

# ウルトラマンゼロ The Another Lyrical Story

フォレス

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

その少女は、孤独な魔導師だった。過去の記憶だけを頼りに、肉親の笑顔を取り戻そうと、悲しみを押し込めながら、魔法を振るっていた。そして彼女は出会う。

異世界からやってきた……光の戦士である少年に。

少女の名は——フェイト・テストロッサ。

少年の名は——ウルトラマンゼロ。

世界はいつも、様々な可能性たちによって絶えず分岐していく。

この物語は、若き巨人たちのチーム——ウルティメイトフォースゼロと少女たちの、“もう一つの出会いの物語”。

以前なろう（タイトルは再連載時に変えましたが）で連載していたウルトラシリーズとリリカルなのはシリーズのクロスオーバー作品です。こちらでも連載致します。

メインの主人公はゼロ、ヒロインはフェイトです。

ベリアル銀河帝国のソフト発売時期から執筆し始めたこともあり、時系列がビートスターよりも前で、ジャンナインが加入するのはかなり先になります、ナインのファンな方々には申し訳ありません。

また少なからず本作オリジナルの設定も散りばめられ、途中ストーリーも原作から乖離して独自の展開になる仕様（十世界観に対する辛口な突っ込みもあり）になっていますので、注意して下さい。

※本作品は、ピクシブ、すぴばるでも投稿しております。

※タグにR—15を付けました、A，s編からは描写も第二期ウル

トラ並に過激になるからです。

※タグに保険ながらアンチ・ヘイト付けました。二部の内容的に付けないわけにはいかなかったもので。

# 目次

Prologue	1
第一部：Fatal Encounter	
EP01   出逢い	4
EP02   零と雷光	13
EP03   この手に魔法を 前篇	35
EP04   この手に魔法を 後篇	56
EP05   意固地な少女	68
EP06   ある休日の交錯	80
EP07   光の巨人	91
EP08   出会いの前夜	111
EP09   対面／再会	128
EP10   見えない裏側	149
EP11   嘆きの夜空	171
EP12   嵐が過ぎた後：	198
EP13   無自覚な逢引き	213
EP14   憤怒	233
EP15   止まない雨	257
EP16   乱戦	274
EP17   不明瞭な想い	296
EP18   問われる覚悟	316
EP19   もう一つの家族	332
EP20   各々の想い	350
EP21   遺されたもの	361

STAGE 06	少女は白く染まる	749
STAGE 05	The Mystery	732
STAGE 04	獅子と鋼鉄	709
STAGE 03	思いがけない再会	691
STAGE 02	RETURN	676
STAGE 01	Curtain Rises	658
Prologue	覚醒	655
第二部   呪われた闇の書		
	腐れ縁とのはじまり	642
	ウルトラマンゼロの義母	623
	海鳴の子狐	619
	学校の怪談?	608
	ゼロの恥ずかしい里帰り	596
幕間編		
575	Last ep in 1st tale   再会の未来へ	
EP 30	CALL MY NAME	554
EP 29	START	536
EP 28	一つの終わり	520
EP 27	閃く一太刀、重なる心	501
EP 26	運命の雫	472
EP 25	星の光、絶望の宣告	448
EP 24	最初で最後の……	424
EP 23	ひと時の休息	405
EP 22	海上の決戦	380

STAGE 30		影		1156
STAGE 29		乱れし戦場		1135
STAGE 28		突きつけられる現実		1161
STAGE 27		激戦の裏側		1102
STAGE 26		Fierce Battle		1084
STAGE 25		ZERO vs SIGNAL		1069
STAGE 24		再戦		1053
STAGE 23		接触		1031
STAGE 22		懸念		1101
STAGE 21		破られた約束		996
STAGE 20		温泉に行こう 後篇		976
STAGE 19		温泉に行こう 前篇		965
STAGE 18		隠れた純真		950
STAGE 17		烈火の煩悶		937
STAGE 16		賑やかな八神家の日常		923
STAGE 15		齎された平穏		906
STAGE 14		ある一家の模様		883
STAGE 13		少女たちの試練		867
SATGE 12		Misfortune		851
STAGE 11		絶えぬ疑念		838
STAGE 10		DREAM		825
light				799
STAGE 09		Chase of the dark		n
STAGE 08		急転		786
STAGE 07		転校生		774

STAGE 4 6		依怙地		142214011386136513491327131412941280126612511238122111941177
STAGE 4 5		男泣き		
STAGE 4 4		EXPLOSION		
STAGE 4 3		Flow		
STAGE 4 2		Faint hope		
STAGE 4 1		NIGHTMARE		
STAGE 4 0		闇に覆われし夜天		
SATGE 3 9		HAND		
STAGE 3 8		サッカーパンチ		
STAGE 3 7		恋の好敵手		
STAGE 3 6		心の内		
STAGE 3 4		MASK		
STAGE 3 3		託す者、託される者		
STAGE 3 2		温もりの夜		
STAGE 3 1		見落としていた真実		

# Prologue

## プロローグ

どこまでも…どこまでも…どこまでも…どこまでも…本当は果てがあるはずなのに、それが無いと錯覚させられてしまってくる…：星々が輝きを放ちながら、点在している広大な宇宙。

その宇宙の中の、とある無人の惑星にで…一つの激しい戦いが、行われていた。

巨人たちと、彼らより巨大な異形の怪物との死闘だ。

地球の人々と縁が深き光の人、巨人族の戦士たち。

『ウルトラマン』

その中で、特に偉大な称号を与えられた歴戦の猛者たち。

『ウルトラ兄弟』

その一人にして三兄、ウルトラセブンの息子である若きウルトラ戦士。

ウルトラマンゼロ。

その彼が別宇宙で出会い、絆を育んだ仲間たち。

鏡の騎士、ミラーナイト。

炎の戦士、グレンファイヤー。

鋼鉄の武人、ジャンボット。

彼ら若き精鋭4人で結成された宇宙警備チームの名は、ウルティメイトフォースゼロ。

そんな勇猛な戦士たちと、激闘を繰り広げているのは――

『おのれ…ウルトラ兄弟…そして…：ウルティメイトフォースゼロ！』

ウルトラマンたちの前に何度も、現れ、立ちはだかる異次元人ヤプール。

その者たちの怨念が作りだし、かつては地球、日本の都市の一つ、神戸を恐怖のどん底に突き落とし、奴の強大な怨念で再び復活した究極超獣――ヒキラーザウルスだ。

巨人たちと、彼らが小さく見えてしまうほどの巨体を持つ超獣との



死闘。

その戦況は、次第に巨人側に傾きつつあった。

「シルバアアアークロオオス！」

ミラーナイトから、いくつもの十文字の光刃が放たれ。

「燃えるマグマのファイヤアアアアア——フラアアアアツシユ  
！」

グレンファイヤーの炎の如意棒、ファイヤースティックが火を噴  
き。

「必殺！風車」

ジャンボットが巨大斧、バトルアックスで嵐のように舞い。

さらに…

「ゼロ！合体光線だ！」

「ああ！ いつでもいいぜ親父!!」

父ウルトラセブンの掛け声を合図に。

長兄ゾフィーの、

M87光線が。

「ダアア！」

ウルトラマンのスペシウム光線が。

「ジュア！」

ウルトラセブンのワイドショットが。

「ヘエア！」

ウルトラマンジャックのシネラマショットが。

「ヴォア！」

ウルトラマンAのメタルウム光線が。

ウルトラマンタロウの、「ストリウム光線！」が。

ゼロの師であるレオとアストラ兄弟の合体技。

ウルトラダブルフラッシュャーが。

ウルトラマン80の、サクシウム光線が。

「セエア！」

ウルトラマンメビウスのメビュームシュートが。

ウルトラマンヒカリの、ナイトシュートが。

そしてウルトラマンゼロが――

「くらいやがれええええー！！！！」

必殺のゼロツインシュートを発射。

鮮やかな光線群が一つとなり。

極太の光が、Uキラーザウルスに大ダメージを与えた。

「お前ら！行くぜ！」

「はい！」

「あいよ！」

「おうとも！」

そしてゼロは、仲間とともに、エネルギーを集め。

4人の戦士は、光の球となった。

そのままUキラーザウルスに突撃。

4つの流星たちは一つに纏まり。

4人の力が合わさった究極技。

『ウルティメイトフォースゼロアタック』が炸裂。

流星の体当たりを受けた超獣は、断末魔を上げながら青い光に包まれていくが、ヤプールは敗北が濃厚となってもそれを認めない。

「貴様らだけでも……道連れにしてやる！」

その捨て台詞が吐かれた瞬間、急激に超獣の光が強まり、周辺の空間が歪んでいく。

「不味い！4人とも早く離れろ！」

ゾフィーの警告も空しく。

時空を超えて巡り会った若き4人の戦士たちは、視界が真っ白に染まるほどの閃光に巻き込まれ。

光の中へと消えていった。

物語はそれから11年後。

ウルトラマンが存在する世界とは、別の次元に平行して存在し、  
魔法”という地球から始まる。

# 第一部：Fatal Encounter E P O 1 — 出逢い

とある世界からは、第97管理外世界と呼称される、ある宇宙に存在する青き惑星。

私たちには、『地球』と呼んだ方が馴染みがあるだろう。

その星の極東に位置する国——日本。

満月の光に程良く照らされた市街地。

ここは“この世界”の日本での神奈川県西端に位置する地方都市で、名称は“海鳴市”。

その都市を囲むように隣接する山々の中の森の一角。

ほぼ全ての生物が明日の夜明けまで眠りにつく静寂につつまれた時間を破る者が、“一頭”と“一人”いた。

一頭の方は、熊であろうか？

黒い毛並みと、ずんぐりとした体格から見て、ほぼ間違いない。

どうしてほぼと付け加えたかと言うと、その姿は明らかに日本、否地球に生息するものと異なり、10メートル近くもある体躯、黒く禍々しい表皮と長い爪と牙、怪しく光る両目そして額には蒼く輝く菱形の宝石が埋め込まれていた。

「たく……:よりによって地球(ここ)に落ちてきやがって」

その異形の熊と対峙している一人の方が、独特の艶を帯びた声色で愚痴を零した。

180近くある背丈、やや吊りあがった目尻と群青色の瞳、夜の闇より深く長い黒髪は肩辺りまで伸ばし、丁度耳と平行になる当たりの高さでポニーテールにまとめ上げ、黒いインナーの上にこげ茶色ジャケット、深い色あいのジーパンを着た外見は日本人寄りな黄色人種の少年。

目つきは、鷹などの猛禽類を思わせるまでに鋭く吊りあがり、ともすれば無愛想で近寄りがたい雰囲気醸し出しているが、その顔つきは『イケメン』だとか『ハンサム』という表現では無粋と感じられる

ほど中性的で整われ、凜とした佇まいさえ感じられる。

やや細身ながら、バランスがとれ逞しく鍛えられた体つきで男性だと直ぐに分かるが、顔だけを見せられれば、確実に性別が判別できないくらい、長髪が良く似合う容貌である。

『愚痴を言っても始まりません、零牙（れいが）を使用しますか？』

一つ、訂正をしなければならぬ。

この場にはもう一人いた。

エコーがかかった成人女性の声をしたその『もう一人』が、愚痴た少年に語りかける。

「まだいいぜ、相棒」、こいつ程度なら素手で充分だ」

拳をバキバキと鳴らしながら、もう一人の問いに答える少年。

実は彼もまた、地球を含めたこの世界の生まれの人間では無い。

日本人、つまりは地球人の血も彼の体内に流れてはいるのだが、彼もまた、別の世界からの来訪者だった。

『了解』

そのもう一人の返事を合図に、異形の熊が体格に似合わぬ速さで少年に襲いかかった、普通の熊でさえ、人間よりも速いスピードとパワーを持つている。ましてやこの怪物の前では人の体は、一瞬で肉塊と肉片に果てるだろう。

死んだという自覚すらできないまま、気が付いた時には魂だけの存在となって天に召されるのが落ちだ。

それぐらい熊の攻撃は、豪快にして瞬速。

死を直に感じられないだけ、もしかかもしれないが、生憎少年には天に召される気は微塵の欠片も無く、それどころか至極落ち着いた様子で、相手の連続で繰り出される爪の攻撃を最小限の動きで回避していた。

長身でやや細身な体躯から魅せる体捌き。

これだけでも人間離れしているが、彼は右手の上段から下ろされた一撃を回避しつつ、右足で自分を捉えようとした熊の爪を蹴り上げ、粉々に砕いた。

とても人間技では無い。

「このっ！」

そして左腕下段からの凶刃もかわし、カウンターの要領で放たれた手刀は、怪物の凶器の爪を粉々に砕きあげた。

もう一度だけ言う。ただならぬ威力をこめた『ただの手刀と蹴り』で、彼は怪物を圧倒したのである。

怪物は悲鳴をあげながらも、爪がダメならばと握りこぶしからの豪腕で襲いかかるが、少年はそれすらも難なく回避しながら、怪物の鳩尾に重い正拳突きをぶつける。

さらに、人間ではワイヤーなどのサポートを使わなければ不可能な高さ、およそ10メートルまで飛び上がり、空中からの回し蹴りを怪物の貌に叩きこむ。

直に蹴りと言う名のハンマーの一撃を当てられた熊は、回転しながら宙を舞い、地面に叩きつけられる。

常識外れの度合いにおいては、むしろ人間離れた少年の方が勝っていた。

それでも一度地に伏せられた怪物は、態勢を立て直し、少年に威嚇の雄たけびを上げる。

「ふっ……結構タフじゃねーか」

少年は大しては動じることも無く、むしろ不敵に笑いながら親指で鼻をこすった。

彼がこの『世界群』に迷い込む前から癖にしている所作。

怪物が咆哮を上げ、殺気をぶつけながら正面から突貫してくる。

少年も同タイミングで走り出す。

ほぼ同時に地面を蹴ってジャンプする両者。

怪物は豪腕と、それがダメなら牙による二段構えで、少年を捉えようとするが…

「でえええええあああ!!!」

その前に少年の飛び蹴りが、相手の胸部に炸裂。

空中でもろにくらった怪物は衝撃で10メートルほど吹っ飛ばされた。

「零牙、ガンモード」

降り立った少年は左手を前に翳してそう眩くと、左腕にはめられた腕輪から、眩い青緑色にそまった光の粒子が溢れだした。

粒子は少年の周りを何周かすると、少年の右手に集まり、一瞬の発光の後に粒子は形を為した。

現れたのは拳銃。木製のグリップと撃鉄の形からリボルバーに似ていなくもないが、地球で生産されているものより銃口は大型で無骨、銃身も長くて分厚く、シリンダーの代わりに青く光る角が丸みを帯びた菱形の青緑色の光を照らす輝石が付けられた、単発中折れ式型の漆黒の拳銃へと姿を変えていた。

「リンク、カートリッジを」

『了解』

声を発す腕輪から、USBにも見える掌に置けるサイズの長方形型のカートリッジが出現。

それを中折れした拳銃に装填。

「カートリッジロード！」

銃口を怪物に向け、構える少年。

同時に彼の足元に、文字が書かれた青緑に輝く円陣が現れ、拳銃の銃口に光が球状に集まっていく。

「とどめだ……ジュエルシード封印、マグナムシユート——ファアア!!」

少年は段階的に音量を上げながら、引き金を引いた。

銃口から飛び出した光と言う名の弾丸は、正確に怪物の額に命中。

止めの一撃を受けた怪物は仰向けに転倒すると同時に苦しげに声を上げると、額を中心に閃光が走った。

視界を奪う白銀の光が消えると、怪物がいたところには幼い小熊が、あわててその場から逃亡し、小熊を怪物に変えた元凶であるその宝石は、枯葉が溢れる地面に転がっていた。

「災難だったな……」

怪物にされて暴れていたのはこの小熊、さっきまで相對していたその小熊の身を案じつつ、少年は菱形の形状をした青白い宝石を拾い上げ。

「リンク」

『了解、Internalize No.4』

宝石は拳銃を出現させた腕輪へと吸い込まれた。

『お見事です、マスター勇夜』

「どうってことねえよ、腕試しにもならない相手だ」

『油断大敵ですよ』

「分かってるさ」

少年を褒め称える『この場にいたもう一人』である、少年からリンクと呼ばれた腕輪に対し、腕輪から「勇夜」と呼ばれた少年は、謙遜しつつも皮肉げに返した。

実は彼、いわゆる「魔法使い」という肩書を持っている。

そして左腕に装着している腕輪と右手に持っている拳銃が、彼専用の『魔法の杖』、と言えよう。

尤も、腕輪の方は、一応だがこちらの平行世界に来る前からの付き合いである。

「残りの20個も、全部ここに落ちたのか？」

『はい、正確な位置までは把握できませんが、おおまかな落下地点はこの『神奈川県海鳴市』付近一帯で間違いありません』

「まあ、バラバラに落ちてもらうよりは探しやすいけどさ、先に地球に行っただっていうスクライアの坊主君は明日探すとして、今日はもう――」

帰るか――と言おうとした時、彼は咄嗟に左腕を横に伸ばし、手を広げ翳した。

彼に向けて、稲妻を纏った光の矢が、少年に奇襲をかけてくるが、左手の掌から発生した半透明の光の壁に阻まれる。

稲妻と半透明の障壁（バリア）の拮抗する押し合い。

その押し合いの後、稲妻は根負けして四方に拡散し消滅した。

少年、勇夜は矢が放たれた方角に、目を向けた。

「渡してくれませんか、今あなたが手にしたものを…」

光の矢を放ったのは、少女だった。

まだあどけない、外見から判断して、年齢10〜11歳ほどの少女。

容姿から見て、明らかに日本人ではないのは確か、金色の髪をツインテールにまとめ、瞳はアルビノ——色素欠乏症な色白の人間よりも鮮やかな紅（あか）に染め上がっている。

着衣しているのは、ともすれば水着に見えそうな袖なしの黒い着衣とピンクのミニスカート、肩には魔法使いを連想させる黒いマントを纏っている。

こんな奇形な恰好でも似合ってしまうほど、容貌は美少女の領域において上方に位置していた。

少年よりも「魔法使い」の趣がある………実は本当に彼女も魔法使いではあるのだが。

黒色のグローブをはめた右手が握っているのは、少女の魔法の杖だろう。

ただ、大方の人間がイメージするのは違い、それは彼女の髪と同じ色をした円形の宝石らしき光沢が埋め込まれた、全長が彼女の背丈に匹敵するほどの長さを持った——漆黒の武骨な斧だった。

少女の横には、同行者が一人いた。

オレンジがかかった長髪の10代半ばの少女。

グラビアアイドル顔負けのスタイル。

胸元と下腹部、太ももと、惜しげも無く恵まれた体つきをくつきり見せる服装と顔つきから、物静かそうな黒衣の少女と好対照に、勝負そうな少女である。

だが彼女には、普通の人間なら絶対に見られない特徴が存在した。

犬、むしろ狼か、日本では固有種が絶滅したその肉食獣を連想させる髪と同じ色の耳と尻尾、口元には月光で反射される艶めいた犬歯、そして額には赤く丸い光沢が埋め込まれていた。

実は彼女、純然たる人間では無い。

いわば、魔法使いである黒衣の少女をサポートする生命体——「使い魔」。

先程の不意打ちといい、今の彼女たちの態度といい、どうやら穏便に済まずという選択肢は、端から皆無だと少年は感じ取る。

「誰だあんたら？」「管理局」の連中……じゃねえよな」



少年は少女に問う。

だが目的は聞くまでもなく把握できていた。

彼女たちが求めるのは、今自分が手にした宝石。

「今あなたが手にした『ジュエルシールド』を、私たちに」

やはり、少女が目的は「ジュエルシールド」を手に入れること。

「へえ〜…こいつの正体は何なのか知ってる上で、欲しいってのか？」

「どうしてもそれが必要なんです、さもないと……………」

「なら……………もし俺が……………『嫌だ』と言ったら？」

「力づくでも奪います、バルディッシュ！」

フェイトは静かに、それでいて確かな意志の籠った真紅の瞳で少年を見据えると、バルディッシュと呼んだ杖を正眼に構え。

『Scyth Form』

フェイトがバルディッシュを称する？魔法の杖？から発せられたエコーがかかる男性の低音な発声と共に、バルディッシュの斧の刃が15度展開され、そこから金色の光の刃を発生する。

彼女の杖は、斧から巨大な鎌へと変わった。

黒く染まった装飾とマントと相まって、その姿は正に「死神」だ。

刃を向けられ、意思を持つ腕輪から「勇夜」と呼ばれた少年も、彼女たちとの戦闘は不可避と悟ったのか。

「零牙…ブレイドモード」

右手が握る拳銃が、先程と同じ光の粒子になり、やがてそれは、一振りの日本刀らしき漆黒の鞘に入った剣へと変わった。

らしきと付け加えたのは、日本人がイメージする刀と微妙に異なるからだ。

柄と呼ばれる持ち手は、彼が着用しているこげ茶色のジャケットと同じ色をした木の紋様と、まるでオートマチックの拳銃の木製グリップのような手にフィットする形状を形作り、鏢と呼ばれる部分は黒色でやや太めで厚みがあり、左右対称になる形で、丸く青白い光沢が二つ埋め込まれていた。

それでも、今は鞘に納められて隠れている反りの入った刃は、間違いない刀そのものだった。

少年は刀に変えた得物を、居合の態勢で構え、少女と対峙した。

二人は、お互いを注視し、武器を構えたまま微動だにしない。

「フェイト…：気をつけて」

獣人の少女アルフが、彼女に忠告する。

「…大丈夫」

この時の彼女たちは勝算があると踏んでいた。確かに相手から発せられる気迫と魔力は尋常じゃない。

でも相手は剣を鞘に収めたままだ。

そして、死神の如き少女のスピードをもつてすれば、負けない。

絶対に負けはしない、自分にとっては家族なあの人から叩きこまれた魔導は、今まで大の大人が相手でも圧倒してきたのだ。

そして、絶対に負けられない。今少年が手に持っているのを含めて、自分たちはあれを全て手にしなければならぬのだから。

瞬間、さきほどの『ジユエルシード』と呼ばれた宝石で凶暴化した小熊の比にならないスピードでフェイトは少年に踏み込み。

相対する少年に金色の魔力の鎌の一撃を振るう——は  
ずだった。

少年を捕らえるはずだった杖はいつ抜いたか、全く視認できないほど、彼女のスピードよりのさらに速く抜刀した、青空を連想させる雲のような模様と白みがかかった光を放つ彼の刀の刃の一閃で、彼女の魔



## EP02 — 零と雷光

眠りから解放された少女は、眼を覚ました。

こ、ここは？

最初に視界に映るのは、どこかの部屋の天井。

室内の灯りは抑え目で、窓越しに照らしてくる月光がメインの照らしとなり、何とも幻想的な趣がある。

一応ここがどこか見覚えはある。

この星、地球での潜伏先としてアルフが借りてきてくれた、ある高層マンションの一室。

少女——フェイトは今、その部屋の室内に備えられたベッドに横たわっていた。

でも何故？

私…どうして今、ベット上で眠っていたの？

何があつて、こんなことになつてるの？

目覚めたとはいえ、まだ覚醒したばかりで瞼が重く、眠気が意識の中で残留している。

必死に自分がここに至っている理由を探ろうとするが、思考がおぼつかない。

体を動かしていないのに、霧の中を歩いている感覚に見舞われる。

それでも少しずつだが、思考と意識から眠気が抜けていった。

するといきなり、フェイトの脳裏にある映像が煌めき、フラッシュバックして、そのショックでフェイトの半開きだった目が一気に見開かれた。

映ったのは、自分がバルディッシュで切りかかろうとした、少年の姿。

性の判別を困難にさせるその整った容貌から、温かき、慈悲、『熱』を感じさせるあらゆる要素を一切不要と切り捨て、冷たさを通り越して痛みすら与える鋭利な殺意と殺気のみを、その全身から発しながら刀身が婉曲した剣を鞘から抜き、横薙ぎに振るう姿だった。

他に見えるのは、宙を漂う赤い液体の群れ群れ。

紛れも無く、それは少女の血（たいえき）。

途端、刺激の強すぎる光景に息が乱れて苦しくなり、慌ててその身を起き上がせるフェイト。

落ち着こうとするもの、呼吸が短く激しいサイクルから平常に戻らない。

逆に何度もあの映像がフラッシュバックして繰り返され、体の震えを加速させていく。悪夢から現実に目覚めた瞬間の疲労がどういいうものか、その身で、肌で直に感じ取った。

まだあどけない少女の年頃なフェイトには、あの映像を見せられながらの完全覚醒は、酷な事であった。

そうだ……私……あの時……森から『ジュエルシード』の発動と魔力を感じ取って、行ってみたら封印してた男の人を見つけて、どうしてもあれが必要だったから、あの人から力づくでも奪い取ろうとして……バルディッシュで斬りかかったら……逆にあの人から、斬りつけられて……あれ？

ど……どうして……なの？

怯えの次に彼女の内から浮かび上がった感情は疑問だった。

自分は、自分のスピードよりも速く鞘から抜いた相手の刃で腹を切られたはずである。

さつきまで容赦なくリピート再生された映像には確かに血が映っていた。

自分の肉体が斬り裂かれ、宙に飛び散った自分の血が。

なのに、なんで自分はまだ生きているの？

自分の手を腹に置き、あちこち触ってもどこにも傷が無い、初めからそんなものが無かったかのように綺麗なままだ。

治療魔法をかけられたのかと思っただが、その形跡である魔力の残滓が全く感じられない。

どういふことなの？

『お気を確かに、Sir（サー）にお怪我はありません』

「バルディッシュ……」

疑問が回り続けるフェイトに、エコーのかかった男の声。

その声を聞いて初めて、フェイトの片手の掌に声の主である彼女の愛機の魔法の杖、バルディッシュが置かれていることに気付いた。

自分もろとも斬り裂かれたはずの彼も、逆三角形型の掌サイズの待機携帯——スタンバイモードの姿で健在、罅ひとつとして存在していない。

「フェイト…」

半獣半人の少女アルフが、フェイトの視界に入った。

その身を苛ます悪夢から逃れたてな様子を見せたこともあって、勝気そうな顔には、フェイトを案じ、かなり心配している表情を浮かばせている。

「アルフ…私…どうして？あの後何があったの？」

「ああ、それがね…」

フェイトの質問に対し、上手く説明できる表現がみつからないのか、アルフは苦笑いしながらはぐらかしている。

「あのさ、びつくりしないで、よく聞いてよ」

「うん…」

前置きの後、フェイトが倒れた後に起きた出来事をアルフが話そうとしたその時。

「お、気がついたみてえだな」

台所のある奥から、人が現れた。

さつき驚かぬようアルフに念を押されたにも拘わらず、フェイトは内心動揺が隠せなかった。

あの青い宝石を巡って自分と争い、自分を斬って打ち負かしたその張本人が目の前にいる。

長い黒髪をポニーテールで縛った、長身で中性な顔つきの少年。

一度、またあの映像が浮かび、恐怖心に埋め尽くされそうになったが、今のその少年からは、記憶では全身から発していた殺意は微塵も感じられない。

ちよっと目つきが鋭い点があるが、紛れも無く同一人物であるはずなのに、どうしても記憶の中での彼と、眼前の彼を結びつくことができない。



相当の実力を持った手練れだということは容易に窺えたが、それでもアルフは、フェイトは負けないと確信していた。

フェイトも優秀な魔導師——魔法使いだし、何より彼女のスピードについて来られる魔導師はいない。

彼女は『魔法』が普及している世界では、右に並ぶ者はいないと断言できるほどの、スピードと機動性と、それを存分に生かせる魔力も力量も持っている。

それは確かに事実だった。

それがただの、鞘から抜いた刀の一振りだけで、あっけなく打ち砕かれた。

魔道師が、魔法を使わなかった相手に、駆逐されるという事実とともに。

「少しは落ちつけ」

「何!？」

そこから一連の出来事は一瞬だった。

防御と回避に専念していた少年は、アルフの鳩尾にカウンターの拳を叩きつけ、ほぼ同時に左手で彼女の右手を掴み、強烈な腕力で捻りつつ、ほぼ間を置かずして左足で相手の右膝を蹴りつけ、一連の攻撃で苦痛に歪んだアルフを背負い投げた。

まともに受け身もとれず、地面に叩きつけられるアルフ。

全身に衝撃と激痛が走る。

「頭、冷えたか？」

「てめえ!」

「ご主人さまなら無事だ」

「え?」

アルフはその一言を前に面喰った。

「そもそもご主人に何かありや、こうして元気に殴り込めねえだろ？」

「使い魔さんよ」

「ああ……」

殺気も、闘争本能も、頭に登っていた血の気も、一気に引いていった。



使い魔とは、魔導師——魔法使いが、死亡したあるいは寸前の動物に人道的に生み出した魂を憑依させる事で造り出した、魔導師をサポートする生命体。

パートナーである魔導師の魔力を供給されることによって生存しているため、もしそのパートナーのフェイトに何かあれば、例えば死亡するようなことがあれば、当然アルフも今頃は主と共に昇天している。

「その子、フェイトとか言ったか？ 今は気を失ってるだけだ」

少年の言葉が真実かどうか確かめるためにアルフはフェイトの許へ駆け寄った。

確かに全身には今付けられた『外傷』は何一つない。

“今日以前につけられた傷跡と痣”を除いて…ではあるが。

「斬ったのはこの子の相棒（デバイス）だけだぜ、俺から言うのもなんだが、リカバリーできるか？」

『Yes, sir』

図太い声と、淡々で上官に應對する軍人のような口調でバルディッシュは答え、少年は真つ二つにされたバルディッシュを両手に持ち、柄と柄の切断面を付けると。

『Recovery（リカバリー）』

その一言をきっかけに、バルディッシュは金色の光に包まれ、点灯が終わる頃には、少年に付けられた傷は瞬時に修復され元通りになっていた。

さらにバルディッシュは——

『Mode release』

——発すと同時に再び発光すると、サイズがみるみる小さくなっていき、フェイトの身の丈ほどもあった斧は、逆三角形型のの掌サイズとなった。

フェイトたちの世界における魔法の杖、デバイスは使い手の魔力を糧に形態を維持させているので、普段はコンパクトな大ききの待機形態——スタンバイモードの姿をとっている。

「あんだ…いったい？」

喧嘩を吹っ掛けたのは自分たちであることに自覚があるだけに、少年の対応を前にアルフはしどろもどろになりながらも、問いを投げかける。

「そっちがその気だったから、相応の返しをただけだぜ」

「じゃあ…さっきの…『嫌だ』ってのは」

『もし嫌だと言ったら』と言っただけで…『渡さない』とはまだ一言も言っただけで、はやとちりの慌てんぼうが」

『そちらさまを煽ったことは事実ではありませんが』

アルフも問いに対し、内容に反してあつけらかんとした口調で答える少年と、淡々と補足を付けた彼のデバイスらしき腕輪に、アルフはすっかり体から力が抜け脱力し、その場に膝を付いてへたりこんでしまう。

自分たちは完全に、この少年たちに踊らされていたのだ。

少年が手にした宝石をものにしようと躍起になる余り、彼の挑発に簡単に乗り、勝ちに急ぎ過ぎたところを突かれてしまったのだ。

「とりあえず、ずっとここで寝かせておくのもなんだな、あんたらの家はどこだ？」

「あつ……あのデカイビルのマンション」

正直に答えるしかない。自分たちではこの人に絶対に勝てない。

体術と剣術と心理的プレッシャーで彼は打ち負かしたのだ。

これで魔法を使われていたら、どうなっていたことだろう。

悔しいけど認めるしかない。

加減しつつ穏便に対処しようとしたその様や、フェイトの愛機——バルディッシュが素直に主以外の人間の指示を聞いたことから、自分たちを陥れようなんて魂胆は、無いようだけど。

「よし、じゃあ案内してくれ」

そして、現在に至る。

「てなことが…あつて」

アルフは苦笑しつつ、前述の経緯をフェイトに粗方話していた。

取りあえず言えるのは、彼が局員であるのかはともかくとして、あくまであの宝石が起こしかねない災害の阻止のためにこの管理外世界に来て、自分たちはその妨害をしてしまったということ。

「それで、どうしてあの人がエプロンを着て料理を？」

どうよく目に見ても非があるのは自分たちなのでやり返されても文句は言えないし、彼の対応に不満は無いが、それでもさっきまでやりあっていた人物がキッチンを貸し切っている状況はどうしても気になってしまうフェイトである。

「それが…」

アルフによると、二人がこの地球に来て最初に食べて、これからのメインの食糧源が、インスタント(とドックフード)と聞いた勇夜が、律儀にも閉店ギリギリのスーパーから材料を買って来て、フェイトらには無用の長物な台所を占拠して調理し始めたそう、「そちらさんの相棒を斬ったお詫び」と本人は言っていたそうだ。

「でも…どうして斬られたって思ったんだろ？」

あの時、確かにそう感じた、血だっけ見えた。

意識が薄れていく中で、その痛みさえリアルという表現では物足りないほどの現実感を持って、痛みが彼女の精神まで容赦なく叩きのめしたのに。

あの時の経験は、あまりに鮮烈過ぎて、悪寒さえ感じるのに。

精神的外傷、いわゆるトラウマとなってPTSDを発症させるに至っていないのが奇跡的である。

「あいつによると、幻覚…らしいんだけど」

「幻術魔法？」

フェイトたちの使う魔法にも、一応相手に幻覚を見せる類のものがあるのだが、魔力の消費量、すなわち燃費が悪く、使用する機会に恵まれないので取得する人は稀である。

それに魔法を使っていたのなら魔力を感知し、彼の足元には魔法陣が現れていたはずだ。

そのどちらも、魔法を使うには必須となる、ならばどうという原理で

彼は自分に幻覚をみせたのだ？

「いや…本人はレアスキルみたいなもんで言ってたけど…」

『正確には、相手に殺気を込めた眼光をぶつけることで、『斬られた』と一種の暗示をかけたのです』

料理を運んできた少年の左手中指に今は指輪となつてはめられているリンクが、本人に代わってフェイトの疑問に答えてくれた。

淡々と説明するリンクだが、言ってしまうえばこの少年は、睨んだだけで相手を気絶させられるということになる。

そうなれば、そのまま容易く殺害を実行に移せる。

もし彼に明確な殺意があれば、フェイトたちは今頃本当にあの世行きだった。

「ただこの『暗示掛け』にも弱点があんだよ、受けた殺気と同等以上の気迫で返せばいいし、それにその気になりや、戦い慣れた奴なら誰だって使えるぞこれ」

「そう…なんですか…」

頷くしかなかった。

彼はこう弱点をあつさり口にしたが、実のところ、彼女の世界での暗示掛け、別名アイズインパクトを受けて意識を保っていられる戦闘員、特に魔導師の数は、国境問わずに集めた地球人の兵士の総数より少なかったりする。

「簡単に作ったもんしかないけど、食べてくれ」

テーブルには白ご飯と味噌汁と野菜炒めがあった。

料理群の手元にはフェイトに配慮してか箸の代わりにスプーンとフォークが置かれ、恐るそれを手に持って食しようとするが、その手を止めてしまうフェイト。

「あの…」

「どうした？」

「どうして…私たちを…」

フェイトはまだ少年——勇夜への警戒心を解けなかった。

振り返りにあったが、先に仕掛けたのはフェイトたちだ。

正当性なら、どう考えても彼の方にある。

なのに、なぜ手を出した自分たちここまでしてくれるか？

ここまでされると、却って裏か何かあるのでは？ と勘繰りたくなるのも仕方なかった。

「質問したいことが幾つかあったからな…まあそつちも聞きたいことはあるだろ？」

「はい…」

それに警戒心を抱かせられる原因は他にある。

「言ってみろよ」

「あなたは……『管理局』の……人間ですか？」

正式名称、時空管理局。

噛み砕いて説明すれば、『魔法』が普及されている世界のほぼ全ての治安を維持し、特に時空をまたにかけた犯罪を取り締まるために存在している組織だ。

地球で言うなら、フィクションによく出てくるインターポールのようなものだが、実在するインターポールには犯罪者を逮捕する権利は無い（例としてある国際犯罪者がアメリカにいる場合、身柄を捕えるのはアメリカの警察組織が行う）が、管理局にはあつたりなど、相違点が多い。

「……………『囑託魔導師』の肩書持っている以上、間違つてはいねえよな」

そして彼の言う囑託魔導師とは、正式な管理局の組織の一員ではないが、局からの仕事を請け負う民間の魔導師のことを指す。

彼は左手を前に出すと、魔法によって編み出したホログラムで、その囑託魔導師の資格を持っていることを証明するIDカードを見せた。

周辺の空気が緊張感に染められる。

その空気を発しているのは、無論フェイトとアルフの二人。

「ほ、本当ですか？」

あれだけの實力があるのにもかかわらず、囑託止まりなことにフェイトは驚いた。

あの組織は實力さえ有れば、彼と同じぐらいの年齢なら、かなり高

官に身を置いている者もいる。

彼から感じられる魔力量や、難なく宝石を封印したところから見ても、充分組織で出世できる素養の持ち主だ。

それは置いといて、どっちにしても局と繋がりを持つ人間と接触してしまったのはまずい。

地球なら、警察官か民間の警備員に出くわしてしまった状況だ。

そしてフェイトたちが、警察官たちら警察組織から見てどういう立場なのかは、聞くまでもない。

あの宝石は法的に許可をもらわなければ、所持できない決まりだ。囑託魔導師の彼ならどうにかセーフだが、自分たちは完全にアウトの部類に入る。

「なんで嘘ついてまで、『俺は局員です』とか言う必要があんだ？」

少年は苦い顔付きになると、一旦間を置いて紡ぐ。

「あんま言いたくは………ねえんだけど………あの組織には少々いけ好かねえところがあるし、囑託に就いてんのも、世話になった人たちからの勧めと、無いよりはましだと思っただからだ、それに捕まえる気なら、おたくらを拘束もしないで、のこのこ買物にも出ていくわけないだろ？ その使い魔さんだって、その間に君を連れて逃げるはずだ」

「アルフ？」

「うん……私も今の話をさつき聞いた、管理局に連絡するそぶりも無かったし、そんなに………悪い奴でも無さそうだったし」

アルフの言葉だから、本当のことで間違いない。

彼女は元々隠しごとが得意な性格では無いし、何よりフェイトに嘘をつく思考は持ち合せていない。

「じゃあ今度はこっちから質問だ、子どものお使いにしては物騒な代物を探してるようだが………何が目的だ？」

いきなり彼から核心を突かれた、アルフも緊張した面持ちで冷や汗が流している。

本当のことを話せば、彼も黙ってはいまい、即捕獲魔法で拘束される可能性もあった。

なんとか上手く言い繕って、この場をごまかそうと思ったのだが……上手い言い訳が思い浮かばず、それどころか。

「こんな子に危ない綱渡りをさせるなんて………」  
「碌な人間じゃないさそうだな」、君の親御さん」

「っ！ 母さんを悪く言わないでえ!!」

彼の今の発言に、頭に血が上り、冷静さを失って思わず叫び、本当の理由を暴露してしまった。

「落ちつきなつてフェイト………ほら、相手だつてびっくりしてるじゃんか」

一見して大人しめな態度の女の子が、いきなり激情に駆られた姿に少年も戸惑っている様子。

激昂したフェイトを実の姉の如く宥めるアルフだが、フェイトと違つて内心彼女は少年の言葉に反論できなかつた。

アルフから見ればフェイトの母は、彼の言うその『碌でもない人間』に該当する、『フェイトを悲しませる』人物だったからだ。

「悪いな嫌なこと言つて………まさかホントだったとは………」  
「えっ?」

寒気が走つた。

体中に広がつた激情の熱が、一瞬で零下までフリーズさせられる。

今……鎌をかけられて、まんまとそれに嵌つてしまった。

ど、どうしよう。平常を装うとするが、反して胸の心拍数は高くなるばかりだ。

「ロストロギアを欲しがってるのはお袋さんで、君とアルフには、それを悪用するつもりはないんだな?」

これでどういう目的で、フェイトたちがジュエルシードを集めているか知られてしまった。

彼が嘘をついているようには見えない、わざわざ身分証も提示したから囑託魔導師であることは間違いないだろう、なら自分たちがロストロギアを勝手に探し回っている以上、野放しにはされない。

このままじゃ母さんの願いを叶えられない。母さんを喜ばせてあげられない……少年は、ただでさえその吊り目で平常時からきつい印象

を与えているのに、感情を感じさせない淡々な調子で言葉を発している。

その眼光は、この上なく鋭利で…怖かった。  
何を考えているのか、全く掴めない。

「はい…」

頷くしかない、先程の戦闘で返り討ちにあつた以上、自分のスピードを持ってしても、この状況とこの相手では振り切れないかもしれない。

大げさかもしれないけど、最悪…今度こそ剣で斬られるかも……冷たい目つきで、剣を振るう、相手の姿を思わず想像してしまう。

完全に八方詰まりだった。

だが…彼女の予感に反し。

「ならいいさ」

「えっ?」

「どうしてもお袋さんに渡してえんだろ?」

あつげらんかんとした口調で、彼が次に口から出した言葉は――

「本当に………良いんですか?」

――予想外のものだった。

自分たちの違法行為を見逃すと受け取られても、文句は言えない発言である。

「た・だ・し、条件付きだけどな」

だが……やはりただでは、返さないようだ。

無意識の内に緊張で息を呑むフェイト達。

「一つ、今俺が持つてる一個は、俺に管理させること、二つ、『俺をお袋さんに会わせること』だ」

前者の条件はともかく、後者の方はこれもまた予想外だった。

「これを呑んでくれて、もしそのお袋さんが、お前の言う通り『悪い』人じゃないのなら、これから君が自分の力で手に入れたジュエルシードは全部くれてやってもいい、ただしな、少しでもお袋さんが悪用する素振りを見せたら、そんな時は全部渡してもらおう、力づくでもな……」



呑めないなら、悪いが今すぐお縄を頂戴させてもらうぜ」

フェイトたちに、捕えようと思えばいつでもできると意思表示をし、眼光の鋭さを増しながら条件を提示する少年。でも承諾できないものでもない、ジュエルシードを渡せば母さんはきつと喜んでくれるし、母が悪い人じゃないって証明すれば、彼も認めてくれるだろう。

悪い条件では無かった。

「それと、お二人さんの収集の手伝いも一切しないからな、俺も君の願いを無下にするほど外道じゃないが、犯罪者に堕ちるつもりも無い」「分かりました……ありがとうございます」

「あと最後に一つ……リンク、ジュエルシードを」

『了解』

リンクから光の粒が溢れると、粒子がジュエルシードとなり、手にしたそれをフェイトたちに見せる少年。

「こいつは、願いを叶えてくれるって謳い文句を持つてるが、碌でもない形でしか叶えてくれない欠陥品だ、たとえ願った人がどんなに人畜無害な野郎でも、最悪次元震を起こして、この星を含んだ次元世界ごと消し飛ぶことになっちまう、今自分がやろうとしていることも含めて、自覚して探してんだろ？」

「はい……」

上げられて気持ちが高くなったと思ったら落とされた。

でも……自分のしていることとそれだけのことは分かっているし、反論もできない。

次元振とは、普通の地震と異なり、空間そのものに揺れが生じる災害で、その規模は通常の地震の比ではない。

「でも、その代わり、もし君が君の魔法をもってしても、どうにならない状況になった時」は……必ず君を助けると約束する」

「それって……どういう？」

「『俺の力』は、そのためにあるからな」

フェイトには、その意味がよくわからなかった。

でも……なんで、なんだろう？

自分には未知の生命体な異性で、口調はぶっきらぼうで棘がある

し、目つきもちよつときついし、自分の目的をばらされてしまったし、こつちから仕掛けて詫びを入れられたとは言え、リニスが精魂込めて作ってくれたバルディツシュを切ったし、何より、さつきまで、この人の事が怖くて怖くて堪らなかつたのに……何より、この人からまだ名前もちやんと聞いてないのに。

どうして……この人の言葉は、不思議とこんなに安心させられるんだろう？

暖かいと、感じられるんだろう？

目覚めたばかりの時に、精神に剃りこまれた少年への恐怖は、もう微塵の欠片もフェイトの内には存在せず、代わりに妙だけど、悪い気はしない生温かな感覚が沸き上がってきた。

「まあまず無えだろうけどな君の腕っ節なら……ぶちのめした俺が言っても説得力はないかもしれないねえが……」

と彼は、自嘲気味に笑って答えた。

「アルフも異論は無いよな」

「ああ……私はフェイトが笑ってくれるならそれでいいし……その『どうにもならない状況』には絶対しないから」

意気揚々と答えるアルフ。

彼女もようやく、いつもも陽気な調子に戻りつつあった。

「じゃあ、交渉成立だ」

彼は、ジュエルシードを再びリンクにしまいこんだ。

「あの……そう言えば、名前をまだ……」

「そうだったな、悪い、俺は諸星勇夜、ユウヤでいい、こいつは相棒のリンク」

『以後お見知りおきを』

勇夜は自己紹介しつつ、自分の相棒——デバイスを縦に翳して二人に見せた。

「君の方は？」

「何がですか？」

「フルネームだよ」

「あ、そうでしたね、フェイト・テストアロツサと言います」

「フェイト……テストロッサ？」

名字を含めた彼女のフルネームを聞いた途端、勇夜から笑みが消え、その吊りあがった眉をしかめた。

「どうしたの？ユウヤ」

「いや、なんでもないさ………気にするな」

「そ、そう……」

一瞬さつきとはまた違う怖い眼をしたが、すぐに穏やかな表情に変わった。

その直後、室内に腹から鳴るあの鈍い音が響いた。

出所は、フェイトの腹部から………——音の正体と誰のものか聞くのはよそう。

女の子に今起きた事柄を明言するのは、失礼極まる。

さて、音を鳴らした本人のフェイトといえば、頬が紅潮し、恥ずかしさで身を縮ませていた。

「あ………あの………」

「フェイト、ここ数日ともに食べてないんだろ？」

「どうして、それを」

「アルフから聞いたんだよ………それにさつきお前が倒れたのは、飲まず食わずで、体に無理させたのも原因だ、今度からはちゃんと食べるよ」

「は、はい………」

はつきりズバズバ突きつけられて、彼女の顔はさらに羞恥心で真っ赤になった。

事実フェイトは、今回のジュエルシードの件を含めた“おつかい”に対し、まともに食事を取らぬまま無理をして体に負担をかけることが度々あった。

ここまでダメだしされるとは思わなかったので、フェイトは己の不甲斐無さにしよんぼりし、羞恥で頬を染めながらも、彼のお手製の料理を口にする。

さつきは勇夜への警戒心もあり、一口も食すことできなかった。

でも、今は

「おいしいです」

正直な感想を、この料理を作ったご本人に述べた。

この料理は諸星勇夜の人柄そのものだ、一見荒っぽく調理されているが、その実丁寧に作り込まれて、味はとても温かみがある。

空腹であったことが食欲を増進させ、それがまた料理の旨味を増幅させる相乗効果を生んでいた。

「そうか、なら……良かった……」

『美味しい』と言われたことが、当人にとっては思わぬ返りだったようで勇夜は少し、鼻をこすりながら照れ気味に返すのであった。

勇夜は、自分の作った夕食をフェイトが食べ終わるのを見届ける  
と、

「飯ならまたいつでも作ってやるよ」

そう言って彼女の部屋から出て行った。

それから、しばらく経った後のこと。

「フェイト……もう寝た？」

「ただだけど……どうしたの？」

「今……思い出したんだけどね、勇夜ってさ……あの噂の『魔導殺し』  
じゃ……ないかなって」

『魔導殺し』

最初に言っておくが、魔導師を殺しまわる殺人鬼という意味合いでは無い。

魔導師にとって天敵という意味合いな言葉だ。

本人も相当の実力を持った魔導師でありながら、魔法を使用することとは稀で、徒手空拳と剣術とレアスキルで、魔導師や魔法生物を打ちのめしてしまうことからつけられた。

管理局に管理された世界にとって、『魔法』は最もポピュラーかつ絶対的な力で、それに敵う力はないというのがもっぱらの常識とされて

いる。

それを勇夜は、容易く覆してしまった。

魔法が普及されている世界の住人にとってそれは、例えるなら、戦車やヘリをハンドガン一本で、壊してしまうくらいの衝撃。

そのため彼は、ある者からは『畏敬の念』を、ある者からは『屈辱の念』の意味合いから『魔導殺し』と呼ばれるようになった………フエイトたちが聞いた噂ではそうらしい。

とりあえず言えることは、その噂の信憑性は100%であることであつた。

現に魔法を使わずに、二人を打ちのめしたのだから。

「別にあいつを疑ってるわけじゃないんだよ、勇夜がああ妥協してくれなきゃ、今頃私たちは牢屋行きだろうしさ………チャンスをくれたってことみは、感謝してらんだけど……」

アルフは、勇夜の言葉を思い出していた。

彼は自分たちが集めようとしているジュエルシードのことを、『どんなに人畜無害な野郎にも、碌でもない形でしか叶えてくれない欠陥品』

と評していた。

ジュエルシードは、以前から存在は確認されていたが、各世界を転々としつつ、遺跡発掘を生業とする部族、スクライア一族が初めて実物を発見したロストロギアの一種。

ロストロギアとは、もう滅びてしまった文明が残ってしまった、傍迷惑な置き土産のこと。

その置きの土産一つであるこの宝石は、全部で21個発見され、管理局へ輸送する途中に、原因不明の事故が起き、全てがこの地球の日本、海鳴市周辺に落ちてきたのである。

これは言ってしまうえば『願いを叶える石』なのだが、膨大なエネルギーをかなり不安定な形で保持し、使用者を求めて、人や動植物にとりつき（とりつかれた生物は異相体と呼称される）、暴走して暴れたり、一歩間違えば、前述の次元振を引き起こしかねない。

ロストロギアと認定されるには、十分過ぎる危険性を秘めた代物。

それを含めて、以前からロストログアをフェイトに回収させようとする彼女の母に対し、使い魔のアルフはその不信を日に日に強めていた。

使い魔には言ってしまうえば使い捨ての消耗品という一面がある。

主人である魔導師に特定の行為を行使する契約を結び、それが完了すれば使い魔は消滅する運命にある。

なまじ命を生みだしておきながら、用が無くなれば切り捨てる非人道的なシステムのため、現在は使い魔の生成は、法律で規制されている。

だが、フェイトとアルフの契約内容は特殊なもの。

それは——『生涯をともにすること』と、『フェイトが死ぬまで一生一緒にいること』だった。

アルフのいわゆる前世は狼の子だったが、怪我を負ったことで群れから見捨てられ、それをフェイトに助けられ、仮契約を経て、この内容で正式に契約を結んだのである。

これらの経緯からフェイトを守り、案じ、力になりたいという気持ちには誰よりも強い。

「フェイトがあんなに無理してるのに、あの女は一度もそれに応えてくれたことないじゃないか、それこそ勇夜が『欠陥品』って呼んだ、あのロストログアみたいに……」

それだけにフェイトに何度も危ない買い物させておきながら、感謝も愛情も示さず。

代わりに一方的な『痛み』を強いる彼女の母親が許せなかった。

彼女を案じる言葉をかけても本人は『大丈夫』というものの、アルフは漠然とした形ながらも、彼女の感情を感じ取れるので、無理をしていることは分かっている。

そのため、ジュエルシードを集めることも内心では乗り気では無かった。

たとえ集めて、あいつに持って行っても勇夜のいうとおり『碌でもない形』でしか叶えてくれないだろう。

いつそのこと、フェイトをあいつから引き離して、二人で一緒に逃

げられたらどれだけ良いか。

「ごめんねアルフ、でもジュエルシードさえ集めれば…母さんだって」  
それでも…「あいつ」の「娘」への日頃の態度に反して、フェイトは頑なに母の願いに報いようとしていた。

勇夜もそれを薄々察したのでだろう。

だからあのような条件を出して、容認してくれたのかもしれない。  
さつきだって、囑託魔導師であることを明かしておきながら買い出しに出ようとした勇夜に。

「あたしたちを放っておいていいのかい？」

と聞いたたら。

「捕まえる気ならとつくにやってるさ、でもなんとなく、そのやり方じゃこの子を救えない気がすんだよ」

と答えたのである。

その言葉に、逃げようとする気が、すっかり失せてしまった。

自分もさつきは勇夜に虚勢を張ったけど、本当のところ、彼女を救いにならない状況にもどかしい。

自分がやるべきことは分かっている。彼女の傍にいて支えてやること。

でも本当に願いが叶うなら、彼女を助けてほしい、そう思わずにはいられなかった。

勇夜は今、夜の街を歩きつつ、物思いに耽っていた。

あのしつこきと怨念混じりの執念には恐れ入る異次元人の最後の足掻きで、こつちの多次元宇宙、マルチバースに飛ばされちまっから、もうかれこれ11年。

今の彼は、囑託魔導師の身で、時間が許す限り、世界のあちこちを巡っていた。ヤプールの次元振に巻き込まれて、散り散りになってしまった仲間を探しだすためだ。

時々、色々世話になった『ナカジマ一家』に帰ったりはしている。

今から三年前に二人の女の子を引き取ったので、現在自分を含めて5人家族。

その引き取った子たちには相当懐かれており、特に下の子からは帰ってくる度に突撃されることが風物詩になっていた。

迷い込んだばかりの時に時空の歪みに晒されたのが影響で4歳児に縮んでしまった体も、今はほとんど成人に近い姿になっている。

こっちの世界飛ばされたばかりの時は、かつての父のように「本来の姿」に戻ることもできなかつたが、数年前には取り戻せた。

だが、事前に情報を集め、時に現地に赴いて世界を廻ったものの、肝心の仲間の手掛かりが一切無く、このところ完全に手詰まりになっていた。

最後の賭けとして、管理外世界を廻ることにし、最初の目的地としてこの地球に着いた際、ジュエルシードを運んでいた輸送船が事故に遭い、こっちに落ちていった事を知り、当初の目的を変更し、独自に回収作業に入ろうとして彼女たちと出くわしたのである。

特にあの金髪赤眼で、まだ幼く細い容姿と似合わないようで、この上なく似合う、漆黒の斧を持った少女。

確かに彼女たちが警戒したように、管理局に引き渡そうとも思えなかった。

途中までそのつもりだった。

むしろフェイトから、危ない買い物強いてる野郎を聞き出して、そいつをブツ飛ばしてやろうとさえ考えていた。

だけど……：彼女の体にあつた、昨日今日つけられたものじゃないその代物を見た時、嫌な予感がし、そしてカマをかけた時の反応から、そいつは確信へと変わった。

彼女の抱えている問題は、かなりデリケートで生々しい。

腕っ節で解決できる代物じゃない。

必死で孝行する女の子の邪魔をして、傷つけるような真似なんてできぬわけない。

でもかといって、彼女たちの行動を容認するわけにもいかなかった。



ロストログアは、然るべき手続きを受けなければ、持つだけで違法なのである。あの時はなんとかああいう形で一時的に収集をつけたが、課題は山積みではある。

フエイトのお袋さんに会ってどうするか、管理局が捜査に乗り出した時にどう説明するか……等々、色々だ。

自分で言うのもなんだが、親子ぐるみの問題には弱いよな、俺って……でも、家族が、すぐ近くにいるってのに、分かり合えないってのは……悲しいからな。

どうしたらあの子たちを救えるか……今は具体的な解決策が思いつかない。

それでも、今自分がやれることをやらなければ。

あの子を助けるといふことも

ジュエルシードが引き起こす厄災から、この星の人々を守ることも。

昔は……毎日苛々して、無駄に喚き散らして大馬鹿やらかした大馬鹿野郎だったけど、俺だって、**■■■■**「戦士」の端くれだ。

もうお気づきな方もおられるだろう。

彼の……正体は――

## EP03 — この手に魔法を 前篇

これは、諸星勇夜ことウルトラマンゼロと、フェイト・テスタロツサの邂逅から数日遡った話である。

その夜、とある地球人の少女は、不思議な夢を見ていた。

荒唐無稽な光景ながらも、妙に現実感溢れる不可思議な夢だった。

場所はどこかの森林公園、時間帯は恐らく真夜中。

木々に囲まれたそれなりに広い池があり、船着き場には小型のボートが計二隻置かれている。

そんな日本でよくみる風景の一種なこの森は、異様な空気感を醸し出していた。

ただでさえ、夜の暗闇は生物の恐怖心を刺激させるのに、この森は周りの色合いが赤味がかって、より不気味さを助長させる演出をさせている。

異常で非日常的な日常の空間の中で、少年が一人、張りつめた表情で緊張感を発し、周囲に気を配りながら佇んでいた。

年齢は11〜12歳くらいで、薄めなブロンドの髪に翡翠色の瞳、女の子にも見えなくはない顔つき、地球で見慣れない紋様が特徴的な、半袖短パンの民族衣装とマントを羽織っている。

少年に、一つの影が迫っていた。

その影は赤く光る眼以外は、どんな姿か判別がつかない、その体は一見丸みを帯びているのだが、表皮は黒ずんだ煙にも、もやにも、雲にも見え、表皮が絶えず流動しているので形状が一貫せず、生き物と呼べるのかすら怪しい。

しいて言うなら、あるアニメに登場する、日本の八百万の神様が、呪いによって祟りをまき散らす悪魔になったものと言うべきか。

黒いそいつは、殺気を剥き出しに少年を睨みつける。

実体が分からないことが、より不気味さと怖さを増す効果を出していた。

「お前は、こんな所にいちゃいけない……大人しくあるべき場所に――  
――帰るんだ！」

恐怖をばら撒く殺気と異形に対し、自制心を総動員して耐えながら、影を目にとめた少年は、首にペンダントとして掛けていた一見色の付いたただのビー玉にしか見えないルビー色の球体を取り出し、影に向けて真っ直ぐ手を翳して構えた。

すると球体から、円と正方形を幾重に重ね、何らかの文字が書かれた、彼の瞳と同じ色をした光の陣形が、彼の足元と球体を中心に二つ出現する。

対象の影も、少年を視認すると敵であることを悟ったのか、血の瞳を細め、獰猛に突進してきた。

「妙なる響き、光となりて、許されざるモノを封印の輪に！」

例えるなら、魔法使いが魔法を使う時に詠唱する呪文のような言葉の羅列を少年は唱え、叫ぶ。

「ジュエルシード！ 封印！」

それとともに、円陣と突進してきた影が衝突。

怪物は純粋な闘争と生存本能から、少年は、責任感と罪悪感を活力の源にし、影はその肉体で、少年は魔法陣と呼ぶべき翡翠色の円陣で押し合う。

見ているだけでも伝わる衝撃破。

譲歩して退く思考は両者とも持たず。

どちらも、相手を屈服させるまでは、その迸るパワーを抑える気は毛頭ない。

瞬間、眩い赤い光が煌めいた。

影はその際生じた衝撃で宙に舞い、地面に叩きつけられる。

相当消耗したらしく、ぎこちない動きで地面に体を引き摺りながらゆっくり、影はその場から逃げようとする。

後を追おうとする少年、とどめを指すには絶好のチャンス……しかし、疲労困憊であるのは少年も同じ、むしろ消耗の度合いはあの怪物以上であり。

「逃がし……ちゃった……追いかけ……なきや……」

息を荒げ、膝をつき、うつ伏せに倒れこんでしまう。

心はまだ諦めていないのか、急激の消耗で重くなつた体を必死に起こそうとする少年。

だがこの時の彼の体は、彼の意志に伝えてくれるだけの余力を残していなかった。

数度、身体に立ちあがれと繰り返し指示を出し、全て断念させられ、うつ伏せの体勢のまま、力尽きてしまう。

「誰か…僕の声を聞いて…お願い…僕に…力を——」

夢はそこで終わりをづけ、少女は深い眠りについていった。

翌朝、

三月の誕生日に買ったつもらつたばかりな、目覚まし時計の代わりに使っている少女の携帯のアラームがベッドの中で響いた。眠気と格闘し、二度寝したい誘惑を押しつけながら、手に取ろうとするが、うっかり床に落としてしまう。

なんとか手探りで落ちた携帯を取り、電源ボタンを押してアラームの着信メロディを解除した。

「ふにゃ〜〜〜……」

メロディが鳴りやんだことを聞きとめると、少女は起床したばかりでまだおぼつかない体を置きあがらせて。

「何だったんだろう？ ああ夢って…」

その夜見た『変な夢』の感想を述べた。

歳は、フェイト・テスタロッサと同じ10〜11歳ほど、肩まで伸ばしたロングヘアは鮮やかでエンジェルリングができ、艶がある栗色、寝癖でところどころ髪が跳ねているのはご愛きようだ。

少女は、不思議で不思議で…堪らなかった。

なんで、あんなファンタジックな夢を見たんだろ？

前に夢は、前日の経験が反映されると聞いたことがあるが、いくら記憶を探って見ても、夢に影響を与えそうな該当する映像は、見当たらず再生されなかった。

しかし、そんな疑問も眩い朝日と背伸びの前に一気に吹き飛んで

いった。

なぜなら今日も、春の暖かさが身にしみる朝であったからだ。

少女——高町なのはは、私立聖称大付属小学校の5年生。

この高町一家においては、四人兄妹の末っ子さんな女の子。

パジャマから学校の制服に着替え、洗面所で髪をツイントールで纏めると、ダイニングへ向かった。

「おはよう」

「おつ、なのは、おはよう」

「おはよう、なのは」

台所で朝食の準備をしている私と同じ亜麻色の髪をした女性と、テーブルで朝刊を呼んでいる男性にあいさつします。

この二人が私の父と母であり、高町家が経営する喫茶店、『翠屋（みどりや）』のマスターとお菓子職人である高町士郎、桃子夫妻です。

「はいこれ、テーブルに並べてきてね」

「は〜い」

なのはに、家族全員分のコップを乗せたお盆を渡す桃子。

なのははそれをテーブルに運んだ。

「今日はちゃんと一人で起きたな、偉いぞ」

士郎は、早起きしてきたなのはを褒めた。

なのはは朝に弱く寝ぼすけなところがあり、こうして今朝のように自力で起きることは稀であった。

でも、小5にもなつてそんな風に褒められるのは正直複雑な気分である。

ちなみに喫茶翠屋は、この海鳴市の駅前商店街に位置し、ケーキとシュークリームに、特製の自家焙煎コーヒーに定評が有り、特に学校帰りの女子や近所の奥様方に人気がある店である。

地元のタウン情報誌に、何度か載ったことさえあるくらいだ。

「お兄ちゃんたちとお姉ちゃんは？」

「ああ…今道場で朝練」

高町家の自宅には剣道の道場がある。

なのはが聞いた話では、父士郎の生家には、昔から伝わる特殊な流派を受け継いでいるらしい。

「お兄ちゃん、光兄、お姉ちゃん、おはよう」

なのはには、兄が二人と姉が一人いる。

「今日の朝練はここまでだ、美由希、光」

大学生で、もう一人の兄と姉の剣術指南役でもある高町恭也。

「じゃあ続きは学校が終わってからね」

高校二年生の高町美由紀。

そして――

「今日は一人で起きれましたね、お寝坊さん」

――緑がかつた黒髪をした、とても剣を持つ姿が想像できないくらいに穏やかな佇まいをみせる、ただいまなのはをからかった少年は、中学三年生の高町光、名前はヒカリと書いてリヒトと呼ぶ。

念のために言うと、どちらも『光』を意味している。

「私だつて自力で起きるぐらいできるよ光兄（りひにい）」

「いつもは、僕に起こしてもらっているではないですか」

「もー光兄ったら」

この二人目の兄である光は、実は高町家の養子で義理の家族ではあるのだが、兄弟仲は全員良好である。

しかしこの光と言う人物、血が繋がっていないにも関わらず、何故か恭也と同じ声をしていた。光は普段から誰に対しても敬語口調なので、付き合いが長い人には聞き分けは容易ではあるが、聞き慣れない者はどう違うのかさっぱり分からないだろう。

まあ、そんな些細なことはいちいち気にしない、おおらかなで傍から見ると羨ましいけれど、ちよつと空気が甘つたるくなるほど仲が良い家族だった。

例えば、朝食の食卓ではと言うと。

「今朝もおいしいな、特にこのスクランブルエッグが♪」

「ホント♪ 今日隠し味にトッピングのトマトとチーズとバジルを使ってみたの」

「みんなあれだぞ、こんなに料理上手なお母さんがいるのは幸せなことなんだぞ、分かっているか？」

「分かっていますよ、ですよね、なのは「うん」

子どもが四人で、特に上の子は大学生な年頃ではあるが、二人は未だに新婚ほやほやに負けず劣らずの仲の良さ。

容姿も夫妻ともども、他人から子持ちと信じられないくらいに若々しかった。

二十代のおしどり夫婦と勘違いされても無理ない。

結婚歴の問題さえクリアすれば、新婚夫婦を対象としたバラエティ番組に余裕で出られそうだ。

「美由希、リボンが不格好だぞ」

「え、本当？」

「ほら、直してやるから」

で、恭也と美由希のお二人も、とても仲良しさん。

この年頃だと普通の兄妹なら、家庭内別居な疎遠の間柄になりがちだが、高町家では、そんな「普通」は通じない。

仲の良さと言えば、なのはと光もそうだ。

さつきみたいにからかいか、からかわれても笑って済ませるくらいに、互いに良好な間柄。

なのはにとつて光は、血は繋がりなど瑣末なことにも等しく、憧れの大好きな兄であった。

光兄と呼ばないと、しつくりこないくらいである。

どうして、そこまで光兄が好きかと言われると。

絵本に出てくる騎士さんみたいに、穏やかだけど強い……こともあるけど、やっぱり――

場所と時間は変わって、今はなのはの通学風景。

彼女の学校は、私立聖祥大付属小学校。

今着ている白を基調としたセーラー風の制服は、その学校のもの。

家からは遠めなので、行き帰りはバスも使って通学している。

「おはようございます」

いつもの時間にバスへ乗車しつつ、運転手のおじさんに挨拶をするのは。

「なのはちやくん」

「なのは、こっちこっち、席確保しといたわよ」

最後部座席の方からの、なのはを呼ぶ声。

同年代の女の子二人が席に座り、彼女を手招きしていた。

「すずかちゃん、アリサちゃん、おはよう」

二人にも朝の挨拶を返し、後部席に座る。

金髪で一部の髪を縛っている勝気そうな女の子は、アリサ・バニングス。

紫の長髪でカチューシャを着けた物腰が柔らかかそうな女の子は、月村すずか。

なのはらこの三人組は、二年前の小3に上がりたての頃に知り合い、今や親友と言える仲である。

こうして三人で、談笑しながら通学するのが三人の日課だ。

このように、高町なのははごくごく普通(?)なのは……かは明言できずとも、色んな幸せに囲まれて暮らしている女の子ではあったが……その内にはある「悩み」を抱えていた。

その日のお昼、かの仲良し三人組は、校舎の屋上でお昼をとっていた。

普通の小学校と違い、この聖祥大学は小中高大一貫校で制服の着用が義務付けられ、お昼も持参型で給食制度はない。

「将来か……」

ぼつりとなのはが呟いた。

今三人は、午前の授業で話題になった『将来』について話をしている。

「悩むことないって、普通の小5なんて、未来の夢なんかまだ漠然としたものよ」

「でもアリサちゃんとすずかちゃんって、もう結構決まってるんで



しよっ。」

「まあね、うちはお父さんもお母さんも会社経営だし、あたしはそれを継げたら良いと思ってるけど」

「私は機械をいじるのが好きだから、工学系の専門職がいいかなって」

何気に、小学生の会話じやないような気がしないでもない。

漠然と言ったアリサもすずかも、この歳で明確な将来設計をしていない。

「そっか…二人ともすごいよね…」

一方なのははと言うと、将来に関しては漠然としたものしか浮かばない『普通の小学生』といったところ。

「でもなのはは喫茶緑屋の二代目じやないの？」

「うーん……でも…」

なのはは一応翠屋を継ぐこともまんざらではないが、実際どうかと聞かれても、分からないとしか言えない。

フオローすれば、この年代ならむしろなのはのような子が普通である。

逆に彼女の親友たちのように、小学5年生の齢で具体的なビジョンがあることの方が異端だとしか言い様が無い。

「やりたいことは何かあるような気もするんだけど…まだそれがなんなのかはつきりしないんだ」

だだ、歳相応以上にませた感覚と、先に行く親友たちの存在も有り、自分の『やりたいこと』が見つからないなのはにとっては、悩ましい実情であった。

「あたし…みんなと光兄と違って、特技も取り柄も特にないし…」

「この、バカちゃんが！」

「にやあ!？」

自嘲気味に呟いたなのはの頬に、アリサの叱咤とともに彼女の弁当にあったレモンが飛んできた。

「自分からそういうことを言うんじゃないの！光さんにも失礼でしょ！」

「そっだよ……なのはちゃんはしかできないこと、きつと……あるよ」

「だいたいあんた！ 取り柄が無いとか言うけどね、算数の成績とか、このあたしより良いじゃない！ それで取り柄が無いとはどの口が言うーんだあああああああ！」

アリスのなのはへの励ましと叱咤は、いつしか一方的なイチャモンに変わり、お仕置きとばかり、なのはの口を両手でぐいぐいと左右へ引っ張り出した。

「だあくてえなのはあくこうごにがあてえだしいたあいいくもおにがあてだあしく」

ほほを引っ張られ、涙目になりながらも、自分の苦手科目を述べるのは。

妙なところで意固地な女の子である。

「二人とも、ダメだよ……ねえつたら……ほらみんなじろじろ見てるよ」

そんな状況に、おろおろすることしかできないすずか。

今日の親友三人組のお昼の会話は、こんなコント気味な結末に終わるのだった。

実は……なのはの「悩み」は想像以上に深刻なものだ。

親しい人と一緒にいるのはともかく、一人でいる時、それは表に現れてくる。

例えば、臨海公園のコンクリートの上で一人、潮風を受けている時。

彼女が一人になりたい時に、良く来る場所だ。

今の生活に、不満も不安も抱えてない。

自分には家族がいて、友達もいて、彼らと一緒にいる日々はとても幸せな時間で、寂しくなる理由なんて……どこにもない……無いはずなのに。

時々、どうしようもなく悲しくなって……苦しくなり、どうしても一人になりたい時が現れてくる。

言いようのない不安と行き場のない気持ちと言う淀みが体から抜けずに体の中を巡り。

“なにかをしなくちゃ”

“自分にしかできないことを見つけなきゃ”

“何もできない、助けられて……守られてばかりな自分を変えなきゃ”

という強迫観念たちがこみ上げてくるが……それを発散して、外に向ける行き先が見つからず、心の内で巡り回るのを繰り返すばかり。

なまじ優しく、痛みを内に抱え込んでしまうゆえに、父にも……母にも……兄にも姉にも……そして光にも言ったことが無い苦悩と痛み。その心の痛みのために何度、一人の時、海原に向かって涙を流して叫んだことか。

「自分でできること」を明確に理解し、それを為そうとする。

なのはは、それを見つけたのに見つけられずにいた。

見つけられない今に、苦しんでいた。

彼女がなぜそこまで拘るのか？ それには幼少時の日々から、繋がっている。

今はここでは話さないでおこう。

そして、“自分でできる何か”を見つけてるきっかけとなる出来事が、直ぐそこまで迫っていることは、まだ彼女は知らずにいた。

その日の夕方。

「ねえ、今日のすずかのドッチボールすごかったわね」

「うん、カッコよかったよねすずかちゃん♪」

「そ、そんなこと……ないよ」

「男子も真つ青な身体能力のすずかのどこが “そんなことない” のかしら」

三人は、今日起きたことを話題にしながら、一緒に通っている塾へと向かっていた。

「ほらこっち、ここが前に見つけた塾への近道」

「そうなの？」

アリサの示したその近道は、若干深い森で囲まれた園道だった。  
「ちよつと道が悪いけどね」

確かに深く生い茂る草木らが太陽光を阻んで大きく広い影を作り、子どもが通るには抵抗を感じさせる薄暗さのある道であった。

そんな道を通っていると、なのはは昨夜見た夢を思い出した。

「(ここ、夕べ夢で見た場所と……似てる?)」

確かに、あの夢での一連の出来事があった場所と、この森の風景は酷似していた。

「どうしたの?」

「なのは?」

「あ、うん何でもない、ゴメンゴメン」

「じゃあ行こう」

再び歩き出す三人

ここで起きた出来事を夢にみるなんて……正夢? まさかね。

「(助けて……)」

そう思った矢先、なのはの耳、いや頭か……自分の脳内に声が響いてきた。

「なのは?」

「今なにか聞こえなかった?」

「なにか?」

「何か、声……みたいな」

「別に」

「聞こえ……なかったかな」

二人はそう言うものの、なのはには『助けを求める』悲痛な声が、確かに何度も何度も響いていた。

気がつくとき、なのははその場を走り出していた。

「なのはちゃん」

「なんでだろう?」

なんとなくこの先を行けば声の主がいると言う確信がなのはにあった。  
あつた。

声のした方と思われる方角を走っていくと、道の真ん中で小さな動

物が倒れていた。

その動物の前にしゃがむと、こちらに気づいたように目を開けてこちらを見ている。

その小さな動物の首には赤い球体を着けたペンダントが下げられていた。

「もうどうしたのなのは！ 急に走り出して！」

「あつ見て、動物？ 怪我してるみたい……」

その動物は、怪我をして衰弱していた。

「あ、うん………どうしよう」

「…どうしよう… って…とりあえず病院？」

「獣医さんだよ」

「でも、この近くに獣医さんっていたっけ？」

幸い、この近くに動物病院があったので、なのはたちに拾われた動物はそこで治療を受けることになった。

「そんなにたいした怪我じゃないけど、随分衰弱しているみたいね、きつとずっと一人ぼっちだったんじゃないかな？」

「院長先生、ありがとうございます」

「ありがとうございます」

まだ会ったばかりの動物に代わり、礼を言う三人。

「どういたしました」

「先生……これってフェレットですよね？」

フェレットとは、ヨーロッパパケナガイタチを家畜化した、イタチの仲間。

「どこかのペットなんでしょうか？」

「さあ……見たことない種類だけど、この首輪に付いているのは………宝石なのかな」

獣医さんが宝石に触れようとすると、フェレットは眼を覚ました。

あちこち周囲に視線を向けて、なのはに目を止めると、そのままじつとなのはを見つめ出した。

「なのは、じーと見られてるわよ」

「にやつ？ え、あつ…えつと…」

恐る恐るフェレットに手を差し伸べると、フェレットは人間としては小さめだが、小動物からは十分大きい彼女の手近づき、なのはの人差し指を舐め初めた。

「「はあ〜〜〜」」

三人が、思わず顔が綻び、感激の声を上げるほどの愛らしさだった。だがフェレットは、まだ回復してないためか、すぐにそのまま眠り込んでしまう。

「とりあえず、明日までこちらで預かっておくわね」

「「はい、お願いします」」

と、ここで三人はようやく当初の目的を思い出す。

「あ！やば！塾の時間」

「ほんとだ！」

「じゃあ院長先生、また明日来ます」

フェレットのことを気にしつ三人は動物病院を後にした。

その後の塾の授業中でもなのはは、あのフェレットのことで頭が一杯で、講師に名指しされた時は親友のフォローでなんとかその場をしのぐ有様だった。

その夜の高町家の食卓。

「でね……そのフェレットさん、ちよつとの間、うちであずかりたいんだけど……いいかな？」

「フェレットか………」

なのはは、例のフェレットのことを家族に切り出した。

「ところでなんだ？ フェレットって？」

神妙そうに考え込んだ仕草から、一転して練り出された父の思わぬカウンターボケに、家族一同はズッコケそうになった。

なのはに至っては、顔をテーブルにぶつける始末。

「イタチの仲間ですよ、父さん」

「だいぶ前から、ペットとして人気なんだよ、この間もテレビの特集でやってたし」

光と美由希が補足説明をした。

「しばらく預かるだけなら、カゴに入れておけて、なのはがちゃんとお世話できるならいいけど」

母桃子に、言い方こそ穏やかだが、やはり命を預けるのである、ちゃんと責任をもって預かれるかと問われるのは。

もちろんなのはも、軽い気持ちで世話をするつもりはない。

「三人はどう？」

「俺は特に依存はないけど」

「あたしも」

「僕もです」

「だ、そうだ」

「よかったわね、なのは」

「うん！ありがとう」

幸い、全員から了承を得ることができた。

明日には、フェレット君を迎えに行こう。

就寝前に、アリスとすずかにフェレットを自分の家で預かることをメールで連絡し、眠りにつこうとするのはだったが、電気を消す寸前に、再び響いてきた。

「聞こえますか？僕の声が」

夕方に聞こえた……正体不明なあの声。

両手で頭を押さえるなのは。

また……なんなの？ これ。

空耳にしては、くつきり頭に伝わってくる。

「聞いてください、僕の声が聞こえるなら、お願いです、僕に少しだけ力を貸して下さい」

どうやらその声の主は、助けを求めている様子。

「危険がもう——」

途中で声が千切れるとともに一瞬目眩がし、ベットに倒れるなの

は。

何事なのか、把握はできていない。

でも、自分の心が訴えてくる。

“行かないや！行つて助けなさい”

その心そのままに、直ぐに私服に着替え家を飛び出して行つた。

行き先はあのフェレット君のいる動物病院、どうしてかは分からない、

でも本能のような感覚で、 “そこに行けば分かる” という奇妙にはつきりとした確信が渦巻いていた。

目的地かもしれない、榎原動物病院に着くのは。

今まで無我夢中に走つて気がつかなかつたが、やはり夜の夜道は氣味が悪い。

暗闇から、何かが出たらどうしようと考えてしまう。

その時、突然妙に生温かい風が流れ、頭に妙なノイズが走る。

たまらず頭を押さえるなのは。

「この音って…」

夕方時もさつきも聞こえたものだが、今まで断続的に響いていたそれはより遙かに強いノイズとなって、長いこと響いてくる。

そのノイズが終わつた時、空気が変わったような感じがした。

周りをよくみると、ありとあらゆるものがどこかみどりや紫ががっている。

それに…なのは外にいるはずなのにまるで室内にいるような奇妙な感覚を感じていた。

そして。

「g u a …」

低く響く獣のような不気味な声とともに、あのフェレットと、周りのものを破壊しながら夢に出てきた黒い影が現れた。

自分に向かつて、飛んできたフェレットを受け止めるのは。

「いったい何!?!」

その影は、自分が倒した木に身を抑えられてもがいている。



「来て……くれたんだ」

突然声がした。

今の声って……今ここには自分と変な怪物とフェレットしかない。  
ない。

ということは、まさか今手の中にいる “この子” が、声の主？

「にゃ!? しや、しやべった!」

だが状況は驚く暇さえ与えてくれない、影は自分たちに明らかかな敵意を向けて、こつちを見ている。

フェレットを抱えたまま、なのはその場を走り出した。

「その、何がなんだがよく分かんないんだけど！ あれって一体何なの!？」

聞きたいことは一杯あったが、あの謎の影についてをフェレット問  
いいただきます。

「何が起きてるの!？」

「君には資質があります、お願いです、僕に少しだけ力を貸して」

どうということ? ますます分からない。

ししつって? それに力ってどういうこと?

運動だって、音痴レベルなのに……緊迫した状況のせいか、色々  
段階を高跳びしたフェレットの言葉は、逆になのはを混乱させる。

「僕はある探し物のために、ここでは違う別の世界から来ました、でも  
僕一人の力ではどうにもできなかった、だから迷惑だったことは承知  
しています、あなたのような資質を持った人に協力してほしくて、だ  
からお願ひします、僕の『魔法の力』を」

「魔法?」

昨日の夢から魔法っぽいと思っていたが……まさか……本当に朝のア  
ニメみたいなきることが起きるなんて……すると空からあの『影』がいき  
なり落ちてきた。

なんとか直撃を避けて、電柱に身を隠す。

「お礼は必ずしますから……」

「お礼とか、そういう場合じゃないでしょー!」

影は容赦なく追ってくる以上、こうして話をしてる時間も無い。

「とりあえず、私は何をすればいいの?」

フェレット君の説明の大半は正直チンプンカンプンだが、少なくともその「魔法」を使つて、あれと戦つてほしいということは何となく理解できた。

でもどうやって? 本当に私にできるの?

こうして逃げるだけで手一杯。

非常識な状況に、恐怖を押し込めながら、何とか耐えている。

そんな自分が、怪物を戦えるとはこの時のなには思えなかった。

「これを持つて下さい」

フェレットが差し出したのは、あの宝石をつけたペンダント。

ひもに括られたその球体は、赤く発光していた。

手にとつてみると、まるで人の手に触れたような温かさを感じる。

「あなたに管理者権限を譲渡します、それを手に、目を閉じて、心を澄ませて、僕の言う言葉を、言う通りに繰り返してみて」

正直、まだ今何がどうなっているのか分からない……でもやるしかないと思つた。

このままでは自分もこの子も危ない。

どこまでできるか分からないけど………どうにかする方法がこれしかないのなら。

「行きますよ」

「う……うん」

意を決して、彼の言う通り、目を閉じ、ペンダントを握りしめた。

「我、使命を受けし者なり」

「我……使命を……受けし者なり……」

「契約のもと、その力を突き放て」

宝石は断続的に点滅し出す。

「えーと……契約のもと……その力を解き放て……」

「風は空に、星は天に」

「風は……空に……星は天に」

「そして不屈の心は——」

「そして……不屈の心は——」

なんでだろう？

その時最後に唱える言葉が、ふっと自然に脳内に浮かんできた。

「——この胸に！ この手に魔法を」

宝石を持った右腕を真つ直ぐ天に向けてかざし。

「レijingグハート！セエエト アアアアップ！」

『Standby REDDY SET UP』

最後の言葉と共に、宝石から発された赤い光が、空の彼方まで溢れ光の柱が現れる。

「なんて……魔力なんだ？」

フェレットは驚嘆の声を漏らす。

初めて会った時から、素質があるとは思っていたが、なのはの『資質』はフェレットの予想を超えていた。

「落ち着いてイメージして下さい、君の魔法の『杖』の姿を、そして君の身を守る強い『衣服』を」

「そんな、急に言われても……」

『はじめまして、新たなマスター』

どこからエコーがかかった女性の声が出た、もしかしてこの宝石？

「えっ、あ、はじめまして」

『あなたの魔力資質を確認しました』

フェレットが話をしただしたという魔法もの全開な展開もびっくりしたけど、魔法の杖まで喋るなんて……どうもこのフェレットの言う魔法は、なのはのイメージする魔法とは異なるようだ。

『デバイスの形状はこちらが自動選択しますが、防護服はあなたのイメージを元に最適なものを形成します、よろしいですか？』

杖の言葉を噛み砕いて言えば、杖のデザインは『杖自身』がするが、その『防護用の服』のデザインは、なのはの想像（イメージ）を元に作ります——という意味合いであった。

「えーと……とりあえず、はい！」

本音を言えば、この球体の言葉はフェレット以上に難解な単語のオンパレードで理解できているとは言い難い。

でも……わたしはこの魔法の杖を信じることにした。

ぶつつけで大雑把だけど、なのはは『服』を脳内に浮かべた。

『All right. Stand by Ready. Barrier jacket, set up.』

瞬間、眩いまでの閃光が宝石から発って、周りが白く染まっていた。

その光を視認しているのは、なのはとフレットと影だけ、では無かった。

光の柱を目に止めた者が、この街でもう一人いたのである。

「あの光……まさか！」

その彼もまた、別の世界から来た来訪者の一人であった。

「成功だ……」

「にやあーふえっ！ええええ！嘘……なんなのこれ!？」

光が収まった瞬間、なのはは自分が置かれた状況に驚愕した。

何となく咄嗟にイメージしたのが、聖祥付属小の制服なのだけだ、これがフレット君の言っていた『杖』と『服』なの？

服装は胸部に真紅のリボンが付いた彼女の学校の制服をモチーフに青色とライン、華奢なのはの両腕は小手に覆われ、ロングなスカートの裾はギザギザが付いている。

さらに左手には、先端にアルファベットのG状を模して、中央に赤い球体はめられた杖を持っていた。

でもそこからどうしたら良いの？

呪文とか、どうすれば使えるの？

「来ますー！」

相手は考える余裕も与えてくれない。

影はこちらに視線を据えた。

明らかになのはを狙っている。

怖い……あんなのとどう戦えば良いの？

異形の赤い目は、少女を金縛りにするには充分すぎる殺気を秘めていた。

なのに、体は恐怖でくすんで固まってしまっている。

目じりは涙目で、立っているのもやっただ。

それでも理性を保っている辺り、常人よりも逞しく堅固な胆力を彼女は持っていた。

が、それは同時に、それだけしかできないとも言える。

なのはの反応はごく自然なもの、普通の小学生がこんな状況に放り込まれたら、こうなってしまうのは必然だ。

影は空高く飛び上がると、不気味な赤い眼をなのはに向け落下してきた。

「危ない！」

反射的に屈めるなのは、その影がなのはを押しつぶそうと迫った時、

杖の赤い宝石部分が突然光り出し、手り剣状の凶形と六角形が重なった形をした紋章が現れる。

「あの紋章は？………！？」

紋章から人が出てきた、正確には“人に似た姿形”をした何か。

その全容は光に包まれてよく見えない。

「はあああ！」

光の人は影を蹴りつけ、もろに受けた相手は放物線を描いて落下する。

「こ、今度は何？」

今杖から人が？ 自分を助けてくれたのか？

光の人は着地し、こちらに目を向けると全身を覆ってた光が収まり、その全貌を現した。

銀色のスラリとしたボディに、緑色に染まった肩と腕、胸と手の甲には黄色い光沢が、そして顔には人間に相当するパーツが無く、代わりに漢数字の10にも見ええない形をした、黄色い光を放っていた。

「君は？」

「あなたは？」

二人は、ほぼ同タイミングで光を纏う何者かに尋ねていた。

「どうにか、間に合いましたね」

その光の人は、騎士を連想させる落ち着いた口調で言葉を発した。

そう、間違いなく彼は、かつてはエスメラルダ星の騎士で、今はウルトラマンゼロが結成した宇宙警備チーム、〃ウルティメイトフォースゼロ〃のメンバーの一人。

鏡の騎士——〃ミラーナイト〃。

## EP04 — この手に魔法を 後篇

異世界からの来訪者たるフェレット姿の少年にとって、なのはに備わる魔法の素質は想像以上だったが、それ以上に予想外な事態が起きた。

彼の持っていた魔法行使のアイテム、彼の世界ではデバイスと総称され、今は実質持ち主になったなのはが持っている魔法の杖、《レイジングハート》から光を纏いし人が現れて、異相体の巨体に踏み潰されそうになったなのはを、間一髪のところ助けたのだ。

「どうにか、間に合いましたね」

「あなたは？」

なのはたちは思わず声を重ねて、銀色の騎士に何者かと問いかけていた。

「話は後です、そこのフェレット君」

「は、はい！」

「あの怪物をどうにか沈める方法は、あるのですね？」

「あ、はい」

「なら、私が奴の気を引き寄せ、時間を稼ぎます」

「あ！ 待って！」

騎士はその場から駆け出し、異相体と戦闘を開始。

敵だと見定めた影は、不定形な肉体から触手のようなものが飛び出し、騎士を襲うが、騎士は手と足を巧みに使って振り払い。

「ミラーナイフ！」

指先を立てた手から光の矢が放ち、影をけん制する。

影はその矢を受けてたじろぐが、直ぐに狙いを定めて突進してきた。

だが光の騎士はその攻撃も難なく躲し、空に飛び上がった。

怪物も空に上がり、空中線が繰り広げられる。

あの騎士が何者かはフェレット君も分からない……けど味方なのは確か、このチャンスを生かさないと。

「君！ これからその杖の指示をしつかり聞いて」

「はっ、はい！」

『マスター、魔法についての知識はありますか？』

「全然です！ まったくありません！ ど、どうしたら!?!」

『落ち着いて下さい、私が全て教えますので』

初心者を通り越して、魔法に関しても、戦うという行為に対しても素人なのは、精々知っていることと言えば武道の心得ぐらいだ。

おまけにさつきまで未知の怪物への畏怖で委縮していた有様、今は助っ人のお陰で大分落ち着けるまでになっているが。

「はい！」

『まず、飛びます』

「えっ?」

『Flier Fin』

「にやああああ！」

いきなり両足に、桜色の光でできた翼が現れたかと思うと、なのはの体は宙に舞った。

幸い、レイジングハートが姿勢制御のサポートをしてくれることもあり、動きこそぎこちないが、なんとか空中に浮遊できていた。

「あの黒い生き物みたいなものは何?」

『生き物ではありません、ロストロギアの異相体です』

説明を聞いたなのだが、小学生には難しい単語の羅列であまり内容を把握できずじまだけど、何らかのエネルギーがあつた怪物を生み出したぐらい……何となく掴めた。

「じゃあ、あなたから出てきた人は?」

なのはは自分を助けてくれた騎士のことも質問する。

『私にも分かりませんが、何らかの方法で、瞬間移動してきたとしか』

銀色の騎士が未知の存在であるのは、あのフレット君とこの魔法の杖も同じのようだ。

答えなど出ようがないのに、それでも考えてしまうのは……どうして、あの人は自分を助けてくれたのだと。



彼女の視線の先では、異相体と呼ばれた影と騎士の戦闘が続いている、どちらも譲らない、互角の勝負。

やや騎士の方が防戦気味だが、積極的に攻撃しないだけで、攻勢に転じれば圧倒できる余力があった。

「あなたの魔力があれば、あれを止められます、レイジングハートと一緒に封印を!!」

「よくわからないけど…何をすれば」

『異相体を封印するためには、接近して封印魔法を発動するか、遠距離からの砲撃魔法が必要です』

つまり選択肢は二つ。

近づいて攻撃し、直接封印するか、または遠くから封印するためのエネルギーを直接放つかのいずれかだ。

『あなたの思い描く、強力な一撃をイメージしてみてください』

「そんな……急に言われても……」

『両腕で私を持ち、胸の奥の熱い魂を両手に集めるつもりで、集中して下さい』

た……魂？

その時だ。

騎士と戦っていた異相体が二つに分かれ、内一体がこちらに向かって来る。

異相体の意図に気づいた騎士は、なのはのもとに向かおうとするが一方に邪魔される。

「きゃあー」

そして一方が突進してきた時、反射的になのはは利き手を伸ばした。

すると、掲げた掌が桜色に光ったと思うと、同色の光の弾丸が放たれ、異相体に命中。

光弾を受けた対象は、四方にバラバラに飛散した。

だが、黒い破片たちはすぐに一つの影に集まって戻っていく。

なのはは、一連の出来事に、あることを思い出す。昔に見たアニメで、体の中にある『気』ってエネルギーを両手に集めて、発射する場

面があつたことを。

杖の言うようにイメージを形にするには、その記憶は格好の材料となつた。

「今のよりも、もっと強い光を出せない？」

『了解、あなたがそれを望むなら』

なのはは、自らの記憶を参考にデバイスの指示通りにやってみた。彼女の体は桜色に発光し、その光は両手に集中して行く。

『Mode change, Cannon mode.』

同時にデバイスの赤い球体の周りにCの形を取った、金色の部品が、音叉のような形に変わり、持ち手の真ん中にトリガーが現れ、槍とキャノン砲の特徴を掛け合わせた形態となつた。

『構えてくさい、『直射砲形態』で発射します』

ここまでいけば、なのはでも何をすべきか理解できた。

やることはシンプルだ。

「あの影を、魔法で撃って封印すればいいだね」

『そうです』

変形した杖の先端という銃口を、異相体に向け狙いを定めた。

「あの子…砲撃型…」

上空から遠距離からの魔法攻撃を行おうとするなのはに、フェレットはまたも驚かされる。

「デバイスのサポートがるにしても、素人であそこまでできるなんて……あの子はいったい？」

『標的のロックオンは私が行います、合図とともにトリガーを引いて下さい』

「はい…」

レイジングハートに、なのはの足に生えてきたものと同形の光の翼が出現し、その先端には桜色のエネルギーが集束、光の球体を形作る。

だが異相体は果敢なく宙を動き回り、中々対象をロックできそうにない。

そんな時。

「ディフェンスミラー!!」

騎士がそう叫ぶと、かざした両腕から半透明の十字架に酷似したクリスタルがいくつも出てきた。

十字架の群れは異相体の周りに密集し、球体となって閉じ込めた。

異相体は体当たりをして、光の牢獄を抜けようと試みるが、牢は頑強でびくともしない。

「ミラー・ウエイト!!」

光の騎士は今度はそう叫ぶと、閉じ込められた異相体の周りに、同じ形状の十字架が4つ出現。

同時にバリアを解除した。

「えっ!?!」

なのはとフレットは、当初騎士の意図が分からなかったが、間もなく理解できた。

百聞は一見にしかず。

異相体は、見えないロープに縛られたかのように動きを封じられている。あの光の十字架は、一種の捕縛効果があったのだ。

「今の内に封印を!」

「はい!」

『Target, lock on』

杖のターゲットマークが異相体を捕える。

『今です、トリガーを!』

杖の指示通り、引き金を引くのは、レイジングハートからすさまじい桜色のエネルギーが発せられ。

「シルバーアアアアーークロス!」

同時に騎士は両腕を×字に構え、水平に広げると十字型の光の刃を発した。

桜色の奔流と黄色い光刃は地上の異相体へと正確に命中し、閃光を散らすとともに、邪悪な影は消滅していった。

『Nice, a shot』

排熱筒らしきところから煙を排しながら、なのはを称えるレイングハート。

『降りられますか?』

「あつ……はい」

浮遊状態からゆっくり降りて、地面と着地するなのはと騎士。

「あ、あの……助けてくれてありがとうございます」

「こちらこそ、私だけでは、ここまで穩便にことを済ませられませんでしたから」

騎士は紳士のような佇まいで、片手を胸に置きつつ一礼する。

さつきは心情的に余裕がなかったので気が付かなかったが、なのはは彼の発する声と言いまわしに、聞き覚えがあった。

どこかで聞いたことがあるんだけど……ひよつとして。

「僕からも協力に感謝します、ですがあなたはいつたい?」

フェレット君も騎士の助太刀に感謝を表明しつつも、正体について尋ねた。

すると、騎士の体が突如として光り輝いた。

視界を一時奪うほどの光が収まると、そこにいたのはなのはにとつて、馴染みあるどころではない人物だった。

「りい！光（りひと）兄っ！」

「ずいぶん探しましたよ、なのは」

なのはの顔は驚愕で全身ごと凝固してしまう。

何度見ても身間違いではない、紛れもなく鏡の騎士は、高町光その人だった。

喋るフェレット、謎の黒い生命体、魔法と魔法の杖、そして助けにくれた光の騎士の正体が自分の義兄……様々な非常識な事態の前になのはは思わず。



たのです」

「にやはは、そうなんだ…」

なんともアニメに漫画やら、特撮番組やらで出てきそうで、地球では絵空事と笑われそうなどはあるが、あの姿といい、空を飛んだことといい、手裏剣みたいな光線技といい、それらを直に見ている以上、本当のことだと信じられた。

他にも色々聞きたいことがあったが、光兄の言う通り、長くなりそうなので、次の機会に聞くことにした。

「気がつかれたようですよ」

「えっ?」

光兄の言う通り膝に目を向けると、眠っていたフェレット君が起きていた。

「怪我……痛くない?」

「平気です……もうほとんど治っているから」

フェレット君は体を揺すると、獣医さんに巻かれた包帯が解かれ、地面に落ちた、確かにあちこちあった傷がほぼ無くなっている。

「ほんとだ」

「それも『魔法』で直したのですか?」

「はい」

「ねっ、自己紹介してもいい? 私、高町なのは、なのはでいいよ、えーとこの人はわたしのお兄さんで」

「ミラーナイト…今は高町 光(リヒト)と言います、光と呼んでください」

「僕はユーノ・スクライア、ユーノが名前です」

「ユーノ君か……かわいい名前だね」

「本当にすみません……あなた方を巻き込んでしまつて……」

「そうですね……私はともかく、妹を巻き込んだ罪は重いですよ」

「ひ……光兄?」

義兄の様子に、違和感を覚えた。

あ…あれ? なんでだろ?

いつもより兄の美声のトーンが低いような……ひよっとして、怒ってる？

なんか、兄の体から黒いオーラを感じるのは、気のせいでしょうか？

今まで、怒りのいの字も見たことが無かったのに……兄の豹変に言葉がみつからない。

「さて、どう償ってもらいましょうか……」

髪に隠れて表情は見えないが、なのはの懸念は当たっていた。

光はユーノを、なのはから一瞬の早業で取り上げると、彼の体を鷲掴みにした。

ユーノは必死でもがいているが、光の手は相当力がかかっている様で、ほどかしてくれない。

「フェレットって……どう調理すればおいしく食べられるでしょうか？」

夜の闇より濃い影が顔に差した彼の口から、さりげに物騒なことを呟いた。

なまじ美声なのと口元が笑顔なのが、恐ろしさを倍増させる。

「まっ！待って下さい！キュウ！キュウ！」

「光兄！落ちついて！」

「止めないでくださいなのは！こいつはなのはを誑かそうとする悪徳セールスマンです！陰湿な外道です！淫乱な獣です！災厄を起こし、なのはに絶望を与える死神です！いえイン○ユベーターです！今のうちに始末していかなければ！」

どういう理屈だよ、とツツコミたくなるが、当人にとってもはや理屈どころでは無かった。

愛する義妹（いもうと）が、怪物と戦うことを強いられ、危うく命まで落としかけるところだった。

突然全容が分からない謎の声に一人で出てってしまったのはにも負うべき責は少なからずあるが、それ以上に彼女を「巻き込ませた」少年（フェレット）の行為の方が、光にとって許しがたい業であったのである。

彼の台詞に、某アニメに出てくる悪徳ド外道営業マンなマスコットキャラの名も出てきた気がするが、気にしないでもらいたい。

「く……苦しい……」

「私のことはいいいから、ユーノ君を許してあげて！」

ミラーナイトから“シスコンナイト”に化して暴走する光の凶行を、なんとか阻止したなのは。

とりあえず、ユーノからの事情は、家に帰ってから聞くことにした。

こんな遅くに外出したから皆心配しているだろうな………と考えるながら光と歩くなのは、彼女の予想通り、案の定家に帰ってみると。  
「おかえり」

長兄の恭也が、玄関前で腕を組みつつ待っていた。

流星にその表情は険しい。

「二人とも、こんな時間にどこへお出かけだ？」

「あ……その、えーと」

返答を窮せられる。

頭の中に声が響いてきて、なんとなく声が主がいるかもと思って病院に行ったら、色々起きて………なんていくら異世界から来た光を家族として向かい入れた自身も家族でも信じてもらえるか怪しい。

かといって、上手い誤魔化し方も浮かばない………どう説明したら。「今日なのはがフレットを助けたって話したでしょう？　なのは、この子のことが心配で様子を見に出かけたんですよね？　で、僕はそののが心配だったので後をつけて、こうして二人で帰ってきたんです」

言い分が思いつかずにいたところを、光兄が助け舟を出してくれた。

「気持ちはこちらからなくてもないが、だからと言って内緒に行くのはいただけない」

「その……内緒で出かけて、心配掛けて……ごめんなさい」



「僕からも謝ります、無断で出かけたことは一緒ですから」

「まあいいさ、二人とも上がりなさい」

「はい」

こうして第一関門はクリアした。

問題は第二関門である、特にユーノにとっては災難な試練だ。

それは何故かと言うと――

「かくわいい ♪ほんとにかわいいわね♪」

「お母さん！ほどほどにー！」

母の桃子が、難関そのものだからだ。

母のかわいいもの嗜好症は想像以上で、その愛でつぶりも予想以上だった。

今何歳だと思っているのだろうか？ だが歳を想像するだけであの世行きが決定しそうなので詮索はやめておこう。

ペットは禁止と言われるよりはまだ……いいですよ？

「ずいぶん賢そうな『イタチ』だな」

父士郎の本日二度目のボケが来た。

「フェレットだよ……お父さん」

訂正する美由希、実際フェレットはイタチの仲間なのでイタチと呼んでも間違っではないが。

「何か芸とかしないのか？ ほれ、お手」

士郎は自分の掌を、お手の要領でユーノに差し出すと。

当然中の人（？）は人間なので、士郎の意図を理解したユーノはお手をした。

「ほんと、この子賢いわね♪」

結局その夜は色々どたばたして、事情を聴くことができずに終わり、話は明日に持ち越しになってしまった。

そして光ことミラーナイトは……と言うと。

「あんな醜い姿を………なのはに見せてしまうなんて………なんて………愚かしいことを………私は………」

自分の部屋で灯りも点けず、ベッドの上で体育座りで腰かけていた。

体からはどんよりとした黒い波動が溢れている。

「なのはには平静を装って見せまいとしていたが、内心妹に『シスコン』という名の醜態を見せてしまったことをひどく後悔し。

彼かつて故郷の星の湖の中で披露した、あのおなじみ……かは別として、かの『引きこもりモード』となって、落ち込んでいるのであった。

## EP05 — 意固地な少女

なのはが、成り行きで常識の枠外の世界に足を踏み入れ、魔法使いとなって初陣を飾り。

高町光——リヒト・シユピーゲルが久しぶりに本来の姿である《ミラーナイト》となり、義妹を助けるべくその姿を彼女の前に現した。あの昨夜の戦闘から一夜明け放課後の時間帯、なのはの部屋では、なのはと異世界から来た義兄の光、光のとも違う世界から来たフェレットユーンがおり、彼が地球に来て、なのはに拾われるまでの経緯を話していた。

それをざっくり光は——

「つまり、君の一族は次元を旅しながら遺跡発掘を生業とする部族で、そのジュエルシードと言う発掘品を運ぶ途中事故に会い、輸送していた21個全部が地球に落ちてきてしまい、責任を感じた君は独自に回収しようとしたが失敗、まだ傷が癒えない中怪物となったジュエルシードに襲われ、やむを得ず魔法使いの素質がある方に片っ端から呼び掛けていたら、昨夜の事態になった……と言うことよろしいですね？」

——と要約して纏める。昨夜の「騎士」としてはあるまじき暴走っ振りはどこへやらな、知的さと優雅さを兼ね備える冷静な態度であるのだが、その落ち着いた言動と声音には、まだ少し棘があるのが見受けられた。

愛する大事な家族が、あわや命の危機に瀕する事態にあえば、こうも刺々しい対応になってしまうのは当然と言えば当然であった。

「はい、その通りです……」

「でもちよつと待って、そのジュエルシードがバラまいちゃったのつて、全然ユーン君のせいじゃないんじゃない……」

確かにジュエルシードは発掘したのはユーンではあるが、その輸送作業には直接かわってない。輸送事故に関して言えば、彼には何の落ち度も無かった。

「だけど……あれを見つけてしまったのは僕だから、自分が全部みつ

けて、ちゃんとあるべき場所に返さないとダメだと思って……」

「責任を感じるのは分かりますが、それで一人で突っ走ってしまったことは問題ですね」

「光兄、まだ怒ってる？」

「当たり前です、彼の行ったことは、例えるなら警察官が凶器を持った犯罪者を追いかけている道中、たまたま通りかかった民間人に逮捕の助力をしてほしいと頼む様なものです」

光も攻めたくてユーノを攻めてるわけではないのだが、家族が危険に巻き込まれてしまったことと、こういうことの為に自分の力があるのに巻き込んでしまったことへの自責も合わさり、どうしても言葉がきつくなる。

「本当に、すみません」

「まあ、先走ってしまった件はこの辺にしておきましょう」

が、いつまでもねちねちと攻める気もない。

ユーノの落ち込む姿を見て、これ以上の追及は傷口に塩を塗る行為だと光は悟った。

「では、今度は僕が話す番ですね、私はこことは別の宇宙の鏡の向こうにある世界に住む、二次元の民と呼ばれる種族の父とエスメラルダと呼ばれる惑星の地球人によく似た容姿を持つ、エスメラルダ人の母との間に生まれました」

「そんな世界、今まで聞いたことが無いのですが」

「それは僕の世界がこちらの次元世界とも違う別の次元世界、平行世界に存在していたからでしょう」

「あ、その平行世界の原理なら僕も分かります、多次元宇宙理論ですよね」

「じ、じげん？へ、へいこう？」

一人話しについていけない人物をよそに、光は自分の半生の話が続けていく。

その後成長したミラーナイトは、王国であるエスメラルダを守護する騎士として勤めていたが、別の宇宙から来て帝国を築き、各地に侵略を始めたカイザーベリアル軍に星を襲われ、王家の姫君の一人

を、逃がし、命がけて王宮を守り抜いたが、カイザーベリアルによって彼の操り人形となるウイルスを注入され、自分の力が悪用されないように、二次元の世界で自らを封印したが、ベリアルと同じく、別の宇宙から来た戦士、『ウルトラマンゼロ』によってそのウイルスは浄化され、ゼロと、彼の心意気に、心動かされたものたちが団結したレジスタンス軍と協力しベリアル軍と交戦、その結果によって二次元の世界で封印されていた伝説の『バラージの盾』が復活、ベリアルとの戦いで瀕死寸前まで追い込まれたゼロに力を与え、最後にはゼロと宇宙海賊の用心棒グレンファイヤー、エスメラルダ家に代々使えてきたロボットジャンボットと協力し、ついにベリアルを倒したのである。

そしてバラージの盾を受け継いだことで時空を自在に移動できるようになったゼロからのスカウトと、自らの力をもっと広い場で生かすために、ベリアルとの最終決戦に集った戦士たちと新たな宇宙警備隊。『ウルティメイトフォースゼロ』を結成。

その活動としてのパトロールの途中、ウルトラマンとの因縁が深い異次元人ヤプールに怨念で誕生した『Uキラーザウルス』が復活、これと交戦。

ウルトラ兄弟とも協力して、なんとか倒したものの、Uキラーザウルスに宿っていたヤプールが最後の足掻きで次元振を発生させ、4人は時空の歪みに取り込まれ、散り散りとなってしまい、ミラーナイトはこの世界の地球に迷い込んだのである。

「その際、無理がたたったのか僕の体は、地球人と言うなら4歳児ほどまで幼児退行してしまい、高町家に拾われて、こうして今に至ったわけです」

「ごめん、よくわかんなかったんだけど…その…お兄ちゃんがミラーナイトさんだっことは家族みんな知っているの？」

「はい、高町家の皆さまには今言いたいきさつを話した上で養子にしてもらいました、なのはに隠していたことは申し訳ありません、私が来た時にはなのはは生まれたばかりの赤子でしたので」

「にやはは…そうなんだ」

内容が想像以上に神話の類と呼べるくらい壮大だったので、自分だ

け彼の正体を知らなかったことに関しては、何も攻める気になれなかった。

それにしても、外国を通り越して別の世界から来たという人間を養子にするとは、自分の家の凄まじさを噛みしめるなのではある。

「あの……一つ聞きたいのですが、レイジングハートから出てきたあの現象はいつたい?」

「僕たち二次元の民は、鏡かそれに準ずるもの、例えばガラスや水面といったものがあればどこへでも瞬時にワープすることができます」

なるほど、確かにレイジングハートの赤いコア部分もそのワープを可能にする鏡面があった。

「ユーノ、私からも質問があります、あなたの世界では、時空管理局と言う組織が、この地球を含めた一部を除いて、多くの世界の治安を担っていると言いましたね」

「はい」

「なら11年前に、そちらの世界に漂流してきた人物がいたという記録を調べてもらえますか?」

「やってみます、レイジングハート、頼めるかい?」

『了解しました』

レイジングハートはユーノの指示通り、ネットワークにアクセスし調べ始めた。

「どういうこと? 光兄」

「その世界の中に僕の仲間がいるかもしれない」

『アクセス完了』

「わかったの?」

『該当事例あり、11年前、ミットチルダで光様と同じ並行世界から来た次元漂流者が一人、保護された記録がありました』

「名前は?」

『ユウヤ・M (モロボシ)・ナカジマ、15歳、時空管理局嘱託魔導師』

「そうですか…」

「でも……その人が光兄のお仲間さんかどうかは」

「いや、彼がその仲間の一人『ウルトラマンゼロ』である可能性は高い」

「どういうことですか？」

「実は僕らの世界にも地球は存在し、彼の父は『モロボシⅡダン』という名前で地球に滞在していた経験があると聞いたのです、それと同じ姓名を名乗ってるならひよつとすると……彼はいまどこに」

『現在、各地の次元世界を転々としてっているとあります』

「じゃあ、光兄を探してるってこと」

光は地球人として暮らしている今の生活に不満は無いが、ミラーナイトには時空を超える能力はないため、自力で元の世界に戻るのには絶望的と思っていた。

だがその能力を持ったゼロが、この次元世界にいるなら希望が見えてきた。

「レイジングハート、他にも光兄のお仲間さんが来たって記録は」

『残念ながら、他に該当する記録はありません』

「すみません、お力になれなくて」

ユーノは謝罪した。

彼が謝る要素など皆無だと言うのに、本当に真面目な子である。

「いえ：仲間の行方が一人わかっただけでも、十分な収穫です」

内心、なのはを巻き込ませたことはチャラにしてもいいと光は考えていた。

となると、残った問題はと言えば。

「それでユーノ君：これからどうするの？」

「僕の魔力が戻るまでの間、ほんの少し休ませてもらえたら、それだけでいいんです、一週間：いや5日もあれば回復できますし、だからそれまで…」

「やはり、責任は自分で果たすということですね」

「はい…」

いくらしつかりしてようがまだこの子は地球なら小学生な年頃、さすがにこのまま、子ども一人で危ない橋を渡らせるわけにはいかない。

光には学業と平行しなければならぬ制約はあるが、帰宅部な身だから何とかなるだろう。

鏡の騎士は、自分もジュエルシード収集に協力すると言おうとしたが。

「それ、わたしにも手伝わせて」

その前に、なのはが先を越して志願を申し出た。

「な、なのは!?!」

「なのはさん!?!」

「なのはって呼んで!」

「な……なのは」

「本気なのですか?」

「学校と塾の時間は無理だけど、それ以外の時間なら…私だって手伝えるよ」

「なのは……気持ちはありがたいですが、これは遊びじゃないんですよ、昨日だって、一歩間違えば……」

「でも放っておけないでしょ、お父さんだっていつも言ってるじゃない、『困ってる人がいて、助けてあげられる力があるなら、その時は迷っちゃいけない』って」

確かになのはにはその『力』がある、レイジングハートのサポートがあるにしても、初陣であそこまで出来たのだ。

ひよっとすると、相応の訓練を積みれば、稀代の魔法使いになれるかもしれない。

「だがこれ以上なのはを危険に——」

「それなら光兄だって危ないじゃない、私と同じこと考えていたんでしょー!」

普段の彼女からは想像もできない語気の強さで、兄の苦言を跳ね除ける。

この高町家の末っ子は、このように一度決めたら、絶対に曲げない真っ直ぐさ、辛辣な表現を使うなら頑固さを持っていた。

どれくらい頑然と言うと、あの気の強い性格な親友のアリサが、彼女を『突撃ロケット』と評するくらいである。

「光兄は確かに『危ないこと』には何度もしたかもしれないよ、でもだからって、ユーノ君と光兄だけにそんな危ないこと押しつけたくない



の！」

「なのは…」

一度こうなってしまうと、絶対なのは折れようとしないうし、誰も彼女を止められなかった。この状況を終息させるにはもう……こちらが折れて、了承する以外に。

「あの、お取り込み中申し訳ないんですが…」

「あ………」

二人はようやく、ユーノを置いてきぼりにして口論していたことに気づいた。

「光さんの言う通りです、一人でなんとかしなきゃと思い詰めた僕が浅はかでした、でも……その上で……僕に力を貸してください、お願いします！」

「ユーノ、頭を上げて下さい」

「え？」

「僕もなのはもそのつもりです」

どの道、自分もなのはも状況の一部になりつつあるのだ、ならやることは一つしかない。

「わたしも出来る限り頑張るからユーノ君」

「ありがとうございます、僕も出来る限りサポートしますから、魔法の使い方も、ある程度は教えられます」

「そうですね……ユーノには先生としてみっちりなのはを指導してもらわないと」

「にやはは……ごめんねユーノ君、厳しいお兄ちゃんです」

「いえ、味方が多いのはありがたいですから」

たとえば魔力が戻っても、ユーノの力だけでは一昨日の二の舞になるだろう、それなら、協力してもらおう上で自分にできることをやるしかない。

「それでユーノ、一度は本来の姿をみせてもよろしいのではないんですか？」

「どういうこと光兄？」

「ああ……そうですね、わかりました」



なぜ……こうも主張が食い違うのだろうか？

ユーノは改めて、その日の状況を思い出してみる。

えーと、異相体と戦闘になって……封印しようとして、失敗して、その後は——頭に指を立てながら、とんちが利く有名なお坊さんのような所作で記憶を辿る。

ぽん、ぽん、ぽん、ぽん、ぽん、ぽん、ぽん、ぽん——  
コオオオオオ——

「あ——そうだった！ ゴメンゴメン！ みせてなかったね……」

「だよね？」

そうだった……異相体との戦闘の後、直ぐに消耗を抑えようとフェレットの姿になったから、あの日の時点でなのはは、彼の本来の姿を見ていない。

一応なのはは、一昨日の夢で異相体と戦う彼を見てはいたものの、覚めた後は漠然としたイメージした頭に残らなかったもので、人間の姿でユーノと対面したのは実質これが初めてだ。

何でこんなことを見落としていたのかと、ユーノは少し恥ずかしくなった。

しかし、恥ずかしさで上がった体温は、急に体を突きさす悪寒で急降下した。

「まさかあなた、人間であることを隠して妹を取り入ろうと考えていたのですか？」

原因（げんきょう）は、なのはの兄こと光——ミラーナイト。

彼の周りからは、以前彼の生まれ故郷の世界を征服しようとしたカイザーベリアルに洗脳された時を上回る勢いなどす黒いオーラが漂っていた。

「り、光さん……それは」

「そうですよね……ただの喋るフェレットなら……なのはと堂々と添い寝もできますし、妹のあんな姿だって見れますし、こんなことまで、いくらでも——」

彼の発言が何を指すのかは、空恐ろしいので明言しない。

「そ、そんな……誤解です、僕は本当に……」

「言い訳は無用ですこの淫獣!!!」

理不尽とは、正にこの状況を差す。

ユーノの言い分は、全く光に届いていない。怒りで支障を来した思考は、思い込みから来る勘違いを勝手に推し進め、勝手に結論づけて自己完結してしまっていた。

「これは少し………頭を冷やさなければなりませんね」

「光兄！ストップストップ！　なんでだか分かんないけど！なんか色んな意味でストップだよ！」

光の一言に、なのはは先程以上にテンパっていた。

なぜかこのときのなのはの脳裏には、色んな感情が混じり合った結果、他者を見下ろす冷たい目つきとなって同じセリフを呟く、*「大人になった未来の自分」*が映ったからだ。

内心そのことに戸惑いながらも、華奢な細腕で兄を後ろから羽交い絞めて、どうにか暴走を抑えようとした。

「ユーノ・スクライア………貴様だけはああああー……!!!」

「光兄！　何だかキャラが壊れてきてるよ！　光兄から頭冷やして！」

こんな一騒動の後の相談の結果、光が斬り込み隊長、なのはが遠距離から援護と封印、ユーノなのはの講師をやりつつ実戦では二人のサポートとポジションが決められ、早速その日から魔法の教習が始められた。

「魔導師たちの胸の奥には、リンカーコアっていう魔力の生成器官があります、空気中にある魔力素を集めて、固めるようなイメージで、呼吸してみてください」

光も、参考にと言う名目でユーノの教習に参加していた。なのはのことが心配であるのが大半だろうが……折角コアもあるとのことだし、戦術の幅を広げておきたいのも事実だった。

なのはと違って、魔法の杖にあたる*「デバイス」*が無いので、せい

ぜい簡単なものしか試せなかったが。

それからここ数日はジュエルシードを一回発見して、異相体と戦闘。

それ以外の日は、専ら講義と実習ばかりが続いた。

決してそれが無駄だったわけではない。

なんせ才能があると言っても、まだなのは魔法使いとして駆け出しな身。

その日の教習が終わる頃には魔力を消費したことによる体力の消耗で、へとへとになることが多く、度々光に背負ってもらって帰宅することが多かった。

光が立ち会えなかったある日の帰りのこと。

「な、なのは……大丈夫?」

その日の講義で貯まった疲労を顔に出すなのは、バリアジャケットを解除し、私服姿に戻ってるにもかかわらず。

「大丈夫……って言いたいけど……ちよつと疲れた」

レイジングハートを起動したままの状態で、それを引きずりつつ夜道を闊歩すると言う、通行人に見られたら、説明に困る失態を起こしていた。

「それより、レイジングハートを……」

「うん、レイジングハート……モード、リリッ」

当然、体力は魔力に、その魔力はデバイスの形態維持に吸い取られるわけで、疲労がピークに達したなのはは。

「はあにゃ〜」

バタリと、そのまま住宅街に囲まれた道路の真ただ中にて、うつ伏せで倒れ込んでしまった。

「なのは!大丈夫!」

実戦でガス欠になってピンチにならぬよう、早急に魔力を効率よく使う為にも必要な通過儀礼とも言えなくはないのだが……結局その日もなのはは光に背負われて帰宅した。

そしてこのあとユーノは――

「あなたがいないながら、どうしてなのはをこうなるまで放っておいたの

ですか!? この淫獣フェレットもどきがああああああー

!!!  
——無論の事、たつぷりとシスコンヤンデレナイトモードになつた光にこつてり絞りに絞られたことは、言うまでもない。

## EP06 | ある休日の交錯

四月の休日。

その日は適度に温かな日光と、風速と涼やかさ加減が丁度良い心地よさな春風に恵まれ、外出するにはもってこいの一日だった。

喫茶翠屋も、晴天の恩恵を生かそうと、今日は店の前でテラス席をいくつか設けられ、内一つの円型テーブルを囲む形で、なのはとアリスとさすがが座って、注文したケーキとジュースを食べながら雑談していた。

テーブルの上にはフェレットに変身してるユーノもいる。

「今日の試合凄かったよね」

「うん、ギリギリの勝負っていうか、いつの間にか手に汗握ってたわ」

「でも、『あのお兄さん』のシユートも凄くなかった？」

「あ、それは言ってる」

「ていうか試合終わり立ての時は、あの通りすがりの人に全部持ってかれてたわよ、漫画みたいなシユートこの目で見るなんて思いもしなかったわ」

話題の内容となっていたのは、ここから少し時間を遡った頃に起きた出来事。

なのはの父で翠屋のマスターな高町士郎は、少年サッカーチーム「翠屋JFC」の監督も務めており、この日は河川敷でのサッカーグラウンドにて相手チームの「桜台JFC」と一試合が行われていた。

なのはたちも観客として、翠屋JFCにエールを送りながら試合を観戦していた。

両チームとも、一步も引かない一進一退の攻防を続けているが、ついに士郎のチームは先取点を取った。

「(ユーノ君の世界では、こういうスポーツはあるの?)」

「(あるよ、ただ僕は研究と発掘に夢中だったから、あんまりやってな

「かつたけど」

この一文だけ見ると、何か寂しさを禁じ得ないユーノの幼少時代ではあるが、見方を変えれば、彼にとつてその「研究と発掘」こそが、やりがいのあるスポーツというか遊戯であつたとも言える。

「(にやはは、私と同じだ、運動は苦手だからね)」

二ラウンド目の終盤、翠屋JFCはさらにもう一ポイント取つてリードを広げ、やがて終了のホイッスルが鳴り響いた。

「やべー」

不意打ちの甲高い笛の音にびつくりしたのか、うっかり選手の一人がボールを場外に蹴り飛ばしてしまつた。

アーチを描いて跳ぶボールの進行先には、通行人である少年が一人。

今にもボールが彼の頭にぶつかる寸前——それは起きた。

まるで先に感じていたかのように少年は振り向くと、胸で受け止めたボールを垂直に蹴り上げ、落ちてくるボールを、一回転した勢いからタイミング良く落ちてきたボール蹴りつけた。

鮮やかな手際、ほとんどタイムラグを起さず、歩行者の少年が蹴りつけたボールはネットに放り込まれていた。

選手は誰もその一撃に見惚れ、反応もできずにいた。

一拍置いて、選手も観客も、一度たりとも入らなかつた翠屋JFCのネットにボールが入りこまれたことに気づいた。

「悪い！ 今のはノーカウントにしてくれ！」

部外者でありながらファインプレーを披露した少年は、詫びを入れるとそのまま悠然と立ち去つて行つた。

「いちごうさままでした！」

鈴が取り付けられた翠屋のドアが、澄んだ音色を奏でて開かれ、中



からジャージを着た男子たち——翠屋JFCの選手たちが出てきた。

「——次の大会でもこの調子で勝とうな！」

「「はー！」」

監督の士郎は一同を整列させる。

彼らも試合後、ここで昼食をとっていたのだ。

「じゃあ、これにて解散」

士郎の閉めの挨拶は終わり、選手たちは各々帰宅していく最中、なのははっとした。

ほんの一瞬、微かだが感じたのだ…… “通りすがりの少年” に入られるまでゴールネット死守し続けた翠屋JFCのキーパーから、  
“ジュエルシード” の波動を。

そのキーパーはチームのマネージャーの女の子と一緒に、通りの向こうへと歩いていく。

引っかかりを感じつつも、確信を持つにはあまりに反応は小さ過ぎて、この時なのはは、気のせいだと思ひ込み、片づけてしまうのだった。

第三海鳴公園、海鳴市に点在する公園の一つ。

アリサ・バニングスが見つけた塾への近道であり、ユーノがジュエルシードの異相体と戦闘を繰り広げ、なのはとユーノが巡り合った場所である。

正確にはユーノと異相体が戦闘を行ったのは、この公園内のボート場がある池で、それなりに水場の面積は広い。

当然今は、先日の戦闘による爪跡が大きく、立ち入り禁止の看板も立てられ、だれも遊びに来る人はいない——が、娯楽以外の理由で、

公園に来ている人物が一人いた。

伸ばした黒髪を耳と同じ高さで纏め、中性的で美人と評されても決して過大評価とは言い難いまでの顔つきながら、刀剣のように鋭い目つきとぶつきらぼうで近寄り難い雰囲気を漂わせる少年——諸星勇夜。

「ここなのか？ リンク」

『はいマスター、微かな量ですが、『榎原動物病院』で感知したものと同様の魔力とジュエルシードのエネルギーが残留しています』

「まあ……如何にも一波乱ありましたって、感じだけだな」

正直なところ、一々魔力の形跡を確認しなくても分かるぐらいのひどい荒れ様だった。

建物やボートの損壊は激しく、地面はどこどころ抉られた跡があり、倒れている木々も少なくない、ある程度見栄え良く作られたはずの池も、水は泥で濁り、散々な有様だった。

勇夜はさらに目を忙しく右、左と行きゆきさせて、周辺を注視して観察。

地面にできた何かに引き摺られた跡……異相体が移動してできたもの、恐らく不定形なスライムタイプ。

一定の幅でできた小さなクレーター……そのスライムの足跡ならぬ跳躍跡。

ボート施設の破壊痕……体そのものを弾丸に変えて発射したものとと思われる異相体の攻撃。

そして、勇夜の立つ地点の近くでできた一際大きなクレーターと、より大きく土を抉らせた移動痕。

『クレーターから、封印魔法を発動した痕跡があります』

ここで起きたことは、大体分かった。

ジュエルシードの発見者である《ユーノ・スクライア》は、ここで異相体と戦闘となり、封印を試みるも失敗、異相体にダメージを与えたものの、取り逃がしてしまった——ってところか。

スクライア族は、結界等の補助システムの魔法技術には秀でているが、戦闘に関してはお世辞にも得意とは言い難い。

ここでの戦闘を見るに、やはりユーノはたった一人でこの地球に来たようだ。

それは分かったが……どうにも解せないことが二つ。

ここに来る前、勇夜は魔導師と異相体の戦闘が原因による「榎原動物病院で起きた建築物事故」の現場に赴いた際、そこで残留魔力反応が二つ検出されたのだ。

一つは同様の魔力がこちらにもあるので、「ユーノ」のもの。だったら……もう一人の魔力の持ち主は一体誰だ？

同伴していた協力者のもの……ではない、公園での戦闘は動物病院の前日に起きている。

連れがいるのなら、わざわざ一人で異相体との戦闘に挑んだりはない。

無謀にも一人でロストログアの怪物に立ち向かったことは、協力者を連れてくるだけの思考も、あの時の彼には持ち合わせていなかった。

そうなると、一つ目の謎たるもう一人の魔力反応の正体は解けた。

一番気になっているのは、二つ目の謎、あの事故現場で、魔力とは別のエネルギーの反応があったのだ。

勇夜はそのエネルギーの波動に覚えがあった。

まさか――

『どうでしょう？ 気晴らしに街を散策してみてもは』

とそこへ、リンクが休息を提案してきた。

そう言えばここに来てから調査と回収と、フェイトたちに食べさせる為の食事の調理ばかりだった。

これでは何か味気ない。幸い自分の容姿は日系人そのものだ。日本の喧騒と雑踏に溶け込むくらい造作も無い。

「そうだな……調査ばかりじゃ面白味もねえし、折角地球に来たんだ、楽しまねえと損だぜ」

それに、たとえ別の世界に存在する星だとしても、『地球』は自分の「父」たちが必死になって守ろうとし、地球人たちと共に戦ってきたウルトラ一族にとって馴染み深い星だ。

一休みに、海鳴市内を散策してみるかと決めた勇夜は、戦場の爪跡と化したボート場を後にした。

そんな勇夜が最初に寄ったのは、図書館でありました。

えっ？—— “なん……だと？”—— “ですって？”

かつて不良街道真っ盛りだった “あいつ” が読書？

何の性質の悪い冗談だよ！—— “ですって？”

ジョークではありません。彼は確かに素行不良で、一応努力家ではあったので “訓練校” の授業には出てはいましたが、読書どころか長時間座って活字を読むと言う行為自体は好きではありませんでした。転機となったのは、彼の師匠から 『思考力も鍛えろ』 と、故郷の図書館にて無理やり読まされた小説が切っ掛け。

その作品とは、あの《シャーロック・ホームズ》のシリーズでした。最初こそ嫌々読み進めていた彼でしたが、優秀だが変人過ぎてダメ人間なホームズと、頼りになる相棒で時に保護者同然にホームズを支える元軍医ワトソンの名コンビっ振りと彼らの生活模様が “超面白れえ” と病みつきになり、そのまま一気に長編短編全て読破。

やがて本を読むと言うこと自体、彼の趣味一つとなりましたとき。

ずらりと棚が立ち並び、肅々と訪問者たちが本を読む館内。

“ホームズの原語版!? これもあるとは域だぜ、一度は読んでみたかったんだよな”

“逆○の日本史……こいつは面白そうだ、ゾクゾクする”

“黒○明の用○棒のノベライズ版? こんなのが出てたのか……”

“静寂がむしろ気持ちよくもある棚と棚の間を移動しながら、勇夜は興味をそそられた本を手にとっていく。

最初に読むのは『用○棒 ○三十郎』、なぜかこの本の原作の映画の

主人公の浪人に、妙なシンパシーを感じているのだ。

特に劇中で、初代黄門様な俳優さんが演じる酒屋の親父の『お前は根っからのワルじゃやない、ワルぶるのが好きなだけ』って台詞は、思いつきだけで体がむず痒くなってしまう。

もし自分が、その浪人と同じように一人流浪の旅をしていたら、彼みたいな人柄になっていたかもしれない。

何冊かまとめて腕内抱えて机の一面に向かっていると、一人の女の子が目に入った。

フェイトと同じくくらいの年頃で、電動式の車椅子に腰かけた女の子。

バツテン印の髪留めを着けた茶色がかったショートカット。

彼女は棚から一冊取り出そうとしているのだが、目的の本はギリギリ手の届かない高さに置かれているので、四苦八苦している。

他に館内にいる者は読書に夢中になっていて、彼女の悪戦苦闘に気づく輩は勇夜を除いて一人もいなかった。

「これか？ 読みたいのは」

代わりに本を取り出して、車椅子の少女に渡す勇夜。

「あっ……おおきにな」

勇夜は彼女の発した言い回しを前にに“？”が脳内を駆け巡る。

今、この子はあるがとうつて言ったが、言い回しが標準的な日本語と違う。

同じ国の生まれでも、住んでる地域によって微妙に違う喋り方、

訛り“ってやつか、確か日本じゃ《方言》とも呼ぶんだっけ？

「(リンク、この子の方言がどこのか分かるか?)」

『(関西弁のものでしょうか、ただ……)』

「(ただ?)」

『(彼女の発音は独特で、関西のどの各府県の方言とも微妙に一致しません、最も近い方言は京都弁なのですが……)』

関東で暮らしている時間が長いのもあるのか、少女の喋り方はどの地域のものとも似てるのだけど、でもどこのものとも似通わない独特の訛りをしていた。

「(じゃあ、関西弁って言えば問題ねえんだな?)」

『(はい)』

「お兄さん、どないしたんですか?」

「いや、こんなところで関西弁を聞くとは思わなくてさ」

「ああ、今はここに住んどるけど、生まれは関西なんです、お兄さんはよくここに來るんですか?」

「いや……最近こっちに引越したばかりで初めてだ、街中散策つてやつさ」

「そないですか」

ん? ふと相手の顔を見て気がついた。

なんでそんなに笑っているんだ?

少女は勇夜の顔面に視線を送りながら、微笑みを見せていた。

自分の顔に……何か付いているのか?

悪意は感じないので悪い気はしないのだが、気にもなったので尋ねてみる。

「何がおかしい?」

「ごめんなさい……なんや私の兄によう似てましてな、でもお兄さんは二枚目寄りで、兄の方が三枚目やな……」

「顔がか?」

「いや、なんと言うか、雰囲気つてやつです」

なんでだろうか? ある映像が脳内で再生される。

一瞬、音信不通になって久しい仲間の一人であるあの「火頭」なあの顔の顔を思い浮かべたのだ。

確かに喧嘩っ早いところとか、口調が粗野なところが似ていることに自覚はあるし、ある意味あいつとは肉体言語で語り合った仲ではある。

だけど……あいつがここに飛ばされたのなら、一悶着と言うか……一騒ぎに一騒動ありそうなものなのだが。

身を隠して暮らすイメージが、どうしてもあいつからは浮かんでこない。

あいつの性格のことだ、あの姿のまま街の中を堂々と歩きそうだ。

いや……そもそもあいつって、人間の姿に変身できたか？

まあいいか、たまたまあいつとこの子の兄の人柄が似てるだけだろう。

「他に読みたい本はあるか？ 代わりに出してやるよ」

「あ、ほんならあの茶色のと朱色のを」

勇夜は指定された本を、棚から出して少女に渡した。

本たちの主なジャンルは大雑把に言って、『剣と魔法』のファンタジーものが多かった。

中には、『上巻』で電話帳並みのぶ厚さがあるものまである。

地球の子って読解力が高いんだな、と感心してしまった。

「おおきいな」

俺はできるだけ、彼女の足については言わないように接した。

五体満足な健常者から見れば、障害を抱えていることは、可哀そうに思われるかもしれない、中には見下げてしまう野郎もいる。

だが当人たちにはそのハンデを受け入れた上で、この健常者にありふれた世の中を生きているのだ。むしろこうして普通に、対等に接した方がいいのだと、聞いたことがある。

それを言うなら、自分だって『本来の姿』を隠して生活しているというハンデを背負っている身だ。

「じゃあな」

「あの」

「何だ？」

「わたし、名前は八神はやてと言います、お兄さんは？」

「勇夜、諸星勇夜だ」

そうして自己紹介した勇夜は、『八神はやて』と名乗った関西弁の女の子と別れた。また会えたらいいなと思って、名前を言ったのかもしれない。

ずっとここにいるわけじゃないし、立場上そう度々地球には来れないのだが、不思議と自分もなんとなくそうであったらいいな、ふと思った。

彼女に課せられた、重さと痛みと宿命を、後々思い知ることになる

とも知らずに……………。

諸星勇夜が関西弁の少女八神はやてとと出会ったのと同じ頃。

「ふにゃ…」

なのはは自分の部屋に入ると、そのままベッドに倒れ込んだ。

本日は特に激しい運動はしていない。

この歳に似合わない疲労は、日頃の魔法行使から来るものであった。

魔法を習いたてなビギナーの宿命とも言えるだろう。

「なのは……せめて寝るなら、着替えておかないと……」

「はあ〜〜」

ユーノからの苦言で、渋々なのはは眠気と疲れで重くなった体をおこし、茫洋とした表情のまま私服を脱ぎ、ユーノの目の前で下着姿を披露しながらパジャマに着替え始める。

「はあー」

何度も言おう、『ユーノの目の前』である。

なのはの無防備な姿に顔を真っ赤にしつつ慌てて背を向けて、なのはが着替え終わるのを待つユーノ。

しまった……さっきのは不用意な発言だった。

なのはは寝ぼけてて、仮にも『男の子』なユーノが目の前にいることを認識できていない。

光が外出していたのは、不幸中の幸い……もし家内にいたら、怒りの雷がユーノに落ちるのは明白である。

「晩御飯の時間になったら起こしてね、おやすみなさ〜い……」

着替え終えるとともに、なのははそのままぐたっとうつ伏せに眠り込んでしまった。

その寝顔には、疲労が溜まっているのが容易に窺える。

「(やっぱり、慣れない魔法で、疲労が溜まってるんだ……)」

彼女の魔法に対する才能は、予想以上だった。



デバイスのサポートによる賜物もあるとはいえ、初戦で魔法に精通している者でも取得が難しい飛行魔法と砲撃魔法をいきなりやつてのけたのである。

とは言え、光Ⅱミラーナイトの言う通り、それ以外は普通の女の子だ。

本当なら、やっぱり自分一人だけでなんとかしたかった。

だが魔力が本調子に戻ったとしても、異相体と化したジュエルシードを封印できるのか…と言われると。

十中八九、この前の二の舞になるだろう、それこそ光さんの言う通り、浅はかな考えだ。

今なら分かる、こうなっているのは全て自分の力だけで問題を解決しようとして周りが見えていなかった自分にあると。

でも、なのはやミラーナイトという心強い味方がいると言っても甘えてばかりではいられない、もっと自分もしっかりしないと。

それに…：ユーノには気がかりなことがもう一つあった。

午前中のサッカーの試合時にファインプレーを見せた…：あの少年。

無論あんな芸当はサッカー歴が長い経験者やプロでも、そうそうできないうが、気になる点はそこではない。

どこかで見たことあるんだけど、どこで会ったのだろう…：あのひと。

長く伸ばした漆黒の髪を後ろで縛った、美しさと実用性を兼ね備えた刀のような鋭さを秘めた顔つきの少年。

だが漠然と見たことがあるだけで、いつどこで会って、名前はなんであったか…：…までは、この時思い出せなかった。

## EP07 | 光の巨人

ここは海鳴市にある電波塔、海鳴タワーの展望台。

大概是家族か友人連れで、海鳴市を一望するために来ているだろうが、一人だけ違う目的で来た例外がいた。

この憩いの場において、物腰の穏やかそうな顔を真剣そうな表情に染め、市内を一望している少年——高町光（リヒト）こと、ミラーナイトである。

彼は今、広域探索と呼ばれる微量な魔力をソナーの要領で360度全方位に飛ばし、魔力を帯びた対象の物体を探し当てる魔法で、ジュエルシードを探知できないか試していた。

結果は芳しくない。やはりデバイスが無い身での魔法行使は厳しいようだ。

物語に出てくる魔法使いのほとんどが、効率良く魔法を運用するために「杖」を使用するように、魔導師もまたデバイスが無いと、どんな使い手でも使いこなすのは難しい。

一応こちらが妥協する形で、なのはにも魔導士としてジュエルシードの収集にあたらせることを許したが、内心は複雑な思いを彼は抱えている。

なのはは……昔からそうだった。

一度決めたことは、どんなに行く先に障害が待ち構えていようとも、めげずにやり遂げようとする。

どんなに止めようとしても、絶対に引き下がらない。

今でこそ親友のアリサやすずかだって、ぶつかりあって友情を築いた——正確に表現をするなら、アリサがすずかを苛めていたところを鉄拳制裁込みで止めようとして喧嘩になり、それらの紆余曲折を経て親友になつたくらいだ。

義妹が今の人格を持つまでに至った理由には、心当たりがある。

なのはがまだ物心を芽生えさせたばかりの頃、様々な要因があつて、自分を含めた高町家の面々は、遅くまで家を空けることが多かった。

まだ園児の時期だったので、夕方から夜まではきちんと言い付けを守って、じーつと家で自分たちが帰るのを待っている毎日を送っていた。

なまじ同い年の子より聡かったゆえに、自分たちが汗水たらして疲れるまで体を動かしていたことを直感的に悟っていたのだろう。

ほんとは思いつきり甘えたかったのに……それを我慢して、大変な思いをしている家族に何もしてやれない自身に無力さを毎日噛みしめていったなのは。

あの日々の影響からか……当人は隠してるつもりだけれど、妹は誰かの助けになりたい自分と、自分にしかできないものへの強い渴望と、それが見つからず、今でも周りに助けられてばかりな己に対して、悔しさとジレンマを抱えるようになっていた。

魔法との出会いは、そんなのはにとって待ちわびた好機だっただろう。

なのはが求めてやまなかった『自分だけの取り柄』と『誰かを助けになれる力』が手に入ったのだから。

でもまさか、あんな怖い目に遭っても尚、積極的に関わろうとするとは思わなかった。

魔法には、『非殺傷設定』という相手に物理的損傷を与えないようにできるらしい。

だが相手は、気前よく銃器で諭えるならゴム弾な『非殺傷』で戦ってくれるような、そんなご都合主義なんて一切通用しない、人の願いを貪り食って襲って来る怪物だ。

怪我では済まない事態だつてありえる。

現に下手すればあの時、異相体の巨体に押しつぶされて、帰らぬ人になっていたかもしれない。

もし頭にもたげた最悪の想像が、現実のものとなつたら？ 内容にも、イメージしてしまった自身に対しても、恐ろしきでゾツとした。しかし、それでも尚彼女は『手伝う』ことを頑として譲らなかつた。

それは彼女の強さでもあり、同時に危うさでもある。

ユーノと同じよう気持ちを彼もまた抱えていた。

自分が、あの子の支えになってあげないと。

そんな時だ。広域探査中に、反応が起きた。

あれは！ 光が見たのは、都市の真ん中に突然閃光を発した後に現れ、映像を早送りさせていると錯覚させるまでに、どんどん巨大化し、市街を呑みこもうろしていく樹木だった。

そして…ジュエルシードの反応がもう一つ!?

巨木の反対方向からも、ジュエルシードが発動されたことを感知する光。

光の現在位置からは、それほど離れておらず、むしろ樹木より近い位置にあった。

どうする？ 二つ同時に現れた以上、二手に別れるしかない。

だがそれは、魔導師としても戦いに臨む者としても「ビギナー」なのはを、ユーノのサポートを含めたとしても、一人で戦わせなければならぬ、と言うことだ。

選択と決断が猶予を与えないまま、光に向けて迫ってくるのであった。

同時刻…：海鳴私立図書館の出入り口。

車椅子の少女、八神はやたと別れ、たった今ロビーから出てきたばかりの勇夜にも。

『ジュエルシードの反応を確認しました』

「ちっ…お出ましと来たか」

はしたないのを承知で、舌を打ち鳴らした。

よりによつてこのタイミングからかよ。

このエネルギーの規模からすると…： “人の願い” に食いつきやがったな。

勇夜がいる位置からも、例の肥大化していく樹木を確認できた。

これ以上の被害の拡大は阻止しないと、どっち道超常現象として大騒ぎになり、当分マスメディアのネタにされるだろうが、背に腹は変

えられない。

「リンク！封時結界だ！」

『了解』

封時結界とは特殊な空間を生み出し、特定の物体や人物を現実世界から遮断する魔法である。

勇夜の周囲から結界が構築され、まわりの光景はそのままに、現実とは異なる色合いをした空間が形成された。

『ターゲットを取りこむことには成功しましたが、一部の民間人が対象に捕縛され、取り残されているようです』

「しまった……」

どうにか急激なスピードで成長を続け、街を覆う笠となりつつあった巨木を自らが作り上げた空間に閉じ込めたが、一部の市民が木に捕らえられたせいで、一緒に放りこまれてしまったようだ。

『民間人の避難補助の優先を提案します』

「そうだな、どの道このままじゃまともにも戦えそうにない、行くぞー！』  
『はい』

勇夜は急いで、巨木に蹂躪された市街地へと向かう。

魔法世界から撒かれちゃった災厄の種なんかの為に、この星の人たちにとんだとばっちりを受けさせるような真似はさせない。

市街を踏み荒らす異相体、ただその一点を見据えながら、彼は疾走した。

一方なのはとユーノも、ジュエルシードが発動されたのを感知し現場へと向かっていた。

疲れがないわけじゃないが、そんなこと言っではいられない。

身体強化の魔法で、走力を上げながら木々の下へと馳せる。

その突如、巨大化が進行させていた巨木が、いきなり姿を消した。

「き、消えた？」

「多分、誰かが結界魔法を使ったんだと思う」

なのはの肩に乗るユーノが今起きた現象を説明する。  
でも、そうだとすると誰が？ 光かと思われたが、まだ彼も結界魔法をマスターしていない。

他にジュエルシードを集める魔導師がいるとでも言うのだろうか？

直後、別方角からの波動が二人の身にかかる。

別のジュエルシードが、発動してしまったことを知らせるシグナル。

「もう一つ？」

「こんな時に…」

「(なのは！ユーノ！)」

「光兄！」

「光さん！」

「(別のポイントで起きたジュエルシードは僕がどうかします、二人はそちらを！)」

「わかりました…なのは、これから結界の中に転移するから、入ったらレイジングハートを起動させて」

「うん」

緑色の魔法陣が、なのはとユーノの足元に出現する。

「妙なる響き、光となりて、我らを彼方の地へと羽ばたかせ」

二人は、魔法陣から吹き上がる光を受けながら、その場から消失した。

突然現れた規格外の巨体の樹木を前に、通行人たちは常識外の災害によって、理性のタガが呆気なく崩壊させられていた。

急成長を続ける異相体の巨木は、逃げ回る市民を、しなやかな枝木で捕縛していく。

ジュエルシードは、本能のままに、取り込んだ宿り主の人間だけでは飽き足らず、さらなる生命体の欲求、願望を捕食しようとしていた。

が、それを阻む者が現れる。  
諸星勇夜とその相棒リンク。

「フォトンバレット——フルオートシフト——ファイア！」  
右手に持つ拳銃の形をとったデバイス、『零牙』から魔力で生成した弾丸を連続発射して枝を破壊し、左手から発した『念動力』で市民を浮かせ。

『結界外へ転送』

リンクが生成した魔法陣は、彼らをテレポートさせていく。

勇夜には、二つの愛機を持ち合せていた。

一つは零牙、勇夜自らが設計したストレージタイプのデバイスである。

彼が本来の姿の時に使う『多目的兵器』を元に作られており、状況によって、用途の異なる、様々な武器に形状変化できるオールマイティーな性能を秘めた武器だ。

そしてもう一つは、平常時は指輪サイズで彼の中指に嵌っているが、戦闘時はブレスレットになる意志を持ちし神秘のアイテム——リンク。

レイジングハートのように、独自に魔法行使ができ、マスターと呼ぶ持ち主をサポートする役割を持つが、正確には『デバイス』ではなかった。

彼女の正体に関する旨は、今は明言を避けさせて頂く。

この二方による救出作業。

勇夜が市民を捕縛する大振りで群れる枝たちを破壊し、リンクが記憶処理の魔法をかけつつ転移魔法で結界外へ移動させていった。

「あと何人だ？」

『救出は完了——マスター、魔力反応を二つ確認、魔導師ですが、フェイトたちのものではありません、こちらから北東700メートル先のビルの屋上です』

「あれか？」

市街地で周りより一際高いビルの屋上に人影を一つ、子どもだった。

歳はフェイトと同じくらい、栗色の髪を彼女と同じツインテールで纏め、あ白を基調とし、青いラインが走ったセーラー服風のバリアジャケットを着た日本人の女の子であった。

左手に持っている先端が金色の金属パーツと赤い球体が付いた杖は、彼女のデバイスであろう。

『あの少女から、榎原動物病院でのものと同様の魔力反応を確認しました』

じゃあ……あの子がユーノの協力者、だけどどこかで見たことがあるような……疑問は尽きなかったが、答えを詮索する暇なんて異相体の野郎は与えてくれず、その魔導師である日本人の女の子に向けて、異相体の枝による触手が、さながら槍を思わせる鋭さで、今まさに迫りつつあった。

「リンクー！」

『はい、マスター』

間に合うか!?

いや——絶対間に合わせてみせる！

勇夜は即決した。

真の姿となりて、自分の“力”をここで使う決断を。

彼は左手を前方に真っ直ぐ翳すと、腕輪形態のリンクから、光が発せられ、赤と青と銀に彩られ、黄色い半透明のレンズが付けられた、サングラスらしきアイテムが出現し、右の手で掴んだ。

彼の持つ太陽（ひかり）の力を、最大限に発揮でき、彼にとって本来の姿と言ふべき形態へと変身させるアイテム。

ウルトラゼロアイ。

「デユワ!!」

勇夜はそれを目に付けると、ゼロアイを中心に光が発せられる。

光は繭となって勇夜の体を満遍なく包み、球体の中で彼の体は変貌を遂げていった。

「ひ……ひびく」



ユーノの転送魔法によって、結界内に入ったなのは第一発声がそれだった。

巨木はビル群を覆い隠しつつ、枝は建物を貫き、アスファルトの道路には巨大な根で破壊された箇所は多数。

まさに災害と呼べる惨状だった。

「たぶん、偶然拾った人間の願いに反応してしまったんだ」

人の願い……やっぱりあの時、感じたのは。

そう、なのはたちが翠屋で昼食をとっていた際、ほんの一瞬だが、ジユエルシードの波動を感じ取ったのである。

あまりに些細で微弱だったので気のせいではと思ったこともあり、結局そのまま放っておいてしまったのである。

もしあの時……ちゃんとしていたら、ジユエルシードを回収するべく、あの子から石を手放すようお願いして、封印させていたら……こんなことには……ならなかった。

ちゃんと自分がやらなきゃいけないことをやっていれば、ここまで酷いことには……ならなかったのに。

「お父さんだっていつも言ってるじゃない、『困ってる人がいて、助けてあげられる力があるなら、その時は迷っちゃいけない』って」

光兄やユーノ君に、あんな偉そうに言っておいて……肝心な時に……わたし……また何も……できないまま。

「なのはー」

「え?」

そう自分を悔いて、攻めてしまっていたために気づくのに遅れた。

自分に迫る、異相体からの枝の触手による、無慈悲な一撃に。

「いやっー」

触手がなのはを、捕らえようとしたその時。

上空から緑色に発行した光線が、なのはを叩きつぶそうと企む触手を破壊する。爆音とともに粉々に散る触手。

「え……」

「何が!？」

爆風と爆音が収まったあと、二人はてつきりミラーナイトが自分た

ちを助けたのかと思い、攻撃があつた方角、上空へと目を向けた。最初は、夜空に煌めく星の如く、小さくて眩い一点の光だった。それがずんずんと大きくなり、物体は金色の視界を覆うまでの光をともしていた。

空から降りてきた光輝く、何かは、アスファルトの地へと降り立った。

着地の衝撃で、地響きと粉塵が重力に逆らって舞う。

大地に力強く降り立つ金色の光を放つそれは、いや——巨大な人は、光が消えて行くとともにゆつくりと立ち上がる。

上半身は青と、下半身は赤を中心に色付けされた体躯。

胸にはプロテクターが散りばめられ、中央には蒼く光るドーム状の球体。

銀色の厳つい顔と、黄色に光る鋭利に吊りあがる眼。

頭部には、ナイフラしき銀の刃を二つ。

そこに立っていたのは、三色——トリコロールの、光の巨人だった。

「あ…あの巨人って…」

「ユーノ君、あの巨人さんのこと知ってるの？」

「あ…ちよつとね…」

なのははユーノのリアクションから、彼が巨人のことを知っていると漠然とながらも掴みとつた。

そしてかの巨人は、なのはたちの方に顔を向け、視線を投げかけてくる。

敵意の類は感じられないし、どうやら自分たちを助けたのは彼らしいが、鉄面の顔からは、何を考えているのか全く掴めない。

目じりが極端に上がった金色に輝く目が、巨体を相まって近寄りがたさをより強めている。もし地上から見下ろされていたら、眼光と巨躯で今頃震えあがっていたかもしれない。

すると不意に巨人は——

「バカヤロー!! 何ボオーと突っ立ってんだ!!」

——いきなり念話、テレパシーらしきもので、なのはたちに怒声を上げてきた。

「にゃあ!？」

突然、声をあげられて驚く二人。

なのはにいたっては、思わず素っ頓狂な奇声を上げていた。

ただでさえ巨体かつ強面で威圧感があるのに、いきなりテレパシーで怒声が直接脳内で響いたら、こんなリアクションをとってしまうのは当然と言えば当然。

ともかくこの怒声で、二人は巨人が自分たちに加勢する為にこの場に参上したことを理解した。

「俺が人質を救出するまで手を出すなよ、いいな！」

「はい……」

ものの、いきなりのことだったので、思わず同時に頷いて了承するしかない二人であった。

サングラス型のアイテム、ウルトラゼロアイから発する光に包まれた勇夜は、本来の姿へと変身した

M78星雲光の国のウルトラ戦士——ウルトラマンゼロ。

彼は間一髪、額の緑色に輝く光体《ビームランプ》から発射する光線——《エメリウムスラッシュ》で枝の触手を破壊し、彼女たちを助けたのである。

ゼロは改めて少女を凝視していると、思いだした

ボート場に向かう道中通った河川敷で、サッカーの試合を観戦していた女の子の一人だ。

よく見ると、彼女の肩にフェレットが乗っている。

もう一つの魔力反応はそいつか……ってことはあのフェレットが「ユーノ・スクライア」か……他にも気になることは多々ある、けど今は詮索している場合じゃ無い。

ゼロは、よく戦闘前に癖として行う鼻をこする動作をし。

「デェアー！」

異相体に向けて、片手を腰に据え、もう片方の掌を相手に向ける形で突き出す《宇宙拳法》の構えをとった。

敵対行為と見なしたのか、複数の触手の枝による攻撃がゼロを襲う。

ゼロは冷静に手と足で振り払って迎撃。

しかし内心、〃結界の中とは言え、戦にくい〃と愚痴っていた。

それは相手が人質を取っているからだけでは無い。

ゼロは不良時代から一目置かれていただけであって戦闘センスは高いが、実を言うと彼にとって、市街地の真つただ中での本格的な戦闘はこれが初めてであった。

いたるところに密集した建物の中では、下手に動けば大惨事、一回歩くだけでも被害が出る。

ウルトラマンが地球での戦闘でピンチに陥ることが多いのは、エネルギーの消耗が激しいこともあるが、50Mもある巨人にとって、人間サイズの環境下では余りに戦にくい。

結界内なので、多少周辺への配慮は無視したいところだが、ここには敵と自分しかいないわけではなかった

ハマすれば、あの子たちを巻きこんでしまう。

「しまった……」

異相体の鞭がゼロの右腕を捉えた。

さらに残りの四肢全てに鞭が絡みつき。そのまま為すがまま引つ張られ、態勢を崩すゼロ。

その勢いのまま、異相体はゼロをビル群に次々と叩きつけられた。

ビルの破片の山に埋もれるゼロ。

反撃する時間を与えないとばかり、枝の触手が、投げ槍のように鋭く、破片の山々に襲いかかる

だがそんなことでへこたれ、防戦を強いられる彼ではない。

突然ゼロを縛り付けていた異相体の鞭にエネルギーが流れ、粉々になる。

悲鳴の奇声を挙げながらも、触手はゼロに肉薄するが、ビルの破片から、粉と鞭を払いながら立ちあがったゼロは、両の手にエネルギーを込めた手刀技、《ハンドゼロスライサー》で迎撃した。

彼は全身からエネルギーを放出する技、《ゼロボデイスパーク》で、自分の体に絡みつく触手を破壊したのだ。

「シューア！」

新たな鞭の猛攻がその身を捉える寸前に、ゼロは上空へと飛んだ。どこにいる？ 異相体の宿主にされた人間は。

「（“人質”の位置はまだ分からねえか？）」

『（巨体な上、大量の魔力でカモフラージュされて、生体反応が特定できません）』

「（よし、だったら場所を搾り込んでやる）」

『（頼みます、マスター）』

突破口を開くべく、ゼロは頭部に装着されていた二つの刃を手に取り、切っ先を接触させると、刃たちが発光し、形状が変わっていく。

二振りの短刃は、銀色の弓へと変形した。

弓は両端から、緑色の光でできた筋を伸ばして繋がって弦となり、ゼロはそれを右手で引いて構えると、弦と指が触れた地点から光の矢が現れた。

「バニシングスピア——」

引く力を強めるとともに光矢にエネルギーをチャージさせ、狙いを地上の異相体に定める。

『チャージ完了、撃てます』

「——ファイアー！」

弓と矢を掴んでいた右手を離す。

限界まで引き絞られた光矢は、斜線と描いて急速降下。

異相体までの距離が半分に切ったところで、突如矢はバラバラに飛び散った。

拡散したエネルギーは、無数の小さな針の雨に分裂し、巨木の面積に匹敵するほどの広範囲で降り注いでいった。

対して異相体は、巨大な枝の触手たちを一か所に固めて盾を作り、攻撃の驟雨からその“箇所”を守った。

呆気なく防がれた光矢、されどゼロの鉄面に落胆の色はない。

むしろ最初から防御させるのが狙い。

今披露した攻撃技——バニシングスピアは、ダメージを与えるのが目的ではなく、本体と宿主の位置を割り出す為の策として放ったのだ。

『(あの枝の障壁地点を中心に、エネルギー反応が増大)』

彼の超能力の一つ、《透視》で反応が特に強まった地点を重点的に対象を探すゼロ。

そして、枝の合間ある光を見つけると、中にジャージを着た少年と少女が、それこそ子宮内の胎児のように抱き合って眠っているのを見。

あれか！ 人質を見定めたゼロは、弓を元の短刃に戻し。

「行けー」

《ウルトラ念力》、すなわちテレキネシスで高速回転させて投擲した。

普段頭部に収めている短刃——《スラツガー》は、万能武器である。

“宇宙ブーメラン”の異名の通り、手裏剣のように飛ばし。

また直接手に持ってナイフとしても使える。

さらに彼の宇宙ブーメラン《ゼロスラツガー》は、デバイスと同じく状況に応じて様々な武器に変形もできる機能があり、先程の弓型形態《アークスラツガー》はその一つだ。

スラツガーに続いてゼロは、さらに両腕を横に重ねて広げると、三日月状の光の刃を飛ばす技《パーテイクルサイクラー》を計4つ発射。彼のウルトラ念力で正確にコントロールされた刃の数々は異相体の触手たちを反撃も許さないまま正確に切り裂いていく。

鞭が光刃に翻弄される隙を突き、ゼロは音速の速さで風を切り裂いて降下し突貫。

「その子たちを離せ！」

右腕から、ロープのような光の帯を閉じ込められた宿主たちに向けて放った。

ゼロは以前、とある“ウルトラマン”から、彼の分身とも言えるアイテムを授けられた際、彼の光も浴びたことでそのウルトラ戦士の不完全中間形態、“ウルトラマンネクサス”の技を一部使用できるようになった。

これはその技の一つ、主に人質を救出する際に重宝する光の帯——  
《セービンググビュート》

帯は宿主二人を包むと、ゼロに手に戻ってくる。

光の中を浮いている、ジャージを着た少年と少女。

ジュエルシード本体も取って暴走を止めたかったが、そうはいかなかった……二人の願いに呼応して巨木を生みだした宝石は、今もある異相体にエネルギーを送って巨体を維持させていた。

「しづめてえ野郎だ……」

ともかくこの子たちを結界外に出さなければ、宿主を奪い返そうと異相体が襲いかかってくるかもしれない。

予想通り、異相体から枝の槍たちが一斉にゼロに迫った。

難なくそれらを回避したゼロは、異相体から大分離れた位置にある公園に降り、救出した二人を地面に降ろし、テレポートで結界外へとワープさせた。

これで心おきなく戦えるのだが、封印する上、今の姿ではどうしようも無い。

この姿の時は、自らの力を十全に発揮できると引き換えに、魔法がほとんど使えなくなってしまう。かと言ってこっさり人間体になろうとしたら、傍からは敵前逃亡した風に見えてしまうのが癪。

仕方がない、あの白いバリアジャケットの女の子の手を借りるか。

「シユアー！」

ゼロは再び異相体へ向けて、その場から飛び立っていった。

「すごい……」

また自然とハモってしまうくらい、一人と一匹(?)は、その巨体同士の戦闘に目が点になっていた。

人間を取りこんでいたことは、二人も分かっていたが、この短時間、ものの数十秒で、その人質たちの居所を突き止めて、無傷で助け出した巨人の勇壮な戦い振りに感嘆せざるを得ない。

「実は、僕の世界ではあれぐらいの異相体が出現したり、魔法生物が暴

れたりした時にあの巨人がよく現れたんだ」

「そうなの？」

「僕たちはそれを『光の巨人』って呼んでた、事態を收拾させるとすぐどこかへ飛んで行くから、正体は分かってないけど」

「ユーノ君、ひよつとしてあの巨人さんが光兄が言ってたお仲間さんなんじゃ」

「そうかもしれない……」

「おい！その子とイタチ野郎」

人質を助けた後、なのはたちの近くまで飛んで戻ってきた巨人は、着地と同時に二人を呼び掛ける。

「『イタチ』って……僕のこと……ですか？」

以前動物形態時の自身のことを「フェレットもどき」と呼んだ光に続き、今度は巨人からも「イタチ野郎」と言われてしまったユーノ。

フェレットもイタチの仲間に分類される動物なので間違っではないけど……なんか……複雑な気分させられるユーノである。

「お前以外に誰がいんだ？」

巨人の表情は全く変わらないのに、ドヤ顔で言ったのが手に取る様に分かる気がした。

「ですよね……」

この場にいる者が極端に限られる以上、該当するのは自分しかないないので、苦笑いで返すしかない。

「さっきので本体の位置は分かってるよな？」

「にやっ？」

『はい、あなたの攻撃のお陰で、本体の正確な位置が判明しました』

放心のあまり、巨人からの質問の中身を読み取れなかったのはに代わり、レイジングハートが肯定の意を示す。

「よし、先に撃つから、やつが俺の攻撃に気を取られてる間に封印してくれー！」

「は……はいー！」

「シューア！」



三度空へとび上がる巨人。

とりあえず何者であれ、手を貸してくれる以上はありがたかった。

「なのは、でもこの距離からじゃ、あそこまで……」

「大丈夫！レイジングハート、お願い！」

『了解、キャノンモード』

なのはは、レイジングハートを通常形態からキャノンモードへ変形させる。

『Devine buster』

屋上と砲口に魔法陣がしかれ、チャージの為の桜色の魔力エネルギーが杖に集まっていった。

その桜色の魔力光を、空から眺めるゼロ。

バリアジャケットのデザインからそうではないかと勘繰っていたけど……やっぱりの女の子、砲撃タイプの魔導師だったのか……なら大丈夫だな、あれほどの魔力量なら、あの距離からでも封印エネルギーは異相体に届く。

それを阻む障害物を消し去るのは、今の自分の役目だ。

ゼロは上空で静止すると、右手を腰に添え、左腕を横に広げた

一瞬、スライドした左手が光り輝き、体内の太陽エネルギーを両手に集まる。

そして、両手をL字の形に組むと。

「行けえ!!」

右腕の指先から関節まで範囲一杯から、無数の光の粒子が帯状に放たれた。

ゼロの必殺光線の一つ、『ワイドゼロショット』である。

異相体は再びを束にして盾を作り、降り注ぐ光粒子の群体から身（ほんたい）を守ろうとするが、枝の盾は光線によって容易く貫かれ、直撃。

そのままゼロは体をスライドさせ、ジュエルシードに当てない様に心がけながら、光線を異相体の巨体へ満遍なく照射してぶつけると、



に、見逃してしまった……放っておいてしまった。

この「魔法の力」で……ちゃんとやり遂げるって……決めたのに……なのに……それなのに——

「なのに……気のせいだと思って……」

「なのは……もとはと言えば僕がジユエルシードを」

「でもユーノ君は、みんなを迷惑かけないように頑張ってたじゃない!!」

ユーノはフォローの言葉をかけようとするが、なのはの叫びに遮られる。

気がつくのと、なのはは身を震わせ、拳を力の限り握りしめながら、二つの眼（まなこ）に涙を溜まらせて、水玉が頬を伝って流れ出ていた。

「わたしのせいで……みんな……死んじゃうところだったんだよ……あの子たちを『人殺し』にするところだったんだよ……、止められたかも……しれないのに……」

悔しかった……せつかく「魔法使い」になれたのに、結局何もできず、誰も助けられず、助けられるだけだった自分。

許せなかった……自分にしかできないことを見つけたからって、いい気になって、周りに我儘を押し付けた自分に。

一体自分は何をした？

こんな災害を引き起こしておきながら、何をしていた？

最後の攻撃以外は、ただ見ていただけじゃないか！

結局自分は、やるべきことを放棄して、その落し前さえ目の前の巨人に無理強いさせて、迷惑かけてしまった。

激情で流れる涙は、止まることを知らない。

枯れ果てるまで、流しつくさんとする勢いであった。

「なのは……」

ユーノは何も言えなかった。

この結果を貼ったのは、目の前にいる巨人で間違いない。

彼が手を施してくれなければ、あの成長を続ける巨木によって街は押しつぶされ、その場にいた人々を巻き込み、多数の死傷者を出し、原因を作った少年と少女に、災害を起こしてしまった重い罪を被せてい

たかもしれない。

いや……実際そうだ。

こればかりは誤魔化しもきかないし、揺るぎようが無い。

紛れも無く、この状況は人の願いが生んだ『人災』であることは否定しようがないし、なのはたちは、それを事前に防げなかったのも事実だった。

そんな二人の有様に、見かねたのか。

「おい」

今まで聞き手に徹していた巨人が、テレパシーで二人に呼び掛けた。

見上げるなのはとユーノ。

「二人ともな、責任を感じるなどは言わねえけど……あまり思い詰めるなよ、まあ結界で街に被害ほとんど出て無えから安心しろ、あと話の続きだが……どっちも一理あるってことにしておけ、それとあと一つ——」

巨人は一拍置くと。

「半端に関わって、半端に悔やむなんてことは絶対すんじやねえ……本気でやるって決めたんなら、最後までやり抜けよ」

顔は無表情で強面で、口調はやや荒いながらも、二人を気にかけて、励ましていることはよくわかった。

「じゃあな」

「あーあのー」

飛び去ろうとした巨人を、反射的に呼びとめるなのは。

「私、高町なのは、この子はユーノ君と言います、あなたの名前は」  
「……………」

巨人はほんの一間、沈黙していたが、やがて。

「俺はゼロ——ウルトラマンゼロだ」

彼の『ウルトラ戦士』としての『名』を告げた。

「え？」

聞いたなのはたちは驚きを隠せない

まさか光の友の名を、この瞬間に聞くとは思ってもよらなかったの

だ。

「シユア！」

「あ、待ってー！」

疑問を確かめようする暇も与えないまま、ウルトラマンゼロと名乗った巨人はそのまま、飛び立って行ってしまった。

その姿が見えなくなると同時に結界が解除され、夕陽が街を照らした。

ゼロの言う通り、街は元の光景を取り戻していた。

結界越しに、彼の超能力で、損壊を修復させていたのである。

明日の新聞で、『謎の超常現象』とかもろもろの記事にはなるだろうが、国民の血税で直さなければならぬ事態になるよりは……良いだろう。

友達が今地球にいること、兄に伝えた方が良いよね……そんなことを思いつつ、目に溜まった涙を拭いながら……自分を叱りつつ、励ましてくれた『彼』に対して――

「ありがとう……」

――の言葉を送るのであった。

## EP08 — 出会いの前夜

異世界の地球にて、白い魔導師の少女とフェレットの二人を例外に、人知れず「ウルトラマンゼロ」として戦った諸星勇夜。

あの戦闘の後、彼は関東地方で広くチェーン展開し、海鳴市でも複数店舗を置く大手スーパー「関東スーパー」で買い物をしていた。

本日のフェイトたちに食べさせる夕飯の買い出しである。

リンクの提案で、今夜は肉じゃがを主食としたラインナップにする予定。

必要な材料を目利きし、買い物籠に入れながら、勇夜はついさつき——少女たちに発した言葉を反芻し、少しカツコつけてしまったなど一笑していた。

昔はそれこそ、「二万年早いぜ!」とか、「ビックバンは止められないぜ」とか、勢い全開というか勢いだけのヘンテコでワケわかめな台詞を平気で吐いていたのに、今はそれを思い出すだけでちよつとこそばゆい。

いつもなら、用が済めば何も言わずにさつきと空へ飛んで退散するのだが、あの時の二人の思い詰めた様子を見ると、どうしても何か言わなきゃ気が済まなかった。

二人の会話から察するに、あのフェレットの正体は「ユーノ・スクライア」で間違いない。

ボート場での戦闘を踏まえて、あの「なのは」と言う日本人の女の子がユーノに協力するに至る流れは——

『(輸送事故でこの地球にロストログアが散らばってしまった事態に責任を感じたユーノ・スクライアは、独自に回収を試みるも、異相体との戦闘で「適合不良」を起こし、フェレットの姿で魔力の節制を行わなければならないほど消耗し、仕方なく魔力資質を有した地元民に呼び掛けた結果、あの子が応じたのでしよう)』

——リンクが整理して纏めてくれた。

ちなみに、彼女の言葉の中に入っていた単語——適合不良とは、大気に漂う星そのもののエネルギーである魔力素をリンカーコアに取

り込み、魔力に変える機能に支障を来してしまう症状

似たようなのを上げるなら、“時差ボケ”。

本人にとつて、未知の世界な星に降り立った際、その星の魔力素の濃度とつた環境に体が着いていけなくなり、上手く魔力運用ができなくなってしまうのだ。

『(いわゆる、“自分で全て何とかしなければ病”、生真面目な方によく見られる症状です、前準備も無しに地球に降りた辺り、無為無策も甚だしいですね)』

そこに少し毒のあるコメントも付け加えて。

この相棒は、言葉も態度も平静で丁寧な一方、時たま毒気のある物言いをする癖がある。

その毒舌な彼女の言う通り、なのも事実だ。

異世界を渡り歩く頻度が多く、適合不良のリスクには身に沁みて理解している筈のスクライア族でありながら、前準備も怠つて“一人”で“管理外世界”に行き、あそこまで弱つているということは、それだけ焦燥で思考が冷静さを欠いていたと言わざるを得ない。

「(その辺にしろ、その生真面目君だつて、もうとつくに戒めてるだろうからさ)」

とは言え、相棒のきつい物言いは看過できないので、釘も差しておいた。

『(はい、すみません)』

リンクは即座に詫びた。

呆れるくらいの素早い対応。

たく、どうして自分の言うことにはこうも素直なのやら、と苦笑してしまう。

同時に、毒舌へのお仕置きも兼ねて、ちよいとからかってみたくなつた。

「(俺に謝つてどうすんだよ)」

『(謝罪するべき当人がおられないので)』

「(おい、俺は代替え品か何かか?)」

顔に出しては周りから変な目で見られるので、あくまでイメージの

内で悪戯っ気のあるやや下種な笑みを浮かべて返す勇夜。

『(いえマスター！ 滅相も…ありません、そのような意味で…申し上げたのでは…)』

すると、さつきまで淡々と声を発していたのは嘘のように、急に慌てふためく口調に様変わりし、途中から何やらぶつぶつと呟き出した。

おろおろした彼女に、勇夜はさらに追い打ちを掛ける。

「ふくん、じゃあどんな意味なんだ？」

『え？…その』

「ど・ん・な意味なのかな？ “リンクちゃん”」

『“ちゃん”を…付けるのは、やめて下さい……………マスター……………恥ずかしいです』

“ちゃん”付けされたのはよほど応えたのか、リンクは途切れ途切れな口振りで悶え、恥ずかしがっていた。

普段の『できる秘書官』然としたクールな雰囲気とのギャップもあって、こう“女の子”らしい、言い方によつては“ボロを出す”とも表せる反応を見せる彼女も、これはこれで愛らしくて可愛いと思っている。

正直もつと見たいという我ながら嫌らしい欲求に駆られるが、これ以上の相棒のお仕置きはやめておこう。

ほどほどにしないと、さしもの彼女でも怒り心頭になるだろうから。

とりあえず、ユーノが現状は判明した。

多分今は、協力者である“なのは”の家に御世話になっているだろう。

ただ…気になるのは、どうして成り行きで“魔法使い”になったあの子が、今もジュエルシードの収集に携わっているのか？

ほんのちよつと見た程度でしかないが、ユーノは押しの強い人柄じゃない。

なら、あの子が今も彼に協力しているのは、彼女自身がそうしたいからってことになる……………から分らない。



いくら素質が申し分のないにしても、普通の暮らしをしてた地球人の女の子が、自分から鉄火場の中に入り込むは思えないのだ。

歳相応以上の責任感……いや違う。

あの時の大粒の涙を流して己を攻める様子からして、責任感どころかむしろ強迫観念すら感じた

何があの子をあそこまで掻きたてているのか……今は霧がかかって答えが見えない

それよりも、深刻な問題がもう一つある。

「(あの子たちも収集を続けるとなると……)」

『(ジュエルシードを巡って、フェイトたちと戦闘を交えることは避けられないでしょうね)』

なのはとユーノの二人は、ジュエルシードは全て集め次第、管理局に渡すだろう。

となると、私的で違法に集めているフェイトたちとは、確実にロストロギアを巡る争奪戦になる。

俺にもいきなり警告も無しに攻撃をしかけてきた辺り、一緒に協力して集めるという思考は、今のフェイトには持ち合せていない。

たとえ相手が誰だろうと、魔導師としてはビギナーなのはでも、容赦無くバルディッシュの刃を突きつけるはずだ。

“フェイト”の名の通り、あの子たちの戦いは、避けられない“運命”だ。

そうなった時、俺は――

『(ややこしい選択をしてしまいましたね)』

リンクからきつい一言が来た。

ほんと……そうだな。

ともかく今は、フェイトのお袋さんに会うまでは、争奪戦の煽りを海鳴市民に受けさせないようフォローしつつ、静観の立場に徹するしかない。

そういう意味では、なのはにはもう煽りを受けさせてしまった。

まったく……あの子にあんな偉そうなこと言っておいて、現状では一番自分が“中途半端”な立場、人のことが言えない。

フエイトたちに加担なんてできないし……かと言って交わした“約束”の都合上、目的が近いとなのはたちともつるめなかった。

だがずっと引きずっていられない。

現状の枷がなんだ？

どんな状況だろうと——自分が“今やれること”をやるだけだ。

「ゼロに会ったですって？」

高町光ことミラーナイトは、夕食後になのはたちから聞かされた話  
しに驚きを隠せなかった。

なんせその日現れた異相体の一体を、11年来の離れ離れだった仲間と義妹（いもうと）が、共闘して一緒に倒したというのだから当然である。

「はい、すぐに飛び去ってしまったんですけど……」

「それで、そのゼロさん、ユーノ君の世界でも、ちよくちよく現れているらしくて」

ユーノの話では、ここ数年、ロストロギアによって生まれた異相体や凶暴化した魔法生物など、それこそ怪獣クラスの災害が起き、魔導師の力を持ってしても対処しきれない絶望的な状況下に陥った際、どこからともなく現れ、收拾をつけるとどこへとも無く去っていくそう  
で。

ユーノたちの世界の人々は、そのウルトラマンゼロのことを『光の巨人』と呼んでいた、それとは別にユーノの世界の治安を請け負う組織からはその巨大さから『マウンテンガリバー』とも呼称されているらしい。

理由は山のように大きいから、なそうである。

意外に単純な理由である。

ウルトラの世界でも、単純明快なネーミングセンスで名づけられてしまった怪獣は、かなりの数で存在する。

ある怪獣は、空スカイからドーンと落ちてきたから『スカイドン』を呼称されてしまったし、ある宇宙怪獣がゴキブリと毒クモを合わせ

た容姿なだけで、当のウルトラマンご本人から『ゴキグモン』と名付けられた事例さえあった。

「どうしてそれを早く教えてくれなかったんですか!」

思わぬ不意打ちという報せに、光はユーノを両手で鷲掴み、相手の襟もとを掴む要領で振り回した。

「すみません…まさか…あなたの仲間があれほどの巨人だと思わなかったのです」

「あ…」

目を回しながら弁解するユーノに、ようやく光は、自分がうつかりをかましていたことに気づく。

そう言えば、二人に自分がこちらの世界の地球に来るまでの経緯は話したが、自分たちが50メートルクラスもある巨人だとはまだ一言も言っていないかった。

初めてミラーナイトとして姿を現した時も、人間サイズであったし、ゼロと自分の繋がりにすぐ行きつけなかったのは無理無い。

「すみません…また取り乱してしまいました…」

「いいですよ、あとそれと…そのウルトラマンゼロかもしれない…モロボシユウヤって人のことなんですけど」

モロボシユウヤ。

光とほぼ同じ時期にミッドチルダという世界に迷い込んだ（向こうは次元漂流者と呼んでいるらしい）人物。

「僕は会ったこと無いんですけど、仲間の発掘調査に何度か彼が護衛として同行したことがあって」

それから、そのユウヤの管理世界での経歴の話になった。

9歳で囑託魔導士と呼ばれる資格をとり、ここ数年は、実質フリーランスの立場で様々な世界を廻っている。

一見当り障りは無いし、輝かしいとも言えない。

しかし、彼は色んな面で異端だった。

8歳の時、管理局員である保護責任者の連れで管理局を見学した際、局員との模擬戦を志願した。

子どもの遊びだろうと高を括り、軽い気持ちで局員の1人が相手に

なったがそれがいけなかった。

彼は、あらかじめ借用された訓練用のデバイスを使わず、徒手空拳で相手を打ちのめしたのである。

本人曰く手加減したと言い、相手をした局員も怪我はなかったが、大の大人が、子どもに腕っ節で負けたのである。

その子どもは魔導師としての素質が充分にあると見なされたにも拘わらずだ。

当時の管理世界にとっては天地もひっくりかえる出来事だった。

が、異端の経歴はそれだけでは終わらなかった。

囑託魔導師の資格取得の為の試験。

筆記も難なくクリアし、実技に移る。

その実技試験は二つある。

まずは特定のターゲットを破壊することだった。

彼はそれを魔法による一撃で破壊した。

それだけでもまだ凄いが、予想範囲内である。

問題は次だった。

最後は魔導師同士の試合だった。

相手は、彼より年上で局内屈指の武道派であった。

試合は互いに互角、どちらも譲らない、

だが勝敗の決め手となったのは、ユウヤが魔力をこめずにデバイスの剣から振るわれた神速と呼ぶべき剣撃で相手のデバイスを切り刻んだことで決した。

ここでも彼は（最後の止めのみとは言え）魔法を使わずに、相手に勝利したのである。

そうして彼は、囑託魔導師の資格を得た。

その後もモロボシⅡユウヤという少年魔導師は、着実に成果を上げていった。

状況によっては魔法を使いつつも、大概は己の肉体と刀とレアスキルらしき能力で、魔法を使わずに魔導師を駆逐する。

常識外れな事象をやつてのける時空漂流者。

だが彼はそこまでの実力を持ちながら、資格は取る一方で頑なに囑

託以上の地位を拒み、出世コースに入ろうとしなかった。

そうして彼は良い意味でも、悪い意味でもこう呼ばれるようになる

——『魔導殺し』——と。

「その僕の仲間たちの護衛任務の時、発掘したロストログアを輸送中、ある犯罪組織の襲撃にあつたらしいんですが」

中には管理世界では禁止されている質量兵器（銃などの実弾兵器）を使用する者もいたが、彼は物怖じすることなく、刀と拳と、ブーメランのように飛ばした短刀で、全員を殺さずに戦闘不能にした。

無論無傷ではないし、デバイスと質量兵器も徹底的にジャンクヤードにされた……とのこと。

その一連のを聞いた光の第一印象は…確かに「ゼロ」ならやりかねないな、だった。

元々彼は、組織の厳しい規律に大人しく従う性格ではないし、ウルトラマンであることを隠しつつ、自分自身の能力を使うには、むしろフリーの立場の方が動きやすい。

世界を回っているのも、自分たちを探していると考えれば納得が行く。

これでモロボシ・ユウヤ⇨ウルトラマンゼロである確証は強くなった。

「で、そのモロボシ⇨ユウヤと今日会ったんですね」

「何故分かったんですか？」

「わざわざその人の経歴を詳細に述べているあたり、そうだと思いまして」

どうやら彼は、たまたま今日のサッカー試合観戦に通りがかったらしい、

選手が偶然自分に向って蹴り上げたボールを、蹴り返してシュートするという名プレーをしたそうである。

ユウヤとゼロが同一人物かは置いといて、今この世界にゼロがいることもよく分かった。

となるとジュエルシードが発動した時に、彼と接触できる可能性は高い。

けれども、ユウヤルゼロであることをどう確かめたものか。

一応、ゼロのミドルネームが同名という証拠があるのだが、これだけで断定するほど、彼は楽観的ではない。

「ところで……もう一つの異相体はどうしたんですか？」

そうであった……まだもう一方のジュエルシールドがどうなったかと、ユーノとゼロ以外にも、あれを探している者のことを話していなかったのを思い出し、その一部始終を打ち明けた。

もう一つのジュエルシールドはとある市民プールで起きた。

すぐに現場へ向かった光だが、ここでも既に何者かが結界を貼っていた。

だがゼロが張ったものと思われるのと違ってかなり嚴重で、まだ魔法に慣れていないこともあり侵入できず。仕方が無く人気のない、かつ鏡面が存在するところを探し、ミラーナイトに変身。

鏡面テレポートで内部に入りこんだが、その頃にはもうジュエルシールドは封印されていた。

「黒衣にバリアジャケットを纏い、鎌のようなデバイス持った、死神を連想させる金髪の少女によって」

「ユーノの言う『時空管理局』の人間でも無かったようですし、直ぐに転移魔法で消えてしまったんですが……」

「僕たちの他に……ジュエルシールドを集めている人が」

積極的に共闘してくれたゼロと違い、少なくともあの少女はユーノとは違う目的で、あの青い宝石を集めていることは間違いない。

そうなれば、彼女と自分たちが戦闘になることも……ここに来て思わぬハードルである。

勝敗云々よりも、一番の問題はあの金髪の少女がロストログアを集めて何をするかだ、

世界の一個や二個、簡単に消し飛べる基地外なアイテムである。

彼女が『願うこと』で世界に風穴を上げることにならないことと、これ以上ジュエルシールドに関連する事態が、そのハードルを上げること

がないようを願うばかりであった。

ところ変わって、ここはその金髪の魔導師Ⅱフェイト・テスタロツサが住むマンション。

今この部屋のリビングでは、勇夜が調理した『にくじやが』を中心とするラインナップな料理をフェイトとアルフと3人で食しているところだった。

勇夜は積極的にフェイト達に力を貸せない代わりに、毎日飯を作るとも約束していた。

当初フェイトはそこまでしなくても良いと言ったが、彼曰く『食事を返上してまで体を酷使して、お陀仏になりそうだから』との理由であつさり一蹴されてしまった。

実際彼女は早くジュエルシードを探さなきゃ、時間が惜しいと焦るばかりで精神的に余裕が無く、食事も寝る間も惜しんで集めようとはしていたので、凶星を指され、反論ができなかった。

このところ、彼に一本を取られてばかりな気がする。

ちなみにここでのアルフの普段の主食はドックフードなのだが、勇夜からの『人型形態でドッグフードを貪り食わないでくれ』との要望でフェイトと同じメニューにしていた。

当初は不満たらたらだったアルフではあったが、勇夜の料理を口にしてからは一転、目を輝かせ、犬よろしく舌を出しながら毎日作ってほしいとすがつてくる始末だった。

全く現金なものも甚だしい狼っ子である。

「あたしたちの他にもアレを集めてるやつがいるのかい？」

「ああ：内一人はアレを発掘した張本人、片っぽは地元の女の子だった」

今この食卓で話題となっているのは、例の地球人の魔道師のこと。何の目的で集めているのだどフェイトらは気になったが、勇夜の言葉から、一人はちゃんと回収して管理局に引き渡すが理由であることは分かった。

なぜ魔法の無い世界に住むその女の子が、協力しているのかはフェ

イトたちも気にしていた。

大方の人間にも、謎だと思われるかもである。

「私もね…今日妙な人を見たの」

「誰だ？」

「その…：人と同じ体型なんだけど、人じゃないって言うか…」

どうも相手は説明しづらい容姿をしているらしく、フェイトは上手く言葉で説明できないでいる。

「見た目は銀色と緑の体で、ガラスからいきなり出てきたの…その人」

フェイトから切り出された話に、勇夜は動揺を隠せずにいる。

『緑と銀色の体』で『ガラスから出てきた』……だつて？

「勇夜？」

「なんでもない…とりあえず、アレを探してる連中が複数いるつてのは分かったぜ」

どう考えても、あいつしかいない。

その『あいつ』と同じことができる『二次元の民』は大勢存在するが、それを踏まえても勇夜——ゼロにとって、『鏡から鏡へ瞬時に移動する』などという、そんな芸当を可能にする人物に心当たりがあるのは、一人しかいない。

鏡の騎士、ミラーナイト——リヒト・シユピーゲル。

やっぱり、動物病院で感じた波動の持ち主は、リヒトのものだったのだ。

本来なら、心から喜ぶべきことだ。

まだ一人とは言え、やっと離れ離れになった仲間の所在が分かったのだから。

けどその歓喜は後にとっておくべきだと、理性が自身を注意した。それに問題は、あいつが、なのはとユーノの二人と、繋がりがあるのかどうかだ。

地球人として暮らしているのは、まず間違いない。



「ご先祖様が地球人の血を引いているお陰で、あいつも人間に変身できると前に本人から聞いたことがある。」

もしリヒトが、あの二人と共同戦線を組んで、ジュエルシードにあたっているなら、フェイトたちには不利だ。

数の面でも、技量面でもだ。

まだ魔導師なりたての高町なのはなら、フェイトは負けることは無いだろう、

だけどリヒト相手ではそうはいかない。

あいつはあのベリアルの大軍団から、王宮とエメラナの家族と避難した市民を最後まで守り抜いた紛れもない「勇者」だ。

真つ向から闘えば、あの鏡を使った戦法で、フェイトが良いように遊ばされる様が、造作も無しに想像できた。

案外、早く実行することになりそうだな……フェイトとの約束。

「勇夜、今日の献立ってさ、リンクの要望なんだよね？」

「そうだが、どうかしたか？」

「羨ましいよね、フェイトのバルディッシュなんてさ、こう事務的って言うの、無口で一言二言しか喋らなくてさ、同じ？インテリジェントデバイス？なのになんでこうも違うんだろう」

「そんなこと言わないのアルフ、作ってくれたリニスに失礼でしょ」

正確にはリンクはインテリジェントデバイスとはちと違い、下手するとロストログアと見なされかねないアイテムな「相棒」なんだけどな、と勇夜は内心そう訂正した。

ここは、フェイトが隠れ住むマンションの屋上。

かなりの高層で、この辺りのビル群の中ではトップクラスの高さだった。

勇夜は夕飯のあと、アルフにここで話があると言われ、彼女を待ちながら星を眺めている。

都市部での夜空は街の灯りで、あまり見えないんだが、地球人より俺は目が良いので、はつきり見える。

さきほど自分が一番半端な立場と自虐した勇夜だが、なんの考えも無しにそうしている訳ではないし、彼女を助けたいという感情だけで今の立場にいるわけではない。

初めて、フェイトに会った時から、彼女に危ない『お使い』をさせている黒幕がいると踏み、かつ『テストタロツサ』という名字に心当たりがあったので、該当する人物は、魔法世界でのインターネット探し始めて、すぐに見つかった。

フェイトの母かもしれない、そいつの名は『プレシア・テストタロツサ』。

かつては『アレクトロ社』というエネルギー開発専門の企業の技術開発チームを束ねる主任も務めていた、名の通った技術者であった。

しかし20年以上前に、開発中だったとある試作段階の魔力エネルギーを生成する魔導炉『ヒュードラ』のテスト運行の際、暴走事故が起き、彼女はその責任の全てを負わされ、会社からも解雇され、以来行方知れずになっていた。

勇夜がこの世界に来る前に起きた話だったが、その事故の被害の大きさと妙な臭さを感じて、今でもその事故の内容を覚えていた。

本題は母がプレシアだとして、奴がどういう目的で、娘である彼女に、あんな物を探させているのか……だ。

フェイト本人に聞いても、「研究に必要なだから」としか言わない。

自分にははぐらかして、話す気は無いとも言えるけども、フェイトの態度から見て、本当に母からはそれぐらいしか聞かされていないだろう。

実際、母親の話題を上げても、あまり彼女は答えてくれない。

代わりに彼女の目から、寂しさと憂いの色が強くなることと、それを見たアルフが悔しそうな表情をするくらいだった。

こんな調子で、今フェイトたちを捕らえても、母親の居場所は話さないだろうし、あちらさんだってロストロギアを違法に集めていることに自覚ぐらい持つてはるはずだから、見つからないように細心の注意を払っているはずだ。

次元航行艦クラスのレーダーでもなきや、アジトは探せないかもし

れない。

となりや、あいつのもとに行くには場所を知っている彼女に連れて行ってもらうほかない。

そのため、ただでさえ、フェイトたち親子の間に由々しき事情が隠れているかもしれないのに、これ以上事態がややこしくなつてハードルが上がるのは好ましくなかった。

やはり当面のたんこぶはやはり……ミラーナイトだ。

もしあのなのはとユーノと繋がりがあんなら、俺と会ったことは二人の言葉越しにもう知っていると踏んでいい。

チャンスは、次のジュエルシードが現れる時。

分の悪い賭けだが、今の頑ななフェイトよりは話は通じるはずだ。

今後の方針が決まったことで、ようやく勇夜は無意識に、夜空のある一点を見つめていたことに気づいた。

ここから、300万光年先にあるM78星雲がある位置へ。

もちろんこの宇宙には光の国は無い、それにこの世界にもM78とついた星雲は実在するがこっちでは地球から1600光年先にあるのである。

これだけでも今住む宇宙が、元の世界と似てはいるが、決定的に違うと言う事実を俺に突きつける。

まだミラーナイトの行方しか分かってないのに、親父や先輩たちや仲間がいる光の国に帰れるのはいつごろになるか。

時空を超える術は、実のところ持っている。

次元を超えし力を秘めたあるウルトラマンから、この腕にはめしリンクを授かったことで、あいつが持っていた時空を自在に旅する力も、あの時から身に付けた。

だがこの世界がいくつも存在する平行世界（パラレルワールド）のどこに位置するか、ここから光の国がある元の世界まで、どれぐらいの距離があるか、まだ判明していない。

端的に言えば、帰るための船も燃料も食糧があっても、目的地までのルートが分からない、地図も無い状態なのだ。

それに、自分はまだ相棒の力を全て知っているわけじゃない。

リンクには、彼女ですら解けないリミッターが掛けられており、あの「鎧の姿」に自力で変化させることはできず、本来の「力」がどれ程のものかはまだ未知数だ。

不満は無い。「あいつ」のデタラメな能力を踏まえれば、むしろ枷を付けられた方が、むしろあり難くもあつた。

「勇夜…」

呼ばれたので振り返ると、アルフが屋上に突っ立っていた。

どこか快活な彼女らしくない、神妙な表情をみせながら、そのまま勇夜の隣に座つた。

「で、話つてなんだよ」

こちらから話を切り出す勇夜。

「あたしに…稽古つけてほしいんだ」

アルフが切り出したのは、思わぬ内容だつた。

「おい、本気で言ってるのか?」

アルフは真剣な面持ちでこちらを見据えてうなづいた。

本気の本気らしい。

打ちのめしておいてなんだが、勇夜から言わせれば、あの二人は充分に強い。

あの時はほぼ一瞬で勝つたが、フェイトが体調管理もままならない状態で正面から攻撃をしかけたことと、アルフの激情にかられ、攻撃が単調になり、動きが読みやすかつた為と、こつちにとつての好条件が重なつてああ言つた形になつただけである。

特にフェイトの飛行スピードは、「ウルトラマン」の時はともかく、人間体の時の自分を遥かに上回る。

そのアドバンテージのお陰で、彼女と互角に戦える魔導師はそういないだろう、多分大概の魔導師が相手では、気がつけば喉元にバルドイツの刃が突きつけられてるつてのがオチだ。

とはいえ、真剣な「その眼」で見られると、無下にもできなかつた。昔の自分も、そんな眼をしていたからだ。

強さを渴望していたその眼を。

だからこそ、その前にどうしても確認しておきたいことがあつた。

「それはフェイトを守りたいから、頼んでるんだよな…」

再びはつきりと頷くアルフ。

やはりそうか、そうだよな、こいつの主な行動原理はフェイトの為にだ。

自分を通じて、無力さを突きつけられたことで、強くなりたい願望が強くなったのだ。

なら、きっかけを作った自分は責任をとらなければならない。

「わかったよ、付き合ってるよ」

「勇夜…」

「だがその前に忠告がある…」

ただその前にもう一つ確認したいことと、言っておきたいこともあった。

「何だい？」

「力を得ることを、『目的』にするな」

「え？」

己を高めようとする意志、それ自体に罪はない。

だからこそ予め忠告しておかなきゃならない。

「つまり、フェイトを守るって言う目的の為の手段として力を求めて、使えってことだ、絶対に力を求めるためだけに強くなりたいなんて考えるなよ」

アルフが勇夜に指南を求めたのは、ひとえに勇夜が言葉にしたことが理由だ。彼女との正式な契約をする際、アルフはフェイトの傍にいて支え、力となり、災厄から彼女を守ると言うことだった。

が、実状は、その契約内容をまともに実行できていない上、勇夜との戦闘で心身ともに未熟であることを痛感させられた。

勇夜は約束上、ジュエルシード収集に手出しはしないが、手助けもできないことも分かっている。

無理かもしれないと思っただけ、彼は了承してくれた。

だけどその後の彼の発言が、アルフにはよく分からなかった。

「もし強くなる《目的》になっちまったら、昔の俺みたいになる」

「それって?」

「俺は昔、ある大罪を犯して故郷から追放されたことがあんだよ、強くなることを、過剰に求め過ぎちまったためにな、お前にはそうなたってほしくない」

「何を…やったんだい?」

少しの間を置き、勇夜は――

「……………太陽を…独り占めにしようとした」

――と答えた。

太陽を盗む? どういう意味だ?

アルフはますますわけが分からなくなった。

そもそも彼が保護されたのは4歳の時らしいし、その後の経歴からも大罪と呼ばれるようなことはしていない。

ひよつとして比喻表現ってやつなのか? とこの時彼女は勘繰っていた、

「それじゃ…」

勇夜の言う『大罪』が気になるアルフをよそに、彼は立ちあがり、境界を張るとアルフに立つよう促し、初めて戦った時と同じ構えをとった。

空気が変わった気がして、アルフは息を呑んだ。

事実変化していた。

彼の闘気という「魔法」によって、この場の空気は殺伐とした戦闘空間に変えられた。

元から鋭い彼の目つきが、より鋭利さを増す。

言うなればその目は……「刃」だ。

「遠慮はいらねえ、本気で来い」

構えをとった彼の声音も、剣の切っ先を思わせるまでに、鋭敏に研ぎ澄まされていた。

突然だが、ジュエルシードと言うロストログアは、ある意味に関しては生き物だと言えるかもしれない。それが人間であれ、動物であれ何であれ、願いを餌に、食らいついてくる生物。

八束神社という名称が付いた、海鳴市では最も丘の高い場所に建てられた神社の裏の森、その周辺に落ちたジュエルシードは、自らを見つけた猫に憑り付き、活動を開始した。

さつきは生き物と言ったが少し表現を変えよう、寧ろ願いに寄生してくるジュエルシードは、寄生虫と呼んだ方が正確だ。

憑りつかれた猫は、ライオンよりも大きい黒い体躯に虎のような白い模様を全身につけ、とうの大昔に絶滅したサーベルタイガーより鋭い犬歯を持つ、異形の異相体となった。

異相体は、同胞であるはずの子猫たちに狂気混じりの殺気を剥き出しにし、威嚇する。

子猫たちは脅える余り、逃げ出すことすらできない。たとえ逃亡を実行しようにも、その小さな軀では、翼を持った凶獣から生きて帰れることも叶わない。

今にも、異相体の凶刃と凶牙が、あどけない子猫たちを襲おうとしたその時、金色の魔法陣が爪の一撃を食い止めた。

「バルディッシュユー」

魔法陣と同じ色をした髪をツーサイドで纏めた。どう横目に見ても日本人ではない少女、フェイト・テスタロッサだ。

『GET SET』

彼女と愛機のバルディッシュユは、掌より長く、白光りする異相体の爪の攻撃を、魔法陣の障壁、『ラウンドシールド』で食い止めつつ、攻撃魔法を発動。

地面に魔力で構成された稲妻が走り、もろに受けた異相体は吹き飛ばされた。

『Barrier Jacket. SET UP』

夕方の住宅街をひた走る少女が一人、なのはである。

アリサ、すずかと下校し、丁度二人と別れた矢先にジュエルシードの発動を感知したなのはは、たった今波動を示す八束神社方面へと向かっていった。

ふと突然、現場への方角から黄色い光の柱が走る。

この時の彼女は知る由もないが、天へと上がった光はフェイトが相棒のデバイス、バルディッシュをスタンバイモードから起動した際のものであった。

「(なのは！焦らないで！　せめて僕と光さんが行くまでは——)」

同じく発動を察し、高町家宅から飛び出してきたユーノが、一人先行するなのはに念話で呼び掛けてくる。

「待てない！　怪物になったジュエルシードが人や生き物を襲うかもしれないんだよ」

なのはの言う通り、現にジュエルシードは生き物を憑りこみ、森を破壊し、動物たちに襲いかかって暴れている。

しかも相手は、飛行能力のある憑依タイプの異相体。

このまま放っておけば、ロストロギアの本能のままに、近くの住宅街に住む住民たちを襲いかねなかった。

先日の自分のミスで、危うく市街が大木に覆われる大災害になり、本来自分がやるべきだった後始末も、あの光の巨人、ウルトラマンゼロにほとんど押しつけてしまった。

封印したのは自分だが、ゼロのサポートが無ければそれすらもままならなかった。

あの時ゼロが言ってくれたように、もう「中途半端」のまま終わらさせたりしない。

ちゃんと自分の意志で、やりぬくって決めたんだから。

八束神社の祭壇に繋がる石畳の階段を、全て登り切ったなのは。

まだ異相体がいると思われる森まで距離があったが、木々の間から発せられる爆音や、雷光が事態の深刻さを物語る。



「レイジングハート、お願い！」

『All right, Standby Ready, SET UP』

「レイジングハート!!セエエトアアアアプ！」

そして今現在この森で、フェイトと異相体との戦闘が行われている。

戦況ではフェイトが圧倒していた。

不利であることを悟ったのだろうか？

異相体は背中から蝙蝠のような翼が生やし、その場を逃走しようとする。

しかし、飛べるのは相手も同じだ。

そしてスピードにおいては、彼女の方がはるかに上、あつという間に追いつき、バルディッシュの刃で、上空から唐竹の要領で振りおろし、相手の左翼を切り裂いた。

だが異相体の左翼は瞬く間に再生され、直ぐに態勢を立て直す。

斧を振りおろした勢いで一旦地面に降りたフェイトは追跡を続行しようとするが、切られた翼が、かの生物に寄生して成長する完全生命体の幼年体のような物体に4つ分裂し、彼女に襲いかかる。

が、フェイトは冷静に食いつこうとした物体を電撃を込めたバルディッシュの一撃で消滅させた。

人間体とは言え、正体がウルトラ戦士で戦闘経験も勝る勇夜には遅れをとってしまったフェイトだが、彼が一目置いている通り、若年だが魔導師としては破格の力量の持ち主だ。

もはや彼女から逃げおおすことは不可能と悟ったのか、空から異相体が斜めに降下しつつ突っ込んでくる。

それに対処しようとするフェイト、右の掌に稲妻の魔力を集める。だが反対方向から、異相体に向かって桜色の光が突進、被弾する。

思わぬ不意打ちに、異相体は慣性を受け止められずに地面へ激突した。

桜色の光Ⅱ魔力を纏って、空から体当たりを敢行したなのは、今の攻撃で深手を負った異相体を足で押さえつけ、キャノンモードのレイジングハートを向ける。

しかしそれにしても、魔力を全身に纏って体当たりを仕掛けるとは……なんとも滅茶苦茶な戦法である。

もつとも、ウルトラマンも変身直後に、こうして空から体当たりをよく仕掛けていたりする。

「ジユエルシード！封印!!」

キャノンモードに変えたレイジングハートの砲口を異相体に向け。封印処理を施した砲撃を放とうとするのはだが、異相体は最後のあがきで振り払い、飛び上がった。

逃走を許さない黒い影が迫る、フェイトだ。

『Scythe Form』

バルディッシュの黒い実剣が展開し、黄金の魔力刃を現れ、異相体に眼前に振りかぶり。

「ジユエルシード——封印!」

振り下ろした。

死神のごとき一閃が異相体を襲い、唐竹に切り裂かれた異形の生命体は、為す術も無く爆発した。

あれが……光兄の言っていた、魔法使いの女の子？

上空を浮遊する、体にぴたりと密着した黒いノースリーブと短いスカートで組まれたバリアジャケットらしき装束と、地球人のイメージする魔法使いに近いマントを巻き、自分よりも長い金髪をツインテールで縛り、明らかにその細い体格とは似合わない——はずなのに、この少女にはとてもよく似合う、無骨な斧の形をした魔法の杖——デバイス。

歳は……私と同じくらいかな？

艶やかな金髪と燃えるように赤く大きな双眸、幼いのはから見て

も美少女と呼べるカテゴリー。

そして何より、それだけの綺麗な容姿をしながら、どこか……寂しそうな、〝悲しそうな眼〟をしている。

ふいに浮かんだ少女への印象に、なのはは立ち尽くす心境であった。

どうして…… 〝かなしい〟 ……なんて。

わけは自分にも解らない。なぜ一目見てそう感じたのだろうか？

ただ、彼女を一目見て、直感的に現れた言葉がそれであった。

そしてその女の子は、目の前に浮いている封印が完了されたジュエルシードを手に取ろうとする。

「あの…待って!」

『Flier Fin』

なのはも空へ飛び上昇、彼女と正面から向き合える位置へ止まり、滞空状態を取る。

「それはユーノ君が見つけて、この街の人たちに迷惑をかけないように必死に…」

すると少女は、なのはに視線を移すと、稲妻を纏った魔力弾を生成する。

彼女は無表情を貫いたままだ、しかし斧の切っ先をなのはに向けたことから、明らかに戦う気であり、なのはと対話する姿勢は絶無であった。

「あ、あなたも…それを探してるの?」

「それ以上近づかないで…」

「お、お話したいだけなの…:あなたも魔法使いなの?とか…:なんでジュエルシードを…:とか」

それでも相手の真意、ジュエルシードを集めてどうする気なのか確かめようと、少しずつ歩み寄りながら、話を試みるなのは。

「答える意味は、無い」

『FIRE』

相手は返答の代わりとして、周囲に滞空させていた魔力弾を発射。ジェット噴射の要領で全身を魔力を出し、それを推進力にしてから

うじて回避するなのは。

しかし、その瞬間、少女はなのはの背後に回り込み、魔力の刃を胴薙ぎになのはに一閃する。

それもどうにか急上昇して躲した。

だが予断を許さず、正面から閃光のようなスピードでなのはに迫る少女。

互いのデバイスがぶつかり合い、火花を散らす。

「待って！私、戦うつもりなんてないのに！」

なのは相手の一撃をレイジングハートで受け止め、杖での鏢迫り合いの状態になりつつもなお、話し合いに持ち込もうとする。

自分も彼女も、ジュエルシードを集めるために戦っているのは同じはず。

目的が同じなら、こうして争う必要は無いのではと、なのはは考える。

が、だからと言って素直に協力とまで——

「だったら、私とジュエルシードに関わらないで」

——いかなかった。

少女はその一言でもって、なのはの想いを拒絶し、切り捨てた。

「だからそのジュエルシードはユーノ君が！」

発掘した本人を差し置いて集めて、何をする気なの？

街なんて簡単に壊して、人だって殺してしまう、危険な物なのに。

あの日の巨木の異相体が起こした災害の光景が目に見え、目の前の少女がどうしてそこまで宝石を求めるのか、居たたまれなくなりそうになるのは。

膠着状態が続くと判断した二人は一旦後退、フェイトはチャンスとばかり。

『Arc Saber』

バルディッシュから生成した魔力刃を、三日月の刃にしてブーメランのように飛ばす。

斬撃タイプの魔法、名はアークセイバー。

『Protection』

なのはは防御魔法プロテクションを張り、魔力の盾で防ごうとするが、

『Saber Explode』

三日月状の魔力刃は桜色のシールドに接触すると同時に刃状に固められた魔力が拡散され、暴発を起こした。

この魔力の刃は、『セイバーエクспロード』と唱えて結合を解くことで爆発させる効果も有している。

爆風を受けたなのはは、衝撃で態勢を立て直せないまま、地面へと落ちていく。

止めとばかり、魔力弾を生成した少女は、小さく、だがはつきりとなのはにも聞こえる声量で。

「……ごめんね……」

詫びを入れ、魔力弾を放った。

高速で発射された雷の弾丸は、落下するなのはに迫り、彼女の意識は、着弾する直前にブラックアウトした。

フェイトのフォトンランサーは正確に、なのはを捉えたはずだった。

しかし、前述の結果を覆すアクセシントが起きた。

「あの光？」

レイジングハートから、光が発し、魔力弾を受け止めると、なのはの体はゆっくりと地面に降りていく。

やがて光は人の姿となって、彼女を優しく地面に横たわらせた。

彼を纏っていた光が消える。

フェイトは驚いた。

先日、なのはとウルトラマンゼロが倒した巨木の異相体の出現と同時に、市民プールで発動したジュエルシードを回収した際、建物のガラスからいきなり現れた——謎の鏡の騎士。

勇夜から、白い魔導師の子がまだ魔導師になりたての地元の子

であることは知っていた。

だがこの騎士は…あの子とどう言う関わりが？

騎士は両腕を×字に組む、独特のファインディングスタイルでフェイトを見据える。

フェイトも愛機を構えた。

あの騎士が何者か考えてる時間はない。

白衣の少女と違い、向うは積極的に戦う意志を見せたのだから。対峙する両者。

突然眼下の騎士の姿が、光を発して消えた。

どこに？

フェイトは辺りを見回す。

後ろ！ 反射的に、横に回避。

いきなり現れた騎士の蹴りは宙を舞った。

速い。魔法とは違う方法で、ワープしたのも脅威だが、スピードに聞しても、フェイトと五分五分。

「ミラー！ ナイフ！」

騎士の手先から、無数の矢尻状の光が飛んでくる。

小刻みに宙を飛行してかわしつつ、バルドイツシユの魔力刃で光を迎撃しながらフェイトは。

『Arc Saber』

金色の魔力刃、アークセイバーを投げつけた。

三日月の刃は、正確に相手に当たった……………のだが。

「えっ？」

金属音が鳴り響き、銀色の破片が四散する。

命中したのは、騎士ではなく、騎士の姿を写した鏡だった。

真つ二つに切裂かれ、破片となって散っていく鏡。

少なくとも、この破片と化した鏡が囷であることはフェイトでも理解できる。

なら…本物はどこに？

「ミアアアアアアー！ キック！」

上空から、本体が急降下してきた。

回避が間に合わない！

『Round Shield』

バルディツシュがすんでのところで障壁を張るが。

「ぎゃっー」

飛行と落下の勢いと何らかのエネルギーを乗せた蹴りの衝撃に、態勢を崩したフェイトは、地面に叩きつけられた。

バリアジャケットが鎧とクッションの役目を果たしてくれた恩恵で、外傷はほとんどない。

フェイトは騎士から追い打ちをかけられる前に、立て直そうとしたが。

突然、フェイトは体が重くなったかのような感覚にとらわれる。

自分の周りの引力だけが強くなったかのようなようだった。

その重力を前に、空を飛ぶことも、魔力を生成することも、立ちあがることさえ、ままならない。

一体、何が起きた？

周りをよく見ると。

光でできた4つの十字架が、彼女を取り囲んでいた。

フェイトを封じこむこの十字架は、鏡の騎士——ミラーナイトの技の一つ、《ミラーウエイト》。特殊な重力波を生み出す光の十字架で、対象の動きを封じる技であった。

なのはの初陣の時に、異相体の動きを封じたのもこの技だ。

ゆつくり、地面に降り立つミラーナイト。当分フェイトは動けない。10歳前後の少女の力で振りほどけるほど、十字架が発す重力の縄は脆弱ではない。

その間に、彼は彼女に聞こうとした。

彼女が、愛する妹のなのとは一戦交えてまでジュエルシードを集める……その理由と——？自分の友？と思わしき人物と、何らかの関わりがあるのか？——ということ。

「大人しくしてもらえませんか？　いくつか、君に聞きたいことが—

と質問しようとしたが、全て言い終える前に。

「はっ！」

気配を感じ、空を見上げると。

ミラーナイトに向かつて、光の球体が急接近。

あの金色の光は……まさか!?

その正体を思案する間も無く、ミラーナイトは降下してきた光に包まれた。

その数分前、八束神社の裏の森の中を走る艶やかな黒髪をポニーテールに縛るの少年が一人。

諸星勇夜だ。

もう、戦闘が始まっているのか？

茂みで向うがどうなっているかは、視覚では掴めないが、爆音と雷鳴で、わざわざ透視を使わなくても、フェイトが異相体と戦っていることは理解できた。

フェイトとの約束があるため、迂闊に戦闘に介入はできない。

とは言え、その制約で全く何もできないわけじゃないし、それを何もしない言い訳にもしない。

せめて戦闘の火の粉を、海鳴の人たちにかからないようにしなければと、その足で戦場へと向かおうとしたその時だ。

彼の体に、“人の目では見えない流れ”が触れて、染みわたる。

空気中に漂う、エネルギーの流動を、彼の皮膚感覚が掴みとった。

そしてこの波動の持ち主がだれなのか、直ぐにいきついた。

ミラーナイト——リヒトか？

今回はくつきりと彼のものだと分かった。

やっぱりあいつは、あの子——高町なのはと何かしら繋がりがあ  
る。

あいつの波動と魔力の流れからして、今頃フェイトと戦闘を行って  
いるのは明白。



変化球な形ではあったが、あいつの技量は実際に戦ったこともあるからよく知ってる。

確実にフェイトの方が分が悪く、ピンチの疫病神が微笑むのは彼女の方だ。

となれば……やることは一つ。

「リンク」

『了解』

勇夜の意志を察したリンクから光が溢れ、変身サングラス、ウルトラゼロアイが出現。

約束は約束だからな……ちゃんと果たすさ。

すまないミラーナイト、少しの間、付き合ってもらおうぜ。

「デュワ!!」

ゼロアイの光が勇夜を包み光体となりは、光そのものとなったゼロは、フェイトとミラーナイトの元へと飛んだ。

「……は？」

ホワイトアウトした視界が元に戻り、ミラーナイトは今、どこかの森にいた。

さつきフェイトとの戦闘があった位置とは、そんなに離れていない。

だが視界に映る物体たちの奇妙な色無いと、外にいるのに、室内にいるような、この独特な圧迫感によって。

「結界の……中か……」

誰かが張った異空間に閉じ込められたこと確認した時だった。

背後に気配を感じ、振り向くと。

「……………ゼロ……………」

青と赤と銀の配色。

吊りあがった金色の瞳。

頭部に装着された宇宙ブローメラン——ゼロスラッガー。

自分の戦友であり盟友。

ウルトラマンゼロが……そこにいた。

この結界を張っている主も彼だろう。

今は、お互いの立場上……戦うしかないようだと言われ、覚悟を決め、両手を交差させた構えをとる。

ゼロは、その様子に一瞬戸惑いを見せたが……彼も意を決し、片手を前に突き出し構え、戦闘の意志を表明する。

対峙する両者。

こうして舞台を、平行世界の地球に移し、二人の戦士の再戦が始まった。

人と同じ体格をしながら、人を超えた力を宿す巨人たち、

たとえ今、大きさが人間と同じサイズでも、その戦いの苛烈さは凄まじい。

お互い、武器を持たない、素手でのストリートファイト。

だが彼らに掛かれば、それだけで。魅了かつ壮絶な決闘となった。

走るだけで地面が抉れ、拳を振るうだけで、突風が起き、蹴りが舞うだけで木々は倒れた。

並の人間ならその戦闘の余波さえ、致命傷となる嵐の渦中。

ミラーナイトの蹴りの連撃が、ゼロを襲う。

美しく、かつ鋭く無駄が無い。

それでいて、細身な体躯からは考えられないほど重い。

だがその連舞をゼロは、最小限の動きで回避しつつ、相手の足を掴み、そのまま投げ回した。

だが相手も態勢を立て直し、倒立の勢いで反撃の蹴りを見舞う。

それを両腕で防御し後退しつつ、頭部のゼロスラッガーを投擲する。

ナイトに迫る刃は彼の手刀で弾かれるが、その隙を狙い、ゼロの額のランプから緑の光線、エメリウムスラッシュが放たれる。

それを間一髪、両手で掲げて形成されたバリア、《ティフェンスミ

ラー』で防ぐミラーナイト。

追い打ちとばかりゼロは、ナイトに向けて飛び上がり、袈裟がけの手刀が下される。

ナイトはそれを上空へ飛びあがり回避した。

空振りとなった手刀は、大地を大きく抉り取る。

「シユア！」

ゼロも、彼に続いて飛び上がり、空中で再び対峙する格好となる二人。

既に森は嵐か竜巻が来た後のように荒れていた。

結界の中だからこそ、二人はここまで戦えたと言える。

互いに譲らない互角の勝負。

死線を潜り抜けてきた戦士だからこそできる、戦闘と言う名の円舞。

ミラーナイトは手の甲を重ねると。

「ミラーエッジ」

甲に位置する光沢から、光の刃が伸びた。

対してゼロも、頭部のゼロスラッガーを手に取り、逆手に構えた。

武器と持ち方は異なれど、二刀流と二刀流。

ゼロとミラーナイトはこの時、不謹慎であることは理解しつつも、

二人は、互いの技量に…感嘆し…驚嘆し、別離してから久しい友は、

今でもその腕を衰えさせていないことに歓喜していた。

やはりこの二人も、根っからの文字通りの戦士である。

数秒の間後、第二ラウンドが開始された。

奇しくも、なのはとフェイトの初戦と同じく空中戦。

だがその凄絶さは、比べ物にならない。

いくらなんらかの能力の補助を得ても、人間の体は音速を超えられない。

そういう作りになっていない。

だが彼らの場合、そんな常識は通用しない。

音速を遥かに超えたスピードで翔け巡る光点と光点が交差し、シザース軌道を描きながら、刃と刃が交わり、激しいスパークが幾つも

起きる。

まさに……：超音速の大決闘。

刃を振るうスピードも、もはやまともに視認できない。刃を交わしたのがこれで何十回となるだろうか？

そのまま膠着状態が続くと思われたが、状況は動いた。

ミラーナイトの刃がゼロのゼロスラッガーを弾かせ、彼の手元から離れさせた。

後退しようとするゼロにミラーナイトは決めてとばかり、一気に踏み込み、両手の光の刃を突きだす。

勝敗は決まったと思われた。

だが、ミラーナイトの刃と刃がクロスし、ゼロの体を捉える寸前、ゼロは刃を両手で挟み込んだ。

真剣白羽取り。相手にそれを理解する暇さえ与えず、強烈なストリートキックがゼロから炸裂。

腹部へもろに受けたナイトは、その勢いを逆に利用して距離を取ろうとするが、彼の背後に迫る物体が、ゼロスラッガーだ。

間一髪、回し蹴りで振り払うナイトだが、ゼロへ向き直ると、炎を纏ったゼロの右手が迫っていた。

ゼロが師匠から受け継いだ、エネルギーを纏った手で繰り出す手刀技《ハンドゼロスライサー》の強化版、《ビックバンゼロ》。

回避は不可避と悟ったミラーナイトは、ミラーエッジを×字に構えて受け止めようとする。

「デェアアー！」

紅蓮の手刀が、ミラーエッジと衝突した瞬間、光の刃は碎け散った。だがナイトはその衝撃を利用してゼロから離れ、腕を×字に組み、エネルギーチャージ。

対してゼロも左腕を横に広げ、体内のパワーを両腕に集束。

「シルバァアアァー！クロス！」

「デェアアー！」

ナイトからは十文字の光刃、《シルバークロス》。

ゼロからは光の粒子の奔流、《ワイドゼロショット》。

二人の必殺技が炸裂。

光刃と光線は衝突すると、凄まじいスパークによる対消滅とともに爆発が起きた。

その爆発を見止めると、手合わせは終わったとばかり、二人は同時に地面に降り立ち、そして同時に変身を解き、人間態へと戻った。

「腕は鈍っていないようですね、ゼロ」

「たく……グレンならともかく、お前まで鉄拳で伝えにくるとは思わなかったぜ」

傍目からは、とてもさつきまで拳を交わしていたとは思えぬ二人のやり取り。

実はこの二人、拳や足にテレパシーを込め、この世界に来てからのことを報告し合いつつ、攻撃していたのである、

文字通り、〃拳と拳の語り合い〃であった。

ただ、それを理論的に実行したのは、後にも先にもこの二人だけだろう。

「まあまあ、その拳から、あの子とは今停戦しているだけ、ということによく伝わりましたから」

「ならいいさ、そろそろ外の状況を確認したいから、結界解くぞ」

勇夜は結界を解く。

竜巻に遭遇した後にも窺える荒れた惨状の森は、戦闘前の元の光景に戻って行く。

結界のおかげで、外界には被害の欠片も無い。

この時勇夜は、改めて魔法を覚えておいて良かったと、内心呟いていた。

リンクには彼女をゼロに授けたウルトラマン記憶を一部ながらも有している。

その記憶によれば、そのウルトラマンが弱体化、あるいは力をセーブした形態であるネクサスという名の巨人は、地球では3分だけ外界と遮断できる異空間、《メタフィールド》を形成できる能力を持っているとのこと。

生憎ゼロには、その能力は受け継がれなかった。

その代わりに、この封時結界である。

ゼロの姿の時は、ウルトラマンの力を最大限発揮できる代償に、魔法は『殆ど使えなくなる』のだが、幸い結界はその『殆ど』から除外されていた。

「でも良かったのか？義妹（いもうと）さんだけに戦わせて、まだビギナーなんだろう？」

「はい……ですが魔法の非殺傷設定のような術を持たない身では、ロストロギアには迂闊に手は出せませんからね……破壊はともかく、封印するとなると、今の私では門外漢ですから」

今のところ、光はデバイスを持っていないこともあって補助魔法ぐらいしか使えないし、デバイスを持ってないと攻撃魔法を非殺傷に設定もできない。

それに……昨日のあの一件以来、よりジュエルシード収集に乗り気になったなのは。次は、自分にやらせてほしいと言ってきた……必ず封印させてみせると意気を見せながら。

もちろん当初は反対したが、それでもなのはは譲らなかつた。

現状でジュエルシードを確実に封印できるのは、デバイスを持つ彼女だけ。

ならいつそ、ちゃんと実戦を経験させた方が良いと判断した。

危険への対処法は教えることはできて、『危険』がどれだけ危険なのかは、結局のところ、実際危険に遭遇しないと分からないのだ。

籠に閉じ込めてばかりでは、いつまでもそれを身に付けられない。

過保護過ぎる教育では、良い結果を生まないこともある。

「（光さん！直ぐに来て下さい！）」

とその時ユーノが念話で呼びかけてきた。

光のみへの念話だったが、勇夜は光の表情から事態を把握し。

「行ってやれ」

行ってあげるよう促した。

11年前より、言動や佇まいに落ち着きが見られるようになったゼロ——諸星勇夜だが、少し棘のある言動のオブラートに包まれた優しさと気遣いを見せる一面は変わっていないようだ。

「はい」

それに悦びを感じながら、光はなのはたちの許へ走っていった。

「広域サーチ、第四区画終了と」

その日の夜、アルフは海鳴市街の上空で、魔法陣を足場に立ち、ジュエルシードの探索を行っていた。

やり方は先日光が披露したのと同じ、僅かな魔力を全方位に放出して対象を探し出すソナー式。

『アルフ、お疲れ様』

一区切りついたところへ、フェイトから通信が入った。

「あ、フェイト」

『そっちの調子はどう?』

「じゃーん♪ 発動前のやつを、一個見つけたよ」

一方のフェイトは、噴水のある公園広場にいた。

結界で地元の人がないようにしているので、堂々とモニターを出してアルフとコンタクトをとっている。

「私は、子猫に憑りついたので一つだけ…」

『そう…』

ジュエルシードは、相当かくれんぼが上手なようで、二人がこの数日で得た収穫は3個だけ……早く母さんのところへ、持って行きたいのに。

できればこれを全部、せめて最低でも多目に持ち帰れば、きっと自分の母は、遠い昔の頃みたいに。

焦りを抑えながら、フェイトは今日交戦した二人のことをアルフに話した。

『やっぱり…あの白い子と鏡から出てきたあいつは、グルみたいだね』

「うん……勇夜の言う通り、女の子の方は素人だったけど……あの鏡の戦士は強かった、手加減されたのに、負けそうになったし…」

『本当かい!? 怪我とかは! どこも何ともないの!?!』

「大丈夫、傷とはついてないよ……多分……勇夜が……」

負けそうになったという発言に取り乱すアルフを、心配掛けまいとするフェイト。

実際鏡の騎士の手加減で、怪我らしい怪我は負っていない。

それが少し悔しいけど、それよりも、まるで騎士を自分から遠ざけるようにいきなり飛んできた光。

あれが勇夜によるものなのかは、はっきりしない。

聞いてみても上手くはぐらかされて、また一本取られて、恥ずかしい気持ちにさせられそう。

『勇夜が、助けてくれたってことかい？』

「どうなんだろう……よく分からないの、いきなり光が飛んで来て、騎士と一緒に消えちゃったから……」

けど……何でなんだろう？

勇夜が助けてくれたって……絶対そうだって……確証はないのに確信が……フェイトにはあった。

その頬も自身が気づかないほど、無意識のうちに緩んでいた。

目を覚ますと、見知った天井が目に入る。

まどろみを残しつつ、なのはの意識と思考能力が少しずつ覚醒して行く。

思いだした。八束神社の境内の森に現れた異相体のジュエルシードを巡って、あの「女の子」と話したいと思ったけど、攻撃されて：負けちゃったんだった。

『ごめんね……』

とどめの一撃を受ける直前、あの時確かに聞こえた……あの子の謝罪の言葉。

「なのは……」

ユーノが、心配の色を見せる眼差しでこっちを見ていた。

「光兄は……」

「念の為にとって、見回りに行った」



「そうなんだ…あ…あと、憑りこまれちゃった動物さんは…」

「無事に元に戻ったよ」

「……………良かった」

「あと…光さんが、今日はもう休みなさいって」

本当なら、直ぐにでも収集に出たいけど、言う通りにするしかないよね、もう夜だし、気を失ったんだし、休める時は休めって恭也兄ちゃんも良く言っていたし。

「うん……………分かった…」

でも、あの子って……………いつたい。

どうして？ あんなことしてるのかな？

なのはは無意識の内に、あの『金髪の魔法使い』のことで頭が一杯になっていった。

フェイトがこの世界での隠れ家的なマンションがあるのと同じく、諸星勇夜ことウルトラマンゼロも、この地球での住居を借りている。

彼が借りたのは、よくCMに出てくるマンション。

家具家電が予め付いてきて、敷金礼金0、短期間での契約も可能だったので、ゼロにとつて都合が良かった。

ちなみに戸籍とか言った個人情報はどうしたのかと言うと、裏技を色々使ったとしか今は言えない。

そして今ここには。

「CMの通り、本当に一通り揃ってるんですね」

高町光ことミラーナイトが、訪問していた。

「ここに感心するために、来たわけじゃないだろ？」

「そうでしたね」

勇夜は現状で分かった情報の交換と今後の対策を組むために、彼を呼んだのである。

「まずこつちから話すな、一応……………フェイトがなんであれを集めているのかは、目星が付いている」

「本当ですか？」

「ああ、あいつのお袋さんから頼まれた『お使い』らしい」

「それはまた……やけに物騒な『お使い』ですね」

今までジュエルシードが引き起こした事故、事件を反芻するだけでも、アレの危険性は身にしみて理解できたし、次元振が起きていないのが奇跡的とさえ考えてしまう。

「お袋さんの名前はプレシア・テストアロッサ、ミットチルダ、あっちの世界じゃ結構名の知れた技術者で魔導師、つまり魔法使いだったんだが……」

勇夜はフェイトの母が、件の魔導炉実験の事故をきっかけに失踪したこと、以前からフェイトにロストログアを集める違法行為を強いていることなどの情報を、大まかに話した。

「しかし、娘さんを危険な目に遭わせてまで、そのプレシアという女史は何を……しようとしてるのです?」

「そこなんだよ……一番腑に落ちねえのは、ただな……」

「ただ?」

「ちよつと引つかかることがあってさ」

勇夜はジーパンのポケットから、コンパスに似た物体を取り出して、ボタンを押すと、縦に密着して並んでいた二つのステイックが展開し、3Dモニターが現れた。

見たところ、向こうの世界のタブレットPCだろう。

「プレシアはあの事故の時、娘さんを一人亡くしてるんだ」

「あのフェイトって子の……姉、ということですか?」

「………とりあえず、これを見てくれ」

怪訝そうな顔で、タブレットのモニターに入力操作をすると、彼は画面を光に向けた。

ディスプレイに表示された写真を見た時、光はそれから目が離せなくなった。

「本当に……この写真の子は、そのアリシアなんですか?」

「ああ………」

光がモニターに釘付けになれている理由。

それは、画面に写っていたのが、どう見ても……  
……見えなかったのだから。 ■■■にしか

## EP10 | 見えない裏側

分かっていたつもりだった。

たった今、修行の一環で組み手をしている相手とは、決定的な力量差があることを。

拳での殴り合いには自信があっただけど、上には上がいたってことを。

でも……何度も組みあつて、相手は想像以上の上手だと思い知らされた。

息が苦しい。短いサイクルで、荒い呼吸が繰り返される。

仰向けに地に伏せられた体が疲労で重たく、起き上がりたいのに、起きあがらない。

まるで、腹筋したいのに一回もまともに起き上がれない運動音痴みたいに言うことを体が聞いてくれない。

全身から汗が流れ出て、ボディラインにフィットされた露出の多い服に染み付き、痛覚が汗と布が混じった感触が不快だと訴え続けた。

自分はこんな有様だつてのに。

「おい……大丈夫か？」

対して、さつきまで自分とやり合い、タバコを吸う姿がやけに様になりそうな体勢で見下ろす相手は、息の一つも乱していない。

こっちは全速力で走っていたのに、彼は軽い散歩をしてきたようにけろつとしている。

「どんだけタフな体してんだよ!？」

失礼な言い方かもしれないし、使い魔のあたしがいうのもなんだけど、本当に人間なのかと疑いたくなかった。

あたしたちの世界では、並大抵の相手なら腕っ節だけで魔導師とやりあつて勝ってしまうことから、「魔導殺し」なんて異名が付きくらのやり手。

魔導師としても秀でた実力者として結構有名なのに、実力があれば10代での管理局の高官に出世できてしまう私たちの世界で未だに

囑託魔導師の立場を貫く異端者で、11年前にミットチルダに迷い込んだ時空漂流者。

諸星……勇夜。

「ほらよ、しばらく休憩だ」

勇夜が差し出してきたのは、青に刻まれた白い文字のラインが特徴で、綺麗な水をイメージさせるこの日本って国で売られてる清涼飲料水。なんでも、体の中の水分とほぼ同じ成分になっているらしい。

すぐにでも水が欲しかった。

今マンシヨンの屋上において、夜だつてのに、真昼間の砂漠を長時間歩いてきた気分だ。

キャップをとると、直ぐにボトルに入った半透明の液体を口の中に放り込む。

体内の水と同じという謳い文句は本当らしい。

まだ体は重いが、全身に潤いが戻ってくるのがまざまざと感じられる。

飲料水を与えてくれた……今は先生な立ち位置の勇夜は、あたしからのわがままでこうして毎晩、組み手に付き合ってもらっていた。

アルフの相棒で主人でも、姉妹同然な仲間でもあるフェイトは、空中での高速機動による接近戦がメインの魔導師だ。

アルフも一応空は飛べるのだが、元が狼であるせいから、フェイトほどうまくは飛べない。

陸上での競争なら負けないのに、空での追いかけてこでは、いつもアルフが連敗記録を更新させていた。

だから彼女は、戦闘時には中々遠距離の後方支援がメインにしつつ、フェイトのスピードで翻弄された相手の隙を突いて殴りこむのが役目。

前述の彼女の独白の通り、アルフは肉弾戦には自信があった。

けれど勇夜に指南を求めた際、アルフはまず体から鍛えろと言われた。

大まかなメニューは3つ。

まず常人より多目な準備運動とトレーニング、腹筋だけで1000回を超えるのは当たり前。

二つ目に、雑念を捨てる為の黙想。

そして実戦重視の組み手。

これらのメニューを結界内で行っていた。

この手の魔法の効能として、結界の内部では時間の経過が結界の外と異なる。

外では数十秒の時間だが、内部では一時間前後。

よって実質、短くて半日、長くて丸一日分ぶっ通しの特訓であった。くだいようだが、アルフ自身、素手での格闘なら自信はあった。

だからこそ、あそこまで攻撃が通らないと思わなかった。

何度殴つても、何度蹴つても、相手には全く当たらない。

避けられるか、弾かれるか、払いのけられるかだ。

そのくせ、勇夜からの攻撃はほぼまともに受けることになる。

拳は弾丸のように速いし、手刀は刃のように鋭いし、蹴りはハンマーのように重いし、気がつくと自分の体が宙に浮いて投げられ、地面に叩きつけられたのを一泊遅れて自覚させられるのが何度もあった。

特に投げ技は、一番きつかった。

勇夜によると投げ技は、自分の体重がそのままダメージとして自分に伝わり、どんなに身をクッションや鎧で覆つても、ほとんど意味がないらしい。

きついと言えばきつ過ぎる特訓だったが、気になることが。

実質組み手で使う「武器」は己が肉体だけ、魔法だって一切使われない。

アルフはなんでこんな訓練内容なのかって聞いてみると。

「運動を繰り返すと、体内の魔力循環の巡りが良くなって効率良く、かつ素早く魔法も使えるようになってんだよ」

と、一応ちゃんとした理屈込みの返答が帰ってきた。

おまけに、稽古中の勇夜はとにかく厳しい。

鬼、鬼畜、鬼気、鬼面、鬼教官、鬼軍曹。

言葉で表現すると必ず「鬼」がつくほどに厳しい。

容赦は無し、甘えも慈悲も一切無く、地球の言葉で言う「スパルタ」。

ほめて伸ばすタイプだったフェイトの「家庭教師兼乳母さん」だった。「あの人の魔法の授業とは、180度正反対。」

休憩は適度に入れてはくれるが、それまでは砂漠で長時間全力で走らされるような地獄を味わされる。

その間、ちよつとでも泣き言が入ると。

「お前の耳と鼻と目と馬鹿力と俊敏性は飾りか!!?人より頑丈で恵まれた体を持っておいてそのザマはなんだ!」

「体で覚えこまなければならぬことを、口先で逃げるような野郎は足手まといだ!」

「一体お前が使い魔として、相棒としてどんな努力をしたんだ?使い魔アルフはフェイトに一体何をした?」

「その顔はなんだ!?その眼はなんだ!?その涙はなんだ!?お前がやらなくて誰がやる!?お前の涙で……フェイトを救えるのか!」

手までは上げなかったが、特訓中アルフは徹底的に彼からドスの利いた重低音の怒鳴り声で叱責罵倒された。

根性精神と、合理的トレーニングが、見事に合わさった特訓であった。

まだ始めてから数日しかたっていないので、アルフには体に変化があるのかまだ分からない、それこそ一朝一夕で鍛えられるなら苦労はしないけど。

とりあえずメンタルは、鬼教官と化した勇夜の言葉攻めの数々で確実に鍛えられている、という実感だけは、はっきりとアルフにはあった。

勇夜に嘆願して始まった修行初日から数日経ったある日の夜、アル

フは先生である彼に、特訓とは関わりが薄い質問をした。

「あのさ…あんたのデバイス見せてくれない？」

藪から棒であったが、当人はどうしても気になることがあったのだ。

一応自身の先生なんだし、彼のその強さの一端を見たい欲求が実のところある。

「いいけど振り回すなよ、おもちゃじゃねえんだから」

「あたしはそこまで子どもじゃない！」

彼の釘を刺す意味合いが入った忠言に、ついカツとなるアルフ。

反論はしたけれど、実際実年齢ならフェイトより年下の3歳な使い魔である。

死病に晒され、群れから捨てられたところをフェイトの仮の使い魔契約で転生したのは3年前、これが普通のワンコなら三十路間近ではあつたりする。

どちらにしろ「ガキじゃねえ!」、或いは「おばさんって言うなー!」とこんな感じでアルフは声を荒げて反論するだろう。

「リンク」

『はいマスター』

彼は中指に指輪形態リンクがにはめられている左手を、肩の位置まで上げて、直線に伸ばした。

地面に青緑色の魔法陣が現れ、勇夜は起動用パスワードを唱える。

「古より受け継がれし光よ、我の剣と銃と鎧となりて、邪悪なる意志を薙ぎ払え、契約のもと、絆を守護せし希望を我に——」

なぜに勇夜はわざわざ、デバイスを召喚するのに長い言葉の羅列を発しているのか? と言うと、自身の得物が他人に悪用されないように、当人以外は触れることのできない魔力フィールドを張っているからだ。

解除には勇夜の声紋と魔力による認証も必要なので、詠唱を覚えただけではフィールドは解けない仕組み、尤も勇夜が彼女を信頼しているからこそ、こうして堂々とコードを唱えているのである。

「零牙——SET——UP——」



大方の魔導師なら、彼の指にはめられた指輪——リンクが杖か武器へと変わると想像するだろう。

だが彼の場合は少々違う。

リンクから、青緑色をした雪のようなマリンスノーのような粒子が溢れだす、最初は無軌道に溢れていたそれは、勇夜の左手を中心に集まり、一瞬光輝くと、実体化したそれを勇夜は手に取った。

それは鞘が着いた一振りの剣だ、ただアルフが文献などで見た剣と違って、弓みたい刃が曲がっている。

「こいつの基本モードの元になった剣は刀つていつてな、この日本で独自に発展した刀剣さ」

そう言うときそれを鞘から抜いた。

鞘に隠されていた刃が、月の光に照らされて反射し、光沢を魅せる。

「綺麗……」

一度目にしたことがあるにも拘らず、アルフは気が付くと見惚れつつそう呟いていた。

刀は普通の両刃の剣と違って刃があるのは片方のみで、やはりやや湾曲している。

刀身は雲のような模様が幾つも並べられ、日頃から手入れをしているのか新品同然に受けた光を反射し、この上ない美しさを醸し出していた。

それでいて、見ただけでこちらを容易く切り裂いてしまうような武器としての鋭さを秘めた武骨さも兼ね備えている。

芸術には疎いけど、優れた美術品や工芸品を目にした時、なんとなくこんな感情が浮かんでくるんだろうなとアルフは感じた。

いくつか気になることはあるけど、まずは——

「てつきり、そのリンクが変形するのかと思ってた」

——そう……デバイスを起動したにも関わらず、リンクは指輪のまま勇夜の左手に収まっている。

戦闘の時は腕輪だったから、指輪が彼女の待機形態なんだろう。

『私は、バリアジャケットの生成、魔法発動と戦闘のサポートが主な役割です、武器の使用と、それを介して発動する一部の技は、この非人

格型アームドデバイスの『零牙』が行います』

デバイスには容量に大差あるが物体を格納できる機能があり、この零牙も普段はリンクによって嚴重に保管され、必要に応じて取り出しているとのこと。

「アームドつてことは、ベルカ式も使うのかい？」

「いや、一応練習はしてたが、似たようなレアスキルがあるから、あんま使わねえな」

そのレアスキルや、デバイスを二つ所有していることも気になるが

「こっからは企業秘密だ」

——とはぐらかされてしまった。

まあともかく、異相体との戦いから、フェイトと同じ接近戦がメインだけど、万能型のオールラウンダーでもあることは分かった。

意外とフェイトと共通点が多いと気づかされるアルフだった。

「ねえ、ちよつと魔力弾を撃ち込んでみてもいい？」

「いいぜ」

さらに「先生」の強さを確かめなくなったアルフは、予め了承を得ると、魔力弾を数発、生成した。

勇夜も刀を鞘に納め、フェイトと対峙した時のように居合腰に構える。

アルフは勇夜に向けて魔力弾を撃った。

すると信じられない光景が目に見えた。

彼は刀を抜いて振るうと、全ての魔力弾がろうそくの火のように消し飛んだ。

使い魔であるアルフの目でもまともに見えないくらい素早い抜刀により発生した風圧で、「魔力弾を掻き消した」のである。

「嘘だろ……」

「ようは使い手の使い方次第つてやつだよ、体も魔法も、「何もかも」な」

やはり『魔導殺し』の異名は伊達じゃない。

噂で流れゆく武勇伝も、ほぼ誇張がなされない掛け値なしの本物で

あろう。

彼の力量を毎日間近で見ただためか、魔法も世界に存在する『力』の一端でしかないという見解が、最近の彼女に芽生えていた。

使い手次第つてのにも同感、鍛え方次第で、徒手空拳だけでもとんでもない強さを持てるのは決して不可能ではないことを教えられたのだから。

「持ってみるか?」

「いいのかい?」

「ああ、気をつけろよ」

彼から零牙を受け取った。

実際持ってみると……予想以上の重さだった。

本とかで見た剣の構えを、見よう見まねでやってみてみた。

柄の一番後ろをへその前に付けて、正眼と呼ばれているらしい基本の構えをとる。

「力入れ過ぎだ、こういうのは卵持つぐらいの握力でいいんだぜ」

「た、卵?!」

これを勇夜の言う通り卵を持つぐらいの握力で振ってみると言われても、無理としか言えない。

腕っ節も脅威的で、この刀を目に止まらないまでの速さで手足のように扱い、バルディッシュだけを切って寸止めできちやうこの男は――

「何者なんだいあんた?」

様々な意味合いを含んだその言葉を無意識の内に声に出していた。

一拍置いて、意識するに至る。

どうしよう、どう言い分すれば、いいのか。

「聞きたいか?」

「いや……やっぱいいかな」

「ん?……ならいいけど」

とりあえずほっとした。何か今は聞かない方が良く、本能が訴えてきたからだ。

今は気にしてないけど、初めて会った時………というか打ちのめさ

れた時、内心使い魔としてのプライドをずたずたに壊されて心中複雑だったし。

勇夜は零牙を鞘に納刀し、それをまた粒子化させるとリンクへと戻っていった。

「とところでさ……こつちも少し聞いていいか？」

「なんだい？」

「アリシアって女の子に……聞き覚えがあるか？」

「……………」

訳が分からなかった。

そもそも自分には見知った人間は、フェイトに「乳母さん」に「あいつ」ぐらいで、男と知り合いになったのも勇夜が初めてだった。

アリシアなんて子など、全く聞いたことが無い。

「フェイトの姉貴らしくてな、あの子が生まれる前に死んだらしいんだが」

フェイトに……お姉さんが？

そんなこと……初耳だ。

あいつの使い魔でもあった「あの人」だって、知らなかったかもしれない。

「アルフ？」

「え？あついや……」

「……………」やっぱうまくいってねえんだな……フェイトとプレシア・テスタロッツサは……」

「……………」知ってたのかい？」

「お前らの様子を見て、薄々」

「……………」昔からなんだよ、あいつはいつも研究室に籠って、まともにフェイトと顔を合わすこともしなかった……飯の時だつて——」

気が付くと、ごく自然に本音がアルフの口から溢れ始めた。

あいつは、あたしが使い魔としてフェイトと契約した頃には話どころか、顔さえ、フェイトにも合わせなかった。

日頃の面倒も、その先生兼乳母さんの使い魔に押しつけっ放しで、

一緒にいる貴重な時間でもあった食事の時も、気まずい空気を流しまくって、まともな飯の味を感じたためしが無い。

だからアルフから見た「あいつ」は、「母親失格の人でなし」ではない。

自分から見れば、「あの人」の方がずっと母親らしかったくらいだ。

「なのに……フェイトに危ないお使いさせといて、お褒めの言葉を一つもかけてくれない……」

あいつが実の娘を冷徹に振る舞う度に、フェイトは寂しい気持ちを無理に笑ってごまかしてきた。

本当は思いつきり泣きたいのに、思いつきり抱き締めてもらいたいの。

その気持ちは昔から変わってない、今だって。

「でも……それと、そのアリシアって奴とどんな関係が……」

「前にな、20年以上前の魔導炉実験の事故の記事を見たことがあって、その開発主任がプレシアだったのさ、そのアリシアって娘さんもその事故に巻き込まれて亡くなってんだけど……」

20年以上……その単語に胸がざわめく。

「そのことで、フェイトから何か聞いてないか？」

確かフェイトから、自分はその頃に生まれて、勇夜の言うその事故で20年くらい昏睡状態になって、5年前に目が覚めたという話を思い出して照らし合わせる。

どういうこと？ これでは辻褃が合わない。

双子で、一緒にその事故に巻き込まれたってことは考えられるけど、それならフェイトがアリシアのことを覚えてないのはおかしい。

「そのアリシアの写真を見つけたんだけどさ……見るか？」

勇夜はポケットから、表を伏せた状態で写真を取り出した。

なんでだろうか？

よく分からないけど、見ない方が良くってこころが警告してくる。

フェイトのお姉さんなその人の顔は見るな、その先には踏み込むなって、警鐘は絶えず響く。

「無理にはいわねえよ……アルフにはかなりどぎつい代物だからさ」  
でも、警告を鳴らす本能よりも、好奇心が凌駕した。

「うん…みせて」

一言で、アルフは了承した。

それでも、聞かなきや……見なきやいけない気がしたからだ。

勇夜は懐から紙を一枚出してあたしから見、裏返しに差し出した。

アルフはそれを手にとって見る。

写真の主を目にしてから、どれくらい経っていたか。

実際の時間よりも、長く流れてた気がした。

それだけ、手に持つ写真は衝撃的なものだった。

「言っておくが、写ってるのはフェイトじゃないぞ」

「そ、そんな……だっ……だっ……だっ……だ、だっ……」

だって、写っているのは……どこからどう見てもフェイトそのものじゃないか。

髪の色だって、目の色だって、顔つきだって。

何から何まで……生き写しのドツペルゲンガーだった。

「なんなら、事故の時の記事を見るか……その写真はその記事から切り出したもんだ、ついでに……アリシアが亡くなった時の歳は……」

「聞いていけない、聞いたら、ここで聞いてしまったら。」

なのに勇夜の口を制せられずに、聞いてしまった。

「6歳だ」

フェイトが、昏睡した年齢と一致する。なのに双子みたいにこんなに似てるなんて……髪の色も、瞳の色も、顔つきまで一緒なんて……他人の空似なんて次元じゃない。

なのにフェイトは、双子で学校に通う前だったから、本来ならいつも一緒にいたはずの彼女のことを、何も覚えていない。

「ちなみに父親は、アリシアが物心つく前に別れたらしい……」

フェイトはちょうど同じようなことを言ったことがある『自分が物

心つく前に』って…その後再婚したって話は聞かない。

雄と雌が一緒じゃなきゃ、子は生まれないってことはアルフだって知ってる。

じゃあ…：フェイトはどうやって生まれてきたの？

なんでその死んだ姉さんとあんなにそっくりなの？

どうしてフェイトは、そのアリシアのことを知らないの？

分からない、分からない、分からない。

疑問だけが、脳内で膨れ上がってくる。

なんで…：なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで  
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで  
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで  
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで  
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで  
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで  
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで  
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで  
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで  
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで

「アルフ？」

「……………っ!？」

勇夜の一言で、疑問の渦に吞まれそうだったあたしは、なんとか現実に戻ってこれた。

でも、一度心に生まれたしこりそのものは、まだ残ったままだ。

「悪いな…：嫌なこと聞いちまって…：今日の組み手はこれでお開きだ」

そのまま、結界を解除し、その場を立ち去ろうとする勇夜。

「勇夜…」

思わず引き留めるけど、何を聞こうと言うのだろうか？

アリシアのこと？

フェイトのこと？

それとも二人の親であるあいつのこと？

多分何もかも、全部だ。

知りたいくせに、全部知るのが怖いときえ思う、そんな己を自虐した。

何て贅沢者だろう……自分って。

一度、経験してるからかもしれない。

昔、使い魔は用が終われば主から縁を切られて消滅する運命であることを知って、精神——ところが叩きのめされて、自暴自棄になってしまったことがあるから。

あの経験に相当する真実が、きつとあの親子たちにはあるんだ。

だから知りたいけど、それを躊躇ってしまう、どっち着かずな今になってるんだ。

「俺も今教えたこと以上は知らない……それに今のお前に、稽古組む余裕あんのか？」

思えば、あの時、勇夜が全てを話さなかったのは……英断だったと思う。

だって……あの後に全てを聞いた時、自分の中にあつた引つかかりが全て解けたと同時に……まるで、自分のことのように絶望してしまつたからだ。

インテリジエントデバイス。

端的に言うと、AIを搭載した、人格を持つ魔法の杖である。

使い方次第では、魔導士のポテンシャルを最大限に引き出せるが、術者が未熟だったり、デバイスとのコンビーネーションがなつてなかつたりするとまともに扱えない代物だ。

それに大変高価な代物、車なら高級車レベルに相当し、またAIを搭載する使用上、構造がとても複雑で脆弱なので、あまり一般には浸透していない。

一方で、ビギナーにも優しいチュートリアル機能がインテリジエントデバイスにはある。



たとえば高町なのはとレイジングハートの場合。

今、彼女は授業中なのだが――

『イメージトレーニングを開始します』

――なのはの視界は、授業を教える先生と黒板と、それを受ける生徒との授業風景から、青空と雲に変わり、海原を見渡せるほどの高さ  
に浮いていた。

「ふええ……」

もう何度か空を飛んだ経験はあるが、その光景に言葉が出なかつた。

この眼に写る光景が、レイジングハートが作り上げた仮想空間であり、なのはの脳内映像だというのだから驚きである。

仮想世界は、全てのインテリジェントデバイスに搭載されている機能だ。

『戦闘には速度やパワーも必要ですが、それよりもさらに必要なものがあります、それが何か分かりますか？』

「ええーと、負けない気持ちとか……」

とつさに思い浮かべた言葉で答えてみた。

漫画では、結構それで活路を見出したりするけど。

『好ましい回答ですが、少し違います』

「えつと……」

『知恵と戦術……すなわち自分の力をどう使いつつ、勝利に持っていくかです』

前にレイジングハートは自身を『高性能な乗り物』と呼び、  
“乗り物は乗り手がいないと性能を發揮できない”と言った。

その乗り手が使いこなすために必要なのが、“知恵と戦術”  
ってことなのだ、ぼんやりとだが、どうにかレイジングハートの言うことは理解できた。

そうしてトレーニングが開始される。

この仮想シミュレーターのおかげで、なのはは授業中でも魔法の練習が行えた。

だが熱心にレイジングハートの教導を受けている一方で彼女の頭は……同じジュエルシードの収集が目的でありながら、自分と戦闘を  
行い、叩きのめした金髪の女の子のことで一杯だった。

初めて会った時、なぜか昔の自分も思い出した。

ずつと一人だと思い込んで、塞ぎこんでいたあの頃の自分。

いや……あの子の抱えてるものはひよつとしたらあの頃の私以上か  
もしれない。

「ごめんね……」

と詫びておきながら、自分を落とした少女。

どうしてあんな寂しい目をしてまで、ジュエルシードを集めてるん  
だろ？

どうしても、自分と戦つてまでも、あの宝石を何が何でも集めてま  
でも、叶えたいものがあるから？

なら、それは何？

気がつけば一日中、彼女のことを頭から離れなかった。

それは言葉に出さなくても……顔に出してしまった。

「いい加減にしなさいよー！」

その証拠に……放課後の夕陽が指す頃、なのははいつものようにア  
リサとすずかと三人で帰っていたのだが、物思いにふけているなのは  
の態度にアリサの堪忍袋の緒が切れた。

「あんたね、最近何話してもぼーと上の空であんた何考えてんの!？」

なまじ親友であるがゆえ言葉に出さなくても、顔で『何か悩みがあ  
る』ことが筒抜けだったのである。

「ごめん……」

そして内容が内容なだけにまともに話せず、そしてうまく誤魔化す  
ための言葉を持たないのには『ごめん』以外に返せる言葉が無く。

「ごめんじゃない！ あたしたちと話してるのがそんなに退屈ならい  
くらでもぼーつとしてなさいよー！ 謝るくらいなら……事情くら  
い教えてもらっても……いいじゃないー！」

「アリサちゃんー！」

それを素直に受け止められるほど、気持ちに余裕が無いアリサはそ

の場を走り去って行った。

「なのはちゃん…」

「いいよ、今のはわたしが悪いから……アリサちゃんの所に行つてあげて」

「ごめんね…」

なのはを置いていくことが申し訳なさを感じつつも、アリサが去っていった方向に走って行った。

そう言えば、一昨日のことだ。

光兄が見周りから帰ってきた時、丁度今の自分みたいな表情をしていたような気がする。

やっぱり：わたしのわがままから：光兄もユーノ君も、ほんととはあたしにこんなことさせたくなかったんだ。

たとえば、自分にレイジングハートという乗り物を乗りこなせる力があるといつても、

特に光兄は昔、王国を守護する騎士さんだったこともあって、やっぱりあたしみたいな女の子を戦わせることに抵抗感があるんだと思う。

昨日は許してくれたけど、怪我もしちゃったし、その気持ちはありがたい。

でも、あの人が……あの、口調は荒いけど、自分を叱咤してくれた光の巨人。

『ウルトラマンゼロ』

あの人が言ってくれたように、中途半端に終わりたくない、終わらせたくない。

たとえばがままでも、自分がやりたいと言いだしたのだ。

ここで中途半端に止めたら、私は絶対後悔する。

だからちゃんと言おう。

わたしは、  
“辞めない”って。

親友への苛立ちで、アリサは前を向く余裕も無いまま走っていたため。

「きやー………(ぐ)めんなさい!」

通行人とぶつかってしまった。

相手の顔を見ないまま、頭を下げ、顔を上げると。

「あ……あなた………」

「アリサちゃん!」

そして、アリサを追いかけてきたすずかも。

「あ………」

その人に釘付けになったからである。

「なんだ?」

その通行人が何を隠そう、先日のサッカーの試合で選手を差し置いて名プレーを披露した少年、諸星勇夜だったからである。

「で、その親友が、理由は分かんねえけど悩んでて、あんたらに話してくれないことに怒って走ってきたら、俺とぶつかってわけか……」  
アリサとすずかは、近くの公園でブランコに座りながら、向かいの金具に座り、今ぶつきらぼうな口調でいきさつを聞いて要約した勇夜と話していた

「そうなんです……」

俯いたまま、何も言わないアリサの代わりにすずかが答える。

あの後直ぐに立ち去ろうとしたが……「そんなに急いでどこ行くつもりだ?それとも友達と喧嘩したのか?」とあながち的外れでもないことを聞いてきた。

それから、そんなこんなで今に至っている。

「なのはは隠してるつもりなんだけど、悩んでいること、見え見えで……困ってることも見え見えで……なのに……何度聞いても教えてくれない……悩んでも……迷ってもいないなんて……嘘じゃない」

独白のように、アリサはやるせなさを口にした。

すずかも、同じ気持ちなのか沈んだ表情をしている。

「それで…その悩みを聞いてあんたはどうしたいんだ？」

「……………それは……………」

勇夜からの問いに、アリサは答えられなかった。

自分たちに打ち明けてくれない事実に関わされて、そこから先を見落としていたからだ。

「確かに、その悩みを聞いてあげるだけでも良いことだし、それだけで心に乗っかってた重りが軽くなる、でも、打ち明けようと思うまで……………結構時間がかかるもんなんだぜ」

「今は…………無理に聞かない方が良くってことですか？」

「そんなとこ…………あんま押しすぎると…………却って言い辛くなるもんなんだよ」

勇夜——ゼロは二人にそう言いながら、彼の父のことを思い出していた。

ずっと、父だと明かせぬまま、陰から見ていることしかできず、危うく闇に落ちそうになった自分に苦悩を刻むことしかできなかったウルトラセブン。

「まあ、ただ待つのも癪だ…ってんなら、『話せる時が来たら話せ』と予防線を張つとくつて手もあるけどな」

要は、タイミングってことなのだ。

それを見定めないと、ずっとすれ違ったままになってしまう。

「ありがとうございます…何か、口にしたら楽になりました」

アリサはそう言いつつ彼にお辞儀をすると、その場を去っていった。

「私からも…………ありがとうございます」

「いいさ、てか行かなくていいのか？」

「え？」

「行っただろ？ 習い事」

「あ、いけない遅れちゃうー！」

公園に設置された時計を見て、この後の予定を今になって思いだしたすずかは勇夜にちゃんと一礼すると、行き先が同じなアリサの後を

追うのであった。

「で…話してなんですか？なのは」

突然なのはから話があると持ちだされたのは、帰って間もなく。

今二人は近所の公園にいる。

念の為、特定の人物以外を寄せ付けない、人払いの結界を張っているので、魔法に関する話しも堂々とできる。

ちなみにユーノは先に散策に行つてこの場にはいない。

「あのね…ジュエルシード集めの…ことなんだけど…」

やっぱりその話ですか…昨日なのはがフェイトと戦闘して負傷したこと。

見周りと評して、ゼロと接触し、彼から聞いた話の重さに、意気消沈して、なのはに素っ気なく振る舞ったことで、なのはに心配させたようですね。

「やっぱり…その…」

「もういいですよ、その話は」

「え？」

「ゼロだつて言っていたのでしよう？『半端に関わつて半端に後悔するな』って」

「うん…」

「なのはも覚悟を決めたのなら、僕も覚悟を決めます」

でも、その前に。

「ですがなのは、僕からも話があります」

「何？」

「こちらからも、なのはにどうしても聞いておきたいことがある。

「ジュエルシードを集める以上、あの子とは確実に戦うことになりま  
す、はつきり言つてなのはより場数も積んでいて…強い、もし鉢合わせ  
になった時はどうしますか？」

「できれば…お話したい…なんで…ジュエルシードを集めているの  
か…」

「それでその後は…」

「え？」

光の目が冷静でありながらも、厳しいものになる。

「譲れない理由があるからこそ、彼女はなのはと戦ったんでしよう、それはなのも同じです、目的を知ったところで、衝突は避けられませんが…」

戦いというものはいつもそうだ。

命を掛けた決闘でも、言葉を武器にした論戦でも、どうしてもこれだけは譲れない。理由があるから、戦いは起きる。

王国の騎士、兵士であつたことから、彼はそれを痛いほどに理解している。

たとえあの子から理由を聞いたとしても、十中八九彼女はなのはに刃を向けるのは確実。

母の意志なら、たとえ褒められたものでもないことでも実行する。

友であるゼロから聞いた……彼が譲歩しなければならぬまでに、己を強く凝り固まつてしまった少女、フェイトの現状。

「は……」

今まで、こんなに厳しくなのはにものを言うことが無かつたためか、よそよそしい態度になった。

本当ならゼロに会つたことと、彼から彼女に関する情報を聞いたことを言っておきたいところだが、その彼から、集めている情報が確信を帯びるまで待つてほしいと言われている。

なのはにそれらを話さないのは気が引けるのだが、信憑性が不確かな情報は、却つて混乱を招く結果を起こすことには同感でもある。

「それでも……お話をしたいのですね？」

しばらく間を置いてなのはは、まっすぐ僕の目を見て、力強く頷いた。

やっぱりそう言うところは物凄く……頑固な子だ。

下手すれば、エスメラルダ星の第二王女エメラナ姫や、同僚であるスターコルベット以上かもしれない。

「(なのは、光さん!)」

「ユーノ君？」

「見つかったんですか？」

「（一応は、でも反応が微弱でどのあたりにあるのかまでは）」

「わかりました、行くこうなのは」

「うん！」

二人は反応があったという市街地方面へと走り出す。

「別の宇宙から来たゼロが命がけで戦っているのです」

ふと光は、エメラナ姫様がジャンバードに言ったという言葉を思い出した。

姫様は、ゼロのように戦えなくても、せめて自分にできることを率先してやろうとした。

なら、自分たちも、やれることをやろう。

とある海鳴市街のビルの屋上、そこに諸星勇夜は言葉の通り、瞳を青白く光らせながら、市街を一望している。

この瞳が発光する現象の名は、透視——クレヤボヤンス

人間態の時でも使える不透明な物体を見透かす超能力の一つ。

その能力で彼は、街中に隠れ潜むジュエルシードを探していた。

「リンク、どうだ？」

『ダメです…やはりジュエルシードの反応が微弱で、具体的な位置まで特定できません』

相棒の広域サーチでも、簡単に捉えられてくれない。

「となりや…方法は」

透視も使いつつ、根気よく足で探し回るか。

あると思われる場所に魔力を打ち込んで、無理やり叩き起こすか。

一番手っ取り早いのは後者の方だ。

だがあのロストロギアは大変デリケートな代物、ちよつと衝撃をぶつけただけで何が起きるか分からない。

それにこんな街の人だかりの中じゃ、とてもやる気にはなれない。フェイトたちなら多少のリスクを承知でやるかもしれねえが、と



思った時だ。

なんだ？ いきなり体に過つてきた……良い気のしない胸騒ぎ。

『どうしましたか？マスター』

「いや…なんか、嫌な予感が……」

何と言われても、具体的には分からない。

でもどうにも、胸に引っかかりを感じる。

嫌な“何か”が、漠然とながらも、これから起きつつあると心が騒いでくる。

どうにも、妙な電波を体が受信したらしい。

こういうのを『第6感』とか『虫の知らせ』って言うのか？

“ウルトラマン”の力が、必要になるような事態が起きるかもしれない気さえした。

『マスター、左方400メートル先を見て下さい』

勇夜はリンクの指定した方角に目を向けた。

空から金色の雷が降り注いでいる。

今、雷を起こせるような積乱雲は空には無く、雲からは魔力。

よって自然現象から来るものではない、人為的なもの。

だとすりゃ……あの雷鳴を轟かせる張本人は、唯一人しかいない。

「フェイトか……」

あの女の子たちによる第2ラウンドのゴングが、もうすぐ鳴りそう  
だ。

けど、胸騒ぎはまだ収まる気配を見せなかった。

この身が感じた嫌な出来事は、どうやらその第2ラウンド中に起こるものであると、勇夜は確信するのであった。

## EP11 | 嘆きの夜空

時刻は午後19時50分近く。

文明の光、すなわち電気による灯りに照らされた夜の海鳴の中心市街地の喧噪の中を、高町兄妹、なのはと光は、微かに魔力を発するジュエルシードを求めて歩いていった。

「ユーノ、この辺りなのですね?」

「はい……反応は確かに」

この地区周辺に、いつ発動するか瀬戸際の眠れる野獣なジュエルシードの一つが潜んでいる……筈なのだが、やはりどこにあるかは、簡単に尻尾を掴んでくれない。

対象物が「存在する」ということ自体は解るものの、具体的にどの位置に落ちているのかまでは、魔力反応が微量過ぎて特定できなかった。

手分けして探したいところだが、この時間帯に子どもが一人で歩いているのはとても目立つ、光も戸籍上は中学生で未成年となっている身なので、そろそろ夜の街を歩くには厳しい状況。

いつ街を巡回している警官に、自分たちがなにゆえ親の同伴も無しに夜道を出歩いているのか、問いただされてもおかしくない時間帯。

よって、一纏まりして動かざるを得なかった。

そんな時だ。

「空が……」

「なんで? こんなに雲が急に」

比較的晴れ渡った夜空に積乱雲が突如大量発生、月光が照らされていた市街上空を覆い尽くすと、地上に向けていくつも雷が降り注いできた。

突然の天候変化にざわめく市民。

この怪現象が誰の仕業によるもので、どういう意図で行っているかは直ぐ検討が着いた。

あの「黒衣の魔道師」は、ジュエルシードの反応がある場所に片っ端から魔力を打ち込み、あえて対象の猛獣を起こさせることで位置を

割り出そうとしていたのである。

確かに手っ取り早く見つけられる方法だが、まさかこんな街中で!?  
ともかく街をパニックに落とし込む前に、対応せねばならなかった。

「広域結界! 間に合って!」

ユーノも雷を落とす相手方の真意を察したようで、すぐさま広域結界が貼られ、周辺にいた通行人たちが消えていった。

「なのは! あの子よりも先に封印を!」

「うん! いくよレイジングハート!」

『Standby READY, SET UP』

なのはは手に持ったレイジングハートを空に掲げ起動、ルビーの水晶玉から溢れる桜色の閃光が、なのはを包み込んだ。

市街で最も高層に位置するビルの屋上で街を見下ろすフェイトは雷雲、反応がある地域に集め、魔力を雲に打ち込むことで広い範囲で対象に雷を撃ち込む広域攻撃魔法、《Thunder Fall——サンダーフォール》を、ジュエルシードの反応地点に向け、手当たり次第に雷光を落としていた。

やがてその稲妻の一つが対象に命中したのか、青い光の柱が上が  
り、結界内の市街全体に振動が起きる。

「見つけた!」

フェイトも屋上から、光の柱が上がった方角へと飛翔した。

なのはとフェイトは、ジュエルシードが発する光の柱にある程度接近すると。

『Cannon Mode』

なのはのレイジングハートは、砲撃形態に変形し。

『Glove Form』

対してフェイトのバルディッシュは漆黒の刃を180度展開しつ

つ、柄から翼にも似た3つの魔力刃がトライアングル状に伸びた、槍としても。グレイヴ——薙刀としても使用可能な、強力な大規模魔法を使用する時にとる形態、グレイブフォームへと形を変えた。

『Divine Buster』

『Thunder Smasher』

それぞれの足元と、デバイスの前方に現れた魔法陣に、膨大な魔力が集まっていく。

狙いは、ビルと隣接して浮遊している呪いの石。

「ジュエルシード！封印！」

レイジングハートから桜色の魔力——ディバインバスターが、バルデイツシュからは稲妻が迸る雷撃——サンダースマッシュャーが迸り、大気の中をひた走る。それぞれの攻撃魔法が発射されたタイミングも、魔力流がジュエルシードに命中するタイミングもほぼ同時であった。

双方から封印処理を施した魔力を受けたジュエルシードは活動を停止し、光の柱は消え、振動も鳴りを潜めていく。

その光景を見つめている光。

あとは、なのはの言葉（おもい）に、彼女はどう応えるのか。

自分としても、母の期待に答えたいからといって、向こうの世界では禁止されているロストログアの無断採集を続けるフェイトを止めたい気持ちはあるし、穏便に済むならそれが最善だとも思っている一方で、話し合いに持ち込めるほど、上手く行く保障もないことも熟知していた。

勇夜、ゼロからの話では、彼女は知り合い以上の関係を持った人物は極端に少なく、年上か年下の二択で、歳の近い子や異性とはほとんど関わりが無かったらしい。

その異性が勇夜で、同い年の子がなのは。

それまでは家族としか、真つ当に付き合いが無かったという。

その一人の母親とさえ、今では家庭内別居のように疎遠で、今こう

して母から指定されたロストログアを、言われるがままに泣き言一つ  
言わずに収集する今が、只一つの繋がり。

それを淡い希望にして、頑なになっっているのが今の彼女。  
でも同年代のなのは言葉なら、あるいは……あるいは雁字搦めにな  
った彼女に変化を与えることができるかもしれない。

それもまた淡い期待ではあるが、抱かずにはいられない。

こんな犯罪紛いなこと、彼女に続けさせていいわけがないと、内心  
眩いた時だった。

どこからともなく……嫌な風が身に吹いてきた気がした。

まるで、災害が来る前兆のような。

その風のように穏やかであるのに、気持ち悪いくらいに生温か過ぎ  
る小さな空気の流れ。

思わず空を見た……そこに嫌な風の正体が在るような気がして。

「あれは……」

空が、歪んでる？

上空が……というより、上空の空間が台風のように渦を巻いて歪ん  
でいた。

まさか、こんなところで空間のワームホールが？

この場合、虫食いを意味するワームホールとは違う。

この海鳴と、どこか別の地点の空間が、トンネル状に繋がったので  
ある。

その規模は並のトンネルどころか、都市一個を飲み込めるだけの広  
さであるのだが。

これから何が起こるのか？ 繋がった向こうから何が来るのか？

誰の差し金か？ 今はまだ全貌が全く掴めない。

けれど、一つだけ断定できることがある。

身に触れた嫌な風は、これから起こる「何か」を知らせる警告であ  
ることだった。

一体……何が起きるの？

なのはもフェイトも、市街上空の夜空の異常に気が付き、お話も戦う意思すら忘れて、目が離せなかった。

すると、空に夜の天より黒く、おぞましい先が見えない大穴が開いた。

それだけでも異常事態であるのに、次に起きたのは、黒く巨大な円の中央から、巨大な物体が降りてきた。

何かが着地したと同時に、衝撃でアスファルトに地震と粉塵が走る。

しかも二つ。

仄暗い大穴から降りてきた対象のその姿に、なのはは――

「か、怪獣?」

――と呟いていた。

どちらも二足歩行で50メートル以上はありそうな体。

片や、巨大な一本角と、頭部に青い発光体が付き。

片や、羊のような角を一对持った。

そしてどちらも、見る者の感情を恐怖一色に染め上げてしまうほどに、牙、双眸、巨漢、相貌と極低音で心の臓を響かせる雄たけびを空へと響かせる怪獣たちだった。

「何なんだ? あの生き物は…」

なのはよりもこの世界で言う『非常識』に関わりが深いユーノでさえ驚きを隠せない。

二人は一応、光から怪獣と呼称された大型の生命体が実在することを聞いてはいたが、まさかこちらの世界にいきなり現れるとは、思いもしなかった。

地上に降り立った怪獣二体は、地響きを立てた直後、こっちに視線を向けた。

正確には、空中に漂うひし形の宝石に対して、目線を固定させていた。

「まさか、ジュエルシードを狙ってる!?!」

なのはたちは彼らのその視線だけで、目的を感覚的に悟った。

由々しき事態である。

ここに来て競争相手は一気に増えてしまった。  
しかも相手は、テレビとスクリーンにしか存在していなかったはずの、得体のしれない未知の巨大生物。

対処方法なんて、分かるわけもない。

初めて異相体を戦った時以上の恐怖が、なのはを支配していた。

怪獣からの明確な敵意と唸り声で、震えでレイジングハートの柄を握る力が弱まり、滞空状態さえ維持できなくなりそうになる。

今までは、明確に異相体を倒し、ジュエルシードを封印する方法と、光とユーノの存在がいたから慣れない戦いに身を投じることができた。

が、相手は彼女の固めあげた意志を、容易く崩し、不安定にさせるまでに、心と体を怯え震わせる異形であった。

「(なのは！ユーノ！)」

「光兄!？」

「光さん？」

光からの念話で、ようやく我に返るなのは。

「(あの怪獣たちは『僕たち』が相手をします、なのははあの子とジュエルシードを！)」

「う…うん」

「分かりました」

今は『兄たち』に頼るしかない。

むしろああいう手合いが、彼の兄とその仲間力を、発揮できる相手なのだから。

そうか…：…兄って…：…今まであんな相手とたくさん戦ってきたんだよね。

自分なら怖がってしまうこんな時でも、自分たちが相手をするとき座に言えるまでに、彼が経験を積んでいる事実に対し、頼もしく思う一方、怖がることしかできなかった自分に歯がゆく感じてしまうのはであった。

「なんで……」

見間違いの無い。

あの二体は、『ウルトラマン』たちのいた『世界』に生息している巨大生物であった。

ワームホールが出現するタイミングから見て、人為的に送り込まれたのは明白だが、一体何の目的でこんなまどろっこしい真似を？

考えるのは後か……あの二体を結界の外に出すわけにはいかない。

それに怪獣の出現で、フェイトもなのはも、その場に留まったまま動かない。

恐怖で委縮し、余裕が無い証拠だ。

ここで力を披露すれば、正体は知られてしまうが、あいつらの命に比べればその対価なんて軽いもんだ。

「(リヒト！準備はいいか!?)」

「(こちらはいつでも)」

「よし…リンクク！ウルトラアイを！」

『はい、マスター』

相棒のリンククからウルトラゼロアイが出現し、手に取る勇夜。

別地点にいる光も、首に掛け、いつもは服の下に隠しているペンダントを取り出した。

鏡の騎士たる彼の変身アイテム——ミラージュアイズ。

「ミラー！」

そう声に出しながら両腕を重ねた後、横に広げ扇状かつ鏡写しになるよう両手を回しながら、ミラージュアイズの前に翳す。

「デュア！」

「スパーク！」

勇夜はウルトラゼロアイを目に装着し。

光はミラージュアイズの前で両手をクロスさせた。

瞬間、双眸に当てられたゼロアイと首に下げられたミラージュアイズから溢れる光に、二人は包まれていった。



フェイトも、突然出現したその巨体を誇る生物たちに心身ともに圧倒されていた。

あれくらいの大きい生物は、管理世界にも極まれにいる。だが……あれから発する凶暴な殺気はその比じゃない。目にしたものの全てを敵と見なし破壊しかねない勢いだ。

お願い……止まって……止まってよ。

今まで実戦を幾度となく経験してきたにも拘わらず、フェイトも恐怖による震えで立ちすくんでいた。

駄目、こんなところで立ち止まったら……駄目。

まず離れなきゃ、怪物から少しでも距離をとらなきゃ……お願い……私の体……動いてよ……いつものように空を舞いらせてよ。

勇夜と対峙した時の再来とばかりに、精神を蝕んでいく“恐れ”によって、金縛りに遭うフェイト。

せめて、実戦でその恐怖を何度も体験していればよかったが、なまじ魔導師としての実力がありすぎたせいで、人間としては正しい反応である“恐”の感情の対処法を身に付けてこれなかった。

積み重ねてきた勝利のツケが、ここに来て現れてしまったのだ。

雷光の如きスピードも、角に集まっている怪獣の飛び道具らしきエネルギーを前に力を発揮できずにいる。

フェイトの怪獣の攻撃が襲いかかる。

一体の方は奇しくも、フェイトと同じ——雷撃。

『Defense』

防御魔法を唱える愛機だが、『防ぐこと』に難があるフェイトでは……雷光を自身で阻む術は無かった。

巨大生物たちの飛び道具が放たれたと知らせる爆音。たまらず、フェイトは目を覆った。

あれ？ 何時までたっても、雷撃が来ない。

代わりに、地面に轟く衝撃音と、何かに遮られた雷撃の衝撃音。

そして瞼越しにでも感じる、眩くて、暖かな熱を帯びた閃光。

どうしたのかと、目をゆっくり開けるフェイト。

眩しさに視界が歪み、どんな光景となっているのか分からない。  
やがて完全に視線の先の輪郭を捉えるまでに回復した時に目に止  
まったのは。

「あれは…」

怪獣たちと対峙する、二人の巨人。

怪獣も突然の乱入者に驚きを、隠せないようだ。

フェイトは一方の巨人は見知っていた。

鏡から突然現れ、自分とも交戦したあの緑と銀色の人だ。

もう一方の赤と青のボディ、銀色の顔、黄色の蔽つい瞳、頭にはナ  
イフのような刃をのせたあの巨人にも、一応心当たりあった。

まさかあれが、風の噂で聞いた………管理世界に度々現れ、人々を  
助けているという、神出鬼没の「光の巨人」なのか？

巨人が、自分に振り向いてきた。

その巨躯が、フェイトの脳裏に、ある人物と見事に重なりあう。

姿と大きさが大幅に変わってしまったても、巨人から発する佇まい  
で、その正体が誰なのか、簡単に行きついてしまった。

あの人——勇夜…なの？

フェイトの心境を見透かしたように、ゆつくりと頷いて肯定する巨  
人。

「あの…勇夜…」

続けて巨人となった「勇夜」に尋ねようとするが、彼は怪獣たちに  
視線を移して、彼女に背を向ける。

「話しは後だ」

巨大な背中が、そう言っているような気がした。

フェイトと同じく、一連の出来事に虚をつかれていた怪獣たちは、  
直ぐに目の前の巨人たちに敵意を表し、威嚇の咆哮を上げる。

「デェア！」

「ハァ！」

光の巨人、ウルトラマンゼロ。  
鏡の騎士、ミラーナイト。

言葉を交わさなくとも、二人は共闘する意思を示し、怪獣たちに向き直りつつ、気迫を発しながら戦闘の構えをとった。

ユーノは突然ワームホールから飛び出してきた謎の巨大生物の介入に戸惑ったが、ミラーナイトとウルトラマンゼロが相手をしてくれることに安心した。

あの二人の実力は直に見ている。

幾多の修羅場を潜り抜けてきたことは間違いない、その背中から発する頼もしさで充分に分かる。

二人が片方の脅威の相手をしてくれる間に、自分たちは本命の脅威の対処に臨まなければ。

「なのは！今の内に確保を！」

「させるかよ！」

なのはに指示を出した矢先、突然空から、何者かの声と拳が迫った。咄嗟に結界を張って応戦するユーノ。

声と拳の主は女性だった。

いや……見かけは、自分より年上みたいだけど、むしろ少女と呼ぶべきだろう。

でも、あの狼に似た耳と尻尾はひよつとして、普通の人間ではなく。

「君は一体？」

「フェイトの邪魔はさせないよ!!」

少女はオレンジ色に光り輝くとその姿を、その髪色と同じ体色をした狼へと変貌した。

「間違いない……使い魔」

まさかあのフェイトって名前らしい魔導師の子に使い魔がいたなんて……いやむしろあの子ほどの実力なら、使い魔がいてもおかしくない、予想しておくべきだった。

なのははあの子と、光さんとウルトラマンゼロは、あの怪獣との相手たちで精一杯だ。

今は、自分が彼女の相手をするしかない。

まだ適合不良から完全に回復していないこの体で、どこまでできるか分からないけど、なんとかしなければ……時間を稼ぐことぐらいは、自分でもできるはずだ。

ユーノは己を鼓舞しながら、使い魔の少女と相対した。

そしてなのはとフェイトの二人の少女の方はと言えば。

片やなのはは、地面に足を置いて彼女を見上げ。

片やフェイトは、滞空した状態で彼女を見下ろしていた。

予想外の介入者に、横道を逸らしてしまっただが、兄とウルトラマンが何とかしてくれる。その間に、ジュエルシード……それと――

「レイジングハート……モードリリース」

『了解』

――あれを集めている女の子と、話をしなければならない。

なのははまだ、少女と戦うつもりは無い。

兄の言う通り、それは自分のわがままで、戦いになることは避けようがない現実なのかもしれないけど。

「この間は、自己紹介できなかったけど」

それでも……どうしても知りたかった。

あんな危険なものを集めてまで、あんな寂びそうな顔をしてまで、自分に刃を向けてまで……彼女が戦う理由。

「わたし、なのは、高町なのは」

『Scythe Form』

相手はこれからやり合うっていうのに何を言っているのだ？ と  
いった面持ちでデバイスの形態を変え、魔力の刃を形成した。

「前にも言ったよね、ジュエルシードと私たちには関わらないでって」

「それを言うなら、わたしの質問にも答えてくれてないよね？ まだ名前も聞いてない！」

なのはの、その一途さを前に、一度構えを解くフェイトだったが、すぐに魔力スフィアも形成し臨戦態勢をとった。

「今度は手加減はしない」

以前と同じく、言葉で答える代りの返答、意志表示だった。

なのはも、やり切れない気持ちを抑え、レイジングハートを再起動。彼女の意志とは裏腹に、第二ラウンドの幕が上がる。

こうして巨人と怪獣、獣（少年）と獣（使い魔）、魔導師と魔導師の共闘と激突が入り混じった戦闘が始まった。

一見するとそれは小動物のフェレットと肉食獣の狼の食うか食われるかの追跡戦だった。

だが都市のど真ん中で行われているそれは少々違う。

「なんでジュエルシードを集める!? あれは危険な物なんだ!」

「ぐちやぐちやうるさい!」

苦虫を噛み心境を抱えて、アルフはユーノの言葉を遮る。

分かってる……そんなことぐらい。

勇夜は……今は『ウルトラマンゼロ』って巨人になってる彼は、あれのことを『碌でもない形でしか叶えてくれない欠陥品』って言った。今相手をしているイタチみたいな奴は、そいつを発掘した張本人らしいし……その危険性は誰よりも知ってるはずだから、あいつの言い分も分かるんだ。

だけど、今はどうしてもあれが、ジュエルシードが——必要なんだ!

アルフは飛び上がり、鋭利な爪でユーノに襲いかかるが、ユーノはそれをバリアで防いだ。

二人の巨人は怪獣たちの注意を向けさせ、なのはたちと距離を稼いでいた。

「ゼロ…やはりこいつらは？」

「コツヴとパズスだ」

少し説明が長くなるが、ウルトラマンが存在する世界は複数存在し、その世界の一つに怪獣を自在に操る力を持ち、宇宙を恐怖で君臨していたレイブラッド星人という存在がいた。

やつが使役する次元を操る怪獣プルトンによつて、時空が歪められ、一時期ウルトラマンゼロの生まれ故郷が存在する世界に、あらゆる次元に棲息し、レイブラッドに操られた大量の怪獣たちが押し寄せてきた。

最終的にレイブラッドの野望は、各世界から集結したウルトラマンたちによつて阻止され、後にこれらの出来事は『ギャラクシークライシス』と呼ばれるようになった。

この事件により、ゼロの故郷には異世界の怪獣の詳細な生体データが記録されていたので、彼は眼前の怪獣たちに関する知識自体があったのだ。

コツヴとパズスは、根源的破滅将来体と呼ばれる、破滅をもたらす存在が地球を襲い、その地球自らが自らと自らの星に住む生命を守るための光を生みだし、その光を得て超人になった地球人を『ウルトラマン』と呼んだ世界の、とある惑星に住む野生動物だった。

本来は大人しい種族であった彼らは度々破滅招来体に無理やり地球に移動され、その意志とは反して尖兵にされ、暴れた。

彼らに操られていたわけでは無い。

操る必要なんて無い。

環境に適応するための本能と、自分だけのテリトリー——縄張りを作ろうとする本能と、無我夢中で生きようとする本能だけで暴れ狂い、街を破壊し出すため、それだけで充分に脅威だったのである。

「俺はパズスをやる、コツヴは頼む」

「了解」

ゼロはパズスに、ミラーはコツヴに立ち向かっていった。

巨体と巨体がぶつかり合い。

地響きと粉塵が舞う。

常識を超えた大きさの巨人と怪獣の組み合わせ。

見かけではパズスの方に分がありそうだが、パワーは互角、むしろゼロが押していた。

そのまま組み合った手を振り払ったゼロから繰り出す重い正拳突きと肘打ちと蹴りが、連続でパズスに突き刺さる。

何のエネルギーも付加されていない肉体からの攻撃でも、宇宙拳法を会得したゼロに掛ければ、絶大なもの。

最後に両手突きが炸裂、たまらず後退するパズスに追い打ちをかけるようにするゼロ。

だが、パズスの角から稲妻が走ると。

「何!？」

スパークを発した角から、高圧電流がゼロに向けて放たれる。

後退し、横転して回避するゼロだが、ここはビル街のど真ん中。

結界で周辺の配慮はある程度無視はできても、やはり魔天楼は移動に支障が出る。

その制約を承知しつつも躲すゼロだが、パズスの口から今度は火炎を発射。

両手を盾代わりしてなんとか防いだが、その隙を突き。本命の電撃がゼロを飲み込んだ。

いくらウルトラ戦士でも、電流をもろに受けるのはきつい。

一瞬体がマヒした感覚に襲われる。

その隙を狙い、今度は雷撃と火炎を同時に発射するパズス。

それを受けたゼロは吹っ飛ばされ、ビルに叩きつけられた。

追い打ちを掛けさせまいとゼロは態勢を立て直し、手を頭部に翳すと、ゼロスラッガーを投擲。

狙いは電撃を生み出すあの角、だがそれは何かに弾かれた。

念力で何度も何度もスラッガーを当てるが、その度に角に纏った電磁波に阻まれる。

『角に集めた電気で発生させた電磁バリアで、マスターの攻撃を防御





電磁バリアも刀身に纏わせた電磁波で中和され、最後の頼みであった残された角も無残に切断された。

変わってこちらはミラーナイトとコツヴ。

コツヴの手は指の代わりに一振りの鎌がある。

振るわれる鎌の手を躲したり、手で打ち払って防ぐミラーナイトだが、コツヴは両手でミラーの頭を挟み込んだ。

力任せに押さえつけるコツヴ。

首を絞めつけられる様な圧迫感を覚えるミラーナイト、そのまま押しつけられ、羽交い絞めされながら後退される。

そのままミラーナイトを投げ飛ばすコツヴ。

高層ビルに叩きつけられ、破片に埋もれるミラーナイト。

ミラーはスピード、即ち『柔』を主体とした戦闘が得意なので、こうした真つ向からのパワー勝負では後手に回りがちだ。

コツヴは、その攻撃が有効だと思ったのか、瓦礫から、粉まみれになったミラーナイトを鎌の手で羽交い絞め、その勢いのまま、彼を押し倒した。

しかし彼も負けてはいられない、それに対する対応策はある。

「ミラー！ エナジー！」

ミラーナイトは両腕からエネルギーを直接相手の体に送り込んだ。ダメージを受けた相手は腕の力を緩める。

チャンスは逃さない。鎌を両手で払いつつ、彼はお返しとばかり、相手の脳天に手刀を見舞い、さらに顎に向かってアッパーの要領で掌底打ちを炸裂。

怪物と言えど生き物であることは変わりない。

頭に衝撃をまともに受ければ脳震盪だつて起こす。

ひるんだコツヴにミラーの回転キックが命中。

さらに連続で、回転の勢いにより威力が増幅された蹴りを当てていく。

最後に横転の勢いを乗せて放ったストレートキックに、コツヴは倒

れ込んだ。

「ハァー！」

特徴的な腕をクロスしたかのような構えを取るミラーナイト。

直ぐにでも止めといきたいが、まだどんなカードを隠し持っているかは分からない。

いつでも攻められるような感覚を研ぎすましつつも、冷静に距離をとり出方を窺うミラー。

来る！

起き上がったコツヴは頭部から光弾を発射した。

ミラーはすかさずパントマイムの要領で、中空を手で横になぞると。

「ディフェンスミラー！」

ガラス状のバリアが形作られ、複数迫る光弾の群れを防御した。

ならばと考えたのか、コツヴは今度は鎌状の腕の重ねると、エネルギーが集まり、光線が放たれた。

間一髪ミラーは空へ飛び、回避するがコツヴは彼に向けて再び鎌からの光線を発射。

ミラーも両手を突き出し。

「ミラーナイト！」

いくつもの手裏剣の如き光の刃は、コツヴの光線と衝突、爆発が起きる。

ミラーナイトの姿は爆煙で見えなくなったが。

「ミラーキック！」

煙を切り払い、弾丸の如き速さでナイトのキックはコツヴの脳天に命中した。

その勢いのまま仰向けに倒れるコツヴ。

着地をしたミラーナイトに。

「ミラーナイト！」

ゼロが彼を呼びかけた。

目の先を移すと、ゼロはパズスの尻尾を掴んでいる。

その意図を理解したミラーナイトは、コツヴの背後にまわり。

同様に尻尾を鷲掴みにした。

ゼロとミラーは腕力を込めて相手を持ち上げ、振り回す。何度も何度も、プロレスの投げ技の要領で回し続け。

「行くぞー！」

ゼロとミラーは互いに向けて怪獣を投げ飛ばした。

投げられたコツヴとパズスは空中で激突。

続けて落下し、コンクリートの地面からくる衝撃が追い打ちをかけた。

本当なら、連れ戻してやりたいんだが……ゼロは心の中でそう呟いた。

コツヴとパズスは、本来は大人しい性格をした種族なのだ。

こうして暴れているのは無理やり、地球に連れてこられて操られているだけで彼らに悪意は無い。

だがこの怪獣たちがどこから連れてこられたのか分からず、こうして暴れまわる以上……倒すしか最善の手は無かった。

いや……「最善」なんて言い方は、傲慢か。

恨んでも良いさ、せめて……安らかに眠ってくれ。

「行きますよー！ゼロ！」

「ああー！」

ミラーは両腕をクロスし右手を上げ、左手を下げ時計回りに回して広げ、ゼロはリンクがある左手をカラータイマーに翳し。

エネルギーをチャージした二人は、コツヴとパズスに向けて。

「シエアー！」

ゼロは拳を突きだした左腕から竜巻状の光線、『サイクロンストリーム』を。

「シルバー……ークロス！」

ミラーナイトは×字で組んだ腕から、必殺の光の刃、シルバークロスを放った。

二人の必殺の光が、コツヴとパズスに直撃、細胞が急激に分解作用

を起こし、怪獣たちは粉々に爆発四散した。  
感傷に浸っている暇は無い、ジュエルシールドはどうなった？

そして、ビルとビルの合間を飛びまわる光跡が二つ。

なのはとフェイトだ。

現状では、なのはは追われる者、フェイトは追う者な状態のドック  
ファイト。

前方を飛行するのはに向けて、フェイトは雷の魔力誘導弾を数発  
発射。

なのはに光弾の群れが牙を向く。

だがなのはも、前の時のように直ぐにやられるつもりは無い。

小刻みに身の軌道を変えて全弾回避すると、こちらからも魔力ス  
フィアを4発発射。

今は応戦しなければ、自分の言葉さえ伝えられない。

話し合いを所望しながら、戦闘を行う、明らかに矛盾していた。

矛盾を抱えるは、なのはだけでは無い、彼女の桜色のスフィアを回  
避するフェイトもだ。

内心では、相手を傷つけるという行為には抵抗がある彼女。

そうでありながらいくら母の頼みとは言え、今は戦闘行為を行わな  
ければならない。

非殺傷設定が無ければ文字通りの殺し合いに発展しかねない事態  
なのに。

そうやって、いつも己の心を無理に押し込み、凍てつかせながら戦  
いを続けている少女。

フェイトが全弾回避した直後。

『キャノンモード 非殺傷スタン設定』

チャージを完了した砲撃形態のレイジングハートの砲口から。

「シューター！」

桜色の魔力光が放たれた。

回避は困難と判断したフェイトはシールドで一旦防御し、受け流し

つつ退避する。

「君なりの目的が…事情があるのなら…ぶつかり合うことになっちゃうのは…しようがないのかもしれないけど…でも…でも私…何も分らないまま…戦うのだけは嫌なの！」

反撃へと行動を移そうとした矢先、なのはの思いの丈に、動きが止まる。

分からないまま？

その言葉が微かながらも、痛みとして心に突き刺さってきた。

今は言葉なんて、交わしている場合でも、ましてや聞いている場合でもない。

勇夜との一件と一風変わった停戦関係は、そうそう起きる者ではない、ならばこれ以上、自分の素性も目的も知られるわけにはいかない。聞く耳を持っては駄目なのだと心に言い聞かせているのに…どうしてその一言で、こんなにも心が揺さぶられるの？

どうして…『知らない』という言葉一つで…原因に行き着いた。

そうだ…私も知らない…分からない。

母が、母さんが…なんであそこまで、ジュエルシードを欲しがっているのか…昔はあんなに優しく、いつも笑ってくれた母さんが、なんであんなに冷たい態度を取るのか…解らない。

「わたしも言うから…だから教えて、どうしてジュエルシードが必要なのか…」

敵対しているはずの少女の言葉が、フェイトの心に波紋を起す。

そう言えば、あの人…諸星勇夜に自分の目的を知られてしまった時。

あの時、どうしようって…このまま母さんの願いを叶えられなかったら…どうしようって思ったのに、どこかほっとしてる自分がいた。

結果的にとは言え、自分の抱えているものを勇夜が知った時、どこ

か安心していている自分がいた。

共有してくれる人がいることに、喜んでいる自分がいた。

言葉では何も変わらない、変えられないって今まで考えていたけど……でも……ひよつとしたら、ロストログアを集めなくても、戦わなくても……自分は。

「フェイト！答えなくていい！」

揺れるフェイトの心に響くは、狼形態のアルフの叫び。

「ジュエルシードを手に入れるんだろ!？」

一度揺らいだ彼女の意識が引きしめられる。

でもやっぱり……今の私にはこれしか……これしか方法が無いんだ。

あれを持ち帰る。たったそれだけで良いんだ。

たったそれだけで、あの頃の母さんが戻ってきてくれるんだ。

なら迷う必要はどこにもない、こんなところで止まってちやいけな  
いんだ。

同年代のなのはの言葉で、凍りつかせた少女の心を多少溶かす効果はあったものの、光の懸念の通り、それは淡い期待であった。

フェイトは、ジュエルシードにめがけて飛んだ。

なのはも続けて追いかける。

狙いは宙に浮く菱形の宝石——ジュエルシード。

どちらかより先に手にすること、スピードではフェイトに分がある  
が。

『Flash Move』

なのはもこのまま渡すまいと、魔法による加速で飛行速度を上昇させ、降下する。

結果的にだが、封印する時と同様に、互いのデバイスが、ほぼ同時にジュエルシードに触れた。

「今すぐそこから離れる（離れて下さい）！」  
ウルトラマンゼロとミラーナイトの警告が響く。

二人の警告の意味を測ることもできぬまま、宝石から突如溢れた光に、二人は吞まれた。

ゼロたちの警告も空しく…デバイスが触れた衝撃で菱形の宝石から膨大なエネルギーが放出。

光はドーム状に広がりながら、大爆発を起こし、衝撃と爆音を拡散させていく。

魔法と同様に殺傷力は無かったがその場にいた全員は、その光に呑みこまれた。

なんて…：威力だ。

たった一個で、デバイスが少し触れただけの衝撃で、こんだけの次元振を。

ジュエルシードは例えるなら、大量の魔力を無理やり詰めた代物だ。

そしてそれを覆う外殻は、風船並みに脆い。

さらに魔力を空気だと仮定して、そんなものに衝撃を与えて穴を開けたらどうなるか、それがこの有様だった。

光がようやく収まった。

スパークで一時的に機能不全になった視覚を取り戻した二人の巨人は、目を見開くと、衝撃で吹き飛ばされたなのは、アスファルトの地面に叩きつけられ、気を失っていた。

「なのはー」

ミラーナイトは変身を維持したまま、人間サイズになりつつ、なのはに駆け寄った。

愛する義妹を抱く兄、バリアジャケットの魔力フィールドと、あの状況下でも使い手であるのはを守ろうとしたレイジングハートのお陰で、外傷は無い。

気絶したのは、次元振の衝撃波による魔力ダメージが原因だった。

一番震源地に近い位置にいて、なのはを庇ったレイジングハートは、あちこちヒビだらけではあったが。

「ありがとう、レインジングハート……戻ってください」

『了解…モードリリース』

妹に代わって彼女のパートナーに礼を言いながら、ミラーナイトはほっとしてていた。

人間体だったら、安心して切った顔を浮かべていることだろう。

同じく、次元振を間近で受けたフェイトたちの方は言うところ。

「ごめん……戻ってバルディッシュ」

うまく意識を保ちつつ退避はできたが、バルディッシュのダメージも甚大であり、彼女は愛機を斧の状態から、待機形態に戻した。

とりあえずは全員無事か……とほっとした時だ。

ジュエルシードの様子がおかしい。

光を断続的に明滅させながら、揺れを発している。

あんなだけバカでかいエネルギーを出しておいて、まだ次元振を起こす気なのか!?

フェイトにも目を向けるゼロ。

視線を、異常をきたしているジュエルシードに見据え、今にも飛ばぼうとしていた。

デバイスが使えないのに、素手で封印処理をする魂胆かよ!?

あんなものを生身で触れたら、下手をすれば怪我どころではすまない、腕ごと吹っ飛ばされる危険性さえある。

「あの莫迦あー！ くそお!!」

そうはさせまいと、体を人間サイズへ縮小させながらゼロは、暴走寸前のロストロギアに突っ込んだ。

『巨人態のままでの封印処理は非常に危険ですマスター!』

「分かってる!」

冷静さと焦りの合間で忠告してくるリンク。

実はゼロの姿の時は、魔法はほとんど使えなくなる。

体内の太陽エネルギーと魔力は一定以上の量に達すると相殺する性質があるからだ。

本来の力を存分に行使できる引き換えに課せられたハンデ。

当然…封印魔法も使えない。



だが人間体——勇夜での飛行スピードがフェイトに劣る以上、彼が今フェイトを助けるべくとれる行動は一つしか……存在しなかった。

ジュエルシードに向けて地面すれすれを飛ぶフェイト。

バルディツシユが使えない今、自分だけで封印させるしかない。

どうしても、一個でも多く、持ち帰らないといけないんだ。

「フェイト!? ダメだ!」

主の意図を察したアルフは、引き留めようと呼びかけるが、夢中になっっているフェイトにはその想いは一欠けらも届かなかった。

たとえ聞こえていたとしても、進みを止めることは無かつただろう。

右手がジュエルシードに触れようとする寸前。

「デエア—」

何かが横から来て、先にロストログアを取った。

だ、誰が!?

何かが通り過ぎた方向に視線を移すと……巨人の姿のまま人間ほどの大きさになって、必死にジュエルシード素手で押さえつける「勇夜」がいた。

「ゼロ—」

「勇夜…」

「来るんじゃない—」

駆け寄ろうとしたフェイトと「騎士」を「勇夜」は制した。

鉄面の表情は変わらないが、かなりきついことが窺える。

自分と違って、リンク——彼のデバイスは健在なのに、どうして

……自分が今やろうとしたことを?

「ピコン…ピコン…ピコン…」

ゼロの胸の中央にある水色の発光体が、けたたましい音と鳴らして赤色に変わり、点滅し始めた。



ゼロは疲労困憊で、荒い息でまともに声を出せられない……そんな状態でも尚、フェイトを気にかけていた。

瞬きするのも忘れて、疲労困憊な「勇夜」を眺める、あの巨大な怪物を倒した彼でさえ、こんな状態にさせるジュエルシード。

もし、自分がやってたら……想像することさえ空恐ろしい。

自分が受けるはずだった顛末を代わりに受けて、自身を守ってくれたボロボロの戦士に——  
「……………」

——返す言葉が、思いつかない、浮かばない、見つからない。

明らかに「勇夜」の方が遥かに満身創痍でボロボロなのに……それでも、わたしの身を案じてる。

こんな時どうすればいいの？

ありがとう……っていうべきなの？

「うん……」

今の私には、頷いて……大丈夫だってことを伝えることしかできなかった。

「そりゃ……………」

「光の巨人」の姿をした「勇夜」は鉄面皮で表情が変えられない代わりに、安心した声色で、自分の無事を確認すると。

「よかつ……たあ……」

力尽き、その場に倒れ込んだ。

「勇夜？」

嘘？

今日の前に起きた光景が、信じられない。

嘘だよ？

目が大きく開いたまま、彼が倒れた事実を呑みこめない。

一拍置いて、これが紛れもない現実であることに気付いた彼女は、勇夜の下に駆け寄り、彼の体を必死に揺する。



## EP12 | 嵐が過ぎた後…

海鳴市に隣接する都市、遠見市。

フェイトたちが隠れ家として使っている高層マンションは、ここに建てられている。

今彼女たちが借りた部屋のベッドでは、借用主の代わりに、ウルトラマンゼロの人間態、諸星勇夜が占拠し、眠りにについている。倒れた時はゼロの姿だったが、運び込まれる途中、体の本能が働いたのか、勇夜の姿に戻った。

いつもは一纏めにして縛っている黒衣の長髪は下ろされ、さらに起きている時は鋭い刃を連想させる目つきと無愛想な容貌も、眠っているためか少年どころか少女にも見えてしまう独特のあどけなさを前に影を潜め、余り人と関わりを持たなかったフェイトたちから見ても、その彼の顔つきは美形中の美形に位置していた。

黒の長髪も、男性のものにしては細く柔らかかで、見ているだけで触り心地の良さを感じとれてしまう。

先程の戦闘で、フェイトの代わりに素手でジュエルシードの暴走を抑えて倒れ、その時できた痛々しく血が流れる勇夜の右手を、アルフが包帯を巻いて手当てをしていた。プレシアからの『おつかい』で、時々無茶をしては、傷が絶えない主人によって経験を積んでいたの、彼女はこの程度の介抱なら無意識に手を進められるまでの域に達している。

一方彼女の主であるフェイトは、目じりを赤く腫れ上げて、何度も鼻孔をすすらせて、顔には暗い表情を形作り、ベッドの向かいの壁際にて体育座りで腰かけていた。

今は大分落ち着いてはいるが、少し前までの彼女は、泣き喚き、その容貌を溢れる涙で濡らしていた。

原因は勇夜がフェイトの代わりにジュエルシードの暴走を止め、消耗して倒れたこと。

フェイトはその時、今までは抑圧できていたはずの感情の波をせき止めることができず、久方ぶりに大粒の涙を流して慟哭し、意識の無

い勇夜を隠れ家に連れ帰っても、横になった彼に顔をぐしゃぐしゃにしながら『ごめんね…ごねんね…』と、さつきまで泣きつつ連呼していた。

勇夜を介抱しつつもアルフは、今夜見せたフェイトの変化に驚きを隠せずにいる。

彼女の使い魔となって転生してから、かれこれ3年の月日だが、ここまで感情を発露したところを見たのは、アルフの知る限りではかなり久しい…今日を除いて彼女の泣き顔を見たのは、自分がまだ外見年齢がフェイトより下であった頃に、彼女が入浴中、せっけんの泡で目が開けられない中、おけを取ろうとしてうっかり転び、浴槽に頭から落ちて溺れた…あの時ぐらい。

元々気を遣い過ぎる性格ではあったけど、ここ最近は顕著で、周りに配慮する余り、自分を抑える日々をおくるフェイトの現状を、アルフは歯がゆく感じていた。

まだ10歳なんだし、もつと素直に気持ちを表しても、文句は出ないはずだ。

だから、さつきの出来事に当初は驚きが感情を埋めていたが、今は個人的には良い傾向だと思うし、嬉しいとはつきり断言できる。

「いいのかい？…これだけで…」

『心配はありません』

「それなら良かった…でも…何者なんだい？…あんたたちって…」

例えば、勇夜と会ってからのフェイトは、ちよつとずつだけど明るさが段々と戻って来ている気がした。

今までは、自分を心配かけまいと、安心させようと、特に自分たちには育ての親と言ってもいい『彼女』がいなくなつてからは悪く言えば無理に気張って作られた笑みしか見なくなつていたから…だからそのきつかけを作ってくれて、『約束』通り主を助けてくれた勇夜には ホント感謝している。

が、前から様々な意味で…彼のことが気にはなっていた。

時空漂流者で、11年前より以前の経歴が無いこと。

一見普通の人間なのに、腕っ節なら上のはずの使い魔な自分を圧倒し、《魔導殺し》なんて物騒な異名をつけられてしまうほどの脅威的な身体能力と戦闘技術……気にならない方が無理な話だ。

極めつけは、風の噂で聞いた……管理世界では神出鬼没で結構有名な50メートルの巨体を誇るかの光の巨人へと、彼が姿を変えた事実。ただものではないとは薄々感じ取っていたけど……あそこまで常識の範疇を超えるなんて芸当を見せられるとは思わなかった。

言っておくが、畏怖とか嫌悪とか言った差別的感情はアルフには無い。自分たち使い魔は、一昔前の時代そんな目で見られていた存在、そんな嫌な気持ちも他人に抱くなんてまっぴら御免だ。

気になる気持ちの源は、あくまで純粋な好奇心。

自分をウルトラマンゼロと名乗った彼が何者で、人間と巨人、どちらが彼の本来の姿なのか？

アルフたちには質問したいことが、山ほどある。

もつとも、フェイトはそれ以上に、彼女の周りに気を遣いすぎる性格によつて、必要以上に勇夜を傷つけた罪悪感に苛まれてはいる身だ。

『そうですね……これから話す内容を、秘匿できるとお約束できるなら、マスターの出自含めて、全てお話致します』

「ああ、約束するよ」

『フェイトも、よろしいですね？』

「っ……………」

問いを投げかけられたフェイトは、うつむいた顔を上げつつ、晴れない表情のまま黙って頷いて了承するのであった。

「マスターの正体は、彼の生まれた世界では『ウルトラマン』と呼称される巨人族の戦士、ウルトラマン——ゼロです」

そうしてリンクは、特定の人物たち以外には徹底して隠し通してきた真実を、二人に明かし始めるのであった。

自分は今、闇の中にいた。

今の自分は「ウルトラマン」の姿をしている。

あれだけエネルギーを使ったのだ……こうしてウルトラマンの姿を維持できるの自体あり得ない。

次元振を防ぐべく、ジュエルシードを掴んで負傷した右手も、無傷だ。

十中八九、これは夢の中。

ゼロ：ゼロ：ゼロ。

反響がかつた声で、自分を誰かが呼ぶ。

誰だ？ 誰の声だ？ いや……誰なのかは直ぐ判別はついた。

目の前に光が照らされる。

光が収まると、そこには……ある意味で、懐かしい相手がいた。

「久しぶりだな……」

「ベ……ベリアル！」

そう、ウルトラマンでありながらダークサイドに堕ち最強最悪の悪魔になってしまった以前の、「ウルトラマンベリアル」。

カイザーベリアルとの戦いで、カラータイマーの光が消え、力尽きてしまった時、ともに戦った同士たちの『希望』と、あらゆる世界に、伝説を残している「銀色の巨人」の力で結集した——バラージの盾、ウルティメイトイージス——よって復活するまでの間、自分の命を繋ぎとめてくれた。

恩人でありながら、倒すことでしか救えなかった……ウルトラマン。

「……………」

何と言ったら良いのか、言葉に出ない。

かつて俺は、ベリアルと同じように恒星の代わりに故郷を照らす人工太陽、プラスマスパークタワーのエネルギーに手を出そうとした。彼とはある意味似た者同士。

強くなりたい……誰よりも強い戦士になりたい、それに執着するあまり、自分を見失ってしまった過ちを抱える者同士。

俺の場合は……父や師匠やみんなのお陰で、一度は歪んでしまっ



た心を変えることができた。

だがベリアルは……ずっと履き違えたまま……闇の泥沼へと落ちていくばかりだった。

「もう10年以上たつのに……まだ気にしてるのか？」

「っ……当たり前だろ！」

ずっとこの人は暗闇の中で、悪事を重ねる自分を見ることしかできなかった。

奪って。

殺して。

破壊して。

際限無く欲と憎悪を撒き散らして、罪を重ねていく様を見ることしかできなかった。

そんな、自分の未来の可能性の一つだったこの人を……俺は――

「俺はあんたを殺すことしかできなかった……何度助けられたらって思ったよ」

「懺悔をしたい気持ちは分かるが、聞いてくれないか」

「え？」

「フェイト・テストロッサのことだ……」

思わぬ名前が、ベリアルの口から出てきた。

「どうして……フェイトことを……」

「詳しくは言えないが……彼女の母親はかつての俺と同じ状態にある、目的を果たす為に手段を選ばず……それをただ実行するための機械」

「どういう意味だ？」

確かに、あの親子には何か深刻な問題がある。

でも機械って……不吉さを嫌でも感じられる表現だ。

「彼女と、その母の罪は一生汚名として残るし……お前も決してその母を許しはしないかもしれない……でも、それでも……あの『親子』を助けてやってくれ……」

「ベリアル……」

「お前なら……ウルトラマンゼロならできるや」

「待ってくれ！」

「頼むよ……」

そう言うとき彼は、闇の奥へと消えていく。

必死に俺は手を伸ばして、こちらに引つ張ろうとした。

あの闇の奥にベリアルを行かせては、いけないような気がしたから。

彼をあの闇に溶け込ませたら、またあの「黒くおぞましい姿」な彼になってしまうような不安が過ぎったから。

けれど、その手は……ついに彼に届くことは無いまま、視界の輪郭がぼやけていった。

先に目が入ったのは天井と、そこに向かって伸ばしていた右手。

部屋を見渡してみる。

さっきまで自分が眠っていたこの部屋は、フェイトたちが今借りてるマンションだった。

『おはようございますマスター』

「あ……ああ……」

『無茶もほどほどにして下さい……地球人の血を引いていると言っても、地球では長時間ウルトラマンの姿を維持できないことに変わりないのですから……』

俺はジュエルシードを握った右手を見た。

リンクによればアルフが巻いてくれたらしい。

痛みはもうほとんど無い。

ウルトラマンとしての生命力と、リンクが掛けた治癒魔法でほぼ治りしかかっていた。

完全に完治するには、もう半日は掛かりそうだけど。

『うなされていましたが、何の夢を？』

「ベリアルに、会ってた」

『そう……ですか』

リンクはかける言葉が見つからないのか、“そうですか”と、一言しか言わなかった。

どうあがいてもベリアルは、その脅威を直に触れた大方の人たちにとつては“悪魔”と同義語。

その人たちが彼を一生許すことは無いだろう。

だけど……その悪魔になる前の彼を知ってしまった俺としては、複雑な心境になるわけで、相棒がその気持ちを悟ってくれただけでもありがたかった。

しみつたれた自分に活を入れようと両手で両の頬をビンタする。

いつまでも引きずつてられない。

こう落ち込んでいては、それこそベリアルが安心して成仏できない。

ビンタの次は心機一転するために、深呼吸もした。

『わたしからも謝ることがあります』

なんだ？ 改まった態度で……ああ、そういうことか、大体分かった。

「二人に話したんだよな、俺たちのこと」

『はい……』

「昨日変身しちまったんだ、手間が省けたよ、お前の口から話してくれただが分かりやすいだろうしな」

『いえ……』

「あと、どれくらい眠ってた？」

『12時間42分38秒です』

なんだ……まだ半日しか経ってないのか。意外だ。もつと長いこと眠っていた気がする。

勇夜は周りを見渡してみた。この部屋の借り主たちは出かけてるようである。

ふと、テーブルの上に置かれた物が入る。

机上には、主食のトースト数枚、おかずが目玉焼きとサラダがあり、横には置手紙が添えられていた。

折り畳まれた手紙を手に取り、拝読する勇夜。

『こんなものしかありませんが、食べて下さい、昨日はありがとうございました。』

文面を読むと、彼の頬が自然と笑みが形作られていた。たく……そこまで気負わなくて良いと言うのに。

ミットチルダ語で書かれた文面は、お世辞にも綺麗とは言えない。正確に言うとは、多分、綺麗には……書けなかったんだ。なぜなのかは敢えて言わないでおこう。

突然、ジープンのポケットから着信音が鳴った。

音を響かすオープン式携帯電話を取り出す。

画面を見ると、『TAKAMACHI LICHT』と表示されている。

「もしもし……」

『ゼロ……大丈夫なのですか？』

清水のせせらぎを思わせる独特の綺麗な声。

電話越しにでも、心配した声音になっているのが理解できた。

相手は高町光Ⅱミラーナイト。

この間の再会がてらの日に、携帯電話の番号交換をしたのだ。

念話を使えば良いじゃないかって？

確かに直ぐ連絡はつくが、よほどの急用でもないのに相手の状況、用事に関係なしに、いきなりずけと頭ん中に向けて話せるわけない。

その点電話というか通信は、前もって連絡が来たぞと教えてくれるのが良い。

「もう心配無いぜ」

「良かった……カラータイマーが鳴った時はどうなるかと思いましたがよ」

ウルトラマンは、自らが得られる太陽エネルギーの強弱によって、巨人の姿を維持できる時間がまばらになる。

カラータイマーはそんな己のコンディションを知るための装置だ。

光の国以外の惑星や星系に出る者は、必ず着けることが義務付けられている。

もしこの輝きが消えてしまえば、最悪死が待つ。

ウルトラマンは超人ではあるが、決して不死身では無いのだ。

「今日学校あるだろ、続きは放課後、海鳴臨海公園でいいか？」

「そうですね、分かりました、ではまた後ほど」

「ああ」

さてと……光と会うのは夕方、それまでは暇だ。

ずっと部屋にいるのも何だし、とにかく外に出ることにした。

フェイトを探してみるか。

多分……今のあいつは、落ち込みながらジュエルシードを探し回っているだろうからな。

時刻が午後一時を過ぎた頃、フェイト・テスタロッサは海鳴の中心市街地をねり歩いていた。

バルディツシュは自己修復中で当分使えないが、発動前のジュエルシードなら見つけようと思えば見つけられる。

現在の彼女はお世辞にも明るい性格とは言えないが、今は普段以上にその表情は暗い。

原因は昨夜の……自分の代わりに素手でジュエルシードを封じようとして、怪我を負った光の巨人、ウルトラマンゼロ——諸星勇夜。

本名『ゼロユウヤ・ヴェアリスト』

彼に傷を負わせた罪悪感。

勇夜の勘は、ずばりと言えば当たっていた。

彼女は身の上の境遇から、ネガティブ思考に陥りやすい。

それでいて周囲には大丈夫だって強がってしまう。

そうして溜まった淀みを流す術を知らない彼女の気持ちは、沈んでいくばかりであった。

彼が眠っている間、リンクが色々話してくれた。

ゼロたちウルトラマンのこと。

故郷のM78星雲光の国のこと。

如何にして光の国の人たちが『ウルトラマン』の力を手に入れたこと。

彼が尊敬している父のウルトラセブンのこと。

あの緑と銀色の巨人、ミラーナイトらゼロの仲間たちのこと。

かつてゼロが故郷で犯した罪。

次元振に巻き込まれ、その仲間と離れ離れになり。

体が幼児退行してミットチルダに迷い込んだこと。

リンクはその次元振で自我に目覚めて、デバイスに相当する機能を得たアイテムで、厳密にはデバイスとは異なることその他諸々。

次元漂流者とは聞いていたが、まさか正体がおよそ50メートルもある巨人とは、思ってもみなかった。

それも驚いたけど……何より。

“だ…大丈夫…か？”

自分の方がダメージは大きいのに、あの人は当たり前のように自分の方案じてくれた。

一応…：覚悟はしているつもりだった。

相手を傷つけてまでも、ジュエルシードを手に入れるって。

でもあの人が倒れて力尽きた時…：…自分の集めている物がどんなに恐ろしいものか痛感させられた。

自分よりもずっと強くて、頼もしいと思ってた人でさえ…：あれだけ傷つけ、消耗させるロストロギア。

リンクの話ではウルトラマンは魔法とは別系統の能力を持ち、巨人の姿ではそれを100%発揮できるが、反面魔力は体内で一定以上の量になると互いを相殺してしまうので魔法はほとんど使用できなくなるらしい。

でも…：人間の姿でいたなら、リンクと一緒に封印処理することはできた筈なんだ。

ほんの少しの衝撃で、次元振を起こすものと知らなかったばかりにバルディッシュも傷ついて、あたしがゼロよりもジュエルシードに近い距離にいて、素手で封印しようと考えたばかりに…：わたしよ

りも先にジュエルシードを取るためにゼロのまま封印しようとして、勇夜にあんな無茶をさせてしまった。

私のせいだ……こうなったのは、あの人を傷つけたのは……全て私が……私が全部……自分がいけない子だから……ダメな子だから、勇夜にあんな酷い目に遭わせたんだ。

思い詰め過ぎて、フェイトの目は目として機能しておらず、それがアクシデントを呼ぶ。

「キヤッ！」

いきなり肩に痛みが走り、甲高い悲鳴がフェイトの口から洩れた。俯いて余所見をしたばかりに、通行人とぶつかってしまったのである。

「どこ見て歩いてんだ？」

しかも相手が悪すぎた。

いわゆる、不良と呼ばれるガラの悪い学生たちである。

「目がないのか!? お嬢さんよ」

しかも彼女と接触したのは一人なのに、5人の不良たちはよってたかって自分より幼い少女を問い詰める。

「あ……あの……」

髪を染め、制服をラフに着飾った悪趣味な不良たちの威圧的な剣幕を前に、フェイトは口からまともに言葉が出てこない。

「なんだ？ 口も聞けないのか？」

魔導師である彼女なら、魔法で簡単に護身できただろう、だが、相棒のバルディッシュはただいま自己修復中。

その上ここは管理外世界なので、その魔法も迂闊に使えない。

アルフを呼ぼうにも今から間に合うかどうか……八方塞がりの手詰まりだ。

さらに、勇夜によって耐性が付いてきているが、未知なる生命体と同義な異性からの剣幕に、完全冷静さを失い涙目になっていた。そんな苦境極まる悪状況の最中だ。

「おい！探したぞ」

向うから声が聞こえてきた。

一声奏でただけで、誰か分かってしまう特徴的な艶のある声のした方に目を向けると、そこには……………昨日の怪我をして倒れたのが嘘のように佇む、諸星勇夜。

「悪い…その子うちんとこでホームステイしてる外国の子でさ…まだ日本語に慣れてねえんだよ」

フェイトと違い、日本人そのものな容姿をフルに生かし、上手いことそれらしい言い訳をしつつ、こちらに歩んできた。

「ほら、行くぞ」

「あつ…………」

無論、目的はフェイトを早く不良たちから引き離すためである。

勇夜はフェイトの手を掴んで、少々強引だがそのままこの場から立ち去ろうとするが……………相手はそう易々と許しはしない。

「待てよ…そいつの保護者を気取ってんなら、責任取れ!!」

無謀と言うか、無鉄砲と言うか、今度はイライラを発散する標的を勇夜に変え、彼の片方の腕を無理やり掴もうとして、逆に一瞬で振り払われて掴みなおされた。

「い、いてててえええ!!」

かなり強く握りつつ捻っているらしく、掴まれた不良の一人が悲鳴を上げる。

「てめええ!!」

不良仲間が突つかかろうとしたが、次の瞬間、全員が突然立ち止まる。

その顔は恐怖で歪んでいた。

特に腕を掴まれた一人は、猛獣に迫られた様子だ。

さつきまでの威勢は、もう完全に失われている。

彼らを猛獣から小動物へと無力化された原因は——

「怪我したくなかったらさつきと失せろ…………」

——勇夜の瞳から迸る眼光だった。

とてつもない殺気を放つ眼力と、重くドスのきいた低い声だった。



目と声、どちらも刀剣を連想させる鋭さと冷たさを秘めていた。

不良たちと違って、視線を向けられていないフェイトでさえ伝わる闘気。

彼は幾多の死線を潜り抜けてきたウルトラ戦士。

それこそ目の前の街のチンピラなんて虫けら同然。手を掴んで捻る以外に手を出していないのは、せめてもの配慮であり、彼がウルトラマンであるがゆえに己に課す戒めでもあった。

底冷えする環境を前に、不良たちはたまらず全員情けない声を上げながら、逃げて行った。

「ところでよ、いつまでしがみついてんだ？」

「ふえっ？」

最初フェイトは、それがどういう意味合いで彼が口にしたのか、全く理解できなかった。

ドクンドクン。

わたし、さつきまで……ずっと勇夜に直にくっついて、抱きついて。

ドクンドクンドクンドクン

抱きついて……抱き——ついて!?

ドクンドクンドクンドクン

「あ……あわ……わ」

一拍置いて気持ちが悪落ちてきてきたことでようやくフェイトは無意識の内に、今の今までずっと勇夜にしがみついていたことに気がつく。

勇夜の凄味ある眼力も怖かったが、不良たちの剣幕も怖かったのか、体は勝手に彼の体に密着していた。

さて、無自覚からとった行為に、やっと自覚するまでに至ったフェイト本人は、羞恥の感情が一気に沸騰点を超え。

「ひゃあ!!」

心臓の鼓動が急加速し、同時に一瞬で顔の体温が頬を真っ赤にさせるまでに急速沸騰したフェイトは、変な声をあげながら勇夜の腰から慌てて離れた。

「ごーごーごーごーごめんなさいー!」

間髪いれずにフェイトは、条件反射的に頭を下げ、彼に謝っていた。

それこそ彼女が持つ高速移動魔法——《ソニックムーブ》使用時のフェイトの飛行スピードに匹敵するまでに、素早い動作から繰り出されていた。

異性にほとんど免疫がない、彼女ならではのリアクションである。

「なんか…まるでこっちが脅したみたいな口振りじゃねえか」

余りの慌て様に、勇夜はジト目で彼女を見つめた。

「っ……………ごめん」

そうだ。勇夜はできるだけ穏便に済ませつつ、自分を助けようとしたんだ。

あの「目」は脅しと言えば脅しだけど、せめて暴力沙汰にならないようにとの苦肉の策だっただけで、せっかく助けてくれたのに私、またなんてこと……と自らを恥じる。

「まあいいけどさ……自分の目つきがめつ々ちや悪いってことぐらい自覚はできてるからな」

確かに彼は目つきが鋭いと言われれば、平時から鋭い。

人間態の諸星勇夜でも、巨人態のウルトラマンゼロのどちらでもな上にぶつきらばうな口調と相まって、第一印象は近寄り難い人と思われることが多い。

「そ、そんなこと……ない……と思うよ」

「ふっ、よく言うぜ、さつきまでワンコみたいにぶるぶる震えてたじゃんか」

「ふえ、そう…だけど」

何とか弁解するつもりだったのに、今度は皮肉っぽい笑みと揶揄とのセットでからかわれてしまった。

またしても、彼から「一本」取られてしまったフェイトである。言い返したくとも、怖かったのは本当なので、どうしようない……なのにそれが余計に内心悔しい。

「勇夜……いじわる……」

実は負けず嫌いな一面もあって、彼の皮肉返しにすっかり打ちのめされたフェイトは悔しさでまた涙目となり、顔を俯かせ、鼻をすすらせながらぼそつと呟いて、拗ねた気持ちをアピールした。

なんとまあ、破壊力抜群で愛らしさ溢れる「いじわる……」である。

「悪かった、ほら、これで涙ふけ」

彼は懐からハンカチを出し、フェイトの目じりを拭いてあげた。

心身ともに成長している元不良（ヤン）のウルトラマンと、牙を向くだけが能の現役不良の学生たち。

口調が粗暴なところは同じであるのに、貫禄と甲斐性は、天と地、或いは雲泥の差なのであった。

EP13 — 無自覚な逢引き

街中で不良に絡まれたところを勇夜に助けられたフェイトは今現在、彼にはぐれぬ様に手を繋がれて、一緒に市街地の喧騒の中を歩いている。

「あの……」

「何だ？」

「(どっちの名前で呼んだら……いいのかなと思って)」

「(どっちも俺の本名だが、この姿の時はユウヤ、ウルトラマンの時は『ゼロ』って呼んでくれ、ウルトラマンであることは隠してる身だからな、リンクからも聞いただろ?)」

「(うん)」

ちなみに、どうして彼が自分の場所を把握できたのは、半分は偶然だが、わたしが探査魔法を使っているとふんで、魔力を辿りながら散策していたとのこと、それと、なんでもこの日本では金髪の人はいく、わたしは子どもなこともあって街中ではかなり目立つ方らしい。なら一人より、一緒に行動した方が目立たずに済むという勇夜の進言で、こうして並んで歩を進めた。

一緒……考えてみれば、勇夜と二人つきりなのはこれが初めてだった。

勇夜に会うまで私は、男の人と会話したことが無かった。

手を繋ぐなんて尚更、ましてや、さっきみたいに抱きつくなんて……あの時の自身を思い出し、一度意識し始めるとそれが起爆剤になり、顔が火照って仕方が無い。

それに……正直今は、勇夜と会いたくはなかった。

と言うより、合わせる顔が無かった。

今握られている右手に巻かれる包帯の下にある傷は、私が受けるはずだった傷を代替わりにしてできたもの。

非があるのも、咎を受けるのも自分の方なのに……私はなんと、悪い子だ。

「フェイト」

突然勇夜は歩を止めて、私の名前を呼んだ。

ペコン！

「いたっ！」

いきなり、おでこに何か当たって痛みを訴えてきた。

勇夜が私の額に、デコピンを当ててきたのである。

加減されてはいたけど、それでも痛い物は痛くて、おでこを抑える。

「また『私のせい』だとか考えてただろ？」

「な…なんで分かったの？」

涙目になりながら、勇夜に質問した。

まだ額はひりひりするが、痛みよりも、自身の思考が見抜かれていたことの方が驚きだった。

まさか、彼には読心術でもあるの？　いくらウルトラマンでも、そこまで万能なんてと勘繰ったが、実際はと言うと。

「顔でモロバレだ、アルフだって言わないだけでフェイトが無理していることに気づいてるさ、精神リンクなんか頼んなくてもな」

実際は彼の超常的な力を使わずとも、自身の顔に書いてあったからであった。

自分では完璧に隠してるつもりだったのに、また一本取られちゃった。

この腫れが引くと同時に、勇夜は私の手を引きつつ再び歩き出す。デコピンで自己嫌悪が和らいだお陰か…今やっと気づいた。

勇夜の手って、こんなに暖かいのだと。鍛えていることは明白な武骨な手だし、太陽の光がエネルギー源な種族ってこともあるのかもしれないけど、彼の隠れた『温かさ』が、表れている気がした。

正直に言う…初めて会った時、彼への第一印象はとても怖かった。

自分にとって異性——男の人は未知の生命体であったこともあるけど。

さつきみみたいな怖い目をして、挙句魔導師としては負けないと自信があったわたしを刀一振り下して、介抱してもらったと思ったら口

ストロギアを集める目的を知られて……目的を阻む障害と言うなら、あの『白い魔導師な女の子』よりもずっと手ごわい相手であった。

でも……今は一緒にいるのも、手を繋ぐのも怖くない。

むしろ、安心する。わたしが生まれた頃には、母さんは父さんと別れたらしくて、だからわたしには、父親というものが分からなかった。

お父さんって……こんな感じなのかな？

たぶん……そうなんだ。

年齢ではむしろ『お兄ちゃん』なんだろうけど。

あれ？ でもウルトラマンって……かなり長生き……なんだよね？

何万年も生きる種族だって、リンクから聞いた時は本当驚いた。

兄でも、ちよつと変な気がする。

それでも、お兄ちゃんと呼んだ方がしっくり来た。

お兄ちゃん、心の内でその言葉を口にする度、安心感が増していく気がした。

できればこの気持ち、もっと味わっていたい。

「やつと笑ってくれたな」

「ふえ？」

耳に伝う勇夜の声と籠められた意味に、虚を突かれた。

私……笑ってたの？ そんな自覚、無かったけど。

「笑ってた方がずつと可愛いぜ、フエイト」

「……………」

『カワイイ』

その一言を彼から言われた途端、やつと定温に落ち着いていた体がまた熱を生み出してくる。

勇夜に見られたくなくて、私はそっぽを向いた。

感じる熱さから、さつきよりも顔が真っ赤になっているかもしれない……沸き上がるこそばゆさをよそに、彼の『カワイイ』って声が、何度も連続で脳内に再生されていた。

分かっている。勇夜のさつきの言葉は、お世辞でもからかいでも皮肉でも口説きでも無くて、自分を見て、さらつと浮かんだ印象を口にしただけなんだ。

でも、当分赤くなった頬は収まりそうに無かった。

そっぽを向くフェイトを見て、安心した。

実のところ、笑顔を見せてくれた彼女へバカ正直に“カワイイ”って口にしてしまったのが恥ずかしい。

体に出さぬまいと自制はしているつもりだけど、さつきより顔が熱い……鏡見ずとも、赤くなっているのが手に取るように分かった。

フェイトに見られなかっただけでも幸い。

そりゃ、微笑むフェイトはとても可愛かった

この子の人の良さってものが滲み出た……眩しい笑顔だった。

会ってからずっと、この瞬間まで、自分の目が見るフェイトは、平静そうで、でも“寂しさと悲しみ”に溢れた目をした彼女しか拝めなかったから、初めて目に映ったのが、嬉しかったのかもしれない。

けど……だからって「笑ってた方がかわいい」とか、何口説いているのだろう、全くはしたない。

なのに、さつきから頭に記録されたフェイトの微笑が、何度も再生される。

胸の奥も、急な運動してるわけでもないのに、なんか鼓動の回数が多くなってきた。

照れ臭くなることは、何度もあった……でも、今の感覚は、経験したことがない。

一体……どうしちまつたんだ？

体が引き起こす原因不明の現象に戸惑いつたところへ、ぐうぐうと鈍い音が、それはそれは……よく空気を響かせて耳に入ってくる。

音の出所は隣、そしてフェイトの顔は茹でダコみみたいに真っ赤で、口があわあわと半開き、どう見ても音の正体はフェイトの腹の虫の鳴き声だ。

女の子には恥ずかし過ぎる失態に呆れる……どうもフェイトは一度何かの作業を始めると、そっちにばかりのめり込む悪癖があるらしい。

「その様子じゃ、また飲まず食わずで廻ってただろ？」

「ぐ……ぐめん」

彼女の腹の悲鳴が鎮静剤となったのか、体の異変は収まっていた。さて、頭も冴えたところでフェイトの腹の虫を納まらせるような丁度いい店がどこかにないかと、飲食店を目当てに歩きながら見回している、とある喫茶店が目に入った。

『喫茶翠屋』

見覚えがある店名だなと思っていたら、たまたま見たテレビのローカル番組で紹介されていた喫茶店だった。

なんでも、女学生や主婦に人気の店らしい。

甘い物が嫌いな女の子なんて、そうそういないだろうし、ここでお昼にするとしますか。

勇夜に誘われるがまま、『翠屋』と書かれているらしい看板が掲げられたお店に私は入った。

空いていた窓際の席に勇夜と向かい合わせになる形で座る。

メニューを見たけど、写真はともかく、文字となると厳しい。

バルデイツシュには言語翻訳機能が着いているので、会話は問題ないけど、文字となるとそうともいかなかった。

なので日本語もミッド語も堪能な勇夜にフォローしてもらいつつ、わたしはイチゴパフェを選んだ。

ちなみに、勇夜が頼んだのはブラックコーヒーと、『抹茶羊羹』という食べ物だった。

羊羹というのは、小豆つて豆と寒天で作る、この日本って国の固有のお菓子であり、抹茶もまた日本製のお茶らしい。

「紅茶とどう違うの？」

「原料は同じ茶葉だぜ、加工の仕方が違うだけだな」  
「そうなんだ」

異世界の国の知識を勇夜から聞いている最中、パフェより先に立方体状の形をした羊羹の実物が来た。



初めて見る感じではねっとりして、てかてかしているけど、どんな味なのかさっぱり分からない。

美味しそうに口に運ぶ勇夜を見て、分けてほしいと頼もうかなと思っただけ、声にするまで勇気が出てこなかった。

もう少しすると、注文したイチゴパフェがテーブルに添えられた。

口にしてみる。

美味しい、特に女性に人気があるって評判も納得させられる美味だ。

「アルフも誘えばよかった」

「あいつの分も買ってやるよ、俺の驕りで」

「ふえ？ い、いいよ……流石にそこまで甘えられないから」

「遠慮すんなよ、そもそも今いくら持つてんだ？ 確か金銭管理の担当はアルフな筈だろ」

「あ……」

まだ小さい自分では色々と不都合なので、見た目なら大人の女性に近いアルフが、金銭を含めたやり繰りを行っていた。

なので、私の懐には硬貨数枚くらいしか備えていない。

勇夜に世話を掛けてばかりな現況を気にした結果、見事に地雷を踏んだ私は、自身の醜態を前に縮こまってしまふ。

このままでは、気恥ずかさで押しつぶされそう。

何か、他の話題に変えよう。

えーと、そう。

「アルフから聞いたんだけど、勇夜のデバイスって刀って言う日本の剣をモデルにしてるんだよね？」

「ああ、師匠のレオから刀を使った剣術も指南されたからな、他にも形態はあんだけど」

無理やりな軌道修正ではあったが、勇夜は急な話しの鞍替えを特に気にせず受け答えた。

話題は、デバイスから勇夜の師へと変化し、彼によればその師であるウルトラマンレオって人は格闘などの接近戦では右に出る者はいないらしい。

その修行もかなりスパルタな厳しいものだったらしく、挫けそうになつた時にはむしろ。

『その顔はなんだ!? その眼は何だ!?』

逆に厳しく叱咤されたらしくて…勇夜のとんでもない強さの源を垣間見たような気がした。

説明を挟むけど、私たちは今ミットチルダ語で会話している。

発音と文法は、この星の国際語になっている。『英語』と同じらしくて、私はその言葉が母国語な『外国人』に近い容姿なこともあり、周りから怪しまれはしなかった。

一応英語に理解ある日本人がいるかもしれないので、発する単語を周囲に認識されにくい効果のある結界も貼つてある。

「それと…前々から気になってたんだけど…どうして、囑託魔導師のままなの？」

どうしても気になっていたのだ。

管理局を『いけ好かない』…理由。

口調から見て、根っから毛嫌いしているわけじゃなさそう。

認めてはいるけど、何かの一点では相容れないような、そんな感じ。

「……………」

質問を受けた勇夜の顔付きが変わる。

具体的には、少し棘があるけど気さくな雰囲気か鳴りを潜めて、妙な感じへと変わった。

「怖いからだよ」

ギリギリ聞きとれるささやかな声で、勇夜はそう答えた。

「何……………」

「力」そのものと、そいつを持つてる自分がな」

私からは意外な答えだった。

あれ程の戦闘能力と、『怪獣』もロストログアにも勇敢に立ち向かうこの人には、『怖い』って気持ちは無縁だと思つていたから。

「……………フェイトは、魔法のことをどう思つてる？」

「質量兵器よりは安全で…クリーンな力つて…本にはそう書いて

あつたけど」

フエイトは文献から受け売りで応じた。

彼女が口にした『質量兵器』とは、管理世界における魔法を伴わない火器類の総称を指している。

「そう言えなくもねえけどな、俺に言わせりゃ魔法ってのは、おもちゃの弾と本物の弾を本人の意思でいつでも切り替えられる銃みたいなもんだ、局の謳ってる通り「スイッチ一つで大勢を殺せる」のが「質量兵器」なら、使い方によつて使い手たる人間を「大量破壊兵器」にしちまうのが「魔法」ってのが俺の考え……」

言われてみると、確かにそうだった。

物理的な衝撃を抑える非殺傷効果で忘れがちだけれども、確かに魔法は個人差はあれどど、人、それも大勢を殺せるだけの殺傷力と破壊力を持っている。

自分の「魔法の先生」も、AAAクラスの魔力保持者な魔導師は、本気を出せば街一つを廃墟できると言っていた。

「これは魔法に限ったことじゃないんだけど、完璧に安全が保障された「力」………つか、エネルギーとか道具なんて無いんだよ………それいつらは俺たちの使い方次第で、力は人を救えることも、逆に傷つけ……奪うこともできちまう、まあそんな持論が局とかみ合わないことと、後は俺の反骨心つてやつ」

驚いた………そういう考え方もあったんだと、思わず頷かされる。

結局、どんな「道具」とか「力」も、人間の意志というスイッチが入らないと使えなくて、そのスイッチによつて化けるものだと言夜は言いたいのだ。

「つまりだな………何事も行き過ぎは禁物つてことさ」

何事も限度がある………と彼はこつこつと言った。

例えば食物、生きる上では必要だけど、摂り過ぎれば体調を崩すし、空気中の酸素だって、濃度が高いと生き物を死に至らせる毒物にもなる。

魔法の原料である魔力だってそうだ。

過剰な量の魔力素は、呼吸困難を引き起こしてしまう。

昔、私はそれで何十年も『植物人間』になってしまったことがあった。

それらを踏まえると「魔法」だつてとても危ないところはあるのに、管理局は「魔法」にばかり固執しすぎな組織かもしれない。

便利な機能は多いけど、人によつては一切使えなくて、使い手が限られた力だから、局は万年人手不足で悩みであつた。

おまけに勇夜の「ウルトラマン」としてのあの驚異的なパワーと、リンクから聞いた、力を求める気持ちが行き過ぎるあまり『太陽を盗もうとして故郷を一度追放された』という彼の過去と、自分の経験から見ても、彼の持論はとても納得できた。

何事も、使い方を間違えれば……行き過ぎれば毒となる。

魔法の源な《魔力》も、ウルトラマンのが使う力——《デيفاアレーターエネルギー》も、平等に持つ危険性。

だから勇夜は、身寄りになつてくれた人が局員なのに、その人たちが勤める管理局を『いけ好かん』と言つて、距離をとつていたんだ。じゃあ……もしも彼が局に入つて、実力を認められて高官になつたら——

「ふふっ……」

「おいフェイト、何がおかしい?」

想像してみたなら、思わずお腹から笑みが登つてきて口から零れた。

諸星勇夜とウルトラマンゼロ、両方高官の制服を着た姿をイメージしたところ、浮かんだ彼への印象は——

「ごめん、勇夜に偉いお方は似合わないなつて」

——一言にすればこうなつた。

堅苦しい将校よりも、むしろ性格的に気ままにフリーランサーを続けていく方がしっくり来る。

「そんなの……こつちから願ひ下げだ」

「それもその『反骨心つてやつ』から?」

「う……うるせえ……」

彼は強がつて見せたが、まさかのカウンターをくらつたことあつて、かなりショックだつたようだ。

拗ね気味にコーヒを口にする彼に、自分はガッツしたくなくて、自覚できるほど顔は喜んだ。

やった。やっと勇夜から一本取れたって。

勇夜の言う通りだ。こう、心から笑うなんて本当久しぶり。

できれば…母さんともこんな感じに…笑いあえたら…母のことを浮かべたことで、私は思い出す。

あ…そうだった。

私は約束として、この人を母さんに――

「あの…勇夜…」

「何だ改まって」

「明日、母さんのところへ行きます、約束通りあなたにも会わせますから」

「そうか…」

さすがに母さんのことになる、自分も彼も、顔から笑顔が消えた。

「何も分からないまま戦うのは嫌なの！」

すると突然、昨夜のあの白い子からの言葉を思い出した。

あの時は、耳を傾けている場合じゃなかったから、ジュエルシードの確保を優先させたけど…今思い出すと、疑念が頭にこびり付いてくる。

なぜ母さんは、あんなものを必要としているの――と。

今日の前にいるこの人を、悪ぶってるだけで、そう振る舞ってるだけで、こんなに優しい人を…傷つけさせたのに。

たった一個だけでも、あれほどに凶悪なら、もしいくつも束になって同時に暴走を起したら。

今になって実感させられる。あの宝石の、綺麗な見た目の裏に隠れた凶暴さを、自分にはあれをどうやったら有効に、かつ無害に使えるのか、想像つかない。

なら、母はあれをどうしようと言うの？

もし、母さんの…あのジュエルシードを使う「目的」勇夜にとって許せないものだったら…それこそ昨日みたいな次元振を起こして、世界を道連れにするようなことを、行なおうとしているとしたら。

そして勇夜がそれを許し難いことと断じて、母さんと戦うようなことになったら。

不安が、心の中を侵食して行く。  
違う！

不快な思考を、必死に振り払った。

だが否定すればするほど、最悪のビジョンはより具体的な映像となつて彼女の脳内にこびり付いて来た。

殺意を剥き出しにして、戦う二人の姿。

違う違う違う違う違う違う違う！

母さんはそんな人じゃない……そんな恐ろしいことする人じゃない。  
い。

バカバカバカバカバカバカ！

あたしの大馬鹿！

母さんは悪くない！ そんな悪者なんかじゃないんだ！

そんなことを考える私の方が悪者なんだ。

今だって、研究に忙しいから、あたしと会わないだけで、あれを集めて持つて行けば昔みたいに……あの頃みたいに……笑って……くれる。

「フェイト？」

「っ……………」

勇夜の声のお陰で、なんとか思考の迷宮に彷徨う前に抜け出てこられた。

「なんか、顔色悪いぞ」

「だ、大丈夫……」

精神を収めようと、深呼吸を繰り返しながら己に言い聞かせる。

大丈夫、勇夜と母さんが戦いになるようなことなんて……無い。

絶対無いから、大丈夫だから、落ちついて、私。

「もう行くか」

「う……うん」

絡みついてくる嫌な考えを振り払いつつ、私は勇夜とこの店をあとにした。

せつかく勇夜が奢ってくれたパフェだって、あんなに美味しかった

のに、心配させちゃったよね。

でも大丈夫。きつと大丈夫だから。

勇夜に心配させる……ましてや怒らせるなんてことは、絶対起きない。

そう自分に言い聞かせてはいたが、一度芽生えた不安はフェイトの心に寄生したまま、離れようとはしなかった。

夕方。

学校の授業があらかた終わり、学生は部活に従事するか、ちよつと寄り道しつとも家へ帰る時間だ。

で、高町光はと言うと。

「待てよ高町！」

駐輪場に置いた自転車に乗って、今にも下校しようとしたその時。

またスカウトか……いつものことだけど、心情の内部で溜め息が流れた。

光に剣道着を着た学生が、呼び掛けてきたからだ。

彼が通う学校の剣道部の主将、部長である。

用件は、いつものことだ。

部の助っ人になってほしいという、同級生からの懇願。

「もう帰るのか？」

「ええ……先約がありました」

これから、臨海公園で諸星勇夜ことウルトラマンゼロと情報交換の為に会う約束があるのだ。

実は彼は訳あって、この三年間一貫して帰宅部だった。

このところ、それが功を奏したのは言うまでもない。

「武闘派一家の一人のお前が入れば百人力何だがな」

「一人で戦局を覆せるほど、世の中甘く無いですよ」

「甘く無いね……ところで今日は『何枚』もらったんだ？」

「すみません……急いでいるので」

慌てて自転車を走らせて、なんとか振り切った。

本当に王制国家の騎士であつた光Ⅱミラーナイトは、その気品ある佇まいと穏やかな物腰と文武両道さで、本人にその気は無くても校内では一目置かれていた。

例えば、今みたいに部活のスカウトを受けたり。

さらには——彼は一度自転車を止め、バックから、封筒を何枚か出した。

他の例の場合、女子生徒から、昔風に言う『恋文』が何枚も下駄箱や机の中に置かれたりしている。

中にはメアドと番号まで入っている始末だ。

彼の性格上、彼女たちの行為を無下にもできず、こうして目的地に行く間も彼女たちにどう断りの返事を入れるか考えていた。

海鳴臨海公園に着いた時には、勇夜は既にそこにいた。

「怪我の方は？」

「この通りだよ」

右手をこちらに見せてきた。

どうやら既に完治済みのようだ。

次に彼は左手で何かを投げてきた。

受け取ると、それは無糖の缶コーヒーだった。

「バックで良かったか？」

「問題無いです」

船の汽笛と、カモメの鳴き声が響き、空と海原は暁に染まっている。

「明日、フェイトのお袋さんに会って来る」

「大丈夫なのですか？ 相手は名の知れた魔導師なんですよ」

「魔導師なら、な、だが腕っ節自体なら、話は別だろ？」

「それもそうだ。」

少なくとも戦士としてのキャリアなら、自分たちの方が上。

過信では無く、客観的に思考した上での判断だ。

「あと、義妹さんのことなんだけどき」

「なのはが何か？」

「いや…なんであんなにフェイトに話し合いを求めてたのか、気になつてさ」



なるほど、そう言うことでしたか……まあゼロが気になるのも無理はないです。

「ゼロは彼女に初めて会った時、どんな印象を持ちましたか？」

「……………なんか……………寂しい目をした女の子だなんて……」

「そう感じたそうなんです、なのはも」

「どうしても……知りたいの……あんなに寂しい気持ちを押し込めてジュエルシードを探してるのか」

なのはは、*「昔の自分」*とどこか重なってしまう彼女に対して、どうしようもなく気になって仕方がないのだ。

「悪いな……口止めさせて」

ゼロが詫びを入れた。

集めているフェイトたちに関する情報が確証を得られるまでは、なのはたちには口止めしておくようにと、勇夜は光に頼んでいたからだ。

「謝ること無いですよ、なのはは昔から人の痛みにも敏感な子でしたから、知っても知らなくても、同じだったはずですから」

自分の心の痛みよりも、相手を案じることを優先させる。

だから、何もできないことに何度も心を痛めていた。

だから、ずっと探していた。

自分にしかできない何かを。

自分はそんななのはの在り方を尊いと思う一方で、危ういとも感じていた。

「だから……わたしはなのはを」

「守りたいって思ったてか？」

「はい」

「親父みてえだな」

「そうですね」

彼の父、ウルトラセブンもそんな、相手を重んじ、案じ、思いやる人の一面を知り、当時は戦闘員でない身でありながら地球を守ろうとした。

いや、セブンだけじゃない……それはウルトラマン全員に言えるか

もしません。

フェイトの関する話を切り上げて、話題は移る。

「あのコツヴとパズスについては何か」

「誰かが無理やり連れてきた、ぐらいしか…まだ分かんねえよ」

「それもそうですね」

昨夜現れた、こちらの地球がある世界には存在しないはずの怪獣、それがどうして、結界の張られた街の真ん中に出てきたのか、現状ではまたあんなことが起こる可能性が皆無では無いとしか分からなかった。

この件は保留にして、また次だ。

「例のデータ持ってきたか？」

「はい」

光はバックからUSBメモリを取り出し、彼に手渡した。

「なるべく早く持ってくるからな、お前のデバイス」

「かたじけないです」

やはり自分としては『ミラーナイト』としての力は切り札としてとっておきたい。

それには、戦略の幅を広げるためにも、魔法を使用するための『杖』がどうしても必要だった。

幸い、勇夜に行きつけにしているその手の業者がいるそうなので、今渡したパソコンソフトで設計したデバイスのデータを元に作ってもらうことにした。

無論、ユーノがなのはにレイジングハートの管理者権限を譲渡したように、その時空管理局と言う組織にとつては眉をひそめる行為なんだろうけど。

「その時空管理局が介入してくる…：…ということとは？」

「次元振も起きちまったからな、流星に重い腰を上げるだろうさ」

事態の收拾のためなのだろうが、またややこしいことになりそうだ。

彼の話からすると決して一枚岩では無いし、内外に色々問題も抱え、勇夜も根っこから嫌っているわけではないけど距離をとっている

ようだし。

自分も、そのややこしくさせる一因ではあるけど。

もし彼らと接触した折には、ここまでの経緯、場合によっては自分たちのことも話さなければならぬと、覚悟しておくことにした。

それでもしなければ、得られない信頼もある。

「そっぴやな、今日お前んとこの店に行つたんだけど、お前の親父さんつて武術でも嗜んでるのか？」

身が固まる感じがした。

彼が翠屋に来たことも驚いたが、特に父の関する事に対してだ。

「どうしてそんなことを聞くんですか？」

彼が『武道』では無く、あえて『武術』という表現を使ったことに驚きを隠せなかった。

「いや…それがな…」

数時間前の翠屋に時間は遡る。

「君？」

「はい、なんででしょうか？」

会計を済ませようとした時、この店のオーナーらしき中年よりは若い男性からじろじろ見られた。

そっぴや…俺もこの人をどこかで見た気がする。どこだったか。

「この間の試合の時にいたでしょ？ 君」

あ、思い出した。

あいつの義妹のなのはと、ユーノに初めて会った日。

ボート場に向かう途中、河川敷を歩いていた時にサッカーの試合がやっぴいて、その時の片方のチームの監督さん。

「すいません、あの時はおたくのチームに一点入れてしまつて…」

試合終了の時に、たまたま俺のところにはボールが飛んできて、条件反射的にこの人のチームのネットに放り込んだんだよな。

反射的とは言え、目立たぬよう努めていた身としては失態も良いとこだ。

「いいよ、君のシユートを見た後、部員たちの士気がさらに高まったからね」

そうなんだ……ならいいけど、でも感化されたお子さんたちがあのシユートができるまで上達できるかは、保障できなかった。

「私は高町士郎、君の名前は」

彼は自己紹介しつつ、握手を求めてきた。

高町？ひよつとしてミラーナイトを養子にした一家ってこの人たちなのか？

そういや、喫茶店を経営してるとは聞いてたけど。

「諸星勇夜です」

そんなことを考えつつ、こっちも応対して、握手を交わした瞬間。

彼の手に違和感を感じ取る。

手に付いた、竹刀ダコとも呼称される独特のタコ豆と、岩のようなごつさ。

自分も武術に嗜んでいるから分かる。

この男、相当な手だれだ。

修羅場も経験してる……いわゆる殺し合いつてやつの『実戦』を。

けど、なんで一介の喫茶店のオーナーが……戦争と見なされるような闘争なんて、もう何十年も起こってない国だぞ。

「その連れの子は？」

士郎の隠された爪の存在に戸惑っていると、本人からフェイトのことを聞いてきた。

明らかに日本人な風貌の勇夜と、金髪赤眼の白人風なフェイト、かなり目立つ組み合わせだった。

「(勇夜：どうしよう)」

フェイトは念話で不安を口にした。

「(そのままダンマリしてろ)」

「観光に来たらしいんですけど、親御さんと離れちゃったらしくて、一緒に捜し回ってたんです」

なんとかその場をまとめ、二人は翠屋をあとにした。

「見かけは温厚そうな親父さんだったけど、あれは殺し合いの経験がある手つきだった、義妹さんといい、あの一家はどうなってるんだ？」  
ゼロの懸念は最もだ。

この世界の日本は、かれこれ50年以上、内外問わず戦争をしていない。

自衛と称して存在する自衛隊も志願制なので、戦闘訓練さえ受けたことが無い人がこの国では多数だ。

そんな国で、死線を潜り抜けていると匂わせる人物は、同様に経験している者から見ればどうしても目立つし、感じとりやすい。

ここまで感ずかれては、仕方ない。

一応秘匿するよう言われているのだが、勇夜なら口外はしないだろう。

「御神真刀流……」

「ん？」

「高町、正確には父士郎氏の旧姓、不破家に伝わる古流武術です、その不破一族は、昔から要人警護の仕事を生業としていました」

「なるほど、昔ながらのSPってやつか、道理で」

「その義父さんは、現在引退して一介のマスターですがね、これ以上のことは秘匿を義務付けられているので、申し訳ないですが」

「いいさ、俺たちだって似たようなもんだからな……しかしさしずめ戦闘一家だな、お前んとこの家族」

戦闘一家か……間違っていないのがなんとも。

父も兄も姉も勿論、なのはさえ魔力の資質保持者で魔導師となつたので、純然たる非戦闘員な一般市民に該当するのは、高町家では母桃子しかない。

「そう言う勇夜も、剣術の心得はあるようですが？」

「あれは修行やってた頃にレオ師匠から、宇宙拳法と一緒に教え込まれたただけだぜ、一応師匠は地球の古流剣術を学んでたらしいけど」

「どんな流派ですか？」

「色々だよ、内一つが、香取神道流……だったか……」

なんですって…まさか。

「あの香取ですか!？」

「ああ…室町辺りから、発祥した総合武術だって…」

正式名称、天真正伝香取神道流。

飯篠家直という侍が開いた、特に歴史が長い剣術の流派であった。

どうも師のレオが、地球各地を旅していたところに、武者修行の一環で門下に入ったことがあるらしい。

他にもレオは、あらゆる古武術の指南を受けていたとのこと。

「まさか、神道流の剣士と会えるとは…」

「とはいってもあくまで師匠が習ってただけで、正式なその流派の剣士ってわけじゃねえしな……………あ、やべ、そろそろ買い出しにいかねえと…」

買い出し。確かゼロは、毎日彼女たちの為に材料を買い、食事を作って、一緒に同じ屋根の下で食べているという。

実の親よりも、親らしい役目を果たしているのがなんとも皮肉。

「ゼロ、明日は気をつけて下さい、どうも何か…」

「ああ…肝に銘じておくよ」

ゼロがやられる何て事態は起きないだろう。

問題は彼の心にある。

幼少の彼はいわゆる孤児の身の上で、父親が今も存命で、その父がセブンであること知ってから…ウルトラ一族としての時間ではそんなに経っていない。

家族がすぐ近くにいない痛みを知っているゼロにとって、もしフェイトの母の娘に対する接し方、もつと直接的に言うなら「一方的な暴力」が真実で、それを思い知らされたら…そんな不安を胸に秘めつつ、光は勇夜を見送った。

「光さん」

勇夜の後ろ姿が見えなくなると同時に自分を呼ぶ声が、この声の主は。

「ユーノですか？」

地面を見渡すとフェレット形態のユーノがいた。

「すみません…見回ってた時にたまたま」

「いいえ、僕と彼がこうして会っていることは知っていますよ」

ユーノには勇夜がフェイトとは停戦協定的なものを結び、事件解決の情報収集の為に動き、信頼している自分に提供していることを知らせていた。

勇夜本人はフェイトたちの行為そのものは許してはいないが、裏にある事情に対し、放っておけないが為に今の立ち位置にいることも含めてだ。

「それもあるんですけど…」

「デバイスのことですか？」

「はい…」

やはり、こうして協力させてもらっている今でも、巻き込んでしまったことに負い目を感じているんでしょう。

「僕も、中途半端に後悔をしたくないから、最善を尽くしているんです、これでののはとユーノの負担も減るなら、それで良いじゃないですか」

「本当に、ありがとうございます」

「ただ…お互い管理局様への言い分は、今の内に考えておいた方が良いでしょうね」

「そ…そうですね…」

ユーノは苦笑いで返した。

管轄外な世界である事情もあつたとは言え、すぐにでも管理局が捜査に乗り出してくれれば、彼だつて責任を感じ過ぎて独断に走ることもなかったかもしれないのに。

そこを上手く相手方に突いて、チャラにはできないものか。

普段から言動も物腰も丁寧に関心掛けている自分にしては珍しく、チャラい言語で思考していた。

## EP14 | 憤怒

「お土産って…お菓子?」

フェイトとアルフが一室を借りている遠見市内の高層マンションの屋上にて、勇夜とフェイトとアルフの三人は一同に会していた。

先の一言は、フェイトが両腕で大事に抱えているケーキボックスを見たアルフの第一声で、今からフェイト、アルフ、そして勇夜が、フェイトの母がいると言う『時の庭園』へ行こうとしている時に発されたもの。

フェイトが抱えるケーキボックスは、の成果報告がたら、母への土産として昨日昼食代わりに寄った喫茶店『翠屋』から購入してきた代物である。

「何か文句でもあんのか?」

「そういうわけじゃないよ、あの店のケーキはほんと美味しかったしさ……ただ……『あの人』が喜ぶかなって……」

アルフは、その翠屋のケーキを土産にすること自体に異論は無かったが、やはりフェイトの母への不信感から、どうも乗り気では無いようだ。

対してフェイトは、よほどあの店で食べた菓子類が気に行ったらしい。

実はジュエルシードの『競争相手』の親が経営している店だったことは内緒。

フェイトはともかく、アルフはがやがや言って色々ややこしくなるのは目に見えているので、今は知らぬが仏だ。

「よく分からないけど……こう言うのは気持ちかなって」

気持ち……フェイトの今の発言に、勇夜は瞳を曇らせた。

フェイトはフェイトなりに、母の気持ちに答えたいと思っているのだろうけど……彼女の名でもある『運命』ってやつは、シニカルに彼女を笑っていた。

彼は二人と出会ってからプレシア・テスタロッサの経歴を調べていたのだが、昨夜にあの親子の問題の核心と言える内容、フェイトに



そつくりなアリシアと、科学者としてプレシアを照らし合わせて、あの推論を打ち立てていた。

もしプレシアが、あの『技術』に手を出していたとしたら、確かに辻褄は全て合う。

あの親子が疎遠な——正確にはプレシアがフェイトにとっているであろう、娘に冷たい態度で接する——理由が。

どういう用途で、彼女にジュエルシードを集めさせている理由は、まだ分ならず仕舞いではあるけど。

あれにアリシアを生き返らせてほしいと願う？ と頭に過ぎつたが直ぐに思考は否定した……あれの傍迷惑で大雑把な願いの叶え方を差し引いても、科学者であるプレシアなら、他力本願にアレに願いを叶えてもらうより、多量の魔力を貯蔵している声質を利用し、何らかの蘇生の用途に使う方が自然だと考えるものの、具体的な方法まではさすがに勇夜は思い浮かばずにいた。

フェイトの母の目的に関する疑問の樹海に迷い込みそうになる彼をよそに、フェイトは地面に転移魔法を発動するための魔法陣を浮かべた。

「次元転移……目標地点……時の庭園」

「(リンク、転移先の座標記録、頼むぞ)」

『(了解)』

「次元座標、 876C……4419……3312……D699……3583……  
A1460……779 ……F3125」

胸に抱えた引っかかりを抱えつつ、勇夜たちは次元の狭間に停泊している時の庭園へと飛んだ。

まるで……城人中だな。

それが時の庭園の内部転移した際の、勇夜の感想だった。

まさかいきなり、果てが見えないくらい長い廊下に出くわすなんてな。

『(建物の構造から見て、要塞クラスの大きさがあると思われれます)』  
大理石でできた壁も天井も、少々白味で素っ気なく派手さが抑え目な作りだが、王室の城内の廊下と言ったら、簡単に信じてもらえそう  
だ。

フェイトによれば、この庭園は漢数字の十字に突起を数十本周りに  
生やした形状、外壁は黒い岩石に覆われ、目のような光点があちこに  
埋め込まれていると言う。

なんともマッドサイエンティスト風な施設なこと、と勇夜は皮肉つ  
た。

この要塞クラスのコロニー、いわば人工居住区は、今頃外の空間(じ  
げんのはざま)では、雷鳴が絶えず轟いているはずだから、完璧に月  
並みなマッドサイエンティストの研究施設である。

できれば、プレシアがその絵に描いたマッドな奴だなんてことは  
ジョークで済まして欲しい気分だ。

だって、ジョークにしたってつまらないと断じることさえできな  
い、笑えなくて食えない代物だから。

フェイトたちにこの廊下で暫く待つてほしいと言われ、二人が奥の  
方へと歩いていく様を見送る。

しかし、彼は黙って待ち続ける気は無かった。

『天井に通気口が見られます、そこを通りましょう』

「了解」

リンクに応じつつ勇夜さっそうと飛び、魔力で足の裏を壁面に密  
着させ、地上での歩行と同じ感覚で壁歩きをしつつ、通気口の中に侵  
入した。

今のこの時間は、俺たちにとって却って都合が良い、タイムリミッ  
ト付きだが、仮説の立証を行うことができるからである。

人が一人分、辛うじて通れる広さしかなく、かつ薄暗い通気口を匍

匍で進む勇夜。

もし、プレシアが愛娘の為にあの『研究』に手を出していたとしたら、そこから得た推論が事実なら、この庭園にはあの3人の他に“生命反応”がもう一つあるはず——と踏み、勇夜は『反応』を身そので感じ取ろうと、己の感覚を研ぎ澄まし。

「次の角を左に進んで下さい」

リンクは周囲の視覚状況から、目的地へと繋がるであろうルートを処理演算して勇夜をナビゲートする。

つまり片や直感による勘と、片や緻密な計算による勘で、“彼女”がいるかもしれない部屋へ、狭い通気口を進んでいった。

自分でも言うのもなんだが、背は高い方だ。

もしこのままのサイズで通れなかったら、変身魔法で人間の体格を調整しなければならなかった。

でも予めエネルギーを溜めておいたアイテムによるウルトラマンへの肉体変化と違い、人間のまま体を変化させるのは結構燃費が掛かる。

だからそんな手間暇掛けずに何とか通れる広さで良かったと考えつつも、狭くて暗い道のりを進んでいると、体の感覚が捉えた。

『微弱ですが生命反応があります…』

「ああ」

フェイトたちのものではない、4つ目の生命体の反応をリンクが感知した。

その後も、リンクの指示を受けつつ、反応がある方角に向かって行く。

「ここだな…」

天井越しに真下から、生命反応を感知した。

勇夜の目が青白く光り、透視で真下の部屋を確かめる。

何らかのガラスの容器が見えるが、ここからで内部は死角になってよく見えない。

近くにカバーらしきものは無く、力づくで開けるしかなさそうだ。

「零牙、ダガーモード」

リンクから青緑の光の粒子が溢れ、一振りのナイフを形作った。  
勇夜の使うデバイス、『零牙』を短刀形態、ダガーモードにしたもの  
だ。

ゼロスラッガーの通常形態のように、ナイフとして使え、念力で飛ばすこともできる形態である。

「ヒートスライサー」

その刃を魔法で熱をこめさせ、赤く染まった刃で床を四角字に切りこみを入れつつ、底辺にあたる部分だけを残すと、両手で押し込み、缶詰を開ける要領で金属の板を開かせた。

もつとも缶詰の場合は引いて、こつちの場合は押し込んだとも言える。

ちなみに全部を切らなかつたのは、魔法で元に戻しやすくするためだ。

まず頭だけを出して、部屋中を見渡す。

見る限り、特にトラップも無さそうだった。

罫の有無を確認し終わると、勇夜はそのまま躊躇うことなく飛び降りた。

常人にはきつい高さだったが、魔法の補助も借りずに、造作も無く綺麗に着地する勇夜。

そして、例のガラス容器の中に目を向けると。

「……………」

絶句し、言葉が出なくなってしまった。

一瞬、幻覚か錯覚の類だと思った。

正直……嘘であつてほしかった。

これまで掴んだ情報も、自分の推測も、自分の目に写る光景も、何もかもだ。

だが、何度瞬きしてみても、目に映る光景は不変、現実は変わつてくれない。

残酷な真実が、そこにはあつた。

視線の先には、生物の肉体の腐敗を止め、保存させる生体ポッド。  
大きなガラスの容器には、小さな女の子一人が液体の中で佇んでい

る。

煌びやかな金色の長髪、瞼の中の瞳は紅であろう幼い美少女の顔。一糸纏わぬ姿で漂っていたのは……フェイト……ではない、外見の幼さからして6歳ぐらい。

となれば、この子が一体誰なのか……検討がついた。

「アリシア……テストタロツサ」

20年前に起きた魔導炉の暴走事故、その時に炉心から外部に放たれた高濃度で大量の魔力素を体内に吸い込んだことでリンカーコアを含めた臓器が圧迫され心停止、そのまま帰らぬ人となった……プレシア・テストタロツサの娘だった。

確かにプレシアが失踪したのと同時期に、アリシアの遺体も消失したという情報はあつたけれど、こうして何十年もポッドの中で生前の姿のままとっておいた……つてことは、やっぱり……フェイトは……この子の。

『マスター、そろそろフェイトが呼びに来る可能性があります、早く御戻り下さい』

「ああ……分かった」

実際には揃って欲しくは無かったパズルのピースが、これで全てはまってしまった瞬間だった。

バシ！————バシ！————バシ！

響く、リズムよく小刻みに部屋を残響させる、柔らかな何かが、細くしなやかな何かに何度も当てられる音。

バシ！————バシ！————バシ！

音が鳴り響く度に、腫れあがる痛みによって、彼女は目を覚ました。頭がぼんやりして、視界も焦点が合わなくてピンボケし、一時的な機能不全に陥っている。

バン！————バン！————バン！

体のあちこちの痛覚が、悲鳴を上げて、はつきりと感じられるとい  
るのに、自分も痛みで声を喘いでいるのに、ぼーとして思考が散漫し、  
どうしてきつきまで眠っていたのか、原因が掴めない。

バン！————バン！————バン！

「うあ……んんっ………んああ」

はつきりしない意識、絶えず叫びを上げ続ける体、痛みに苦しむ様  
を突きつける自分の声。

ようやく、今の自分の状態、こうなるまでの流れが頭の中に入っ  
てきた。

両腕が真横で顔より高い位置に伸ばされて動かない、天井に繰りつ  
けられた黒光する鎖に手首を拘束されているから、足が床に付いてい  
ない、その鎖で体が浮かされている格好だから。

自分の体を見回す、ボロボロだ。

いつも戦う時に装着している黒のバリアジャケットは、あちこち布  
地が破れて、防護服——バリアジャケットとしての機能は失われてい  
る。

魔力さえ有れば、ジャケットは並の防弾服よりも堅固な鎧となり、  
傷ついても即修復させられる。

だが、その魔力がなければ、普通の衣服よりも脆く、服として使い  
物にならない欠陥品となる。お陰で防護服の破れた跡には、赤く被れ  
て晴れた自分の肌が見えた。その痕はどこもかしくもあつた。

バン！————バン！————バン！

紅の痕は今も尚、こうして増えて、体を刻み続けている。

バン！————バン————バン！

使い物にならないと言え、自分もまたそうだ。むしろ魔力を与え  
れば簡単に縫い直せる防護服よりもっと役立たずだ。

バン！————バン！————バン！

意志に反して上手く動いてくれない顔を無理に見上げる。

その先にあるのは、紫がかった髪と、その髪と同じ色をしたマント  
と装束、右手には、魔力で編み上げた鞭を宿したデバイスを持って、自  
分に“躰”を行っている………母だ。

バン！——バン！——バン！

ダメだった……今回もまたダメだった。

ジュエルシード……あれを4個手にすることができた時、まだ4個だけど、手に入れることはできたから、今度こそ母さんは笑ってくれ  
ると思つてた。

昨日……勇夜が……私に笑いかけかてくれたみたいに、母さんがあの頃  
の母さんに戻つて、勇夜の時と同じ、一緒に笑い合えると信じてた。  
でも……やっぱり今日もダメだった。

こうなつてしまった要因は明白。

全部……自分が至らないから……しっかりしてないから……母  
さんの期待に応えられず……母さんを悲しませてしまう……役  
立たずでダメな自分だから。

これは因果応報……自分が受けなければならない……当然の罰（む  
くい）なのだ。

だって……いつまでも母が冷たく恐い人のままなのは、自分が元凶  
なのだから。

バン！——バン！——バン！

だから……どうということは無いのだ。

だって……こんなのはいつものことだからだ。

なら自分は、いつものように、痛みとか……辛さ……そんなものに  
何も感じないと……思いこめばいい。

どうということは無い。

これでも……我慢するということは、自分が誇れる特技だから。

どうということは無い。

今までだって……そうして自分を抑え込んできたのだから。

どうということは無い。

悪い子な自分には、むしろ母さんからの躰はむしろ温い方なのだか  
ら。

何よりこれは、母からによる不甲斐無い自分への、愛情行為である  
のだから。

そう…悪い子なのは全部……わたし…なんだ。

通気口から飛び降りて、転移してきた地点の廊下に戻ってきた勇夜。

まださっきのショックから立ち直れず、心臓がバクバク鳴り、左手で胸を抑えながら、右手を壁に当ててどうにか身を支える。

何度かの深呼吸と精神統一で、ようやく鼓動が正常になった。やっぱり、自分の予想した通りだった。

だが実際目になると、あらかじめ予想していても衝撃的であった。プレシア・テスタロッサは以前、とある研究を行っていた。

使い魔を超える人造生命の育成の名の下に、人間の細胞から、元になつたものとそっくりの人を生み出す技術。

いわゆる……クローンの生成ってやつだ。

その研究の名前は……プロジェクト――

「勇夜！」

突然、アルフが大声を発しながらこちらに走ってきた。

かなり切羽詰まって、泣きそうな表情（かお）をしている。

「何があった？」

「いいから来てくれよ！早く！」

勇夜はアルフの後に続いて走り出した。

長い長い、どこまでも続きそうな大理石の廊下を走り抜け、案内された先には一つの大きな金色の扉があった。

表面に見事なレリーフが彫られているが、そんなレリーフの芸術的価値を測るなんていう悠長なことに気を止めてはいられない。

彼女の方を見ると、いつもの勝気な少女はそこには無く、憤りと悲しさとやり切れなさど悔しさが入り混じった表情をした使い魔がそこにいた。

耳も彼女の心情を代弁するかのよう垂れ下がっている。

「アルフ？」



「勇夜…お願いだ…フェイトを——」

アルフが悲痛な面持ちで『フェイトを——』から言葉を繋げようとしたその時、扉の向こうから、声が聞こえた。

正確には、それは悲鳴。

少女が激痛を訴える悲鳴と、鞭のようなものが人間の体を絶え間なく打ちのめす音。

それだけで……たったそれだけの情報で中で何が起こっているのか理解できてしまった。

認めようにも認めたく無くて、フェイトたちの母が、そんな外道じゃないと…何度もそう願った。

だが真実は、どこまでも冷酷にそれを嘲笑して目の前にいた。

どうしてだ？

どうしてあの子が…あんな悲鳴を訴えなければならぬんだ？

やり方は、お世辞にも褒められたものじゃない。

はつきり言って親孝行としては、邪道だ。

それでも…家族の想いに応えてやろうと健気に走ってる女の子が、なんでこんな目に遭わなきゃならないんだ？

なんで『家族』から…仕打ちを受けなければならぬんだ？

体が身震いする、特に強く握る両手は大きく震えあがった。

その身の内には、黒い業火が燃え上がる。

許せない…許せない許せない許せない…絶対に許せない。

家族なのに…自分たちが『家族』だってことぐらい、ちゃんと分かっているはずなのに…手が届いて、触れ合えるくらい近くにいると言っのに！

『マスター…落ちついて下さいー』

相棒の忠告も空しく響き。

どす黒い感情が、彼の心を埋め尽くしていった。

「下がってる…」

それが、あたしが玉座の間の扉の前に連れてきた時の、勇夜の第一

声だった。

同時に寒気で、体が心底震えあがり、髪が逆立った。建物の中が寒いわげじゃない、今日の前にいる少年から発せられる、どす黒く冷たい殺気。

それを前に、本能的に彼の言う通り身を後ろに下がらせていた。だけど背中越しただというのに、自分に向けてはいないのに、刃を喉元に突きつけられたような感覚が襲いかかる。

こんなこと、今まで無かった。

初めて会った時も。特訓の組み手をしてもらった時も、ウルトラマンに変身した時でさえ、ここまで温かさが廃絶された眼差しも「気」も体から出すことはなかった。

急に、この人が見知らぬ遠い人になっていく感覚になる。

近づけない、狼としての本能が、勇夜は危険だと警告を絶えず発する。

彼は扉の目の前に立ち、右腕を思いっきり振り上げると、力任せに扉に拳を叩きつけた。

たったその一撃で、玉座の間に繋がりし分厚い扉が開いた。

そしてその先にあったのは、ボロボロなバリアジャケットを羽織って倒れているフェイトと、魔力の鞭を形成したデバイスを持ったプレシアだった。

お土産にと持ってきたケーキも、プレシアの逆鱗に触れたのか無残に床に散乱、綺麗に焼き上げたパウンドも、バランス良く装飾された生クリームもイチゴも、不格好に撒き散らされていた。

「フェイト!!」

アルフは気を失った主へと駆け寄り、抱き抱えた。

華奢な彼女の体は鞭で撃たれた痕がいくつも新たに刻まれていた。

アルフは納得できなかった。

何でだよ、フェイトはちゃんと言われた通りのものを持ってきたじゃないか、21個全部じゃないけど、ちよつとでも母を喜ばせてあげようと、異相体とも戦って、同い年の女の子とも戦って、勇夜が毎日ご馳走してくれなきや、食べる暇も寝る暇も惜しんで、必死こいて

集めていた筈だ。

それだけ全身全霊で臨んで、ちゃんと結果だつて出したんだ。手づかずに成果が全くでなかったわけじゃないんだから、少しぐらい褒めてやっても良いじゃないか……なのになんでこんな仕打ちを？

ここまでする必要はあるのか？

！  
こんな、騾に程遠い八つ当たりをする道理がどこにあるってんだよ

「アルフ……」

フェイトへの不条理に嘆くアルフの耳に、無感情にさえ感じられる、怜悧で低い声が横から響いた。

「悪いが、フェイトを連れて出てつてくれ……この人と話がある……」

勇夜の豹変に、惑いと不安がよぎるアルフだったが、彼の言った通りに、フェイトを連れて、玉座の間を後にした。

「いったい何の用かしら？人の家に土足で入り込んで、あまつさえ騾の邪魔をするなんて……」

「はあ？ 騾？ 今こいつは騾だと言ったのか？」

「さつきまでやってたのが騾？」

「聞き間違いかと思った。」

「あれで騾だなんて、何と笑えない冗談かと笑いたくなくなった。」

「どう見てもただの八つ当たりにしが見えなかっただろうが、年寄り風に言えば、最近の親は騾と暴力の境界さえ理解できないのか？」

「そう無粋なことを考えなくなるほどに……フェイトに強いられる痛みは、余りに冷血な所業だった。」

「あ、あなたね……フェイトに纏わりつくネズミ……かの噂の『魔導殺し』」

「この女——プレシアを直に目にするのは、これが初めてだ。情報収集で集めた写真越しで、何度か見たことはある。」

けど、この黒装束の魔女があの子の母親だとは、とても信じられない。似ても似つかない。

紫がかった黒い長髪も、氷のような鋭利な美貌も、何から何まで……同じ遺伝子を宿しているのかすら疑わしい。

さつき目にした光景（ぎやくたい）が、それを拍車にかける。

「質問が幾つかあるんだけどな…プレシア・テスタロッサ」

「答える義務は無いわ」

プレシアの手からその髪と同じ紫色の稲妻が発生し、勇夜に向けて雷撃が放たれた。

雷撃は彼を飲み込んで爆発を起こし、爆煙で勇夜の周囲が見えなくなる。

大魔導師と呼称されるだけあり、プレシア・テスタロッサの一撃は凄まじかった。

詠唱を使わずに、これだけの威力の魔力雷撃を実行したのである。そこらの魔導師なら、この一撃でリタイアになっているだろう。

非殺傷なら気絶。殺傷なら確実に死亡レベルの威力だ。

雷撃で生体組織をずたずたにされ、高熱で体内の水分が瞬く間に干やがり、最終的に死体は生前の形を留めずに焼け焦げた炭になり果てるだろう。

だが――

「撃ってる暇があんなら…さつきさと答えろ……」

――爆煙の中からは、右手を真つ直ぐに翳して何事も無かったように立っている勇夜がいた。

大理石の床は無残にも抉られているのに、彼は着ている服が少々焦げて煙を上げる以外は傷一つ付いてない。

瞳もより鋭利で冷たく目つきを秘めており、巨人の姿の時は金色に輝く瞳も、人間態の今は光の欠片も無かった。

あるのは――凍えすら感じる無慈悲な闘気だけ。

「あの子はあんたからの『危ないお使い』を…必死でやったんだぞ、そんでこの始末とはどう言うことだ?」

「必死ですって？ 笑わせないでくれるかしら……」

プレシアの美貌が、歪んだ笑みを形作り、彼の言葉を嘲笑して返す。「これだけの時間をかけて、回収したジュエルシードはたったの4つ……大魔導師の娘としてはあまりにも期待外れだわ……」

大魔導師：自分から高々を発したこの女の単語そのものには異論が無い。

白状すると、「魔導師」としてなら、自分でもこの野郎には勝てなかった。

今の一撃で即死していたかもしれない。

だがその大魔導師さまからが口にした言葉には、白々しくて吐き気がした、

「期待」だとか、そんな言葉でフェイトを酷使してきたと言うのか？

そうやって純粋な女の子の願いを、この女はずっと——目じりの皺が、怒りでさらに増加される。

「期待外れ？ そんなもんはなからあの子に持ってたのか？」

「どういう意味かしら」

「あんたの目を見れば嫌でも分かる、《アリシア》と生き写しなあの子への憎悪ってやつがな……」

一瞬相手は、やや面喰った表情をした。

その顔にこっちも面喰った。

娘を蘇生させる結果をあげる為に、人らしさとか一切全て捨ててしまったのだと思っていたけど、まだそんな表情（かお）ができるとはな……それを表情（おもて）には出さなかったが、驚き自体は隠せなかった。

だが彼女の容貌は、すぐに冷酷な笑みに戻った。

「……調べたのね、この短期間でそこまで、流石だわ」

「あんたの愛娘を死なせたあの魔導師事故、20年以上も前のことなのにその子にそっくりなフェイト……そしてあんなのやってた研究、これだけあれば……フェイトがあんたの実験が生んだ、デザイナーベイビーだってことは検討がつくさ」

彼女がフェイトの母親、どれだけ自分の心が納得できなくても、その事実には間違いは無い。

しかし……実はフェイトは、こいつの体内の“子宮”の中で生まれてはいないのだ。

ガラスの生体ポッド、それが彼女の母胎。

ポッド内に蓄えられた液体、それが母体の羊水の代わりに彼女を自分で呼吸ができるまで育てた。

正確に表現するならば、生前のアリシアそのものの姿になるまで、人工の母胎で、本来その身で経験する時間を、アリシアの記憶を代わりに植え付けられて生まれた。

実際に目にしたわけでは無いが、彼女がそうしてこの世に受肉したことは間違いない。

どうしても……もう一度、もう一度娘に会いたいと願ったこの野郎の願いによって、フェイトは……《アリシア》として……この世に生を受けた。

「そこまで知ってて、なぜあなたはあの“人形”に拘るのかしら？ 赤の他人でしかないあなたが」

「……………今……………何て言った？」

人形……だと？ 勇夜の心がさらにささくれ立つ

何を言っているのか、分からなかった……分かったくもなかった。

訂正すれば、分かっていたけど、認めたくなかった。

我が子に“憎しみ”を抱くどころか、その子を“人”とさえ……みなしていない事実。

そこへも容易に辿り付けた。

簡単なことだ。仮にもアリシアとして生まれたフェイトが、なぜ“フェイト”という名前を持って生きているのか？

プレシアにとって、あの子は“失敗作”だったのだ。

この魔女にとって、アリシアには余計で致命的に異なり、許し難く、心を狂わせる最後の一押しとなる異物を、フェイトは持っていたのだ。

「何度も言わせないで……あれはわたしにとっては何だの“人形”よ」

なぜだ？

生まれ方が違うだけで、アリシアと全く同じ遺伝子と、生き写しな容姿を持つてはいるけど、〃異なる存在〃であるあの子を、ちゃんと血の通ったあの子を…玩具だとしても言いたいのか？ 人間だって認めてないのが？

あの子を自分の手で生んだ子だって、思っていないのか？

どうして〃アリシアでない〃だけで、こんな人でなしなことを言えるんだ!?

「教えてあげるわ…わたしにとつての娘は、アリシア只一人だけよ…」

冷酷な美貌に、悲哀と言う名の揺れが加わりつつも——

「私の時間も…愛情も…何もかも全部アリシアに上げるはずだった…それを叶えるためなら、世間にどう思われようとも構わなかった!」

——恐らく…誰にも、一人たりとも、ついで知ることが無かった…この〃プレシア・テスタロッサ〃だった人間の闇—モノローグ。

「なのに…どうして…どうしてあんな人形に注がなくちやいけないの!?! あんなアリシアの出来損ないに、ただ似ているだけの失敗作に、愛情なんて、注げるわけ無いでしょ……………」

そうか……これですつきりした。

「だから、『全て』を取り戻すために、私は人形を生かしているだけ、用なんて済めば——」

「だったら!!!」

今——やっど解ったのだ。

この外道が、失敗作の烙印を押したフェイトを酷使してまで、ジユエルシードが欲しい理由、それを使って何をしようとしているのか、はつきりした。

それを理解しただけに……それを達成した先に待つフェイトの運命を察してしまっただけに、黒く熱い憤怒溢れだしてくる。

「だったらな…今すぐ言えよ…」

真意を汲み取ったからこそ、許せない。

「なんですって?」

最初は、死なせてしまった愛娘への贖罪だった。

ただもう一度会いたいと言う、願いからであった。

科学者としての自分を捨てきれない自分に罪悪感を覚え、苦しみながらも、母と呼んで帰りを待っている子を、少しでも母として接してあげようとする前に、アリシアは帰らぬ人となった。

魔女は、その現実と、自分自身さえ呪いながら今日までひたすらあの世から、彼女を連れ戻すことに生涯を捧げてきた。

「今言ったことを……その本音を、フェイトに今言ってみせろよ!!」  
フェイトは、その過程で『アリシア』として生まれながら、別の存在として生まれてしまった。

地球でも、ミットチルダでも、倫理的には問題があると言われるクローン技術。

人によつては、フェイトのことを、この外道の罪の象徴だとも言うだろう。

生まれたこと自体が、彼女の存在そのものが罪だと言うやつもいるだろう。

「お前は自分の娘じゃない!」  
「アリシアの妹でも無い」  
「娘と似て非なる出来損ないの人形」、自分があの子の母だつて認められないなら!それを洗いざらいあの子に言え!!!言ってみろよ!!!」

でも俺にとつては……そう言い切れる理由がたとえ、あの子の出生を後から知ったからだとしても……フェイト・テスタロッサという一人の人間。

一人の……一人でしかない……たった一人の女の子なんだ。

フェイトつて名前が何よりの証拠だ。

あの名前を彼女が付けられた理由は、特に意味は無い。きっとプレシアは自分には「出来損ない」なあの子に意味なんて与えたくなかつたら、あのクローン技術の名称と同じものを付けたのだろう。

でもその時点で、フェイトはアリシアの代わりでは無く、ちゃんとした自分(じが)を持つ人になれた……この世に一人しかない存在になれたんだ。

紛い者として生まれてしまったのが逃れようのない事実だけど、存



在そのものは——断じて“紛い者”じゃない。

「そして……あの子を解放しろ！」

それを…人形だってほざきながら、散々痛めつけておきながら。

「あの子に縛り付けてる足枷を……解きやがれよ！ 娘じゃねえんだろ!? なら今すぐできるよな！」

『目的』を果たすまでの道具としてしか見てないのに、自分の『娘』としてあの子を縛り付けて、己のエゴを満たすために、あの子に罪を重ねつけて道連れにして弄んでいる……このケダモノが許せない。

「真実を知れば、フェイトは何年も闇ん中を閉じこもるかもしれねえ、だがせめて、あの子を妹としてかわいがってやるさ…自分の娘とも、“アリシアの妹”としても見ようとしないうんたの代わりになああ!!!」

弄んでんのは、フェイトだけじゃない、アリシアもだ。

物言わないこと良いことに、あの子の体をずっとポッドに閉じ込めて、生きることも死ぬことも許されない地獄を味あわせている。

仮に現世に戻ったとしても、変わり果てた母の姿と、捨て石にされた“妹”の存在が、あの子の心を一生暗闇に落とし込むことだって、あり得ない話じゃない。

娘——アリシアの為と言いながら、その娘たちに痛みと嘆きを強いている。

見もしない、聞きもしないで、己が受けた悲劇を周りに押しつける。

それが、この魔女の本性だ。

「黙りなさい…」

「黙れだあ？ 笑わせるなよ、フェイトを道具にしてんのは誰だ……一言もあの子の言葉を聞いてあげなかったのは誰だ……見てあげなかったのは誰だ……“あの子たち”に地獄を見せてんのは誰だ!!!それを見ない振りをしてんのは誰だ!!!あんただろ！ てめえの下らないエゴの為に、娘（あのこ）たちを弄んでんじゃね!!!」

勇夜の怒りは、一種の同族嫌悪、近親憎悪も混じっていた。

彼も以前は、誰も言葉にも耳を貸さず、誰とも、自分とさえ向き合

うことができず、フラストレーションを撒き散らして、心を閉ざしていた時期があったからだ。

「口で言っても解らない様ね、ネズミ如きに私と、私のたった一人の家族の問題に、減らず口で不躰に入りこまないでくれるかしら、どうもあなた、死にに急ぎたいようだし、これ以上耳障りなその声を飛ばし続けるなら——」

少なからず、彼の言葉が彼女の心に波紋を読んだのだろう。

少女を生き返らせること以外、何も考えず、目的を遂げる機能以外全てすてた筈の魔女。

それが勇夜の怒りによって、殺戮に特化させたようだ。

今まで聞き手に徹していたプレシアは、懐からもう一つデバイスを取り出し。

「——殺してあげる」

殺意以外の情を、全て切り捨てた声音とともに掲げた。

『(あれはまさか!?)』

いつもは冷静な勇夜の相棒も驚きを隠せない。

なぜならそのデバイスは、余りに酷似していたからだ。

勇夜―ゼロの世界で、*“怪獣使い”*と呼ばれる存在が使うアイテム。

色が紫なことなど、細部に違いがあるが見間違いのようがない。

『サモン・ローディング』

そのデバイスから、5つの光が放たれ、勇夜の周りを何周かすると、光から5体の西洋鎧の騎士に似た風貌をしたロボットたちが出現。

体格も3mから10m近くとバラバラで武器も槍だったり両刃の大剣だったり斧と様々で、中には徒手空拳な巨体もいたが、明らかにリンクのマスターたる勇夜を狙っていた。

*“どう足掻いても……勝ち目は無い”*

内の一体が馬上槍で勇夜に襲いかかる。

鋭利な先端は、呆気なく彼に避けられ、空気のみが切り裂かれた。

馬上槍の一体の攻撃が合図となり、一斉に兵士たちは得物を振るいだした。

右に左に後方に身を逸らして凶刃たちを回避しつつ。

「零牙ー」

ブレイドモードの零牙を召喚し、鞘から抜いた剣先で兵士の猛攻を振り払う。

一見顔つきは、凜と引き締まっているが、瞳は明確に、冷血な負の色で濁りきっていた。

その黒き表情がまた、ウルトラ戦士も感情を持つ生命体にして、人であると言う証しであるとすれば、何たる皮肉か、憎悪を力の源とする闇の戦士と化してしまった彼は、苦も無くロボット兵を捌き切っていく。

しかれど、勇夜を襲う牙は機械の兵士だけではなく、稲妻の閃光が迫る。

プレシアからの雷撃だ。

跳躍して宙返りをし、雷撃は勇夜でなく背後の壁に衝突し、平らな壁面は醜く抉り取られて変貌する。

姿勢を整え、地に着地しようとする勇夜、がその前に眼前に剛胆な物体が迫り、鳩尾に巨体タイプの兵士の正拳が捉えられ、壁面に激突し、四方に罅を刻ませた。

そのまま地面に落ちる、その瞬間を相手方は逃す筈もなく、馬上槍の一体が、今度こそ勇夜を串刺しにしようかと打突。

横たわったまま横転し、槍先をいなす勇夜。

瞳の黒さと闘志は、壁面に身が衝突された程度では滅滅の効果を作さない。

額を貫こうとした先端を、左腕で槍を掴み止め、次の瞬間、馬上槍のロボットは右手の零牙の剣閃で四肢を切断された。

そう：この機械の兵士たちに、「勝機」——など、端から無かったのだ。

マシンである為、一体がやられた程度では兵士たちは怖気もせず、他の四体が彼を取り囲み、一斉に攻撃を仕掛けるが、勇夜は刀身に、エ

ネルギーを込めると横薙ぎに一閃。

その斬波に三体は両断され、最後に残った一番巨体で二回りも大きな一体は、勇夜に拳を振るうが、難なく左手の掌で受け止めると、腕力で一気に相手の腕をねじ切り、右手の一撃で腹部を言葉の通りに貫いた。

そして、プレシアに冷酷な瞳を向ける。

向けられた彼女の手には先ほどの一撃以上の凄まじい雷の魔力が溜められていた。

さっきのロボットは、最初から時間稼ぎのために召喚した噛ませ役だったのである。

「消えなさい!!!」

明確な殺意を込めて、雷撃が放たれる。

対して勇夜も掌を広げた右腕を突きだした。

稲妻が、勇夜とプレシアとの間の中心地点で阻まれた。

何も阻むものは——在る。

ただ見えないだけだ。

ウルトラマンゼロが勇夜の姿でも使えるウルトラの力。

『ウルトラテレキネシス』

彼の右手から放たれる念力波動だ。

雷と念動のせめぎ合い。

互角で拮抗だ。

だが、次第に雷鳴の龍が、不可視の鉄球を押し始める。

「終わりよ……魔導殺し」

執念。言葉にするならその一言が、雷の龍の活力となり、念波動を撃ち破って勇夜に馳突して行った。

その雷は今度こそ、勇夜の肉体を完膚なきまで破壊する——はずであった。

雷撃を放った直後。

プレシアの右手に持っていたデバイスは切断され、彼女の喉元に刃

が突きつけられていた。

しかしその刃は、零牙ではなかった。

銀色、三日月状で身の丈近くある長さ、両端にそれぞれ長さの違う片刃の大刀。

“彼”が使う二振りの宇宙ブーメラン、ゼロスラッガーが変形してできあがった武器……ゼロツインソード。

そして、その大剣を突きつけるのは、青、赤、銀の色を帯びた三色——トリコロルの戦士、ウルトラマンゼロ。

プレシアは信じられないと言う顔をする。

距離にして、10mあったはずなのに……間違いなく仕留められる一撃だったはずなのに、ましてや彼がこうして変身して、自分を追い詰めることなんて、よくまわりを見渡してみると、彼女から見て左側にあたる壁が大きく抉れていた。

そう……魔導師としてなら勇夜に勝ち目は無かった。

だが、《戦士》としてならば——話は別となってくる。

勇夜——ウルトラマンゼロはこの平行世界に来てからも、心身を鍛えることを怠らなかつた。

海鳴に来てからも、情報収集や調理の合間を縫って、リンクの仮想シミュレータを使って鍛錬を欠かさずにいた。

その日頃の研鑽の結果、人間態でもある程度ウルトラマンの力を行使できるようになった。

彼が『デイファレーターパワー』と命名したエネルギー。

本来は“ウルトラマン”にならなければ扱えぬ能力で、かつスペシウム光線のような、大火力の遠距離攻撃はできず、当然魔法のように非殺傷にもできないので人間相手に使える代物でないなどデメリットも小さくは無いが、肉体と得物に付加させることで攻撃力が強化され、魔法よりも早く発動できるメリットを持つ。

特に、今はスクラップと化したメカ相手には有効的であった。

フェイトのフォトンランサー、プレシアの雷撃を受け止めたのも、そのエネルギーで張ったバリア。

《ゼロデイフェンサー》

今の一撃もこのバリアでまず受け止め、向きを斜めにずらして受け流したのである。

そして間髪いれずゼロに変身し、彼女が視認できないスピードで、相手へ踏み込み距離を詰め、ゼロツインソードを居合の要領による斬撃でデバイスを切り裂き、こうして喉に突きつけたのである。

戦士としてなら、戦いを経験したきた者なら、彼の方が上手だった。重ねて言えば、彼をウルトラマンに変身させるまでに追い込んだプレシアも、人外と見なされてしまいそうな稀代の魔女とも言える。けれど……その魔女たるプレシアは身動きがとれなかった。

この距離で下手に撃てば自分も巻き込むのもあるのだが、文字通り身動きができなかった。

自分の体が、いうことを聞いてくれない。

体が：心が：この男は危険だと叫んでいるのに、応えてくれない。ウルトラ念力による……金縛り。

全てのウルトラ一族が持つ能力だが、特に父ウルトラセブンとゼロはトックラスの使い手。

人間体でも、怪獣やウルトラマンクラスの巨人の動きを封じる有効な技である。

並の人間相手なら、そのまま為す術も無く金縛りにできる。

プレシアにとって今日の前にいる相手は、感情が表情として表せない鉄面皮と金色の瞳を見せながら、明確な殺意を発するこの少年は、まさに死神だった。

殺される：人知を超えた超人によって……生物しての本能がそう感じた。

だがゼロは、怒りに震える声で。

「臆病者が……」

そう吐き捨て、背を向けると、プレシアにかけていた金縛りの念力を解除した。

体が硬直していた影響と、彼女そのものを蝕むもの“の影響で、プレシアの息は激しく乱れ、しばらく立てそうも無かった。

しかし、一方で彼女は、まだ念力の金縛りがかけられたように呆然

としていた。

ゼロに殺される瀬戸際まで追い込まれたショックと、彼が先ほど言ったある言葉を切っ掛けに、ずっと忘れていた『あること』を、この瞬間思い出したことで硬直を強いられていた。

それを知る由も無いゼロは、一度も彼女に目を向けることも無く人間体——諸星勇夜の姿へと戻り、玉座の間を退室した。

玉座の間を出て、真っ先に入っただのは、まだ眠ったままのフェイトと、沈んだ表情で彼女を抱えるアルフだった。

「ゆ……勇夜………あのさ……」

眠りの床に着いているフェイトと違い、彼女は扉越しに会話と真実の一部始終を聞いてしまっていた。

「後にしてくれ………帰るぞ」

勇夜は自分とフェイト達の足元に、青緑色の転移魔法用の魔法陣がしくと。

「次元転移……目標地点……遠見市、■■■■マンション屋上」

三人の姿は、魔法陣から発せられる光に包まれて消えた。

## EP15 | 止まない雨

灯りがほとんど消失された、どこかの部屋。

闇が支配していることで、ある程度広さがあること以外は、どうい  
う一室であるのか、判別がつきにくい。

一人の男が、そんな暗黒の空間で腰かけていた。

顔つきは日系で髪はすつきりとした短髪、歳は見たところ初老あたり。  
り。

そして彼の右手には……怪獣使いのアイテム。プレシアが持っていた類似品とは違い、外見上はより本物に近い。

男は、現状の疲労困憊な自分が恨めしかった。

だが、復活の足掛かりな贄であり、欠片程度の力しか持たない地球人とその仲間たちに二人の『光の巨人』によつて、『今の世界』に飛ばされ、その能力の大半を失った。

本来なら雑作ない、2体同時使役さえ、今の彼にはままならない。

現に、操作中は過呼吸症候群のような息の荒れと、倦怠感に見舞われた。

まあいい……あの女に『あの技術』と取引先の星人に作らせた『次元要塞』を提供したのは正解だった。

あの星人たちの技術力も中々だ。『光の国』ですら制約がある次元航行技術を今や有し、現状奴らに知られることなく、最強の生体兵器を生み出すべく、あらゆる世界の生命体を捕らえ続けている。

女からの対価として、輸送中のジユエルシードを地球に落とすこととなつてしまつたが、結果的にウルトラ兄弟三兄の倅と連れの戦力はある程度分かつた。

まさか『奴』の息子だけでなく、その仲間たちが、こちらに来てい  
ると思わなかつたが、逆に言えばこの身に微かでも抗える存在は、  
彼らしかないのだ。

策なら、いくらでも応じようがある。

さらに、完全復活の手だても持つている。

あの呪われし魔導の本を利用すれば、全盛期以上の力を手にでき



る。

そのための準備も怠っていない。

データも取れた。あの技術が人間だけでなく、《怪獣》にも有効であると示すデータを。

管理局など、図体がデカイだけの組織、恐れるに足りない。

どの道彼らでは、手遅れな状況下でも、まともに手は撃てまい。

現状はよく分かった、とりあえず……今は静かに待つ時。

部屋の中を電子音が響き、男は机に設置されたキーボードを操作、

『SOUND ONLY』と表示されたモニターが現れる。

「マンジョウメ博士、グレアム提督がお呼びです」

「分かりました、直ぐ向かいます」

嘲笑したくなる気持ちを抑えながら、彼は答えるのであった。

若造のウルトラ戦士と、狂気に墜ちた大魔導師との憎悪のぶつけ合い。

あれも中々の見物であったが、あの魔導書が起こす修羅場は、あれよりも黒く激しい悦を、こちらに示してくれるだろう。

楽しみだ。待ち焦がれるだけでも、歓喜の震えが沸き立つ。

落ち着け、今は耐えて静観する時なのだから。

男は、そう自身を抑制させていたが、口元には確かに、おぞましく歪んだ嬉笑が現れていた。

昨日、勇夜は光にジュエルシードの次元振をきっかけに時空管理局が重い腰をあげることを話していたが、その通りとなった。

マルチバースの海を泳ぐ、銀のカラーリングに、二つの突起が音叉状に伸びたデザインの戦艦が一隻。

時空管理局本局が所有する、時空を超える船。

L級巡航艦船——アースラ。

その艦内の床、壁、天井全面に艶が敷かれ舗装された廊下を、歩く女性が一人いた。

ミントグリーンな色合いの髪を、勇夜よりはやや上向きに縛り、藍色のロングスーツに純白のスラックスな管理局本局の制服を着込む、見た目は20代後半に見える女性。

彼女は横開き式の自動扉の前に着き、開放されたドアを抜けると。

「みんなどう？ 今回の巡行は順調かしら？」

ドアの先は、この船の艦橋であった。

女性は入室するとともに、この船を動かしているクルーたちに声をかけた。

「はい。現在、第三船速にて航行中です、目標次元の惑星には、今からおよそ12時間後に到達予定です」

「次元観測を続けていますが、前回の次元震以来、特に目立った動きはありません」

クルーからの報告を受ける女性の名は、リンディ・ハラオウン。

時空管理局本局に勤める局員で役職は提督、そしてこのアースラの艦長だ。

「事件の中心人物である二名の魔導師も、今はその活動を停止しているようです」

その内の一人で、艦長の為に紅茶を淹れているショートカットで茶髪の少女は、このクルーのオペレーター——エイミー・リミエツタ。

「管理外世界で起きた小規模のものとは言え、次元振の発生は見過ごせないわ」

勇夜の予想通り、管理局はその重い腰を上げてアースラクルーを地球に向かわせていた。

「それから、『彼と例の巨人』が両方確認された以上、事態はかなり深刻と思われまます」

中央の艦長席に腰かけたリンディに、紅茶を渡すエイミー。

彼女が言う『彼と巨人』が誰なのかは言うまでも無い。『彼』はどちらの姿でも、管理世界で名の知れた存在なのだから。

何せ、どちらも大概は、管理局が捜査で介入する前に事件や事故を解決してしまうのだ。

その「彼ら」が両方存在しながら手を焼いている時点でかなり状況はややこしく、緊迫していると推測できた。

「そうね…危なくなったら、急いで現場に向かって貰わないと、ね、クロノ？」

リンデイは艦橋内で佇む、籠手などの武具が装着された黒衣の装束と黒髪の少年に声をかけた。

彼はクロノ・ハラオウン。

管理局では執務官と呼ばれる役職に就き、リンデイの息子でもある魔導師だ。

「わかっていますよ、艦長」

親子だからと言って公私混同はせず、彼は事務的に。

「僕は、その為に居るんですから」

中央に深い青色の光沢が埋められたカード…彼の愛機——デバイスを取り出しながら答えた。

その日の夜の遠見市は、曇天であった。

空の大半は、雨雲に支配され、海上に浮かぶ雲は雷鳴さえ起きている。

いつ雨となってもおかしくない天気だ。

勇夜はと言えば、マンシヨンのベランダで、夜の遠見市市街を、浮かない表情で一望していた。

アルフはと言えば、戻ってからでも眠りに着いているフェイトの傷の手当てをしつつ、やはり沈んだ表情で彼女を見下ろしていた。

彼女の寝顔は至って穏やかだ。

だからこそ、目に写る体中に刻まれた赤く変色する痣が、相対的に痛々しさを醸し出している。

こつちに戻ってからというものの、勇夜とアルフは一言も会話をしていない。

2人とも、お互い気まずさからどう言葉を絞り出して切り出すか、踏み込めずにいた。

あの玉座の間で交わされた会話の内容と、フェイトに課せられた真実を、アルフも知ってしまった。

勇夜も彼女が受けたショックを察し、何も言いだせずにいる。

「本当なのかい？ あの……話」

暫くして、ベランダに出てきたアルフが開口一番に静寂を破った。

彼女の問いに、どう返すべきか困惑している顔を、勇夜はしばし見せつつも、決心したのか、アルフに視線を合わせながら。

「本当だ……」

と、答えた。

そして、彼が今まで調べ上げた『真実』の詳細を、アルフに洗いざらい話し上げた。

勇夜が明かす真実は、アルフにとって信じがたい、フェイトが当人すら知らずに抱える十字架であった。

フェイトが……あのアリシアって子の、クローンだったなんて……あたしと同じように、人工的に生まれた命だったなんて、そんな彼女をあの女は、利用するのに便利な“人形”としか見てなかったなんて……嘘だと断じたかった。

でも、アリシアがフェイトと合わせ鏡にそっくりなことと、あの女がやっていた研究、古代から伝わる禁断の技術、クローン人間の生成、その研究の名前が——プロジェクトF・A・T・E。

パートナーであり、姉妹と言ってもいいフェイトと、同じ名を冠した技術。

これだけのことを、勇夜とリンクに聞かされたら、信じるしかなかった。

『プロジェクトF・A・T・Eは、単にクローンを生み出すだけではありません、遺伝子のモデルになった人間の記憶も、対象のクローンに植え付けるのです』

「……じゃあ……フェイトがいつも言ってた……優しい頃の母さん“って”」

『恐らく……アリシア・テスタロッサの記憶によるもの、と思われま  
す』

と言うことは、フェイトは一度たりとも、あいつから愛情も笑顔も  
まとも向けられないまま今日まで生きてきたの？

姉貴が経験した記憶だけを、頼りにして、それを自分の過去である  
と、疑うこともないままに。

なんて……残酷だ。

でも、同時に納得もいく。あの女が、必要以上に、フェイトに冷徹  
に接する理由。

あいつは、死なせてしまったアリシアを、何が何でも、生き返らせ  
ようとした。なんせ、自分が殺してしまったと言ってもいいからだ。  
その絶望は、計り知れないものだった筈。

プロジェクトF・A・T・Eに手を出したのも、その方法なら、も  
う一度生きた娘に会えると、信じて疑わなかったからだ。

だけど、結果はあいつにとって、失望を生む失敗であった。

勇夜によれば、アリシアはかなり活発で明るく人懐っこい性格な女  
の子だったらしい。

前に見せられた写真に写ったあの子を思い出すだけでも、フェイト  
とは全く正反対な子だと領けた。

アリシアとして生み出したのに、見た目以外は全然似てない子に  
なったんじゃ、あんな鬼婆を化すくらい、狂っちゃうのも無理ない。

だからって、あの仕打ちはとも許せる業では無いと言いたい。

「すまねえ……フェイトにも……ひどいことを言っちゃったな」

「え？ いいよ……勇夜が謝ることないって……」

アルフは戸惑う。

まさか、彼から謝罪を受けると思わなかったからだ。

だって……あんな理不尽、感情任せに叫びたくもなるさ。

「あたしもあの場にいたら、勇夜と同じことを言ったと思うし、そのこ  
とには、逆に感謝してるんだ、あたしが今まで言いたくても言えなく  
て我慢してたことを、洗いざらい代弁してくれたからさ……」

理由を知っても、心はとても納得などできない。

昔からフェイトと話そうともしない。

顔を合わせようとするもしない。

研究室にずっと籠って、たまに対面した時は一方的に『危険なお使い』を頼むだけ。

フェイトが苦勞してお使いを達成して、指定されたロストログアを持って来ても、礼の一つも言わず、あまつさえさつきみたいに何度も痛めつけて、ただ？アリシア？じゃないからって…そんな手前勝手なことがあるかい。

憤怒に駆られない方が無理な話だ。

勇夜と違って、自分の場合は、喧嘩を売ったら逆にあいつに打ちのめされただろうけど、フェイトの母だけあって、あいつの魔導師としての強さは段違いだ。

一発殴りたくとも、自分ではその前に奴の雷撃の餌食となるのが落ち。

勇夜だつて、ひよつとすると…負けてたかもしれない。

悔しいけど、それも認めざるを得なかった。

けれど、腑に落ちないこともまだある。

「けどさ…ならあいつは、ジュエルシードで何をするつもりなんだい？」

フェイトにジュエルシード含めたロストログアを集めさせてきたわけだ。

願いを叶えてもらうにしても、勇夜が欠陥品と称して、ちよつと衝撃を与えただけでバルディッシュを破損させ、ウルトラマンの姿であつた勇夜も倒れるほど消耗させ、街に大穴開けるだけの被害を出す代物を、いくらあんな心が壊れた人間だからって…あんなものを使つて、娘を蘇らせる何て願いを叶えてもらおうなんて、思えなかつた。

「アルハザード…」

「え？」

不意に勇夜が発した単語に、首を傾げるアルフ。

『別名、"忘れられた都"とも呼称される、遙か昔、現代以上の技術力

が結集していたらしい文明の都市の名称です、史実では跡形も無く消滅したことになると思いますが、最近の研究で、今もどこかの空間に存在していることが判明しています』

あたしらの世界では、数百年前、各次元世界の文明同士で、大きな戦争があつた。ロストログアもたくさん乱用されたらしく、消滅した世界は数知れず、生き残つた世界の文明も、大きな打撃を受けたと言  
う。

お陰で、あの時代はこの地球じゃ何千年前くらい遡らないと当て嵌まらない、『古代』と見なされて、大昔扱いされている。

アルハザードは、あの大戦争で、一度は消滅したと思われた世界に存在した都市で、どうもひよつとしたら次元の狭間にあるかも、と学会では騒がれているらしい。

たとえあつても、今の技術じゃ、そこに行くのはおろか、どこの次元に隠れてるのかさえ見つけるのも叶わないとのことだ。

そんな場所に、あいつが行きたがるのは…こうパズルのピースの組み立て方を指南されれば、自分でも難なく把握できた。

今の文明の技術では無理でも、あの都にある技術なら、今度こそ娘を蘇生できると思いついたのだろう。

「て、ことは…あいつはジュエルシードを使って」

『わざと暴走させ、無理やりアルハザードに繋がるゲートを開く魂胆でしよう』

「フェイトをこき使つてんのは、そこへ行く為の“切符稼ぎ”ってことだろうさか」

「鬼婆にとつてフェイトは……アルハザードをこじ開ける為の踏み台……ってことかい？」

『そう…なりますね』

口を噤む様子で、リンクが答えた。

怒りの熱流が、体中を巡り、アルフは必死に抑える。

勇夜があそこまで怒るのも無理無い。

あたしだって、たとえ無謀だと解つていても、今すぐにでもあの女をぶん殴りたくて、腕が疼く。

「でも…」

でも、なにより一番の問題は……フェイトに何て話せばいいのだろう？

本当のことを言うべきか……けど、自分が使い魔の宿命を知った時のショックを思い出すと、とても言う気にはなれそうにない。

だけど、このままフェイトにこんなことを続けさせるのを良しとする気にもなれない。

今やっていることが報われないことを、その先に待つ結末を、知ってしまったから。

「なあ、どうしたら——」

そういったところで、勇夜はアルフの口に人差し指を立て制し、片方の指で部屋の中へ指差した。

指の先に目を向けると、そこにはフェイトが眠っているベット。

そして寝具の上で横になっている彼女の瞼が動いたかと思うと、閉ざされた瞳がゆっくり開かれ、フェイトは目を覚ました。

「フェイト！」

アルフは彼女に駆け寄り、その身を起こしてあげた。

「大丈夫かい？」

「大丈夫……平気だよ」

彼女はそう言っているが、傍目から見える気だるそうな様子は、起床時特有の眠気の残りかすが原因だけではないであろう。

普段からか細い声も、今はそれ以上に小声で夢げだ。

「フェイト？」

まさかと思った。

フェイトは、重々しそうに体を動かし、ベットに備えられた壇上に於いてあるバルディッシュに手を出そうとし、思わずアルフはその腕を掴み阻んでいた。

「止めないでアルフ……まだ、ジュエルシード……探さないで……」

「まだ探す気なのかい!? ダメだよ、そんな体じゃ無茶だつて」

勇夜とアルフは呆然自失になった。

昼間の仕打ちで、体力も戻って無いはずなのに。



その体も、痣だらけで痛々しいのに……それに万全な状態で封印できるほど、異相体となったジュエルシードは甘くない、やられに行くようなものだ。

「だって……母さんが、これじゃ足りないって……」

「でも……フェイトはちゃんと言われた物を持ってきただろ……なのにあの女、あんな酷いことを」

「酷いことじゃないよ……母さんはわたしの為を思っ……」

「思ってるもんか！ あんなの……あんなただの八つ当たりじゃないか!!」

気がつけば叫んでいた。

あいつの目的を知ってしまっただけに、この全身の痣を作った元凶の期待に応えようとする彼女の態度に納得いかない。

フェイトは知らないとはいえ、とても用が済めばいつでも捨て石にする魂胆な野郎に、どこに報いる義務だとか責任だとか、情があると言うのか？

「違うよ……だって……親子だから……あれは私が受けるのが当然の、罰だから」

「フェイト！……だって……だってあいつは——!」

「待て！……アルフ」

思わず、『あのこと』を言いそうになりかけたあたしを勇夜が手でさえぎり、首を横に振って宥めた。

真実を口にしそうになった短絡的な己を恥じるアルフ。

何馬鹿やってんだ？

あんな話、下手に話せば、あの時の自分みたいにフェイトを余計自暴自棄に追い込んでしまうってのに。

「フェイト、俺からも聞きたいんだけどな、まさかいつもああいう風に、あのお袋さんの言うことを聞いてたのか？」

諭すように投げかける勇夜の問いに、フェイトは黙然と頷いた

「そりゃ、親の言うことを聞くのは確かに当然だ、でもな、それだけじゃ、血を繋がってるだけじゃ……親子って言わねえんだよ」

彼の言葉を前に、フェイトは黙ったまま答えない。

「黙ったままじゃ何も伝わらないだろ……俺にも……そしてお袋さんにも……正直に言う……俺もアルフと同じ意見だ、俺から見たらあんなのは親子じゃない……奴隷と使役者だ……あんなのは母親じゃない……独裁者だ」

「勇夜……それ以上母さんを」

勇夜はあたしが、我慢して言葉に出来なかったものをフェイトにぶつける。

「何度でも言っつてやるさ！あいつはフェイトを見ようともしてないし、フェイトも『血縁』だけの繋がりに甘んじてるだけだ、ジュエルシードを集めるよりも、やらなきゃいけないことがあるだろ……あいつに伝えなきゃならないことだつて……」

「……………」

リンクの話じゃ、勇夜、ウルトラマンゼロは、小さい時は天涯孤独で、実は父は生きていたんだけど、その人が父親だつてことは、強さへの渴望で故郷の人工太陽に手を出した罪による更生を含めた修行を終えた直後まで知らなかったという。

さっきの言葉は、多分その経験から来ているものだと分かった。

フェイトには悪いが、今回は勇夜の意見にあたしは賛同だ。

確かに、家族を作る上で、血の繋がりは必要なかもしれない。

でも、なんとというか、血脈があつても、お互いに大切だつて思ってる気持ちを共有できないんじゃないじゃ、親子だとか、家族の糸なんてものは作れないと思うのだ。

逆に血が繋がなくなつて、その糸が固く結ばれたなら、家族になれる筈だと信じたい。

これは、フェイトと……あの人……と一緒に生活してきた、自分の経験からくる見解（かんがえ）だ。

「だから、一度……ちゃんとプレシアに——」

勇夜が、彼なりの言葉で、フェイトの今をどうにか改善させようと、彼女を説き諭そうとした時。

「それ以上言わないで!!!」

フェイトの悲痛さが垣間見える叫びに、勇夜とアルフは目を見開か

せた。

常人より声量が抑え目な彼女だけに、今の号叫は、豹変したのかとすら感じられた。

その喚きを切欠に、フェイトは体を小刻みに震わせ、頭を両手で抱えながら、崩れゆく。

「違うの……母さんは何も悪くない、悪いところなんてないの……悪いのはあたしだけなの……母さんを失望させたから、あんなことをさせるのも私のせいなの……わたしが良い子でいないから……言われたことをやらないから……期待に応えられないから、こんなことを続けることに迷ってるから!!」

パニックを起こしているのは明白。

勇夜たちに言い返すというよりは、むしろ自分に無理やりにも自身がとる行動を肯定させようと、強迫観念で言い伏せようといった印象を受ける。

この場にいる者、特にアルフは、フェイト不安定な感情の爆発に、狼狽するばかりだ。

どうして……この子は、こうまで自分で自分を罵倒できるのだろうか？

ここまで、自分の精神（こころ）を、リストカットよろしく、傷つけられるのだろうか？

一体何が、フェイトをあそこまで愛情を示さずに虐待を続ける母に固執させるの？

分からない……なんでなんだよ？

「だからあ……母さんの悪口を……言わあ……ないでえ……全部、わたしがいけえない子だから……」

こんなフェイトは、今まで見たことが無かった。

この瞬間まで彼女が、誰にも見せなかった……心の闇、蓄積されてきた……彼女の歪み。

「……………」

自傷するフェイトを前に、暫く何も言えずにいた。

「分かった……だったらもう勝手にしろ……」

次に耳に響いた声が、アルフにさらなる衝撃を叩きつける。

「勇夜？」

「今日を持って約束は終わりだ……」

アルフは時が止まった感覚に囚われる。

フェイトも顔を疼くませたまま、貌こそ見えないが、今までずっと震えていた体が固まった。

「もうここには来ない……次に会った時は容赦するな、全力で来い、こつちも全力で邪魔をする」

そう……今日がこの『約束の期日』であることは前々から決まっていたこと……プレシアに合わせるまで、ジュエルシードの収集は黙認する。

対面の結果次第では、収集の阻止と、身柄の確保も辞さない。

それが、この関係が今日まで続いた……条件と約束。

それが果たされれば、晴れて自分たちは敵対する者同士。

今までの状況が、異常だったのだ。

「どんな願いがあるにしろ、あんたのお袋さんに、この星を『道連れ』にさせるわけにはいかないからな……」

「待って、勇夜！」

「……………」

とうとう何も言わず、背を向けた勇夜に、ようやくフェイトは嘆きで腫れた顔を上げた。

まるで世界が終ってしまうとような表情をするフェイトを振り切って、背中で「さよなら」と伝えた彼は、部屋を後にした。

ボタンと、ドアの閉じる音が、非常に響く。

まるで二度と開くことはないような、冷感な扉の残響が、部屋の隅々まで鳴り渡った。

「勇夜！」

アルフはフェイトを残すことに罪悪感を感じつつも、勇夜の後を追った。

残されたフェイトは、勇夜から突きつけられた断絶のショックによって、小さな体躯をただ縮こませながら、嗚咽を繰り返すことしか、

できなかった。

捨て台詞を置き土産に、部屋を出ていった勇夜の後を慌てて追うアルフ。

廊下に出た際、自分が耳と尾を出したままだと気づき、慌てて押し込もうとするが、心が慌てふためくせいで、上手くいかない。

「だあゝゝもう!」

とうとうめんどくさくなり、隠すのを断念した。

もし地元の人に見られたら?

まあそんな時は、アニメとか物語に出てくる架空のキャラに成りきるという「コスプレ」……だとか何とかで誤魔化そう。

言い分をまとめつつ、エレベーターに向かうアルフ。

しかし時間を喰ったせいで、勇夜を乗せた昇降機は既にこの階より下へと降りている最中だった。

階段を使う余裕さえ、彼女にはない。

仕方なく、廊下から身を乗り出して、地面の周りに人がいないことを確認すると、アルフはその場から飛び降りた。

あの時の勇夜の表情、間違いない。

本心とは、正反対の気持ちを見せなきゃいけない人の顔だった。

だって、何度も……何度もフェイトはそうして、無理をして来たんだから。

今ならフェイトのパニックの原因も分かる。

ずっと我慢ばかりしてきたから、だから今みたいに、今まで溜めこんでいたものが一度に爆発してしまって……情けない、ずっと一緒にいたのに気づいてあげず、どうすることもできない自分が。

飛行魔法の応用で、落下速度を抑えて着地する。

丁度、マンションのドアから、勇夜が出てきた。

「勇夜！」

彼に呼び掛けると、彼はこつちを見止めて、立ち止まった。

「やり合うなら、今度にしてくれ……」

「そうじゃない！ そうじゃないんだけど……」

勢いで来てしまったので、いざ何を言ったらいいか分からない。

自分も初めて見た。

あんなに自分を攻める主が……あの女への不満を口にする、窘められることはよくあったけど。

「どうにも……ならないのかい？」

自分の言葉も、勇夜の言葉も届かず、あんな雁字搦めになったフェイト。

そんな彼女の痛みを知らず、痛みしか与えない母。

でも、勇夜なら、あの二人を、どうにかできるかも……だって、自分じゃ取り戻せなかった……フェイトの心からの笑顔を、この人は齎してくれたから。

他力本願なのは承知だ。

だけど、どうしてもこのまま彼を帰らせたくはなかった。

「悪いが……俺たちじゃどうにもならねえ」

微かな希望を込めて、投げかけた彼女の想いに、彼は低く静かに答えた。

「フェイトみたいな虐待を受けている子どもはな……」親が悪いなんて微塵も考えない”らしいだよ、こうなのは全て”自分のせい”なんだと……自分を責め続けるんだってさ……」

勇夜のその言葉と皮切りに、曇った夜空から、雨が降り始めた。

最初はまだ少量だったが、直ぐに本降りとなる。

まるで、自分たちの気持ちを代弁するみたいに、雨粒が大量に流れ落ちていく。

「そんな……」

「お前も見ただろ……今のフェイトには、それこそ”血を吐きながら続ける……悲しいマラソン”……ってやつを続けることしか……できない」

死刑宣告を、受けた気分だ。

濡れた髪も耳も尻尾も服も、その冷たさも、突きつけられた現実に比べれば苦にならないほどに。

なんで、なんでなんでなんで………なんであいつがフェイトの親なんだよ!?

娘を、彼が言う『血を吐きながらのマラソン』を無理やりやらせて、犠牲（ふみだい）にして、娘を生き返らせようとする野郎が……どうして？

硬直したアルフをよそに、勇夜は彼女を横切るが、背を向け合う形になると立ち止まり。

「それとさ……あのことはまだフェイトには話さないでくれ」

「プロジェクト……F・A・T・Eのこと？」

振り向き、勇夜の背中を見つめながらアルフは答えた。

「ああ、下手すりゃな、抜けがらみてえに笑わなくなったフェイトと一生をともしることになるぞ」

一生……。生涯を、ともに過ごすこと。

それがフェイトとわたしが交わした契約。

その契約の時、あたしはフェイトを守るって誓った。

そして“あの人”から、フェイトを幸せにすると約束した。

今あのことを話せば、あたしはそのどちらの誓いを守れないまま……死ぬまで生なきや……ならなくなる意味合いを込めた………彼からの警告。

「俺も、そこまで冷酷になれねえよ」

背を向けたままだった彼は、ようやくこちらに顔を向けた。

彼なりに見せまいとしているのだろうけど……頬をつたる雨粒が涙に見えるほど、顔は……目は……憂いでいた。

その泣きそうな表情を見ても解る。何が……“容赦するな”だよ。今でも、彼は自分たちを案じてる。

どうしたら、フェイトを救えるか、助けられるか、もがいて苦しんでいる。

それを、やせ我慢で隠している。

「もう…行くぞ」

そう言つて、彼は歩き出した。

やるせなさど、無念を秘めた背中を見せながら。

アルフも、背中を見送りながら、悲しさと悔しさと無力感の前に、足に力が入らなくなり、膝をついた。

ああ……この人が、あの子の……フェイトの……家族であつてくれたら、どれだけ良かったか……一瞬、そんな無粋が考えを過ぎらせってしまった。

こんなこと、フェイトにとても言えたことじゃないのに。そう考えってしまった。

雨がひどくなる中、アルフは勇夜が見えなくなるまで、ずっと彼を見つめていた。



それまで毎週テレビで放送される特撮モノでしか見ない存在だった《怪獣》が現れて、ジュエルシードがなのはたちの接触で次元振を起こし、愛機のレイジングハートとバルディッシュが傷つき。

前に自分ことなのはを励ましてくれたウルトラマンゼロも、あの『フェイト』と呼ばれた女の子の代わりにジュエルシードを止めようとして、怪我を負ったあの夜から、3日の時間が経った。

光兄に聞いたけど、怪獣たちのことはゼロさんのいた世界から無理やり連れてこられた以外は分からないらしい。

何にしても、光兄ことミラーナイトとウルトラマンゼロがいなかったら、為す術も無かった。

塗りつぶしようの無い事実。

だって、本当に何もできなかったのだから。

この身には魔法があつて、この手には共に戦う愛機がいてくれたのに、あの巨体を前にして、ただ震えて佇むことしかできなかった。

実際あんなことが起きれば、ああいった反応をとってしまうことは無理もないと言われても、苦すぎる味が口の中に広がらせる経験だった。

それだけではない。

“なにもできなかった”のは、あの女の子……“フェイト”の件も同様。

あの子の目的を聞くことも、話をしようとかえできないまま。結局、戦うことになってしまった。

でも……光に実際言われるまで気が付かなかったけど、自分は一体、あの子と話をして、想いを聞いて、どうしたいのだろうか？

解らない……答えは一向に見えないのに、あの子の想いを知りたい、その一点だけが頑なに心を占めている。

そういう頑ななところはあの子と似ていると、あのあと兄に言われた。

自分でも心当たりはある。

最近は特に顕著だ。

今封印に必要なレイジングハートを使えるのはなのはだけとは言え、ジュエルシード集めには、ユーノ君や光兄にかなり無理を言った。説得する相手が「自分」だと思えば、それがどれだけ難しいことかよく分かる。

あの光の巨人——ウルトラマンゼロですら、手こずる頑固な子なのだから。

兄、光から聞いた。

以前あの日の河川敷で会った少年——諸星勇夜はやはりウルトラマンゼロであること。

ゼロと、あの女の子——フェイトとの関係性。

どうにも、フェイトがジュエルシードに賭けるものが大き過ぎて、本当はゼロも彼女を止めてあげたいのだが、今はあの夜のようなことが起きないようフオローしつつ様子見のポジションにいるらしい。

いわゆる、停戦協定というものだ。

一度、彼と彼女はジュエルシードを巡って相争ったそうである。

結果は完敗だった自分と正反対に、ゼロ——それもウルトラマンの姿にならずに勝ってしまったそうだ。

でも、勝ててもフェイトの心を完全に解きほぐすことはできなかった。

「暫く手を出さない」約束が、何よりの証拠。

しかしながら、一定以上の影響をフェイトはゼロから受けているのはなのでもよく分かった。

でなければ、自分にはポーカーフェイスに徹してきた貌を、あんなに涙で濡らす筈はないからだ。

それだけ彼女から慕われているウルトラマンでさえ、手間取ってしまっまうほど……頑なな女の子。

なのになんか、彼女と向き合いたいというを望むことを、諦めたくない。

その後はどうしたいかは……まだ解らないけど。

「(なのは)」

そう考えこみながら下校していると、念話でユーノ君が呼び掛けてきた。

電柱の隅からフェレットが出てきた。

勿論ユーノ君だ。

前に、どうして人間の姿にならないのと聞いたことがある。

地球に来て消費してしまった魔力の回復と。

その魔力を減りにくくさせること。

見た目とは裏腹に、フェレットの時の方が怪我の治りが早い、とのことだった。

実際、初めて魔法を使ったあの夜の後には、その前に異相体と戦った時に受けた怪我は、ほとんど治っていた。

そして、ユーノ君の首には赤いビー玉。

前はユーノ君が持っていて、今は私の魔法の杖であり、パートナーとなり、あの夜のダメージで修理中であった。

インテリジェントデバイス——レイジングハート。

「直ったんだね、レイジングハート」

「うん…見回りついでに届けようと思って」

「にやはは、ありがとう」

なのはは愛機を受け取り、首にかけた。

「また、一緒に頑張ってくれる?」

『All right, my master』

そう改めて、愛機に語りかけ、意気込もうとした時だ。

脳裏と皮膚に、ジュエルシードが発動したことを示す波動が過ぎり。

「行こうなのは」

「うん!」

ユーノ君を肩に乗せて、発動した場所へと急いだ。

そのジュエルシードは今、海鳴臨海公園のどこかにある。  
今はそれしか分からない。

やはり反応は微弱で、確たる位置を特定できない。

「レイジングハート……解る」

『申し訳ありません、生物を取り込んだことまでは判明しているのですが、それ以上は』

来てみたのはいいいけど、肝心のジュエルシードがどこにあるか、ユーノでもレイジングハートでも見つからない。

あのフェイトつて子が前にやってみたいに、強制発動を思い切つてやる手もあったが、すでに異相体になつているかもしれないので、それは却下となつた。

光さんはまだ学校にいる時間なので、無闇に学業を疎かにさせてまで甘えるわけにはいかない。

でも……どこなんだ？

対策としてもう結界はこの公園の敷地内に貼つてあるし、対象もこの中にいることは分かつている。

異相体か本体が出てくるまで待つしかないの？

そうこうしていると、結界に微かな揺らぎが生じた。

結界内に侵入者？

空を見上げると。

金色の魔法陣から、あの金髪で黒衣の魔導師が現れて降り立った。

『GET SET』

彼女はこちらに自分のデバイスを向け構えた。

「あの…フェイト…ちゃん」

「っ………フェイト…テスタロッサ」

少し間をおいて、彼女は名乗り上げた。

自分からの問いに、魔法の攻撃では無くちゃんと言葉で応えた辺り、何かしら心情の変化があつたようだ。

それでも構えを解かないあたり、ジュエルシードを巡つて戦う意思は変わらないらしい。

異相体がまだ見つからないのに、この場はどうするべきか？

現状の一計を講じようとしたが、それは新たな結界の揺らぎによって妨げられた。

「なのは！」

『Protection』

上空から、突然光弾の雨が降ってきた。

なのはもあの子も自分も、光弾を障壁で防御して無事ではある。

同時に、今攻撃をくわてきた犯人であろうその『異相体たち』は現れた。

人間に近い体格と大ききで、手の代わりに羽を持ち、この地球に存在するカラスと呼ばれる鳥のような顔と黒い体色をした怪人たちが、複数で出現した。

二、三体ってレベルじゃない。

なのはたちの周りを、数十体もの数で囲んできた。

その様はさながら忍者、あるいはカラス天狗とも比喻できる。

そして：有無を言わさず、一斉に彼女らを標的に襲いかかってきた。

「なのは！ 空へ！」

『Flier FIN』

空にいても危険なことに代わりない。

だが移動と回避なら、飛んだ方が速く対応も迅速に行えた。

「接近戦はできるだけ避けて、遠距離攻撃で仕留めて」

なのはの肩に乗るユーノは彼女に指示を出しつつ、彼女の背後に迫る光弾を、障壁の魔法陣を張って食い止めた。

「防御は僕がなんとかするから！」

「うん、分かった」

ユーノもこんな数を相手にするのは初めてではあったが、現状で把握できたのは、あの群れが異相体を作りだした実体にほぼ近い幻影で、本体はその中に紛れているということだった。

でもなのはのサポートをしつつ、どこまで本体を探し当てられるか

……でもやるしかない、ユーノは気を引き締めた。

反応があつた結界内に入り込むと、すでにあの白い魔導師の少女と、一見すると彼女の使い魔みたいなフェレットがいた。

彼女から「フェイトちゃん」と彼女から呼ばれた時、なんとなくちやんと言わなきゃいけない気がして自分の名前を言いつつも戦おうとしたら、異相体が何十体も現れそれどころでは無くなった。

当面の相手はこの黒い鳥人間たち。

『Photon lancer multi shot』

稲妻の魔力スフィア——フォトンランサー・マルチショットをいくつか形成し。

『FIRE』

それを放つ。

一撃でいくつかの異相体の分身が消えた。

これだけ数がある以上は、まずある程度減らして、本体を探しやすくする状況を作るしかない。

『Scythe Form』

できれば大技で一気に叩きたいが相手は素早く、光弾やら爪やらくちばしやらで果敢無く攻めてくるので立ち止まっていられない。

けど速さなら、こっちの方が上、持ち前のスピードを生かして、フェイトは金色の刃で次々と異相体の群れを切り裂いてゆく。

『Arc Saber』

魔力刃を飛ばし、ブーメランのように飛ぶ三日月の刃は対象を切り裂き。

『Explosion』

以前なのはとの初戦に使用して、有効打となった魔力刃の爆発を敢行する。

爆風とともに発散された小さいが凶悪な針の群体と化した魔力を受けて消滅していく影たち。



もしこの中に本体がいたら良かったのだが、異相体も簡単にはやられてくれない。

かなり数も削られたのに、数が減る気配がまったく無い。  
なのはたちは焦りを隠せなかった。

どうすれば、ジユエルシードがとり付いた本物を封印できるのか？  
——と。

そして、フエイトもまたしかり。

相手は相当隠れるのが上手いようだ、心が焦りで揺れ出す。  
いくら倒しても、いまだに本物を見つけられない。

アルフは別行動をとっていたから、こつちに来るまではまだ時間がかかる。

そして……あの人は、もう来てはくれない。

『なら、もう勝手にしろ』

あの時の彼の声が耳から離れない。

昨夜突きつけられた言葉の数々が、ちくりと胸を差してきた。

これでもまだ良くなった方。

今まで母さんの躰を、いくら受けても耐えられたのに、勇夜に言い捨てられて出ていった直後の私は、あの人から冷たい言葉を吐かれたことがどうしようなく悲しくなって、一昨日のように、我慢できてたはずの気持ちがい慢できなくなって……朝までずっと涙が止まらなかった。

目の前が真っ黒になる様って、こういうことなんだって実感さえした。

朝日が出たばかりの時にはすっかり、アルフがびっくりするくらい、瞳も瞼も真紅に腫れあがっていた。

『今日を以て約束は…… “終わり” だ』

尾を引く憂いを、どうにかして払おうとする。

あの時の勇夜の言う通り……元々そういう約束だった……あの人はその契りを前提とした関係だった。



母さんに会わせるまではジュエルシードの収集には手は出さないが、手伝いもしない。

でも自分にもしもの時があれば、全力で助ける……その約束通り、何度も自分を助けてくれて。

食事だって、毎日作ってくれて。

アルフの希望通り、稽古にも付き合ってくれて。

あの時は、無鉄砲で愚かな私の代わりに、命だっかけてくれた。でも……それはあくまで、『約束の範囲内』だったんだ。

もう全部、終わってしまった。

もう……あの人と、一緒にいることは……ない。

その心の揺れが、一瞬の致命的なる隙を生んだ。

『サーー・右です！』

いつもの冷静さから考えられないほど、彼にしては切羽詰まった声色でバルディッシュが警告したが、間に合わない。

異相体の一体からの爪による一撃が、フェイトに致命傷を与えようとしたその時。

突然、異相体が血を噴き出した。

状況が読めないフェイト。

気がつくのと、まわりの異相体が次々と切裂かれて消えていく。

何も無い……いやあった。

回転する“ナニカ”が、異相体を攻撃している。

だが余りの速さに、その異相体を切り裂く何かを視認できない。

何が？ 物体の正体も分からないまま、今度は耳に、重い音が響いてきた。

猛獣の唸り声にも聞こえる、何らかのマシンの駆動音。

どんどんその轟音が、こつちに近づいて来て、発せられる方角へと目を向けた。

重々しい咆哮を上げて、舗装された大地を駆けていたのは、一台のバイク。

ネイキッドタイプか？ それともクルーザーか？

どちらにも似ていて、されど似ていなく、300kgは確実に超えていそうな凶太く、黒い車体。

最も近い車種を上げるなら……ヤマハ社のクレイジーな技術者たちが作り上げたモンスターバイク——VMAXの二代目。

だが地球で市販されているものと、現在走るコイツとは違う点も見られた。

猛禽の横顔にも見えなくはないツインアイのライトを積んだカウル。

伝説の初代のものに近くなったダミーインターク。

全体的な形状も、武骨さを残しつつ、シャープさが際立っていた。

そんな、見るからにカスタマイズされた荒馬たるVMAXを操るライダーに向かって、先程フェイトを助けた刃たちが飛んで来る。

途中、刃は空中で合わさり変形、6インチはある黒光して角ばった銃身と木製グリップが印象的な銃となり、フルフェイスのヘルメットを被ったライダーの左手に収まった。

銃を手にしたライダーは、上空の異相体たちに向け連続で魔力の弾丸を発砲。

エネルギー製の弾丸たちは、全て命中、対象は衝撃で後方に吹き飛ばされ、中には他の個体とぶつかる者までいた。

ライダーはバイクを加速、前輪を上げてその重厚な車体を20mの高さにまで飛び上がらせると、アーチを描いて跳ぶ鉄馬に跨ったまま地上に向けて、機関銃の如く魔力弾を乱れ撃った。

一気に20体近くを撃破し、地面に降り立ったライダーはブレーキを掛けると同時に転回させてバイクを急停止させ、素早くヘルメットを脱いで降り立つ。

直後、VMAXが発光して粒子状に分解され、ライダーの左腕のブレスレットに取り込まれていった。

黒こげ茶色のジャケット。

濃い青色のジーンズ。

黒い髪を伸ばして後ろでしばり、それがこの上無く似合ってしまう

ほど中性さと、精悍さが両立され、無愛想ながら、凜とした顔つきと切れ長の吊り目の少年。

諸星勇夜——ウルトラマンゼロ。

勇夜……あの人もここに来ることは、予測がついていた。

その時は、彼とも戦うとも決めていた。

だって……もう約束を守る必要も無い。もう心おきなく、自分たちのジューエルシード収集の前に立ちはだかつて、最悪お縄を頂戴するだろうから。

それなのに……空中に佇んだまま、彼の勇姿から目を離せなかった。

どうして……どうして今もこうして助けてくれるの？

どうして？ 彼はこつちを向いたが何も言わない。

無骨な無表情で、何を考えているか全然読めない彼は、魔法陣を足下に敷き、黒い拳銃形態な自身のデバイスを構える。

銃口に魔力が集まり、勇夜の魔力弾が、閃光と轟音を煌めかせながら発射された。

青緑色の魔力の弾丸は、襲いかかってきた異相体を仕留めた。

その一連の行動だけで、彼がどうするつもりなのか理解できてしまった。

明らかに、自分を助ける目的も込みで、勇夜はこの場に現れたのだ。どうして、まだ助けてくれるの？

もう敵同士なのに…… “守る” 約束を守り抜く必要なんて、もう……どこにもないのに。

彼女を揺らがすのは、彼の行為だけでは無い。

自分でも、戸惑いを隠せない。

嬉しい……のだ。駆け付けて、助けてくれたことに、喜びを感じていたのだから。

そして勇夜——ゼロが来るなら、彼も然り。  
突然、レイジングハートが光り出し、あの半透明の紋章が現れる。  
彼も来たのだ。

なのはたちがこの現象を見るのは、これで二度目な彼の固有能力、  
鏡面を伝つての瞬間移動。

紋章から、高町光——ミラーナイトが姿を現す。上着を脱いだ以外  
は制服のままの格好な光は、両手に持っていた、普通の刀にしては短  
いが、短刀にしては長すぎる刀を振るい、早速異相体を何体か切り刻  
んだ。

「大丈夫ですか？二人とも」

「うん（はい）」

「すみません、これを取りに行くのに時間が掛かりました」

光の持っている得物は、一般的な長さの日本刀よりも短い剣二振  
り。

小太刀と呼ばれる武器だ。

本物の真剣ではあるが、それ以外は特に特殊な機能も効果も持たな  
いただの刀。

しかし御神の剣を会得した彼が持てば、絶大な力を発揮する代物  
だった。

異相体たちは、ただ今推参した者たちの方が脅威だと感じたのか、  
ある者は地上に降り立ち、ある者は空から急降下して一齐に勇夜へと  
標的を変え向かってきた。

対して勇夜は、特に焦りも見せずガンモードの零牙を構え、鋭利な  
その瞳で狙いを定め。

「フォトンバレット、リードショット」

トリガーを引く。銃口から放たれ、最初は一つだった魔力スフィア  
は、途中無数に分裂して相手に突き刺さり、消滅した。

悠々と歩を進め、空から降る飛び道具を軽やかに避ける勇夜は、

リードショット……つまりショットガンの如く散弾を放つ射撃魔法——フォトンバレット・リードショットによる魔力弾をあらゆる方向へ銃口の向きを変えて何度も撃ち、自らを取り囲む異相体の分身たちを撃破していく。

ガンモードの零牙は、撃鉄の衝撃で魔力を火薬よろしく炸裂、その圧力で魔力スフィアを通常の射撃魔法よりも速い弾速で飛ばし、勇夜の任意で、フルオート、散弾とった様々な撃ち方を可能にする形態なのだ。

「ダガーモード」

押し寄せる散弾の群れに攻めあぐねる群体へ、二振りのナイフとなった零牙をゼロスラッガーよろしく投擲。

横殴りな弾丸の雨に続く、ウルトラ念力でコントロールされた刃の超高速かつ正確無比な軌道による猛攻に防戦一方な異相体たちだったが、どうにかそれらをすり抜けた数体が勇夜に迫る……が、彼によりによって肉弾戦を挑むのは、愚行としか言い様が無い。

四方からの攻撃を避けながら、相手よりも遙かに速いカウンターによる重い拳打、肘当て、蹴りを当てていく。

その身のこなしは、型がしっかりと整われ、残心も取れて洗練されているながら、若人らしいエネルギーシユさと荒々しさも持ち合わせている。

宇宙拳法で鍛えられた彼の体は、それこそ全身が武器となっており、威力はたった一打で幻影とはいえ異相体を打ち倒す破壊力を秘めていた。

「ハッ！」

徒手空拳で異形どもを圧倒する勇夜は一旦跳んで後退すると。

「ブレイドモード」

飛び廻るダガーモードの零牙を手元に戻し、鞘の付いた一振りの刀『ブレイドモード』へと変え、異相体の群れに向けて刀を腰に据え、いわゆる居合腰の姿勢で疾走、刃の有効範囲内まで一気に踏み込むと同時に抜刀した。

「デェア！」

神がかった速さの域な居合の一振りで、異相体数体が血祭りを上げた。

彼はそれだけに留めず、反撃を許さぬまま、刀を振るう。

腕、腰、足、体全体の運動を巧みに使い、前進と並行して振るわれる斬撃の数々は、異相体の肉をバターで切るような軽さで仕留めて行く。

無駄が無い。流麗であると表現できるのに、力強くも猛々しい太刀捌き。

人間でも剣術を究めれば、真剣でも常人には軌道が読めないほどの速さで振るうことができる。

ましてや師であるウルトラマンレオから体術とともに剣術を叩きこまれたことで達人級の腕前を持ち、かつ常人以上の身体能力を持つ彼が刀を持てば、いちいち魔法などで威力を強化せずとも、ただ一閃するだけでデバイスも両断する必殺の一撃となった。

だが相手も接近戦は無謀だと判断したのか、空に飛び上がり遠距離攻撃を果敢無く仕掛けてくる。

それならこつちもと、即座に勇夜は零牙を再びダガーモードにし、空中で静止させると、魔法陣が敷き、右足に風が集まってくる。

「行けえー！」

そして、かつて河川敷でシユートを披露した時のように、回転の勢いで宙を漂うダガーモードの零牙たちを蹴り上げた。

これは彼の父、ウルトラセブンが使用したアイスラッガーに光線を当て、破壊力を高めて飛ばす技、『ウルトラノック戦法』を自分流にアレンジした技——《ノックスピンスラッガー》——を魔法にしたものだ。

自分の魔力と魔法でかき集めた空気を足に秘め、宙に浮遊させたダガーモードの零牙にエネルギーを乗せつつ蹴って飛ばすことで、刃の直撃を受けなくても、刃の周りに漂う魔力と風の刃で、掠めただけで広範囲の敵を仕留めることさえできる技。

魔力と風による衝撃波を纏った刃は先程とは比べ物にならないスピードと、霞めるだけで致命傷となる広大な攻撃範囲で、異相体の分

身たちの数を減らして行った。

そして光も、勇夜に負けず劣らずの剣速で二刀の小太刀を振るい、圧倒していた。

勇夜の太刀捌きが柔と剛を併せ持った剣なら、彼の剣は柔の二刀流。

流れるような、もしくは舞うような軽やかさで二刀の小太刀を振るっていた。

切れ味は、勇夜の剣閃と勝るとも劣らぬ鋭さ。他の者らと違い、デバイスが無い身ゆえ燃費が悪く、下手に魔法は使えない。それでも、異相体を次々と切り裂くその姿は凄まじい。この結界内の戦場では一番ハンデが付いている光だが、そんな枷などものともしない奮戦振りだった。

また光は、何体が斬り伏せると、その場から移動して距離を一旦稼ぎ、再び剣を振るうを繰り返している。

適度に動き回ること、相手側が数に物をいわせた攻めを取りずらくして敵を討ち果たしていた。

勇夜がとつたのが密集する多数を逆手にとり一度に多く撃破する大胆な戦法なら、光がとるのは多数の利点を活用させない堅実な戦法であった。

そんな彼が取得している御神流の剣技は、その名の通り獅子奮迅の力を引き出す。

分身の一体が、光の一閃をバリアで受け止めたが、その腕はいきなり、粉々に砕け散った。

今の現象は、御神流の剣技《徹（とおし）》、斬撃の衝撃を、相手の体内に直接通す技。

今のように、たとえ防御されても通用する。

以前ゼロと戦闘した時にゼロスラッガーを弾かせたのも、この技。

あの時は相手がウルトラマンだったから得物を弾かせた程度で済んだが、その気になれば人体破壊も容易な危険極まる技だ。

付け加えると、御神流が実戦を想定した殺人剣以上、剣技が危険なのは当たり前では話である。

「ハアアア！」

小太刀を虚空に振るうと、切っ先から半透明で三日月状な刃が飛ばされ、複数の対象を両断。

その場の即興による、大気と自らのエネルギーを合わせた混合技だった。

御神流の剣技に、さらに二次元人としての力を加えれば相手にとっては脅威の内の脅威。としか言いようがない。

戦いは数。

数の多さが勝利の条件だ。

間違っではない。

戦場ではその方が勝率は高い。

それが常識だ。

だが今この瞬間は、そんな常識は働いてくれない。

たった二人の戦士によって数が多い方が劣勢になるという非常識が主導権を握っていた。

しかしこれ以上戦闘が長引けば、主導権は『常識』に握られることになる。

本体以外は分身とは言え、大量の魔力が蓄えられた、異相体をバツクアップしてくれるロストログアがいるので、相手には物量による消耗戦、という手段（カード）があるからだ。

「（まだ見つからないか？）」

「（はい、もう少し数が減らされれば……）」

「（光！ 俺の攻撃で気を取られた奴らの懐に飛びこめるか？）」

「（造作ありません、了解しました）」

ここで一気に勝負をつける！

二人は必勝へと誘う行動を起こした。

まず勇夜は、零牙を鞘に納めると。



「アローモード！」

彼の声と共に零牙は光り、勇夜の愛機は刀からカラーリングはそのままに、弓へと変形した。

アークスラツガーに相当する遠距離攻撃用形態——アローモード。連射力と取り回しの良さはガンモードに劣るが、威力と射程距離は遥かに凌いでいる。

魔力で編み固定した弦を、空に向けて引くと、矢状に魔力が集まっていく。

実はこの魔力の矢は、彼だけの魔力でできているわけではない。

「レイジングハート……あれって」

『集束魔法、この場に散らばった魔力を再利用しているのです』

この場での魔法の行使で大気中に分散した魔導師たちの魔力だった。

勇夜はそれを再利用したのである。

数ある魔法の中で、難易度が高い高等技術の一つ——集束魔法、〃魔導殺し〃などと呼ばれながら、魔導師としても優秀と称されるのはこのためであった。

「バニシングスピアー——レインシュート！ ファイア！」

彼の大声と共に、引き絞った手が離されて放たれる必殺の魔力の矢。上空へと駆けあがった矢は宙で静止すると、夥しい数の矢となり、その魔法名称の通り雨の如く降り注いだ。

矢の驟雨は、命中した一体たりとも逃さず異相体たちの肉体に突き刺さった。

「エクスプロード」

直後、勇夜はコマンドを唱えると同時に指を鳴らす。今の動作がスイツチとなって、突き刺す矢は魔力拡散による暴発を起こし、分身たちは跡かたも無く閃光を発して消し飛び、爆発の余波は驟雨から免れた者たちをも呑み込んで、一気に数が減った。

続いて光が攻める番。

彼は小太刀を構えると、目を伏せ集中力を高める。

深く……深く……深く、意識を極限にまで研ぎ澄まし、目をカツと開かせた。

今の光の視界は、モノクロな色合いと、動きがスローモーシオンとなった物体で埋め尽くされていた。

それは、御神の剣を極めた者が使える——奥義。

まさしく一瞬の出来事だった。

突如、異相体の分身たちの体から切り傷が刻まれ、血祭りを上げた。それも、ほぼ同時に。

なのはら魔導師にしろ、異相体にしろ、誰にしろ、こう思っただろう。

何が起きた？——のだと。

光の巨人の人間態である勇夜を除けば、誰もがその事態の全容が理解できなかった。

御神の剣士はここまで動けるのか……特異な現象を辛うじて目に刻んだ勇夜でさえも、思わず驚嘆させられる場景。

そう……光はその動きがまったく人の目に入らない速さで突き進み、ほぼ一斉に叩き斬つたのだ。

御神真刀流奥儀——《神速（しんそく）》

人間にはその意識関係無く、その体にリミッターがかけられている。

脳が、体を壊さぬよう、無意識レベルで常に制御化に置いているからだ。

神速は御神の剣士たちがそれを意識的に集中して外すことで、驚異的な速さでの移動を可能にさせるという、流派では奥義中の奥儀に分類される高等技。

使用中は視界が白黒になり、アクション映画のようにスローモーシオンになる。その間は銃弾だろうと、新幹線だろうと、荒波だろうと、自身の動きさえ当人から見れば遅く緩やか見える。

無論、これは無理をして体を速く動かす行為なので負担は大きい。二次元人の力を受け継ぎ、常人より肉体が丈夫な光も例外じゃない。

速度ならフェイトをも上回るが、消耗もそれ以上の両刃の剣だ。

現に光は、敵を斬り伏せたあとは直ぐに神速を解除しても尚、奥義使用の代償で息は絶え絶えで、膝を地面に付けざるを得なかった。

『本体の反応をキャッチ』

「あれです！」

だが勇夜たちの猛攻で敵の数が激減されたお陰で、探索に専念していたユーノとリンクは、同タイミングで本体を見つけることができた。

絶対に逃がさない！

「フォトンスピア、ファイア！」

威力は先日より落ちるが、速射できる魔力矢——《フォトンスピア》を勇夜は飛ばし。

「シュウウウウーート！」

なのはもレイジングハートからデバインショットを発射。

魔力弾と魔力矢は、それぞれ異相体の翼を正確に射抜き、本体は血と悲鳴を上げて、本体は地面へと落ち始めた。

神速の負担から回復した光は飛び上がり、まずかなり離れた距離から一気に詰めて時間差をつけて二刀による斬撃を斬り付けた。

《御神流奥儀ノ一、虎切（こせつ）》。

長距離からでも、瞬間的に肉薄し相手を両断できる抜刀術。

それにプラスして、《奥儀ノ二、虎乱（こらん）》の居合を見舞う。

×字に斬られて激痛に嘆く異相体の胸部を蹴って光は宙返りし後退。

異相体は敢え無く地面に叩きつけられた。

傷だらけな本体の下へ、勇夜は悠然と進んでいく。

最後まで抵抗する気なのか、舐めるなどばかり、無理やり立ち上がらせた異相体は彼に向かい、雄叫びを上げ突進。

しかし、その爪が勇夜の顔を切り裂く直前——

「タアア！」

——勇夜の長くすらりとした脚から繰り出された“対の先”、つまりカウンターによる上段回し蹴りが、見事異相体の顔面にヒット。

襲い来る衝撃と、慣性の荒波にを前に相手は為す術も無く呑み込まれ、飛ばされていく。

そして勇夜は、カウンターキックによる勢いを一回転で流した後、打撃の濁流に翻弄される異相体に右手に携えたガンモードの零牙の銃口を向け。

「バーン」

口から銃声の擬音を囁き鳴らして、引き金を引いた。

けたたましい爆音を轟かせて、封印の術式が込められた魔力の弾丸——フォトンバレットを頭部に撃ち込まれた異相体は、そこに埋め込まれていたジュエルシードが強制的に活動停止されたことで肉体維持ができなくなり、大地にのたうつと共に爆発。

噴き上がる火を眺めながら、火薬の代わりに魔力の炸裂による発砲で銃口から上がる煙を、勇夜は洋画でのガンマンよろしくふつと吹き上げた。

炎の中から、宿主にされ取り込まれていたカラスが飛び去り、その元凶たる宝石は何事もなかったかのように傲然と浮遊。

なのはたちは本来の目的を果たすべく、空に上がってジュエルシードに急接近。

デバイスとデバイスがぶつかりそうになったが、その直前に二人は先日起きた次元振を思い出し、下がって距離をとった。

慎重にならなければならない。うかつに触れば、先日の二の舞となる。

今地面に佇むあの宝石は、ちよつとした衝撃で次元振を起こしてしまふのだから。

なのはは光を、フェイトは勇夜をそれぞれ見た。

勇夜はガンモードの零牙をリンクに収め、光は小太刀を腰に掛けていた鞆に入れた。

「どうやらここから先は介入せず、一騎打ちを見守る立場に徹してくれるようだ。」

フェイトは複雑な内心を押し込めつつも、今は助けてくれたことと、真意はともかくチャンスを作ってくれたことに内心感謝して、バルディツシユを構えた。

「悪いけど……これだけは譲れない」

なのはもまた愛機を構える。

「うん……それはわたしも同じ」

なんでそう寂しい目をしながら、自分にはごめんと謝れるくらい、心を痛めながらジュエルシードを集めているのか、それが知りたい。

でも……今はそれが叶わないなら、どんな理由があろうとこつちも譲れない。

なのはの脳裏に、大木で覆われた街の惨状と、光に支配された市街がフラツシユバックする。

「どんな願いを持つてるのか分からないけど、フェイトちゃんには、それを使って願いを叶えて欲しくないから」

だから今は、何が何でも彼女を……寂しげな目をした女の子を止める。

光の「二人は似た者同士」って表現は的確だ。

二人とも、『超』の単語を付け加えるまでに頑固で強情。

譲れないものがあるのなら、ぶつかり合うのは必然。

だから勇夜も光も、二人の一騎打ちを許したのだ。

二人は魔法で、飛行スピードを加速させながら踏み込み。

『Scythe Slash』

『Flash Impact』

魔法で強化した互いのデバイスをその勢いを相乗させて、振り下ろした。

そしてデバイス同士がぶつかり合い。火花を散らす……とろこだったのだが。

「ストップだ！」

それを阻む者が一人、魔法陣と光と共に二人の間に突然しやしやり出て来た乱入者。

黒く分厚いバリアジャケットを羽織り、右手に無骨な色合いと形をした杖を持った少し小柄な少年。

彼は杖でバルディッシュを、左手でレイジングハートを掴みあげて止めた。

「ここでの戦闘は危険すぎる！」

余りの間が悪過ぎる介入行為。

こら！せっかくいいところだったのに、何でまたこんなタイミングで出てきて止めてんだこのKY野郎！とか言われかねない。

でも落ちついて冷静に思考すれば、彼の言うことも正論だと気づく。

いつ起爆してもおかしくない爆弾がある目の前で戦おうとしたのだから。

勇夜たちは、そうならないようフォローするつもりではあったが、

“少年”は黙って見過ごせなかった。

この場合、この場に赴くことができるなら、誰だって彼のように行動したであろう。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ、詳しい事情を聞かせて貰おう」

こうして、かなり出遅れた形で“時空管理局”が……この一件に介入した。

まただ。

またこの感じだ……これから何か起きる予感。

諸星勇夜ことウルトラマンゼロは、なのはとフェイトがデバイスを構え、互いを見据えた時に、再び胸騒ぎが走った。

実際、ジュエルシードにちよつかいをかければ、その嫌なことは現実になるのだが、そうならないようにカバーすれば良い。

今回はウルトラマンの姿になっていないので問題無く魔法は使えるし、あの二人もできるだけロストログアと距離をとるよう配慮して戦おうとしている。先日の事態が起きる可能性は低い。

だというのに、何なんだ？ この妙な胸騒ぎ。

はつきりと断定できないが、この前に感じた予感とも違う気が……何と言うべきか、深刻度……とでも表現するべきか？ 怪獣が寄越されたあの夜よりそんなに感じられない。

でも決して楽観視もできない引っかけか。

まさか……二人の一騎打ちが始まったところへ、この場に管理局の局員がいきなり現れて戦闘が強制中止——なんて可能性が過ぎり、流石にあるわけがないよな……と高を括った矢先。

「ストップだ！」

得物たるデバイスがぶつかり合う寸前、その予感をたった今現実にした本人がフェイトたちの真つただ中に堂々と転移して現れた。

高く見積もっても目測で150代くらいしかないと分かる小柄な体躯。

ブラックカラーにグレーのラインが走り、膝より下まで丈が伸びた分厚そうなロングコート風のバリアジャケット。

そのジャケットと色合いを競っているかのようにちよつと跳ねた黒い髪。

実際は10代の半分近くの歳だが、思春期に入る以前の時期特有の幼さがまだ濃く残ったあどけなさに、いかにも生真面目そうな雰囲気漂わせた童顔。

両手には銀色の籠手を付け、右手には先端が丸みを帯びていながら、フェイトのバルディッシュとはまた違った兵器としての武骨さのある杖型デバイス——を持ったその少年以外はみんな、ぽかんとした表情を浮かべて戸惑いを隠せずにいる。

勇夜もやれやれと頭が疼きそうになった。

さっきの前言を撤回しよう。いた……いました、この状況に横槍入れてくる野郎は確かに存在しました。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ！」

右手にホログラムで身分証のIDカードのCGを堂々と提示して、彼は名乗り上げた。

「(あの……勇夜、もしかしてこのお方が——)」

光はテレパシーで、勇夜に介入者の詳細を聞いてくる。

平静に努めようとはしているが、その顔は驚きと呆れが入り混じり、微かにげんなりとした顔色を浮かべていた。

王家の騎士だけあり、光は勇夜以上に一對一の決闘は不可侵なものと認識している。

だから理由がどうあれ横槍を入れて来たその少年の行為には、解せない心情も否めないようだ。

「(管理局の局員さん、あんなおチビさんなりでも、日本の警察なら室井さんみたいなキャリア組のエリート君さ)」

「(で、そのエリート君とあなたはこういうご関係で?)」

「(“向こう”の小学校からの付き合いいな腐れ縁だよ)」

クロノ・ハラオウン。

今勇夜が明かした通り、この少年は彼にとって小学校からの付き合いなある種の幼馴染な間柄で、これでも15歳、10代の半分は行っているし、歳の若さより幼い外見に似合わず重要な役職に付いている身だ。

その役職の名は執務官。噛み砕いてその職務内容の一端を説明すれば、捜査の現場指揮を執る管理職だ。

筆記、実技のどちらも試験合格率が15%以下と超難関。

そんな狭き門を潜っただけあり、彼は局員として優秀。魔導師とし



ての実力にしても、なのはとフェイトが二人で掛かってきつとしてもあしらえるくらい強い。

勇夜だってそんな彼を認め、リスペクトしているが、それにしたつてこのタイミングに出しゃばるのは……間が悪いにも程がある。

個人的には「空気読めよめえ」と言いたくなる気分であった。でも彼の判断は、間が悪過ぎてはいるが間違つてはない。どの道言うと、管理局はロストログアが起こす事件、災害の防止、阻止が仕事、クロノじゃなくても、この場に介入してきたのは明らかだ。

それにクロノが来ているということは、捜査を一任されたのが、次元航行艦アースラのクルーだということ。

勇夜にとつて、信頼できる局員たちが派遣されたことは幸いだつた。

とは言え、今フェイトを御用にするわけにはいかなかった。

臨海公園の戦場に来る前、彼は『時の庭園』が停泊している座標地点に行つていたのだが、一番の脅威たるプレシアは次元要塞ごと逃走済みだった。

こういうのもなんだが、今フェイトを捕えても、プレシアにとつて都合の良い駒が消えるだけ。

ベリアルが夢で忠告してきた通り、彼女は今狂気に堕ちて、愛娘を生き返らせる悲願を遂げるための機械、またはプログラムになり下がってしまった。

勇夜自身、あの時は、その狂気とフェイト傷付けたことへの怒りから、心から湧き上がる殺意に飲み込まれそうになり、ゼロの姿で手をかけそうにまでなってしまった。

そのプレシアを止めない限り、次元災害と世界消滅の危機は続く。もう不法収集をやらかしているが、ここでフェイトを捕えたとしても、首謀者のプレシアの居場所を絶対吐いたりしないだろう。

一方でプレシアは使いつ走りがいなくなった程度で特に気に留めず、下手すると宇宙一つを引き換えにしてまでアルハザードの道をこじ開けようとするだろう。

そんな暴走を許せば……フェイトにまで、その大罪の汚名を背負わせることになる。

一番の手は、やっぱり親子ともども身柄確保だ。

表現はアレだが、フェイトたちはトカゲの尻尾って奴であり、本体のプレシアごと捕まえなければ意味がないのだ。

なら今は、ジュエルシードによる被害抑制の為に敢えて泳がせる時。

決して褒められたやり方ではない、フェイトに報われぬ血反吐なマラソンを続けされるのだから……けどこの際贅沢は言っではいられない。

問題は、この状況からどうフェイトを――

『(マスター、あなたが策を弄せずとも “彼女” がフェイトを連れ去ってくれるでしょう)』

何か良い手はないかと考えようとしたところへ、リンクがそう告げた。

「ここでの戦闘は危険すぎる、まず武器を下げ、詳しい事情を話してもらおうか」

一方クロノは彼なりに穏便に事を進めようとするも、突如として彼の立つ地点周辺を中心に燈色の魔力光が降り注いだ。

「フェイト！ 撤退するよ!!」

魔力弾の雨を降らせたのは、人型形態のアルフだ。

リンクの言った “彼女” とは、アルフを指していたのだ。

彼女は熱くなりやすいところはあるけど、確かに余程の事態を除いて、フェイトに限ることによって言えば冷静な判断ができる。

さらに10発近くの魔力弾――フォトンランサーを発射して牽制する。

魔力弾の当たった地面は白煙を上げて、それが目くらましの役目をした。

よし、この隙に逃げてくれればよかったのだが……今がチャンスだとばかり、フェイトはその場から飛翔、宙を漂うジュエルシードに手を伸ばそうとした。

なのはおも追いかけてしようとするが、出遅れた今となっては間に合いうらない。

多分フェイトは、自分のスピードならジュエルシールドを手にしつつ逃げ切れると踏んでいたのだろう……でもクロノの力量を知っているこちらからしたら、その判断はミス以外に他ならなかった。

フェイトの細く伸びる指でできた手が、空色で菱形の宝石に触れようとしたその時。

「きゃっー」

フェイト目がけ、いくつもの水色の閃光が襲う。

クロノが右手に持つ無骨な杖型のデバイス、S2U（エスツーユー）から魔力弾を放ったのだ。

その狙いは正確で、弾丸はフェイトの腕に命中、態勢を崩され、痛みで飛行維持ができなくなった彼女は落下していく。

「フェイトちゃんー」

猛スピードで飛ぶフェイトを正確に狙い、一撃で追い込んだクロノの魔力弾は威力こそは高いと言えない——が、元々防御系統の魔法が不得意で、攻撃は受けるより避けるのが主流なスピードタイプな彼女には、大きな決定打となってしまったようだ。

「フェイトー」

地面に激突する寸前、アルフがすんでのところでキャッチし抱きかえた。

ダメージの影響でフェイトの呼吸は荒く、頬が熱をこじらせたように紅潮していた。

そんな彼女たちに、ポーカーフフェイスでS2Uを構え、狙いを付けるクロノ。

人間は一定以上の魔力ダメージを受けると、一時的に意識を失う、非殺傷設定でも有効

であり、クロノはそれが狙いで二人を撃つ気だ。

真っ向から局員に抵抗する意志を提示した以上、荒いやり方で拘束されても文句は言えなかった。

とどめの一撃を、クロノが今まさに放とうとしたその時。

「やめて！ 撃たないで！」

なのはが、射線上に両手を広げ立ち塞がる。傍からは引導を渡されそうになる光景に居ても立ってもいられなくなったようで、身を以てフェイトたち庇おうとしていた。

「なっ！」

さすがに発射を止めるクロノ。

その僅かな間に、勇夜と光は飛び上がってなのはの横に着地し、フェイトに手を出さぬようクロノの前に立ちはだかった。

なのはが咄嗟にやらずとも、フェイトがジュエルシード確保を優先した時点で勇夜らはこうする気でいたのだ。

「早く行け！ こいつは俺たちが何とかする！」

「(今の内に逃げて下さい)」

「(す……すまない！)」

アルフはフェイトを腰に抱えつつその場を飛び去り、転移魔法で姿を消した。

「………どういふつもりだ勇夜、君ともあろう者がみすみす取り逃がすなんて……」

まさかの立場では「味方」であり友でもある勇夜が「重要参考人」の一組を庇い立てて逃走補助した件で早速、クロノはその意図を尋ねて来た。

「まだあいつらを捕まえるのが早いと思っただからさ、ほらよ」

勇夜はそう言いつつ、ジュエルシードに手を向けると、菱形の宝石は掃除機のごとく彼の手に吸い寄せられ、それをクロノに投げた。

無論この能力はウルトラ念力、一応テレキネシスというレアスキルで、周りには通している。

だが名称が違うだけでどちらも念力、嘘は言っていない。

「早いって……君は」

彼の言うことも分かる。

ロストロギアを不法に集める犯罪者を逃がすことになったのだから、公務執行妨害と見なされても仕方ない。

ちゃんとそれらについて説明するつもりだが、その前に張りつめた

この空気を緩ませるとしよう。

「お堅いチビクロじゃ話にならん」

「なっ!? 君はまたそんな呼び方で!」

しれっとした顔で勇夜は大気を変質させる一打を放った。

体格に関連する「あだ名」で呼ばれたクロノは、「公人」としての顔から、歳相応の少年の顔に様変わりしていた。

かれこれ執務官の任を三年務めるクロノではあるけど、彼とてまだ10代の男の子ってやつである。

「じゃあチビクロ改めてまっクロノ執務官どの」

「その名前でも呼ぶなど言ってるだろ! エイミイといい君といい……」

「だつたらちつとは受け流せよ、そんなカツチカちなおつむだから」「鉄頭」なんだよ」

「君がフランク過ぎなんだ!」

ちなみに勇夜の口から発された「鉄頭」とは、彼お手製の造語で、石頭よりお固い頭という意味合い。

「まあいいや、さっさとリンディ出せ」

「だからかあさ……提督を呼び捨てにするなども——」  
『はいはい、そこまで』

勇夜の計画通り、真面目な性格を利用したクロノいびりで先程の張りつめた状態から一転して漫才のような空気になり、光ら当事者以外の面々が呆然としていたところを、タイミングよく通信による3Dモニターが現れ、画面に映る女性が場を制した。

ミントグリーンの長髪を勇夜より高い位置でポニーテールにした見た目は20代で、知的さとほんわかとした雰囲気併せ持った物腰の女性。

クロノの母で、上官でもあり、アースラの艦長でもあるリンディ・ハラオウン。

役職は提督。日本の警察で喩えるなら「管理官」に相当する管理職だ。

「すみません、もう一人の少女は逃がしてしまいました」

『ま〜大丈夫でしょう、彼も彼なりの意図あつての行動だろうし』  
第一印象に、『堅物』って言語が即浮かんでくるお堅いクロノ少年とは対照的に、母である彼女はかなり大らかな女性だった。

『で…あなた方にもわたしたちの船に来てほしいのだけれど、大丈夫かしら？』

「俺は問題無いぜ…：光（リヒト）たちはどうする？」

「同行します、これまでの経緯を話さなければならぬでしょうから」

クロノ君という名前の魔導師（まほうつかい）の男の子が、フェイトちゃんを攻撃しようとした時、とっさに私は庇っていた。

はたから見たら、おかしい行為だろう。

これから戦おうとした相手を助けるなんて。

そもそもあの子をできるなら、助けになればと考えているのに、戦いになっている時点で色々とおかしなだろうけど。

でもあの時、どうしてもああしなきゃ…：て思った。

光兄と勇夜さんのおかげでフェイトちゃんは逃げられたけど。

それでわたしたちは今クロノ君の魔法によって、どこかの建物の廊下にワープしていた。

「（ユーノ君…ここって）」

廊下を進みながら、ここがどこかとユーノ君に聞いてみる。

「（えっと…、簡単に言うと、いくつもある次元世界を、自由に移動する為の船だよ）」

「（あんまり、簡単じゃないかも…）」

ちんぷんかんぷんとは、正にこの場合のことを言うのでしょうか。

ユーノ君の説明は難しく、全然頭に入りません。

『（なのは、宇宙がどんな形をしているか知っていますか？）』

勇夜さんのデバイスであるリンクがいきなりそう質問してきました。

そう言えば“諸星勇夜”としてこの人と会うのは、河川敷のこと

を除いて、これが初めてです。

兄から、やつぱり勇夜さんがウルトラマンゼロだってことは聞いていたけど、本当に見た目は日本人にしか見えません。

勿論、この人が『宇宙人』だったくらいで、嫌がる気はありませんけど。

「わ：わかんないです」

正直に、リンクさんからの質問に答えました。

『星のように、球体でできているのです、そして宇宙の外には、たくさん宇宙が泡のように幾つも存在する空間が存在しています、一般的に地球の天文学ではマルチバースと呼称される空間です、ここはそこを渡るための戦艦』

なんとなくだけど、例えも出してくれたお陰で彼女の説明の内容は分かりました。

つまりここは、そのマルチバースって言う海を泳いでいる船なんだと。

『(分かりましたか?)』

「(なんとか：です)」

「いつまでもその格好というのも窮屈だろう。バリアジャケットとデバイスは解除しても平気だよ」

そうクロノ君に言われて、ようやく自分がレイジングハートを起動したままであることに気がつきます。

「レイジングハート、モードリリリース」

『A l l r i g h t』

愛機を待機状態にし、格好もバリアジャケットから聖祥の制服姿に戻る。

「お前も元の姿に戻った方がいいんじゃないのか？」

「ああ、そういえばそうですね、ずっとこの姿でいたから忘れてました」

勇夜さんに指摘されたユーノ君はその身を輝かせると、人間の男子の姿に戻った。

最初にユーノ君が『人間の男の子』だと知った時は本当驚きました。

魔法がある世界なんだから、てつきりしやべるフェレットなんだだと勘違いしてしまったからです。

光兄に言われなければ、この時までずっと知らなかったかも。

でも、忘れてたつてユーノ君……地球人に変身している光兄と勇夜さんと違って普通の人間の男の子なのにと、苦笑いしてしまいました。

そんなこんなで、勇夜たちはリンディのいる艦長室の扉の前に着いた。

「艦長、来てもらいました」

シンプルで無機的な扉が両端にスライドし、その先にあつたのは――

「……………」

――ドアの向こうにある部屋の内部の有様を見たある三方は、言葉が出なくなる。

言葉の通り、目も点になり、呆然自失に開いた口が塞がらなくなつた。

日本人であるなのは。

日本人として生活してきた二次元人。

ある程度、日本文化に精通しているM78星雲人。

この三者から見て、それはとてもとてもシニールな光景だったのだ。

床は座敷と畳で土足厳禁、壁のまわりには盆栽がいくつも置かれ、室内にもかかわらず桜の木が一本立っており、わざわざ空調で桜吹雪まで演出している。

そして部屋の中央には――

「お疲れ様、四人ともどうぞ、楽にして」

――どう見ても日本人どころか地球人からもかけ離れた容姿をしたリンディ・ハラオウンが茶道具を揃えつつ正座して待っていた。



もう、どこから突っ込んでいいのやら、困り果てる……ハリウッド映画よりはまだ純然たる和室のだが、室内に桜と壁や天井やガラスが反して未来的で無機質、さらに獅子おどしまで置かれている始末なので、その手の映画でよく見る、『なんちゃって日本像』からは抜け出していない。

本人の言い分では、一応現地の人間さんに尊重したつもりらしいのだが、茶道の経験者でもない、こんな場を体験している現代人はそう滅多にいないので、却って逆効果な気もしないでもない。

とりあえず彼女に言われた通り、勇夜、光、なのは、ユーノは座敷に正座で座り込んだ。

「久しぶりね、勇夜君」

「ああ」

と、挨拶を交わす勇夜とリンディ。

このやり取りからでも、結構な年月の付き合いをしていると窺える。

「初めましてね。私はリンディ・ハラオウン。この次元航行船アースラの艦長をしています」

「高町光と言います」

「高町なのはです」

「ユーノ・スクライアです」

そうして自己紹介の後、リンディから出された文化錯誤な部屋に反して、見た目も味も本物な和菓子と茶を頂戴しつつも、今日までの流れを彼女たちに話した。

「なるほど。あのロストログア、ジュエルシードを発掘したのはあなただったのですね」

「はい……それで……僕が回収しよう」と

ユーノは思い詰めた表情で呟く。

最初にこの世界に来た時よりは、『自分で全部なんとかしなきゃ病』は治まっているが、やはりジュエルシードの起こす災害を目にしてきた以上、それを発見してしまった責任感はそう簡単に拭えない様子だ。

「立派だわ」

リンディは彼のその心意気を称え。

「だが同時に無謀でもある」

息子のクロノは彼の行為を咎めた。

ハラオウン親子の発言は、どちらも正論だ。

責任を果たすというは立派だし、それを果たそうとしない大人がうようよしている世の中では、彼の爪の垢を煎じて飲ませたいと思える。

だが、クロノの無謀という発言には、勇夜も光もなのはも同感だった。

なんせその先が文字通り無謀過ぎたのだ。

まず単身で碌に、目的地に関する知識も無いまま、管理外世界に入り込んだこと。

勇夜は前々から、知識で地球、日本のことは知っており、フェイトも日本に来る前は、現地の下調べをし、二人とも一時的な住みかを確保していたが、ユーノは事態の收拾に焦るあまり、それらを怠ってしまった。

次に彼の持っていた、今はなのはの愛機であるレイジングハート。

このデバイス、実はスクライア一族が発見した出自不明の謎に包まれた代物で、なのはと契約するまでは正式に契約者として登録させてくれなかった。

そのため封印などの一部の機能を除いてほとんど万全に使用できなかった。

最後には地球での魔法行使。

魔導師は大気中にある魔力素を取り込みエネルギー源にして魔法を使用する。

だが慣れない異世界で魔力素を取り込み過ぎると、適合不良と呼ばれる現象によって、体調不良をおこしてしまう。

なのはが夢で見た異相体との戦闘で、彼が封印に失敗したのも、その適合不良が最大の要因。

かのウルトラマンゼロも、かつて似たような現象に陥ったことがあ

る。

ウルトラ戦士の主な力の源は、太陽光線などの光エネルギーのだが、ゼロが初めて異世界に来た際、その世界の太陽エネルギーを吸収できず、巨人の姿を長時間維持できなくなってしまう、もしもの為にと父のセブンから託されたウルトラブレスレットに貯蔵された非常用エネルギーを短期間で連続使用をせざるを得ないことになってしまった。

未知の土地に行くには、それだけのリスクがあるのである。

そんな様々な悪条件が重なり、ユーノは極度に消耗したことで魔法適性のある地元の住民の協力を頼まないといけなくなり、なのはと光Ⅱミラーナイトが協力者としてこうしてここまでに至っているのである。

まあ高町兄妹の協力を得られたのは、不幸中の幸いであった。

なのはたちが見つけてくれなければ、人間の姿にしる警察に補導、フレットの姿にしる外来動物として捕獲され、探索どころではなくなっていたかもしれないからだ。

話を戻そう。

「あの…そもそもその『ロストロギア』ってなんですか？」

なのはにとっては聞き慣れない単語が出てきたので、質問を試みた。

「んんん遺失世界の遺産…って言われても、ピンと来ないわよね」

「はい…」

この世界には様々な次元が複数に、同時に存在している。

その世界の中には、極端に科学技術が進歩しすぎる文明が出てくることもあり、時として度を超えて発達しすぎた技術は、やがて文明そのものを滅ぼしてしまうことになってしまう。

そして文明崩壊後に残された厄介な置き土産、危険極まりない遺物。

「それらを総称して、『ロストロギア』と呼ばれているの、私たち管理局や保護組織が正しく管理していなければならぬ品物」

そのロストロギアも一つであるジュエルシードは、次元干渉型の工

ネルギー結晶体、特定の方法で起動させれば、空間内に次元震を引き起こし、最悪次元断層さえ巻き起こしかねない危険物。

一昨日のように一個だけでもあれだけの被害を出すのだ。複数が同時に発動して、暴走を起こせば、地球で起きる災害以上の地獄が顕現しかねない。

「次元断層が起れば、世界の一つや二つ。簡単に消滅してしまうわ。そんな事態は防がないと……」

リンデイはそうロストログアの危険性を説明しながら、緑茶に大量の角砂糖とミルクを入れていた。

「(うげ……)」

もう一度言おう。

『緑茶』に、大量の角砂糖とミルクを放り込んだ。

話している内容の深刻さとは裏腹に、これまたシュールな光景。緑茶という飲み物がどんなものか知っているだけに、なのはも、礼節をわきまえる騎士であった光でさえ、げんなりとした表情で引いている。

茶とは苦みを味わう飲み物であるのに、こうなっては最早苦味なんて欠片も無い、跡形もなく消えているだろう。

見ているだけで、胃がもたれる感覚が襲ってきて、精神面で気分が悪化。確かに、緑茶に砂糖を入れる習慣がある地域が地球にもあるにはある……が明らかにこの艦長の飲み方は、限度が許容範囲を越していた。

「まだそこまでしねえと、まともに飲めないのか？」

どつぷり入った砂糖やらシロップやらで、もはや液体と言うよりジェルになった「緑茶だったもの」を嬉々とした表情で飲むリンデイに、勇夜が呆れた顔つきで苦言を呈する。

「失礼ね、私にはこの味が一番気に入っているんです」

「勇夜、それはどういう？」

まさかこの人のこの常軌を逸した行動に、勇夜が係わっているのか？

「実は前に「なんだかんだあつて」、この人に御中元で緑茶を送った

んだが…」

流星に苦すぎると、クレームとまでは言わないが、苦言を呈され、彼は以前読んだ本で、地球のある地域によっては砂糖を入れる習慣があることを思い出して彼女に薦めたら、こうなってしまったわけらしい……この人は想像以上の甘党だったのだ。

「(その「なんだかんだ」との詳細は……長くなるから今度にしてほしいよね)」

「(察しがいいな)」

どうやら、勇夜とクロノたちが今の関係になるまで、ちよつとした紆余曲折というものがあつたようだ。

「話しが逸れましたが、これよりジュエルシードの回収は私たちが担当します」

一度は大甘な緑茶でブレイクされたシリアスな空気が、部屋を支配する。

「え……」

なのはとユーノは、リンディの発言を完全に飲み込めずにいた。

「君たちは今回のことは忘れて、それぞれの世界に戻るといい」

「でも……」

「ランクSS+の危険なロストログア、しかも次元干渉に関わる事件だ、民間人に介入してもらうレベルの話じゃない」

クロノはそう言ったが、二人とも納得できない様子だ。確かに本来なら、こういう事件は管理局のような警察組織がやるべきであつて、民間人がどうこうできる問題ではない。

彼女たちがこういうことをしていること自体、異常な状態なのだ。

「……………いやです……」

目を伏せて、震えながら言葉を絞り出すなのはその様に、その場にいた一同は全員彼女に目を止めた。

「なののは?」

「そんな……何も無かつたみたいにやめるのは……絶対嫌です!!!」

なのはは、普段の彼女の言動から考えられない剣幕で反論する。

この時のなのはの脳裏には自分のミスで勇夜Ⅱゼロが尻拭いをし

てくれなければ大勢の死者を出していたジユエルシードが起こしたあの街の惨状を含めた、ジユエルシードが引き起こしてきた災害が掠めていた。

「しかし君は…」

「嫌なんです！このまま中途半端に終わっていつもの生活に戻るのも、そうやって中途半端に後悔するのも!!」

惨状だけではない。

フエイト……まだあの子の目的も聞いていない。

まだあの子の瞳に映る寂しさの訳も知っていない。

まだ……あの子の目的を聞いた後、あの子をどうしたいのか、整理がついてない。

なのにここまま引き下がって、後悔するなんて……どうしてもなのは嫌だった。ここまで深く状況の一部としてかかわってきた以上、今更下がれと言われて、素直に従えるわけがなかった。

「落ちつけ」

「勇夜さん……」

珍しく激情をあらわにするのはを、勇夜が宥めた。

「艦長さんらはこう言ってるけどな、本音は猫の手も借りたいのさ、だろ？」

「察しがいいわね」

笑みを帯びた勇夜の物言いに、苦笑で返すリンディ。

少なくとも、一方的に現状から引き離されることはなさそうだったが、かと言って易々と本来は普通に学校に通って学業に勤しみ、友達と娯楽を堪能している筈の少女に頼るほど彼女は恥も外聞もない人ではなく、一日今後どうするかを思案する時間を設けることとなった。

「それからすまないが、そちらのお二方は先に席を外してくれないか」  
なのはとユーノは、クロノからいきなり、『勇夜と光は残した上で退室しろ』という意味合いの言葉を受けた。

「君のお兄さんと友人にちよつと、お話したいことがあるの」

リンディはそう言ってくれたが、なのははどうしても不安が消えて

くれない。

だってこの二人は、自分にとっては人間と変わりない。

でも、同時にこの人たちの正体は50Mもある巨人であり、全ての人が自分みたいに恐れを抱くことなく受け入れてくれるとは限らないくらい、小さい身ながら理解できている。

なのは前にテレビで見た、とある映画を思い出す。

守っている人たちから、差別と偏見を受ける超能力を持ったヒーローたちのお話だった。

自分はともかく、あの映画のように兄たちのことを好ましく思わない人だって……おまけに二人は、その超能力者たちより、強大な力を持っている。

「なのは、ユーノ、二人は外で待っていて下さい」

光からの言葉もあり、二人はこの部屋から退室した。

「で、俺たちに何の話があるってんだ？」

なのはとユーノが海外映画風のなんちゃって和室から退室したのを見計らい、勇夜はこちらから

「正直なところ、二人に聞きたいことは山ほどあるんだが……特に勇夜、君には——」

「はつきり言っても構わないんだぜ、俺が『光の巨人』だって」

ハラオウン親子の表情が驚きに染まった。

二人の態度から見て、推測は確かにしていたようだけど、こんなにあっさり白状されるとは予想だにできなかったと見える。

対してこっちは、なのはたちを退室させた時点で、薄々正体に関する話がお題の一つだと見当ついていた。

「お見せしましょう、論より証拠とも言えますし」

余り自分たちの正体は大っぴらにはできないのだが、こうでもしないと得られない信頼だってある。

それに、それなりの年月を重ねた付き合いで確信していた。

クロノたちになら………「正体を明かせられる」と。  
二人はその場を立つ。

勇夜はリンクからウルトラゼロアイを取り出して構え。

「ミラー」

光はミラージュアイズの前で両腕を横に重ね。

「デュア！」

片や額に装着し。

「スパーク！」

片や両手をクロスさせた。

二人は眩い光に包まれ。

それが収まると二人は本来の姿を現した。

片や青と赤に彩られ、柔軟さと逞しさが両立したボディに銀色の鉄  
仮面と金色の瞳。

片や銀と緑で彩られたスレンダーな体と、目や口などの代わりに漢  
数字の10にも翼を広げた白鳥にも見える黄色い光沢がついた顔。

そしてどちらも無機的だが、何らかのスーツの類ではなく、純粹に  
その生物のものと言える体表。

人間と同じ体格をしながら、人とかげ離れた容姿をした『人』がそ  
こにいた。

「何豆鉄砲をくらった顔してんだよ？」

「ごめんなさい、こうもあっさりあなたが明かすとは思わなかったも  
のだから」

思わずリンディは苦笑いで返した。

「仕方ありませんよ、この世界では、私たちのような姿をした人種と本  
格的なコンタクトは、まだ果たせていないのですから」

「それもそうだよな………改めて自己紹介する、この姿の俺の名は、  
ウルトラマンゼロ」、そしてこいつは俺の仲間で——」

「ミラーナイト………本名はリヒト・シュピーゲルと申します」

巨人としての名を明かして、二人は人間態へと戻ると、自分たちの  
関係と、こちらの世界に迷い込むまでの経緯を大まかに打ち明けた。

「そうか、だから君は管理局への本格的な入局を拒んでいたのか……」



「ああ……『変身』できなくなつたお陰で、嫌つてほど思い知らされたからな……俺がどんだけ『物騒』な野郎だつたつてこと」

勇夜が囑託魔導師という立場を貫いていたのは、彼の束縛を嫌い体質と、管理局そのものシステムへの疑念とつた理由もあるのだが、一番の『理由』とは……自分が『ウルトラマン』であるということだつた。

強過ぎるのだ、強大過ぎるのだ……ウルトラマンのその巨体と、その圧倒的な力は。

特に、特定の組織の下で、その共同体の思惑のまま力を振るうなんてことは、絶対にあつてはならない……それは大きな災いを生む種となる。

この世界での10年間で、勇夜——ゼロはそう学ばされたのだ。

「あなたと光君についてはよく分かりました、でも勇夜君、ここからが本題なのだけれど、どうしてあの女の子たちを逃がすような真似をしたの？」

尤もな問いだ。

フェイトたちに罪を重ねてほしくないのなら、本来はあの時クロノと一緒にお縄を頂戴するべきだつた。

冷徹ではあるけど、その方が正しい判断であつたのは勇夜とて理解できる。

「あのなのはつて子もそうだが、さつき僕から少女を庇つた時の君は、彼女に対して何か個人的な思い入れがあるようだつた」

「……………」

「凶星だね」

頷いて、凶星であると勇夜は肯定する。

「凶星さ……けど、分からねえんだ」

彼の顔は、自嘲染みた笑みを形作つていた。

「分からない……つて？」

「自分でもよく分からねんだよ……なんであの子……フェイトに——」

拘っているのか……気に掛けているのか……想っているのか。

正体の分からない思い。

昨日、突き離れたも同然な言葉をフェイトにぶつけておいて、自分は今でもあの子を縛り上げる鎖を壊して、解放してあげたいと思っ  
ている。

わけは、家族の温もりに恵まれない境遇に、自分と重ね合わせてい  
る………のもあるけど、今となっては、それ以外にもナニかあるよう  
な………気がする。

そこまで行き着いているのに………何度考えても、どうしてそこまで  
フェイトって女の子に拘りを見せているのか、いくら必死に考えても  
全然はつきりせず、答えが見つからず仕舞いだった。

きつと、光の義妹（いもうと）、なのはも同じ気持ちを抱いてること  
だろう。

それもあつて、さつきもあそまで我を通そうとしたんだ。

「でもこれだけは分かるんだ………フェイト・テスタロッサの心を救  
わない限り、この事件は解決にはならないんだって」

けれど、そんなこと瑣末なことだったんだ。

分からないから何だっけ言うんだ？

余計な御託なんていらぬ。

フェイトを救いたい、助けてあげたい。

命だけでなく、あの子の心も………守りたい。

そして、あの時見せてくれたフェイトの温かな笑顔、それを何とし  
ても守り抜きたい。

この心には、そんな赤く熱い鼓動が確かに存在する——それだけは  
はつきりしていた。

なら今は——それだけで充分だ。

## EP18 | 問われる覚悟

「光兄ー！」

なんちやって和室もといアースラ応接室から出てきた勇夜と光。  
とそこへ、いきなりなのはが光の身に抱きついて来た。

「なのは？」

「(何も……悪いこと……されてないよね?)」

光の腰を巻き付けた腕の力を強めながら、兄の安否を気遣うのは。

彼女のことだから、ハラオウン親子を信じていないわけではなかったろうが、もし…異星人で巨人な兄たちが何かよくないことをされたら……少女の齢なりにネガティブな想像が掻き立てられてしまつて、それで今の行為に至つたのようだ。

「(大丈夫ですよ、現にこうして無事なのでですから)」

栗色の髪を優しく撫でながら、なのはを安心させようと接する光。

「よかつた……」

その彼の態度に、ようやくなのはの心は落ち着きを取り戻し……たのだが。

「兄貴にゾツコンなのは分かるが、もう少し周りを見てくれねえか」  
勇夜のからかい気分が多数を占める発言をきっかけに、落ちついたら落ちついたで今度は兄に抱きついた自分の行為と、少数とはいえ衆目に晒されていた状況を自覚され、恥ずかしさで頬の熱が急上昇して赤く染まっていく。

ユーノも、どう切り出したらいいか測りかねる様子で苦笑いを浮かべていた。

「もう、余り義妹(いもうと)をからかわないでもらえますか」

棘のあるものにならぬよう留意して、光は勇夜に忠言する。

そう言えば、仲間たるこのウルトラ戦士は、4人で真空の海を旅していた頃から結構相手をおちよくる癖を持っていたのを思い出す。

戦闘では勇壮さと苛烈さが目立ち、今ではクールさも磨きがかつた彼だけど、ジョークを飛ばすくらい根はきさくで砕けた一面も、良

い意味で相変わらないうだ。

「悪かったよ、俺にもなのはと同じくらいの義妹がいるから、つい調子乗っちゃった」

「例の、(っ)先祖様が日本人の方ですか」

「ああ、特に下の子はかなりのやんちゃ坊主で帰ってくる度に、ミサイル見てえな体当たりで抱きついてくんだけどな」

ミサイルとは何とも物騒な表現ではあるが、実際彼にはミサイルなんて人間態でも『へ』でもないのだから性質(たち)が悪い。

けれど、言い方とは裏腹に微笑ましい勇夜の表情から、彼もまた妹を溺愛し、兄妹間の関係はとても良好なものであると容易に窺えた。

ひよつとして勇夜、ゼロは天性の兄貴気質があるのでは？

根拠はある。彼は二次元世界とエスメラルダのある宇宙——エメロードスペース、勇夜—ゼロが初めて訪れた別世界ということと通称アナザースペースとも言う宇宙に来た際、惑星アヌーでベリアル軍の侵攻で重傷を負った青年ランと一時的に一体化したことがある。

そのラン青年には、ナオという当時はなのはくらいの歳の弟がいた。

最初こそベリアル軍の侵略ロボット、ダークロプス（モデルがゼロなのだから当然だが）にそっくりな得体の知れない巨人に、兄を乗っ取られたとも言えたので戸惑ってはいたが、彼の一目荒い口ぶりに隠れた真摯な人柄に触れ、すぐに彼を『ゼロ兄貴』と呼んで慕うようにまでなった。

案外、彼の人柄は特に小さい子に惹かれるのかもしれない——などと考えていると。

「いいじゃない、兄妹仲が良いのは」

婦人警官を彷彿とさせるスカートタイプ制服を着込む、ショートカットな茶髪の跳ね具合と、年中顔をニコニコさせてそうな佇まいが特徴的な女の子がやってきた。

見た目ではクロノと歳の差がありそうだが、彼が小柄なだけで実際は同い年と見ている。

「勇夜、この人は？」

「ああ、この船の通信主任で、クロノとは同僚であり執務官補佐役でもある」

「エイミィ・リミエッタ、エイミィと呼んで下さい」

「高町光です、この子は妹のなのはです」

「よろしく、なのはちゃん」

「はい、よろしくお願いします」

勇夜が『鉄頭』と評するのも納得な堅物君の趣がある執務官殿と違い、気前の良い、社交性豊かな補佐官、それが光から見た第一印象だった。

生真面目な上司のサポートには、これくらいの陽気さが適任なのだろう。

「勇夜君も久しぶり、二年ぶりだよね」

「お前もあの鉄頭も相変わらずで安心したぜ、今でも隙ありやあいつをからかってんだろ？」

「当たり前、クロノ君ほどからかい甲斐のある子はそうそういないからね」

しかし、趣味が同僚でもあるとはいえ上司へのちよっかいは、なんだか仲間の炎の用心棒と鋼鉄の武人のやり取りに似ていたさっきの勇夜に弄られる執務官を見るに、彼はかなりからかい甲斐のある方らしい、正直に言えば同感ではある。

ああいう真面目君な手合いは、特に年上の女性たちには愛くるしいとさえ感じてしまうでしょうから。

なので、実状はさておき、彼が異性関係で苦労している様が容易に想像できてしまった。

「俺も同感だが、上官への態度としてはどうかと思うけどな」

「彼には私みたいのが一人くらいいた方がいいの、でないは無愛想で付き合いくらい堅物君になっちゃう」

「そいつは確かに言ってる、ポーカーフェイスのつもりでももろに顔にでちゃうからな、アイツって」

「そうそう♪」

根はきさくくな勇夜と、社交性溢れるエイミィは相性が良いのか、執

務官君を弄り倒しながら和気あいあいと談笑していた。

「いけねえ、無駄話が過ぎたな」

勇夜はデニムジャケットの内ポケットから、USB状の物体を取り出してエイミィに手渡した。

「あの黒いの魔導師たちに関する捜査資料だ、アレックスたちにも回してくれ、こいつに書かれてることはさつき口でリンディたちに伝えてあるからな」

「ありがとう、それじゃね♪」

仕事中でなければ、絶えずお喋りしてそうなくらいお喋り好きな補佐官は、艦内の廊下の向こうに消えていった。

「なんと言いますか……『柔軟』』という概念を人型で具現化したような方ですね」

「だからクロスケのサポーターが務まんだよ、あいつくらいじゃなきゃ長くは続かねえ」

「亀吉さんが来るまでの特命係じゃないんですから」

と突っ込む一方で、確かに言ってる、とも頷かされる光なのであった。

4人は、行きにも使用したアースラ船内に備えられている転送ポートから、海鳴市の臨海公園の敷地内へとワープして戻ってきた。

空と太陽が既にオレンジ色となった時刻であったが、空が夜に染まるほど日は沈んではいない。

ふと、勇夜は視線を感じ、その見えない線の発信原であるのはの方を見た。

「どうした？」

「あ……あの」

ところどころこつちを見て、何か言いたげのようなのだが、どうしても止（とど）まってしまう……そんな様子。

話題が分かっている。

「フェイトちゃんの……ことなんですけど」

当然ながら、フェイトのことだった。

「勇夜と同じ……寂しい」目をしていると

先日にも光から聞いた、なのはのフェイトに関しての印象の言葉を思い出す。

そう言えば、この子も自分と似たような理由……自分でも分からない程なフェイトへので、あれだけ彼女の「想い」を知りたいと思いい、話し合うことを求めていたのだった。

「フェイトちゃんから聞いてませんか？ その…ジュエルシードを集めてる理由とか」

フェイトとは一度交戦した後、表向き停戦協定みたいなものを結んでいた——つてことは光にはもう話しているから、その光から聞いたのだろう。

それぐらいは許容の内だ。彼が明かさなければ、自分からちゃんと話すつもりであった。

だが……この子に「真実」を伝えるその前に、聞いておかなきゃならないことがある。

「で……あんたはフェイトのことを知って、どうしたいだ？」

「そ……その……」

フェイトとは、ある程度付き合いを重ねていったことで、勇夜が痛感していた。

あの子には、対等に付き合い合える同い歳の友達が必要だと。

外見年齢相応より少ない彼女の人生では、今まで年上か年下しか、付き合いが無い。

自分なんて、ぶつちぎりの最年長の5900歳、母のプレシアより年上だ。

やっぱり、彼女には同じ高さに立つ関係な「友達」が必要なのだ。

たとえばあつて敵対する間柄でも、ちゃんと自身の気持ちを伝え、相手を理解しようとする気持ちを持っている、それこそなのはみたいなのが。

「ジュエルシードは渡したくない、でも彼女をどうにかしたい、でもどうしたいのか、まだ分かんない——だろ？ 高町なのは」

だからと言って、この間まで普通に学生をやった小学5年生の女の子に安易にお願いするつもりはない。

そのために、勇夜は敢えて、静かに淡々しつとも厳しさが含まれた声色で、問いかける。

「はい…」

「中途半端に関わって、中途半端に後悔するなって前にも言ったよな」  
「はい…」

単に知りたい気持ちだけでは、フェイトと、フェイトが「抱えているモノ」に関わってほしく無い。

それだけではきつと、この小さな女の子の心は耐えられず押し潰されてしまうだろう。

なまじ、他人（ひと）の痛みを感じ取れてしまう感受性を持つゆえに。

「あの子の境遇は、はつきり言って重すぎるぞ」

フェイトが背負わされているのは……彼女の境遇、彼女の家族が抱える咎、あの子自身も知らない出生、それに……この事件が終わる頃には、あの子は自分の支えにしているものを失うことになる。

一生抱えなければならぬ罪と過去と痛みはずつと足枷のまま、生きていかなきゃならないのに、きつと独りでは抱えきれず、下手すれば「楽になる」道を選んでしまうかもしれない。

それだけの重みが、フェイトと言う少女には確かに在るのだ。

「それでも知りたいなら………：………：腹、括れるか？ 高町なのは」

誰だろうと、他人の背負っているモノを完全に代わりには背負えない。

人によつては、自分の痛みなんて他者には理解できないなんて言う奴もいるだろう。

現に……かつての勇夜―ゼロはそうだった。

自分の苦しみなんで、誰にも解るわけないと、周りに牙を向くことしかできない大馬鹿野郎だった。

それでも自分を救ってくれた人たちのように、その人を心から、な



んとかしてあげたい、助けたい、少しでも胸の痛みを一緒に受けて支える、その心意気と覚悟があるのなら。

それは、目の前の少女への問いかけでもあり、同時に自分自身への問い。

気がつくくと、日は水平線に半分浸り、空には星がいくつかが光を発し、街灯も灯りをともし始めていた。

「なのは…」

なのはは暫く、俯いて黙ったままだった。

ユーノが心配そうに彼女を呼び掛け、光は黙して見守る。

だがやがて下を向いていた視線を勇夜に向け、真っ直ぐこちらに見据えた。

「はい」

さつきとは違う、決意に心身を固めた佇まいで勇夜を見上げていた。

彼女の姿を前に、心の内で微笑む勇夜。

光の言う通りだ……ホントにこの子もとんだ頑固ちゃんだよ。

フェイトと「似た者同士」だったのも、全く頷ける。

真実を知ってしまえば、今固められた決心が揺らぐかもしれないけれど……確かに想いは受け取った。

ならば、ちゃんと応えてあげなければならない。

「分かった」

勇夜は目を閉じ、右手の人差し指と中指を立て、側頭部に付けると、それをなのはたちに向けた。

指先から放たれた「思念」の波動が、彼女らの脳へと送られる。

光はともかくとして、なのはとユーノは何をしようとしたのか良く分からなかったが、指を向けられた瞬間、知りたかった事柄が一気に脳内を駆け巡った。

「フェイトちゃんが……クローン」

「まさか、親から虐待を……」

今彼が何をしたのかと言うと、テレパシー能力の応用でフェイトに関する情報を、直接なのはたちの脳に送信したのだ。

思念伝達術——サイコトランスミット。

父であるウルトラセブン譲りのテレパスだからこそできる能力だ。便利そうな能力だが、デメリットもある。

相手がちゃんと「聞く耳」を持っていないと、送っても不快なノイズが脳内で響くだけ。

無理に聞かせようとすれば、受信者の精神（こころ）を壊してしまう恐れもある。

またこの能力はあくまで、無機的に「情報」を伝えるだけ。

言葉を発する際、その時に込める「気持ち」ってやつまでは、送ることができない。

「次に会う時までは、君の答えを聞かせてくれ、俺からの『宿題』だ、あと光」

「はい」

「俺は暫く地球を離れることになるから、その間頼むな、注文のデバイスも必ず持って帰るからさ」

「了解、任せて下さい」

二人は挨拶代わりに互いの拳を打ち付けた。

直後勇夜は、左手の指を鳴らして結界を発生させ、そして光たちから離れて、距離をとると。

「リンク」

『はい、マスター』

リンクから出現したウルトラゼロアイを手に取り。

「デューワー！」

装着し変身。

眩い光とともに、勇夜の体は瞬く間に巨大化していき、ウルトラマンゼロへと姿を変えた。

ゼロはなのはたちを見据え、頷くと。

「シユアー！」

その場を飛び立ち、海原付近を境にして、燈（あかり）と深青（みさお）に染まる空の彼方へと飛んでいった。

その雄姿を、三人は見えなくなるまでずっと見送っていた。

同時に周辺の結界も解除される。

その頃には、既に海鳴は夜の時刻となっていた。

「さあ、帰りましょう」

「うん」

「はい」

光のその一声を皮切りに、三人は臨海公園を後にした。

「駄目だよ……管理局まで出てきたんじゃ、もうどうにもならないよ」  
隠れ家として住んでいるマンションで、クロノの攻撃で負傷した  
フエイトの手当てをしつつ、アルフはそう切り出した。

「大丈夫……だよ……」

「『大丈夫』じゃないよ！　だって雑魚クラスならともかく、あいつ  
は一流の魔導師だ……あの時は、勇夜と光って言う勇夜の友達が助けて  
くれたけど」

その勇夜は囑託魔導師で、その友はあの白い魔導師の身内、彼らは  
今後管理局と協力体制をとらざるを得ない。続けるのなら自分たち  
は今まで以上に、厳しい条件下での綱渡りを要求されることになる。  
「本気であいつらに捜査されたら、ここだっていつまでバレずにいら  
れるか……」

少なくとも、勇夜がこの場所を管理局に教えることは無いだろう、  
それならあの場で捕まえればいいこと、なんせ絶好のチャンスだった  
からだ。

わざわざ逃がしておいて隠れ家を教える、そんな遠回りなことをす  
るメリットは無い。

が……それでも焼け石に水、どの道隠れ家であるこのマンションの  
一室を特定されるのは、時間の問題だった。

「あなたの母さんだって、酷いことばかりするし……ねえ、二人で逃  
げよう、もうあんな奴のためにこれ以上……」

逃げたところで、いつかは不法収集の罪で局に拘束されてしまうだ

ろう。

だが虐待を受け、無理やりロストログアを集めていたが耐えきれなくなつて逃げたと供述すれば……刑罰はある程度軽く済むかもしれない。

勇夜もそれを攻めはしないし、できるだけ罪を軽減できるように奔走してくれるだろう。

良くも悪くもフェイトのことが優先上位のアルフだが、そんな彼女でも彼を信頼し、慕うようになっていた。

彼がもし家族であつたなら……いや、勇夜だけじゃない。

フェイトには魔法の先生兼親代わりをしてくれた人がいた。

名前は、リニス。

山猫を素体としたプレシアの使い魔だった女性。

研究室に籠りきりな実の母の代わりに、フェイトと自分を自分の娘のように育ててくれた……アルフにとっては母と言ってもいい存在。

昨日勇夜が言った、単に血が繋がってるだけでは親子とは言えない、アルフはそれに同感だった。

だつてフェイトが、勇夜またはリニスと一緒にいるところを見ると本当の家族のように見えたから。

勇夜はどちらかと言えば兄と言えるかもしれないけど、彼とリニスの二人みたいな人が、フェイトの実の家族であつたなら、どれだけ良かったか。

そう思えば思うほど、対して実の母への憤りは大きくなるばかりだった。

フェイトの出生諸々の「真実」を知つてからは益々。

けれど……いくら自分がそう思つていようと。

「だめだよアルフ、母さんにそんな酷いことを言つたら」

それでも彼女の主は、『実の母親』を庇つた。

あの時のように、パニックを起こして取り乱すとまではいかないまでも、頑なにプレシアが「母」なのだと言き通そうとした。

「言うよーだつて私、フェイトが心配だ……！ フェイトは、私のご主人様で、私にとっては世界でだれより一番大切な子なんだよ」

虐待を受けてる子は、苦痛を与えし親が悪いなんて、微塵も思わない。

理不尽を受ける原因は全て……自分のせいなんだと、自分を攻めて、傷つけていく。

なんて不条理なんだろう……全ては、あの「魔女」の理不尽なエゴだというのに、しわ寄せを受けるのはフェイトばかり。

そのフェイトすらも知らない真実を口に出してしまいそうな心境を、必死に抑えながら、アルフは思いのたけをぶつけた。

「群れから捨てられた私を拾ってくれて……使い魔にしてくれて……ずーっと優しくしてくれた！」

本当は……分かってている。この体に宿っている自分の命は、病にかかり群れに見捨てられた狼の子のモノではないことぐらい。

あの小さな狼は、間違いなくあの時……死んだのだ。

狼としての記憶も、あくまで頭の中に残っているだけで、実際に自分が体験したものではない。

まさかフェイトも、それが姉とも言える人物のものとは言え、他人の記憶を持っているとは思わなかったけど。

それでも自分を繋ぎとめてくれたのは、一生一緒に生きると言ってくれたのは、紛れも無いフェイトという女の子なんだ。

「そんな優しいフェイトが泣くのも悲しむのも……私、嫌なんだよ!!」

なのになんでこんな辛くて、悲しい目に遭わなければならぬの？ どうしてそれに耐えながら生きなきゃならないの？

使い魔と主人は魔力だけでなく、精神でも繋がりを持っている。

これは、魔力が持つとある性質による偶発的な効果、念話もこの性質を生かして形となった魔法だ。

この精神リンクでどんなに感情を表に出さなくても、主が内に押し込めた苦しみは、いやでも使い魔に伝わってしまう。

今までは……フェイトの為を思って、あの女の頼みごとを聞いてきたが、アルフもう我慢の限界が来ていた。

「ごめんね、アルフ、だけど、それでも……私は母さんの願いを、叶え

てあげたいだ」

それでもフェイトは、折れようとはしない。

寂しさと悲しさと、自分を攻める気持ちを押し込めたまま、戦い続けようとする。

なら、自分にできることは、そんな彼女を支えてあげること。

それは変わらない。

でも……でも……でも……でも……祈らずには、願わずにはいられなかった。

お願い、誰か、この優しい女の子を助けて下さい。

心からの……笑顔を取り戻して下さい、と。

そう思い切り叫びたい衝動を、アルフは必死に留めさせるのであった。

「すごいやみんな、これだけの実力者が一同に会するなんてそうそうないよ」

次元航行船アースラのモニタールームでエイミイは感嘆の声を上げた。

今ここでは、クロノとエイミイが先程の勇夜たちと異相体との戦闘分析を行っていた。

エイミイが興奮するのも無理は無い。

相手の異相体は本体を除いて全て分身なのだが、それこそ小隊以上の数なのだ。

それを相手に4人とも、獅子奮迅の戦い振りを披露しているのである。

「特になのはちゃんと金髪の女の子は、魔力値平均1000万を超えて、最大発揮時に3倍以上に出力が上がってる、単純な魔力の量なら、クロノ君を上回っちゃってるね」

「エイミイ……魔法は魔力値の大きさだけじゃない」

実際、魔力量は多いに越したことはないのだが、それだけでは強さ

に繋がらない。

「状況に合わせた応用力と、的確に使用できる判断力だろ」

まあ結局のところは彼の言う通り、使い手次第ってことなのだ。

使い手のセンスがボンクラ未満なら、高い魔力量も宝の持ち腐れにしかない。

一応補足するが、クロノは決して魔力量が少ないわけではない、むしろ多い方、なのはたちが余りに出鱈目過ぎて霞んでいるだけだ。

執務官の肩書を持つだけにクロノも伊達ではない。この役職に課せられた任は事件の捜査の現場指揮だけでなく、さらには法律執行の役目を負った警察官でもあり、検事にして弁護士でもある役職。

戦闘面での実技は勿論、法に関する知識や、冷静な思考で事件にも戦闘にも裁判にも対応できる判断力が求められるので、日本なら国家試験レベルに難度が高い管理職である。

「僕から見れば、魔力運用も含めた戦闘に関しては、勇夜と高町光の方が上手だ」

「でも、それならクロノ君だってその上手の一人でしょ、なんてったってこのアースラの切り札なんだから」

「……………」

エイミイのおだてを前に、クロノはそのまま黙りこんだ。

そう言われるだけの自負はあるし、そのための努力は怠ってはいないが、いざこう口にされるとどうも気恥ずかしい。

相手が真面目君なクロノを弄りまわすのに定評のあるエイミイとなれば、尚更だ。

「でも、カツコよきなら二人に軍配が上がるかな、背も高いし」

「エ、エイミイ！」

「何い？ 私クロノ君が『ちっちゃい』なんて一言も言っていないよ」  
「……………」

小柄な体軀のことは、少なからず気にしている執務官の狼狽振りに対し、執務官補佐は悪戯げな笑みを同僚な小さな上司に返してきた。言うまでもなく、確信犯ってやつだ。

公務中でも、二人の間で度々起きる光景が今行われている最中、突

然背後からオートドアの開閉音が響く。

「あ、艦長」

リンディが入室してきたのだ。

「ああ、あの子たちの戦闘データを見ていたのね、確かに凄い子たちよね、なのはさんたちもそうだけど、光君もだし、こうして改めてみると、勇夜君の戦闘能力も凄まじいわ」

まずこの二人、身体強化系の補助魔法はまったく使っていない。

光にはデバイスが無いというハンデがあるが、勇夜の場合、デバイスを実質二つ持っているにも関わらず、魔力フィールドの鎧を纏わずに戦闘を行っている。

実は勇夜はリンクにより体が攻撃が着弾する寸前、その瞬間だけ魔力バリアを張る様にさせているのだが、それを知らぬ管理世界の住人から見れば、自殺願望でもあるのか？と疑りたくもなる。

だが彼と光の二人は、常人を遥かに超えた超人であり巨人だ。

そして二人とも、恵まれた自身の肉体に驕ることなく、この世界に流れてから己の研鑽を続けて、人間態でも魔力補助を使わずとも（もつと端的に言えばわざわざ使う必要が無い）、驚異的と言える戦闘能力を獲得しているので、その分魔力消費を抑えられている。

その上で使う際は、無駄弾を出すこと無く確実に相手を仕留めていた。

特に勇夜は、集束魔法で戦闘区域に散らばった残留魔力を再利用して、魔力の矢の雨を形成した。

言うのは簡単だが、魔法に限らず、体内で作られたエネルギーの運用は、例えるなら陶芸のように繊細なコントロールが必要となる。

特に集束魔法は、高等の中の高等技術。

クロノが上手と評するのも、決して過剰評価ではないのである。

ただ、彼らの無双振りは魔法に限ったことではない、例えば勇夜がダガーモードの零牙を空中に自在に飛ばしているのは、彼のウルトラ念力の賜物だし、光の鏡から鏡へのワープは二次元人の特殊能力、神速などは御神流の剣技だ。

魔導師と違い、彼らにとって魔法は、自身が戦闘で使えるスキルの



一つでしか無い。

管理世界、特に管理局の人間が魔法に拘り過ぎている事情を考慮してもだ。

「総合的な戦闘力なら、二人はSクラスにいくかもしれないわね…」

リンデイから見ても、二人の戦闘能力ははずば抜けていた。

もし、彼らの本来の姿である巨人に戻れば、エネルギー相殺現象による魔法使用がほぼできなくなるというデメリットを差し引いても…管理世界に彼らに並ぶ猛者はそうそういないだろう。

それだけに、勇夜がその強大な力を持つ自身に「恐怖」を抱いているのは、至極当然なのかもしれない。

強い力は時に争いを生む要因になりかねないのは、紛れも無い事実。

現に人間には、新たなエネルギーや技術が出現する度、争いの道具に利用してしまう悪しき慣習があるのだから。

「けど…一番の問題はこの子たちよね」

なのはにしろ、ユーノにしろ、光にしろ、勇夜にしろ、ジュエルシードによる災害を防ぐ、あるいは最小限に留めるために収集を行っている。

だが、あの黒衣の魔導師と使い魔は——と言うと。

「虐待を受けても尚、母親の願いに応えようとする女の子…」

愛娘を失った母が、禁断の技術に手を出したことで生まれた娘の生き写しでありながら、その技術名と同じ名を冠し、自分の出生も母の内面もその使用目的も知らぬまま、暴力を受けつづけながらロストロギアを集め続ける少女。

フェイト・テストロッサ。

その母でありながら、彼女を娘と認めず、道具としてしか見ていない魔導師。

プレシア・テストロッサ。

「ですが、本当なのでしょうか？ プレシア・テスタロッサの目的がアルハザードへの道を開くというのは」

「今のところ、勇夜くんの憶測でしか無いけれど、可能性が無いとは…言い切れないわ」

彼女には何かしら収集を駆り立てる強い目的があるとは思っていたが、勇夜からもたらされた背景は余りに重かった。

彼女を救えなければ、この事件は解決しない。

勇夜の言葉は、実を的を得ていると、思わざるを得なかった。

「まだあんなに小さい子なのに…辛いでしょうね…」

リンディたちの目からも、モニター内のフェイトの瞳は、とても悲しそうに映っていた。

## EP19 | もう一つの家族

マルチバース。

地球人が到達するには、まだまだ遠い先の未来になるであろう宇宙の外。

光の国でさえ、現状星の住人達全員のエネルギーを総動員しても一人しか送り込めない超空間。

無数の宇宙が点在するその海の中を、一つの光が泳いでいる。

その光とは、ウルトラマンゼロだ。

彼は今、惑星ミットチルダのある第一管理世界へと向かっていた。堂々と星中を飛び回れた光の国と違い、管理世界では局員だろうが非常時以外の飛行は禁じられている。

それが法で定められたルールであることは承知しているが、それでも性分なのか、時々無性に飛ぶことに恋焦がれることがある。

だからどの次元世界に行くにしても、ばれない様細心の注意を払いつつ、こうしてゼロになってマルチバースの海を飛び回っていた。

『諸星勇夜』としての生活に不満は無いが、大っぴらにウルトラマンの姿に戻れないこの現状では、唯一ゼロとしてのびのびと飛べる貴重な時間だった。

同じようにその空間を飛んでいる次元航行艦に出くわしたら、どうするかって？

実はゼロはマルチバースを飛んでいる間、特殊な魔力フィールドを体に纏っている。

それを纏う間、誰であろうがゼロが視線に入っても、道端の石ころの如く見向きもされなくなる効果がある認識阻害の術だ。

幸い、ダイファレーターエネルギーと相殺するほど消費は高くないウルトラマンの姿でも使える安上がりな魔法なので、一役買っていた。

光の国でも一人送るだけで手一杯なところをゼロはどうやって移動しているって？

それは、リンクこと《ウルティメイトイージス》、またの名を《バラ

ジの盾』のおかげ。

これによりゼロは、単体で次元を自在に移動できる能力を有したとあるウルトラマンとほぼ同等の次元航行能力を得ている。

だからこうして、人一倍注意力が必要になることを大目に見れば、自由に、快適に本来の姿で宇宙を遊覧飛行ができた。

ゼロⅡ諸星勇夜がミットチルダに向かうことになったのは、先日の…よもやプレシア・テスタロッサと殺し合いに発展した、その日の夜のことだ。

傘を持つてなかつたとは言え、彼は雨の大群を前に、走ることも無く淡々と夜の道を進んでいた。

当然体はずぶ濡れ、服も髪も雨水を吸収するだけ吸い取り勇夜の体に張り付き、湿り気を帯びた布は嫌な感触を与えてくるが、そんなことを気にする余裕は彼には無い。

その足で仮住まいの集合住宅に戻り、服を洗濯、風呂に入った。

風呂上がりの彼は今、髪を下ろし、黒のランニングシャツにゼロの体色を思わせる青いラインの入った赤のジャージを履いている。

体格は太すぎず、かと言って痩せすぎもせず、無駄をそぎ落としつつも、バランス良く鍛え上げられ、濡れた長髪もこの上なく似合い、顔つきも中性的なので、長髪と違和感無く調和がとれていた。

水もしたたる良い男を、地で行く容姿。

ちなみに。どうして髪を伸ばして、ポニーテールにしているのかと聞かれれば彼はこう答えるだろ——『父が一番近い髪型だから』と。ゼロと父のセブンをよく知る者なら、この一言だけで納得してしまう筈だ。

勇夜は冷蔵庫からスポーツドリンクを取り出し、飲みながらリモコンでテレビを点けた。

だが、たまたま点けたチャンネルの番組の内容を見て反射的に消し

てしまった。

夜のニュース番組で、偶然児童虐待を特集していたのである。

ニュースの内容そのものに罪は無い。

それでも、余計に気分が沈んできた。

その日、実際にこの目で親が子に振るう理不尽な虐待を目にしたからだ。

脳内から分泌される不快なもやもやに対し、勇夜は半ばやけになって勢いよく仰向けにベットへと倒れ込み……あの時の自分を反芻し始めた。

許せなかった。

あの時、勇夜は、プレシアに明確な殺意を抱いた。

本気で彼女を殺す、その寸前までいっちまった。

本人に母だと騙っておいて、娘と認めない娘を痛みつけ、縛り付け続け、ただ一人の女の子の蘇生を実行するだけの機械、プログラムになり下がった魔導師。

ジュエルシードを使い、近隣の次元世界、それこそ地球を巻き添えで踏み潰してまでも、次元振を起こして、無理やりあるのかすらも分からない所へ行こうとする外道だと見なし、危うく、また『あの時』みたいに自分を踏み外しそうになった。

こんな奴は人間じゃない、人としての一線を踏み越えた人で無いなのだから、殺しても殺人にはならない。

一方的に被られる恐怖と痛みと絶望を与えてやる。

フェイトが今までこいつから受けてきたものを倍返しにして、後悔させてやる：俺とやり合おうとしたことも、フェイトの気持ちを散々踏みにじってきたこと諸々含めて、まとめて痛めつけてやる。

あの瞬間、確かに沸いた感情(きもち)だ……我ながら末恐ろしい。基本お人よしで善良なウルトラ一族でも、どす黒い感情に支配されてしまうことがある。

現に勇夜——ゼロはあの時そうなりかけた。

ゼロになって跡形も無く消し去ってやろうとさえ……頭をよぎり、現にウルトラマンの姿で自分の力を人間であるプレシア相手に使っ

てしまった。

そんな勇夜を、ギリギリのところまで引きとめたのは。

『優しい女の子をどん底に落とすのがウルトラ戦士なのですか？』

念話で自分に語りかけてきた相棒の静かながらも、厳しい一言だった。

それで、なんとか一線を超えずに踏みとどまれた。

でも……一度ささくれてしまった心を落ち着かせるには時の庭園から出るしかなく、あの4個を分捕る余裕さえ無かった。

当初はなんとか、あいつにフェイトを使って収集させるのをやめさせて、回収した分を発見者のユーノ・スクライアに渡しそうとしたのだが。

あの親子が抱える問題はとんでも無く深刻……他人の俺がどうにかできる話じゃないのかもしれない。

本当なら、私情なんて捨てて、力づくでも二人を止めてやる方が賢明なのか？

そのチャンスはいくらでもあった。

さつきにしろ、フェイトたちと初めて会った時さえだ。

けどできない。理屈では分かっても……心がそれではダメだと叫ぶ。

その方法じゃ、次元振の危機は回避できても……あの子を救えない、助けられないと訴えてくる。

でも……それならどうしたら、あの子を救えるんだ？

寂しく悲しい目をして、心を雁字搦めにして凝り固まったあの子を、どう助け出せば良いんだ？

ようやく、昼からくすぶつてた激情のせいで淀んでいた思考がクリアになってきた。

けど、『最善の手』って奴を考えれば考えるほど、選択肢が脳裏をかすめては、あれは駄目、これも駄目とどんどん消えていく。

たとえそれが仮初のものでも、向かう先が絶望に繋がる谷底でも、フェイトにとっては淡くて……微かな希望（ひかり）……フェイトを止めることは、希望の守り手——ウルトラマンである俺が、あの子の

希望（ひかり）を……あのとき見せてくれた笑顔だって……最悪……奪うことになる。

だがどうにか瀬戸際で止めてあげなければ、フェイトは『独り』のまま、背負わされた十字架と、嵌められた足枷を引きづりながらの人生を送らせることになっちまう。

『申し訳ありません……マスター』

「なんで謝るんだよ、それを言うのは俺の方だ……」

『私も色々と思案しましたが、とても薦められないものばかりなので』  
ああ……そっちの方が……てつきり、憎悪に身をまかせそうになった大馬鹿野郎な自分を予め止められなかったことでの謝罪なのかと思っただ。

あの時の自分を悔んで、恥じていることを悟ってくれたのか、あの後リンクは何も追及しなかった。

それに文句は無い。

でも、今度もしゝあいつゝに会う機会があるなら……謝つとかねえとな。

せつかく俺を信じて、リンクを授けてくれたんだ……あの程度で乱しちまうなんて、情けないな。

『ウルトラマンは神では無い』……か……」

天井に向け、腕を真つ直ぐ伸ばし、広げた掌を見つめながら、そう呟く。

これは先輩であるウルトラマンメビウスに、初めて地球に来たウルトラ戦士——ハヤタことウルトラマンが彼に言った言葉。

ハヤタの言う通りだ。

かつては盲目的に欲しくてたまらなかった……一度は失いながらも、少しずつ取り戻していった……こんなに破壊的で、『神の力』とも言われそうな力を持っていても、精神（こころ）が壊れかけた女の子一人助けられりやしない。

フェイトだけじゃない。

ベリアルも……『母さん』の同じ部隊の仲間だった大切な人たちも……どうすることもできなかった。

一人では限界があることは分かっているけど、なまじ力があるせいで、無力感もより鋭い槍になって心に突き刺さってくる。

彼にしては珍しく、思考がマイナスの方向に行っていた。

どうしたらいい？

何か……何か……あの子の心を研ぎほぐせるものがないか？

何かあるはずなんだ……何か……ふと、声が脳内に再生された。

「何も分からないまま、戦うのは嫌なの！」

あの光……ミラーナイトの義妹、高町なのは。

あの子が、フェイトに呼び掛けた時、僅か、ほんの僅かだがあの子の心が解きほぐれたような気がした。

あの時は怪獣と交戦していたが、ゼロの時は五感が遥かに高くなるので、その時二人が交わした会話もしっかり耳に入っていたのだ。

フェイトと同年代の、小学生兼魔導師の女の子。

考えてみれば、フェイトは対等に付き合える同い年の友がいない。

その同年代の友人ができない、そもそも外界と関わることもできない身の上だった。

なし崩しとは言え、同い年で一番フェイトに関わりを持つのはなのはだけ。

なら……あの子に賭けてみるのも悪くないかもしれない。

でも……それにはなのはに……強いることになる。

いいのか？

今自分の胸の中で淀んでいるジレンマを……フェイトがしよって  
いる十字架（しんじつ）を……少し前まで、普通の小学生だったあの子に……抱えさせていいのか？

リヒトだって……ユーノだって……なのはを戦わせなきゃいけない  
現実に無力さを突きつけられて苦しんでるはずなのに……どっちにしても、それは自分のエゴだ……自分はそれを……あの小さな女の子たちに押しつけることになる。

ちきしょう……歯を食いしばる力が強まった。地球と地球を含めたこの世界が、滅ぶか滅ばないかの瀬戸際に立っているというのに……どうすれば。



♪~~~~♪~~~~♪~~~~♪~~~~♪~~~~♪

突然、机の上で充電させていた携帯電話のメールの着信音が響いてきた。

勇夜はベッドから机に向かい、電話を手にとる。

誰からの電話かと、発信先を確認してみたら。

「おやっさん？」

勇夜にとって、こちらの世界に来てからの馴染み深い人からだった。

そして現在、マルチバースを飛ぶゼロに戻る。

良いニュースだと言っていたけど、なんなんだ？

その相手からの電話内容に疑問を持ちつつも、丁度ミットチルダに用があったのでそれも兼ねて、こうして行くことにしたのである。

見えた。ゼロの眼前に佇む泡粒。

あれが、惑星ミットチルダがある、第一管理世界と呼ばれる宇宙。

ゼロはスピードをさらに速め、並の生物なら跡形も残らないほどの高熱の水素ガスで覆われた宇宙の表面に、迷わず突っ込んで行った。

第一管理世界、惑星ミットチルダ。

魔法文化が発達している管理世界の中心的な立場に位置する星。

その星の首都クラナガン、地球より科学技術が発達しているとあって、近未来的な高層ビルがいくつも立ち並ぶ都市だ。

この都市の中央のビル街から少し離れた住宅街の道中をゼロから人間態に戻ったリュックを片腕だけかけた諸星勇夜が歩いていた。

旅人としては軽装だが、旅道具の大半はリンクが収納、管理している。

彼は今、こちらの世界に迷い込んでからお世話になった、ある一家

の許に向かっている。

里帰りと言われれば、はつきりと里帰りだと言える。

もう日は夕暮れになり、夜空が顔を出し始めている。  
目的地に着いた。

ミットチルダに迷い込んで、あろうことか体が4歳児に退行した俺を  
実の家族のように引き取って、正体を明かしてからも、家族として  
迎えてくれたナカジマ一家の住宅。

半年ぶりの我が家、なのに、少し身構えている自分がいる。

だってな……うれしいと言えばうれしいんだが、そんな自分に笑み  
を零し、夜はインターフォンを押した。

『どちら様ですか?』

一拍置いて、しつかりとした感じのある幼い女の子の声インター  
フォンから響く。

「ギンガか? 勇夜だ」

「え? 勇夜兄ちゃん!?!」

インターフォン越しからでも、その声の主が弾んでいることが窺え  
た。

するとドアからロックが解除された音が鳴り、ドアを開け。

「ただいま〜」

この世界での『我が家』に久々に入ると。

「ゆうにい!」

「がはああ!!!」

幼さ特有のたどたどしさと、人懐っこさ全開な女の子の声が耳に  
入ったと同時に腹部に強烈な衝撃が走り、勇夜はそのまま仰向けに倒  
された。

「す………スバル、お前ってやつはまた……」

勇夜に突進……もとい体当たり染みだ勢いで抱きついてきたのは、  
青い髪を男の子のように短髪にした活発そうな7歳くらいの女の子  
だった。

「おかえり♪ ゆうにい」

名前はスバル・ナカジマ、このナカジマ家の次女でかつ末っ子さん。

「スバル…またお兄ちゃんにタツクルして、早く離れなさい！」

玄関に連なる廊下の奥から、スバルと同じ髪色と瞳の色に、彼女よく似た顔付きだが反対にロングヘアで、しっかり者そうな小三くらいの女の子がやってきた。

名はギンガ・ナカジマ、スバルより二つ上のお姉さんだ。

さっきのインターフォンから響いた声も彼女のものだ。

「は〜い」

姉の言葉に洩々従うスバルは、ようやく勇夜から離れた。

「大丈夫？お兄ちゃん」

「どうにか」

仰向けの体勢から起き上がりつつ、彼は二人の頭を撫でてあげた。

二人と言え、義理とはいえ兄のご帰宅に心底嬉しそうである。

そして勇夜も、実を言えば元気に出迎えてくれた二人に喜びを噛みしめていた。

「ただいま、二人とも」

「おかえりなさい」

ギンガとスバル。

名前に宇宙に関連する言葉を宿す彼女らは勇夜にとって、実の妹とも言える姉妹たちだ。

「毎度のことながら、災難だったな」

蔵つさの中にきさくさがにじみ出る地球の東洋系…とというか日本人よりの風貌な中年の男が、先程の帰宅時に起きたイベントについて笑い飛ばした。

それもそうで、ナカジマって名字の通り、この男のご先祖は日本からの移住者で、彼はその末裔であった。

ゲンヤ・ナカジマ、この世界の『帰る場所』であるナカジマ一家の大黒柱。

時空管理局には、大まかに二種類の組織に別れている。

一方はハラオウン親子にエイミイらアースラクルーも所属し、マルチバースの超空間に本部たる超大型コロニーを構える本局。

もう一方は、各世界の惑星に存在し、その星の治安を重点的に担う地上本部。

ゲンヤはそこに勤める局員であり、リンカーコアを持たない為魔導師でこそないが、陸士108部隊の隊長で、和風に言えば「一国一城の主」だ。

「笑い事じゃねえよおやつさん、あいつのバカ力はウルトラ戦士でもきついんだからな」

勇夜はゲンヤのことは父のように思っているが、実の父であるウルトラセブンのことも配慮して、彼のことを『おやつさん』と呼称している。

「やんちゃになれるのは子ども内だけだぞ、それにヤンキー時代のお前さんに比べたらかわいいもんじゃないか」

「ぐっ……そこ突いてくるかよ」

不良だった頃の自分を引き合いに出されてしまつては、苦笑いで返すしかなかった。

確かに元気がいいのいいことだが、はつきり言つて帰ってくる度にスバルの体当たりの威力が右肩上がりになっているのは気のせいだろうか？

でも一応、あいつのバカ力の源には心当たりがある………そいつはスバルらの境遇にも直結しているから、あまり強くは言えないのだけれど。

「もうあなた、勇ちゃんがいるからつてほどほどにしなさいね」

キッチンで食器を洗いながら、ギンガたちと同色の髪をワンサイドに纏めた女性が夫ゲンヤに注意する。

クイント・ナカジマ、ゲンヤの妻で、ギンガとスバルの母で、勇夜の義母に当たる方。

見た目は、ギンガ達が大人になった姿と表せるくらい美人で、母特有の包容力に慈しみさと、姐御さん風な気の強さを併せ持った雰囲気  
が印象的であり、また勇夜には直接の面識は無いものの、彼にとつて

縁深き“女性”にそっくりな容姿をしていた。

かつてはミッドチルダ地上本部でも指折りの武装局員兼魔導師であったが、当時彼女が所属していた部隊が壊滅してしまった“ある事件”をきっかけに引退し、今は専業主婦となっている。

クイント局員でよく家を空けていた頃は、姉妹の面倒含めた家事を勇夜が担っていたので、彼は調理といったその手のスキルを身に付けていた。

現在の彼の物腰に落ち着きが見られるのも、人間の体感時間で何年もギンガとスバルの子育てをしてきた副産物である。

「分かってるよ」

「大丈夫だよ母さん、その為に俺が番人として付き添ってんだから」

「ふふ、頼りにしてるわよ」

「お任せあれさ」

クイントが釘を刺した通り、ゲンヤは今、ビール、つまり酒を飲んでいる。

勇夜は戸籍上約5900歳分の時間を生きているウルトラ戦士な上に、人間体でもアルコールの耐性には成人より遥かに強いものの、一応戸籍上でもウルトラ一族としても未成年なので、ノンアルコール。

ナカジマ家では、スバルとギンガが寝ている間、二日酔いで仕事に支障を来さぬように加減する条件で飲むゲンヤのお酒タイムに、勇夜が付き合っただけの決まりができていた。

「で、用ってなんだよ？いきなりメールで“帰ってこい”とか」

幸い、ミットチルダに他に用があることと、苦も無く次元を超えられることもあり、その日の内に帰れた。

日本とクラナガンの時差も、実はそれほど大差無い。

「驚かそうと思ってね、勇夜にとって、念願叶った話だから」

念願って？ まさか……自分にとって待ちわびていたもの、それは。

「見つかったのか!? 光の国が…」

「ああ、これを見てくれ」

ゲンヤはそう言つてリモコンを手にとると、テーブルの上に3D映像が浮かぶ。

ここミットチルダのある次元世界を含んだマルチバースを形作つたホログラムだ。

「この隣の平行世界の一つにな、地球に酷似した星とそこから丁度300万光年離れた先に、勇夜が言つてたお天とさんのように光を放出する惑星が存在する次元世界が見つかったんだ」

ゲンヤの説明とともにホログラムが一つの宇宙にズームし、光り輝く惑星が映し出された。

この世界での勇夜は、4歳ごろにこちらの世界に飛ばされた記憶喪失の次元漂流者ということになっている。

自分も入れたウルトラ一族のことは内密にするようナカジマ家には頼んでいたが、自分たちの星が人工太陽で光り輝く惑星であることなどは、表向き「あぼろげに覚えている」設定で公表した上で、探査を頼んでいたのである。

場所と、こちらのマルチバースからのルートさえ分かれば、後はもう自力で行ける。

なぜゼロが次元を超える力がありながら、手をこまねいていたのは、前にもいつたが、ミットチルダのあるこの次元世界が、光の国のある世界からどれぐらい離れているか把握できなかつたことが上げられる。

目的地に行くまでの船も燃料も食糧も揃っているが、肝心の地図が無い状態。

そしてなお且つ、多数の世界を内胞したマルチバースも無数に存在する。

そのため自力で探そうとすれば、虱潰しに博打を打ちながらの旅になるのは明白だった。

以前の勇夜——ゼロならその大博打に躊躇いなく乗つたであろうが、これまでの経験から、ウルトラ戦士でも一人でできることには限度があることを学んだ今は違う。

何より、勇夜も、そしてリンクも、《ウルティメイトイージス》に宿

るその力を全て手中に収め、使いこなししているわけではないのだ。

「勇夜……やっぱり、帰りにえか？故郷（ふるさと）に」

ゲンヤが、酒で赤くなつた顔と正反対に改まった表情で俺に語りかける。

そりや、ここに来たばかりの時は帰れたらな、とは考えていた。

「部屋は空けておくから、帰る時はいつでも言つてね、向うのお父さんも、帰りを心待ちにしてると思うから」

クイント母さんの言う通り、今だつて親父は、自分が生きていると信じ、帰つてくるのを心待ちにしている。

それを分かっている上で、向こうにいる父に詫びた。

ごめん親父、まだ今は、帰れない。

「ありがとう、でも当分はまだこつちにいるつもりさ、まだ一人しか仲間見つかっていないし、やることも山ほどあるし……まあ時々里帰りはすつと思うけど」

まだ離れ離れな仲間がいる。

ジュエルシードのことも、それが起こす災害も、巻き込まれる地球も放つておけない。

そしてフェイトたちのことも、それを残して、のこのこ帰省なんかできるわけ無い。

それに、師匠であるレオが地球を『第二の故郷』だと呼んだように、この家は俺にとって故郷の一つだ……色々厄介事が多くて、とてもあやういバランスで成り立っている世界だけど、いやむしろ言うべきか。

こんな不安定な世界、侵略者にとっては絶好の地だ。

「愚かな人類の救済」などと言つたお題目で、いつかここも狙われるかもしれない。

現に、誰の仕業かはまだ分からないが、狙いを定めた奴が確かにいる。

だからこそ、見捨ててはおけないのだ。

何より……やめておこう、自分はこのこと恥ずかしさで胸に秘めておくタイプ、はつきり言う性質じゃない。

「そうか、じゃあその時はセブンの親父さんも連れてきてもらいたいな」

「ああ、でもその時までにはおわずけだぜ、おやつさん」

ゲンヤにそう返し、勇夜は泡が消えかけたノンアルコールビールを飲みほした。

翌朝、ナカジマ家内の勇夜の部屋。

「お兄ちゃん、起きて」

ギンガが、ぐっすり夢の中の勇夜を起こそうとかけ布団越しに揺すっていた。

時刻は朝5：00。

陽光が、勇夜の使っている部屋を照らし出している。

その光と、ギンガの呼び声が目覚ましとなって勇夜は起床した。起きたたてなので、瞼は半開きで、艶のある長髪も癖っ毛となっていた。

空を飛び、光線を放ち、念力を駆使し、格闘にも強く、体のサイズも自由自在な、米国人から《スーパーマン》と称されるであろうM7 8星雲人でも生き物、眠気と無縁ではないし、睡眠も必要だ。

「おはよう〜ギンガ〜」

「今日、朝練付き合ってくれるって約束でしょ」

「あくそうだったな〜〜」

ねぼけた目をこらして改めてギンガを見ると、服装はいわゆる体操着でいつでも運動ができる状態だった。

正式に着用が禁止され、飢えているであろう全国のブルマフリークの方々には悪いが、生憎………黒いスパッツだ。

なお勇夜には、妹を愛おしいと思ってもそんな趣味は微塵もない、あっち方面にしろ、そっち方面にしろ。

むしろギンガたちに『そんな目』をした連中を、最低でもゼロツインシュートか、プラズマスパークスラッシュ、下手すると、ファイナルウルティメイトゼロで成敗しかねない。



全国のブルフリ、またはロリ好きな方々は要注意するように。

「じゃあ先に外で待つてるから」

「ああ」

場所は変わって、今わたしことギンガ・ナカジマは、血の繋がりは無いけど、兄でありウルトラヒーローである勇夜お兄ちゃんと近所にある公園にいます。

どうして兄がウルトラマンであること知っているかと言いますと、長くなりますね………色々。

ともかく、お兄ちゃんとお母さんたちに助けられたお陰で、今の生活を送れていると、言っておきましょう。

いつもわたしは朝早く起きて、一人で走っているのですが、今日は兄と同伴です。

できれば、本当は妹のスバルと3人一緒に走りたいのですが………そうはいかないのです。

「用意はいいか？」

「うん」

お兄ちゃんはウルトラマンの時にでも使っている、片手を真っ直ぐに突き出し、もう片方の手を腰に据え、後ろ脚に重心を置く、兄のお師匠さん直伝の構えをとります。

今からわたしと組み手をするためです。

「お互い頑丈な身だ、遠慮はするなよ」

お兄ちゃんが人間の姿でも、一騎当千のツワモノであることは分かっています。

だから……わたしも遠慮する気はありません。

「そのつもりだよ、お兄ちゃん」

構えをとった私は、自分の目を「黄色く光らせ」、兄に向かって思い切りよく踏み込みました。

数分くらい経って。

「はあ…うう…ふあ…ああ…」

息が荒れるに荒れて、汗がどばあ〜と出ているのはわたしで。

「大丈夫か？」

と、ケロつとした顔でわたしに気に掛けているのは兄です。

結局今回も、兄に一発も攻撃を当たられませんでした。

因みに、兄はこの数分、わたしの攻撃をひたすら避けたり交わしたりの繰り返しで、ちつとも反撃をしてくれませんでした。

その代わり、自分が攻撃した勢いを利用して、何度も体勢を崩そうとしてきました。

こちらにも意地があるのでどうにか踏ん張り続けられましたが、その分体力が余計に削られに削られて、立つのもやつとなくらいへとへとにされました。

攻撃にばかり行き過ぎて、自滅を狙った兄の作戦にまんまと嵌ったわけです。

「まったく、そう焦って攻めて当たるわけねえだろ、昔の俺とどっこいどっこいだぜ」

「昔のお兄ちゃんも、さっきの私みたいな感じだったの」

「そう、調子乗るかカットなったりすつとごり押しになって、そのたんにびに師匠に“焦るな”とか“頭を冷やせ”とかこっぴどく叱られたもんさ」

確かにそう。私はその焦りを突かれたわけです。

焦ったところで、兄はおろか、昨日の自分さえ簡単には超えられないと、自分に言い聞かせます。

たとえば体が機械で、普通の人より頑丈だとしても。

むしろ、伸び代があるってことが幸運なんだとも。

「そんなじゃ休みにするか」

「うん」

休憩タイムに入り、私と兄はベンチに腰掛け。

「ほらよ」

「ありがと……もうからから」

前もって持って持ってきた水筒を受け取り、中に入ったスポーツ飲料をごくごく飲んで、汗だくな体を潤します。

兄さんと組み手をするのは時々ぐらいいしかありませんが、私はこうして毎朝トレーニングを続けていました。

兄も含めて家族には、〴〵っかり人前で力を使わないように加減を覚える〴〵の目的だって話し、実際それも理由の一つなのですけど、実は他にも〴〵目的〴〵があつて、そつちの方はその表の理由を笠にして隠しています。

知ってしまったら……特に兄は一番反対し、「どうしてもと言うなら自分に一本取ってみろ」と言ってくるに違いありません。

いつかは、ちゃんと打ち明けなきゃいけないけど——まだ秘密です。

「今日にはもう、お仕事で行っちゃうの?」

「おう、今晚も家で寝るつもりだけどな」

もう一日だけ、兄が家にいることに嬉しく思う一方、もう一日だけなのがほんのちよつと残念にも思う私です。

でもそれは、離れていても、ちゃんと思合っている証。

「お兄ちゃんが助けたい人つて……私たちと、おんなじなんだよね」

「……………母さんから聞いたな」

「うん」

昨夜(ゆうべ)、兄が今度はどんなお仕事をしてるのか気になった私は、こつそりお母さんから聞きました。

ロストロギアを集めてるそのフェイトって人は、私が感じてるこの〴〵寂しさ〴〵さえ、味わえて……ない。

私たちと同じクローンで、かつての私とスバルのように、孤独の闇の中にいて、それどころか、私たちがそうなるかもしれない残酷な〴〵運命〴〵の穴に落ちかけてる。

たとえ直接会ったことが無くたって、それだけははっきりと分かった。

兄はその人を、必死に助け出そうとしている。

だから……邪魔をしちゃいけない。

「ギンガ？」

私は兄の手を握りました。

自分の手が感じる兄の体の熱。

「お願い……あの人も、助けてあげて」

“私たち”は、この温かい手に救われたんだと、その手で“フエイト”を助けてあげると、自分の手にその気持ちを籠めて、兄に送り。

「ああ、勿論さ」

私たちの“ヒーロー”なお兄さんは、そう微笑みを返してくれました。

## EP20 — 各々の想い

『だから、僕たちにも、そちらに協力させていただきたいのです』  
次元航行艦アースラ。

艦内の一室なモニタールームに今いるのは、クロノ、リンディにエイミーの三人。

設置された大型モニターには、フェレット姿のユーノが映っている。彼は今レイジングハートを使い、こちらと通信をとっていた。

「協力………ねえ」

クロノは実年齢相応よりも幼く、あどけなさが色濃く残る顔立ちをしかめ面にした。

「僕はともかく、なのはと光さんは、そちらにとっても有効な戦力になる筈です」

アースラチームが今回のジュエルシード絡みの事件に参入して二日、猶予期間を経てユーノが代表し、彼に、光となのはら高町兄妹の事件協力をリンディたちに願っていた。

正直、彼らが助力を申し上げてくれたのは、ありがたくもある。

ユーノの独自収集には今でも軽率と考える一方、彼らがいなければ、ジュエルシードによって地球は現地の人々にとって未知かつ未曾有の大災害を被っていたのは間違いないからだ。

輸送中のアクシデントが、不慮の事態だった……いやだからこそ、早急に手を打てなかった自分たちの不手際を、彼らは賄ってくれた。偽りなく、感謝の気持ちはある……ある上に、これ以上甘えたくはない……気持ちはちゃんと受け取る上で、どうにか自分たちだけで事態を収束させることを伝えようとしたが——

「中々考えてますね、それならまあ……いいでしょう」

「かあ——艦長！」

先んじる形で、母兼上司のリンディがもの凄くあっさり承諾してしまった。

「ただしこちらからも条件があります、三名とも身柄を一時的にアースラにお預かりすること、それからこちらの指示にも守ること——」

公的な場で一瞬「母さん」と呼びそうになってしまったくらい戸惑うクロノをよそに、リンディと向こうのユーノはそそくさと話を進め、口も挟めないまま通信が終わってしまった。

「不服だったかしら？ クロノ執務官」

「艦長がそう決定した以上、異議は申し立てません、ですが不満がないわけでもありません」

腕を組んでクロノはそっぽを向いた。

幼い見てくれのせいで、その姿は駄々を見えている子にも見えてしまふ。

クロノ本人とて、現在の自分の仕草が傍からどう映っているかは客観的に把握できている。エイミイにも見られているから、この時の自分を後々いつものからかいの種にしてくるだろうが、その時はその時だ。

彼女に目を向けば、緩み気味の口元は猫みみたいな形状……十中八九、ネタにする気満々な証だった。

「そうは言ってもね、あの子たちダメだと付き返されても、独自に回収を続けそうだったし……昔のクロノみたいに」

卑怯だ。母は自分を納得させようと、「昔の自分」を引き合いに出してきた。

母にとつて切り札なこのカードを出されると、何も返せない。自分も、かなり母に無理を押し通してきた身だからだ。

魔法を習いたいこととか、管理局に入つて「正義の味方」になりたいたとか……それはもう我ながら大いに困らせたものだ。

それこそ、あの時の「高町なのは」みたいに。

一見争いごとを嫌ってそうな印象を受けたあの子が、あそこまで真つ向から我を通してくるなど、予想だにできなかった。

並はずれた魔法の才能と云い、あの子は一体……いや、下手に深入りするのによそう。

ともかく、これ以上突っぱねてもいられない。

彼女らを「民間協力者」として迎えると決まったのなら、それを見合った対応をすればいい……と自身を納得させつつも、もう何度目

かも分からぬ溜め息をクロノは吐くのであった。

少し時間を遡って、場所は高町家宅内、なのはの部屋。

『ですが、条件が二つあります、両名とも身柄を時空管理局の預かりとすること、それから私たち指示を必ず守ること、よろしいでしょうか？』

「分かりました」

最初から無条件で協力させてもらえるとは考えていなかった。

が、これでなのはや光さんに学校を休ませなければならなくなったが、もうこの際贅沢は言わない。二人がまだ義務教育の学校に通っていてよかった。

一方で内心は、やっぱり勇夜さんとアースラの人たちに任せられた方が良いのかもしれないとも考えた。

事故自体は不慮のアクシデントだったけど……なのはと光さんを巻き込ませてしまったのは、一人だけで突っ走ってしまった自分なのだから……そして日頃の生活を縫って、手を貸してくれた兄妹たちを……今度はその『日常』をも犠牲にさせることを強いてしまうことになる。それだけに、こうして返答するまで、時間が許す限り悩みに悩んだ。でも……二人の故郷であるこの星が危機に瀕している。

それを知ってしまった今、あの時なのはが語気を強めたように、二人とも、絶対に引き下がらない。

それになのはは、あの女の子……“フェイト”のこともあるから、中途半端に引き下がりはない。

ならその分、自分も二人の力になれるよう、力を尽くそう。

ユーノはアースラとの通信を切り。

『なのは、光さん、決まりました』

念話で二人に結果を報告した。

『了解です』

『うん、ありがとユーノ君』

その時なのはは、母の桃子の食器の洗浄を手伝っていた。

光はと言うと、義父と義兄と義姉と一緒に御神流の稽古のために裏山に出かけている。

「はい、これでおしまいつと」

皿洗いが一通り終わり、二人はリビングに移動してソファアールに向かいあつた形で座った。

「それで、大事なお話つてなあになのは？」

「う、うん」

なのはは、魔法やユーノ、ミラーナイトⅡ光、ウルトラマンゼロⅡ勇夜のことを伏せつつ、彼女の精一杯の表現で暫く学校を休み、家を当分空けなければならぬことを話した。

普通の家庭なら、娘がまともに理由を話さずに家を出ると言いだせば、断固反対して阻止するだろう。

まだ小学生となれば尚更だ。

だが高町家の場合、少し事情が違った。

光が言つてた魔法のことなのよね……なのははの話聞きながら、桃子は内心でそう呟く。

前にも話したが、高町家は光が、別世界から来た二次元人の血を受け継ぐ巨人であることを知った上で彼を養子として迎えた。

その為、当時生まれたばかりのなのはを除いた全員が彼の正体を知っている。

そして以前彼から、なのはについてこんなことを言われていた。

“なのはには特殊な力が存在します”

その時は彼もその力がなんなのか漠然としか分からなかったらしいが…

あの日、なのはがユーノを飼えないかと言ってきたあの日。



なのはが寝た後、光は話があると言って私たちを食卓に集まらせた。

その内容は：魔法が存在する別の世界から、事故で海鳴に過去の文明の遺産がばら撒かれて、その発見者である男の子が回収に来たが失敗、苦肉の策として、その子はなのはと光に助けを求め。

なのはの力がその魔法が使える力で、その時目覚めたと言うことだった。

余りに突拍子も無い話ではあったが、光もまたその突拍子も無い別の世界から来た住人だったので耐性がついており、直ぐに信じられた。

その時言われたのが、危ないことであることを分かった上でなのはが自分の意志で私たちに話してくれるまで、魔法のこと諸々のことを知っていることを伏せてほしいと言うものだった。

「危ないこと…なんだけど、大切な友達と光兄と一緒に始めたこと…最後までやり通したいの…」

危ないこと、それが事実であることは間違いない。

海鳴公園のボート場や、動物病院で起きた謎の損壊事故。

大勢の人が、アスファルトから出現した巨大な樹木を見たと言う集団幻覚。

これらが、その「遺産」の仕業であることも聞いたからだ。

「一つ聞くけど…光がどこから来た男の子なのか、もう知っているのよね？」

「うん…」

「そう…隠していたことは謝るわ…けどそれでもお母さんは心配よ…いくら光がとても強い人でも…なのはのことが、凄く心配」

でも…それでもものは止めないだろう、この家族の中で一番強情で頑固な子だから、光もそれが分かっているからこそ、一緒にその友達のお手伝いをしているのだろうし。

「でも、もう決めているんでしょう？お兄ちゃんと友達と始めたこと、それを最後までやり通すって、ならお母さんはそれを応援するわ、お父さんたちにはちゃんと説得しておいてあげる」

なら今できることは、その背中を押しあげ、本当に心から心配してあげ、無理はしないように……と伝えるだけだった。

けれど、また光になのはのことを頼んであげないといけなんなんて……

なのはがまだ小学校にも入っていない頃、わたしたち一家は色々あってなのはを残して。夜遅くまで家を空けなければいけなかった。

本当はまだ甘えたい年頃だったのに、なのはは我慢してくれた。それでも一人の夜はさぞかし孤独で辛い時間であっただろう。

本当は寂しいことを訴えたくて仕方がなかっただろう。思いつきり涙にして、出せるだけ出したかっただろう。

そんな時、光は率先して、なのはの傍にいてあげた。

一度、溜めこんださみしさを光に発散したことがあつたらしい。

以来、なのはは特に光に対し、甘えん坊になった。

今でもなのはは、光を『光兄』と呼んで慕っている。

そのことを恭也は承知しつつも、悔しがってしたけど。

前に『同じ声なのに、どうしてここまで違う』とか言っていた。

文武両道な彼が中学に入っても、帰宅部であり続けるのはできるだけなのはの傍にいる為だ。

思えば、なのはのことはいつも彼に押しつけてばかり。

今だってそう……でもお願い光——鏡の騎士ミラーナイト。

なのはを、お願いね。

「でも心配なのは変わり無いわ、だから……気をつけていきなさい」

実のところ、ウルトラマンゼロから出された宿題に関して、まだ明確な答えは出ていない。

フェイトちゃんはどうしたいか……一応、初めて会った時から知りたかったジュエルシードを集める理由、どこか寂しさを感じさせる目をしている理由。

諸星勇夜越しにはいえ、なのはは知ることができた。

だがその内容は、なのはの想像を超えたものだった。テレビやネットなどのメディアや、フィクションからぐらいいしか聞かない。

親から虐待を受けながら、無理やりロストロギアを集めさせられ、しかも、彼女は母の实の娘のクローンで、母はフェイトを娘と認めず。彼女自身、その真実を知らないまま、ジュエルシードを集めれば、実には元になった人間の記憶の中にあるかつての母に戻ることを信じて、自分とも何度も戦っていた事実を、なのは突きつけられた。

なのはも、昔は周囲に疎外感と孤独を感じ、それなりに辛い過去を体験しているが、彼女に比べれば自分は幸福であったと認識せざるを得ない。

そんな……フェイトより恵まれた自分に何ができるんだろ？

勇夜の言う通り、ただ知りたいだけでは駄目なんだ。

それだけじゃ、また中途半端に後悔するだけ、だから自分に『宿題』を出してくれたんだ……また半端に関わったせいで、自分を攻めてほしくなかったから。

まだ、自分なりの解答は見つけられない。

自分がフェイトをどう救いたいのか、どう接して向き合うべきなのか。

正直……「腹を括れる」のか……すらも分からない。

でも……「あの時」みたいに、このまま何もせず後悔して、何もできないまま終わってしまうのも嫌なんだ。

それでもユーノ君と光兄と最後までやり遂げると決めたんだ。

ジュエルシードを集めることも。

それが引き起こす災害からみんなを守ることだって。

そして……自分がどういう形で生まれたこともしらずに、お母さんと分かり合えない日々を送っているフェイトちゃんを、勇夜さんと一緒に助けたいことだって。

「うん、ありがとう、お母さん」

だから今は、背中を押してくれるお母さんに感謝の言葉を送った。

また、少し時間を巻き戻す。

ユーノがアースラと交渉していたその頃、光は市街の裏山にて。

「はアアアアア！」

光は義父の士郎と、稽古の一環で木刀で打ち合わせていた。

無論御神流なので、小太刀の長さで二刀流だ。

身体能力では光の方に軍配が上がるのだが、御神の剣士としての

キャリアは士郎の方が上、よってほぼ五分五分の稽古だった。

それを義兄の恭也と義姉の美由希が見学している。。

『なのは、光さん、決まりました』

その時ユーノから念話で結果を報告してきた。

どうやら交渉は成立したようだ。

だがユーノの話では当分学校は休まなければなさそうだ。

自分はまだ良い。

危険な藪の中に入る覚悟はあるし、己を守れるだけの力は日頃の研鑽で積んでいる。

けど……なのはにその藪の中を一緒に通らせることになるのは、気が引くし、抵抗感がある。

勇夜（ゼロ）も、きつとそのことで悩みに悩んだはずだ。

フェイトの境遇は、友と妹を迷わせるには、充分過ぎる重さを有している。

だから『腹括れるか？』とあの時、なのはと『自身』に問おたんだ。

思えば……『父』が、自分がエスメラルダの騎士になることを、最

後まで反対したのは、今の自分と同じ気持ちだったからなんだ。

あの頃の自分は、二次元人の父に、複雑な感情を抱いていた。

分かりやすく言えば反抗期。

騎士としては尊敬し、目標ではあった。

でも……『父』としては……『親』としては……許せなかった。

エスメラルダ人であった自分の母は、生んだ時に無理が祟って帰らぬ人となった。

父だってそれを悔んでいたのに、自分は父を攻め、『見殺しにした』と罵倒し、反対を押し切って騎士になり、『ミラーナイト』という名を王家から承った。

そのささくれた心はエメラナ姫専属のナイトになり、彼女や同僚の騎士たちの交流で治まっていったが、でも………和解は果たせぬまま、父は……ベリアル軍の侵攻で命を落とし。

自分も騎士の本懐を果たせぬまま、悪に堕ちそうになった。だから、ほぼ同じ身の上でありながら父セブンと和解できたゼロが、羨ましかった。

なのはへの想いも、あの時の後悔をしたくない、させたくないから………それなら、なのはの意志を尊重させるべきなんではあるが。でもそれにはどうしても、なのはを戦わせることになる。

誇りある騎士、戦士たち同士にとっては気高く、互いを讃えあう神聖なもの。

しかし、やはり『戦い』とは、血生臭く汚れ………多くの人を弄び、命を奪い、狂わせる魔物。

魔導師——魔法使いを続けるなら、恐らくずっとなのはを苦しめる鎖（ジレンマ）になることは違う。

だが………「取り柄が無い」自分に悩んでいたなのはにとって、魔法はようやく指し込んできた光明（きぼう）でもある。

“そう簡単には、手放せないだろう。”

自分が、御神流の稽古に励んでいたのも、『力』が自分から消えていくかもしれないことへの………恐怖と不安があったから………けれど力を持つことは、己の無力さという傷をを助長させる塩でもある。

「例の友達からかい？光」

念話を感覚的に察したのか士郎はその話しかけてきた。

自分たちが今何をしているのかは、話してあるのだが、実はその友達が今家で飼っているフェレットであることは内緒にしていた。

自分もなのはを巻き込んだことに関して、あれほどユーノにお仕置

きをしたのだ……もし恭也兄さんあたりが知ったらどうなるか……自分が言うのも何ではあるけど、想像するだけでも背筋が少し寒くなる。

「はい……暫くなのはと、家を離れなければなりません」

「そうなんだ……ごめんね光」

「なぜ美由希姉さんが謝るんですか？」

「だって、昔からなのはのことは、光にまかせつきりだったし……」

「気にしないで下さい」

自分も、あのロストログアやフェイトのことを、なのはに『まかせつきり』だ、おあいこ以上に高くついている。

「そうだと美由希、光は兄として当然のことをしてるんだ、だから……だから……」

あれ……なぜだろうか？ デジャヴと言う単語と、それと思われる感覚が今浮かんだ。

「見ないでくれ……こんな醜い兄を……」

「恭也兄さん……」

気づけば、義兄はベリアル毒の毒に侵されたかつての自分と同じように、こちらに背を向けて体育座りをしている。

なのはが自分を『光兄』と呼んで、そろそろ微妙なお年頃に差し掛かるいまでも、自分を慕っていることを、羨ましがっていることは知っていたが、どうにも気まずい。

ゼロも、〃体育座り〃して落ちこんでいた自分に初めて会った時は

『最後まで守る為に戦い抜いた、勇者の姿だ!!お前は、立派なやつだぜ』

——と叱咤してくれた。彼のその言葉に偽りは無かった筈だが、内心ではこんな気持ちを抱いていたのではと勘繰ってしまった。

けれど流石御神の剣で心身を鍛えて来たゆえか、恭也は直ぐに回復し調子を取り戻していた。

「大丈夫だ、学校には上手く説明して、休みをとらせるから……」

家族として迎えてくれた人たちが、こうしてフォローしてくれてい

るのだ。

「なのはが小さい時は『色々あったからな』……なのはには余り父親らしいことをしてやれなかったし、光がいなきや、ずっとあの子は周りに遠慮して生きていたかもしれないな……だからさ……」

「父さん……」

「ミラーナイト……なのはを……頼む」

「はい」

その人たちの為にも、最後まで自分ができることを為そう。

人として、戦士として、そして—— “ミラーナイト” として。

## EP21 | 遺されたもの

長方形の卓上に、十字架型のラインが入ったテーブルが中央を座し、全体的に深い青味のある一室。

ここはアースラ艦内のミーティングルーム、会議室に値する部屋だ。

「と言う訳で、本日0時を以て、本艦の全クルーの任務はロストログア、ジュエルシードの搜索と回収に変更されます」

リンディはこの部屋に集まったクルーメンバー+αに今後の任務内容を通達していた。

「また本件においては特例として、問題のロストログアの発見者であり、結界魔導師であるこちら」

「ユーノ・スクライアです」

「それから彼の協力者であり、現地の魔導師さん」

「た、高町なのはです」

「そしてなのはさんのお兄さんでもある剣士さん」

「高町光です」

そのプラスアルファに該当するのが、この三人だ。

「よろしくお願いします」

紹介された三人はクルーに挨拶をした。

緊張でやや強張っているのはとユーノとは対照的に、光は凜として堂々とした姿勢と、流麗な佇まいで頭を下げる。

さすが王制国家のナイトを勤めていただけあり、作法にはムラが無く洗練されていた。

なお余談ではあるが、後に彼はフィクションから飛び出してきた騎士として局内で評判になり女性ファンが大量に発生、アウトロー寄りな佇まいの勇夜と人気を2分する事態が起きたらしい。



同時刻。

「ではここからは、ジュエルシードの位置特定はこちらで行いますから、場所が分かり次第、現地に向かって回収作業をお願いします」

ブリッジの艦長席でリンディは、なのはたちに任務の概要を話していた。

「「はい」」

了承する一同。

「艦長、お茶です」

とそこにエイミイが、湯のみと、角砂糖とミルクによるかの水と油な組み合わせで、お茶を淹れて持ってきた。

「ありがとう」

受け取ったリンディは迷わずに、即湯のみの中に砂糖とミルクをドバーーーーと勢いよく入れ、恍惚とさえ表現できる満足げな表情で飲んで一服していた。

本人にとっては、好きな組み合わせなんだろうが、やはり見てるこっちは胸焼けとの戦いを強いられ、それに慣れそうも無い。

「そう言えば、こちらから頼んでおいてなんなのけど……二人とも学校は大丈夫なの？」

「あ、はい、私も兄も家族に説明してありますので、大丈夫です」

ちなみになのはは、アリサとすずかにも全容は伏せつつ、家を空け、学校を休んでであると伝えていた。

その間のフォローは、まだ素っ気ない態度のままだが、内心はなのはのことを思っているアリサが積極的に行っていたとのことである。

なのはと光とユーノが、アースラに同行してから10日ほど経った。

その間は、特に記すことは無い。

あるとすれば、異相体との戦闘がいくつかあったこと、ジュエルシードの反応が検知され、現場に急行したが、フェイトたちに先を越

された、或いは逆に先越したこと。

戦闘になった時は、3人のコンビネーションで対処したこと。

残ったロストロギアが6個にまで減ったことぐらいだ。

ともかく、ここ数日は、フェイトたちと鉢合わせとなる事態がまったく起きずじまいであった。

後は、何があったのかと言えば10日目のその日、光は異相体と戦闘にもなった海鳴臨海公園で待っていた。

個人的用事と調査ミットチルダに一時戻っていた勇夜から、自分専用のデバイスを受け取るためだ。

彼の二次元人のワープ能力を使えば、アースラの個室から、ここに来るまで朝飯前だった。事前になのはたちに何か動きがあれば直ぐ念話で呼ぶよう頼んであるので、非常時に後れをとることはほぼ無い。

「おーい」

海を見ながら待っていると、勇夜がこちらへと走ってきた。

指定の時間から、2, 3分早いご到着、因みに光は15分前から来ている。

「長旅御苦労様、まあ勇夜にとっては隣町に行く感覚だったのでしようけど」

「皮肉のつもりか？」

「いえ、本当のことを言っただけです」

「次元超えるのに苦労してないのは確かだけども」

実際、勇夜——ゼロは、リンク——イージスのお陰で半日もかからずに、次元の壁を越えられる。

シニカルさ抜き的事实であった。

「で…例のものは」

「ああ、できてるぜ」

勇夜はリンクから、鏡の星の紋章によく似た形をした宝石が埋め込まれたブレスレットを取り出し、光に渡した。

「希望通り、基本形態は二振りの小太刀にしておいたぜ、マニュアルデータもプログラムもリンクがお前の戦闘データを元に作ってそん

中に入っているから、その気になりや今からでも使えるぞ」  
「ありがとうございます」

勇夜が渡したのは、光自らデザインしたデジタル画にを元にリンクが子細に設計したデータを元に作成してもらった、零牙と同じ、アームドタイプのデバイスであった。

違いがあるとすれば――

『おはようございます、マスター光』

AIが埋め込まれていること、リンクと違い、声は男性のものであった。

「で、そいつの名前どうする?」

「そうですね…シルバークライト…でしょうか…構いませんか?」

『御意』

「しかし、よく一週間でできましたね…」

「元管理局の技術顧問だった行きつけの職人さんお手製だ、典型的な石頭だが腕は確かだぜ」

「そうなんですか…」

彼の言う通り、シルバークライトは一週間の突貫工事できたとは信じられないほど、完成度が高かった。

零牙も同様、勇夜の大まかなデザインにリンクが設計し、その職人さんが作り上げた経緯がある。

「ところで、ジュエルシードはあとどれくらい残ってる?」

「6個です、今は海底を重点的に探しまわっています」

海ん中か、可能性は0じゃねえよな。

海岸線に近い地にある海鳴市、その周りに落ちたのなら、海中に隠れていることも有り得る。

地上で探す以上に、苦労はしそうだがな、と勇夜は思案した。

「イカに憑りついて、クラーケンになったりとかはねえのか?」

「今のところは、ありませんね……」

光は苦笑いで返す。

だがこれも、可能性は0ではないのがみそであった。

事実、地上の動物の例もある。海棲生物の異相体も、出現し得る可

能性はあるし、運良くそうならないこともまた、無きにしも有らずではあった。

できれば後者であってほしい。

「そうですか：僕はアースラに戻りますが勇夜はどうします」

「わりい、まだ向こうで調べたいことがあるもんでね」

「分かりました、ではまた」

光と別れた勇夜はその足で再びミッドチルダに向かい、調べものの為にとある施設に入室していた。

LEDの明りが強過ぎない様調整された、やや薄暗さのあり、窓は一つたりともない空間。

一定の間隔で室内にそびえ立つ茶色がかった本棚たちと、棚の中で綺麗に陳列された資料本の数々。

シツクさと年季が入りながら、独特の閉塞感も漂っている。

この広くも狭苦しいフロアは、時空管理局ミッドチルダ地上本部資料保管室。名前の通り、犯罪関連の資料が保管されている場所だ。

どこかレトロチックな地球の蔵書施設に雰囲気は似ているのだが、心理的にこういう環境の方が落ち着いて書物を読めるらしい。

それは言えているなど、棚から資料を幾つか取り出す最中な勇夜は心の中で呟く。昔はそれこそウルトラマンの中で生粋の活字アレルギーだった自分でも、読書が捗りそうな空気が確かに流れているからだ。

今は読書が趣味の一つとなった現在の彼が本に触れた際、微かに半透明なフィールドが可視化される。

こっちの蔵書施設と地球のとの違いを上げるなら、各棚には特殊な魔力フィールドが常時展開されていること、フィールド内は真空状態となっており、紙質の劣化を極限にまで抑えているのである。

紙というアナログな情報記録、最も保存が聞いて比較的安全な媒体なのは、こちらの世界の同様であった。

何冊ものの分厚い資料ファイルを事も無げに閲覧用の机まで運ん

だ勇夜は、腰かけて最初に手に取り読み始めた。

初めの内は平静な顔付きで、ページを進めていたが、段々とその顔は不機嫌なものとなっていき、全て読み終えた頃には仏頂面な形となっていた。

淀んだ気持ちを発散させるべく、溜め息を吐いて仰向けに腰かける。

『(拝見させてもらいましたが、怒りを通り越して呆れ果てるばかりです)』

「(そいつは奇遇だ、俺もリンクと丁度おんなじ気持ちだよ)」

この時勇夜は、日頃移動に使っているVMAXカスタムのカスタマイザーでもあり、彼のデバイス——零牙の製造者でもある『情報屋』等から仕入れた情報と、さつきまで読んでいた事件資料から、今回の事件の発端も同然な『事件』の経緯を組み立て、結果相棒とともに呆れに塗れた心情となっていた。

その当事者たちには憐れみさえ浮かび、とぼつちりを受けたフェイトの『姉』に改めて哀悼の意を表したくもなった勇夜は、ここでの一応の目的は達せられたので、ちゃんと律義に元の場所に資料を戻していった。

資料保管室を出た勇夜は、近場のエレベーターに乗り、VMAXを停めてある地下駐車場の回のボタンを押す。

ほとんど振動を感じさせない立ち心地の良い円形ガラス張りの高速エレベーターが降りていく中、その間の暇つぶしにガラス越しに見えるクラナガンの魔天楼を見下ろしていた。

あつという間にエレベーターは地下駐車場に着き、勇夜は二輪車用スペースで停車していたVMAXのエンジンを起動して発進、出口用道路を通って地上へと出た。

「(リンク、実は行きたいところがある)」

『(どこですか?)』

「(アルトセイムだ)」

相棒に行き先を告げた勇夜は、通常の公道から高速道路に繋がるインターチェンジの道路へと入った。

アルトセイム地方、近未来の大都市風なクラナガンとは対照的に緑の森林がほぼ人の手が加えられずに残っている惑星ミッドチルダ南部の辺境の地域。

以前フェイトからそこに住んでいると聞いていた勇夜は、VMAXを走らせてそこへと向かい、たった今その森の中にいた。

ミッドチルダ屋内の高速道路は、結界魔法の応用で出発地の反対側へも半日で行けるので、ほんの数時間で目的地に着けたのだ。

先程まで乗り回していたVMAXから降りると、バイクは光を輝かせ、指輪形態のリンクの格納領域の内部へと消えていった。

『マスター、これからこの地でお調べになるつもりですか？』

「悪い、そこまで考えてなかった……」

フェイトたちの生家である『時の庭園』。

今は、マルチバースの海に佇んでいるが、前はここに停泊して生活していたらしい。

でもフェイトにとっては生まれ育った地なのだろうが、後はせいぜいフェイトがアルフト、この辺りを公園代わりにして遊んでいたぐらいで、事件に関わる手掛かりがあるとは言い難い。

「ただ、なんとなくここに来れば、何かある」って、思ってたさ」

痕跡が残っている根拠も保障も無いのに……曖昧だが妙に胸に引かかる直感のまま、気がつけば来ていた。

いくらフェイトの育った地だからって……どうしてここに『何かがある』なんて考えたんだか……行きあたりばったりにも程があるな……と、そんな自身を自嘲して嗤った。

『マスター』

「ん？」

『サーチャーを放っていたのですが、ここから南西5キロ先に建築物の反応が見受けられました、恐らく木造一階建てです』

こんな辺境にまで来て徒労に終わらせたくないかったのか、相棒は「何か」たる収穫を得ようとして実際にその「何か」を発見したよう

だ。

けど、こんな辺境の地に民家？ だれかが都会の生活に疲れて、自給自足の隠遁生活でもしてるのだろうか？

ともかく、このまま手ぶらで帰るのも癪だったので、行ってみることにした。

「これか？ リンク」

『はい、間違いありません』

リンクが指定された地点にあったのは、民家だった。

彼女の予測通り、木材で組み上げたシンプルで一階建て、生活の匂いを感じられないのでどうやら今は空き家になっているようだ。

だが一応ドアをノックした上で、勇夜は中に入る。中はテーブルと暖炉しかない殺風景な部屋だった。

床をこすると、指に埃がこびり付いた。

空き家になってから、それなりに月日が経っている。

「大体2、3年つてどこか……」

部屋中を見渡してみると、窓際に置かれたテーブルにトランクが一つ、置かれていた。

無粋なのを承知で、勇夜はトランクのフックを外し、開封。

中に収納されていたのは……分厚い一冊の本と……添えられた造花に、それと――

『DEAR MY FATE』……『親愛なるフェイトへ』……これ……これ……と書かれた……一通の封筒。

その封には続けて送り主の名前も記されていた。

中身を見ずとも十中八九、これは『彼女』が残した遺言だ。

なら、手紙と一緒に入っていたこの分厚い本は……表紙には何も書かれていない。

不躰なのは承知で、勇夜は本の扉たる表紙を開いた。

最初に書かれていたのは、『彼女』の前置きの言葉。

『私は愛するフェイトの成長の記録と同時に、私にとって大切な日々の記憶と願いを形として残せるよう、ここに記します』

そこから先は、最初の前置きの通りの文章が、延々と続いていた。例えば……自分が自分でも分からなくらい無性にアルトセイムに来てみたかったのは、*“彼女”*がフェイトにその*“手紙”*を渡してほしいという*“意志”*を受け取ったから、だったのかもしれない。

勇夜がある人物の遺物を発見してから、三日間。

アースラでは粘り強く探査は続けられていた。

フェイトたちも、探すのに手こずっているのか主だった動きを見せず。

出撃する機会も減り、なのはたちは専らアースラでデバイスによる仮想訓練をするか談笑する日々を送っていた。

「はあく今日も空振りかもしれないね……」

なのはとユーノは、今アースラの食堂で食事をとっている。

ちなみに光は、部屋で仮想シミュレータによる訓練中。勇夜から渡された専用デバイスを、今の内に慣らしておきたいとのことだ。

「全部集まるまで、結構長くかかるかもしれない……ごめんねなのは、まだ友達とも喧嘩したままなのに」

「ユーノ君が気にすることないよ」

「でも……喧嘩になったのは、僕たちに関わっていることが原因なんだよね？」

「にやはは……まあね……」

関わりと決めたのは自分の意志だし、親友たるアリサを怒らせてしまったのも自分だ、今やつてることを片づけたら、そちらもちゃんとけじめをつけよう。

「もしかしたら、家族や友達に『魔法』のことちゃんと話すことになるかもしれないけど、あ、ちゃんと秘密にするよう言うからね！」

「大丈夫、もうこうなったらちゃんと話してあげないと、みんな納得し



てくれないと思うから」

「そうだね」

「それでなのは…勇夜さんから出された例の『宿題』の方は…」

「うん…まだなんだ…」

なのはの原動力であった、どうしてフェイトが、あんな悲しく寂しい目をして、ジュエルシードを集めているか…本人から直に聞いたものではないにしろ知ることはできた。

けどその先にまだ行けていない。

あの子とどう向き合いたいのか、何をしてあげたいのか、まだ答えは出ずにいる。

母の願望から生み出され、ただ『アリシア』では無いという理由で拒絶され、その『願望』を現実にするための道具としかみなされず、本人はそれすらも知らぬままに、母に報いようとする孤独な女の子。

そんな子に、自分は どうして あげたい のだろう？

「あたしも、昔は一人ぼっちだっと思ってたことあったけど…」

「なんで？…あんなに優しい家族がいるの？」

「実はね……」

ふと漏らした一言が切っ掛けで、なのははユーノに自身の昔を語り始めた。

わたしのお父さんは、翠屋のオーナーになる前は偉い人のボディガードをする仕事をしていました。

御神流も、そうした仕事のために代々伝えられてきた剣術だそうです。

わたしが三歳の頃、翠屋を開く為に最後の仕事に臨んだあの日、お父さんは大ケガを追って入院をすることになり。

お母さんは翠屋の営業に、恭也兄ちゃんと美由希姉ちゃんと光兄は学校の合間のお手伝いで忙しく、わたしはみんなが帰ってくるまで、家で一人待つ事が多くなりました。

まだ小さいながらも、我儘を言っではいけない。

迷惑をかけてはいけない。

我慢しなきゃ……耐えなきゃいけない。

そう自分を抑えつけながらおくる毎日でした。

でもやっぱり……一人でいることが……傍にいる人が誰もいないことが、寂しくて寂しくて……わたしは誰にも必要とされない。

いらぬ子なんだって……何もできない、取り柄がない子だって……何度頭を過ったか……そんなある日のことでした。

光兄がいつもより早く帰ってきました。

この頃の私はまだ『光兄ちゃん』と呼んでいました。

光兄は、灯りも点けずに待ってたわたしを見て、心を痛めたのでしよう。

「寂しくないですか？」

お馴染みの丁寧な言葉遣いで自分を心配してくれました。

でも心配させちゃいけないと思った私は無理に笑って。

「大丈夫」

と言いました。

その日の後も、光兄は毎日早く帰って来て、傍にいてくれました。

でも、素直になれない私はある日。

「大丈夫だから、我慢するから！なのはを放っておいて！」

「ずつと、なのはを一人にしたのに！ どうして！ 一緒にいてくれるの!?!」

と言ってしまった。

直ぐにこんなこと口走ったことに後悔し、小さいなりに相手から愛想をつかれたと思ってしまう。

そしたら……光兄はわたしを抱きしめてくれました。

何も言わずに、強くも、せつなくも、優しく。

そしてただ一言。

“一人にさせて……ごめんね”

言葉とともに、その想いを抱擁で伝えてくれました。

いらぬ子だって嫌なことを考えてた自分が……心配させてしまった自分が……何より何もできない自分が許せなくて……そして自分を抱

きしめてくれたこと、一緒にいると言ってくれたこと。

それが、とても嬉しくて……その時、溜めこんだものが一気に溢れ出しました。

その後は、その言葉の通り、翠屋の手伝いも行いながら、できるだけ自分と一緒にいて、遊んで、笑ってくれました。

わたしも、そんな兄を素直に何度も甘えたりしていました。

その頃からです……私が「光兄」と呼ぶようになったのは――

「そ……そんなことがあったんだ……」

「な、なんか……色々と重くなっちゃったね……」

なんとか、話題を明るくものにしなきゃ……なのは不自然にならないように、話の内容を軌道修正しようとする。

「そう言えば、ユーノ君の家族って」

「ああ、僕は元々一人だったから……」

「え……そうなの？」

ユーノによれば、彼の両親は発掘作業中に起きた落盤事故で帰らぬ人となったとのこと。

場を明るくするつもりが、逆に墓穴を掘ってしまった。

彼と違って、なのは親兄弟全員いるだけに、なのははどう答えればいいのか、言葉が見つからない。

どうしよう……と困惑で冷や汗が額から一筋流れた。

「いや！ 確かに両親はいなかったけど、部族のみんなに育ててもらったから、一族みんなが、僕の家族なんだ」

言い淀むなのは気づいたユーノは慌てて心配させまいと返した。

「そっか……」

考えて見れば、ジュエルシードを集めることに時間を費やしていたから、こうしてゆっくり話すのは久しぶり………と言うより、初めてのことだろう。

「雑談ですか？二人とも」

噂をすれば光兄が、昼食のトレイを携えて隣にやってきた。

昔のことを思い出して話していたせいかな、なのは兄の顔を目にしたら、途端急に恥ずかしくなって顔が赤くなり出し、そっぽを向いた。「どうしましたなの？」

「え……うん、な、なんでも無いよねユーノ君」

と言ったものの、顔は赤いままなので『なんでもない』と説得させる効力など全くない。

「あ、えーと、そうだね」

「……………」

笑ってごまかそうとするけど、やっぱり駄目……かな。

そう考えていた時、突然艦内にアラートが鳴り響いた。

『エマーージェンシー！ 搜索域の海上にて、大型の魔力反応を探知！』

同時に緊急事態を知らせるアナウンスが響く。

けたたましい大音量を前に、三人は即座に気持ちを切り替えて、アースラのブリッジへと向かった。

海鳴市ときさほど離れていない太平洋のある海域に張られた結界内では、波が荒々しく蠢き、どす黒い雲は、台風並みの風と雨を起こしていた。

その真っ只中に、フェイトとアルフはいた。

何を隠そう、この異常気象を起こしているの張本人のフェイトなのだ。

アースラと同様に残りのジュエルシードが海にあると踏んだ彼女がとった行為は、余りに無謀すぎるものであった。

「撃つは雷、響くは轟雷、アルカス・クルタス・エイギアス……!!」

九つの魔力スフィアから稲妻がほとばしった。

以前、海鳴市街で行ったことと同じく、ジュエルシードに魔力を撃ち込んで強制発動、位置を確認し、再封印を行うと言うもの。

だがその以前と違って、今度はそれを6個まとめて行おうとするものであった。

当然、魔法もその分大掛かりなものになる。デバイスのサポートで発動に必要な詠唱は最小限に抑えられるが、大規模魔法となると、術者が直に自分の言葉で詠唱することを余儀なくされる。

彼女の恵まれた魔力量でも、その大半を奪う大規模な魔法の雷撃だった

（海ん中の6個を全部ブン捕まえるなら、このプランが一番……だけど）

相手は下手するとゼロの世界の怪獣以上の被害を及ぼす怪物。それを一気に6体を無理やり起こして、その6体相手に消耗した体で戦うのである。

プランと表現するには、荒っぽく無茶で、リスクが高くつく行為であった。

稲妻は荒れる海原に降り注がれると、撃ち込まれた海中から、青白い光を輝かせる。

ジュエルシードが発動したのだ。

それも6個同時。

「はあっ……ああっ……見つけた……」

海中を照らす光は、さらに輝きを増し、それに呼応するように、波が生き物のようにざわめき始める。

これだけの魔力を撃ち込み、更に全てを封印するなんて……こんなの、フェイトの魔力でも、絶対に限界を越えている。

アルフですら、フェイトの行為は無茶の極みだと判断せざるを瀨ない。

現に大技の行使で、もう既にフェイトの息は荒く、疲労が溜まり始めている。

執念場とは正にこのことだ。

地道に一個ずつ探す手もあったが、もう彼女のメンタルにそんな余裕は残されていない……さっきフェイトが提案してきた時、当然無茶だと反対したが、結局押し切って実行に移してしまったのだから。

「アルフ！空間結界とサポートお願い！」

「ああ！任せといて！」

今……自分にできるのは、彼女をサポートし、守ること。  
アルフはそう自分に言い聞かせながら、眼前の大波に挑むのであつ  
だ。

艦橋に入った光、なのは、ユーノの三人は、モニター越しにその状  
況を見ていた。

「光兄、フェイトちゃんは何を？」

「この前のように、強制発動で位置を割り出した後封印する魂胆で  
しよう、でも今度のは規模が違いすぎる……」

「なんとあきれた無茶をするのかしら、あの子……」

「無謀ですね……間違いなく自滅するでしょう、あれは個人が出せる  
魔力の限界を超えている」

なのはは光、リンディ、クロノの三者三様の言葉から、少なくともフェ  
イトが危険な状態にあることを理解、映像越しに見ても、極度に疲労  
している体に鞭を打ち戦い、苦戦を強いられていることは一目瞭然。

「あ、あの、わたし急いで現場にー」

「その必要は無い」

モニターの向うへ急行しようとするなのはをクロノが引きとめる。

「彼女が消耗するまで、静観するおつもりですか？」

冷静とさえ言えるほどの冷静で無感情な執務官の少年の口調から、  
光はクロノの意図を読み取ったらしく、彼に真意を問う。

「そうだ、たとえ自滅しなくても、力を使い果たしたところで叩けばい  
い」

淡々とした調子でクロノは肯定した。

「でもー」

非情な宣告。

だが正論であり、この場において最も合理的な選択肢である。

どう足掻いても、フェイトが行おうとしているのは、個人的な理由  
(エゴ)から来る違法行為であり、犯罪であり、まだ幼い少女であると

しても、覆しようのない事実。

「捕獲の準備を」

「了解」

なのはたちをよそに、クロノは年上の部下であるクルーに指示を出した。

「残酷に見えるかもしれないけど、これが現実、わたしたちは常に最善の選択をしなければならぬの」

最善の選択、組織の人間は時に私情を捨ててことに当たらなければならない。

が、光はともかく、小学生のなのはには納得しろと言われても、無理な話であった。

とは言え、命令を聞くという条件でアースラに同行しているため反論もできない……だが目の前には、魔力刃を形成するだけの力も残っていない、満身創痍の少女がいる。

けど、冷静に考えてみればなのは一人が、向うに行くだけで事態が好転するとは限らない。それどころか、今までみたいに妨害に来たと思われて……余計事態がややこしくなる危険性もある。

ジュエルシードを集めるのことが、フェイトという少女が継る、たった一つの希望であり、でも決して褒められたことでもない、なのはとて理解している。

けど……このまま放っておいたら……1個だけでも危ないのに、6個全部が暴れることを許していたら、危ないでは済ませれない事態になる。

どうしたらいいの？

どうにかして、フェイトを止めたいのに、助けてあげたいのに。

拳に力が入り、迷いの迷路に嵌り、抜け出せなくなりそうになる寸前。

「(何そんなところで油売ってんだ?)」

なのはの脳裏に念話——テレパシーで声が響いた。

「(勇夜さん?)」

その相手は、自分とフェイトを何度も助けてくれた、諸星勇夜その人。

「(リンディたちの言い分に間違いは無いさ、俺も『正しい』とは思ってる、けどな、なのはのフェイトへの想いは、その程度のもんだったのか?)」

先程のクロノの発言とは対照的に荒っぽい温かみのある言葉が響いてくる。

「(でも…)」

「(命令無視の落し前は僕たちがつけます)」

「(光兄…)」

「(なのは、あの子の元に行ってあげて、僕も一緒に行くから)」

「(ユーノ君)」

次元を超えてやってきた二人の巨人と一人の少年がなのはの背中を押して行く。

いけないことは自覚している。

でも、正直な気持ち、今直ぐにフェイトの下へと行って、彼女の危機を救いたい想いは、強く心に巡っている。

行かなきゃ、このまま立ち止まっていたら、絶対後悔する。

ここで助けあげられなきゃ、その頑なな心を捕える運命から、フェイトを救ってあげられない。

それに、同じ想いを持つてるのは自分一人だけじゃない。気持ちを共有している人たちが確かにいるのだと噛みしめた時——なのはの脳裏に閃きが走った。

そうか……ようやく今、勇夜から出された『宿題』の答えが……掴めた。

自分が、あの寂しい目をした女の子と、どう向き合いたいか……：ようやく形がはつきりと現れたのだ。

「(ユーノ、僕の鏡で防護しますから、その間になのはと転移を)」

「(はい)」

光はなのはとユーノに向けて手を翳すと、十字架状のクリスタルが



球体状に二人を包み込んだ。

「君たちは！」

何をしようとしているか察したクロノは、止めようとするが。

「待っただぜ」

光のすぐ横の床に魔法陣が出現、そこからこの場に転移した勇夜がクロノを制止した。

「ありがとう、光兄、勇夜さん！」

なのはのお礼の言葉に、二人は頷いて返す。

無言の頷き……ただそれだけで二人から、勇ましさと頼もしさを感じた。

「今の内に行け」

「分かりました、妙なる響き——光となりて——我らを彼方の地へと羽ばたかせ」

ユーノの呪文詠唱が終わるとともに、転移用の魔法陣と一緒に二人はその場から消えた。

「君たち！ 今何をしたのか——」

先程の冷徹さは既に消えたクロノは、語気を強めてなのはたちの独断を許した勇夜たちを問い質した。

「説教なら後であいつらの分まで聞いてやる、けどこのまま呑気に待ってたら、色んな意味で手遅れになっちゃうんだよ」

「今はあの子の結界で外界への影響は防がれていますが、その維持もままならなくなるのは時間の問題です、あなた方の『最善』で、海鳴市を危険に晒すわけにはいきません」

対して二人は毅然とはつきり返す。

彼らの表向きの言葉の裏にある想いの形は、至ってシンプルだ。

小難しい理屈などない、なのはと同じ、助けたいと思うから、助ける。

沸き上がる感情（おもい）だけで充分、その心のままに、彼らは足元に魔法陣を敷き。

「そういうわけだから、先に言ってるぜ」

勇夜と光——二人の戦士は、魔法使いである彼女たちを助けるべく、その場から消え去っていった。

## EP22 — 海上の決戦

6個のジュエルシードの強大な魔力を有す天へとそびえ立つ一頭の海の竜巻を前に、フェイトは防戦一方。

体内の魔力は強制発動に使ったサンダーフォールで体力とともに枯渇し、新たに魔力素を取り込む余力も無い。

当然、遠距離から封印の術式を込めた飛び道具は使えず、飛行速度もいつもよりキレに欠け、渦から放たれる水の鞭を回避するだけで精一杯、踏み込んで切り付けることすらままならない……気を抜けば、強風で姿勢制御すら崩されそうだ。

「フェイトオオオオオ———!!!」

アルフも風と鞭の猛撃にフェイトと引き離され、サポートすら叶わない。

完全に活路が断たれたかに見えた。

その刹那、薄暗い曇天の合間から、光が溢れ出る。

積乱雲が起こす雷、ではなかった。

降り注ぐ桜色の眩い光に、アルフとフェイトは釘付けになった。

そして、雲と光の隙間から、降りてきたのは、桜色の光を纏った、あの白い魔道師の女の子。

陽光を浴びた白装束のバリアジャケットを纏うその姿は、正に天使。

「フェイトの邪魔を……するなああああ———!!!!」

アルフは舞い降りた白の魔導師へ、拳を振り上げ突進。

フェイトの消耗が著しいこんな時に、管理局と手を組んでいるであろう彼女が現れたので、てっきり妨害しに来たのかと思っただけの行動だった。

「(落ちつけアルフ)」

そこへ脳裏に響く、聞き覚えのある声に飛行速度が緩む。

直後、アルフの目の前に出現した魔法陣から勇夜がこの場に転移し、彼女の拳は彼の掌に受け止められた。

「勇夜!？」

「いがみ合ってる場合か？　このままじゃお前もフェイトもお陀仏になるぞ」

勇夜の忠言で冷静さを取り戻すアルフ、確かに自分たちだけではあの異相体の竜巻を止めるには無理がある。

自分では大掛かりな儀式魔法は使えないし、フェイトも体力も魔力も搾り取られてしまった。

「僕たちは戦うために来たわけじゃないんです！」

「今は拳を引いて下さい、戦闘なら異相体を止めた後でもできるでしょう」

アルフの懸念を頷けるように、光とユーノが呼び掛けた。

ちなみに、初めて実戦でデバイスを起動した光は、勇夜より明るい色のジーパンと、ミラーナイトと同じカラーが塗られたジャケットを羽織っていた。フアスナーを襟まであげているあたり、彼らしい。

そしてその手に持つのは、緑が主な配色の鍰無しの二振りの小太刀。

シルバーライトの基本形態、ショートセイバーモード。

『全く、何をやってるんだ君たちは!』

通信でクロノの声が響いた。案の定独断専行されたことに、変声期前の中性的な声は少し強く張りがあり、苦言の色が混じっている。

「ごめんなさい!でもほっとけないです!!　ジュエルシールドも!　フェイトちゃんも!!」

なのはは丁重に謝罪しつつも、フェイトを助けたいという強い想いを口にする。

「悠長に待ってたら手遅れだって言っただろ、ここで結界が消えたらジュエルシールドが起こした津波で街を呑みこんじまうだよ!」

勇夜、光、ユーノの三人も、理屈じゃない想いを内に秘めていたが、一方で理性的判断も以てこの場に来ていた。

確かにジュエルシールド6個相手に無謀な手段を押し通そうとしているフェイトを御用にするには、自滅するまで待った方が合理的ではある。

だがフェイトはおろか、アルフまで消耗させてしまえば、結界の維持は困難となり強制解除、そうなってしまえば、異相体の竜巻が海鳴市街に襲いかかるのは確実だ。

それを判断した上で、彼らはなのはの背中を押しつつ急行したのだ。

「……………」

なのはの押しの強さと、勇夜の筋の通った返答を前に、さしもの堅物君なクロノも、言い返すことができなかった。

人命を救うのは局員の使命としている彼から見れば、勇夜たちの行為は命令無視だが、同時にこの状況に於ける判断としては間違っていないかつたからである。

そんな勇夜たちの遣り取りを、呆然と見ていたフェイト。

敵は、満身創痍でもある彼女が見せた隙を逃さなかった。

「フェイトちゃん！ 後ろー！」

渦から放たれ、遠心力を相乗して振るわれる海水の凶刃が、フェイトを捉える寸前。

「このー！」

勇夜は刀身にディファレーターパワーを纏わせた零牙による一閃

——オーラ

セイバーで横薙ぎに両断した。

オーラセイバーは非殺傷等の利便に富む魔法か、今間一髪フェイトを救えた様にタイムラグをほとんど挟まず発動できるディファレーターと、状況に応じて使い分けられる技だ。

斬撃による衝撃と熱で、水蒸気を上げ四散する水製の鞭。

飛び散る水玉を浴びながらフェイトは勇夜に視線を送った。振り向いた彼は目線を送る返すだけで何も答えない、でも彼がフェイトを助ける理由は分かっている。

約束。フェイトが、自身の魔法を以てしてもどうにもならなくなつた時は、必ず助けるといふ、彼の誓い。

口にせずとも、それを勇夜は、今でも当たり前のように実行に移していた。

熱い……ウイルスに感染しているわけでもないのに、彼を意識すると、頬が胸の奥が、奇妙な熱に晒された。

そして、またこうして来てくれたことが、堪らなく……却って戸惑う程に、嬉しくなる。

まだこの時のフェイトには、その気持ちの正体が、全く分からずだった。

「まずはジュエルシールド止めないと……放って置いたら融合して、手の付けられない状態になるかもしれない！」

ユーノの言う通り、ジュエルシールドの輝きは増し、渦巻きとそれによつて誘発される波の勢いも凶暴さを増していた。

「封時結界！」

外への影響を完全に遮断すべく、ユーノはフェイトの結界の内側にもう一幕結界を生成した。

これでもう暫くは外への被害は回避される。

『融合による次元振発生まで、後およそ10分です』

異相体の状態をスキャンしていたリンクが、最悪のシナリオがスタートを切るまでのタイムリミットを導き出した。

10分、父ら先人たちの地球での激闘に比べれば、充分な時間だ。「光とユーノとアルフは奴の動きを止めろ！ 三分割に切り分けてな！」

「了解！」

「はい！」

「ゆ、勇夜？」

あたかも普通のことのように、アルフにも指示を出してきた当惑気味だ。

「力を貸してくれ、頼む！」

戸惑うアルフに、勇夜は念を押しして願い出る。

いくら自分でも一度に6個全部を一度に封印するには無理がある。かといってウルトラマンになって破壊するわけにはいかない。そんなことすれば、先日に引き起こされたのと比べ物にならない規模の次元振を発生させてしまう。確実にこの世界の地球が空間の歪みに捻じ切られ、そこに住む生命たちごと消失することになる。

この状況をどうにかするのは、ここにいる6人全員の力が必要なのだ。

勇夜の端的だけど、必死で切実さが籠もった言葉が功を奏したのか、アルフは顔に戸惑いを残りつつも頷いた。

「フェイトちゃん手伝って！ ジュエルシードを止めよう、勇夜さんと一緒に」

一緒に手伝ってほしいと言ってきたのはに対して、フェイトはまたも面喰う。

『Divide Energy』

なのははデイベイトエナジーでレイジングハートからバルディッシュのコアに魔力を送り。

「メディカルパワー」

勇夜の掌から、様々な暖色に彩られる小さな光球たちによるシャワーが彼女に注がれる。

メディカルパワー、生命力を活性化させるウルトラマンとしての治療技だ。

疲労による体の重荷がみるみる抜けていき、体内に魔力が戻っていく感覚をまじまじと知覚するフェイト。

『供給完了』

バルディッシュの応答とともに、消えかけていた魔力が回復。

短くなってきた魔力刃も、元の長さに戻った。

「光兄とユーノくんとアルフさんがサポートしてくれるから、今のう

ちに、大丈夫、私たちなら、一緒なら、きっとできるよ」

なのはの言う通り、未だどうするべきか惑い漂うばかりのフェイトをよそに、状況は動き出す、荒波を止めるべく尽力する者たちによって。

「チエーンバインド！」

先手はまずユーノ、掌から出現した魔法陣から魔力で形成された翡翠色の鎖を解き放ち、異相体を縛り付ける。

だが相手も大人しくする気は毛頭なく、鎖を解き放とうともがき続ける。このままでは力負けするのはユーノの方だ。

「ぐっっ！このままじゃ…」

「ストラグルバインド！」

そこにアルフもバインドを形成し、その抵抗を抑えつけた。

彼女の使ったストラグルバインドは、捕縛した対象の魔法効果を弱らせる効果がある。

ジュエルシードのパワーを弱体化させるには持つてこいな捕獲魔法、その分拘束力はお世辞にも強いと言えない弱点があるが、パワー不足はユーノのチエーンバインドが補うことで互いをカバーしていた。

「行きますよ、ライト！」

『御意、ミラーリング』

「ハアアア！」

光はライトの刀身から、CD型の魔力カッターを形成して放つ。

ウルトラマンの切断光線、『八つ裂き光輪』を参考にした斬撃魔法、『ミラーズリング』だ。

二振りの刀身から発した二つの刃は、幾重にも分身。

バインドに縛られたジュエルシードの荒波を三分割に切裂く。

融合寸前だった異相体の波は一体から三体にジュエルシードごと枝分かれし、融合妨害による弱体化でその勢いを一気に弱めた。

ユーノとアルフは、もう一度バインドを張り直し、再融合を図る異相体の行動を阻止すべく力を強めて縛り上げる。

それでも分散されたことで力が弱まっているので、さっきよりは動



きを封じやすくなっていた。

そして光は追い打ちに。

「まったく騒がしい方々ですね、少しは落ち着いたらどうですか？」

『シルバークロウエイト』

異相体の真上に、彼の防御技、デイフェンスミラーを彷彿とさせる輝く十字架を形成、それが幾重にも降り注ぎ、突き刺さる。

周辺に特殊な重力場を作る光剣——《ミラークロウエイト》を元にした彼独自の魔法——《シルバークロウエイト》だ。

「デューア！」

勇夜はウルトラゼロアイを装着してゼロに変身、左腕をスライドさせ、両手をL字に組んだ。

「そろそろ大人しくしてもらうぜ、ブリザードワイドショット——  
デェア！」

右腕の側面から、デイファレーターエネルギーを青白い冷凍光線に変換させたワイドゼロショット——《ブリザードワイドショット》を発射、三体の異相体の渦の根元を素早く氷結させた。

氷の糧を壊そうにも、ユークたちのバインドと、光のシルバークロウエイトによる重力波が阻みとなり、その上ゼロのダメ押しで異相体の動きがさらに鈍化、先程までの荒ぶる勢いは失速して見る影もない。

四重の拘束で、波も風も、身に降りかかる圧力が一気に弱体化した。

今が、封印するのに絶好のチャンス。

「フェイト、なのは、1人2つの割り当てで封印だ、行くぞ！」

「はい！」

人間体に戻った勇夜となのはの足元に、それぞれの魔力と同色の魔法陣を生成され。

「零牙、アローモード！」

リンクから弓形態の零牙を取り出した勇夜は、弦を引き。

『Mode change, Cannon Mode』

「デイベインバスターフルパワー、行けるね？」

『当然です、我がマスター』

なのははレイジングハートを砲撃形態に変え、パートナーのトリ



なのははレイジングハートの引き金を引き。

フェイトはバルディッシュの刃先を魔法陣に突き立て。

勇夜は零牙の弦と引き絞った魔力の矢を離して。

必殺の一撃を解き放った。

溢れる桜色の魔力光が、広範囲に迸る金色の雷が、燦燦（さんさん）と輝いて大気を裂き、突き進む青緑色の矢が、災厄を巻き起こす宝石を呑みこんでいく。

6個のジュエルシードは、一斉に眩過ぎるな光を発して、活動を停止していった。

アースラのモニターに映ったのは、青い閃光の後に活動を停止したジュエルシードだった。

「凄い……6個全部を完全封印」

エイミイは、オペレートの仕事をこなしつつも感嘆の声を上げる。

「凄いわ……」

ハラオウン親子も、クルーたちも驚きを隠せず。

一発で封印させた彼らのパワーもあるが、何よりも敵対している身同士でありながら、それぞれの役割を分担して事態を収束したその手際の良さに驚嘆を隠せなかった。

特に裏の功労者を上げるなら、諸星勇夜ことウルトラマンゼロ。本人は自分の立ち位置を一番“中途半端”と自虐していたが、結果として双方からの信頼を得て、立場では敵対する間な者たちを共同戦線に誘わせたからだ

無論、あの状況で“一人”でも欠けていたら、ここまで迅速にジュエルシードの暴走を食い止められなかっただろう。

海上に“6人”全員が集っていたからこそ、可能にした離れ業だった。

海は静寂を取り戻し、雨も風も止み、雲の合間から太陽光が降り注ぐ。

先程の荒れた光景から一転して、穏やかなものになっていた。

「勇夜さん……」

「宿題の答えはできてんだろ？なら 言ってみてやれ」

「……………はい」

そう……勇夜——ゼロから出された宿題。

その自分なりの解答がようやく定まった。

自分が一人だと思ってたあの頃に、光兄が教えてくれたこと。

勇夜さんが自分に宿題を出した時、ヒントを既に出してくれたこと。

なのはは、真っ直ぐフェイトに向き合う。

余りの真っ直ぐにフェイトへと送られる瞳に、受けてたる彼女はとう応じればいいか困惑した表情を浮かべていた。

「フェイトちゃんの抱えてることに比べたら、私は恵まれているのかもしれない、甘ったれた……我儘な子なのかもしれない、でも、今伝えたいの、ジュエルシードは……どうしても譲れないけど……私は……フェイトちゃんと——」

自分の想いを打ち明ける。

喻え歪な生まれ方をしていても。

心を押し殺して戦っていたとしても。

自分がその子より、暖かな家庭で育っていたとしても。

それでも、目の前の悲しみを背負ったこの女の子を助きたいから。だから——

「——友達に……なりたくないんだ」

“この子と、分けあいたい”

寂しさや悲しみを共有し、自分が持っている喜びや温かさを分けて、少しでもフェイトの抱える重みを和らげて、支えてあげたい。

“友達”——として。

雲の隙間から注がれる太陽光を受けて、想いを伝えたなのはの姿

を、フェイトは目を大きく開かせて、じっと見つめていた。

だがなのはが想いを告げるために用意された静寂は、糸も簡単に破られる。

最初に異変を察したのは勇夜と光……本能が自分たちに危険が迫っていること呼び掛けてくる。

まさか！　そして次なる異変。

『次元干渉？　別次元から本艦及び戦闘空域に高次魔力来ます！  
あ、あと六秒!』

通信から響く、エイミーからの無情な宣告。

「母さん…」

フェイトは、その宣告を遂行する元凶の名を読んだ。

黒く染まった空から、紫色の稲妻が降り注ぐ。

「動かないでください！」

それが当たる寸前に勇夜と光は互いのエネルギーを合わせて巨大な長方形のバリアを貼り、雷撃を防いだ。二人がそれぞれのバリアを合体させた防御技——《ディフェンスミラーゼロ》の魔法版だ。

(フェイトと同じサンダーレイジだが……)

(威力は彼女のより…遙かに…上)

巨大な雷撃の龍に押しこまれながらも、なのはたちを巻き込ませないと二人は必死に耐える。

第一射はなんとか持ちこたえた。

だが、間髪入れず、まるで勇夜たちをジュエルシードから引き放すように、最初の一撃よりは弱目だが、さらなる雷撃が降り注ぐ。

果敢無く振ってくる雷に回避に専念するしかない一同。その間にアルフは、ジュエルシードに目がけて飛んだ。

しかし、その目前に。

「これを渡すわけにはいかない！」

クロノがアルフの眼前に転移をして立ちはだかった。

「じやまを…」

アルフは激情のままクロノの腕を掴み上げ。

「するなアアアアア！」

投げ飛ばした。

その隙に回収しようとするが： 三個だって!?

浮遊するジユエルシードは、先程の半分しか残されていなかった。

なら残りはまさか……クロノを投げ飛ばした方に目を向けると、クロノの手には消えた残り半分の三個があり、デバイスに収納していた。

「ちくしょう！」

アルフは海面に魔力弾を撃ち込み、水柱で目くらましをし、母のとった行動に立ちつくしているフェイトを連れて逃げ去っていった。

その時はアースラも攻撃を受け、システムが一時ダウンし、逃亡した先を特定することも断念せざるを得なかった。

「グオホオ！」

災害クラススの雷を降らせた元凶。

プレシア・テスタロッサは時の庭園、玉座の間で多量の血を吐いた。吐血は止まったが、息は荒く、短いサイクルで呼吸が繰り返されている。

「もうこれを使うのも……限界かもしれないわね」

彼女の右手には、*「怪獣使いのアイテム」*と類似した補助デバイスが握られている。

そして左手は、吐血した血液で、赤く染まっていた。

こんな汚れた手で…… *「あの子」*を取り戻そうと、もう一度会いたいと考えるなんて……今となつては、なんて愚かだったのかとしか言いようが無い。

ここに来て今さら、あの子との約束を思い出すなんて……なんと間が悪い。

*「てめえの下らないエゴのために、フェイトとアリシアを弄んでん*

じゃね!”

そうね……わたしは娘の為と言いながら、結局自分のことしか考えず……”子どもたち”を不幸にさせてばかりだった大悪党。

大事にしていたのに、忘れてしまい、それに気づくのがいつも遅すぎる愚者……ならせめて、”悪女”の極みな自身にできることと言えば、やはり。

「指示や命令を守るのは集団を守るためのルールです。勝手な判断や行動があなたたちだけでなく、周囲の人たちも危険に巻き込んだかもしれないということ。それはわかりますね？」

アースラ内の会議室、ここでは艦長のリンディ・ハラオウンが、命令無視をして独断行動をとったのはたちを、厳しい声色と口調で咎めていた。

リンディの横にはクロノがおり。無論、光も勇夜もこの場に同伴している。

「はい」

大小問わず、組織に属することは、同じ組織内にいる同士と一心同体かつ一蓮托生となる。

生きるも死ぬも——は言い過ぎかもしれないが、一個人の独断が全体を巻き添えにしてしまう結果を生み出しかねない。

「艦長……責任は自分たちにあります」

「この子たちを煽つたのは俺たちだ、余り責めないでくれ」

勇夜と光は、少女たちの独断が自身が起こしたものと強調する。

理屈を超えた想いで動いたのはと違い、この世界に来る以前から、二人はある意味社会人として、組織に身を置き、その運用についてはある程度理解を及んでいるいたからだ。

その為最初から、罰則を受けること覚悟して、彼らはあの場に臨んだ。

「待つてあなた達、確かに本来なら嚴重に処するところですが……融

合暴走と地球に多大な被害が及ぶ危険性があつたということも鑑みて……」

とは言え、あのままフェイトが生き倒れるまで静観を続けられ、ジュエルシード同士が融合して、最悪の中の最悪の場合、以前海鳴市街で起きたものと比較にならない次元振を引き起こしかねず……最悪地球が太陽系から消滅してしまう事態になってもおかしくなかった。

結果的ではあるが、組織の『最善の選択』が『最悪の結果』を生む皮肉的な結末は免れたのである。

「よって今回は、特別に不問とします」

処分は無し、という判断になのはとユーノは頬が緩みそうになったが。

「ですが……正式な局員であつたなら、罰則は免れなかつたことはご理解して頂くように」

「はい……すみませんでした」

続けてリンディから釘を刺され、特になのはは縮こまった。

「(みんな、ごめんなさい)」

「(なのはが謝る必要はありません、むしろ私たちが頭を下げる方です)」

「(気にするな、命令違反は事実だけど、お陰で海鳴市も救えたんだからな)」

しゅんとする彼女に、光らはフォローを入れた。

「エイミィ、犯人に関する情報を出してもらえらる」

『はいはいっ♪』

クロノの指示で別室にいるエイミィが卓上に3Dモニターを表示させた。

その映像の中にプレシア・テスタロッサの画像があつた。

この人が……フェイトちゃんのお母さん……勇夜から、フェイトの出生もプレシアがフェイトに対して行っている所業諸々は聞いていたが、今表示されている写真からはとてもそんなことをする人物には見え



ない。

だが：数時間前の海上での出来事を思い出す。

「母さん……」

あの雷撃が落ちる瞬間、フェイトの顔は間違いなく恐怖に染まっていた。

それだけ日頃、この人から手痛い目に遭っているということだろう。

と言うことは今頃彼女は……母の暴力を無抵抗に受けて、ひたすら耐えているフェイトの姿を、なのはは思わず想像してしまった。

なのはは拳を握り、やるせない気持ちになる。

あの子はただ……母親に笑ってほしい、ただそれだけ、それだけなのに……でもそんな願いでも、ジュエルシードはまともに応えてはくれない。

「まあこのプレシア・テスタロッサとフェイトさんに関することはもう粗方勇夜君から聞いているのよね？」

「はい」

「で、勇夜君、新しい情報が手に入ったから、こちらに来たのでは無くて」

「まあな」

勇夜はリンクから、彼女に収納されていた茶色のトランクを取り出した。

「勇夜さん、それは？」

「あの親子に関する重要な文献が入ってる」

「どう言うことですか？」

ユーノが勇夜に問うてくる。

「フェイトには、母親代わりに育ててくれた人がいてな、これはその人が残した代物さ」

勇夜の言う通り、後にこのトランクはこの事件における重要な証拠物件となる。

扉一つを隔てて、狂気に彩られた女の怒声と、鞭が人体に叩きつけられる音と、痛みに呻く少女の声。

「あれだけの好機を前にして、ただぼーとしているなんて……ひどいわフェイト」

「ごめんなさい……母さん」

聞きたくない音と悲鳴に目を閉じ、耳を塞ぎ、体を屈ませながら、アルフは玉座の間へと繋がる扉の前の床で座っていた。

なのはの想像通り、フェイトは今理不尽な『躰』を今まさに受けている。

鞭が弾かれる音と、悲痛な叫びを耳にするたび、アルフの心も、容赦無く痛めつけられていく。

確かに残りの6個全部を持って行くことはできなかった。

でもだからって……そんなにアリシアに生き写しのフェイトが憎いのか？

今までは、フェイトが引きとめてくれたから、なんとか我慢してきたけど……もう……今度という今度は……限界だ。

拳を引つ込めることは、もうできない。

悲鳴と鞭の音がやみ、あいつの足音と扉が閉まる音が聞こえた。

アルフは、あの時勇夜がそうしたように、拳を引いて力の限り殴り付ける。

重く分厚い扉が開く。

部屋の中は、前の勇夜との戦闘で受けた傷跡はまだ癒えず、中央には、全身痣だらけで、バリアジャケットもボロボロの……フェイト。

「フェイト！」

アルフは傷だらけの彼女を抱える。

「ごめんね……あたしが……」

こんなことすれば、また勇夜に「莫迦」だとか言われるかもね。

でも……もう我慢がならない。あいつにどうにか「一発」ぶち込んで、目を覚めさせてやる。

「あたしがもう、何もしなくていいようにするから……」

決意の言葉を述べ、フェイトを床に寝かせ、バリアジャケットのマ

ントを毛布代わりに被せた。

この部屋の床じや冷たくて、固いけど、しばらく我慢してね。

玉座の間から向うに繋がる、プレシアの部屋は、その言葉の通り異界であつた。

黒や紫などの黒目の色色が混じり、淀んでいる空間に、ところどころ、ギリシヤ様式のもの似た円柱と

地面がまるで冬の北の海に流れる氷塊のように無数に浮いている。

そんな暗く、閑静な空間に爆発と爆音が起きる。

中央の円陣にいたプレシアが、爆発のした出入り口の扉がある方角に目を向けた。

「来たわね……」

そこにいるのは、憤怒の形相でプレシアを睨めつけるアルフ。

牙をむき出し、髪も怒りで逆立っている。

顔と体つきは人間に近くても、その姿は狼そのものであった。

アルフは、浮遊している地面を、八層飛びの要領で飛び、プレシアに向かって突っ込んでいく。

が、プレシアは魔法陣を形成、そこから伸びたバインドでアルフを縛り上げた。

それを解こうともがくアルフ。

「そりゃ……フェイトは……普通の子とは……違う生まれ方をしたけどさ……」

「っ？……聞いたのね……諸星勇夜……いえ、ウルトラマンゼ口から」

驚愕するアルフ。

なぜこいつが、勇夜が「ウルトラマン」だと……そもそもなんで「ウルトラマン」って固有の名を知っている!?

だが今は、その疑問よりも、沸騰する怒りが凌駕した。

「ああそうだよ！ フェイトのお姉さんのことも、洗いざらい全部さ  
！」

アルフがバインドブレイクでバインドを解き、プレシアに殴りかか  
るが、魔力の障壁に阻まれた。

障壁とぶつかった右手から激痛が走るが、構わずに左手も障壁に触  
れ、魔力を流し込む。相手と自分の魔力を合わせ、中和し、障壁の魔  
力結合を弱めると、力の限りそれを引き裂いた。

その勢いのまま、プレシアの襟元を掴み上げ。

「それでもあんたは『母親』で……あの子はあるの『娘』だろ!?  
それなのに……それなのにどうしてあんなことを、平気な顔で  
きるんだよ！」

今まで溜めこんでいた憤りを、プレシアにぶつける。

「何とか言えよ……この……」

その怒りの余り、反応が遅れた。

アルフの腹部に向けて、詠唱もせずに発生させた雷撃に。

「……………?!」

至近距離で受けた攻撃に、吹き飛ばされて、円柱の一つに叩きつ  
けられた。

その衝撃で口を切ったのだろう、唇から血が流れていく。なんとか  
立ち上がろうとするが、全身に痛みが走り、思うように動けない。

そんなアルフに、プレシアはデバイスを向けた。

「邪魔よ……消えなさい」

デバイスの先に魔力が集まる……止めの一撃を放つ為に。

こんなところで終われない！ 咄嗟の判断で転移魔法陣を引く。

ごめんフェイト……もうちよつとだけ待って……発射の直前、アル  
フはその場から転移して消えた。

それを見届けると、プレシアは魔力の収束を止めた。

最初から彼女を撃つ気は、はなから無かったのだ。

こうすれば、アルフはこの場から逃亡を測る、これはそれを見越し

た一芝居。

それにしても、あのフェイトの使い魔、ああも容易く、自分のバインドと障壁を破るとは……それだけでは無い。

明らかに以前より、魔力の瞬間最大出力、制御能力がアップしている。

いくら使い魔とは言え、この短期間で……ここまで……まあ良い。

なんにしてもこれで良いのだ……あの使い魔は真っ先に、“彼”の元に行つて頼るだろう。

そして“あの子”の罪を軽減させるために尽力する。

それで良い……道化を演じて罪を被るのは自分だけで充分なのだから……

後は――

「誰が出てきていいと言つたかしら？」

プレシアは背後に振り向く。

浮遊する地上の一つに、銀と黒と茶色がかったオレンジの体色をした人型が立っていた。

その人型は、ある科学者から齎されたデータを元にプレシアが傀儡兵を生み出す上で作り上げた、いわば試作品。

こちらの命令は絶対遵守とプログラムしている。

なのに、勝手に補助デバイスの格納領域からワープしてきた。

原因は……自分に危機が及んだと判断したこと、“彼”の戦士としての名を呼んだ為、かもしれない。

このマシンとあの“ウルトラ戦士”には、浅からぬ因縁があるからだ。

会議室での話が終わり、艦内の廊下を歩いていたのはたち。

なお勇夜は、例のトランクを渡した後、さっさとアースラから出てってしまった。

その前にクロノから、光にシルバーライトを渡したことを少々追及されたが、海の一件の事態の収拾に一役買ったこともあり、これもまた不問になった。

「プレシァ女史もフェイトちゃんも、あれだけの魔力放出の後ではそうそう動

きはとれないでしょう、あなた達も一休みしておいた方がいいわね」

「あ…でも…」

なのはは少々渋った。

なんせ、アースラのクルーはその休息をしている間も仕事がある。のこのこ自分たちだけ、休みをもらうのは、さすがに気が引けた。

「ごちらも無理を言って、手伝わせていましたからね、ご家族とお友達に元気な顔を見せてあげなさい」

「なのは、ご厚意は受け取っておきましょう」

「光兄…そうだね」

勇夜はその時、借りているアパートに帰宅する為、雑踏の中を歩いていた。

時間帯はもう夕方、家に帰る学生やサラリーマンがあちこち見かける。

さて…今後はどうするか…全てのきつかけになった、あの魔導炉事故の資料を集めるのは良いとして…

ジュエルシードは実質全部回収された。

もう、発現した場所で鉢合わせなんて手は通用しない。

時の庭園も、既に前にあった地点から移動しているし、あんだけの大技を使ったから、当分は静かにはしているのはず。

なのはが「友達になりたい」って気持ちを伝えたことでフェイトにある程度心境の変化があるかもしれないが、どの道プレシァをなんとかしない限り…完全にフェイトを「血を吐きながら続ける悲しいマラソン」をさせ続ける呪縛は消えないだろう。

一応、あいつを説得させる材料はある。

自分の故郷、M78星雲光の国、そこまでの道筋が分かった時点で芽生えた可能性。

だが、時間が余りに無き過ぎるプレシアがそれを了承してくれる保障も、それが上手くいく保障も100%ではない。

ずっと希望に裏切られ続けたあいつに、下手に光明をみせることは、逆に傷つける結果になる可能性だってある。

どうしたもんかな……と、これからのことを思案している時だった。

「(ゆう……)」

脳内に声が響く。

念話？ 誰からだ？ 細々しくて、最初は誰の声か特定できなかった。

「(勇夜……)」

「(アルフか……どうした?)」

集中力を高めて聞き取ったことで、ようやくアルフの声だと認識。弱弱しく、痛みに耐えている声からして怪我をしているかもしれない。

「(庭園から……逃げて来たんだ……)」

逃亡までの流れは、直ぐに把握できた。

大方プレシアのフェイトへの仕打ちに我慢の限界が来て、喧嘩を吹っ掛けて返り討ちにあっただろう。

それで仕方なく、フェイトを残して逃げてきたってところか。

「(今どこだ!?)」

「(た、確か……じ、神社とか言う建物の……裏の……森の中……)」

「(そこで待ってる！ 今そっちに行く!)」

「(すまない……)」

勇夜は念話を切り、人気の無い場所へ移動し、周囲を確認すると。

「封時結界！ あとリンク、VMAXを！」

『了解』

結界を貼り、リンクからVMAXカスタムを取り出した。

海鳴にも神社はいくつかあるが、近くに森があるところは一つしかない。

結界内なら警察も通行人も交通規制も気にせず突っ走れる。

「勇夜はアクセルを捻り、スロットル全開にしてバイクを走らせた。人っ子一人いない、道路のど真ん中を極太のエンジンの重低音を響かせながら、VMAXが疾走する。」

日本では不法滞在で銃刀法にも違反、さらに無免許で結界内とは言え、違法改造されたバイクを、明らかに法定速度もオーバーして走らせているが、この際大目に見よう。

「ぐ……」

さつきよりはましにはなったが、全身が痛みで悲鳴を上げながら、わたしは目を覚ました。

今わたしはどこかの部屋のベットで寝込んでいたようだ。

隠れ家として使ったマンションよりは、リーズナブルと言った印象。

狼形態をしている今の自分の体には、包帯が巻かれていた。

その手当てをしてしてくれた筈な人物も、地元の集合自宅を借りていると聞いていたから、ここがそうなのだろう。

ガチャと、ドアが開く音がし、部屋に灯りがともる。

ビニール袋を持った勇夜が入ってきた。

「勇夜……」

「起きたか……ちよつと待ってろ」

買った物袋から、材料を取り出すと、料理を作りだした。

「勇夜……あたし」

「分かってるよ、あいつに殴り込みをして、そうなたんだろ？」

勇夜は調理をしながら、アルフがこうなってしまった経緯を簡潔に代弁する。

「うん……」

あいつを追いつめた勇夜と違って、やり返されてしまったが。



「バカヤローが……無茶しやがって……」

やっぱり言われてしまった。

でも……彼なりに、それだけ自分を案じているということである。現状、頼れるのは彼しかない。

初めて彼に会った——フェイトが打ち負かされた時はもう駄目だとさえ感じたが、今思えば幸運だったと言える。

頭が冷静さを取り戻し、真実を知った上で考えてみれば、遅かれ早かれ、ジュエルシードが欲しいというあいつの願いが叶えられてしまったら、真つ先にフェイトは用済みとして捨てられ……この星も巻き添えになって……そして、勇夜が前に言ったように、自分は笑わなくなつた主と後悔を抱えて、残りの人生を歩むことになっていったのはつきり分かる。

そう思うと、なんで……あんな石ころなんか希望を見出そうとしたんだろ……と己を嘲笑してしまう。

ちゃんと彼が前から『欠陥品』だつて言ってくれていたのに……あれを手に入れば、求めていたものが元に戻ると、考えてしまったのか。

「もし君が君の魔法をもつてしても、どうにならねえ状況になった時は……必ず君を助ける」

「私は……フェイトちゃんの……」  
「友達」に……なりたいただ

あんなものよりも、フェイトの頑なな心を溶かしてくれる人が、いたというのに。

「できたぜ」

気がつくと、目の前にご飯と切り刻んだ材料を油で炒めた、所謂チャーハンが置かれていた。

あたしは料理の匂いを嗅ぎ、口に入れる。

ご無沙汰さつた勇夜の料理、やっぱり美味しかった。

ただ味が美味だけじゃない。

久しぶつた……誰かと一緒に食する温かさを思い出させてくれたのも、この人の料理だつたから。

そうだ、あの時あいつは勇夜のこと。

思考がクリアになったことで、アルフの脳裏にプレシアの言った言葉がよぎった。

「勇夜あのさ……前にあいつに会った時、ゼロに変身した？」

「いや、それがどうした？」

「あいつ……勇夜がウルトラマンだってこと、知ってた……」

彼が別の次元世界のM78星雲光の国から来た巨人であることは、あいつに一言も言っていなかったのに。

勇夜は若干驚いた表情をしたが、すぐ納得した様子になる

「あんまり、驚かないんだな……」

「一応……心当たりがあるからな……それより分かっているとかが、俺は囑託魔導師だ、重要参考人としてお前を管理局に引き渡すことになるが、いいよな」

「ああ……構わないよ」

アルフは勇夜からの申し出を了承した。元々そうなることを覚悟して、彼に助けを求めたのだ。下手に匿ってくれるよりは、むしろそうしてもらえた方が良く。

いつだって彼は、自分たちがやっていることの「重み」をちゃんと示す一方で、救おうとしてくれていたんだから。

「心配すんな、保護という形にしてもらうからさ」

「ありがとう……それとさ……」

初めて自分らと会ってから、勇夜は自分たちの我がままに付き合っただけだった。

そのことに申し訳なく思う一方、今でも尽力してくれるこの人には、感謝しないと。

「何だ？」

勇夜だけじゃなかった。

敵対する立場にいたのに、それでもフェイトを何度も呼びかけてくれた……今日「友達」になりたいって言ってくれた……あの地球人の女の子。

「なのは……って言ったっけ？……あの子に………会わせてくれない……」

かな？」

## EP23 — ひと時の休息

リンディからのお達しの通りに、なのはたちは一旦アースラを降りて、高町家に帰宅していた。その際、本局提督用の制服から私服に着替えたリンディも彼女たちと同行して。

理由はと言うと。

「——とそんな感じの10日間だったんですよ」

有体に言えば、なのはたちがなぜ10日間も学校をさぼってまで、家を開けていたのかを高町家の方々に説明する為だった。

地球では目立ち過ぎるミントグリーンの髪も、今は魔法で金髪に見えるように細工している。

「(リンディさん：見事に話をぐまかしてると言うか：真つ赤な嘘を吐くと言うか：)」

「(す、すごいよね、提督の話術)」

「(虚言もここまで来ると……逆に清々しく思えてきます)」

無論、基本不可侵な方針の管理外世界と見なされている地球の方々に本当のことは言えないので、嘘が8、真が2の割合……もう嘘八百以外の何者でもない内容をでっちあげて高町家に話していた。

本人曰く……「気遣い」このことらしいのだが、竹を割った開き直り様に驚きというか、呆然となるのを禁じ得ないなのはたちである。

対して桃子たちは実を言うと、なのはたちが今まで何をしていたか大体の筋は光から知ってはいるのだが、その彼との約束があるので、敢えて知らないふりをして、話を合わせているのであった。

「でもなのはさんも光さんもしつかりなさってますし、うちの子にも見習わせたいくらいで」

「またまたそんな」

「うちのクロノはどうも愛想が無く、せめて光さんぐらいの社交性を身につけてくれれば——」

かれこれリンディも桃子も、ほとんど間を置かず何十分喋りっぱなし、一体ご婦人方のボキャブラリーの豊かさと喉の構造はどうなっているのか？

こんな調子でもう暫く、母親たちのご近所トークはもうさらに数十分も続きそうだ。

さつき話題になっていたクロノが愛想が無い件は………まあ間違いない。

本人は今頃、仕事中に勢いよくくしゃみを吐かせられ、『誰かが噂してる』とかどうのこうのでエイミイが彼にちよっかいを掛ける一幕になっている筈だ。

「二人とも今日明日くらいは家にいられるんでしょ？」

「うん」

「ですが、その後はまた数日家を空けることになるかもしれません」

「そうなんだ」

「なのははアリサとすずかちゃんには連絡したか？二人とも凄く心配してたぞ」

「大丈夫、さつきメールを送ったから」

余談だが、バニングス家の執事によると、アリサはなのはから来たメールを見て、大層喜びながら返信したそうなの。

その翌日。なのはと光が10日振りに登校し、学業に勤しんでいる午前の時間帯。

勇夜とアルフは、閑静な住宅街の歩道の中を歩いていた。

「(勇夜)」

「(何だ?)」

「(本当にこれで、目立た………ないんだよね?)」

「(ちよつと変わった見た目のワンコに見えるけど、そんなあからさまに通行人を怪しませるほどじゃないぜ、ほら見ろ)」

勇夜が視線を飛ばす方向に、アルフも目を合わすと。

「あ、わんちゃんだ♪」

「かわいいい〜♪」

向かいの歩道では、全員頭に黄色い帽子を被り、青色のちよつとぶかつとしたジャケットを着て、エプロンを纏った妙齡の女性に先導さ

れる10人ほどの数の4、5歳くらいな子どもたちが歩いており、何人か一部の子がアルフに手を振っていた。

「(勇夜、あの子らって……)」

「(幼稚園の子どもたちだよ)」

「(幼稚園?)」

『(まだ学校に通える年齢ではない未就学児たちの教育機関のことで、子どもたちから無邪気に声を掛けられるということは、それだけ地球の日常に溶け込んでいる証拠です)』

「(よかった……やつと緊張が解けてきたよ)」

ちよつとそわそわしていた「子犬」なアルフの顔にリラックスの色が浮かぶ。

現在勇夜と街を歩くアルフは、人型でも、ましてや猛々しい狼でも無い。オレンジがかった色合いの体毛と、水色の瞳と額の宝石はそのままに、小型犬の姿になっていた。

アルフの肉体が、後に《こいぬフォーム》と名称が付く子犬の体格まで縮んでいるわけは、昨日の一幕にて。

『アルフ、一つ尋ねますが、どちらの形態でも体格の小型化はできますか?』

「やったことは無いけど、できると言えばできるね……」

リンクはいきなり、このようなことをアルフに聞いてきた。

「でも、いきなりなんだいリンク?」

『形態維持による消費を節制し、余った魔力を治癒に回せば、怪我の治りが早まる筈です』

「あ、なるほど……」

どうしてリンクに指摘されるまで思いつかなかったのか……：プ  
レシアにぶちのめされるまで、これと言って特に大きな怪我を負った  
ことが無かったとはいえ、悔やまれる。

彼女からのアドバイス通り、体を小型にしてみると、想像以上に形態維持用の魔力が節約され、その浮いた分も治癒に回した。使い魔と

しての再生能力の高さと、勇夜のメデイカルパワーと呼ばれる、ウルトラマンの能力による治癒術によるサポートと相まって、怪我は全快とまではいかずとも一晩で大方治った。

そして今、負傷で鈍った体を慣らすリハビリの一環として、こうして市内を勇夜と一緒に歩いているのである。傍から見れば、ちよつと変わった容姿のワンコを勇夜が散歩させているという状態であった。アースラへの出向は夕方を予定しているので、まだ時間があるのを利用して今に至っている。

そのアルフの身柄の処遇だが、幸い協力的な態度を示したことで、保護という扱いにしてもらった。

「(フェイトとの念話は、まだ遮断されたままか?)」

「(ああ、あの鬼婆が何か細工してるみたいでさ、こっちからの念話も全く通じないんだよ)」

アルフが庭園から逃亡したことで、フェイトと直接話をつけられる場を作れると思ったが、そう上手くはいかないようだ。

アースラのサーチャーでも時の庭園を発見できおらず、こちらからテストロツサ親子にコンタクトをとるのは難題に等しいと言わざるを得ない。

「(あせるな、まだ9個しか無い現状じゃ、あいつが次元震を起こすことも、フェイトを用済みにもまだしないさ)」

「(そうだね……)」

精神リンクでフェイトの現在の感情を知ろうとしたが、片時も離れず一緒にいた頃と比べると……目がうるつと、鼻がむず痒くなつて悲しい気分になるのは微かにあったぐらいで、はつきりと感じ取れなかった。

理由は分かっている。自分がフェイトの気持ちを感じて辛い思いをしないように、必死に耐えているのだ。

自分の寂しさとか悲しさの痛みに我慢しているだけでも、もう手一杯だったのに……あせるなどは言われたけど、つい勢い任せでどこか

にいるフェイトを探したくなる。

そんな考えが表に出ては、必死に気持ちに流されるなど我慢しながら歩いていると……突然、勇夜はその場に立ち止まった。

通る道を変えるのかと思いきや、まだ道の真ん中から少し進んだ辺りで、交差点も曲がり角ももう少し先と中途半端。

顔を見上げると、何かに目が釘付けとなっっている勇夜が映る。

「あの子……」

さっきの幼稚園の子どもたちの時と同様に、勇夜が視線を送る先に目を合わせてみると、向かいの交差点辺りで、ある女の子が視界に入った。

歳はフェイトと……あのなのはって子と同じくらいで、髪は茶色のショートカットで、バツテン状の髪留めを付け、そこそこ距離があるこちらからでも、ほんわかとした感じが伝わる子だった。

足が悪いようで、手動式の車いすに乗り、細い手でハンドリムを力一杯回してタイヤを進ませている。

確か……あれぐらいの歳の子って、今はまだ学校で勉強している筈、どうしてこんな時間に一人で出歩いているのか……いやそれ以前に。

「勇夜、あの子と……」

“知り合いなのかい？”と聞こうとした時だった。

今、横断歩道を渡っている女の子は、道路に転がっていた石か何かにタイヤが引っかかったのか、途中で転び、前かがみに無機質なアスファルトに倒れ込んでしまった。

そして、無情にもそこにトラック車が迫って。

いつものように私は、海鳴大学病院のかかり付けの先生の元へ、検査のために行く途中でした。

車いすのタイヤに何か引っかかったのか、横断歩道のど真ん中で転んでしまいました。



いつもは兄と一緒に行くのですが、平日の時は、授業の合間を縫って来てくれるので、少し意固地になった私は無理を言って、今日は一人で行くとうとして。

さらに足が悪いせいで起き上がれないわたしに向かって、トラックが一台向かって来ます。運転手さんは慌ててブレーキを掛けましたが、間に合いません。

わたし……………死んでまうの？

お父さんと……………お母さんみたいに……………車に引かれて……………反射的に目を瞑りました。

「危ないー！」

その声が聞こえた瞬間、わたしは誰かの腕に抱えられていました。服越しても分かる、筋肉が鍛え上げられて、固いけど、温かい体。もしかしてと思つて目を開けて見上げると、やっぱり“あの人”でした。

長い黒髪を後ろに結び……………それがこの上なく似合う、男の子と女の子、どちらにも見える顔立ちをした吊り目で、兄より二枚目だけど、尖った雰囲気がとてもよう似とる男の人。

ようやく、自分はこの人に間一髪助けられたと解りました。

そして目の前には、トラックに轢かれて、バラバラのスクラップになつてしまった車椅子の姿に、私はゾツとしました……………この人に助けてくれなかったら、

そして残骸に変えた張本人のトラックは、その場を走り去ろうとしますが。

「待ちやがれ!!」

男の人は我先に逃げようとするトラックに掌を向けると、何故か急にその場に停車し、ドアが開くと慌てて運転席からドライバーが降りて、逃げようとしてはますが。

「うううううう、ワアアーン！」

「な、なんだこの犬!？」

赤味がかつた茶色の毛並みをした、ちよつと変わった容姿の小さな子犬ちゃんが大型犬顔負けの大声で吠えて威嚇し、ドライバーの逃亡

を阻みます。

彼は私を抱えたまま、子犬ちゃんに吠えられて驚いている男に近づき、胸倉を掴んで、右手だけで持ち上げました。

モデル並にすらりとした見かけによらず、かなりの力持ちです。子犬さんも唸り声をあげて相手を睨んでいます。

「ま、まままま、待ってくれ！」

「何が待てだあ？ 不慮の事故だったのは分かるけどな、この子放つて逃げようとしたのはいただけねえぞ」

年齢と見た目と声優さん並に綺麗な声に反して、ドスと覇気を利かせてひき逃げしようとした男に詰め寄り、相手は恐怖で引き攣っています。

「待つてな勇夜さん」

「は……はやて……」

「やめてあげて下さい、気持ちはよう分かりますけど、もう良いですから……勇夜さん」

彼がわたしの為に怒ってる……ということには分かっています。

でもだからこそ、あんまり無闇に相手を怒鳴り散らさせたくありません。

だって……せつかくまた会えたんですから、諸星勇夜さん。

八神はやて。さつき勇夜が助けた車いすの女の子の名前だ。

ひき逃げ未遂犯は、地元の警察官に御用となったけど……車いすが壊されてしまったので、勇夜は彼女を担いで、目的地の病院に送るところになった。

あたしは今、子犬の姿なので、二人が病院に入っている間は、表口の前でお留守番。

暫くうつ伏せに腰を下ろして待っていると、検査が終わったのか、新しい車いすに乗ったはやてを押しながら勇夜がロビーから出てきた。

またあんな事故が起こらないとも限らないので、帰りも送っていくことになり、そして、今現在に至っている。

ちなみになぜひき逃げ犯が、車を止めて、わざわざ足で逃げようとしたのは、勇夜がウルトラ念力で強引に停車させたためである。

魔法と違つて目に見えないので、そこは上手く誤魔化した。

警察にはやてや彼女の主治医には、自分は大学つていう学校の学生で、今日は講義をとっていない日だったと勇夜は説明したそうさ。

「そのワンちゃんつて、なんて名前なんですか？」

「アルフつて言うんだ、暫くうちで預かつててな」

「そうなんや、さつきはありがとなアルフ、でもほどほどにせにやあかんよ」

彼女の言葉には、訛りがあった、勇夜の話では関西弁つて言うらしい。

訛りもそうだが、それ以上にはやてのことで気になることが色々あった。

「(この子、どうして足が悪いんだい?)」

「(さつぱり原因が分かんないんだと……昔は普通に歩けたそうなんだが……今は足指一つも動かせないつて聞いた)」

主治医の話によると、はやてが4歳の頃に、何の因果か足の神経の機能が異常をきたし始めて、今は指すらまともに動かせなくなるほど悪化していると言う。その足の障害もあつて、学校も休学扱いになっているらしい。

「(家族は?)」

「(兄が一人だけで……両親の方は……はやての足が悪くなり始めたたちよつと前に交通事故で亡くなつたらしい)」

「(……)」

自分はどこか、彼女からフェイトに似たもの感じとつていたが、まさか両親に先立たれているなんて……会えるのに分かり合えないフェイトと、今は会うことすらできないはやて、どっちにも……親の愛情に受けられていない共通点があつた。

上手く顔に表情を作れない子犬みたいな狼の姿でよかつたかもし

れない。

これが人間体であつたなら、悲痛な表情になつてただろうから。

「どうしたん？ 勇夜さん」

「いや……寂しくないか？ 親御さんいなくて」

勇夜——ウルトラマンゼロも小さい頃は、父も母は死んだと聞かされた。

その父が実は生きていて、ウルトラ兄弟三番目の戦士のウルトラセブンであり、最終的に彼が修行から帰ってきた時に親子として再会を果たすことができたけど……それでも、家族が近くにいない寂しさを彼は身を以て知っている。

だから、はやての身の上は彼の心にも憂いの気持ち齎していた。「そんな辛い顔しないで下さい、わたしは大丈夫です、兄も、石田先生もいますし」

と、本人はそう言つて気丈に振る舞っているが、本当は両親と死別し、足のせいで学校にも行けないといった、自分の身の上に寂しさを感じているだろう。

そんな境遇でも笑顔と優しさを忘れずに持っているこの子は、本当に……強くて健気な女の子だった。

幸いだったのは、決して“一人”だったわけじゃないこと。

ずっと一緒に暮らしている兄と、はやての主治医をしている石田先生と、支えてくれる人がちゃんと近くにいるということだ。

「私はくうちちゃんって呼んでるこぎつねちゃんの友達もおりますし」  
「へ？」

珍妙な調子な一文字が勇夜の口から零れ出た。

何かの聞き間違いか……今はやての口から“狐”って言葉が出たような。

「きつね？ ワン公（こう）じゃなくてか？」

「は？」

「ワン公で、ペットじゃなくて……子狐で友達つてことは……」

飼ってるわけじゃないんだ……よな」

「そうですよ」

戸惑いの影響により、若干スローかつたどたどしい滑舌で、実情を聞く勇夜。

兄やその石田先生はともかく、子ギツネと友達って。

はやて曰く、その“くうちゃん”って名前の狐ちゃんは、普段は八束神社の裏の森に住み、狐に生態に違わず少々人見知りだが、人懐っこくてちよくちよく家に遊びに来るらしい。

どんなギツネだよそれ！ と内心一度は突っ込んだ勇夜だったが、少ししたら縦割り社会な犬と違い、狐は自分が作った“チーム”と同じく横割り社会らしいので、“友達”って表現は案外理にかなっていても思えないとも思えてきた。

まあ、その“くうちゃん”のお陰で、曇り気味だった心が晴れやかになったのはありがたいだけに……余計に苛立ちが際立つ。

「(アルフ：お前も感じるか?)」

「(ああ：どこの誰か知らないけど……)」

原因は、自分たちの後を着ける誰かの気配。

病院からはやてをおぶって歩き始めてから何者かがこつちをじろじろと見ている、目的は……タイミングから見てもはやてか？

しかも、上手くジャミングをし、誰のかは特定できそうにないが、微かに魔力を感じる。

もし魔導師なら、狙いはこの子の魔力資質か？

初めて会った時から、勇夜はこの子の体内から膨大な魔力を感知していた。

量だけを見れば、あのなのはやフェイトよりも遥かに上で、ここまでの資質の高さは、管理世界でも宝石クラスの希少さ。

しかし……スカウトのつもりなら、他に手は無かったのか？

おまけにここ地球は、不可侵と定められた管理外世界で、はやては足にハンデがある。

何にせよ、尾行されること自体、気持ちの良いものではない。

『(二人とも、もう少し我慢して下さい、彼女を家に送るまでの辛抱で

す』

「(分かってるさ)」

「(分かってるよ)」

尾行される不快感に耐えしのびながら、勇夜たちははやての自宅に辿り着いた。

足の不自由な子を一人、家に置いて行くのもなんだったが、兄がもうすぐ帰ってくるそうなので、二人ははやて宅を後にすると。

『魔力反応、ロストしました』

分が悪いでも思ったのか、尾行していた相手は上手いことこの場から逃げて行ってしまった。

引き際も心得ている辺り、慎重かつ相当したたかで頭の切れる野郎どもらしい。

彼らがその連中と再び対峙することになるのは、もう少し先の——  
未来。

勇夜とアルフの両人が、この全容の掴めない厄介事に係わっていった一方。

少し時計の針を遡り、聖祥大付属小のホームルームが始まる前の朝の教室。

「なのはちゃん、良かった元気で」

「ありがとう、すずかちゃん」

10日振りに登校したなのはを、親友たちが出迎えていた。

「アリサちゃんも……ごめんね、心配掛けて……」

「まあ良かったわ……元気で……」

大っぴらに話せない事だったとは言え、悩みを打ち明けてくれないなのはに苛立ちをぶつけたアリサも、ややつんけんどんな態度を残しながらも内心は無事を喜んでいた。

こういうのをツンデ……嫌な予感がするので何を言いたかったの

かはご想像に任せる。

「そつか…また行かないといけないんだ…」

「うん」

「大変だね…」

「でもやっぱり…今なのはが何してるのか…話せないんだよね…」

「ごめんね…たぶんもうすぐ全部終わるから…そうしたら、ちゃんと話すから」

「ちゃんと何してたのか言ってくれるならいいわよ、私もちよつと言い過ぎたと思ってたしね…こつちも、ごめん」

「アリサちゃん…」

今はまだ駄目でもこの一件を片付いたら、なのは二人と家族に魔法のことを話すつもりだった。中途半端に終わらせたくないという気持ちゆえに、周囲に心配掛けた分の代価とも言える。

こういう地球からは「非常識」な諸々に何となく耐性がついてそんな家族はともかく、親友たちがその内容を呑みこむのは、時間がかりそうだけれど。

「それよりなのは…」

「何？」

「何か…少し吹っ切れた？」

「え？えーと…どうだろう…」

吹っ切れたと言えば、まあそうだろう。

あのフェイトという名前の「寂しい目」をした女の子。

彼女とどう向き合いたいのか、どう助けてあげたい…その答えを見つけられたから。

異世界から来た、三人の男の子たちの助けもあって。

「心配してたのよ…あたしが怒ってたのはさ…考え事や悩み事を抱えてたってこともあるけど…なのはが不安そうだったり、迷っていたり、それで時々…あたしたちの元に帰ってこないんじゃないかって、思っちゃうような目をしてたから…」

アリサの告白を前に、自分が悩む姿はそんな風に見られていたのか

と驚かされた。

事情が事情だけに打ち明けられなかった……自分が異世界から来た“危険”に関わり続けたこと。

結果的にそれは壁となつて、心配させまいといたつもりが、却つて親友を心配させてしまった……そのことで申し訳ない気持ちが沸いたが、同時に嬉しくもあつた。

「行かないよ、黙つて……みんなから出て行かない、だって……友達だもん……」

だから……こうしてみんなと一喜一憂できたように……今はまだ叶わずとも、フェイトにも……こんな喜びの気持ちを分けてあげるんだと、改めてなのは自身の心に誓うのであつた。

日本の現地時間では夜中の頃。マルチバースに浮く、アースラの会議室では、勇夜に保護されたアルフの事情聴取と今後の対策を練る為の会議が行われている。

他に今室内にいるのは、艦長、執務官、執務官補佐、M78星雲人の囑託魔導師、現地の協力者たる地球人と二次元人の二人と、発見者の結界魔導師だ。

「では、この日記はプレシア・テスタロッサの使い魔、リニスが書いたもので間違いないか？」

「うん、何度もこつそり中身を覗こうとして、怒られっけ……」

アルフは、自分の知る限りの情報は全て話した。

プレシアの日頃の虐待。

以前から、『お使い』と称してロストログアを不法収集が行われたこと。

大方の情報は勇夜が掴んだものと同じものではあつたが、関係者の証言ということもあり、彼女の発言は、重要な証拠材料となつた。

けれども、本題はここからだ。

アースラは正式に現状任務をフェイトの保護とプレシアの逮捕に



変更になった。

だが、その相手も簡単に尻尾を掴んでほくれない。アルフから齎された、時の庭園の座標地点もすでに逃げられた後、しかも強いジャミング効果のある結界を貼りながら、逃亡を続けている。

相変わらず、フェイトとの念話、その他の連絡も取れないままだった。

「ジュエルシードは全部回収されちゃったから、今まで以上に探査は難しいだろうし」

「でもあいつは21個全部持つてこいって言ってたからね、最悪フェイトをこの艦に殴り込みをさせるかも…」

「やりかねえよな……今のあいつなら」

あり得ない話では無い。数日前の海での一件でプレシアは、庭園から直接艦に攻撃を掛けるといふとんでもない離れ業で、艦内の機能を一時ストップさせたのだ。

あの時と同じことを敢行し、フェイトを艦内に転移させて、機能が回復する合間を縫って残りを強奪。

無謀極まる行為だが、娘を蘇生させる為に娘を酷使し、ロストログアを集め、存在さえあやふやな場所へ行こうと画策するほど、彼女は狂気に堕ちている。

しない可能性より、実行に移す可能性の方が大きかった。

「やはりこちらから、先手を取った方が良いかもしれません」

「光さん、その手とはやはり…」

「はい、互いのジュエルシードを賭けて、彼女に決闘を申し込むということですよ」

光の出した提案は、勝てば相手のジュエルシードを全て手にすることができると言う条件で、一騎討ちを行うことであった。

「でも…フェイトちゃんとはともかく、プレシアがその手に乗ってくれるかな？ 罨と感ずかれるんじゃない？」

「それは無いよエイミー」

「クロノ君？」

「俺もクロノと同意見だ、仮にも天下の管理局様に目を付けられち

まったくだぜ、普通ならその時点で、リスクが大きいと判断してさっさと手を引くさ」

そう、冷静に状況を把握できるなら、管理局がこの件に介入しても直、ジュエルシードをフェイトに集めさせたりはしない。

真つ当な思考を持てていれば……の場合だが。

「でも……あいつにはもう余裕も時間も無いんだ、メンタルもそうだが、リニスの日記に書かれてたのが本当なら……」

「重度の肺ガンに侵されてるんですよね、今のあの人の体は……」

ユーノが、プレシアを蝕む病魔の名を口にした。

「愛娘を取り戻したくて何年も部屋に籠って不健康な生活を送ってたからね……ガタが来ないわけ、ないんだろうけど……」

アリシアを死なせてからは、プレシアは自らの時間を全て、娘を蘇らせる為だけに費やしてきた。

何十年係ろうと。

記憶を写したクローンを生み出そうと。

それが別人であると突きつけられても。

何度も何度も、希望とも言えない、微かな可能性に賭けてはどん底に落とされても……そしてそれが、己の心身を疲弊させていくだけだとしても、その代償がその病であった。

日記によれば、リニスが病魔のことを知った頃には、腫瘍は他の臓器にも転移し、管理世界の医学力でも完全な治癒はできなくなるまでに悪化していた。

プレシアが、現世に留まれる時間は、もうそんなに残されていない。

2、3年か、下手をすると1年にも満たないかもしれない。

医療技術は日々飛躍的に進歩はしているが、それでも長いことプレシアを現世に留められない筈だ。

その病魔が、彼女をさらなる狂気に誘わせている。

穏便な方法では、消すことも止めることも困難な狂気。

「大博打ではありませんが……時の庭園の居所を突き止めるチャンスは、その時しか無いかと……」

そしてアースラの探査能力を持ってしても、尻尾すら掴めない現在

では有効打な一手、ただその分、リスクも大きい。

もし、決闘に負け、こちらのジュエルシードが全て奪われ、以前のような広範囲の次元干渉攻撃を受け、逃亡を許せば、プレシアは確実にアルハザードに向かうために21個全てを発動させるだろう。

そうなれば、地球、太陽系どころか第78管理外世界という一つの宇宙が次元振によって跡形もなく消えてしまう。

「問題は、フェイトさんとの決闘の相手を、誰にやらせるかだわよね……」

だからこそ、フェイトの相手を担う者に課せられる責務は大きい。

正直言ってしまうと、フェイトを圧倒できる魔導……もとい魔道師を含めた戦士はこのアースラにおいては三人いる。

ランクA A A +の黒衣の執務官。

二次元の世界から来た鏡の騎士。

そしてM78星雲光の国のウルトラ戦士。

無論、この三人が一度は彼女を圧倒、或いは勝利を果たしたからと言つて、二度目はそうとも限らない。

フェイトも今度は死に物狂いで、その場に臨み、戦うだろう。

時に執念とも言える想いは、実力差を超えた、思わぬ力を発揮することがある。

その彼女を真つ向から向かい打てるのは……誰か。

「あの……」

その大役を、真つ先に自分から名乗り出て志願したのは――

「そのフェイトちゃんとの決闘、わたしがやります」

「なのは……」

――なのはであった。

「なのは……でもなのはも強くなってるけど、やっぱりあの子の實力はそれ以上だよ」

ユーノが渋るのも無理ない。

あの時はまだ習いたての素人ではあったが、なのはは初戦で彼女に完敗している。

今は日頃の仮想シミュレーションと実戦による叩き上げで、様には

なってきたが、タイムンでフェイトと勝負をして、勝てるかはほぼ五分五分であった。

「でもプレシアを捕まえるなら、光君と勇夜君とクロノは戦力として温存させた方が得策よね……アルフさんの話では、庭園には護衛の機械人形もたくさんいるとのことだし……」

「あたしも全部は見たことないけど……数だけでもこの船にいる魔導師より多いよ、確か……デカさだけならウルトラマンぐらいの大型の奴だって、いたしな……」

つまり数の利においては、相手方が上。

厄介ではあるが、それが分かった分、対策は充分立てられる。

「それになのはさんも、彼女と戦うことに譲る気はないんでしょ？」

「はい、まだ……あの子から返事も聞いていませんし、それにわたし相手なら全力でぶつかっていくと思うんです、それなら勝っても負けても……」

「疲労困憊になった彼女を止められると言うことですか……考えましたねなのは」

「にやはは……あんまり気持ちの良いやり方じゃないかもしれないけどね、でも……これ以上、フェイトちゃんには自分を傷つけながら戦ってほしくない……自分が一人なんだって、寂しい思いをしてほしくないんです、だから——」

自分に背負わされている重みにフェイト耐えられず、負けてしまう前に、助け出す。

なのはは、まだ幼い顔立ちに凜とした佇まいで、周りの人たちに見据えると。

「——フェイトちゃんは、わたしが止めます、そして、全部終わったら、友達として迎えてあげます」

己の決意を、強く、はっきりと述べた。

「そうとなれば、決闘をする場所ですか」

「海鳴臨海公園はどうか、そこに結界を二重に貼って、外部と遮断すれば、周りを気にせずに戦えるよ」

そして、決行日は今から二日後と決まった。なぜ二日後なのは、各自のコンディションを整えて、全力で臨む為に一日空けたのである。

「あとは、フェイトにこの決闘の旨を伝える方法だが…」

「そいつなら、俺がやっておくさ」

フェイトへの伝令役は、勇夜が名乗り出る。

「大丈夫なの勇夜君？ フェイトさんが今どこにいるかもまだ…」

「問題無い、海鳴市周辺にいるのがは違いないからな」

「どう言う根拠だ？ 勇夜」

「アルフには悪いが、あいつはフェイトの出生上、その顔を見る気すらしないし、庭園に匿ってもいないだろう、となりや、今頃フェイトは海鳴市の近くで隠れ潜んでるさ、そこを重点的に送れば良い」

「私もその役目は勇夜に任せられた方が良いと思います、彼女も彼の言葉なら、伝聞の内容を信じるでしょうし、『ウルトラ一族』の伝達手段はミットチルダ人にも有効なんでしょう」

「まあな」

「なら……お願いしますね、勇夜君」

「了解、今からその伝達に出るから、目つぶっててくれ」

一瞬彼が今何をしようとするのか、この中で一番付き合いが長い光を除いて会議室にいる一同は理解できなかった。

「リンク」

『了解』

ウルトラゼロアイを取り出し、右手で掴む勇夜。

「さて！ ここでウルトラマンになるつもりか？」

「心配すんな、艦内の壁をぶち抜いたりはしねえよ」

「だが僕たちは、その伝達方法とやらをまだ」

「企業秘密だ、デユワ！」

構わずに勇夜はゼロアイを装着、光が部屋を埋め尽くし、それが止む頃には、勇夜はその場から消えていた。

建物内で変身して、内部を傷つけずに外に出るのは、ゼロに限らず全ウルトラマンが出来る芸当である。

「まったく…行動に移すのが早いというか、せっかちと言うか」

一人愚痴るクロノと、苦笑する一同であった。

## EP24 | 最初で最後の……

アースラから飛び出した一つの光、輝くそれは、球状から50メートルものの人型へと形作り、明度が落とされて物体の輪郭が鮮明になっっていく。

さつき諸星勇夜がアースラの会議室内にて変身したウルトラマンゼロ。

『ティメンションゲート、オープン』

リンクの声と共に、ゼロは握り拳の両腕を天に向けて翳すと、光の筋が二つ、真下へと伸びていった。

二つの筋が一つに合わさると、大きな光の輪Ⅱワームホールが開く。

この技の名は『ウルトラトウインクルウェイ』、本来はウルトラマンが光の速さで何万年もかかる距離を一瞬で移動する技なのだが、リンクの補助を借りることでワームホールは次元の壁をも越えられるトンネル、『ティメンションゲート』となる。

「シューア！」

今この瞬間、マルチバースから地球近辺の宇宙空間まで、時空を超えた次元間トンネルが繋がれ、ゼロはその光の輪の中へと突入して行った。

海鳴市は、比較的山間に近いところに街が広がっている都市、だから市内の場所によっては多少星が見えるし、さらに山の奥へと行けば無数の光点が漆黒の夜空を照らす様を拝められる。

まるで蛍のように、光は点滅を繰り返し、自分が一番光を放てるんだとばかり主張し、そして月も今夜は満月の球体を形作り、地球に一番近い衛星である自分の立場を最大限に生かしながら、太陽から授かった黄色い輝きを照らしていた。

人それぞれ感想を持つだろうが、少なくともその光点たちを綺麗だと考えるだろう。

が、フェイト・テスタロッサには、そんな感動を覚えるだけの余裕は無い。

現在木の枝に腰かけて眠っているということもあるが、たとえば目を覚ましていても、同じことだと言えた。

光の巨人と白き魔導師の少女が「寂しい目」と表した、彼女の紅の瞳は、目を閉じて入るが、滲み出ている寂しさという闇は、さらに深くなるばかりであった。

夢を、見ていた。

昔の……まだ色あせずにはっきりと覚えてるのに、もう遠い昔の………このよう。

その日は、わたしの誕生日だった。

いつもは多忙なお仕事でわたしが寝てしまう頃に帰ってくることも多かった母さんもその日は休みをもらい。

わたしたちは、二人でピクニックに行った。

今だって、その時の嬉しさ、楽しさは昨日のことみたいに覚えてるのに……

なのに……母さんが私を名前を呼ぶ時だけ……その時だけ、世界は「無音」になる。

確かに呼んでいる筈なのに、呼んでいることは分かっているのに……聞こえない……耳に入らない……耳が聴覚の役目を果たさない。

いくら「音」を思い出そうと思っても……その瞬間の母さんの声だけが消えてしまう

お願い！ 私を呼んで……名前を呼んでよ。

私が聞こえるくらい。

大きく、はっきり言つてよ！

わがままなのは……分かってる。

でも……でもでもでもでも、それでも！

お願い！ 名前を呼んでよ！

「■■■■」



え？　今……なんて？

気がつくのと、フェイトの目に写る景色は、昼間の草原から真夜中の森へと変わっていた。

しばしの間を置き、眠気で鈍っていた思考が研ぎ澄まされて行く。寒い、砂漠や冰山といった過酷な環境下でも暑さ、寒さを防いでくれるバリアジャケットを着込んでいるのに、言いようの無い悪寒が体の芯にまで吹き抜ける。

大丈夫、自分の体からは魔力がどこかにいるアルフに流れているから、無事。

なのに……近くにいないというだけで、本当にここには自分しかないといだけで、震えは秒刻みに増していく。

自分のせいなのに、アルフが不満を爆発させて母と戦って逃げたのも、自分がいけないからなのに、一人の夜が怖いと感じる自分が憎らしい。

アルフがいなくなったと告げてきた母さんは、まだ「足りない」つて、ジュエルシード残り12個を持って来てと頼んできた。

残りのジュエルシードは全て、どこかに停泊している管理局の次元航行艦の中、完全に手詰まりだ。

手に入れるには、本格的に管理局と一戦交えることになる。

そうなったら、勇夜とだって……戦わなきゃならないと気づいた時、全身にさらなる寒気が押し寄せ、震える体が丸くなる。

い、いやだ……あの人が戦うことになるだけは、嫌だ。

あの人は強い。自分の知る限りでは、あの人と肩を並べられる戦士はそういないし、たとえ誰であろうと、刃を向けられたのなら、迎え撃つ覚悟を直ぐに決められる人、でも……あの人の強さとか心構えとかそれ以前に、彼と「戦わなきゃいけない」ことそのものが嫌なんだと心が訴えてくる。

ずっと約束を守って、何度もピンチの時に助けに来てくれた人に、切っ先を突きつけるなんてできない……そんなことになればアル

フにも、また辛い思いさせちゃう。

だけど、ここで止まったら、母を悲しませたまま、あの頃の優しい母は戻ってこないまま……どうすればいいの？

感情の揺らぎに苛むフェイトは、ふと……空を見上げると、彼女の視線はある一点に集中した。

理由は、突然空に文字が浮かんだからである。

光でなぞられた、謎の文字、それは日本語でも英語でも、ましてやミットチルダ語でもない。

「バルディッシュ、翻訳できる？」

『……識別中……翻訳不能です』

愛機でも、あの文字の意味の解読はできなかった。

なら、あれは……何？

「フェイトへ」

突然、光の文字から、自分を呼ぶ声があった。

少しエコーが掛かっていたけど、その独特の綺麗な声は、間違いなく。

「勇夜？……ゼロ？」

「ウルトラマンゼロ」のもの。

なぜか何となく、地球人としての名前ではなく、「ウルトラ戦士」としての名前で呼んだ方がいいと思った。

ユウヤという名はゼロのミドルネームなのでどちらも本名で間違いはないけど、それでも「ゼロ」と呼ぶべき気がした。

「白き魔法使い、高町なのはが、互いのジュエルシードを賭けた果たし合いを所望している、二日後の日本時間午前6時に、漆黒の鳥たちとの戦いがあった地に参上されたし——ウルトラマンゼロ」

「やっぱり……ゼロだ。」

「じゃあ彼の言った『白き魔法使い』って、やっぱり『あの子』のこどだよな？」

本来魔導師に成る筈の無かった地球人で、初めて面と向かって会った同い年の女の子。

名前、何て名だっただろうか？

確か、なのは……だったような……ああそうだ、その名前だった。あの二度目の戦いの時、あの子はちゃんと自分のことを「なのは」だって名乗っていたじゃないか。

わたしはとり合おうとせず、聞こうともせず。

あの子から投げられた言葉の返事の代わりに刃を向けて、何度も傷つけたのに。それでもあの子は自分に語りかけることをやめなかった。

「友達になりたい」と、そう……言ってくれた。

未だに、どうしてそこまで自分に入れ込むのか、その言葉にどう自分は答えたらいいか、全く分からずにいる。

だが、ゼロからの伝聞は、フェイトに舞い降りた……最後のチャンスでもあった。

アースラの会議室で今後の方針が決定した後。

なのはたちは談話室も兼ねた食堂で談話をしていた。

アルフの希望でどうしても、なのはたちと話をしたいとのことだった。

今は保護という形で、かつ協力的な姿勢を見せていたおかげで手錠等の処置はされていない。

本人も、そんな処遇にしてくれた勇夜からの気遣いもあり、脱走する気はさらさら無かった。

色んなことを話した。

アルフは、フェイトたちと住んでいたアルトセイムのことや、そこで思い出話。

なのはの方は、家族や友達、海鳴の街のこと。

「じゃあホントに光って、絵本に出てくるような王国の騎士だったの？」

「絵本とは少し違うかもしれませんが、そう、なりますね…

光は、地球に来る前、来た後のこと。

主に鏡の星やエスメラルダなどなどだ。

「それで、リニスさんでどんな人だったんですか？」

「あ……そうだね……」

内容はプレシアの使い魔であった、リニスの話になった。

「本当に……あたしにとってみれば、フェイトは……お姉さんで……リニスは、お母さんだった……リニスもあたしたちを……本当の子みたいに育ててくれて……」

「アルフさん？」

暫くして、アルフが今までと声色が変わったことになのはたちは気になった。

今彼女は顔は屈ませていて、表情が見えない。

だが……その体には震えが……特にそれが強く、握り拳にした両手の甲に、ぽたりぽたりと雫たちが落ちていく。

顔を上げたアルフの双眸からは、その雫らが溢れ出していた。

「知らなかった……リニスが最後に言っていた言葉に……そんな意味があったなんて……」

リニスが残した日記には、フェイトとアルフの成長の記録だけでなく、フェイトとプレシアを仲介しようとする日々……と『真実』を突きつけられた後の苦悩と葛藤の記録も残されていた。

『しっかりと支えてあげて……フェイトがきつと、幸せになれるように』、って託されたのに……あたしはまだ……あの子に何もして上げられてない……リニスから約束も果たしてあげられてない……」

アルフが口にしたのは、リニスがフェイトたちの元から去った日に、彼女に残した『遺言』であった。

あの日記を読んだことで、アルフはその遺言に込められた重みを噛みしめたのだ。

役目を終えれば『死』、それが分かっているながらも、リニスを愛情一杯に育てて、どうにかして母親との絆を紡ごうと頑張ってきた。

でもそれは報われず、悩みに悩み続け、それでも役目を最後まで

真つ当し、せめてもと……フエイトを幸せにしてほしいと、自分に託してくれたと言うのに……ここ何年間の自分が許せない。

自分は現状に不平不満を零すばかりで、リニスみたいにそれをどうにかして変えようと努力さえもしなかった。

「あ……あの……」

「ごめん……でもこうしてさ……誰かと一緒に話すのが、こんなに嬉しいものなんだなって思うと、フエイトにそんなこともさせて上げられてない自分が、悔しくて……」

勇夜が作った料理と一緒に食べたあの時とか、今みたいに楽しく団欒する、そんな何気なくも温かな日々を、どうにかフエイトにプレゼントできないかとか……考えもしなかった。

それどころか、そのチャンスさえ、自分は無下にして切り捨ててしまった

「あたしから言えた義理じゃないってのは分かってる……みんなには、散々なことしたからね」

結果的にとは言え、自分はフエイトを助けたいと思い、奮闘してきた人たちの邪魔もしてしまった。

なのはたちと二度目の戦いがあったあの夜もそう。

あの時……なのはが精一杯投げた言葉が、頑ななフエイトの心を溶かしかけていた。

もし自分が横やりを入れなかったら、もっと早くフエイトを、心の牢獄から救い出せたかもしれないのに……ロストログアを不当に集めてて、そう簡単に他人を信用できる状況じゃなかった事情を踏まえても、自分の浅はかさが嫌になる。

「でもお願い……あの子を助けて……フエイトは今……本当に一人ぼっちなんだよ」

「うん……まかせて」

アルフの懇願に、なのははきりつとした貌で答え、光たちも頷いて応えた。

光から、アルフは自分がなんとかするから、もう寝なさいと言われて、二人はアースラから支給された部屋へと戻った。

「アルフさんも、辛かったんだね」

「うん、今までずっと傍にいたから、その分……無力感も大きかったんだ」

だがやはり、アルフの流した涙は鮮烈過ぎて、直ぐには眠れそうにも無い。

「フェイトちゃんのお母さんも、認めて上げられるかな……フェイトちゃんが自分の子で、ずっと……寂しがってたこと」

「そうなってほしいけど、時間は……かかるだろうね」

アリシアを亡くして以来、プレシアの時間は止まったままで、ひたすら時計の針を『あの頃』に戻そうと躍起になっている。

そしてフェイトも多分、『あの頃』の実はアリシアのものである記憶だけを頼りにあの時間を取りもどそうして……そう考えれば、確かにあの二人は親子だ。

過ぎ去ってしまった思い出に今でも縋り付いてしまい、お互い正面からお互いと『現在』に向き合えずにいる。

「なのはは大丈夫？ 色々……辛い話を聞いて」

13歳の自分でさえ、心を痛める現実を聞いたのだ。

今年でやっと11歳になるのはには、より重くのしかかっている筈だ。

「大丈夫……とはまだ言えないかな……だけど、フェイトちゃんはずっと、今だつてわたしなんかよりずっと辛い思いしてるんだよ、ここでへこたれたら、フェイトちゃんを友達として、迎えてあげられない」

それでも彼女は諦めていない。

ジュエルシードにも、フェイトにもだ。

「それに……みんながいるからね、光兄も勇夜さんもアルフさんもクロノ君たちも、お父さんもお母さんもお兄ちゃんもお姉ちゃんもアリサちゃんもすずかちゃんも、それにレイジングハートもユーノ君だつ

て」

「なのは…」

「だからがんばれるんだよ…背中がいつも、あつたかいから…」

「ありがとう…頑張ってるねなのは、後悔の無いように」

「うん」

フェイトは一人ぼっち。

確かにそうだった。

だが、一人だと思うことと、本当に一人であることは違う。

フェイトの場合は紛れもなく前者、だから、そうでないこと彼女に伝えたい。

どこまでできるかは分からないし、たとえその為の通過儀礼が、戦うことだったとしても——真っ直ぐに、行くんだ。

それが、なのはの決意でもあった。

「これでも飲みますか?」

「あ、ありがと…大分落ち着いたよ」

涙で目が赤くなったアルフに光は、飲料水の入ったコップを差し出す。

今食堂は消灯されているが、その分窓から見えるマルチバースがはつきりと二人の目に映っている。

ウルトラマンゼロが直に何度も見てきたであろうその光景、二人とも思わず、見惚れてしまっていた。

「そーいや…あんたとこうして話をするのも、初めてだったね」

「僕の話は、だいたい彼から聞いているでしょ?」

頷くアルフ。

「仲間で、恩人で、友達だと勇夜は言ってたんだって、リンクから聞いたんだけど」

それを聴いた光は、フツと微笑んだ。

「それは…むしろこちらの方ですよ…」

「あのベリアルとかいう、悪党になったウルトラマンに洗脳されたこ

とかい？」

「それもありますが、彼のお陰で世界はこんなに広いことを知ったし、地球に来られましたからね」

「どういう意味だい？」

「私のご先祖様の一人は、地球人のハーフだったんです、ゼロと同じく」

ゼロが別世界の地球の人間と、M78星雲人のウルトラセブンの間に生まれたことはリンクから聞いた。

そんな出生を知らずに育ったために、荒んだ時期もあったことも、それを超えて、父との絆が強固になったことも。

「僕にはこの二次元の能力を使って、惑星間ネットワークを作るのが夢でした、今思えば、それを叶えなかったのは、地球に行ってみたかったから……かもしれません、先祖が育った地に……」

「光……」

「不可抗力ですが、それが叶って、血はつながらなくても家族ができて、地球人として生きることでもできましたからね……」

光||リヒトのミスメラルダ人の母は彼を生んだ時に無理がたたって、昇天し男で一つ育ててくれた父も、カイザーベリアルの侵攻で命を落とした。

エメラナ姫やジャンバード、自分を騎士に任じてくれたエスメラルダの王族や、同僚の兵士たち……そして……ゼロ、グレンファイヤー、ジャンボット。

朋友（なかま）たちもいて、寂しくは無かった。

でも、ゼロと同じく家族に恵まれなかった境遇から、家族に恋焦がれていたのも事実だ。

一時期、どうして母に無理強いさせて自分を生んだのか？と父に詰め掛かったことがある。

穏やかな彼にも、反抗期はあった。

その父も、今はもういない。

それだけに、地球で、自分にちゃんと家族ができたことが、地球人として生きることができたことが、とても喜ばしかった。



「血が繋がってるだけじゃ…家族って言わない…」  
「え？」

「勇夜が前に言ったんだ…それだけが家族を形作るものじゃないって」

「彼らしいですね…」

血が繋がっていながらも、分かりあえるまで紆余曲折あった。

彼の言葉は、それを経験したからこそ言える言葉。

「なれるかな…これかも…フェイトの家族に…」

「なれますよ…今でもそうじゃないですか…ゼロもなのはも、必死に想いを伝えてきたんです、たとえフェイトに届かなくても、それでも…と…あなたがここで負けてどうするんですか？」

光の叱咤に、アルフは苦笑いで返す、

「ごめん……その自分の想いが、何度届けても…届かなかったからさ、弱気になつてた…」

そうだ、ここで負けちゃいけない。

もう一度、フェイトと姉妹のような家族でいられるように…支えてあげられるように。

そうだよ。

今度こそ、約束を果たすんだ。

リニスと交わした……あの遺言であり、*“約束”*を、勇夜たちみんなと一緒に。

そして2日後……運命の日。

日本時間午前6時。

海鳴臨海公園にて、二重に貼られた広域結界の中。

結界の中ということもあるが、朝はやはり静謐で、それでいでのどかだ。

だがこれから、この場所は戦場になる。

二人の魔導師の少女によって：そのとあるビルの屋上庭園。

「ここなら、良いよね？」

そこにある噴水の前で佇む高町なのはは、念話で伝える、これから、全力で戦うことになる相手に向けて。

「(出てきて：フェイトちゃん)」

念話で自身の思念を伝え、目をつぶりながら待っていると、魔力とともに後ろから、人の気配を感じた。

目を開けると、噴水の水面に彼女が映っていた。

直ぐ後ろにあるこの庭園に繋がる、円形のエレベーターの上に立つ、金髪赤眼の漆黒の魔導師。

フェイト・テストアロッサ。

なのはは振り向き、彼女を見据える。

初めて会った時と同じ、寂しそうな目をした女の子。

たぶん：たぶん今、フェイトに真実を語っても：それでも彼女は立ち止まられない：立ち止まらない。

その証拠にフェイトは、いつでも受けて立つとばかり。

『Scythe Form』

魔力刃を展開した。

全ての始まりは、理不尽に引き裂かれてしまったある親子たち。

でも：自分たちのきっかけは——

「たぶん……きっかけは……このジュエルシード」

『リリース、ジュエルシード』

二人の周囲に自分たちが今持つてるジュエルシードが浮遊し、それを見せ合う。

「だから賭けよう、わたしたちが持つてるジュエルシードを：それからだよ、全部——」

不思議としか言いようがなかった。

自分でもびつくりするくらい、頭の中で自然とこんな言葉の数々が浮かんで、真っ直ぐに口から発せられていく。

「多分……わたしたち」の全ては、まだ終わってもいないし、始まってもいない」

そうだ、今まではまだスタートすらしていなかったんだ。

あの海の戦いで答えを見つけて、今日でやつと、出発地点のラインに立っている。

「今日がその為の……スタートなんだって！」

フェイトはなのはから発せられる気迫に一瞬驚いた素振りを見せるが、直ぐにバリディッシュを正眼に構える。

そしてなのはも、応じる形でレイジングハートを構えた。

「いくよ！ フェイトちゃん」

なのはとフェイト。

二人の少女による、全力を上げての真剣勝負の幕は上げられた。

「始まったね……」

「そうだな」

なのはたちがいたところとは違うビルの上では、諸星勇夜、高町光、ユーノ・スクライア、そしてアルフが、この戦闘を見届ける為にこの場にいる。

アルフは、数日振りにフェイトをこの目で見た時、思わず『もう止めよう』と言いそうになった。

でも同時に、フェイトはこう答える——『それでも……わたしはあの人の娘だから』——と思った。

絶望の沼に浸り続けたプレシアからの呪縛は、簡単には消えてくれない。

なのはもそれを分かっているから、一騎打ちを願い立てたんだ。

今は……あの子を信じよう。

フェイトの『血を吐きながら続ける悲しいマラソン』に、終止符を打ってくれると。

アースラのオペレーター室においては。

「戦闘開始…:かな」

「ああ…」

クロノとエイミーが、モニター越しに二人の戦闘を見届けていた。既にモニターには、いくつもの光点が輝いては消えていく。

「戦闘空間の固定は大丈夫か?」

「うん、上空まで伸ばした2重結界に戦闘訓練用のレイアー建造物―

―」

簡単に言うと、魔法でほぼ実体を持つ建造物を足している。

管理局では訓練でよく使われる技術だ。

「地球の人には絶対見つからないし、どんだけ壊しても、結界外への被害は0と、でも珍しいよね」

「何がだい?」

「クロノ君がこういう大博打を許すなんて」

「なのはが勝つに越したことはないさ、けれど…」

確かにリスクは大きい。

だがその時の対処も想定している。

「勝敗はどう転んでも関係ないしね」

「なのはちゃんが戦闘で時間を稼いでくれるうちに、時の庭園補足の準備と」

「頼りにしてるんだ、逃がさないでくれよ」

「了解!」

いつもの陽気かつフランクな響きで、エイミーは応じた。

空中で何度も交差する桜色と金色の光跡。

桜色の光の方のなのはが、フェイトの一撃で海面スレスレまで落下。下。

一瞬海水につかるが、直ぐに態勢を取り直し、加速。

『Photon Lancer』

追跡するフェイトはすかさず魔力光を4つ発射。

なのははなんとか4発全て回避し、そのまま上昇する。

『Deveine shooter』

なのはも魔力光を5発形成。

「シューター」

フェイトに向けて飛ばす。

フェイトは、魔力の鎌を生成し、接近するスフィアを全て切り落とす、なのはに向かって急加速。

迫る第二破のディバインシューターを回避し、斬りかかった。

『Protection』

によって受け止めるなのは、鎌と盾の鏝迫り合い。

だがなのはも防御に専念する一方、フェイトが回避した魔力スフィアを彼女に飛ばす。

が、なのはの意図に気づいたフェイトは。

『Thunder bullet』

左手に魔力を集め、至近距離からかました。

シールド越しとは言え、衝撃を受けたなのはは、ビルを貫き、海上に衝突、衝撃で海水と水蒸気が舞う。

魔力スフィアもコントロールを失い、不発に終わった。

大穴が開いたビルの先を見つめるフェイト。

まだ……終わって無い。フェイトの直感がそう告げる。

彼女の勘は当たりだった。

水蒸気のスモークから、光が瞬いたかと思うと、魔力の光線が突き進む。

あらかじめ予測していたフェイトは急上昇して回避。

水蒸気の霧が晴れると…息を荒げながら、キャンオンモードのレイジングハートを構えるのがいた。

『やはり、総合的な実力では彼女の方が上手です』

レイジングハートが忠告する。

この短期間で、なのはは魔導師としての実力を着実にアップさせてきた。

実戦を何度も経験し、時間の許す限り、訓練に訓練を重ね、寝ている間さえマルチタスクを使い、夢の中で、シミュレーションを続けていた。

だが相手だって、数年の月日をかけて修練を積み、経験も積んでいる。

簡単には勝たせてくれない。

「この日の為に特訓はしてきたし、切り札だって用意してる」

『彼』が見せた数少ない魔法の一つを元にして作り上げた。

とっておきのジョーカーカード…だがまだそのタイミングではない。

あれを使うには、もつとなのはと彼女の魔力をこの空間にばら撒かなければならないから。

「だから後は、負けないって気持ちと、みんなからもらった想いで向かっていくだけ…でしょ？」

『All right, My Master』

使い手も愛機も名前の通り『不屈の心』は健在であった。

「やはり彼女は強いですね…なのはもかなり腕を上げていますが…」

「(フェイトも伊達に魔導師をやってねえし、あのリニスも相当教え上手な先生だったみてえだな)」

その名教師を生み出す辺り、さすがは大魔導師ってわけか…プレシア・テスタロッサ。

勇夜も光もまた、なのはが勝ってくれればと願ってはいるが、あらゆる非常時に対応できるよう、冷静さを保ちながら見聞をしている。

その辺りは二人とも流石、若年ながらも幾多の修羅場を潜り抜けてきた戦士たちである。

「(ですが、なのはにはあるみたいですよ、とっておきの『奥の手』が)」  
「(え？　なんだそれ?)」

「(なんでも、あなたの魔法を参考にしたらいいです)」

「(俺の……魔法を?)」

勇夜は、なのはたちに比べれば魔法の使用したケースは極端に少ない。

海鳴での戦闘も、半分はゼロに変身して戦っていたし、実際になのはらが目にした使用例は数えるほどしかない。

その中で一番印象に残りそうなものは………そうか、思わず口元に笑みを浮かびあがる勇夜。

なるほど、確かに逆転の切り札には、丁度いいカードだと思った。

「(ただ：フェイトにもその『奥の手』はあるはず、この勝負、そいつの使い時をミスった奴が……負ける)」

なんせ切り札を出した瞬間が、一番勝率は高く、同時に敗北する可能性も高くなるのである。

それは単なる直感では無く。

勇夜——ゼロが戦士としての今までの経験から導いた分析結果だった。

そこからの戦闘は、互角かつ熾烈であった。

二人は魔力弾を打ち合いながら、雲が漂う高さまで上昇。

自分の得物で時に、10個近くの魔力弾を一气打ち合い。

交差し合い。

正面から、ぶつかり合い。

バリアジャケットも時間が進むごとにボロボロになっていく。

今戦っているのが、まだあどけない少女たちであることを忘れさせてしまうくらい……それは、鮮烈で激しい空中戦だった。

『Scythe Slash』

魔力の密度を上げた刃でフェイトなのはの背後を取り、切りかか





まっではいる。

一旦出方を窺いながら後退し、距離をとる二人。

静寂の間に入った途端、たまっていた疲労で息が荒くなっていることをようやく自覚した。

それだけ、予断を許さない戦闘だったのである。

なのはの愛機や、勇夜たちから総合的な実力は対戦相手より上と評されたフェイト。

だが彼女は、なのはに決定打を与えられていなことに焦りを感じていた。

初めて戦った時は、魔力が大きいだけの素人だったのに、今は違う。完全に自分だけの戦闘スタイルを確立してしまっている。

機動力とスピードはそれほどでも無いが、火力と防御力なら、自分を遥かに上回っていた。

有効射程も長いし、コントロールも巧み。

まるで……スピードに長ける自分に対抗するみたい……違っ、  
“みたい”じゃない……実際そうなんだ。

結果的に自分の叩き上げで、彼女はここまで強くなった。

でも、こつちも負けられない。自分がここで負けたら……母を助けて上げられない。

脳裏に浮かぶのは、失って久しい、母の笑顔。

あの頃に——戻れなくなる！

母から笑顔が消えたきっかけは……母が寝る間も惜しんではげんだ。  
ある魔導炉の開発計画。

その多忙さで、わたしが寝てしまう頃に疲れた顔で帰ってくることも度々だったし。

いつ終わると、わがままを言ったりもした。

それでもこれが終われば一緒にいられる時間ができる。

その言葉を信じて待ち続けた。

そして……その魔導炉の起動実験だった日。

その日、実験は失敗し、事故が起きた。

ベランダから、帰りを待ちわびていたわたしが見たのは。

母さんのいた場所から光を放つ柱だった。

それからどうなったのかは、まったく覚えていない。

次に目を覚ました時に最初に見たのは——

泣きながら自分を抱きしめる母と……あの事故で怪我をせずと眠っていたという事実だった。

その後、小さな自分には、持て余してしまうくらい大きく新しい部屋に連れられて、母さんは自分が少し休んだら、これからは何時でも一緒にいられると言ってくれた。

お仕事は？と聞いたが、その必要は無いって……私は思わず『右手』で母さんの頬に触れた。

その瞬間、母さんはひどく驚いた顔をして……でも、直ぐに笑って……

私の名前を、呼んだ。

『アリシア』

え？ 何言ってるの？

アリシアって……誰のこと？

わたしはフェイトだよ、アリシアって名前じゃない。

フェイトはグレイヴフォームにしたバルディッシュで突貫。

それをなのは、障壁で受け止める。

バリアを貫こうと力をこめる一方で、フェイトは必死に記憶を辿る。

母さんが笑ってる記憶を……でも……それでも呼んでくれない。

どの場面でも母さんは自分を……『アリシア』って呼んで……フェイトって呼んでくれない。

違う、違うよ……違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う  
違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う  
違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う  
違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う  
違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う

う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う  
う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う  
う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う  
う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う  
う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う  
う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う  
う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う  
う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う  
う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う  
う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う  
う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う  
う違う違う

私は——いや、どっちだっついていい！

帰るんだ！ あの——温かい日々（きおく）に！

「アリ…シア？」

攻撃を必死に受け止めている最中、フェイトは確かにそう呼んだ。

咄嗟に体を逸らして、受け流すなのは。

その勢いのまま、二人は距離が離れる。

明らかに彼女の様子がおかしい。

今までは果断無く飛びまわりながら攻撃を仕掛けてきたのに、急に動きにぎこちなさが現れていた。

確か、フェイトには姉の記憶が植え付けられ、それを自分のものと思っ込んでいた筈………ってことは——

勇夜も、フェイトの異変を感じ取っていた。

まさか、アリシアの記憶が「アリシアのもの」だと認識し始めたの

か？

恐らくは……でない最後の賭けで臨んだ筈の戦闘の場で、あんなうろたえた顔を見せやしない。

まあ……誰だっけ自分のものと信じている記憶に『異物』が紛れ込んでいたら、パニックにはなるものだ。

一度は戦闘どころじゃない状態だったフェイトは、直ぐ調子を戻すと、今までで一番巨大な魔法陣が足元に出現、そして30はゆうに越える稲妻の魔力スフィアがフェイトの周辺に現れる。

ビルから見えている勇夜たちからも、その姿がはつきりと見て取れた。

「フェイトは本気だ……」

「アルフ、まさかあれが？」

「そうだよ……あれはリニスから教えてもらった……とっておきの『切り札』」

高圧縮された、一撃一撃が強力な魔力弾を大量に生成し、合計1000発、一気に乱れ撃つ技。

『《フォトンランサー・ファランクスシフト》……』

なのはが、防御する準備を取りかかろうとした時。

突然四肢に金色で半透明の立方体が現れ、動きを封じられた。

「設置型のバインド、いつの間？」

「どうやら、大量のスフィアは彼女が、バインドはデバイスと役割を分担したようですね」

AIを積んだデバイス、特にインテリジェントタイプは、デバイス自身の意思で魔法を発動できる。用途次第で使い手と愛機が、それぞれ異なる効果を持つ魔法を同時に行使することも可能だ。

「なら、せめてなのはにサポートを」

「やめておけユーノ」

「勇夜さん？」

思わず横やりを出しそうになったユーノを、横に伸ばした勇夜の腕が制止。

「二対一のタイムマン勝負に、手出しは無用だぜ」

「でも勇夜、本当にやばいんだよ、あれを受けたら、どんな手練れだつて…」

「いいから黙って見てろ」

焦燥を隠せないユーノとアルフに対して、勇夜は冷静に戦況を見る様努めていた。

お陰で、瞳は“彼女”の足元に張られた“網”を捉えた。

当人はそのトラップそのものに気がついていない。

冷徹で情を挟まない見方をすれば、この瞬間によつて、勝敗は決まったも同然であった。

「フォトンランサー………：ファランクスシフト」

フェイトは愛機を持った手を振りかぶり。

「打ち———砕ああけええええええ———！」

振り下ろすとともに一斉に魔力弾を放った。

バインドで動けないのはは、それを真つ向から受けるしかない、流星雨の如く、飛んでくるフォトンランサーの雨は、爆煙で見えなくなるくらい彼女に降り注いだ。

質も量もけた違いな攻撃に、フェイトの体力も魔力もどんどん削られていくが、それでも砲撃を止めない。

さらに駄目押しの一撃で、左手を空に翳し魔力を集める。

それは、金色の魔力でできた槍となり。

最終的にはフェイトの身の丈をはるかに超える大ききさとなる。

フォトンランサーを巨大化させて投げつける技。

『Spark End』

「スパアアアア———ク———！」

それを爆煙の中へと投げつけた。

「エン———ロード———！」

眩い閃光と同時に大爆発が起こる。

拡散された稲妻と爆風で周辺のビルも損壊した。

巨大な傷を走らせ、ゆつくりと自壊していく現代の巨塔たち。

なのはが滞空していた地点は、粉塵のボールに包まれ、フェイトは肩で息をしながら凝視する。

フェイトは、確かな手ごたえを感じていた。

バインドで動きを封じていたから、今の一連の攻撃はほぼ全ての子に当たっている。

仮に防いだとしても、防御に費やすあまり、魔力を使いすぎて自滅すると踏んでいた。

もう浮遊する余力さえ残ってはいない。

疲労で息を荒げながら、そう思考していた。

だれだってこの一部始終を見ればそう考えるだろう。

そしてこの勝負はフェイトの勝ちだと…思われた。

しかし、実状は予想を超える。

煙が晴れ、その先にいたのは——満身創痍ながらも……悠然と、毅然空に佇む、なのはがそこにいた。

## EP25 | 星の光、絶望の宣告

信じられない。爆煙の合間から、バリアジャケットの破損が酷い状態ながら、未だ大地を踏みしめるかのように佇む少女にフェイトは己の目を疑う。

どうして……あれだけの攻撃を受けて、なぜまだ飛んでいられるの？

疑問はつきないが、なら、反撃される前に、自分も今の攻撃で消耗が激しいけど、魔力ダメージで昏倒させるだけの余力なら相手よりある。

負けない、こっちだって、負けられないんだ！

意志を固め直して、踏み込もうとした瞬間だった。

四肢に突如、何らかの圧力が加わり、体が前進できなくなる。

見下ろすと、自分の両手両足が、桜色のリングに縛り付けられていた。

バインド！ いつの間に?! どこにそんなタイミングが？

必死でフェイト心当たりを探り、行き着いた。

まさか……フランクスシフトの前準備の、あの時に。

それはフェイトが、スフィアの制御に集中するあまりに生じた、致命的な隙。

『まだ動けますか？ マスター』

使い手たる主が、疲労困憊ではあるものの、その心の熱さと強さは未だ健在なのは分かっていた。それでもレイジングハートはなのはこのコンディションを確認するべく問う。

無論答えは――

『もちろんーレイジングハートー！』

――であると、聞く前から把握できていた。

ならば自身は、彼女の意志に応えるべく務めを果たすだけ。

『Comprehension —— Canon mode』

砲撃形態へと移行するレイジングハート

ユーノとアルフは自分が見ている物が信じられなかった。

100発以上ものの魔力スフィアによる波状攻撃を受けて、未だに飛んでいられるなのはの勇姿に対してだ、

尤も、何発かは直撃を受けている、決してダメージが無い……という訳ではない。

現にバリアジャケットの布地は傷だらけで、布の下のなのはの体にはいくつも痣ができていた。

「(実はひやひやしてただろ?)」

「(バレてましたか?)」

「(奥の手の準備とはいえ、あれだけの波状攻撃を受けるとこ見せられたら、冷や汗流れるさ)」

ユーノたちと反対に、勇夜たちは多少冷やっさせられたものの、あのフェイトの大技を耐えきれぬ確信があつたのでそんなに驚いていなかった。

なぜかと言えば、遠くからでも認識できる彼女の意志の強さが、その確信を強くさせていたのかもしれない。

「でも、現状から見て砲撃を撃てるのは一発分……もしあれが耐えきれたら」

「心配ありませんよ、ユーノ」

「え?」

「なのはが今ぶっ放そうとしてるのは、盛大な“前置き”なんだよ」「前置きって……アタシから見ても、とてもなのはにはフェイトのフアランクスみたいな大技を使える魔力なんて」

「確かになのはにはそんな余裕はねえ、でも魔力は使ったら跡形もなく消えるもんだったか?」

光を除いて、勇夜の発言を理解できる者はこの場にはおらず、アルフとユーノは首をかしげるばかり。

「まあ、とにかく見てれば分かる」





周りの空気中の魔力が、嵐が来る前の雲のように静かに、かつ急激に空へと吸い込まれていることに、そして：前方にいたはずのものが高度遙か上空へと上げ、浮遊しつつ。

“使い捨てられた魔力を、掻き集めていることに”

先程も前述したが、あの渾身のダイバインバスターの一撃はあくまで……壮大な前振り……であった。

ユーノたちは光の言葉で初めて、なのははやろうとしている……その特大の“切り札”の何たるを理解した。

そしてその確信を裏付ける――

「使える魔力なんて、この辺にはいくらでもあるじゃねえか」

――勇夜の発言と、上空に上がったなのはの目の前に集まる魔力の光球が、疑いのような無い証拠だった。

「集束……砲撃」

今までの戦闘で、自分敵味方関係無く使いきれずに空気中に漂っている魔力残滓を再利用して集め――

『Starlight Breaker』

――体を通さずに、直に操作し使用する最上級技術、《集束魔法》。それを実際に披露した勇夜の魔導を元に、集束技術を最大限に生かした、なのはとレイジングハートが知恵と戦術を練って作り上げた技、それが加速度的に巨大化する光球であった。

光はなのが見えなくなるくらい大きくなり、怪獣やウルトラマンら巨人たちをも呑みこむほど巨大となり、輝きを増していく。

それは正に名付けられた魔法名の通り、《星の光》だった。



余りに強すぎる魔力の閃光は、爆風とともに雨粒となって拡散し、広がり。

ビルは次々とその衝撃に、ガラスが粉々に砕け散り、強度が耐えられる限界を超えて倒壊。

追い打ちに魔力の荒波の直撃を受けた海は、津波という名の凶暴な巨大生物となって暴れ狂い、境界内の建築物を容赦なく呑みこんでいく。

勇夜たちは、あらかじめなのはよりも上空へ飛んで退避していたので無事ではあったが、爆発の余波はここまで飛んできた。

爆発が収まった後に広がるのは、廃墟、その表現だけで充分だ。

海はまだ荒れ気味でささくれ立ち、爆発を免れて無事な建物は、一つも残っておらず、辛うじて倒壊していないビルも、痛々しくヒビと挟られた傷が見受けられボロボロであった。

星の光によって起こされた津波に浸水された街は正に：ゴーストシティそのものだった。

災害を直に体験した者なら、その光景を前に悪夢の再来とばかり、内に撃ちこまれた心的外傷（トラウマ）を再発させてしまうだろう。

その中を、なのはは大技を使った疲労がまだとれない中、フェイトを探していた。

最初から全力で戦うことになってたし、威力に反して、非殺傷に設定した上での攻撃なので外傷は無い。

だが、意識を失って海に墜落することは明白だった。

やり過ぎたよね：戦ってる時は殺し合いとまではいかなくとも、譲れない目的のために死力を尽くしていたので気にする余裕はなかったが、TV越しでしか見たこと無かった惨状を前に、なのはは流石に表情を曇らせながらフェイトを探していた。

「(なのは、こっちです)」

とそこへ、光からの念話が来た。

兄が指定した場所に飛んで行くと、倒壊したビルの一つに、光と勇夜と仰向けに倒れているフェイトがいた。

フェイトが海に落ちる寸前、光が勇夜をミラーアイズに映る鏡面から『ナイトムーバー』で海面にワープさせ、勇夜は彼女を救いあげ、その足で近くのビルに移動したのである。

「光兄…」

「大丈夫です、気を失ってるだけですよ」

なのはは横たわるフェイトを見つめる。

すると丁度いいタイミングで、彼女は意識を取り戻し、ゆっくりと目を開けた。

フェイトの最大の敗因は、やはり『攻撃への傾倒』だった。

攻撃することに拘り過ぎるあまり、周囲への配慮が疎かになる。

魔法の先生であったリニスからも常々指摘されている点だった。

もし、網——バインドが張られていることを先に気付いていたら、強力だが隙が多く、直線的で見切りやすいなのはの砲撃をまともに受けることにはならなかった。

勇夜の見立て通り、フェイトは切り札の出し時を見誤ったことで、敗北の味を味わうことになったのだ。

「ごめんね…大丈夫？」

自分を見つめるフェイトに謝罪の言葉を言った直後、それは何の前置きもとることなく起きた。

パコン！

どこか間の抜けた擬音と同時に、痛みがなのはの頭に響く。

「イター…いきなり何？ 光兄、勇夜さん」

「やり過ぎだ（です）」

なのはにゲンコツを見舞った張本人である勇夜と光と、リンクはほぼ同時にはもって彼女に突っ込んだ。

相手は一応… … “一応” … … 小5の女の子なので手加減はしている。

「まったく…バインドかけられた一人相手に何ドデカいのぶっ放してんだか… …いくらなんでも鬼畜過ぎるだろ…」

「境界内で非殺傷とは言え、明らかに過剰暴力ですよ」

『それにまだまだ集束の詰めが甘いですね、その結果被害がここまで

拡大したものと……はつきり申しますと、〃下手っぴ〃……です」

「確か『スターライトブレイカー』とか言ったか？意味は星の光なんだろうけど、むしろ『星を軽くぶつ壊す殲滅砲』って言った方がだいたい合ってるような……」

「言い得て妙ですね、私もあれは、魔法と言うより魔の砲撃と書いて魔砲と呼んだ方が正確だと思います」

「その表現に違和感を感じないのが怖いわ……そんであんな天使みたいな姿で、あんな『魔砲』使うんだ、天使は天使でも、告死天使か……墮天使……」

「いいえ、墮天使という表現では生ぬるい、もう悪魔と呼ぶのが相応しいです、最悪……『魔王』に昇華するかもしれない……」

「今の魔法の破壊力を計算してみました、地球で現存する大量破壊兵器と、過去地球で起きた自然災害を上回る数値結果が導き出されました」

「やべえんじやねーか……このままじゃお前の妹さん、光の国からもヤプールとかJUDAとかエンペラ星人とか、ダークザギ級の脅威だとレットルを張られるんじゃない……」

「将来本人の意思に関係なく、周囲から〃管理局の白い悪魔〃、〃白き魔王〃、〃冥王〃、〃霸王〃と言った異名を付けられるかもしれません」

「不味いですね、私がある前になんとか、教育しておかなければ……」

「あ……あの、勇夜、リンク……あと……リヒト……さん……でしたよね……」

「何だ（何ですか）？」

加減？ 何それおいしいの？ 的、ボロクソに言いたい放題に毒気の利いた暴言を発しまくる3人に、フェイトが恐る恐る尋ねてきた。

「それ以上……言わない方が……良いと思うのですが……」

「何言ってるんだ？ 一番の被害者はフェイトだろ……正直まだ言い足りねえぞ」

『〃悪魔〃を誕生させないためには、これくらいの荒療治は必要です』

フェイトの提言に、二人はドヤ顔で即答。

「でも……もういい……もういいから……気持ち十分受け取ったから……」

やめてあげて……でない？」

指さしながら答えるフェイト、その方向に目を向けると。

「見ないで……光兄……フェイトちゃん……勇夜さん……こんな醜いわたしの姿を……見ないで……」

『墮天使』やら『悪魔』やらと、言いたい放題ボロクソ言われたご本人は、かの義兄の引きこもりモードを彷彿とさせる体育座りで、どんよりとしたオーラと黒い縦線を漂わせる状態になっていた。

「なのは？ 一体どうしたの!？」

「ユーノ君も見ないで……わたしは歪んだ『魔砲少女』……なんだから……」

「な……何を言ってるの?」

遅れてやってきたユーノが駆け寄るが、落ち込むのはから零れる言葉の羅列に戸惑うばかり。

「勇夜、光……これはどういう騒ぎだい?」

アルフも、この惨状を前に尋ねてくる。

「アルフ……これも世の為人の為、世界を守る為だ」

真剣そのものなのにどこか笑いを誘うコミカルさもある表情で、勇夜は答えた。

「あ……そう……なんだ」

アルフもこの惨状に思うところがあるのか、それ以上何も言わなかった。

「なのは……」

「光兄……いいんだよ慰めなくて……分かってるもん、わたしが怪獣より物騒な怪獣だから」

珍しく光にそっぽを向いたなのは。

言いたい放題ずばずば言われて、すっかりご機嫌斜めなモードとなっていた。

兄たちのズきつと突き刺してきた言葉の数々の意図は、彼女とて理解している。この惨状を見れば、ああ言われても仕方ない。

魔法で作り出した結界（せかい）は、なのは渾身の切り札たる《スターライトブレイカー》で、世界が滅亡してしまっただかのような光景となっていた。

なぜこの名前になったかといえば、シミュレーターで練習中、集まっっていく魔力の粒子一つ一つが、星の光のように見えたから、その技名になった。

我ながらゾツとする程の威力を見れば、勇夜が揶揄していたように「星を軽くふっ飛ばす砲」なんて表現されてしまうのも無理ない。

けど……自分だって一応「女の子」なのだ。

さっきの兄たちのやり取りで出てきた一連の「名前」は、勇夜の言い様を見る限り、ウルトラマンにとっても強敵な……それこそアニメ等のラスボスに相当する存在なのは違いない。

そんなボスキャラたちと同列に見なされるのは、いくらなのはでも、自身の心の中の「女の子」としての一面にダメージが響くのは避けられなかった。

「さっきは流石に言い過ぎました……でも……力を持つと言うことは、自分がどう思っようと思っよう関係無く、誰かから、「悪魔」と呼ばれる覚悟を持たなければならいんですよ……確かになのはのフェイトを助けたい気持ちは本物でしょう、しかしフェイトから見れば、目的を邪魔するなのは、悪魔に見えたはずです、私たちは神様にはなれませんが、悪魔にはなれてしまう人間（いきもの）ですから……」

「……………光兄……」

「それに魔法には、非殺傷というストップパーがあります、本当にストップパーを掛けなければならいのは、それを使う人間自身、自分の『心』なんです」

「それって……どういうこと？」

「今はまだ無理に理解しなくてもいいですが、今言っただことは絶対に覚えておいて下さい、そして……どんな力を得ようとするかは「一人の人間」でしかないことも忘れぬことです、なのはが……これから魔法使いを続けていくのなら尚更、いいですね？」

「……………うん……分かった」



兄の言葉の意味をきちんと理解するのはまだ先になってしまうだろうけど……自分の為を思つてのこと……ということとはちゃんと分かるし、これがその時まで兄がストッパーを務めるって宣言だつてことも。

そう思うと……さつきまで斜めだった機嫌は一転して、どこか嬉しさがこみ上げてくるのであった。

さて、緩んだ空気もここでお開きとする。

「アルフ………」

数日振りの姉妹とも言える、主と使い魔の再会。

でも……まるで長い間、会つてなかつたような錯覚さえ覚える。

何て言つたら良いんだろう？

アルフが、母さんの仕打ちに我慢できなくて反抗したけど、返り討ちにあつて、勇夜を頼つて今ここにいることは自分でも理解できる。

頑固な私を思うあまり、ずつと辛い思いをしてきたことも……なのに……私……言葉が見つからない、何て薄情な子なのだろう。

「えっ？」

突然、アルフはフェイトを抱き締めた。

「ごめんね……傍にいて言つたのに……あたし……」

今はアルフの顔が見えない恰好だが、泣いていることは明白だつた。

「これであたしたち御用だつてことは分かつてるさ、でももう、母さんのためだからって、罪人紛いのことなんか、しなくていいんだよ……」

「アルフ……」

「おとりこみ中のところ悪いが……」

わたしたちは彼の方を見る。

わたしたちのやってきたことは危険で違法だと言いながらも、本当に危ない時はいつでも助けてくれた。

諸星勇夜：ウルトラマンゼロ。

そしてその横には――

「フェイトちゃん」

――何度も戦いながらも、

「ごめん…やり過ぎちゃったよね……」

いつでも私と、向き合おうとした。

白い魔道師……高町なのは。

「悪いが約束は約束だ……ジュエルシードを」

「うん…」

彼はいつでも「危ない時は助ける」という約束を守り続けた。

なら、自分も守らなきゃいけない。

そういう約束で、ここに来たのだから。

『Put out』

保管しているジュエルシードをバルディッシュから取り出して、それを今果たそうとした時だった。

「きやがったな…」

空を見た勇夜がそう呟き、自分も空を見上げると、青い色に染まっていた空が雷鳴を轟かせながら蠢く雲に覆われた。

『高次魔力確認！ 魔力波長は、プレシア・テストアロツサ！ 戦闘空域に次元跳躍攻撃…勇夜くん！みんな！』

「かあ…さん」

雷雲から、凶太い魔力の雷が一同に降り注ぐ寸前。

「デュア！」

「ミラー！スパーク！」

二人は変身、なのは、フェイトたちを連れてその場から光となって消えた。

アースラでは、降り注いでくる魔力の稲妻を、艦に搭載された魔力シールドで防ぎながら。

「魔力発射次元特定！ 空間座標確認！」

「転送座標セツト！」

クルーたちが時の庭園の居所を突き止める。

そして、予め突入に備えて、艦内の転送ポータルで待機していた武装隊の魔導師たちは。

「突入部隊、転送ポータルから出動！ 任務はプレシア・テスタロッサの身柄確保です」

リンデイの指示とともに庭園内へと転移した。

丁度そのタイミングで艦橋室に入る者たちがいた。

先程の戦闘空間から帰還した一同である。

「お疲れ様」

「すまねえ、フェイトが持ってた分は捕られちゃった」

まさかあの状況下で、抜け目なく転移魔法で露わになったジュエルシード持ち去るなんて……やはり大魔導師で、あのフェイトの母親であるだけのことはある。

「全員無事で戻ってこられただけでも良かったわ、後はわたしたちに任せて」

「それからフェイトさん、初めまして」

リンデイは今は拘束服を着て、愛機を掌で握りしめているフェイトに自己紹介をする。

対して、彼女は俯いたまま答えない。手錠までは付けられなかったが、拘束着を着た姿がその痛々しさに拍車をかけていた。

無理も無い、先程振りそそいだ雷撃は海上での一件以上の威力で、勇夜たち諸共巻き添えにするつもりで撃ってきた上に、多分その瞬間……念話でプレシアから何か言われたのだ。

あくまで予想でしかないけど、“もういいわ”などと、あいつは抜かしたのかもしれない。

『プレシア・テスタロッサ！ 時空管理法違反、及び管理局艦船への攻撃容疑であなたを逮捕します！』

マイク越しから罪状を述べる局員の一人の声が響き、勇夜たちはモニターへと目を向ける。

画面には局員たちに囲まれながらも、悠然と玉座に座るプレシアが映っていた。

最初こそ不敵に笑みを浮かべてはいたが、局員たちが『彼女』が眠る部屋に繋がる扉を見つけた瞬間、形相が鬼のように豹変した。

『何だこれは?! まさか——』

そして、例の部屋に入った局員たちによって……『彼女』の姿が明るみになった。

言葉を無くす一同。

「(勇夜さん…あれが…)」

「(そうだ…あれがフェイトの…)」

既に真実は知ってはいた。

知っていた…知ってはいたんだ。勇夜に至っては、一度直に目にしている。

だが分かっているとしても、理屈では理解していても…それでもやはり……実際目になると、瞳にそれが映ると、心に重くのしかかってくる。

モニターに映っている、生命維持カプセル内の液体の中を浮いている彼女と自分の容姿が瓜二つなフェイトなら尚更。

『わたしのアリシアに——近づかないで!!』

なのはたちと同様に呆然自失していた局員たちにプレシアはうち一人を、片手で、病人とは思えない力で投げ飛ばし、自らの雷撃を彼らにお見舞いした。

突入から数十秒……武装局員は糸も簡単に全員戦闘不能になってしまった。

「武装局員を艦内に転移」

光は咄嗟に、転移魔法で局員たちを庭園から連れ戻した。

「ありがとう、光くん」

「いいえ、それよりも」

「アリ……シア……」

アリシア。先程の戦闘でフェイトの記憶に紛れ込んだであろう、真実であるが、彼女にとっては異物な存在である単語。

『たった九つのジュエルシードで辿り着けるかは分からないけど…も

ういわ、全て終わりにする…アリシアを失ってから暗鬱な時間も、身代わりの“人形”を娘扱いすることも…」

フェイトの方を見る。口は半開きになって、大きく開かれた瞳は小刻みに泳いでいた。

頭にハンマーを叩きつけられたも等しい精神的一撃が彼女を襲ったことが、明瞭に受け取れた。

『聞いていてフェイト？あなたのことよ…』

勇夜は、罰の悪い表情を見せながらも口を開く。

「フェイト、実はな、今まで……黙ってたことがある」

「フェイトちゃん、実はね、フェイトちゃんが生まれる前に、プレシアさんにはもう一人娘さんがいたの」

論より証拠、ここまで直に見せられてしまったら、本当のことを話すしかない。

「20年前に起きたプレシアが開発主任として進めていた、魔導炉実験の暴走事故、その時にね、画面に映ってるその子、アリシアはそれに巻き込まれて…」

「その後あなたのお母さんは、もう一度娘に会いたいが為に、アリシアの遺伝子を使って、そっくりの女の子を生み出し、その子に……彼女の生前の記憶も植え付けたんです……『アリシア』として…」

「フェイトちゃんの名前は……その……死者蘇生技術の、開発コードからとったの…」

光とエイミィは、重い声色で二人の言葉を補足する。

「記憶転写型クローン技術……そいつの名前は……PROJECT  
………」

一度はためらいながらも、体の中に重りがあると錯覚するしてしまうほど、心に重荷を感じながらも勇夜はその名を口にした。

「………F. A. T. E」

耳にしたフェイトは、さらに目を見開かせて、そのまま固まった。「黙ってて……悪かった……でも……でも言ったらさ、フェイトがそん

な顔をすると思つて…言えなかった……ごめん」

今のフェイトには、心は既にズタズタに切り裂かれて、自分の言葉に耳を傾ける余力はないとは分かつていたが、それでも詫びの言葉を口にする勇夜。

『その人たちの言う通りよ…でも駄目だった…せつかくアリシアの記憶をあげたのに……似ているのは見た目だけ…』

それなのに、追い打ちは止まらない。

プレシアは無慈悲に、フェイトが負った傷口に大量の塩を投げ続ける。

「やめろ…」

『作り物の命は所詮作り物、失ったものの代わりにはならないわ』

「やめてよ…それ以上言わないで」

『アリシアはもつと優しく笑ってくれたわ、アリシアは時々我が儘も言っただけど、私の言うことをとてもよく聞いてくれた、アリシアは、いつでも私に優しくかった』

「エイミィ！ 直ぐにモニターを切つて下さい！」

「駄目！ あちら側にモニターの操作が乗っ取られてる、こつちからじゃ時間が…」

『フェイト……あなたは私の娘じゃない。ただの失敗作……だから、あなたはもういらぬわ。どこへなりと消えなさい！』

「やめて下さい!!!」

「黙れって言つてんだろ!!!」

呪詛を振りまく母（プレシア）に、勇夜となのはの叫びが木霊する。

もう良い。

もう良いだろ。

もう十分、手痛い真実をフェイトは知って味わった。

自分がクローンだつてことも。

それでもアリシアとは別人であつたことも。

その事実がプレシアを狂わせたことも。

今まで自分が、アリシアを蘇らせるための都合の良い道具としてしか見られていなかったことも。

何もかも。

だけど、そうだとしてみ言わなきゃ気が済まなかった。

「それでも——この子はあるんだが、生んだ子、だろうが!!」

どうしても、それだけは言いたかった。

血の繋がりだけが家族を作るものじゃない。

以前フェイトに言ったその持論は曲げるつもりはない。

けれど、確かにフェイトは、プレシアが生んだ女の子。

それもまた、たった一つの確かな真実であるのだから。

だが、無情にも。

『そうね……確かに私が生んだわ、でもね、良いことを教えてあげる………フェイト……私は……あなたを生み出したときからずっと』

それは、長い詠唱からくる呪いだった。

一人の女の子を奈落に落とすための……呪い、そしてその呪いを完遂するための最後の言葉が——

『大嫌いだったのよ』

母である女性の口から、紡がれてしまった……彼女の心を壊す、最悪の一撃。

呪詛の宣告を受けたフェイトはその場に崩れ落ち、掌に持っていたバルディッシュも床に落ち、彼女の今の心を表すように砕け散った。

「フェイトちゃん!」

「フェイト!」

勇夜となのは抱きかかえるが、その眼は虚ろで光が失われ、生氣

が感じられない。

体は生者たる熱を帯びているのに、その姿は抜け殻な様相。

二人の呼びかけにも、全く反応を示さない。

「ちよ、大変！ 見て下さい！ 屋敷内に魔力反応多数！」

「魔力反応……いずれもAクラス！」

「総数60、80……まだ増えます！」

「例の機械人形と思われまます！」

アルフからの情報の通り、プレシアは庭園に保管していたこの艦の戦力を上回る数のロボット兵を一気に起動させた。

「っ…プレシア・テスタロッサ…やはりあなたは…」

勇夜くんが言っていた仮説の通り、彼女の目的は……忘れられた都への。

『私たちは旅立つの……。永遠の都、アルハザードへ！ この力で立って、取り戻すのよ！』

そして自分が今持っている9個のジュエルシードを取り出し、菱形の宝石は彼女の周りを浮遊し回り始めた。

時の庭園から、物凄まじい揺れが起きる。

ジュエルシードの輝きが増せば増すほど、振動は比例して増していく。

「次元振です、中規模以上」

「振動係数拡大！ このままだと次元断層が！」

「ディストーションシールドで防御」

大地が揺れる普通の地震と違い、次元振は空間そのものが揺れを起こす災害。

そして断層は、地面と地面が割れて大きくずれる現象。

それが空間レベルで起きたら、最悪その空間は消滅する。

「震度、徐々に増加しています!!」

「この速度で震度が増加していくと、次元断層の発生予測値まで、あと30分足らずです!!」

「あの庭園の駆動炉も、ジュエルシードもロストログアです。それを暴走覚悟で発動させて、足りないエネルギーを補っているんです」



「…始めから、片道の予定ってことね」

艦内は警報とアナウンスでごったがえしている。

このまま放っておけば、地球も、地球が存在する世界も巻き添えを受けて消えてなくなる。

なのに………本当の人形のように、動かなくなってしまったフェイトから、目が離せなかった。

その時。

「ウルトラマン…ゼロ…」

プレシアが念話で勇夜に呼び掛けてきた。

「何のようだてめえ——」

脳内に呪い宣告をした者の声が響いた時、思わず……やるせなさで拳に力が入り、爪が掌にくい込んでしまっそうになる。

「(この子に……フェイトにこんなことをしておいて……今更——)」

何のようだ？ 何さまのつもりだ？

洗いざらい激情をプレシアにぶつけるつもりで、勇夜はモニターへと顔を見上げた。

そこに映っている彼女にガン飛ばしてやろうと。  
しかし。

■■■■…■■■■

激情で歪んだ自分の貌がその言葉を前に、呆然となった。  
声に出さずに、口だけを動かして彼女はそう告げた。

だけど、何を言おうとしたのか、俺は分かっちゃった。

そして……彼女の意図……フェイトを突き落とした意味も。

その一言を最後に、プレシアとアリシアを映した映像が、途切れた。

アラートとアナウンスが響く、アースラの中を勇夜たちは走る。  
その途中。

「クロノ！」

年相応より見た目が幼い執務官と鉢合わせになる。

「クロノ君どこへ？」

「プレシアを止める……」

いつもは小柄で童顔な容姿とは不釣り合いな落ち着きがある鉄頭だが、今のクロノの目には隠しても隠しきれない熱気がある。

その熱気の心当たりはある。も、プレシアと同じ痛みと悲しみを、小さい時に味あわされている。

同族嫌悪……とまではいかないが、彼女がこれからやろうとしていることに少なからず怒りがあり、断固阻止したいんだろう。

「同行する意志があるなら、止めはしないが、どうする？」

「わたし、行きます！」

「僕も一緒に！」

なのはとユーノが即座に名乗り出た。

「光、なのはたちと先に行ってくれ」

「勇夜は？」

本当なら、俺も直ぐに行くべきなのかもしれない。

この船にいる武装局員がほとんど戦闘不能な今、時の庭園に殴りこんで次元災害を阻止できるのはここにいる者たちだけだからだ。

庭園にいるガラクタどもに負けるほど、ここにいるやつらはやわじやないが、一人でも戦力は多い方がよい。

でも、どうしても今自分が抱えてるこの子から聞いておきたいことがある。

それが望めるかどうかは……怪しいけど。

さっきのあの『言葉』に嘘偽りが無いとしたら、今のあの人は……ちやんとフェイトのこと。

だから、どうしても賭けてみたかった……フェイトの心にある確かな意志の力に。

「フェイトを医務室に連れて行ったら直ぐに行くさ」

「分かりました、行って下さい」

「ああ、アルフ！」

転送ポートに向かう仲間たちを背に、俺はアルフを連れて、医務室に急いだ。

アースラから転移されたなのはたちは、時の庭園敷地内に立ち、虫食いのように穴だらけな床を進んで行く。

様々な色が混ざらずに渦巻いているマルチバースと次元世界の間に存在する『次元の狭間』には、宇宙と同じく空気が無い。

ウルトラマンのような空気が無くとも生きられる超人でも無い限り、生存はできないが、時の庭園の周りには見えないフィールドを張り。

その中を人工生成された空気と重力で満たしている。

さらにバリアジャケットが、宇宙服の代わりを果たす生命維持機能を持つので活動はできた。

もつとも重力なら、この庭園の直ぐ下にもあるのだが。

「ユーノは知っていると思うけど、この下の空間には気をつけて」

クロノが忠告をする。穴の下には底が見えない暗闇が広がっていた。

「ユーノ君……あの黒い渦って…」

「虚数空間、そこは魔力素が分解される空間で、一切魔法が使えなくなる、飛行魔法も同じ、もし落ちたら重力の奥底（きば）に捕まって二度と戻れなくなる、気をつけて、なのは、光さん！」

「了解」

いわば、強大で巨大なアリ地獄だと、眼下の渦をそう捉え、細心の注意を払いながら前に進むと、扉が見えてきた。

クロノが杖からの魔力弾でそれを破壊。中に入ると案の定、先が見えなくなるほどの夥しいロボット兵が盛大に待ち構えていた。

「ここからは二手に分かれよう、なのはとユーノは最上階の駆動炉を叩いてくれ」

「クロノ君は？」



さらに自らを高速回転して、遠心力を籠めた斬撃でロボット兵を切り刻む。

『Mirror lancer』

そして光の周囲に、魔力を集中させて作り上げた眩く光を反射するクリスタル状の突起、射撃魔法『ミラーランサー』が複数出現。

「貫け!!」

室内ということもあり、一斉に掃射された全弾が、ロボット兵たちに突き刺さった。

相手が魔導師換算でAクラスの力を有していても、たかがそれぐらいの脅威で引き下がる二人ではなく、むしろ圧倒する側に立った。

戦闘が始まった頃、アースラの医務室では丁度勇夜がフェイトをベットに寝かせていた。

魔力が消費されている以外は、体に異常は無い。

やはり問題は彼女の心だった。

心を物体にして表すなら、粉々に四散しているのが今のフェイトの心の状態。

アルフは瞳の光が消えたままの主を案じながらも、室内に置かれたモニターに目を向けた。

画面にはロボット兵相手に奮闘し、先へと進み続けるのはたちの姿があった。

「勇夜…」

「分かってる…」

主のことも心配ではあったが、彼女の性的的に、今の状況は自分たちが端を発して起きたことなのに、自分だけが何もせず静観するなんて真似はできない。

「行ってやってくれ、直ぐ追いかける」

「ありがとう…」

アルフは自身の意志をくみ取って背中を押してくれる彼に感謝し

つつ、ベッドに横たわるフェイトに近づき。

「みんなのことが心配だから……あたしも……あたしができることをしてくるね」

彼女の髪を、普段の彼女からは想像がつかない、母性さえ感じさせる優しさで、その眼を潤わせながら……ゆつくりフェイトの額を撫でた。

「これからは、フェイトの時間は全部、フェイトが使っているんだからね……あたし、待ってるから……何年かかっても、待ってるからね」

静かに囁き、勇夜を一瞥すると医務室を後にした。

そして残った勇夜は、フェイトの横に立ち。

「付き合ってくれるか？相棒」

時間的には現実では10秒も掛からないだろう。

だが、この一日の中では確実に一番長い10秒だった。

『はい、マスターがまだ希望があると信じているなら、わたしもその可能性に賭けて、全力でサポートします』

そして右手には彼女の愛機。

「お前も、まだ諦めてねえよな？ バルディッシュ」

『Yes. Sir』

バルディッシュ。いつもの素っ気ない軍人口調ながら、エコーのかかった電子的な声色には、どこか力強さを感じられた。

「よし、行くぞ」

『はい、マスター』

勇夜はリンクが嵌められた左手を、フェイトの額に翳す。

勇夜の左手が光を発し、そこから光の粒子が彼女に降り注いだ。

光のシャワー、《メデイカルパワー》を照射し、フェイトの肉体を回復させながら、彼はテレパシーで、彼女の意識の奥底に入っていた。

その場所は……《無》であった。

夜にしても、宇宙にしても、光は必ずどこかにある。

だがここには本当に何も無く、あるのはどこまでも広がる暗闇と……そこに俯く少女だけ……最果ての見えない底知れぬ闇にて、彼女の心は地に堕ちていた。

“私はずっと、あなたのことが——大嫌いだったのよ”

彼女の脳裏（いしき）には、何度も母から宣告された呪いが渦巻いている。

「わたし……生まれてきちゃ……いけなかったのかな……」

自分はずっと知らなかった、自分の真実に打ちひしがれて……誰にも聞こえない心中の闇の中で、フェイトは一人呟いた。

母さんは……わたしのことなんか……一度たりとも、“わたし”として見てはくれなかった。

母さんが会いたかったのは、笑ってくれたのは、愛していたのはアリシアで……わたしは、ただ見た目と遺伝子が瓜二つで、記憶を植えられただけの、“アリシア”になれなかった出来損ないの失敗作。

そんなフィルター越しでしか、母は自分を見ることしかしなかった。

なのに、自分は母の本音なんて知らずに、縋り付いてばかりだった。そんな自身の様は、母にとってはさぞ滑稽だったろう。

蔑んでいる“紛い者の人形”が、自分に愛情を求めていたのだから。

憎悪はない、あるのは無力感だけ。

これから、どうしたらいいの？

唯一つの抛り所が壊れた今、何の力も湧かない。

その母は、最後まで自分を知らうとしてくれなかった……というのに。

ふと、彼女はここで引つかかりを感じた。

見て……くれなかつた？

知らなかつた？

見ようと……しなかつた？

アリシアというフィルタを掛けて、目を逸らし続けた？

「何も分からないまま戦うのは、嫌なの！」

次に過ぎつたのは……あの女の子、「なのは」の言葉。

分からないまま……理解しない……まま、この言葉から、彼女は……察した。

そうだよ、わたしだつて……わたしだつて同じだ。

自分の頭に植え付けられた「アリシア」の記憶の中の母に縋るばかりで、今の母さんを一度たりとも知ろうとはしなかつた。

現在の母が、胸の奥にずっと抱えていた苦しみも悲しみも、憎悪も、何もかも……気づいてあげられなかつた。

自分は「フェイト」だと、人形という烙印を打ち消すくらいに、自分は自分なんだと主張しなかつた、言つてあげられなかつた。

ただ言われるまま「お使い」をすれば良いんだと、悪いのは自分なんだと、言い訳を重ねて考えることを捨て続けて、向き合おうことも、どうにかしようかと踏み出すことさえ、ずっと放棄し続けた。

戻らない「思い出」に縋つて、「今」から逃げていたのは……自分も同じじゃないか。

母さんを堕ちるところまで突き落として、見ない振りをして、止めを刺したのは……むしろ自分じゃないか。

母があんな風に狂ってしまったのは、自分だ。

一番近くにいた私が、先に見捨てて……壊してしまったんだ。

「最低だ……わたし……」

涙が、後悔の涙が……止めどなく流れてくる。

その時……瞼越しに外が明るくなってきた。

フェイト涙で濡れた顔を上げる。

光が、近付いてくる。

自分の許へと、光の明度はどんどん上昇していき、余りの眩さで反



射的に目を覆った。

光が治まって目を開けると、私は半球型の透明のケースにいた。何故か、体が勝手に動き、視線も右に左に行ったり来たりと周りを見渡している。

広い部屋だ。それこそ、ゼロたちウルトラマン並の巨人のサイズに合わせて作ったような。壁と床は黒味がかった赤と黒で覆われ、怪しげなモニターがいくつも飾られて、一方向にだけ大きな窓があり、緑と海に覆われた惑星が眼前にあった。

ここは、宇宙船の中なの？

「ナオ…エメラナ…」

視線の主が誰かの名を呼んだ。

ここまで来れば、自分でも分かる。

これは……誰かの記憶。

『やつと会えたな』

低く、重くて、無情で、怪しげなエコーが掛かって、地の底から響くような不気味な声が響いた。

フェイトと目を共有する主が、声のした方に目を向ける。

『ダークロプスを送り込んだ甲斐があったぜ』

階段の上にある玉座に座っている声の主は、部屋と同じ怪しい赤に染められたマントを着て、黒いボディに赤いラインに、鋭利で堅そうな爪を生やしていた。

『疼く……疼くぜこの傷が…』

サメのようなするどい顔つきに、片方には亀裂が付いたオレンジ色の発光する瞳、そして、胸には紫色に光ドーム状の発光体……あれはまさか、カラータイマー？　と言うことは……黒い巨人は一気に目の

前へと近づく。

『見ろ、これはお前が付けられた傷だ、ウルトラマンゼロ』

「ベリアルう……………」

やっぱり、これは勇夜…ウルトラマンゼロの記憶なんだ。

そしてこの巨人が、リンクから聞いた、あの悪に堕ちてしまったウルトラマン、カイザー…………ベリアル。

「俺と戦えー！」

ゼロは、人と昆虫並の体格差にも動じずベリアルに意気揚々と叫ぶが。

『ふっハアハアハアハアハアハアハア！何言ってやがる？そんな虫けらみてえにちっぽけになっちまって』

ベリアルはゼロへの禍々しい憎悪を隠しもせず、優位な状況にいるという優越感が混じった邪悪な笑みで返す。

『こいつが欲しいか？』

ベリアルの指に特殊なフィールドで浮かしていた物体は紛れもなく。ゼロがウルトラマンに戻る為のアイテム、《ウルトラゼロアイ》が握られていた。

『お前はここで見物している』

「何をする気だ!？」

『見ろ…』

ベリアルは、室内に掲示された数あるモニターの一つを指さした。

『今ので丁度100万體目だ、光の国をぶっ潰してやるぜ』

その一つには、ゼロにそっくりな姿をした一つ目の巨人が、輸送機らしき物体に収納され、緑色のエネルギーを纏って飛ばされる様子が映っていた。

『挨拶状はとつくに送ってやったぜ』

「だがあつちは親父がいる、仲間もいる、お前の軍隊に負けはしない！」

『はあ！… どんだけダークロプス軍団を作ったと思ってるんだ？…これから見ものだぜ』

ゼロも私も、立体モニターに映る光景に固まってしまった。

『いくらウルトラ戦士でも、この数は無理だな』

モニターの向こうでは、何千、何万ものダークロプスが輸送船に収納され、一斉にゼロの故郷へとワープしていったのである。

もう100万體も送られているのに……これ以上あんな数を相手にされたら、それが際限なく続くとしたら、それだけで戦意喪失してしまう。

ベリアルと言う通り、いくらウルトラマンでもこれだけの物量を相手に消耗戦を強いられたら、敗北は必至だった。

「やめろオオオオオオ！」

『お前にはもう何も無い……絶望の恐怖を味わうが良い』

同じだ……今の自分と同じだ……無力さを思い知らされながら、絶望に追い落とされる現実。

もうやめて……これ以上ゼロを……そんなに痛めつけて何が楽しいの？

どうしてそんなに笑っていられるの？

どうして？

「カイザーベリアル陛下」

そんな時、ベリアルの部下らしき無機的な異形の怪物が現れた。

『ああ？』

「あれを……」

部下が指したモニターには、鳥のような形状をした赤と白に彩られた船が現れ、光の国に送られようとするダークロプスの輸送船を破壊していた。

「ジャンバード！みんな無事だったのか!？」

「我々の侵略部隊の邪魔をしています」

『ふん……撃ち落とせ』

「逃げろ！逃げるんだ！バラージの盾はまだ見つかってないんだぞ！」

バラージの盾……確か、リンクは自分のことをそうとも言っていた。

それはともかく、今のゼロの気持ちも分かる。

明らかに多勢に無勢、圧倒的に不利だ。

感情を挟まずに考えれば、彼らの行為は無謀と言っても差し支えが無かった。

「兄貴！聞こえる!?ベリアルルの思い通りにはさせないよ！今助けるからね！」

「ゼロ！気をしつかり、必ず助けますから！」

ジャンバードからわたしと同じくらいの男の子の声と、少し年上の女の子の声が聞こえた。

何故か、その声の主の名前と顔が浮かんだ。

男の子はナオ。

惑星アヌーの開拓民族の子。

女の子はエメラナ。

惑星エスメラルダの王族の第二王女。

「ナオ…エメラナ…」

そして声の主はラン。

ナオの兄で、ベリアルルの侵略に立ち向かって大ケガをして、ゼロが救う為に一体化した青年。

感じる…助けて上げられない今の自分の無力さを、かみしめる一方で…命がけで助けに来てくれたことに嬉しいと感じるゼロの気持ちに。

「必ず助けるからね！」

「助けますから！」

そして、一筋のしずくが流れ落ちた。

その雫は、光を発してドームのガラスを破り、光から今はゼロのかけがえの無い中まであり、友達と彼が言った、鏡の騎士ミラーナイトが彼を救いだした。

「ミラーナイト」

「随分探しましたよ…」

「兄貴………」

「ゼロ………」

互いの名を、思いのたけをこめて叫ぶ。

「ナオ！エメラナ！」

そしてジャンバードは、ベリアルの右手を攻撃。  
ウルトラゼロアイは宙に飛ばされた。

「ミラーナイト！俺を投げてくれ！」

ゼロの希望に応え、ミラーナイトはゼロアイに向けて投げた。

その勢いのまま、ゼロアイを手に取り、目に翳し、眩い光となつて  
………本来の姿やるウルトラマンゼロに変身。

そしてゼロとその仲間。

ベリアルとその部下たちの死闘が始まる。

激戦の末、ミラーナイトとジャンバードが人型ロボットに変形した  
ジャンボットは幹部である部下を倒すが、ベリアルは想像以上の強さ  
でゼロを圧倒…

さらに内部に保管された膨大なエネルギーを含んだ鉱石の山から  
エネルギーを吸い取り。

怪獣の呼べるほどのおぞましい姿にパワーアップ。

そこにもう一人仲間の巨人。

グレンファイヤーと対ベリアル軍連合艦隊がかけつける。

だがベリアルはエスメラルダごと破壊しようと口から光線を放ち。

ゼロとミラーナイトは海でみせたのと同じバリアを張って、グレン  
とジャンのサポートも借りて防ごうとするが…その前の戦闘でベリ  
アルにエネルギーを吸い取られたゼロには余力が無かった。

ジュエルシードを封じようとした時よりもさらに早くカラータイ  
マーの点滅が早まっていく。

対ベリアル艦隊もベリアル軍に阻まれ、彼らを援護できない。

でもここでバリアを止めてしまったら、エスメラルダも…この世界  
も…

わたしは見ることにしかできない…たとえこれが過去のものであつ  
ても…胸が痛かった。

そして。

「俺たちは……絶対イ……負け……ない……」

ゼロの金色に輝く目から……光が失われた。

もう……終わりだ。

世界はあの悪魔の手に墮ちる。

あの世界だけじゃない、存在する全ての次元世界は奴に食いつぶされて、絶望の奈落の底に落とされる…… “過去” のものだと思われて打ちひしがれそうになった時。

「ゼロが『夢も希望』もあるって教えてくれたんだ！負けられねえんだよ！」

「闇に沈むばかりだった私を、ゼロは救ってくれた！今度こそ守り抜く」

「ゼロもナオも姫様も、微かな “希望（ひかり）” を頼りにここまで来た！絶対、ここを引く訳にはいかない！」

「負けないよ！絶対負けない！負けるもんかアアアアアア！」

それでもここにいる人たちは希望を捨てずに、諦めずに立ち向かう。

滅びが秒読みに入り、それを享受するしかなかった世界に……差し込んだ光明によって……ゼロも光を失っても尚、まるで死後も主を守り続けたある僧兵の如くバリアを張って、佇み続けている。

「兄貴、聞こえる？……僕にはあの時間こえたんだ……僕らみんなが、バラージの欠片なんだって……僕らみんなが助け合って、支え合って、バラージの盾は生まれるんだ」

助け合って……支え合って……ナオの言葉を反芻しているフェイトに、彼が “伝説の巨人” からのメッセージを受け取った、その時の

ビジョンが彼女の脳裏に浮かぶ。

「僕らみんなの心に光(ちから)はあるんだ、ねえ？ そうだよね…父さん!!!」

この場に臨む者たちの想いが、最高潮に達した瞬間………光が彼らの体から溢れた。

ナオ、ジャンボット、グレンファイヤー、ミラーナイト、立場の垣根を越えて…宇宙海賊、二次元人、エスメラルダ人、様々な人たちの想いが光になっていく。

なんて………眩くて………綺麗で………温かいんだろう。

眩さも温もりも直に、体にも………心にも感じる。

これが………人の心”が生んだ光？

悲しみとは違うものの涙が止まらない………光が、ずっと凍てついていたフェイト心に沁み込んで行く。

その光の群れは一つとなり、ゼロに降り注いだ。

どこかの空間で目を覚ますゼロ。

最初は何も無い漆黒の“無”だった。

死んだのか？ 俺…だが、ここが“あの世”だって実感が沸かず、反対に自分の魂はまだ体に宿っている実感だけはあった。

「ゼロ………」

現状と距離感が掴めない静寂さと闇が広がる空間に声が響き、ゼロは響いた方に目を向けると。

「ウルトラマン………なのか？」

そこには、少し厳つさのあるシルバー族のウルトラマンが立っている。

「“元”な………」

「え？」

どうして………だって………その姿は………途端、相手が『元』を付け加え

た理由を知ってしまった。

シルバー族特有の、銀色のボディに彩る赤色のライン、それは確かに……紛れもなく。

「ベリ……アル……？」

「ああ……正確には『奴』に残された……闇に墮ちる前の自分の欠片……残留思念つてとこだ……」

「それがどうして俺を………っ!!!」

「助けるまでもなかったさ、お前があんまりにしぶとく生きようとしてたんでな」

と、ベリアルは言いはしたが、何かしらの延命措置を、ある程度行つてはいたと見える。

「お前の前に姿を見せたのは少し用があつたからだ」

ベリアルはゼロに手を向けると、突然彼の頭に頭痛が響く。

「な……何を——っ！」

「少し手荒だが、この方が伝えやすい」

「荒っぽ過ぎるだろ……俺も人のこと言えねえけど」

ベリアルはテレパシーで自分の記憶を、直接ゼロに送り込んだのである。

ウルトラ戦士のゼロには頭痛程度に済んだが、人間なら、ショック死確実な荒技だった。

何万年の時間が刻まれた記憶と言う名のデータだ、人の脳のスベックでは、一欠片も積み込まれない。

ゼロの脳内には時間的には一瞬だが、ベリアルが闇に墮ちる過程を追体験させられていた。

かつて光の国を震撼させたエンペラ星人の恐怖と、幼馴染で……親友であったウルトラの父と、母への愛憎混じった感情に揺れ、プラズマスパークの光に手を出し、いもずる式に暗黒に染まつていった記憶。

ずっと、自分はいいつを根っから腐った大悪党と思っていた。

でも違う、この人は俺と同じだ……がむしやらに力ばかり追いかけたせいで……壊れちまった、自分のなれの果てだ、分身みたいなも



んだ。

「ご到着のようだな」

「あつ?」

何が? と疑問をよぎったが、彼らのの前に……一筋の光が向かってくる。

「受け取ってやれ……『バラージの盾』を」

「ベリアル……あんたはどうするんだ?」

「どうするって、お前たちに倒されるまでさ……」

「そ——それで良いのかよ!? あんたはそれで!」

知ってしまった……この人の人となりを知ってしまった今……このまま……『悪魔』と呼ばれたまま……彼を殺さなきゃならないなんて。

納得いかない……いけるわけない……同じ罪を犯したのに……自分だけ……ウルトラマンとして生きて……この人は憎まれ役になって死ぬ運命だなんて、納得できるわけない。

どうにかして救えないのか? 助けやれないのか?

「俺にはもう……あの光の向こうには戻れない……言っただろ? 今の俺は残留思念……過去の遺物だ」

ベリアルの言葉は、こつちからすれば屁理屈でしかなかった。

これじゃ……浮かばれねえじゃねえか……犯してしまった罪は消えず、ずっと背負って生きていかなきゃいけないことは分かっている。

でも死んだら……それまでじゃねえか。

償うこともできないじゃいか。

贖えぬまま、生前の悪名が、ずっと残り続けてしまうじゃないか。

「彼」に会うまでの自分が持っていた『悪名』が、死んでも尚ずっと生き続けてしまうじゃないか。

そんなの……不条理だ……こんな……理不尽だ。

「ありがとう……」

「え?」

「こんな俺のことで、悲しんでくれてな……」

彼の体は半透明になり、消えかかっていた。

「掴んでくれ……俺には掴めなかった」

ゼロに語りかける声もくぐもっていく。

「待ってくれ!!!」

「光を……」

「ベリアル!!!」

手を伸ばそうとした瞬間ベリアルは消え去った。

“ありがとう”

感謝の言葉から、彼から自分に送られるべきものじゃない。

本当なら、その言葉は、俺が……彼に言っただけならなかったのに……

結局俺は、伝えることが……できなかった。

ベリアルが漂っていた空間に、鳥の羽ばたく姿にも似た赤い光体が現れ、そこを起点に巨大な人型が形作られていく。

白銀の体躯、背中から天に向かって伸びる一対の突起、胸に一際目立つ発光体を持つ、銀色の巨人。

「ウルトラマン……ノア」

光の国の民が今の姿になる遙か昔から存在し、父たちとも共闘したという、あの“伝説の巨人”が姿を現した。

ウルトラマンノアは、光の雫たちを集めると。

“光は……絆だ”

ゼロの脳裏に、直接そう一言送りながら……光をゼロに差しのべた。

“修行の日々を思い出せ!”

“信じるよ、僕も信じる”

“仲間ってのは……良いもんだよな”

“別の宇宙から来たゼロが、命がけで戦っているのです”  
“共に戦おう”

“もう大丈夫、彼のお陰です”

“忘れるな…わたしもみんなも、いつでもお前のことを思っている”

そしてゼロの脳裏に彼が今まで巡り合った人たちの“言葉（おもい）”と、世界を守るために集まった人々の“思念”が流れていく。

“お前は、一人じゃない”

その光を受けて、ゼロに新たな力が湧き上がっていった。

『何!?!』

怪獣化したベリアルは、自ら発射した光線が、自分に跳ね返されたことに驚愕した。

直撃は避けられたが、爆煙と爆風が吹き荒れる中、ゼロたちがいる方を見上げる。

その光線を反射させた金色の光の中からは……鳥が翼を広げたような形状をし、背中から二つ突起が見受けられ、中央にはカラータイマーに酷似した光沢が見受けられる白銀の鎧——《ウルティメイトイージス》を身に付けたウルトラマンゼロ。

否……ウルトラマンを超越した戦士——《ウルティメイトゼロ》が……そこにいた。

『ふん！……どんな手品か知らねえが……なぶり殺しに変更だ!』

ベリアルの手を模した巨大要塞から、次々と現れるのは。

彼が作り上げた侵略ロボット——レギオノイド。

ゼロの姿と能力を模したマシン——ダークロプス。

ベリアル軍の戦艦——ブリガンデ。

それらによって編成された大群が一斉にゼロたちに襲いかかろうと迫る。

「まだあんだけいたのかよ」

「だがなゼロ、むしろ暴れがいがあるぜ」









確に命中。

その高熱は、ゼロの肉体を跡形も無く蒸発させてしまった……と思われたが。

「何だと?」

ベリアルが破壊したのは、ゼロの姿を映す、鏡面の「破片」だった。「鏡を作るのは得意でね」

破片の正体は、ミラーナイトが生成した鏡。自身または味方の姿を映し、周囲の風景に擬態した鏡（おとり）で敵を惑わす技《ミラーデコイ》だった。

「知らなかったかい?」

「引っかかりやがった!」

「攪乱成功!」

全ては、この三人による陽動作戦だった。

誰が言い出したわけでもなく、それぞれの能力を生かしたプレーが自然と生んだコンビネーションだった。

「ベリアル!!受けてみる!!!」

そして、本物は既にエネルギーの集束を済ませ、発射態勢をとっていた。

射線上から退避するグレンとジャン。

準備は全て、整った。

「これが——俺たちの——」

全体像が見えなくなるほどの光に包まれた超弓——ウルティメイ  
トイーンジスから——

「——希望（ひかり）だ!!!」





そうか、今分かった。

ゼロが……彼があんなに強いのは……ただ、力があっただけじゃない。

色んな人から助けられ、支えられて生まれた光（キズナ）があっただけなんだ。

だから、まったく別の次元世界に迷い込んでも、挫けずに戦ってこられたんだ。

わたしにも……あつたのかな？

ゼロが、みんなから授けられたような光が……今を生きる力になってくれる『思い出』が、遺伝子を分けた姉妹とはいえ他人のモノでしかなかった自分にも。

『あるさ』

「え？」

あたしは顔を上げた。最初の暗闇から戻ったと思うと、目の前から光が溢れ……それはゆっくりと巨大な人を形作った。

「ゼロ……」

ウルトラマンゼロ。

そして、自分とゼロの横に、映像が現れ、そこに映っていたのは――

姉妹も同然な狼のアルフ……何度もわがままを通して、悲しませたのに……それでも傍にいてくれた。

白い魔導師の子――なのは……敵だったのに……何度も戦って……傷つけて……酷いことをしたのに……友達になりたいっていつてくれた。

そして、目の前にいる巨人、勇夜……ウルトラマンゼロ……わたしがいけないことをしてるのに……本当しなきゃいけなかったことから逃げ続けていたのに、それでも……心配してくれて……想ってくれて……何度も何度も……守ってくれた。

彼らのことを思い返している内に、気づいた。

世界にはあんなにたくさんの方がいるのに……なんで……自分と母しかいないって思ったんだろ？

ゼロの言う通り、自分にもちゃんといたじゃないか……

『フェイト』と言う、一人の人間として……自分がどう生まれたのかを、知ってしまったって、それでも自分を『フェイト』だと、そう名前を呼んでくれた人たちが。

ゼロは察したのか、そつと頷き、両手で輪を形作ると、金色のゼロからも手を差し伸べると、そこから発された光が私へと流れていく。

私は手を伸ばすと、その光に包まれていった。

光でホワイトアウトした後……次に私が見たのは……管理局の次元航行船内の医務室の天井と。

「フェイト……」

ゼロが地球人の姿になった少年、諸星勇夜がそこにいた。

さつきまで消えていたフェイトの瞳の生気（ひかり）は、光沢を取り戻している。

「忘れもんだ」

彼は起き上がったフェイトの掌に何かを手渡す。

「バル……ディッシュ」

ボロボロになりながらも、それでも輝きを止めない、寡黙だけど大事な愛機。

彼は光点を光らせながら。

『Get set』

と、たった一言だけ発した。

その行為に思わず彼を抱きしめるフェイト。

この子も、バルディッシュもそうだ……ずっと一緒にいてくれた、大事な存在。

「リニスが精魂込めて作ってくれた、大事な相棒だろ？」

そしてバルデイツシュを通じて、フェイトは相棒の作り主を思い出  
す。

先生でもあり、家族でもあったリニスのことを。

リニスも大事な人の一人だ……ずっと傍にいられないことを分  
かってたのに、それでも……私のことを愛情一杯に育ててくれた。

「勇夜……」

夢の中でもずっと流れたままだったのに……また瞼に熱いものが込  
め上げて、瞼が赤くなるのも構わずに、フェイトは勇夜の見据えると、  
自然と……彼の腕の中へ身を預けて。

「ごめん……なさい……ごめん……なあさい……」

今まで堪えてきた分を一気に解き放つように、自身のしづくを様々  
な思いと一緒にあらいざらい流していった。

勇夜は黙って……言葉にする代わりに固く逞しい腕で、優しく彼女  
を包みながら、彼女の溢れる想いを受け止める。

みんな……ずっとずっと……わたしをわたしとして、助けようとして、  
呼び掛けて、向き合ってくれたのに……わたしはそれを拒み続けて……  
自分には何も無いと、一人だと思いつけて……知らなかったとはい  
え、地球を……世界を消してしまうこんな事態を引き起こしてしまっ  
た。

「ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……」

フェイトは愛機を握りしめ、光を力にする巨人に相応しい彼の暖か  
な体温を感じる腕の中で雫を流せるだけ、流し続けた。

ロストログアなんかには、頼らなくても良いんだ。

“光”はわたしにも、あるんだ。

ずっと直ぐ傍にいたんだ。

私も、一人じゃなかったんだ。

一人だと思つてただけで、“独り”じゃ無かつたんだ。

「ありがとう……もう、大丈夫だから……」

溜めこんだものを流しつくした後、フェイトは勇夜の腕から離れ  
る。

「フェイト……」

勇夜は真つ直ぐフェイトを見つめ、名前を呼ぶと。

「これから……あの庭園に行くところなんだけど……付き合ってくれるか？」

「勇夜……」

『みんなは今、あなたの母を止める為に戦い、私たちも地球とこの次元世界を守る為に庭園へと乗りこむつもりです、ですが、わたしたちにはそれしかできないのです、世界を守ることに、プレシアを止めることしか……』

「それしか……できない……」

「フェイト、お前は どうしたい？」

今まで血の繋がりと過去の記憶に甘んじて、それらに縋ったまま、背を向け会って向き合えなかったわたし。

そして母も、まだ昔に囚われたまま “独り” ……ならやるべきことは明白。

今度こそ、わたしがちゃんと母さんと向き合って、呼び掛けて、助けてあげなきゃいけないんだ。

このままベリアルのように、母さんを憎まれ役にさせて良いわけが無い。

ずっと過去の牢獄に囚われたままの母さんを……このまま見捨てて良いわけがない。

たとえ一度で果たせなかったとしても……頑なに自分呼び掛けてくれた勇夜たちの様に、何度でも挫けず立ち上がって、 “今の母” と向き合って、今度こそちゃんと、救ってあげなきゃいけないんだ。

「私も、一緒に行きます！」

涙を拭いながら、フェイトは静かながら、力強さが満ちた響きで、自分の決意を述べた。

「よし、なら決まりだ」

彼女の決意に彼は笑顔で応えた。

「バルディッシュ」

『Yes, sir.』

デバイスフォームになるバルディッシュは……あちこち損傷が酷

く、とても戦える状態から程遠かった。

なのはとの戦闘で、スターライトブレイカーを受けた際、バルディツシユはフェイトへのダメージを少しでも軽減させようと、身を盾にしていた。

さらに、フェイトがああ宣告の時に落した時の衝撃が傷口を抉る塩となつて、戦闘で身に受けた傷をさらに深くしていた。

勇夜の「ウルトラマン」の力で、体力も魔力も回復しているが、リカバリーできるか、かなり難しい。

そんな時、フェイトの手の上に重ねる形で、勇夜の手がバルディツシユに触れた。

「あ……」

「手伝うぜ」

でも、勇夜と一緒になら……きっと大丈夫。

彼の手の温もりで一度は緩んだ顔を引き締めながら、フェイトは勇夜と自分たちの魔力を、バルディツシユに注ぎ込む。

その魔力を糧に、フェイトの愛機は自己修復を進めていき……

『Recovery complete!』

力強い響きと閃光ともに、愛機も復活を遂げた。

フェイトは生成したバリアジャケットを着込み、マントを羽織る。

「私たちの全ては、まだ始まってもない」

「最初で最後の一騎打ち」の前に、あの子が投げ掛けた言葉が浮かぶ。

その通り、「わたしたちの全て」は、まだ始まってもないかつた………出発点にすら辿り着いていなかった。

ずっと遠回りをしてきたけど、色んな人たちのお陰で、やっと自分は、今スタートラインに立っている。

だから……「フェイト・テスタロッサ」として……ちゃんと自分の意志で、自分の翼（いし）で、スタートを切って飛び立つ為に………

「思い出に囚われた日々」を——終わらせよう。

「行くぞ、フェイト」

私は強く頷き、差しのべてきた勇夜の左手をしっかりと握った。

そして勇夜は、ウルトラマンとなる為のアイテム——ウルトラゼロ  
アイを顔の前に構え。

「掴まってるよ！ デュアア！」

額に装着、光が溢れだす。

あの温かい……人の想いの結晶たる光が……二人を包んだ。

駆動炉を指すのはとユーノと助太刀に来たアルフは、ロボット  
兵を倒しながら、最上階を指している。

今彼女たちはそこへと繋がるオペラハウスを彷彿とさせる螺旋階  
段にいる。

だが、目の前にゴールがあるにも拘らず、多数のロボット兵に道を  
阻まれ、立ち往生を余儀なくされていた。

「たく次から次へと！ 数が多すぎる！」

この三人にかかれば、一体程度どうってことはない。

とは言え、それも群れば厄介だ。

「多いだけなら良いんだけど……この！」

ユーノはバインドで動きを封じ、それをなのはの砲撃とアルフの鉄  
拳で破壊と、分担して応戦しているが、徐々に押され気味になっ  
ていく。

やがて。

「しまった！」

4体のロボット兵が、ユーノのバインドを破った。

その内の一体が、なのはに向けて突進。

「なのは！」

「はあ！」

その手に持った馬上槍がなのはを捉えようとした時……

“諦めるな！”





ズマスパークウェーブ」が放たれた。

光線と雷撃が残ったロボット兵を襲い、螺旋階段にいたものは全て閃光を放って爆発四散した。

それを見止めた後、ゼロとフェイトはなのはたちの許へ飛び寄る。

「フェイトちゃん…」

「……………」

二人は互いの視線の糸を繋げる。

お互い、言葉にしたいことが多くて言葉にできない。

静寂が続く、なのはとフェイトは暫く互いを見つめ合っていた。

しかし、それを破る闖入者がいた。

「あれは!？」

階段と壁を強引に破って、そいつは現れた。

「ゼ…ゼロさんが、もう一人?」

なのはとユーノは驚愕していた。

なぜなら、そいつは「ウルトラマンゼロ」とよく似た外見をしているのだから。

あのゼロにそっくりな「ロボット」にフェイトは覚えがあった。

ゼロにそっくりで、でも色合いは鈍い橙色に黒色に灰色に近い銀色と、全く違う姿と、赤く禍々しく光る単眼。

この目で見るのは初めてだけど、間違いない。以前リンクから話は聞いていて、さっきのゼロが見せてくれた彼の記憶の世界で直に見てもいる一つ目の人型マシン。

「ダークロプス…」

「フェイトちゃん…知ってるの?」

「ベリアルって言う悪党になっちまったウルトラマンが、ゼロへの逆恨みから作ったロボットさ」

フェイトが名前を呼び、アルフが補足する。

今はゼロと同じ人間サイズのダークロプスが手を顔面に翳すと、光が集まり。

「来るぞー！」

モノアイから、真紅のレーザー、《ダークロプスメイザー》が発射。全員何とか回避するが、ビームが当たった内壁は大きく抉られていた。

まもとに受ければ、ひとたまりも無い破壊力。

さらに、ダークロプスは頭に手を翳し、ゼロスラッガーに酷似する宇宙ブーメラン、ダークロプススラッガーを飛ばす。

「シエアー！」

ゼロも通常形態に戻したゼロスラッガーを投げ迎撃、刃はなのはたちには視認できないほどのスピードで打ち合い。

ほぼ同じタイミングで、スラッガーを頭部に戻すゼロとダークロプス。

「こいつは俺が食い止める、みんなは駆動炉に！」

「ゼロさん……」

「ゼロ……でも」

『次元振の発生まで時間がありません！ 早く行って下さい！』

普段は冷静なリンクも声を荒げる。

彼女の言う通り、これ以上、道草をくっている時間は無い。

一刻も早く時の庭園を動かし、母が次元振を生む為にわざと暴走させている駆動炉を止めなければ、地球は消え失せてしまう。

けれど、優先順位は分かっている……フェイトの表情が曇る。

相手をするダークロプスは、大ききこそそこのロボット兵より小型だが、少なくとも目の前の相手は、今までの比ではない強敵であることは明らかだったから。

「頼む、行ってくれ」

ゼロは表情こそ変えずとも、フェイトたちに微笑みを向ける。

“心配してくれるのは嬉しい、でも行ってくれと”——笑みにはそう書かれていた。

「フェイトちゃん、行こうー」

大丈夫……ゼロなら大丈夫。

ゼロも私たちなら、駆動炉を止めてくれると信じているのだ。

なら、自分も信じるまで。

「気をつけてね……ゼロ」

「ああ……」

私たちは、駆動炉に繋がるエレベーターへと向かって、飛んでいった。

ゼロを残し、なのはたちは駆動炉へと繋がるエレベーターへと飛んで行く。

それを阻止するとばかり、ダークロプスは彼女たちに照準を向けるか。

「させるかよー！」

ゼロが立ちはだかり、手から発射する稲妻状のビーム、シューティングゼロでダークロプスメイザーを相殺、さらに音速を超えたスピードで急接近し。

「デェアー！」

その勢いを付けた上段回し蹴りを叩きつける。

ダークロプスはとっさに両腕でガードするが、その衝撃に20Mほど吹っ飛ばされる。

「お前の相手は——」

ゼロは鼻をこすりながら写し身を見据え、裂帛の気迫を発すると同時に構え。

「——この俺だ！」

啖呵の雄叫びを切った。

## EP27 ― 閃く一太刀、重なる心

プレシアお手製のダークロプスをウルトラマンゼロに任せ、駆動炉に繋がるエレベーターに乗ったなのは、フェイト、ユーノ、アルフ一行。

「駆動炉にも見張りがいるはずだから、気をつけて」  
「うん」

目的の階に突き、ドアが開かれる。

円錐状の巨大な部屋は薄暗く、上部に赤い光点が見える柱のような円錐がそびえたつ空間が広がっていた。

そしてフェイトの忠告通り、駆動炉の前に、そいつは居た。

「大型だ……面倒なやつがいやがる」

今までのロボット兵よりも巨大かつ屈強で、肩にはロボット兵の顔よりも大型の砲台を二つ抱えていた。

当人曰くもうすぐ四十郎になる凄腕の浪人の表現を借りれば、さつきまで戦っていた相手は、数は多いがなのはたちから見れば一体一体は『猫』だった。

だが、さっきのダークロプスとこの眼前の敵は、一体ではあるが『虎』だ。

怪しく赤く光る単眼がなのはたちを捉えると、肩の砲台から光線が発射される。

飛んで回避する4人。

『Devine Shooter』

『Photon Lancer』

「シユート！」

「ファイア！」

なのはとフェイトは反撃の魔力弾をそれぞれ放出するが、ロボット兵に着弾する直前、半透明の障壁が機体を包み、弾道の進行を阻んだ。

「バリアが強い……」

フェイトが毒づく、しかも巨体の似合わず機動性に恵まれ、攻撃に対する反応速度も恐ろしく速かった。

庭園の心臓部を守護するだけあり、やはりかのマシンは『虎』と評しても誇張ではなかった。

螺旋階段はもう先程のオペラハウスのような様相では無くなって  
いた。

ものの数十秒でこの空間は、あちらこちらに罅、亀裂、傷口のよう  
な破壊の跡でボロボロとなっていた。

超音速で飛ぶ、光点と光点が何度も何度も交差、激突している。

片や、光の国のウルトラ戦士。

ウルトラマンゼロ。

片やゼロの容姿と能力を模した一つ目のマシン。

ダークロプス。

燦々たる光景と化した円錐の内では、それを齎した者同士が、互い  
の宇宙ブーメランを逆手二刀流で打ち合っていた。

20合ほど打ち合った後、一旦離れて距離をとり、出方を窺う態勢  
となる。

どっかで見た動きだな……とゼロは内心呟く。今までのダークロ  
プスの戦い振りに、ゼロは見覚えがあった。

ふと、自分の構えと相手の構えを見比べてみる。

鏡で写したかの如く、そっくりだった。

まさか……俺か？

『(何者かがプレシアにダークロプスの設計データと、マスターの戦闘  
データをプレシアに渡したのでしょうか)』

リンクが補足説明してくれた。

で、そのデータを元にプレシアはこの「もどきのもどき」を作った  
と。

データを提供した犯人は「カイザーベリアル」……では1000  
パーセント無い。

仮に「彼」の闇が生き延びて、この次元世界でくすぶっていたのな

ら、ナオやエメラナたちがいた世界の時と同じく、圧倒的な物量を持って、あちらこちらを破壊している筈だ。

こんな回りくどい真似は、どっちのベリアルでも絶対しない。まあいずれにしろ、これはある意味では名誉でもあるのだろうが。「ふっ……今度そいつに会ったら締めてやる」

と、不敵に笑い、やや物騒な表現を心の中で発言した時だった。ダークロプスは手に持つスラッグの切っ先同士を向き合わせる。短刃が紫の輝きを放ち、二つの光点は一つの三日月状の光と化していく。

「あれは？」

三日月の大剣……ゼロスラッグが変形した《ゼロツインソード》、奴が手にした剣は、それと酷似していた。

どうやら、一つだけオリジナルを凌駕している点がある、あのダークロプスにはあるようだ。

宇宙ブーメランの変形機構、そいつはプロトタイプも量産型も持ちあわせてはいなかったからだ。

驚愕は隠せないが、いつまでもその感情を味わっている暇も絶無、ダークロプスがツインソードを振り上げながら、ゼロに切りかかる。

両手のゼロスラッグで大剣の軌道をいなし、直撃を避け続けるゼロ。

相手が振るう武器は、ゼロにとっても使い慣れた武器、だからこそ対処はしようがあった。それを踏まえても、偽物とは言えツインソードは脅威ではあった。かの三日月の大剣はゼロが強敵だと判断した相手に振るわれる切り札、それをモデルにしているだけあり、まともな斬撃を身に受ければウルトラマンとてタダではすまない。

さらに、マシンだけありダークロプスの動きは速きこと風の如く、かつ正確無比でムラが見当たらない。

斬撃をいなす隙間を突いて、蹴りに肘打ちなどの打撃を叩きこまれるゼロ。

痛みに呻く彼をよそに、マシンは攻勢のペースを落とさず攻め続ける。これもまた、機械の体を持つ強み。

さらにダークロプスは後退しつつ、スラッガーを投げつける。

独立した軌道で襲い来る刃を、持ち前の研ぎ澄まされた反射神経と先読みでゼロスラッガーを振るい、弾き返すゼロ。

回転飛行する刃の動きも、自分のものと同じだった。

次はどう出てくる？ そう思案していると、ダークロプスはバラバラに動いていた二振りのスラッガーを一か所に纏め、ヘリのプロペラのように回転させて飛ばして来た。

あの、ゼロとウルトラセブン親子の宇宙ブーメランを使った連携技——《コンビネーション・ゼロ》、それを一人で再現したのである。

「ちっ！」

ゼロはゼロスラッガーを持ったまま腕をクロス。交差した腕に防御フィールド纏って敵の攻撃を受け止めるゼロの防御技——《クロスゼロバリアー》で、急接近する刃を防ごうとするが。

「おわっ！」

その衝撃を受けて、ゼロは既に傷だらけの螺旋階段へと飛ばされ、内壁に叩きつけられてしまった。

振動が螺旋階段を爆音とセットで轟いた。

駆動炉でのなのはたちも、一体のロボット兵相手に攻めあぐねていた。

砲台からは、ガトリングガン並の連射力で魔力弾が彼女たちを襲い。

『Arc Saber』

『Divine Shot』

攻撃を加えても防御され、駆動炉に仕掛けてもその巨体に似合わない速さで反応し、阻まれ、大技の魔法を打とうとしても先手を撃つてきて、足を止める時間を与えてもくれない。

アルフは苛立ちでささくれそうな心を静める。

落ちつくんだ、勇夜だつて稽古付けてくれた時に…… 〴〵こういうピ

ンチ状況だからこそ、冷静に対処しないとど坪に嵌って突破口が開けなくなる”って言ってたじゃないか。

現にわたしは、頭に血がのぼって感情任せになった隙を突かれて、勇夜に打ち負かされたんだから。

こんな時こそ平常心、平常心。

邪念を静めるべく、深呼吸をし、敵の能力を自分なりに分析してみる。

問題はやっぱり、あの半円錐状のバリア、どこから撃っても反応する機敏の良さ。

多方向から撃っても切り込んでも、防がれて、即座に攻撃し返してくる。

ん？まてよ……バリアを形成する出力装置は頭部にあることは分かった。

問題はそこから……思い出せ、ロボット兵に攻撃が防御された瞬間を……その動作パターンを。

できるかどうかは、分からない、結構タイミングはシビアだ。

でも時間が無い、賭けるしかない！

やれるかどうかじゃない、やるんだ！

「フェイト！なのは！」

「二アルフ（さん）!?!」

「何でも良いから、真正面からあいつの頭に向かって撃って！ できるだけ強いのを」

「何か策があるの？」

「それがあるから言っただ、早く！」

アルフの熱意に押され、二人は頷くと、ロボット兵から見て、正面の位置に立ち。

アルフは急上昇する。

そして二人から。

『Photon Lance』

『Divine Shot』

フォトンランサーとダイバインショット、二人の各々の魔法が発射



される。アルフに言われた通り、できるだけ威力を強めたのを頭部に集中攻撃する形で。

例の如く、バリアを貼るロボット兵を優れた動体視力と高めた集中力で見据えた彼女は、背部に魔力を集め、使い魔としての優れ急上昇。魔力弾が障壁に着弾し、両肩の砲口にエネルギーの輝きが見えた、微妙なその瞬間を、瞳が捉える。

そこだ！

「どおとおおお

りやあああああああああー！

背に集めた魔力を解放し、その推進力の恩恵で一時的にフェイトの飛行速度に匹敵するスピードを得たアルフは、僅かな“隙間”へ、バリアの死角へと急降下。

何の因果か、その様相はウルトラ兄弟三兄がバリアを持つ怪獣に対抗するために編み出した《流星キック》とよく似ていた。

膨大なオレンジ色の魔力を纏った右足で、オレンジ色の流星となったアルフは頭部の発生装置を破壊。

ロボット兵は、衝撃で頭部あらずパークと煙を上げた。

あのバリアは確かに堅牢で、ロボットの反応も素早い。

ただしある程度威力の高い攻撃には、防御力を高める為にバリアの範囲が狭まる短所があり、またバリアにある程度衝撃が加わらないと、反撃の行動が取れない点もあった。

アルフは、弱点を突いてきたフェイトたちにロボットが気を取られ、砲口の照準を合わせたそのタイミングという死角を突いたのだ。

「やった！」

「アルフ、凄い！」

「へへっ♪ どうよう！」

感嘆を上げる一同に、アルフはVサインで返した。

特にフェイトは、彼女の成長ぶりに驚嘆した。

相手の特性を元に打開策を見い出す判断力もそうだが、その空中飛び蹴りだけを見ても、飛行スピード、魔力解放などの技量が格段に上昇していることで、威力も比例してアップしていた。

アルフは以前、彼女自らの熱望で勇夜——ゼロから、厳しい特訓を受けていた。

使い魔な上、狼が素体による恵まれた身体能力が高さの恵みもあって、この短期集中的な修練も功を奏していたのだ。

「バリアは破れた！二人とも、今の内に」

「うん、行こうなのは！」

「え？………フェイト………ちゃん」

この時、耳に入ってきたフェイトの声の中身を上手く読みとれず、整理できなかつた。

今……フェイトちゃん、何て言ったの？

遅れてその意味を受け取る。

確かに聞こえた、フェイトの声の中に………なのは、自身の名前が。

「私たちなら、できるよ」

名前を読んだ本人は彼女に顔を向け、頷きつつ、今まで自分には見せなかつた温かさで微笑んだ。

名前を……呼んでくれた。

ちゃんと、なのは……呼んでくれた。

なのはも満面の笑みになる。

「はあ……うん！うん！うん！」

たったそれだけのことで、心に熱いものを感じられる。その言葉だけで、こんなにも嬉しい気持ちになる。

「行くよ！バルドイツシュ!!!」

『G l a v e F o r m, G E T S E T』

「こっちもだよ！レイジングハート!!!」

『A L L R I G H T, C a n o n m o d e』

二人の熱意に、彼女たちの相棒も強く応じた。

螺旋階段に叩きつけられたまま、動きを見せなくなったゼロ。

噴煙で見えない穴をダークロプスは腕をL字に構え、ダークロプスショットを発射、閃光と噴煙が舞い上がった。

ベリアルが作ったオリジナルは、プロトタイプも量産型もインテリジェントデバイスと同じく、AIが搭載され、会話も可能な思考能力が備わっていた。

だがこのロシア製は、火力、機動性、格闘能力などの性能は他のロボット兵よりも上だが、判断能力は他のタイプと同じく、淡泊。

命令の内容も、〃近づいてくる侵入者を撃退せよ〃と、単純だ。だから気づけなかった……ゼロがまだ健在なことに。

煙の中から、突如稲妻の光球が飛び出し、ダークロプス直ぐ様反応、回避したが……別方向から、壁を突き破って現れた。

かろうじて受け流す、ダークロプスの背部に、何かが命中する。

それは避けた筈の稲妻の光球——《ビームゼロスパイク》。

ゼロは魔法を学んだ経験を生かし、ビームゼロスパイクに誘導性能を付加し、本命をフェイントと思わせる二重フェイントでダメージを当てたのだ。

反撃させまいと、ゼロの容赦ない拳と蹴りと手刀が奴を襲う。

ゼロ譲りの防御の型で、防ぎ、躲すダークロプス。

しかしゼロは、その防御の隙間から正拳を相手の左側の鎖骨に命中させた。



そしてこいつの動きは、俺のデータが組み込まれてこそいるが…正直、それをプレシアに送った野郎にこう言っただけじゃなかった。

「——生憎とデータが、古過ぎ」んだよ！」

自分だつてこの11年、何もしてなかったわけじゃない。

常に己をウルトラマンとして、人としてできることを為す為に、研鑽を積んで自身を高めてきた。

だから分かる。こいつの動きは、ぐれた自分の性根を叩き直させた、あの修行が終わりたての頃の俺だつてことが…あの頃の俺を弱いとも言わないし、否定もしない。あの時の自分から、今に繋がっているの事実。

だからこそ言える…堂々と言ってやる。

「過去(きのう)に負けるほど、柔じやない」——てな！

ゼロは相手の右手を左手で掴んで引つ張り、同時に右手から連続で、重い拳をぶつけた。

父ウルトラセブンから受け継いだ喧嘩屋パンチの連打に、頭突き。

そして駄目押しにダークロプスの顎を蹴り上げた。

相手が生命体なら、最低でも脳震盪は確実、ウルトラ戦士の一撃に耐えられるなら、と付け加えたうえでだが。

戦況の逆転を前に、相手は淡白な思考なりに不味いと判断したのか後退し、ダークロプススラッガーを手に持ち、一度はゼロを圧倒したツインソードそっくりな大剣へと変わった。

「負けはしない！貴様などに…負けはしない」

少しシチュエーションが違うが、プロトタイプがその言葉を自分にぶつけた瞬間とダブった。

「やっとな気つてここか？」

ゼロもゼロスラッガーを手に持つと、それを合わせ変形させる。

銀色で、鏢無しの日本刀型形態——ブレイドスラッガー。

ただし、以前結界内の海鳴市街での戦闘で見せたのと違う点がある。

それは、*「鞘」*が存在し、刀身がそこに納められているということであった。

なのはとフェイトは大技を使うための準備に入る。

『Divine Buster』

『Thunder Smasher』

フェイトは前方の魔法陣から、なのははレイジングハートの砲口から、それぞれの砲撃魔法のエネルギーをデバイスに集中させる。

が、相手のロボット兵は、バリアを失いながらも二人の射程圏内に立ちほだかり、両肩の砲台にエネルギーを蓄積させていた。

ユーノとアルフは同時に同様の結論に達する——このままでは、先に撃たれるのはなのはたち——だと。

「二人をやらせは——」

アルフは周辺に彼女の髪と同じ色の魔力弾——フォトンランサーをいくつも作り。

「——しないよ！」

魔力の槍たちを一斉掃射し、ロボット兵を牽制、さらに自身の身を相手の周辺を飛びまわらせ相手を攪乱させる。

そして、アルフに気を取られている隙にユーノは——

「チェーンバインド！」

——鎖型のバインド、チェーンバインドと 輪状のリングバインドを同時行使して砲台を縛り上げる。

強引に振りほどこうとするロボットの抵抗に対し、絶対に屈しまいとバインドの捕縛力を一気に上げ。

「バインドにはこういう使い方もある！ ファング——クラッシュ！！」

ユーノは、渾身の力で魔力の鎖の捕縛力を一気に高め、同時に装甲と接着しているバインドの部位全てに、重い魔力波動を放出させプレスさせた。

鎖そのものの圧力（きば）と、魔力による外圧（きば）による二重の攻めで極端に圧迫された砲台は、とうとう耐久の限界を超えて亀裂

が全体に周りし潰された。

ユーノのバインドの派生技——《ファンングクラッシュ》で完全にその機能を失い、鉄くずなスクラップと化した砲台は、バラバラになってロボット本体からこぼれ落ちていく。

『チャージ完了』

砲撃を放つ為の準備が終えたことを知らせるデバイスたちの声。

大技を敢行する用意は、全て整われた。

後は、心おきなく、全力全開で解き放つのみ。

「サンダアアアアア——」

「デイバアアアアア——」

なのははレイジングハートのトリガーを引き。

フェイトはバルディッシュの切っ先を、前方の魔法陣に叩きこむ。

「——スマッシュアアアアア——!!!」

「——バスターアアアアア——!!!」

桜色と砲撃——デイバインバスター。!!!

金色の雷光——サンダースマッシュアア。

同時に放たれる魔力の奔流が、駆動炉へと一気に突き進んでいく。

満身創痍のロボット兵は身を呈して盾となるが、魔力流が直撃する

と、その役目すら果たせずに貫通され、駆動炉に押し迫る。

直撃寸前、魔力障壁がそれを阻んだ。駆動炉自体の防衛システムが

編んだ障壁。

だが、その程度の障害でへこたれる二人では無い。

さらに二人は魔力光の威力を上げ——

「せええええ——!!!」

——同時にかけ声も威力の増幅させるタイミングも重なり。

二つの極太の魔力流が最後の足掻きたる障壁を突き破って、駆動炉を呑みこんでいった。

それぞれの得物を持って対峙するゼロとダークロプス。

互いの距離は80メートル。

ダークロプスは弓状の大剣。

対してウルトラマンゼロは、鏢無しの日本刀であり、その刃は鞘に封じられた『ブレイドスラッガー』を腰に据え、  
「居合腰」に構えていた

先程までの超高速の「動」の戦いから、「静」の領域へとシフトされ、張りつめた空気が、その場を支配する。

どちらも頑として微動だにしない。

片方はロボットではあるが、ゼロは生命体、生身の生き物、そんな彼が山のように動かずに静止している。それだけでもかなりの神技。

ゼロはひたすらその時を待っている。

そのための準備も怠らずに……待機の姿勢を維持する。

どこまでも続きそう……静寂。

実際よりもゆつくりと時間が遅く流れているとさえ錯覚する。

永遠を思わせる刹那……の後……そして……その静謐な空気が……破られた。

先に動いたのはダークロプス。

やつはエネルギーを纏ったツインソードで敵を両断するゼロ最大の必殺技——《プラズマスパークスラッシュ》を連想させる構えで、刀身を発光させながら急接近。

対してゼロはまだ動かない。

着実に近づいてくるダークロプスを、逸らさずに視線を固めたまま。

居合の態勢のまま、ひたすら溜める。

何を溜めるか？

ある意味では、何もかも……この一撃に、全てを賭けて。

60 M。

まだ動かない。

30 M。

微動だにしない。

20 M。

その様相、動かざること山の如し。



そして10M……5間ほどの距離を切った瞬間。  
ゼロは動いた。

それまでパワーを溜めに溜めこんだトリコロールの剣士は、その全てを解放。

ダークロプスを上回る、風の如き速さで踏み込み。

鞘の内部の刃を走らせ、左下段から抜き放ち——一閃した。

互いの一撃が同時に炸裂し、切り抜けた写し鏡の二人。  
切り抜け、静止する。

ダークロプスが先に踏み込んでから、二人が切り抜けるまで、僅か数秒の出来事だった。

勝敗はどちらに上がったか？

まだはつきりしない。どちらも先程の静寂の続きをしているかのようにまた動かなく——なっただと思われた瞬間。冷たく重く響く金属音が、螺旋階段内に残響した。

ダークロプスの胴体が、両腕が、ツインソードが、同時に真つ二つに切り裂かれた。

やつの機械仕掛けの体軀を斬ったのは、鞘から抜かれたクリスタル状の片刃——《ブレイドスラッガー・クリスタルエッジ》

この刃は、高密度に圧縮したダイヤアラーターエネルギーを、日本刀の刀身状に押し固めた剣、半透明の実体の刃と、刃から放出されるエネルギーで敵を切り裂く武器。

さらにゼロたちウルトラマンの、体から放出した反重力エネルギーのコントロールによる飛行原理を応用。

彼は構えをとりながら、刀身にエネルギーを込め、反重力エネルギーも、空気を押さえつける要領溜めこみ、踏み込みからの抜刀と同時にそれらを一気に解放、その神速の一閃で“写し身”を両断したの

だ。

総合的な破壊力では、ツインソードによる《プラズマスパークスラッシュ》の方が上、しかし“切れ味”に関しては、《ブレイドスラッガー》の方が上手なのだ。

彼の心技体が為せる、必殺の居合を受けたダークロプスのボディは、切断面から端を発した青白い光に浸食され、単純なプログラムしか持たぬマシンは呻きだした。

実はこの時のブレイドスラッガーの刃には、物質を分子レベルで崩させる効力を秘めていた。この能力もまた、ノアの光により授かった彼の力の一つだ。

分子分解の光の浸食が進むに比例して、ダークロプスは海にでも溺れたかの如く、苦しみもがく。

対してゼロは剣術の残心を心がけながら、血を振り払う所作で刀を振り、ゆつくりと刃を鞘の内部へと納め、完全に納刀されたと報せる金属音がなつたと同時に、全身に光が廻ったダークロプスが、閃光を煌めかせて粒子状に四散した。

「ふう〜」

ゼロは溜めこんだ緊張感を発散し、心身をリラックスするため、息を吐き、ブレイドスラッガーを握っていた手を放す。スラッガーは元の二振りの短刀に戻り、ゼロの頭部に装着された。

程なくして、庭園内で突然大きな振動が起きる。緩んだ意識がまた張りつめ、一瞬次元振が強まったのかと思われたが、むしろ空間の揺れと、それを強めていたロストロギアの波動も弱まっていくのを感じた。

『駆動炉の制圧に成功したようです』

「そうだな…」

もう一度、一息つかせる。

これで一応は人為による次元災害の危機は防がれた。

しかし、まだ残っていることがある。

光達もフェイト達も今頃向かっているだろう、プレシアのところに。

こつちにもある、彼女に問わなきゃならないことが――

『急ぎましょう』

「ああーシユアー！」

ゼロは最下層に向かって降下、その場を後にした。

プレシアのいる最下層へと進む光とクロノ。

眼前には、無限にいるのかと考えたくなるほど、多数のロボット兵が待ち構えている。

「ライトーリングエッジモード！」

『御意』

光のシルバーライトは刃が魔力でできた小太刀、ビームセイバーモードから半円型のチャクラムに酷似する独特の形状をした実体剣になった。

剣とは言ったが、実質拳銃として使用するシルバーライト唯一の遠距離戦専用のモードだ。

『Bullet knife』

刀身が発光し、そこから、光でできた手裏剣状が弾丸――バレットナイフを連射、ロボット兵を牽制し、距離をとらせる。

「光！退避しろ！」

『Blaze Cannon』

光の時間稼ぎで、難なくチャージを完了させたクロノのS2Uから、彼の砲撃魔法ブレイズキャノンが目標を捉える。

火器なら、バズーカやグレネードランチャーに匹敵する魔力弾をクロノは苦も無く操りながら、相手を屠っていく。

『Short Saber Mode』

そこに追い打ちと光の御神流の剣技が轟く。

《徹》が斬る衝撃を機械兵たちに通し、金属の骨格は断裂、内部破壊される。

「神速！」

光の視界がモノクロになり、勇夜たちの強さで忘れがちだが、一般

人には脅威以上なロボット兵の機動が、人間未満になる。

そのモノクロな世界からの虎切で、一気に数十体を切り刻んだ。

「(影すら…見えなかった…)」

彼からは、光が踏み込んだ次の瞬間には、敵は残骸の山と化していた。

クロノは戦闘中であることを心がけながら、神速で消耗している光を援護しつつも、光の剣技と彼が会得している剣術の流派に改めて舌を巻く。特にあの神速…その御神流を極めれば誰でも使えるという。

消耗が激しいことに目に瞑れば、魔法の補助を借りずに、体が無意識にはっているリミッターを外すだけで、魔法以上のスピードを実現する。

そんな勇夜とその仲間たちの戦闘能力を直に見させられると、良い意味で実感させられる、魔法は力の一端でしかなく、それだけが全てでは無いのだと。

二人はロボット兵を蹴散らしながら着実に進軍していたが、なのはたちの場合と同じく、次から次へと新手が現れていく。

いくら若年ながらも執務官という高官についた魔道師の少年と、圧倒的に不利な物量差がある状況下の中で、王宮を最後まで守り抜いた鏡の騎士でも、この数の多さには手を焼かされた。

鏡面テレポートで、一気にプレシアがいる部屋まで向かいたいが、今はまだそうもいかない。

二人には陽動という役目もある。できるだけ派手に、かつ多くの敵機を狩り、一騎当千の奮戦をすることでこちらに戦力を集中させ、駆動炉制圧に向かったなのはたちの負担を抑える目的もあるのだから。

『クロノ君、光君』

とそこへ、エイミーからの通信。

『なのはちゃんたちが駆動炉の制圧が完了したよ、みんな特に怪我はないから安心して』

なのはらの目的が果たされたのなら、これで陽動の任は完了した。

「ミラー！スパーク！」

光はミラーアイズの前で手をクロスさせ、ミラーナイトに変身。

「クロノ！僕の手を握ってくださいー！」

「あ、ああ」

ミラーナイトの要望通り、クロノは彼の手を握ると。

「ミラームーバー！」

その叫び声と同時にミラーナイトの体が光り出し、壁へと消えていった。

駆動炉の封印を完了され。

なのはたちの愛機は、排気筒から、余熱を排出した。

床に降り立つなのはたち、どこかバツの悪い様子だった先程の空気とは打って変わって、二人とも笑顔だ。

「フェイトー！」

そこにアルフが、涙を浮かばせ、喜びで尻尾を大きく振らせながら、眩しい笑顔でフェイトに抱きついた。

「アルフ、心配掛けてごめんね」

フェイトは自然と笑顔で、燈色なアルフの髪を優しくなでてあげた。

「ユーノ君、さつきほんと凄かった……カツコよかったよ、いつあんな使い方を？」

「二応理論上は可能だったんだけど……ほぼぶっつけ本番だったね……」

女の子らしい物腰の中にどこか「男前」な面が見え隠れするなのほども驚嘆させられたユーノの勇ましい活躍は、かなりの大博打でもあった。

魔力で生成された物体から、魔力を放出させるということは、一歩

間違えば結合が崩壊してしまう恐れもある。

なのにバインドを制御し続けるどころか、捕縛力まで強められたのは、補助系統の魔法に秀でたスクライア一族の端くれたる彼の面目躍如と言えよう。

「そうなの？ 大丈夫？」

「さすがにちよつと体に響いたけど、もう平気、なのはと光さんと勇夜さんの『熱さ』が乗り移ったのかもね」

「にや？」

ユーノの発言に、なのははいまいち納得できず、首を傾げたくなつた。

自分と光は、そんなに『熱い』と言えるのだろうか？

勇夜——ウルトラマンゼロが熱血漢と表せるくらい熱いお人だと言われたら、それは同意できるのだけれど。

いや、今はそんな寄り道するみたいなこと考えてる場合じゃない。

駆動炉は止めたけど、まだ終わってはいないのだ……フェイトは。

「フェイトちゃん」

まだこの女の子には、やり残していることがある。

「行くんだよね？お母さんのところに」

フェイトは頷いた。

「わたしは……見ることぐらいしか、できないけど……」

自分はまだ小さいが、これはフェイトという少女自身が解決しなければいけないことであるのは理解できる。

だからせめて……なのははフェイトの手を握り。

「でも……一緒に……行つてあげるから」

「……………ありがとう」

フェイトも笑顔で返した。

「急ごうよ、勇夜たちもあの人のところに向かつてるはずだからさ」  
「うん」

なのはたちもその足で、庭園の最下層の下へと急いだ。

洞窟のような黒い岩肌の瓦礫の地面と壁面と、様々な暗い色々が混在する空がある庭園内のとある空間。

その空間の中央には、ジュエルシード9個が円を描きながら漂っているアリシアを乗せたカプセルと、それに寄りそるプレシアがいた。

ここは次元振の震源地の一つだけあり、揺れは一際強い。

もしプレシアがもう一押しすれば、この「次元の狭間」は次元断層によって、亀裂どころか巨大な風穴を生み出していたことだろう。

しかし、庭園を揺らしていた揺れの上昇はそこで止まり、それどころか急激にその勢いを弱めたのである。

原因は、もう一つの震源地の揺れが停止されたかだと、プレシアは把握していた。

状況は、ほぼ彼女が編んだ「流れ」の通りに進んでいる。

「(プレシア・テスタロツサ)」

大気を伝う肉声ではない自分を呼ぶ声がして、反射的に振り向くプレシア。

だが周囲にはその声の持ち主に相当する影も形もない。

なぜなら、呼び掛けた本人はこことは違う場所から呼び掛けていたのだから。

「(終わりですよ、次元振は私が抑えています、駆動炉も既に封印済み、あなたの許には執務官が向かっています)」

念話の声の主はリンデイ、彼女も自ら時の庭園に乗りこんでいたのだ。

リンデイはアースラを稼働させている魔導炉で生成される魔力のバックアップを受け、時の庭園を球体で覆う形で、特殊広域結界——《ディストーションシールド》を張り巡らせていた。

この大規模魔法は、空間の隙間にわざと特殊な歪みを生じさせることで、敵からの攻撃は勿論、次元振動といった空間そのものに干渉する力、現象に対しても軽減、無効化させるフィールドである。

「(忘却の都、《アルハザード》：かの地に眠る秘術、そんなものは

……もうとつくの昔に失われているはずよ」

虚しさと物悲しさを入り混じった響きが籠もらせて、リンディはプレシアを諭そうとしている——そんな「幻想」に縋っていても、報われはしないのだと。

「違うわ」

対して淡々として、けれどはつきりとしたプレシアの返し。

「アルハザードは今もある……失われた道も、次元の狭間に存在する」  
狂気の底に墜ちた「悪女」の仮面を付けたまま、真つ向から反論する。

自分が「最後の希望」としていた地は、次元の狭間のどこかで、今も確かに在るのだと。

「(仮にその道があつたとして……あなたはそこに行つて、何をするの?)」

演技の技法の一つに、メソッド演技というものがある。

これは言つてしまえば、自らの過去の記憶、経験を掘り上げ追体験することで、演じる役が、ある瞬間の場面で込みあげたであろう「心情」をリアルに表現する演技法。

演劇理論に関する知識は一般人並みで、そんな技法など知る由も無いプレシアは今、されどこの時それに近いことを行つていた。

「取り返すわ……わたしたちの過去と未来を取り戻すの」

失われたものを取り戻す戦いにのめり込んでいった過程で、心を狂わせていった自分の記憶を反芻し、自身に「戻ってきた理性」を維持させながらも、かつて味わつた「絶望」の味を思い返し、その瞬間に形作られたのとはほ同じ、美貌を酷く歪ませ狂いの絶頂へと至つた容貌を再現し。

「こんなはずじゃなかった——世界の全てを——」

自らの内にでき、自らを蝕んでいた「呪い」を言葉に換え、口から力の限り号叫を迸らせた。

その叫びと同じ時……宙を漂うジュエルシードの一個が、突然光を発し、あの『紋章』が現れるとともに、光から人が二人飛びだした。

二次元人のワープ能力でここまで転移した、ミラーナイトとクロノ



だった。

同時に瓦礫の一つから、光線の粒子が飛びだし、そこから『ワイドゼロショット』で道を開けたウルトラマンゼロも現れる。

「世界はいつも、こんなはずじゃないことばかりだ！いつの時代でも！誰だって！」

「誰もがみんな…描いてた未来と現実の狭間で、もがきながら今を生きてるんです、あなただけが特別ではないのですよ！」

二人はそれぞれの想いの丈を、プレシアにぶつけた。

「(プレシア……)」

そしてゼロも、どうしても直に聞きたかった事柄を、プレシアに投げつける。

「(あんたは本気なのか?)」

「(何のことかしら?)」

フェイトへの宣告の直後、プレシアがとつた行為……彼に送った一言”について。

「(とぼけんな!)」

あくまで白を切るプレシアに対し、語気が強まった。

以前初めて対面した時も、彼はこうして啖呵を切った。

ただし、以前と異なるのは、心の内に「憎しみ」を宿していないこと。「彼女」の日記を読み、そのプレシアからの伝言を受けた今となつては……そんなものがこみ上げてくるわけがなかった。

「(俺にわざわざ遺言じみたことぬかしやがって!)」

あの時、この「母親」は唇の動きだけでゼロにこう伝えたのだ。

「フェイトを、お願い」——と。

さっきの呪いの言葉には、嘘偽りはない。

後に「フェイト」って女の子になるF計画の落とし子が、アリシアと似て非なる存在だと思いついた時に、心には「憎しみ」と呼ぶ「癌細胞」がこびり付き、ずっとプレシアを蝕み続けたのは事実。

でも……いつどこかは分ならずとも、あの「言葉」一つで、今の

プレシアそのこびり付いていた腫瘍から解放されているのは明らか。

なのに、今でも「悪女」の仮面を被っているってことは――

「(こんなやり方で、あの子に報いれるとでも思ってたのか! たった一回の自己犠牲で消える程、「罪」ってのは柔じゃねんだよ!)」

我が子を痛めつけ、その純粹さを弄んできた彼女の罪は重くて、一人では背負いきれなくて……その重しを下ろすには、気の遠くなる時間が掛かる。

だからって、これがせめてもの償いだとでも?

ふざけるのも大概にしろ!

こんなのがあの親子の結末だなんて……余りに惨過ぎる……悲し過ぎる。

「いい加減その煩わしい「仮面」を外せ!」

激情の強さの余り、思わず肉声で迸る想いをプレシアに投げつけていた。

それでも尚……プレシアは「悪女の仮面」を被ったまま、無言で『答える気は無い』と、突き返してくる。

「少し前のあの子といい、この人といい……なんでそんな廻りくどくて、極端な方を選んじまうんだよ」

人間体であったなら、どうにもできないもどかしさで額の皺を寄せ、強く歯ぎしりしてしまうほど、悔しかった。

やっぱり、せいぜい自分ができることと言えば、これぐらいか。

根負けするようで歯がゆくもあるけど、絶望から這い上がってきたフェイトに、託そう。

ゼロの視線には、この場に辿り着いた少女たちの姿を捉えていた。

庭園の回廊の中、先導する形でなのはとアルフとユーノと共に飛ぶフェイト。

できれば転移魔法で一気に母のいる最下層まで行きたい気に駆ら

れるが、そうはいかない。庭園内部全てにはそれを阻害する術式が組まれ、魔法による「瞬間移動」を行おうとすれば自分が行きたい地点とはまったく違うに飛ばされてしまう。

面倒でも、地道に目的地へ進むしかない。内部の構造は大体頭に入っているから、迷子の心配はないけど、余り変わり映えのしない景觀は、同じ道をぐるぐる回っていると錯覚させた。

やがて回廊の果てを抜けて、鈍い暗色の荒々しい大地がいくつも浮上し、周囲のガラス越しに次元の狭間の流動する紋様に囲まれた最下層に辿り着いた。

そこからさらに進むと、「アリシア」を閉じ込めた円筒状の生体ポッドの傍らで佇むプレシアと、彼女に対峙する漆黒の執務官に鏡の騎士。

そして――

「ゼロ……」

――ウルトラマンゼロが先に来ていた。

ほっとする……あの禍々しい彼の生き写しなロボットに勝ち抜き、無事であったことに。

自分の視線に気づいたのか、ゼロも金色に光る瞳をこちらに向けて、ゆつくりと優しく頷いた。

表情はいかついままなのに、何だか彼の頷きに不思議と安心を覚え。

「伝えてやれ、自分の想いを」

瞳からは、そんなことを言っているような気がした。

「(フェイトちゃん……)」

背後からも、ここまで一緒に来てくれたなのはの瞳が、そっと背中を押し。

彼らの温かみを噛みしめながら、フェイトは我が母を見据え……少しずつ歩み寄ろうとした直後、プレシアは突然手を口に添えて咳込んだ。

口からは赤い液が吐き出され、手にはその血がべつとりとこびり付いた。

「母さん！」

母の急変に、フェイトは駆け出そうとするも。

「何を……しに来たの？」

プレシアの強い怨嗟と拒絶の意志の籠もった目を突き立てられて、途中で立ち止まってしまふ。

居竦んだ体は震え、せつかく前進したというのに、右足が意図せず一歩後退し、恐怖によるストレスで、フェイトの息が乱れて瞼が閉ざされた。

「消えなさい……もう用はないわ、『アリシア』のなりぞこ無いのあなたに」

冷血、酷薄と表するに相応しい母の無慈悲な眼差しを前に、フェイトの脳は反射的に過去（むかし）の母の姿を映し出した。

それは、少女が自らの心を維持する為に無意識に身に付けた防衛の術……だがフェイトは、瞼と一緒に瞳の上に覆われたイメージを振り払い、一度下がった右足を踏み出し、真っ直ぐ相手を見据える。

ここで踏みとどまってはいけない……諦めてはいけない。

「あなたに、言いたいことがあつてきました」

ずっと今まで、都合よく『彼女』の記憶の中の母に縋ってばかりいた。

今度は、ちゃんと『自分』の目で、現在（いま）の母と向き合わなきゃいけない。

「私は……確かに私は、アリシアと同じ姿と、遺伝子をしているだけの別人です……でも、あなたに生んでもらったのも確かです……なのに、私は『自分』を母さんに伝えてこなかった……母さんがずっと抱えてきたものを、知ろうとしなかった……今まで気づいてあげられなくて……ごめんなさい」

独りだと思ってきた、独りなんだと思ひ込んできた。

自分には、『母』以外には何もないと、決めつけてきた。

だけどそれは違うんだって、今ここにいる人たちに教えてもらつた。

だからこそ、孤独に浸っていた自分が腹ただしい。

本当に「独り」だったのは……母の方だった。失われた大切な人との「時間」を取り戻したくて、ひたすらもがき続けて、誰からの手も拒んで……一人ぼっちになってしまったのが今の母だ。

「血が繋がってるだけじゃ家族って言わねえんだよ！」

あの時……勇夜が言っていたように、自分は「血の繋がりに甘えて」。

「何も分からないまま戦うのは嫌なの！」

母に認められたいと願っていたながら……なのはの様に、相手を分かつろうとする努力をしてこなかった。

ほんの少しでも勇気を振り絞って、踏み出せなかった結果が……母のあの姿だ。

こんな悲しい姿のまま、姉も同然なアリシアに会わせて良い筈が無い。

きつと、記憶の中で母に見せていた……「姉さん」のあの眩しい笑顔は、永遠に失われてしまう。

「だから何？ 今さらあなたを「娘」とでも思えば良いの」「どう思ってもらっても、構いません」

嘲笑って切り捨てたプレシアにめげず、フェイトは言葉を紡いだ。「あなたをここまで落としてしまったのは、私でもあります……」

「ただ、生み出してもらってから今までずっと、今も、母さんには笑ってほしい、幸せになってほしい……そう願っています」

フェイトはそっと手を母に差し伸べる。

昔を取り戻すのではない、新たな今を築く為に。

「私の、フェイト・テストアロツサの——本当の気持ちです」

一瞬、その姿を見止めたプレシアは、怜悧な顔つきから、どこか安心した表情を浮かべた……が。

「……………くだらないわ」

黒い嘲笑でフェイトの手と想いを振り払い、杖を地面に突いた。

魔法陣が敷かれ、ジュエルシードの輝きが一気に激しくなる。同時に、一度はなりを潜めていた揺れがまた強くなった。地割れと崩壊を起こす庭園。

デイスト―ションフィールドを張って振動を抑えていたリンデイも、地割れから逃れるために、魔法の持続をストップしてしまう。

『だめです艦長！ 庭園が崩れます!! クロノ君達も脱出して！ 崩壊まで、もう時間が無いよ!!』

切羽詰まった声で、状況を報告するエイミー。

「了解した、フェイト・テスタロッサ……フェイト!!」

クロノがフェイトを呼び掛けるが、母から目が離せない彼女には届いていない。

「わたしは行くわ……フェイト……」

「母さん……」

プレシアとアリシアが眠るポッドの足元が、地響きを立てて崩れゆく。

「母さん！アリシア！」

フェイトはひび割れた地面を走り抜け、落ちていく自分の肉親たちに駆け寄ろうとするが、魔導師の翼を剥がす空間の前にはどうにもならなかった。

今すぐ、あそこへと飛びたい。

このまま、笑顔を失った母を奈落に落としたくない。

けれど、眼下の黒く淀む空間が、彼女の気持ちと裏腹に逡巡させた。生き物としての生存本能か、足がそれ以上進まない。

そんな、立ち止まる彼女を横目に虚数空間に飛び降りる光を帯びたヒトガタが、一つ。

「ゼ……ロ」

ウルトラマンゼロ。

光の正体が、彼によるものと察した時。

「駄目！ 待つてゼ ロオオ!! ゼ

ロオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

フェイトの頭の中は真っ白に変貌し、今まで理性で必死に閉じ込めてたものが濁流となつて、溢れだし。

理性がふつ切れそうになり、喉が渇きで干からび、声が枯れてしまいうような絶叫でゼロとプレシアがいる空間に身を落としそうになるフェイトを、なのはとアルフが必死で引きとめた。

「フェイトオ!!」

「フェイトちゃん！駄目ええええええええ！」

「離してええ！ 離あしてよ!!!なのは！アルフ!!ゼロが！ゼロが!!ゼロ  
ロ

がああああああああああああああああああああー———  
!!!!」

かつて彼が自分を庇って倒れた経験が、油となつてフェイトの激情の炎に降り注ぎ、細身な彼女からは考えられないパワーで二人の制止を振り解きそうになる。

「ゼロさんは魔法使いじゃない！ウルトラマンなんだよ！」

そのなのはの一言ではつとした。燃えたぎっていた感情の炎が、一気に鎮火されていく。

「大丈夫です」

フェイトの髪に、温もりが置かれる。

ゼロの仲間、ミラーナイトの手。

「あの『闇』は魔力こそ霧散させますが、彼の力にはさして脅威にはなりません、それに何の確証もなく飛びこむ程、今のゼロは無鉄砲ではありません」

そうだ…:ゼロは、魔法と違う力を持ったウルトラ戦士。

魔法が使えなくなることを除けば、虚数空間の重力は大したものじゃない。

『今のゼロ』には相棒（リンク）もいるから、虚数空間内でも飛行も込みで活動できると把握もした上で飛びこんだと見ていい。  
「信じて上げて…」

なのはたちの言う通り、今は、待つてあげよう。

ゼロが、母さんと姉さんを連れて帰つてくるつて……フェイトはそう自分に言い聞かし、律した。

「脱出するーエイミイ、ルートをー」

『了解』

一同の足下に転移魔法陣が敷かれ、彼女らの姿は庭園から消える。ギリギリのタイミングで、庭園は閃光を眩かせながら、崩壊していった。

これでいいの……家族を失い、過去を取り戻そうとする余り、狂いに狂つて、子を道具として弄んでしまった次元犯罪者として、この上ない相応しい最後だから。

魔法使いの翼を、容赦無く奪う漆黒の空間へと落ちながら、プレシアは一人独白した。

あの時、最後にフェイトに掛けてしまった言葉。

以前は混じり気の無い本音であった。

アリシアとして生まれてくれなかったあの子に……あの子をアリシアとして生んでくれなかった運命に……そしてアリシアを奪った運命に。

気づけば、自分はこの世の全てに憎悪を抱き……フェイトことを、ただ自分の言葉に従順なだけの人形だと思つていた。

そんな自分は、とんでもなく醜くて酷い存在だ。

一日たりとも、アリシアを、アリシアとの思い出も、忘れたことは無い、忘れる筈が無い……筈だったのに、肝心のあの子と交わした大事な約束をわたしは忘れてしまつていた。

そう、いつだつてわたしは、気づくのが……遅すぎる。

アリシアとのあの“約束”も……あの時“彼”に殺されそうになつて、初めて思い出した。

彼はフェイトに強いられた理不尽への怒りで越えそうになつた一



線を、寸前で踏み止まれたけど……わたしは踏み外したまま、戻ろうともせず、聞く耳も持たず、ここまで来てしまった。

そして、本当は嬉しかった。

自分の言葉（のろい）で、どん底に落とされながらも、それでも、立ちあがって、這い上がって、自分を見捨てずに……自分を母だと言ってくれた。

でも、もう駄目なの……もう母さんは、フェイトの足枷にしかかなれないから、フェイトを不幸にしかできない身だから。

最後まで……微笑んであげなくて……ごめんなさい。

目の前に光が迫ってくる。

天からのお出迎えかしらね。

現実主義の科学者にしては、らしくない表現だった。

不思議と怖くは、無い。

でも……最後にもう一度『彼』に伝えたい言葉がある。

異世界からの来訪者。

あの子の光となってくれた……光の巨人——ウルトラマンゼロ

……フェイトを……お願い。

光がプレシアを捉える直前、彼女の意識は虚無の彼方へと落ちていった。

転移魔法陣が視界をホワイトアウトする程の光をほんの瞬き迸らせたかと思うと、足が踏みしめている場が、時の庭園からアースラの転送ポートに移っていた。

光は周りを見渡し、ゼロとプレシアたちを除いた全員がちゃんといることを確認、エイミイの技量を疑ってはいないが、念の為だ。

幸い取りこぼしはない、なのは及びみんなポートにいる。

本来はゼロが帰ってくるまで取っておくべきだろうが、一度はほつと息を吐こうとしたところへ——艦内のけたたましいサイレンが響く。

同時に、艦の外からエネルギーの出力が増していく感覚が過ぎつた。

「(何事です、ライト)」

『(次元要塞内に遺されたジュエルシードの活動が活発化している模様)』

『大変です！ 虚数空間内の次元振動反応が増大』

シルバーライトの分析の直後、エイミィのアナウンスが異常事態を告げる。

ここにいた一同は、真つ先にブリッジに向かって走り出した。

特にフェイトは、まだゼロの安否が完全に定かじやないのもあって、一番顔に焦燥を浮かばせていた。

一人ポートに残される形になる光。

彼は服の内からミラージュアイズを取り出した。

“寄り代”がいなくなった次は“次元”に八つ当たり……あの寶石は最後まで災いを振りまく様だ。

だが……そんな蛮行は、絶対にさせはしない。

「ミラー——スパーク」

ブリッジに着いたフェイトたち。

立体モニターには、稲妻と振動を蠢かしている虚数空間が映っている。

「何があった？ エイミィ」

「ジュエルシードが要塞内に残った動力エネルギーを吸収したせいで次元振が強まって

いるの、このままじゃ……虚数空間内で次元断層が」

エイミィの口から発せられた最悪の事態。

それを聞いたフェイトは、両手を抱き合わせ、握りしめた。

母たちを連れている筈のゼロは、まだあの闇の近くにいます。

帰ってくるかと信じてはいるけど、どうしても不安は消えてくれな

せめてもと……愛する家族とウルトラマンの帰還を祈っていると。

「(待たせたな)」

あの声が、あの人の声が、頭の中で聞こえてきた。

目の先をモニターに移し、注意深く見つめると……暗黒色な虚数空間の奥から、星に似た一点の光。段々とそれは大きくなつて——こつちに近づいてきて、宙で静止したかと思うと光は球の形から人の形になり。

「はあ……」

フェイトの顔に笑みが浮かぶ。

紛れも無くウルトラマンゼロが、その勇姿を見せた。

「(“二人”とも無事だ)」

『(今は私の内部で眠っています)』

家族も無事だと分かり、心から安心したいところだけど、まだジュエルシードの暴走という危険は残っている。

その暴走の切っ掛けを生んだ以上、どうにかして止めたい気持ちに駆られるが……状況はそれを許してくれない。

虚数空間が一種のフィールド系の障壁の役目を果たして、あらゆる魔法から暴れるロストロギアを守ってしまうのだ。

だけど——希望も潰えてはいなかった。

ゼロの横に、もう一つの光球が飛んでくる。

「光兄」

光の正体は、鏡の騎士——ミラーナイトだった。

二人の巨人、彼らこそ、次元の危機を打ち砕く“希望”。

「(ゼロ君、リヒト君、ジュエルシードの破壊、お願いします)」

念話でリンデイが、怒りを撒き散らしているみたいに暴れ狂う宝石どもの破壊を依頼してきた。

虚数空間は魔導師による魔法だけじゃない、魔導兵器すら無効化し



ジュエルシードが完全破壊されたのを目に留めたフェイトとなのはは、ゼロたちを迎えるべくブリッジを飛び出し、艦内の廊下を走り抜ける。

「ゼロっ……勇夜！」

「光兄！」

フェイトたちの向かいから、人間態に戻った光と、彼と同じく人間の姿でプレシアを抱える勇夜が歩いてきた。

「クロノ、プレシアを医務室に」

「分かった、医療班」

遅れる形でクロノと医療スタッフが駆け付ける。

ストレッチャーに移されたプレシアは、即座にメデイカルルームに運ばれていった。

ふとフェイトは、この場に一人足りないことに気づく。

「ゼロ……アリシアは？姉さんは？」

母と一緒に落ちていったアリシアがいない。

まだ生命維持ポットごと、リンクの中にいるのだろうか？

「待て、驚くだろうからさ……落ちついてくれよ」

「う……うん」

妙にバツの悪そうな顔をする勇夜は、入念に前置きをすると、自らの肉体を光らせる。

眩しさに目を覆うフェイトたち。

光が収まると……彼女らはその光景に目を疑った。

「勇夜さ……え？」

そこには、本来居る筈の諸星勇夜では無く、彼のバリアジャケットによく似た色合いとデザインの、限りなく黒なこげ茶色のジャケットと黒のインナー、半ズボンのジーパンを着て、金色の髪をポニーテールに縛った5、6歳ほどなフェイトに瓜二つの女の子。

「アリ……シア？」

つまり……アリシアであったのだ。

なぜゼロが、アリシアの姿でいるのだ？

まさか。

「光兄、勇夜さんとフェイトちゃんのお姉さんって……もしかして」

「はい……今は〃一心同体となっている〃状態です」

「悪いな……フェイトの姉貴を無事に連れて帰るには、これしかなくて……」

女の子の愛らしい容姿と声にそぐわない口調と、頭を掻く仕草で、アリシアと一体化しているゼロは、苦笑いしながら詫びを入れた。

……

……

……

呆然と中身は〃ウルトラマンゼロ〃なアリシアを見つめ、一拍遅れて二人は状況を理解した瞬間、なのはとフェイトは――

「ええええええええええええええええ!!!」

――見事にシンクロさせた絶叫を口から飛ばし、アースラの艦内で盛大に轟かせるのであった。

まず初めに「彼女」の意識が知覚したのは、文字にすると「ピー」となり、無機的にかつリズムよく反復して鳴らされる電子音。

続いて、赤い色合いな「闇」………何かの灯りを受けた血の流れる  
瞼。

少しずつ意識は明瞭へと向かい、軽くなった瞼が開かれる。

注がれる光で一度閉ざされたが、瞳の明度と部屋の内内部にいる人間の目の状態に合わせて灯りの強さを自動調節される機能を有した電灯の措置で、ようやくはつきりと、プレシア・テスタロッサの目は正方形形状の人工の光と、白味の天井を映した。

まだ……生きているの？

まだ残る眠気で、プレシアはまだ「生きている」のだと実感が持てない。

少しして、胸の内の鼓動音と、大気を出し入れする呼吸音で、ここは現世だという確信が得られた。

部屋は例の次元航行船内の病室だろう。

横たわったまま、彼女から見て左側に位置する電子音の鳴る方へ顔を傾けると、彼女の体の現況がモニタリングされた3D式バイタルモニターを捉える。電子音はプレシアの心拍数のものだった。

左腕に何かが巻かれる感触に気がつき見ると、前腕の中心に円形の物体が密着して巻かれていた。

この物体はいわゆる点滴装置で、転移魔法の応用でチューブを使わず薬剤を送れる仕組みとなっている。

右側の方へ眼を向けて………ようやくこの病室には他にも人がいたとプレシアは気づく。

壁際に置かれた椅子に腰かける形で、長い黒髪を耳の高さで纏めた少年がそこにいた。

濃い目のジーンパンにやや白寄りのグレーなフード付きスウェットシャツを着衣し、すらりとした両脚も両腕も組み、目を瞑って微動だにしない。

「気がついたか？」

いきなり少年の口が開いた矢先、彼は目を開かせて、眼差しをプレシアに向けた。

ウルトラマンゼロ——諸星勇夜。

若年ながら“戦士”だけあり、彼の目つきは洗練された刃のようで、その端正な容貌を凜々しいものにしてている。

でもよく目を凝らすと、その顔は少年特有のあどけなさも垣間見れると観察していると……お腹から鈍い音がいきなり鳴りだす。

恥ずかしさで頬の熱が上がり、つい彼から視線を外して反対の方に向いた。

全くはしたない……男性の前で空腹の音を鳴らすなんて。

「やっぱそういうところ、あの子とそっくりだな」

近寄り難さのある顔付きに反して、屈託ない笑みを浮かべた。

「あの子って……フェイトのことかしら？」

「ああ、あいつ一度何かやり出すと飯もそっちのけで打ちこむからな、腹の虫の音何度も聞かされたよ」

頬の赤味が増した気がする。

ああ……こんな自分の悪癖がちやっかり遺伝してしまっているなんて……今は“二人目の子”への拒絶感こそないものの、娘の恥ずかしいエピソードを聞かされて、余計に恥ずかしくなってきた。

「まっ、腹ペコだと思って作つていたよ」

ここでようやく、勇夜の横に小さなテーブルがあり、そこに置かれた物に気づく。

確か“茶碗”だったか、蓋をされた陶製の食器と、それと同じ材質らしきスプーンがトレイの上に乗っていた。

勇夜はトレイを手にとり、移動させようとする。

同時に、ベッドの上に光の筋が長方形形状に走ったかと思うと、それは半透明なテーブルとなった。このベッドに備えられた機能である。彼はベッドテーブルの上にトレイを移すと、茶碗の蓋を開けると、中で溜まっていた湯気が一気に天井へ立ち登っていく。

見たところ……米を柔らかく煮た料理、ポリッジのようだ。地球の



一部の国では『お粥』と呼ぶらしい。

白米に混じって、キノコにほうれん草に細かく刻んだ長ネギにとじ卵も入っていた。

まるで出来立てのように温まっているのはトレーによるもの、これも魔法によるものでトレーの周辺は真空状態にして食物の腐敗を防ぎ、さらに食されるまでの間、トレーはお皿との接着面のみ適度に熱してもいるので、かなり長いこと熱を維持させられるのだ。

「あなたが作ったの？」

「おう」

「意外……」

ほんと長い間ご無沙汰だった穏やかな笑みが浮かぶ。

「何がだよ？」

「ごめんなさい、とても料理をするイメージがなくて」

このお粥を作っていた時の彼の姿を想像すると、妙に笑いがこみ上げてきたからだ。

「よくよく言われますよくだ……」

料理の作り主は少しムスツとなってそっぽを向く。

鬼神の如き戦闘能力を有しているといっても、やはり歳相応の男の子なのだ、その仕草から実感させられた。

「でも折角作ってもらったから、ありがたく頂くわ」

「どうぞ」

まだ拗ね気味な彼に召し上がることを伝え、手に取った陶製のスプーンで粥を掬い、吹いて熱を和らげから、口に入れた。

バランスよく調合された味と、米そのもの甘さといった素材そのものの味が絶妙にかみ合った美味が口の中で広がった。

料理には結構自信がある自分の舌でも、素直に「美味しい」と断言できる逸品だった。

久しぶりのちゃんとした食事でもあったのか、スプーンが弾む勢いで進みに進み。

「中々良い食いつぶりじゃねえか」

悪戯っ子風のニヤケ顔を浮かべた勇夜の一言を聞いた頃には、茶碗

には米粒一つも残さず完食してしまっていた。

彼の反応を見るに、かなりガツガツと食べていたのが容易に想像できる。

「ありがとう……とても美味しかったわ」

再びこみ上げた羞恥で縮こまったプレシアは、小声気味にお礼を述べた。

落ち着きを取り戻した頃には、腹ごしらえの効果で頭が大分冴えてくる。

虚数空間に身を投げた自分が助かったのは、この少年に助けられたからだろう。そのことで文句を零す気は無い、あの状況を顧みれば、彼が助けにくるとむしろ予想しておくべきだった。

そんな勇夜が、なぜここ自身が目覚めるのを待っていたのは――

「勇夜君、用件は……事情聴取、かしら？」

「まあな」

さつきまでの気さくな素の彼が鳴りを潜めて、凜とした真剣な眼差しが顔に現れ、ジューパンのポケットから、スティック状の物体を取り出した。小型の会話録音機だ。

「あなたにとっちゃ……辛い思い出ばかりだからな、まだ無理だつてんなら――」

「良いわ」

こちらの心境の案じての対応を受け取った上で、プレシアは制した。

自分はこの一連の事件の「最重要人物」。

まだ生きているのならば、「あの子」の為にも、ああなってしまう経緯を、ちゃんと明かさなきゃならない。

「全てお話しします、私と……娘たち」の「これまでを」

「いや〜大声大会とかあったら、絶対優勝できる絶叫だったね、なのはちゃん」

その頃のアースラの食堂では、なのはたちが食事をとっていた。

なのはの横に、ユーノと光が、向かいにクロノとエイミイが座っている格好

となっている。

「だつて、ゼロさんたちウルトラマンにそんな能力もあるなんて知らなかつ

たんですよ」

ウルトラ戦士が、地球などの外惑星に長期間滞在する場合には、二つの選択

肢がある。

一つは勇夜や、父ウルトラセブンの人間態、モロボシ・ダンのように、自らの肉体構造を変える変身態。

もう一つは、互いに了承の上、地元の人間に憑依して、一心同体となる憑依態だ。

何気に、不慮の死を遂げた人間に憑依して、最終的に心身ともに完全に一体化して、後者から前者になってしまったパターンもある。

今、ブレスレットが本体と揶揄されていくつも名前がある四兄とか、くびれが無い胴長な体型で光線・切断の鬼である五兄が、冷やっとした表情を見せた気がするが、気にするな。

そしてゼロがなぜ、一時的にアリシアと一体化したのは…あの生命維持カプセルは駆動炉とロストロギアのエネルギーを動力にしていた。

だがゼロが救出した頃にはその供給が途切れていたのである。

その時ゼロは、故郷の場所が分かったことでせつかく見いだせた「光明」を

消したくは無かつた。

よつて不躰がましいのを承知で、彼女に憑依したのである。

なおなぜ一糸まとわぬ姿でいた筈なのに、ゼロと同化していた彼女が着ていたのは、リンクが彼女のサイズに合わせて生成したバリアジャケットだ……ってなんだ!?! 今どこかで舌打ちしてがっかりした奴は! 表に出てこい!

貴様は歪んでいる！

その汚れた魂、俺が叩き潰す！

ゲフンゲフン！

とまあ……それは置いておこう。

「クロノ君……フェイトちゃんたちは、これからどうなるの？」

「ロストロギアの不法所持に、次元干渉という重罪行為もあるからね、厳罰に処せられるのは確実だ」

「そんな……」

地球も太陽系も、それらがある宇宙——次元世界そのものが、消えてしまう結果になりかねなかったことは、なのはでも理解できる。

だけど、気持ちまで納得はできそうにない。

「でも、今回は状況が特殊だし、フェイトも自らの意志で犯罪に加担していなかったこともはつきりしている、言い方は悪いが、彼女は道具として利用されていただけだ」

さらに、プレシア・テストアロツサがかつて技術主任を務めていたアレクトロ社には、あの魔導炉事故を中心に、様々な問題点が浮上していることが、クロノの口から説明された。

「これらのことを裁判で立証できれば、無罪とまでは行かなくても、執行猶予は着いてくる」

「執行猶予って？」

「定められた期間内で、再度犯罪を犯さずに生活できたなら、刑罰を受けずにすむという措置です」

「でも……こういう裁判は結構長引くんだよね、フェイトちゃんのだけでも最低で半年、長いと2、3年はかかるし……」

「でも、その辺は自信がある、勇夜も色々と捜査資料を集めて尽力してくれたからね」

「クロノ君……」

少なくとも、フェイト達が、これからもこの社会を生きていけるよう力を尽くす人たちがいる。

それがとても、喜ばしかった。

「何も知らされず、ただ母親の願いを叶える為に一生懸命なだけだった子を罪に問うほど、時空管理局は冷徹な集団じゃない………と言いたい……それは欺瞞か……」

「クロノ……君？」

クロノは自嘲気味に呟く。

だって、管理局に入って思い知らされた。

全ての世界の平和を守る名目を持ちながら、どうしようも無く存在する組織の矛盾と闘。

それを感じ取っているが上に、「彼」は今の立場のまま孤高を貫きつつ、それでもこの世界の人々を守ろうと……戦い続けている。

だからせめて、彼にも見せてあげなきゃいけない。

自分たちの世界にも、光はあると、闘と戦っていける意志があるのだと。

「でも……なるべく早く、君とフェイトと一緒にいられるように頑張るから……安心して」

「ありがとう、クロノ君」

病室では、プレシアへの「事情聴取」が続いている。

嘱託魔導師な立場だけど、一応「捜査官」の資格試験をパスしているのも、このような捜査活動を行うことができる。昔の自分からは、光の国で言う宇宙保安庁所属のウルトラマンが取り組むこんな仕事を『かつたるい』と思うだろうけど、「腕っ節」のスキルだけでは正式な管理局員は無論、フリーランサーだってまともに続けられない。正面からドンパチさせてくれる敵なんて、そうそういるものでもないのだ。

だから現在の自分は、こうして捜査スキルも身に付けている。

「上層部からは、度々安全度外視の命令を受けられたわ」

静かに今回の事件に至る流れを語るプレシア。

大体のその流れは、今までの捜査の積み重ねで把握していたし、ほとんど自分が集めた情報を元に組みあげた想像と……変わりない。

それでも、本人の口から、直に絶望と狂気の底なし沼に沈んでいく様を聞かされていると、その生々しさに胸の中が悲しみで張りつめていった。

全ての始まりは、プレシアが主任となつて進められていたあのアレクトロ社の新型魔導炉“ヒュードラ”稼働実験。言い方は悪いが、その日までの下りは正直吐き気に苛まれた。

調べてみると、短期間の間に開発スタッフの編成が度々変わっているのが分かり、また着手してからそれほど間を置かずにあの稼働実験が行われていたことが判明した。

エネルギー技術関連の知識が詳しいと言えない自分でも、これだけは分かる。

アレクトロ社の上の連中は、かなりプレシアたちに無茶な要求を突きつけ、ひつ迫したスケジュールの中、彼女率いるスタッフは開発に追われてきたのだ。こんな人でなしな待遇では、嫌気が指して止めていくやつが大勢出てくるのも当然。

実験の件一つとっても、プレシアは余りに早過ぎると進言したが却下され、強行も同然に決行されることになった。

本当はプレシアだって、このブラック企業からさっさと手を切りたいかっただろう……でもフェイトにも遺伝した愚直なまでの責任感と、アリシアを養わなければならない家庭事情と、何より娘への想いでどうにか切り抜けようとした。

そして……安全性を無視した“あの日”の実験で魔導炉は暴走、その時母の帰りを待ちわびる余り、当時住んでいたマンションのベランダにいたアリシアに、魔導炉から漏れていた魔力エネルギーの波が襲ってきた。

プレシアは万が一暴走した場合を考慮して、予め部屋に結界を張っていたけど、魔力波は周辺の大気にまで作用して酸素呼吸不可な現象

を起こし、アリシアは窒息して帰らぬ人となった。

愛娘を失ったプレシアは、当然会社を訴えたけど……大企業相手に裁判で勝てるわけも無く……表向きの記録では『魔導炉事故はプレシア個人の無茶な強行』であることにされ、濡れ衣を押し付けられた彼女は……行方をくらました。

蒸発していた間のプレシアは、寝る間も惜しんでアリシアを蘇生させる研究に没頭し……クローンにオリジナルの記憶を植え付ける生命操作技術『プロジェクトFATE』を発見し、独力でその理論を発展させて……結果、『フェイト』という一人の女の子が生まれた。

「そのF計画のことを教えてくれた人がいたの」

「誰なんだそいつは？」

「ごめんなさいね、その人物とはメールで連絡しあっただけだったから、誰かまでは……知ろうとも思わなかったし」

当時の彼女の心境を考えれば、『上手い話』を提示してきた野郎個人に関心が向かなかつたのは無理ない。

「そうか……」

俺は一度録音機のスイッチを切った。ここからはウルトラマンである俺個人にも関わりがあることだからだ。

「けど、何か対価を要求してきた筈だろ？ F計画の基礎理論と一緒に、ダークロプスに俺の戦闘データ諸々の情報をあんたにくれた野郎は」

「ええ、私が完成させた技術データが欲しいと言ってきたわ」

「それだけか？」

「それだけよ、私が設計した次元要塞の製造も請け負ってくれたりと……今思えばキナ臭いくらい親切だったわね」

やっぱりか、施設の拡張作業はあのロボット兵たちがやってたんだらうけど、駆動炉といった骨組みに相当する部分は他の『誰か』が製造していた。

時の庭園くらいの規模の次元要塞となると、身を隠してたプレシア個人だけで実際に作れるわけがないからな。

「でも、あなたの世界にも関わりのあるその誰かは、よからぬことを企んでいるのは、確かね」

「受けて立つまでさ、そんでぜってえそいつら企みはぶっ潰す、あんたたちの為にもな」

間違いなく、その何者かの「親切」の下には、碌でもない企みが秘められている。子どもへの強い想いで狂っていたとはいえ、プレシアは心ならずもそんな悪魔に手を貸してしまったのだ。

これ以上プレシア……いやテスタロッサ親子にに罪の重しを背負わせない為にも、この世界の人々に不条理な運命を味あわせない為にも、奴らの邪悪な野望は叩き潰さねばならない。

「で、こっからは俺個人の質問んだけど……もう一度会いたいか？ アリシアに」

この質問を受けたプレシアは俺に目を一度向け、直ぐに逸らして俯く。

双眸の影が強くなった気がするの、気のせいでもなさそうだ。

直ぐに返ってくるとは期待していない。こいつは言葉にするのも難しい話だ……今は気長に待つのみ。

「会いたいわ……やっぱり」

もつと沈黙が続くと思っただけに、自分の見立てより早くプレシアは答えた。

響きは乾いているようで、でも切実さがたつぷり沁み込んでいた声だが、彼女の偽りない気持ちであると証明させる。

「フェイトも私の子だって認められるまでこんな時間に時間が掛かって……長いこと娘たちを苦しめてきたというのに……なんて身勝手でしょうね」

俺への返答と言うよりは、独白と見た方がしっくりとくる自嘲に満ちた笑み……確かに、アリシアを失ってから今日まで、この人は身勝手をたくさん重ねてしまった。

でも……「家族」への想いまで、否定することはできない。

「アルハザードに行かなくても、アリシアにもう一度現世（ここ）で会えると言ったら……どうする？」



俺は切り出した。

自分が“故郷”に帰れる目処がついたこと。

自分が一時的にでもアリシアと同化したこと。

そして——プレシアが血反吐を吐き、自らの体に鞭を打ち続けてまでも、アリシアの体を保たせようとしてきたことで、明確な形になった……一つの光明ってやつを。

プレシアの病室の前で、娘のフェイトとアルフはお目付けの局員を横に待っていた。

今この部屋で、彼女にとって大切な人たちが対面している。

どんな話をしているんだろう？

一度は殺し合いに発展したとアルフから聞いている。

もうそんなことは起きないと信じているが、それでもどこか心に不安が芽生えて拭えない。

それに私も、あの時は、はっきりと自分の気持ちを言えたのに、今会えると言われても、どう言葉をかけたらいいのは思いつかない。

どうしよう、せつかく勇夜が取り計らってくれているのに。

それだけじゃない、なのはやアルフ、それにアースラの人たちもそうだけど、わたし、あんなに自分を助けようと尽くしてきたあの人に何も返せてない。

自動ドアの開閉音がした。

勇夜が病室から出てくる。

「御苦労さまです」

私のお目付けの局員が敬礼をし、勇夜もそれで返す。

「プレシアの聴取が入った音声データだ」

そして懐からサウンドレコーダーを取り出して局員に渡した。

「ご厚意ありがとうございます、モロボシ囑託魔導師どの」

「礼には及ばねえよ、俺はこの子を助けになれるなら、それで良い」

「……………」

微笑みながら答える勇夜の言葉にスイッチが入ったのか、顔がどん

どん火照っていく。風邪でも引いたくらいに熱い……前から何度も体験はしたけど、今まで感じたことのない熱さ。

それに、胸の鼓動が前のより、ずっと速くて……苦しい……どうしよう……止まってほしいのにどんどん速くなる。

さつきも虚数空間に落ちる勇夜（ゼロ）を見た時、わけが分からなくなつて……我慢できなくなつて……自分を抑えられなくなつて……止められなくなつて……

何なんだろう？ この感じ……この気持ち……心当たりの無い体調の異変と、湧きあがる未知の感情に、思考が平常から程遠くなり、とろけていく。

余り人と接することが無くて、その数少ない人たちにさえ遠慮して生きてきた自分では、それを理解するのは難しい話だった。

そして、そんな未知の感情によつて、落ち着かない彼女を。

「フェイト？」

「ひゃあー！」

大元である勇夜本人が呼び掛けてきた。

その瞬間、フェイトは以前街中で不良から助けしてくれた彼に無意識にしがみついた時の再来とばかり、また変てこで素っ頓狂な声を上げてしまった。

「どうしたんだい？」

アルフも主の慌てぶりに？ 顔だ。

「あ、あああああああああ、あの!!!そ、その、えーと——」  
しかも、勇夜の顔を見ると、さらに顔が真っ赤になり、パニックになる。

心を落ち着かせようとしても、空回りしてドツボに嵌るイタチごっこな状態になる始末。

絶対……変な子だつて思われる。

恥ずかしさでさらに頬が紅潮し、涙目になっていた。

「大丈夫か？ まだ心の準備ができてないなら後にでも——」

「大丈夫……大丈夫だから……」

何度か深呼吸を繰り返して、ようやく鼓動が正常に戻る。

「よし、じゃあ行って来い」

「ガンバ、フェイト」

「うん」

私は何度でも、向き合おうって決めたんだ。

本当の親子になるために。

勇夜——ウルトラマンゼロと父のウルトラセブンがそうなれたように。

私は、母さんのいる病室へと入った。

入室して最初に目に入ったのは、ベッドで仰向けに横たわっている母さん。

私を見ると、ゆっくりと起き上がって、私の方を見る。

もう会う度に感じていた威圧感を感じられず、恐怖も湧きあがってこない。

アリスアの記憶にいた、あの優しい母そのものだった。

ずっと欲しかったものなのに……望んでいた現実の筈なのに。

「あ、あの……」

やっぱり、中々言葉にできない。

「まずは座りなさい、フェイト」

「は……はいー」

声が裏返った自分に恥ずかしくなりながら、ベッドの横に備えられた椅子に座る。

「あんな酷いこと言っておいて、なんでしようけど、もう……大丈夫なの？」

「はい……あの人たちのお陰で、立ち直れました」

「そう……」

最初は、笑顔を見せていた母さん。

でもその表情に陰りが現れる。

「フェイト……あなたに……伝えなきゃいけないことがあるの……」  
「母さん？」

「良い報せと…悪い報せなんだけど、どっちから聞きたい？」

「じゃあ…悪い報せから」

フエイトは後者を選ぶ。

どうせ悪い報せがあるなら、先に聞いてしまおうと思った。

「よく聞いてね…実は母さん……………病気なの…」

「えっ？」

以前から咳籠る母を何度も見たことはあった。

けどその時の私は、研究に没頭しすぎたせいでと片づけてしまっていた。

さすがに、庭園で顔を合わせた際に血を吐いて苦しそうな顔を見た時、もしかして…………とは思ってたけど。

「あなたのお姉さんを生き返らせたいと思って、母さん、体に鞭打って無茶をしてきたから…もう、そんなに長くないの」

もう長くない、死ぬまで残された時間が…その事実により、頭の内が猛吹雪で視界がホワイトアウトしたみたいに真っ白に染まる。

「あとどれくらいなの？」

「長くて…2、3年…………短くて一年ちよつと…」

「そんな…………直すことは？」

「延命治療である程度、フエイトと一緒にいられる時間は伸ばせられるけど、長くないことになり無いわ」

私も母さんも、思い出の呪縛から解放されて、やつと…やつと…親子として向き合えたのに…もう残された時間が少ないなんて。

悔しい…膝の上の手を握る力が強くなる。

いかに自分が、今の母をちゃんと見てこなかったか思い知らされたから。

母の願いを叶えるのだとか言いながら、ずっと近くにいなながら、母の体を苦しめているものさえ、打ち明けられるまで知らなかった。

私は「プレシア・テスタロッサ」の娘だから、あの人の為に頑張るのは当然…………なんて思ってた少し前までの自分が情けなくて、腹正しかった。

勇夜の言う通り、ロストロギアを集めるよりも、もつと大事なこと

があつたのに。

「それとね……良い報せの方なんだけど」

「何？」

「フエイトのお姉さん……アリシアに………会えるかもしれないの」

「アリシア……姉さんに？」

驚いた。誰だつてこんなこと聞かされたらびっくりする、

ずっと昔に死んだ人に、会えるつてことだから、それが自分の元になつた……生き写しの姉妹な人となれば、尚のこと。

実感が持てない中、母からどういった方法でアリシアを生き返らせるのかを、聞かされる。

一応、リニスのお陰で学力は高いから、大体の理屈は納得できた。

「で、勇夜君、一度故郷に里帰りしようと考えてるらしくて、アリシアも一緒に連れていけないか、と聞いてきたの」

あんなに母さんと幸せな時間を過ごしていたのに、突然それを奪われてしまった。

確かに、もう一度、母さんと生きられるチャンスがあるなら、私もそれに賭けたい……母さんと姉さんと三人で一緒に生きたい。

だつて……それがアリシアの「夢」だったのだから。

今まで封じられていた、自分の中にあるアリシアの記憶、その中には……こんなことがあつた。

ある時、母さんがアリシアに欲しいものはと尋ねると。

「じゃあね私、妹が欲しい」

アリシアは妹が欲しいと言つてきた。

当然、母さんはとても困つた。無理だと言いたくもなかったけど、かと言つて易々と請け負えることでもなかったから。

漠然とした知識しかないけど、父と母、両方いないと子は生まれな  
いことは自分でも知ってるし、その父親はアリシアが物心つく前に、  
母と別れてそれつきりだつた。

単なる子どもの一時の戯言と断じることもできた。それでもプレ  
シアは、簡単に果たせるものではないと分かつてた上で、約束をした

のである。

アリシアだって、クローンである自分の存在を、きつと受け入れてはくれる。

だって、私はアリシアのコピーだけど、同時にアリシアが抱いてた「夢」……そのものでもあるのだから……でも。

「でも…母さんの体はもうボロボロで、彼の国でも治せないって、言ってたわ」

やはり、現実残酷。

神様にも思えてしまう超人的な力を持った人たちでも、母さんの病気は治らない、治せない。

いいのかな……もうそう遠くない未来に、別れが待ってるのに……そんな辛い思いを、姉さんにまで味あわせて良いのかな、なんて想いも過ぎる。

でも、それでも、もう一度一緒に生きられるなら、生きたい筈だった。

「上手くいけば半年で、元気なアリシアを連れてこっちに戻れると言ってた、条件も付けられちゃったけどね」

「何を言われたの？」

「アリシアが帰って来た時はでに、一緒に笑顔で迎えてあげなさいって」

「血を繋がってるだけじゃ、親子って言わねえんだよ」

勇夜は前にわたしにそう言った。

ジュエルシードを集めるよりもしなければいけないことがあると、あの時の私は、その意味が分からなくて受け入れられず、自分を攻めながら拒絶するしかなかった。

今なら分かる。その言葉の意味。ようやく私たちは、親子としてスタートを切る為に、そのラインに立っている。

「本当のことを言うかね……あの時あなたに言ったことは、少し前までは、母さんの本音だった」

「私は…あなたを生み出したときからずっと……大嫌いだったのよ」

一度は、母に何もしてあげられないで……その癖依存していた私を、どん底に突き落とした宣告。

「でも、勇夜君に刃を突きつけられた時、思い出したの……アリシアとの約束、そして気づいたの……わたしが欲しかった幸せは、あなたも一緒にいないと……意味が無いって……でも、色々と酷いことをしてきたから、母さん……もうあなたに母親を名乗る資格は無いと思って………無理やりにも、私に依存しているあなたを、母さんは引き離すしかなかった」

二度に渡って、死の淵に追いやられて気づいた真実を明かす母。言葉を重ねる度、嗚咽で声は霞み、その瞳は潤いを帯びていく。

「本当に私は、大事な娘たちを不幸にしかできなかつた、最低の母親……それはもう絶対に消えない、母さんの罪」

「母さん……」

「でも……でも……それでも……こんな私でも……あなたのお母さんだと、言って……くれる？　母さんと、生きて……くれる？」

感情の熱が、こみ上げてくる。私の瞳も、その熱で潤んでいた。ずっと……ずっとその言葉を、聞きたかった。

「だけど……過去（おもいで）に縋っていたままでは、絶対に聞けなかつた。」

勇気を振り絞って、向き合おうとしなかつたら、永遠に届かなかつた……その願いが形になってそこにあるのだから。

さつきも勇夜の胸の中で、あんなに涙を流したのに……瞼が熱くなり、頬に雫が流れ出した。

「もちろんだよ……わたしだって……母さんと、姉さんと、もう一度………一緒に生きたい……生きたいに、決まってるよ」

その言葉がきつつけとなつて、雫が止めどなく流れていく。罪が消えなくなつていい。

たとえずっと重しを抱えて生きていくことになつても、それでも、私は最後まで、姉とともに、母と生きようと思つていたのでから。

もう、我慢できなかつた。

溜めこむ必要も無かつた。

その心のまま、母の胸に飛びこむ。

プレシアも彼女を受け止めながら、涙を流す。

幼子のように泣きじゃくりながら……母の温もりを絶対に忘れぬようかみ締めた。

本当に夢のような、眩しく小さな奇跡が現実としてそこにはあった。

『泣いているのですか？マスター』

「そうだよ……悪いか？」

やけに潤ってる鼻をこすりながら、俺は相棒に強がった。

『いいえ、涙を流せることは、素晴らしいことなのですから』

フェイトの泣きじゃくる声は、壁越しの自分にも聞こえてしまっていた。

おまけに、初めて父と親子として抱きあったあの瞬間を思い出して、気がつけば眼が真っ赤になっていた。

同様にアルフも、感涙の余り、号泣の号泣。

お目付けの局員さんも、最初は泣いている二人に首を傾げていたが、病室から聞こえるフェイトの泣き声に、「今度休みをとって、ふるさとの母に会いに行こう」と言いながら涙腺を結壊させていた。

俺もも……たまには眼が真っ赤になるほど泣くのは、悪く無いと思っただ。

だって、あの二人が仮初のものではない、ちゃんとした家族になれたことが、こんなにも嬉しいと、感じるのだから。

良かったな……フェイト。

親子として、ようやくスタートを切ったフェイトたちに。

“さすが、俺の子だな”

“お……親父”

家族として再会した……あの時の俺と“父”を思い出しながら、心から……あの子たちを、祝福した。



## EP30 | CALL MY NAME

後に、『PT事件』と呼称される地球で起きたジュエルシードを巡る一連の事件は、一応の解決となった。

が、次元断層を起こす寸前になったジュエルシードが原因で、周囲の空間が不安定になり、アースラは次元の狭間で立ち往生、なのはたちは暫く艦内で缶詰となる状態を余儀なくされてしまう。

ただ一人、そんな環境下でもリンクの恩恵で問題無く次元を超えられる勇夜Ⅱウルトラマンゼロは、裁判の為の資料収集との名目でアースラから飛び廻っていた。

無論それも理由ではあるし、お世話になっているナカジマ家に里帰りの旨を報告するという理由もあるのだが。

「アルフさん」

「なんだいなのは？」

「さつき勇夜さんが目を真っ赤にしているのを見たんですけど…心当たりありますか？」

「あ〜それはね…まあ…勇夜は意外に涙もろいといしか言えないな」

「そう…なんですか…」

アルフに聞く前に、兄の光にもなのははウルトラ戦士の涙のわけを聞いたのだが、彼も「ああいう人ほど、シャイで涙もろいのですよ」としか言わなかった。

アルフも同じくらい目が真っ赤に腫れていたもので、何か知っているのではと思ったのだが…でも、よく考えてみれば、理由は直ぐに分かった。

誰よりも彼女に笑ってほしいと、願っていた光の巨人。  
はつきり言って、照れくさかったのだ。

それから数日の間のこと…アースラ艦内のある一室。

「ユーノ、データのまとめはできたか？」

「できてます…とところでクロノ執務官」

「何だ？」

「僕は一応民間人であって、ここまで協力する義務はないはずなんだけど…」

ユーノはアースラにて、ほぼ使いつ走り同然のポジションで、事件の後処理を手伝わされていた。

一仕事終わればまた新たに一仕事させられ…ユーノから見ればブラック企業ストレスの酷使。

そんな一応民間人のクレームに対し、少年執務官は――

「義務を押しつけた覚えはない、提案をしただけだ…違法ストレスの探索行をした上に、君は管理外世界の少女と少年に魔法を教えたんだぞ」

――一種の正論を盾に一蹴。

基本不可侵と決め込んでいる以上、いくら非常時だとしても管理外世界に管理世界の情報と技術を教えるのは管理世界ではご法度な行為。

それが結果として、事件の収束に一役買ったのだが…やはり違法ストレスはストレスなわけで、そう易々と打ち消されはしないのが実情。

「勇夜は今でもフェイトたちの裁判を有利にするために尽力し、アルフも現地調査に積極的に参加している、君だけがそこまで関わる義務は無いと言い張るのか？」

つまり、行き過ぎた責任感による独断専行と現地民を巻きこんだことをチャラにしたければ、グダグダ言わずに手伝いなさいという意味だった。

「そ…そんなことないです…」

「なら作業を続けてくれ…」

こんないつも以上の素っ気なく棘がある態度で、執務官はユーノのクレームに応じていた、と言うかねじ伏せた。

「(悪いねユーノ君)」

「(ランデイさん)」

クロノの会話の後、ユーノと事件関連の資料整理をしているアースラクルーのランデイが念話で話しかけてきた。

「事件を未然に防げず、自分たちでは関係者を救えなかったかもしれないことに心中複雑なんだ……でも珍しいだよ、クロノ執務官が——」

「ランデイさん」

「は、はいー!」

てつきりクロノにこっそり念話をしていたのがばれたと思いこみ、てんぱるランデイ。

「計測データ、未記録のデータがあるようですが」

「ホントだ、ログを拾い直してきます」

「お願いします」

「あ、それからね、クロノ執務官がエイミイ主任以外にまとめ系の仕事を頼むの珍しいんだ」

「(そうなんですか?)」

「(ユーノ君の作業能力を頼ってるってことだと思うから、悪いけど頑張ってる)」

無愛想な執務官のフォローを入れながら、ランデイは退室した。

「僕も少し出てくる、引き続き整理を頼む」

ユーノも心中複雑な気分を押し込め。

「……了解」

と応じた。

「クロノ君」

「エイミイ」

アースラ艦内の銀色に彩られた無機質な廊下で、鉢合わせになる執務官と副官。

「そっちはどう?」

「捜査資料はもうすぐ纏まるよ」

「そりゃよかった……それよりクロノ君、表情気をつけてる?」

「何がだ？」

「怖い顔しているとみんなが緊張しているんだから、勇夜君も『仕事の中で、自分は今『不機嫌です』なんて顔するな』って前に言ってたでしょ」

クロノは確かに優秀で、職務に忠実な執務官ではあった。

とは言え、やはり彼もまだ15の微妙なお年頃の少年。

若さゆえに、苛立ちを内に秘めるよう善処していても、周囲にはダダ漏れなことは度々あった。

本人には申し訳ないが、その『不機嫌』な表情はともすれば、初見は無愛想に映る勇夜の普段の態度の方がまだまともに見えてしまう。

「別に……怒ったところで時間が巻き戻るわけでもない」

「クロノ君が『別に』と言う時は大抵怒ってる時なんだよね……それを顔に出さないでねって話」

「……………」

こう堅物で近寄りがたい人物に、こういつでもフレンドリーにフォローしつつ接してくれる人物が周りにいてくれるのはありがたいことだ。

日頃のちよっかいを除けば、エイミーは理想の副官と言えるよう。

「今回ばかりは仕方無かったよ……事態を把握するのが遅すぎた……」

「遅すぎたって……親が子を亡くして、親の為にロストロギアを集めた子が親を失いそうになって、次元災害を防ぎながらもその子を救おうと尽力した人たちに、出遅れた僕たちが『仕方無い』なんて言えるのか？……………すまない、今のは八つ当たりだった」

「まあわたしで良いなら、いくらでも当たっていいんだけどね……それが副官の仕事なんだし……」

結末だけを言えば、事件は最高の形で収拾をつけられた。

ロストロギアも一部破壊を余儀なくされたが、それでも次元災害は回避。

事件の最重要人物であるテストロツサ親子も、事件の根底にあった互いのわだかまりを解いて、本当の家族として再スタートを切ろうと

している。

「結局僕たちは、彼らの力を借りなければ、その最高の形で解決することができなかつた……」

発見者のユーノ・スクライア、彼をきっかけに魔導師に目覚めた高町なのは、彼女の義兄である二次元世界の騎士、高町光ことミラーナイト。

そして、小学校以来の友人で囑託魔導師兼M78星雲光の国から来たウルトラ戦士——諸星勇夜ことウルトラマンゼロ。

昔から管理世界の在り方を疑問視していた彼に、僕は『あの時』むきになって、自分が全ての管理世界を守ると宣言した。

それからもう5年経ち、執務官にまで登ったが……あの時の自分が納得できるような成果は出せていない。

寧ろ彼の方が、その『守る』ことを着実に実践して積み重ねている気がする。

今回の件だって、本人は『自分にできることをやってるだけ』『自分だけの力じゃない』と言うだろう、そして彼も……個人で戦い続けることに、いつか限界が来ることは重々承知してるはず。

でも今は、個人の限界よりも、組織の限界の方が先に立ちほだかるのが現状、やはり管理局は、ロストロギアの存在があつたとは言え世界の幅を広げ過ぎ、魔法に頼り過ぎている実態と、行き詰まった社会システムによって、手遅れな状況を起こしてばかりだ。

自業自得だ。組織内でも、色々と解決しなければならぬ淀みも歪みもたくさんある。これでは、彼に顔向けできない。

時空管理局と、彼の故郷の星で組織されている宇宙警備隊。

自分以外の世界をも護ろうとする理念など、似ているようで、どうしてここまで決定的に違うのだろうか……きつと「限界」をちゃんと自覚しているか否かと、内に秘める意志に、その世界の人々を「信じている」ことが、ここまで差を開かしているのかもしれない。

せめて、あの子たちが未来に向かっていけるよう……力の限りを尽くさない……と、誰に言うでも無く、彼はそう独白した。

数日後。

「今回の事件解決について、大きな功績があったものとして、ここに略式ではありますが、その功績を讃え、表彰致します」

アースラの会議室では、事件解決に貢献した者たちへの表彰が行われていた。

「高町なのはさん、高町光君、ユーノ・スクライア君、ありがとうございます」  
「ありがとうございます」

代表として表彰状を受け取るなのは。

ちなみにこの中に、囑託魔導師の資格を持っているが民間人寄りの立場でもある勇夜はいない。

リンデイはそれを考慮した上で彼にも表彰しようとしたのだが、ご本人から気持ちだけは受け取つとくと直々に辞退されてしまった。

理由は——『紙切れがもらいたくて、頑張ってたわけじゃねえ』であつた。

それを後から聞いた、なのはと光たちは。

「やっぱり、あの人（彼）らしい」

と、同じことを思ったとのことだ。

それから次元振の影響がようやく弱まり、なのはたちは海鳴に帰れることになった。

一方でその影響はマルチバースにまで及び、ミットチルダ方面への航路はまだ不安定で、安全に航行できるようになるまでもう少し時間がかかり。

ユーノも、なのはからの薦めで、もう暫く海鳴で生活することになった。

無論どうか当然というか、フェレットの姿での生活かつ……シスコン兄貴に釘を刺されたりはしたがだ。

「それじゃ、今回は本当にありがとう」

「協力に感謝する」

見送られながら転送ポートに立つなのはたち。

「なのはちゃん、光君、ここにはいつでも遊びに来ていいからねー」

「はい」

「ありがとうございます」

「エイミイ、アースラは遊び場じゃないんだぞ…」

エイミイの発言に溜め息をつけながら突っ込むクロノ。

「まあ、いいじゃない。どうせ巡航任務中は暇を持て余してるんだし」「そうですね、たるみ過ぎては元も子ありませんが、あなた方が暇であることは、決して悪いことでは無い筈ですよ」

「艦長と光まで…」

彼女を端に発した柔らかな場の雰囲気有助長させるリンデイと光の発言を前に、頭を抱えるクロノ。

お堅い鉄頭さんには、少し緩すぎる空気であった。

「フェイトの処遇は、決まり次第連絡する。大丈夫、決して悪いようにはしない」

「うん、ありがとう」

時の庭園が崩壊してからというものの、規則ということもあって、ここ数日なのははフェイトと話す機会が無かった。

それがルールであることは分かっているのだが、色々お話をすることも、母とよりを戻したことを祝福する事も、お別れすら言えないまま、家に帰ることになるのは、やっぱり寂しくて、残念に思う。

「(勇夜さん…)」

「(心配すんな、一回ぐらいは、フェイトと会える機会を作ってやるからさ)」

「(ホント!?ありがとうございます!)」

「(私からも礼を言います勇夜、良かったねなのは)」

「(うん!)」

満面の笑みで勇夜、感謝を送るなのは。

思わず照れくさくなり、鼻を擦るいつもの癖をとった。

まったく…お礼が言いたいの、むしろこっちだぜ。

フェイトの出生を知って、それでも彼女の…初めての友達になるっ

て言ってくれたんだから…俺一人だけじゃ…あの子を救えなかったからな。

「(こつちからも礼を言うぜ、ありがとう、なのは)」

「(はい!)」

転送ポートの魔法陣が、光を発し始める。

「それじゃ、またいつか」

「うん、またね、勇夜さん、クロノ君、エイミィさん、リンディさん」  
光がポート内を埋め尽くし、三人はアースラを後にした。

海鳴に戻ってから数日が経って、あれから私は自分の日常に戻りました。

♪~~~~~♪

あの始まりの日のように、ベッドの中で目覚まし代わりに携帯を漁り、一度は床に落とすつも、アラームを解除します。

とは言え、今日はお休みなので、寝ぼすけ私は、また布団に潜り込んでしまった。

平日は起こしに来る光兄もユーノ君も、無理に起こすのは野暮だと思ってるのか、半ば諦めているのか、休日での私の寝坊は容認されません。

今まで通りではあるけど、いろんなことがあったから、今までとは少しだけ違う日常。

夢中だった時のことは、いざ終わってしまうと、なんだかあつという間のことのように。だけど、心の中にはちゃんと残ってる。

出会ったこと、必死だったこと、いろんなこと。

帰って来てから、ここ数週間に魔法に関わっていたことを、わたしは、家族や親友に内緒にしてもらうよう計らいつつ、話しました。  
後から、実は光兄が予め、お父さんたちに話していたことが分かって。

それでまともにわけも話せなかったのに、学校も休んで家を開けることを許してくれたんだ…と納得…やっぱり光兄にはかなわないな。



で、アリサちゃんにもすずかちゃんにも、このことを話して。

一応、信じてはくれたんだけど、特にアリサちゃんから…

「魔法が普及してる世界に喋る魔法の杖にパラレルワールドを渡る戦艦！何そのFantasyとDcience Fictionがごっちゃになった世界観！」

と日本語とネイティブな英語が混じるほどびっくりされて、突っ込まれました。

確かに、わたしたちの地球人のイメージする魔法とはかけ離れています。

何と言いますか、ファンタジーでよく見る魔法の《ミステリアス》なイメージからは、余りに遠いと言いますか…：光兄ことミラーナイトと勇夜さんことウルトラマンゼロの使う能力の数々の方が、遥かに魔法っぽいとさえ思う今日この頃。

そんなことを考えながら、また夢の中に入ろうとした時でした。

こんこん、ドアの外からノックが。

「なのは、起きてますか？」

光兄です。朝が苦手で、自力で早めに起きられなかった日によく見かける光景です。

「にや〜く休みなんだからもうちよつ〜と…：」

平日は眠りたい気持ちを戦ってどうにか起きますが、休みの日くらいは——

「フェイトに会えるせっかくのチャンスでもですか？」

「にああ!？」

そう…：自分が日常に戻ってからも、ただ一つの気がかりであった。

前は寂しい目をしていただけ、今は綺麗で眩しい目をした女の子——フェイトちゃんのこと。

あの子の名前を聞いた途端、びっくりできつきまで重かった頭も目も体も一気に軽くなります。

「フェイトちゃんが!？」

「はい、勇夜からお電話がありました、本来は裁判が終わるまで会えな

い決まりなんです、フエイトの強いご希望とのことです」  
「どこどこ?!」フエイトちゃんたちは!」

自分でもびっくりな喜び溢れるハイテンションに、ドア越しでも光兄がたじろいでいるのは分かりました。

「臨海公園で待っているそうですよ」

「分かった、直ぐに準備するね!」

「慌て過ぎないよう気を付けて下さい」

光兄が慌てないようにと言ってくれましたが、うきうきと弾む興奮は抑えきれそうにありませんでした。

「もうそろそろ何だな、分かったぜ」

光からの返しの電話を受けた俺は、携帯端末を切った。

「勇夜…」

「どうしたフエイト?」

今俺にフエイト、アルは丁度待ち合わせ場所の臨海公園の園内にいる。

気温も丁度いい暖かさで、海から吹く潮風も適度に涼しく心地いい。

「なのは……どうだった?」

「光の話じゃ大喜びしてたぞ、今全速力でこっちに向かっている」

「そうなんだ」

少し頬を赤らめながら、微笑むフエイト。やっぱりフエイトは笑っていた方が良く勇夜は思った。打算の無い正直な気持ちだ。

そう考えながら……フエイトを見ていると。

「で、まだ俺に何か?」

「あ……その……あのね……」

まだ何か聞きたいことがあるようなので、こっちから聞いてみた。

「私……今まで、友達って言える子と、触れ合ったことが無かったから

……その……どうやったら……友達になれるか——」

上目遣いで、もじもじとぎこちなく言ってくるフエイト。

男にしろ、特殊な嗜好を持った同性にしろ、人によってはその仕事だけでノックアウトされるだろう。

だが俺は敢えて厳しい姿勢で――

「知らん」

彼女が言い終える前にばつさりと言い切った。

「えー！！」

フェイトにとっちゃ予想だにできなかった返しだったので、彼女は素っ頓狂で妙に味のある驚き顔をした。

まったく、ああもかしこまって何を言いたいのかと思えば……”女の子同士の友情”のことで男子の俺に聞いてどうしようと言うのだ？ 彼女の期待に添える返答など持っていない……しいてアドバイスできることと言えば。

「友達だろうと家族だろうと恋人だろうとな…絆を育むことに、これと言った正解は無いんだよ………いつの間にか…なってるものなのさ」

「そうなの？……でも…」

どうにも腑に落ちないのか、顔をしょんぼりとさせるフェイト。その仕事も可愛いと言えれば可愛いが……あんまりそんな顔をさせるのも癪だったのだ。

「いら」

「ひゃあー」

勇夜はペコンと、あの時のように彼女の額にデコピンをした。

「あう~~~~」

でこを撫でるフェイト。

明らかにフェイトは以前と比べて、ずっと表情豊かになっている。寧ろ今の彼女が、フェイトの素そのものなんだよな、それを見られるだけで、何だが妙にこそばゆかった。絶対にこの気分を見せまいと自制しつつも。

「そうしょんぼりするなよ……時にはな、自分で見つけなきゃいけない答えだってあるんだぜ………まあ…今の正直な気持ちを、なのはにも伝えてやれ、俺が言えるのはそれだけ」

普段のツンケンどんな雰囲気は鳴りを潜めさせ、自分なりに優しくフェイトに微笑んだ。

「勇夜……うん……」

フェイトも微笑み返ししながら、頷いた。

「フェイト……勇夜君、お取り込みのところ悪いけど」

「あ、母さん」

今はシンプルな私服を着て、微笑ましい顔で俺たちを見るプレシア。

彼女を蝕む病魔は消えてはいないが、定期的に勇夜がメデイカルパワーをかけていたこともあり、一応歩けるまでの体力は戻っている。

そして、何かニヤニヤしているエイミィとアルフに罰の悪そうな鉄頭。

「こら！ 今僕だけ名前と呼ばなかつたら勇夜！」

「はて……何のことやら？」

本当のことなので、しれっとはぐらかした。

心の声を読み上げるとは、中々やるじゃねえか。

「で……そこのお二人さん、何がおかしい？」

ジト目で睨む。睨み先のアルフとエイミィが、何か悪戯っ気のあるニヤケ顔で勇夜とフェイトを見ていた。

「いや〜お熱いなくと思って、考えてみると中々の策士だよ〜勇夜君」

「本当の恋人みたいじゃないからフェイトも勇夜も〜いくらでも応援するよ」

「ば！ 莫迦！ そそそそんなんじゃねーよ！」

二人のからかいに、思わずツンデレ全開な返事をしてしまう勇夜。

くそ……今日はなんて厄日だ……と愚痴ながら、火照る体を知覚する。

「(でも勇夜君、娘のことは嫌いじゃないでしょ?)」

「(プレシア……あんたまで)」

プレシアにまでからかわれた。否定なんてできない、だから恥ずかしい。

実際、フェイトを「好きか？」と言われれば好きだ。

恥ずかしいから、それを口に出す時はどうしても間接的な表現となるか、意固地に慌てる返答となってしまう、それだけ彼はシャイな人柄なのだ。

もつと踏み込んで言うなら、このウルトラ戦士はツンデレ。これは絶対否定できない事実である。

「……………い……………びと？」

フェイトもフェイトで、アルフラの言葉に過剰反応し、今にも湯気が出てきそうな勢いで、ほつぺたを真つ赤かにし、両手を頬に張りつかせていた。

一体、何の盲想をしているやら……………と苦笑する一方、勇夜は胸に違和感を覚える。

実のところ、フェイトが俺のことどう思ってるか、薄々察しはついている。

でもフェイトも……………そして俺自身も色々整理する時間が、必要だと思おう。

越えなきやいけないハードルもたくさんある。

だって…俺は……………地球人の血も混じっているけど……………ウルトラマンである俺は、本来フェイトとは違う時間を過ごしている。

出会ったことも、助けようと力を尽くしたことにも後悔は無い。

でも……………時々考えてしまう。彼女が初めて本格的に触れ合った異性が、本当に俺で良かったのか——と、

ウルトラ戦士としての俺にとつては、この一月がほんの少しの寄り道よりも短い時間だとしても……………フェイトにとつては——それは地球人の姿になっても覆らない事実。

余りに途方も無い時を生きる俺が……………遥かに短い時を生きる女の子の一生にこんな大きな影響を与えて良いのか？

などと心の内で過ぎる度、せつなくなり……………息なんて滅多に乱れないのに息苦しくなって……………胸が締めつけられるほどに痛感させられる……………覆しようの無い真実。

ホント、血は争えねえみてえだな。親つ……………いや……………父さん

…アンヌ母さん。種族の壁も、時間の壁も覚悟の上で、俺を生んでくれた人たち。

でも今は……あの子が乗り越えなきゃならない高すぎる障害を乗り越えられるようにと願ってあげることにした、

「フェイトちゃ〜ん！みんな〜ん！」

「あ、来た来た」

フェイトを呼ぶ声が出て、目を向けると、なのはとユーノを乗せた光が走ってきた。

ちなみに今、周辺には人除けの結界を張っているの、うっかり通行人に見られる心配は無い。

「お待ちせしました」

「さて、門外漢の俺たちは、退散と」

「そうだね…」

「時間が来たら呼ぶから」

「なのは、しつかりね」

「ちゃんと伝えるのよ、フェイト」

「うん」

勇夜たちは、誰が言い始めたわけでもなく、各々の言葉を置きながら、二人を残して遠くのベンチに移動して行った。

勇夜たちによって、築き上げた二人だけの時間。

なのはとフェイトは、しばし笑い合ったまま、静寂を保っていた。

やがて…なのはからやり取りを紡ぎ始める。

「にやはは…なんだか話したいこといっぱいあったのに…変だね、フェイトちゃんの顔見たら、忘れちゃった」

「私は………そうだね…私も上手く言葉に出来ないや……」

二人にとって、着替った言葉なんていらなくらいに、ただ…この場で会えただけで、こうして目の前にいるという事実だけで、十分に

事足りていた。

「だけど嬉しかった」

「え？」

「真っ直ぐ向き合ってくれて……何度も手を伸ばしてくれて……嬉しかった、色々、痛いおもいもさせちゃったのに」

「わ、私はただ友達になれたらいいなって思っただけで……その気持ちだって……光兄や勇夜さんがいなかったら……気づけなかったし、フェイトちゃんのお母さんを助けたのも……地球を守ったのだって勇夜さんたちだし……私なんて……いくら真剣勝負だったからって……その……やり過ぎちゃったし……にやはは……」

なのはにも、手を差し伸べて、助けになっってくれる人がいた。

だから最後まで……重い足枷と十字架を背負わされたフェイトとも向き合うことができた。

「謙遜することないよ、なのは」

「フェイト……ちゃん」

そして今は、ちゃんと自分のことを――

「ありがとう……でも……今日はもう……出かけちゃうんだよね」

「うん……少し、長い旅になる」

フェイトが、これまで背負ってしまった罪。

これから……それを少しずつ清算する、贖罪の旅が始まる。

過去に縋りついてばかりだった自分に、過去から課せられた罰。

「また……会えるんだよね？」

不安な顔で、フェイトを見つめるのは。

会いたいと思うほど、会えると信じようとするほど、不安は重さとなって心中に積もっていく。それはフェイトも、同じ気持ちであった。

「少し悲しいけど……みんなのお陰でやっと、本当の自分としてスタートを切れるから…………来てもらったのは、返事をする為」

「え……？」

だから、その前に。

「君が言ってくれた言葉…… “友達になりたいんだ” って言葉」

だから、別れるその前に、ちゃんとなのはに言っておきたかった。  
彼女の想いへの、返答。

「っ……うん！……うん！」

「私も友達になりたい……私にできるなら……私でいいなら……私の……  
初めての……友達になってほしい、でも……実は、どうしたらいいのか  
……分からないの……今まで友達と呼べる子はいなかったし……」

彼がさっきアドバイスをしてくれたように、自分の想いを、率直に、  
真っ直ぐに、なのはに伝えた。

「勇夜さんは？」

「………ちよつと……違うかな……勇夜のことは……大好きだし、大  
切な人だけど……まだどう言う………『好き』………なのか………」

“時にはな、自分で見つけなきゃいけない答えだつてあるんだぜ”  
頬を紅く染め、口元を適度にかみ緩ませながら、彼の言葉を反芻し  
ながら、フェイトは彼への今の気持ちを話した。

「それを見つげるまでは……時間がかかると思う」

「そっか……」

なのはは内心、きつとそれを見つげられるのは、そんなに遠くない  
よ、フェイトちゃん、と語りかけていた。

「だから……せめて知りたいの……どうやったらなのはと、友達になれる  
？」

前置きを経てフェイトは……自分の答えを、自分の気持ちを正直にな  
るのはの目を見て打ち明ける。

そして……なのはは投げ返した。

「………もう……友達だよ」

「え？」

「私たちはもう……ちゃんと友達になつてるよ」

「なのは？」

友達になることは……難しい気がして、実は意外にシンプルだ。

「そう……もう一度名前を呼んで……」



「な……なまえ……？」

「うん、そうだよ、最初はそれだけでいいの、君とかあなたとか、そういうのじゃなくて……ちゃんと相手の目を見て……はつきり名前を呼ぶの、あの時みたいに、今言ってくれたみたいに」

それは……何よりも代えがたい……魔法の言葉。

「……な……のは……」

「うん……そう……」

もう……何度も呼んでいるはずなのに、いざ意識して呼ぼうとする  
と、気恥ずかしさで、中々言葉にできない。

「なのは……」

それでも、次ははつきりと。

「うん……」

「なのは……」

日差しが暖かさと、潮風の香りを肌で感じながら……そして次はと力強く、なのはの手に触れながら、なのはの名前を呼んだ。

「うん……うん……」

名前を呼ばれる……ただそれだけで——名前を呼んであげる……たったそれだけのことで——こんなにも嬉しい。

「ありがとう……なのは」

二人は、こんなに暖かな気持ちとなる。

「なのはの手も……こんなに……暖かいだね」

それだけに……離れなければならぬことに……こんなに胸が苦しくなる。

「今気づいた……友達が悲しんでいると……自分も悲しいんだって……嬉しいと思うと……本当に嬉しいんだって」

嬉しさとせつなさが入り混じって、二人から自然と流れる光。

「フェイトちゃん……」

その想いのまま、なのははフェイトの胸に飛び込んだ。

フェイトは、勇夜が……母が……想いが溢れた時の自分にくれたように、優しく受け止め、抱き返す。

「今は離れてしまっけど、きつとまた会えるから……絶対会いに行くか」

ら…そしたらまた、なのは名前を呼ぶから…」

「うん…うん…」

「会いたくなったら、必ず“なのは”って呼ぶ…だからなのはも私を呼んで…なのはにもし、困ったことがあったら…：今度はきつと、私なのはを助けるから…光さん…ミラーナイトがなのはにそうしたように…：勇夜…ウルトラマンゼロが私にそうしてくれたように…なのはが…：私にしてくれたように…」

別れなければならぬのは、本当に辛い。

でもだからこそ、互いを想っていることが手に取るように分かる。

「うん…：フェイトちゃん」

それを忘れないように…確かめるように…噛みしめるように…二人は強く、お互いを抱き締めあうのであった。

感極まる二人の様子を、まじまじと見ていた勇夜たち。

「勇夜…光…ユーノ…」

ふと、アルフが勇夜たちを呼んだ。

「あの子も…なのはもき…ほんといい子だよ…フェイトがあんなに幸せような顔をしてる…」

感極まったアルフに、ユーノとプレシアがそつと彼女の肩に手を置いた。

「やつと…：これでリニスに顔向けできるかな？」

「そうね…きつとリニスも、祝福してくれているわ、アルフ」

これもまた…：少し前までは考えられなかった光景…フェイトと同じく、アルフもまた『鬼婆』表して反発していたプレシアと和解できた。

プレシアもかつては、彼女を『フェイトの使い魔』という認識しかなかったのだが、今はちゃんと“アルフ”と呼び、一個の存在として見ている。

これもまた…：小さいが…：とても尊い奇跡であった。

「もう少し…二人をあのままにしておきたいのですね」

抱き合ったまま、互いに芽生えた絆を確かめる二人を見つめる光は、目を潤わせながら、そんなことを口にした。

「奇遇だな…：…俺も同じ気持ち…」

できれば…ほんの少し…：…ほんの少しだけでもああさせてあげたい。

二人だつて、まだ話し足りない、思っているだろうし…：…けどそうもいかない。

「時間だ…」

「クロノ君、こういう時地球では何て言われるか知ってる？」

「エイミー…：…今はそういうの無しだ」

「はい、勇夜君に言われたんじゃ、仕方ないね」

珍しく俺がなだめ役を買って出た。

今回ばかりは、クロノの真面目さに同感する。

こうして、会える時間ができただけでも、儂いけど、凄いことなのだから。

「フェイト…なのは！」

クロノの声に気づいた二人はこちらに目を向ける。

勇夜たちはベンチから離れ、二人の許へ歩む。

「ごめんな…：…本当はもっと、時間を作っておきたかったんだけど…」

「謝らないで勇夜さん」

「そうだよ…：…もうこうして会えただけで充分だから」

二人の顔を見て、なんか安心した。

その笑みを見られただけでも、この世界で、ここまで走ってきた甲斐はある。

「あ、フェイトちゃん、行っちゃう前に…：…その…」

なのははそう言うと、自分の髪を縛っていた真っ白いリボンをほどき。

「今…思い出にできるもの、これしか無いんだけど…」

それを、フェイトに差し出す。

「じゃあ…私も…」

フェイトも髪を下ろし、ほどいた黒いリボンを手にとつて。潮風がゆつたりと吹きぬける中…二人が、絆を結んだ記念として――

「…ありがとう、なのは」

「…うん…フェイトちゃん」

――もう一度会えると…祈りと想いを込めて――

「きつと…また」

「うん…きつとまた」

――お互いのリボンを、交換した。

「ほら、預かりもん」

アルフの声が出たと同時に、なのはの肩に軽く重みがかかる。

今はフェレット姿のユーノだ。

「ありがとう、アルフさんプレシアさんも、クロノ君もエイミイさん、元気でね」

「お達者で…」

「ああ、色々ありがとうね、なのは、光、ユーノ」

「私も礼を言うわ…ありがとう、なのはちゃん」

そして光は勇夜に目を向け。

「勇夜…ゼロ…」

「…リヒト…」

名前だけ呼び、微笑みながら、互いの拳を打ち付ける二人の巨人。こつちも、余計な言葉はいらなかった。

時が経つても色あせなかった、この次元を超えた友情には…だから、また今度も会おうと、視線で交わす。

「勇夜さん…」

そしてなのはは、若きウルトラ戦士に。

「フェイトちゃんたちを…お願いします」

と頭を下げた。

「なのは」

「…はい？」

頭を上げると、右手を差しのべた勇夜が、その意図を理解したなのはも差しのべて、笑顔でかわしながら、互いの手を握り合う。

「いつでも、地球に遊びに来て下さい」

「勿論さ」

勇夜たちが、なのはたちと距離をとると、転移の魔法陣が現れた。

「バイバイ…またね…」

クロノ君。

エイミイさん。

アルフさん。

プレシアさん。

勇夜さん…：ウルトラマンゼロ…：そして…：フェイトちゃん。

光に包まれる中…：フェイトは“さよなら”の手を振った。

なのはも放物線を描きながら、大きく腕を振って応える。

涙を浮かべながらも…：笑顔で…：別れは辛いけど…：笑顔でさよならって…：光が…：お互いを別つその時まで、二人はずつと…：手を振り続けるのであった。

フェイトたちの身柄がマルチバース内で建設された時空管理局本局に移され、本格的に裁判が始まってから約一カ月が経過した。

最初こそ、罪状が罪状なだけに、きつく問いただされてはいたが、凜と落ちついた姿勢で被告席に臨むフェイトたちと……勇夜やクロノたちが、必死に集めた事件関連も資料の存在。

そして：全ての発端となったアレクトロ社の不正疑惑や安全管理の問題などが明るみになり、魔導炉の暴走事故によって死亡した被害者であるアリシアの存在が後押しし：無罪、とまではいなくても、執行猶予がつけられる希望が段々と見えてきた。

無論裁判は長期戦、骨が折れるほど時間がかかるし、何が起きるか分からない上、状況が不利になる可能性もまだ消えていない。

それでも、家族と穏やかに過ごせる日々と親友と再会する未来を掴みとる為にフェイトはひた向きに走り、関わった人たちは全力でサポートを続けていった。

そんなフェイトの原動力は、無論家族や親友の存在もあるが、やはり、アクシデントで異世界から迷い込みながらも、今も尚この次元世界に降りかかる火の粉から人々を守り続け、自分を光ある場所に導いてくれた、一人のウルトラ戦士の存在が最も大きかった。

五月のある日のアースラでの一幕。

フェイトとアルフが、艦内を自由に移動できるまでになっていた頃のこと。

アルフに至っては、勇夜に手ほどきを受けた影響か、艦内をジョギングコース代わりにして、走るのが日課にしていた。

使い魔としてのタフネスの高さか、はたまた元が狼だからか、日によって何百週も艦内を走り回っていたりする。

「リンディ提督、失礼します」

その日のフェイトは、艦長室にいるリンディのもとに赴いていた。

「あら、ごめんなさいね、お茶を持って来てくれたの？」

「はい」

緑茶と砂糖ミルク一式をリンディに届ける為である。

因みにそのお茶の茶葉は、なのはから贈られた翠屋で使われているのと同じもので、当然、甘党のリンディに合わせて砂糖も甘味料も多めに着いている。

フェイトもさすがに当初は、リンディの甘党趣味には引き気味だったが、好みは人それぞれで自分で自分に言い聞かせ、この頃にはもう耐性が着き慣れっこになっていた。

逆にそれだけ糖分接種して体を壊さない、提督の鋼の肉体に内心羨望と感心を抱いていたりする。

一度試飲してみたが、案の定嘔吐しそうになったのは苦い経験だがさてと、色々と忙しくてごめんなさいね、事件以来、余り話もできなくて」

「いえ……その忙しさも、事件の後処理でしょう」

「そうね……それから……勇夜君ともなのはさんとも、リアルタイムでお話できなくて……なんだか謝ってばかりね」

「きまりはきまりですから、ちゃんと守ります、なのはとビデオメールでのやり取りができるだけでも、十分ですから……」

できれば……一時的であるとしても、彼がこの次元世界から行ってしまう前、なのはの時と同じく、もう一度話をしたい、だが今の扱いだけでも十分贅沢な立場なので、強くは言えないのが実状。

「お母さんの容態はどう？」

「前より環境が良くなったおかげで、元気にしています、体のあちこちに移った腫瘍も、ほとんど取れたそうなので」

「そう、それは良かったわ」

事件の中心人物であるプレシアは、病で余命が現状数年ほどな状態なため、専ら裁判にメインで出頭するのはフェイトが行っていた。

「で、リンディ提督、お話と言うのは？」

「そうだったわね、勇夜君のことなんだけど…」

事件が終わってからも、彼は囑託魔導師の立場で、『魔導殺し』の異名を存分に轟かせる活躍を続けていた。

先の約束通り、勇夜の正体が管理局では『マウンテンガリバー』と呼称されている光の巨人、ウルトラマンゼロであることは内密にされている。

現状このことを知ってるのは、ナカジマ家の面々と、アースラクル―を含めた事件の関係者のみ。

表立った破壊行為をせず、大規模な次元災害やロストログアなどで凶暴化した魔法生物の暴走などの事態に突然現れ、事態を収束させては去っていく不言実行を地で行くゼロに対し、局内での評価は、危険視する者、彼と平和的に接触を試みるべきだと言う者、中立立場の者で、平行線な状態は続いている。

それでも市民、特に子どもたちの間で、何の因果か偶然か、最近では憧憬と尊敬の意を込めて――

### 《ULTRAMAN》

――と呼ばれるようになるなど、決して悪い方向に行っているわけではない。

そんな、どちらの姿でも、〴〵人として、自分が精一杯できることを続けていく彼にフェイトは胸躍らせている一方。

「明日…あなたのお姉さんを連れて、故郷に帰ることになったの」

「……………そう、ですか」

彼がふるさとの医療技術で、アリシアを蘇らせるために帰省する。

それは前から、決まっていたこと……せつかく故郷の場所が分かったのだから、今でも帰りを待っている彼の先輩や仲間、そしてお父さんのウルトラセブンのためにも、帰ってあげた方がいいとはフェイトだっけ思っている。

でもやっぱり、別れも言えない今の立場が、恨めしいとまではいかないが、残念でならなかった。

「フェイトさん？」

沈み気味になっていたフェイトにリンディは表情を曇らせながら



尋ねた。

「分かっています……私が今、どんな立場なことくらい」

胸を握りしめ、鼓動を感じながら答えるフェイト。

今でも……彼のことを考えると、慕情が溢れて、今までの彼との思いが鮮烈に浮かび、嬉しくなると同時に、目が潤むほどせつなくなる。

会いたい……もう一度ちゃんと会って、見送ってあげたい。

「で、明日は丁度、フェイトさんを案内役として、アルトセイムを現地調査する日だったでしょ」

「は……はい」

それと彼のことかどうい関係があるのか……次にリンデイが発したことにフェイトは驚きを隠せなかった。

翌日。

「あ……このそよ風と緑の草原、久しいね」

「そうだね、アルフ」

「久しぶりの故郷なのは分かるが、遊びに来たわけじゃないんだぞ」

「分かりましょ……鉄頭さん」

「君までその名前で呼ぶのか……」

「まあまあ……クロノ」

一見すると、まるで家族のピクニックの風景にも見えなくはないが、クロノの言う通り、ここにいる一同は遊びに来たわけではない。今フェイトたちが、調査の名目で来ているこの地はアルトセイム、時の庭園がかつて停泊していた地、フェイトたちにとって、生まれ育った故郷だ。

もうかれこれ一年ぶりの里帰り。

やっぱりいざ戻ってくると、脳裏に蘇ってくる。

すれ違ってばかりだった母と自分。

後にアルフとなる瀕死の狼の子との出会い。

リニスの魔法の課外授業。

アルフと一緒に飛んだ空。

とある雪の日の、リニスとの別れ。

辛い思いもあるけれど。

自分、フェイト・テスタロッサと言う名の一人の人間が歩んでいた、確かな足跡がちゃんとここにもあったんだと思うと、感慨深くもあつた。

「アルフ、あれ…」

「ん？」

フェイトが草原のとある方向を指さし、アルフはその先に視線を移すと。

「あつ…」

狼形態のアルフによく似た体毛と姿を持つ、狼たちの群れがフェイトたちを見つめている。

紛れも無く、アルフの素体元になった種類の狼たちであった。

「……元氣だったかい…」

「アルフ、ひよつとして…」

アルフの反応から、フェイトは彼女の前世とも言えるあの『狼の子』がいた群れなのか？ と聞こうとした。

「いや…なんとなくそう思っただけ……あつ…」

狼たちは視線を外し、地平線の向こうに消えていった。

まだ自分たちは、生まれて、そんなに経っていない。だからこんなことを言うと、年寄りから、まだ若いのにとかわられるかもしれないけど、どうしても言いたかった。

生きてるってことは、思わぬ巡りあわせ…… “出会い” がある  
と。

生前狼だったアルフは死病を患ったことをきっかけに、フェイトと  
出会い。

そのフェイトも、地球で、運命的とも言える出会いを幾つも果たし  
た。

「フェイトさん」

「はい？」

「勇夜君、この先にある岩場に待ってるそうよ」

「はい…じゃあ行ってきます」

思い出に浸ることも悪くは無い。

でも、自分はそのだけのためにここに来たわけじゃないのだ。

表向きは現地調査だけだ。

思い出と絆を力にしながら、自分の手で未来を掴むことを、教えてくれたあの人の元へ、フェイトはひた走っていった。

しばらく駆けると。心臓の鼓動は早く反復し、やや荒くなった息が口から流れていく。

考えてみれば、こんなに走ったのは久しぶりかもしれない。

走るより、飛ぶことの方がずっと多かったから。

飛ぶことは好きだけど、何だかこうして走るのも悪くない気がした。

「あっ…」

何かに目を留め、フェイトは駆け足を止めた。

草原の真ん中に、ぽつりと一人佇む、岩場。

その上に座る、風のさざ波で揺れた見覚えのある艶やかな黒髪のポニーテールが印象的な、後ろ姿が見えた。

彼、少年はこちらに振り向く。

鋭い吊り目ながら、中性的で凜とした顔立ちの少年、諸星勇夜。

「勇夜！」

そのまま全速力で、彼の許へ一気に駆け寄った。

「よっ、元気そうだな」

彼は相変わず、表面はぶつきらぼうだけど、暖かい口調でフェイトを出迎えた。

「うん…」

どうしよう…いざ彼の顔を直視したら、また心臓がドキドキしてきた。

顔もまた、熱を帯びて紅くなる。思考もその熱でおかしくなりそうだ。

「どうした？ 座れよ」

「あ……うん」

彼の言う通りに、フェイトは勇夜の隣に座る。

そう言えば、会うのも久しぶりだけど、二人きりなのは、もっと久しかった。

あ、今ここで気づかなきゃよかった。

はつきり意識したせいで、頬の熱がまた上がりそう。

思い出せ、実際この場には、他に人がいることを、勇夜のパートナーであるリンク——ウルティメイティーズ、彼女の中で眠っている、アリシア姉さん。

落ち着いて、落ち着こうと、何度も言い返す内、何とか……高鳴る心は沈められた。

でもまだ心臓は、手を置かなくてもはつきり感じるほど鼓動が速い。

「綺麗なところだよな」

「うん……」

「エスメラルダの草原も、こんな感じだったな」

「エメラナ……さんの星のことだよな」

「ああ」

ミラーナイトがかつて騎士を務めていた王制国家の星。

エメラナとは、その星の王国の王女さまである。

ゼロの記憶越したが、彼女の姿をフェイト見たことがあった。

清楚でか弱そうだけど、芯の内は一本通ったしなやかさを持った人、それがフェイトの彼女への印象。

エメラナだけじゃない。

あの星がある世界で、ゼロと絆を繋いだのは、他にもいる。

惑星アヌーで、逞しく生きる二人の兄弟たち。

かつてゼロと一心同体となった兄のラン、その弟のナオ。

彼にとって、今を生きる力の源の一つでもある、大切な人たち。

「どうしてるかな、そのランさんも、ナオ君も、エメラナさんも」

「こつちと同じくらい時間が経ってんなら、もうみんな大人になってるよな……俺は一度……子どもに逆戻りをしたってのに」

「勇夜？」

彼に目を向けると、自分の手を憂いを秘めた目で見つめる勇夜がそこにいた。

その目はどこか、寂しそう。

自分と初めて会った時もなのはからは、自分はこう映っていたのだろうか？

「いや…なんでもないさ」

が、彼の沈痛な面持ちは直ぐに笑顔へと変わった。

さつきまでの勇夜の横顔が気になりつつも、フェイトは目の前に広がる緑と青空を見上げた。

「この前ね、リニスが私宛に書いた手紙、読んだんだ」

「なんて書いてあったんだ？」

「色々…私がどう生まれて、母さんが何をしようとしていたことを知って——」

やがて話題は、フェイトの家庭教師のこととなる。

使い魔として生まれた当初から、フェイトを愛情込めて、しっかりと育てつつも、疎遠な二人の仲をなんとか仲介役として取り持とうとしたリニス。

しかしある時知ってしまった。

『フェイトの出生』も『プレシアの心の闇』も…プレシアの病魔にも…それを知ったりリニスがその真実と自分たち親子の狭間で苦悩と葛藤を繰り返したことも…

「ありがとうね」

「いきなり何だ？」

「リニスの願い…勇夜とみんなのお陰で、叶えられたから…」

そして…フェイトが…どんな絶望にも。

悲しみにも。

苦しみに。

立ち向かえる強さを…持てるよう。

フェイトとプレシアが本当の親子になれること。

同じ速度で一緒に歩み。

真っ直ぐ向き合ってくれる友達ができること。

そして笑顔を忘れずに生きていけることが、できるように。

そんな祈りと願いが、文面に綴られていた。

「だから……一度ここに来たのかもな」

「え？」

「なぜかき、あても無いのに、何かあると思って前にも来てみたんだよ、そしたら、あの日記と手紙だけ……ひよつとしたらさ、リナスが俺に見つけてほしいって……願ったからかもしれないね」

「うん……そうだね」

非科学的な話かもしれない。

でも無性にそうだと信じられた。

この次元世界意外にも世界が無数あって。

ゼロみたいな巨人だって存在してるんだから……巨人……ウルトラマン。

異……世界……ふといきなり……前に母が自分に話したことが頭をよぎった。

プレシアは……前に……二人の科学者から、ある技術を提供されたという。

一つは、プロジェクトFATEの基礎理論。

もう一つは……ウルトラマンゼロの戦闘データと……ベリアルがゼロを模して作り上げたロボット。

ダーククロプスの設計データ、さらに単独次元移動が可能なコピー、《時の庭園》。

そして、ウルトラマンと同等、或いは上回る巨体を持つ怪獣を操るためのアイテム……バトルナイザーに関するデータだった。

どちらもメールでのやり取りで、実際に顔を合わすことは無かったとのこと。

前者はその理論を独自に発展させフェイトが生み出され。

後者は、まずゼロのデータを組み込んだダーククロプスを作成。

そのデータを元に、通常の傀儡兵より機敏に動くロボット兵を開発、もつともAIなどの自立稼働で課題が残り、結局なのはたちには

一部を除きやられっぱなしに終わった。

さらに、バトルナイザーのシステムを解析し、多数のロボット兵を格納、召喚、操作し、同時に庭園の駆動炉のエネルギーをプレシアに供給させ、一時的にSSクラスの魔力運用を可能にする特殊補助デバイス『サポーターディングデバイス』を開発。

それらの成果の一部のデータと、F計画のデータをその科学者に渡したそうなのだ。

最初からそういう取引だったらしい。

次元跳躍攻撃も、そのサポーターディングデバイスの賜物だった。

もつとも、これだけの未知の技術をここまで扱えたのは、プレシア自身の技術者と魔導師としての高い技量と力量の賜物でもある。

さらに、母によれば、あの夜現れた怪獣たちも、あの科学者の差し金ではないかと推測していた。

どうやら、あの時は自分がどこまで怪獣を操れるか、勇夜たちを使って確かめるために寄越したらしい。

でも現状では、あくまでこれはプレシアの推測、その域を超えていない。

だが……ただ一つ言えることは……ゼロ以外にも彼がいた世界から、何者かがこちらに来て、潜んでいること。

そしてその何者かが、良からぬことを考えているということ。

もし、その良からぬことが現実になっても、勇夜——ウルトラマンゼロは毅然と立ち向かう、と断言できることだった。

「勇夜、一つ……聞いていいかな？」

「どうした？」

「この次元世界のこと……どう思ってる？」

「……………」

勇夜はアルトセイムの風景へ目を向けたまま答えない。

「やっぱり……嫌い？」

「なんでそんなこと、聞くんだよ？」

「ごめん、そ……その……………」

《魔法》に必要以上に固執する実態も含めて……彼が今の管理世界のシ

システムに、疑念と不信を抱いていることは知ってる。

私も今回のことで思い知らされた。

魔法も万能じゃないって……こと。

たとえば、勇夜や光は、魔法を使わずに自分を打ち負かしたし……魔道師の私では、虚数空間に落ちていく母と姉を、ただ泣きながら、見ることしかできなかつたし……アースラの装備では、暴走するジュエルシードを止められず、地球がある次元世界が、地図から消えていたかもしれない。

そしてなまじ別の世界に触れた自分は知ってしまった……世界には、眩しい光もあるけれど……暗く淀んだ闇も一緒にあることを。

「まあ……言いたくないけど、色々爆弾を抱えてる世界だとは……思ってるさ」

時空管理局が、設立されてから百年ほど……日に日に、文明を持った世界の存在が次々確認され……場合によっては、管理世界の仲間入りを果たすか、管理外として放任されたりしている。

同時に世界が繋がるほどに、次元犯罪も日に日に悪化し、増加の一途を辿っている。

一部を除き、魔法以外の力の保有は禁止、特に管理世界では質量兵器と称される火薬などを使った兵器群は、異常ともとれる嫌悪で排除されていた。

相手方の世界から見れば、極端な話し他人の家に土足で踏み込む態度で他の次元世界を自らの管理下に置き、自分色に染めていく局の行為は、反発を招き、あちこちの世界で火種は起きていく。

そのくせ、実質使える戦力を限定させているのが仇となり、後手後手に回ってしまう状況を頻発。

世界はどんどん広がっているのに……管理局は自ら撒いた火種の始末に右往左往するという悪循環を繰り返して、行き詰まった状態に追い込まれている。

フェイトはリンデイやクロノなどの局員の存在のおかげで、勇夜ほど不信を抱いてはいないが……今のままじゃ不味いとは漠然と感じていた。



「今のこの次元世界のシステムじゃ、ガタがとうに来てんだよ……」

だからフェイト自身、彼のこの言葉には、賛同している。

社会の仕組みを、ちよつとずつでも変えていかなければならない必要性を……でなければ……以前の母みたいに、壊れて。

「どこかで見えない時限爆弾が、少しずつだけ……確実にカウントダウンを刻んでんのさ……」

「じゃあ……このまま放っておいたらどうなっちゃうの?」

「………今の世界の枠組みをぶつ壊そうとする連中が、管理局に喧嘩を吹っ掛けるだろうな……」

勇夜の言う爆弾が爆発する時……それは………つまり。

「革命と……戦争?」

「そう……おまけにその相手は馬鹿にデカイ組織だからな………それらに対抗する組織もどでかくなって………下手するとロストロギアを躊躇わずに使われて、泥沼に落ちねえとも限らないし………」

「そんな………」

下手をすれば、地球で起きた二度に渡る世界大戦と、古代ベルカの戦乱以上の惨劇が起きる可能性があるということだった。

「でも……本当に怖いのはその後だよ……」

「どういふこと?」

「それまでの社会のシステムを壊して、新しく作られた社会ってのは………自分たちの正しさを証明させる為にさ、過去(むかし)を徹底的に否定する………いわゆるこっちじゃ質量兵器と呼ばれてる武器が使用を禁じられてんのは、昔の戦乱で大量に使われて、大勢の人が惨い死に方をしたってこともあるんだが………」

「正しさを示し続ける為の………生贄にされてるってこと………」

「………当たり前」

それまでの仕組みを、悪と断じ、足蹴にして嘲笑いながら、今の社会を正しいと主張し続け、間違いを一切認めない。

「己つてのを顧みれないまま………そんな状態が………何十年………何百年も続けばどうなると思う?」

「歴史が………繰り返し返されちゃう」

何と…言うことだろう。

自分のいるこの世界が、危ういバランスで、その平穩を辛うじて保っているが、遅かれ早かれ…いつそれが崩壊して爆発してもおかしくない状態なのだ。

そして仮に多大な犠牲を果てに、勝者たちが新たな枠組みを作っても、一歩間違えば、敗者と同じ末路を迎える。

そんな惨劇の歴史が…いつまでも続くことになる。

きつと『侵略者』から見たら、この世界ほど侵略し甲斐のある世界はないだろう。

社会の地盤（システム）にあちこち罅が入って、今にも崩れようとしているのだ…そんな状態にさせてる人間なんかより、自分らが支配する方が相応しいと、攻めてこない保障はない。現に『何者』かが目を付けている。

「ごめん…偉く物騒な課外授業になっちまったな、柄でもねえのに何言ってるんだか」

「謝らなくていいよ…怖いことだけど、無関係にすむ話じゃないことは、私にも分かるよ、むしろ今知ってよかったと思ってる」

「…じゃあ…さっきの質問の答えだけどさ…」

「…うん」

ほんの少しの溜めを置き、勇夜は口を開く。

「…嫌いに…なれるわけねえよ…」

「勇夜…」

「ごつちにだつて…家族も仲間も…友達と呼べるやつだっている…そして何より…フェイトだっている」

フェイトを見つめて答える勇夜の微笑みは、普段の印象を打ち消すまでに穏やかで朗らかだった。

「え？」

フェイトは一度頭が真っ白になる。

「だから嫌いじゃないよ…むしろ大がつくほど、この世界のことは好きさ…だからさ…みんなに気づいてほしいんだよ…手遅れになっちまう前に…」

温かだけど、どこかせつなさど寂しさが感じられる笑みで、彼は答えた。

「どうやら、彼がこの世界に希望を持つ一端となる一人が、自分らしい。」

「何だか照れくさくなって、体を丸めた。」

「一方で、喜ばしかった。」

自分たちの住むこの世界を…同胞と殺し合いながら…壊してしまいう前に…過ちを犯してしまう前に…それを何度も繰り返し返す、無間地獄に嵌る前に…自分たち人の闇と向き合いながら、少しずつ、良い方向に変えていけるように。

「彼は今でも、希望を諦めずに走ってる。」

「たとえば…一人孤独な漂流者でも——突然、胸に引っかかりを感じ、ささくれた。」

孤独…??

一人…??

次に、心中で起きたのは、寒気。

今季節は春で、周りの空気はこんな暖かいのに、感じる悪寒。

自分が、恨めしくなった。

どうして…どうして今気づいてしまったの…??

なんで今、気づけなすぎやならなかったの?

「これから…せつかくこれから…笑って勇夜を、見送りたいかつたのに…」

「どうして? どうして?」

「ある一つの現実。」

それに気づいてしまったことで芽生えた不安が、暗雲のように心を埋め尽くし、冷たい風が吹き荒れているさえ錯覚させられてしまう。

「フェイト?」

「勇夜からは、現状のフェイトの顔は前髪に隠れて見えていない。」

駄目…駄目…駄目…駄目…駄目…駄目…駄目…駄目…駄目…  
目駄目駄目駄目駄目駄目駄目駄目駄目駄目駄目駄目駄目駄目駄目駄目

目駄目駄目駄目。

今勇夜の顔を見たら、自分を抑えられない。

見ちゃ駄目……見てしまったら……そうしたら……私。

顔も体も、震えながら、必死に俯かせながら、何度もそう言い聞かせるのに……体が言うことを聞いてくれず、顔を見上げてしまった。

自分を心配する目で見つめている勇夜を、瞳に写してしまった。

何かが、自分の中で弾けた。

「……っ………フェイト!?!」

驚きの声を出す勇夜。

彼が驚愕し、戸惑うのも、無理は無い。

なぜなら、怯えたように震えだしたフェイトがいきなり、彼の胸に飛び込み、抱きついてきたからである。

「お……おい……どうした?」

小さな体で、力の限り彼を抱き締める彼女。

「ど………しい………て」

腕の力がより強ませながら、嗚咽と滴る水滴の中から発せられる。

「え?」

「どうしてなの?」

悲痛な想い。

「フェイト?」

「どうして、一人なの?……どうしてゼロが戦い続けなきゃいけないの?………どうしてそこまでして………みんなを守り続けなくちゃならないの?」

彼にとつて、不慮の事態で迷い込んだ以外は、まったく縁もゆかりも無かったこの次元世界。

それどころか、ウルトラマンの有り余る力と巨体の前に、人々が恐怖でおののき、その存在を抹殺するかもしれないのに……

それに脅えて、自分の正体を隠しながら、生きていかなきゃいけなかったのに……自分を孤独から救ってくれたこの人は、『諸星勇夜』としては一人じゃないけど『ウルトラマンゼロ』——ゼロユウヤ・ヴェアリスト』としては、この世界では、誰よりも孤独なのに……

一人なのに……　なのに……なのに……なのにそれでもゼロは……  
この世界を……

わたしたちがいるこの世界を……大好きだつて言ってくれて、少しでもこの世界の滅びの運命を食い止めて、良い方向にもっていかうと、必死にもがいて、足掻き続けている。

本当は自分たちが抱える重しを、一人一人が自覚して……みんなで立ち向かわなきゃいけないのに……わたしたちは、それを全部ゼロたちヒーローに押しつけて……のうのうと知らないふりをしてる。

そうやって一部の存在を踏み台にして、犠牲にしながら、それを憂おうともせず、歴史を繰り返して行く。

人間不信になってしまえば、残酷な人々が溢れる世界。

それでも彼は諦めない……彼がどんなに傷ついても、人の心の中にある、光を信じて——立ち向かっていくだろう。

「そんなの……そんなの酷いよ……酷過ぎるよ」

だからこそ嫌だ……だからこそある拒絶の感情が溢れる。

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ……嫌なのだ。

許せない……許したくないのだ。

押し付けるだけで、攻めてばかりで、何もしない、しようとも考えずに生きるのは。

自分の手は罪で汚れているけど、そんな無自覚な悪意を抱えた罪深い人たちの一人にはなりたくない。

そうやって、彼の願いを無にしたくない。

ウルトラマンである彼が、みんなの手を差し伸べるなら、誰が彼の手を差し伸べるの？

誰が彼の心を支えてあげるの？

誰が彼のことを護ってあげるの？

誰が彼の光になってあげるの？

「私も……なりたくない……」

「フェ……フェイト……」

「私もなりたくない……ゼロの光になりたい……」

涙と哀咽で、舌足らずになった喉から声を精一杯絞りながら……細く華奢な腕に力を込めながら……彼の力になりたい己の心境を、彼に伝える。

「お願い……」

できるなら、ゼロが自分にしてくれたことを、私もしてあげたい。世界に、ヒーローは必要なかもしれない。

ウルトラマンみたいなヒーローたちに比べたら、私たちは無力なのかもしれない。

でも、彼らに頼ってばかりで、何もせず、都合が悪くなれば責任転嫁して支えてすらあげないのは、一番冷酷で無慈悲で罪深いことだと思うから、せめて……少しでもいいから、支えたい。

「フェイト……分かったから……フェイトの顔を見せてくれ」  
「……うん……」

言われた通りに、フェイトはゆっくり、顔を彼の体から離す。

色んな想いが巡ってめちやめちやになり、混沌の渦を巻いていた思考が落ち着きを取り戻し、急に取り乱した自分が恥ずかしくなった。今どんな顔をしているのか、嫌でも分かる。

雨に打たれた様に見えるしまうくらい、涙で濡れて、真っ赤に腫れて、ぐちゃぐちゃになった自分の顔。

「ごめん……わたし……いきなり取り乱して……」  
なんて……ひどい顔……そう思わず自嘲してしまう。

「はあ……」

そんなフェイトを、勇夜は自分の手を彼女の頭に置き、淑やかにな

でた。  
「いいさ……ありがとう……でも、今はそう思ってくれただけで……充分だぜ……今のフェイトには、越えなきやいけないハードルが、たくさんあるだろ？」

真摯に語りかける彼に、フェイトは無言で頷き応じた。

今の自分は、本当に無力だ。目を背けて、逃げてばかりだった自分に、家族と一緒にやり直せるチャンスをくれたこの人に、何もしてあげられない。何も返してあげられない。助けてあげることさえできない。

こんなに、悔しいと思う気持ちは初めてだった。

でも……いつまでもこうしてはいられない。

流しに流した雫を拭う。

今は、見ていることしかできない。想ってあげることしかできない。

そして……見送ってあげることしかできない。

だって今日は、その為に、ここにいるんだから。

「もう大丈夫………姉さんを、よろしくお願いします」

私たち親子との約束を果たす為に、旅立つ彼を、フェイトは見送りの言葉を送る。

直後、彼は何か思い立った顔をする。

自分の髪を縛っていた髪留めを外した。

解かれて、下ろされた艶のある長髪が、そよ風になびく。

「……………」

口を開かせたまま、目が離せなくなるフェイト。

一度見たことがあるのに、髪を下ろしている時の勇夜は、この上なく美しかった。

男だとか女だとか言った、性なんて概念を超越した美しさがそこにあった。

いつもの無愛想で吊りあがった目じりは平行に流れ、神秘性を感じさせる趣とオーラであふれ、への字な唇はアルカイツクスマイルと呼ぶに相応しい、綺麗で柔らかな笑みをたたえ、天使の輪が見えるほど整われた黒く長い髪も見事に調和をとってアクセントの役目を果たし、群青色の瞳は海よりも見る人を吸い込ませる透明感を発しながら、寶石よりも眩く光を反射させている。

平常時は粗暴で棘のある佇まいと態度で隠れ、今はその様相を惜しげも無く晒されているその美しい容貌に、フェイトは思わず見惚れて

いた。

「手を……」

「あっ……うん……」

勇夜の言葉に我に返ったフェイトは、言われた通り掌を差し出すと、彼が今外したその髪留めを勇夜は彼女の手に置いた。

「これって……」

金色の縁で文字が彫られた黒い髪留め。フェイトがこれを目にするのは二度目。最初は、勇夜初めてフェイトの前でゼロに変身し、自分をかばって倒れたあの夜。

「何て書いてあるの？」

彫られた文字の意味を聞いてみた。

見たこと無い文字だから、ゼロの故郷の言葉であることはすぐ分かった。

「光の国の言葉で、『ZERO』だ、こっちの世界の父さんと母さんが、誕生日プレゼントになって、オーダーメイドで作ってもらったもんさ」「いいの？ そんな大事な物……私が預かって」

「大事なもんだ……大事だからさ……」  
「ここに」に帰ってきて、また会えるまで、フェイトには、持っていてほしいんだ」

「……………」

今自分にできるのは、彼が帰ってくるのを待つてあげること。

今はそれしか……それしかできないのなら、待つてあげよう……

「うん……分かった」

そして彼は、優しくフェイトに微笑みながら。

「じゃあ……行ってくる」

ゆっくりその場を立ち上がり、フェイトと距離をとると、リンクからウルトラゼロアイを取り出した。

「デェアー！」

それを手に取って目に翳し、光が彼の体を包み込む。

その輝きはどんどん大きくなり、光のウネリの中から、ウルトラマンゼロが姿を現した。

フェイトが立っている地面を見下ろすゼロ。



フェイトもゼロの顔を真っ直ぐ見つめている。

時間にして、数秒ほどの短さだったが、当人たちは、それよりもっと長く感じていた。

そして最後に一言。

また……会えることを祈りにこめて……微笑みながら。

「行ってらっしゃい」

と、ゼロに伝える。

その彼女の想いを受け取り、静かに頷いたゼロは、空に目を向け。

「シユア」

腕を広げて、ゆっくりと飛び上がった。

フェイトは、ゼロが飛翔したことで、吹き荒れる風を身に受けながら……初めての親友が、別れ際にそうしたように、草原を駆け抜け、大きく手を振りながら、地平線の向こうへと、段々小さくなっていく彼の雄姿を、笑顔で見送る。

やがて、ゼロの雄姿は空彼方へと吸い込まれ、消えていき、見えなくなった。

フェイトは、彼が飛び立っていった後も、しばしの間……ずっと、ゼロが飛び去っていった青空を見上げていた。

「ゼロ………」

彼の髪留めを、大切に握りしめながら……そつと一言。

「……………ありがとう………」

再会の未来を……願い、想い人への感謝を、送った。

第一部、完

## 幕間編

### ゼロの恥ずかしい里帰り

宇宙に存在する星の中で、光を発する惑星と言われれば、誰もが恒星と答える。

だが中には、自ら光を放つ惑星も、この次元の宇宙には実在する。諸星勇夜ことウルトラマンゼロ——ゼロユウヤ・ヴェアリースターの故郷（ふるさと）の一つ。

M78星雲と呼ばれる星系、地球を含めた宇宙を、今もなお守護し続ける光の巨人たちの住む星。

惑星アルトラ、通称ウルトラの星、もしくは光の国。

その星の周辺に、光でなぞられた文字、《ウルトラサイン》が上げられた。

もう、11年にもなるんだよな…… “あの子” たちのいる世界に飛ばされてから。

宇宙という海の中を、流星となって飛ぶゼロはそう独白していた。

今から11年前、彼はヤプールと呼ばれるウルトラ一族と因縁がある異次元人が生み出した、ゼロたちの世界ではどこの惑星、銀河でも生息している巨大生物、怪獣、その怪獣を超える怪獣——『超獣』、その中でも最強と呼んでも過言ではないUキラーザウルスとの戦闘で別の世界に飛ばされてしまったのである。

俺には相棒のリンクと言う次元を超える術は持っていたのだが、現在地と生きたい先の位置も距離も分からない迷子の状態から、故郷に帰還するのは至難の技で、おまけに幼児退行してウルトラマンへの変身ができなくなってしまうから、こうして帰ってくるまで11年の歳月を要したのである。

実を言うと、ウルトラ一族にとって11年はそんなに長い年月ではない。現生する生命体の中で長命な彼らは、何万年もの時間を生きる

種族だからだ。

俺はまだまだ若いガキンチョではあるけど、それでもあちらの世界の地球の西暦より歳を重ねている身であった。

とはいえこの11年は、人間として、それも体感時間が長い子どもとして生きてきた。

下手をすると、磁気嵐が吹き荒れる境界の星で修行していた頃より、一日を長く感じる日々だった。

でも、その世界で「諸星勇夜」として生きていく日々も、悪くないと思っっている。

『マスター、間もなくM78星雲圏内に入ります』

「了解した」

あちらの世界に迷い込んだきつかけで、意志を持った相棒のリンクーウルティメイトイージスの言葉で、思い出に浸っていたゼロは意識を現実に戻した。

眼前には黄緑色に点灯する惑星アルトラ——光の国。

この日、久方ぶりに俺ことウルトラマンゼロは、故郷（ふるさと）に帰ってきた。

それから数週間後。

「ほら早く立てー！ 弛んでるぞー！」

ここは光の国にある、宇宙警備隊員の卵となる訓練生たちが日夜訓練に励む訓練場——ウルトラコロセウム

「相手から目をそらすな！ 外れた時は直ぐに合わせろ！ 敵はボケえーとしてる奴を見逃さなねえんだぞー！」

「は、はいー！」

そこでは地球人換算で中学生に位置する訓練生ら相手に組み手と言う名の扱きで教導しているのは何を隠そう、ウルトラマンゼロだ。

光の国に帰ってからというもの、彼は時々臨時教員として後輩たちを扱き。し、宇宙パトロールをこなす日々を送っていた。

ちなみになぜゼロが、臨時で教官を務めているのは、本人直々の希

望からであった。

理由は無論のこと、自分やベリアルのように「力に溺れ、心が奈落に堕ちてほしくない」、『どんな力を持つのが、自分たちは神では無い、自分以上にはなれない存在』であることを示したかったからであった。

その教習はやはり師匠譲りで手厳しい、少なくとも訓練中は一切の泣き言を許さない。

実は内心、彼は叔父であるコロセウムの教官に志願しながらも不安もあった。

ある分野でのエキスパートが、その分野を教えることまで優秀とは限らないという話を前に聞いたことがあったからだ。

今でもまだ若いゆえに訓練校時代では、荒くれ反抗児ながらも、努力家で成績がトップクラスであったので、逆に生徒をやさぐれさせてしまう懸念もあった。

これが地球人なら、大学卒業したての教育実習生（せんせいのためご）が、中学生相手に授業するようなものである……と言いたかったが、ゼロの場合はもっと若い。

人間としての体感時間の11年で、精神面はそれなりに齢を重ねたが、それでも5900歳は地球人としては高校生の年代。

ただ、以前アルフを鍛えていた時の経験が生きたのか、評判は上々だった、こともあり、一回限りから定期講習へと昇華。

生徒たちも飲み込みが早く、ゼロの鬼訓練に必死に食らいついている。

宇宙警備隊隊員を目指すだけあり、確かな意志と覚悟と向上心が彼ら、隊員のたまごたちにはあった。

「よし、午前の教習はこれで終わりだ、解散！」

「はい！！！！」

ゼロの号令で整列していた訓練生は、各々バラバラに解散していった。

「今日も精が入った教導であったな、ゼロ」

そこにゼロを呼び掛ける巨人が一人。

声の主は、サイズこそウルトラマンと同クラスだが、胸部は白銀の装甲、四肢は赤いカラーリングで、メカニカルで洗練されながらも、メカ特有のごつく、屈強な容姿をし、西洋甲冑を想わせる頭部と、ウルトラ一族より小さめで、カメラレンズが見える黄色い瞳が埋め込まれた顔つき。

だいたいの方は、一目で彼が実はロボットであることに気づくだろう。

「ジャンボット、まあ……前科者は俺とベリアルだけで充分さ」  
ジャンボット。

ウルティメイトフォースゼロのメンバーで、ウルトラマンが存在する多次元（マルチ）宇宙（バース）の一つに存在する、こことは違う次元世界、通称アナザースペースの惑星エスメラルダ、王制の国であるそのエスメラルダの王家に代々仕え、宇宙船（スターコルベット）に変形でき、『鋼鉄の武人』と異名をつけられた自立AI搭載型巨大ロボットだ。

ちなみに宇宙船の形態をとっている時は、ジャンバードと呼ばれる。

名前の通り、鳥とよく似た主翼と機首が特徴的で、とあるムードメイカーで三枚目なチームメイトからは「焼き鳥」と名付けられてしまった。

学生なら学級委員長か風紀委員など立ち位置に分類できるほど、真面目一徹で堅物なジャンは彼にそう言われる度、過剰に反応して突っ込み、地球の文化の一つである漫才的な口論になることが、散り散りになるまでのチーム内での風物詩であった。

実はジャンボット、かの次元振の時、幸いなことにM78星雲の宙域に飛ばされていたのである。

とは言え、ゼロとミラーナイトが変身不能と幼児退行するほどに消耗したように、彼も機体に多大なダメージを受け、光の国で修理を受けることになった。

その際、動力機関を中心に、ジャンたちの世界にしか無いエメラナ

鉱石以外のエネルギーで活動できるように改修を受けている。

「父上殿も誇りに思ってるはずだ…」

「うっ……あんま…父さんのことは話題にしないでくれ……若干…トラウマなんだ…アレ以来……そりゃ……嬉しかったんだけどさ」

ゼロは明後日の方向へ目線と飛ばしながら、若干歯切れ悪い口調で両手の人差し指同士を突き合っていた。

「あ…それはすまなかったな……あれは機械であるわたしから見ても微笑ましくもあり、かなり気恥ずかしくもある光景だったからな」

ゼロの実の父で、伝説のウルトラ兄弟の三兄である戦士——ウルトラセブン。

彼は長いこと、ゼロに父自分であることを隠し、陰から見ていることしかできなかった。

その反動ゆえか、普段は絵に描いた好漢で、かつ戦闘時は勇ましく戦う戦士だが、ゼロの前ではかなり心配性で親馬鹿になってしまう性質になっていた。

遡ること、俺が里帰りをした当日。事前にウルトラサインで、自分の安否と帰還の旨を伝えたため、光の国では、かつてゼロが初めて異世界に旅立つ日と同じく、ウルトラ兄弟、ウルトラの父、母、警備隊員ら、多くの国民が、遙か昔に消え去った恒星の代わりに光の国を照らす塔、プラズマスパークタワー前で待ちわびていた。

驚ろかされたよな。いきなり帰ってはびっくりさせるので一応予め連絡はしていたけど、行方知れずだった自分を出迎えるのに、こんなに大掛かりなイベントになるなんて、どうも気恥ずかしくなる。

羞恥の気持ちを隠して、タワーの前に降り立った。

そして、最初に目に入ったのは、ゆっくりとゼロのもとへと歩み寄る、愛する彼の父であるウルトラセブン。

ウルトラ兄弟の中でも、セブンを含めた6人が着ることを許された

ブラザーズマントを羽織ったその姿は、勇士としての貫禄に溢れていた。

親子の距離が、手が届く範囲まで縮まる。

「おかえり……ゼロ」

やばい……先にただいまって言うておきたかったのに、先を越されちまった。

くそ……やっぱ実際口にするのは恥ずかしい。喉に詰め物が、詰まったみたいに声にならない。

「その………ただいま……」

でも……あの子たちに想いはちゃんと伝えろと偉そうな口を叩いた身だ。自分もちゃんと伝えなきゃならない。

11年……ウルトラ一族にとってはそれほど長くなくとも……人”にとっては永過ぎる時間。

ずっと“地球人”に憧れていた父にとって、この11年は気の遠くなる時間だった筈なのだ。

そして俺は……眼前の父に対し、初めて、今まで使ってきた呼び方……『親父』ではなく。

「どう………さん……」

と呼んだ。

ちきしよう、恥ずかしくて、ほっぺたが熱くなつてきやがった。

あ……顔はおろか体全体まで熱が回ってきやがる……こそばゆいって、こんな感じなんだな。

そのせいで、父の異変に気付けなかった。

「うあっ!!」

こうして父にいきなり抱きつかれるまでは。

「ゼロ………」

しかもかなり強めで抱き締められる。

「よかった……よくぞ無事に戻ってきてくれた……ゼロ……」

「父さん……気持ちには分かんだけどき……」

「さすが……俺の子だな……」

「みんな見て……があああつあああああああー!!」



“父さん”と呼ばれたことはよほど嬉しくて感極まった為か、公衆の面前での父の強い力の籠もったハグは暫く続き、ゼロは思わず奇声な悲鳴を星中に轟かせてしまった。

この日は俺にとつて、こつ恥ずかしい思い出の一ページに認定されてしまうのであった。

「それでだがゼロ、朗報があつてきた」

「まさか…アリシアのことか？」

「ああ、ウルトラクリニック78本局からの連絡によれば、彼女の魂の完全定着が完了し、バイタルも安定期に入ったそうだ」

アリシア・テスタロツサ。

20年前、ウルトラマンが存在する世界とは違う次元世界群の一つの世界にある惑星、ミットチルダ。

魔力が主なエネルギー源としていて世界で、ある駆動炉の起動実験の暴走事故で帰らぬ人となった女の子。

正確に言うると少し違うのだが、向うの世界の地球で出会った彼女の妹と言える少女との約束で、帰省の際、蘇生させるために彼女を同伴させたのである。

死んだ人間は生き返らない。人に限らず、生物界での大前提とも言える常識。

だがウルトラ一族は、完全ではないにしろ、それを覆した技術を手に入れた。

現在はウルトラ兄弟の一人であるブルー族の科学者。

ウルトラマンヒカリによって開発された——『命を固形化する蘇生技術』、何とも突拍子のない上にぶつ飛んだテクノロジーなので、少し説明が必要だろう。

生物に宿る日本の言葉で “魂” と呼ばれるものは、実は二種類ある。

一つは肉体を活動させる生命エネルギー、ライフ。

もう一つは、意思を宿したエネルギー体、ソウル。

致命的なダメージを受けると肉体はライフを体内に保有することができなくなり、また何らかの影響でライフが大量に体外に出て行く

と、肉体は生命維持ができなくなる……つまり「死」だ。しかし意思を有したソウルは、たとえ死に瀕したとしても暫くは体内に残留している。

命の固化とは、生命力たるライフを固体状に長期保管し、まだソウルの残りつつも亡骸になった肉体移すことでその者を生き返らせる蘇生術であり、これにより宇宙警備隊員の殉職率は格段に下がった。

かのウルトラ兄弟たちもこの技術のお陰で、何度も死の淵から生還を果たしている。無論、100%蘇生が可能という訳ではない、移植されたライフが体に適応できず蘇生の失敗する可能性も小さくはなかった。

幸い、アリシアの場合は好条件に恵まれていた。魔導炉の暴走による酸欠の呼吸困難によるショック死で、肉体のダメージはほとんどなく、また母のプレシア・テスタロッサが身も心も削つてまで彼女の体を保存し続けたお陰で、20年も経過していたのに今でもソウルが体の中に残っていたので、かの蘇生術が可能だったのだ。

ウルトラ一族以外の種族、生命体にこの技術を使うのはアリシアが二人目であった。

因みに、かの蘇生術を受けた最初の一人は、ウルトラ兄弟次兄の戦士と一体化していた科学特捜隊隊員の青年だ。

さて、俺の里帰りの恥ずかしい思い出は、実はもう1ページ刻まれていた。

ウルトラクリニック78では、ウルトラ一族以外の生命体にも治療が行えるように異星人用の外来病棟がある。地球人サイズの人種にも対応した施設だ。

騒動は、ハグの一件から数時間のクリニック内で起きた。

「ゼロ…その姿は…一体？」

父セブンの人間体、諸星弾は、絶句していた。

外来病棟では、施設周辺を遮光バリアが張られている。建物のサイズとプラズマスパークタワー光量の関係上、人間体での活動の方が適しているのです、彼は弾の姿となっている。

「これは仕方なかったんだ父さん、この子の体保(も)たすには、こうしないといけなかったもんで」

そんな弾が放心に近い心境としているのは——口調はゼロそのものなのに、声はフェイトよりやや低め、体格も6歳の女の子で、髪型も金髪。

そう、俺がアリシアと一体化していたということだ。

無論、れっきとした訳柄あったること。

いくらアリシアの体が綺麗に残っていてもそれは一時しのぎ、時間が経てば遺体は腐敗を始めるし、いずれソウルが体から出て行って蘇生不可になってしまう。

その「一時しのぎ」を延長させる方法として、定期的にアリシアと一体化させる必要があったのだ。

アリシアの姿な俺(ゼロ)——勇夜は、そのことを父に説明しようとしたのだが。

「そうか……そんなにもお前は——『女の子』への憧れがあったのか?」

「へ?」

間の抜けた声を上げてしまう、父の発言を理解するのに数秒掛かった。

「いや、確かに前々から、人間体のお前は美人だと思ってはいた、顔ならアンヌにも勝る美貌であったし、しかし……まさかお前がそんな嗜好——」

「い、いやちょっと待ってくれ!」

いけない! 何やら父にとんでもない誤解を与えてしまっている。

早急に解かないとマジでやばい!

「『お前のことをいつでも思っている』などと言っておきながら、お前の心の内に秘めた願望に気づいてやれなかった、すまない」

「お…おやつ…じゃなくて父さん、違うから、そんなんじゃないから、んな願望なんて持ってねえから！　まず話を聞いてくれ！」

「いいのだ息子よ、この程度で愛情は薄れたりはしない、私はどんな姿をしていても、お前を愛しているからな」

恥じらいも臆面もなく、父はそれはそれは眩しい笑顔で言い切った。

対して俺の頭はパニックで霧散になる寸前だ。切迫した状況もあって、父の大き過ぎる愛は、この時の自分には余りに重すぎた。

「だくかくら——違うんだよ!!　この親馬鹿親父iiiiiiiiii!!!」

決死の想いで、この親馬鹿過ぎる父に訴え掛ける。

でも俺は、ウルトラセブンの我が子への『愛』をまだ見くびっていた。

「これはもしや、反抗期までぶり返したか？　いいぞ、存分にぶつかって来い」

「いやあああああああああ————!!」

もはや言葉にすらならない悲鳴を、完全にパニックに陥った俺は病院中に響かせてしまった。

あの後誤解はどうか解けたものの…その日俺は連続で恥ずかしい思い出を作り上げてしまうのであった。

「ウルトラマンゼロ…一生の不覚だ……」

と、内心こんなことを口にさえするくらいに、当然この出来事は消したい記憶の第一候補となった。

そして後に俺は、ネオフロンティアスペースの地球人と一心同体になった際、かの台詞をまたしても零すことになるのだが、まだこの時は知る由もない。

「ただ…意識が覚醒するまではもう少しかかるそうだが、目覚めてからのリハビリも含めば…ご家族の再会までさらに時間が必要だろ

うな」

「そうとんとん拍子には行かねえよ……『生き返らせる方法』があるだけでも、『奇跡』なんだからさ……」

実は以前のゼロにとって、『奇跡』とは呪いにも等しい意味合いな言葉だった。

当時孤児院で生活していたゼロは、物心付いた頃、父も母も警備隊員で殉職した、と聞かされ、この時のゼロは幼いながらも、自分たち家族は『奇跡』を受けるに値しない無価値な存在だと思い込んでしまった。

誰もそんなこと、彼に言ったわけではなかったのに……せめて、自分たちが出来損ないな存在じゃない、両親の汚名を返上させたい……その為に……もつと力が欲しい……誰にも文句を言わせない力が欲しい。

それが、力と強さへの渴望となって、ゼロは光の国の中でも、稀代の反抗児へと歪んでいってしまった。

その後彼が何をし、どうやって更生し、現在に至ったのかは、ご存じだろう。

今振り返って見ると、よく更生できたよなと反芻してしまうほど、自分でもあの頃の自分はひどいもんだったと言える。

けど、過去に戻ってわざわざ訂正するなんて気は無い。あの頃の先に現在と直線で繋がっているのも確か。色々バカやってきたけど、バカな自分の果てが今の自分なんだから、否定しようがない。

そんな今の自分が……向こうの世界で出会ったあの子……フェイト。

正反対なようで過去の自分と似たもの同士であった少女。

誰とも本当の意味で心を開けず……閉ざしてばかりで、危うく闇の底に落ちそうな危うさを持った『寂しい目をした女の子』

初めて会った時から、彼女にシンパシーを感じると同時に、この子の力になりたい。

この子の笑顔が見たいって気持ちになった。

今でもあの子のことと思うと……自分の言葉では表現できない何か

が、自分の中でぎわめいて、湧きあがってくる。

“私も……ゼロの光になりたい……”

別れ際に、泣きべそかいた彼女に抱きつかれて、あんなこと言われて以来、特に……謙虚だ。

言っておくが、嫌な気はしない……むしろ安心して……暖かみがあつて……心地良い。

本当に嬉しかった。ああ言ってくれるだけでも、あの世界でウルトラマンとして戦ってきた甲斐がある。

クローンであつた自分を受け入れて、フエイトはちゃんと自分の足で歩こうとしている……そのことだつてとても喜ばしい。

だけど、この胸からくる熱さは、それだけではない気がする。

それはひよつとしてあれではと知識では知っている……ある感情を思い浮かべるが、生憎……今までグレルまで力を求めているか、戦つてばかりの人生だったので、異性同士の付き合いの経験なんか皆無な自分では、残念ながら断定なんてできなかつた。

でもきつと……もつと“諸星勇夜”という人間として生きていた……その原動力の源になっているのがこれなんだと断言できるのも、確かな真実だつた。

## 学校の怪談？

朝焼けの光に照らされた、海と山に囲まれたとある地方都市、海鳴市。

そこのとある住宅街では、このあたりに住むとある一家、高町家の兄妹と付き添い一匹もとい一人が、早朝でのジョギングのコースとなっていた。

「光兄……もうちよつとペース落として……」

黒いリボンでツインテールに纏めた栗色の髪が虹状の曲線を描き。

学校から支給されている物であろう体操着を着て、ルビーの球体を携えたペンダントを首にかけ、息が荒れ気味な小5くらいの年齢の少女――高町なのは。

高町家の末っ子で、私立聖称大付属小に通う小学生で、かつ小5に進級と同時に「魔法使い」をデビューしてしまったちよつと前までは普通（？）の女の子。なぜはてなを付けたかというと、彼女の性格（ないめん）と彼女の魔法使いとしての活躍を知ってしまったえば、絶対普通じゃないと突っ込まれてしまうからだ。

「その言葉……これで何回目ですかなのは？　これ以上の譲歩はありませんよ」

「うっ……いじわる……」

アニメ声と表せる独特の高音な声色と、丁寧な口調でなのはの要望を却下した少年の名は高町　光（リヒト）。聖称大付属中に通うなのはの兄だ。

実は彼、地球人ではない。一応地球人の血を受け継いでいるが、こちらの世界の地球とは違う世界から来た、本来の姿は50m近くある異世界の巨人で、ウルトラマンゼロが結成した警備チーム『ウルティメイトフォースゼロ』の一員、『ミラーナイト』である。

「（ユーノ君も疲れてるでしょ？）」

「（僕はまだ大丈夫だけど）」

「（はぁ……はぁ……ユーノ君も凄いよね）」

なのは魔法で、俗に言うテレパシー（正式にはこれは念話と呼ぶの

だが）を使って地面を駆けているフェレットに話かけた。

このフェレット君こそ、良く言うとなのはが魔法使いになった切欠、悪く言うとなのは魔法少女もので言えばマスコットキャラに当たる魔導師。

ユーノ・スクライア。

その正体は、遺跡発掘を生業とする部族の少年で、13歳の男の子、列記とした人間だ。

それがどうしてこんなフェレットの姿になっているか気になる人は、本編を見てほしい。

遺跡発掘を行っているだけあって体力は有り、フェレットの姿でありながら息一つも乱さずに並走している。

『(マスター、ここは踏ん張りどころです、これも魔導師として必要な訓練ですから)』

「うん……頑張る……」

なのはの首にぶら下がっているルビーの球体が点滅しながら声を発して、なのはを励ますのは、デバイスと呼称される魔法の杖。

レイジングハートだ。

彼らがどういう経緯で会って、今に至っているのか気になる方々には申し訳ないが、今ここは番外編。

本編を既に見ており、舞台となるこの世界の理を知識として持っている踏んだ上で話を進める。

やはり、なのはを朝練につき合わせたのは正解でしたね。

なのはの要望を却下しながら、自分は独白した。

妹のなのはは、魔法使い——魔導師としては有り余る才能の持ち主だ。

魔導師になってから、まだ二カ月しかたっていないが、あくまで非殺傷設定が前提となるものの、戦闘面に関して言えば並ぶ者がそうそういないという成長振り。

おまけに魔法で作られた空間内とは言え、街一つを消し飛ばしてし



まう鬼畜振り。

なんと恐ろしい妹でしょう。けどこうして見れば分かるとおおり、体力面で言えば、はつきり言って年相応未満、音痴レベルです。

こうして三人で朝走る習慣になってから、そこそこの日が経つのですが、御覧の有様。

世の家電が、電気がなければ唯の箱のように、なのはも魔法が無ければ肉体面なら普通の女の子だと実感します。

自分がこうして、妹を朝練につき合わせているのには訳があり、それは『なのはが魔法の才能に溢れすぎている』からでした。

魔導師としてのなのはを、戦闘スタイルのカテゴリーに分類させると――『砲撃魔導師』――『歩く砲台』だと言ってもいい。

飛行の機動性は大したことは無い一方で、魔力量と防御力は桁違いに高く、敵の攻撃を持ち前の防御力で耐えきり、大火力の攻撃魔法で完膚なきまでに相手を落とす。

可愛らしい外見に反して、なんと小手先からは遠く、男らしい戦法でありました。

が、これははつきり言っただけで体に大きな負担をかける。いくら魔法で身体を強化しても、多大な魔力を行使して敵の攻撃を受け止め、極太の魔力流を発射させる行為はそれだけ体に多大な負担をかけるのです。

そしてなのははまだ幼く、肉体も成長途中。そしてその砲撃は使用者にも反動という形で、襲ってくる。

何が言いたいのかというのと、なのはの戦い方は、はつきり言っただけなのは自身を蝕む諸刃の剣なのです。

今はたいして問題なくても、なのはが今後も今の戦闘スタイルで『魔導師』を続けていけば、確実に体に罅を入れることにもなるろう。

最悪……我が戦友ウルトラマンゼロの父、ウルトラセブンがかつて経験したようなことが起こらないとも限らない。

自らの才能の為に、身を滅ぼすなんて本末転倒なことになるのは、血縁は無いとは言え、兄である自分としては避けたかった。

その対策の一環がこの朝練。なのはが、今後も魔法使いを続けるか

……それ以外の道に選ぶのかは分かりませんが、成長を阻害させないよう無理の無い程度で、かつ手厳しく、自身の戦闘スタイルと魔力に耐えられる体作りを今から行った方が得策でありました。

しかし……こうして息を切らしながら妹を見ていると、やはりまだあどけない女の子だと思えます。

魔道師としては、もういくらか貫禄が着いてしまいましたが、なのはだって、まだ魔法使いとして駆け出しだった初々しい時期が、ちゃんとありはしましたがね。

地面を駆けながら、自身の意識は数か月前に遡った。

なのはが魔道師になりかけで、今では親友で当時はロストログアを巡る競争相手だったフェイト・テスタロッサと、光の友、諸星勇夜とウルトラマンゼロと邂逅する数日前。

その日の高町兄妹とフェレットは、夜の聖称大付属小学校の校門前にいた。

「ユーノ君……ホントにここなの？」

「間違いないよ……ジュエルシールドは、この学校の敷地内だ……」

「どうにかして結界内に取り込めませんか？校舎内にあるとしたら、とてもまともに戦えたものではありません」

「やってみます、封時結界！」

ユーノ足元に魔法陣が敷かれ、周囲の空間の色合いが変わっていき。

外にいなながら、建物の中にいると感じる独特の感覚で、結界の中にいることが直ぐに分かった。

「なんとか、ジュエルシールドも結界内に取り込めました」

「感謝します、これで心おきなく戦える………それよりなのは、いつまで僕にしがみついているおつもりですか？」

「だって……」

校門の前に来てからというものの、このメンツの中で確実にジュエルシールドを封印できる高町なのはは、木にしがみつくコアラみたいな様

相で、体を震わせながら兄にべったりと張り付いていた。

理由は単純だ。

夜の学校が怖いのである。

日が上がっているか沈んでいるかの違い、すなわち……暗闇が蔓延んでいるだけで、いつもの馴染みある場所も、恐怖を湧きあがらせる異空間となる。

「まったく……ジュエルシードの異相体に毅然と立ち向かった魔法使いとは、到底思えませんね……」

「それとこれとは別だよ……あの時だって……光兄がいたからどうにかなったし……」

『マスター……もう覚悟を決めましょう、一人で行くわけでは無いのですから、バリアジャケットを展開して下さい』

「うん……」

レイジングハートからの励ましもあって、なのははようやく光から離れ。

愛機を手に取り。

「レイジングハート、SET UP」

『Standby lady set up』

桜色の光に包まれたなのはは、聖称の制服をモデルにレイジングハートが形成したバリアジャケットを身に纏い。

左手にはデバイスモードになったレイジングハートが握られる。

「さあ行きましょうー」

「はいー」

「光兄！ユーノ君！待ってよ!!」

光は校門を苦も無く飛び上がって入り、ユーノは門の隙間から校内に侵入。

『Flier, fin』

そのどちらの芸当もできないなのは、飛行魔法でどうにか付いていった。

どうか勇氣を振り絞って、校舎内に入ったのはであったが、暗く細長い廊下、ドアのガラス越しに見える教室、不気味に照らしている非常灯を前に、表情を強張らせ、足が震えている辺り、相当無理をしているのが窺える。

ただ、恐怖を抱くこと自体は悪くない。

人として、生物として、それは普通で正しい反応。

だからこそ、危険を危険だと判断でき、そこから困難に立ち向かう勇氣が生まれる。

光もユーノも、その恐怖を乗り越えた経験が生きてるからこそ、この場で冷静にいられるのだ。

光は騎士として何度も実戦を経験し、ユーノも落盤事故などの危険が多い発掘作業でメンタルが鍛えられている。

「光よ、床の闇を照らしたまえ、ライトボール」

対してまだ理性を保つのに手一杯な妹の現状を察した光は、呪文を唱え、掌から、魔力スフィアが出現、周囲を照らした。その灯りは、廊下の最果ての壁まで届いていた。

「ありがとう、光兄」

ライトボールは、一種の人工太陽で暗闇を照らす魔法だ。

本来なら魔法で、視力の明度を上げることができのだが、生憎駆け出しのなのは、そこまでできない。

で、ブラコンな兄貴が妹のフォローのためだけに、独自にこの魔法を編み出してしまった。

妹愛、恐るべしである。

ちなみに二次元人の血を受け継ぐ光は、魔法に頼らずとも、暗闇でも見える。その上、御神の剣士は、常人以上に気配で人や生き物の存在を識別できる。彼から見て結界内の校舎は、ジュエルシードの波動以外、気配を全く感じなかった。未知なる存在への畏怖は浮かびようがなかった。

「ジュエルシードの場所分かりました、屋上………っ!？」

「まさか!？」

勇み足で屋上に来てみると、案の定だった。三人の眼前には、以前



突き破られたフェンスに駆け寄ったのはとユーノは、校庭で肉弾戦を展開しているミラーナイトと異相体。

「レイジングハートお願い!!」

『all right. Cannon mode』

なのはの呼びかけに応じ、レイジングハートは、槍先が音叉に見える砲撃形態、キャノンモードに変形させた。

校庭で練り広げられている演武は、一見すると互角だ。一撃一撃が強力だが、荒くて大ぶりの異相体の体裁きにミラーナイトは空回りさせている。

だがミラーナイトには決定打となる大技が使えないハンデがある。相手は大火力の爆弾を抱えているに等しいのだ。そしてミラーナイトには、その爆弾の起爆装置を解除する手段を持っていない。

それができるのは、デバイスを持っているのはだけなのだ。

「僕がバインドで動きを封じるから、その時まで待つてー!」

「うん」

ユーノの足元に魔法陣が敷かれる。

「たえなる響き……光となりて……許されざるものを、封印の輪に!!」  
地球人がイメージするのはかなりかけ離れた、ミットチルダの魔法だが、行使するのに特定の単語の詠唱が必要なのは一緒だ。

ユーノの意図を理解したミラーナイトは、飛びあがりながら両足からの蹴りを交互に連打、蹴った勢いで距離をとりつつ。

「ミラーナイフ!」

指先から光の手裏剣ミラーナイフを異相体の足元に放つ。

「チェーンバインド!!」

それにより生じた隙を突き、ユーノ右手に翳された魔法陣から、魔力でできた鎖が解き放たれ、異相体を縛りつけ、体勢を崩させて仰向けに倒させた。

「ミラーウエイト!」

体勢を立て直そうとしつつ、バインドを解こうとする異相体は、光の十字剣ミラーウエイトから発せられる重力波で断念させられた。

二重の物理的な圧迫感に、まともに身動きどころか立つこともでき

なくなる。

『マスター！トリガーを』

『ジユエルシード……シリアル&#8554……』

『Target lock, Divine shot』

「封印!!!」

トリガーが引かれ……相手に引導を渡す魔力光が、異相体に突き刺さり。

「aaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaa  
aaaaaaaaaaaaaaa!!!」

不気味な断末魔を上げながら、夜の校庭を照らす閃光をととも異相体は消えていった。

ちなみに、ほぼ同時刻にもう一つが原生物に取りつき、それは諸星勇夜が封印、そしてフェイトたちと邂逅し、戦闘になっていた。

そして今現在……ジョギングをしていた三人は近所の公園で一休みしている。

「はあ~~~~もうへとへと……」

なのははすっかり疲労困憊な様子でベンチにへばりついている。

光は飲料水を買って行っている最中。

『以前より走破距離は長くなっています、成果は出ていますよ』

「でもみんなに比べたらまだまだだよ、ユーノ君だってフェレットの体なのに息乱してないんだよ」

「まあ発掘で、嫌でも鍛えられたからね……」

ユーノに賞賛の言葉を送りながら、今の自分の立ち位置を再認識するなのは。

以前から運動音痴は自覚していたが、魔法を得たせいで、あやうく感覚麻痺になりところだった。

超人とは言え魔法が無くても戦えるよう、修練を積んだ勇夜や兄の光のお陰で、なのはは自分がいかに井の中の蛙だったか思い知らされる。

結局自分は、魔法が無ければ、電気が通ってない家電で、体育の成績が下方な小学生。

それに気づけただけでも良かったかな……慢心させないよう気遣ってくれる光兄には感謝しないかね。

息を乱し、体操着の袖を腕まくりをして、胸元のチャックを下ろすのは。

「……………(ゴクッ)」

ユーノはその様を見て思わずドキッとしてしまった。

疲労で頬を火照らせて、息が荒れ気味なのは、まだ幼いのに妙に艶めかしい。襟の合間から見える素肌も、露わとなっている面積が少ないのに、心拍数を上げさせてくる。フェレット体型からのあおり視点が、それに補正と拍車をかけていた。

「駄目だ！ 何を考えてるんだ僕は!？」

なのはを、こんな目で……そりや……多少異性に気になる思春期なお年頃に入っているけど……でも、だからって少女にそんな嫌らしい目で見てどうする？ と言い聞かすユーノ。

「なんとか……心を落ち着かせて……精神統一……でないよ。」

「(ユーノ……)」

「(なっ!?!……な、なんででしょうか？ 光さん)」

すると、いきなり光から念話で話かけられた。

「(気のせいなら良いのですが……今なのはを『変な目』で見えていませんでしたか?)」

「ギクッ！」

どう答えていいものか……あなたがち間違っただけだった。

「(別にいいですよ……ユーノも微妙なお年頃で健全な男の子です、異性が気になってしまうのも仕方ないでしょう)」

そうは言ってるが、声色は低めで淡々、なのに蛇に睨まれたようなプレッシャーを感じるのは……何故でしょう？

傍から見ても震えが伝染してきます……あ……怖い。



「(ですが……もう少し上手く隠して下さいね……私から見ればもろバレでしたので……)」

「(はい……善処します……)」

「(よろしい……)」

「ユーノ君大丈夫!? ひどい汗だけど……」

「あ……なんか……今頃になって疲れが出てきたみたい……あはは……」

見えない圧迫感にユーノは苦笑するしかなかった。

高町家の末っ子には、普段は物腰穏やかな好漢だが、妹のためならヤンデレにもなるスーパースコンな騎士さんがいる。

彼女に惚れてしまった方々は、くれぐれも要注意するよう心がけよう。

## 海鳴の子狐

その子は、ずっと“一人”で日本中を転々としていた。

彼女の母は数百年前、まだ侍が政治を行っていた時代に彼女と死別。

以来彼女は心を閉ざし……特に人に対して重度の不信感を抱くようになってしまった。

でも……不信は持っていない、憎むことはできなかった。

彼女の母は、ある人間の男と恋に落ち、愛し合っていたからだ。人を憎むことは、それを愛した母すらも憎むことになる。

けれど、その二重の相反する重圧を前に、心をすり減らして言った彼女は、その姿すら、人はおろか同類と呼べる動物まで、晒すことを拒否するようになってしまった。

何度死ねたら……と考えただろう。

だが母から受け継がれた力は、簡単に彼女を黄泉の国へと連れて行ってくれなかった。

その日彼女は“人間たち”には海鳴と呼ばれている地に来ていた。

当然街にひよこと現れるわけが無く、なのはとフェイトが初対面と初戦闘を行った八束神社の裏の森に隠れ住んでいた。

时期的には、なのはたちが小3の冬に差し掛かった頃である。

その海鳴に来た初日、彼女は人に見られるという自身にとつては失態中の大失態を犯してしまった。

妙な力の波動を感じた彼女は、思わずその方角へ森の中を進んでいくと、その先には人間の作った《神の社》があった。

“g u u u a a a a a a a a a a ……”

沸きあがってくる…視界にそれが入った瞬間……ある感情とともに獣としての闘争本能が彼女の理性を狂わせようとする。

人の作りし神のやぐらと“神”への信仰心……それが母と父になつてくれるかもしれなかった人間を、あの世にぶち込んだ元凶。

「なんだ？」

その声に、危うく理性がふっ切れそうになった彼女は、慌てて憎悪と一緒に体外に放出していたエネルギーを抑えつける。

そのまま逃げようとしたが、遅かった。

見られた……見られてしまった。彼女の眼前には、見た目は10代の後半くらい、オレンジがかかった金髪、朱色の瞳、日本人離れた容姿と不良っぽく粗暴そうだがどこか憎めない三枚目風な雰囲気醸し出す少年がいた。

が、相手の特徴なんていちいち観察する余裕は彼女にはない。

まだ来たばかりで土地勘がまだ無かったと言えるが、この時の彼女にとって深刻な事態。

こう人間と鉢合わせするのはおろか、彼女の視界に入ることがこのとこと無かったために慢心が芽生えていたのかもしれない。

「こんなところにも『狐』はいるんだな」

珍しそうに彼女を見る少年。それもそうだろう、狐は元々警戒心が強く、遠目から見かけることさえ滅多にない。

彼女はそこの狐とは違うが、こんな近くで見られるなんて、一生に一度かそこら。

「おい、どうした？」

少年は、とりあえず敵意は無いことをアピールするために屈みこんだ。

「お袋さんとはぐれたのか？」

お袋さん……母……母さん！

「お……おいー」

その単語を聞いた瞬間、彼女は走り去ってしまった。

彼に悪気なんて無い。傍から見れば、彼女は子狐な姿なので親とはぐれたと思ってしまうのは無理ないことだからだ。

だが、彼女にとって『母』は最大の精神的外傷——トラウマだった。

その日は、過去の重い思い出に苛まれ、逃げた彼女だったが、あの

人間のようで、人間と違う感じを覚えた彼女は、毎日社の近くに来るようになった。

直ぐこの地から離れることもできたが、ある人間が作った《岩の塊》を見て、ここはかつてのあの村の果てだと知り、前述の少年への妙な好奇心もあつて、結局なし崩しに止まることになった。

時間にして午後4時から6時まで、その期に社に来ると、決まつてその少年はいた。

好奇心はあるとは言つても彼女の種としての本能から、当初は一定の距離をもたせたまま、警戒は怠らなかつた。

ただ数日もすれば、少年には打算も悪気も持たずに毎日ここに通つていることに気づいた。

その頃には、彼が時々差し入れて来る食物を、遠慮なく拝借するようになっていた。

四角く黄土色で、水気と独特の食感がある『油揚げ』も中々だったが、見た目は白いのに中身は真っ黒で甘い味の『大福』も中々の美味。結果として餌付けとなつてしまつたが、空気の中に混じる『魔の力』を食すか、当ても無く放浪する以外にやることがなかつた身としては、彼と毎日会うことが悪くない習慣であつた。

しかし、なぜ少年は今の形になるまで接触を続けられたのだろうか？同種ですら、顔を合わせない、徹底して自分以外の誰かと関わらない生態な生き物である自分なのに。

気にはなつた。そして：心当たりもあつた。

「お前を見てると、何か妹とダブるんだよ、ほんとは泣き虫のくせに、我慢強さだけは一ちよ前なことか：」

物言いは粗暴だが、きさくでとつきやすい印象な彼ですら、そんな寂しそうな顔をしてしまう何かを、その子は抱えているということか？

すると、関心を通り越してその子に会つてみたいと思ひ立ち、その日社から帰つた彼の後を着けた。

気配——自らの存在を隠すことなど、彼女には造作も無きこと。流石にあの頃と様変わりしてしまつた人間のテリトリーと、そこを

歩く者たちの数の多さには驚かされたが、注意を払いながら、彼の後を追いかける。

歩いていくうちに、角角した人の住みからしき物体がいくつも並ぶ場に入り、辿り付いた。

彼が内部に入って言った物体、これこそ彼とその「妹」が住んでいる「家」で間違いない。

この一連の出会いをきっかけとして、この「人外たる彼女」は後にある悪しき運命の呪縛を切り離す役を全うすることになる。



大きな爆音が鳴り響いて、爆煙がシミュレーションルーム中に立ちこめていました。

「また……やっちゃった……」

バリアジャケットの効果で、体は煙の影響をまったく受けてはいませんが、この惨状を前に、溜息が私ことフェイトの口から零れ落ちます。

「今日はこのあたりにしておこう、しかし……これは直すのに時間がかかりそうだな……」

さつきまでシンプルで凹凸の少なかつた白く無機質な壁にはあちこちに罅が入っているし、床もところどころクレーターができて抉られています。

こうなってしまった原因は勿論と言うかなんと言うか、私のサンダースマッシャーとクロノの射撃系の魔法の中で最も光威力な砲撃魔法——ブレイズキャノンが真つ向からぶつかり、その時生まれた衝撃波によってこの有様になったわけです。結界でルームは補強されていたと言うのに。

「ごめんね……力入れすぎちゃった……」

「いや……僕が相殺しきれなかっただけだよ」

多忙な執務官の仕事の合間を縫って付き合ってくれるクロノはそうフォローしてくれますが、中々気分は晴れません。

一応、私としてはいつ崩落してもおかしくない洞窟といった狭い空間内での戦闘を想定して模擬戦をしていたわけです。

途中からつい熱くなって、一時はすっかりその設定を忘れてしまい、確実に周囲の環境に爪痕を残す大技を使ってしまうました。

それだけクロノが強いつてもありますが、ほんと何たるザマつてやつです。

これで六回中六回、つまり模擬戦する度、何かしらこのルームは私から被害を被っているのです。

「でも……これを直すお金って税金から使われてるんでしょ、そう思うと荷が重くなるよ」

当然と言えば当然ですが、私たちの次元世界にも星ごとに「政府」はちやんとございます。

時空管理局はあくまで魔導犯罪または次元犯罪の取り締まりと、ロストロギアによる次元災害阻止が主なお仕事としている。警察組織“、そしてその組織を運営するのに、あらゆる国のいわゆる国民様の税金も使われています。

つまり私はその税金を浪費しているとも言えまして……すみません。

「子どもがそこまで気を遣わなくてもいい」

さらにクロノはフォローしてくれましたが、「子ども」って単語に少し顔が膨れてしまいます。確かに私はまだ子ども、それどころか生まれてからまだ片手で数えられるくらいの時間しか生きていません。それでも「子ども」と言われると、ちよつとご機嫌が斜めになつてしまいます。こんな反応をしている時点で子どもなのですが。

「むう……クロノだつてまだそんなに歳とつてないじゃない」

「確かにそれを言われると、元も子もないんだけどな」

クロノが少し苦笑いを浮かべました。

「お疲れさん、はい、差し入れだよ」

「アルフ、ありがとう」

そこにアルフが、差し入れの清涼飲料水を引っ提げやってきました。

これがいわゆるP・T事件以降の私の一日の一場面です。

え？女の子らしくないって？

女の子らしくなくて……悪かったですね……どうして日頃からこんなことをこなしてるかと言うと……理由は二つあって……日に日に、自分でもはつきりと分かるんです……感じるんです、前より……自分の魔力量が増えること。



今でもAAAクラスの量があるのに……将来的には……Sクラス以上になると言われました。

これには正直、複雑です。はっきり言いますと、私は自分の内（なか）にある魔法（ちから）が……怖いんです。

魔法だって……兵器で……武器で……人を殺せてしまう道具だと、今回の事件で思い知らされたから。

実際、自分となのはが戦った結界内の街は、自分たちの一騎撃ちで大規模災害が起きたかのように壊滅しました。非殺傷設定にしておいてこの被害なのです。

勇夜が、どこがクリーンな力だって突っぱねるのも無理ないし、結局非殺傷設定って名の『安全装置』も、下手をすれば気休めにしかない。

今では自分の中にあれだけの破壊ができるものが、体中に巡ってると思うと、身震いします。

でも……こんなこと言うとか矛盾してるとか、言われるかもしれないけど……それでも……あの人の力になりたいから。

自分が一人じゃないってことも、なのはっていう、最初の『友達』ができたことも、たとえば自分が誰かのコピーでも……自分は『フェイト・テスタロツサ』だって胸を張って言えるも。

諸星勇夜……ゼロユウヤ・ヴェアリースター。

光の戦士——ウルトラマンゼロ。

あの人に出会えたから……だから守りたい……彼の背中を守ってあげたい。

孤独な戦いを続けてるゼロの、支えになりたい。

それが何より……以前はただ誰かの願いを叶えるだけの木偶の坊も同然だった……自分自身に……芽生えた願い……これが、二つ目の理由です。

あ……ごめんなさい！

暗い話ばっかしちゃって……わたしってば……（どよーん）

あ……そっか、なら、明るい話をすればいいんだ。

じゃあ行きます！ってあれあれ？……何言えば言いのでしょうか？

(オロオロ)

私ってばまた……(カーカーカーン)

とまあ空回りしているフェイトは置いて、彼女はトレーニングや模擬戦以外に日課としてしていることがある。

先ほどまで鉄頭と模擬戦をしていたフェイトは、アースラ内で支給されたホテルクラスの広さを持つ個室に真っ先に駆け込み、汗を流すためのシャワーを浴びた後、フェイト宛てに届けられた小包を開封。

中に入っていたディスクを、眩しいまでの笑顔、喜びを隠せない様子で手にとって、さっそく再生機を作動させてディスクをセットさせた。

『こんにちわフェイトちゃん』

地球製より薄型で高性能、3D常備のテレビ画面に、栗色の髪の子が映る。

「こんにちは、なのは……」

これは録画映像で意味がないことであるのは理解しているが、それでもフェイトは挨拶を返した。

高町なのは。PT事件、ロストログアジュールを巡って、当初は戦うことになりながらも、今はフェイトの最初の友達になった地球人の少女。

事件以来、二人はこうしたビデオメールで交流をとっている。一昔のもので例えれば、交換日記のようなものだろう。

裁判に出頭中の被告人であるフェイトは局員以外の人間と直に接触するのは、基本認められていない。

一応、しかるべき手続きを踏めれば、短時間ではあるが面談は可能ではあるのだが、与えられた時間に反してその手続きの手順は非常に多く面倒で、実際にやる人間は少ない。

ビデオメールはそんなフェイトの環境下でも、画面と時間越しにでも友達と面と向き合える手段だった。

ちなみに、今再生しているプレイヤーがどうして異世界である地球の映像記録規格を再生できるのかと言うと、異世界間交流が盛んな管理世界では普通に常備されてる機能らしい。

二人が、ビデオメール越しで話題になるのはといとめのないことだ。

なのはの親友、アリサ、すずかのこととか（時には三人一緒にメツセージを送ることもある）。

まあ端的に言うと、近況報告ってやつだ。

今日は日頃からなのはの兄、光の指導下で行っている朝練に関する話題だった。

なのはによると、普段は妹には甘いのが、トレーニングに関しては溺愛振り抑え目になるとのこと。

勇夜とは管理世界に来る前からの親友でもある光とは、余り話す機会は無かった。

でも、義妹（いもうと）のなのはをそれだけ愛していることはちゃんと分かる。

時にそれが行き過ぎて、暴走することもあるとのこと、主に被害者はユーノ、

まあ愛する妹が異世界から来た人にいきなり呼び出されてロストログアの異相体を戦つてと頼まれるようなことが起きれば……複雑な気持ちになるのは無理ない。

なんとなく、そういうちよつと過保護なところはアルフと似ているとフェイトは思った。

ひよつとしたら、自分も年下のお姉さんに過保護になっちゃうかも。

自分の場合は、それだけ自身が無理をして、危なっかしかったってこともあるのだが。

ともあれ、こうしてなのはと顔を合わせられるだけでも嬉しい。

本当になのはと……そして勇夜——ゼロには感謝している。

ゼロと会っていないければ、自分なのはの言葉の意味に気付けなかったし。

なのはと会えなければ、どうしてゼロがあそこまで自分を助けて、手を差し伸べてくれるのかずっと分からないまま。

多分……母とも分かりあえず……母の言葉に絶望し、自分の生まれ方を呪って生きていたかもしれない。

だから……怖いと思う魔法とも……贖罪も含めた……辛いことも悲しいことも待っている人生（これから）と向き合える。

力が沸いてくる。

ありがとうだけでは語りつくせない。

なのはの声を聞きながら、自分の光になつてくれた人たちに想いを馳せていたその時。

電子音が部屋に響く。

フェイトは一時停止を押して映像再生を止めると、机に供えられているタッチパネルを押した。

「はい、フェイトです」

『フェイトちゃん』

通話の相手は、アースラクルーの一人でクロノの補佐官をしているエイミイだった。

「どうしたのエイミイ？」

『フェイトちゃんに面会希望する人が来てね』

「面会？」

前述の通り、管理世界では被告人との面会はかなり制限がつく。

そしてその面倒な手続きを経てアースラに訪問したのは、意外な人物だった。

エイミイからの通信で、自分に面会を希望したいという人が来ていると聞いて、アースラ艦内にある談話室に向かって廊下を歩くフェイトとあたし。

「面会希望者って誰なんだろう？」

と、思わずフェイト口にするほど気になるのは当然のことだ。

ここ最近は勇夜やなのはたちも入れて一気に増えたけど、フェイト

はその境遇上、あまり多くの人と関わりを持っているわけじゃない。

「アルフ、聞いている？」

「聞いているんだけど……エイミイに見てからのもお楽しみって、口止めされてるからダククメ」

「えくくく今聞かせてよ」

「もうすぐその人に会えんだからさ、いいだろ？」

「それは……そうだけど」

そう雑談を交わしている内に談話室のドアの前に着いた。

「失礼します」

自動ドアが開き、中に入るあたしたち。室内には、備え付けられているソファアーに向かい合った形で座る女性二人と立っている男の子一人。

男の子は勿論、勇夜から鉄頭なんてあだ名貰ってる真面目君なクロノで、女性一人はアースラ艦長で提督のリンデイ・ハラオウン。

もう一人は……案の定フェイトにとっても、私にとっても見知らぬ女性だった。

深い青色の髪と緑色の瞳。見た目は20代半ばで、気の強そうな感じと、大人の色気つてやつと、母性つてのかな？ それらを兼ね備えたリンデイに負けず劣らずの美人だった。

私服を着ている辺り、局員じゃなさそうだ。でも……初めて会うのに……なぜか……既知感と言うべきか……どこかで感じたことがあるようなオーラがその人から漂っていた。

「紹介するわフェイトさん、勇夜君がこちらの世界でお世話になった」

勇夜、その単語を聞いてあたしとフェイトははっとした。

じゃあ、この人が……この世界のゼロの——

「クイント・ナカジマです、はじめまして、フェイトちゃん」

——お義母さん。

いくらウルトラマンでも、予備知識の無い未知の世界で一人で暮らすことは簡単ではない。

ましてやゼロは、ウルトラ兄妹のように他の惑星で駐在する経験が無く、次元振の影響で変身能力を一時失い、人間の肉体も4歳児まで退行してしまえば尚のこと。

彼が11年間、無事に過ごせたのは、引き取り手になってくれたナカジマ夫妻の存在があればこそだ。

ゼロにとっても、その境遇ゆえに、心の奥底、潜在的な願望として抱えていた『家族と過ごす団欒』、それを実体験させてくれた人達には、実の家族のように慕っている。

そんな彼の、この世界——ミッドチルダでの母が、クイント・ナカジマその人であった。

リンディは面会時間終了時には知らせのために戻ると言って、部屋を後にした。

残った彼女らはまず自己紹介から始める。

「その……ふえ……ふえふえフェイトです、フェイト……テストロッサ……ここ、こここの子は使い魔のアアアルフ——」

「落ち着いてフェイトちゃん……そう固くならないで」

「そうだよフェイト……ちよつと気張りすぎだよ」

「はう……すみません」

思い人の義母を前にした緊張感で、こんな醜態を晒してしまったフェイトは恥ずかしさで涙目になっていた。でも可愛いから許す（オ  
イ

「改めてはじめまして………諸星勇夜の義母（はは）であります」

「あ……どうも……」

年上からかしまった態度で挨拶されたので少し戸惑いながら応じた。

「（若い……）」

事前に打ち合わせたわけでもないのに、フェイトもアルフも同じタイミングで内心呟いた。

リンディも相当年齢不詳な若々しさだが、この人も負けず劣らず

だ。

勇夜の愛慕であるウルテイメイトブレスレットことリンクから、ナカジマ家のことは聞いており、勇夜の下に彼と同じく養子だが、二人の妹達がいることも聞いていた。

一応三人の子どもを持つ母親だと言うのに、この美貌と若さは何だ？

そのくせ、母親特有のオーラというか包容力が感じられる。

そう言えば、なのはと光のお母さんも二人に負けずに若い。

一番上お兄さんは大学生だから、それなりに歳を重ねているはずなのにだ。

どうして……自分たちが会う母方な人物はこんなに若い人ばかりなんだろう？——とも思ったが、なんとなく永遠の謎にした方が良い気がしたので考えるのをやめた。

「その……今日はどんな要件であたしらに？」

それより気になるのは、地球の国家群よりもハードルが高くめんどい立場なフェイトとの面会をこの人がしに来たかだ。

「そうね——」

最初の挨拶より砕けた声色でクイントは——

「息子の将来のお嫁さんの視察かしらね」

——さりげなく、とんでもないことを口にした。

お……お……おっ……お嫁さん!?

ブウウウウウウウウウ——

!!!!

どっかのパンチパーマな探偵さんや、ハードボイルドを目指す半熟な探偵でもある仮面の戦士ばりに、テーブルに予め出されていたお茶を飲んでいたフェイトは、クイントの発言によって、女の子にも拘わらず一度口の中に入った茶を噴き出してしまった。

幸い二人にはかけられていない。

「フェイト！落ち着いて！もう何を言ってるのかさっぱりだよ……」

耳までゆでダコみたいに顔を紅潮させ慌てるフェイトは、弁解して

いるつもりのようなだが、テンパって呂律が全く回らず、傍からは意味不明の単語を連発していた。

様相で何を言いたいのか把握はできても、言っている単語を訳すのは至難の技レベル以上である。

多分、この場に勇夜が入れば、ほぼ同様のリアクションをとっていることだろう。

「ごめんなさい、フェイトちゃんには刺激が強すぎたわね」

「冗談きついよあんた……」

そう言いつつ、絶賛パニック中なフェイトを落ち着かせようと背中をさするアルフはお姉さんそのもの。

姉妹同然な二人は、たまに姉と妹の立場が逆転しちゃうことがあった。

「まあ、ほんとはあの子があれ程あなた入れ込んでたから、どんな子なのか気になったってところかしらね」

「はあ……」

こうは言ったが、実は二人が夫婦になることには満更ではなかったりする。

血は繋がらないとは言え——あの息子にしてこの親あり——であった。

「しかし……よく面会の申請を許可しましたね艦長」

艦内の廊下を歩きながらクロノが切り出す。

くどいようだが、管理世界での面会は非常に面倒、申請する方も申請される方も……どちらにとっても。あれだけ苦労してこぎつけて最高1時間よりちよつと多いくらいの実利とリスクの釣り合わなさに誰もやりたがらないのだ。

「まあ……クイントさんと意見が一致したって、ところかしらね」

この場が実現したのは、リンディとクイントが面識があったことが最大の要因。

息子たちが同じ学び舎で学生をし、同級生であったことと、《とある



一件》を通じて二人は知り合った。

お互い管理局員で、務め先も本局と地上本部と部署も違うので、そう滅多には会えなかったが、定期的にメールのやり取りをしたり、息子の学校行事でとった休暇をとっては近況報告をしながら一種のご近所トークで盛り上がるのが通例になっていた。

勇夜が既にリンディに正体を明かしたことはクイントに報告していたので、その辺は問題ない。

強いて問題があるとするなら、二人ともウルトラマンゼロのことを秘匿し、報告（ほう）・連絡（れん）・相談（そう）を怠っていたことであろう。

だがウルトラマンを兵器として利用させたくなければ、リスクを背負う覚悟でこうするしかなかった。

そういう邪な考えを持つ連中が、組織にも、世界にも存在していることは二人とも局員として痛感させられていたからである。

「その『意見』と言うのはやはり……」

「フェイトさんの、養子のことだね」

「勇夜って、その子どもに戻ったばかりの頃はとうだったんですか？」  
「そうねえ……事情も事情だし……反抗期もとつくの昔に過ぎてたから、手のかからない子だったわね」

それもそうだろう。

既に6000年近くは生きているゼロ。

地球人、ミットチルダ人に換算しても高校生くらいで、昔は不良上等、その何が悪い——的な感じで周りに八つ当たり、やさぐれてはいたそうだが、次元振でミッドに飛ばされる頃にはかなり丸くなっていたのこと。

精神（なかみ）がほぼ大人なので、風呂は一人で入り、一人で寝れて、当時夫妻は共働きで家を空けることも多かったが、文句一つ言わ

ず、むしろ前からの日課である自主練と、リンクが講師をする魔法授業でやり過ごしていた。

それを逞しいと思う一方で、寂しさがナカジマ夫妻にはあった。実はクイントは武装局員で、局内でも有数の武道派ではあったが、体質的に子どもが生まれにくい体で、無論二人はそれを承知で結婚した。

夫で勇夜たちの義父であるおやっさんことゲンヤも、管理世界では別段珍しく無いが、魔力をまったく持たないので魔法は使えない。

それだけ二人は長短含めた、お互いの人柄に惹かれ合い、添い遂げた。

三人の子がいながら、今でもおしどり夫婦なのはその証拠。

だが承知していたと言っても、子宝に恵まれない現状がはがゆく、寂しいものだった。

そんな時、偶然二人の家に迷い込んだ勇夜―ゼロは、正に天の恵みで、コウノトリが運んできた子宝であった。

だからたとえ、彼が妙に大人びていようと、魔力とは違う力をクイントが感じようとそれでも二人は彼の保護責任者となった。

「でもね……一度だけ……見た目相応な子どもっぼく、甘えてくれたことがあってね」

……ゴクリ。

思わずこの主人と使い魔は、即答で喰いつきそうになる。

気になる異性の幼少時代を聞けるとならば、反応しやすくなるのは

……分からないわけではないけど。

「勇夜が、光の巨人——ウルトラマンだってことは知ってるわよね？」

「はい」

「その日、勇夜は私たちに自分の正体を明かしてくれたの」

ナカジマ家に引き取られた当初の勇夜は、日頃の威勢はどこ行った？と言いたくなるほどよそよそしかった。

自分に向けられる愛情に、何も感じなかった訳ではない。

むしろ嬉しかった。

血縁は無いとしても、ゼロが内心ずつと求めてやまなかつた『家庭の温もり』

それを直に感じられたから、嬉しくないわけない。  
ちやんと二人には感謝している。

だからこそ……素直に受け入れることができない原因が存在した。  
勇夜が『ウルトラマン』であることをナカジマ夫妻にカミングアウトしたその夜。

クイントは思い切って、勇夜に「一緒に寝ないか？」と尋ねてみた。

というか、無理やりにも彼を自分の寢床に引き入れた。

まあ、こうでもしないと了承されなかつただろう。

クイント自身、男を惑わすには十分な美貌とスタイル持ちで、年頃の男性な勇夜には今まで戦った強敵より、精神を追い詰める難敵であるからにして。

「でも恥ずかしかつたのか、背中を向けて寝てたわね」

そんな勇夜を、クイントは背中から抱きしめた。

抵抗されるかな？と思ったが、体温が上がる以外は、彼女の温もりを素直に受け入れたようだ。

しばらくすると、抱擁で心が解れたのか、彼は――

「怖いんだ……怖いんだよ、俺が……」

――その一言を皮切りに切り出した。

「義母（かあ）さんもおやつさんも……好きだよ……一緒に暮らせて……嬉しいよ……だから……」

怖い……ウルトラマンとしての自分が……ウルトラマンの力が……二人からもたらしてくれる家庭を壊してしまうのが怖い。

自分の存在が、二人に……最悪の仇で返すが怖い。

そして自分自身が……怖い。

身を震わせながらの……告白だった。

以前は巨人と呼ばれるくらいに巨大な体躯も、空を飛べることも、光線を放つことも、当たり前前なことだった。

だがウルトラマンの力を失い……人間としてミットチルダで暮ら

すことで思い知らされてしまった。

自分が……どれだけ破壊的な力を持っていたかを……それがどれだけ無力な人達を恐怖させるかを……暖かさを感じるほどに……深さが増す不安。

さらに故郷に帰れないのではと感じてしまう恐れと、今いる次元世界群に“生まれ故郷”が存在しない事実が、拍車をかける。

リンクが自我を持たなかったら、早くも心が折れていたかもしれない。

その彼の告白を受け止めなら、クイントは正面から勇夜を抱きしめた。

ただ……そつと……ゼロの告白を受け止めながら。

「……も……勇夜のふるさとで……良いんだよ……」

それだけで……その言葉だけで、充分だった。

最初こそ彼は頬を真っ赤にして戸惑っていたそうだが、そのまま眠りについてしまう以降の彼は、クイントに抱きついたまま離さなかった。

見た目の歳相応の、子どもっぽく。この時リンクから『よく創作で、体が幼児化すると精神年齢も幼くなる設定がありますが、それと似た現象です』とフォローを入れてくれた。

そしてただ……目に涙を溜めながら……一言……囁く。

「母さん………」と。

とても儂く……幼い……声だったと言う。

「後にも先にも……あの子が甘えてくれたのはそれつきりだったけどね」

ただ、重荷になつていたものが取れたのか、それ以来夫妻に気兼ねなく接せるようになった。

中身が大人なゆえに、懸念された学校生活も友人ができて充実したものだっただ。

クイントの抱擁で、せつかく子どもに戻ったのなら、徹底的に楽し

もうと思考がプラス向きになったのもある。

その時期にクロノと《一悶着》が……あるにはあつたが、それがクイントとリンデイの交流のきっかけになったのが疑いようがない。

それプラスで、なのはたちからどん引きされた大甘緑茶を飲む習慣も確立されてしまったが……それは置いてこう。

「あの……クイントさんは怖くなくなつたんですか？……勇夜が、ウルトラマンだつて……」

「確かに彼が怖い力を持つてるのは事実よ、でもそれは魔導師も同じだし、怖いものなんて世の中にくらでもあるでしょ」

「怖い」という概念は世の中そのものに常に存在する、人の感情の中にだつてそうだ。ただ普段は誰もが気付かない振りをして、平静をなんとか装うとするだけ。

「でも……それをその人がどんな人か、知ろうとしない言い訳にしてはいけないわ……異世界と繋がりを持とうとする管理局（わたしたち）の場合は尚更……」

「……………」

クイントさんの言葉が、胸にずしりと響いた。

ちよつと前までの自分は、血の繋がりを言い訳にして、一番近い筈だつた母に対し、その「知ろうとする努力」を怠り続けてきたのだから。

血縁はある……と言うのは聞こえはいいが、見方を変えればそれだけしかない。

結局たつたそれだけでは「親子」のなりえなかつただと、約二カ月前の地球での出来事の数々で、知らされた。

そしてクイントさんからの勇夜——ゼロ……ウルトラマンもやっぱり「人間な男の子」なんだと知る。

そう思うと……何だか親近感が沸いてきた。前々から、彼のことになる心身ともに火照つて仕方ないのだが、あれだけ超人的強さを持つているからなのか、どこか……遠い人のような感覚があつたか

ら。

「ああそれとね……フェイトちゃんに会いに来たのは……もうひとつ理由があつてね」

「はい……」

クイントさんの目が真剣みを増した。

「ゼロ（あのこ）の……義妹（いもうと）になつてみない」

その意味を理解するのに、結構な時間が掛かり。

「ふえ……」

完全に理解したと同時に、一瞬で思考が――

『嫌いに……なれるわけねえよ……』

『フェイトだつて……いる』

――あの時の勇夜から言われたみたいに……真つ白になった。パタリ。

「フェイト!？」

数分後……今度は思考停止で倒れたフェイトは、まだ照れ気味だったがようやく平常時に戻った。

よく数分で回復できたものである。

「どうにか落ち着いた？」

「はい……ど、どうにか……」

まあ一応、以前からフェイト自身にとって避けられないものであったから。

本局の医療施設で入院しているプレシアから、ある日の通信越しの面会で、プレシアから養子に入ることを勧められた。

やはり、どう弁明しようと、プレシアは重罪に値する罪を負った。

まだ幼くても、虐待を受けていたとしても、フェイトはそんな母に手を貸した共犯者。社会的に辛い立場だ。

さらにプレシアは、病魔で生い先は決して長くない身。

フェイトと、ゼロと一緒に帰ってくるであろうアリシアが、身寄りの無い二人ぼっちになる。

そんな彼女たちには、引き取り手になつてくれる人たちが必要とな

る。

プレシアは、それを見越して娘のフェイトに提案した。

「それで……………その……………」

年相応より賢いフェイトには、理屈自体は理解している。

でも……………そう簡単に『テスタロッサ』の性を捨てることはできなかった。

ようやくちゃんと『親子』になれたことが、彼女の迷いを加速させる。

「そう無理に結論を急がせることはないわ、今日は単にフェイトちゃんたちの里親立候補に來ただけだから、フェイトちゃんにはまず乗り越えなきゃいけないものがあるでしょ」

え？ 今の……………って。

確か、別れ際に勇夜から言ったのと同じ。

「……………」

「フェイト？」

「フェイトちゃん？」

「あ……………いえ……………なんか…勇夜に似たようなことを言われたことがあります」

「……………似ている、か……………」

それを聞いたクイントは少し驚いた様子だったが、そこから神妙な面持ちになって、独白のように呟いた。

「クイントさん？」

「実わね……………あの子によると、似ているらしいの……………勇夜……………ゼロを生んでくれた、地球人のお母さんに」

さらにクイントの話では、勇夜と同じミドルネームを持っているとのこと。

どうも彼女の両親は名前をつける際、かなり白熱とした議論を重ね。平行線のまま埒があかなかったたので、両方つけてしまおうという経緯から現在の形になったらしい。

そして……………なんと運命のいたずらか。

「クイント……………『アンヌ』……………ナカジマ」

生みの母の名は——諸星アンヌ、旧姓……友里アンヌ。  
奇しくもゼロの実母とクイントは、似た容姿と、同じ名を持っていた。

フェイトははっとした。

「ひよっとしたら、私とあちらのアンヌさんって、物語でよくある平行世界の『同一だけど異なる』存在なのかもね」

クイントに会ってからずっと胸に引っかかりを感じていた既知感、デジャブの正体があった。

別れ際に……自分に髪留めを渡してくれた……髪を下したあの時の勇夜に……そっくりだったのだ。

実の母とそっくりな義母とは、なんとという運命だろうか。

そして、クイントさんとお話して改めて分かった。

ゼロの原動力は、色んな人々の出会いと縁でできているって。

だから……今でもゼロは「私たち」のこと、信じられるんだ。

フェイトは、心の内に、温かいものがこみ上げてくるのを……まぎまぎと感ずるのであった。



## 腐れ縁との始まり

M78星雲惑星アルトラ、ウルトラの星または光の国と言った異名のある星の人々からは“K76星”と呼ばれ、星の皮膚とも言える地表が赤味がかった惑星。

ここは毎日強烈な磁気嵐が吹き荒れ、並の生物ではとても生命活動を全うできない過酷な星であった。

「デエアァー！」

「イエアァー！」

ごつごつとした岩肌な地上の一面にて、二人のウルトラマンが肉弾戦を繰り広げていた。

一人はウルトラマンゼロ。

もう一人は彼の師、ウルトラマンレオだ。

50メートルものの巨体であることを一瞬忘れてしまうスピーディな身のこなしと、そこから繰り出される重々しい打撃の数々は、もし観戦する者がいるとすれば、その者たちに言葉を失わせ、我を忘れさせるほどの、実戦しながらで熾烈な組み手であった。

互いの攻撃がぶつかり合う度、磁気嵐の暴風よりも遥かに強力な衝撃波が何度も迸っている。

ゼロが右足から並大抵の動体視力ではまともに捉えられない速度からのキック連続で蹴り付けた。対してレオは両腕を軽やかさすら連想させる手つきで、弟子の猛攻を捌いていく。

腹部に見舞おうとした一際強力な正面蹴りを両の手で受け止めた。そのままゼロを投げ飛ばそうとするレオだったが――

「行つけええー！」

――その前にゼロは左足のみで飛び上がろうすると同時に反重力エネルギーを放出し、右足の力でレオを投げ飛ばした。

宙を舞うレオは直ぐに態勢を立て直して着地すると、直ぐ様こちらへと疾駆するゼロを見据え跳び上がった。

ゼロも疾走の勢いを相乗させて跳躍。

「デエアァアァアァァー！！！」



「ん？ どうしたゼロ？」

「いや……師匠に褒められるの慣れてねえもんだから、ちよつとこそばゆくなつちまつて」

かつての自分が余りに生意気盛りの反抗児だったこともあるとは言え、師匠は余り自分を褒めたことはない。自身を思つてのこととは言え、大抵は厳しい叱責ばかりだった。

「人がせっかく称賛していると言うのに、なんて薄情な態度だ」

ご機嫌を損ねてしまったようで、レオ師匠は腕を組んでこちらを睨みつけてくる。

確かに今の返しはダメだ。せっかく称賛の言葉を送ってきたのだから、ありがたく頂戴しておくべきだった。

「悪かったよ、だつてあんま喜び過ぎると舞い上がるなどか言つてきそうだったら……」

「ふつ、冗談だ」

「へっ？」

師の少しおちやらけた笑みを見て、俺は一杯喰わされた事実を嫌つて程突きつけられた。

「この程度の冗談を見抜けられないようでは、まだまだ未熟だぞ」

「この狸親父い……」

俺からの恨みのこもったガン飛ばしを、笑みでさらつと受け流す師匠。

ちきしょう……この貫禄に満ちた獅子は、一見手厳しく堅物なようで、時々ジョークとかかましてからかつてくる茶目つ気もあんだよな。

車の件のそうだった……どこまでも追いかけて容赦なく引き殺そうとする危険なものだ、気をつけろ”って冗談をつい真に受けちまつて、クイント母さんとおやつさんに言われるまで完全に信じ切つていた俺はとんだ赤っ恥をかかされたっけ。

「向こうのナカジマ夫妻には感謝しなくてはならんなゼロ」

「まあな、でないと学校で友達相手に大恥掛いてたよ」

「ほう、そう言えばゼロ、二度目の学校生活はどうだったのだ」

休憩がてらの雑談の話題は、ミッドチルダでの学校生活関連に移った。

勉学に関しては、半分「事実」を上手く隠した上で話した。

なんでかと言えば………まだ全然若造とは言え、次元振の影響で体が歳相応より幼児退行し、見た目と精神の年齢がギャップがあったことが原因。

そんな奴が、小学校レベルの授業を受けたらどうなるかと言うと、退屈……ひたすらに退屈だった。

そのため入学当初から、俺は居眠りの常習犯だった。

真面目に授業を受けるより、寝ている時間の方が圧倒的に多く、できるだけ起きようと努力していたんだけど、気がつくとも睡魔に負けていることが度々だった。

魔法の授業も、もう基本以上のことは、相棒兼デバイス兼家庭教師であるリンクことウルティメイトイージスに入学前から教えられているので実技を除けば、夢の中。

こんなこと師匠に話せば、事情を理解してくれた上で大目玉をくらすに決まってる………とても話せたもんじゃなかった。

とは言え、勉学そのものをおろそかにもできず、授業中居眠りした分、できた穴は残さず埋めようと心掛けた。

「自由」を満喫したいのなら、せめてやることはちゃんとやらなきゃならない。めんどくさがっていたら、余計に面倒なものをしよこむことになる。そんなのは自由では無く、放縦と怠惰だ。

宿題は必ず提出させていたし、予習復習もちやんとやっていた。遅刻も欠席もゼロで、一応成績も上位の方を維持させていた。

まあ、居眠り常習犯のくせに勉強は怠らないアベコベな学校生活を送っていたせいで、先生らには「不良インテリ」なんてあだ名をつけられてしまった。

それを自覚しているのだから、言われることに抵抗感もっていない。居眠り癖も、学年を進むごとに改善はされていった。それでも完全に0となるのは、最終学年の歳だったけど。

勉強関連ばかりなのも味気なく、俺は話題を学友関係に移した。

「特に一緒につるんでたのは、ヴァイスとディーダの二人だ」

今でも時々連絡を取り合っている二人とは、地球の日本なら小学校に相当する『初等学校』の一年からの付き合いだった。

不思議と最初から、お互い意気投合したのだ。

ヴァイスは乗り物に関する知識が豊富な野郎で、車だの飛行機だのその範囲は広々としていたが、特にヘリコプターがお気に入りだった。人柄の方を評するなら、それこそムードメーカーな炎の用心棒の『あいつ』とエイミイを掛け合わせたような、気さくな上に気配りもできるヤツ。

ディーダの方は、オレンジ色の髪が印象的な、幼い頃から妙に知的でしつかりとした男子で、一方ではガンマニア、と言っても実際に撃つてみたいなんて衝動はなく、どちらかと言えば銃そのもののデザインに『美』を見い出して嗜好している一面もあり、ヴァイスを銃器マニアにもしてしまったヤツである。

俺も少なからず影響を受けた身、零牙にガンモードがあるのもその為だった。

「あ……あいつもまあその頃から友達だったよな」

その『あいつ』とは、クロノ・ハラオウン。あの超堅物な執務官様だった。

さつき紹介した二人と対照的に、最初はこれと言った繋がりのない同級生でしかなかった。

ただ、全く関心がなかったわけじゃない。

当時のあいつは『家庭環境』の影響で今以上に無愛想な野郎で、優等生ではあつたけど、周りに分厚い壁を作っていた。

その姿は、俺にかつての自分を反芻させるのは充分だった。

それでもある『転機』を経るまでは、ただの同級生でしかなかった。

5年前。

「ユウヤ・モロボシ」

地球からはいかにも近未来的に洗練されたデザインの廊下。

第一管理世界、惑星ミットチルダ首都クラナガンにあるとある初等学校の廊下にて、その日もヴァイスとティーダの三人で教室に向かっていた勇夜は、そのクロノに声を掛けられた。

周囲の生徒は声をかけた方と、かけられた方に注目。

勇夜と談笑していた二人の友人も戸惑い気味。

「君に話がある、『放課後4時、屋上に来てくれ』」

この頃から髪を肩まで伸ばして一纏めにしていた勇夜と言えば、斜に構えてクロノに視線を送っている。

そしてクロノは用件を伝えると、さっさと去って行った。

廊下は、小学生の日常とは思えない緊張感に支配されていたが、すぐに学校特有の喧騒を取り戻して言った。

「クロノに呼び出されるなんて、何かしたのか?」

データーが問いかけてくる。

「いや…」

勇夜はこの時こう答えたが、薄々心当りはあった。

「あんなの小学生の目つきじゃねえよ、ヒーローの悪役より怖かった」

「お前も小学生だろ」

ヴァイスのお陰で、三人の空気も朗らかになるのであった。

「一体お前は彼に何をやらかしたのだ?」

まるで悪者は俺と言わんばかりの師匠の口振りだった。

否定はできない、実際原因作ったのは自分の方だったからだ。

「前に話した魔法に関係してんだけど……」

その頃の俺は、今以上に「魔法」に対する受け取られ方にいけ好かなさを感じていた。

過度に力を求め過ぎたせいで、危うく取り返しのつかない罪を犯すところだった俺は、その経験から「力」そのものに「善悪」はなく、

使う者次第で簡単に変色してしまう無色で、だからこそ怖い存在だと見なしていた。

そんな俺からしてみたら……あの世界は「魔法」を神聖視しているようにしか見えなかった……「グリーンエネルギー」なんてお題目は戯言にしか聞こえなかった。

いつかそれがとんでもない「過ち」に繋がってしまうんじゃないかと、気が気でならなかった。

体が子どもだったから、迂闊にそんなこと言えず、不満は少なからず溜まつていき、とうとうある日思いつきし吐き出してしまった。

10歳の時、管理局嘱託魔導師の資格取得の試験日のこと。

どうしてその試験を受けたかと言えば、おやつさんとクイント義母さんから、仲間を探して次元を旅するのなら、せめて嘱託の資格は持つておいた方がいいと勧められたからだだった。

試験は見事、筆記も実技も一発合格、特に実技の一つだった局員との模擬戦では、魔法に頼らず一本を取つてやった。

そして……その日の試験の担当官こそ、クロノの母リンディだった。

俺に合格の通知をした直後、リンディは本格的に局員にならないかのスカウトをしてきた。

彼女なりに表現には気を遣つただろうけど……それでも当時の俺の耳には……「力」を甘く見ているようにしか聞こえなくて。

「断る……」

思い出せば自分でも戦慄を覚えるくらいの冷たい響きで一蹴し。

「正直言うと俺はおたくらのことはあんま信用してない、次元をまたにかけて犯罪が多い世界だから管理局のような組織は必要だとは思つてけどよ、はつきり言つてあんたらの謳い文句には辟易してんだ、そもそも魔法に対するとらえ方が気に入らない、何がグリーンだ？ 安全だ？ そんな「神話」ちよつとでも悪知恵働かせば簡単にぶっ壊れちまうんだよ——」

とまあ、こんな感じで長々と持論を述べたてて、と言うか八つ当たりをしてしまった。

「確かにお前の考え方は正しい、確かに『善悪』のない力そのものに委ね過ぎてしまうのは危険だ、お前が自力でそれを見い出せたことは誉れだと私も思っている、しかしどう考えても、クロノ君の母君にしまったことは大人げない『八つ当たり』だぞ」

「面目次第もございませぬ」

深々とわが師に頭を下げた。

一連の話しを聞いた師匠からも、静かながらきついお灸を据えられてしまった。もし当時の自分に会える機会があるなら、『やり過ぎだ』とゲンコツ一発やるくらい反省してる。

「なるほど、それならクロノ君もお前を呼びだすわけだ、彼にとっては憧れの対象を侮辱されたにも同然だっただろう」

「ああ、確かにあいつにとつて管理局は憧れの仕事だったし……そこに勤めてた両親はまさしくヒーローだったからな」

時刻はPM16:00

勇夜は校内の屋上に顔を出し、クロノは彼が来るのを待っていた。

そして定刻通り、クロノは姿を現した。

「君を呼んだ理由は解ってるよな……」

「……………」

さすがに殺し合い特有の殺伐とした空気が流れていないが、とても小学生が発せられる雰囲気じゃない。

「先週……君は嘱託魔導師の認定試験を受けた、その時の試験担当官は僕の母だったんだ……」

怒気の混じった言葉から、やっぱり呼び出したのはリンディ・ハラオウンに八つ当たってしまった一件だと察した。

「お前のお袋さんたちへの侮辱を取り消せつつか？」

「そうだ……」

「そのことについては謝るよ、俺もあの時はどうかしてた、けどな——

——局に不満があることに変わりはない」

「なんだと！」



とうとうクロノが声を荒げた。この辺りはまだ歳相応だろう。

クロノにとつて管理局は『憧れのヒーロー』であった。どんな子でも憧憬の念を抱くヒーローのことを悪く言われたらこういうリアクションをとる。

さらに彼はポケット忍ばせているものに、手を取りそうになった――

「待てえ!!」

が、その前に勇夜が常人離れた身体能力で一気に相対距離を詰め、ポケットに突っ込んでいた手を取り出した。

カード型の物体……待機モードのデバイスだった。

模擬戦にでもこぎ着けて、もし勝ったら母に投げた言葉を取り消してくれでも約束させる気だったのだろう。

「軽々しくそんなもん使うんじゃね!!」

今度は勇夜が声を荒げ、両手でクロノの両肩を掴みあげた。

幼い姿からは想像もできない迫力に、クロノは完全に気圧されていた。

当然、この世界の学校では生徒が私的に魔法を使用することは禁止されている。下手をすれば……初等からでも退学されるくらい厳しい。

勇夜はそのことも込みで荒げたのだが、それ以上に衝動のまま魔法を使おうした彼に対して「怒って」いた。

「前々から言いたかったがな、魔導師は魔法を当てにし過ぎなんだよ……お前が考えてる以上に、それを使えるこの武器は怖いもんなんだぞ!」

「だが、管理局は質量兵器の撤廃と魔法の推奨を理念に掲げているんだ、魔法が使えなきゃ、父みたいなの……」

「だったらせめて魔法が『クリーンで安全』だなんて思うな! 非殺傷設定なんて便利なもののせいで忘れがちだけどな、魔法だって人をたくさん殺せる代物なんだぞ! 絶対に安全な力もエネルギーもこの世には存在しない、ただけ危ねえものか分かった上で、気をつけて使うしかないんだよ……親父さんを尊敬してんだったら、せめてそ

れだけは覚えておけ」

言葉を積み重ねる度、熱くなった頭は段々と冷えていつて勇夜は落ち着きを取り戻す。

さすがに熱くなりすぎたと自嘲する。

もしこいつが、かつての自分のように過ちを犯しそうになり、その時の自分のように、止めてくれる存在がいなかったら……：一時はその恐れで頭が一杯になっていた。

「まあ……お袋さんに八つ当たりしたのは悪かった、ごめん」

クロノの肩から手を離れた勇夜は、真つすぐに頭を下げた後、屋上から出ようとした。

「待ってくれー!」

そんな彼を、クロノは反射的に呼び止めていた。

彼とて、彼の発言は正しいと幼いなりに認識していた。それでもせめてもと、言い返さずにはいられなかった。

「確かに、君の考えは間違っていない、でも……それでも守りたいんだ! この手で、この魔法で、全ての世界と人々を守りたいんだ! いや、絶対守ってみせる! もっと強くなって……：父さんみたいな局員になつて見せる!」

と、宣言した。その力強い言葉に、勇夜は少々驚いていたが……ふと笑った。

「何がおかしい?」

勇夜もなぜかは分からなかったが、妙に彼の真面目さに愛嬌を感じていたのだ。

「いや、お前のその真面目君なところが可愛いと思つてな、期待してるぜ、『鉄頭君』」

「どういう意味だ?」

「石頭よりお堅くて融通が利かない野郎つてつことさ」  
顔を赤くしながら、クロノは勇夜に對して。

「ぼ……：僕を——からかうんじゃない!」

思いつきり叫んでしまったのだった。

それ以来、腐れ縁として何だかんだ今でもクロノとの付き合いは続いている。

エイミイとの出会いもあって、昔に比べれば大分あいつは明るくなった。

そして……どうしてあの頃のあいつが、他人をよせつけない奴だったかと言えば――

ウルトラマンゼロが師にクロノのことを話していたその頃、本人もまた当時を思い出していた。

“この魔法で、全ての全ての世界と人々を守りたいんだ！”  
友にそう宣言してから5年たって、執務官の地位に就いたのが今の自分。

次元犯罪と災害に立ち向かう一方で、上には何度も、ある程度の魔法以外戦力の解禁を打診しているけど、中々通らない

今なら当時以上に、勇夜が抱えていた“不満”の正体もよく分かる。

冷静に考えれば、使い手が限られる魔法で、日々存在が確認されて増えていく次元世界群を守ろうなんて、無理があり過ぎた。

発足当時はともかくだ。あの頃は、管理世界も少なく、戦乱で多くの死傷者を出して、アルハザードら次元世界のいくつかも消滅する事態になった。

それだけに、管理局の掲げる『質量兵器の廃止』は願ってもない光明で、いくら各世界の現地政府が反対受けても、支持する大衆たちの

後押しを得てどうにかできた。

でももう、あの頃とは違う。一時的な支持で、一時的に成り立っていたあの時代のシステムでは限界が来ているし、昔より「世界」の数も増えたものだから、魔法とそれを使える魔導師だけではとても賄えない。

いくら本局が人材を引き抜いても全く足りず、引き抜かれた各世界の地上本部はもつと悲惨らしいし、組織同士の確執も大きくなっている。

内部がこの有様なのに管理世界が登録される度反対勢力が台頭、質量兵器が禁止規制されているのを良いことに密輸で荒稼ぎする悪党も後を絶たない、局員がそんな不正に手を染めている事例もあったし、魔法に対抗する兵器がいつ出てもおかしくなかった。

次元をまたにかけた犯罪が起きる以上、対応できる組織は必要だけど、ここまで埃がたっている今となっては確実に変革が必要な時期に来ている……と言うのに、中々上手く行かない。

歳と見た目に似合わない溜息を、何度吐かされたことか……同じ想いを抱く人たちが少なくないことが、せめてものの救いだ。

「フェイト」

インターフォンを押すと呼ぶと、部屋の主が出てきた。

「何ククロノ？」

「来週の聴取内容の資料を持ってきたから、当日まで目を通しておいてくれ」

「分かった」

「それより、今日もあの映画を見てたのか？」

「良いでしょ、面白いし、体も鍛えておきたいからから参考にもなるし」

その映画は勇夜のお勧めで、ロート・ラドラムという地球人の作家が書いた小説を映画化した作品で、記憶を失ったスパイが、自分を暗殺者にしたてあげた組織の陰謀に立ち向かうものストーリーだった。

話にも力が入っているし、面白いとは思いますが、仮にも女の子なフェ

イトには合わない気もする。

僕も違う意味にで気になった作品だ。劇中では、主人公を狙う暗殺者との戦闘が何度かあるのだが、彼はよく身の回りのものを即席の武器にして戦っていた。ある時は、雑誌、ある時は本のカバー、ペンだつて彼にかかればナイフになる。

それらで自分より殺傷力のある武器を持っている相手を倒してしまふのだ。

人間その気になれば、日用品でさえ武器に仕立てあげてしまふ。

“道具”そのものに対し、過剰に“クリーン”だと見なすのがどれだけ危ないか、勇夜の持論がより強まり、僕も同意できるだけに複雑だ。

でも、その“現実”たちに負けていられない。

父だって、こんなところで折れるなど叱咤するだろう。

自分たちは、魔法の威を借りた“人”でしかないが、それでもできることはあるのだから。

それから半年の後、僕はずっと“心の内”に押し込めていたものと、直面することになる。

第二部につづく。

## 第二部 | 呪われた闇の書 Prologue | 覚醒

その少女は、決して一人では無かった。

幼い頃に両親を失い、原因不明の両足麻痺で車椅子の生活を余儀なくされていたが、血縁は無いが、面倒見のいい義兄（あに）がいてくれた。

ペットとはまた違う、友達のキツネの女の子もいてくれた。

仲だつて良好以上であつたし、その兄と子狐がいてくれなければ、一戸建ての家で一日中一人で暮らす羽目になつていたはずだ。

学校だつて不満足な足で、まともに通えず、通信制の授業を家で受けるしかなく、同年代の友人など中々できない環境だつた。

彼らの存在は、それだけかけがえの無いものだつた。

生活にだつて不満はない。

でも一方で、こう考えてしまうことがある。

特に兄に対して。

自分は、兄の足を引つ張る存在でしかないのでは……自分は兄の間を奪っているのではと……この前も、車に引かれそうになつて、兄は学校から早退してまで心配して来てくれた。

案じてくれる人がいてくれるのは嬉しい。

でも、受け手になるばかりな自分が、嫌だつた。

だから料理に関しては、頑なに自分担当にして、それなりの腕前は持つようになった。

いやなのかもしれない。

このまま誰かの庇護下のままな自分と、こんな気持ちを繰り返していく日々。

戻りたいのかもしれない。

父と母と兄と揃つて生活していたあの頃に。

周りからは強い子だと思われてるけど、そんなことない。

強がっているだけだ。

今だって彼女は、夜の闇に孤独を感じてしまうから、読書に没頭していた。

でも、もう夜の12時だ。

兄である『紅蓮兄ちゃん』が寝ると言ってくるかもしれない。

本を片づけて、電気を消し、眠りにつこうとした。

その時、彼女は『なにか』を感じた。

言葉では具体的に表現できないけど、何かの存在を感じとった。得体の知れないのに、不思議と怖くない。

でも、それが何なのか気になって部屋を見渡してみた。

あった。

机の本棚に羅列された本の合間。

今の彼女からは背表紙しか見えないが、両親が亡くなって間もなく家でみつけた厚い本。

茶色に金色の縁、表紙には十字架のレリーフが付けられ、封印するかのように鎖がかけられた西洋のものらしき年季の入った古い本。

なぜだかそれを捨てる気になれず、今までとっていた。

それが今、怪しげな光を発し、そして浮き上がり、彼女に向けてゆっくりと近づき。

「はやくー！」

彼女——はやての兄、紅蓮が異常を感じ、ドアを開けて駆け付けた瞬間。

「Ich entferne eine Versiegelung。」

2人には聞いたことが無い言葉を本が発し、閃光が、部屋を埋め尽くしていった。

「目覚めたか……………」

同時刻、ある男が、禍々しい波動を体から発し、かつその容貌は邪悪な笑みに染まっていた。

ウルトラマンゼロ The Another Lyrical  
Story

第二部―呪われた闇の書―はじまります。



# STAGE 01 | Curtain Rises

暦は地球の西暦で11月末、第一管理世界、惑星ミッドチルダ。

その星の西側に位置するエルセア地方の中心都市の郊外に、夜は酒屋だが、昼はデバイスの注文、作成、修理点検を請け負う一風変わった店がある。

店名は『ビリーフ』、日本語で「信念」と意味する。

この店を切り盛りしているオーナーは、職人——デバイスマイスターでもあり、名はベイカー・オールデイス。

口周りに生える髭がよく似合う厳つい四角顔に、オールバックの長結いな中年の渋みがある、それでいてどこか愛嬌も感じられる男。

声はハリウッド俳優のスティーブン・セーールの吹替えを担当する声優の声とよく似て凶太い。

一見すれば典型的な頑固親父で、デバイスに関する仕事は『ある条件』をクリアしないと受けないが、はたから見れば無茶苦茶な注文でも、期限内にこなす腕の立つ職人であった。

「お来たな、お前さんのデバイスなら、整備は済んでるぞ」

近未来的で洗練された都市に反して、穴場で木独特の匂いが漂う、薄暗い店内で店主は、見た目が10代半ばの日系人の少年に、腕輪型の待機モードなデバイスを渡していた。

「ありがとうございます、久しぶりですね、ライト」

『はい、一週間と二日ぶりです、我が主』

日系の少年、高町 光（リヒト）ことリヒト・シュピーゲル、鏡の騎士ミラーナイトと、その相棒、シルバーライトである。

今から11年前、とあるアクシデントで彼を含めた宇宙警備チーム、ウルティメイトフォースゼロは、時空の歪みに巻き込まれ、ミラーナイトはこちらの次元世界の地球、日本の地方都市、海鳴市にとばされた。

その際肉体が4歳児に退行して、ミラーナイトとしての姿に変身できなくなってしまったが、高町家に助けられ養子となつて10年以上を地球で過ごし、約半年前に起きたP・T・事件をきっかけに義妹と

ともに魔法使いになった。

シルバークライトとはその事件をきっかけに巡り会ったバディな仲間である。

「今日もそのお仲間さん探しか？」

「そんなところですね」

件のP・T・事件以来、一度光の国に帰省した諸星勇夜ことウルトラマンゼロに変わって、休日の合間を縫って、次元世界を廻っては、仲間の手掛かりを探していた。

提督であるリンディ・ハラオウンのサポートもあるが、鏡面ワープなど、元々長距離転移が得意な光には、各世界を転移魔法で移動し、その日の内に地球の高町家に帰るなど造作も無かった。

ゼロからのウルトラサインによる伝言で、仲間の一人であるジャンボットが彼の故郷である光の国に居るのは知っている。

残るは元宇宙海賊の用心棒、炎の戦士、グレンファイヤーだけ。

なのだが：彼だけ手掛かりの手の字も見つからず仕舞いだった。

ひよつとしたら、灯台もと暮らしといわんばかりに、地球に居るのではと考える時があるが、それならロズウェル事件以上の注目度で、世界中で話題になるかもしれない。

異世界人で50メートルもある巨人、炎がそのまま顔になった容貌に、喧嘩番長なムードメーカーな性格の彼のことだ、現地の地球人と、一悶着あってもおかしくない。

が、実際のところは、噂の「う」の字も無かった。

実際、自分も地球に飛ばされたのだから、可能性は無いとは言いきれないし、身寄り先の地球人に上手くフォローされているのかも。「手詰まりになってんなら、手伝ってやるぜ、俺は情報屋も兼ねてっし、これでも顔は広い方だ」

彼は情報屋も兼任しており、勇夜によく情報提供していたという。無論お金はかかるが、金銭面では勇夜が囑託魔導師として受けた仕事の報酬で充分賄っていた。

「いえ……そこまで甘えられません、ライトのメンテナンスだけで充分ですから」

とは言え、自分たちの正体は余り世間に公表できることではないので、こればかりは感謝しつつも申し出を断った。

そして何を隠そう、主なデザインは光本人だが、この世界における魔法の杖——デバイスであるシルバークライトを直に作成したのはこのベイカーで、勇夜のデバイスの零牙も設計こそ使い手本人だが、それを元にしてパーツを作りあげたのもこの御方だ。

どちらも独自の機構を持っているにもかかわらず、特に前者は一週間で作り上げてしまった。

これでも昔は、時空管理局でも指折りの技術者だったそうである。

「そうか……なら代わりといっちゃなんだが」

「何か？」

「お前さんも魔導師だろ？ これは無関係で済む話じゃねえからな」

「代金はいくらですか？」

「よせよ、今回はサービスだ」

ベイカーの顔が、気さく笑みから重々しさのあるものになる。

「実はな、最近魔導師……つつーより、魔力を持つてる輩が襲われてる事件が起きててな」

彼が話してくれたのは、ここ最近あらゆる次元世界で魔導師相手に起きる通り魔的襲撃事件のことであった。

その日の夜、彼はその「無関係では済まない一件」に関わることになる。

ちなみに、ベイカーがおっしゃった通り、サービスということでは情報料はタダにしてもらった。

宇宙の外に広がる超空間。あらゆる宇宙を内包し、「マルチバース」とも、「次元の海」とも呼ばれる広大で幻想的な世界。

主に魔法関連、滅んだ文明の落し子ロストロギア、次元を超えた規模の犯罪などを取り締まる時空管理局の本局は、この海の真ただ中にある。

局員でも、その施設の全容を把握していると言えないほど、巨大な円形コロニー兼ステーションであった。

そこに向かう艦船が一隻、L級巡航艦船アースラ。

その艦内にある食堂の一角では、クルーである大人たちに混じって、少年少女たちもそこにいた。

「さて、じゃあ最終確認だ、被告席のフェイトは、裁判長の問いにその内容通りに答える事」

15歳の若さにして、執務官という高官に就いた黒髪の少年、クロノ・ハラオウン。

「うん」

彼とは向かいとなる席に座っているのは、魔導師——魔法使いである金髪赤眼で髪をツインテールでまとめた少女、フェイト・テストアロツサ。

「今回はアルフにも同席してもらおうから」  
「分かった」

オレンジ色の髪色と狼のような獣耳と尻尾、さらに鋭利な犬歯を生やした肉体の発育の良い、10代後半ほどの少女が答える。

彼女と契約を結び、姉妹ともいえる関係で、かつ魔導師であるフェイトをサポートする使い魔、アルフだ。

「で、僕とこのフェレットもどきは証人席、質問の内容はその資料に書いてあるから目を通しておいでくれ」

「うん、分かった——っておい!!」

で、クロノにフェレットもどきと呼ばれて、のりツツコミをした艶のある薄めの色合いなブロンド髪と、翡翠色の瞳をした12歳くらいの少年はユーノ・スクライア。

クロノと同じく若年ながら、遺跡発掘を行う考古学者でもある結界魔導師だ。

「何だ?」

「誰が、フェレットもどきだ! 誰が!」

「勿論君のことだが、何か?」

普段のユーノからは想像できない剣幕と突っ込みを、クロノが冷静

に打ち返した。

危険が伴う遺跡発掘を生業とするスクライア一族は、自らの体を小動物に変身すると言った補助系の魔法が得意で、人型サイズでは無理がある閉所を通る時などに重宝されている。

ユーノの場合だと、彼が変身するのはフェレット。

「そ……そりゃまあ！　ちよつと前まで動物形態で居る事が多かったけど、そのあだ名を定着させないでほしい！」

で、本人の言う通り、ここ最近は本来の姿

自身が発掘したロストロギア——ジュエルシードが輸送中に起きた事故で地球、日本の地方都市である海鳴市に流れ着いてしまい、責任を感じて独自に回収に向かったものの、その際負ったダメージの回復の為、その姿にならざるを得なかったのだ。

お陰でクロノからはすつかり

光からも同様に呼ばれ、勇夜に至っては『イタチもどき』と言われた。

成り済ましている点では、もどきと呼ばれても何ら間違っていないのが何ともである。

「ユーノ、まあまあ落ち着きなつて」

「クロノも、あんまりいじわる言っちゃ駄目だよ」

「大丈夫、場を和ませる軽いジョークだ」

と彼は言うが、正直そんなシリアスな真顔で言われても、場を和ませる効果は皆無である。ユーノのノリツツコミが無ければ、滑って空回りしているところだった。

少し横道に逸れたが、彼らが今行っているのはこれから始まる、裁判の最終公判の打ちあわせだ。

フェイトとアルフは、ジュエルシードを不法に収集した罪等で裁判を受けている被告人の身である。

本来なら、フェイトの母でもある事件の主犯格、プレシア・テストアロツサも同席しなければならぬのだが、病を患っている身なので、主な公判ではフェイトが出頭していた。

私服を着ている辺り、とても被告人には見えないが、これでもア

スラからは基本出られない身……が、それも次の公判で終わる。

罪状は免れないが、執行猶予と数年間の保護観察も付いてくる。再犯さえ起こさなければ、制限はついてくるものの、彼女らは晴れて自由の身だ。

礼服に着替えるために、フェイトは一度、アースラ内の自室に戻った。

部屋に置かれた机の卓上には、写真やら封筒やら、映像記録ディスクならが置かれている。

写真立に、フェイトと一緒に写っている日本人の少女。

高町なのは。

かの高町光の義妹で、高町家の末っ子で、地元の小中学生である地球人で、PT事件をきっかけに魔法の力を開花させた魔道師。

何よりフェイトとは、ジュエルシードを巡って争いながらも、それを経て初めての友達となってくれた女の子。

机に置かれている封筒やディスクは、そんな直に彼女と触れ合えない現状においての交流の軌跡というやつだ。

そして……机の引き出しから、そつと大事に何かを取り出した。

金色の縁と文字で彩られた長方形型の黒い髪留め。

それまで同性しか触れ合ったことが無かった自分が初めて会った異性で、多分、初めて——「好き」——になった人。

その彼が、自分が帰ってくるまで預かってくれと渡されたのが、この髪留めだった。

それを——大切に握りしめた。

もうすぐ、会いに行ける。

今まで、時々しか直に会えなかった母さんに、ビデオメールでしか顔を合わせられなかったなのは、記憶の中でしか会えなかった姉さん——アリシアに、そして……もうすぐ姉さんと一緒に、彼も帰って

くる。

諸星勇夜——ウルトラマンゼロ。私にとっても“ヒーロー”な人。

この間マルチバースにウルトラサインが上がって、今週中には戻ると聞いた時、天に昇るような気持ちになった。

今日を乗り切れば、いつでもあの人たちと会える。

その時になったら——

「まだ気が早いんじゃない、フエイト♪」

温暖な心持ちに浸っていた私の耳に声が響き、意識は現実に戻されられました。

「あ、アルフ?!いつから!!?」

「丁度勇夜の髪留めを、ぎゅーと抱き締めたところから♪」

既に赤くなっていった私の頬が、余計に紅潮されていきます。

いくら寝食を共にし、相部屋である間柄で、しかも使い魔の精神リンクで自分の感情がアルフには筒抜けであること理解していても、こんなところを見られるのは……恥ずかしくなります。

よく見るとアルフは、男の子には刺激が強そうな露出の多い私服ではなく黒の礼服で、耳も尻尾も完璧に隠されていました。

八重歯が多少鋭いことと、額の宝石を大目にみれば完全に人間の姿、もう準備は万全と行ったところですよ

「早くしないと遅れるよ」

「う……うん」

噛みしめるのはいいけど、まだハードルは越えた分けじゃない。

私は、喜びを丁重にしまつて、気持ちを切り替えてしゃきつとさせました。

この時は当然、思いもありませんでした。

自分が予想もしなかった形で、勇夜たちと再会することになることを。

自身の“鏡”も同然な人たちとの——出会いが待ち受けていることを。

一方で、こちらはアースラのブリッジ。

艦橋の窓からは、わざわざカメラのモニターで確認しなくても、時空管理局本局の大型コロニーが肉眼ではつきり見える。

『お疲れ様リンディ提督、長旅御苦労さま』

その艦長であるリンディ・ハラOWN提督は、同じ提督で、同僚でもある、眼鏡と淡い紫のロングヘアが印象的な、レティ・ロウランと通信を取っていた。

「ねぎらいのお言葉どうもレティ、そっちは問題無い？」

『っ…………アースラのドッキング受け入れと整備に関してはね……………』

レティの声色が、幾分か歯切れが悪くなり、悩ましそうな表情になる。

『ごっちの方では、頭を抱えさせられる事態が起こっているのよ……………』

「その事態というのは……………もしかして」

『そう、違法異世界渡航者による魔導師、及び魔力内胞型の生命体の衝撃事件よ』

ここ数カ月、管理世界で頻発していた事件とは、レティも今述べたが、魔導師である人間と、体内に魔力を宿した管理世界での生物が、次々と何者かに襲われている、ということ。

同日、光がベイカーから聞いた情報も、それに関連するものだ。

一連の事件が同一犯であると、既に判明はしている。

被害を受けた者たちの、ある「共通項」によって。

『いくつかの世界で、痕跡が発見されているみたいで、今は派遣した担当の捜査員たちの報告を待つしかないわ』

「大変ね……………」

「それと、襲撃犯のことで有力な仮説があるのだけれど…」

「提督、と言うのは？」

歯切れが優れない言い方が気になりつつ、クロノは『仮説』の詳細を問うた。



「ロストロギア、一級搜索指定が掛かっている危険物で、まだ断定はできないのだけれど……あなたたち家族とも因縁浅からぬ代物」

レテイの一言で、そのロストロギアの名称が直ぐに行きついた。

リンデイは内心、動揺を隠せなかった。この仕事を続けて行く以上、いつかは「あれ」と関わることになるかと覚悟していたが、こんなに早く活動が再開されるなんて……「彼」が亡くなってから……まだ7年。

自分はともかく……クロノは……まだ心の整理がされたとは、言い難い。

その自分でさえ——「友軍艦に撃ち落とされる次元航行船」——の光景がフラッシュバックされると、胸の奥から疼きが再出されるのだ。

これが、息子となれば……疼きと一緒に、懸念がリンデイの胸を過ぎっていた。

冬独特の、早目な日没を終えたばかりの海鳴市。

中心市街のビルの頂の内一つに、影一つ。フェンスを越えて、屋上と壁による角を椅子代わりに座る少女一人。

外見から見るに、歳は5〜6歳程。髪は濃いオレンジで、髪型は二つに枝分かれされたお下げ。青味の目は、一目で強気な性格だと伝えられそうな吊り目。

服も、黒のミニスカートを除けば、長袖のTシャツに、黒と白のラインが横方向に刻まれた袖なしのパーカーで活発そうな印象。

右手には、銀の光沢を帯びた女の子の小駆並の長さな大鎧。

左手には、市街のCGが映されたホログラムの球体が浮遊していた。

球体に、赤く点滅する小さな光点が浮かぶ。少女はそれを目にするのと、その場を立ちあがった。

どうも、少女はこの街で何かを探しており、丁度目星のものを見つけたようだ。

「いくぞ…アイゼン」

ほぼ同刻の夜にて、フェイト・テストアロツサの「友達」である高町なのはは、自室で学校から出された宿題をやっていた。

P・T・事件以降の彼女の日常は、そんなに大差は無い。家では家族と団らんし、学校では勉強に励みながら親友たちと談笑。

ただ、平日の朝は兄の光と一緒に体力を付けるためのトレーニングと、魔法の訓練、さらに時に母からの指南による菓子作りが日課になったこと。

また直に会えることを祈りながら、フェイトとビデオメールと手紙を送り合う文通が続けていること。

と変化は少しずつだがある。

だが、変わってるようで変わって無いものがあった。

前々から、悩みになっていた将来の不安。

ずっと、取り柄が無い自分が嫌になり、そう思う自分にも嫌になる。

みんなの……「誰か」の為に、自分にしかできない「何か」が欲しい。

願う一方で、それが見つからない日々。

でも、フェイト、ユーノ、勇夜たちと出会ったことで、見つけられた。

それが——魔法。ようやく出会えた、しゃんと胸を張って言える自分だけの特技。

ただ、出会えたのは良いけれど、これから自分がどうするべきか、なのはにとって余計悩ましいものになってしまった。

魔道師を続けて……管理局に入る？

それとも翠屋二代目を目指す？

具体的な選択肢はこの二つ。

どちらもまんざらではないだけに、余計悩ましい。

二代目になれば、魔法の世界、フェイトたちとの関わりが薄くなる。でも局員になっても……兄や勇夜のように、守りたいものの為に、腹を括って“戦い続けられるか？”と言われても自信が無い。

中途半端にしたくないから、訓練は続けているし、あの頃は無我夢中だったけど、前に兄が言っていたように、力を行使する以上、心にストッパーをかけなきゃならない。

『マスター、手が止まっています』

今は自分の魔法の杖でパートナーであるレイジングハートが呼び掛けてきた。

「にやはは、ありがとう」

いけない、悩みをこんな、心の中にばかり、押し込めてばかりじゃいけない。

言えない理由があったからとは言え、そのせいで親友のアリサとは疎遠になったこともある。

今度、兄に相談してみることにした。

もうすぐフェイトたちとだって会えるんだから、こうくよくよしてちゃ駄目だと、なのは心を落ち着けさせる。

何だか、不思議だった。光にフェイト、ユーノに勇夜にアルフ、大切な人たちの顔が浮かんだだけで、頬がはにかんだ。

なんとまた現金か、でも嬉しいことに嬉しいと感じて何が悪いのだろうか？

味わえるのなら、ちゃんと噛みしめないと勿体ない。

気分をリセットしつつ、今日の前にあるハードル、宿題に取り掛かろうとした時だ。

『警告、緊急事態です』

愛機からの警告の一声。

同タイミングで自分の体が魔力を感知した。

周りを見渡す。

周辺の空間の色調が、変質される。

結界？

誰かが張った魔法による異空間の中に、自分が閉じ込められたとなのは気づいた。

でも……どうして？

地球には、管理世界と関われるような要素は無い。

P・T・事件はイレギヤラー中のイレギヤラーで起きたものだ。

ジュエルシードのように、ロストログアがこっちに流れ込んできたなんてことも聞いてない。

『マスター、結界を張った魔道師が高速で接近しています』

ともかく、家の中ではどうしようもなかったので、なのははレイジングハートを連れて外に出て、今はあるビルの屋上に立っていた。

アースラにいるリンディたちに連絡を取りたかったが、結界は通信妨害の効果を持っているようで断念させられる。

念話もまったく駄目だった。

光もメンテナンス中の愛機——シルバーライトを取りにミットチルダに行つて、まだ帰ってきてない。

となれば、相手の出方次第だが、暫くは自分とレイハで対応するしかなかった。

『来ます』

魔力を纏った球体が、こちらに向かってくる。

『誘導弾です』

それは、オレンジ色の魔力スフィアだった。アルフのものより、若干色が濃い。

『Round Shield』

それを右手で生成した魔法陣の障壁で受け止める。

重い……気を少しでも抜けば押し切られてしまうほどの衝撃。

よく見ると、障壁を押し付けるのは魔力を纏った鉄球。というより、むしろ魔力で限りなく実体化された弾丸と言えた。物理的衝撃が付加された魔力製の弾丸は、防御が得意なのはでもてこずらせる。



それよりなのはが気になったのは、その少女が“自分より幼い”ということだ。女の子は、なのはの呼びかけに一切応じずに指を翳すと、立てた指の間から鉄球が二つ出現。

『Schwalbe Fliegen』

少女のデバイスらしきハンマーから、英語でもミットチルダ語でも無い電子音が発され、少女は鉄球をそのハンマーで撃ち、なのはに飛ばす。

『Wide Protection』

誘導機能があるのか、左右二方向から来る弾道を全方位にバリアを張って防ぐが。

『T・dlich schlag』

同時にハンマーの打撃も襲いかかり、バリアとハンマーが再びぶつかり合った。

「話を聞いて！教えてくれなきゃ、分からないってば!!」

中々なのはは攻勢に転じられない。フェイトの時は、彼女の目的がある程度はつきりし、集めているジュエルシードが、どれだけ危険な代物か思い知らされていたため、どうにか応じようがあった。

だが目の前の女の子は、動機も目的も、何もかも不明。記憶を探っても、以前会った形跡は全くで見覚えが無かった。

『Barrier burst』

「っ!」

そんな時、レイジングハートが独自の意志でバリアを暴発、反射的に後退する少女だが、衝撃波を前に、後方に飛ばされる。

『(マスター、今は戦闘に集中して下さい)』

『(でも!?)』

『(これが戦いというものです、目的、真意を尋ねて、相手がそれに応えてくれるほど甘くありません)』

愛機の言葉は心にずしりと響く話だが、正論でもある。

どの道、話し合いも拒否されて攻撃される以上、応じるしかない。

「(ごめん……レイジングハート、付き合ってくれる?)」

『All right, canon mode set up』

なのはの意志に応え、レイジングハートは砲撃形態へと変形。

『Devine Shot』

なのははトリガーに指を掛け、態勢を立て直して向かってくる相手に。

「ごめんね………デivainショット、シュート！」

罪悪感を押し込め、トリガーを押す。桜色の魔力弾が発射された。

『Panzer Schild』

少女はなのはたちのとは違う、三角の凶と角の頂点に円が描かれた魔法陣で受け止め、着弾した瞬間、爆発を起こす。

相手は爆煙で見えなくなる。

一瞬、魔力ダメージで失神したのか？　と思われたが、

『Raketen form』

あのエコーが掛かったハンマー型のデバイス音が響き。

「ラケエエエエエエテン」

爆煙を振り払い、四散させ。

「ハンマアアアアアア———!!!」

先程とは比べ物にならない加速で回転しながら、横薙ぎの一撃が振られる。

最初の一打はどうか避けられた。だが「バーニア」から荒々しく吹き荒れる推進力を乗せたスピードでなのはも迫る。直撃を受けまいとこちらも限界まで速度を上げて後退するが、とうとう回避不可の距離まで詰められ。

『Round Shield』

レイジングハートはシールドを張って受け止めるが。

「負けるかあああああああああ———!!!」

屈強な桜色の障壁は、呆気なく破壊され、『片方の打突の先端が尖り、もう片方がジェットを噴射する推進機が付いた』ハンマーにレイジングハートは、衝撃で罅が入り、なのははその身にのしかかるGに悲鳴を上げながら、為す術も無くビルの外壁に叩きつけられていった。

常人なら即死レベルの衝撃だったが、バリアジャケットの魔力フィールドのお陰で致命傷は避けられている。

だが、ダメージそのものは無効化されるはずも無く、ビルのがラスを超えて、部屋の壁面に叩きつけられたなのは、全身に走る痛みを前に、呻いていた。

流石に全身打撲は避けられなかったようだ。

レイジングハートも、今の一撃であちこち亀裂が入って痛々しく、ルビー色のコアは弱弱しく、エネルギーが消耗した時のウルトラマンのカラータイマーのように点滅している。

なのはが叩きつけられたビルはどこかのオフィスのようだが、もう原型を留めていない。

痛みの最中、目を開けると、あの少女がゆっくりと歩んでくる。

逃げなきゃ……逃げなきゃ……逃げなきゃ……逃げなきゃ……心がそう訴えかけるのに、体が痛みと恐怖に伝えてくれない。

薄暗い部屋のせいで、目の前の少女な悪魔は、どういう表情をしているのか掴めない。

が、その少女は防御力の高いなのはの魔力障壁を容易く破壊、愛機にまで重傷を与えた。

もしあの一撃が自分の体に当たってたら……背筋が凍る。

相手が自分より幼い容姿なことが、却って恐怖心を煽らせる。

涙が流れていることさえ自覚されないまま、初めて直にこの身で、この肌で感じさせられる「死」の匂い。

真意も分からぬまま、一方的に蹂躪される恐怖、それを突きつけた少女は、受け手からは悪魔の所業に映るだろう。

なのはも、ほぼ似たような感情に埋め尽くされていた。

だから、少女が一瞬見せた逡巡と憂愁の表情が、目に入ることはなかった。

鉄槌を持った幼い外見の「悪魔」が、得物を振り上げる。

嫌だ……嫌だ……嫌だ、いやいやいやいや！ 嫌だよ……まだ……死にたくない……死にたくはない……まだ……生きたい……生きていたい。



生きたい！

助けて！

その時、レイジングハートから「あの光」が煌めいた。

相手から見れば、何が起きた？ であつたことだろう。

目の前で脅える少女のデバイスから、突然煌めきと見たことも無い紋章が発され、そこから飛び出した光が突進、正面からもろに受けた少女は痛みを耐えながら後退し、ビルから脱出した。

『Scythe Slash』

少女の得物なデバイスのものとは違う電子音が響き、咄嗟に回避、第二破が来ると見越して、魔力刃の斬撃を振りおろしてきた誰かから、距離を取る。

自分と対峙して、浮遊する人が2人いた。

いや、もう片方は人と呼べるのか？

一人の方は、さっきの白いやつと同じくらいの歳で金髪、仲間であるところある戦闘狂な剣士と同じ、その髪を一纏めに縛り、黒いバリアジャケットとマントを羽織らせ、刃が金色の魔力でできた大鎌を持っている少女。

そしてもう一人は、銀色に緑色のラインが走ったスレンダーなボディ、顔には顔らしいパーツは無く、代わりに金色に発光する光体があつた。

自分たちはそれなりに長生きだが、こんな野郎は今まで見たことない。

どちらにしろ、こいつらはあの白い奴の――

「仲間――」

――なのか？ と思わず尋ねていた。

「答える義務はありません、『あの子』の言葉を見殺したあなたに――」

レイジングハートのコア部分の鏡面から現れて、少女に拳を振るつた銀色の人、ミラーナイトは独読の高音の声を冷たく染めながら答

え。

漆黒と金色の魔導師、フエイト・テスタロッサはといえば、静かに、  
だがはつきりと聞き取れる声量で、ただ一言。

「友達だ」

——と、発した。

かくして、長きに渡る戦いの幕は、上げられた。  
つづく。

## STAGE 02 — RETURN

「あれって、光兄の……」

レイジングハートから迸った、輝く“紋章”。

間違いない……兄が、鏡から鏡へ伝ってきたワープの光。

一拍置いてなのはは、自分がまた魔導師として最初の戦闘の時に、ミラーナイトとしての兄に助けられたことを悟った。

「なのは」

「っ……ユーノ君」

目を向けると、ユーノが心配そうになのはを見つめている。

「待って、今治癒魔法をかけるから」

そう言いながら、なのはに手を翳すと、ユーノの足元に魔法陣が出現、ほのかに暖かいそよ風が吹き、なのはの全身に走る痛みが引いていく。

ユーノからの話しでは、今日フェイトたちの裁判が終わり、その事を連絡しようとしたが、通信が繋がらず、調べてみたら海鳴で結界が張られていることが判明し、丁度ミットチルダから地球に帰るところだったミラーナイト——光と一緒に、フェイト、ユーノ、アルフが急いで現場に駆け付けてきた、というわけである。

クロノ、エイミイらアースクルームも、艦の整備を一旦取りやめて、サポートに入っているとのこと。

「ユーノ君、あの女の子って……」

「分からない、ただ……似たような事件が、最近色んな世界で起きてるんだ……」

その頃ビルの外では、なのはを襲撃した“通り魔”な鉄槌の少女と、ミラーナイト、フェイトが対峙していた。

「民間人に一方的な魔法攻撃、軽犯罪では済まないよ……君」

「なんだてめえら、管理局の魔導師か？」

「答える義務は無いと言いました」

「ちっ…」

警戒心を剥き出した、少し舌足らずな口調で問うてくる少女の言葉を、光——ミラーナイトはその一言で下し、斬り伏せた。

淡々と答えているが、フェイトはその奥にある彼の怒りを感じ取っていた。

彼の気持には同感だ。

対峙する6、7歳ほどの少女は、有無を言わず民間人を攻撃した。その相手が愛する妹となれば尚更、怒りが沸くのは必然。

自分も、正直少女の理不尽に憤慨したくなる。

けど、抑えなければ——とフェイトは律し。

「間違っていない…わたしは時空管理局嘱託魔導師、フェイト・テストタロツサ」

彼が、現在ミラーナイトの姿をし、少女の問いに答えないのは、ちゃんとした理由があるらしいが、フェイトの場合は立场上、名乗っておかないといけない。

一応、前に勇夜からは相手がよほど意気消沈してないと効果は無いと言っていた『局の常套文句』を言っておくことにした。

彼女の意志を確認するには、もってこいな言葉でもある。

「投降すれば、君には弁護の機会は与えられる、まず武器を下して——」

「誰がするかよ！」

速攻の即答によって、即刻拒否された。

「(やっぱり…駄目か…)」

「(罪を犯していることを自覚はしているようですが、だからと言って素直に応じてくれませんかよ、前のあなたと同じです)」

「(うん…そうだね…)」

フェイトは光の発言に同意する。自分も少し前は、あちら側の立場だった…：…言い方は違えど、この少女と同じ対応をとり、なのはに敵意の刃を向けていたのだから。

真紅の少女は、予想通りの返答とともに、その手に鉄球を出現させた。

『Schwalbe fliegen』

魔力を球体に圧縮させ、本物の鉄でできた球と区別がつかないほどそっくりな球体を作り出して、打ち飛ばす、それがなのはに最初に襲ってきたこの誘導魔力弾の正体だった。

合計8つ鉄球を召喚して、それらを打ちつけて二人に向けて飛ばした。

飛んでくる鉄球を旋回してかわすミラーナイトとフェイトだが、誘導機能を持つ鉄球が二手に別れ、向かってきた。

『主、フェイト殿、お気をつけを、やつのデバイスはカートリッジシステムを搭載したベルカ式です』

追いつがる鉄球とドッグファイトをする2人に、今は右腕の上腕に装着されているシルバーライトが忠告してくる。

「(なんですって?)」

『(主はともかく、フェイト殿は接近戦を避けて下さい、ミット式とインテリジェントデバイスでは分が悪すぎる)』

「(分かった...)」

得意手は封じられるが、相手はなのはと、愛機のレイジングハートをあれだけボロボロにした強敵、贅沢は言えない。

それにフェイトは接近戦がメインだが、距離を問わずに戦えるよう、母の使い魔で乳母兼家庭教師だったリニスから戦闘スキルを身に着けられている。

「ミラーエッジ!」

『Scythe Slash』

ミラーナイトは手甲から出現した剣で、フェイトはバルディッシュの魔力刃で鉄球を迎撃し。

「シルバーアアアアランサー!!」

ミラーライトは光り輝くクリスタル状の槍、『シルバーランサー』を4発周囲に形成し発射。

『Arc saber』

「アーークセイバアアアアアーークセー!!」

フェイトは三日月型の魔力刃を投擲する斬撃魔法、『アーークセイ

バー』を放った。

闇夜を翔ける光の槍と光の刃が、鉄槌の少女に迫る。

「ちっ！アイゼン!!」

『T&Ouml;l;dllich schlag』

少女はアイゼンと呼んだデバイスのハンマーで、先陣を切る光の槍、シルバーランサーを叩き落とす。

「障壁！」

『Panzer schild』

三角状の魔力障壁で、光の刃であるアークセイバーを受け止めた。

よし、思惑通りかかってくれた——今だ！

「(バルディツシュ)」

『Saber Explotoad』

なのはとの初戦でも使った魔力刃の暴発『セイバーエクспロード』を敢行。

三日月の魔力刃が暴発し、物理的衝撃を内包する閃光を放つ。

決定打にこそならなかったが、爆風で怯む少女。

「はぁアアアアア——!!!」

態勢を立て直させまいと、ミラーナイトが上空から踏み込み、手甲の光剣を袈裟がけに振り下ろす。

それに対し少女は、ミラーエッジをハンマーの柄で受け止めた。

スパークする剣と鉄槌。得物を押し合う両者、ほぼ拮抗していたが。

「こおおおのおおおお——!!!」

少女は、得物越しにミラーナイトを力任せに押し返そうとする。

『photon lancer multi shot』

「ファイアー！」

が、稲妻を有したファイアの射撃魔法、フォトンランサーの連弾が少女を襲う。

直射タイプの魔力弾なので、少女はどうか回避し、彼らと距離がとって離れるが、途端体に力が入らなくなる。

何かに挟まれて、体の自由がきかない。少女は体の周りを見下ろす

と、自分の四肢が捕縛魔法のリングバインドで拘束されたことに気づいた。

少女は毒づいた表情を浮かべた。

周りを見回すと、下方に、燈色の髪と狼の耳と尻尾を持った女性、アルフがいた。

「(アルフ、御苦労さま)」

「(お手柄ですね)」

「(はは……できればさ、もう少し一暴れしたかったけど)」

「(贅沢は禁物ですよ)」

三人のとつた戦法はこうだ。

ミラーナイト、フェイトが彼女の意識をこちらに向けさせ、気を取られている隙に、アルフがバインドで捕える、であった。

少女は強引に振りほどこうとするが、当分は動けない。

が、念のためにとミラーナイトは逃がさぬよう。

「もう暫くじっとして下さい、ミラーウエイト！」

重力波で動きを封じる光の十字架、ミラーウエイトを少女の周囲に漂わせた。

技の特性上、動き回る敵には向かないが、一度発動すれば、十字架に蓄えられたエネルギーがつかえるか、十字架が破壊されるまでは身動きがとれなくなる。

「荒いやり方で申し訳ないけど、君の名前と出身世界、目的を教えてくださいらうよ」

「くそ……」

少々手荒な真似をしたが、改めて事情聴取を行うフェイト。

一方、ミラーナイトは、どこか違和感を覚えざるを得なかった。

手ごたえが……無さ過ぎる。あの少女は見た目はなのはとフェイトより幼いが、あのタイプの魔法とデバイスの使い手なら、相当の実力を持った魔導師で相違ないだろう。

なのに、いくら3対1とは言え、余りにも呆気ない。

それに、あの時、得物を交わしたあの瞬間、明らかに彼女は手加減していた。

抵抗している以上、彼女は捕まる気などさらさら無かったはずなのに。

もしこの少女が、噂の襲撃犯だとすれば、まあ下手に本気を出せない理由も分かる。

それでも尚、奥歯が引っかかる感覚は途絶えない。

何なのだ？ この違和感。

引っかかりが取れずに戸惑うミラーナイト。

刹那、背後に突如押し寄せる寒波、冬の大気の仕業ではとは異なるもの、この背筋が凍る独特の冷たい感覚。

紛れもない、この感覚の正体は——殺気。

そして彼は「違和感」の正体がそれであると、察した。

「2人とも！ その場から離れて!!」

「え？」

彼がフェイトたちに警告を放つたと同時に、フェイトの前に片刃の実体剣を持った女性が現れ切りかかる。

「ディフェンスミラー」

ミラーナイトがすんでのところでフェイトの前にバリアを張って、奇襲を掛けた剣士の斬撃を防いだ。

『（主、真上から来ます！）』

何？ 上空を見上げると、雲から轟音と一緒に雷撃が落ちてきた。

それをも、ディフェンスミラーで受け止める。

しかし、何て威力だ……。プレシアのサンダーレイジに匹敵する規模の雷撃。

すんでで、雷光の射線上から離れる。

ミラーナイトを捉えるはずの雷は地面に突き刺さり、スパークとクレーターを起こした。

「フェイト！ ミラーナイト！」

たった今夜襲を受けた2人の元へ、アルフは掛けようとするが、それを阻む者が現れる。



「(耳と牙!?まさかこいつ)」

いきなり視界に出現した屈強な大男に、回し蹴りをくらわされる、アルフは腕を盾にガードするが、衝撃で吹っ飛ばされた。

突然の奇襲。闇討ちとは、まさにこのことであつた。

「みんなー！」

ビルの屋上にいるのはとユーノからでも、その光景ははつきり見えた。

ピンクの髪を勇夜と今のフェイトより高めの位置で、ポニーテールに縛った女性がフェイトを切りつけ。

その攻撃をバリアで防御したミラーナイトに雷撃が降り注ぎ。

アルフには、褐色の肌と白い髪、髪と同じ色をした耳と尻尾を持つ男に攻撃を受けた。

そして上空からは、ミラーナイトに雷撃を放った張本人と思われる、フェイトと同じぐらいの歳で、同じ金髪な、だが狐を連想させる耳と尻尾を生やし、西洋騎士の防具を身体につけている他の襲撃者と対照的に、巫女服らしき服を身に着けていた。

「ごめんなのは、僕も行く」

「ユーノ君……」

「なのははここでじっとしてて」

「でも……」

今自分と愛機がボロボロなのは、分かっている。

頭では理解できても、攻撃を受けている光たちを見てみると、思わず体が、彼らのもとに飛びそうになる。

「大丈夫、勝てはしないけど、負けるつもりもないから、この結界の分析が完了するまでは持つてみせるよ」

そう言うと、ユーノは彼の魔力光と同じ色の光沢が埋められた腕輪をはめた右腕をのほに向け。

「癒しの円のその内に、鋼の守りを与えたまえ、ラウンドガード・エ

クステンド」

詠唱を終えると、なのはの周りにドーム状の結界が張られた。

対象を攻撃から守るだけでなく、回復効果が付加された結界魔法。結界魔導師なユーノならではの高位魔法だ。

そして、ユーノはその場から戦場へと飛び去って行った。

『マスター』

「レイジングハート？」

『申し訳ありません……私が不甲斐無いばかりに』

「良いよ……不甲斐無いのは……私の方だから」

『気を落とさないでください、見てあげることしかできないのは、私も同じです』

「うん、ありがとう」

自分のためにみんなが駆け付けて、戦っている。

嬉しいけれど無力感を感じる現状に、内罰的になりかけたなのはを

愛機は励まし、彼女も重い気持ち少し和らいだ気がした。

「どうしたヴィータ？油断でもしたか」

「うるせえよシグナム！これから逆転するところだったんだ！」

「そうか、邪魔して悪かった」

右手に持つ片刃の直剣でフェイトに斬りかかり、凛々しさの中にシニカルさを交えた口調で話しかけてくるシグナムと言う名の女性に、ヴィータと呼ばれた少女は強がって答えた。

「ヴィータ……強がり、直じゃない」

「く、久遠まで……くそ」

「じつとして、今……捕縛、解く」

見た目より言動が茫洋で、巫女服を着た金髪で狐耳を生やす幼い少女——久遠は手から発した稲妻でミラーウエイトを破壊し、アルフのバインドもシグナムによって解除された。

「ありがとな……2人とも」

さつきは強がって見せたが、正直危なかったのは事実だ。

あの金髪で黒衣の魔導師とそいつ使い魔らしき狼女はともかく、あの銀色の戦士は手加減こそしていたがかなりの手だれで、殺さずに倒せる自信が無かった。なので、実は助けられたこと自体にはまんざらでもなかった。けど、その『素直じゃない』ヴィータは、少し照れ気味に二人に感謝の言葉を述べるのだった。

その頃、アースラ艦内においては。

「アレックス、結界の解析、まだできない?」

『完了までまだ掛かります』

クルーらが全力で現況の情報収集に勤しんでいたが、海鳴にかげられた結界のせいで、現地の様子がモニターに映らず、解析しようにも。「術式が違う……」

この有様だった。管理世界の魔法は、全容の分からないファンタジックな代物では無く、高度にプログラム化された科学的なもの、例えるなら一種の精密機械。

「ミットチルダ式のととは全然違う、どこの魔法なんだろう? これ……」

オペレータールームにいるアースラの通信主任兼クロノの副官であるエイミイとブリッジのクルーたちは、その「精密機械」の配列を調べているのだが……御覧の通り、一般に普及されているミットチルダ式と違うシステムのもので、解析作業が進まないのが実状であった。

「当然だ、あれはベルカ式、それも古代ベルカ時代に使われたという古い術式だ」

「……………誰だ!?!」

突然、後ろから見知らぬ男性の声が響き、振り抜くと2人はその場で固まった。

少年と少女がそこにいる。

少年の方は、男性にしては長めで女性には短めな青紫がかったショートカットに、当人の真面目さを体現させる眼鏡を掛けている。

で少女の方は、今海鳴の結界内にいるはずの――

「フェイト……ちゃん？」

――少女、フェイトと同じ髪、瞳、顔つきをした女の子だった。「妹のフェイトとそっくりなのは自覚してますけど、一応一度会ってるんですから、間違えないで下さい」

声も、口調はフェイトより明るめで快活だが、その姿は彼女と瓜二つ。

だがよく見れば、容姿は彼女より幼く5、6歳ほど、それでいて本人はフェイトの姉と自称した。

・言うことは……後は該当する人物はただ一人。

「で、この人は――」

「ナオト・J・フライト、諸星勇夜と高町光のとは、彼らがこの世界に来る以前からの付き合いだ」

「ということは、君は……」

「詳しい説明は後だ、すまないがそちらの端末を貸してもらおう」

2人は、オペレーター席に寄り、キーボードを高速で叩きながら、解析のバックアップを始めた。

「エイミイさん、ブリッジの人にもベルカ式のことを伝えておいて下さい」

「あ……はい、ブリッジへ――」

真剣な眼差しで作業する2人に、エイミイの手が止まっていたが、アリシアの真剣味を帯びた言葉をきっかけに、艦橋へ通信を繋いで伝達した。

「その、ナオトさん、解析と解呪にどれぐらいかかる？」

「かなり頑強で複雑な術式だが、通信とモニターの回復は早急に終わらせる」

本来、この2人は不法に艦内に侵入し、勝手に機器を扱っているのだが、助っ人になってくれる以上、今それを問い詰めるのは野暮だった。

「ねえ、アリシアちゃんもいるってことは勇夜君も、こっちに来てるの？」

「ああ、今海鳴とやらの都市に向かっている、まあ正確に言うと、『彼も』——だがな」

結界内部の海鳴中心市街では、乱戦と言うべき戦況だった。

ミラーナイトはヴィータと、アルフは久遠と呼ばれた巫女服を着た狐の少女と、ユーノは銀髪の狼男。

そしてフェイトは、髪型とか雰囲気とかが、どこか彼と重なる桃色の髪をした剣士の女性、シグナムとの戦闘を余儀なくされていた。

さっきの女の子の仲間であろうから、あのデバイスも同タイプのはず。

シルバーライトの忠告通り、接近戦はできるだけ避けなければならぬ。

それでも何回か、打ち合っては余儀なくされていた。

「(ユーノ、全員を結界外に転送できる?)」

「(アルフと一緒にならどうか:)」

「(聞いた?アルフ)」

「(やり合いながらはきついけど、なんとかやってみるよ)」

元々なのは救助がメインだったし、こうなった以上、無理に勝ちに行こうとするより、この場から退散した方が良い。

が、相手はそんな逃げの姿勢では、とても振り切れそうにない。

相手から放たれている気迫、あれは本物だ。

多分、局の魔導師が経験してないことを経験している。

いわゆる——「命のやり取り」とも呼べるものを。

『Photon lanser』

「撃ち抜けファイア!」

剣士に向け、合計6発のフォトンランサーを放つフェイト。

剣士シグナムは、何故か身に迫る閃光を前に微動だにしない。

『Panzerggeist』

彼女のデバイスから、やたらテンションが高い声で『パンツァーガ

イスト』と単語が発せられると、周囲に魔力フィールドが張られ、フォトンランサーは全弾命中こそしたが、そのフィールドを前に全て無効化された。

「そ、そんな…」

まさか、ランサーを全て受けながら無傷で済むとは思ってもみなかったフェイトは、心根にて焦燥の情が増していく様を自覚する。

「魔導師にしては悪くないセンスだが、我らベルカの騎士に1対1を挑むにはまだ足りん、レヴァンティン！」

『了解！』

「カートリッジロード！」

刀身のつけ根がスライドして開き、弾丸の薬莖が飛び出すと、刀身が炎に染まった。

「紫電——」

炎に包まれた剣を振り上げ、剣士が踏み込む。

「——閃！」

一瞬、相手が瞳から消えた。

辺りを見回すが、眼前にいきなり現れ、炎を纏った剣を振り下ろした。

『Defencer』

バルディッシュが障壁を張るが、その斬撃に容易く破られ、砕け散る。

「叩き切れ！レヴァンティン！」

『Explosion』

続けて、右胸の一閃が襲う。

止むおえず、バルディッシュの斧の刃で受け止めるが、驚異的な破壊力で、漆黒の刃はおろか、中心部のコアにまで損傷の亀裂が走る。

一連の攻撃に態勢が崩れ、衝撃でフェイトは下方に撃ち落とされた。

飛びそうになる意識をどうにか繋ぎとめるが、体中に走る痛みで、

飛行に持ち込めない。

このままじゃアスファルトの地面に真つ逆さまだ。

魔力フィールドで死にはしないが、怪我そのものは避けられない。

多分…立てないまま、あの剣士にやられる。

強い…：戦闘の経験からして、自分と違いすぎる。『殺し合い』、

本物の『戦い』をこの人たちは経験している猛者なのだと分かった。

加減を抑えているのに、圧倒された…：それが分かっても、自分が情けなくなる。

ずっと…：『あの人』の力になりたくて…：『光』になつてあげたくて。

今度は自分が助けると、初めての友達に約束だつてしたのに。

時間が許す限り、本当は『怖いもの』だつて忘れずに、修練はかさなかつたのに。

肝心な時に、何もできずに翻弄されるばかり、なんて…：ダメな子。

彼女の生来のネガティブ思考が、自身を支配しそうになった。

その時。

『諦めるな！』

頭の中に、言葉が響いた。

誰のものかは判別できない。エコーが強過ぎて、男の人つて以外は全く分からなかつた。

でも、その言葉を何度も心の中で言い返す内に、思い出す。

諦めるな…：そうだ…：みんな諦めなかつた。

どんなに私が『過去』に捕らわれて…：誰の言葉にも耳を貸さず、何度も拒絶されても、

それでも諦めなかつた。

だから、私は救われた…：ようやく『一人の人間』としてスタートを切れた。

それだけじゃない。

あの…：あの人を含めた光の巨人たちは、何万年も人の光(きぼう)を信じて守り続けている。

いつ終わりが来るか、その先が見えないはずなのに、それでも世界

とそこに住む人々を守ろうと、助けようと頑張ってきた。

自分が想像できる以上、気の遠くなる永い時の流れに、埋もれそうになっても、「あの人」の先輩たちは、それでもと。

終わっちゃ……駄目だ。たかだか5年ちよつとしか生きてない私が、こんなところで、この程度で、挫けてちやいられない！

痛みを耐えながら、魔力を放出し、少しづつ落下速度を抑えながら、身をその場を滞空させて態勢を立て直そうとする。

「はあああああああ……！！」

そこに剣士が、頭上から唐竹に剣を振りおろしてきた。

落下スピードを相乗させているのか、速さは自分の飛行速度に匹敵していた。

まだ体の痛みが抜けないせいで、かわすことも、防御さえ間に合わない。

“ゼロ！”

思わず、あの人の名を、心の内で叫んだ。

来ない。いつまで経っても、感じない。

自分に降りかかるはずの斬撃が……痛みが、身体に刻まれることはなかった。

代わりに、体の感覚が捉えたのは、ゆったりとした温かさ、とても優しく包み込む光。

自分の体を、誰かが抱きかかえている。極限まで鍛え上げ、鋼のように固いけど、確かな暖かさ、熱が伝わってくる両手と両腕と、胸の温もり。

光の熱と体の熱、そのどちらも、私はかつて経験したことがあった。



忘れもしない、見間違えようがない。

自分の心に刻まれ、絶対に色あせることのないあの「光」と「熱」。

「そうか、来てくれたんだ——彼が、助けに来てくれたのだ。ほんと……ずるい。」

私は、ゆつくりと目を開いた。

そこには眩く光る人がいた。私は今、彼に抱えられている格好だ。輝きと言うベールに包まれて、彼の全体像が掴めない。

やがて光は消え、その姿が露わになる。

赤と青のボディに、銀色の鉄面、最初は怖いけど、頼もしきすら感じさせる釣り上った金色に光る瞳——その勇姿がはつきりフェイトの目に焼きつけられる。

「悪い、待たせたな——フェイト」

「やっぱり、こんなのずるい……と思った。」

悔しさからじゃない、むしろ、喜んでしまう。だって、こんなタイミングで来てくれるなんて、嬉しくて……堪らなくなっちゃうから。

見間違えようのない、その勇壮なる姿。

私を救ってくれた恩人の一人な男の子——諸星勇夜の本来の姿。

M78星雲光の国からやってきた、私にとっての、最高のヒーロー。平行世界の宇宙の、M78星雲から来た光の戦士。

ウルトラマンゼロ。

今まさに、彼は「この世界」の地球に——帰ってきた。

「おかえりなさい……ゼロ」

フェイトはゼロに、帰還を祝福する言葉を送る。

彼の名を口にする彼女の顔は、とても晴れやかで眩い笑顔だった。つづく。

## STAGE 03 — 思いがけない再会

危ないところだった。

久々に海鳴市へ足を踏み入れて、市街地のだ真ん中に生成された境界を目にした時——フェイトが「危機」に瀕していると言う直感が過ぎった。

それに従い、内部へと進入すると、今まさに鮮やかな桜の色の髪をした剣士に斬りかけられるフェイトを目にし、間一髪どうにか助け出すことができた。

結界に入っちゃったが、後悔はしてない。たとえ「来る者は拒まず、出ようとする者は絶対逃がさない」仕様だとしても。

フェイトを抱きあげたまま、近くにそびえ立っていたビルに一旦降り立ち、彼女を下ろしてあげる。

「……………」

本当ならば、元気な姿を目にして再会を喜び、感慨深く色々を話したいところだったのだが……そんな場合じゃなかった。

背中を感じる。あの剣士が発する「気」を、業火のように猛々しくも澄んだ、真っ直ぐな闘気だ。

本来なら正々堂々とタイマンによる勝負を好むタイプな「武人」と見た。そういう奴は嫌いじゃない。

けど、ここ最近起きていたらしい魔道師と魔法生物襲撃事件と、この結界が現れたと同時に「なのは」の魔力反応が消えたことを踏まえると、あの剣士たちの内誰かがなのはに不意打ちを仕掛けたのは確かだ。

他にも仲間がいると留意し警戒は怠らず、全方位に感覚の網を張りながら、剣士にこっちの闘気を放って牽制していた。

「フェイト、バルディッシュの調子はどうか？」

ここは戦場であることを頭に入れて、自分なりに厳かな調子でフェイトの愛機の状態を確認する。

「リカバリすれば……まだどうにか」

フェイトはそう答えたけど、どうにか原型は保っているものの、相

当ダメージが酷い。AIも積んだコアのにも痛々しく罅が入っていた。

確かに応急処置（リカバリー）はできるだろう……だが応急は応急、とても接近して斬り込めそうにない。

フェイトに「戦力外通告」をするように、気が引けるが……仕方ない。

「そうか……あの剣士の相手は俺がする、フェイトは結界の解析中なユーノのサポートに回ってくれ」

予想はしてたけど、案の定……フェイトの顔に「せつなさ」が張り付いた。

「でも……」

『この結界は防御力も、プロテクトも頑丈です、市街にほんの僅かな被害も与えずに脱出するには、全員同時に結界外へ転移するしかありません』

「リンク……」

リンクが冷静に、けれど棘を抑えた口調でフェイトを諭した。

「色々面倒なんだよ、この結界……」

後悔はしてないが、この結界が厄介な仕様なのは事実だ。

内部に進入するのは簡単だけど出るのは困難な、相手を誘いこみ閉じ込めるタイプの結界で、おまけに外壁と内壁の強度もかなり頑丈、リンクの分析によればたとえ穴を開けたとしても直ぐに塞がってしまうとのこと。

そうになると、一番手っ取り早いのは完全に破壊する方法なのだが、それにはゼロツインシュートクラスの火力が必要になる……とて

も市街地に一欠片の被害も出さずに済ませそうにない。

上空から撃ては光線は勢い余って地上に着弾しちまうし、地上から撃つても被害は避けられず、外からの攻撃はできなかつた。

かと言って内部からだど、チャージ中に剣士たちの邪魔をされてそれどころじゃなくなる。

昔の自分なら「面倒くさい」と思ってしまう方法だが、プロテクトを解除と同時に一齐に外へ転移するのが一番の方法だった。

プロテクトの解除作業に入っているにはユーノだけではないけど、さすがにそれをやりながら戦闘するにはきつい、せめて一人は付いてあげて負担を軽くさせないと。

「大丈夫だ、さすがに光線は使えねえが、その程度で遅れを取るほど柔じやねえよ」

フェイトの顔にここまで影を指しているのは……やっぱり一緒に戦えない自身への無力さだ。

半年前、別れの時に彼女が放った言葉。

「ゼロ一人では戦わせない」

俺一人に、戦いの重みを背負わせたくない……助けになりたい。

前より上がった魔力量から見ても、その想いで修練に励んでいたのは俺でも分かる。

できることなら、一緒に戦って、俺を支えてやりたかった筈だ。

「フェイト……悪いが今のフェイトに、そんな無茶はさせられない」

それを噛みしめつつも、同じ目線になるようしゃがみ、静かに、かつ厳しい態度でフェイト語りかけ、綺麗な金色の髪の上に、そつと手を置いた。

「頼むぜ、シエアー」

フェイトに背を向けて、俺は剣士へと見据えると、その場飛び立った。

騎士、シグナムは突然目の前に起きた出来事に、驚きを隠せなかった。

あの瞬間、間違いなく我が剣レヴァンティンの刃は黒衣の魔導師の少女を捉えるはずだった。

殺さぬように留意し、刀身を魔力でコーティングして殺傷力は抑えてあるので死にはしないが、魔力ダメージで意識を失うことは確実、その間に彼女の魔力を『蒐集』する算段だった。

なのに、横からいきなり現れた光が、彼女を連れ去り、止めの一撃は空振りとなる。

光は近場のビルの屋上に降り立つと、人らしき人型になり、抱えていた少女を下ろした。

シグナムからはその人型は背中しか見えないが、とても人間と言うには、容姿が違いすぎる。

騎士甲冑、バリアジャケット、それとも何らかの強化スーツの類かとも思ったが、あれからは未知なる強大なエネルギーこそ感じるられるが、魔力反応は伝わってこない。

それに、スーツか何かにしては質感が生々しい。

どう見てもあの青と赤と銀色に染まる体は、その者の表皮としか思えない。

あの白い魔道師のデバイスから現れたと言う銀色の戦士と言い、あのような輩は拝見した経験は皆無で一度も無い。

少女の態度から見て、彼女とは旧知の仲かそれ以上の関係であるとした、分からなかった。

このまま不意を討つこともできるが、背中越しだと言うのに、発される気配が尋常じゃない。

見た目も、守護騎士では黒一点の守護獣ザフィーラより細身だが、余計な肉をそぎ落とし、バランスのとれた、実戦的に鍛え上げられた体躯をしている。

正体は分からずとも、小手先のやり方では、恐らく通用しない。そう思わせるには、十分な相手なのは確かだった。

戦士が振り返って、こちらに目を向ける。直接眼差しを向けられたことで、こちらに押し寄せる「気」がさらに増した。

良いだろう——受けてたっ！

戦士が飛翔したと同時に、シグナムも彼の方へと降下していった。

「ゼロ……」

ゼロは、剣士のいる上空に飛んで行った。見上げる私の目は、彼の後姿から一向に離れてくれない。

助けてくれることは嬉しいし、さっきの言葉だって、少しでも私を

落ちこませまいと、ゼロなりに言葉を選んでくれていた。

無茶をさせまいと、氣遣ってくれていた。

だけど、それでも口の中が、とても苦い味で一杯になっていた。

ゼロ独りだけ戦わせたくなくて、せめて少しでも力になりたいくて、囑託魔導師の試験と裁判の合間を縫ってまで、毎日訓練を重ねて続けてきたのに……まだ、自分とゼロの間には遠い隔りがある。

もどかしかった……無力な自分が悔しかった。

気が思い詰まり、傷だらけの愛機に、思わず力を入れてしまう。

『sir』

「バルディッシュ……」

『お気持ちは分かりますが、そのためにsirが今やるべきことを放棄しないでください、何もできないわけではない、ゼロも、sirも』  
いつになく饒舌な愛機の言葉に、自分の意識が引き締められた。

莫迦だね……私……本当に今現状を見ていることしかできないのは、むしろなのは方なのに、レイジングハートとなのは自身が受けたあのダメージでは、この戦線には立てそうにない。

あの子は、人の助けになりたい優しい子だから、辛い思いの棘は、は自分よりずっと鋭い。

ダメだよ。今の自分じゃ、ゼロの背中に立てないからって、何もできないわけじゃないし、何もしない言い訳にしちやいけないよね……フェイトはバルディッシュに魔力を流し込み、愛機はそれを糧にして修復作業を行う。

『Recovery complete』

コアにまで罅の入ったバルディッシュは一応、戦闘できるまでに修復させた。

一応と付けたのは、これが一時しのぎな応急処置だから、AIを積むがゆえに、他のデバイスより構造が複雑で脆い弱点がある。

愛機の負担を抑えるには、もう近距離戦——クロスシフトは行えない。

でも、それでも——私たちができることを。

「行くよ、バルディッシュ！」

『Yes, sir』

気持ち切り替えながら、フェイトは結界に覆われた魔天楼の中を飛翔した。

群れるビルとビルの隙間を通る、今は誰もいない道路で、アルフと巫女服狐耳の少女の戦闘が行われている。

久遠と言う名の半獣半人な巫女の少女の手から、青白い稲妻が放たれる。

一目見ただけで、常人を感電死させる威力を感じさせる轟音と雷鳴だ。

繰り返されるのは、稲妻だけではない。

時に、空気を集束し編み込んだ風の刃も飛ばしてくる。

使い魔でも、正面から受けてしまえば、痛手になると容易に推測でき、事実アスファルトの大地やビルなどの建物は、巫女の少女の攻撃によって何とも呆気なく破壊しつくされていく。

その撃の数々を、上手く体を反らせて回避するアルフ。

だが久遠は、初撃と同等の破壊力の電光を連続して発射した。

一撃一撃が、フェイトのサンダーレイジに迫る威力であるのに、それを魔法陣も詠唱も無しに放ってくる。

なんてデタラメな！　どこの天候を操るミュー〇ントな白髪黒人ヒーローだよ！

前に、なのはの親友お勧めの映画に出てきたキャラクターと、その少女は全く同じ能力を有していた。

舌打ちしつつも、それらの雷撃の群れを回避できているのは、以前ゼロから手ほどきを受けた成果だった。

アルフは、相手の動きをよく見つつ、感覚を研いで大気の微かな変化を読み、体捌きも水の如く流れを意識させることで、雷撃と風刃の軌道を読んで直撃を避けていた。

ゼロのスパルタ指導が功を奏した。内心彼に感謝しつつ、このままじゃ膠着状態を打破できないと悟ったアルフは、両手を握り。

「あんたが『ストーム』ならー!ー!」

指の合間から、魔力で編んだ刃を三つ伸ばした。

魔法の刃——フォトンダガー。

「——あたしは『ウルヴァリン』だよ!」

自分と相手を、とあるアメコミヒーローたちに例えながら、意気陽々とアスファルトが抉られるほどの脚力を以てして走り出す。

「っ!」

少女はアルフのセリフに、少しびっくりしたようだが、狼らしい瞬速で走ってくるアルフを、電撃で攻撃。

「このお!」

その雷撃を、魔力の爪で迎撃した。

爪と雷撃がぶつかり眩くスパークする。サイズフォームのバルデイツシュ専用の斬撃魔法、サイズスラッシュは、切りつける瞬間、刃の魔力濃度を高めて切れ味を上げるものだが、今アルフが会使用したのは、勇夜直伝のフォトンダガーから派生する『ダガースラッシュ』、サイズスラッシュ同様の効果を持つ斬撃魔法。

こっちに向かってくる、稲妻のみの雷雨を次々その爪で切り裂き、刃のリーチ内寸前にまで接近。

飛び上がり、爪を振り下ろす。

アルフの一連の反撃に見習ったのか、久遠も指先から魔力を結合させ、その爪で受け止めた。

刹那的に光が溢れ、魔力同士の反発で爪と爪が弾かれる。両者とも、この程度では戦意は削がれず、お互いへ切りかかり、その後も爪と爪の撃ち合いは続く。

閃光が迸る、獣同士の荒々しい剣閃であった。

半獣半人の少女2人が激闘を行う大地の真上での上空では、ミラーナイトとヴィータの三次元戦闘が行われている。

性格的に似ている一面があるが、獣性と冷静の合間で戦っているアルフに対し、ヴィータは苛立ちが隠せなかった。



実を言えば、彼女はいつも何かに苛立ちながら戦っていた。

それが、おぞましい戦いに否応なく踏み込まざるを得ない実状か、それとも戦いしかできない己自身か、当人すらはつきりとは分からない。それが余計イラつかせる。

ここ数カ月は、それらとは無縁な生活を送っていたが、『蒐集』を端に発して精神状態がその数カ月以前に戻りつつあった。

いや…戻るどころか、反動でより大きくなっている。

「……………  
!!!」

怒り任せに振るわれた一撃は難なく避けられ、空を掠めた。

空振りになるのが、これで何回目になる？

くそ！　なんでこうなるんだよ!?

たった一人の魔力を蒐集する。

それだけ、たったそれだけだったんだ。

なのに相手が魔導師で、カートリッジを使う羽目になって、気がついたらあたしらと久遠総動員で管理局の関係者らしき連中と戦闘する羽目になってる。

たった『一人』が、高くついた。

進行速度はともかく、蒐集自体は今まで滞りなく進んでいた。

それだけに、この状況そのものが、イラつきを倍加させる。

それと……

「アイゼン・カートリッジ——」

「ロードはさせません！」

銀の戦士の右腕から伸びた光剣を回避するために、カートリッジロードは断念させられる。

ハンマーの剛腕と流麗な剣が何度もぶつかり合う。

こいつだ…こんな人なのか人外なのか判別がつかない野郎。

「魔力は感じない」のにそれとは違う力を発し…表情は見えないのに、殺気だけは突き刺せるほど鋭い。

明らかに加減しているのに、自分とやり合ってる。突然、ビルのガラスが消えたと思ったら、違うビルから、いきなり現れる。

未知の恐怖、と言ったものが彼女を染め上げようとする。それが余計苛立ちに変換された。

なんでだよ……あたしは……あたしたちがただ……■■■■に生きてほしい、ただそれだけだったのに。

相手の連続キックを、デバイスで受け、勢いで後退したところを今だと突っ込むヴィータ。

その右からの切り上げでハンマーが、銀の戦士に炸裂する。否、したはずだった。

破壊したのは、銀の戦士でなく、それに擬態した鏡だった。どうして……どうしてこうなるんだよ!!

心の中の叫びも、空しく虚空に響くばかりだった。

まずいな……■■よりは少し歳が上ほどのスクライア一族の民族衣装を着た少年、先程までシグナムと戦い、今は少年の加勢に来た漆黒のジャケットを着た金髪の少女と戦闘を行っている、シグナムからはザフィーラと呼ばれた半獣半人の屈強な青年は冷静に状況を見ていた。

まさかここで一気に局の関係者と接触して戦闘することになるとは。

シャマルはまだ相手側に存在を悟られてはいない。

シグナムとヴィータと久遠の方はやらねはしない———と言いたるところだが、あの燈色の狼の使い魔もかなりの手練れだが、あの2人の戦士は厄介極まる存在だ。

特にヴィータは、あの銀色の戦士に冷静さを失っている。今まで、多少感情的になっても勝ち続けていたことが仇となったか。

シグナムは……戦闘狂な一面が表出しなければ良いが……あの三色——トリコロルの戦士、拳士としてはとんでもない猛者だ。

そのうえで。力を温存させている。

戦況は五分五分か……その上さらに相手方に援軍が来れば……こ

ちらとしては、*“彼”*の助太刀を望みたいが、そうも言っていられない……元々彼にも秘密にして行っていること、久遠も彼に戦わせたくないから、我々に協力している。  
自分たちで切り抜ける……しかあるまい。

「行けーバインドウィップー！」

ユーノは、鎖型のバインド、チェーンバインドを鞭のようにしならせ振り回し、ザフィーラを牽制する。

鞭に当たったアスファルトは、粉々に抉れ、粉塵が彼の視界を遮った

『Arc blade』

「セット、ファイアー！」

金髪の少女の死神の鎌なデバイスから、三日月状の魔力刃——アークブレードが3発飛ばされる。

ヴィータに対して使ったアークセイバーと違い、回転しない直進タイプ。

ユーノの二振りの鞭（バインド）からの連撃を前にその場から動けないザフィーラに向かって光刃が迫り。

「クロスウィップー！」

同時に左右二方向から、鎖が迫るが。

「防人の鋼ー！」

彼はそう叫ぶと、全身を覆わせたフィールドが発生。

フェイトとユーノの同時攻撃は全て彼に命中、爆煙で姿が見えなくなる。

2人は宙に蔓延る煙を注視していたが、その煙幕の合間から、今だ健在のザフィーラがそこにいた。

まったく効いていない!?

彼は魔力フィールドで強化された堅牢な肉体をもって、一連の攻撃を防ぎきってしまった。

「我は盾の守護獣……その程度の攻撃で崩せると思うな！」

自ら名乗ったその異名の通り、彼の防御力は常軌を逸していた。ザフィーラは、その凶太い二の腕を振り上げると。

「鋼の軛！」

ハンマーを振り下ろすかの如く、地面に叩きつけた。彼の拳で、破砕されたアスファルトから、白く光る刃が飛び出し、ユーノに肉薄する。

「ユーノ!!」

間一髪、スピードに長けるフェイトに抱えられてユーノは事なきを得た。

「(ありがとう、フェイト)」

「(転送の準備は?)」

「(できてるけど、空間結界が破れない……ゼロさんの仲間も手伝ってくれてるけど、もう少し時間が……)」

「(この中からは出させせん!烈鋼牙!」

突き出したザフィーラの右腕から、光線が発射される。

直進する光をユーノが障壁で受け止める。

衝撃と手に走る痛みに耐えながら、ユーノはどうか防ぎきった。

今自分たちがやるべきこと、それは勝てなくても、絶対負けないことだった。

空中戦を行うシグナムは、対峙する相手の力量にも驚きを隠せなかった。

相手をしているトリコロール——三色の戦士は、得物を持たず、己の肉体のみを武器にして自分と戦っている。

それは良い。ザフィーラのように、徒手空拳で戦う者だっている。それを極めた達人だっている。事実、只今戦っている相手がそう  
だ。

『explosion』

「紫電——閃！」

紅蓮に染まる刃となった片刃の大剣——レヴァンティンを上段に構え、戦士に向けて振るう。

唐竹の一閃を戦士は体を右に逸らしてかわすが、それは予想の範疇だ。

刀身の炎を維持させつつ、タイムラグ短めに返す剣で横なぎに切りつけた。

が、それすらも空振りに終わった。

戦士は瞬時に体を急上昇させ、体を縦に一回転させながらの両足からの蹴りが繰り出された。

それを一時レヴァンティン本体に格納させていた鞘を召喚し、受け止め、右手に持つ本体で反撃の突きを放つ。

戦士は両腕をクロスさせながら受け止め、体をずらし、衝撃を緩和させながら後退した。

構えなおしたシグナムは、今度こそ当てるとばかり、急加速して剣先を突きつけた。

常人なら軌道の一筋も捕えられない連続の突き。

それらの連撃も戦士は避け、突きを手で逸らしつつ、相手の運動を利用して後ろに回り込みながらひじ打ちを当てようとする。

「(ちっ!)」

背に鞘を回してどうにかガードする。

この戦士の腕前、想像以上だ。

そのトリコロールの体色と、銀色の厳つい鉄面がどういう作りをしているのかはさておき……身体能力も反応速度も高く、それを十全に扱えるだけの修練も欠かしていないことがはつきりと分かる。

空戦での技量は、おそらく相手の方が上だ。水を得た魚のごとく、自在に飛び回っている。

ここにいるのは不味いと悟るシグナム、*「空」*は相手にとって有利、こちらには不利なフィールドだ。

テリトリーからは、離れるに限るな。

「穿空牙！」

刀身から衝撃波をいくつも発し、接近させぬようにしながら身を降

下させ、アスファルトに降り立つが、戦士は降下速度を緩めぬまま衝撃波を避け、シグナムが降り立った瞬間、鉄槌と化した踵が振り落とされた。

剣の峰と鞘で受け止めるシグナム、アスファルトが隕石が落ちたかのようにクレーター状に凹み、破片が宙を舞った。周りの建物のガラスも一斉に吹き飛ぶ。

攻撃する側だった戦士は、飛び上がり弧を描きながら、降り立った。シグナムは二つの魔法で、脚の鉄槌を耐えきったのだ。

一つはフェイトのフォトンランサーを全弾受け切った防御バリア——『Panzergeist——パンツァーガイスト』

もう一つは、筋肉、骨、血管、体のありとあらゆる細胞に魔力を付加させて肉体を強化する一種のドーピングな身体強化魔法——『Keeperstarkung——ケルパースタークオン』

これらを駆使して戦士の踵落しから身を守り抜いた。逆に言えばこの二つの魔法を同時行使しつつ愛機で受け止めなければ、防ぎきれなかったわけではあるがだ。

何よりもシグナムが驚ろかされたのは、踵落しを含めた体技のほとんどは魔力的付加を行わずしてあれだけの威力を発揮したことだった。

今のところ、彼は空を飛ぶ以外に、体内に宿るエネルギーをほとんど使用していない。

ほぼ己の肉体のみで、剣と魔法を駆使する自分とやりあっていた。やはり厄介だ。

相手は、体力の消費を抑えながら戦っている。対して自分は、奥の手はみせていないが、騎士甲冑、レヴァンティンの維持、さらに魔法の行使。

全体的なエネルギーの消費量なら、こちらが上。こんな強かなつわものが相手だと、下手に手を打ち、戦闘中の判断を間違えれば、即……敗者の道を辿る。

長いこと、邂逅することが叶わなかった——強敵。

シグナムの体が震えあがる。相手への恐怖からでは無い。

むしろ悦び、戦士にしか持ちえない歓喜の武者震いだった。

顔は凜とした表情を崩さずにいるが、内心、この状況下に、彼女は心を躍らせていた。

もう……このような気持には巡り会えないと思っていた。

二度と味わえないと、諦めていた。

現代……今の時代では、自分と対等以上に戦える武者はおらず。また自分たちは、平穏と言う日常を与えられて、剣を握って戦うことすらも無いと思っていた。

それは喜ばしいこととは思いうし、平穏の尊さも噛みしめている。

我らが「主」選択したのは、血なまぐさい戦いよりも、ただ我らと共に生きることだった。

それを己の体質（ほんしよう）のせいで台無しにするわけにはいかない。

それらを頭では理解はしていたが、同時に奥底では、寂しさ、もどかしさが出口を見つけられずに渦巻いていた。

それがどうだ？ いるではないか……目の前に………自分と全身全霊を以て「戦う」に値する「猛者」が、ここに、確かに存在していた。

なんと、僥倖な巡り合わせか、こうなるとより望みは増大していく。もつと、この男の力が見たい。

彼の、本気が見たい。

できることなら、剣閃を競い合いたい。

今のやつの得物は己そのものだが、体捌きで分かった……「この男は、剣の腕も相当な使い手だ」と。

その上で、本気の、全力での、全てを賭けた真剣なる勝負を所望したい。

体の芯まで血がたぎってくるのを、まざまざと感じる。

強者と存分に死合いたいケダモノの血が………圧倒的な熱量を帯び、湧き上がる。

「(シグナム落ちついて、わたしたち本来の目的を忘れちゃだめよ)」

危うく、一気に沸点まで湧きあがった闘争心が、その女性の声で抑えられていく、熱も急速に引き、体中を巡った真紅の喜びも、鳴りを細めていった。

いかん、自分がどうしようも無く闘争に飢えた獣であることは自覚しているが、今は抑え時か。

「よもや拳のみで私とどこまでやり合えるとは、賞賛に値するぞ」

だが……せめてこれぐらいはさせてもらわなければ、我慢できそうにない。

「私はベルカの騎士、ヴォルケンリッターが将シグナム、そして我が剣レヴァンティン、戦士よ、不躰がましいことを承知で尋ねるが、名は何と言う？」

堂々と己の名を相手に上げたその様相は、正に騎士だった。

「悪いが人のダチに喧嘩吹っ掛けた『通り魔』に、名乗ってやれる名前なんてねえ」

シグナムの口上に、戦士は顔を横に振らせそっぽを向きつつ、伶俐な物言いで、拒絶の返答を口にした。

戦士の対応に、残念だと思う一方、納得もするシグナム。

当然か……今の我らは、騎士の風上にも置けぬ落ちた存在、名前を聞こうなんぞ、愚の骨頂だ。

通り魔と呼ばれた方が、むしろ性に合ってるだろう。

「と——言いてえがな、ゼロだ」

だが、戦士は一度は逸らした目先を彼女に向けると、自身の名を上げる。

「何？」

「ウルトラマン……ゼロ、それが今名乗れる俺の名だ」

「ゼロ、ゼロか……」

彼が、名前を口にしてくれた。

我の言葉に応えてくれた。

その上で戦うことを了承してくれた。

これ以上の喜びは無い。

思わず口が、不敵な笑みで崩れていく。



一度は収まった闘士の血が、渴望が再び、身体を埋め尽くしていく。ウルトラマンゼロが、左手を腰に右手を真つ直ぐ突き出した独特の構えを取る。

やはり、とても抑えきれそうにない、我らが結界を外さない限り、やつは戦うことを止めないだろう。

本来の目的の逸脱も、それを余儀なくされるぐらいの強敵だったとシヤマルたちに言えば言い訳は立つ。

ゼロは、左手を腰に据え、右手を突きだし構えをとる。

どうやら、まだ拳のみで自分との戦いを続ける気らしい。

その上で、続きを始めよう、という訳か、良いだろう。

ならば………その力………極限まで引き出すまでだ。

私も全身全霊をもって向かい討とう！

ゼロの金色に光る瞳と、シグナムの水色の瞳から放たれる殺気が真つ向からぶつかり。

ほぼ同時に地面を蹴り上げ、低空ジャンプを披露しながら、互いの距離を縮めていく。

互いの武器が相手に届く、その寸前。横のビルが、いきなり爆発を起こし、そこから飛び出した火の玉がゼロをさらい、進行先のビルへと突っ込んでいった。

火の玉につき破られたビルたちは、支柱を失い、巨体を立たせることを維持できずに崩れ落ちていく。

その光景をシグナムは呆然と見送ることしかできなかった。

まさか、彼が来てるの？

ビルの群れの一つの屋上に、金髪のショートボブと緑を基調とした色々に染め上げられたドレスらしき服を着た20はじめほどのおつとりとした雰囲気を感じさせる女性。

彼らの仲間の一人、シヤマルだ。ポジション的には、回復補助のサポート役で、見た目の通り、正面からどんぱちやり合うには向いていない。

前々から、あの子の兄である彼が、ただの人間で無く、本来の姿のことも含め、知ってはていたが、まさか火の玉になって結界を蹴破ってくるなんて。

ただでさえ、管理局の者らしき何者かから結界のプログラムをハッキングされて、どうにか抵抗して現状を維持していたが、今の一撃で劣勢に立たされて始めた。

下手すると、結界が無力化されてしまうだろう。

でも、彼に文句を言うのは筋違いだ。

たとえば彼から一発殴られることになっても、当然の報い。

それだけのことを、自分たちはしているのだから。

シャリン。

「買い物帰りの寄り道にしては、偉く物騒なところに迷いましたな、お姉さん」

「っ!？」

高い金属音と、低音の人の声を耳が捉えた。

シャマルは焦燥と驚愕で、ぞつとした。

誰もいないはずの屋上に、自分の後ろに人がいる。声からして、恐らく中年ほどの男性……その男の言う通り、彼女はその日買い出しに出て、帰宅途中にその足で結界内に入りこんでバツクアツプに入っていた。

だが、それよりもこの男から放たれる「覇気」。

押し寄せる強圧を前に、心臓を手で掴みあげられた錯覚に見舞われた。

とても視線など合わせられないが、このまま背を向けるよりは……と、恐る恐る……背後へと振り返って見る。

「何でしたら、ご自宅まで送って行きましようか？ 御覧の通り、今夜は酷く物騒な夜ですから」

その男は、確か仏教と呼ばれる宗教の僧侶、それも托鉢僧の恰好をし、右手には、僧が各地を渡り歩く際、不運災厄から僧の身を守り、かつ煩惱を払う効果を持つ音を鳴らす杖、錫杖を持ち、左手の指には和装と不釣り合いにも見える獅子の彫刻が彫られた指輪を嵌め、顔は笠

で覆われよく見えないが、その隙間から、そのまま瞳の先の対象を射殺せそうな気迫と圧迫力を秘めし——「獅子の眼光」——が煌めいていた。

「あなたは……一体？」

猛獣に睨まれたように涙目なシャマルは、恐る恐る尋ねる。

「ご覧の通り、通りすがりの僧侶ですよ」

無論、「彼」の師であるこの男が、ただ者な訳が無い。

いきなり現れた火の玉に驚掴みされて、ビルからビルへと突っ切られたゼロは、体を回しながら相手の腹に蹴りを入れ、巴投げの要領で投げ飛ばした。

普通なら焼け死ぬ火力の炎から解放され、地面に降り立つゼロ。

ゼロは信じられなかった。

まさかと鼻で笑いたかった。

そんなわけないと断じたかった。

確かに、自分は「あいつ」との再会を望んでいた。その為に……何年ものこの次元世界を渡り歩き、手掛かりを探していたと言うのに。なのに、こんな形で……出会ってしまうなんて。

身に纏った炎を振り払い、姿を現したのは……真つ赤で筋肉質なボディ、胸の上部には太陽を連想させる丸型の光、ファイヤーコア。そして、ミラーナイトと同じく表情を作るパーツが無く、代わりに炎がそのまま形になったかのような顔。

彼こそ、かつては宇宙海賊の用心棒で、ウルティメイトフォーエースのメンバーたる炎の戦士——《グレンファイヤー》——その人であった。

つづく。

## STAGE 04 | 獅子と鋼鉄

一般の地球、日本人からは特に何も変わらない、海鳴市の市街地。今この地にて、常人には侵入することも、ましてや視界にいれることさえできないドーム状の空間が佇み、中では映画等のフィクションでしかお目にかかれない、常識の箍が外れた戦闘が行われているとは、通行人たちには誰一人として分かるまい。

例外と言えば、なのはが良い例のように、地球人の中でまれに出てくる魔力資質を持つ者が、ある程度違和感を抱くくらいか。とは言えそれさえも他者が感じ取れない小規模の地震を微かに感じ、気のせいだと結論が行きつくレベルの話だ。

その海鳴の上空に、魔法陣を足場にして、表示されている3Dモニター群をキーボード入力している少年がいることも。

ナオト・J・フライト。

それが“人間の姿”を得た、かの鋼鉄の武人の人間としての名だった。

彼は今、半透明の3Dモニターを正確に、なおかつやり手のプログラマーでも追いつけないスピードを持った手つきで入力している。

この世界の魔法が、高度にプログラム化された精密機械と言えることは前にも話したが、今彼は、アースラにいるフェイトの姉であるアリシアサポートを受けながら、眼下に張られている結界の配線Ⅱプログラムを書き換え、いつでも脱出できる環境を構築させていた。

ゼロとミラーナイトには、重いハンデを背負わせたが、2人はよくやってくれている。

彼らに、人間相手には過剰戦力なウルトラマンまたは二次元人の、姿で戦うよう指示を出したのはナオトだった。

結界を張る連中の一人らしき魔道師が、彼のハックに負けじと抵抗している。

結界というコンピュータにハッキングをかけるナオトと、侵入を阻止しようとする彼女の図だった。

だが今頃は、ゼロの“師”に見つかってレジストどころではなくな

るだろう。

現状の最優先事項は、一方的に襲撃されたミラーナイト——光の義妹である高町なのはの救出だ。

可能なら、襲撃者も確保しておきたいが、リンクと言う名を持つバラージの盾からの話では、彼らの使うあの魔法は使い手を選ぶ代物で、それを使いこなす以上、相手はかなりの強敵とのことだ。

顔隠しのために変身して戦うと言う「ハンデ」が課せられているゼロたちでは困難極まる。

「よし……」

今までが黒一色だった3Dモニターに映像が映る。

結界内の現状を映す映像だった。

「(アリスア、今から贈る結界内のリアルタイムの映像を、アースラに回してくれ)」

「(了解)」

「(それと、管理局からの援護要請の方はどうだ)」

「(まだ時間がかかるみたい、今はゼロさんたちに任せるしか……)」

「そうか……」

直後、彼のレーダーが結界内に入り込んだ新手の存在を感知。

「このエネルギーの波形パターンは……まさか」

極論すれば、レイジンググハートらインテリジェントデバイスと同じ、AIである彼の表情が、驚愕に染まった。

そして、結界内部に強行突入した張本人。

炎の戦士グレンファイヤーは今、ウルトラマンゼロと対峙する格好になっていた。

二人とも、今の姿は表情を変えられない顔のつくりなので、顔からは感情は読み取れない。

グレンファイヤー……まさかこんな形で再会するなんて。

やはりずっと探してた仲間だから、感慨もあると言えばある。

ようやくこうして顔を拝めたのだから、嬉しくないわけがない。

何だけど……明らかに例の“通り魔”を助けようとして攻撃してきた仲間の行為に対し、困惑の方が強かった。

ともあれ、まずは騎士——シグナムとの戦闘、首を突っ込んだわけを問うてみるか。

「久しぶりじゃねえか、今度はどこの用心棒なんだ？」

内心の困惑を隠して、ややジョーク混じりな調子で切り出してみたが。

「悪いなゼロ……それはどうしても言えねえんだ……」

グレンは“いつもの調子”から程遠いトーン低めな声色で、素っ気なく大真面目に返した。

「どうやら……今のあいつは“軽口”を叩ける状態じゃはなさそうだ。」

グレンファイヤーは、チーム加入以前はその世界では名をはせていた宇宙のアウトロー『炎の海賊』の用心棒で、チーム内では隋一のムードメーカーであり3枚目なポジションであった。

決して本人が意識してやっているわけではないのだが、現状がたとえ戦闘の真ただ中でも、軽口を叩くのを欠かせない。

一歩間違えば緊張感を削ぐことにもなりかねないのだが、それが上手いこと活力を生む効果を度々出していた。

それくらい、いつも一緒にいても飽きさせない野郎、それがグレンファイヤーという戦士だった。

無理はないか………と言う関係かは知らないが、自分にとって“大事な存在”が争っているのだ。そんな状況では、特に義理人情の篤いグレンだからこそ、人一倍心を痛め、“いつもの自分”が鳴りを潜めてしまうもの。

「ファイヤースティック……」

彼は、その手から発生させた炎を、棒状に凝縮させた。

ファイヤースティック、火を自在に生みだし操ることができる彼の能力よって生成した炎で作り上げたロッド。

切断武器として使い、如意棒よろしく長さも変えられる汎用性を備

えている。

グレンがこれを使うということは…… “本気” で戦うことを意味している。

そして、自分の背後に降り立つ影が一つ、騎士シグナムだった。どうやら知り合いらしいグレンに対し、不服そうな表情を浮かべていたが、直ぐに彼女がレヴァンティンと呼んだ、確か地球の北欧の神話に出てくる、伝説の武器と同名な片刃剣を正眼に構えた。

実直で凜とした騎士の鏡なシグナムと、粗暴で礼節とは無縁そうなアウトローなグレン、対照的な炎の操り手は、それぞれの武器の切っ先を自分に向ける。

「すまない、我らにも負けられない理由がある、2対1でかかる無礼を許してくれ」

「ご丁寧にもシグナムが謝罪を申し出た。

全く……戦場じゃ一対多数の場面なんて、よくあることだったのに、敵対している関係にも関わらず、ゼロの心中苦笑してしまう。

親しき中にも礼儀あり、なように、かつては戦場においても明確には規定されなかったが、ものご同士の間に礼儀が存在した。

今でいえば、武士道精神や騎士道精神と呼ばれるもの、地球では重火器と言った近代兵器が台頭したことによって、戦場から消えてしまった概念。少なくともシグナムはそれを今でも持っている数少ない生き残りであった。

「その礼儀は受け取っておくぜ」

ゼロは頭部に装着されている二振りの宇宙ブーメラン、ゼロスラツガーを手に取り、それぞれの刃を合わせると閃光を発し、それは一振りの鏢なしの日本刀と変えた。

ゼロスラツガーの使用形態の一つ、ブレイドスラツガー。

ただ、以前P. T. 事件にてダークロプスに使った太陽エネルギーを刀身に凝縮させたタイプと違い、エネルギー消費を抑えるために実体剣となっている。

それを手に取り、いわゆる八双と称される、剣を顔の右側に持つてきて縦に構える複数の敵を相手にする時の構えをとった。

今までの状況から、グレンとは深い縁のあるシグナムたちは、人となりは何にせよ、目的が何にせよ、穏便に逃がす気は無い。

特にグレンからは敵対する理由を聞きたいが、あの憂いすら感じさせる態度から察するに、無理な話だ。

となれば、やり合うしかない。

光線技は使えないが、こちらも相応の覚悟で臨まないとやられるだろう。

二人はどちらも強敵に位置する相手だが、フェイトたちの負担を抑えるためには自分が相手にするしかない。

“ナオト”たちが結界のプロテクトが解除し、みんなが結界外に脱出したのを確認次第、こちらもレポートして離脱する。

それまでの、辛抱だ。

本当は……グレンには、さつきも言ったが聞きたいことが山ほどいくらかもある。今まで、どういう暮らしをしていたのか？こいつらとどういう関係か？話題が尽きそうになく、色々気持ちが頭ん中で周りに周っていた。

だけど、今は心にしまつて置こう、フェイトたちをやらせはしない為に。

さて……勝負に臨むとしよう。覚悟を整えて、ゼロの全身から、物理的な重みさえ感じさせる闘気、プレッシャーがあふれ出す。

それを合図に、シグナムとグレンが、同時に動き出した。

ゼロも八双の構えを維持したまま、出迎えようとする。

意識を戦闘に集中させ、自らの肉体を戦いに適したものと変えようとするその時だった。

ゼロの背筋に冷たい悪寒と胸騒ぎが走り、思わず反射的に飛び上がった。

グレンもシグナムもそれを感じ取ったのか、同様に飛翔。

“あれはまさか!?”

彼は下方のアスファルトで起きている異変を見て衝撃を受けた。

地面が螺旋状にねじ曲がり、黒い空間……かつて海鳴に現れた怪獣、コツヴとパズスが出現したときと、同様の現象——ワームホー



ルが開かれたからだだった。

それは、地球人より常識の範囲内が大きい結界内にいるものたちでも異様な光景だった。

海鳴の都市部のアスファルトと、同時に上空にと、2つ出現した黒い螺旋、ワームホールは渦を巻いて回転しながら面積をどんどん広げていく。

どうにかして、ワームホールの進行を止めたいがそうもいかない。今この瞬間、ある地点と海鳴が、次元を超えて無理やりトンネルとなつて繋がっている状態なのである。

しかしトンネルと違って、長時間物体が行き行きできる環境ではない。

無理やりゲートを繋いでいる分、周辺の空間は不安定で脆弱、危ういバランスで秩序を保っている。

下手に刺激を与えれば、落盤事故より恐ろしい事態が起きかねない。

そのワームホールを伝って何かが現れるのを、今は待つしか手は無かった。

やがて渦から出てきたのは……二つの巨体だった。

まず地上から現れた一つは、こげ茶色で縄文土器のような紋様を持ち、頭の周りが角竜に分類される恐竜、ステイラコサウルスに似た角たちが飾られている二足歩行の怪獣。

続いて空の渦から飛び出たのは、金と銀と紫色の体表、魚のヒレを連想させる足、三本の角を生やし、左腕には指の代わりにドリルを生やした異形の生命体だった。

『アーカイブドキュメントに該当データ有り、サラマンドラとクロスサバーガです』

ゼロの相棒であるリンクことバラージの盾が、自らの記録領域にインプットされていたデータから、対象の固有名詞を導き出した。

半年前、フェイトとなのはが、ロストロギアを巡って戦っていたこ

ろ、今のように結界のど真ん中に誰かが俺たちウルトラマンがいる世界の怪獣を放り込ませた。

それも二体、以前と異なる点が多いが、これはその再演に相違なかった。

思わぬ闖入者たちの乱入で、双方とも、心理的に戦闘を続けられる余裕は無くなっていた。

以前この状況を経験したことがあるゼロたちもそうだが、それすらない、そもそも、こちらの次元世界ではお目にかかることさえ稀な巨大生物に自らを守護騎士と称した者たちは、たび重なる介入に次ぐ介入に、当初の目的を遂行させることが困難と判断したのか、彼らの足元に転移用の魔方陣が浮かび上がった。

「ユーノ、結界をー」

「はい！」

今結界が解除されたら、街中に怪獣たちを放り出すことになる。市民たちは、突然スクリーンから現れた非常識に惑い、実体を持った脅威として迫ってくる災害に為す術無く、この世から生きること剥奪される。

幸い騎士たちが張った結界が消えると同時にユーノの結界がこの場を包み込み、脅威が外に漏れる事態は阻止された。

「っー！——グレン待てー！」

上空から、事態の移り変わり様を見ていたゼロは、この場から騎士たちと消えようとするグレンに呼びかけた。

だがグレンは、答えるどころか、ゼロに背を向けたまま、魔方陣の光に包まれて消えてしまった。

ただ………その時の炎の戦士の背中からは——

『俺だっってこんな時に、のこのこ逃げるなんて真似は御免なんだ』

——と言っているようにゼロには聞こえ、様々な外の状況と内なる感情を前に、翻弄され、必死に抑えてる悲痛な心境をくつきりと示していた。

一度戦わなければどうしようもないと、封じ込めた想いが静かに、けれど確かな重みを感じさせる濁流になって溢れだしてくる。

「ゼロ……」

自分を呼ぶ声が響き、振り向くとフェイトとアルフ、ミラーナイトにユーノがこちらを案じる顔つきで見つめている。

特にフェイトは、心に秘めている想い人への想いの強さゆえ、一段と不安そうな表情だった。

『マスター、サバーカが来ます』

とその時、上空を飛んでいたクロスサバーカがこちらに向けて降下。

『ディフェンスミラー』

光の十字架で突進を受け止めるミラーナイト。そこに今度はその巨体から来る重量でアスファルトを蹂躪しているサラマンドラの鼻孔から、火炎の放流が飛ばされた。

それをウルトラゼロディフェンサーで防御しようとするが。

「サバーカがもう一体!？」

別方向から、もう一体のクロスサバーカが接近してきた。

「バルディッシュユー!」

『Yes. sir Thunder Smasher』

フェイトの足もとと眼前に魔方陣がしかれ、魔力をチャージ。

「撃ち抜け轟雷!」

右手に持つバルディッシュユを魔方陣に添えると、魔法の雷流、サンダースマッシュヤーが放たれる。

ゼロたちをやらせはしない!

フェイトの意思を乗せた迸る雷光は、一直線にもう一体のサバーカを捉えるはずだった。

「消えた!？」

ミラーナイトと押し合っていた個体も突進してくるもう一体のサバーカも、初めから存在などしなかったかのように、あっさりとその場から消え。

『真上12時の方角です!』

見上げた先に、サバーカが佇み、右手からサバーカを小型化させた生物が飛び出てきた。



その光は上空に飛び上がり、サバーガと正面から睨みあう格好となる位置で止まる。

その光の中から、巨人が姿を現した。

全身を染める深紅、胸部に添えられたプロテクター、中世の西洋彫刻を思わす曲線で構成された頭部。

そしてゼロと同じく、金色の瞳とカラータイマーを宿した。

その巨人の名は——ウルトラマンレオ。

格闘戦においては、「最強」とも称される武道派なウルトラ戦士だ。

「エアアア！」

レオは気迫を発しながら、ゼロに受け継がれた片腕を突き出したファインディングポーズを取る。

ゼロの師だけあり、その姿はとても様になっていた。

一方上空から機首に搭載された砲口からビーム、『ビームエメラルド』を発射し、サラマンドラを空中を掛ける鳥、ジャンバードが。

「ジャンー・ファイトー！」

エコーのかかったナオトの声が機体から響き、それが合図となり、機体全体から緑色の光を発した。

それから、まず前方の機首から手が伸び右手に移動、同時に左手が機体内部から飛び出し、続いて主翼が折りたたまれ両足となり、最後に胸部が開き、西洋騎士をほうふつとさせる顔が出現し、金色のツインアイが発光。

鳥型の宇宙船は、50mの人型ロボット——《ジャンボット》——に変形した。

完了と同時に、地面に降り立つジャンボット、その様相は、ロボット特有の威圧感を醸し出していた。

そして彼はサラマンドラを見据えると、右手を握りこぶしに、大して左手は広げ、左足を前に出した構えをとる。

かつて、この形態での戦闘経験が不足していた自分とともに戦って

くれた少年から受け取った構えだ。

別世界の地球を守るべく、二人の巨人が今、降り立った。

二人の勇姿は、少し離れたビルの上にいるなのにも、はつきりと見えていた。

深紅の巨人がゼロと同じ構えをとったことと、義兄の光から仲間の一人がロボットということを知っていたので、二人が味方だということとは直ぐに分かった。

「なのは！」

「みんな…」

そこに、間一髪両者に助けられたゼロたちが、屋上に降りてきた。同時に人間サイズだが巨人体になっていたゼロとミラーナイトは、一旦身を光らせると人間体へと戻る。

ちなみにゼロは、光の国から帰還したばかりであったので、服装は魔法使いやジェダイの騎士によく似た、ローブとマフラーを纏った、光の国固有の民族服だった。

いつも一まとめにして髪も今は下ろしている。性格的に伝統的な服装は似合わなさそうだが、驚いたことに見事なまでにフィットしていた。

目つきのきつきさを抑えて黙っていれば、中性的な好青年と見られてもおかしくない容姿だ。

「ごめんね…私が不甲斐無だから、こんなことに…」

そう切り出すなのは表情はとても暗い。無理もないだろう。ヴェータに完膚なきまで打ちのめされてからは、ほぼ静観しかしていない。

相棒の損傷具合が酷くまともに戦えない状態であったとはいえ、さぞ心苦しい気持ちで、必死に戦うゼロたちを見ていたことだろう。

なまじ『力』を持っていることが余計落ち込ませる。

みんな…自分がきつかけでこうなってるのに。

「なのは」

「光兄？」

「こんな重い心境の妹に対し、兄は彼女の前にいきなり立つと。

「えい」

「ふにや!？」

いきなり彼女のほっぺをつまんだ。

「にやにひゆるの?りひふおにいい」

「なのはが今笑ってくれたら離してあげます」

「ふおんなくくく」

「えいつと」

「にや!ふえひいとひゃんまでえ!」

なのはのほっぺは、流石に某電気ネズミほどではなかったが、気持ちいいくらい伸び縮みしていた。

しかしなんだかんだ言いながら、頬をつまんで引っ張っていた光とフェイトの手はなのはから離れた。

二人とも抑え目に引っ張ってはいたが、それでもなのはの頬はやや腫れ気味である。

「余り必要以上自分を責めないでくださいなのは、気負えばいいってわけでもないですよ」

「私だって悔しいんだよ、今度は私がなのはを助けるって言ったのに、また勇夜（ゼロ）に助けられちゃった……」

「フェイトちゃん……」

周りに八つ当たる外罰的な態度は、人の心を離れさせてしまうが、内罰的に自分を責め続けてしまっても、その人を思う人たちを傷つけてしまう。

フェイトを通じて、なのははネガティブにベクトルが向いていたことを自覚した。

「少し遅くなったけど……久しぶり……なのは」

フェイトは別れ間際を思いださせる微笑みを見せながら、そつとなのはの手に触れる。

「……………うん……………フェイトちゃん……」

そんな時、光も右手を、なのはの頭に置いた。

暖かい……頭と手にかかる温もりに、なのはの表情に笑顔が戻った。

「でも良いんですか勇夜さん？ お2人の加勢に入らなくて」

「そうしたいのはやまやまだが、伏兵がいるかもしれないねえからな」

ユーノからの質問にゼロ——勇夜は答える。

彼の懸念は最もであった。

怪獣を送りこんでくる相手の正体も真意も分からない上に、どれだけの怪獣を従えているかも分からない。

あの二体は消耗させる嚙ませで、本命は別ということもある。

とりあえず今は、体力を温存させた上で、仲間と師匠に託すのが最善だった。

上空では、レオとサバーガの飛行の演舞が行われていた。

音速に乗せられた、下手な刃物よりも鋭く研ぎ澄まされたレオの手刀とサバーガの左手のドリルが、何度もクロスする。

一旦後退したサバーガは、引きつつ右手から小型の分身たちを、10体ほど飛ばした。

これらの分身はいわば小型爆弾だ。対象にしがみ付き、エネルギーを吸い取って相手を弱らせつつ、爆発力を高めさせて、一斉に自爆し、二重にダメージを与える技。一度しがみ付かれると、爆発するまで決して離さないのです、この場合遠方から光線で撃ち落とした方が賢明だった。

だがレオは、自らの腕と足で、急接近してくる分身たちを薙ぎ払う。鍛え抜かれた鋼の筋肉の四肢が、10体全ての分身を粉々に砕いた。

血しぶきを上げてバラバラに四散する小型サバーガ。

小型のサバーガを撃ち落とした後、急加速してサバーガに突っ込み、まず勢いをつけた左腕からの肘打ち、続いて横なぎの右手からパ



ンチ、左手からの掌底、右足からの連続蹴りを繰り出した。

元々レオは、遠縁ではあるが、光の国とは違う星で生まれたウルトラマンで、現在はともかく、昔は光線技の使用は得意ではなかった。

加えて、実戦はおろか訓練すらままならず、成り行きで地球の防衛をすることになった彼は、当初一癖も二癖もある怪獣と異星人たちに何度も苦杯を舐めさせられた。

それらの敵に対抗すべく、レオ——おとりゲンと彼の師であり、ゼロの父であるウルトラセブンがとったのは、レオが得意としていた宇宙拳法を磨き上げること。

当時の地球防衛の組織の隊長でもあった諸星弾ことセブンは、レオの故郷であるL77星を滅ぼした種族、マグマ星人の右腕である双子怪獣を前に敗北し、ウルトラマンに戻ることができなくなってしまった。

そのため、実戦経験が無く、亡命者で難民であったレオに、地球を守ることを託さなければならぬ己の不甲斐なさに心を痛めながらも、レオを戦士として独り立ちできるよう、鬼、あるいは修羅となつて、彼に何度も過酷な特訓を強いた。

それは、二人がウルトラマンであることを知らない者たちから見れば、狂つてると評されても致し方ない、苛烈で常軌を逸したものであった。

ある時は滝の水を切れと強要され。

またある時は時限式の地雷が埋め込まれた地面でのステップによる踏み込みや、心眼を会得するためにボールの動きを感知できるまで目を閉じての訓練。

さらにある時は、有無を言わずブーメランを投げつたり、鞭を打ちついたり、体で怪獣の戦法の対策を練らせたりもした。

ジープに乗った弾が殺気むき出しにしてゲンをで追いかけてまわすなど、正に真骨頂だろう。

が、その過酷な修練を耐え抜いたレオは、ウルトラ戦士の中でも屈指の全身凶器な格闘戦の鬼となった。

今のように、爆弾を素手で切り払うなど、彼にとっては造作もない



で退避。

そのまま踏み込みながら、初撃にアッパーカットをくらわせ、その鋼鉄の巨体に似合わない鮮やかさでサラマンドラの下腹に一回転からのキックを当てた後、瞬時に背部と脚部のスラスタを吹かせ上昇しつつ後退。

「ジャンナツクル！」

ジャンボットの左の前腕がバーニアを勢いよく吹かせながら飛び出した。

ある種のミサイルと化した左腕は、サラマンドラの周りを旋回、人間の周囲を飛び回る意識を本体から逸らせた。

『ジャンボット、サラマンドラの喉を狙って、そいつの喉には細胞再生を活性化させる酵素が分泌されるの、それを破壊しないとバラバラにしても復活しちゃう、今再生器官の位置データを送ったから』

「確認した、感謝するアリシア」

『どうも♪』

今ジャンボットの記憶領域に届いたデータを元に、センサーがサラマンドラの喉をロック。

右の前腕のハッチが開き、砲台が2門出現。

サラマンドラを釘付けにしている左腕——ジャンナツクルをアッパーで打ち上げながら、喉をこちらに向けさせると。

「ゴールデンレーザー！」

喉に向けて、右腕から金色のビームが発射。

照射されたビームは、正確にサラマンドラの再生器官に命中した………にも拘わらず。

「吸収された？」

確かに命中したはずだった。サラマンドラの喉に、膜みたいに張られたフィールドが、ジャンボットのビームのエネルギー吸い取って無効化されたのである。

「あんな能力、無かったはずだぞ」

サラマンドラが今行った芸当に、一同も怪獣に関しては一番知識を持つてる勇夜すら驚く。

『分析してみました、あのサラマンドラの喉には再生器官の他にエネルギー吸収器官も存在します』

「それがバリアの役目をしてるってことか？」

『はい、さらに表皮も堅牢です、並みの攻撃では耐えられてしまいません』

「誰の仕業か知らねえが、粹な真似をしてくれるぜ」

元々サラマンドラはウルトラ世界の地球には生息しておらず、地球侵略に来たゴルゴン星人の過激派が先兵として送り込んだ怪獣だった、あの個体も誰かに送り込まれたようだが、その何者かによってパワーアップされていた。

『でも、まだ手はあるわよ』

「え？この声って？」

通信特有のエコーがかかっていたが、その声はこの場にいるフェイトと同じ声をしていた。

「アリシア……姉さん？」

『は……はじめましてかな、フェイト』

失念していたわけじゃない、ゼロがこちらの次元世界に帰ってくるということは彼女も同伴して来るのは間違いない。

元々、正確にはクローンであるフェイトのオリジナル。

同時に、ある意味では彼女のお姉さんである少女。

アリシア・テストアロッサ。

彼女を蘇生させるために、ゼロは光の国に里帰りをしたのであるから。

「本当に……姉さんなの？」

「フェイト……」

「フェイトちゃん」

信じられないわけじゃない。

ずっと記憶の中でしか会えなかった存在が、声だけとは言え、生きている。

自分と話をしている。

この世でちゃんと生きている。

それだけで、熱いものが胸の内に――

『まあ……一度死んじゃった身だからね、びっくりするのはしようがないわ、でも感慨は後にとっついておいてねフェイト――で、勇夜さん』

「何だアリシア？」

『テレキネシスで、サラマンドラの動きを止められますか？』

「ぶっ続けでやるなら、2分が限度だができるぜ」

『良かった、みんなよく聞いてね』

アリシアが提案したプランはこうだ。

まず勇夜のウルトラ念力で相手の動きを制限させ、続いて誰かが正面からサラマンドラに向かって飛び急上昇して喉を上げさせ、そこにエネルギーをぶつけるものだった。

実はあの吸収能力にも弱点はある。

エネルギーが体内に吸い取った瞬間、その時だけがら空きになるとのこと。

その一瞬に攻撃を叩きこめば、勝機を勝ち取ることはできる。

『なのはちゃん』

「あ、はい」

『レイジングハートの調子はどう？』

「あの……それは……何て言うか」

『リカバリーを行えば、一回だけです。砲撃は行えます』

あちこち罅が入って痛々しいことを伝えようとするが、上手くそれを表現できないのはに変わって愛機自身が己のコンデイションを伝えた。

つまり射撃はなのは担当と言うことだ。

本当ならここは勇夜に任せた方が良い。ヴィータからの攻撃で本調子でないのは以外に現在地からサラマンドラの喉に正確に当てられる射撃能力を持つ者は、彼しかいないのが理由だ。

なのだが、テレキネシスで相手の動きを封じ込める役目がある以

上、他に適任なのは、砲撃魔導師のなのはだけ。

『で、囀役は誰をするかなんだけど』

「それはあたしがやるよ」

注意を引き付ける役はアルフが買って出た。

「あたしはフェイトほど上手くは跳べないけど、ご主人にそんな危ないことはさせられないし」

アルフの言う通り、これは怪獣に対して恰好の的になる行為だ。

「それに、今のなのはじゃ一発撃つだけでもキツイと思うからさ、フェイトと光には支えになってほしいんだ」

「アルフ…」

良かれ悪かれ、それまでの行動指針がフェイトにとって味方か敵か、でしかなかったフェイトの使い魔が、彼女以外の人間に気にかけてという状況は、それだけアルフにとって勇夜やなのはたちとの出会いが転機だったわけである。

「決まりだな、ジャンボット、準備は良いか？」

『こちらはいつでも』

上空で戦っている師匠のレオも気になるが、今はサラマンドラへの対応が先決だ。

何より、故郷も、仲間も、愛する人たちさえ失いながら、最後まで地球での戦いを終えてウルトラ兄弟入りしたレオが、そうそうやられる玉ではないのだから。

事実、レオは三体に増えたクロスサバガたちと互角に戦っていた。

右手から放たれる分身爆弾を叩き落とし、迫ってくるドリルをかわしながらカウンターの重い拳、蹴りを見回せる。

うかつに接近するのは不味いと思案したのか、3体とも、レオから距離を離れた。

だが、それは失策だった。

レオにどれがサバガの本体か、見極めさせる時間を与えてしまっ

たからだ。

己の感覚を研ぎ澄ますレオ。

サバーガには、宇宙忍獣という異名の通り、忍術のような技を使う。分身もそうだし、小型爆弾は手裏剣と見ることもできる。

ある世界で別固体がウルトラマンと行った戦闘では、相手の飛び道具を、畳がえしならぬ地面返しで防ぎ、土遁の術で奇襲をかけたたりした。

特に分身は本物と寸分違わぬ再現度で、独立して行動でき、攻撃すらも可能だ。

だがいくらそっくりでも、本体と相違する部分がどうしてもある。すかさずレオは動いた。

左手を腰に添え右手を広げ、右手を顔より後ろに下げながらエネルギーを溜め、編み上げた紅い光の球。

『エネルギー光球』

を一体に投げつけた。

光球は見事命中し、怯むサバーガ。

今の一撃で分身を維持する余裕が無くなり、残り二体は消えた。

本体と相違する部分、それは熱量だ。

どうしても本物と比べれば、分身の体温は低めで、レオは熱探知を重点的に

感じ取ることによって本物を見極めたのである。

すかさずレオは本物に急接近。

サバーガはドリルで迎え撃とうとするが。

「デアア！」

レオは突き刺そうと迫るドリルを、太陽エネルギーを乗せた手刀で切り裂く体技、《ハンドスライサー》で斬り飛ばした。

さらに宙を舞うドリルに向かって飛び、空中でキャッチ。

そのまま急降下してドリルを持ち主の頭部に突き刺した。

致命的な一撃に、サバーガが動きを止め、地上へと落ちていった。

レオがサバーガを倒す少し前。

「デュア！」

諸星勇夜は、サラマンドラに目を向けて、握りこぶしにした両腕を重ねた。

彼の体が水色に輝き始め、長髪も静電気がおきているかのように浮き上がる。

同時にサラマンドラが悲鳴の雄たけびを上げながら苦しみ出した。今奴は、勇夜のウルトラ念力で全身に金縛りを受け、圧迫されている状態だ。

50mクラスの巨体を押さえつける勇夜も、見えない網に振りほどこうとするサラマンドラを必死に抑えている。

「行けアルフ！ジャンボット！」

「ああ！」

「おう！」

勇夜の掛け声を合図にアルフは飛び上がり、ジャンボットが走り出す。

なのはレイジングハートを構える。そこにフェイトと光が、なのはを囲む格好でレイハに手を触れ、魔力を送り込んだ。

2人の魔力を糧に自己修復を進め。

『Recovery complete』

応急処置ではあるが、傷だらけのレイジングハートは元の艶を取り戻す。

「大丈夫なのは？」

「僕たちが支えてますから、遠慮せず撃ってください」

「うん、レイジングハートお願い」

『Target lock on, Devine Buster』

枝分かれした槍の先に魔力エネルギーが集まる。

アルフがサラマンドラに向かって先頭を飛び、後続からジャンボットが大地を掛ける。

アルフがギリギリまで近づいた。

勇夜は念力の圧力を少し弱め、同時にアルフは急上昇、彼女の動き



に合わせ、視線は顔ごと動き、首を見せるサラマンドラ。

「なのは！トリガーを」

「ディバインバスター、シュート！」

引き金が引かれたレイジングハートから、いつもより威力は弱目だが、魔力の奔流が発射される。

魔力流は喉に命中するが、例の如く吸収された。

「ジャンプブレード！」

その瞬間、スラスター全開にして低空飛行に入りながら、左腕に装着されたシールドから柄を取り出し、ビームの刃を形成、がら空きになった首に横薙ぎに剣を振るい、そのまま切り抜けた。

時が止まったと感じてしまうくらいに、動かないジャンボット。

数秒たった後、両断されたサラマンドラの首は地面に落ち、自らの武器で絶命したサバーガが同タイミングで地につけられた。

勝利の軍配は勇夜たちが上がった。

一段落着いてほつとしたためか、念力で体力を消耗した勇夜は、膝を地に着ける。

「勇夜！」

それを見たフェイトは一目散に駆け寄った。

「何ともないよね？」

以前勇夜が、バルドイツシユが使えない中、素手で封印しようとした自分に代わりに暴走するロストログアを抑えて消耗し、半日倒れた経験があったことも有り、どうしても過剰に反応してしまうフェイト。

「大丈夫だフェイト、疲れただけだからさ」

「……………良かった」

同じくほつとしたためか、フェイトは瞳を潤わせながら、思わず笑みが零れる。

彼がこの程度で倒れる人ではないことは分かっている。自分なんかよりずっと強くて遅しいことも、でもこんな時はどうしても心配に

なる。

ウルトラマンだって、生きているんだから………だからその分、喜びの笑みはより晴れやかだった。

「っ………あれは？」

「え？」

しかし喜びに浸る時間が、突然終わりを告げる。

間もなくフェイトは、一点に釘付けとなった勇夜の視線の先を見ると、同じくそこから目が離せなくなる。

光もなのもユーノもアルフもジャンも、地面に着いたばかりもレオも、呆然となった。

動かなくなつた二体の怪獣が青い光に包まれ、粒子となつていく分子分解現象が起きていた。

完全に光の群体となつた怪獣たちは、空へと天の川を作りながら、空へと消えていく。

多くの謎を残したまま、最初の激戦たる一夜目は、終わりを告げる。

だがこれは、聖夜の死闘に連なる、序章——プロローグ、前哨戦でしか無かつた。  
つづく。

## STAGE 05 | The Mystery

多世界宇宙マルチバースの海の中を飛ぶ、宇宙船が一機。

ウルティメイトフォースゼロのメンバーの一人、鋼鉄の武人——  
ジャンボットがスターコルベットに変形した姿、ジャンバード。

機体内部の一室には、転送用のポートがある。

白銀な色合いの立方体状の室内にて、底辺が僅かに円形状に盛り上がった床が光り出すと、光から、複数の人が現れた。先程まで海鳴市街で戦闘を行っていた勇夜たち御一行だ。

『本局に到着するまで少々時間がある、しばらくブリッジで休憩するといい』

「サンキューな、ジャン」

天井から響いて来た声に答える勇夜。

「光、本当にこの船ってあんたらのお仲間さんが操縦してるのかい？」  
「そうですよ」

「AIによる完全自動機体制御なんて、管理世界じゃまだまだ先と言われてる技術なのに、凄い」

「私もびつくりだよ……ユーン君」

この機体の制御は基本、搭載されているAI——人間の姿の時はナオトという名である《ジャン》によって行われる為、よほどのことが無ければ、搭乗者は快適に乗員することができた。

一行は、部屋の前方に備えられたドアに向かうと、扉そのものに付けられたセンサーが勇夜たちの動きに反応し、スライドして展開された。

艦内のキャットウォークに出た一同は、その場で足を止める。

特にフェイトは、幼い容貌ゆえに一際大きな深紅の双眸を見開かせ、振るわせていた。

「フェイト……」

「アリシア……ねえ……さん」

そう、通路の渦中にて、アリシアが立ち、彼女らが来るのを待っていたからだ。フェイトはアリシアの細胞から生まれたクローンであ

る為、当り前ではあるが、彼女は瓜二つな自身の“姉”の下へ、ゆつくり歩を進める。

今のフェイトの心中を察し、勇夜たちは敢えて何も言わずに見届けの立場をとった。

通信越しの声で、言葉はもう交わした。

植えられた記憶から、何度もその顔を見てきた。

それでも、こうして直に顔を合わせると、想いが込み上げる。

ずっと——会いたかった。

勇夜―ゼロに、なのはとも……再会を待ち望んでいたけど、写し鏡な彼女とも……ちよつと歪な形でも、姉妹同然な……私の……お姉さん。

不肖過ぎた自分は、一度母を狂わせて、姉にも生死の境で彷徨う地獄を味あわせて……あやうく二人を、奈落の奥底に落としてしまうところだった。

光がなのはに言ったように、気負い過ぎなのかもしれないけど……自分では何も決められず、意志を伝えることもできず、ある意味“人形”も同然に生きてきた自分が、あの災厄を招き入れるところだったのも事実。

否定する気はない、その重みを身に受けるのを承知で、自分は“自分”として生きようと決めた。

その上で、長くはないけど、母と姉の家族として……生きたいと思っ

た。  
手で相手を触れられる距離まで近づく。

「ごめんね、折角、勇夜さんやなのはちゃんとも会える日だったのに……こんな形で——」

アリシアの詫びの言葉は最後まで言い終えられなかった。

終わりまで繋げる前に、フェイトが自身より幼い体格の、小さな姉を抱き締める。

「ねええ……さん」

ダメだ……折角笑って迎えようと思ったのに、念願の日なのに、流れてしまった。

いや……念願だったから、より嬉しきで止まらない。

ゼロとなのはに会えた分の喜びも積み重なって、ぽろぽろと雫が瞳から流れ出て行く。

「もう、ほんと、勇夜さんの言う通り、泣き虫屋さんなんだから」

フェイトの抱擁に、アリシアは己より大きく“泣き虫な妹”を抱きとめ、前置きの返しを経て――

「ただいま」

――と、伝える。

フェイトも、涙で濡れた顔で、心からの笑みを形作り。

「おかえり……なさい」

――と返すのであった。

姉妹も再会を見届けた一同も、大なり小なり、もらい泣きをしていた。

なのはもアルフも然り、そして勇夜も。

「目が腫れてるぞ？　ゼロ」

「分かってら……それぐらい」

生来の涙もろさで、すっかり感極まっていたのは、ご愛嬌だ。

今現在は、マルチバースに浮く時空管理局本局の格納庫に停泊し、メンテナンス中の次元航行艦アースラ。

その艦内の会議室では、数時間前に高町なのはを襲った襲撃者たちの起こした戦闘に関わった勇夜たち一同とハラOWN親子が集まっている。

「ナオト・J・フライト、本来はあの宇宙船、ジャンバードに搭載されているAIだ」

「アリシア・テストアロツサ、フェイトのお姉さんです」

「私はウルトラマンレオ、この姿の時はおおとりゲンと名乗っている、弟子がいつも世話になっているようぞ」

ゼロとともにこちらの次元世界に来て、例の襲撃者たちとの戦闘に

かけつけた者たちが、改めてなのはたち一同に自己紹介をした。

「こちらこそ、この度はご協力感謝いたします」

一時怪獣まで出現するという混沌とした事態になりなったこともあり、終息に携わったゲンたちにリンディが代表して述べる。心なしか、会議室内では、奇妙な緊張感が漂っていた。

「余りそうお固くならないで下さい、弟子と同じく、きつく見られがちなことには慣れてますから」

「おい師匠……弟子も」は余計だぜ」

「だがフェイトちゃんも、初見でのお前の印象は怖かったと言っていたそうじゃないか」

「ぬう……それを言うかよ……」

師の返しに苦笑いする勇夜。原因はこの二人の師弟たるウルトラ戦士にあつた。2人とも、良く言えば男らしい逞しさを感じさせる容貌なのだが、特に人間のゲンことレオは、厳つく渋みをきかせた顔つきで、頬に走る皺も、老いを感じさせるどころかむしろ貫禄すら感じさせる。

弟子の方も、黙っていれば中性的で、かつもののふ特有の凜として、勇ましい雰囲気を出す美少年だが、ウルトラマンの時と負けず劣らずの鋭い目つきで、柄が悪そうに見られがちだ。

まあ、叔父と甥みたいな微笑ましい師弟のやりとりによって室内の空気は幾分か和らぐのであつた。

「それでは本題に入ろう、まずはなのはを襲撃した一派のことなんですが、まずこれを見てほしい」

クロノ・ハラオウンは、卓上のキーボードを入力させると、テーブルの中央に分厚い本を映したホログラムが現れた。こげ茶色で、500ページはゆうに超える厚さ、表紙には細長いひし形で構成された金色の十字架が張られている。

「この本の名は闇の書、管理局では第1級に認定されているロストロギアだ」

「それと襲撃者たちとの関係は？」

「それはこれから話すよユーノ」

闇の書。それは、魔法世界で何百年も渡って惨劇を繰り返している呪われた書物。

特定の魔力資質を持った人間を主としてとりつき、リンカーコアに溜められた魔力を吸い取る機能を持っている。その行為のことは『蒐集』と呼ばれている。蒐集される度に、白紙のページには奪った魔力から読み取った魔法が記録され、全ページを埋めると、次元世界を消滅させられるだけの力を主として選ばれた人間は得ることができない。

事実その強大な力をものにしたこと狂ってしまった主によって、過去、局員を含めた多くの犠牲者を出していたらしい。

「で、闇の書には、自らと主を守護する存在がいるんだ」

「それが、なのはを襲ったあの人たち、というわけですか」

卓上に、レイジングハートらデバイスの記憶領域から取り出したシグナムたちの写真が表示される。

彼ら4人の総称はヴォルケンリッター、守護騎士とも言う。闇の書に搭載された、魔力で肉体を構成、再現したプログラム生命体であるとのことだ。

そして彼らの使っていた魔法、それはベルカ式。

現在の管理世界で普及されているミッドチルダ式とかつて勢力を二分していた魔法。遠距離戦、複数戦闘のメリットを犠牲にしつつ、武器を使った1対1の個人戦闘に特化させた仕様で、ミッド式よりも得物、肉体を強化させる能力に長けている。

そして最大の特徴は、デバイスに搭載されたカートリッジシステム。儀式魔法で、高圧縮した魔力を込めた弾丸をデバイスにロードさせることで魔法の出力を爆発的に高める機能。これにより、タイマンでの戦闘ではミッド式よりアドバンテージを得ることができると。ミッド式で、なおかつデバイスがインテリジェントタイプなのはたちにとっては、相性が最悪な天敵であったわけだ。

「それと、彼らを助けるために現れたこの炎の男のことなんだが」

「そいつの名は……………グレンファイヤー……………俺たちの……………仲間だ」

苦みを感じさせる声と表情で、勇夜は答えた。

離れ離れになって、ずっと探していた仲間が、通り魔紛いのことをして魔力を集めている連中と関係を持つていたのだ。それだけにゼロの心中は、少し重く淀んでいる状態であった。

あの複雑な心境を背中から発していただけに、何かしら事情があるのかもしれないが。

「でも、一番分かんないのはあたしとやりあったあの狐ツ子なんだよね」

大なり小なり、何者かははっきりしている守護騎士たちとグレンファイヤーに対して、この狐の耳と尻尾をはやした使い魔らしき少女に関しては、まったく持って情報が少なすぎている。

「ただし、あいつの電撃も風も魔力を使ったものだってことは確かだね」

彼女が使っていたのは魔法とは呼べないであろうが、空気中の魔力素を取り込み魔力として行使する点では魔導師と同じ。しかも厄介なのは、詠唱も魔法陣もデバイスも使わずに、フェイトたちの母であるプレシア並の早撃ちと高出力で攻撃できることであった。単純な魔力量なら、襲撃者の中でなら、彼女が一番で相違ない。

さらに問題なのは、ゼロとレオの世界にしか生息していないはずの怪獣たちを、結界内の戦場に送り込んだ第三者の存在。

「ワームホールで送り込んだ手口から考えて、ジュエルシードの一件と同一犯で間違いはないのだけれど」

「まるで、彼らを逃がすかのようなタイミングで現れましたからね」

「だけど、グレンたちのあの驚いた様子から見ると、協力どころか、見知った仲って…わけでもなさそうだしな」

「なんだか………分からないことが多すぎるね、色々」

「だー…もう！、ややこしいじゃないかまったく」

「にやはは…アルフさん落ちついて」

謎、謎、謎、謎。今日起きた出来事だけを反芻するだけで、謎がその大半を占めていた。

これだけ謎ばかりだと、一連の要素を繋ぐだけでも、暗中模索を強いられるのは必定であった。



「今は分からないことを無理に考えるより、現状判明していることを確認した方が良いだろう」

「私もナオト君に同意見だ、このままでは埒があかない」

危うくハツカネズミのごとく堂々巡りに陥りそうになったこの場に、ナオトとゲンが助け船を出した。

「まず、闇の書の主は、地球、それも日本に滞在しているのは間違いない」

「確かに、一連の事件は地球から個人転送できる範囲内で起きてはいるけど、日本である根拠は？ ナオトさん」

「勇夜、あのシグナムと名乗った騎士と話したのだろうか？」

「まあな、しかもあいつ、日本語を使って俺に自己紹介してきたんだよ、あの言語が日常的に使われているのは日本だけだからな、それに師匠とばったり会った騎士の一人がさ、"スーパールのビニール袋"を持ってたんだと」

その騎士の一人、シャマルは明らかに日本でしかお目にかかれないビニール袋を傍らに置き、前線に出ている仲間たちに指示を出していたらしい。

これだけの判断材料があれば、騎士たちの主にあたる人物は日本人、あるいは日本で長期間滞在している外国人であると断定できる。手掛かりを掴んだことに関しては、かなりの前進と言える。

尚、なぜ後方支援担当で正面からの戦闘に向かないシャマルを、ゲンは取り逃がしてしまったのかと言うと、実はあの場には怪獣の他に介入者がいた。

彼の話では、仮面を被った二十代の男で、格闘戦の心得があったのこと。

その仮面の男の襲撃で、確保寸前だったシャマルには逃げられてしまった。

お返しとばかり、ゲンは男に手傷を負わせたそうだ。さすが、宇宙拳法の使い手でゼロの師たる戦士である。

で、その他に判明していることは——それが主の意志であるかはともかく、守護騎士たちは魔道師を襲い、魔力を集めている。

グレンファイヤーと狐の少女は、騎士たちと主の関係者。

彼らすら、その存在を把握していなかったと推測される、怪獣を戦力に持つ第三勢力の存在。

以上の事柄を整理して、この場はお開きになるのであった。

なのはの襲撃事件で、すっかりお忘れの方もおられるであろうが、本日はフェイトたちの裁判が終わって、晴れて社会復帰した記念すべき日である。

だがまだ、残していることがある。

フェイト達はこれから、ここ数年の執行猶予期間の保護観察の担当官、つまりお目付けを担う人との面接を行うことになっている。

「なんで俺たちまで同伴なんだ？ クロノ」

勇夜の言う通り、本来面接を受ける代表はフェイトのみなのだが、なぜか勇夜、光、なのはも同行することになっていた。先程まで光の国の民族衣装を着ていた勇夜は今、現代的な私服に着替え済み。

「担当官のグレアム提督が、直々に君たちと面会を所望なさっている」

「ああ、お前の指導教官だった将校殿か……………それよりクロノ」

「どうしたんだ改まって？」

「闇の書の担当、アースラ組に決まったんだろ？」

「……………そうだ」

勇夜とクロノのやりとりに、違和感を感じる一同。

例のロストログア関連のようだが、何の話をしているのだろうか？

「俺が言うのもなんだが、一局員として案件にあたれるんだよね？」

「もちろんさ……………私情を挟んでいるようでは、この仕事はやっていけないからね」

2人とも、重々しい表情で言葉を交わしている。何を話しているか、フェイトたちにはさっぱりではあるが。

「(勇夜……………何の話をしてるの?)」

思い切ってフェイトは念話で質問してみると、途端に勇夜の容貌の陰りがさらに増した。

「今、聞きたいか？」

「うん」

「私も、気になるかな……」

やたら改まった態度に違和感を感じながらも、それでも今聞きたいと言う欲求が彼女たちの心の内では勝った。

そして少し間を置いた後、勇夜は念話でフェイトたちに口を開く。

「勇夜、まさかクロノは……」

「お前の考えてる通りさ、遺族なんだよ、クロノは……」

「（え？）」

「あいつの親父さんはな、その闇の書の犠牲になっちゃった一人なんだ」

その内容に三人は、顔に出すまいと抑えるが、驚愕そのものは、物理的な力さえ感じる衝撃で、彼らの心に打ち付けられた。つまりクロノとリンディ、ハラOWN親子にとって、闇の書は家族の命と、ともに過ごす時間を奪った仇と言うことになる。

「（局の上層部は何を考えているのでしょうか？ 個人的な因縁を抱える人たちに担当を任せるなど……）」

地球の警察では、ある捜査チームが担当する事件が、メンバーの身内がらみであった場合、該当する捜査官は担当からはずされることがある。

個人的な感情で、独断行為を招くことを防ぎ、組織内の規律を守るための処置だ。

それにアースラは今整備中。ここから魔道師が直接地球へ転移するには無理があるため、次元航行艦を使うか、中継ポートを使用する必要がある。後者の場合、管理外世界なこともあり、申請に時間がかかるので対応にどうしても遅れが生じてしまう。にも拘わらず、アースラに任せられたということは、その原因の一つとして。

「（やっぱり……人手が足りないんだね）」

フェイトが、管理局にとって一番の難敵を口にした。

P・T・事件と勇夜たちとの交流を経て、フェイトは自分たちの住んでいる世界が、危ういバランスで秩序が保たれていることを、それ

がいつ壊れてもおかしくないことを思い知った。

局そのものには絶望はしていないけれど、できれば、まだ子ども自分でも気付いたことを、大人たちに知ってほしかった。

でも、まだ小さくて、それなのに罪で汚れてしまっている今の自分では、何を言っても聞き入れてはくれない。

それどころか、自分の罪と出生が、糾弾される恰好の材料ことだって起きるかもしれない。

それで、母さんや姉さんやアルフを巻き込むなんて……多分そうなったら、私は一生自分を許せなくなる。

どれだけ世界が汚れてても、それでもと頑張ってるゼロたちの力になりたけれど、まだ……ゼロ——勇夜が言っていたように越えなきゃいけないハードルが沢山ある今の自分でじゃ、足手まといになるよね。

「(フェイト?)」

「(え?何?)」

「(今ここで話すことじゃなかったよな……ごめん、せっかくの門出だったのに)」

「(いやいいよ勇夜、気にしてないから……)」

と念話で返しながら、さっそく足を引っ張ってしまった自分に対して溜め息を吐いた。

でも、確かなことは、勇夜もなのはもみんなも、この事件に協力は惜しまないはず。

なら私も、一緒に力になってあげたい。

それに、何となくだけど……“あの人たち”は少しの自分と同じかもしれない。

強い想いで自分を凝り固めて、自分を追い詰めている。

目的は何であれ、止めてあげなきゃならない。

多分、頑固なわたしにみたいに、簡単にはいかないかもしれないし、ひよっとしたら、F計画みたいな、思わぬ真実を突きつけられるかもしれない。

でも諦めたくはない。みんな……自分がどんな生まれ方をした人間だって知っても、向き合ってくれた。助けようとしてくれたんだ

から。

その前にはまず、今日を乗り切るんだ。

やっと今日がスタートの日、フェイト・テストロッサという、人間としての、始まりなのだから。

「アリシア、レイジングハートとバルドイツシユの損傷具合は？」

「正直言って芳しくないよ、アースラの動力炉のバックアップに付けて自己修復をフル稼働させてるけど、本格的なオーバーオールが必要かも…」

これは時空管理局本局内にあるデバイスのメンテナンスルームにての会話の一幕だ。

特殊な重力フィールドに浮いているレイジングハートとバルドイツシユ。

待機モードである今の彼女たちは、罫が全身を走り、素人目から見ても、修理が必要と行きつく有様だった。

「どころでさアリシア」

「何かしらアルフ？」

アルフと同様に気になると思うだろう、アリシアが――

「6歳にしては、妙に大人っぽくないかい？」

――なことに。

6歳の時に一度亡くなって以来、数ヶ月前ずっとプレシアの手で肉体保存されていた身でありながら、大人顔負けのオペレートやサポートができたのか、と言うことだが。

「これは私の推論なんだけどね、普通なら、生き物は死んでしまうと段々腐敗してしまうでしょ、でも私の場合、魔力素のの過剰摂取によつて死因だったから、肉体の長期保存が可能だった、でも、生きてれば老化が避けられないことと同じで体内時間そのものは、今の科学でも完全に止めることができない――」

一見、アリシアの体は、死亡当時から変わっていないようにも見える。

だが、体の時間そのものの進行がまったく無かったわけではなく、帰らぬ人になってから光の国の医療技術によって蘇生される現在までの20年、その分の時間が体に蓄積された影響か、蘇生されたアリスアの精神年齢は、見た目より上になっていた。

つまり、心が大人か、それに近い年齢の段階で彼女は再びアリスアとして、生まれたのである。

外見よりも実年齢が幼く、6年分のアリスアの時間が予め書き加えられた上で生まれたフェイトと、写し鏡ながらも真逆の性質を持っていた。

「そんな辛気臭い顔しないで、わたしとしては妹ができて、短い時間にはなるけどまた母さんと、フェイトと一緒に生きられることが、嬉しいから……それに、多分だけどね、絶望して壊れたままの母さんと天国で会うか、わたしが生き返ってたら、自分も壊れてたかもしれないし……私も妹と同じくらい、勇夜さんとなのはちゃんには感謝してるんだ」

自分の死が、愛する家族を豹変させてしまった。

例えば、虚数空間に落ちていく母の姿は、ある意味自分たちの可能性の一つであったかもしれない。

「だが、君がそういう形で蘇ったメリットがないわけでは無い」

「ナオトさん……」

「僕がこうして、曲りなりにも人間の体を得られたのも、君の技術力のあつての賜物だ、見ての通り本来の僕はあの宇宙船だからね、人と直に接することができないことに、疎外感を感じていた、感謝している」「まあ、せつかく母さんから資質を受け継いだんだから、使わない手はないからね／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼」

と言いつつも、内心喜んでいるのが筒抜けである。

幼い容姿なこともあり、実に愛らしいものだ。

「先ほどフェイト達のデバイスの修理用パーツの発注の申請に言ったのだが、エイミー・リミア補佐官が既に手をまわしてくれたそうだ」

「さすがエイミーさんですね、クロノの補佐官をこなすだけあります

よ」

「そのクロノ執務官って、そんなに堅物なの？」

「まあ、勇夜さんの言う鉄頭って表現は的確だと思ってます」

「(ユーノの場合、『フェレットもどき』といつも言われる恨み込だけどね…)」

と、心中呟くアルフ。

言葉にしないのは、彼女なりの気遣いというやつである。

「……………ところで、さつきからなぜ僕の顔をジロジロと見ている？アルフ」

「あ、いや……使い魔のあたしが言うのも変だけど、ほんと人間にしか見えなくてさ」

そう言うと、いきなりナオトの頬を人差し指で突き出した。

ナオトのこの体は守護騎士や使い魔と同じ、魔力で作られたプログラムの肉体で構成されている。

それにジャンボット／ジャンバードに搭載されているAIデータを送ることで、こうして人間として活動できるようになっている。

これらのことが可能になったのも、光の国の科学と、プレシアの技術者としての血を受け継いだアリシアの賜物によって成し得られた。

「ジョン・コナーと同じ心境になるのは分かるが、僕は未来から来た暗殺マシンじゃないぞ」

「あの映画のこと知ってるのかい？」

「異世界の文化を把握するための一環として、光の国の図書館で見た」「お堅いロボットさんと思ってたと、結構遊び心あるんだねあんた」

「余り気安く触らないでくれ」

堅物なナオトに、正確には狼名なのにワンコの血が疼くのか、やたら彼にじゃれつくアルフ。

その様をアリシアとユーノは苦笑交じりに見ていた。

補足しておくくと、光の国の建物や日用品、道具は、ウルトラマン基準なので同サイズのジャンでも問題ない。

異世界の慣習、文化、歴史を積極的に学ぼうとする姿勢は賞賛されるべきだ。

しかし、実際ターミネーター2の本編を見ているジャンボットの図とは、中々シユールな光景である。

『お取り込み中のところ、申し訳ありませんが……』

『お取り込みつてわけじゃないけど、何？ レイジングハート』

『一つ頼みがあるので、私とバルディッシュに、カートリッジシステムを搭載していただきたい』

その場の空間が一転して静寂になり、時の流れが遮断したかのように、ルームにいる一同は固まってしまった。

傷だらけの彼女が切り出したのは、自分たちの強化プラン。

実用面で問題が残る『機構（システム）』を導入させてほしいという、提案だった。

面談用に用意された、本局にある広い一室。

その部屋のガラスの向こうに見えるマルチバースを眺めている、管理局高官クラスの制服を着た、下あごと口上に蓄えた髭が人格者であること示させる雰囲気を感じさせる、壮年の男が一人。

男はしばらく、その場から動かずに佇んでいた。

「失礼します」

部屋のドアが開き、入室してきたのはクロノだった。

この人こそ先ほど勇夜たちの会話で名前が出た。

「クロノ、久しぶりだな」

「ええ、ご無沙汰しています、グレアム提督」

ギル・グレアム、その人である。『時空管理局歴戦の勇士』と異名を付けらるほどの人物で、最も出世コースが速かった頃には、次元航行艦隊指揮官、局の中でも難関な役職である執務官の長との呼べる執務官長を歴任した。管理局のことを詳しく知らなくても、これで彼はかなりのお偉いさんであることはお分かりになったはずだ。

クロノに続いて勇夜たちも入室し、部屋の中央に供えられたソファアーに腰掛けたグレアムの向かいのとなる席に座る。こういう場



に慣れていないのか、なのはの挙動は若干固くなり気味。

日頃の物腰の反して、武術を嗜んでいる勇夜と、礼節を弁えるのが必須な騎士を務めていた光、かしこまった場を経験済みなフェイトと対照的に映る。

「初めまして、フェイト・テスタロッツサ君の保護観察官に当たる、ギル・グレアムだ。と言つてもまあ、形だけだよ」

実際のところは、形だけのものとは言えない。再犯を防止すべく観察対象者を更生、指導する役目が彼にはある。彼がこんなことを口にしたのは、フェイト自身の人柄あつてのことだ。

「リンディ提督から、先の事件や君の人柄についても聞かされたしね、とても優しい子だと」

グレアムが前述の発言をしたのは、それだけフェイトを信頼しているからと言えよう。

「あ……ありがとうございます」

今は大分改善されたが、生来の性格と虐待を受けていた境遇ゆえ、自己評価が極端に低かったフェイトにとって好意的にみられることに対して、かなりこそばゆくなる。

「それから、君たち三人には、個人的に礼を言いたくて呼んだんだ、特に光君となのはさん、こちらの管理世界が起こした事件に巻き込まれた身でありながら、最後まで協力してもらっていたからね」

「いや……その……ええっと」

「いえ、それほど大したことはしていません、ですがそのお気持ちはありがたく頂戴いたします」

「こ、こちらもありがとうございます」

緊張感でぎこちない妹と、気品と温和さを発しながら堂々と返す兄の図である。

「特に勇夜君、君の活躍はクロノから聞いているよ、フェイト君の件でも、彼女を助けようと尽力したそうじゃないか」

「私はただ自分ができることをしたまでです……」

「そう謙遜することではないよ、しかし日本か……懐かしいな」

「あの世界のことをご存じなのですか？」

「実は私も君たちと同じ地球生まれなのだよ、イギリス人だ」  
「にや!?! そうなんですか?」

提督からのサッカーパンチに、なのはは声を上げて驚いた。勇夜も光も目を見開かせている。

提督によれば、少年時代に偶然負傷した管理局員を見つけ介抱したことをきっかけに、魔法が使えることが判明し、局に入ったとのこと。もうかれこれ、50年も前の出来事だという。

奇しくもなのはが魔法使いになると、きつかけがよく似ていた。「それでフェイト君、一つだけ約束してほしいことがある、友達や自分を信頼してくれる人のことは、決して裏切ってはいけない、それが出来るなら、私は君の行動について、何も制限しないことを約束するよ」

その語りかけるグレアムの態度で真摯で真剣であった。

父親と呼べる人がいなかったフェイトにとって、この時、目の前にいるこのなのはと同じ地球生まれの提督が、父のように映った。

「できるね?」

はつきり言って自分は、弱虫で意気地無しで臆病者だ。自分一人では、何も変えられなかったし、変える勇氣すら無かった。なのに独りだと言い聞かせて、強がってばかりいた。

それに気づくことさえ……時間がかかってしまった。

「はい、勿論です」

そんな自分にも、最後まで自分を助けようと諦めず、今でも支えてくれる人たちがいる。

それだけは絶対に忘れちゃいけない。

「良い返事だ」

その後も面接は滞りなく進んだ。

だが……フェイトには一つ気がかりなことがあった。

勇夜のグレアムに対する態度だった。

一見、何の問題もないはずなのに。普段は誰に対しても、対等にタメ口な勇夜だが、今回ばかりは彼も敬語で淡々とかしまった口調で応じていた。

見知った人からは、ちよつと違和感を感じるかもしれないけど。

でも、あの時の勇夜から感じた違和感は………何となくだが、グレ  
アム提督と距離をとっていたというか……警戒していた？

確かに、勇夜——ゼロはウルトラマン、自分たちより、遥かに強  
力な力を持っている超人で巨人。

それに目が眩んだ人たちに利用される可能性もあるから、初対面の  
方には、一歩引いた態度で応じるのも頷ける。

でも、それとも違う気がする。何であんなに警戒してたんだらう？  
わたしから見たあの人は、とても優しくて実直そうな人な印象だっ  
ただのけれど。

一度よぎる違和感は、ぐるぐるとフェイトの脳内を巡る。しかし、  
自分だけでは突破口を見つけられそうになかった。いくら廻っても、  
森の中で同じ道を何度も通って迷子になる、そんな堂々巡りを繰り返  
してしまう。

ここはやっぱり、勇夜に聞いてみた方が良い、想いはちゃんと伝え  
るって決めたんだから。

とりあえずフェイトは、湧きあがった疑問に対し今はそう結論付け  
た。

あ、そういえば私、勇夜から預かってたあの「髪留め」まだ返して  
ない！

つづく

## STAGE 06 — 少女は白く染まる

フエイトが勇夜たちと、自身の保護観察官となるグレアム提督との面談を行っているのと同時刻。

「どうぞ」

アースラ艦内に割り当てられた応接室では、リンディ・ハラオウンと僧侶姿のおおとりゲンが対談していた。

提督兼艦長である女性が淹れた緑茶を快く受け取るゲンではあったが……リンディ自身の湯のみに注がれる物体と液体と緑茶が混ざり合う光景には、白状すると結構引いていた。

「ハラオウン提督……」

「お名前でお呼びして頂いても構いません、おおとりさん」

「そうですか、ならリンディさん、そのテーブルに置かれた砂糖やシロップは一体？」

「すみません、甘いものに目がない体質なものですから」

なるほど、これが「弟子」の言っていた提督殿の甘党趣味か……と納得する。

この世界に来る前、ゲンことレオは勇夜ことゼロから、目の前にいるこのミントグリーンの女性が、本来苦みを味わう筈の緑茶に大量の糖分を放り込んで飲むのを習慣にしていることを予め聞いていた。

自分は彼女たちから見たら異世界人でもあるし、極端でなければそういう嗜好を持っていても何も問題無い………と言いたいものの、ゲンでさえ、かなり丈夫な方だと自負している胃腸が、度を越した量の糖分でジェル状になった緑茶だったものを前に、胃もたれを起こしそうな勢いで悲鳴を上げる寸前にまでいった。

こればかりはウルトラマンでも、どうしようも無い。そもそも彼女のこの甘党さ加減の前には、腕っ節の強さなどで通用できる代物じゃない気もする。

「ところで、こちらの世界には如何様な用件で来られたのですか？」

「弟子の報告から、私たちの世界の怪獣がこちらに現れたと言うことで調査任務として派遣されたのですよ、まさか来て早々戦闘になると

は思いませんでした…」

実は、その派遣任務を誰に回すかで、一悶着あった。

否、一悶着という表現は適切では無いかもしれない。端的で言うと、遅咲きの子煩悩病にかかったウルトラセブンが、ゼロと同行するのは「わたしたち」とばかり主張し聞かなかった。既に別件の仕事がセブンに回っていたにも拘わらず、である。

11年もの間、息子と音信不通だったのが、親馬鹿レベルメーターをさらに加速させたようである。

結局選抜された弟子のレオとゼロに説得され、渋々引き下がった。

ゼロ自身、セブンの子煩悩病がずっと父としてふるまえなかった反動であることを察してはいたが、帰還早々のハグ騒動と言い、自重してほしいと内心呟いていたという。

子どもが可愛いと思う余り、愛の度が過ぎてしまうのは、どの世界でも共通要素だった。

「ところで、こちらでの弟子の方はどうでしたか？ 何分あいつは聞かん坊などころがあるので、リンディさんらに迷惑をかけているのでは…」

「迷惑だなんてそんな、むしろ私たちの世界から起きた闇の後始末を押し付けばかりです……」

職種上、任意に局の案件、任務に関われる嘱託魔導師の資格を得た後の諸星勇夜は、仲間を探すと言う名目もあったが、積極的に嘱託の仕事をごなしていた。

時には、独力で「次元災害」に対し、正体は伏せようと心掛しつつウルトラマンに変身してことにあたることもあった。

「私たちが他の世界に顔を出してしまったことで、起きてしまった事件も少なくありませんし、彼の手が及ばなければ手遅れになっていたことだって…」

世界と世界が繋がりを持ってしまった以上、その枠を超えた犯罪が起きることは避けられないし、それに対応する組織の存在も必要となってくる。

現に、ベルカ式魔法の発祥の次元世界、『ベルカ』によって端を発し

た戦乱は多くの異世界を巻き込み、次元世界そのものがいくつも消滅すると言う大惨事を起こし、生き残った世界と人々にも多大な爪跡を残して終結した。

その後多世界に渡る犯罪の防止や、ロストログアの確保のために、ミッドチルダを中心に創設されたのが時空管理局だが、冷静に考えれば、日に日に存在が明白になる次元世界の数が積み重なっていくにも拘わらず、対応する戦力が、使い手が限られる魔法一本で賄うには、やはり無理があり過ぎるというもの。

日頃から騒がれている人手不足もしかり。なのだが、管理局発足当時に、『質量兵器の廃止』をスローガンに各世界の政府の反対がありながらも、大衆から支持を得てしまった事実が、なかなか局の組織改革に踏み込めない一因だった。

それによつて、どうしても時に対応に遅れが生じてしまう。

ゼロはそんな世界の「歪さ」が起こしてしまう「悲劇」を起こさせまいと奮闘するフォロワーともなっていた。

「多分……今回の闇の書の担当が私たちに回ったことにも、内心怒っているかと……」

「なぜ……ゼロがお怒りだと?」

「私の夫は……闇の書の捕獲任務で殉職しているのです、7年前に」

その七年前、管理局はやっと、闇の書の確保に成功した。

だがそれを本局に護送中、書は暴走を起こして搬入していた次元航行艦を掌握、これ以上の被害の進行を防ぐべく、その航行艦は撃沈された。

その時、艦内に残り殉職した艦長は、リンデイの夫でクロノの父——クライド・ハラオウンである。

「そうでありながらなぜあなた方ご遺族に、上層部は担当を回したのですか?」

穏やかな物腰から一転して厳しい表情になるゲン、これには現在の彼でさえ局の「決定」に首をかしげざるを得なかった。

家族を奪った存在の確保など、任を受けた遺族から見ればトラウマ

を再発させる地獄だ。

感情的になつて、組織のルールを破つて独断に走るデメリットだつてあるのに。

「やはり、例のP・T・事件の功績でしようね、近年地球とその周辺の次元で起きた事件に関わつたのは、私たちだけですから」

が、それすらも勇夜やユーノが独自に収集に入り、なのはや光が協力してくれなければ、最悪アルハザードへの道を無理に開こうとして起きた次元振を回避できず。

テスタロツサ親子を救うことすらできなかつたかもしれない。

結局手をこまねいている内に、救えなかつた命を数えることにもなりかねなかつた。

こうして“遠間”から見ると、自分たちの組織は埃がたち過ぎだ………とリンディは愚痴ていた。反感を抱く人々が多いことにも頷ける。

「ですが、一部の存在もにばかり任せきりではいけない、そう考えられるだけまだ救いがあると思いますよリンディさん」

「そうでしょうか？」

「我々ウルトラマンがもつとも恐れていることは、人々に対し、私たちに守られていることが当たり前で、たとえ私たちより非力でも、それでも困難に立ち向かおうとする強さを、奪つてしまうことなのです」ウルトラ一族を知っている者ならご存知の方もあられるだろうが、彼らはウルトラマンの力を使うことに対しては慎重になる。

平和の維持の為なら、他の星系はもちろん、異世界へと飛び命を賭けることも辞さない。

けどだからと言って、自分たちがしゃばり過ぎて、彼らに守られた助けられた側の者たちが、自立心や自分の身は自分で守る意志を損なわせることは避けなければならなかつた。

《ウルトラマンは神では無い》

彼らはそれを戒めとしつつ、何万年も前から戦っている。

「ゼロがこの世界に戻ってきたのも、あなた方のような人がいるから、自身の支えとして諦めないでいてくれるでしょうからね」

「そんな、勿体無いお言葉です」

ひよつとしたら自分たちは、その困難に立ち向かう強さを、奪っている側なのかもしれないのに……こんなことを言われて正直に喜ぶことはむしろ、おこがましいと感じてしまう。

「私もできる限り、あなた方には協力するつもりです、理由はどうあれ、怪獣の寄越してきた何者かの目的は、闇の書の魔力で相違ないでしょうから」

「ありがとうございます」

また彼ら——ウルトラマンたちに甘えてしまうことに、罪悪感を覚えてしまうリンディではあるものの、怪獣への対抗策がこちらには少ない以上、貸してくれる手を逃さない手は無い。

今は素直に、彼らのご厚意を受け取ってあげよう。

「少し話が変わるのですが、なのはちゃんとフェイトちゃんのことです」「何でしょう?」

「恐らく、ヴォルケンリッターは彼女たちの魔力を目当てに、また襲撃を行うでしょう、あの子たちも、まだ小さいですが強い責任感をお持ちです、ゼロたちと同じく協力する選択を選ぶはずですから——」

「また……今日のような戦闘になるのは、現実ですね、かと言ってあの子たちの手を取ってあげて拒めば、それはそれで傷つけてしまいますし……」

罪悪感と言えば、なのはとフェイトたち、それとクロノにもそうだ。

元々、自分たち大人が起こし、解決しなければ事態であるのに、子どもにそれを押しつけてしまっている。

現在の魔法世界の“水準”を踏まえれば、本来ならもう少し“猶予”を与えなければならぬのに……能力さえあれば、これが日本なら義務教育の受けている年代の少年少女でも職につけてしまう今の体質がその代表だ。

それにフェイトはようやく裁判を終えて家族と“リスタート”したばかりだし、なのはなど管理外世界の人間だ。これらがリンディの“罪悪感”を助長させてもいた。

できれば、気持ちだけは受け取っておくというのが最善の手ではある



……が、魔力を身に宿している限り、また今日のようなことが起きてしまうだろう。

「それでですねリンディさん、一度あの子たちを修行の一環として、私に預けてもらえないでしょうか？」

「修行……ですか」

「そんな大層なことではありません、いわゆる備えとうものですよ」

虚をつかれる提案だったが、思案してみればそれも有りだと言える提案であった。

守護騎士たちが魔力を求めて再びフェイトたちを襲撃する可能性は高い、でもだからと言って四六時中彼女たちを監視するわけにもいかない。

ならば、せめて「自分の身は自分で守る」力だけでも、向上させておいた方がいい。

それに彼の指導下ならば、二人の「責任感」の強さがあらぬ方向に飛んでしまうことはないだろう。

何よりこの人は、あのウルトラマンゼロを鍛え上げた人物なのだ。彼の指導を通じて得られるものは、多々あると見ていい。

「まずお二人と保護者に相談して、意志を確認することになりますが、もし承諾された時は、お願いしてよろしいでしょうか？」

「勿論です、責任をもって、お二人を鍛えさせてみせますよ」

彼の獅子の瞳と表現できる力強さを持った彼の眼光に、安心感すら覚えてしまうリンディであった。

グレアム提督との面接を終え、ユーノ・アルフたちがデバイス用メンテナンスルームに居ると聞き、なのはとフェイトの相棒のコンディションの確認も兼ねて入室した勇夜たちが最初に目に入ったのは――

「確かに一回ロードするだけで今までの3倍の出力は得られるわ、でも――」

——魔力フィールドに浮かされているレイジングイハート、バル  
デイツシュと口論しているアリシアと、この状況にどうすればいいの  
か困っているユーノとアルフ、ナオトであった。

事情を知らないものから見れば、アリシアが手のひらサイズの物体  
と言い合っているという彼女がいわゆる『電波』なキャラと見なされ  
るかもしれない光景であった。

「姉さん……」

「フエイト」

「何があつたのか分からないけど落ち着いて……」

「ごめん、この子たちが付けてほしいって聞かなくて……」

フエイトの言葉で、ようやく瓜二つだが彼女より幼い容姿の姉は、  
平常に切り替わる。

「何があつたのですか？」

「レイジングハートとバルデイツシュが、自らにカートリッジシステ  
ムを搭載してほしいと言ってきた」

「何だつて？」

『二人とも、正気なのですか？』

ナオトから概要を聞いた勇夜たちは驚きで動揺し、リンクも困った  
様子で二機に訪ねていた。

「あいつらと同じものを付けるのが、そんなに危険なものなのかい？  
リンク」

『そうです、現在ベルカ式を使う魔導師がほとんどいないのは、その  
カートリッジシステムが原因と言っても過言ではありません』

さながらビデオテープのVHSとベータ、ブルーレイとHDDVD  
を彷彿とさせる規格競争をミッド式が勝ち抜き、ベルカ式魔法とその  
術式に準じたアームドデバイスが、現代では僅かながら需要はあるも  
のの实质廃れてしまったのは、ただでさえ使える人材が多いと言えな  
い魔法であるのに、その特性上使い手がより限られてしまったから  
だ。

原因はメインとなる近接戦闘が、敵の懐に飛び込んで攻撃する必要  
があるので、ある程度戦闘技量が高くなければ務まらないこと、個人

戦に特化されるため、あらゆる戦況に適應できる汎用性にはどうしてもミッド式に譲ってしまうこともあるが、最大の要因は、やはりカートリッジシステム。

『術者によりませんが、弾丸一発に付き、なのはのデイバインバスター一発分の魔力を瞬時に得ることができます』

「そ、そんなにすんだ…」

「前から危険な機構とは、聞いていたけど…」

リンクの説明に目を丸くするなのはたち。特になのはの魔法の威力を、それぞれ敵味方の立場から間近で見てきたフェイトとアルフとユーノは、あいた口が塞がらない。

「さながら、比較的安全な平常速度で走っていた車が、いきなり最高速まで加速をするようなものだ、誰も使いたがらないのも納得できる」  
「彼らの戦い振りを見た後では、ナオトのその例えに納得できますね」  
魔法にも兵器にも限らず、道具というのは一種の使いやすさが要求される。

急激に供給される魔力を前に、挫折する魔導師は後を絶たず、結果魔力さえ持っていれば比較的誰でも扱えるミッド式が普及されというわけだ。

それだけベルカ式を扱える魔導師は、高ランクに位置していると逆に言うこともできる。

「二応、最近はそのシステムをミッドにも取り入れる研究が進んでるから、組み込もうと思えばできるわ…」

「しかし、弾丸の装填と排出機能が付加させる都合上、構造がさらに複雑になってしまうからな、ただでさえAIの搭載で脆弱さのあるインテリジェントデバイスな彼らが耐えられるか…」

非情ともとれるアリシアとナオトとの宣告だが、正論でもあり、デバイスとその使い手を案じているがゆえの発言だった。

高度なAIを積んでいる都合上、インテリジェントタイプが他のデバイスより作りが複雑で脆弱だ。今の技術力では、安全性よりも不安と危険性の方が上回っているのが実情であり、手痛い現実であった。

「ごめんね……レイジングハート」

「バルディッシュ、元々私が至らなかつただけなのに……」

『いえ、私たちはマスターの能力を最大限に生かすのが役目です、それが及ばず、敗北した以上、至らなかつたのは私たちです』

『我々は敗北の一因をsirたちに押しつけたくはない、危険なシステムであることは承知している、覚悟の上でだ』

機械に対してもその優しさを向けられる心を持つのはとフェイトにとって、愛機を傷つけ、そんな無茶をさせてしまったことに心を痛めていた。

それは、ある意味ではデバイスも同じ……担い手をサポートするだけでなく、その「強み」をより強くさせる身でありながら、一方的に負け、勇夜たちの助太刀がなければそのまま魔力を蒐集された事態にもなりかねなかつたから。

「たく……お前らも自分のマスターさんに似て、頑固なやつらだぜ」

『その自覚はあります』

『右に同じ……』

危険なのは変わりないが、彼らも思案しを吟味した上で、今後の対策のための提案として言いだしたことだ。

守護騎士の目的が魔力なら、また二人が狙われる可能性が高い。

なのはもフェイトも、AAAクラスの魔力を体内に秘めている。

蒐集のための魔力が欲しい彼らにとつてのどから手が出る魔力量だ。

またやりあうことになるのは必須で、対応策はどの道必要………ならば。

「ならしようがねえな……リンク、あれを出してくれ」

『了解』

指輪形態リンクから、光の粒の群れが飛び出し、やがてそれは一つの物体となる。

「何だか、USBみたいですね」

それを見たなのは最初の一言がそれだった。

長方形を形作つたそれは、確かに地球性の記録装置に酷似していた。

「こいつは、俺と相棒が考案した新型のカートリッジ」  
『正式名称、カートリッジシステムβ（ベータ）です』

二人が切り出した対応策のカード。  
それがこの魔力を蓄電させた、USB型のバッテリーであった。

フエイトたちとの面談を終えた後も、ギル・グレアム提督はマルチバースの見える部屋で、灯りも付けないまま、じっと佇んでいた。

その貌は無表情というわけではないが、にこやかな態度で接していた先程の彼と比べると淡々とし、そうでありながらどこか憂いに沈んだようにも見受けられる。

しかしその表情から、彼の心中を察することは、とても把握できそうにない。

「（お父さま）」

「入れ…」

念話で語りかけてきた何者かに答えるグレアム。

すると室内に魔法陣は出現し、一人が転移して現れた。

魔法陣の光で、一瞬女性らしきシルエットが映ったが、直ぐに暗闇に紛れて見えなくなる。

「マンジョウメ博士からの報告です、デュランダルの調整が最終段階に入ったと」

「そうか、ところで■■■の方はどうした？」

「実は……ヴォルケンリッターの一人が、諸星勇夜の関係者の男と接触し、■■■は逃亡の手助けのためにやつと戦闘になり、手傷を負わされました」

「怪我の具合はどうなんだ？」

「重傷という程でもないのですが、一日療養は必要です」

「彼の師だけあるという訳か……」

「お父さま……口答えをするようで恐縮ですが、『彼ら』の存在は危険です、博士が怪獣を差し向けてくれなければ、危うく騎士たちは囚われ

るところだった、お父さまの計画だつて！」

「■■■■、そう焦るな、『窮地の時こそ冷静さが最大の友』……であろう」

「はい…」

グレアムのその一言で、強硬策を提案した『彼女』は落ち着きを取り戻した。

「■■■■は引き続き、書の主である彼女と、その兄と騎士たちの動向を探ってくれ、今日はもう蒐集はしないだろうから、自宅を見張るだけで良い」

「了解しました」

グレアムの指令を受けた彼女は、そのまま転移魔法で姿を消した。

もし、自分らが今為そうとすることを「彼ら」が知ってしまったら、絶対に自分を許しはしないだろう。

それだけ、我らは非道で下劣な大罪を犯そうとしているのだから。それでも、これで最後にしてみせる。

悲劇も、哀しみも、慟哭と憎悪の連鎖も……私が罪を全て背負うことで……それは、誰よりも固く結ばれた、誰よりも強固で、誰よりも悲痛で、残酷で、沈痛で、余りにも重くて哀しい決意だった。

時空管理局本局ステーション兼コロニー内に置かれた、大型モニターとそれに対面して席がしきられる構造なブリーフィングルームの数ある一室。

「さて、私達アースラススタッフは今回、ロストログニア闇の書の捕獲、及び魔導師襲撃事件の捜査を担当することになりました」

そこではアースラススタッフと勇夜ら協力者一同が、捜査方針を決めるブリーフィングを行っている最中。

予想通り、勇夜、光、ナオトのウルティメイトフォースゼロの面々、勇夜の師であるおおとりゲンは勿論のこと、なのは、フェイトたちも協力を申し出てきた。

怪獣を戦力に抱える第3勢力がいる以上勇夜たちの力は必要となり、彼らの正体を秘匿する以上、下手に巨人であることを知るクルー以外の人員を寄せるわけにもいかず、彼女たちも強く求めてきたこともあり、結果、民間人の協力者が多いという異例の構成となった。

「ただ、肝心のアースラがしばらく使えない都合上、事件発生時の近隣に臨時作戦本部を置くことになります」

「ただ今アースラはメンテナンス中で出航できないため、地球近辺に停泊という手段は使えない。」

ナオトことジャンバードが代わりとなれば良かったのだが、宇宙船としては小型の部類に入るこのスターコルベットでは、クルー全員を乗せて生活することはできなかった。

闇の書の主が日本にすることは、ほぼ確定なのが幸い。

捜査範囲を限定できるからである。

管理世界と違い、惑星内で何百もの国家が存在しているため、もし日本と断定されなかったら、《国境という名の壁》を前に捜査の進行が遅れてしまっていただろう。

「分割は、観測スタッフのアレックスとランディ、ギャレットをリーダーとした捜査スタッフ一同、司令部は、私とクロノ執務官、エイミィ執務官補佐、以上三組に別れて駐屯します」

「すみません、一つ質問があるのですが」

「何でしょう光君？」

「闇の書の主は、管理外世界の住人で日本人です、守護騎士とグレン、巫女の少女はともかく、主を管理世界の法律で確保するのは問題があるのではと思ひまして」

「あ、ごめんなさいね、光さんとなのはさんには説明してなかったけど、実は事前に管理外世界の政府関係者と交渉して、次元犯罪がその世界で起きた場合、よほどの例外がなければ逮捕権はこちらに譲渡される条約を密かに結んでいるの、これぐらいの礼儀が無いと、あちら側の方々にも失礼ですし、魔法を使った犯罪なんて、管理外世界ではほぼ立証できませんもの」

「なるほど…」

実のところ、フィクション、特に漫画アニメで出てくる必殺技や武器は、仮に現実で使えると仮定して、それで殺害行為を起こしてしまっても、法で罰せられる罪状に該当されないので、罪に問うことは極めて困難。

名前を書くとき死ぬノート、突かれると「ヒデブ！」となる部位を突く暗殺拳。

気を集めて発射する波動、その他諸々がそうだ。ベルカ式アームドデバイスの守護騎士たちなら、剣での殺傷、ハンマーでの殴打などで地球の法でも対応できるが、魔法を使うためのエネルギーを生成する人体の器官から魔力を吸い取られたとなると、地球では完全にお手上げとなってしまふ。

やはり彼らを止めるには、この場にいる者たちに委ねるしかない。ちなみにその管理外世界との交渉を行う部門は、『外世界調停部』と呼ばれているそう。

なんと、ごくたまにテレビでは政府が異星人と交渉しているなんてことがバラエティとかで捉えられるが、それに近いことが実際起きていたとは………現実にはフィクションより奇なり、その奇の側にいる高町兄妹も開いた口が塞がらない。

それだけでも驚きなのに、思わぬ不意打ちはさらに。

「ちなみに司令部は、なのはさんの保護を兼ねて、なのはさんのお家のすぐ近所になります」

連続して繰り返された。

「はっ？」

「はいっ？」

「にゃっ？」

「なんとっ？」

「ふえっ？」

「えっ？」

「はあっ？」

同。各々の言いまわしで『？』を表現しながら？顔になる民間協力者一





たよな」

「提督がフェイトちゃんにアリシアちゃんと親子水入らずでいられるよう尽力したんだって」

リンディが臨時本部を海鳴に置くことを聞いた時はそれはもう驚いたが、一番の驚きは、娘と同様、保護観察付きだが裁判を終えたプレシアも暫くこの海鳴臨時本部でフェイトたちと生活するということになったこと。

もうお察しの方もいるだろうが、昨日晴れて再会したテストロッサ親子は、それはもう真っ赤に腫れるほど大泣きして再会を喜んでいった。

長い子と待ちわびた念願が叶った瞬間。ようやく3人は家族としてのスタートを切ったのである。

今日の夜には、ナオトがジャンバードで二人を向かいに行くことになっている。

「良いじゃないか、家族水入らずで過ごせることは、実はとても貴重なことなんだぞ、ゼロも何度か経験があるだろ？」

「それなら、師匠もそうじゃねえか、下手すりゃ……俺以上に……」  
「そうだったな」

ゼロの場合は無論ウルトラセブンのこと。

そしてレオもそうだった、いやそれ以上とも言えるかもしれない。

王制国家だった獅子座L77星の王子であったレオは、マグマ星人の侵攻で全てを失った。

この時弟のアストラとも生き別れとなり、再会するまではそれなりの期間を要した。

これだけでも心折れそうな半生だが、地球に来てからもレオの受難は続いた。

師セブンの修行の成果で、敗北を喫する機会が減り、当時の地球防衛チームMACのチームメイトとも溶け込め、アストラとも再会し、恋人もいたり順風満帆な時間を送っていた時、地球侵略とレオ抹殺を目的に惑星ブラックスターからやってきたブラック司令の手駒である円盤生物と称される巨大生物の一体、シルバーブルーメによつ

てMACは壊滅、隊長であったダン（当時消息不明だったが、ウルトラの母に助けられる）とレオ以外の隊員は全員殉職し、さらに街を襲撃して、MACに入隊以前から勤めていたスポーツセンター以来の付き合いであるゲンの恋人、友人たちすらも殺されてしまった。

地球に來たウルトラマンの中で、最も壮絶な人生を送ってきたレオ。

磁気嵐が吹き荒れるK76星での修行当初は『クソオヤジ』と呼び、彼に反抗心を剥き出しにしていたゼロだったが、その苦難を知った今では実の父親と並んで、深く尊敬している人物である。

「あのさ師匠、ちょっと……頼みたいことが」

「フェイトちゃんとなのはちゃんを、鍛えてほしいの难道？」

「っ！………なんでそれを？」

「何年お前の師匠をやっていると思っているのだ？それぐらい察しはつく、彼女たちも、パートナーたちもパワーアップを所望している以上、相応の強化が必要だ」

「悪いな、昔の師匠を鍛えてた時の父さんみたいな憎まれ役を押しつけちゃって……」

「気にするな、お前はお前のやるべきことやれ、友であるグレンを重罪人にするわけにはいかないからな、ひよつとしたら、蒐集は主が預かりしらない、騎士たちの独断であるかもしれん……騎士の一人と会ったあの時、私にはとても彼らが悪意をもって他人の魔力を奪っているようには見えなかったからな……」

独断………まだ確証があるわけでもないのに、師の仮説には妙な納得感を感じる勇夜。

グレンは口の悪さなら俺とい勝負だが、義侠心と義理人情に厚い男だ。もし今の主が、過去の主だった人のように、書の力目当てに蒐集を強いているろくでなしな野郎なら、あいつはむしろ、騎士たちを止める立場を取る……はずなんだ。

まあ今は推測でしかないから、本人に会ってとつちめてやらないと、実際の事情は分からないのだけれど。

師匠とさつきみたいなのやり取りを挟みつつ進めているうちに、作業があらかた完了して、段ボールだらけだった部屋は、引越したて特有のモデルルームの様な流麗さを醸し出していた。

「勇夜くん、ちよつとお使いに行ってもらえる？」

「ああ、いいぜ」

引越しが一段落した時、エイミイから渡されたものは、いわゆるリストが書かれたメモと、インターネットの検索サイトの地図検索から印刷された地図であった。

「○×呉服店、海鳴支店？」

地図にマーキングされた店の名をついに口にしてしまう。

何やら「着物」と言った類の服を売ってそうな店名だったからだ。「提督の代理で来たと言えば分かるから、そのお店で受け取った制服をフェイトちゃんに渡ってきてくれない」

制服？ 確か日本の小学校の大半は基本自由服、海鳴（ここら）で制服着用を義務付けられている小学校と言ったら………なののが通っているあそこしかない。

つまり今まで同じ年の女の子とは気色の違った複雑な人生を送ってきたフェイトが、なのはたちの通う聖称で晴れて学生デビューということに。

まったく、リンディも粋なことをしてくれるぜ、思わず俺の口から笑みを零れた。

「分かった、ちよつくら行ってくるよ」

喫茶翠屋のラウンジでは、フェイトにとってビデオメールでは何度か顔を合わせているが、こうして直に会うのは初めてな、なのはの親友であるアリサとすずかと、そしてなのはと4人、それにユーノとアルフを交えながら談笑している。

「ユーノ君も久しぶり（人間の男の子って聞いた時はびっくりしたけどやっぱり可愛い♪）」

「きゅ……きゅう」

ユーノはと言うと、再びフェレットの姿となり（人間の姿だと学校に行かねばならず、捜査の都合上、外にはこの姿でいなければならなかった）。

森で助けた小動物が、実は人間の男の子であった事実には、二人も驚愕を受けた。

ユーノの人柄の良さも有り、さすがに光の時のような一騒動は起きずに済んでいる。

一方でその実、アリサは内心『温泉に行った時、光さんが無理やり男湯に入れてよかった……なのはのことだから、ユーノが男の子だと知ってても一緒に入ったかもしれないし』とほっとしていた。

実際、平行世界のなのはは、ユーノの正体を知ってても風呂に連れ込み、健全な男の子であるユーノは必死に理性を抑えることを強いられていたりする。

「アルフの毛、ふさふさで気持ちいい」

「わん♪（えっへん、可愛いだろ?）」

アルフはリンクの助言を切っ掛けにして取得した子犬フォームとなっている。

狼なのになんで子犬なの? って方もいるだろうが、お気になさらずに。

自分で可愛いなどと言っているが、実際愛らしさ全開のルックスである。

一応、アリサもすずかも魔法の事や2人の正体は既知済みでだ。

「でも2人とも災難よね、魔法使いしか狙ってないんでしょ? その通り魔」

「にやはは、まあね」

「今度もし街中で会ったら、とつちめてやろうかしら」

「アリサ、相手は結構強いからやめておいた方が…」

「でも昼間の人がたくさんいるところなら魔法はつかえないでしょ、ボキヤブラリーには自信はあるから、言葉攻めで問い詰めてやれば……」

「ふふ、アリサちゃんらしいね」

少し物騒な物言いだが、それだけ彼女が友情に篤い性格であると言えよう。

「へえ、仲良くやってるじゃねえか」

「あ、勇夜さん」

「勇夜」

そこに諸星勇夜が、綺麗に包装された箱を持って現れた。

「お久しぶりです勇夜さん」

「あなたが2人と知り合ってたって聞いた時はびっくりしました、まあ…あなたのお陰で折り合いはつけられましたし、ありがとうございます  
ます」

丁度なのはとフェイトがジュエルシード争奪戦をしていた頃、フェイト絡みで悩んでいたなのはに苛立ったアリサは一時期彼女と疎遠状態になってしまった。

偶然喧嘩帰りにばったり会った勇夜から助言を受けなければ、『本人が話してくれるまで待つ』と結論付けられず、そのまま疎遠な関係が続いていたかもしれない。

「何だよ、そのツンデレヒロインみてえな物言いは」

「あ、あなたに言われたくはありません！」

あえて言おう。二人とも、どっちもどちなツンデレキャラである。

この時アリサの彼への態度が、どこかつんけんどんで、且つよそよそしいのは、彼女が勇夜から自分と似た《匂い》を感じ取り、戸惑っていたからだった。

2人のやりとりに、思わず笑いがこみ上げる一同。

と言うかゼロ、サブカル関連の知識も持っているとは……ウルトラの知識欲、恐るべしである。

もともと『ツンデレ』というサブカル単語は、余りその手の分野との関わりが薄い層の人々にも、それなりに知れ渡ってたりもしているが。

「勇夜、その小包って？」

笑いが一段落したところで、私は勇夜の腕の中にある、綺麗に包装された小包のことを聞いた。

何だか衣服が入ってそうなのだけれど……何なのだろう？　そもそも誰に宛てられたものなのだろう？

「まあ、フェイト宛てのプレゼントってやつだ」

「ふええ!!?／／／／／」

プレゼント?……勇夜からの……プレゼント……プレゼントプレゼントプレゼントプレゼントプレゼントプレゼントプレゼントプレゼントプレゼントプレゼントプレゼント。

“プレゼント”

その一言がフェイトの頭の中で、何度も何度もエコーがかかってリピート再生されていく。

言葉の発信先が、想い人の勇夜——ウルトラマンゼロということもあって、フェイトの頬は一秒も経たずに紅く染まるのであった。

分かっている人もいるかもしれないが、エイミーがこのシチュエーションを狙って、あえて勇夜にその買い物を頼ませたのは言うまでも無い。

その頃翠屋店内で、はリンデイが高町家への挨拶を兼ね。

「申し訳ありません、私たちの世界のいざこざで、またなのはさんを巻き込んでしまって」

「いえ、こちらこそなのはを助けていただきありがとうございます」

一昨日起きた一連の出来事の説明と釈明をしていた。

以前訪問した時は、上手いこと嘘八百で誤魔化していたが、今回はウルトラマンと怪獣のことなど、ある程度の情報は伏せつつもほぼ本当のことを話している。

愛娘が襲われたことに関しては由々しき事態だと高町夫妻は思っ  
てはいるが、かと言ってそのことでリンディを攻めるほど狭量な心は  
持ちあわせてはいない。

「それになのはが襲われた原因は魔法の力なんでしょう？　ならな  
のはが魔法使いになろうがなるまいが、襲われる状況になることに変わ  
りなかったはずですから」

さすが高町家、異世界の巨人を養子にとったり、娘が魔法使いに  
なったことを信じて受け入れたり、順応力の高さは異常を通り越した  
レベルである。

士郎の言う通り、なのはは魔法と出会う前から多大な魔力を体の内  
に秘めており、蒐集の格好の獲物になることは、どの道避けらそうに  
なかった筈だ。

「そういう訳で、これからしばらくご近所になります」

「どうぞ、ごひいきに」

店の中で『魔法』だの『世界』だのといった単語を飛びかわして大  
丈夫なのか？　電波で痛い人とか思われない？

とか思っている人に補足として、今リンディは周囲に、周囲のお客  
に自分たちの会話の内容を気にさせない特殊な結界を張っているの  
で無問題である。

その時店のドアが開き、戸にかけられた鈴が店内に響く。

「いらっしやい、ってあらみんなどうしたの？」

例の小包を抱えたフェイトと、彼女に続いて勇夜たちが入店してき  
た。

「あの……リンディ……さん……これ」

フェイトの持つ小包は包装が解かれ、カバーが開かれた包みには、  
新品のなのはたちが通う聖称大付属小の女子用の制服が見えた。

「転校手続きはもうすんであるわ、週明けから、なのはさんたちのクラ  
スメイトね」

なのはたちと同じ学校に通って……しかもクラスメイト!?

嘘……みたい。

天にも舞い上がる気持ちとは、今みたいな心境のことを言うのだから



うか？

まるで、夢の…ようだ。

毎日…なのはと一緒、姉さんと母さんと一緒、そして…勇夜とも一緒に、会える日々。

さらに交換日記ならぬ交換ビデオメールを通じて、日頃から学び舎での生活に憧れを募らせていたフェイトにとって願ってもないこと。

昼はなのはたちと勉強＋遊び、夜は母さんとアリシアとみんなで過ごす。

これだけでも大層なご褒美であったが、これが何より勇夜からの贈り物であることが、フェイトの喜の感情のメーターを急上昇し。限界以上に振り切ってしまった結果。

パタリ。

「ふえ、フェイト!?!」

「フェイトちゃんしっかり!」

感極まったことによる自身の精神の容量を超えた喜びの余り、頭に血と熱が上った影響で喫茶店のど真ん中で仰向けに倒れ、のびてしまったフェイト。

願ったり叶ったりなのは分かるのだが、少しは場所を弁えてほしいものである。

こうはん…もとい、まだ続く。

数時間後。

「たくよ、なのはと同じ学校に通えることになって嬉しいのは分かるけどさ、店ん中で倒れるなよな」

「ご、ごめん」

ようやく意識を取り戻したフェイトに、叱責とまではいかないが苦言を呈す勇夜。

実はこうしてしゅんと謝るフェイトは、気絶する前、とんだ問題(？)行動をやらかしてしまっていた。

(言えない……勇夜から制服をもらった時、実はこっそり勇夜のおい嗅いでドキドキしていたなんて、恥ずかしくて言えない／＼／＼／＼)

恥ずかしさをちゃんと感じつつも、思いつきしフェイト爆弾発言をかました。

喜びで舞い上がり過ぎた上での行為だったので、さすがに頭が冷えた今となっては反省しているものの、もし勇夜が知ったら、いくら彼でもドン引きは免れないだろう。

「さて、転校初日は明後日だ、その前に」

『封時結界』

リンディたちと共同で住まうことになる部屋のリビングに結界が張られた、

しかも、結界の外と中で時間の進行がずれる効果付き。

勇夜は何をしようと言うのか？

「リンク、例のアレを」

『了解』

バン！

続いてリンクから取り出され、勢いよくテーブルに叩きつけられたのは、各教科の教科書とノートの束。フェイトが幸福感で倒れている間に購入しておいた、聖称大付属小で採用されている教材群。

それらと、外の一時間が結界内では半日になる魔法の組み合わせ。

となれば、彼がこれからやろうとしていることは唯一つ。

「あの……勇夜？もしかして」

「ああ、これからみっちり、地球での勉強をしごかせてもらう」

「ええ〜〜〜!?!」

『え』じゃない!!!」

「はいー!」

「まさかフェイト……何の予習も無しに学校通うつもりだったのか？」

「そ、そんなことはありません」

劇画調な顔つきとドスの利いた勇夜の剣幕に、もう既に涙目で震える子犬なフェイト。

確かに、これから学校に通う以上、予習は必要不可欠だ。

特に日本語の文字は早急に覚えておかなければならない。いくらフェイトが学力を持つと、それなりの準備を怠れば、授業で赤っ恥をかくことは必須。

しかし、それにしても勇夜のテンションがおかしい。師匠のレオを特訓と称してしごいていた「父」と、明らかに同じ目をしていた。

どうもその辺りの鬼畜さまで、ちやつかり父から受け継がれたようである。

彼の一段と鋭くなったその眼力を前に、フェイトの冷や汗が止まらない。

「覚悟は、良いな」

「(か——覚悟って、何い~~~~~~~~!!!?)」

さらに、数時間後。

「フェイト!?!」

ジャンバードに乗って海鳴に來たアリシアとプレシアを待っていたのは、勇夜のスパルタ指導によって精魂尽き果て、全身が真っ白になり、教材たちが置かれたテーブルにうつ伏せになっているフェイトであった。

どことなく、『カ~~~~~~~~ン』と効果音が鳴りそうな赴きある様相をしている。

「一体どうしたの!?!フェイト!?!」

心底心配そうにフェイトを抱えるプレシア、本当に、つい半年前までは考えられなかった夢のような、でも現実にそこにある光景である。

「母さん………姉さん」

灰色に染まって生気の抜けた体と心に鞭打ちながら、フェイトはプレシアの言葉に対し、振り絞った一言を。

「日本語って……難しいね」

どうにか言葉にして出し、パタリと疲労で眠りについた。

「アリシア、どういう意味かしら？」

「さあ…私にも」

何が起きたのか知らない姉と母には、ちんぷんかんぷんである。

原因は無論、鬼教師となったゼロの鬼畜指導。

さらにプラスとして、今まで日本に関わった外人たち共通の壁を、フェイトはこの数時間思い知らされたことで、この有様となったのだ。

しかれども、このスパルタ教導のお陰で、フェイトは初日からすんなり授業に付いていけることになるのだが、それはまた今後の回にて。

付け加えとして、なぜ急遽決まったことながら、引越や転校手続きが滞りなく進んだと言うと、実は裁判を終え次第、リンデイは長期休暇をとってテストタロツサ親子と海鳴で暮らす準備を前々から計画していたからであった。

つづく

最近ある用件で引っ越してきた、神奈川県海鳴市、市内では名の知れた喫茶店、翠屋がある風見(かざみ)町のとある高級マンション。それも大きなベランダのある、10人近くは住める最上階の部屋を借りた、ある種のルームシェア的な共同生活をおくる全員地球外の異世界出身の人たちの、とある朝のリビングにおける光景。

「あの、母さん」

「何フェイト？」

「似合ってる…かな？」

白を基調としたセーラータイプの制服を着込む娘を見た母は、微笑んだ。

「そうね、お似合いよ、学校のマドンナ……いえアイドルね、そうなるのもそう遠く無いわ」

「そんな、大げさだよ母さん」

「謙遜しないの、ほくくんと可愛いよフェイト、さすが私の妹」

と、姉は大きく胸を張った。

「姉さんまで、からかわないですよ」

「ごめんごめん、そんなつもりは無かったから」

「でもフェイトさん、リボンの結び目少し緩くない？」

「明日の朝から修行なのだぞ、ここで弛んでいてどうする？」

「すみません……今直します」

「フェイト、それは私がやるわ」

「か、母さん」

制服の胸元の赤いリボンを結び直す母——プレシア。

「あ………ありがとう」

娘——フェイトにとつては憧れながらも、慣れないことであつたので、頬を赤くし、少々きこちない様子で感謝を述べた。

「勇夜にも見せたかったな……」

「しようなないじゃん、勇夜は午前仕事で、午後はナオトと交代で翠屋のバイトなんだし」

「そう…なんだけどね」

「フェイト、そろそろなのはちゃんたちと待ち合わせの時間じゃない？」

「ああ、もうこんな時間!？」

準備はOK、今日の時間割分の教材はカバンに入っている。

勇夜が…：勇夜が作ってくれた弁当もあ…：…と。

「じゃあ、行ってきます」

「行ってらっしゃい」

この朝のやり取りも、IF—かのうせいの一つな光景であった。

転校。それは学生が、他の学校に移ってその学校の生徒になること、ただそれだけだ。

だが、学生諸君にとってはトップを争う、大いなる学校生活における重大な行事の一つであつたりする。

運動会や学芸会と違って、いつ起きるかすらも分からない。ひよつとしたら一回も経験しないまま卒業、などということもある。

それだけに自分のクラスに転校生がくるといふイベントは、学生たちを夢中にさせてやまない。

「さて皆さん、実は先週急に決まったんですが、今日から新しいお友達がこのクラスにやって来ます、海外からの留学生さんです」

かくいう、聖祥大学付属小学校の、なのはたちのクラス、5年B組の少女少女たちもしかりだ。

先日、12月に入りたてなこの時期に、しかも海外からの留学生として、女の子が一人、このクラスの仲間入りを果たすという話題で、クラス内はすっかり持ちきりであった。

「フェイトさん、どうぞ」

「し…：失礼します」

先生の呼びかけを合図に、その海外からの転校生こと、フェイト・テストロッサは入室してきた。



が、使いこなすには数学、物理など理系の知識と応用力が必要となる。当然フェイトも、母プレシアの使い魔で、乳母兼家庭教師だったりニスから魔法の制御に欠かせない理系の勉強を徹底的に教え込まれた。

算数と数学なら、大学生レベルの学力をフェイトは持っているわけで、理系統きな一時間目も二時間目でも、先生から問題を問われても難なく答えられた。

で、問題はこの一、二限目が終わって、午前にある二〇分の休憩時間に入った時から始まりを告げる。

「ねえ、向こうの学校ってどんな感じ？」

「わ、私、学校にはちよつと…」

ずばりと言えば、クラスメイトからの連続してたたみかけてくる質問タイムであった。

「すっげえー急な転入だよね、なんで？」

「その、色々あって…」

人が一生の内に、人見知り以上の関係になれる人の数などたかが知れている。

学生も例外じゃない。

中高で、部活をやっている者はともかく、帰宅部や小学生が、自分が通う学校外から来た同年代の子らと付き合える機会なんて滅多に無い。

「日本語上手だよね、どこで覚えたの？」

「前に住んでたのってどんなところ？」

「えと……あの……その……」

よって転校生なフェイトが良い例のように、自分たちのコミュニケーションに新たに入ってくる子に対しては積極的に関わりたくなるもので、フェイトのように見た目が海外から来た白色人種系の美形ともなれば余計興味津々ともなり、よってたかっの質問攻めになってしまう。

フェイトが普通に海外から来た留学生なら、クラスメイトからの一連の質問に難なく答えられただろうが、彼女が異国どころか異世界か



ら来た人間。

相手が小学生とは言え、現実とフィクションの境界ははつきり理解できるお年頃、下手に馬鹿正直に本当のことだが地球では空想の域を出ないことをうっかり答えてしまえば、《電波キャラ》と受け取られかねない。

よって相手方の質問に対し、一つもまともに答えられずじまいだった。

「(フェイト)」

「(あ、姉さん)」

「(その調子じゃ、クラスメイトに悪戦苦闘のようね)」

「(うん……全然ダメ)」

様子を窺うつもりで念話してきたらしいアリシアに、フェイトは自分の有様を伝える。

“どうしよう……前からバルディッシュの翻訳機能を使わなくても日本語が喋れるように勉強して、勇夜からもこういう時のためのシミュレーションまで受けてもらってたのに、全然生かせない………ウルトラマンって、ほんとすごいよ……他の星に来てはすぐに馴染めちゃうから”

想い人のM78星雲人から、日本の学校での転校はこうなると予め聞き、対策とし予想される質問事項にそつなく答える練習までさせてもらい、わざわざ自身の地球での経歴まで設定させてもらっていた。しかし知己以上の間柄な年上一人相手での練習と、初対面な同年数人囲まれての実践とでは勝手が違ってくる。

特に後者は、初めての同い年の友人が半年前に会ったのはで、交友関係が常人と離れすぎているフェイトにとって慣れないシチュエーション。

まあフェイトに限らず同時に内容の違う質問のつるべ撃ちを受けて、真つ当に答えられる人間など聖徳太子ぐらいしかいない、と一応フオローを入れておこう。

「はいはい！転校初日の留学生をみんなでわちやくちやにしないの」  
「アリサ…」

自分の四方を囲むクラスメイトたちに右往左往、四苦八苦して対応が後手に回っていたフェイトに、アリサが助け舟を出してくれた。

生来の勝気さと面倒見のよさから、今のようにクラスのまとめ役をかってでることが多いアリサ。

「それに質問は順番に、フェイトが困っているでしょ」

アリサがこの場を仕切り、リーダーシップを如何なく無く発揮くれたことで、無秩序とした質問タイムな状況下が整理整頓、改善され、秩序が形成されていく。

「はい、じゃあ俺から」

「どうぞ」

「向うの学校って、どんな感じ？」

「(落ち着いて、お姉ちゃんがサポートしてあげるから)」

「(うん、お願いします)」

「(まっかせなさい♪)」

声のみでも胸を張っていることが分かるアリシアの返しである。

とにかく、質問を投げかける人数が大勢から一人に限定されたことと、アリサとアリシアからのアシストもあり。さつきまで收拾つかずあたふたしていたフェイトも落ち着きを取り戻した。

よかった……事前に勇夜と練習しておいて、最初の質問は勇夜が提示してくれた質問事項の一つだったので、ほっとする私。えつと……こういう時は本当のことを少し茶化しながら答える……だったよね？

「私、かなりの田舎の方に住んだから、普通の学校には行ってなかったんだ、家庭教師というか、そんな感じの人に教わってて」

「へ〜〜そうなんだ、そこってNOKで再放送やってる大草原の小さな○みたいなのところ？」

「……………」

「(そこはイエスでいいよ)」

「た……たぶん」

嘘は言っていないからセーフだよな？

アルトセイムは、ミッドチルダでは辺境の場所だから、田舎と言えば田舎だし、リニスが自分の家庭教師だったことに間違いはないし。

でも：『大草原の○さな家』って？

テレビのドラマだってことぐらいは、最近までテレビの番組を見る機会が無かった私でも分かるけど……はあく〜こんなことなら正直に知らないと言えば良かった。

でも後から姉さんに聞いたのですが、そのドラマはアメリカで放送されてた人気番組で、一応地球での私はイタリア系のアメリカ人って設定なので（地球では私たちの名字はイタリア語らしいので）、むしろ知ってないと色々不味く、こういうのを勇夜から聞いた中国の故事で『塞翁が馬』なんだなと勉強になりました。

または終わりよければ全てよし？ 災い転じて福となす？

ちよつと……違うかな。

その後も、姉さんのサポートを受けつつ、みんなからの質問は続きました。

勇夜からの指導の通り、本当のことと、作り話を五分と五分で混ぜながら答えていきました。

でも：あの人のアドバイスを思い出しながら質問に答えていくうちに……ふと気づいてしまいました。

私……勇夜ことウルトラマンゼロにお世話になりつつ放しであることに……母さんや姉さんを助けてくれて、なのはと友達になったきっかけを作ってくれて、ピンチの時には何度も助けてくれたし。

嘱託魔導師として、あの人たちを探す捜査の仕事もあるのに、今日のために色々手を打ってくれたし、リニスに比べたら鬼教官そのものな個人授業だったけど、もし受けてなかったら日本語にてこずって得意科目な理数から付いていけずにこけていたかもしれないし。

ウルトラマンに頼ってばかりじゃダメだ！ってあんなに意気込んだのに、これじゃ先が重いです。

今日の朝だって、朝食食べ終わったら直ぐに聞き込み調査に出

ちやつたし……翠屋の臨時店員に選ばれちやつたのに合間を縫って………昼食の弁当まで……作ってもらつちやつたし……また髪留め返しそこなつたし……これじゃ面目なんて立ちようがないよ………とほほ。

「次の質問いい？」

「ふえ？ あ、うん、いいよ」

勝手に思考を進めて、勝手に落ち込むという自己完結な無間地獄に嵌りそうになりつつもどうにか抜け出すフェイト。彼女に限った話では無いものの、どうも彼女は悩みを押し込めるタイプなので、思考の深みにずぶずぶと埋まりそうになるにが偶にキズである。

「最近聞いた日本の歌で、好きなのある？」

好きな歌？

あ、あつたあつた、最近お気にいりな一曲。

少し昔、地球の暦で1990年代の歌だけど、今は季節が丁度冬でタイムリーだし、良いよね。

少しの思案の後、フェイトの出したお気に入りのお歌は、かつて90年代の邦楽界を一世風靡した某アイドルグループの代表曲であるウインタースタングであつた。

予想の斜め上で意外なフェイトのチョイスに対し、良い意味で教室中がざわめく。

「フェイトちゃん、一度歌ってみたら」

「なのは？」

「わたしももう一回聞きたいな」

「す、すずか？」

「(思い切つて歌っちゃえば♪ フェイト歌上手でしょ?)」

「(あう……姉さんまで煽らないでよ)」

そのなのはの一言をきっかけに、クラスメイトの期待のメーターが上がり出していく。

周りは状況を煽る者しかおらず、誰も急加速する場の流れを止める輩は誰一人としていなかった。

「え、聞きたい聞きたい♪」

「一曲お願いします」

「さあ、マイクをどうぞ」

クラスの一人が差し出したのは、マイクはマイクでもエアマイクだ。

どんどんテンションを上げて走り出していくクラス一同にフェイトは困惑しながらも、歌うだけなんだから別に問題無いと結論付ける。

なのはたちや、リニスからも上手って言われてたし、見苦しいほどの音痴じゃない筈だから、赤っ恥の心配はいらないよね。

「……………うん……………じゃあサビのところから」

先日ふとその歌を口ずさんでいる時に、たまたま聞いたなのはたちから大絶賛の太鼓判を受けたフェイト。

歌は好きだったし、そんなに下手じゃないから、羞恥なことにはならないと頬が火照り出している己の心に言い聞かせ、1パート目のBメロの旋律を脳内で再生しながら、リズムをとり。

そして深呼吸の後。

……………

……………

……………

……………

歌い終わった時、フェイトはしまったと思った。

1パートのサビのつもりが、最後のパートのサビを全部歌いあげてしまった。

しかも、軽めにいつてもよかったのに、すっかり全力全開で歌ってしまい、廊下にいた生徒まで何事かと立ち止まって、じろじろと見つ

めてきている。

極めつけとして、先程まであんなにがやがやとフェイトに話しかけていたクラスメイトが、沈黙を維持したまま一言も声を上げようとしていない。

あれ？やっぱり不味かったかな……なのは、アリサ、すずかからは評判がよくても、人それぞれ好みが違うんだから、他の子たちにはそうはいかないだろうし。

失敗しちゃったかな、せつかくの学校デビューなのにこれでは未来の自分に《黒歴史》認定されるかも。

そんな不安がよぎった次に起きたのは——フェイトの歌声を聴いて思考がフリーズするほど見惚れてしまっていた全員からの拍手だった。

え？……え？……え？……え？

心の声すら、詰まりに詰まって出てこないフェイトをよそに上がる歓声、スタンディングオベーション。

今日の、後の聖祥大付属小の歴史において、伝説級、神話級の出来事として歴史の1ページに刻まれることになったとか、ならなかったとか。

フェイトが質問が質問攻めを受けていたその頃。

「(フェイトの様子はどうか?)」

「(質問タイムには苦戦してましたけど、クラスのみんなとは直ぐ馴染めましたよ)」

「(そうか)」

よかったとほつとした矢先。

「へっ……へっくしゅん！」

諸星勇夜ことウルトラマンゼロ、ゼロⅡユウヤ・ヴェアリースターは脈絡も無くいきなりくしやみを発した。

「なぜですか？」

「いえ、お気になさらずに…」

「季節が季節ですから、気をつけて下さいね」

「はい、ありがとうございます」

なのはとの念話を平行して、物腰が穏やかなご老体殿から、海鳴周辺に居を構えていると思われる守護騎士達とグレンと主の手掛かり探しの聞き込み調査をしていた勇夜。

くしやみはその最中に突如として起きた。

「ウイルスでも入りやがったか？」

ウルトラマンも生き物なので、体調を崩してしまう可能性は皆無じゃない。

管理は怠っていないつもりだが、もしやと勇夜の脳裏に何らかのウイルスによる感染の可能性がよぎる。

『マスターの身体をスキャンしましたが、病状を発生させるような病原体の存在は見受けられません、恐らく、誰かの噂にマスターの体が反応したのでしょうか』

その可能性をリンクは否定した。

彼女の言う通り、正確に言うとフェイトが内心彼のことを考えていたことが、くしやみと言う形で表出されたのである。

「(根拠は?)」

『(何と言いましょうか……デバイスの勘です)』

「(正確にはデバイスじゃないだろ、お前)」

どちらかと言えば無機物な身の彼女が『勘』などという非合理的な概念を使うことがまあ何ともだ。

実は勇夜からの影響は相当受けている。たまに吐く毒舌もしかりだ。

『(なら…女の子の勘です)』

「(ああ、何かそつちの方がしつくりくるぜ、相棒)」

彼女の茶目っ気を受けた勇夜は、その相棒が予想だになかった返しを投げた。

『(……………)]』

「(おい、リンク?)」

『(い…いえ、行きましようマスター)』

バディでありマスターである勇夜の思わぬ返しに、盛大に自分の言葉で自爆して何も言えなくなるこの人間味あふれる彼女のその一面も、その影響の一つ。

そうした他愛の無い会話、ボケと突っ込みの応酬の後に、聞き込み調査再開と入る勇夜とリンクの二人。

『(冗談のつもりで口にしたのに…マスターはずるい人です／／／／／  
／／／／／／／／マスターにはフェイトという方がおられるのに、私  
をこんな気持ちにさせるなんて／／／…穴があるなら入りたい  
／／…)』

この時内心、照れ(?)ながら、こんなことを独白する “女の子”  
なリンクことウルティメイトブレスレット。

諸星勇夜、彼もまたある意味 “罪づくりな男” の一人であった。

つづく



なのは、アリサ、すずかの「聖祥っ子」（この学校の学生の通称らしい）親友三人組の昼食は、天候が良い日は決まって屋上のベンチで弁当を食べるのは日課で、今日からは私ことフェイト・テスタロツサもその仲間入りだ。

季節は冬で外の空気は冷たいけれど、天候は快晴、青く澄んだ色が空いっぱいになり、お日さまの光が地上をあまなく照らして外の寒さを和らげて、風もほとんど拭いてないこともあって、今日の昼の屋上も食事時には絶好タイムでした。

「フェイトの弁当、ちよつと渋いわね」

「そう？ 勇夜が作ってくれたんだけど」

私の膝に置かれた弁当は、海苔つて緑っぱさのある黒いシート状の食べ物的一面に被せた白ご飯に、おかずはシヤケつて魚を塩で焼いたのちにブロッコリーにニンジンの野菜類と卵焼きのラインナップです。

初めて会った日から料理上手であることは知ってたけど、今日も食欲をそそられる美味しそうな出来栄でした。

私も彼くらい上手になりたいけど……ちよつと自信がないです。

「勇夜さんが？」

「うん、昔は義理のお義父さんもお義母さんも働いてて、妹さん二人の面倒はほとんど勇夜がみてたそうだから」

「それでこんなにお上手なんだね」

「凄いなと思うけど……でもそこまで家事スキルあると女の出る幕なしな気もするわ、〃彼氏〃にするには違う意味で苦労するかもよフェイト」

「ふえ!? いやそんな……彼氏……だなんて」

「にやはは、フェイトちゃん顔が赤いよ」

私の顔は一時真っ赤になりました……勿論原因は寒さによるもの以上に……ごめんなさい！ 恥ずかしくて言えない……

「授業にはついてこれた？」

「どうにかね」

今のところは、どうにか日本の、特にレベルの高いこの学校の授業には着いて来ている。

「でも次の国語は自信が無い…」

けど午後には「日本語」そのものを勉強する「国語」が待っている。勇夜のあの時の鬼指導を通じて一番苦勞し、一番「苦手」なものになってしまった科目……現代日本語はともかく……日本人ですら難関な「古文」なんて、未だにさっぱり分からない。

とても自力のみで着いていく自信が無かったもので、実はなのはと

「無いからって、なのはにその念話とか言うテレパシーでカンニングさせないですよ」

「ドキッ」

——アリスから日本の言葉で「凶星を突かれた」私となのはは、おでこから冷や汗が流れ出しました。

「ほらやっぱり、言っておくけどズルは無しよ、向うの学校だって、授業中勝手に魔法使うのは禁止の規則とかあるんでしょ、それこそテスト中にやったらその時点で0点とか、でどうなの?」

「はい…そうです」

はい、こうなっては白状するしかありません。

彼女の言う通り、まだ本格的に受ける前から苦手科目になった国語の授業では、なのはが念話でフォローするつもりでした。

なのはも決して国語は得意なわけじゃないらしいのですが、私の不安を感じ取った彼女から助け舟を出して来たので、つい甘えてしまったのです。

当然、これは「カンニング」なので、ミッドら魔法世界での全ての学校では、魔法の実技を除いて授業中またはテスト中の念話含めた魔法の私的使用は禁止されています。

教室の天井には、魔法の使用を感知する特殊センサーまで付けられているくらい対策も徹底されています。

テストの最中にやれば失格、進学する為の受験なら即不合格もので

す。

「フェイトちゃん酷い！何も知らない私に悪者の汚名を着せるなんて！！」

「ご、ごめんねなのは……黙ってたのはほんと悪かったから」

そしてそれを知らなかったなのはを騙してしまった同然であり、これには何度自分に拒絶されても「対話」と歩み寄ろうとする姿勢をやめなかったさしものなのも、ぶんすかに怒ってしまいました。

「むっっん」

「お、お願いだから機嫌直して…ね…ね」

私はおろおろと冷や汗を流しまくりながら、なのはの機嫌を直そうと四苦八苦させられま、たとえ苦手でも自力で少しでも克服しなければならぬと学ばされました。

で、本題はここから——実はこの時、何気ないようで後々響いてくる出来事が起きていた。

「でね、みんなには紹介したい子がいるの」

「どんな子なの？すずかちゃん」

「この前図書館で知り合ってたね、茶髪のおかっぱで、京都弁を喋る子で、名前は八神はやてちゃん」

「キョウト…ベンって？」

「訛りのことよ、フェイトの星でもないの？」

「あるよ、南部訛りとか」

「案外変わりないのね、あたしたちの星と」

「でね、うちの学校の子なんだけど、足が不自由で今休学してるんだって」

「じゃあ昼間の平日は何してるの？」

そうしたはやてという少女に関する質疑応答の後、近いうちにその子の家に遊びに行くと言う算段になった。

何気なく、どこにでもありそうな日常にも、思わぬ影が潜んで待ち構えている。その日の昼食はその一つであった。勿論、この時のなの

はとフェイトにとってはやては、足が悪い以外は普通の女の子、という認識でしか無い。

彼女らが、はやての背景を知るのは、まだ少し先の未来まで待つことになる。

勇夜たちの、地球での今の住まいでもあり、闇の書の特別捜査本部でもあるマンションの最上階の一室は、部屋そのものに手を加えない様配慮しながら、地球基準では超高度の科学技術を織り込まれた機能がある。

たとえば、リビングでリンディとプレシアとゲンことレオが、大型3Dホログラムモニターで、先日の海鳴市街での戦闘と、P・T・事件での戦闘の映像を見ているのも、その機能の一端なわけである。

三人の中でもゲンは、静かながら、覇気と厳格さが溢れる真剣な眼差しでモニターを見つめている。

他の住人は何をしているかというところ、アリシアとアルフはテレビゲーム、クロノとエイミィは別室でのサーチ魔法による現地調査だ。

「以上がなのはさんとフェイトさんの戦闘記録です、どうでしたか？」  
「魔法に関して私は門外漢の身ですから、専門的なことはどうとも言えません……」

ゲンは一旦溜めを作りながら、武人の貫禄溢れる眉間の皺をさらによせる。

素人目から見ても、彼がベテランクラスの戦士であることを一目で理解させ、同時に彼が波乱に満ちた人生を送ってきたと漠然とながらも感じさせられる眼差しであった。

「失礼な言い方になりますが、魔導師はほぼ総じて、魔法の行使以外の技術には無頓着だと感じられました」

前置きをしつつ、ゲンなりに柔らかめなオブラートに包んで口にしたつもりだったが、それでも痛烈な一言となってしまった。

「なのはちゃんもフェイトちゃんも、弟子やりヒト君といった良いお

手本が身近にいたお陰か大分改善されていますが、如何せん動きにムラがあり過ぎます、ゼロからも聞きましたが、魔導師は魔力の制御には力を入れているが、それ以外は手抜き同然と言っていました……あくまで弟子の主観ではありますが」

「勇夜君らしい捉え方ですね……」

「この映像を見るからに、あながち的外れではないでしょう、それにカートリッジシステムを今の彼女たちのデバイスに搭載することも渋るのも頷けます、〃騎士〃たちの戦いを見る限り、年頃の少女には重すぎる力です」

自身の肉体の地力が高いからなどといって怠惰に陥りず、魔力制御以外の精進も怠らない有言実行を続けている勇夜や師であるゲンの前では、自分たちが『手抜き』と称されても反論できない。

実際魔導師は魔法以外の攻撃には反応が送れるし、多くの世の魔導師が、勇夜にその弱点を突かれ、彼に魔法を使わせることもなく地に伏せられている。

「むしろ弟子から手ほどきを受けたアルフ君の方が、体捌きに無駄がありません、昔やつに教え込んだ『体の流れ』も身につけてましたし、その点なら娘さんが優秀な魔導師であるのには違いありませんよ」

「いえ、フェイトをここまで育て上げたのは、使い魔のリニスです、その時の私は、自分に向けるフェイトの愛情も……リニスの献身も、利用することしか考えていなかったのです」

苦笑いでゲンの感想を返すリンディたち。

プレシアは少し違う気がするが、これ以上はやめておこう。

「すみません、少しものをきつく言い過ぎましたな」

「いいんです、私もあなたのお弟子さんから、優れた魔導師が優れた兵士、戦士であるに限らないことを、この身で教えられましたから」

ゲンと一緒に映像を鑑賞していた子を持つ母でもあるこの女性陣は、彼の持論を、弟子である勇夜——ウルトラマンゼロの行動という形で直に目にしていた。

リンディはP・T・事件以前にも依頼の形で何度か彼と同伴しての任務で、プレシアに至っては、一度相見える形で、自分が娘のフェ

イトに行ってきた虐待に対して憤怒に駆られた彼と直に殺し合いを経験し、もし自分が病魔に侵されていない本調子の状態であったなら、勝敗はまた違った形になっていたであろうが、勇夜のこの世界での異名である『魔導殺し』の意味をその身に刻まされていた。

だからゲンのこの一言には、胸が染み入る思いであった。

それに彼の戦闘キャリアを聞いていただけに、身に受ける説得力も半端ではない。

「勇夜君の父に代わって地球を守っていた当初は、勇夜君の星のウルトラマンなら、誰もが使えていた光線技を使えなかったのですよね？」

光の国のプラズマスパークや、恒星から発される光エネルギーを生命源にしているウルトラマンたちは、そのエネルギーを光線に転化して額や腕、カラータイマーなどから発射できる能力を持っている。

しかし、光の国とは姉妹国な間柄だったL77星生まれのレオは、故郷の滅亡、地球へ亡命、ウルトラマンとしての戦いの日々当初は全くそれらの技が使えなかった。

唯一、L77星の王子だった頃から嗜んでいた総合武術、宇宙拳法には秀でていたが、せいぜいスポーツなら負けなしな位で、実戦も訓練も経験に乏しかった当時は、癖の強い怪獣、異星人の戦法に完敗を強いられ続けた。

ミッドチルダら管理世界なら、魔法が使えないに等しい、手痛いハングレ。

「はい、あの頃は様々な意味で未熟でした、何度も苦杯を舐めさせられ、師であったセブンからはとことん扱われましたよ、時に『殺意』が沸き、いわゆる『逆ギレ』寸前に陥ることも少なくはなかったな」「ぎゃ、逆ギレですか…」

「はい、ただ師の厳格な指導は、私が至らな過ぎたのが原因なので、攻めるのは筋違いです、なのでどうか自分を抑えられましたかね」「本人はそれも良い思い出だと言わんばかりに懐かしんではいるが、『殺意』だったり『逆ギレ』だったり、物騒にもほどがある表現の数々に、少々どころではない戸惑いが沸いてくるおふた方。」

実は本当の話だったりする。

余りにセブンの有無を言わせぬ、厳しいを通り越して、苛烈で過激な訓練に、理性に反して殺意を沸かせてしまうケースは何度かあった。

我慢してても、その時のゲンの目は血走り、殺気立ち、いつ逆上してダン——セブんに喧嘩を吹っ掛けるかも分からない精神状態。

滝の水を切れだったり、ブーメランの乱れ撃ちだったり、かのジープで引き殺し未遂だったり。

レオからそのことを聞いた、今よりまだやんちゃ盛りだった当時のゼロからも。

『親父……やり過ぎだろ…それでレオが死んじまったり、嫌になって地球から逃げたりしちまったらどうする気だったんだ?』

とドン引きてしまう始末。

そんなレオも、MACとスポーツセンターの同僚、恋人を奪った円盤生物たちと、それを率いるブラック指令との戦いの頃には、光線技を取得、弟アストラとの連携技ものにし、彼単体の光線の破壊力も、惑星一個を粉々にできるまでになった。

これを聞いた年長組女性陣、特にリンデイは、魔力持ちが優遇されがちな自分たちの世界で似たようなハンデを持ちながらミッドチルダ地上本部トップまで上り詰めたレジアス中将を畏敬込みで尊敬しなくなった。

主戦力が魔法なので、どうしてもリンカーコアを宿す人間にばかり、仕事回り、出世の階段を登っていくし、訓練にしても魔法制御にばかり傾いてしまう。

なのでそれ以外……それこそ、肉体そのものの鍛錬などは二の次になってしまう傾向があった。

筋肉の質を比べるだけでも、地球の兵士とかなり差がでるのは明白。

己の身一つでも戦えるよう修練を重ねたこの師弟たちの言葉は、辛辣でもあるが正確、なのでリンデイは頭が上がらなかった。

「弟子のお得意さんも彼女たちのデバイスの改造は了承してくれまし

たし、訓練の指針も固まりました、プレシアさん、フェイトちゃんにはなのはさんともども、きつくご指導するつもりです、生半可な甘えはいたしませんし、弱音も何度か吐くことになるでしょう、それでもよろしいですね」

「はい、元よりそのつもりです、こちらからもお願いいたします」

まだ本格的な訓練は明日からだだが、やはり勇夜の師である彼に二人の指導を頼んだのは正解だ。幼い今の内に粗は改善させた方が良い。

この先、彼女たちがどんな道を選ぶかにしても、今は自分の身を守れる術を身につけなければならぬ。

先刻勇夜たちからの報告で守護騎士が日本にいるのは日を見るより明らかとなり、またなのはたちが戦闘に巻き込まれる可能性も全くないわけではない。

「艦長、レティ提督からの通信です」

「レティから？ 繋いで」

その時、彼女の同僚レティ・ロウランから、ある報せが届く、その内容とは――

「この和風きなこパフェと、翠屋特製生クリームシヨートを下さい」

「ご注文、承りました」

肩まで伸ばした髪を縛り上げ、眼光鋭い目つきに、漢女（おとこおんな）な顔つきをして、ジーパンと黒のトレーナーの組み合わせによるシンプルな私服の上に、店専用のエプロンを纏った少年。

諸星勇夜ことウルトラマンゼロは、二人の若い女性の注文を受け、厨房のマスターたちに報告をした。

知つての通りここは、高町家が運営する喫茶店。

喫茶翠屋。

勇夜は今、この店のアルバイト店員として、ウェイターの仕事に就いている。

実はかのお引越すと、店のど真ん中でフェイトが伸びてしまった事件が起きたあの日。マスターの高町士郎の奥さんであり、なのはと



光——リヒトの母である高町桃子から、ナオトことジャンボットともども、翠屋でバイトでもいいから働かないかと言われた。

闇の書の捜査活動があるので、勇夜もナオトも最初は丁重にお断りしようとしたが。

「働いた分の給料はちゃんと出すし、シフトを半日で分け合えば仕事もこなせるでしょ」と言ってきた。

内容はともかく、その時の桃子の様子は、とても説明し難い。

決して、強引に押しつけて来るわけではない。むしろ温和で落ちつきがある、笑顔だって子持には見えない、若々しくて晴れやかなものであった。

なのに、なぜか——「ここで断ったら後が怖いことになる」——と本能が二人に警告を発してきた。

同時に二人は悟る。この人のからの「お願い」を無下にしてはいけない、あしらってはいけないと。

その時光——ミラーナイトからも、わざわざ念話を使って。

『(母さんの押しを断れる人間は、この世にいませんよ)』  
と、忠告らしき一言を伝えられた。

これは、自らの本能と光の言うう通りにした方が良いと判断した勇夜とナオトは、半日交代勤務の形で、翠屋の店員となった。

地球で無職の扱いを受けるよりは、まだマシだし、働くこと自体に文句は無かったので、一日も経てば、二人ともウエイターとして過ごす時間に直ぐに適応できた。

「(勇夜、光、今話ができる状況か?)」

「(問題ねえよ)」

「(マルチタスクによる作業同時進行が可能となっておりますから、いつでもどうぞ)」

お客から注文を受ける作業を繰り返す勇夜に、ナオトが今学校で授業を受けている最中の光ともども、念話で話しかけてきた。

魔導師には、魔法によって思考を分割し、特定の作業を同時行使することができる。

それがマルチタスク——並列思考だ。

例えば机に向かつて勉強しながら、デバイスによる脳内仮想シミュレータを行えるなど、二足のわらじを可能にし、これを使いこなせば、効果の異なる魔法を同時に発動でき、勇夜たちのように仕事や授業を受けながら会話で会話することが可能であった。

「(藤島町の聞き込みに行ってきたのだが、騎士たちの手掛かりは特に掴めなかった)」

「(そうか…)」

「(まだ二日目なので、めぼしい成果はでないとは思っていましたが)」  
勇夜ことゼロの師匠、おおとりゲンことウルトラマンレオが、守護騎士ヴオルケンリッターのメンバーの一人と接触したことで、彼らと紅蓮と妖弧とマスターたる人間が日本に住んでいることは分かった。

で、捜査の基本は足からということ、昨日からまず海鳴市内、ゲンが見た『関東スーパー』と書かれたスーパーのレジ袋から、そのスーパー周辺の町々を重点的に聞き込みを行っているとうわけである。

「(だが収穫自体は少なからずある、リヒト、君が戦った鉄槌の少女、確かうさぎの人形を着けた帽子を被っていたそうだな)」

「(はい、お世辞にも子どもが喜びそうなデザインでは無かったです…)」

鉄槌の少女が着込んでいたバリアジャケットには、ある特徴があった。

彼女は赤味のベレー帽を頭に被っていたのだが、その帽子に、うさぎがモチーフらしき顔人形が二つ、張り付いていた。

「(それと同型の人形を、大型玩具店、トイオラスで発見した)」

「(何だっ?)」

「(本当なのですか?)」

「(ああ、『のろいうさぎ』という名称で、人形売り場に置かれていた、販売記録を確認してみたのだが、この人形が販売されている大小含めた玩具店は関東地域ではここだけだ)」

ナオトは特に掴めなかったと言っていたが、充分に手掛かりとしては上等な情報を仕入れていた。

これにより、少なくともグレンたちは、海鳴市、或いは海鳴に隣接する都市に住居を構えている線が大きくなった。

捜査の出だしとしては上々の成果である。捜索範囲の広さが、一気に縮まったのだから。

「(こちらは引き続き、捜査を続行する)」

「(了解)」

「(了解しました)」

ナオトからの調査報告は終わり、勇夜はウェイター業一本に従事し始める。

マルチタスクによって、先程から一連の会話を言いながら業務は行っていたけれどもだ。

さらに時間は進み、時刻は午後18時間近、翠屋の閉店時間も間近。

「助かったよ、前からアルバイトの子が欲しかったからね」

「そいつはどうも、リヒトやナオトほどこなしてる自信が無いですけど」

ナオトは休日に翠屋で手伝っているリヒトと同じく王家に仕える身だから、こういうかしこまった仕事には向いているかもしれないが、昔は特に型にはまった行為に窮屈さを感じてた自分としては、店に貢献できていると胸を張って言えなかった。

「そんなことは無いぞ、二人のお陰で、客足がぐんと増えたからね」

「へ？ てつきり今日みたいのがいつものことと…」

士郎さんの話によると、俺たち二人を目当てに、客足が倍増したらしい。

さらに、それ以前から光目当てに来ている客もいたそうさ。

勇夜はまさかと思った。

そりやリヒトが温和なイケメンだし、ナオトも眼鏡が似合う知的で整った顔つきはしてつけど、さすがに俺は無いだろ、目つきがきついかか何度言われたことか、どうも容姿を褒められても、ピンとこない。

父から言われても同様だった。

「(マスターは自身の『美貌』をもっと自覚するべきです)」

「(それ……どういう意味だよ？ 美貌と言われるような顔なんてし

てねえぞ)」

「(なんでも)」

なんかリンクが変なことを抜かしやがったが、まあ置いておこう。いつもやってるポケみたいなものだ。これと言った意味は、無いよな？ まあ無いに決まってるさ、どうせ自分に突っ込ませる魂胆以外に意味はないと勇夜は結論付けた。

もうフェイトたちも帰っている頃だし、寄り道せずに帰ることにする。

「(勇夜君、今は話せるかしら?)」

「(ああ、どうした?)」

翠屋を出て、ここから目と鼻の先にあるマンションに向かおうとした際、いきなりリンデイが念話で連絡を入れてきた。

念話を使う時点で、急用であることは直ぐに理解できたが、その内容を聞いた瞬間、勇夜の目つきが変わった。

それは——彼が戦いに臨む時の戦士、もののふの瞳。

修羅場と死線をいくつも越えてきたもののみが見せ、持ち合せている眼光。

彼はそれを発しながら、太平洋の海方面へと走っていく。

オリンピック選手さえ、大きく差をつけてしまうまでのスピードで市街を疾走する勇夜。

リンデイが勇夜に連絡してきたのは、レティから齎され、自分たちにも関わることだが、一部の者を除き、地球からでは対応できない緊急の情報。

その情報が、勇夜たちの現地調査で、主が海鳴市周辺に潜伏している線が大きくなった矢先の不確定要素だとしてもだ。

あくまで一応の報告、本人の意思によっては、現地の局員に任せる手もあった。

けど万が一「本物」だったら？ やつらは並の魔道師では敵わぬ相手、ならば自分が相手にするしかない。

「(今からミッドチルダに向かうことはできるかしら?)」

「問題ない、30分で着く」

今は起きた事態を冷静に対処する戦士となっている彼が簡潔に答えを切った。

それだけの短時間で異世界へと向かえる、だからこそ手が届かない場所で起きた事態に、彼女は手が届く身である彼に委ねたのだ。

勇夜は市街を疾走しながら、自らの周りに人除けを結界を張り、歩を進めるごとに範囲を拡大。

海鳴臨海公園に着く頃には、勇夜以外人氣が無い様相になっていた。

「相棒、封時結界とゼロアイを」

『了解しました』

これで心おきなく変身できる。

彼は警戒を続けながら人除けの解除と同時に封時結界を張り、リンクからウルトラゼロアイを射出、念力でその場に浮遊させたまま。

「デュアー！」

自身の額に装着し、変身を敢行した。

ちなみに、その情報というのは――

“ミットチルダ、クラナガン市街上空に、守護騎士の一人が現れた

――という内容だった。

つづく

STAGE 09 | Chase of the  
dark night

地球から飛び立った一点の光。

その光はあつという間に月、火星、木星、土星を次々と通り過ぎ、太陽系を離脱していった。

余りの速さに、当然ながら今の光景を目に焼き付けた者は誰一人としていない、まだ地球人の科学技術が宇宙空間での生活がデフォルトな域にまで発展していないとしてもだ。

その光こそ、緊急の要請を受けて、海鳴市の人気の無い場所で結界を張り、変身とレポートと結界解除を同時に行い、地球から太陽系外へ一気に飛び去った、諸星勇夜の本来の姿、光の巨人、ウルトラマンゼロ。

「へアアアアア！」

ゼロは、その超速を維持したまま、両腕の握り拳を、胸のカラータイマーの前で平行に向かい合わせた。

タイマーから発された光が両腕を包み込み、その状態を維持したまま両腕を前方に翳すと、光の筋が伸びていく。

放たれた二つの光の筋は融合、人間の視力では直視できない光のトンネル、ウルトラマンの超長距離航行術にして、ゼロにとっては時空間航行術、《ウルトラトラウインクルウェイ》が出現する。

「シユアアアアア!!!」

ゼロはそれを見とめると、さらに急加速して飛行スピードを上げ、ミッドチルダ直通の次元トンネルに飛び込んでいった。

これもまた一瞬の出来事で、目に止めた者は誰一人としていない。

ミッドチルダという星には、大まかに分けて3つの風景（かお）が存在する。

一つは首都クラナガンを代表に、とことん洗練され、曲線で構成さ

れている都市群。

二つは、人の手がほとんど届いていない緑溢れる自然。

三つ目は、既に建物としては死んだも同然な廃ビル、廃建造物たちが群がるゴーストシティ。

あるものは完全に原型を留めずに破片と化し。

またあるものは斜めに傾き、いつ破片に墮ちるか秒読み。

またあるものは、生々しい罅（きず）を全身に走らせながらも、ただどうにか地面にしっかりと足を付け直立を維持している。

現地（このせかい）の人間たちからは、『廃棄都市区画』を名称づけられた建造物たちの墓標であり、墓場。

今から約数百年前、次元世界が二つの勢力に分断され、この世界の禁忌の象徴ロストロギアに手を出してしまったことで世界そのものがいくつも消滅、生き残った星々も、文明が積み上げた人間の生活の営み場は根こそぎ破壊された。

この街は、ミッドチルダにおける『戦前の遺物』とも言える残された過去の傷跡。

光景そのものが異形なら、こんな悪路を粉塵が飛翔し、後部に巻き散らせながらひた走る、勇夜の駆るVMAXカスタムもまた異形。

地球2009年製では剥き出しのライト一本だったハンドルと後部シート周辺には、エッジの利いた漆黒のカウルが装着され、ライトも円形のモノアイから吊り目なツインアイとなっている。

勇夜自身も、風になびくその髪もヘルメットもインナーの服も黒、その上に限りなく黒なダークブルーのデニムジャケットを羽織り、ジーパンも濃いめのダークブルー。彼を一目見た者が、この格好とバイクから、かの光の巨人を繋げることはまず無い。

減速など思考の隅に置いてきたが如くのスロットルを振るい、急加速する鉄騎は既に高速道路の許容速度から大きく差を開かせてしまっていた。

これが直進ならまだ良い。

それだけに止まらず勇夜は速度を維持したままレーシングばりに身を極度に傾けその豪腕の体軀に似合わない機敏さで方向を変えて

右に曲がり、そのまま続けて左に曲がる連続コーナリングを成し遂げてしまった。

それも一回のみでなく、かれこれこの猛々しい速度で、20回以上もゴーストシティの角たちを曲がり切ると言う凄まじさ。

『目標確認、前方約1km、高度300mの地点』

「ああ、こっちの目でもはつきり見えるぜ」

彼の瞳には、夜空を飛行するあの守護騎士の一人である鉄槌の少女がいた。

今から約一時間前、クラナガン市街に突如彼女が現れた。

地上本部の対応は早く、出動した陸上警備部の部隊に多勢は無勢と悟ったのか誰一人として蒐集せず、廃棄区画(こちら)に逃亡して行った。

クラナガン上空は、上層部その他諸々の許可と、旅客機の航路変更などで飛行できる環境が整わなければ飛ぶことは許されない。

しかし地上からでは、空を逃走する被疑者の追いかけるは困難。

ならばと勇夜が選んだ代案がVMAXによる追跡だった。

爆走するVMAXは、上空の少女と距離をどんどん詰めていく。

『誘導弾、来ます』

それを黙って見過ごす相手でも無く、相手は指先に形成した魔力弾を眼下の勇夜たちに向けて撃ち下げた。

オレンジ色に光る球体の数は10発。

それぞれが不規則かつ独立した軌道で迫ってくる。

対して勇夜は瞬時に対応。

魔力弾のスピードと着弾地点を予測しながら、左右じぐぎぐに方向転換。

一度ミスを犯せば、光球の餌食になる。

その証拠に、VMAXが転換した向きと逆方向の地面に魔力弾が衝突。

爆発して、魔力と塵と炎が吹き上がっていく。

爆音も大きく、並の人間なら鼓膜に多大な負荷がかかって失神しかねない。



こんな火柱の藪の中でも、臆することなく、反復する爆風と爆音地獄を走り抜け勇夜に、一度は標的を当てられなかった誘導弾が追走。「しつけないー！」

毒づきながら、勇夜は左方に体を傾け、車体の向きを変える。

直進を維持し、円を描く形でその身を回転させながら、腰のガンベルトから拳銃形態でしまっていた零牙を取り出し、構え。

車体が180度、フロントが誘導弾と対面する瞬間。

「フォトンバレット——リードショットー！」

魔法陣が敷かれた銃口から迸る青緑色の弾丸。

最初はたったの一発だった。

零点コンマの刻みを経て、弾丸は一発から無数に分裂、玉にもマリンスノーにも見える小振りの弾の群れは、オレンジ色の誘導弾へと飛んで行き。衝突する魔力の弾たちは、地上で盛大に花火を上げる。

群れる小粒の弾の膜が阻みとなり、三発の誘導弾は閃光の後に魔力残滓と果てた。

リードショット—Lead shotの名の通り、この魔力弾は《散弾》を発射する射撃魔法、使い方によつては今披露されたようにミサイルチャフな芸当も可能とする。

勇夜は迎撃するとすぐさま零牙をホルスターにしまい、ハンドルを握り返し、さらに車体をもう180度回してスロットルを回し追跡を再開させる。

『高エネルギー反応、大型の直進弾と思われませう』

上空では少女が第二破として、自身の小柄な体躯をすっぽり包み込む魔力球を作り出していた。

偉くどでかいやつを用意したな、それに何か引つかかる……というか、きな臭さだ。

このクラナガンでやつらが現れたことも、現にこうして逃走劇をやっている、自分の目で確認したことにより強くなっている。

一応検討は着いていた、その何かは漠然とだが……あれは自分の世界じゃ、よく異星人侵略の常套手段、なのかもしれない。

けど、今は思索を後に回す時、どんな手品だろうと、今は眼前の障

害を駆逐して、奴をぶん捕まえるだけ。

「リミッター解除、Vブーストモード」

音声入力式なのか、勇夜の声に反応してVMAXのエンジンのトルク数が上昇、鋼鉄の暴れ馬が猛獣の咆哮（おたけび）を上げる。

元はエンジンが一定の回転数を超えた時、目覚める。野獣——Vブースト”、過度な改造を施されたこのVMAXは、彼の声紋認証によって発動する。

今までの疾走すら余興であり——『眠れる獅子』と『爪を隠した鷹』——であったのだ。

互いの準備が整った。

ハンドルのスロットルを全開にし、エキゾーストが咆哮をあげながら火を噴き、鉄騎——VMAXが豪風と化すのと、少女が鉄槌による魔力の剛球を数回回転してからの振り下ろしからのスマッシュによる炸裂が、ほぼ同時に起きた。

オレンジの魔力弾は、太陽を連想させる輝きで落下してくる。

すかさず勇夜は体の重心を後ろに傾け、前輪を宙に上げると、見えない登り坂があるかのように、重量300kgを悠に超える剛馬を宙に走らせた。

紙一重の擦れ違い。斜面線上を走るVMAXは、ギリギリ光球より上の高度に上昇、跳躍し、太陽を跨る形で直撃を避けた。

人間の体が耐えられる速度はもう越えてしまっている。

こんな速度でも耐えられる作りなバイクも恐ろしいが、その性能をフルに扱っている勇夜は、ウルトラ戦士であることを踏まえてももっと恐ろしい。

そして何よりも恐ろしいのは、まだVMAXが宙を疾走している状態であるのに、ホルスターからガンモードの零牙を抜き、リンクから光の粒子が発せられると同時にハンドルから手を離し、足付きが悪いことに定評があるペダルを足場にして立ち上がり、粒子が形となって左手に出現した——三色の変身ゴーグル、ウルトラゼロアイの射撃形態ガンフォーム——を掴み、渾身の一球をかわされ距離を取ろう

とする少女に対し、右手に零牙、左手にゼロアイのツーハンドで構えた。

このまま逃がす気は毛頭ない。

たとえ「仲間」と何かしらの「絆」を持っていようと、仲間を苦しめてまでこんなことを選ばざるを得ない「ジレンマ」があろうと。

体はプログラムでも、熱の籠った心を持っていたとしても——今はただ、標的を撃ち貫くのみ。

「ファイアー！」

対象を逃し、地面に衝突して大爆発を起こす魔力弾の爆風と閃光を背に、彼の鋼の意志が籠められた、魔力とディファレートエネルギーによる光の弾丸が、それぞれの銃口に火を迸らせながら。

鉄槌の少女に向けて——解き放たれた。

過去の戦乱の爪跡であり、当時の争いの熾烈さを記す記録でもある混泥土密林群——コンクリートジャングル。

廃棄都市区画。

その建造物たちの墓標の西側に位置する第6区画と呼ばれている地域では、日本なら機動隊隊員に該当する全員同じデザインな、体の各部に防具が付けられたバリアジャケットを着こみ、形状が音叉に酷似した杖型のデバイスを持った——『陸上警備部・陸士108部隊』——の隊員たち8人が、あちこちに探査魔法であるサーチャーを飛ばし、実は地球から数十分でミッドチルダに駆け付けた、とある囑託魔導師と追跡戦を繰り広げ、クラナガン市街地に現れた次元犯罪者の少女の探索を行っていた。

他の区画でも、別の部隊が探し回っている。

「勇夜君、そっちは？」

「空振りだ、蟻ん子一匹いやしねえ」

別のポイントで被疑者を探し歩いていた、彼ら108部隊の部隊長とは義理とは言え親子であるその囑託魔導師の諸星勇夜が合流。

隊員たちにとってゲンヤは上司、勇夜にとってはミッドチルダでの

おやつさんこと義父なので、双方とも顔見知りで、今回以前にも共に仕事をこなしたこともある戦友的な間柄。

勇夜も含めて、探索チームの隊員一同が探査を一端中断し集まった。

現場での即席ミーティングというやつである。

「勇夜君が被疑者を撃墜してから2時間です、被疑者はもう空へ逃走したのでは」

「それなら、ここら一带を監視している衛星が捉えて、こっちに連絡が回ってくるはずだろ」

進言してきた隊員の進言に答える二十歳前後の探査チームのリーダー、ラッド・カルタス。

こういう瓦礫の巣窟と化した土地というのは治安悪化を招き、犯罪の温床になり、犯罪組織のアジトとして重宝されがちだ。

年々、瓦礫群の撤去作業によってゴーストシティは少しずつ更地（一部は訓練施設として敢えて残されている）になってきてはいるが、まだまだ予断は許されない。

よって監視もおのずと強めになる。

例えばラッドの言う通り、勇夜たちのいる地上の上空には、区画のお目付けとして、複数の人工衛星が24時間無休で見張っている。

衛星には単にカメラで映像を映しているだけでなく、区画内で魔力を感知するリーダーを備え、魔法行使を感知すると即対応、地上本部に情報を転送するシステムになっている。

これはカメラから死角になる地点にいても、建物内においても地下にいても通用されるので、廃棄区画は情景に反して凶状持ちがうろつく場ではなくなっていた。

「しかし、勇夜君はともかく、我々だけで古代ベルカの騎士を確保するのは難しいのでは、もし彼と別行動をとっている時にはち合わせたりしたら」

「心配はねえよ、あいつを撃ち落とした時、両腕の腱を狙撃したからな、天下の騎士様も、指を動かさなきゃ弾丸ぶち込んで得物を振り回せやしないさ」

勇夜が鉄槌の少女を撃墜する際、ガンモードの零牙だけでなく、ガンフォームのウルトラゼロアイを使った理由をこれからお見せしよう。

「ファイアー」

少女が繰り出した大型の太陽（まりよくきゆう）をライダージャンピングでかわした勇夜は、VMAXカスタムがまだ宙に浮きあがっている状態で零牙とゼロアイを構え、小数以下の僅かな時間差を付けて、それぞれのトリガーを引いた。

零牙の銃口からは、青緑色のテニスボールサイズの魔力弾が、ゼロアイからはBB弾並の小ぶりの緑色のデイフレーターエネルギー弾二発が発射される。

人の動体視力からは同速にしか見えないが、微妙に距離差をつけながら大気を切り裂き、突き進む光弾たち。

少女の方も即座に反応して三角と円で構成された魔法陣の障壁を張る。

先頭を走る魔力弾は、オレンジ色の障壁と衝突、直進を続けようともがくが魔力の球体は粉々に砕け散り、魔力残滓となり果てた。

だが次の瞬間、魔導師にとっては信じがたいことが起こる。

魔力弾の後ろを走っていた後発のエネルギー弾は、障壁に触れたにも拘わらず衝突して消滅するどころか、まるで進行を阻害する存在が初めから無かったかのように、二発とも障壁をすり抜けて少女の二の腕を掠め、皮膚を切り裂いた。

痛みに顔を歪める少女を前に、勇夜はゼロアイをリンクに格納し、零牙を両手持ちで構える。

銃口に集まる本命の一撃となる魔力光——ヘヴィストライク。

彼の指が引き金に掛かり、銃弾の枷が解放される瞬間。

少女は右手に魔力球を作ると、前方に向けて障壁ごと破って暴発。

世界が一瞬、白銀の光一色に支配された。

時間にして数秒、まだ片手で数えられる範囲内の出来事。

結論から言えば、相手に後々響く手傷を負わせたものの、魔力による閃光手榴弾―スタングレネードで逃げられてしまった。

ただし、リンクの分析から勇夜の放ったゼロアイのエネルギー弾と、零牙からの射撃魔法。

弾丸そのものの威力はそれ程ではないが、衝撃力の強さで体勢を崩し突き飛ばす弾丸―『HEAVY STRIKE』――は確実に少女に命中したとのこと。

さらに衛星のセキュリティには一切反応が無いことから、魔法による逃亡は諦めて、足で逃げていると考えられたので、こうして捜査網を張って捜索していたのである。

あの時、なぜディファレートエネルギー弾が障壁をすり抜けたのか、気になる人の為に説明しておく。

まずおさらいとして、太陽エネルギーと魔法は一定以上の量で接触すると中和して消滅する性質を備えている。

この特性を利用し、エネルギー弾には、二発とも膜状バリアを覆った多重構造にし、魔力と太陽エネルギーのバリアが接触した瞬間、その部分だけが相殺され障壁に穴が開き、弾丸はそこを通過して少女の二の腕に傷を負わせたのである。

しかも勇夜は最初から彼女の臍を狙っていた。

そこを傷つけられれば、手、指を動かすのに支障が出る。

いくらベルカの騎士でも、指が五本不満足なコンディションで武器を振るうのは困難極まる。

そんな状態でカートリッジを使うのは自殺行為だ。

まともに握れず、傷口に塩を塗り、余計腕を痛める結果になる。

治癒魔法を使うにも、自身への治癒は他者への治癒をかけるより進行が遅く、神経を傷つけられたとなれば、さらに時間が掛かる。

見張りの人工衛星もいるため、隠れている身で迂闊に使えば、すぐ場所を特定されることになる。

となれば、まだこの区画内に隠れ潜んでいる線はまだ残っているということだ。

「Aチームは地下水道路、BチームはポイントS-52の建造物一帯を当たってくれ、被疑者を見つけ次第報告、確保だ」

「了解」

方針も決まり、探索部隊はそれぞれ割り当てられたチームごとに別れ、搜索を再開する。

やがてその場に残ったのは勇夜一人、正確には相棒のリンクと二人となった。

先程から、その場を微動だにせず佇む勇夜。

顔は黒い前髪に隠れているせいで、何を考えているのか全く掴めない。

ただ、近寄る者を猛獣に睨まれる感覚にさせる圧迫感を発している。

もし直に睨まれたら、そのまま射殺せそうな鋭さだった。

やがて彫像のような静の状態から、動に移行する。アローモードなど一部の形態以外なら、どの形態でもしまえる特製ガンベルトのホルスターに収納された零牙ガンモードを抜き打ちに振り向いて発砲、彼の背後に迫って来ていた影を撃ち抜いた。

地面に叩きつけられる影、零牙からの弾丸に脳天を貫かれて倒れている影は、人では無かった、人と同じ体格だが、人とかけ離れていた。

鳥類、特にカラスを連想させる黒い体色と顔つき、オレンジ色で人間より大きな猛禽類の双眸、全身の体色に負けず劣らずの黒ずくめなスーツ、さしずめ鳥人間と呼ぶべき風貌だった。

こうして直に目にするのは初めてだが、勇夜はこのカラス人間に心当たりがあった。

種族名は《レイビーク星人》、鳥型の生物が知的生命体に進化したと思われ、P413星雲のとある惑星を牛耳っていた種族。

その星には人間に酷似した生物がおり、星人達は奴隷同然に彼らを酷使し続けていたが、そのツケが回り、彼らを絶滅寸前に追い込ませてしまった。

対策としてレイビーク族は容姿、身体構造が似通った地球人に目を付け、照射された物体を縮小させる特殊光線銃で、大勢の地球人を労働力として拉致し連れ去ろうとしたのである。

結局その悪だくみは、その世界の防衛隊とウルトラマンによって阻止された。

これに懲りたのか、それ以降レイビーク族が余所の星に潜入して、現地民たちに拉致を行った記録は残されていない。

「団体さまのお目通り……ってか？」

『数は視認できるだけでも30はいます』

一人見つけたら百いると思え、では無いが勇夜の周辺には先手を撃とうとして返り討ちにあった最初の一人と同じ容姿をしたレイビーク星人たちが一斉に現れ、爪を構えて前傾姿勢をとりながら彼に殺気を放っていた。

「(縮小光線銃を持つてるやつはいるか?)」

『(いえ、どうやら武器の類は持ち合せていないようです、それに……)』

「(ああ、どういうことだよ、この感覚……)」

二人は、レイビーク星人たちに対し、ある疑念が浮かび上がっていた。

だが今はその疑念を晴らす術も時間も、彼らには齎されていない。なぜなら相対する星人たちはほぼ一斉に、勇夜たちに牙を向いて来たからだった。

その部屋は、かなりのスペースが確保されながら、無機的で空間を照らす灯りは余りにも少なかった。

何らかの機械や半透明の円筒のカプセルから発せられる数少ない微量な光も、部屋にある物体の輪郭を捉えるために放っているわけではない。

男が座っている前に置かれた机の上に表示された、二つの3Dディスプレイもそうだ。



一つディスプレイには、神の視点からどこかの迷路を、簡易的なC  
Gで表示させ。

「次は200m先の左を曲がれ」

男はモニターに向けて語りかけていた。

その男は白衣来た50ほどの中年で、顔つきはどことなく昭和時代の日本人男性を思わせる雰囲気醸し出していた。

どうやら、モニターの光点の一つに指示を与えて敵と接触させないようナビゲートしているようである。

「さて……その姿でどこまで戦えるか、見物のし甲斐があるな、”セ  
ブンの倅”よ」

男は一方の画面に映る光点へのナビを続けながら、もう一つの――  
―複数の光点たちと追跡戦を強いられている一点が映ったモニター  
に目を向け、独り呟いた。

正直なところ、彼が人間体でも常人離れの強さを手にしていること  
は理解している。

古代ベルカ式を使い、他者になり済まず制約があつたからとは言  
え、管理局では最強とうたわれた双子の片割れを先刻追いつめていた  
のだから。

さすがウルトラ警備隊7番目の戦士にしてウルトラ兄弟三兄の子  
であり、獅子の弟子ということはある。

だがあれだけでは足りない。

この体の元の主の技術力を以て作り上げた傑作品の性能を最大限  
発揮させるには、やつらのデータが更に必要になる。

噛ませ犬、捨て石というのはこういう時に重宝するのだからな。

男のその口元は……微かにではあるが歪んだ笑みを浮かばせてい  
た。

ポロボロのビル群の森を走る勇夜。

彼を追いかける、カラス人間、レイビーク星人たち。

先程とは趣の異なるチェイスが行われていた。

幕末と呼ばれる時代の侍たちのようにはいかねえか……と走りながら愚痴る勇夜。

彼は、日本の体制が決定的に変化する転換期、新たな社会システムを作り出そうとする者たちと、それまでのシステムを維持しようとする者たちの争いが繰り広げられた時代に、こういつた街中で大勢の敵に一人遭遇した際に侍たちが使っていた対処法を試していた。

まず始めに、追われる形になるが逃げる。

追跡者から振り切る為に背を向けるわけではない。

人が人それぞれ異なる容姿を持っているように、人によって走る速度はバラバラ、それにプラスして是非がなんでも対象に追いつきたい心理状態によって、追走者同士の距離がどうしても離れることになる。

そして先頭を走ってきた者から順に、一対一に持ち込み、一撃離脱を繰り返して一人ずつ屠っていく、先人たちの知恵が編み出した、複数の相手に対抗するための戦法。

実際ある程度の効果は現れた。

この追跡戦で、レイビーク星人たちは飛び道具の類を持っていないこと。

「マグナムシユート！」

一部ビルからビルを跳躍して追いかける輩がおり、そいつらから一人づつガンモードの零牙から発射される魔力弾で撃ち落としていったことだ。

残るは、地上を疾走する個体たちのみ、数は20。

かれこれ5 kmほど走っている。これだけ走っていれば、マラソンランナーたちのようにばらつきが出そうなものだが、レイビークたちは一定の距離感を維持したまま並走を続けていた。

どういう仕掛けか分からないが、彼らは全員、一定基準の性能で平均化された量産機械のようだ。

さつき彼が内心ぼやいた愚痴は、この因から端を発している。

そろそろ追いかけて回されるのがうっとおしくなってきた。

どうやら、自分以外にこいつらから喧嘩を売られたやつはいないら

しい。

音声のみの通信でおやつさんの部下たちに連絡してみたら、特に襲撃は受けていなかった。性質の悪いストーカーどもが、自分を追いかける連中全員だけなのが幸いだ。

かと言つて、自分だけがその対象なのは良い気がしない。

世界一運が悪いが、タフガイなN.Y市警の刑事（デカ）みたいにはやきたい気分だ。

しかし、この停滞した状況をぶち壊すのはほやきじゃない、己自身を選び取つて実行する行動だ。

さて——鬼ごっこはこの辺でお開きだ。

彼の意識が、守勢から攻勢に転じる。

勇夜はその場で足を止めると、いきなり追走するレイビীগ星人に向けて跳び上がった。

高度にして40mもの高さを、体操選手を涙目にさせる流麗なフォームで宙を舞いながら放物線が描かれる。

そしてレイビークの群れから見て真上の位置に差し掛かると。

「『ティターンインパクト』——ヘアア!!」

術名を発すると同時に、ダガーモードにした零牙の一振りを眼下に向けて投擲。

短刀は、レイビীগ星人たちが踏みしめている大地に突き刺さった。

その刹那、刃が刺さった地点から半径数メートルの範囲の大地から、光が漏れたかという、地面がいきなり閃光と一緒に吹きあがった。

レイビークの数人はその爆発に呑みこまれた。爆発の直撃から逃れた者も、閃光と舞い上がった砂塵で、視界が妨げられ、吹き飛ばされた瓦礫がその身に生々しく刺さり、血を大量に流しながら生命活動を停止させられた。

今勇夜が使った魔法、《ティターンインパクト》は魔力を圧縮して溜めた零牙を地面に突き刺し、地面に魔力を流し込むと同時に強制解放して爆発を起こす魔法。

空中戦では使い物にならないが、地上での一体多数の戦闘においては周りへの被害を多少大目を瞑れば、複数の敵を殲滅できる。

先手を撃った勇夜は、態勢は崩されているが同時に粉塵と暗闇で眼が役に立ってない状況下にもかかわらず、意に介せず群れの真つただ中に飛び込んだ。

着地と同時に、まず目の前にいた三体を右足からの連撃で打ちのめし、続いて背後にいた一体を左足からの上段回し蹴りのよる、ハンマーと化した踵で顔面を叩きつけた。

今の攻撃で残り16体になったレイビーク、4体を犠牲にしたことで態勢を立て直す時間ができたのか、粉塵と闇に紛れ姿を消した。

相手も視界が封じられているのは同じ、ならば地の利と数の利を生かして、不意打ちと不意打ちの積み重ねで生殺しにしようとも言うのだろう。

策としては上々の一手だった。

自ら気配を押し殺し、数体が一斉に跳び上がり迫る。

先鋒の一体の爪が勇夜の頭部を肉塊にすべく切り裂こうとした。

が、それは未遂に終わる。と言うよりは、無理やり終わらせられた。

爪が彼の体に触れるより先に、振り向いた勇夜に腕を掴まれ、腕力と遠心力で腕の骨が砕け散る。

その勢いのまま勇夜は片手で投げ飛ばし、射線上にいた同類数体にぶつけた。

彼はそこで動きを止めることなく、上手側から現れた一体の蹴りを避けながら右手の肘打ち、掌底と飛び膝蹴りの連撃で胸部を内部の肋骨ごと破壊する。

続いて下手側からのパンチの連舞を両腕での防護で勢いを殺し、お返しとしてこちらからの拳による連打を食らわせ、足払いで姿勢を崩した後にアッパーカットで下顎を撃ちあげた。

天高く舞い上がって地に堕ちる一体、この時点でもう半数以上がやられていた。

こんな戦況でもやつらは退こうとしない、そんな思考などどうの昔に捨て去っていたようだ。

勇夜としては好都合だ。こいつらの為に自分の身内、それ以上の人たちに手出しなんかさせるわけにはいかないからだ。

悪いが、この場で全員纏めて駆逐する。勇夜は腰のベルトに帯刀していたもう一本のダガーモードの零牙を抜き、ダーツを射る要領で投げた。

粉塵の中へと消える零牙。

バシユバシユ——と、生ものが切り裂かれ、内部から液体が吹き出る音が連続して鳴る。

それから数秒たった後、反対方向から黒い短刀が二本とも勇夜の許に戻り、彼の手の中に収まった。

やがてようやく粉塵が晴れ、クリアな視界が確保される。

この場には、勇夜以外に立っている者がいなかった。

レイビーク星人は全員倒れ、地に伏せられており、残りの者たちは、粉塵の中を投擲され、勇夜のウルトラ念力で自在に飛び廻る零牙の刃で切り刻まれて、血を噴き出して倒れ込んでいた。

四肢を分断されたものまでいる。生首の数も少くない。

勇夜が人並みの容姿をしていることもあって、とても異様な光景であった。

相手を全て駆逐したことを見おさめると、両手に持っていた零牙をリンクに格納しようとする勇夜。

その途端、勇夜の目つきが再び戦闘時のものに変わる。

ダガーモードの零牙一振りをも、逆手に持って構えを取った。自身の持っている感覚器官をフル稼働させて、自分に殺気をぶつけてくる相手の存在を感じ取ろうとする。

瞬間、夜の闇に影一つが通り、月光に反射した。

勇夜に迫る凶刃の一閃。

互いの得物と得物が、火花を散らしてぶつかり合った。

廃棄都市区画の下には、今は使われていない地下水路のトンネルが存在する。

都市が都市としての機能を果たしていない以上、地下水路も同様で、今は水が流れるどころか、湿気の滑りすら無い。

手を着けられていないので、闇とすすと埃だらけで、長時間ここにいるのは苦痛になる点に関しては変わらない。

コン：コン……と音が地下に残響する。

両腕、丁度指を動かすのに必要な腱の位置に傷を負った青みがあった髪の方が、闇の十字路を歩いていた。

できるだけ忍び足で進んでいるが、音そのものは消せてはいない。追われているのか、辺りを注視しながら進み続ける。

“その先を進み続ければ、クラナガン市街の水路に繋がる、追手は近くにはいない”

彼の脳内に、声が響いた。

齡を重ねた男の声であった。

言われるまでも無い。

ここで見つかる訳にはいかない。

転移魔法ですぐさまこんな汚らしいところからおさらばしたいが、ここでは愚行の極み、自分から地雷を踏みに行くようなもの、現状は大人しく足でこの場から抜けるしかない。

数時間前飛行で逃亡していた自分にバイクで追走してきた、己の片割れを打ちのめした男の弟子に当たる少年によつて負わされた腕の痛みを、耐えに耐えながら歩を進めると、やがては水の流れが彼の耳に心地よく響いた。

紛れも無く、クラナガンの真下に流れる地下水道の音。

ゴール地点までもう直ぐの位置だった。

やっとこの闇と閉塞感と緊張感から解放される。

そう思えば、自然と足取りが軽くなっていた。

この世界に迷い込んだウルトラ戦士は、こちらでは『魔導殺し』の異名を持っている。

大っぴらに戦えなかった——という理由と事情があるとはいえ『彼女』もその名の意味をたつた今思い知った……洗礼者の……一人であった。

「『誘拐犯』の次は、『愉快犯』かよ……」

右手の零牙を逆手で構えたまま、レイビーク星人に続いて現れ彼に不意打ちを掛け、剣閃を数合交わした相手に対して、勇夜はこう発して毒づいた。

今度の相手もウルトラの世界にいる知的生命体。

それも彼の師にとつて、因縁深き相手でもあった。

種族名は、『ツルク星人』。

種全てが殺戮衝動を抱えた危険な習性を持ち、宇宙の通り魔と名が付くほど、殺戮者として有名な星人たち。

カミキリ虫を連想させる奇怪な容姿と冷血に不気味に光る赤い瞳。

その両腕には、月の光に反射する刃が付けられていた。

師のウルトラマンレオ——おとりゲンと戦った個体は、彼を兄貴分と慕っていた少年とその妹の父と同僚であったM A Cの隊員を殺害、その罪をゲンに着させようとさえした。

父セブンのサポートが無ければゲンは、腕の刃で両断されていたかもしれないほどの強敵。

噂通りの、殺戮中毒者だな……こいつ。

彼の心に蠢くのは嫌悪感。

なぜそんな感情が沸き上がるのか、元凶は対峙する星人にあった。

笑っている。生死を賭けたこの状況下で、いやでも戦いに快楽を求め、愉悦に浸っていることが分かる。

それだけ邪悪で戯れた笑みだった。

『バトルマニア』だってんなら、守護騎士の一人で自分とやりあつたシグナムもそうだが、あいつには武人としての誇りを持ち合せ、己を律せられる理性も捨てていなかった。

こいつらにはそれすら無い。きつと、とうの昔にそれらを壊して、それつきりなのだろう。

彼らがなぜここまで、『殺し』を極上の娯楽とするようになったの

かは定かではない。

唯一つ断言できるのは……こいつらが、生命体とすら呼ぶ気にもなれなくさせる特上の《悪魔》だってことだ。

数秒の対峙mその時間は星人の踏み込みで終わりを告げた。

両腕の刃で果断無く切り付けるツルク。

手に持った零牙（ナイフ）で、間合いに入らせない様防御し、受け流す勇夜。

一撃一撃が……重く、なのにその二刀の剣舞は変幻自在、一方を受ければまたもう一方が切り裂かんと迫る。

隙そのものを見せつけない、師のレオをかつては苦しめ、一度は敗退させた二段攻撃、どの攻撃も致命傷となる部位を狙ってきているので予断が許されず、少しでもよそ見をすれば、自分の首が飛んで、視界に自身が落ちていく光景が映されるであろう。

聞くところによれば、人つてのは首が体から離れても、しばらく意識があるそうだ。

それを試してみる気はさらさらない。

たとえ先輩にあたり、父の従兄で自分の親類にあたるレッド族のウルトラマンが直に体験していたとしてもだ。

来る！  
やつの大技が——！直感で悟った勇夜は、剣先に念力を集中させた。

両腕を振りかぶり、刃を力の限り振り下ろすツルク。

零牙で辛うじてその凶刃を受け止めた勇夜だったが、刃から発し、念力越しに感じる衝撃と強風で突き飛ばされ、背後の廃ビルの外壁に叩きつけられた。

隙だけは見せまいと激痛に呻く体を動かし立ち上がる。

額からは赤い液体が流れていた。眉間以外にも切り傷が刻まれたが、念力の防壁とバリアジャケットにより、外傷自体は大したことは無い。

それに顔面の傷は、他の部位に比べ血が流れやすい。

額の怪我は、やつ刃から迸った風によつて掠ったものだった。



念力で受けなければ、掠り傷どころでは無かったが……だ。

『今の技はソニックブーム、俗に言う鎌いたちと呼ばれるものです』  
相棒が補足説明してくれた。

今のはすなわち、高速で剣を振ったことで発生した空気の衝撃波で自分をバラバラの肉片死体に変えようとしたのだ。フィクションではよく見る代物だが、まさかこうして直に受けることになるとはな、世の中分からねえものだ。

そのかまいたちが有効打となって形勢をこちらにさらに傾かせるべく、ツルクは無色の大地を駆け、押し迫る。

またしても勇夜の首に迫る二つの×字に交差された刃、その挟撃で切り飛ばすつもりなのだろう。

勇夜もみすみす相手の思い通りに殺されるつもりはない。

刃が首を捉える寸前、右手の零牙を阻みにして挟撃を受け止めた。

『マスター、さすがに変身しなければ不味い状況です』

「分かっているよ、でもそいつはお前が必要だと判断した時にとつてくれ」

マルチタスクで、状況の打開を思案しつつ、相棒からの提言に答える勇夜。

『マスター……』

「(そんな時が来たら、無理やりにも俺をウルトラマンにして構わねえからさ)」

『了解、ですが……くれぐれも無理はなさらないでください……』

淡々とした声音に、彼の身を案じる思いを見せながら、リンクは了承した。

「ああ」

ゼロになれば、一気に勝機が上がるだろう。

人間のこの姿でも、それなりに善戦できていたのだから。

しかし、今はウルトラマンになるわけにはいかない。

やつには、完全に理性を失い、二度と戻れなくなると引き換えに怪獣に変化できる能力を有している。

下手にクラナガンの眼と鼻の先で変身すりゃ、相手も合わせて巨大

化するかもしれない。

結界に閉じ込められるだろうが、そうなれば確実に衛星に引つかかる。

家族であるナカジマ一家も含んだ、この星に住んでいる人たちに無用なパニックは押しつけたくは無い。

それに、こいつとさっきのレイビーグは、前に海鳴で怪獣を送りこんできた野郎の差し金で、間違いない。

殺意は感じられるのに、ロボットであるジャンボットにすら感じられたものが、こいつらには皆無だ。

確たる証拠は無いが、そいつは今でもこの戦闘をじっくり見物中であるはず。

そんな小汚い野郎に、手の内を見せるわけにはいかない。

だから今は——ギリギリまで“諸星勇夜”として戦い抜く。

決意を胸に、彼は右足の蹴りで相手の下腹部を蹴り付け、生じた隙から魔力放射の応用で、身をツルクの股の間に向けスライディング、脚の合間をすり抜けた。

一方、次こそは首級を取るとばかり、立ちあがった直後の勇夜に肉薄するツルク。

まず左手の刃を一閃、その刃は相手の右手の零牙で受け止められる。

それぐらい把握済みだと、右手の二段目が迫った。

だが本命の二段目も何かに阻まれて防がれた。

ツルクの狂気の容貌が驚愕に包まれる。

次に身が感じたのは、胸部に押しかかる重み。

「こっちも——二刀流何だよおおー!!!」

防いだ何かは、隠し持っていたもう一振りのダガーモードの零牙。

重みの正体は勇夜の両足からの時間差キックであった。

一撃目は胸部だったが、二撃目はツルクの顔面に直撃し、先程とは立場が逆転する形で飛ばされ、地面を何回転も転がさせられた。

だがツルクは直ぐその場を立ち、振り上げた剣を振り下ろしぎまに打ち付ける。

かまいたち——大気の凶刃が刃から放たれた。  
来たな、ならこつちは！

左手を正面に翳す。

勇夜の掌から見えない「何か」が飛んだ。

ウルトラ念力の念動波を球体に固めて飛ばしたのだ。

その名も《サイコウエーブ》、念動波と大気の刃がぶつかり、衝撃が四方に広がる。

正確には、念動波が大気の刃を押し殺した。

そのままツルクに迫る念動波だったが、かまいたちをはじめとした空気の壁で衝撃波はすんでのところで届かなかった

しかし、これこそが勇夜の狙いであり、彼は地面が割れるほどの脚力で駆け出した。

彼がここまで人間離れた身体能力を發揮できるのは、ある秘密があった。

ウルトラマンが人間の姿を取る際、二つの選択肢がある。

見た目だけを人間そっくりに変えるか、身体構造まで人間そのものにするかだ。

前者だと、人間でないことが周囲にバレやすく、後者だと危険が差し迫った時に咄嗟対応できない。

さらに変身アイテムに貯められたエネルギーで瞬時にウルトラマンに変身する場合と違い、人の姿のまま「身体構造」を変える行為は時間が掛かる。

長い時には数分費やされることもある。

勇夜も普段は日常生活に支障を出さないよう、体の中身は後者向きなのだが、これが彼とゲンレーオら二人の師弟となると、話が少し違ってくる。

二人は、ある意識法で時間が掛かる身体変換を瞬時に行っているのだ。

過去の武人も持ち合せていたとされる、自身の意識を集中させて研ぎ澄まし、体をより戦闘に特化した性能に置き換える自己変革能力、それを駆使することで、勇夜は人間体でも多大な戦闘能力を發揮でき

た。

さらに先に放った念動波が、駆ける速度をさらに増幅させる。

念動波は空気を切り裂きながら押し進んでいた。

その結果、勇夜とツルクを結ぶ直線状は真空状態となる。

いわゆる《スリップストリーム現象》、空気抵抗の網から解放された真空の穴を走る勇夜は、瞬間的にフェイトの飛行に迫るスピードで駆けていた。

大地を駆けあがる勇夜を待ち構えるツルク。

奴もやられるつもりはない。

彼が自身の攻撃をこちらに当てる前に、こっちの剣撃で屠る気だ。

奴も地面を刈り上げ、自らの脚を疾駆させる。

刃を嵌めこんだ両手を大の字に広げた。

凶刃で勇夜の体を真っ二つにする魂胆だ。

それは勇夜でも理解できた。

だがなお疾走を止めない。

瞳に宿す闘気はさらに熱く滾っている。

ただの殺戮を繰り返すだけのマシンには絶対持ちえない物を持っているがゆえに、彼は走る、戦う。

その身に宿る「心」には確固たる、この手で守りたい、守り抜きたい人たちがいるのだから。

互いが間合いの内に入った。

得物のリーチならツルクの刃の方が上。

振り広げた刃を、勇夜の銅に向けて横薙ぎの挟撃で切り付ける――

――その前に彼は跳び上がり、刃は刃同士重なりぶつけ合った。

「このやろおおおおおー！」

勇夜はその瞬間、刃に向けて蹴りを下ろし、踏み台にしてさらに高く跳び上がった。

彼の脚力から繰り出されたキックによる衝撃で、ツルクの得物は罅を走らせ、砕け散って鉄屑となり果てる。

敵の背後へと跨って飛躍し、逆さになる形で背後をとると、勇夜は

ツルクの胴体を掴み上げ、両足を大地に踏みつけ、起き上がる勢いでツルクを頭部から瓦礫まみれの地面に叩きつけた。

小さな瓦礫の破片が舞い踊る。

今のは、アナザースペースでのバラージの盾を探す旅で彼が身に着けたプレス系統の体技、《ゼロドライバー》の応用技だ。

常人離れた彼の腕力で脳天から叩きつけられたことで、さしものツルク星人も意識を飛ばされていた。

が、彼の攻勢はここでお開きではない、勇夜はツルクを抱えた状態で数回振りまわした後。

「ウルトラハリケエエエエエエエーーン」

空に向け、力の限り投げ飛ばす。

ウルトラ兄弟四兄のウルトラ戦士が、次兄をかつて完膚なきまで倒した怪獣の別固体を見事打ち倒す決定打になった投げ技《ウルトラハリケーン》である。

相手を空中に放り投げると、すかさず勇夜は地面に魔法陣を敷く。

「風よ、豪腕となりて…悪しき者を完膚無きに叩き伏せ」

「(リンク、奴の落下地点はそこで間違いないな?)」

『(はい、勿論です)』

リンクと念話で何らかの確認をし、右手の人差しと中指を立てながら詠唱すると、上空の大気が渦巻き状に急速回転を始めた。

渦の真下には、ウルトラハリケーンで未だ宙を舞ったままなツルク。

「プレス——サイクロン！」

指を立てた右手を横薙ぎに振るうと同時に唱えた詠唱が引き金となり、渦から降り注ぐ竜巻がツルク星人を叩きつける。

《プレスサイクロン》

人工的に竜巻を発生させて、眼下の敵を打ち付ける攻撃魔法。先程のかまいたちのように、空気も使い方次第で凶器となる。

この竜巻も威力は申し分の無い…のだが、攻撃範囲は決して広いといえない短所があった。

一度発生させた渦本体を、移動させるのが困難だからだ。

だが回転させながら放り投げることで、敵を無防備にさせる《ウルトラハリケーン》と組み合わせれば、ほぼ確実に当てることが可能だった。

大風の豪腕に圧され、急速に降下していくツルク。

「零牙、ブレイドモード」

零牙を日本刀形態、ブレイドモードにしながら落下する対象に背を向ける形で居合腰をとる。

集中力を高める為、瞳も伏せ、深呼吸し、静かに構えを維持する勇夜。

そして――

「ブアア!!」

――振り向きざまに抜刀。

煌めく月光の反射の閃光、目にすら捉えられない速さで、彼は切り抜けた。

鈍く、生肉が斬れた斬撃音が二回、夜の廃墟に響く。

地面に粉塵を起こしながらスライディングし、両足で勢いを止める“零牙を上段から唐竹に振り下ろした状態”の勇夜は、刀身に付いた血を振り払いながら、零牙を鞘に納刀する。

刀が収められたと知らせる金属音がなった瞬間、ドサツと複数の物体が地に落ちる音がした。

物体の正体は――ツルク星人。

ただし……今となっては四分割に切断された肉塊と成り果てていた。

勇夜は自身の背後に落ちてきたツルクに、まず逆手で抜刀、左から切り上げ即座に順手に持ち直しながら唐竹の二撃目で対象を四散させながら切り抜けたのだ。

《逆手不意切り》と言う名の技の応用による居合術、余りの速さに、あの瞬きの合間で二連の斬撃を振るつたと、目で把握できるものはいま。

『お見事です』

「どうってことねえよ…」

止めていた息を吐きながら返す勇夜——ゼロ。  
前言の通り、ウルトラマンゼロは《諸星勇夜》として、宇宙の通り  
魔を打倒したのであった。  
つづく

# STAGE 10 | DREAM

時刻は日本時間で午後21時53分。

大人はまだまだ起きていられる余裕があるが、小学生以下の子どもたちは明日に備えて就寝に入っている時間帯である。

ただ、人という生き物は雑念にしろ何にしろ、考え事や引っかかりがあると、容易く眠りに着くことができなくなる生き物だ。

何を隠そう、外見年齢と戸籍上は11歳だが、実は数え年では『5歳』なフェイトも、たった今自室で消灯し、ベッドで横になつてゐるのに、隣で身を丸くし、尻尾を枕代わりにしてすやすやと寝ている子犬フォームのアルフと違い、眠りに眠れなかった。

「はあ〜〜」

愛くるしいまでに整つた容貌から、溜め息を零すフェイト、よく見ると——どうやら彼女、少々落ち込んでいるようだ。

実はフェイトは今、今日『絶対にやり遂げようと心に決めたこと』を、結局出来ずじまいに終わり、若干の自己嫌悪に陥つてゐる。

その原因というのが、フェイトの手の中に大事におさまつてゐる、あのアルトセイムの草原で勇夜から預かつた髪留め——

「今日も返せなかつた……………」

——を、未だに持ち主に返せていないということだ。

約半年前、一度勇夜が故郷であるM78星雲惑星アルトラ、通称光の国へ帰省する際、彼から自分たちの世界に帰つてくるまでの間、預かつてほしいと託された。

ミットチルダでの家族からのプレゼントで、光の国の文字で『ZER0』と彫られた髪留め。

オーダーメイドな特注品なので、世界に一つしかない貴重なものだ。

フェイトは今日こそはと、これを持ち主であるウルトラ戦士に返そうと意気込んでいた……………結局今日も自分の手元に残つたまま。

今日は良いことづくめだったのが、拍車を掛ける。

母と姉に見送られて学校に行き。



なのはたちと一緒に勉強したり、談笑したり、放課後は一緒に遊んだり。

歌を歌うのはちよつと恥ずかしかつたけど、クラスのみんなども馴染めたし。

一日掛けて、フェイトの心情は、暖、正のベクトルへと傾いていた。その調子を維持したまま、髪留めを返すことができたなら良かったのだが、クラナガンで守護騎士ヴォルケンリッターの一人が現れたと聞いた勇夜が翠屋のバイトを終えたその足で、ミットチルダに飛んで行ってしまった。

勇夜にも、守護騎士にも、文句も恨みも無いし、自分もそこまで駄々っ子じゃない。半年前よりはましになった方だと自覚している。今落ち込んでいるのは、足踏みばかりして肝心な時に走りだせず、その上間が悪くて走れずじまいな自分に対してだ。

返せる機会なんて、ここ数日まったく無かつたわけじゃないのに。

「はあ〜」

また溜め息が流れた。

預かりっ放しなことが、こんなにフェイトのテンションを下げるのは他にも理由（わけ）がある。

以前、まだ裁判中だった時期に面会の形で、彼の義母（はは）であるクイント・ナカジマと会った際、この髪留めができる経緯を聞いたことがある。

ミットチルダに飛ばされ、幼児退行した当初は男としては長めだが女性としては短めなショートカットの髪型だったという。

それが一年経つ頃には、ほぼ今と同じ長さになり、ポニーテールにするようになった。

床屋に行っても、長髪の毛先を整えるだけで、ばつさり切ることは断固拒否したらしい。

そうまでして、彼がああ髪形に拘った理由は単純明快だ。

以前お伝えした通り、実父ウルトラセブンに一番近い髪型だからである。

現在の光の国では『フリーズプラネット』と呼ばれている、それよ

り昔に起きた『ベリアル乱』の首謀者で衛星軌道上の《宇宙牢獄》に封印されたダークサイドウルトラマン、ベリアルが復活し、プラズマスパークタワーの心臓部エネルギーコアが強奪された事件が起きるまでは、セブンは父であることを知らなかったゼロだが、幼少期の彼を母代りに面倒見てくれた孤児院の女性から父が勇敢な戦士であると漠然とながら聞かされていたので、父親への憧れが人一倍強かった。

髪を伸ばして結ぶのは、憧憬の存在であった父との絆の象徴であり、そのことに気が付いたナカジマ夫妻は、勇夜——ゼロがミッドチルダに迷い込んでから最初になる誕生日の日に、事前にはばれないよう本人から『ZERO』を意味するウルトラ文字を聞き出し、来るべき日にプレゼントをした。

貰い受けた当の本人は照れくさかったのか。

「しゃあねえ、もらってやるか／＼／＼／＼」

とツンデレ全開なりアクションを見せて誤魔化していたが、その時にみせたにやけた表情と、その翌日から毎日、アルトセイムの草原でフェイトに手渡すまでずっとその髪留めで髪を結んでいた事実から見ても、心底嬉しかったのは明白だった。

彼がああ髪留めで長髪を纏めているということは、セブンら光の国がある向うの世界と、こちらの世界での家族であるナカジマ家の人たちとも、ゼロにとって大切な人たちであることは窺える。

名前に関してもこんな経緯がある。

人間の時の彼は諸星勇夜と名乗っているが、戸籍上では『ユウヤ・モロボシ・ナカジマ』と二重性。

父の代から使っている諸星は、彼の本名の名字である『ヴェアリースター』を日本語に訳したものだ。

ウルトラマンである時に名乗るゼロはセブンから、人間体の時に名乗るミドルネームの勇夜（ゆうや）は、実母である諸星アンヌ（旧姓は友里）から付けられたが、セブンはゼロという名に自分の原点（ゼロ）を忘れぬように、アンヌは勇夜（ゆうや）に勇ましさと優しさを両方とも持てる子であってほしいと願いを込めて名付けたのだ。

ZEROと彫られたあの髪留めで髪を結び、諸星勇夜と名乗るのは、実はシャイな性格であるがゆえに余り口には出さない勇夜(ゼロ)の彼なりの表現というやつなのだ。

この一連の話を、クイントを通じて聞いていたので、フェイトは髪留めが未だに自分の手にあることに、秒刻みで罪悪感を募らせ。

「はあ〜〜」

これで通算三度目となる、溜め息へと連なっていた。

溜め息ばかり吐いてもいられない、ともかく今日はもう寝よう。

明日の朝からはなのはと一緒に、勇夜(ゼロ)のお師匠さんであるゲンさんことウルトラマンレオからご指南を受けるんだから。

勇夜からゲンさんの指導は、鬼がつくほど厳しいと聞いてるから、朝スッキリ起きれるようちゃんと寝ておかないといけない。あくび一つしただけでも『弛んでいるぞ!』と叱責されるに違いないからだ。でもせめて眠りに着く前に、勇夜に髪留めを返す期限を決めておこう。

えくと、期日はクリスマススイブの日まで、うん、その日までに絶対返そう。

はあ〜〜やっぱり私って…… 『ダメな子』だ。

自分で宣言しておいて、宣言した自分に対する自己嫌悪でさらに落ち込む自称—— 『ダメな子』。

その夜は、顔にダウナーな心境の際に現れる縦線を走らせながら、夢の中へと入りこんでいくフェイトなのであった。

諸星勇夜……もとい………今の彼はウルトラマンの姿をとっているのです、ここはゼロと呼ぶべきだ。

ゼロは、自分がどうしてこんなところにいるのか図りかねなかった。

ツルク星人を倒した後も、騎士の捜索を続けたものの、結局見つけられず断念することになり、その足で久方ぶりにミットチルダの家に帰って、夕飯食って、ギンガとスバルの寝顔を見た後に寝たはずだ。

つまり、今自分は夢の中……なんだって「自覚」があるってことは、これがルシッドドリーム——明晰夢ってやつか。

この明晰夢がまた、とても奇妙な光景だった。

彼が立っているフィールドはどこかの森、どこことなく、赤道付近の南海の陸地で見かけそうな緑の山々であるが、無国籍感ならぬ無世界感を表すべきだろうか、地球なのか管理世界から無人世界と呼ばれる未開の星なのか、ゼロの目からは判別がつかない。

太陽は沈みかかり、空の色はメラメラとした赤、オレンジ、黄色と暖色に染められているが、ところどころ黒ずんだ雲雲たちが光を遮り、どこか怪しげかつ妖しげで重々しい情景を演出し、空を舞う鳥たちのさえずりも、その空気感を煽らせる手伝いをしていた。

「あれは……」

彼の金色に発光する瞳が、ある一点を捉えた。

その一点とは遺跡、三叉槍にも見えないことは無い、天空に向けてそびえ立ち、全身に縄文が彫られた塔が建てられた遺跡であった。

その塔も、かなりの年月ものである以外は、誰がいつ、何のために建てたのか、まるつきり分からない。

分からないはずなのに、ゼロは何故か、深い森に立つ古き時代からの塔と言うこのビジョンに見覚えがあった。

見覚えと言うより、正確には聞き覚えというやつだ。

相棒から聞いたのだが、確か「あいつ」が自分と一心同体となる適格者——デュナミストを選抜するために、不特定多数の人間に対し、夢として送り込むイメージ……だったか。

「そうだったよな？ リンクっ……」

知識元である左腕に着けられている相棒に向けて語りかけようとした時に、ようやくゼロは気づいた。

いつも肌身離さず、諸星勇夜の時も、ウルトラマンゼロである時も常に一緒にいた相棒、ウルティメイトイージス——リンクがいないことを。

「どうなっちゃってんだよ……」

悪態をつくゼロ。夢の中とは言え、リンクがいないことも気がかりだが、未だに自分がこんな不可思議な空間にいる現状に、妙な懸念が渦巻き続けている。

ともかく、ここですつと突っ立っているよりはましだ。

あの遺跡の内部に行ってみるとするか——と、ゼロはその巨大な体を、50mから2m近くまで縮小させると、遺跡の出入口らしき空洞に入りこんでいった。

ゼロは茶色にくすんだ洞窟の中を進み続ける。

道の端と端には、一定の間隔でたいまつが置かれ、道の先から背後まで、洞窟の隅々を火のゆらめきで照らしていた。

イメージ空間に入りこんだ人間への配慮というやつだろう。

リンクから聞いた「あいつ」の活躍壇から見ても、余り物は言わなかったが、気配りを欠かせない一面があるタイプだとゼロは『彼』印象付けていた。

若干、何かを教えている時の自分と父とタメを張れる厳しき、というか……鬼畜さも感じられたが……これ以上はよそう。

「ここが、ゴールか？」

奥へ奥へと進んでいくうちに、最果ての場所らしき一室に行きついた。

石棺か？ それとも石碑か？ ゼロから見て、球体の両端と下部、計三つの三角形上の物体が取り付けられた、石柩にも見えなくはない砂色の遺物が祀られていた。

石棺らしき物体の下へと歩み寄ると、ゼロの行為に見計らったのか、石棺がいきなり光を全身から飛ばし始めた。

ウルトラマンですら視界はホワイトアウトしそうな強過ぎる光量

に、ゼロは両腕で眼を覆う。  
やがて彼のその身も光となって、石棺の方へと消えていった。

次にゼロの眼前に広がった空間（せかい）も、何とも不思議極まるものだった。

前方後方上方下方、すべて基本色は黒。

そこにアクセントとして、水が光を受けたことで発する幻想的なゆるめきが漂っている。

さつきのおどろおどろしい、森と遺跡の風景とは正反対な、ヒーリング効果さえ感じさせられる心地良い空間であった。

まったく、粋な演出してくれるゼ……ゼロにはもう、この明晰夢が誰の差し金であるか見当がついていた

果てが見えない、距離感が感じにくい空間の奥から光球がやってくる。

それはゼロ二体分の距離で止まり、球は段々と人の姿を形どった。

「やっぱあんただったか」

宝石より光を反射させる銀色の体色と黒く細いライン、背中から伸びる二つの塔、胸に一際目立つ真紅の発光体——エナジーコア。

M78生まれの俺たちより、遙か遠い昔から、無数に連なる世界たちを見守り続けた戦士。

神秘の巨人——ウルトラマンノア。

俺にウルティメイトイージス——リンクを出会わせてくれた張本人。

あいつが意志を持つなんて、当のノアでも予想外だったろうけどな。

「で、相棒は何ともないんだよな？」

ここがノアの作り出した『夢』な以上、心配する必要なんかもうないのだが、一応相棒——リンクがどうなっているか聞いてみた。彼から託されてから、ずっと片時も離さず腕と指に嵌めていたせいか、左腕がまっさらであることが少々落ち着かない。

『今は眠っているだけだ、私がこうして君とコンタクトをとっている間はな』

独特の渋みと、気品、色気が絶妙な具合な混在して醸し出されている美声でノアは答えた。

今、ゼロとノアは、リンクすなわちウルティメイトイージスという電話回線を通じて、こうして面と向かい合って会話している。

回線としての機能を十全に発揮できるように、今は一時的に彼女の意志が眠らされている状態だというわけだ。

「そろそろ聞いていいか？ 相棒を『電話』代わりにして連絡よこしてきたわけをさ」

『君に情報を持ってきた、君たちが追っている、今は『闇の書』と名付けられてしまった魔導の書物のことだ』

「何……だつて？」

この鉄面皮な顔をしたウルトラマンでは無く、諸星勇夜という人間としてだったなら、今頃彼は綺麗に吊りあがった両目を、驚きで開かせるだけ開いただろう。

彼の持ってきた情報と言うのは、決して多くは無いらしい、むしろ漠然としたものだったが、今自分たちの目の前にそびえ立っている謎という外壁をぶち壊すには、充分な破壊力を秘めていた。

言葉の通り、意識が夢から解き放たれて、気がついた。

人工的な灯りが消えた部屋の天井。

かといって、周りは黒一色と言うわけでも無く、窓越しに指している二つの月の光の筋が、何とも綺麗だった。

地球では一つしかない惑星の周りを公転している衛星も、ここ惑星ミッドチルダでは、星を隣接して横たわる月が二つある。

違う位置に佇んでいるので、片方が満月の時は三日月だったり、二つの星はおそろいの容姿をすることは無く、そのバラつきが却って

地球と言うか日本で言う「月見」が、一度で二度楽しめる仕様となっていた。

部屋の壁に立てかけられた円形の時計の針たちは、午後11時半であると指すしている位置にいた。

家に帰って、クイント母さんが出してくれた飯食べて、地球にいるリンディたちに今日はここで泊まると連絡して、ベッドに入って寝たのが9時半。

何とも中途半端な時間帯。

さつさと二度寝に入りたいところなんだが……今の勇夜には眠りに直行できない要因があった。

今日やりあった異星人たち、怪獣たちを含めてこっちの世界に送り込んでる黒幕、ノアからの情報………に対して、気になっているのも一因………だが一番の近因は——まず両腕が動かない、寝た直後はいなかった「存在」たちによって、二つの二の腕はがっちりホールドされている。

掴まれた腕から感じるのは、適度な柔らかさと体温……心地良いあたたかさを秘めた………儂さを感じさせる華奢な人の体、二つ

顔の左右横からは、やけに生温かいそよ風、はつきり言ってしまうと、人の口から出る風——呼吸の吐息だ。

「あ、ゆうにい起きたよ」

「ごめんね兄ちゃん、せっかく寝てたのに……」

いつの間にかベッドの中に転がり込んで来た可愛い侵入者たちも、目を覚ました。

青みがかつた髪とボーイツシュなショートカットな特徴的で、初対面の相手には人見知りなくせに自分ら家族にはとことん甘えてくる甘えん坊な下の妹——スバル。

そのスバルの姉であり、彼女と違ってロングヘアで、歳に似合わずしっかり者そうで、見かけどおり本当にしっかり者な、謝りながらもその上目遣いな表情からは喜のオーラが溢れ出て来ている上の妹——ギンガ。

血縁は無いが、勇夜——ゼロにとって「家族」そのものな義妹（い



もうと）たちである。

男っぽい名前ではあるし、特に下の妹のスバルは短髪なせいで男の子にも見えてしまうが、二人とも真正正銘の「女の子」である。たとえその体が機械で構成されていようと、それは揺るがない。

つまりは今の状況を改めて詳細に説明すると、勇夜はその愛する妹たちに挟まれて、漢字の「川」の字ならぬ「小」の字で寝そべっている状態なのだ。

彼の父と想い人がこの光景を見たら……やきもちで身を焦がしそうに違うのは、確かなのであった。

数年前までは、おやつさんとクイント母さんが仕事で遅くなる日はこうして一緒に寝ていたので、今さら戸惑うことでも驚くことでもない。

でも一応、こっそり入り込んで来たわけを聞いている。

「いつからいたんだ？ おふたりさん」

「二ついさつき♪」

二人からの話しによれば、外から聞こえてきたバイク音で目が覚め、もしかしたらと思ってクイント母さんに聞いてみたら、自分が帰ってきたことを知って大喜び、母からの煽り……もとい薦めで自分の部屋のベットに直行した、であるとのことだ。

まったく義母（かあ）さんめ……な気分だ。

髪と瞳の色以外は、父が見せてくれたウルトラ警備隊在籍当時の写真で見た「実母」と瓜二つな上に、その人の名でもある「アンヌ」つてミドルネームを持ったクイント・ナカジマ

パラレル、平行世界の、《同一だけ違う存在》であると感じていい。その実母の写し鏡なクイント母さんは、押しが強いというかしたたかというか、ある意味健全（？）な方向で腹黒いというか、少し小悪魔かつ策士な一面がある。

たとえば、妹たちにこういうシチュエーションをさせるよう、けしかけたりとかだ。

悪意を以てやることは絶対にしないので、どうも語気を強めて物申すことはできない。だから余計に対応に困っちゃう。

「お兄ちゃん明日の朝にはまた地球に行っちゃうんでしょ？だから今日のうちにとまって」

「ぎんねえと、ゆうにいと、いつしよいつしよ」

それに、ここ半年……ちびっこにとっては気が遠くなる期間の間、自分は生まれ故郷に帰省中だった。

その間、二人もまたずっと待ち焦がれていたのは、その笑みを見るだけで読みとれた。

「じゃあねえ、今日は特別サービスにしてやるから、二人とも早いところ寝ろよ」

「は〜い」

それに、こんなに嬉しそうに答える二人と寝ること自体に文句は無い。

勿論、家族的な「愛情」から来るものだ。

今は専業主婦だけど、義母さんも昔は陸の武装局員だったからな、家に遅く帰ることもざらで、今みたいに一緒に寝たり、飯作って食べたり、風呂にも入ったからな、疾しい気持ちなんか浮かびようが無い。そもそもこんな小さい子たちに、やんちゃさに手を焼くのはともかく、可愛い以外の感情をどうやって出てくるんだ？

それにこの子たちは、俺と義母（かあ）さんが助けて、この家の子として引き取られるまでは、受けるべき「愛情」を受けることさえできなかつた……癩だけど生みの親とも言える連中からは……人とすらみなされない実験動物―モルモットだったからな。

厳しくする時は、鬼になるべきだけど、失われたというか……本来体験させてもらえなかつた日常の時間の分だけ、二人にはもつと「温もり」を見せてやらなきゃならない。

「おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

数時間前まで、冷たい殺意の渦中にいたせいか、二人の温かみがか心休まる。

色々山積みなことはあるけど、今はゆっくり休もう。

でも、フェイトには……ちよつとすまないことしたかな。

急用だったとはいえ、そそくさと地球から飛びだしてしまった。

多分今頃、また何もしてやれない自分を無力だとなじっているはずだ。

きつと宝物の髪留めを返すことができなかつたことで、落ちこんでいるかもしれない、大事にとつてくれると信じて預けたし、事実そうなのだから、自分から無理強いして返すよう催促するつもりはないけど。

明日の師匠の稽古にも付き添えそうに無いな……翠屋のバイトに聞き込み、ベータカートリッジのパーツも取りにいかなきやならねえ、あれがないとプレシアたちによるフェイトたちの愛機の改修が進まないからさ。

まあ、その分の埋め合わせはちやんとするつもりだし、それに……あの子たちを無闇に戦いの場に引きずりさせはしないさ。

あの子たちには、できれば普通の女の子でいてほしいからだ。

自分の背中を預けよう何ぎ、2万年……ほどじゃねえが、まだまだ早えよ。

今は生きてくれるだけで、それだけで心強いんだから。

フェイトも……この子たちだけじゃない。

言わずもがな「仲間——友」もそうだ。

今はその一人な炎の用心棒とは、壁が存在しているけど、それでも生きていてくれたことが、嬉しくないわけなかった。

絶対にその壁は、いずれ乗り越えてやる。

「(リンク)」

『(何ようでしょうか？マスター)』

そして、心強い存在はもう一人に、おやすみの挨拶をしておく

何だか彼女の体温がいつもより温かい気もするが、嫌でも無いので

良しとしところ。

「おやすみ」

『は……はい、おやすみなさい……マスター』

確かな暖気をその身に受けながら、諸星勇夜は再び眠りについていく。

月明かりに照らされ、髪が下ろされた寝顔は、とてもあどけなく、眩いもの。

眠りの時は、彼が歳相応の「少年」の顔を見せる「瞬間」の一つでもあった。

つづく

## STAGE 11 — 絶えぬ疑念

ウルティメイトフォースゼロ、ウルトラ兄弟の一人なウルトラ戦士、民間魔導師に時空航行船アースラクルーらによって構成された対闇の書特別捜査本部が日本国神奈川県海鳴の高級マンション最上階に置かれてから数日過ぎた。

実はこの臨時捜査本部、海鳴だけにあるのではない。

本部としている場所がもう一つある——月の地表。

ナオト・J・フライトが、宇宙船でもある巨大ロボット、鋼鉄の武人ことジャンボットであるのはご存じであろう。

彼が魔力プログラムで肉体を構成された人間⇨ナオトでいる間、ジャンボットとしての鋼の肉体は、現在月面に隠してある。何を隠そう、ここがもう一つの捜査本部であるのだ。

地球側に特定されないよう、対策もされている。

説明が少し長くなるが、ジャンボットの体が、表面の装甲から生物なら骨にあたる内部の金属フレームまで、ナノマシンで構成されている。

ナノレベルの極小さを誇る機械、ナノマシン、ジャンボットにとっては人間でいうところの細胞にあたる。

このナノマシンと言う名の細胞たちは、地球製や管理世界製のマシンではありえない機能を持ち、例えば自己修復機能、右腕の籠手、ガントレットをガトリングガンへと変形させたり、どうみても収納するスペースが見当たらないのに左腕や頭部が現れるのも、ジャンバード時にはナノレベルで分解され、機体内部にある四次元空間で格納されている部品群である為、それらの部位は、必要時には瞬時に構築させられる。

創作風に言うとかレン味の利いた、地球の科学力では無理がある変形を実際に行えるのは、このようなカラクリがあるのだ。

他にも表面の装甲を周辺の空間の色調と合わせることで、迷彩にもなる、動いてしまうと微かに空間がゆらいで隠れていることがばれてしまうが、要は動かなければ良いだけだ。孫子の教えである「動かさ

ること山の如し”になるだけで、周囲からの発見率は格段に低くなる。

これらの機能によって、地球の衛星から姿を捉えられ、NASAに異星人の存在を実証されたりすることはない。

さて、前置きはこの辺にして、今月面に隠れているジャンボットの宇宙船形態ジャンバードのブリッジでは。

「今までの調査で分かったことを整理するぞ」

諸星勇夜ことウルトラマンゼロ、高町光ことミラーナイト、今はAIデータ——意識がジャンバード本体に宿っているナオト・J・フライトことジャン。

ユーノにアルフのメンツだ。

他のメンツはどうしているかというと。

クロノたちは、各次元世界に出没している騎士の広域サーチ。

アリシアはプレシアと、レイジングハートとバルデイツシュの強化プランを練り。

そしてなのはとフェイトは、おおとりゲンことウルトラマンレオからのご指南による修行に励んでいる最中、である。

ジャンバードのブリッジは、王制国家エスメラルダの家紋が付いた自動扉部分を除いてほぼ360度のスクリーンで月の地表を映し、中央には円形に僅かに盛り上がった凸—エスメラルダ王家用の玉座を収納している。

玉座以外にも座席は存在し、玉座周辺に備えられ収納状態から展開された椅子に光（リヒト）とユーノとアルフが座り。場を仕切っている勇夜はと言うと正面に添えられ、写真などの捜査資料が貼り付けられた長方形の半透明スクリーンの横に突っ立っている。

「そう堅苦しくなんなくともいいんだぜ」

「すみません、何と言いましようか…」

「何かさ、前に見た刑事ドラマっぽい感じがあつてさ、つい身構えちまって」

『それほどまでに気負わなくていいぞ、たるみ過ぎない程度にリラックスするといい』

「はい（はいよ）」

未来的に洗練されているが、確かに刑事ドラマで出てきそうな捜査会議風景にも見える。

モニターに映った、魔導師襲撃事件の被疑者、ヴォルケンリッターたちの写真とかがそうだ。

「最初の報告は、僕からでよろしいでしょうか？」  
「いいぜ」

『主と私で、狐耳の少女のことを調査していたのですが、本局のデータに興味深い事柄を発見しました』

「あの女の子の正体が分ったんですか？」

「はい、まだ断定はできませんが、恐らく彼女は、《魔源種（まげんしゅ）》と呼ばれる生命体です」

「マゲン…シユ？」

狐耳の少女と同じく、人間の体に動物の耳と尻尾を生やしている特徴を持つアルフが、聞きなれない単語に対し、キョトンとして頭を横にかしげた。

なんとなく頭の横に？マークが現れてそうな雰囲気である。

「突然変異で、リンカーコアと膨大な魔力を宿した動物たちの総称ですよ」

少し前にも話したが、狐耳の少女——久遠の正体は、突然変異で莫大な魔力を有するリンカーコアを抱え、その魔力が筋肉、臓器、脳の細胞を活性化、人並みの知性と、肉食動物を上回る戦闘能力を得た生物へと進化した生けるもの。

あらゆる種族がなりえる可能性を持っているが、天文学的数字ほどではないにしても、変異する確率は低い。

そのためもあり、管理世界でも魔源種のことを知っている人間は生物学者など一部の人種に限られている。

「へ〜そんなやつらがいたのね」

「何を言っているのですか、魔源種はあなた達使い魔のモデルとなった方々なのですよ」

「ええーっ！っ！」

光の思わぬ不意打ちな一言にアルフは耳と尻尾をびよんと跳ねながら絶叫、勇夜たち他の者も驚きを隠せない様子だ。

そう、アルフたち動物に魔力で編み上げた魂を定着させて誕生し、魔導師をサポートする使い魔たちは、魔源種たちの生態を元にして生み出された。

魔源種の中には、変身魔法に近い妖術で、人間に変身できる者も存在が確認されており、それを生かせないかと研究を重ねた結果、この世に使い魔という概念がこの世に現界されたのだ。

「どうりで、アルフたちと似ている点が多いわけですね」

モデルとなれば、動物の耳と尻尾を生やしている点が共通しているのも納得。

特に意識せずとも、心が勝手に感心したくなる一同である。

光からの少女に関する情報はこれのみ、というわけではない。

彼がもう一つ提示したのは、海鳴に伝わるというある妖怪狐の伝承であった。

今から約250年前、人間に化けることができたその妖狐は、薬売りをしていた青年と恋に落ちた。

同時期に、浅間山の大噴火を端に発し、現在では『天明の大飢饉』と名付けられた全国規模の飢饉が起き、海鳴でも火山灰による冷害、さらに伝染病が蔓延、ただ一人薬売りとしての職柄なのか、感染が免れた青年は、一連の災害で狂気に陥った村人たちによって天災を起こす神仏を諫める生贄に祀り上げられ、殺されてしまう。

村人たちの理不尽に対し、妖狐は我を忘れて怒り狂い、海鳴の山々を焦土の砂地に変貌させるまで暴れまわり、最終的に人間たちによって昇天したという。

妖狐の怒りで、我を取り戻し、自らの愚かしさを恥じた人々は、彼女を供養するための塚を作ったのだという、これは青年が妖狐の呼び名として使っていた名称から取って『久遠塚（くおんづか）』とつかられ、現在でも八束神社の裏の森に残っているとのことだ。

「興味本位で調べてみたのですが、明治、今からおよそ150年くらい前まで、海鳴は木々の育たない荒地だったそうなんです、それに件の



伝承に出てくる人間の姿となった妖狐の格好が、あの少女と同じ巫女姿と同じなのですよ」

『伝承と同じ容姿をした魔源種……か……』

勇夜も後味の悪い話して、口の中が苦味一杯となり、ちよつと天然入ったとある先輩ウルトラマンから聞いた『怪獣使いと少年』の話を思い出してしまった。その話は、詳しく話せば長くなり、聞いた者を鬱状態に陥らせてしまうので割愛するが、久遠塚の伝承と同じく、偏見によって思考を停止させ、狂気の底へと落ちてしまった地球人と異星人との間で引き起こされた悲劇だ。

魔源種の存在と、魔法文化ない地球生まれでありながらリンカーコアを宿したなのはの例をとれば、あの伝承がほぼ実話であると見ていい。

ともかくだ、あの狐耳の巫女少女が地球に生息する魔源種であることは判明された。

『本題に移ろう、次は魔力蒐集を続ける守護騎士たちだ』

ここ数日も、各次元世界で特に魔力を宿した生物を中心に、リンカーコアが極端に縮小された事例が確認されていた。

ただ、数日前より異なる点がある。

今まで、地球から個人が転移魔法、すなわちテレポートで移動できる範囲内ではか現れなかった騎士たちが、クラナガンで出現し勇夜と戦闘を行った日を境に、より広範囲に出没するようになったこと。

同時に、無人の次元世界を中心に、ゼロたちウルトラマンの世界に生息する怪獣たちが出現したことだ。

出現した怪獣たちは、アーストロン、グビラ、ゴルザ、レッドキング、ガマクジラ、アストロモンス、キングザウルス三世などだ。

外来種による固有種の駆逐が日本で問題になっているように、怪獣たちによって、その星の生態系が破壊されるのを防ぐため、勇夜——ゼロたちが対応せざるを得なかった。

「なんであいつらの転移範囲が急に広がったんだろうね？ やっぱり怪獣を呼び出してる奴らが成り済ましてるのかい？」

『その線が妥当だろう、目的は恐らく……我々への捜査妨害とかく乱、

よほど騎士たちの所在を知らせたくはないのだろうか』

何らかの目的をもって、蒐集の手助けのために、おおとりゲンとやり合った仮面の戦士含めた第三勢力が守護騎士に化け、複数の世界に現れたるを見せしめることで、本物か偽か、こちらを混乱させるのが魂胆。

現に管理局は対応に追われ、怪獣の出現、勇夜たちの正体が仮にバレテしまった場合の対策を予め練った上での、本局への増員要請も見送られてしまった。

おまけに、怪獣の出現は決まって、守護騎士が現れたのと同時刻に起きる。

脅威の度合いでは、災害を誘発する怪獣の方が上なので、対抗できるウルトラマンゼロら巨人の戦士たちは彼らの対処を優先せざるをえない。

状況によっては、止むを得ず倒すか、リンクを持つゼロの次元航行能力で、生息している惑星に送り返したりしている内に、逃げられてしまう流れを繰り返されていた。

姿をはつきりと見せず、怪獣、異星人を使役して管理局を翻弄する第三勢力、だが勇夜たちも負けてはいない。

「どっち道、グレンと守護騎士の奴らが、海鳴に居るのは違いないけどな」

海鳴に捜査本部を置いて以来、勇夜、光、ナオトの三人は、ゲンが騎士の一人と接触したときに見た、市内ではあちこちに存在する『関東スーパードレス』レジ袋から、書の主は海鳴市と隣接する市町村に潜伏しているとの踏み、市内に複数店舗が置かれているスーパードレス周辺を重点的に聞き込み調査をしていた。

騎士達が日本人を通り越して地球人離れしていることもあり、街中で彼らを見かけた市民は結構な数で存在していた。

まだどの地域かはまだ分からずじまいだが、市内の端、市町村の境に近づくほど、彼らの目撃談が少ないことと、さらに——モニターボードに表示されたのは、少々不気味なデザインで子ども受けしなさそうなウサギの人形と、同形の顔人形が二つ付いた鉄槌の少女のベ

レー帽のズーム写真の二つ。

人形の商品名は『のろいうさぎ』。

関東でこれが販売されているのは、トイオラス海鳴支店のみ、購入されたのは今年でたった一回だけときた。

聞きこみ等の情報収集の結果、主が海鳴市民である線は、この数日で確たるものとなっていた。

この『うろいうさぎ』によって明らかになったのはほかにもある。勇夜はモニターボードをタッチすると、一年の暦が横並びに現れる。

彼は7月に人差し指を差し。

「トオザラスで『のろいうさぎ』が買われたのが7月、蒐集が起き始めたのが10月に入ってからだから…」

「闇の書の最初の覚醒の時期は、それよりも以前になりますね、最低でも購入記録より1・2カ月は前でしよう」

「それならそれで、どうして10月から、今まで渋っていた蒐集を急に行い始めたのでしょうか？」

闇の書が起動し、騎士たちの蒐集活動が確認されるようになってから、数か月の空白期間が存在している、という事実と。

「お人形さんを買ってもらってる辺り……昔の『あたしら』より恵まれた生活をおくってそうだし……」

まだ推測の段階だが、情報を集めれば集めるほど、闇の書に選ばれた海鳴市民でもある日本人または日本在住の地球人かもしれない主の人間像が、善良のベクトルへと傾いていく、という疑問点だった。

アルフの言う通り、一昔前の使い魔は魔導師のサポーターでもあり、奴隷的な立場であった。

主人である魔導師と交わされた契約を果たせば、主からの魔力供給は絶たれ、使い魔は消滅という形で死ぬ、それがかつての使い魔たちに科せられた宿命。

この余りに非人道的なシステムによって、現在使い魔を生み出すには、専用の資格を取得する為の試験をパスし、契約期間が、主人である魔導師が死亡するまでである条件を了承しなければ生成できない

ように法律で定められている。

当然フェイトも、P・T・事件の裁判を受けている間、囑託魔導師の試験と同時に受け、パスして資格を手得済み。

闇の書と、その主の守り手であるヴォルケンリッターたちも、現在の主以前は、過去の使い魔たち、下手すると彼らよりも非道な扱いを受けていたはずだ。

管理局の記録だけでも、騎士たちは蒐集行為を強要され、奴隷同然の待遇で酷使されていたとあった。

ところが……だ。

調査とプロファイルを重ねていけばいくほどに、彼らが人並みの生活を謳歌しているという仮説が急激なスピードで浮かび上がってくる。

クロノの話しによれば、過去の守護騎士たちは人の姿をしてはいるが、感情を持たない、ただ主の命令を忠実に実行に移すだけのマシンであったという。

それがどうだ？

實際顔を合わせた勇夜たちから見て彼らは、使い魔に似た狼男を除けば、外見に反せず人間そのもので、全員がそれぞれ異なる人間性に性格と、明らかに感情を持ち合せている生命体であった。

守護騎士、異世界から来た巨人であるグレンファイヤー。日本では妖怪の類な狐の魔力種。

人の理から外れた者たちと共同生活を送っている点と、空白期間から見ても、主は人間や生き物から魔力を抜き取る行為を良しとせず、むしろ家族同然に暮らすことが望みで、騎士たちも主の方針に賛同していたとみて相違無い。

ならばなぜだ？

ユーノもその疑問を口にしたのだが……どうして彼らは一度は手放したはずの「武器」を手に取り、戦いに身を置くようになったのか？

それが最も腑に落ちない。

騎士たちに協力していた魔源種の少女はともかく、グレンは彼らを

守る意志はあったが、蒐集そのものに全面的に同意していたわけではなさそうだ。

一体彼らに何が起きたのか？

9月の……それも下旬ごろに、騎士たちを蒐集に駆り立てる決定的な何かが発生したと思われるが、その肝心な『何か』は天高くそびえる巨大な壁によって阻まれてしまっている。

一言で言うなら手詰まり。

捜査はここに来て行き詰まりの現況となっていた。

せめて、主の手掛かりがあれば良いのだが、騎士たちの目撃例はあっても肝心の主の方はさっぱり。

どうも騎士たちは、所在が開かされない様に、主に「石ころ帽子」を被らせているようである。

情報と言う名の追い風は、ここに来てぱったりと止んでしまい。

勇夜たちは海上（ぎもん）のど真ん中で立ち往生を余儀なくされていた。

「ウルトラマンノアが勇夜に話してくれた内容も気になりますし……」

.....

さて、ここからはあの日の明晰夢内でのゼロとノアの会話を再生する。

「あんたが闇の書と戦っただって!？」

『そうだ、いつの時代かまでは覚えていないが、完全覚醒した闇の書と私は相まみえたことがある』

ノアがこの世界のロストロギアと戦闘を行ったと聞いた当初は驚いたが、実はありえない話ではない。

このウルトラマンは、背中に生やした突起——ノアイーゼスによって次元を自由に渡り行くことができる。

同じ世界と世界を転々とし、次元レベルでの災害を引き起こしかねない闇の書と、過去にご対面してもおかしくはない。

ノアの話では、ある次元世界の惑星に來た時には、その星は書が暴走したことで生まれた大都市を呑みこむまでの巨体を持った巨獣によって、粗方破壊しつくされていたという。

「無限再生能力…」

彼によると、闇の書は脅威的な復元再生能力を持ち、いくらダメーヂを与えても瞬く間に再生されてしまう。

全世界に存在するウルトラマンの中で、最強クラスの力を有する彼でも、書のタフさに手を焼かれたらしい。

しかも、多人数の魔導師と生物から魔力をむしり取った闇の書の暴走体は、巨大な火薬庫と化し、再生が追いつかないまでの大火力攻撃で破壊しようとするれば、その世界ごと巻き添えにして消し去る結末に至ってしまうと來た。

意を決したノアは、彼の体内の全エネルギーと引き換えに、対象を次元と次元の狭間の空間に閉じ込めてしまう最後の禁断の技。

『ノア・ザ・ファイナル』

によって、闇の書を時空の牢へと封印したのである。

「それでナオたちの“光”で復活するまで、鏡の星の神殿で寝込んでたってわけか…」

「その表現が適切かは測りかねるが、大方君の言う通りだ」

力を使い果たしたノアは、偶然にもかつて自分が救い、己の力の結晶であるバラージの盾を与えた。ランとナオ兄弟、エメラナ、ミラーナイトたちの宇宙の二次元世界に到着し、鏡の惑星の地下神殿で休息の眠りに着いたのであった。

時空管理局のデータベースによれば、闇の書はおよそ10年周期に現れるとあるが、数十年間書が主を依り代に出現しなかった期間があり、その不自然な開きこそ、ノアによって封印されていた時間であった。ちなみに、バラージの盾の欠片をラン・ナオ兄弟の一族が持っていたのは、彼らのご先祖が、ノア及びネクサスと一心団体となった人間、適格者デユナミストであったことに他ならない。

「ゼロ、闇の書についての報はもう一つある」

「何だよ」

「私も詳しくは知らないが、『闇の書』という名はあの魔導書の本来の名では無い、積み重ねられた悲劇によって付けられてしまった『蔑称』だ」

「そいつは……本当、なのか？」

どうにも、あの魔導書自体、本来の使い道から外れてしまった代物で、システムの根幹が故障したまま、転生を繰り返しているとのことだ。

さしずめ『闇の書』は、その転生による災害の煽りをくらった人々の憎悪の結晶というわけだ。

『私がかの書物について知っているのはこれだけだ、些か拍子抜けしたかもしれないが……』

「そんなことないぜ、手かがりとしては上等だよ」

少しでも魔導書の情報が欲しかった身としては、この上無い吉報だ。

「ありがとう……ノア」

「そうか、では頼むぞ……ウルトラマンゼロ——」

ウルトラマンノアは、神々しさは感じられるが、同時に淡泊でもあった口調に、ゼロを後押しするかのように感情の色を込め、彼にエールを送るのであった。

.....

銀色の流星によって、闇の書の特性の一端は判明したが、それでもまだ腑に落ちない点が残っている。

ノアのような超常的で神秘の力を持つ存在でさえも、次元災害レベルの災厄を引き起こす闇の書の完全覚醒を、なぜあの騎士たちは行おうとしているのか？………生憎、本局のデータベースには、書が過去に引き起こした惨劇の記録がメインで、書そのものについての記述は心許ない。

『闇の書』という名前が、俗称の類であることさえ、ウルトラマンノ

アを通じて知り得た事柄だ。

「どこかに、ロストログアについての記述が記された史料が保管された施設は無いのですか？」

ふと、光が口にした過去の記録の保管庫の存在を追及する質問に対して――

「光さん、その……実はですね……」

「一応……あるにはあるんだけどさ……色々問題があるって言うか……問題塗れとも言うべきか」

「……………」

――どうにも歯切れを悪くさせて、大っぴらに言いづらい自身の心情をちらつかせながら答える勇夜とユーノ。

二人の思わせぶりな態度に、頭を傾げたくなる光とジャンバード。今は宇宙船なジャンバードに、傾げる頭は無いと言っではいけない。

「管理局本局には、無限書庫っていう、管理世界のあらゆる書物記録を保管した書庫があるのですが……」

そうして、ユーノからその無限書庫の大まかな概要の説明を受けた光とジャンバードはと言うと――

「地球上の全ての博物館員を表彰したくなりましたよ……」

『それは奇遇だなりヒト……私も同じ心情だ……』

――と、どんよりテンションを低くして項垂れていた。

主に……その施設の管理体制に対して……だ。詳細は今度の機会に実態とともに教えるのでお待ちしてもらいたい。

いずれにしろ、闇の書と呼ばれるようになってしまった魔導書そのものについて調べるのは、その無限書庫がうってつけなのも実情なので。

「本局さんに閲覧申請を出すから、魔窟（しよこ）の探検……頼めるか？」

ジャン、ユーノ」

「はい、むしろ望むところですよ」

『私も異論は無い、たとえ書庫が魔窟にも等しい混沌とした管理下であったとしても、贅沢は言ってられない』



と二人は覚悟を持って無限書庫に挑むことを表明した。

大げさと言われるかもしれないが、実物を目にすれば、彼らの書庫に対する表現やリアクションが、決して誇張されたものではないことを思い知らされるであろう。

「俺はレイジングハートとバルディッシュのカートリッジパーツを取りに行ってくるから、先に帰っててくれ」

「はい」

「あいよ、でもあんまり遅いと、うちのご主人様がへそをまげそうだから、早く帰ってきてくれよ」

「わかってるよ……晩飯までには戻るさ」

アルフの催促に、照れくさい心境などの時によくやる癖、鼻をこする動作を見せながら答える勇夜。

というわけで、一部の構成員たちではあるが、ジャンバード内での捜査経過報告会はお開きとなった。

ある意味、彼らはかなりの速さで真実へと近づいているが、まだまだ地上の光が届く範囲までしか掘り進めていない段階だ。

そしてその先の深層部にあるのは、ひたすら暗黒に塗り染められた、悲しき性（さが）と宿命に狂わされた真実であった。

つづく

諸星勇夜は今、ミットチルダの地方都市に建てられたとある酒屋にいた。

カウンター席の向こうに立てられた棚には、それなりの価値はありそうな酒たちが客に飲まれる瞬間を待ちわびて並んではいるが、過度に飾りすぎず、装飾を付け過ぎず、小奇麗過ぎず、広過ぎず狭過ぎず、知る人ぞ知る常連客達によって成り立っていいような店である。

彼はミットチルダでの戸籍年齢は15なので、当然並べられた酒は一口も飲めない。この星の生家であるナカジマ家で家内のルールを守りさえすれば飲酒できるが、ここは家の外なのでご法度だ。

なので、携帯端末を閲覧して何かをお待ちしている勇夜が飲んでいる炭酸の液体は、ジンジャエールであったりする。

この端末は、ミットチルダでのiPadとも言えるタブレット型コンピュータで、普段は円と割り箸型の長方形が組み合わさったステイック状だが、円形のボタンを押すことで15度展開、タッチ入力可能なモニターが表示される機能となっているので、利便性と携帯性は現状の地球製タブレットPCより高い。

今勇夜がこの携帯PCで見ているのは、証明写真付きのある特定の職種に付いた人物たちのリストだ。

「待たせたな坊主」

店の奥から、野太い男の声が響き、その声の主であるこの酒屋『Belief』のマスター、ベイカー・オールデイスがお見えになる。

「注文のベータカートツジはこいつの中だ、受け取りな」

「あんがとなベイカーのおっちゃん、代金はいつものこいつで」

「あいよ」

その声に違わず、2m近くある硬骨巨漢で、ハリウッド俳優のステイブ・セガール似の顔つきをしたベイカーが勇夜に手渡したUSBメモリに似た記憶装置は、OCSメモリ——Object Compression Storage memory。

データではなく、物体を収納できるメモリである。

彼が注文をしていたベータカートリッジのパーツが入ったメモリ受け取ると同時に勇夜が差し出したのはキャッシュカード。

そのカードをベイカーは受け取り、レジに供えられた端子口に差し込むと、引き落としが完了したと知らせる電子音が鳴る。

ミッドチルダでは、今の手順でキャッシュによる直接代金の引き落としができるようになっていた。

ちなみに、嘱託魔導師で、名実どちらもある勇夜の貯金は、実はそれなりに多かったりする。地球での15歳の少年少女たちの目が飛び出すまでの金額だが、あえて具体的な数字は公表せず、ご想像にお任せする。

「それでだな、お前さんのご依頼だった件だがな」

以前も書いた通り、ベイカーは情報屋を、酒屋、デバイスメンテと兼任している。勇夜以外の者も彼の情報網を頼りにしている管理世界の警察官、管理局の捜査官は多い。

「坊主の言う、遺伝子工学にも精通してるデバイスマイスターと言やあ、やっぱマンジョウメ博士しかおらんかった」

ベイカーは自身のタブレットPCを起動させて、ある人物の写真を見せた。

日本なら昭和初め世代から生きていることが明白な、齢の重ね振り昭和風の柔らかな顔立ちした中年日系の白衣を着た男。

「マンジョウメ…マサヨシ」

勇夜はその人物の名を、声に出して読んだ。

さつきまで彼が調べていたのは、守護騎士たちに何らかの思惑で手を貸し、怪獣たちを、各世界に送り込ませていると思われる第三勢力の所在。

覚えているだろうか？

半年前、プレシア・テスタロッサが、愛娘を蘇らせるべく、ジュエルシードで失われし都『アルハザード』へ行くべく、次元震を引き起こしたP・T・事件。

その事件で彼女が開発、使用していた特殊補助デバイス。

『サポーターティンゲデバイス』

通常のデバイスの倍以上の格納領域で数百体ものの魔力で操る兵器、傀儡兵を収納、召喚、操作でき、制御パイプの役目も果たすことで大量の魔力外部供給を可能にし、プレシアを一時的にSSクラスへと押し上げたマシン。

本名も顔も明かさないうメール越しのやりとりではあったが、彼女はそれらの技術を、自分が推し進めていたF計画のデータの代価として、科学者である何者かから齎された。時期的にはフェイトが生まれる数年前である。

ただ、プレシアの証言から、その科学者は機械・デバイス工学に精通し、遺伝子工学の知識も兼ね備えた技術者、であると推測できる。それを立証できる証拠もあった。

先日、ミットチルダ廃棄都市区画で勇夜がレイビーク星人、ツルク星人と交戦し打ち勝った際、サラマンドラとクロスサバガの一件と同様に、青く光る粒子となって、空の彼方に消滅しそうになり、咄嗟に勇夜は魔法による光の帯、セーピングビュートでレイビークの生首と、ツルクの半身を消される前に捕え、リンクに収納。

それをナオトに解析させてもらった。

なのはたちお子さんサイドには刺激が強過ぎるので、骸を持ってきたことは大人組にしか知らせず、解析も月面のジャンバード内で行った。

お陰で判明したことがある……星人と戦った時に感じた違和感の正体、命——むしろ《心》と言った方がいい。

そいつらから発される「熱」ってやつが感じられなかった理由。

端的に言ってしまうえば、レイビークとツルクの脳は意図的に収縮され、ゾンビのように自律思考も自我も持ち合わせていないこと。

さらに：異星人の細胞形質は、フェイトと同じクローン細胞。つまりこちらの世界に現れた怪獣、異星人たちは、『Project F. A. T. E』で生み出された人造生命体と言うことだ。

正直またそいつらとの戦いが待っているのは、気が引ける。

人間では無いとは言え、フェイトや、ギンガとスバルら妹たちと同じ境遇の生命体だからだ。

でも止まる気も無い、それこそ……やつらを送り込んできた連中の  
思う壺、こつちのメンタルも攻める気で、あいつらは怪獣を使役して  
きてる。

連中の最終目的が闇の書の完成なら、騎士のやつらがやり遂げるま  
で、今みたいなことは続く。それで犠牲者が出て、人造生命体である  
ことが世に知れてしまえば、世間のクローンへの悪感情は増すことだ  
ろう。前科持ちのフェイトに、これ以上重荷を背負わせたくない。  
どっち道、フェイトの行く道は常人より悪路が多い蛇の道だが、それ  
を少なめにするにとぐらいはできる。

またあの時みたいに、泣かせちまうかもしれないが、それも覚悟の  
上だ。

それはそれとして、現状騎士たちに腹に一物抱えて手を貸している  
と思われる人物に、一番可能性があるマンジョウメ博士。

管理局で、デバイスの製造管理を行える資格、デバイスマイスター  
を持つ技術者の中でも古参で名高き科学者。

技術力の高さも言わずもなごな、より汎用性、量産性を追求したデ  
バイスを開発したことで、年中局を悩ます人員不足の問題をある程度  
和らげた一役者。

今でも人員不足のたんこぶがあることに変わりが、それでも博  
士のの世代と比べればましなものだ。あの頃は社会問題にまで発展  
するほど、任務で殉職するより、多忙による過労で現場組もデスク組  
も、天に召される局員が山ほどいたのだ。

この人の功績が無ければきつと、お子さんが人員として駆り出され  
る数も、それこそ一部隊をわんさか作れるまでに膨れ上がっていたは  
ずだ。

それと………だな。

「グレアム提督と同期なんだよな？この人」

「まあな、公私混同含めた親友同士、なそうだぞ、だがそいつがどうし  
た？」

「いや…聞いてみただけさ」

今ベイカーが答えてくれたように、かの地球生まれで、クロノの師

で、あいつの親父さんの上司でもあったグレアム提督と、同僚以上の間柄：だという。

途端、勇夜の胸中に奇妙なしこりが表出してきた。

まただ……この感じ……輪郭が沈んだまま浮かんで来ない違和感。

グレアム提督も、マンジヨウメ博士も経歴を見る限り、真つ黒な噂は一切見えないし、耳にもしない、埃の一片すら湧かずに見えてこない。

それはそれで良いと思う。

力、特に権力は中毒性が高く、人を今の位置を維持させるだけの機械に堕とさせてしまうが、組織の上に立つ人間がみんな埃まみれなのは、それはそれで味気ないからだ。

何だけど……どうも初めて面と向かって提督に会った時、詳細の掴めない違和感に見舞われた。

どうと言われても、どうしてもそれがはっきりと表れてこない。

自分から踏み込もうとしても、霧がかかり、却って何も見えなくなる。

分かることと言えば、この違和感を忘れずにとっておいた方が賢明……だつてことぐらいだ。

それより：騎士の目的、グレンとの関係、書の主の正体とこの違和感よりもはつきりしていることがある。

プレシアの使っていたあのサポーターイングデバイス、色や形状で違いが多いが見間違いようが無い。

あれは、何度も一緒に戦ったことがある自分と同じ「0」を意味する名前を持った怪獣使い——レイオニクスの地球人が持ってた相棒の怪獣たちを召喚する「アイテム」に瓜二つであった。

それに怪獣や異星人を、簡単に捨て駒に使い捨てられるねじ曲がつた根性。

極めつけに：「あいつ」を悪魔にしたてやがった元凶。

そりゃあいつも、昔の自分と同じ、取り返しのつかないことをした。

故郷から追放されても、文句は言えない身だった。

遅かれ早かれ、悪魔になつちまう運命だったのかもしれない。

それでも、崖つぶちの瀬戸際に立って必死にもがいてたあいつを、最後の一押しで真つ暗闇の谷底に落としまつたのは……………レイ――

「坊主！」

「え？」

「えらく強張った顔をしてたが、何を考えてたんだ？」

何をと言われても、その考えてたことが自分の正体――ウルトラマンであるに関わることだったので、言いようが無い。

いけねえ……………この程度で何やってんだろ俺、不機嫌モードの鉄頭じゃあるまいし。

「言えないならそれもいいさ、だがな、一つだけ忠告しとくぞ」

いつもは豪放、豪快を絵に描いたというか、服を着てあるいているというか、ともかく『陽』の一字がよく似合うベイカーが、偉く神妙な面持ちで、勇夜を見据える。

「自分の中にある黒いもんと付き合い方を間違えたら、一環の終わりだ、俺はそうなつちまつて身を破滅させたやつらを何度も見てきた、いいか、お前さんも気をつけろよ、なんせ『人間は誰でも猛獣であり猛獣使い』ともいうくらいだからな」

思えば、人さまからの助言が、こんなにもありがたいがだかつたことを、今ここで実感できたなら、どれだけよかつたことだろう。

後に自分はそれを、まだまだ青い己の性分とともに、この身で知ることになる。

数時間後。

捜査本部兼住まいなマンションでの夕食の後、ユーノ、クロノ、エイミィ、ナオトの4人は、多次元宇宙マルチバースに浮かぶ管理局本局の大型コロニー内の廊下を歩いてた。

ある人物たちに、闇の書の調査協力をお願いする為だ。

「確か、クロノの師であられる方々だそうだな」

「そう、グレアム提督の使い魔で双子さんなんだ」

かつては魔導師の体の良い使いっ走りでしかなかった使い魔も、彼らの人権を保障する法が作られ整備されたことで、その気になれば高い地位に着くことも不可能ではなかった。

「正直、二人の指導下にいた頃は余り思い出したくはないんだ：地球の言葉で、『黒歴史』にしたいくらいさ」

「ど……どんな人たちなの？その双子って」

「まあ会ってからのお楽しみね」

クロノをあるアニメ作品から派生した『忘れたい過去』の意味合いで使われる黒歴史を口にさせたまだ見ぬクロノの師に対し、緊張感が高まるユーノをいつもの調子でエイミイははぐらかした。

なお完全に余談だが、ゲンことウルトラマンレオによる修行が始まってから、フェイトとなのはの食事は一気が増えた。

その日の夜も、主食のご飯だけでも三杯、これは勇夜とアルフと同じ食事の分量である。

ゲンのスパルタ指導で毎日へとへとになり、それに比例して食欲が増進されてしまうのが原因だった。

ただ、フェイトもなのはも年頃の女の子。

食事中は空腹で無我夢中なのだが、食べ終わると我に戻って。

「こんなに食べたんじゃないや体重が増えてお嫁に行けない……」

とまあ、こんな感じで落ち込むイベントが連日繰り返されていた。フェイトたちには悪いが、どの道彼女らは体重が増える運命が待っている。

筋肉は脂肪より重いことをご存じの方もおられるだろう。

そしてあどけない少女たちの体は、ゲンの修行で否応にも鍛えられているときいている。

自身の戦闘能力を上げれば、乙女の悩みが深刻になる、少女で戦士である者の性であった。

恐らく何年後の未来のおふた方は、この頃の自分の一面を黒歴史に



したがるだろう。

例の二人が待っているという待合室の前に着き、自動ドアがスライドして開いた。

「リーゼ、久しぶりだ、クロノ——」

「クロスケええ！」

えーと……状況をまず…整理しよう。

その待合室でクロノたちを待っていたと思われるグレーの髪と、髪色と同じ色合いの猫耳と猫の尻尾を生やし、片やショート、片やロングと髪型以外は全く同じ容姿をした使い魔の女性たちのショートカットの方が、いきなりクロノに抱きついてきた、といった模様だ。

あいさつ代わりにハグ、と言いたいが、クロノの生来の堅物さと、思いつきり彼の顔を自分の胸に押しつけグリグリしている女性のはっちゃけ具合が、挨拶としての抱擁と言ったレベルを逸脱してしまっている。

「お久しぶりだねくくくクロスケ」

「ロツテ、その名前で呼ぶのはもう……」

「つれないじゃないか、マッククロノ♪」

「だ、だから……」

「もうくくクロスケってば久しぶりに会った師匠に冷たいじゃんかよ♪」

「……………」

現に、『いつものこと』とばかりケロっとしているエイミィと、ロングヘアの方の猫耳女性はともかくとして、ユーノとナオトは、周りの目を気にしない過剰なスキンシップというクロノの受難を前にして、目を点にして立ちつくしていた。

「アリアー！これを何とかしてくれ！」

「ロツテの言う通り久々なんだし、好きにさせとけばいいじゃない、まあ何だ、実はクロノもまんざらでもないだろう？」

「そ、そんな訳が——」

「ニヤは♪」

ロングヘア——アリアと呼ばれた方に助けをこうクロノだったが、あつさり跳ねのけられ、とうとう素の猫声をあげたショートカット——ロツテにそのまま床へと押し倒されてしまった。

猫の使い魔である当人にとってはじゃれているだけのつもりなのだが、もはや逆セクハラの領域、これが夜でベッドなら、確実に夜這いと見なされる。

訴えられて裁判沙汰になっても文句は言えまい。

セクハラというのは、受けた本人が生理的嫌悪を感じてしまえば、男性でもオカマでも適応されてしまうからだ。

「エイミィ、まさかとは思うが……この方々が」

「そう、クロノ君のお師匠さんでグレアム提督の双子の使い魔、リーゼアリアとリーゼロツテよ」

勇夜——ウルトラマンゼロからは石頭より堅い意味合いで『鉄頭』と付けられるほど堅物な（それを言うならナオト——ジャンもそうではある）クロノの師と聞いていたので、多少身構えていた為に、実際とのギャップにまだ呆然気味な心境から抜け出せない結界魔導師と鋼鉄の武人のお二人である。

「アリア、おひさし」

「こちらもお久しエイミィ」

「ロツテの方も相変わらずだね」

「まあ我が双子ながら、計り知れないところはあるね」

クロノの悲鳴とロツテの猫声と、唇が何か柔らかいところに当たる音が何度も響いている環境下で、しれっと挨拶を雑談を交わすエイミィとアリアのお二人さん。どうやら一連のハプニングは、彼らにとっては恒例行事ものらしい。

「うふふふちそうさまおごやふ」

何がちそうさま……なのかは……床で顔に無数の『聖痕』と呼び、『キス痕』と読むものを付けて倒れているクロノを見れば、大体把握できるだろう。

「リーゼロツテ、お久し」

「ああ♪お久しだなエイミィ」

この双子は髪型以外にも違いがあり、冷静で品行方正、落ち着きがあるのはアリア、元気はつらつでよく言えばやんちゃな小悪魔な方がロツテである。

これでも管理局では、トップクラスの实力者な猛者たちである。へ？でもある師弟からは苦杯を舐めさせられてるじゃないかって？

あ、あれは相手と状況が悪かっただけで——つてゴホン！  
はて？何のことでしよう？

小生にはさあくくつぱり解りくません。

「ところで、そっちの眼鏡君と美味しそうなネズミツ子は……どなた？」

「(ひい……)」

にこやかに語りかけるロツテに対し、ユーノの背筋に寒気が走った。

目が明らかに、地球では世界一有名な猫とネズミのコンビである、ジェリーを狙うトムと同じ目つきだったからだ。

どうも彼女は、小動物属性を有した性別がはっきりとしてないあどけないお子さんが大好物なようである。

下手をすると、ユーノが次の犠牲者になりかねなかった。

「(ユーノ、もし危険を感じた時は、僕を盾にしても構わないぞ)」

「(はい……ありがとうございますナオトさん)」

ナオトのフォローが、天使が現れたかのように眩く感じてしまう某ネズミっ子なのであった。

そしてようやく事後の全身麻痺から平常状態に回復をしてはいるが、まだ顔がキスだらけな、師からのセクハラ行為第一被害者のクロノは。

「何で……あんなのが僕の『師匠』なんだ……」

もう何回目ともしれない愚痴を、師匠らしくない師匠な当人たちに聞こえないよう細心の注意を払いながら、小言ながらに呟き吐くのであった。

特に自分の友の師匠と会い、師弟のやり取りと勇姿を目にしてからは、それが顕著になりつつある。

年齢と経験と修羅場と戦火をくぐり抜けてきたことが、一目で分かる眼光と、鋭く厳つい容貌、戦いや修練の場ではひたすら厳しく、甘えを許さないが、普段はきさくに接することができる強さと優しさを兼ね備えた包容力。

これほど師匠と呼ぶに相応しい、貫禄と父性を宿した頼もしい人物はいないだろう。

彼女たちに文句は無いが、少しは弟子を持つ身であることを自覚してほしかった。

いや……と言うより、自分はこの師弟であるウルトラマンたちの関係に、憧憬を抱いているのかも……しれない。

自分にとつての憧れの象徴だった父と、もつとあんな風に触れ合いたかった。

指針であった父の背中を、もつとずっと追いかけていきたかった。何より、父さんと……母さんと……そして自分とで、家族として一緒に暮らせる日々をもつと過ごしかった……もつと欲しかった……もつとそんな風に生きていたかった。

あの本が、父と関わってしまったばかりに、そもそもあの呪われた書が存在したばかりに、あんなもの………あんなものが………あんなものが僕たちの世界に在ったがために………全部………何もかも——

いけない……何取り乱しているのだ自分は？

どうも勇夜の報告書にあった。

『闇の書の騎士たちと、グレンファイヤー、狐の魔源種の少女は、書の主と『擬似家族な関係』にあると思われる』

の一文を読んでから、調子にどこか狂いが生じている。

こんなことではいけない、心の大半を私情で埋め尽くしてことに当たっては、何事も上手くいくはずが無いのだ。

自分が組織人であることを忘れてはならない。

と・も・か・くだ………ここに来た用件——無限書庫での闇の書

の資料収集の件を、話せる場になるよう軌道修正しなければならぬ。

まずクロノは、自分の頬を叩いて、己の気持ちから場の空気を切り替えべく尽力するのであった。

月面に周囲の風景と擬態させて停泊しているスターコルベット、ジャンバード、その船内に設けられたメンテナンスルーム。

守護騎士たちとの戦闘での敗北が、使い手をサポートできなかった自身だと恥じ、自ら己の強化を願い出た、なのはとフェイトの相棒たるインテリジェントデバイスたち。

不屈の心——レイジングハート。

閃光の戦斧——バルディッシュ。

自分たちは使い手を心身ともに支え、共に空を翔け馳せるのが役目。

なのに、支えるどころか、むしろ騎士たちの豪なる一撃に呆気なく身を碎かれ、主を危機に陥れてしまった。

彼らにとって、これだけはどうしても譲れない失態で、戒めとするべき苦味。

そんな二人の願いに応えようと、技術者である母と、その血を受け継ぐ長女、フェイトにとっての掛け替えのない家族であるプレシアとアリシアは、勇夜が持って来た新型カートリッジシステムと強化形態をデバイスのお二方に組み込むべくプログラムでできた計器をせわしなく操作しながら切磋琢磨していた。

「ママ……」

「何？アリシア」

「まだ……大丈夫なんだよね？ ママのお身体……」

「心配しないで、アリシアが眠ってて、フェイトに酷いことをしてた時期よりは、歯止めが効いているから」

「うん……」

そんなアリシア、だけではない。

フエイトとアリシア、同じ遺伝子を宿す写し鏡の姉妹には、自分たちが携わっている闇の書の搜索以外に気がかりなことがある。

母の体を蝕んでいる病魔だ。  
重度の肺癌。

母として接する時間をとることができなかったばかりか、自分の命さえ奪ってしまい、蘇らそうと躍起になる余りに、身を削ってきた代償。

年々、医療技術が飛躍的に進歩してくれたお陰で他の臓器に転移した腫瘍は除去され、今母の体には、癌細胞の進行を抑えるマイクロメカが埋め込まれている。

一時退院ができて、海鳴でフエイトたちと一緒に生活できるのも、その埋め込み手術が成功したからだ。

でも、進行そのものを止められたわけではない。

今はまだ元気でも、何年かしたら、寝たきりの生活になるだろう。ひよつとしたら、もつと短い先に待つてることだって。

自分がそれに連なる発端の一つと自覚があるだけに、時々罪悪感を感じてしまう。

だけど……それを言うならば――

「母さん、フエイトには痛みばかりしか強くてこなかったし……今のあの子があるのは……リニスとアルフになのはちゃん、勇夜君たちがいてくれたからだわ、母さん一人でじゃ、本当にあの子を『人形』にして、消耗品として捨ててしまった結末に、確実に行きついたでしようしね」

――母もそうなのだ。

狂気の彼方から、正気の領域へと戻ってこれた分、あたしたちへの贖罪意識は、多分自分が感じてる罪悪感と、フエイトが感じてる、もつと早く母の闇を知って、向き合って、〃自分〃を見せながら、母に救いの手を差し伸べられなかった罪悪感よりも、強い。

また思い詰める余り、狂ってしまわないか心配な時もあるが。

「だから、無理して寿命を縮める気は無いわ、一緒にいられるように、母さん頑張っているんですもん」

半年前までは絶対見せなかつた笑顔を見る度に、安心もさせられてしまう。

大丈夫。

今の母なら、優しさによって自分で自分を壊すようなことにはならない。

私たちが、そうならないよう一人にさせてあげずに、支えてあげればいいのだ。

たとえ、生きられる時間が長くなくても、長いロスをした分以上に懸命に悔いの無いように生きていけば良い。

なら今は、自分たちができることをやるまでだ。

騎士さんたちの事情がどうあれ、フェイトと、親友のなのはちやんが、自分の魔法の才によつて、また戦うことになるかもしれない。

勇夜さんや光さんは、そうならない様励んでいるけど、もしものこともあるし、二人ともじーとしてる性分じゃないしね。

せめて、防犯対策は整わせておかないといけない。

その為に、この子たちの要望に応えてあげているのだ。

改めて意気込みながら、レイハとバルのカスタマイズを続けるアリスア。

「それにしても、勇夜さんが考案したというこのベータカートリッジ……」

「確かに名案だわね、システムが持っていた短所をほぼ全て解消させているなんて」

カートリッジシステムは、弾丸に込められた多量の魔力でドーピングさせることで、出力を上げる特性上、デリケートな扱いを要求される。

加えて、弾丸を装填、撃ちこんで魔力上昇、使われた弾の薬莖を排出させる機構で、デバイスの組成が複雑になり、使い方を誤れば、デバイスも使い手も自滅させかねない危険性がある。

ベータカートリッジは、それらのデメリットを抑制させながら、ミッド式デバイスでも使用可能にすることをコンセプトに、ウルトラマンとその相棒、彼のお得意先の職人によって開発された。

弾丸の代わりに、USBメモリ状のバッテリーにすることで、装填排出をシンプルにさせ、機構の複雑化を最小限に留めだ。

さらにそれまでのカートリッジよりも、多目の魔力を溜めこみ、何度も再利用でき、自身の魔力を消費することなく魔法行使を可能にするメリツトも着いた。

ただ、引き換えとして、弾丸でるがゆえに残弾を即座に把握できた以前のモデルと違い、バッテリー製なので、残量管理と魔力調整がよりシビアとなり、却って使い手が限られる結果となってしまった。

よって現状、ベータカートリッジを組み込んだデバイスの使い手は、勇夜と光の両名だけであった。

だからこそ、強化された愛機を扱えるよう、『技』だけでなく、『心』も『体』も磨き上げるべく、おおとりゲンが先生として、なのはとフェイト、二人を修練で鍛え上げる指導を請け負ったのである。

それこそ当初はゲンさんに睨まれただけで、手も足も出なかったと聞く。

毎日へとへとになって帰ってくるけど、スペックの上がった愛機を心おきなく使えるまでの階段は確実に一気飛びして進めている。

いつあの人たちと戦うことになって、パワーアップした二人のデバイスを使うことになるか、今はまだ未定だけど、備えあれば憂いなしだ。

来るならどんと来いだ。

簡単に魔力をくれてやるほど、妹たちの魔力は安くもないのだから。

そう考えながら、指を進めてデバイスの組み立てとプログラミング作業を母と一緒に進めるテストロッサ家のお姉さんなのであった。

「ねえ母さん、パワーアップしたこの子たちの名前どうする？」

プレシアの美貌な容貌が？顔となる。

「漫画とかで、武器にしろロボットにしろ、強化されたら名称もちよつと変わることがあるんだよ」

「そういうものなの？ お母さんそういうのに疎くて」

「そっか……どうするかな、あ、勇夜さんたちに考えてもらおうのもあり



かも」

「どうしてかしら？」

「こういうって『男の子』の方が得意なの」

確かに、この手のことは男子——ロマンチストの方が詳しい。  
つづく。

## STAGE 13 — 少女たちの試練

由緒正しき王室の生まれでありながら、故郷も、家族も、友も恋人も、何もかも失い続けた波乱と悪路溢れる半生を送ってきた男。

何度も地獄を経験し、孤独と挫折を味わい、ひたすら耐えに耐えながら、その苦難を何度も乗り越えてきた獅子の闘士。

おおとりゲン——ウルトラマンレオ。

戦うことの過酷さを誰よりも身にしみて存じている為、当然のことながら、彼の指導は愛弟子の父である師と並んで厳しく、心身ともども、徹底的に負荷を受けさせられるものだ。

知つての通りだが、今回彼のご指南を受けることになった者たちは。

ミラーナイトとは義兄弟な地球人の少女、高町なのは。

弟子——ウルトラマンゼロを想い人としているミットチルダの少女、フェイト・テスタロツサの、おふた方だ。

これは、修行初日に起きたことである。

「2人とも、昨日はよく眠れたか？」

「は、はい」

「ど……どうにかです」

体操着代わりにバリアジャケットを着た二人は、初日であることと、ゲンの厳しさを絵に描いた眼光で、既に緊張でガツチガツチであった。

「ところでフェイトちゃん、その髪型は弟子の受け売りか？」

「ふえ？、まあ……そんなところですよ」

あと実はフェイト、バリアジャケットこそいつもの黒衣だが、髪型はツインテールでもツーサイドでもなく、一纏めのポニーテールだったりする。理由はゲンの言った通り。お子さんによくある憧れのヒーローの真似ではあるが、彼女の場合はその対象への感情は憧れだけではなく、さらに言えば、勇夜に会うまで異性とまともに交流したことがない身であったので、最初に『こ』がつくことには未だに赤面ものな、照れ屋さんだったりする。

照れ屋なのは、『彼』もそうなので、ある意味似た者同士でお似合いなお二人である。

修業の場として選ばれたのは、海鳴市街を囲む裏山の一つ、桜台登山道の広場。フットサルができるほどの広さがあるので。なのはが前々から魔法の訓練に重宝されている場所だ。

修行の時間は、朝の5時から7時と、午後17時から19時までの二つに分類される。

ただし、実際の修行密度は、前述の時間の比では無い。

修行が行われている間、アルフがゲンの弟子の勇夜―ゼロからのご指南と、彼がフェイトに行い、彼女を疲労困憊で真っ白にさせるまで追いつめた転校前の短期集中鬼畜講座でも使用された外部との時間を切り離す特殊結界を張る機能を持つ、火災報知機によく似た形状をしている魔導器が使われている。

結界が張られると、外部での二時間経つ間、内部では6倍の12時間となり、なのはとフェイトはその間、ほぼ丸半日修練に明け暮れている。

レイジングハートとバルディッシュは改修中で手元に無いので、二人は本局の武装局員たちに使われている槍先が金色の音叉状に別れた一般デバイスを使い、さらにゲンの修行プランとして、二人にはあるハンデが掛けられていた。

魔導器が発する結界は、一種のリミッターで、なのはとフェイトの最大魔力量を減らし、魔導師としての彼女らを弱体化させる機能を持ち合せている。

結界自体が、かつてゼロがK76星での修行の際、強制的に身につけられた拘束具――テクターギアに近い役割を持っていた。

さて、そんな下準備を整えた上で、ゲンが最初に行ったのは。

「私と一戦交えてもらう、私に少しでも攻撃を与えられたら、君たちの勝ちだ」

今こうして本人が言った通り、今の彼女らの実力を直に見極めるために、実戦重視の模擬戦を切りだした。

ゲン――レオが、誰かを指導する時には、必ず最初に行っているこ

とだ。

まだ正式な警備隊員なりたてで、地球で防衛活動に従事してたメビウスにもだし、当然のことながら、愛弟子のゼロにも当てはまる。

最初は「こんなギア屁でもねえぜ！」と意気がって挑んだ不良真つ盛りな頃のゼロだったが、結局一発も当てられるままギブアップとなった。

こうすることでレオは教え子に、まず自分自身の未熟さを直視させようとしたのである。

そして今回のなのはとフェイトにも、同様の方針をまずとった。

「はい：」

了承はしたものの、内心二人には抵抗感が芽生えていた。

相手がウルトラマンで、こちらにはハンデがかけられているとは言え、ゲンは生身でこちらと戦うと言ったからだった。

自分たちは、バリアジャケットを展開し、デバイスも起動済みの完全武装。

対してゲンは、黄色と黒の2色で染められたスポーツウェアで、勇夜が何度も見せた、片腕を腰にもう片腕を真つすぐ前方に突き出す宇宙拳法の構えすらとらず、柳生新陰流で言うところの無形の位をとっている状態であった。

だが直ぐに、そんな抵抗感は捨てた方がいいと、まだあどけない二人は察した。

ただ直立しているだけなのに、ゲンからは隙が全く見えない。

どこから、どのタイミングで攻めても、攻撃を容易く躲され、カウンターを受けられると直感させられてしまうまでの佇まいであった。

「来い、遠慮はいらん」

二人は意を決した。

こんな後ろ向きな気持ちでどうする？

中途半端になるな、ゼロから言われたことだ。

何のために自分たちはこの場にいる？

何のために自分たちは戦闘服であるバリアジャケットを着て、武器たるデバイスを手に持っているのだ？

自分にとってのヒーローたちの、足を引っ張りたくないから、少しでも力になってあげたいからではないのか？

でなければ、自分たちの指導を請け負ってくれたゲン師匠に申し訳がたたない。

「行くよ、なのは」

「うん、フェイトちゃん」

二人は、10m先に立つ、静かに気を発するゲンに負けじと見据え、デバイスを構える。

眼光を受けたことで沸く『恐』の感情そのものを感じていないわけじゃない。

現に二人の手をよく見ると、デバイスを握る指先が微動している。だけれども……ここで立ち止まれないのだ。

刹那……

『Flier Fin』

飛翔する……少女二人……対峙するウルトラ戦士に向かい……大地を風で吹き荒らして……突貫した。

先に初日の模擬戦の結果を話してしまおう。  
はつきり言ってしまえば……なのはとフェイトの“完敗”であった。

ゲンの提示した勝利条件、攻撃の規模、威力は関係なく、一撃でもゲンの体に当てられたら勝ち、という条件をクリアすることはおろか……攻撃を当てようとするこすら、全く適わなかった。

何が起きたのかと言うと、意を決して踏み込んだのはとフェイトに向けて、ゲンが殺気を上乘せした眼力の弾丸——視線をゲンはぶつけただけ。

彼が先手で行ったのは、たったそれだけ、二人を……“見た”……だけだ。

少なくとも、最初は視線は出したが、手は一切出さなかった……が、

これがおおとりゲンという人物の場合、話し、というより次元が大分違ってくる。

何度も修羅場と窮地と死地が立ちほだかりながらも、屈せずに踏み越えてきたウルトラ戦士なのだ。

彼ほどの猛者となれば、自在に殺気をコントロールし、眼光すらも武器にしてしまう。

フェイトが勇夜と初邂逅した際、彼は彼女に殺気をぶつけながら抜刀することで、相手に斬られたと錯覚させ気絶させてしまう『アイズインパクト』という技を使用したか、この技もある意味では師匠譲りのものだ。

そんな名前の通り、獅子と呼ぶに相応しいゲンの殺気の前では、魔道師として有り余る素質があり、経験はそれなりに積んできたのはたちでさえ、ひよっこ未満となり果ててしまった。

瞬間的に膨れ上がったゲンの「気」に、二人は攻撃する意志どころか、戦う心意気すら剥奪、篡奪され、恐怖心の余り立ちすくみ、その隙を突かれて呆気なくゲンの体技に地に伏せられてしまった。

さすがに手加減したのか、ゲンは合気道による投げ技で済ませたが、これは見方を変えれば、拳を振るうのに値しない、彼女たちは敵ですら無いとも言いきれてしまう。

ただ、ゲンが披露したのが外国からは『動く禅』と喩えられるほど『和』を理念とし、相手を傷つけずに制する合気道なら、むしろ前述の行為は正解だとも言える。

「一撃も…入らなかつた…」

ただ…それでも彼女たちがぐらわされた精神的打撃は、自分たちが持つ魔法の数々よりも、より痛烈な威力を持ち合せていた。

敗北の経験は、二人とも何度もその身に受けている。

なのはは、初めてフェイトと対面した時や鉄槌の少女に襲われた時。

フェイトは、勇夜の初対面と、なのはとの決闘、シグナムの強襲など。

だが、今回はばかりはその今までの比では無く、まさしく文字通り

手も足も出ない惨敗であった。

ゲンから出された勝利条件を、満たし遂げることがどれだけ困難なことか、重々承知していたはずだった。

なのに、結果は二人の範疇を遥かに超えていた。

睨まれた…ただそれだけで、相対する相手に屈してしまった…打ちのめされてしまった。

以前二人が、魔法で作られた仮想空間のビル街で決闘した際、最終的に街をゴーストタウンになり下がらせるほどに戦いが激化してしまったが、それすらも、超人たちには、ぬるま湯であったと言うのか？

そうなのだ…戦いの規模と言うよりは、戦いに臨む…姿勢という奴が、そう…致命的なまでに、次元が違い、隔たりが存在していた。

「どうやら弟子と光君は、君たちを過大評価していたようだな」

「……………」

地に着いたまま放心状態に陥っていた二人に、辛辣なゲンの言葉がズシリと踏みかかった。

「弟子たちに、少しでも力になってあげたいから、君たちは魔法使いを続けているそうだな？」

「はい…」

「それならば君たちのあの様は何だ!？」

重くて低く、渋みとドスが利いたゲンの怒声が、二人の耳に響き、痛みとなって訴えてきた。

あの様…彼の目を見ただけで、殺気を身に受けただけで、戦闘する意志を奪われた無残な自分たちの失態。

恐怖を感じることも自体は、生き物として正しい判断だ。

あの時のゲンは猛獣と表しても差し支えない棘を身から発していた。

ただし、その怖さとどう折り合いをつけて対応するか、その点なら二人とも落第点、ゲンがもし本気だったなら、もうこの時点で二人とも生命活動を停止させられていた。

一瞬の判断ミスが命取りになる戦場に於いて、これは致命的である。

「少し言い過ぎたな……なら一つ質問しよう、なぜ魔法には『非殺傷』などというものがあるか、考えたことはあるか？」

先ほどより声色を落ち着かせつつも、顔つきと目つきは厳しさを維持させながら、ゲンはなのはとフェイトに聞いた。

「そ……その」

二人は言葉に詰まった。

今までの戦闘経験と、勇夜や光を通じて、魔法もまた危険性を帯びた力であることは承知していたが、それでも非殺傷在りきの戦いを続けていたので、なぜ魔法にそんな機能が備わっているのか……考えたこともなかった。

「正直に答えれば良い」

「すみません……分からないです」

「私も……なのはと同意見です」

なので、正直に答えが見つからないことを、二人は答えるしかなかった。

「非殺傷設定とはな、たとえば相手が殺す意思を持っていたとしても、殺さずに次元犯罪者を確保し戦い抜き、魔導師たちの覚悟の顕れだ」

時空管理局は階級などを見ると軍隊のようにも見えるが、やはり警察としての一面が強い治安組織だ。

たとえどれだけ非道で冷血漢な輩でも、犯罪者は生かして捕まえるのが役目。

ならば、一定量を人体にぶつけると外傷を与えることなく気絶させる魔力の性質を生かした非殺傷設定は、確かに被疑者確保に有効だ。

だが、局員と相対する存在が全て魔法を使ってくるとは限らない。殺意剥き出しにし、手加減抜きで殺そうと掛かろうとする罪人が大半であるし、そもそも人間的な慈悲も情けもないロストログアたちだっている。

非殺傷で殺さずに戦うことは、実は想像以上に困難なことで、ゲンの言うとおり、先人たちが自らに課した覚悟の顕れなのである。



しかしだ：現在ではその先人たちの戒めを知る魔導師たちは希少で、特に若輩者たちは悪く言ってしまうえば、傷つかず傷つけずに戦える安全装置としか思っていない。

勇夜に「魔導殺し」なんて異名が付けられてしまったのは、少なからずそんな「怠慢」が存在するのも原因の一つであり、苦い事実でもあった。

「いくら使う武器に安全性を求めても、実戦というのは一皮抜けば殺し合い、それは私（ウルトラマン）たちの戦いも同様であり、過酷なものだ、君たちにそのような「覚悟を決めろ」などとは言わん、しかし、敵を「殺さぬ」戦いは、それ以上にもっと過酷なものだ、まずそのことを肝に銘じてほしい」

本音を言ってしまうえば、ゲンは二人が戦うとうこと自体、よしとはしていなかった。

いくら才能があろうが、彼女たちはまだまだ幼い身、ゲンが地球防衛をしていた頃、彼と親しかった少年、梅田カオルとほぼ同い年だ。

戦いがどれだけ己を心身ともも追い詰めるか……故郷のL77星を滅ぼし、師のセブンを一時再起不能にさせたマグマ星人の尖兵たち、ブラツクガラスとレッドガラスの起こした津波で黒潮島が沈没し島民のほとんどが犠牲に、ツルク星人によってカオル少年の父は惨殺、ツルクに並ぶ通り魔、カーリー星人によって同僚の白戸隊員の恋人を含んだ女性が殺され、そして円盤生物シルバーブルーメによって……これらの経験から、戦うことで受ける痛みを、その身に染みらせているゲンから見れば、幼き二人を魔導師として戦わせることは、カオル少年をM A C隊員にさせることと等しい。

できれば、ここは敢えて身を引き、書の確保は弟子たちに任せてもらい、普通の女の子としての日常を送らせてあげたかった。

良かれ悪かれ、まだまだそんな幼き子たちすら人員として頼らなければならぬ管理世界の住人であるリンディたちでさえ、最近は大人が解決すべきことを子に押しつけてしまう世界の現状に憂い、抵抗感を抱かせている。

けれど、二人はその年齢にも拘わらず、実年齢よりも聡く、ませて

いる上に責任感が強く。そして勇夜と光から、どちらも内罰的な女の子であるとゲンは聞いていた。

同年の子らよりも精神（こころ）の齡を重ねてしまったこの子たちは、きつと彼女たちにとつて大事な人たちに何もしてやれない自分を責め続けて、追い詰めてしまうだろう。

心を大人にさせた分、この子たちは他の同世代の子たちよりも脆く、危うさを抱えている者たちなのだ。

ならば、せめて今の内にゼロたちの戦いがどれほどまでに過酷で、覚悟を以て臨まなければならぬかを、教え説いておかなければならない。

できることが限られる

「君たちには、鍛錬とともに戦うことの重みを体験させてもらおう、子どもだからという甘えは絶対に許さん、それを肝に銘じられるのなら、強化された君たちの愛機（パートナー）を扱えるようになるまでに鍛えてあげよう、分かったか？」

「はい！」

ゲンにあしらわれてしまった当初は、呆然とするあまり立つこともできなかつた彼女たちだが、ゲンが前述の言葉を言う頃には、背筋を伸ばし立て、力よく答えられるまでになっていた。

さつき自分の言ったことを少し訂正せねばならないな、とゲンは心中呟いた。

この子らは確かに脆さと紙一重ではあるが、この程度で立ち止まるほど、柔な身ではないということだ。

それだ。

この二人の眼を見ていると、ふと……荒削りで、無鉄砲で、若氣のオーラが溢れていた昔の自分と弟子のことを思い出す。

まあ……これぐらい血気、活力、バイタリテイが無いと、こちらもはり合いが無いし、あつた方が教え甲斐も高まるというものだ。

内心微笑みたくなる気持ち、顔に出さぬよう努めながら、気を引き締めるゲンなのであつた。

外界より時間が延長され、魔力量と魔法行使に伴う魔力放出量を制限させることで魔道師としての質を弱体化させる結界内での、ゲンの指導による修行は、ゼロと違いなのはたちが成長期真っ只中の少女であることを考慮しつつも、初日の発言の通り、甘えを許さない厳しいものだった。

訓練項目は、やはり師弟と呼ぶべきか、弟子がアルフを指南した時とほぼ同じメニューである。

勇夜がアルフを鍛える際、参考にしたので当然と言えば当然だ。

最初に、準備体操の後、腹筋や腕立て伏せなどのトレーニング。

次に集中力を高める黙然、無論雑念を見せれば肩を叩かれる。

その次に、デバイスに魔力刃を展開して維持させたままの素ぶり、デバイスによらぬ魔力弾のコントロールと射撃。

そしてメインにゲンとの模擬戦、マンネリを避ける為に時々勇夜や光に変わってもらいながら行われる。

実戦重視なので、三人とも殺気——『憎しみ突き刺す意志（こころ）』を飛ばしながら二人に攻撃を仕掛けてくる。三方は戦闘キヤリアを積み重ねているので殺気をコントロールするのもお手の物。

緊張感の余り、終わる頃にはなのはフェイトともども、場の環境に合わせた体温調節機能の着いているバリアジャケットを着た身でありながら、汗だくと息切れ塗れであった。

「攻撃に集中する余り脇ががら空きだ、何ための並列思考だ、常に周囲に気を配れ！」

「はー！」

そして三人とも、指導中は鬼教官そのもので、終始厳格たる態度でこの場にのぞんでいた。

「そんな攻撃では、直ぐに魔力切れを起こします、AAAでも有限は有限です」

「う…じゃなかった、はいですー！」

「はいで結構」

「は、はい！」

さすがに光もこの場では、ブラコンを封印させていた。

「何て言うか……勇夜さんがあれだけ強いのに、何となくだけど分かった気がする」

「だろ？ あたしもあれだけ扱きに扱かれたな」

見学に来たユーノとアルフも、厳しさが体現された訓練の場に思わず感心させられるのであった。

体の動きのムラと、魔力の消費を抑えさせることで、柔軟に戦闘行為を進められるようにするのが狙いである。

結界で弱体化されているので、下手に無駄遣いすれば、あつという間にウルトラマンで言うところのカラータイマーが鳴り響くまでに消耗してしまう。

最初の数日はそんなガス欠による疲労で自滅が幾度も起き、ゲンの怒声が飛んだ。

さらにこの結界には仕掛けがあつて、ゲンの意志によって魔力のリミットを弱められる機能が備わっている。

そうすれば、なのはたちの体内の魔力の出力が急激に上がり、擬似的にカートリッジを使用した状況を再現できる仕組み。

何の前触れも前置きも無く平常運転から急加速される恰好となるので、いきなり膨張された魔力を前に、なのはの場合は砲撃の反動で姿勢を崩し飛ばされ、フェイトは魔力刃の質量でデバイスが持てなくなる事態を起こしたりした。

ゲンとしては、かつての自分やゼロのように、肉体を優先的に鍛えたいところだが、短期間で成果を出すことと、成長過程の幼い体を視野に入れなければならぬので、これらの方法をとった。

初日は、あのような様を見せてしまった二人だが、向上心はとてつもなく高かったので、ゲンの鬼教導中は少しも泣き言を口にしなかった。

ただ……一方でこんなやり取りもあった。

勇夜が稽古に加わる日の、彼とフェイトによる、日本刀(れいが)と槍(ミッドデバイス)での模擬戦での最中。

「ハアアア！」

零牙を勇夜から見て、右側下段後方に刃先を向け、踏み込んできたフェイトに向けて斬り上げて、得物（デバイス）を弾き飛ばし、刃をフェイトの喉元に突きつけた。

日本のある剣術の剣技の一つで、『三学円之太刀・一刀両段』と呼ばれる技である。

「っ……………」

「何ぼーと立ってんだよ」

「ふえ？」

『ふえ』じゃね！飛ぶなり走るなり、距離を取って対応しろどアホが！！

「ご、ごめんなさい！」

「じゃねえ！一応俺が敵って設定なんだ、戦闘中にグダグダ言わせるな」

「ごめん…」

パコン！

頭に何かが当たる音が響いた。

勇夜による、フェイトの金髪が生えた頭部に向けられた冷徹極まるゲンコツの衝撃音である。

「今度から戦闘中にごめんとか言う度に、ゲンコツの刑だからな……」

「す…すみませえん」

腫れとバツテンが付いた頭を抑えながら、涙目に噛んでしまいつつフェイトは答えた。

その仕草も可愛くて愛らしく、異性をノックアウトさせるには十分な破壊力だが———パコン！

二度目のゲンコツ。

「フェイト……………その顔は何だ!?その眼は何だ!?その涙は何だ!!!?」

———フェイトが聖祥大付属小転校する前に勇夜から受けた短期集中講座でも披露された、父と師匠譲りのドス声が唸りをあげる鬼畜モードな彼の前では、フェイトの仕草がたとえ無自覚によるもので

も、そんな行為は無力も同然なのであった。

そんな勇夜の父から師、師から彼に継がれた名言と怒鳴り声と遺伝子を通じて受け継いでしまった鬼畜指導を、ひたすらに耐えるフェイトなのであった。

しかしだ。

これでもレオがセブンから受けた訓練と言う名の扱きに比べれば、かなり優しめなレベルである。

さて、以前にも端的に話したが、こういう心身を鍛え上げる特訓は、女の子にある悩みを突きつける。

結構大人数だけあり、その日もルームシェアする異世界人たちの夕食は非常にポリユーマーなものだった。

「エイミィ、おかわり」

「はい、良い食べっぷりだねフェイトちゃん」

三杯目のごはんをエイミィから受け取ったフェイト。

修行が始まった日以来、彼女も、なのも食事が急激に増量されていた。

「もうこれでごはん三杯目……」

「(あたしと同じくらいの量)」

驚く遺伝子を分けた姉、と姉妹同然の使い魔。

「(それだけ体力が一日で消耗されたということか)」

冷静に分析する鋼鉄の武人。

「(師匠にとことん扱かれてんだ、これくらい大目に見てくれ)」

師の厳しさとどれだけ修行が心身を消耗させるかを身を以て知っている弟子。

「(いやまあ、ちよっと前の飲まず食わずな生活よりはずっと良いんだけど)」

「(でも……食べた後となると、やっぱり落ち込むかも、フェイトだっ

て年頃の女の子なのよ)」

と、母は懸念する。

日々の修練の疲労により食欲は極限にまで増進され、その端正で愛くるしい美少女と断言できる容姿に似合わなさそうな食事量と食入りの良さに、嬉しいんだけどどこかしら、心配も沸き上がるアルフやプレシアである。

実際、夕食後のフェイトの部屋にて。

「今日だけで0、〇キロ増えた……これじゃお嫁に行けない」

「しようがないよ、筋肉は脂肪より重いんだからさ、ああなっっちゃうのは仕方ないって」

「筋 肉 …… 脂 肪 …… ……」

「やあああああああつあああ………!!! 聞きたく

なああああああ………い!!!」

「フェイト、気をしっかり持って!!!」

そこから数分後。

「勇夜！ ちょっと来て！」

「どうした？」

洗面上にて歯磨き中だった勇夜は、大慌てなアルフに連れて行かれ、フェイトの部屋に入ると、しくしくと泣いているフェイトの姿が

「フェイト……泣いて——」

「泣いてなどおりません！」

どう見ても瞳から涙が流れているのに、突っぱねる彼女、それだけならまだよかったのだが……

「いや……そう言われてもよ、どっからどう見たって」

「涙を流しておりません！ フェイト・テストロッサはその身を剣へと鍛えた戦士です！ だから——」

妙に時代がかった口調になってしまったフェイトを前に、二人はほかくんとするしかない。

「何か……変な電波受け取ってる気がするんだけど……アタシの気のせいかな？」

「いや……多分アルフの勘は当たってる……暫くそつとしとこ」  
「うん……」

修練による筋肉の密度と食事量の多さで、体の重みが増えたことで、自室のベッドの上で落ち込み、時にはパニックまで起こし、電波まで受信するフェイトと慰めるアルフの図ないイベントが、ここ毎日起きていた。

当分アルフの発した単語が禁句となる状態は、続きそうである。

そして、それはなのも同様でもあり。

「なのは、どうしたのですか？」

「聞かないで……光兄……」

食後の歯磨きと入浴のために洗面所に寄った光が見たのは、二次元人の光直伝（？）体育座りで頭に黒い縦線を走らせながら落ち込むなのはと、近くに置かれた体重計の組み合わせであった。

一体彼女に何が起きたのか？

まあそれは容易に想像が付くので、彼女たちの心境を踏まえて、敢えて明言はしないでおく。

その時、喧騒の中では、通行人たちにすら気づかれない異常な事態が起きていた。



小さくあどけない子狐が一匹、人の群衆の波の中を、とぼとぼと歩いていたのである。

非日常的な現象が、今まさに起きているにも拘わらず、人々は気にするどころか、『彼女』を目にも止めないし、気づこうともしなかった。彼女自身も、周りのリアクションを示さない現況を気にもせず、とぼとぼと短い手足をささっと動かしながら歩き続ける。

ある『可能性』を求めて——ひたすら街の中を進み続ける。ふと、彼女は何かに目を止め、立ち止まった。

見つけた。

誰に言うでも無く、心の中で静かに彼女は呟く。

彼女の目の先には、『彼』と歳が同じか近い、少年が二人、会話をしながら喧騒に混じって歩いていた。

この現況こそ、彼女が探しに探し求めていた——可能性。  
つづく

## STAGE 14 — ある一家の模様

地球にて闇の書の存在が、本格的に公になる数ヶ月前。

丁度、願いを歪んだ形で叶えるロストロギア、ジュエルシードを巡って、少年たちと少女たちの想いが錯綜していた四月の頃。

春の温かさが心地よく漂い、朝日が静寂に包まれた海鳴の街を照らししていく。

こういう朝は日頃から運動の一環として走っている人々にとっては絶好の走行日和なので、人氣が少ない市内を駆け抜ける人々は結構いる。

「今日も眩しい朝陽だこって、まあ俺たちの炎には劣るがな」

軽口叩く少年もその一人だった。

オレンジがかった短髪、鮮やかにくつきりと染められ燃え上がる朱色の瞳。

悪ガキ大将か、はたまた喧嘩番長のような赴きがありながら、それでいてフランクで親しみやすさを感じさせる。

八神（やがみ）紅蓮（ぐれん）、それがこの姿で海鳴の地に住む彼の名。

暫くは河原を一人で走っていたが、そこに並走者が現れる。

「よお久遠、おはようさん」

「くお〜〜ん」

彼——八神紅蓮の横を同じペースで走るのは、人間では無く、抱き心地のよさそうな黄土色のふさふさとした毛を持った、ちっちゃな子狐だった。

短い手足で懸命に地面を駆けるその姿は、見ているだけでもほわっとさせられる。

日本人離れた容姿な日本人（実は違うのだが、戸籍上はそう

なっている」と、本来警戒心が強い習性で自分から人間に近づくはずが無い狐の子のツーショットは何とも言えない組み合わせだが、海鳴に置いてはこの辺りの地域でよく見かける光景である。

「たっだいま〜」

ジョギングを終えて帰宅する紅蓮とおじやまする久遠。

八神家の自宅は、かなり大きい方だ。

『2人』で済むには、部屋が余り過ぎ、仮に『4人と一匹』だったとしても、それでも余裕があるくらいである。

「おかえりな、紅蓮兄」

「くう〜くう〜ん」

「おはようさん、くうちゃん」

車いすが必須なほど、足が不自由であることが明らかである、茶髪のショートカットと×（ぼってん）の髪留めが特徴的な、朝食を調理している関西弁の少女の名前は、八神はやて、紅蓮の妹に当たる今年で小5になる少女である。

「くうちゃん、ほんと紅蓮兄の頭に乗るの好きやね」

今久遠は、紅蓮の燃えるオレンジの髪の毛の頭頂に乗っていた。

「くおん♪」

「羨ましいわ」

「肩車なら何度もしたことがあんだろ？」

「そうやのうて、私はくうちゃんを乗せてあげたいんや」

妹は関西弁なのに、兄は比較的江戸っこ寄りな標準語だし、紅蓮自身の容姿もあって、大概の方々はこの八神兄妹を似てないと印象付けてしまう人は多いだろう。

“八神家”の一日は、だいたいこのような形で始まる。

兄である紅蓮にとって、足の不自由な妹に家事をやらせるのは、正直好ましいと言えない。

できるだけ、自分が家にいる時は、家の仕事は自分が率先してやろうとした。

お陰で家事スキルはそれなりのものとなっている。

だが、こと料理に関しては、妹であるはやてが自分担当と頑として譲らず、てこでも動かなかった。

無論反対した。

火や刃物を扱う以上、家事の中では一番危険が伴うものだからだ。けど、普段滅多に怒るところか感情をストレートに表現することも滅多に無い彼女が、自分にやらせると語気を強めたのである。

今のところ、あそこまで自己を主張したのは後にも先にもこの時だけ。

渋々ながら、その時の紅蓮は妹の意志を尊重することしかできなかった。

「紅蓮兄、まいどおいしそうに食べるよね」

「そりゃ、上手いんだからこんな顔になっちまうよ」

ただ、良い意味での誤算なのは、はやての料理の腕前が下手すりゃプロより高いということだ。

本日の朝のラインナップは、白ご飯に味噌汁におかずと和食志向。そのどれもが高レベルの美味である。

「久遠だつてそうだろ？」

「こおん♪」

「ほんま2人もありがとな」

床に置かれたペット用の皿に盛りつけられた、昨日の残りである唐揚げを嬉々とした表情で租借している。

今のところ、紅蓮と久遠しかはやての手料理は味わっていないので実際のところは判断しかねるところだが、100人中100人は初めて食した時に衝撃は必ず受けるかもしれない。

手料理が好評価なことにはやても本望なのか、満面の笑顔だった。

『昨日海鳴市街にて起きた集団幻覚事件は――』

テレビ画面からアナウンサーが、多くの海鳴市民が、街を埋め尽くすほどまでに巨大化した巨木を見たという事件の内容を述べている。「何っーか陳腐な事件だな、視聴者を増やす為なら、こんな茶番でもクソ真面目に垂れ流すのか？マスマンたらつてのは……あれ？マ

ス何とかだっけ？」

「言い方きついよ、兄ちゃん……後それはマスメディアとマスコミや」  
毒っ気のあるコメントでボケる兄に突っ込む妹。

実際は、異世界から落ちてきたロストロギア——ジュエルシードの一個を、なのはの父士郎が務めるサッカーチームに所属している少年とマネージャーの少女が発動させたことで生まれた実体を持つ樹が出現。

ウルトラマンゼロの人間体時の姿である諸星勇夜が、すんでで結界を張り被害は最小限に抑えられ、死亡者も幸い出なかった。

街中で起きたことなので、こういう形で世間に流れてしまったが、すぐに風化される運命が待っている。

「そっぴやね昨日、紅蓮兄ちゃんによう似た人に会ったんよ」

「ああ？ どういうことった？ 顔がか」

「何て言ったらええんやろ……雰囲気つてやつや、悪そうに振る舞ってるけど面倒見があるとかか頼りになるとか、でもあのの方が二枚目やったな」

「へえ……そりやつまり、はやてはそいつに惚れたってわけか……」

紅蓮の全身から、暑苦しいまでの鬨気が溢れ出る。

発されるオーラを前に久遠は若干脅え気味で、まん丸に縮こまって震えだした。

「そんなんちやうねん！ 私は紅蓮兄が一番や、だって——」

「人の大事な妹を誑かすとは良い度胸じゃねえか雑種風情が……今度そいつに会ったら……俺の真っ赤に燃えるこの拳で、ギトギトのコテンパンにして、然るべきでっついで——」

「もお、アニメの見過ぎや兄ちゃん」

弁明して抑えようとするはやてだが、本人は中の人ののが紅蓮そつくりの声なアニメキャラの台詞を交えながら、厨二と怒りで我を忘れて耳に届いていない。

この時の彼女は、その時の彼の体から、炎を熱と陽炎とゆらめきが沸き上がって見えた。

しばらく平静になるまで時間がかかりそうである。

さらに言うと、もし紅蓮が……グレンファイヤーが兄になつてくれなかつたら、その兄がさつき言った通り、あの人に惚れていたかもしれない。

八神家の面々が今まで送ってきた時間は、決して穏やかなものばかりでは無かつた。

今は八神紅蓮として海鳴で暮らしている、元宇宙海賊の用心棒にしてウルティメイトフォースゼロのメンバー。

炎の戦士グレンファイヤー。

異次元人ヤプールの悪あがきで次元振動に巻き込まれたグレンⅡファイヤーは、高町光ことリヒトⅡシユピーゲル——ミラーナイトと同じく、彼はこちらの次元世界の地球、海鳴市のはやてが生まれたてであつた八神一家に迷い込み、彼らに保護された。

その時彼は、ゼロとミラーナイト同様、時空の歪みに巻き込まれた影響で、本来の特徴的な燃え上がる姿に一時戻れなくなつたと引き換えに、人間の姿を得た。

日本の海鳴市に迷い込むまでは、二人と違い、体の大きさは変えられても肉体そのものを人間と同じ容姿にする芸当は持ちあわせていなかった。

二人と同様に、体が4歳児ほどに幼児退行と言う、いらぬおまけも付いてきてしまったが。

他に当てが無いグレンの身の上を案じた八神夫妻は、快く空から降ってきたその男の子を向かい入れた。

ゼロもリヒトも、子どもに戻つたことで家庭の温もりに触れられたが、グレンもまたそうだ。

グレンは、熱に強い体質を生かして、地下資源の採掘を生業とする種族。

《フレアード一族》の生まれだつた。

彼にも、親はいたし、実の妹もいた、友もいた。

口が乱暴なこと以外は、すすくと育ち、内心外の世界を見てみたい冒険心を秘めつつも、採掘作業に従事していた。

だが、そんな日々は、突然根こそぎ奪い取られてしまった。

恐怖の銀河皇帝、カイザーベリアル率いる帝国軍の侵攻。

採掘された地下資源の70%を、帝国に貢ぐという要求を断固拒否した一族にベリアルは圧倒的物量を持って攻め、辛くも逃げのびたグレンを残して一族は虐殺され、惑星ごと滅亡した。

それから数年は無念と失意と悲しみに暮れ、宇宙を放浪していたグレン。

ある日、彼は宇宙を股に駆けベリアル帝国に抵抗を続けている、宇宙海賊でも特に名の知れた三兄弟。

ガル。

ギル。

グル。

率いる『炎の海賊』たちと出会う。

ベリアルに因縁があることと、炎という共通のキーワードを持つグレンと三兄弟はシンパシーを感じ。

グレンが、棒術と一族の間で昔から伝わっていたレスリングによく似た格闘技に秀でていたこともあり、彼は炎の海賊の用心棒となった。

それからさらに時が経ち、共闘してベリアルを倒した巨人たち。

鏡の騎士、ミラーナイト。

鋼鉄の武人、ジャンボット。

そして光の戦士、ウルトラマンゼロ。

彼らと宇宙警備チーム、『ウルティメイトフォースゼロ』を結成。

世話になつた炎の海賊から離れることになるのは、名残惜しかったが、時空を超える力を持ったゼロたちと一緒にならば、心の奥にしまひこんでいた未知なる世界、天地への冒険が叶うと考え、三兄弟の長男ガルから言われた。

『自分の力を使う本当の時』

その自分なりの答えを見つけるべく、ゼロたちと歩む道を選んだ。そして八神家の一員になるに至る。

炎の海賊のクルーたちとも、ある意味では家族だったが、戦いばかりな人生になって久しく忘れていた日々、感涙するグレン。

物心ついた義妹のはやてとも、実の兄妹のように睦まじい仲間になり。

いつか必ずゼロたちと再会できると信じながらも、グレンはこの幸福を離すまいと、日々を送っていた。

けれど、それもまた、突然終わりを告げる。

たまたま片や仕事、片や買い物帰りに鉢合わせして、一緒に帰宅途中だった八神夫妻は、横断禁止の道路を渡ろうとした自転車にコントロールを失なった大型車に追突され、帰らぬ人となった。

現在から7年前のことである。

普段は静寂とは無縁な彼も、悲しみに暮れていたこともあり、葬式の日は一言もまともに発さなかった。

だが、不条理な仕打ちはこれで終わらなかった。

はやては、4歳にもなるのに、同年代の子よりも身を立たせることが困難で、何も無い平野でも、ふと足に力が入らなくなり転んでしまうことが度々起きた。

これにはさすがのグレンでも異常だと感じ、病院で検査を受けさせてみたところ、待っていたのは、原因不明の神経性下半身麻痺であった。

どうしてこんな症状がはやての体で起きているのか、病院側も全く分からず。

ただ、数年後には車いすの生活を余儀なくされるといふ。

ひたすらに冷酷な宣言。

自分はまだ良い。

不幸の痛みに耐えられるだけの体と心は持ってる。

なのにははやては、それすらも無い……………なんであいつがそんな目に遭わなきゃいけないんだよ！

あいつが何をした!?



何をしたっていうんだ!?

まだ4歳で、親の愛情を受けて、自分や友達と遊んでじゃれあつて……

ただそれだけなのに……まだまだ、これからだって時に……夢も希望もありやしないじゃねーか!

何よりも悔しいのは、自分の力が例え元に戻っても、はやてに降りかかる不条理から助けることができない現実だった。

暗く重い心境で、はやてにこのことを伝えるべきか悩みつつも、そう遠くない未来にその不条理が待ち構えてる以上、今伝えてしまおう。

そう決心して、二人で寢床にしている部屋に入ろうとした時だ。

ドアから泣き声が響いた。

はやての嗚咽がだ。

紅蓮にとつて、物心付いてからののはやてが、涙を流すのを見たのがこれが初めてであった。

たとえ転んだりして、普通の子なら大泣き確定なことが起きても、笑ってやり過ごして、こつちを安心させた。

義父（おやじ）と義母（おふくろ）の葬式の時でさえ、じつと我慢しながら両親の遺影を見つめ、一筋も泣かないまま、葬儀場を去っていく棺を見送っていたのはやて。

そんなはやてが泣いていた。

それこそ、愛くるしい貌をぐしゃぐしゃに歪めるくらい。

その時、紅蓮はキャプテンである三兄弟の長兄ガルが自分に言った言葉を思い出した。

“人間てのはな、嫌なことがあつたり、辛かったり悲しかったりと、碌でもないことが起きるとな、そいつらに押しつぶされないようにきれいさっぱり洗い流す習性を持つてる、その一つが『涙』なのさ”  
ならばはやてはどうだ?

確かに流せてはいる、悲しくてやり場のない理不尽に、泣いている。

“一人”でだ。

誰もいないと思って初めてあいつはああ感情を流せられる。

それは逆に、誰かという時は流すことさえできない。なら、流せないまま、自分の中にしこりが溜まって行ったらどうなる？

簡単だ、船長たちと会う前の自分になる。

炎の海賊たちに会っていなけりや、自分は心が壊れた野郎だと誤魔化して、ずっと宇宙を彷徨いながら生きてしまっていた。

そんなのは、生きていくけど生きていない、まだ死んでないが死んでしまっている、ゾンビ見たいな、悲しくて空虚な生き方だ。

今のグレンのムードメーカーな明るさは、彼らとの日々で養ったものだった。

今は耐えられても、このままじゃいつかはやてはそんな生き方を選んでしまうかもしれない。

ならば、今度は自分がなつてあげよう。

はやてが、いつか自分の前でも泣けることができるように。

前は海賊の用心棒だったが、今は、あの子の用心棒だ。

それから数年、イギリスに住んでると言うはやての両親の “知人” からの金銭的援助もあり、八神兄妹は、今でも二人には大きすぎる一戸建てで暮らしていた。

今でもはやてのかかり付けの主治医となつてくれている石田幸恵先生の宣告通り、はやては車椅子の生活になり、勉学も通信制の授業で賄っていた。

読書が趣味と言うこともあり、成績は学校に通う生徒よりも上である。

紅蓮はと言うと、生来の喧嘩っ早さから、問題行動を頻繁に起こす問題学生かと思いきやそうでもなく。

八神夫妻が健在な頃こそ、短気さと義侠心の強さが災いして、近所の悪がきたちとしょっちゅう喧嘩騒ぎを起こしていたが、はやてと二人暮らしになっていこうは、問題を起こさぬよう努めながら、ある程

度の成績は残せるよう、学問もこなしていた。

家事だって、前述の食事以外は、ほぼ全部紅蓮がやりこなしている。理由はやはり、妹に迷惑はかけられないからだ。

自分が巻いた種のせいで、はやてにとぼつちりをかけて巻きこませるなんて真似は、絶対御免だ。

だから本人的には柄でも無い、慣れないことを率先してやりこなしてきた。

それに、決して二人ぼつちな生活ではなかった。

石田先生は、面倒見の良い女性で、自分たちのサポートをしてください、最近は狐ツ子の友達もできた。

そいつは、はやてが幸せになれるようにと、ふとお参りに寄った八束神社で初めて会った。

そりゃ、最初は本とかネットで仕入れた情報の通り、警戒心が強くて一目散に逃げた。

けど毎日同じ時間に来ると、そいつも必ず神社裏の森に現れた。関心はあるようなんだが、近づいたら近づいたで、慌てて脅えて逃げ出すだけだな。

そういう流れが何か月か続く内に、身を結んだのか、その狐ツ子は紅蓮に懐くようになった。

それどころか、朝ひよつこり自分たちとこの庭にさえ現れるようになる。

狐ツ子のはやてとも直ぐ仲良くなった。

で、名前をどうするかってことになって、会議に会議を重ね。

「くおくくって鳴くんだから「くおん」で」

と即決、それに漢字が付いて、狐ツ子の名前は晴れて『久遠』となった。

当の本人(?)も気に入ったのか、その名で呼ばれるといつも嬉しそうに鳴き返す。

久遠の存在もあって、はやては前より元気に笑うようになった。

これがアニマルセラピーってやつだろうか？

紅蓮の場合、学校に通っているので友達はそれなりにいる。

でもはやては、その立ち位置上、友達一人作ることすら一苦労だ。昼間外出しても、平日は同じ年の子は学校にいるし、車椅子に乗る姿が、どうしても他者に声をかけ辛くさせてしまう効果をもたらしてしまう。

だから、たとえ人間でなくても触れ合えるやつが身近にいるだけで、かなりの救いだ。

でもまだ、辛さを我慢して押し込めてしまうところは、相変わらずだ。

焦ったってしょうがない。

自分だって船長と仲間たちと打ち解けるまで時間がかかった。

その分、ゼロたちとはすんなりつるめる様になったけどな。

特に自分が『焼き鳥』と呼んでるロボット、ジャンボット。

あいつの堅物さは本当弄りがいがある。

だからついついちよつかいを出してしまう。

大真面目にリアクションを返す様は、面白くて飽きさせなかった。

丁寧なようで少しずれ気味なりヒトも、自分と同じく口が悪くて、自分より厨二全開なゼロもそうだ。

特にゼロは、ある意味で自分の夢を叶えさせてくれた恩人でもある。

こんな気持ちの良い3人との旅は、決して長くはなかったが、満ち足りた日々だった。

あいつら……今頃どうしてるかな……はやてと一緒にいると決めたから、地球、海鳴から離れるなんて、まだまだ先の話だ。

せめてはやてや久遠が生きてる内に、あいつらと再会して紹介させてやりたいけど。

つて……いけねえ、この課題明日提出だったのに、何辛気臭く考えこんでんだか、あの先生偉く厳しいからな、期限内に出さなかったら即補修に回さちまう。

はやての面倒のこともあるから、それだけは絶対阻止しなきゃならねえ。

5月に入った頃の夜、紅蓮は机に置かれた宿題の数々と睨めっこを

していた。

「くん？」

「なんだ久遠、まだ森に帰ってなかったのか？」

「こおん」

声がして振り返って見ると、今頃は八束神社の裏の森に帰っている筈の久遠がそこにいる。

「しゃあねえな、今日はもう泊まっていけ」

「くお~~~~ん♪」

ぴよんぴよんとどび跳ねながら答える久遠。

その姿に元気をもらった紅蓮は、彼にとっては怪物やレギオノイド、カイザーベリアルカよりも難敵な宿題の続きに入ろうとした。

その時異変は起きた。

ドクン！ 直後、胸騒ぎと共に、膨大なエネルギーを肌で感じ取る紅蓮。

久遠もそれを感じているのか、毛を逆立てて警戒している。

最近こういうことは頻繁に起きていた。

ゼロたちに比べれば、こういう感知能力は決して高いと言えなかったので、何かがあったらしき現場にいつても、戦闘の爪跡が残ったくらいで、既に後の祭り状態だった。

しかし今、それが直ぐ近くで起こっている。

はやてのいる部屋で。

「ちっー！」

無意識の内に、慌てて自室を飛びだして、発信源と思われるはやての部屋に駆けだした。

ここ最近、海鳴を中心に妙な超常現象が起きていることが、紅蓮に嫌な勘繰りをさせてしまう。

そんなのを、夢や幻なんて断じられない事情と根拠が彼にはある。

今は、一応地球人として暮らせてはいるが、自分は本当は異世界からの迷い子で、この星でじゃ常識の枠から外された存在、はみ出し者なのだ。

そして世界は、数え切れないほど無数に、いくらでもある。

実際船長たちやゼロたちと一緒に、この目で直に見てきたのだ。戯言だなんて絶対言わせない。

もし、その異世界から齎されたトラブルに、はやてが巻きこまれたら。

巻き込ませやがったそいつらみんな、ブツ飛ばしてやる!!!

「はやてー!」

扉を開け、妹の名を叫びながらはやての部屋に入ると、その刹那、許容量を超えた光の洗礼を受け、紅蓮の視界が白一色となった。

たまらず紅蓮は目を瞑り、貌を手で覆い隠した。

<<page>>

数秒の後に、光が収まって行くのを睨越しに感じ、目の機能を回復させながら、ゆっくりと目を開かせた。

何なんだ? こいつら……紅蓮の初見の感想の一言がこれだった。

はやてのような小柄の女の子には余裕があるが、広いかと言われるとそうとも言えない室内には、闖入者が4人佇んでいた。

年齢も、見た目も雰囲気も、全く異なる女性3人と男性1人、4人の足元にはわけの分からない文字が書かれたピツカピカに光る円陣がある。

おいおい、俺が言っちゃまうと『お前が言うな』と突っ込まれそうだけれどな、どこの万国ビツクリ人間ショーだ? これ……。

一人は、俺の世間での歳より少し上気味で、ピンクの髪をやたら長く伸ばしてポニーテールで一纏め、そしてグラビアアイドル涙目な、やたら無駄にデカイ乳を抱えてやがる。

もう一人は、薄い金髪のボブカットで爆乳。ピンクより年上で温和で、虫も殺せないくらい優しそうなお姉さんキャラ。

もう一人は、何か俺を女にしてちっちゃくすれば、こんな感じになつてしまふと思えるくらい。柄の悪そうなガキンチョだった。

何気にお下げに結ばれたその髪色まで、自分とよく似てるし。

で、こいつらの中で唯一人男な、褐色な肌と真っ白けの髪の毛な、元の姿の自分とタメ張れそうなのこのマッチョメンは、どういう訳か耳がワコンコの形をしていた。

付け耳かと思っただが、見てくれからとてもそんな趣味をしそうな野郎でもなさそうし、どつからどう見ても人間が本来付いてなきやいけないところに耳が無い、正真正銘の獣耳だ。

そんなバラバラな容姿の4人だが、全員体にぴったりとフィットさせられた袖なしの没個性な黒い薄着を着こんでいる。

そして4人の前には、丁度はやての足が悪くなり始めた頃に家で見つかったヘンテコで分厚い本が浮いており、人様に読ませる気なんてさらさら無さそうだった真っ黒い鎖も、今は解かれていた。

こんだけでも、並の人間なら、TVやらスクリーンやら本から出てきたこの非常識に頭ん中パンクしてしまいそうだが。

「闇の書の起動を確認しました」

「我ら、闇の書の収集を行い、主を守る守護騎士」

「夜天の主に集いし雲」

「ヴォルケンリッター、何なりとご命令を」

デカ乳（パイ）、ボブ姉さん、ガキンチョコ、犬耳の順で目ん玉瞑らせたまま、日本語なこと以外は意味不明な単語をペラペラと喋りやがった。

やたら日本語は上手いことは置いて置いて、こいつら、はやてのことを『主』とか言ったか？

しかも自分たちを『騎士』だと名乗りやがった。

そのへりくだった態度といい……リヒト——ミラーナイトがエスメラルダの王様やエメラナの姫さんと接している時とまったくおんなじ。

あいつの場合は、いつでも誰でも堅っ苦しそうな敬語で喋ってたけどな。

それより『主』って、この一家はそんな大層な家柄でも無いし、どつかの王族の末裔ってわけでもねえんだぞ。

日本で騎士ごっこをやりたいんなら、皇居の江戸城にでも行って、  
天皇家のご一家さんにご挨拶でもしてこいってんだと、突っ込みたく  
なる俺だった。

「ところで、そこにいる貴様らは一体何者だ？」

一通り御託を並べた後、ようやく目の玉開かせて、紅蓮と、隣にい  
る久遠に警戒の視線を向けてくる紅蓮の心中からはデカ乳（パイ）と  
付けられた騎士。

「闇だか騎士だか知んねえけどな、俺はその主さんの兄貴だ」  
「何？」

「あんまり似てねえな」

「よく言われるよ、キレキレ目つきのガキンチョ」

「今……何て言いやがったてめえ」

生憎、紅蓮ははやてとは似てないと言われるのには慣れているんで  
あつさり打ち返す。

予想通りというか、見た目通りと言うか、このオレンジ髪のがキン  
チョと呼ばれた少女は、もう一人の燈髪がキンチョの『ガキンチョ』に  
過剰反応してしまった。

「ガキンチョだって言ったんだガキンチョ」

「言わせておけば、これでもてめえより年上だボケ！」

「言ったな、だったららてめえはロリババアあだ!!」

「んだと！やる気か!？」

「上等だ！土足で人んちの家に扉も開けずに踏み込んで偉そうな  
面してんじゃね」

見た通りそのまんまの、粗暴なりアクションを返しあう両者。

やはりこの二人は色んな意味で同類。

二人ともすっかり頭に血が上り、周りなどお構いなしに稲妻の視線  
をぶつけ合う状況になってしまった。

もうこのまま同族同士の幼稚な喧嘩になりかけた瞬間。

「頭…冷やして…」





「忝い、我はシグナム、彼らはシャマルとザファイラ、主のご家族と倒れているのはヴィータだ、貴公の名は？主の使い魔なのか？」

「違う、久遠………はやてと、紅蓮の……友達」

久遠にとつて、シグナムの言う『使い魔』が何を意味するかこの時の彼女には分かる筈が無かったが、それでも久遠は八神兄妹の二人とは『友達』であると強調して訂正するのであった。

これが、八神家と久遠と騎士たちとの邂逅の場面である。

翌朝。

読書を終えて、寝ようとした矢先、机の棚に置いてた西洋風の古い本がいきなり浮いて、聞いたことない単語を発して光だし、そのまま意識が飛んでしまったわたしこと八神はやて。

朝、目が覚めたばかり時は、あの時のことは夢だったんやないかって思ってたのですが……今家のリビングにおるんは。

ピンクのポニーテールな凛々しい女の人、シグナム。

淡い金色の髪をおかっぱにしたお姉さん、シャマル。

黒っぽい肌と白い髪に犬耳が生えたごつい男の人、ザファイラ（本人は『狼です』と訂正してきました）。

見かけは私より年下で、刺々しそうなところはすんごく紅蓮兄ちゃんに似とる女の子、ヴィータ。

当の本人たちも自覚してるのか、二人ともお互いを見る目が怖いです。

そしてヴィータと睨めっこをしている紅蓮兄ちゃんと、巫女服を着た女の子に変身しているくうちゃんこと久遠。

この人たちから夜にあったことを聞いて、改めて昨日のことが本場で、私の膝の上に置かれた本が魔法の本であることを知りました。

言い忘れていましたが、実は私、紅蓮兄ちゃんが元宇宙海賊なヒーロー、グレンファイヤーであることと、久遠が何百年も生きてる化け

狐なことを知っています。

最初聞いた時は、小さいながら（今もまだ子どもですが）にびつくりしました。

でも宇宙の外には宇宙が一杯あることを聞いた時は、胸が高鳴りましたし、女の子に変身したくうちちゃんもとても可愛かったですし、あと実はくうちちゃんって……詳しくはまた後ほどということでお楽しみに♪。

「で、この子が『闇の書』って本で、私が何代目かの主に選ばれたんやね」

「その通りです、主」

この『闇の書』、主を求めて色々な世界を旅する本で、今はどのページも真っ白やけど本に魔力って呼ばれとる魔法を使うエネルギーを入れると文字として記録されて、全部埋めるとんでもない力が得られるそうなんです。

普通ならチンプンカンプンになるところですが、紅蓮兄ちゃんのお陰で、色々な世界があることを知っていたので、何とか理解できました。で、このシグナムたちは、魔法で作られた人工の生き物さんで。

「そして我らヴォルケンリッターは、闇の書とその主を守護するのが役目」

だそうです。

まあいわゆるボディガードというやつです。

さすがに人工生命と言われてもピンときませんが、とりあえず前見た錬金術を使う漫画原作のアニメに出てきた『ホームクルス』みたいな人たちと納得させました。

「ところで、主のお兄様とのことなそちらの御方と、お友達と言ったその女の子のことなんですけど」

「何だよ？文句あつか？」

「ひいー」

おかつぱお姉さんのシャマル、どうも兄ちゃんとかうちちゃんのことがかか気になる様子です。

んで、紅蓮兄ちゃんは今機嫌が悪いこともあり、いつもより怖そう

な目つきで睨んできたので、目が潤み気味です。

「あかんよ兄ちゃん、怖がらしたら」

「ちえ…分かったよ」

「何が気になるん？」

「その…二人からも魔力を感じるんです、久遠さんは主よりも多量で、お兄様も魔力以外に力を感じます、私たちが言うのも何ですけど、何者なのですか？」

これには私も驚きました。

二人にも、魔法が使える力があつたなんて、そりや二人が不思議な力を持つてゐることは知つてましたけど。

「わたし…説明する」

すると女の子モードの久遠は、体を光らせ、その体はゆつくり変わつていき、輝きが収まると、金髪、狐耳、巫女服はそのままに尻尾を5つ生やした容姿端麗な大人の女性に変身しました。

「すまない、私は姿によって精神の齡（よわい）にバラツキが出てな、子狐の姿では喋ることもできないし、先程の形態では、余り饒舌に言葉を話せないのだ」

「そうなのか（そうなんですか）……」

そう、くうちゃんは人間の子どもと大人、どちらにも変身できるんです。

体力の消耗が激しいらしいので、いつもは子狐ちゃんの姿ですが。子狐の時も、女の子モードの時も、可愛くて愛くるしいですが、この名付けて大人モードなくうちゃんもかなりのべっぴんさんやし、声も色っぽくて大人の色気むんむんだし、ペツたんこな胸も偉い大きくなつておりましよう♪

あ…あかん、またハメ外してしもうた。

兄ちゃんからまた『おっぱい星人』つて言われてまう（> <）。「まず、私ことから話そう、私はこの世界では妖怪と呼ばれる、魔力を生きる糧にしている生命体だ」

第97管理外世界こと地球でも、魔力の素となるエネルギー『魔力素』は空気中にどこにでも存在する。

地球には、『マナ』と呼称される超自然的エネルギーが概念として存在しているが、実はこのマナこそ管理世界では『魔力素』と呼称されるエネルギーであるのだ。

だが、それを魔力に変えて使える人間の数は、管理世界よりも遥かに少ない。

それこそはやてが良い例のように、稀に突然変異でリンカーコアをその身に宿す人も出ては来るがだ。だ。

そしてその突然変異は、何も人間だけに起きるわけではない。

動物たちにも該当される。

そして中には魔力運用能力と、人並みの知能を持ち、言葉を話せ、久遠のように人間にすら姿を変えられる種も稀に現れる。

彼らをことは、以前も話したが管理世界では《魔源種》と呼称される生命体だ。

厳密には魔法と言えないが、彼らは魔力を使うことで超常的な能力を発揮できる。

久遠の変身能力や、昨夜披露して強制的に紅蓮とヴィータの喧嘩を終息させた電撃もその一つ。

そんな魔源種の一部が人間と接触、伝承や逸話などで脚色されたのが、日本なら妖怪、欧州ならモンスターが生まれていった。

久遠は、その魔源種の数少ない一体なのである。

「そしてはやての兄上である紅蓮だが、実は二人には血縁は無い、彼は君たちと同じく、別の世界からやってきた存在だ」

「時空漂流者というわけか…」

「何なんそれ？」

「紅蓮さんのように、他の世界に飛ばされてしまった人のことを言います」

シグナムが口にした聞き慣れない単語を、シヤマルが補足説明してくれた。

ついでにと、久遠は本人の代わりに紅蓮のことを大まかに話した。

紅蓮の能力、炎を操ることに関しては《超自然発火能力——パイロキネシス》ということで騎士たちに納得してもらった。

まあ、実際そうではある。

「どうりで主と似てねえわけだ」

「うっせえ、ロリババア」

「だからそんな呼び方すんな！」

「はあ？ そのチビな風体で歳喰ってんだろ？ だったら他に何で呼べってんだ!? チビばあさんか!？」

「どっちもお断りだ！」

売り言葉に買い言葉と、昨夜の再演が危うくりビングで起きそうになるが。

「まだ頭が冷やし足りないようだな、御希望なら黒こげにしてやってもいいが、どうする？」

「申し訳ありませんでした！」

指先を電気でスパークさせながら、半ば二人を脅す形で見下ろし睨みつけ、二人は同タイミングで即土下座して謝罪した。

よっぽどあの一撃が応えたようである。

やはり似た者同士だ……本人たちはハモリながら否定しそうではあるけど。

「大方の話は、よう分かったわ……」

はやての言葉に気持ちを引き締める守護騎士たち。

「主、私たちは主の命令をお受けする身、何なりと如何様にご申しつけ下さい」

自らの存在意義上、主の命令には絶対尊守。

たとえどんなに血も涙も無い、非人道的なものであろうとだ。

まさかこんな小さい子がそんな命を下すとは思わないが、彼女の意思次第では今からでも『蒐集』を行うために出向き、自らの『魔導』を存分に披露する所存だった。

「そやな、命令というか、お願いなんやけど聞いてくれるか？」

「はい」

騎士たち一同の姿勢が正される。

そしてはやての口から出た次の言葉は――。

「私の家族になってくれん？」

「はい？」

騎士一同の顔が点となった。

今なんと申されたのだ。

呆然としながらも、主の言葉の意味を探ろうと思いを巡らすシグナムたち。

紅蓮も同様なのか、口が開いたまま動かない。

大人モードの久遠は「はやてならさういうと思った」と言いたそうな顔をし、一人だけその意味合いを理解できていた。

「せやから、私の家族として、兄ちゃんとかうちゃんと私とで一緒に暮らしてほしいねん、主の言葉には必ず聞くんたる？」

「はい、仰せのままに」

まだ戸惑いが残ったままだったが、騎士たちは一応了承の言葉を返すのだった。

ちなみに、その直後。紅蓮とヴィータが……

「何でこいつと一緒に暮さなきゃなんねえんだよ!!」

とハモリながらクレームを出し。

「人の真似してんじえねえよ!」

「そりやお前の方だろ!俺は真似されんのが大っきれえなんだ!」

「言わせておけば!」

「あーいくらでも言つてやるよ!」

とまた、一瞬触発になる状態になるところだったが。

「いい加減にしろ……ガキども……」

低くぞつとする声を発しながら、全身から稲妻を迸る久遠を前に二人は降参、事なきを得た。

当分は、家内の騒動の抑止力として、八神家で住まなければならぬなど、この時の久遠はこう思い決意するのであった。自分がしつかりしなければ、この家が色々ともたない……修繕費で金銭がみるみる消費させられかねない。

さらに。

「すまない、昔からヴィータは気性の激しい奴でな、やつに代わって謝る」

「気にするな、こちらこそ我が友が暴れん坊な輩で申し訳ない、だがあれでも義理人情には篤い人柄だ」

「そうか、そこまでヴィータと似ているとはな」

口調と物腰がどことなくよく似ているシグナムと大人モードの久遠は、はやくもお互いに対し、強いシンパシーを感じるのであった。

その日、八神家に新たな家族が生まれた。

この時の紅蓮たちは、まだ知る由も無い。

彼の十年來の“友”たちとの再会も。

はやてに降りかかるさらなる災厄も。

直ぐそこまで近づいていることに。

つづく。



## STAGE 15 — 齎された平穩

それなりに人一人の一生よりも遥かに長い時を生きてきた■ ■の魔導書を守護せしプログラム生命体。

雲の騎士、Wolken Ritter——ヴォルケンリッターの4人。

そんな彼らだが、当人たちにとってこの一連の経験は、未曾有の体験のオンパレードだった。

まず今回選ばれた主が、今年で11歳になる年端もいかない女の子であったこと。

まあこれは騎士たちにとってはまだ許容できる出来事だった。

主がどのような人柄であろうと、主の矛となり、盾となり、受けた命令を遂行する。それに変わらないのだからと、あっさりと言の書の新たな主である八神はやてという少女を受け入れた。

だがそこからが、4人たちの予想を超えたイベントの始まりだった。

当のはやては『お願い』と称していたが、4人が彼女から最初に受けた命は『八神家の家族』になって、一緒に同じ屋根の下で暮らすこと。

彼らは最初、これが何を意味するのか、まったく測りかねなかった。これは騎士たちに限らず、一般市民でも『家族』の意味を聞かれると、さすがに即答はできないだろう。

ともかく、真つ先に出た『お願い』がお願いな以上、蒐集行為はしない方針と言うことと、これまでの主の下での暮らしに比べれば、遥かに恵まれた環境下での生活が保障されるということは理解した。

次にはやてが、『お願い』の後に彼らにやったことは。

「動かんといてな」

「は、はい…」

メジャーという、物体の長さを測る器具を使って、3人の体のサイズを、すみずみまで測り始めた。

今まで経験が無いことなので、シグナムもシャマルもヴィータも戸

惑いながら、はやての身体測定を受ける。

どうも自分たちの衣類を用意する為に、適切な服のサイズが知りたかったとのこと。

代表としてシグナムが、今着ている黒い衣服で充分ですと進言したが、はやてからの『あかんよ』との一言で敢え無く一蹴された。

唯一ザファイラは、人型形態から狼形態に変身できる自身の体質を利用して。

「私はこの姿の方が落ちつくゆえ、衣類は結構です」

はやてに丁重にお断りを申し出た。

が、それには代償も付いて来た

「ワンコになったザファイラ、もふもふして気持ちええわ、暖かい」

「そ、それは光栄です…」

狼姿のザファイラの背中を手で撫で、頬ずりするはやて。

見るだけでも、羽毛布団より遥かにさわり心地がよさそうで暖かそうなのその体毛にご満悦。

恍惚でぼわぼわとした、幸せそうな表情でザファイラの体を撫で撫で、彼の毛皮をさすさすしていた。

「くうくうくうん」

「あ、ごめんなくうちちゃん、くうちちゃんも体もとても気持ちええで」

「こおくくくん／＼／＼／＼／＼」

子狐形態の久遠が、つんつんと小さな手ではやてをつつく。

どうやらザファイラばかり愛でられる光景に少々焼きもちを焼いてしまったようだが、はやてから優しく撫でられたことで、機嫌を取り戻し、見る人を思わず触らせたくなる中毒性を秘めた尻尾をさながらメトロノームみたいに、嬉々としてふりふりしていた。

先程の雅さと気品さと神秘性を感じさせる大人モードと正反対だが、人懐っこく甘えたがりな子狐モードともこれはこれで愛嬌があり、はやてが愛でたくなるのも頷ける。

「(狼であると進言する時機を逃してしまった……)」

表面上は平常を装いつつも、内心冷や汗をかいて焦るザファイラ。自らの寡黙な性格が仇となってしまった瞬間だった。

一見犬と狼は似ているようではあるが、実はかなり違いがある。一例として、脳面積の広さや、顎の力は犬より狼の方が上だったり、日本犬によくみられる巻尾が狼には見られなかったりなどだ。

久遠と違い、形態を変えても精神年齢が変わらないザフィーラには、正直撫でられることとワンコ扱いされることには複雑な気分になる。

犬をバカにするつもりは毛頭無いし、せっかく喜んでいいる主はやてに水を差す気もないのだが、ザフィーラは自分が狼であることに誇りを持っていくからだ……なのだが、綻んだ表情で自分とスキンシップをする少女を見ると、とても語気を強めて主張する気になれず。

「まあ、これで主が喜んでくれるのであれば……」  
と、己に言い聞かせる。

実質久遠と並んで、八神家のペットポジションに立ってしまったが、これも主たるはやての為になると、受容するザフィーラなのであった。

ちなみに、紅蓮は無論学校に行つて勉学に勤しんでいる時間帯であるので、家にはおらず、ヴィータとの似た者同士の喧嘩イベントと、Dの権化と化した大人久遠のお仕置きタイムなど起こるはずも無い。

いきなり家内の人数が多くなったこともあり、早く授業終われと内心急かしながら受けていたとのことである。

その日の午後、はやては騎士たちの私服の購入の為に出かけた。

シグナムたちはというと、本当は主のボディガードとして同行したかったのだが、容姿と真つ黒く味気なくせに人目を引く服装で目立ち過ぎることと、騎士たちは全員お留守番を余儀なくされた。

代わりに女の子モードの久遠が同行するということで、渋々承諾。

巫女服と狐耳で余計目立たないかと思つた方はご安心を、久遠も耳と尻尾は隠せる上に、身に着けている衣服は魔力で編んだ物なので、巫女服から服のカタログに載つていたものに変化させて、現代服に衣

替えさせた上ではやての車椅子を押し一緒に外出していった。

その間、ヴォルケンリッターができることと言えば、本当に何も無かった。

やることが全く無かった。見つからなかった。

暇であった。

全員リビングで、ダンマリであった。

空気に耐えかねたシャマルがテレビを点け、試しに番組を視聴してみたが、状況の改善にはならず直ぐに消した。

「あのさ……どう思う？」

すると最初にヴィータから口を開かせた。

「今度の、主……」

「……………」

「まだ一日目だし、どうこうは……」

「今のところ、今までの主とは違うとしか言えん」

「そうだよな……」

「ヴィータはどうなんだ？」

「文句はねえよ、蒐集はしねえって言ってくれたし、兄貴は今んとこ気に食わねえけど、主の作った飯、滅茶苦茶おいしかったし」

昨夜闇の書が起動してから約半日。

まだ半日だが、なんとも密度の濃い半日だ。

『家族』になってほしいという主の『願い』にも驚かされたが。魔力の蒐集行為は一切しない、というはやての言葉には、天地がひっくり返される衝撃だった。

書が起動し、騎士たちが召喚され、彼らが概要を聞いた主が、欲に目が眩み、その日から蒐集が開始される。

騎士たちの半生は、その繰り返しだった。

時期的に戦乱期ということもあり、毎日毎日戦場に駆り出される日々、

愛機である得物は血に染まり、その身も返り血と己の血で汚れ、一心不乱でその日を戦い終えても、主からは賞賛の言葉も行為も受けられず。

今着ている黒い薄着で、暗く、明かりも僅かで、じめじめとして無慈悲な地下の牢獄に放り込まれたりなど、散々な扱いを受けてきた。非人道的で人でなしと言われる行為だろうが、生憎自分たちは人間ではない。

魔法で作られたプログラム。

騎士なんて名乗っているが、所詮道具の域を出ない存在。人間の価値観（ものさし）で扱われることなんてむしろナンセンスだ。

ただ一人、ヴィータだけはやり場の無いフラストレーションをため込み、戦場の兵士たちを鉄槌で蹂躪することでもやりきってはいたが、大方のメンバーはこれが自分たちの購えない運命だと、半ば諦観という形で悠久の時を過ごしてきた。

長い転生の中で、一人か二人は、好意的なマスターも現れなかったのかと考えたくもなるが、不幸にも、そのような人間が今まで主に選ばれることはなかった。

というより、大半が書の内包する圧倒的な力に呑まれ、心身ともに狂っていくのが通例。

何百人ものの魔導師や魔力持ちから吸い上げた大容量の魔力と魔法は、下手な薬物よりも人の精神をハイにさせて壊し、闇の底に突き落とす麻薬の効果を齎してしまう。

書が完成し主が■■■度に、次のマスターとなる人を求めて、次元の狭間を彷徨う。

心を凍らせ、自身がまともでないと壊れていると思いついていないととてもやっていけない、直ぐにでも身を投げたくなる日々。

プログラムの体は、それすらも許してはくれなかった。

だから、いつもと違う召喚、いつもと違う主、いつもと違う始まりに、4人の心はどう対処したものかと途方に暮れた。

シグナムに至っては……一度。

「しかし、闇の書が完全に覚醒すれば強大な力が手に入るのでしょ!」  
はやてに対し、語気を強めながら思わずこんなことを口走ってしまった。

「私は闇の書になくも望みはない。みんなに望みたいのはわたしの

家族として、人間として一緒に暮らす、それだけや」

はやての『望み』を聞きながら、直ぐに自分の発した言葉を理解し、声にしてしまったことを後悔した。

主の命を聞き実行する存在でしかない、そんな自分が何故、主に何を強制させるような真似をしているのだ？

蒐集をしないという主はやての意志を尊重する。それでいい筈なのだ。

今まで無かっただけで、今回のようなことがあってもおかしくない。

それを許容する。それだけのこと、それだけの……筈なのに、なぜ？

「ちよつと面貸せ」

突然義理とはいえ、主の兄君である紅蓮に手を掴まれ、部屋のはなれに連れられた。

「兄上殿？」

「紅蓮でいい」

「しかし、お前は主の」

「いいつつの、そんなかたつ苦しいの俺苦手だからさ、いつそ呼び捨ての方がすつきりすんだよ」

「ではグレン、何ようか？」

「お前、滅茶苦茶強い敵ほど燃えるタイプだろ？」

「……………」

「そのだんまりなりアクションじゃ、当たりか」

紅蓮の表現は端的だが……申す通りだ。

自分には、騎士としての誇りと理性によって抑えられたケダモノの血がある。

自らの命を脅かしてしまえる技量、実力を備えた強敵に対しては、その強さに比例し、自らの魔力変換資質の如く戦意が沸き上がり、殺気が燃え上がる獣の血。

そんな猛者たちとの全身全霊を賭けた命のやり取りに悦びを見出しながら、それに相応しい獲物という名の相手を探し求め、剣を振る

う。

時にその嗜好は仲間、特にヴィータ辺りからは「戦闘中毒者——ジャンキー」と揶揄される彼女の本性の一端であり、衝動（ほんのう）だ。

ならば、先程の失言の原因はやはり、衝動（ほんのう）を満たす為の手段が奪われてしまうことに対する「恐れ」だったのか……。

「昔見た映画のセリフにな、『一人殺せりや人殺しだが、百万殺せりや英雄だ』つてのがあつてさ、前の主の時は英雄になれた時代かもしれないえがな、こつちじや人殺しになつちまうぜ、まさかはやてに殺しをさせてくれとでも言わせたかったのか？」

「どうやら、自分の血の黒さを、まだ正しく認識していなかったと言  
う訳か。」

「ああ、お前の言う通りだ……私は確かに血に飢えたケダモノだ、無意識の内に蒐集行為を本性を誤魔化すための言い分にしていた」

いくら兵士にとって戦場が日常であつたとしても、鬪争を求める血を抑えられないようでは、騎士の風上にも置けない。

主に押しつけるところだったのが尚更だ。

あんな獣の牙と血の黒さは、あの幼く清らかな少女に見せるべきでは無かつたと言うのに。

「まあ、恨むんなら、今まで散々戦いばつかな世界に放りこんどいて、今さら一応平和なとこに来させちまつた運を恨むんだな」

さっきの『陰』の表情から、いつもの陽に変わった紅蓮の手がシグナムの肩に置かれた。

「それに、折角血だらけな毎日から解放されたんだ、どうせなら楽しめるだけ楽しんじまおうぜ、『平穩』つてやつをさ」

「そうか……やつと私たちは、暗闇で行く先も分からなかった洞窟から、日差しが照らされた地表に出てこられたのか。」

「なら、これはむしろ喜ぶべきところだ。」

「当分は己との戦いを強いられそうだが、どこからか、それを乗り越えられそうな自信が出てきた。」

主と、義理とはいえ兄である紅蓮のお陰……かもしれないな。

「シグナム？どうしたの？いきなり笑って」

「いや…蒐集と戦いとは無縁な生活も、悪くないと思ってな、折角の好機だ、『八神の一員』として、この生活に慣れて行こうではないか」

彼の言う通り、楽しめるだけ楽しむとしよう。

この『平穩』と言う名の日々を。

全国に展開している某ショッピングモールの女性用衣服売り場で、シグナム達の春服と夏服を、そのまま食品売り場で今日の夕食を含めた買い出しを行ったはやてと久遠は、八神家宅へと歩を進めていた。

「ありがとなくうちちゃん、荷物全部持ってもらって」

「平気♪ 久遠……力持ち」

「それは頼もしいわ」

荷物は、はやてが車椅子な立場も有り、全て久遠が持っていた。

大の大人でも長時間持ちながらの歩行に難があると思えるほどの大量の服やら食物やらが入った袋の群れを抱えているが、特に苦も無く歩き、そのままはやてと会話できる余裕すら有る。

絶世の金髪美少女な外見もあって、通行人が思わず歩を止めて視線を止めてしまうくらいに、かなり目立ってはいたが完全に耳と尻尾は隠しているので当人はそんなに気にしてない。

でも、早く帰って堂々と出したいというメーターもとい気持ちは、着々上昇していた。

普段出しっぱなので、隠しているとどうしても窮屈に感じてしまう。

でもうつかり出して騒ぎを起こして、はやてに迷惑をかけるなんてまっぴら御免だったので、どうにか我慢できていた。

「くうちちゃん…」

「何っ……はやて…」

久遠はいきなりかしこまった表情で自分のあだ名を呼ぶはやてに、



久遠は首を傾げる。

歩を速めて、はやての後ろから横に並んで彼女の横顔を眺める。

今は外見より心が幼い久遠でも、陰りを感じさせる表情。

何があつたんだろう？

ここ最近はやてがこんな表情になる出来事なんて……少なくとも久遠には心当たりが無い。

「ごめんなくうちちゃん」

「くう？」

ましてや、こんな風に彼女から謝られる心当たりなどは全くだ。

思わず完璧に人間に化けているのに、狐としての素が出てしまった。

直ぐ近くに通行人がいなかったのは幸い。

「私……前から……もっと家族が欲しいって、思つとつたんよ」

「……………」

「兄ちゃんやくうちちゃん、先生にお金のやりくりしてくれるおじさんもいるのに……………」

久遠は、以前紅蓮から聞いたことを思い出す。

はやては人一倍優しいが、その分自分の分はおろか、他人の悲しさとか辛さ重さとか背負ってしまう。

我儘なんて言えない。

他人が傷つくくらいなら、人に重圧かけてしまうくらいならいっそ自分が、自分がと背負いこもうとする。

そんな子なんだって、彼から聞いたことがある。

紅蓮の言う通りだと思ふ。

足が不自由なことだって、動かない足に傷つくことよりも、足が動かない身の上で誰かに迷惑かける方にもっと傷ついてしまう。

朝のヴォルケンリッターに対しての『お願い』は、彼女の望みが完全ではないにせよ叶われる願ってもない瞬間が来たゆえでの心からの気持ちだっただろう。

父と母がいた頃のように、大勢の家族と一緒に暮らす夢。

でも一方で、自分の今朝露わにした願望が、自分と紅蓮にはシヨツ

クだったのでは、自分たちでは物足りない、と思わせてしまったのではと感じてしまったようだ。

「久遠、迷惑じゃない」

「くうちゃん？」

「はやての…家族、増えて、凄く嬉しい」

だから伝えておこう、たとえ擬似的なものでも、はやてに新しい家族ができたことに、自分も喜んでいることを。

自分にとって、八神兄妹は誰かと一緒にいる喜びを思い出させてくれた人たちだから。

「久遠も、一緒に暮らしていい？」

「ええよ、うちには聞かん坊が多いさかい、お目付け役お願いできるか？」

「くおん♪」

やっと笑ってくれた。

久遠ははやての笑顔が大好きだ。

本当は似てないはずなのに、遠い昔に一緒にいた母の面影を思い出す。

今まで独りだった頃は、辛い思い出しか思い出せなかった。

でも、それだけじゃないってこと、紅蓮たちに出会って思いだせた。

そんな救いとなってくれた人たちが悲しむのは辛い。

けど、その『悲しい』を誰にも見せられないのはもっと辛い。

今のはやてがそう、さっきの吐露だけでも、きつと悩みに悩んで打ち明けた。

独りにはさせない、独りから解放してくれた人に、独りぼっちにはさせない。

今までちよくちよく八神家に訪問するのに、夜遅くには神社裏の森に帰ってしまうのは、自分が人じゃないって遠慮もあった。

だけどそれは騎士たちもそうだ。

多分、心無い主の為に、いっぱい人を殺してきた。

人の皮を被った怪物だと、言い聞かせながら。

あの人たちからは、ほんの微かだけれど、血の鼻に付く独特の臭い

を感じたから。

それでも、はやてたちの家族になって上げられるのだ。  
もう遠慮する必要が無い。

このまま遠慮して、勝手に焼きもち焼くくらいなら、友達として  
ずっと一緒にいてあげよう。

「どうしたん？急に笑って」

「何でもない♪」

声が弾んでいた。

今日は色んな意味で記念日だ。

絶対この日を忘れないようにしよう。

少女の姿の久遠は、どこまでも純真な女の子であった。

「紅蓮…今日はやけにやつれてるけどどうした」

八神紅蓮と一緒に帰宅しているクラスメイトの一人が、紅蓮のやつ  
れっぷりを指摘した。

紅蓮はクラスでも、そのムードメーカーさを発揮し、クラスを明る  
くすることに長けていた。

まあ明るさが過ぎて。

「これで黒いジャージ着て関西弁で『ワイ』なら、完璧に三馬鹿トリオ  
の一人」

と言われたことがある。

見方を変えれば、それだけ彼が周りど、気取らず飾らずに付き合え  
る性格である証しだ。

「ああ〜色々あってさ…」

「色々って？」

「色々と言いや色々なんだよ…」

原因はやはり騎士たちの事。

彼らを信用してないって訳じゃない。

異世界から来たと言う意味では、ある種の同胞でもある。

だが、〃あいつら〃が『これも主はやてのため』などと称して何かトラブルを起こしてたらどうしようかと気が無かった。

自分も、八神家に保護されず、『あいつ』から人間に変身できる能力をもらわなかったら、色々騒動を起こしていたと容易に想像できるだけに……そのせいで精神的に余裕が無くピリピリし、放課後の時間帯には、疲労の蓄積でどよ〜んとした空気すら発する状態になっていた。

「じゃあまた明日な……」

クラスメイトと別れ、暫く歩くと、いつの間にか八神家宅に着いていた。

とりあえず、やつれて擦り切れていた自分をスッキリさせるべく、頬をバチつと叩き、気分を入れ替え。

「ただいま」

家のドアを開けた。

「おかえり兄ちゃん♪」

「のわあ！」

瞬間、玄関で奇声を上げてたじろぐ紅蓮。

何に驚いたのかと言うと。

「と、飛んでやがる!?!」

闇の書が、はやての周りをふわりふわりと飛んでいたことにだ。

「あ、実はな、闇の書の中にシグナム達のお仲間さんがもう一人おっつな、その子が書を動かしてるんやて」

「そ、そうなのか……」

聞くところによると、書には主とは別に書のシステムを管理、制御しているプログラム生命体がいるという。

何百人分の魔力を扱えるチートスペックなアイテムなのだ。

主一人で全部賄い、扱うには無理がある。

そいつと会えないのか？ と騎士たちに聞いてみたところ、書が完成しないと書から出てこれない面倒な仕組みになっているらしく、蒐集しない以上、直に顔を合わせることは叶わない相談だった。

本越しに触れ合えるだけでも良しとするしかない。

自分だったら、そんだけじゃ満足できず、ルールなんてクソくらえな感じで、無理やりでてくるかもと、この時紅蓮は思うのであった。

んで、それはそうと……目覚めて一日目である守護騎士たち。

「はやて」、おかわりいいか?」

「ええよ、どんどん食べてな」

「シグナム、そのドレッシング取って」

「ああ、これか?」

「ありがとう」

今のは夕食時の風景での会話の一つ。

はつきり言おう、この騎士たち、たった一日分ちよつとで馴染み過ぎである。

場面は少し進んで、本日の八神家の夕食の風景。

人数が増えただけあり、テーブルにはいつもより豪勢で多種多様なはやての手料理が並んでいる。

家族が増えたこともあり、相当入れこんだようだ。

その食卓に、朝の飾り気の無いノースリーブの黒服から各キャラに合わせた現代の私服を着こなしたヴォルケンリッターが、髪色のこともあつて違和感はあるが、すつかりこの現代の空気に溶け込んでいた。

適応能力の無駄遣いにもほどがある。

かの征服王を筆頭とした英霊たちと、タメ張れるのでは無いか?

適応力をパラメーターで置き換えれば、最低でもA++、最高でE Xを叩きだすかもしれない。

しかも、何気にヴィータははやてを呼び捨てにしていた。

はやてが各々の名で呼んで欲しいと言ったので、じゃあおかまいなくと『はやて』になったとのこと。

ちなみにシヤマルは『はやてちゃん』、シグナムとザフィーラは元の性格も相まって、さすがに恐れ多かったのか『主』或いは『主はやて』のまま貫き通した。

「どうしたよ紅蓮？ 全然箸進んでねえじゃねえか」

そのヴィータの言う通り、紅蓮の料理を口に運ぶペースがいつもより遅い。

いつもなら、ご飯三杯は余裕で行くところがまだ一杯目で半分も減っていない。

騎士たちの環境適応能力の高さに、しばらく呆然としていたせいだ。

「言われなくともおわかりするぜ、オレンジジロリ」

「んぐ……言ったな人さまが気にしてること……」

やたら女性率が高い守護騎士たちだが、シグナムもシャマルも、日本の芸能人どころかハリウッドスター顔負けの美貌とスタイル持ちである。

ヴィータ柄の悪さを除けば美少女と呼べるだけのルックスなのが、如何せん外見ならはやてや久遠より年下な幼児体型。

で、プログラム生命体なので、生まれた時からこの姿。

つまりヴィータは書がこの世で最初に起動された時から、スタイルの良い仲間と、己のメリハリの無い体にコンプレックスを抱きながら生きてきたというわけ。

「まあいい、一応あたしは大人だからな、その程度で怒ったりしねえよ」

どの口が言うか、である。

その証拠に。

「そうだよな、ヴィータもう××歳だもんな」

「てーめんえええええー！！！！」

言った傍からこれだ。

煽つたのは紅蓮だが、彼の発言にブチ切れたヴィータは、憤怒混じりのギャグ顔で彼に迫り。

「ヴィータちゃん落ち着いて！」

「今食事時なんだぞー！」

「離せ！ 離せよ！ こいつだあけえは今ブツ飛ばさなきやー！ー！ー！  
腹の虫がああああー！ー！ー！ 収まんねえええん

だああああー！！！！

シグナムとシャマルに羽交い絞めにされて取り押さえられた。

仲間の拘束を振りほどかんど、もがき足掻くヴィータ。

ここではやては、この一連の流れに既知感——デジャヴを感じた。

何やる？ この流れどつかで見たことがあるんよな、このシチュ

エーション。

どこで見たんやっけな？

テレビのバラエティ番組で見たことがあるってどこまでは思いだせるんやけど。

なぜか『仁義○き戦いのテーマ』の曲が頭の中で流れてきてるんやけど。

「言っただろ！あたしはてめえより年上だって！こんでもな——」

「今でもちつちえーじやんか」

「こおおんのおおおおー！！！！！！どきあがれってんだよお前ら！！」

紅蓮の油を注ぐ、てんどんネタ的な発言に白眼を向かしながら、シグナム達の制止を振り切ろうと、さらにもがく力を増量して暴れるヴィータ。

これで彼女が大人で年上だとは誰も思うまい。

実を言うと、紅蓮が彼女らに明言していかないだけで、実年齢ならヴォルケンリッター以上だったりする。

巨人族だけあり、寿命はウルトラ戦士とほぼ同じくらいの長命で、紅蓮本人ですら、具体的な齢の数字を覚えていないほどだ。

年齢ネタと体格ネタで巻き起こるハプニングに、はやては今まで引っかかっていたデジャヴの正体に行きついた。

あ、あれや、うた○んでア○シがゲストで来た時に、大○君がS M ○Pの中○君に喧嘩吹っ掛けるあの下克上コントや、こうして見るとまんま同じ構図。

どうりであの仁義なきBGMが脳内再生されるわけや。

おもろかったなあ、あのコント。

気だるそうにぼそつと湯夫役大○君の暴言にブチギれる中○君と、

それを抑える他のメンバーの絵柄が最高やったわ。

兄ちゃんもあの下克上コントから狙ってやったんやろな。

はやての予想は的中していた。

紅蓮はヴィータに中○さんのなりアクションさせるつもりで、狙って煽ったのだから。

あかん、今でも笑いだすと腹が笑いで痛くなるwww

中○君の友達の子がいつも楽しみにしてたって本人が言ってたけど、その子とはいい酒が飲めそうや。

「くうん？（はやて？）」

今何歳だあんた……口と腹を抑えるニヤケ顔なはやてに？顔を浮かばせ、首をかわいらしくかき上げる久遠である。

なんで彼女が昨夜のように止めないかと言うと、雷撃で強制的に『頭を冷やそうか』とこの時の久遠は考えていたが、シグナムたちとせっかくはやてが作った料理を巻き添えにしかねないので、この場での実力行使は半ば諦めていた。

「主……笑っておられないでヴィータたちをお止めて下さい」

「そやな、落ち着いてなヴィータ、兄ちゃんもやり過ぎやで、めっ！や」

呆れ気味に進言するザフィーラを切っ掛けに我に返ったはやての仲介でその場は丸く収まる。

あれだけの騒ぎにも拘わらず、料理が盛り込まれたお皿が一枚もひっくり返ってないのは幸いであった。

「はやてそう言うなら……しょうがねえな」

「悪い、あんまり面白かったんでな、お前だつて笑つてただろ？」

「それとこれとは話は別や、さあ、冷める前にはよう食べてな」

まあ、今度は石○さんみたいに兄ちゃんにネタを仕込んでみようかな。

魔法には思念通話つうテレパシーが使えるそうやし、と思考しつつ食するはやて……この狸少女、などと突っ込まれそうだ。

まあ何はともあれ、八神家の食卓は穏やかな様相を取り戻していくのであった。



そんな団らんを外から眺める影が一つ。

その影の正体は、ある目的で八神家を日夜監視し、数か月後ウルトラ戦士の師弟たちと戦闘で、苦杯を舐めさせられることになる。

あの「仮面の男」そのものだった。

事態が急転直下に陥り、日常に暗い影が落とされるのは、それからもう少し先の出来事である。

つづく

## STAGE 16 | 賑やかな八神家の日常

地球に転生して八神家の一員となった闇の書の守り手、守護騎士ヴォルケンリッターと、主のはやて、義兄の八神紅蓮ことグレンフアイヤー、騎士たちより兄妹との付き合いが長い妖弧の久遠たちによって始まった共同生活。

騎士や久遠の戸籍に関する諸々は、金銭援助をしてきている海外の御親戚が手を回してくれたのでどうにかなり、はやての担当医である石田幸恵先生には遠縁の親戚の方々と説明した。

初見は流石に日本人どころか地球人離れた（紅蓮も該当するけど）シグナムたちを怪しげに見ていたが、前々からはやての支柱になつてくれる人がもつとあればと石田医師は考えていただけに、快く彼らの存在を受け入れてくれた。

日本の現代的な住宅に、異世界から来た巨人の人間体、人並の知性を持ち、人間たちに紡がれ創造された伝承、物語によくみられる妖術を駆使し、人にすら姿を変えられる小さな子狐、世界を渡り歩いてきた魔導書から生み出されし主を護る使命を帯びた魔法で編みあげられたプログラムの肉体を持つ騎士たち。

地球の常識範囲内で、“人間”と呼べるのが実質家内では一番の末っ子なはやてだけという、アメリカよりも多種に渡ったサラダボールな家族構成となった八神家。

そういうわけで、一般家庭では絶対見られないようなイベントが、この共同生活では度々起きることになる。

今回はそのイベントの数々を、オムニバス形式で紹介しよう。

たとえば、ある朝の、八神家の朝食。

「うっ……………」

「ぬう……………」

「くう……………」

その日の朝は、全員重くダンマリとどよよんとした空気を発散

しながら、朝下をとっていた。

いつもなら紅蓮にヴィータに久遠が勢いよく味わいながらおかわりを頼み、そこその大所帯でもあるので、こうして一同に会して食せば、かなり賑わいのある食卓の一風景になるはずなのだが……今日に限って言えば、正確には「彼女」が料理を作る日はほぼ毎回、みな黙秘権を最大限に活用して、味覚が刺激されたことで沸き上がる情を抑え込んでいた。

「みんな……今日のはどう？ 自信はあつたん……だけど」

この今朝の食卓のテンションのゲージが、異様に低くなっている食卓の沈黙の元凶——風の癒し手、湖の騎士シヤマル。

彼女は、自ら調理したお手製の料理の感想を黙秘を続けて一言も発さない一同に感想を求めてきた。

シヤマルの言葉に、余計沈痛な面持ちになる一同、彼らのその表情には、正直に答えるべきか否か、凄絶で悲愴感さえ漂わせる苦悩と葛藤を刻ませていた。

このままでは悩みに悩む全員が、世界の救済を求めながら、最終的に世界の根源に至ろうとする概念と化してしまった台密の僧並に皺ができてしまいそうな勢いで老けそうだ。

「お願い！ そんな顔して黙ってるくらいなら、いつそ本当のこと言つてえええええー！！！！」

その空気に精神を摩耗させ、耐えられなくなったシヤマルは悲痛の叫びを上げる。

その有様にいたたまれなくなり、どつちにしろ癒し手が傷つくマルチバツド

エンドになると痛感した一同は、事前に打ち合わせをしているわけでも無かったのに、絶妙なハモリ具合で。

「美味しく無いです」

シヤマルの料理を一言で下した。

気を遣っているのか、表現が遠回し気味で、普段タメ口なメンツまで敬語を使っている。

それでも下された当人には手痛い精神的ダメージであったのか、

シヤマルは部屋の隅ですすり泣き、暗い波動を漂わせながら、体を丸くして蹲っていた。

はやての『お願い』によって、守護騎士たちは、今までは起動早々過去の主たちから強いられた蒐集行為をしない方針を取るようになった。

それは同時に、武器を取って戦うことはもう実質無いことを意味していた。

はやて自身に悪意は無いし、騎士たちも納得の上なのだが、これはある意味ではリストラにも等しい。

彼らは戦争ばかりやってきた、戦闘以外に取り柄が無い者たちだからだ。

しかも異世界から来たので、当然騎士達には日本国籍は無いし、不法入国もいいところ、そういう立ち位置なので前述のことを含め、外で働き口を見つuckerのは中々困難であり……となるちはまず、せめて家事くらいはできるようにしておかなければならない。

タダ飯食らいは、とても騎士の誇りに賭けてあるまじき、許されない行為だったからだ。

よって、八神家では日ごとに掃除、炊事、洗濯、さらにははやての入浴同伴係の当番を割り決めることとなったのだが、その悪い方の結果が、シヤマルの料理だった。

シヤマルに限らず、ヴォルケンリッターに料理の経験はほぼ皆無。

まともに味覚を感じる料理を食したことさえ、はやての手料理を口にするまでは全く無かった。それだけに初めて食べた感動は忘れ難い。

シヤマルとヴィータは余りのおいしさを前に感動し、シグナムも二人ほどでは無いが瞳を潤ませ、ザフィーラも表の顔こそポーカーフェイスのままだったが、まだ自分たちに味覚が残っていることを実感し、その事実喜んでいた。

その為、心に火がつき、主とはいえ、今年で11歳の女の子に負けれないといわんばかりにシヤマルははやてから手ほどきを受けながら、料理に挑戦してみたのだが、御覧の通り食卓の空気を破壊する

散々な結果となった。

特に初日は酷いもので、見た目こそ、フィクションでよく見られるようなどす黒い毒性のオーラは発されず、それなりに見栄えは良かったのだが。

「すまないシヤマル、一口で食欲が無くなった…」

「あたしらを毒殺する気なのか？ シヤマル」

「シヤまっちゃんよ、あんまりの不味さで吐き飛ばしそうになったじゃねえか…」

各々の表現で不満を口にするシグナム、ヴィータに紅蓮。

「……………」

「く~~~~ん」

「あはは……」

久遠もザファイラも、言葉にはしていないが、その様子から食欲が減退したことは容易だった。

はやても返す言葉が見つからないようで、ぎこちなく笑うことしかできなかった。

全員、シヤマルの手料理を口にした瞬間、舌が不快感で不協和音を響かし奏でて、一気に体が拒絶反応を起こし、防衛本能が異物を体から出そうとし、思わず口から食べた物を吐きだすはしたない行為を危うく実行しそうになった。

理性をフル稼働させ、どうにか胃腸に放り込むことはできたが、これ以上皿に盛りつけられた料理を、とても口にできそうにない。

「みんな酷い！ せつかく作ったのにいいいいいい……！！」

「おい待てよシヤマっちゃん！」

人として正しく、生き物としても正常な反応だが、余りにも冷酷な一同のリアクションに耐えかねたシヤマルはエプロン姿のまま、号泣しながら外に出て行ってしまった。

「とりあえず、食べてしまおか……」

「はい」

「そだな……」

このまま残すのも、罪悪感に心が押しつぶされそうになるので、死に不味さと格闘しながら、はやてたちはどうにか完食するのであった。

その日は夕方になるまで、シャマルは帰ってくることは無かった。以来、めげずに修練を重ねて入るのだが、冒頭のように、結果に結び付かないのが現状。

多少不味さは軽減されたが、無味無臭という、却って貴重だが美味しいと言えない味となっていた。

そして、みんなから不評塗れの料理の感想を突きつけられる度、シャマルはシヨックで八神家宅から飛び出してしまうという流れが恒例となっていた。

「シャマルのやつ、料理作って挫折するたんびに飛び出していきやがって……」

「ヴィータ、今動かすのは体の方だぞ」

「わりの、ほら次のやつ」

空が快晴真つ只中な午前の八神家の庭にて、大人姿の久遠とヴィータは洗濯したての衣類を干す作業をしていた。

紅蓮は学校、シグナムは最近見つけたある仕事、はやては体軀を本来よりやや小型化させた狼形態のザファイラ（それでも大型犬の大きさではある）と一緒に家出したシャマルを探している最中。

ヴィータが各衣服の皺を伸ばし、久遠がハンガーにかけつつ物干しざおに掛ける分担作業で取り組む二人。

流石に狐耳と尾と巫女服では目立つどころではないので、騎士たちの私服選びのついでに購入した衣服を、今久遠は着込んでいる。

あの巫女服は魔力製なので、その分魔力消費も嵩むものもあるからだ。

黒のタートルネックにジーパンと飾り気のない組み合わせだが、その地味さが――

「大きい」

――幼児体型へのコンプレックスが、平穏な日常ではやてに転生以

前より大きくなっているヴィータが眩くほど、大人モードの久遠はスタイルの良い金髪美女さんだった。

バストだけ見ても、シグナムには譲るが、シヤマルより上な大きな双丘。

「この姿は魔力で変身しているだけで、本当にこんな体格なわけではないぞ」

「それでもあたしには、その風体になれるだけで羨ましいんだよ」

「だがヴィータの幼い体軀も中々可愛げがあるぞ」

「ガキにも大人にもなれる久遠が言っても説得力がねえよ」

「うふふ……これは失敬したな」

朝のシヤマルお手製料理の件や、久遠のスタイルのことなど、他愛ない会話をしながら進める二人を、見ている者がいた。

「あ、闇の書」

開いたガラス戸から、金の十字架のレリーフが印象的な魔導書が庭の敷地内に出てきた。

「あの書物本体を動かしているのは、例の『管制人格』殿であつたな？」

「うん」

「本当に彼女固有の名は無いのか？」

「無えよ、あいつ自身も名前があつたのか、そもそも初めから付けられてなかつたのか……知らなかつたみたいだし」

「名無しの権兵衛、ジョン・ドウというやつか……少し前の私と同じだな」

「え？」

「言わなかつたか？ 久遠という名ははやと紅蓮に付けられたものだ」

「そーいや……そうだったつけ、でも紅蓮から『くおくん』と鳴くからって単純さで付けられたもん、よく気にいったよな」

と言いながら彼女の横顔を見て、ヴィータは手を止めた。

昔をせつなそうに回想しているような……そんな顔だった。

「実は……偶然ではあるのだが、私の母と同じ名だったのだ……」  
ぽつりと零したその一言。

「……………」

ヴィータは彼女の表情と物言いから、『久遠』の名についての話題はここで切り上げることにした。

久遠は八神兄妹と会う以前のことは余り話さない。

口にしてくれたのはせいぜい、海鳴に腰を据えるまでは何十、何百年も日本全国を放浪していたことと、生みの親が現代から『江戸時代』と呼ばれた時代に亡くなったことだけ。

自分ら騎士たちも、明言するには憚れる過去を持つ身。

下手にずかずか入りこまない方が良い。

「しけた話をしてしまったな、すまない」

「いいよ、それよりとつとこの服の山全部干してシヤマルを探しに行こうぜ、下手すると迷子になって、おまわりに保護されてるかもしれねえ」

「いくらドジっ子と評されそうな今の彼女でも、そこまでは——」

ヴィータは今の台詞はジョークのつもりで言ったつもりで、久遠も笑いつつさらつと流そうとした最中、リビングから電子音が流れてきた。

電話の受信音だ。

久遠は一旦物干しを中断し、リビングに駆けこみ、受話器を手に取り。

「はいもしもし八神です」

今は各々の用で外出している実質家主な八神兄妹の代わりに応対する。

しばしの間、電話越しに相手と何らかの話をした後、受話器を置いた。

同時に溜め息を零す。

その様子が気になったヴィータは尋ねてみた。

「誰からだったんだ？」

「警察だ」

「な、何だって？」

「つまり、ヴィータのジョークが真になったということさ」



詳細を述べるなら、勢いと言うか感情任せに外を走り回った結果、迷子になってしまい、近くを通りかかったお巡りさんのお世話になってしまったのだった。

八神家での家事当番の項目には、一般的なものの他に八神家独自のものがある。

「さて、はやての入浴同伴の割り決めなのだが」

それが今久遠が口にしたのはやての入浴同伴係。

知つての通り、はやては下半身不随の障害を患っている。

加えてまだ幼い上に、同年代の女の子より小柄な体格なので、とても一人で風呂に入るなどできるわけがなかった。

その為、久遠が来るまでは、紅蓮と一緒に流し合いっこをしていた。久遠が二人に妖狐であることを明かして、八神家を出入りするようになってからは、はやて自身異性が気になるお年頃に近づきつつあったので、大人モードになった彼女が同伴するようになった。

そこに守護騎士たちも加わったことで、八神家の年長組な女性陣三人は日ごとに交代で、はやてと一緒に入ることとなる。

実はここに至るのに、そんなに深刻なことでもないのだが…………ちよつとした紆余曲折があった。

「ところで久遠、お前がこの家に入入りする前は、主はどうやって湯あみをなされていたのだ？」

「はやて本人によれば、紅蓮と一緒に入っていたそうだ」

「な、何…………だど？」

「仕方あるまい、ヘルパーに頼めばその分金銭がかかってしまうからな」

からつとしたこの妖狐の言い方に反して、女性には驚愕させるに値する発言に部屋の大気が凝固する。

シグナムとシャルマルは、前述の一言を元に脳内である映像を浮かび

あげ、それによって頬を熱くさせていた。

その映像とは、混浴している八神兄妹の凶。

「くうちゃんがはやてちゃんたちと会ったのは……2年くらい前だったよね」

「そうだが」

特に烈火の将は、自分の想像が火種となり、八重桜色の長髪より顔が赤く火照らせ。

「シグナム、どこへいくのだ!?!」

いきなりその場から走り出した。

彼女の走り行く先は二階。

それも紅蓮の使っている個室。

その上尚且つ。

「レヴァンティーン!」

キーホルダーと言われても違和感の無い、ペンダントとして首に掛けている待機モードの愛剣を彼女は起動させ。

「切り捨てえええええ御免

!!!」

「な、なんだ!?!」

ノックもせず紅蓮の部屋に入りこむと同時に、頬を真っ赤っかにしたまま、学校の宿題で机と睨めっこしていた部屋の主——紅蓮に斬りかかった。

紅蓮が上段からの斬撃を真剣白刃取りで何とか止める。

「いくら主はやての足が悪く——兄君とは言え——じよ……じよじよ女性である主と混浴とははしたないぞ紅蓮!」

「ちよちよちよちよ!ちよっタンマ!こんな狭えところできそでけえ真剣なんか振り回すな!」

「その心配は無用——切らぬよう魔力で刀身をコーティングしている!少し痛い死ぬことはない!」

「それで『はいそうですか』と、のこのこ切られるバカがいるか!」

「貴様——我が剣術と愛機を侮辱するというのかあああああ——!?!」

「そんなわけあるかあああああ——!?!」

どうも彼女は凛々しく色香溢れる外見とは対照的に、いやむしろ下手な男より男らしい気性が災いしてか、『性』に関しては、知識も経験も一般人未満のようで、心が過剰反応してしまったようだ。

ここが家内でなければ、反射的に紅蓮がファイヤーステイクを取り出して応戦してしまうほどの剣幕だった。

会話にすらなっていない、言葉と言葉の弾丸の撃ち合いの後、どうにかはやての説得によって落ち着きを取り戻し。

「今まで主を支えてくれた方に対し、お恥ずかしい姿をお見せした…」と、シグナムは紅蓮に律義に頭を下げてくれた。

こうもはつきり謝られると、とても紅蓮は怒る気になれず、一応騒動は終結するのであった。

が、この時女性陣の騎士たちは知る由も無かった。

はやてには、ある特殊な嗜好を持っているという事に。

交代制が決まり、最初に経験者である久遠が、はやてと一緒に入ることが決まり、大人モードに変身した彼女は、はやてを抱えて浴室に繋がる洗面所に入って行った。

その前に久遠シグナムたちは、わざわざテレパシー、騎士たちには思念通話と称される念話で……

「(忠告しておく、浴室でのはやてには気を付ける)」

と意味深な台詞を残していた。

一体何のことだろうか？ 女性陣は頭を捻ざるを得なかった。

浴室が、実は危険が潜んでいる場所だということは分かる。

床は水でぬかるんで滑りやすいし、室内は狭い上に角が多いので、一度足を滑らせれば大惨事になってしまう。

いくら家中にバリアフリーが行き届いていたとしても、足が不自由なはやてと入浴する以上は、より慎重にいかなければならない。

それに気をつけろと言う意味なら、まあ納得はできる。

しかし、久遠があの時自分たちに伝えようとした事柄は、それとは異なる感じがする。

判断材料が少ないので、それ以上久遠の発言の意図は掴めなかった。

逆に特に脈絡の無い冗談の類かもしれないし、これ以上真面目に考察するのも何だったので、そこで思考を打ち切ろうとしたその時――

突然、浴室からエコーのかかった久遠の声が響いてきた。――  
だが様子がおかしい。否、おかしいを通り越して異常、明らかに「風呂場」から出ていい声ではない。

特に幼子たちには、はつきりと明言できないものの類だ。

「一体何事だ紅蓮？」

「あゝ気にすんな、こんなのいつものことだからさ」

紅蓮はもう慣れたと言わんばかりの声色で返してきたが、気にしないほうが正直言つて無理な話だ。

久遠が口から発しているのはいわば、体が敏感に反応する部分を愛撫され、そこから来る刺激に悶え、快感に酔いしれている状態の時の女性が呻く声。

男を理性ある人間から、知を徹底的にそぎ落とさせ、本能のままに行動する獣に変える魔性の言霊だった。

だが、一緒に入っているのは同姓であるはやてのはず、それはどうして今のような声を上げる状況に陥っているのだ？

居ても立ってもいられなくなり、女性陣は慌てて浴室へと向かった。

「お前らは来るんじゃないぞ」

「へ〜い」

「分かっている…」

ヴィータは男性に釘を指すことも忘れずにだ。

そして女性陣は今でも、久遠の無駄に色気があるいやらしい声が響く浴室のドアに着き。

「何があった!? 久遠!」

勢いよく戸を開けると。

「みんな、どないしたん?」

そこにはキョトンとした表情のはやてと、相対して気持ちよさそう

に頬を染めて、だらしなく口を開けて息を荒げ、視線の焦点が定まっていな久遠がいた。

ついでに言えば、はやては久遠の後ろに回り、その手は両方とも彼女の脇をすり抜けて、そのシグナムたちに勝るとも劣らない豊満な二つの盛り上がる丘に手をかけていた。

「すまない、そなたたちにははしたない姿を晒してしまったな」

数十分後、さっきの痴態はどこへやら、大人モード特有の雅びさと凛々しさと慎ましさを取り戻した久遠が騎士たちに、浴室で起きていたことを説明していた。

「いや、あの声が主はやてが久遠の胸を揉んだことにより起きたというのは分かった」

聞くところによれば、はやてが久遠の胸を揉みに揉みまくる行為は、共に入浴するたび、ほぼ必ず起きていることだという。

最初の時は紅蓮も余りの官能さに鼻血を出して気絶することを頻繁に起こしていたが、おかげと言うか何と言うか、性への免疫がすっかり付き、今日の頃にはリアクション薄めでスルーし、『おっぱい星人』と揶揄できるまでに至った。

時刻は既に9時を過ぎていたので、はやてはもうヴィータと一緒に夢の中に入っている。

よって心おきなくお子様には刺激が強い話をする事ができた。

「しかし…なぜあの幼い主がかのようなことを…」

「あいつが4歳の時に、親父さんとお袋さんが事故で昇天しちまったことは話したよな」

「ああ、それが何か？」

「人間で4歳といえ、子が母乳を卒業してからそんなに経っていないし、まだまだ親に甘えたい盛りの年頃だ」

ザフィーラの質問に紅蓮が答え、久遠が補足を入れた。

両親が既にこの世にいないことも、動かなくなつた足が治る見込みは現状全く無いことも、はやては幼いながらも、年相応より上の聡さ

で理解がしている。

だが久遠の言う通り、まだ親に甘えるだけ甘えたい歳に遭遇した永久の別れは、心の中にしこりとして残留している寂しさを抱えさせ、容赦なく重しとなる。

このことが影響となり、無意識の内にガス抜きとしての代償行為を行うことがある。

「それがあの他人の胸を揉む理由というわけか…」

「人の胸は、異性の本能を刺激する魔性だが、同時に母性の象徴でもある、それに触れる欲求があるということは、それだけ愛情に飢えていることだ」

そして生来の優しさからはやては普段、内に抱える「飢え」によって迷惑をかけまいと、心の奥底にしまいこんで、隠し通そうとしてしまう。

「だからお二人には、もしはやてから胸を触らせてほしいと言ってきたら、できるだけでいい、それを拒まないでほしい、今のはやてにはあれ以外に我を通して甘える術が無いからな」

「分かった…」

シグナムもシャマルも拒むつもりは無かった。

はやてのことは、最初は境遇にもめげずに生きる毅然とした少女だという印象を持っていたが、彼女もやはり人の子だ。

主を精神面で支えるのも自分たちの務めである、ならば久遠の頼みを断れるわけが無い。

「ただし一つだけ忠告がある」

「くうちちゃん、その忠告って？」

「実は経験を積んだせいで、今のはやては胸揉みにかけては相当のテクニシャンだ、その…白状すると…私はその毒牙に、すっかり病みつきになってしまったな」

今までの落ち着きのある言動が嘘のように、頬を赤らめ、もじもじとした仕草で途切れ途切れに紡ぐ久遠。

誰もが見惚れてしまう超絶美人だけあって、そのギャップが放つ破壊力はとてつも無かった。

「ああ、気をつけておこう」

そんな主の友人の思わぬ一面に、微笑ましなるシグナムたちなのであった。

つづく

## STAGE 17 — 烈火の煩悶

さて、今回も前回に引き続き八神家の取りとめの無い日々の断片をお送りしましょう。

「ごめんさい、買い物袋全部持たせちゃって」

「どうってことねえ、これぐらいやらなきや男が廃るわ」

「おう〜江戸っ子やね〜」

片や買い物帰りのはやととシヤマル、片や学校帰りに丁度二人とが鉢合わせ食品等の商品を詰めるだけ詰めたレジ袋を計5つ抱える紅蓮。

雑談を行き交う中、三人は家へと到着。

廊下に入り、キッチンと地続きとなったりリビングに入ろうとドアを開け——最初に目に入った光景を目にして、即座にしめ直した。

「今の…シグナムでしたよね？」

「シグつち…だったな」

「シグナム…やったね」

扉に背を向けて屈み、顔を合わすお三方。

何を見たのかというと、今彼女らが口にした通り、リビングであることをしているシグナムが“あること”をしていたのである。

それは平常の彼女の立ち振る舞いからは、とても信じがたいものであったので、真実か幻覚かのどちらなのか？ 真相を確かめるべく今度は手が入るか入らないかの小さな幅で扉を開け、隙間から覗く。

「やつぱり、シグナムやね」

「何を読んでるんでしょう？ テーブルに何冊もびっしり乗せてますけど」

「なんかネットも使ってるみてえだし」

シグナムが読んでいるテーブルに何冊も置かれた本は、コンビニやスーパーなどのショッパでよく見る小冊子、彼女はそれに目を通しながら、平行してPC画面に目を通し、マウスを動かしている。

「紅蓮兄ちゃん、テーブルの本のタイトル読めるか？」

「まかせとけ、え——えっと？ タオン…ワーク？」



その小冊子は、無料で手に入る求人誌であった。

「あのお仕事の募集とか載ってる冊子ですか？」

「ああ、他にもそれっぽいのが何個もある」

「つてことは……シグナムは求職中……つてことかいな？」

「そうだろうよ、てことはパソコンで見てるのは求人サイトで決まりな、ヴォルケンズのおっぱい騎士さんもようやくニートから卒業か」  
「紅蓮君……私たちのことをスポーツチームの名前みたいに略したり、変な渾名で呼ばないでください……でも、私たちの中で一番立ち位置が不安定ではあったわよね、シグナム」

「本人も結構気にしとったみたいやな……にしても働くシグナムか……たとえば——」

「はやて、想像させないでくれ、あいつにはスングク失礼なことしちまうから」

「紅蓮君、それ既に失礼極まりない気がするんだけど……」

「じゃあさしヤマつち、指輪の魔法使いのベルト、いや最近じゃマツハ○ライバーか……みてえにやつたら〜ハイテンションで騒がしい剣振り回すのと魔法以外にないつができるのを言ってみろよ」

「え？ えーと……う〜くん、うえ〜と……」

「シヤマル、ガンバや、何百年間の付き合いやろ？」

「何……してるの？」

「(ひゃあ!)(ひょえ!)」

中年女性たちのご近所トークか、はたまた湾岸署の某アミーゴな三人組かのようなトークをする三人はシグナムに意識を傾倒させていたので、後ろから聞こえた声に思わず大声を出しそうになったが、どうにか驚きの叫びを心の内のみに留めさせる。

出歯亀中の彼女らに声を掛けたのは、少女モードの久遠だ。

「くうちゃん……おどかさんといてな」

「そうだけ、せつかくお目にかかれなさそうなもんを直に目にできるチャンスだったのに」

「うっかり声にも出してリビングにいるシグナムにバレたら」

「もう……バレてる」

「「へ？」」

はやてたちは、自分らの背後にあるなにかを差す久遠の指先を辿り、後ろを振り向くと——すらつとしながらもほどよい肉感も備えたこげ茶色のパンストを纏った脚。

視線を上へ上へと登らせていくと。

「紅蓮はともかく……シヤマルに……主はやて、あなたまで」

「シ……シグナム、これわな」

いつの間にやら、シグナムがドアの直ぐ近くに立って三人を見下ろしていた。

「物珍しい光景だったでしょうし、笑いの種にもなるのも致し方ないことであるのも『納得』はできます」

「いや、そこまでは……」

「ですが、見世物ではないのですよ……私にとっては重要な問題であるのです」

そして、ぐいーと拳を握りしめ、わなわな体を振るわせ、その顔は火照りと涙目に覆われ、ぐぬぬと唇を噛みしめていた。

ヴォルケンリッターのリーダー、烈火の将ことシグナムは、八神家ででの生活を初めてから幾分か日々を過ぎて行くうちに、ある悩みに直面していた。

八神家における、自身のあやふやで不安定で半端な立ち位置。

実質無職で、確たるポジションに身を置けない現況。

「つまりさ、シグナムはニートになりかけてる自分が嫌なんだろう？」

「うぐつ……」

「ヴィータちゃん、せめてもう少し遠回しに言ってあげて」

ヴィータのストレートな物言いによる精神的な圧迫に胸を抑えるシグナム。

前述のヴィータの言葉には、彼女の苦悩を解りやすく端的に、辛辣

に表現されていた。

時と場所は進んで、食後の時間帯のリビングでは、八神家宅に暮らす者たち全員が集まって、一種の家族会議的なものを行っている最中。

お題はシグナムの今と将来への不安だった。

先程も申ししたが、彼女は八神家では一番半端な立場だ。

はやては下半身不随で学校を休学中だが料理担当。

紅蓮も戸籍上はまだ学生で働けないが、料理以外の家事を担い。

シヤマルも家事にやりつつ、ご近所づきあいのポジジョンに付いている。

見た目年齢なら最年少で、紅蓮と同じく法律上働きたくとも働けないヴィータも、はやての数少ない遊び相手で、かつここから少し先の未来では、あるスポーツを通じて近所のご高齢の方々のアイドルとなっている。

「定職に就いていないのは、私も同様だが？」

「私も世間一般では本来、動物扱いされる身だし」

「助勢の言葉はありがたいが……お前たち二人にも、主はやての介助という重要な任を持っているではないか」

「……………」

久遠とザファイラのフォローも、余り効果を出せずじまいに終わる。

この獣組の二人でさえ、実ははやての介助役という仕事を持ち合せていた。

健全者は普段何気なく歩いている道でさえ、車椅子な方には進行を大いに阻害させるバリアが幾つも存在している。

それに以前、はやては横断歩道を渡る際に転び、危うくトラックに轢かれそうになったことがあり、以来外出は石田先生の進言もあつてほぼ必ず同伴者を付けるようになった。

主にその同伴を担うのが狼形態のザファイラと狐形態の久遠。

久遠は人間体と同様、本来の姿な狐でも体格を変えられるので、成体時まで身を大きくし、幻覚の術で周囲には『犬』だと錯覚させ、ザ



にもその場で思いつきり爆笑。

かなり笑いを誘発する効果があったようで、しょっぱなからお腹を押さえこみ、紅蓮はうつ伏せで、ヴィータは仰向けで笑い転がっている。

二人が脳内でシグナムにさせた職業は色々だが、しいて上げるとすれば。

無難なところでデスクワークをするOL。

石田先生のような医師、またはナース。

教師。

工事現場。

キャビンアテンダント。

観光ガイド。

弁護士、検事。

ウエイトレス。

競走馬の調教師。

カメラマン。

ライター。

これ以上書き連ねないくらいその他色々。

もうこの数秒で、オレンジコンビは相当数のありとあらゆる職を八重桜の騎士にやらせていた。

「似合わねえ！w w w超絶的に似合わねえ!! w w wシグナムがせつせと働くのが滅茶苦茶似合わねえ!!!」

「なんでだ？w w w wあいつが真面目に労働してるところを想像すりやるほどw w w w違和感しか浮かばねえええええええー!!! w w w w w w やべえ：腹が：ねじ切れちまうw w w」

完全にネットスラングで『(笑)』を意味するアルファベット小文字のw(くさ)を並べた草むらを語尾に付け、笑い苺でも口に入れた様子で爆笑し続ける二人。

とうとう目じりには涙まで溢れ、流れだしそうになりつつある。

「a h a h a h a h a ——— i h i h i h i ——— n n n n n n n n ———

!!!」



まる気配がない。

何が笑いのツボとなり、理性の堤防を決壊させたのかというところ。

「やべえwwwwwwころ寝してるシグナムがとんでもなく似合うんですけどwww」

「今日はやけに気が合うよな紅蓮wwwそれでさ、いつまでも真昼間に寝てんじゃねーよとか言われると、『働きたくないでござる』とか言っでごねるとかさwww」

「そっちもそっちでお似合いだなおいwww」

「だよな、なのになににちやつかりご飯だけはどつかの腹ペコ騎士王さんみてえにガツガツ食べんだぜahahaahaha——  
wwwwww」

この会話の流れから察するに、『ニートなシグナム』が偉く爆笑を誘う光景であったようだ。

しかも無駄に滑舌が良く、一言一句はつきりと聞き取れる。

まるで聞いてくれと言わんばかり……よくあれだけ笑って、噛ま

ずにものを言えると、呆れるやら感心するやら。  
ネタにされてる本人が目の前にいるのも構わず、未だに紅蓮と  
ヴィータの高笑いの奔流が途切れず続く。

そうしてこうなれば、次に起きるアクシデントと言え

「ブチッ」

「「あ……」」

はやてと久遠とシヤマルとザファイラの額に冷や汗が滴る。

文字を付ければ前述の感じに書ける筈な、鳴ってはいけない擬音がこの場に響いた気がした。

そう、ある人物の体内に潜む、とある爆弾が点火したという、報せ。

そうして、かの着火音が鳴った直後。

「き……いいいいいさ」 ああああああま…… ああああああ  
あああああああ——！！！！

起動されたレヴァンティンが持ち主の右手に現れ、紅蓮と声がそつくりな声優さんの演技を彷彿とさせるシャウトを撒き散らしながら、シグナムの怒りの熱情はついに大爆発を起こした。





度重なる笑いによる腹部の痛みが、一気に吹き飛ばすまでの握力をもろに頭部に味あわされる二人。

「前にも言った筈だが、一応おさらいとして確認しておこうか……」

零下までに至る冷気がはつきりと知覚できてしまう……透き通った……大人形態の久遠の声。

そう、紅蓮たちの顔を捕縛したのは、シグナムとは違うベクトルで怒れている彼女の手。

すらりとしたその細く伸びた腕とは不釣り合いな圧力だ。

さらに彼女そのものから溢れるもう一つの精神的圧力も、悪寒を誘発させる恐怖を見る者に植え付ける様相を醸す。

「私がこの家に住むようになったのは、度を弁えぬ餓鬼なそなたらの抑止として、調停官として、そして執行者として、場合によっては厳正なる処罰を敢行する為……であったことは覚えているな？」

コクコクと黙して頷くしかない彼女の怒りの矛先たち。

口を封じられているからではない。

たとえ口が聞けたとしても、一言も声を出せぬだろう。

忘れがちだが、久遠は人並みを知性と自我を持つとはいえず、あくまでそれは突然変異で身に着けたモノ、その本質は狐であり、種族の特性上、性格は臆病と言えど肉食獣。

今の彼女は、言うなれば獣としての己を意識的に呼び覚まさせている状態。

証拠として、今の彼女の瞳は黄色く発光し、瞳孔も黒い円形から細長いスリット状に変化していた。

そして彼女の体から、雷の光がスパークを起こす。

彼女の言う『厳正なる処罰』を知らせる閃光。

「これが——そなたらの因果の痛みだ！」

久遠の最後通牒——アルティメイタムが告げられると同時に、断罪の雷光がリビングに煌めくのであった。

数十秒の後、久遠はたった今執行させた対象から手を離す。

体に流れた電流で、全身黒焦げの炭と化した紅蓮とヴィータは力無くその場に転倒。

「ごめんなさい……もう致しません……反省しております——」

どうやら意識がはつきりと保たれたまま、雷撃の熱と痛みに始終晒されたようで、二人の口から細々と贖罪意識を示す言霊の羅列が口から漏れ出していた。

それだけ彼らがタフと言うこともあるし、久遠もそれに配慮しての罰の執行だったのだが、受けた本人たちには、むしろ稲妻に耐えられしてしまうこの身を恨みたくなる心境でもあるだろう。

「さて、将殿も落ち着かれたか？」

「ああ、あやつらの無様な姿を見て、頭の血の気は引けた……すまない」

シグナムも、この時にはいつもの凜と落ち着いた物腰に戻っていた。

「色々バタバタして申すのが遅れてしまったが、実はシグナムに打って付けの吉報がある」

「何……本当か？」

「とりあえず、私に付いて来てくれ、それとシヤマル、床で寝そべってものらの後始末は頼むぞ」

「ええ」

すっかり夜な外に出て、久遠に案内される形で夜道を歩くシグナム。

そうして一分もかからぬ時間で着いたのは、主に町の行事や会合の旨を提示する町内の掲示板であり、そこにはある求人募集の貼り紙が張られていた。

「剣道教室の……講師募集」

内容は今シグナムが口にした通り。

この町内には小中学生を対象とした剣道教室があり、たった今その剣の学び舎に通う子どもたちを指導する先生を募集中だった。

「シグナムの剣は、この国の剣術とそれ程相違はないのであろう？ それに求人を掛けてるのはここだけではないぞ」

久遠が指差したのは、早朝この地域の新聞配達のアルバイトを募集中と言う広告。

「一応そなたにぴったりな職だと思っただが……いか——」

『如何か？』と言い終える直前、数秒前まで掲示板に視線を張りつかせていたシグナムから両手を握られた。

「上々だ、心から感謝するぞ久遠、よくぞ見つけ出してくれた」

瞳を潤わせ、心底嬉しそうな面持ちで謝恩の想いを述べる烈火の騎士。

確かに、久遠が紹介した仕事は彼女にぴったりだ。

早朝の配達は運動代わりになるし、講師の仕事も長い年月に渡り磨き上げられた彼女の剣のスキルを生かすには持って来い。

まさに天職の類。

「そうか……そこまで喜んでくれるのなら、私としても喜ばしい……」

けれど、まさかここまで感激の意を表明されるとは思わなかったのだ、久遠はシグナムの押しに若干たじろぎ気味だ。

何が烈火の騎士の容貌をここまで感涙の色に染め上げるのだろうか？

「実はここだけの話……毎日家内で無為に時間を過ごす度、妙な幻聴が聞こえてきたのだ……『ニート侍』だとか、『烈火ではなく劣化の将』だとか、それこそ心無い揶揄の数々……私はそれは不快で心苦しくて仕方なかった……これでやっと解放される」

先程の憤怒や今の歓喜は、本人の証言から察するにその幻聴によるストレスが爆発したものと云ってもいい。

否……久遠からの見解では、この一連の吐露はストレスによるものだけではなかった。

彼女ら守護騎士、何百年も心を押し殺して殺し合いの海で戦い続けなければならなかった境遇を持つ身。

まっとうな日常生活は、はやての代になるまで体験することはなかった。

それゆえ、彼らは殺し合いの術には長けているものの、人間的な感情、情緒などといったものは芽生えたばかりの発達途上で、ある意味では——騎士たちはまだ幼子同然なのだ。

だからこそ、平穏な環境下での情操のコントロールは、まだ不慣れな時であつたりする。

その上さらに補足すると、幻聴の原因はシグナム当人は無職な身の上への焦燥から無意識に自分に掛けていた精神的重圧であると本人は解釈していたが、久遠は漠然とながら、彼女を苛んでいた幻の言辞は、外部的な要因が関わっている気がしてならなかった。

これはある意味、久遠の憶測通りとも言える。

なぜならその幻聴は、〃次元の壁の先のとある人々から発せられていた〃ものなのだから——。

一応追記として、あの後はやてに静かながらも諭されたオレンジコ  
ンビは、誠心誠意を以て、深々とシグナムに頭を下げたのだとき。  
つづく

## STAGE 18 | 隠れた純真

今回も八神家の日常の一片をお送りしよう。

今日は、ヴィータが見つけたとある趣味、スポーツの話が主軸だ。シグナムが剣道教室の講師と新聞配達の仕事に無事就いて数日の刻が過ぎ、彼女と例のスポーツの出会いがあったその日、ヴィータははやてと久遠と一緒に外出し、図書館に来ていた。

同行ははやての補助と、彼女の趣味である読書と、本の貸し借りなのだが、ヴィータ自身、日本語文字の勉強の一環という理由があったから。

日本語による会話なれば、覚醒する以前の眠りに着いていた頃、睡眠学習の要領で身に着けている。

一方で文字となれば、能動的に覚えるしかなく、ヴィータの場合は書店で発売されてる学習ドリルをやりつつ、読書を通じてどれくらい字を覚えたかの腕試しを繰り返していた。

「ヴィータ、今日は何の本読んでんの？」

館内のテーブルで、自身が好んでいるファンタジー系の分厚い小説を読んでいたはやては、ふとその横で読みふけるヴィータに思念通話、いわゆる念話で何の本を読み進めているのか尋ねる。

「これだよ」

ヴィータは一度本を閉じるとはやてに表紙を見せた。

「(み、みんきょう…しろう?)」

「(『ね○りきょうしろう』だよ、はやて)」

文庫本の形態なその本の表紙は、漆黒色合いな着流しの着物を纏い、この時代ではあり得ない筈の髪色が茶髪な丁髷頭の侍らしき男の絵が描かれたものだ。

「(どんな話なん?)」

「(転びバテレンの親父さんと日本人のおつかさんの間に生まれた剣士の活躍を描いた時代劇…大雑把に言うならこんな感じかな)」

八神家では衛星放送が鑑賞できる環境が整っているので、テレビの番組を見る視聴時間の割合は地上波よりも遥かに長い。

中には年中時代劇のテレビドラマに映画が放送されているチャンネルもある。

この恵まれた視聴環境下で、ヴィータに限らず、ヴォルケンリツターの面々の大方は、時代劇が彼らの中でブームとなっていた。

同じもののふ同士な侍が登場する時代のドラマに、どこか惹かれる何かがあったのかもしれない。

当然ながら、シグナムは暇がある時はしよちゅう姿勢正しく正座でテレビ画面を凝視。

『この紋処が目に入らぬか!』

「私も彼のような名君に仕えてみたかった……」

さらに意外かもしれないが、ザフィーラも狼形態の姿でじーと番組を眺めることが多々あった。

ちなみに彼が一番欠かさず見ていたのは――

『貴様が邪な我欲で積み重ねてきた悪逆非道の数々、断じて許すわけにはいかない』

『一体、何奴!?!』

『世の顔を見忘れたか?』

『う、上様!?!』

実在したとある人物が主人公の――

『成敗!』

――某暴○ん坊な將軍様が悪を成敗する勸善懲悪ものだったりする。

「主、視聴中ですのでチャンネルを変えるなら一言申し上げて下さい」

「え? ザフィーラ今の見てたんか?」

「はい」

「面白いん?」

「はい」

いつもの寡黙さを維持したまま見ているので、今のようなやり取りが何度も起きていた。

表情も微動だにしないので、直に本人に聞かないと習慣にしていることさえ気づかれず。

たとえば前述のはやてのように尋ねても、『はい』とか『うむ』とポーカーフェイスの一言で彼は返答していた。

その内、ザフィーラがいつも以上に黙然となつてテレビに視線を送っている時は、その番組が終わるまで待つという暗黙の了解が自然とできた。

ヴィータはと言えば、少々経緯は異なり、日本語の勉強には一番適した教材だと踏んでこの手のジャンルに手を出してみたことで今日に至っている。

この流れで今日のはかのシリーズを手に取り、読み耽っていた。生まれながらに宿命―さだめを背負い、虚無的な生を送るしかなかったかつての自分らの過去と、主人公の出生と境遇に一種のシンパシーを感じたからである。

「(また渋いの読んでるね)」

「(いや、じいさんばあさん以外が読んでも面白れえよ、それに最近GOKKTが舞台上で演じてたし)」

「(ほ、ほんま：)」

日本人離れた容姿なかのアーティストが時代劇、はやては意外と思つたが、ヴィータから聞いた例の小説の主人公の設定を聞くと、ぴったりかもしれないとまでに心境が変化した。

けれども、はやてにはよりピタリと嵌りそうな人物に心当たりがあつた。

ヴィータたちが目覚める前の時期、トラックに轢かれそうになった自分を間一髪助けてくれた。

不良ぶつた物腰は兄と似ていながらも、他の追隨を許さない黒く長く束ねた髪に彩られた美を持ちし――「あの人」

無意識の内に、黒の着流しを着こみ、刀身に残像が掛かりながら、剣先で円を描く必殺の円月殺法で相手を挑発する彼の姿を浮かべる。

彼の声で台詞も流れた。

「俺の顔を照らすこの月光が、お前のこの世の見納めだぞ」

あ、あかん……長髪姿が似合ってシグナムに負けじと凛々しい美人と言えるくらい綺麗な顔をしていたせいかな、偉く様になる。

キザったらしい口調も、彼の場合しつくり嵌らせてしまっていた。そして自分で想像しといて……気が付けば脳内イメージの彼に見惚れてしまっているはやてな有様だった。

まだ一度しか会ったことがないのだが、その一度の出会いで、はやては漠然とながらも、彼から紅蓮と同じ、自由を愛するアウトローっぽい雰囲気を感じ取り、そのイメージがその剣豪と重なったのかもしれない。

でもそれなら、もっとぴったりくる浪人がいたな、とこの間映画チャンネルで見た白黒映画を思い出す。

海外の方が遥かに有名ならしい名優演ずる凄腕浪人が主人公の映画だったのだが、彼と演じる俳優のルックスは正反対だと言うのに……その「気質」と言うものが瓜二つだったのだ。

「おもしれえ、やる気か？　だが気をつけな、俺は今寝入りばな起こされて機嫌が悪いんだ！」

「おい、お前らも大人しく鞆に入ってるよ」

うん、彼で劇中の場面を脳内で再現したら、やっぱりとても様になっっていた。

ちなみに自分の義兄（あに）が時代劇に出るとすれば——岡つ引きか町火消しの親分が妥当かな。

「おいおい、そりやねえぜ！」

何となく、不服な様子である江戸っ子風体の紅蓮の姿も脳内に再生される。

そう言われても、それが一番しつくりくるのも確か……と言い様がない。



些かレールを本道から脇道に流れてしまったが、ここからが本筋。数刻館内での読書と、何冊か本を借り、自宅へと帰る最中のはやてとヴィータと久遠。

八神家宅がある中丘町の住宅街に入り、町内の公園の一つを横切ろうとしていたところ、ヴィータは公園内のある光景が目に入り立ち止まった。

「ヴィータ……どうしたの？」

彼女より前の位置で歩いていた久遠とはやては数歩ほど跨いだ後にそれに気付き、久遠は子ども形態特有のたどたどしい口調で何事かと問いかけた。

「あれ……」

ヴィータの指が指し示す方向の先には、あるスポーツを嗜んでいる御高齢の方々がいた。

両手持ち型の金づちの柄を長くさせたような形状のスティックで、野球の球ほどの大きなボールを打ち、カタカナのコを15度右回転させ地面に突き刺せたとも見えなくもない銀の金具のゲートに通していた。

「あ、ゲートボールやね」

「どんなスポーツなんだ？ そのゲートなんか」

ヴィータの質問に、はやては黒目を泳がせ、こめかみに雫を流した。アイコンタクトで久遠にも助け舟を求めるが。

「ごめん、私も……よく知らない」

と、正直に『ゲートボール』の詳細を知らないことを白状した。

「なら良いよ、帰ったら自分で調べるから」

分からないなら解らないって正直に言えばいいのに、と思いつながら答えるヴィータなのであった。

ヴィータはその日から、主にインターネットを通じて、ゲートボ―

ルという競技について調べた。

ゲートボール——1947年の終戦間も無い時期に生まれたスポーツ。

物資不足で遊び道具に恵まれなかった当時の子どもたちの為に考案されたが、高度経済成長期に高齢者の間でブームとなり、最近はお老人たち向けのスポーツ”扱いは多言が多いと聞く。

競技概要を簡単に述べると、制限時間内に3つのコの字型のゲートにスティックでボールを打って通して得点を稼ぐというもの。

外見だけならヴォルケンリッター最年少の少女は、調べれば調べるほど、このスポーツを実際にやってみたいという心情に駆られていった。

当初彼女は、その欲求を沸かせる自分自身に戸惑った。

なんで、こんなにもこの球技に焦がれるのだろうか？

他の球を使った競技に比べれば、確かに地味目ではあるし、一見して印象付けられる彼女の性分にはむしろ野球やゴルフといった思いつきボールを飛ばせる球技の方が様になっている気もする。

でも、自問自答している内に、気が付いた。

ゲートボールへの興味を抱く理由——使うスティックが自身の愛機なハンマー型ベルカ式デバイス——グラーフアイゼンにそっくりだ。

ボールも、彼女がアイゼンで打って飛ばす魔力で作り上げる鉄球とほぼ同じ大きさ。

「何を見ている？」

「あ、ザファイラ」

「例のゲートボールか」

「うん、近所の老人会でチーム組んでるじいさんばあさんがよく公園でやってんだけど、あたしも入っていいかな……ほら、見てくれはガキだから、気を遣わせそうだし……」

「お老体殿たちはその程度のことでは気はしないだろう、それに趣味を持てるようになることは良い傾向だと私は考えている」

彼の言うことも尤もだ。

戦いしか知らなかった自分に、戦い以外の楽しめる嗜みとなりそんなを見つけられたのは、確かに良い兆候。

だったら、足踏みに時間なんか掛けず一気に踏み込んでみなければ。

「そつか……そうだよな、じゃあ明日思い切ってアタックしてみるよ」

翌日。

「あの……」

「ん、お譲ちゃん、どうしたのかい？」

前言通り、町内の公園でゲートボールを通じて形成された輪の中へ、ヴィータは入りこもうとしていた。

「あたし、この街に住んでいる八神ヴィータです……その、あたしにゲートボールを教えてくださいませんか？」

この瞬間ばかりは、彼女のいつもの勝気さで溢れる態度は緊張で影に潜んでいた。

実のところ、覚醒以来はやてたちら同じ屋根に住む者以外の人とコミュニケーションをとるのは、海鳴大学病院の石田先生を除き、初めてのこと。

さすがに彼女も、*“はじめて”*の体験には心身が張りつめさせられる。

「構わないよ、むしろ君のような子が興味を持ってくれてうれしいよ」

「ところで経験はあるの？ 八神ちゃん」

「ヴィータでいいです、それとやるのは今日が初めてですけど、ルールは覚えてきました」

「そうかそうか、じゃあまず一発打ってみるか？」

「うんー！」

普段な粗暴さに彩られている吊り目が印象的な彼女の顔から、子ども特有の純真で眩い笑顔が零れるのであった。

実際やってみると、ゲートボールは世間の印象よりもずっとシビアで奥深いスポーツだとヴィータは感じていた。

「あちゃ、またゲートに当てちゃった……」

「スタート地点からやり直しだな」

ただボールをゲートに通して、杭に似たゴールボールに当てれば良い訳ではない。

まず一番目のゲートをくぐれないと、スタートからやり直しになるし、もしボールがフィールドのコースから外れることになっても同様（二番目以降のゲートではコースから外れても問題無い）。

かと言ってゴールに当てればいいわけではなく、一度当ててしまうとそのプレイヤーは試合に出られなくなってしまう。

上手いこと相手チームのボールを当てて進行を妨害したり、早急に『あがり』にならないよう、慎重な判断が求められる。

これらの特色が彼女の気質に合ったようだ。  
勝気で負けず嫌いな性格と、好戦的そうな見た目に反し、実は不必要な戦闘はしない主義だったり、このような控えめな一面も彼女にはある。

それに、この球技を通じて、『楽しい』心地を味わえるのは、何よりの喜びだった。

彼女のこの心情も有り、ゲートボールを嗜むヴィータは特に明るい表情を表すことが多かったので、一躍彼女はこの町のゲートボールチームのアイドルとなっていくのであった。

それはいいが、ツツコミどころが一つある。

「今日もゲートボールなのか？」

「ああ、またばばくさいスポーツとか言うなよ」

「もうそう言う気にはなれねえっての、それより前から気になってんだけどよ、なんでそのデバイスってやつをスティックに使ってんだ？」

「アイゼンが一番手に馴染んだからなんだけど、こいつだって意志があんだし、あたしにとって戦友の一人だ……戦わないと誓った代わりに、こうして戦い以外のことで使ってやろうと思ってさ」

本来武器であるはずのヴィータのデバイス、グラーフアイゼンがスティック代わりなのは何とも、どう突っ込んでいいのやら。

まさかこういう使われ方をするのは、彼らの製作者も思わなかっただろう。

この時、道具も使いよう、それは兵器も然りと実感させられ、それも悪くはないよなと感じる紅蓮なのであった

紅蓮とヴィータ。

久遠のお仕置きで治められた騒動が闇の書起動初日に起きたことはご存じだろう。

出会った当初は、性格、容姿ともに、下手するとはやて以上に共通点が多いこともあり、同族嫌悪というか近親憎悪というか、とにかく二人はいがみ合っていた。

時間が経つにつれ、段々といがみあう尖った関係は、大分丸くなりつつあったが。

朝の報道番組にて、男性アイドルグループのドームコンサートのニュースが流れている。

「後ろ席のやつらが不憫に見えるな」

「うん、つまめるくらい：ちっちゃい」

「チケットの料金も一緒なんだろう、なんて不平等だか」

「だから色々奇抜なパフォーマンスしてるやろね」

「ふくくん、って紅蓮、何2828笑ってんだ？」

「ヴィータの場合はちっちゃええからwwwどこに座っててもみえねえよなってwww」

「笑いながら言ってるじゃねえええええーよ!!」

それでもたまに、仁義なき戦いの某BGMが流れそうなの○ぼんの下克上コント風なやり取りは続いていたりする。

紅蓮の暴言にキレたヴィータを久遠と闇の書が抑え、紅蓮はと言えばはやてに庇われる格好となっている

「てめえ！ どの面下げて言ってるんだよ!! はやてがう○ぼんのアレが好きだったからってなあ!! お前はいいよな言って逃げるだけで

！ 止めてるやつらは結構つれえんだぞ！」

「うん、確かに…」

ここまで来ると、『仲良く喧嘩』と断言できる領域であった。

そんな喧嘩友達な二人の仲が少し変わる出来事があった。

世界規模で展開している大型の某おもちゃ専門店トイ〇ラス、各年代、国内だけでなく、海外の玩具も並べられた店内を歩くのは——はやてに紅蓮に、シグナム、シヤマル、ヴィータ、女の子モードの久遠、ザフィーラはと言うと自宅警備員として家でお留守番中。

「はやてちゃん、なんで玩具店に？」

「ええから、こういうところにこそそれっぽい材料（ネタ）があるんよ」

彼らが今日ここに来たきっかけは、朝的一幕で。

「騎士甲冑？」

「はい、我ら騎士は武器は持っていますが、甲冑は主から賜らなければなりません」

ベルカ式魔法が発祥し、かの戦乱で世界ごと消滅して現在は存在しない星ベルカでは、魔力で編み上げた防護服、バリアジャケットのことを『騎士甲冑』と称していた。

シグナムたちは、その騎士甲冑——バリアジャケットのデザインをはやてに依頼していたのだ。

蒐集は無論、戦闘行為そのものを強いるつもりは無いはやては、最初断ろうとしたが、少し前まで海鳴で起きていた超常現象が、自分たちの世界から発生したアクシデントかもしれないと、今後起きない保障も無いので、有事の際の備えにと言われ、絵には自信があったので了承した。

「ほんなら、資料探して、カッコええの考えてあげなな」

玩具店には、その甲冑のデザインの参考資料を集める為の一環として来ていた。

ネタ集め以外に店内で遊びに耽る者も中にはいる。

子どもモードの久遠だ。

「この4つボタンを押して、こうポーズを取ってレバーを押してみよう」

「うん、スイッチ押して」

『3、2、1』

「変身！」

特撮ヒーローたちの玩具が置かれた売り場には、実際にアイテムを着けて、変身ごっこができるコーナーがあり。いつのまにやら久遠が外見年齢より年下な男の子たちから某ヒーローの変身の指南を受けていた。

変身完了の効果音が鳴り。

「宇宙キタアアアアアーーーーー！！！！　うふ♪」

「あ、そのポーズだとフオーゼじゃなくてな○しこの方だよ」

「ん？　そう、なの？」

男の子からの訂正に、？顔で首を横に傾ける久遠。

「確かにお姉ちゃん首傾げるところとかな○しここにそっくりだけど……フオーゼのはこう両手をグーにしてまず屈んで——」

言われていると彼女、雰囲気はかの少女仮面戦士によく似ている、毎週紅蓮が見ていたヒーロー物に、すっかり感化している様子で、心底ヒーロー遊びに熱中していた。

ここまで世間に馴染み過ぎな妖怪はそうそういまい。

『シャバドゥビタッチー！　ヘンシンン！』

『3・2・1』

『タカ！　トラ！　バッター！』

『サイクロン！』『ジョーカー！』

『ソイヤー！』

『ドラ——イブ！』

「変身！」

久遠も混じった子たちからは、玩具でロマンの塊と言える同時変身を再現していた。

一方でもう一人、はやてたち別行動をとっているのがいた。  
ヴィータだ。

お人形売り場で置かれているテディベアだったりのお人形さんに混じったその一品を、瞬きもしないまま、ジ——と眺め続けている。

それは黒い蝶ネクタイを着けた白うさぎの人形だった。

ただ……デザインが独特と言うか、はつきり言うところ奇妙天然なものだった。

体の形状は、どこの店でも売っていそうなのだが、顔が何とも言い難い。

両目は丸に朱色を塗っただけで、口もへの字でところどころ×字に縫われた跡が有り手抜き全開。しかもお世辞にも可愛くないと言う、子どもに需要があるのか怪しく、こうして売り場に置かれていることそのものが奇跡的とまで言える作り。

ダメ押しに商品名が『のろいうさぎ』ときた。

意味が『鈍（のろ）い』なのか、『呪い』なのかは別として、とても子どもに購買意欲を持たせるオーラなど持ち合せていない。

今のところ、唯一の例外が、それを見つめているヴィータであった。

「そいつが欲しいのか？」

「っ!？」

ヴィータは自分のうっかり加減を呪いたくなくなった。

しまった……ここには自分しかいないわけじゃなかった……反射的に振り向いた先には、紅蓮にシグナムたちがいた。

どう考えても、自分が『のろいうさぎ』に夢中であることははつきり見られたはずだ。

「べ、別にこんなのもうさぎなんか欲しくねえよ！」

日頃、特に紅蓮やシグナムには、自分が大人だ、子ども扱いするな



と主張していたことも有り、内心欲しくて堪らない気持ちを押しさえつけてしまった。

「良い風ですね」

「ほんまや、絶好のお散歩日和やな」

そんな強がりも、帰宅途中に入る頃にはすっかり消え失せ、ツンケンどんな態度を取ってしまったさっきの自分を叱りたくなるくらいに、後悔の念が心のスペースの大半を占めてしまっていた。

自分が素直じゃない性格なことは、日常を過ごしているうちに重々自覚はしているつもりだった。

先代の主たちの時は、蒐集で兵士やら魔導師やらとやり合って紛らわしていたが、平穏な毎日を送る今となっては、自己嫌悪となって押し寄せてくる。

写し鏡なまでに、はやての兄貴とは似ている部分が多いこともあって、つい彼には突っかかることが一番多い。

だが、考えてみれば………あいつは血は繋がらなくとも、自分らが目覚める前から、久遠とも出会うずっと前からはやてを過ごし、支えていた少年なのだ。

こんな平和な世界で一人ぼっちなんて、寂し過ぎる。

おまけに脚も悪いから、その日を暮らすことさえ苦勞が絶えなかったろう。

彼のことは、もっと感謝してあげなきゃならないのに……溜め息が漏れ、宙に漂った。

「ヴィータ、ほらよ」

「え？」

落ち込み気味な彼女に、紅蓮は玩具店で購入したらしき手に持っていた袋を差し出す。

「帰ってから渡すつもりだったんだけどよ、気が変わったんでな、今開けてもいいぜ」

「お……おう」

紅蓮の言われた通り、黄土色の紙袋を取り出すと。

「これっ……………」

中には、紛れも無くデザインは微妙というか不気味だが、ヴィータが欲しくてやまなかったあののろいうさぎが入っていた。

ヴィータにはれない様に、その後紅蓮はこっそり購入していたのである。

「はやての親父さんの友人(ダチ)なおっさんが多目に仕送りしてくれるからさ、これくらいお安いぜ、地球に来る前は、ガキらしく生きられなかったんだろ？」

「う……うん」

生まれた時からこの姿だったヴィータ。

スタイルがよ過ぎな仲間にコンプレックスは抱くことがあっても、元が子の体なんだから仕方ないと言い聞かせてきた。

でも、この体相応の、子どもの生活なんて、運命は一度たりとも経験させてくれなかった。

「折角平和な世界に来たんだ、子ども時間つてやつを満喫しようぜ」

「あ……………ありい……………」

この生活を送れる『今』をくれたはやてに久遠に紅蓮の三人には、心底謝恩の心持がある。

言葉にするのは気恥ずかしいが、せめてこれぐらいは言っておこう。

口にしようとする、声と言葉が喉に詰まって、中々言いたいことが言えない状態だったが、ちゃんと言えない様な薄情者になるのは御免だ。

「あり…がとう、紅蓮」

小さい声で、照れ気味ながらも、にこやかな面持ちでヴィータはのろいうさぎを買ってくれた紅蓮に『ありがとう』の言葉を返すのであった。

そしてその顔は、心の底から嬉しそうな表情を浮かばさせているのであった。

似た者同士な上に、衝突して二人の距離が少し縮まった瞬間だった。  
つづく

## STAGE 19 ? 温泉に行こう 前篇

大半が異世界生まれで、地球人基準では人外な者たちで占めている一風変わった八神家での共同生活が始まってから、月をいくつかまたぎ、夏真つ盛りな八月の初めに入った頃。

「合計で9485円になります」

「これで…お願い」

「1万円お預かり致します、515円のお返しになります」

「どうもです」

「小さいのにいつも偉いわね、お二人は姉妹なの？」

「ちよつと、違う」

「血縁は無いけど、同じ屋根の下で暮らす家族です」

久遠がレジ接客店員に福沢諭吉1枚を渡し、ヴィータがお釣りを受け取る。

ここは関東スーパーと呼ばれるスーパーマーケット。名前の通り、関東地方を中心に店舗が展開しているスーパーで、家からは近場にあるのも相まって、八神家の買い出しは専らこの関東スーパー海鳴店で賄われている。

会計を済ませ、食材やら調味料やら生活雑貨諸々を詰めた二人は、店内を出るべく出入口へと進んだのだが……自動ドアのセンサーが反応しないギリギリの地点で、二人は歩を止めた。

「ヴィータ……いい、行かないの？」

「く、久遠こそ、先い……行けよ」

この逡巡している様子から見ても、外に出るのを躊躇っているのは明白。

当然と言えば当然、クーラーの恩恵を受けた店内と、太陽光と高い湿度に支配された外とでは、体感温度の隔たりが余りに大きい。

そしてこの扉をくぐったら最後、家に着くまでの苦行が始まる。

店内が涼しい環境もまた、ついまだ冷房の涼風に浸りたい欲求に駆

られてしまう。

でも、もう贅沢は言つてられない。

「よし、じゃあ……行くぞ」

「うん、覚悟持つて、前進……前進」

意を決し、二人は店外へと足を運ばせるのであった。

何を大げさな——と言われるかもしれないが、多少表現を誇張させてもそんな色の無いのが、現代の日本の真夏である。

そこから少し時計を針を進めて——場所は住宅たちに囲まれた十字路のアスファルト。

メスの気を引こうと、残り一週間と迫った寿命の内で懸命に各々の鳴き声で歌うセミたち。

透明感と清らかさすら感じる青の色彩が広がる空。

その巨体で堂々と空中を鎮座する色白の大入道の雲海たち。

遠慮と加減を知らなさそうな強い陽の日差し、それによって空間を歪ませる陽炎。

大空からの熱を乱反射する無常なる外壁に塀と、グレー色の無機質な大地、わざわざ触らなくとも、アスファルトが熱を帯びているのが否がおうにも窺える。

熱を体外に逃がす筈の汗も、ねっとりとした感触は心地悪く、セミたちの大音量による大演奏会とともに精神をも疲弊させていく。

「他の世界でも四季はあったけどよ……こんなに季節で天気が変わるところは初めてだ」

「辛抱、辛抱……家にはクーラーと、アイスが、待ってる」

夏特有で、夏らしい風情溢れる直中を、荷物を抱えたヴィータと少女形態の久遠は汗だくで自宅、正確に言うところクーラーの利いたリビングへ、暑さの消耗で重くなった脚で懸命に歩を進めていた。

「うはあ……暑かった」

「ここ、天国…極楽」

水分を根こそぎ体外へ出そうとする熱波に支配された外から、どうにか帰って来られた二人は、リビングのカーペットの上で、クーラーからの涼風に身を委ね、心地よく満喫していた。

久遠とヴィータがさつきまで外出していたのは買い物。

この買い出しに関しても、八神家では一日ごとに担当が割り当てられた当番制となっており、その日はこの二方に御役目が回った日だった。

そんな日によりよってお天道様は、今年度の最高気温を更新する灼熱地獄を齎し、見た目は幼い少女な彼女らにも容赦無く暑さの牙を向けたわけである。

追い打ちにと、日差しと湿度がただでさえ規格外に強いのに、無機質なアスファルトと建物の外壁に塀は降り注ぐ太陽光線を乱反射し、体感温度は摂氏40度に迫る勢い。

昼のニュース番組が放送される頃にはアナウンサーから外出は控えるようにとお達しも出ていた。

肉体面では常人離れしている彼女らでも、何の防護もなしに歩くにはキツイ熱地獄。

それでもヴィータは魔法、久遠は妖術を使わず、ほぼ己が身体と根性補正で切り抜けたのは、これらの力は余り大っぴらに使える代物ではないことも理由だが、ここで下手に利便の利く、「異能の術」に頼るのは、何とくなく「負けた」気がしたからでもあった。

「暑い中御苦勞様や、ほら、ご褒美やで」

「お待ちかねのシャーベットだ」

「おお………待ってました♪」

「くぅ〜ん♪」

車椅子のはやての代わりに紅蓮がお盆で運びテーブルに置いたのは、オレンジにレモンにグレープフルーツにスイカに夏みかんと種々なアイスシャーベットたちであった。

当然、はやてお手製の代物である。

「今日はずまみ食いしてねえだろうな？ 紅蓮」

「バカ言え！俺だってそういつまでもガキンチョみてえね真似はしねえよ」

「そやで、今日はしておらんよ、だって私が前もって口酸っぱく『めやで』と釘刺しといたさかい」

「はやて！それはシー！口外しないでくれって！」

と口にしたはやての貌は、清々しいまでニコニコ顔となつて表情に浮かばせ、今話題にもなつたこの一家ではつまみ食い常習犯でもあるはやての兄貴さんは、妹の当人にとっては爆弾発言なカミングアウトに大慌てで片手の人差し指を口に付け、もう片方の手を残像現象を起こすほどに扇状に振っていた。

「年下である主はやてにこう言われているようでは、まだ子どもは卒業できそうにないな」

「シグつちまで……泣けるで」

「ほいよ」

「ん？」

とそこへ、紅蓮の分であつたオレンジ味のシャーベットが盛られた皿に、ヴィータが一口分の夏ミカン味をスプーンで移した。

「おすそわけしてくれんのか？」

「おう、我慢したご褒美と、夏休みの宿題へのエールだ」

皮肉でないヴィータの彼女なりの心からのエールを聞いた紅蓮は、顔を真っ青にした。

「があ~~~~~……今その言葉は聞きたくなかつた……学生のご身分には最上級の地獄だつてのによ……」

「いけねえ……こいつは一言余計だったわ、ごめん」

縦に伸ばした手を顔の前に添えて頭を下げるヴィータ。

彼女なりの気遣いというやつではあつたが、結果として一言多く、さらに彼に追い打ちを掛ける顛末に至る。

一年で最も長い長期休暇な夏休みは、ほとんどの学生にとっては天国でもあるし、地獄でもある。

その地獄こそ、『宿題』だ。大きく羽を伸ばしたい学生にとって、最大の障害にして目の上のタンコブ的な存在。

当然、紅蓮の通う中学校でも各教科ごとに割り当てられたドリル諸々に大量に言い渡され、生徒たちに日々多大なプレッシャーを与えているのは、言うまでも無い。

本人には改めて突きつけないでおくが、彼は中三なので、今年は高校受験も控えている。

その為の勉強をする意欲はあるにはあるのだが、それでも彼の頭を気難しく使うのを好まない性格上、精神面で重荷となっているのも確かだった。

しかれど、『宿題』の重圧で落ち込んでいた紅蓮は数秒もすると、彼の持ち前のポジティブさですっかりテンションは平常時に元通りし。

「このキンキンさもたまんねえな♪」

舌に快感と一緒に降り注ぐシャーベットの美味を満喫、本当に単純な野郎である……この場にゼロたちがいたら全員内心同じことを口走っていたことだろう。

ただ、テンションがローからハイへ一気に戻ったのはシャーベットの旨味によるのもある。

「ギガうまあ~~~~♪」

「く~~~~ん♪」

ヴィータの方も頬が緩み、普段は吊りあがった目じりと眉も垂れ、久遠も家の中ということで堂々と出した尻尾を円形状に振り、耳も小刻みに揺れ、子狐としての素の声を上げながら味わっている。

ひよつとするとプロ並みどころかそれ以上の料理の腕を持つかもしれないはやてのお手製なので、家内での評判は天にも昇る域だ。

「食べ終わったらお風呂に入っとくんやで」

「はい」

「ごおん」

「ところでよ、今風呂沸かしてんのって、シャまっちか?」

「そうやで」

「はは……嫌な予感がすんぞ」

「紅蓮の懸念は最もだな……あやつは家事能力なら我らの中では上位に位置してはいるが、時々とんでもないへマをやらかすことがある」



「この間も風呂のお湯を紅蓮以外入れない熱湯にしやがったし、料理の時もフライパンから火柱上げたし」

「雨の日……洗濯物、とりこみ忘れに……お皿も、何度も、盛大に割った」

「掃除機のコードが絡みに絡み、魔法で解こうとしたのだが、どういうわけか自身の体を緊縛してしまったとも聞く」

「あ……あれな、目にしたときやどこのSMプレイかと思っただけ、おまけに無駄にエロかった」

「主はやてらに出会う以前のあやつとは、本当に変貌著しい限りだ」

「やつぱ……そんなに性格が変わっちゃったのか？」

「昔のあいつはそりや……人間の情ってやつとは、いっちばん程遠かったよ」

「参謀役としては優秀だったが、非人道的な戦術も戦法も辞さず、必要とあらば味方殺しも躊躇わない冷血な女史で……魔力蒐集の際も、顔色一つ変えず結構する程であった」

「それが今ではドジっ娘姉ちゃんか……良いのかわりいいのかはつきりしねえビフォーアフターだぜ」

「もうちよつよドジ踏まなけりや、あいつの変わり様をもっと素直に喜べんだけど」

「まあまま、最近はそのドジも少しずつ減つとるんやし、もうちとシヤマルを信じてあげな」

駄弁な雑談のお題目が湖の麗人が日常生活を経験による変わり様に移り、一同は各々の表現で……簡潔に言うならば『またヘマをやらかさなきやいいけど』という思いを口に出していた。

一応フォローをしているはやてでさえ、彼女からは多少のやらかしは愛嬌があつて良いとは思っているもの、今また何かやらかしちやつたらどうしようという焦燥を胸の奥に秘めている次第である。

「シヤまっちのドジ列伝はもうこの辺にしようぜ」

「賛成だ……これ以上話を伸ばすと、我らの懸念が現実となるかもしれない」

「いっちそうさま」

「お皿は片づけるから、二人とも入っというてな」

「は〜い」

シャーベットを食べ終え、風呂に湯を入れてからそれなりに時間が経っているので、そろそろ入り時と、久遠とヴィータは先の買い物の際、熱波で溢れた汗を洗い流すべく洗面所に行こうとした……その直後。

「ぎやあああああああああああー……」

!!!

丁度洗面所の方角から、浴室に居る際の特徴のエコーがかかったシャマルの悲鳴が響き渡り、同時に響かれた声が耳の内に入った瞬間、リビングにいた八神家一同の額に、冷や汗がポタリと流れた。

大事に至っていないことを祈りながら、紅蓮たちは悲鳴の発信元である洗面所へ行くと……そこには尻持ちを付いて鼻をすすらせ、慎重に泣くシャマルがいた。

そして、浴室へと繋がるドアは開いたままとなっており、許容量の八割ほどの「水」が溜まった浴槽が瞳に映る。

これだけの情報でこの場に何が起こったのか見当は即付いたが、念の為の確認として、紅蓮は自分の指を浴槽の液体に浸した。

何も物を言わぬ代わりに、視線で紅蓮に『どうか?』と伝える一同。紅蓮もまた何も言わず、うなだれた表情を見せながら、首と手を振って返答。

「メーター見たけどやっぱり入ってなかった、ガス」

洗面所の扉の横の壁に備え付けられた例のメーターを確認したヴィータから、事実をさらに補強させる一言が告げられた。

洗面所内に溜め息が漏れ、充満する。

少々大きさに表現してしまっただが、これでよく分かったであろう。シャマルが今回やらかしたドジとは——ガスを忘れられて、うっかり浴槽に冷水をほぼ一杯に入れてしまったことである。

「ごめんなあさあ〜い、また私……やらかしてしまいましたあ〜」

「こいつはやつちまったな…だぜ」

「沸かし直しか………とは言えシヤマルなら仕方ない」

「無理ない…無理ない」

「気を落とすな、それだけ人間味を帯びてきているということだ、この程度のミスならまだ微笑ましい」

「みんなフオローしてくれるのはありがたいけど………何だか居たたまれなくなるからむしろ叱ってほしいです」

「シヤまつち、そういうお前はドMかってんだ」

パコン！ シヤマルのボケに紅蓮は加減の利かせたチョップによるツツコミを、彼女の頭の頂に一発見舞った。

「すみせん………紅蓮君、戒めと反省の為にもう一発お願いします」

「だからドMか！」

パコン！ 二発目。

「もう一発下さい」

「ドMかってんだよ！」

パコン！ 三発目。

「もう一回おね——」

「だから——」

「ストップや、漫才ごっこはそこでやめい、てんどんネタで笑えんのは三回が限度やで」

「そのツツコミもどこかズレてると思うぞ………はやて」

四回目ははやてによって止められた。

何だか、どこかのお笑いコンビの漫才の様相が感じられた気がするが………綺麗さっぱり忘れて欲しい。

さてと、今この場でどうにかしなければならぬ問題を思い出そう。

「沸かし直すとして、この家の水、お湯になるのに結構時間がかかるからな」

「じゃあさ、シグナムのレヴァンティンを燃やして湯船に突っ込んで——」

「断る！」

「それじゃ紅蓮がグレンファイヤーに変身して、真っ赤に燃えた体で湯を温めながら入るとか——」

「イヤだ！」

「——どっちも即答……」

しかも拒否の言葉には無駄に語気とエモーションが強く込められていた。

二人が即答で却下するのも無理ないか、能力の無駄遣いもいいところだ、はつきり言えるからだ。

「俺の炎がはやてたちが入れるくらいの力加減で温められると思うか？」

「私も炎熱系は得意だが、微細なコントロールは苦手だ、下手をすると浴室を爆破させるかもしれん」

「それもそうだ……な」

「やっぱりここは、私が魔法で何とか……どうか『汚名挽回』の機会を——」

「それを言うならシヤマル、そこは『汚名返上』と言うべきだ」

「もしくは……名誉、挽回」

「はい——」

久遠とザファイラの獣組の、正論で彼女を思つての発言とはいえ、間違つた慣用句の使い方を突つ込まれたシヤマルはまたも涙目となった。

「もうええって、そもそもそんなしょうもないことで魔法つこうてどないすんの？」

「その通りでございます」

一体ここまで、何度本題から脱線したことやら。

おさらいとして事の発端は、シヤマルのガスの入れ忘れによる湯沸かしの失敗、ただガスを入れて湯が出るまで待てばいい話なのだが、それまで時間が掛かるのがネック。

それにほぼ湯船一杯に溜まつた水を捨てるのも、勿体ない限りである。

水は洗濯用にとつておけるが、そうになると実際使うまで浴槽は冷水

に占拠される状態にもなるわけなので、実に悩ましい。

「あ、そや」

「はやて、どうしたの?」

「くうちゃん、私の部屋からあのチラシ持って来てくれへん?」

「うん、分かった」

とぼとぼと小さな女の子特有の愛らしい走り方で、久遠ははやての部屋へと向かった。

ところは変わって、リビング。

全員テーブルを囲む形で座し、はやてはそのテーブルの中央に例のチラシを置いた。

二階立ての和風屋敷の趣がある建物のCGが描かれた広告で、大文字で――

『『スーパ―銭湯、なるみの湯』?』

――とロゴが書かれている。

「温泉ですか?」

「そや、今日がこのスーパ―銭湯のオープンする日やねん」

「そーいやそうだったっけ?」

そのチラシはただいまはやてが言った通り、本日開店する公衆浴場のものだ。

お風呂だけでも10種以上有り、サウナも複数、マッサージケアにレストラン、美容室、ゲームセンターまでも常備していると、単なる温泉施設には止まらない大型銭湯である。

オープン次第、いつか行ってみたいとはやては前に朝刊に付いて来た広告をとっていたのだ。

本日は開店記念で特別料金、さらに3人以上のお客様には割引ときた。

「ほんで、このなるみの湯に行きたい人挙手!」

「はーい」

「おうよー!」

「はい…」

威勢よく手を天へと一直線に上げるヴィータ、久遠、シヤマルに紅蓮の4人と、対照的に少し顔を赤らめて気恥ずかしそうに腕を曲げた状態で慎ましく挙手するシグナム。

「でもこの銭湯、家からは結構遠そう」

「バスで行くことになるのは確実やね、路線調べておかへんと」

「主、ご心配なく、これを」

「何やこれ？」

ザフィーラが唾が着かぬよう、細心の注意で口に銜えて持ってきた紙には、家からなるみの湯までのルートの詳細と地図が載っていた。

これらは全てインターネットで集め、マイクロソフトで纏めた情報。

「以前からお行きになりたいとお耳を挟みましたので、こんなこともあるうかと事前に調べておきました」

「ザフィーラ気が利いてるぜ」

「主たちを思つてのことです」

「ほんなら、みんな外に出る準備してな」

塞翁が馬とは言ったもので、こうして本日の八神家の入浴はスパ―銭湯なるみの湯にてと相成った。

つづく

STAGE 20 — 温泉に行こう 後篇

ドジっ子お姉さん——もとい風の癒し手シャマルのドジ列伝の頁が新たに刻まれたことが幸いとなり、本日オープンしたての『スパ―銭湯 なるみの湯』へ行くことになった八神家の面々。

『次は——中央公園前——中央公園前、お降りのお客様は、バスが停車するまで、席をお立ちにならないでください』

「えーと、今は海鳴中央公園辺りなんやから、降りるところまでは——」  
「ここから4つ目の停留場ですな」

「ありがとなシグナム」

「よかったよな、銭湯がバス停の前に建つてて、また暑苦しい中長いこと歩かずに済んだ」

「(私ならみんなの体温調整くらい、簡単なんだけど)」

「(このような真夏日に、我らだけ汗を微量も流さずに外を出歩いていたのでは、通行人に怪しまれるぞ)」

「(それにわたしただけ魔法で涼しい思いをするのも、何やズルイ気もするしな)」

なるみの湯がある地区行きの海鳴地鉄バスの車内にて、一家一同は目的地に着くまで雑談をしながら、内心温泉の癒しを待ち遠く揺られていた。

今回は一家総出ということで、ザフィーラも海鳴での生活に入ってからはお見えになるのが少なくなつた人間体ではやてたちと同行している。

当然、耳も尻尾も隠してある。

服もはやてがこういう日の為にと、事前買い揃えていた。

この日はシンプルな白い生地の特シャツと、ジーパンの組み合わせ。

派手さとは程遠い出で立ちだが、彼の寡黙で謙虚な人柄にはしつくりと来る。

「(何やら、他の乗客からの視線を感じるのだが……)」

「(無理ねえよ、ムキムキマッチョで真っ黒な体と真っ白けな髪してん

じやな)」

「(人間モードのザフィーラって、消耗品傭兵軍団にいそうな出で立ちやからね、目立つと言ったら、紅蓮兄ちゃんもどっこいどっこいやで)」

「(そう言われてもよ、この髪は地毛だからしゃあねえじゃん)」

八神家の守護獣が他の乗客から視線を受けてしまうのは、彼のその風体にあつた。

背丈だけでも185cmほどと大柄であるのに、黒色人種ほどではないにせよ褐色の素肌に、振れなくとも鎧に喩えられるほどな固く太く、血管が浮き出ている筋肉。

肌の色に反して、脱色を施されたかのように真っ白で逆立った髪。逞しい肉体に負けじと、容貌もシャープさが際立つ男前な顔つき。

はやての言う通り、アクションスターが傭兵役で多数出演する某映画劇中で機関銃を乱射してても遜色も違和感もない風貌である。

彼だけでも相当目立つのに、彼の隣に座る紅蓮も、整われた顔立ちだが、名の通り燃え上がる紅蓮の如くオレンジがかつた髪に、ザフィーラより細身だが筋肉に覆られた二の腕に、いかにも不良とかガキ大将的な容姿。

ここまで目を引く見てくれだと、視線を浴びさせてくれと、主張しているようなものだった。

ところで、『あれ?』と感じられた方もいるだろう。

ヴォルケンリッターたちと八神家に居候している、魔源種の妖狐は今どこにいるのだ?——と。

実は彼女もちゃんとバスに乗車中である。

どこかと言うと。

「くう~~~~ん」

只今の彼女は本来の姿と言える子狐形態の姿で、紅蓮の頭に乗っかっていた。

八神家で本格的に住むようになってからは人間形態でいる方が多くなっていたので、久々に獣の姿での外出である。

魔力を使った彼女特有の妖術により、周囲には紅蓮たち以外に認識



はされないのです、堂々とタダ乗りをやらかしていた。

「(重くはないのか？ 紅蓮)」

「(こん！・くうんくうん！)」

テレビのバラエティ番組等で『ビシッバシッ』と効果音が付いてきそう感じで、ペシペシと小さな手でザファイラの頭を何度もはたく久遠、どうも彼の『重い』という発言が、彼女の女の子としてのプライドに刺激を与えてしまったようだ。

「(不用意な発言だったな、すまない久遠、ただそんな長いこと乗って、紅蓮に何の重みも伝わらないわけではあるまい)」

「(俺は全然平気だぞ、むしろこいつの毛並みに滅茶苦茶気持ちいいんだよ、なあ？ 久遠)」

「(おん！おん！)」

言葉を発することができない子狐モードでも、嬉しそうなのは明白な領きようだった。

彼女の現在の感情を示す代弁役とも言えるふさふさとしたさつまいも状の尻尾も、喜怒哀楽なら『喜』と『楽』に相当する意味合いな、円月を描く360度フル回転。

完全に紅蓮の頭は彼女の特等席と化していた。

「(あく！もう一回はくうちゃんに頭乗ってもらいたい)」

お互い最良の形で、頭に乗る、乗られる関係を築いているそんな二人に、はやては指をくわえながら羨望の眼差しを送っていた。

紅蓮の頭部が久遠の特等席になり、肩車ならぬ頭車となったのは、彼女が八神家に入出入りするようになった時期、はやてが小学生なら三年時の頃に遡る。

八神家の義兄さんは、毎朝近所の河川敷をコースにジョギングを行い、度々家に向かう久遠が彼と鉢合わせて並走することが多かったのだが、ある日のこと、久遠が子狐時の自分の体が丁度紅蓮の頭に乗られることに気づき。

「(こん！こん！)」

「俺の頭がどうかしたか？」

「こおん！」

まず彼の頭を指差し、ジャンプして飛びのるジェスチャーをして要望を伝える。

「ああ、乗りたいってか？」

「こおん♪」

既に久遠が人間に変身できることは互いに了解していたが、彼女は敢えて喋れない姿でどこまで気持ちを相手に伝えられるかと試し、ちゃんと伝わったことの喜びを、体をぴよんぴよんと跳ねて表現する。

で、紅蓮の承認を得て、ひよいっとジャンプしてオレンジ色に染まった後頭部に飛び乗った。

「くお〜ん……」

その時、いくらなんでも誇張しすぎじゃ……と呆れるかもしれないが、久遠当人にとっては、中々言葉で表現できないまでに、舞い上がるかのような快爽たる乗り心地を感じたそうだ。

以来、闇の書の起動と同時に本格的に八神家に居候し、人間形態にすることが多くなってからは減ってはいたが、子狐の姿にいる時はちよくちよく紅蓮の頭に乗つかるようになった。

他の八神家の面々はと言うと、一回だけお互いの了承のもと乗ったことがあったが、久遠曰く。

「やっぱり……紅蓮の頭が、一番」

と——不評とまでは言わずとも、イマイチだったようである。

子狐姿の久遠は、それはそれは一目見ただけで老若男女問わず魅力に憑りつかれてしまう愛らしさと魔性を秘めているのもあって、彼女を頭に乗せる行為が半ば紅蓮の特権と化していることが、はやてにとっては羨ましい限りであったわけである。

「(あたしらにも一度だけ乗ってもらったけど、やっぱり紅蓮の頭(てっぺん)が一番の乗り心地だって言ってたな)」

「(主、久遠とは日頃からじゃれあう仲ではありませんか、彼女の整わ

れた毛並みをいつも撫でて堪能なさってますし……………その……  
尻尾や……胸にも、マッサージという形で……」

「(そうなんやけど……やっぱりお兄ちゃんばっかり堪能して、ずるいわ)」

「(だからその分久遠の乳揉みが一番力入るわけね)」

「(あはは……当たりや)」

「(今日は控えるよう善処願います、さすがに同姓相手でも、大勢を前に……喘ぎ声は、はしたなく映るでしょうから)」

「(は……いい、気付けますわ、ところでシグナム、顔が赤いよ)」

「(気の……せいです)」

そしてはやての場合、その代償行為として、一緒に入浴する時は胸を揉んではその感触をすみずみまで堪能してたりする。

さすがに今回は公共の場での湯あみであるため、今回は胸揉みは実質「封印」と言うことになっている。

『次は——』

「あ、次のところで降りるんやった、シヤマル、降車ボタン押して」「は……」

そうしてバスは、ようやく目的地のなるみの湯のすぐ傍に立っている停留所へと辿り着いた。

「「おお……」」

ほぼ全員が、感嘆の声を上げる。それほどなるみの湯は、彼らを圧倒させる規模の施設だった。

建物は江戸時代頃の武家屋敷風で、目側だけでも、寝殿造りの貴族屋敷並の敷地面積を誇っており、塀に屋敷門まで作られている有り様。

中に入ってから驚きは続く。靴箱に各々の履物を入れて受付口ビーに入ると、開店当日で特別料金で入浴料は安くなっているとあって大勢の人ばかりができていた。

今日は休日なので、家族連れが大半。

「それじゃ入り終わったらロビーに集合な」

「おう」

「分かりました」

当然ながら男女別に別れ、はやてたちは温泉と脱衣所に繋がる暖簾をくぐっていった。

「えーと、私とはやてちゃんと久遠ちゃんのロッカーは、537、ここね」

「541番は、これか」

縦長で二段重ねの木製ロッカーを、受付で手渡された鍵で解錠。

念のためと、財布と言った貴重品は別の専用ロッカーに保管させている。

施設内はスロープに車椅子置き場など、バリアフリーも完備されていた。

できれば詳細に描写したいところだが、これ以上脱衣所内の场景は各々の想像にお任せする。

ゆえにここから暫くはほぼ台詞のみの状態が続くが容赦願いたい。

むしろ“紳士”なら、これくらい脳内に浮かばせるなど余裕だろうからな。

「へっへ♪ はくやくはいろく〜」

「こら、ここは家では無いのだぞ、床に脱ぎ散らかすな、他の客に迷惑がかかる」

「ちゃんと片付けんだからいいじゃんかよ」

「ここは公共の場だ、守るべきマナーがあるのだぞ」

「ぐっ……うだうだいちいちうっせーなうちのリーダーさんは」

「口うるさいと感じるなら、追及されるようなことをしななればいだろう、この生活に入ってから常々思っていたが、お前は少々ガサツが過ぎる」

「があーったくよ！ バカでかいおっぱい抱えてるからって偉そうな口叩いて良い気になるなよー」

「なっ!? なぜいきなり胸の話になるのだ!!?」

ヴィータからのセクハラ発言に顔を赤くしながら、ヴィータ曰く『バカでかいおっぱい』を腕で隠すシグナム。

「やたら胸にばっくくかり栄養送ってっから、心のスペースが狭くなってガミガミと口うるさくなるんだよこの爆乳魔人ナイト!!」

「ばっ……………ばっばっばっ——ばく……………ばくにゆう……………」

シグナムの顔の肌色が、ほぼマゼンダ味がかかった赤に変色。

その変化の時間は、一秒にも満たなかった。

一瞬で鮮やかに顔全体の色合いが変化したのである。

鉄騎からの追い打ちの口撃に、しばし烈火の将の口は体と一緒にあわあわと揺れていたが、怒の導火線に火が点いたのか。

「貴様そこになおれ! レヴァンティンの錆びにしてくれる!!」

「へっ! 上等じゃんか! そっちこそアイゼンの頑固な汚れになりてえか!」

この場の流れを短い文で表現するとすれば、ミイラ取りがミイラとなった瞬間であった。

待機状態のデバイスまで取り出し、額から稲妻を迸らせんとする勢いで睨みあうお二方。

無駄に剣幕も規模も大きい、その実スケールの小さい低レベルの極みな喧嘩があわや『公共の場』で起こりそうになったが——

「喧嘩はそこまで」

「いたっ」

まず大人モードの久遠がシグナムの頭をポカンと叩き。

「そや、悪い子にはおしおきやで」

「んがあああ~~~~ふあ、ふあやてえ~~~~ふうるしい——」

室内に置かれた藁椅子に腰かけるはやてはヴィータの鼻を指で強めにぐいぐいと挟みこむ。呼吸の妨げと鼻孔の痛みで喧嘩を吹っ掛けた大人げない者の一人は呻き声を上げさせられた。

「うちの者が騒ぎを起こして申し訳ありません、申し訳ありません」

シャマルはと言うと、周囲のお客たちに頭を下げながら、当人たちに代わって詫びを入れているところだ。

「（公共の場で何を取り出そうとしている、銃刀法違反で御用になるぞ、そなたらにとつては誇りの象徴でも、警察にとつては法を犯す凶器でしかないのだ）」

「（それにそんな格好で、二人ともはしたないわよ、シグナムの下着姿もそうだけど、ヴィータちゃんなんて丸〇じゃない）」

「……………」

久遠とシャマルの正論に、二人は落ちつかせるしかなかった。

デバイスは当然ながら武器で凶器、おまけに地球では知られてないエネルギーで超常の技を使えるのだから物騒極まりない。

それに、脱衣中に起きたアクシデントなので、彼女らは男が見たら確実に女性陣から破廉恥に変態呼ばわりされるあられもない姿である。

大人げないにも程がある二人の喧嘩騒ぎは、大火になる前に少々の荒療治込みで鎮火された。

ただし、まだ一度振り上げた拳が引つ込められずに小火が残ってるのか、シグナムもヴィータも未だ黙然と睨みあいの冷戦を続けている。

「いつまでもガン飛ばすのはやめやで、シグナムの注意に逆ギレしたヴィータも悪いし、リーダーやのに喧嘩買って煽り返したシグナムもシグナムや、喧嘩両成敗、二人ともちゃんと謝り」

頭ごなしの激情任せではなく、かといって穏和過ぎない、静かさや適度に厳しさが入ったはやての諫めの言葉。

「リーダーをこ馬鹿にするような発言をして、すみませんでした」

「私も些細なことで熱くなりすぎた……………すまない」

これには二人も冷静となり、自らの大人げさを内心反芻しながら、謝るのであった。

さつきまで売り言葉に買い言葉といがみあつてた両者は、はやてよりもずっと年上の筈なのだが、見た目を除けばはやてが保護者のように映ってしまう。

純然たる地球人がはやて一人だけな事情もあり、八神家では普通の年功序列は通じない様であった。

こんな一騒ぎが起きながらも、女性陣は女湯へと入室。

まず体を洗淨させた後、まずは色々と効能があるというラドン温泉に入る一同、湯船がひのき製の多面体と少し変わった形をした風呂だった。

「なんてゆーか…怪獣みたいな名前」

「そやね」

「そうだな」

まあ実際、同名の怪獣が映画の世界にいたりする。

「あ〜〜ええ湯加減や…」

「気持ち良いです〜〜」

「生き返る気分なところ水さしてわりいけどいいか」

「いかがしたヴィータ？」

「今までスルーしてきたけどよ、久遠…：…何だつてこんな時に限つて大人モードで入ってんだよてめえ！」

今まで温泉だけにあつきり流してはきたが、ヴィータの言う通り、今の久遠は見た目二十歳前後な成人女性の姿、尾と耳は引つ込めているので、一見金髪の白人女性な容姿だ。

肌は陶磁器のように白く、髪は宝石のように煌びやか、プロポーションもふくよかさと細さの調和がとれ、バストはシャマル以上、シグナム未満のサイズな、形の整ったスライム乳で、同姓も羨み、当然男性にもたまらない体つき。

彼女がこんな絶世な成人女性の姿で浴してるのは、特に理由はなく、気まぐれというやつだ。

実をいうと、久遠が子狐モードに認識阻害の術でバスにただ乗りをしたのは、彼女が成人になった分嵩む金銭的負担——今日だと入浴料などの費用を抑える目的があった。

「何か問題でも？」

「大ありだよ！　うちには無駄にスタイルのいい奴がいるつてのにお前までそっちのグループに入ったんじゃ、こっちは余計に肩身が狭くなるんだよ！」

「と申されてもだな、たまにはこの姿でいたい時もあるのだ、それに私

のこの体を見て、他の女性客たちの美意識が育くまれることさ」

「育つとしたらな、あたしの場合には心の傷だけだよ、せめてもうちよつとスタイルの良さ落としてもいいじゃんか」

「そうしたいのだが、なぜか成人に近づくほどこうなってしまうのだ、そこは容赦願いたい」

「ぐう……男を誑かす悪魔な体つきしやがって……女狐め……」

「（私相手では文句にもならないぞ今の言葉は、なにせわっちはヴィータの言う通り——人をあやかす『女狐』で、西洋では悪魔の化身な身でありんす——うふふ）」

ヴィータの目じりは温泉と汗以外の液体で濡れ、ぼやきが口からこぼれ落ち、対して久遠は瞳を細め、妖艶なる小悪魔な笑みと視線と、とろける甘味の声に乗せられたおいらん口調で打ち返した。

昔から容姿体型な自身にコンプレックスを抱いていた紅の鉄騎であったが、特に海鳴での生活に入ってから、人間味が育まれたのも後押しとなり、他の女性陣の裕福なプロポジションを前に日々嫉妬と劣等感が蓄積されているヴィータである。

「はくやくてくく」

「分かるよ、ヴィータの気持ち、思いつきり泣きや」

泣きどころを突かれて泣きついてきたヴィータを、はやてはハグして優しくあやした。

この時ヴィータは、抱きとめてくれたはやてが聖母の如く眩いと感じたと言う。

「私も時々ぶるんぶるん実ったシグナムたちのおっぱい見ると、羨ましくなるねん」

「なあ!? ひ…悲観することはないですよ、あなたには、その…将来…性が、ありますから」

「あたしにはその将来性すら絶望的なんだぞ…」

「私だって…」

「そう言うシャマルも充分ナイスなバディヤんか」

「お褒めの言葉は嬉しいのですが、この街で暮らすようになってから、シグナムと大人モードの久遠ちゃんには……微妙な敗北感とコン





wwww!

「今日は私が気持ちよくさせる番どすえ、心おきなく味わいなんし」

「ひゃー! その辺はいかんねんwwww気持ち良過ぎてイクー——

イってまうー————wwwwwwww!!!」

「シグナム、鼻を抑えてるけど大丈夫?」

「案ずるな……問題無い」

「ようには見えねえけどな」

裸一貫ということもあり、今日は一段と色々オープンになる女性陣、その後も色々とはつちやけたガールズトークは女性同士の長電話並に途切れずに続いたと言う。

一方その頃男湯では、一通り体を洗い終えた男性陣がサウナで大量の汗を体から流す真っ最中。

我慢比べの苦行とも言えるか、彼らの場合。

もう何十分は熱風の利いた室内から出るつもりはない。

異なる点として、紅蓮はサウナ内に設置されたテレビで番組鑑賞中。

ちなみに今テレビ画面からは——

『「こいよベ○ツト! 銃なんか捨てて、かかってこい! 楽に殺しちゃつまらんだろう? ナイフを突き立て、俺が苦しみもがいて……死んでいく様を見るのが望みだったんだろう? そうじゃないのかベ○ツト!?!」』

——80年代のアクション洋画を牽引していた一人である筋肉もりもりマッチョメンなアクション俳優主演の《筋肉バカアクション》洋画が流れていた。このチャンネルはこの時間帯に映画を放送する事が多い。

性的的にこの手の頭からっぽにして見られる娯楽作品が大好きな紅蓮は、案の定劇中の台詞丸覚えしているくらいこの映画に入れ込み。

『もう一度コマンドー部隊を編成したい、君さえ戻ってくれば——』

『今日が最後です』

今日の放送でもキャラと一緒に台詞を吐くくらい釘付けになって鑑賞していた。

対してザフィーラは、腕を組んで目を覆い、いつもの寡黙さをキープしながら座していた。

こんな二人の共通項は、やはり溢れる汗で灯りに反射されたことであり、その屈強さを際立たせている逞しき筋肉に恵まれた体躯。

それこそ映画でしか滅多にお目にかかれないマッスルボディから発されるプレッシャーを前に、他の男性客はいすくまり、実質サウナは二人の貸し切り状態と化していた。

「(ん?)」

「(どした?)」

「(何やらシグナム達が何やら一悶着起こした気がしたのでな、恐らく発端は我らのリーダーと年少者だろう)」

「(あく／＼あいつらならやらかしそうだよな、シグたちは最近自分の無駄にバカデカイ爆乳をどうにかしたい言ってるやがったし、ヴィータはデフォなおこちゃま体型に前々からコンプレックスだったみてえだしな、絶対おっぱい絡みで喧嘩してっぞ……それに久遠もポインな大人モードだし、トークのネタに上げられてんだろうな、二ヒヒ)」

全く以て二人の予想通りである。実際前述の脱衣所での一騒動を良い歳したところでない二人がやらかし、歳下の女の子に諭されている有様となっていた。

そして紅蓮の口からも『爆乳』などという単語が出るあたり、やっぱり守護騎士最年少少女とは似た者同士と言えた。

「(私としては、一人家で留守番役を全うしていても構わなかったのだが……)」

「(んな固いこと言わない言わない、気が利く守護獣さまにはみんないっつもお世話になってんだからよ)」

ヴォルケンリッターのメンバーでは黒一点な唯一の男性であるザ

ファイラ。

八神家での生活に入ってからには、主に車椅子な身のはやての介助を生業をしてきたが、彼の気が利くサポートには、一家全員助けられていた。

例えば――

「雨だ〜！洗濯物が濡れちゃう〜って、あれ？」

突然降り出した雨に慌てて庭に干した洗濯物を取り込もうとしたシヤマルだったが、雨に晒されている筈の肝心の洗濯物が庭からぽつりと消えていた。

この現象を前にポカ〜んとしていたシヤマルに、洗濯用籠を抱えていた人間形態のザファイラが話しかけてきた。

「シヤマル」

「ザファイラ……それって」

「午後から一雨降ると予報が出ていたからな、丁度乾いてもいたし、取りこんでおいた」

「よかった〜〜助かったよザファイラ」

さらにもう一例――

「あれ？家の鍵どこやっちゃったかな？」

自身の部屋にて所在不明の家の鍵を探す紅蓮。

そこにザファイラが入室してきた。

「紅蓮、探してる鍵はこれではないのか？」

鋭い犬歯が生えた下あごにぶら下げているのは、たったいま紅蓮が探していた代物であった。

「お、それぞれ、あんがとよ、ところでどこで見つけたんだ？」

「制服の内ポケットに入れたままだったぞ」

「あ〜〜そうか、入れっぱだったのか」

そのまたさらにもう一ケース――

数品程度の買い物を頼まれた大人モード時の久遠に。

「最近この近くでドラッグストアができてな、コンビニよりも割安な値段で商品も揃っているそうだが、これは家からストアまでの地図で、最短ルートもマークしておいたぞ」

「忝いな、恩に着るぞ」

とまあ、これらの事例以外にも、彼の手際の良い気遣いに色々とはやてたちは助けられていたわけである。

「(だからはやてもあいつらも一緒に行こうぜって誘ったんだぜ)」

その為、今日は自宅警備の一環で謙虚に一人留守番をしようとした彼は、全員からの勧めで同行したわけである。

「(ああも毎日助けてもらってたんだ、羽伸ばしさせてえくらいみんな感謝してんだぜ)」

「(感謝か……いい機会かもしれない)」

「(なに一人だけ納得してんだよ?)」

「(いや、この際伝えておこうと思ったのだよ、私もお前たちには感謝している)」

「(へ?)」

思ってもみなかった発言だったので、紅蓮の目ん玉は点となって表情ごと固まってしまった。

「(話が逸れるがな、私の二つ名と言える『盾の守護獣』、どういう経緯で付けられたかまでは覚えていないのだが……)」

「(そら、誰だって生まれ時の記憶なんて頭に残ってはねえわな)」

「(一方で由来は漠然としたものではあるが、今でも心に刻まれている、『主だけでなく、共に主を守護する友たち全ての盾となり守り抜け』)」

「(すんげえご大層な由来だな)」

「(だが、この二つ名も由来も、実質名ばかり同然であった……積み重ねたことと言えば、守ることから程遠い、主からの命を大義名分として：戦場で無名同然の兵士たちの惨殺、それどころか、一蓮托生の間柄なシグナムたちの……『人としての尊厳』すら……長きに亘って守り通せなかったからな)」

「(気負い過ぎじゃねーか、だって……お前らが殺しを大勢やらかしてたのって、お前らに選ばれたのを調子こいて黒い欲っ気働かせてバカ

やらかそうとした主さまの自業自得などこだってあんじやねえの？」

「お前の言うことも一理はある、だが惰性的に力を振りかざし、死体の山を築いてきたのも、『守護』という言葉から、最も遠き存在であったのも事実、目を逸らすつもりはない」

「……………」

紅蓮は言葉に詰まった。

はやてが今の主になる、それよりずっと昔の騎士たちのことは、余り当人たちには聞かないようにしていた紅蓮たち。

なぜなら、それがどれだけ苦くて、生き地獄そのものな凄惨極まることか、聞かなくても容易に想像できたからである。

辺り一面荒野な地平線の真ただ中で、屍と化した兵士たちに囲まれて佇むヴォルケンリッターの姿がだ。

確かに、こんなこいつらを見て、こいつらが『守護』なんて肩書き持つてると説明されちゃあ……嘲笑のネタに扱われるのがオチ。

それどころか、自分の意志を全うするどころか、意志すら持つことも許されなかった。

こいつらの人生は、自分の本懐を果たせず、挫折ばっかりの不本意な経験に埋め尽くされている。

絵に描いた無口無愛想なこの守護獣も、内心二つ名とは程遠い自分が悔しくてたまらなかっただろう。

「だから嬉しくはあるのだ、シグナム、ヴィータにシヤマル、あやつらは一介の人として過ごしている今に、それに私も……戦う」以外の方法で主はやてを守る身となった、心から感謝する」

さつきとは別の理由で、紅蓮は返答できずにいた。

ちきしよう、こうまではずきりと気持ち伝えられたんじや、どう返していいか分からなくなる。

それに、どうも照れくさいのか、体のあちこちがムズかゆかった。

だくくもう、＼ありがとう＼なんてこつちからも正直言ってやりたかったのに、先越されたんじや恥ずかしくて口に出せねえじやねえか。

何にありがとうって？

ゼロにミラーナイトに、焼き鳥…もといジャンボットと宇宙のあちこちを旅してた頃のように、退屈と縁の無い、楽しくてしようがないこいつらと暮らしてる今つてのもあるが、やっぱり何よりなことと言え、義妹のはやてだ。

八神の親父さんとおふくろさんが死んで、歩けなくなる宣告を受けた頃は、まだ小さいのに無理して我慢して、作り笑いするのが多かった。

周りの大人は、『強い子』だとほざいてたけど、紅蓮はそう思わない。流れずに溜まった水が時間が経つうちに腐っちまうように、押し込め過ぎたら、その内心が壊れてしまうからだ。

気持ちつてのは、たまには素直に吐露して流さねえといけねえ、でない…：自分の場合だったら——それこそゼロたちに船長たちと会わなかったら、誰ともつるめずに独り寂しく死んでたかもしれない。

だから…久遠にヴォルケンの連中と会えたのは幸運だ。そうしか言いようがない。

特に大勢屋根の下でがやがやとにぎやかな毎日になってからは、一段とはやてが心の底から笑うことが多くなつたし、より素直になつた気がする。

今日の銭湯での湯浴みだつて、はやてが言いだしっぺだ。

胸揉みの癖とか…：若干アレな方向に目覚めつつあんだけど、それは時たま『おっぱい星人』とか言ってからかって自覚させとこ。

ほんと、感謝を送りたいのは、こつちも同じ。

なんだけど…：…やっぱちと恥ずかしい、口にするどころか、その気持ちで自覚するだけで、何か…：体がサウナの熱気以外の熱に、晒された。

照れ隠しの変化球でも打つて、どうにか下げよう。

「ありがたく受け取ってやるよ、しかし、今日はやけに弁舌じゃんかザッファイちゃんよ、いつもの寡黙な守護獣さまはどこ行きやがったんだ？」

「(さあ、今日だけはおしやべりな守護獣ということにしておいてくれ)」

その彼からの変化球を、ザフィーラは普段の堅物さからは想像もできないユーモア返しで球で投げ返してきた。

自分の目を疑う紅蓮。

この場合は「耳」ではないのかって？

それもそうなのだが、その時紅蓮の目に入ったものが、それ以上の衝撃であったからだ。

一度目を擦って、ザフィーラを見返してみる。

うん：いつものクールな無骨顔だ。

気のせいか？ はたまた幻覚だったのか？

ちよつと気にし過ぎか。

「ほかの温泉に行つてゐるわ」

「ああ」

サウナから出る紅蓮、次は湯の温度がこの銭湯で一番高い『溶岩風呂』に入るつもりだ。

さて、ここで紅蓮が何を見たかお教えしよう。

それは————ザフィーラのほんの微かなで慎ましやかな……微笑み。

一通り館内の多種多様な風呂たちを堪能した八神家一行は、この一家では相当珍しい……どころか、今日が初めてと言える外食を体験していた。

なるみの湯の中には、お食事処もある。

座敷スペースにて彼らは、この店で評判の焼き肉セットを注文して食していた。

「はやてのレベルが高すぎるから、不安があったけど、結構美味しいぞこれ」



「そんな…大げさやって」

「うむ、リーズナブルな価格でこの味は破格だ、人気メニューとなるのも頷けるな」

「脂もタレもくどすぎ無くて、丁度いいし」

「あまり腹の中に入れ過ぎると、また体重計に乗った時悲鳴上げるぞ」

「久遠ちゃん…：気にしてるんだから水を差さないでよ」

「失礼した」

「兄ちゃんもヴィータも、ちゃんと野菜もとるんやで」

「は〜い」

はやてのプロ並み以上な腕で振るわれた料理で舌が肥えていた紅蓮たちでも、団欒しながら美味しく頂ける看板メニューであった。

途中、ある意味恒例というか…：紅蓮とヴィータの箸が同じ肉を捉えて一瞬触発の状況になりかけたが。

「半分こにしとくか」

「だな」

と上手く丸く収まった。これには自称『家の抑止力』な妖狐からのおしおき…もとい影響も強い。

「そや、さつきも話題に出た闇の書の中に居る管制人格さんのことなんやけど…」

はやては足元に置いていた、騎士たちが現界する以前から外出する時はいつも持ち歩いてた魔導書を取り出す。

「やっぱり、名前が無いのはちょっと可哀そうやと思うんよ、みんなにはちゃんと名前があるのに、この子だけ『あいつ』とか『彼女』とか『管制人格』とか、不公平や」

「だよな、お前らと違って、蒐集をしねえと本から出てきて一緒に暮らすこともできねんだ、せめてこいつだけのネームくらい付けたっていいだろ？ な？」

「ああ」

「うん」

「はい」

はやての代になるより昔、生きるのは殺し合うに方法がなく、そも

そも人らしい営みなど望めなかった身の上ゆえ、当時の彼らには固有の名など無価値同然、あつても無くとも、大差の壁は存在しなかった。けどこうして「人間」として生きる日々を得て、名を持つということとがどれだけ重要か、日々痛感させられている。

彼女の考えには全員全面的に賛同だった。

「良い名前を考えてあげてください、魔導書の内にいるあやつも喜ぶでしょうから」

「そない言われたら、責任重大やな……まず帰りに本屋でもよろうかな？」

「こないだの甲冑みたいにネタ探しか、この辺りに書店はあつたっけ？」

「心配はない、この浴場から五分歩いた先にジ○ンク堂がある、案内しよう」

「今日もさえてるわね、ザファイーラのアシスト」

こうして、帰りは寄り道確定となった八神家である。

そんな彼らの夕食の団欒を、見守っている者が一人。

「まだ……泣けたのだな……私も」

できることなら、あの光景の向うに、行きたかった。

だがそれは叶わない。

儂い自身の願望——ユメだ。

自分が、現世に現れるということは、大勢の命ある者に痛みを強いらせることになり、そして……それ以上の数え切れない生ける者の屍を、生み落とすことになる。

これでいい……自分はこうしてただ見ているだけでいいのだ。

ただ彼らが享受する幸福が、長く続くよう願うだけでいいのだ。

少女たちの想いを前に、目頭を熱くさせながらも、今はまだ「名無し」な彼女は、そう自分に言い聞かせるのであった。

つづく

## STAGE 21 | 破られた約束

夏が終わり、秋もとうに通り過ぎ、着々と冬本番へと進行中な11月の終わり頃のその日の夕方。

「みんな……遅いな……」

身体のハンデで、車椅子の生活を送る身な彼女でも調理に勤しめる様、バリアフリー仕様になっている八神家の台所にて、今日の夕食の準備をしているはやてがふと呟いた。

台所とリビングが陸続きになっている一階の一部屋では、かなり広めなスペースであるのだが、今この家にははやて一人しかいない。

この部屋一帯を指すのではなく、家一戸そのものだ。

はやての声と息遣い、調理器具や暖房の稼働音、テレビから発されるニュースを読み上げるアナウンサーの声しか聞こえなかった家中に、ドアが開く音が鳴る。

「ただいま〜と」

「おかえり兄ちゃん」

ようやく、義兄である紅蓮ことグレンファイヤーが学校から帰ってきた。

一年からずっと帰宅部なので、部活動に勤しんでいる学生さんよりは帰りが早い。

紅蓮が部活に入らなかった理由は、無論のことははやての為だ。

できれば一日中付きつきりでいてあげたいのだが、戸籍上はまだ教育を受けるために学校に通うことを義務付けられている年齢なので、日中はどうしても家を空けなければいけなかった。

守護騎士や久遠のお陰で、家事の負担は減ったが今や季節は冬の11月の下旬、もう三年生は受験で引退した身なので、部活で青春を謳歌したければ高校に進学しなければならない。

一応彼も進学の意志はあると伝えた上で、横道から本筋に戻そう。

「久遠もあいつらも、まだ帰ってきてないのか？」

「そないやねん……どこほつつき歩いとんのやろ、剣道教室もゲートボールの集まりももう終る時間やし、シヤマルもザファイーラも買い物

に行っただつきりやし……」

その守護騎士たちは最近、「どこか」へ用件も言わぬまま出かけることが多くなっていた。

だいたい食事時には必ず帰ってくるので、外出は各々の日課によるものと最初紅蓮は考えていたのだが、一緒にゲートボールを興じてた老人会のじいさんたちや、剣道教室の先公に生徒たちによりや、ここんどこ会う回数が以前より減ったと言っていた。

家にいない時の回数が増えているにも拘わらずだ。

それに、いつもシグナム達よりも家にいることが比較的多い久遠とザフィーラの獣耳コンビや、はやてが家にいる時は傍に漂って浮いている『闇の書』さえも、今日も無い。

あの4人だけでなく、久遠や書の中にいる『あいつ』までが家を出ているという事実にも、どうしても、ある疑念が嫌でもよぎってしまう。

「……………ちよつくら、あいつらを探しに行ってくるわ」

「頼むわ、気いつけてな」

「ああ」

二階の私室に一旦向かった紅蓮はすぐさま制服から私服に着替え、コートを着込み、その内ポケットにとある棒状型の『アイテム』を忍ばせて、自宅を後にするのであった。

日が沈み、段々辺りが暗くなっていく市街を走る紅蓮は、あることを思い出していた。

そうだ……思えば、石田の姉ちゃんからあの宣告を聞いたのを境にして、あいつらの理由―わけの分からねえ出歩きが多くなつちまつた。

だいたい二カ月前の9月の終わる頃、はやての定期健診で海鳴病院に来たある日のことだ。

「紅蓮君に、シグナムさんとシヤマルさん……ちよつとお話があるの

ですが」

いつもの通り、一通りの検査をやった後、俺とシグナムとシヤマルが、はやての保護者代表として石田の姉ちゃんに呼ばれた。

診察室での………そんな時の姉ちゃんの顔は、目茶目茶重たかったのが今でもはつきり頭ん中で再生できる。

「はやてちゃんの足が、原因不明の神経性麻痺に侵されていることは、お伝えしましたよね」

「そ、それがどうしたってんだよ」

前に俺に、はやての下半身麻痺を伝えた時と、同じくらいの重たさと深刻そうな顔つきだった。

「この半年、麻痺の進行が少しづつ悪化しているんです、この2カ月は……さらに顕著で……」

この時俺は、目の前が真っ暗になるって言葉が——  
「……このままでは内臓機能の麻痺に発展する危険性があるんです……」

——どういう意味なのか……嫌ってほどに思い知らされた。

ナイフとか剣なんかよりも鋭く強く、心に突き刺さってくる現実つて刃。

『目の前が真っ黒』になる時、目ん玉はいつもようにはつきりと映るんだけど、目に見えない、形なんて無いもんじゃないはずの『心』つてのが、真っ黒に塗り潰されていく様になっていくのが、目に見えてしまう感覚に襲われちゃうんだ。

一緒に聞いてたシグナムもシヤマルも、さぞ同じ気分だったろうよ。

はやてを心配させまいと、無理に笑ってんのが見え見えだったさ………かくいう俺も、その一人だった。

数日は学校のダチとつるむのも面倒くさくなって、どうにか自分を奮起させることで取り組んでいた受験用のドリルの回答欄はやる気がでないせいで、さっぱり埋まらなかった。

自分のその時の心境はともかくな………あの日から少し日が経ったくらいからだ……あいつらが、頻繁に家から出るようになったのは。

昼の時なら、まあ自分の時間もあるのだからと納得はできる。

だけど、あいつらはその『自分の時間』よりも優先させていることをやってやがる。

昼間はともかく、夜中の遅くにまでだ。

ある日、トイレで夜中に起きた時、感じるはずのあいつらの魔力一つ魔法を使う力が感じられねーじゃねーか。

前からいわゆる独学ってやつだけといつでも自分の力が使えるように鍛えてたし、今は落ち着いてつけど、今年の春辺りにヘンテコな事件が何度も起きてたからさ、シグナムたちが鎧のデザインをはやてに頼んだように、自分も備えとして、ずっと昔にゼロから聞いた『エネルギーを感じ取る』特訓も行つて、『銀色のあいつ』からもらった、変身アイテムも携帯してた。

んでさっきの話の続きだけど、自分の目で確かめたら案の定、家にいるはずのあいつらがいなかった。

玄関には、あいつらの靴が無くなってて、そろそろその思春期つてやつに入りかけだからアウトな年頃に入るけど、こつそりはやての部屋を見てみたら、いつも一緒に寝てるはずのヴィータがいなかった。

あいつらだけじゃねえ、最近は八神家（ここ）で一緒に暮らす様ですつかり染みついた久遠までだ。

前置きはこの当たりにして、はつきり言うとな俺は、あいつらが昼もだけど夜な夜なこつそり抜け出して何してんのか、一応おつむを使うのが苦手だと自覚してる自分でも大体の見当は付いてた。

そもそも、魔導書さんも一緒な時点で、モロバレだつてんだ。

あいつも相乗りな時点で、ヴォルケンリッターがやることと言っちゃ一つしかねえ……でも、俺の中がどつかで否定しやがれと言つてくる。

ただの俺の思いこみであつてほしいと、心が訴えてきやがる。だつてそうだろ？

欲に目がくらんで、人間だから悪魔より性質悪い主たちから、毎日殺し合いをさせられて、人として扱われない、道具よりもひでえ生活から、やつと解放されたんだ。

あつてほしくない、あいつらがやっとなんだ、掴めたものをみすみす壊すような真似してるなんて、はやてにどう説明すりや良いんだよ！

言えない……主で、家族として暮らしてるはやてに黙って、こっそり魔力集めてるなんて……言えるわけが無い。

ましてや魔力を集めるに魔力を持つてる野郎を襲う、なんて尚更だ。

だと言うのにさ、またどつかじや間違い無く久遠もグルになって蒐集をやっちまってる結論付けちまってる自分もいるわけよ。

特訓の成果で、街中であいつらが魔法を使いやがった痕跡を見つけた……てもあんだけどよ。

頭にかかるモヤモヤに苛立ち、振り払いながらも、市街を駆けていた紅蓮。

途端、いきなり歩道の真ん中で立ち止まった。

感じる……ヴォルケンリッターと久遠の魔力が、しかもこの量と他の感じ慣れない魔力、絶対その辺でどこぞの誰かとやり合ってる。

どこだ？ 聞く話じゃ、異空間を作れる魔法だつてあるらしいから、どっかにそれがあるはずなんだ。

それにはやっぱ、地べたより高えところの方が良いよな。

紅蓮はそう即断すると、人気の無いビル街の路地裏に入りこんだ。

人工の光が遮断され、月の光も届きにくい場所なので一際暗い。

誰もが、その暗黒で閉鎖的な空間を前に近づかない。

だから紅蓮にとって都合が良かった。

両足に力を溜め、踏み込みを入れると、紅蓮は壁に向かって飛びあがった。

宙を駆ける紅蓮の身が壁にぶつかりそうになる寸前、紅蓮は壁を蹴り上げ、さらに高度を上昇。

一連の壁蹴りからの跳躍を反復させて、紅蓮はビルの頂に降り立った。

テレビゲームの主人公みてえに跳べるかは、跳ぶ前は分かんなかったが、案外上手くいくもんだな、体慣らしのウォーミングアップとしては、上々な方だ。

ビルに着地と同時に彼は深呼吸をして、集中力を高めさせる。

エネルギーの波動を感じとる感覚を研ぎ澄まして、この海鳴(まち)のどつかで張られている異空間——結界を探し当てようとする。

落ち着きとは無縁そうな彼にしては珍しく、一言も口にしないまま集中力を持続させていた。

そこは、学業、つまりは周りのクラスメイトと同じく、ダンマリと先公の授業を聞くことを経験してきたゆえの賜物。

ありやがった。

紅蓮の視界には、一般人には絶対見えない、魔力で構成されたドームが映っている。

贅沢言うなら、ウルトラマンたちみてえに“透視”で中がどうなつてんのか見たいんだが、自分では無理な相談だ。

今の超感覚とかテレパシーなら、どうにかなると付け加えた上でだ。

意外かもしれないが、一見パイロキネシスと腕っ節しか取り柄の無い単細胞な男に見える紅蓮には、それなりに超能力は使える。

特にテレパシーは、宇宙でも活動できる人種たちには必須スキル。

音を飛ばすのに必要な空気が一切無い空間において、一番滞りなく会話が可能にさせるのがテレパシー。

これができなければ、真空でお話なんてできるわけない。

そして、もう一つの超能力であるエネルギーを体で感じ取る紅蓮の超感覚が、結界内での戦闘が激化していることをまざまざと訴えかけてくる。

いや、紅蓮が結界のある方角に、見開いた視線を固定させたまま、微動だにしなくなつたのはそれだけじゃない。

この……懐かしさすら浮かんでしまうこの感じ。



「おいおい……これって……」

あの結界の中から、魔力とは違う、久しくて、長いことご無沙汰だった……

「仲間」の力を感じ取った。

ああ……間違いない。

こいつは絶対に、あいつらのものだ。

鏡の騎士、ミラーナイト——リヒト・シュピーゲル。

光の戦士、ウルトラマンゼロ——ゼロIIユウヤ・ヴェアリストアー。

忘れもしないさ……はやてと一緒にいると決めてからも、また会えるってのをずっと信じてた。

特にゼロは、バラージの盾を持つてるから次元を渡るなんて朝飯前。

どんなに時間がかかっても、絶対死に物狂いで探してるのが容易に想像できたしな。

どうやら焼き鳥ことジャンボットの野郎は、いなさそうだ。

あいつはロボットで宇宙船だから、俺以上に人間になるなんて無理な話。

いや……むしろいないのは不幸中の幸いってやつだぜ。

だってさ、結界越しにでも分かんだよ。

ゼロとリヒトが、守護騎士と久遠と戦ってるってことに。

それに、あの見えないドームからは、自分の知らない、他の誰かの魔力も混ざっていた。

シグナムたちの話じゃ、魔法を使つて、異世界を渡れる文明持った世界がいくつもあるという。

だが、地球はそこから除外された世界だ。

はやてみたいに、稀に魔法が使える野郎もいるらしい。

こうなつちまえば、認めるしかねえ……あいつらが蒐集を現在進行形でやってるのは、もう明白だ。

多分、ここらで丁度よく、魔力を持った誰かさんを見つけて、搔っ攫おうとしたら、運悪くそいつがゼロたちの「ダチ」か、ひよつとしたら「家族」の間柄で、こうしてやり合つちまってる。

紅蓮の推測は、ほぼ当たっていた。

市街一帯で魔力持ちを探していたヴィータは、高町なのはを見つけ結界内に閉じ込めて襲撃。

なのはが魔導師だったので抵抗を受けながらも打ちのめし、蒐集に入ろうとしたところ、義兄(あに)のミラーナイトと、友達であるフェイトたちが介入。

一時追いつめられるも、シグナムたちの助太刀で五分五分となり、戦闘経験とデバイス同士の相性差で一時優位に傾けるも、ゼロとレオが駆け付け、実は人間の体を得たナオトことジャンボットとフェイトの見た目が年下な姉アリシアのサポートで、戦況が膠着状態に、下手すると逆に押されつつあるのが、結界内の一部始終だった。

ともかく、ゼロたちがこの世界の地球にいることはよく分かった。

なら：俺は一体どおすりや良いんだ？

理由はどうあれ、あいつらは魔法使いになれる素質を持った通行人を、通り魔よろしく襲つちまってるんだ。

ゼロたちはきつと、その襲われたやつとはダチで、そいつを護るために戦っている。

それも違う。

正当防衛が当てはまんの、ゼロたちの方で……どう足掻いたって、あいつらは一方的に人を襲った悪玉、悪漢、悪党、悪いやつだ。立ち位置は圧倒的に……騎士たちの方が不味い。

なまじ学校に通って頭使うことが多くなったお陰で、単純な思考回路ながら知恵を使いこなせるようになってる自分にだって、すぐに行きつく現実。

だけだよ……ジャケットのフアスナーを下ろし、内ポケットに入れていたものを取り出して手に取る紅蓮。

紅蓮——グレンファイヤーはあの次元振に巻き込まれた際、ある……ウルトラマン”に助けられた。

その時、俺はそいつから人間に変身できる能力と、いつでも人間から元の姿に戻る為のアイテムを授かった。



あつた。

それから数時間経った八神家宅。

一階のリビングでは、一応いつもの八神家の姿がそこにあつた。

「こいつもさつきもアイドルみたいに口パクとかじゃねえよな」

「そんなことあらへん、二〇動じゃ『口からCD音源』って付くくらい上手い人なんよ」

「へ〜〜つて、確かにすんげえうめえ」

テレビを鑑賞中のはやてと久遠とヴィータにはやての体を支えるクツシヨン役を務める狼姿のザフィーラ。

今流れてるテレビのチャンネルでは歌番組をやっていて、しっかりと生歌を披露している女性歌手三人組のユニットが映っていた。

「はやてちゃん、お風呂の支度出来ましたよ」

テレビ画面の前で、お団子状に集まっていたはやてたちに、お風呂の準備と、夕食の後片付けをしていたシャマルが入浴を催促してきた。

「ありがとうな」

「ヴィータちゃんも久遠ちゃんも、一緒に入っちゃいなさいね」

「はい」

「こおん」

丁度食器洗いも終わったので、身に着けていたエプロンを外すシャマル。

メンバーの中で、一番家事に携わることが多いためか、エプロン姿が大分様になってきたが、相変わらず料理に関して言えば惨敗記録を絶賛更新中。

それ以外の家事でも、やっぱりごくごく偶にドジを踏むことが多かった。

「明日は朝から病院です、あまり夜更かしをなさらないように」

「シグナムはどうするの?」

「今夜はいい、明日の朝に入らせてもらう」

「風呂好きが珍しいじゃん」

入浴は明日にするというシグナムの申し出にヴィータが思わず食いつく。

スタイルはともかく、八神家の中で一番男勝り、または男女な彼女には意外だが、風呂好きな一面もある。

体を洗い流す行為さえままならなかった経験もあって、入浴特有の温かみと『生き返る』心地よさは絶品であったようで、一家の中では一番の浸かっている時間が長い、よって入るのはほぼ決まって一番最後。

一度湯に浸り過ぎ、のぼせてドジ踏んだことさえあるくらいだ。

抜けていると言われても致し方ないが、それだけ彼女も人らしくなったがゆえ。

最初は紅蓮に一糸纏わぬ姿を見られても、ケロっとしていたが、現在の彼女が同様のアクシデントを経験すれば、羞恥心で顔を真っ赤にしながら悲鳴をあげることだろう。

「たまには、そういう日もあるさ」

なので今日は遠慮するという態度に、どうしても気になってしまいが、彼女の言う通り今日は『そういう日』だとヴィータは結論付けた。

「ほんでなシヤマル」

「何？はやてちゃん」

「ほんとに兄ちゃんが何かあったか……知らんの？」

はやてを除く、その場にいる一同に緊張の稲妻が走る。

どうにか顔に出さぬように心がけたが、嘘発見器を着けられていたなら、その感情の揺れ幅に機械が反応して、筒抜けになっているところだった。

あの戦闘から帰って来た後の紅蓮は、口数が極端に少なかった。

家にいる時は、喋って無い時間を探すほうが手っ取り早いほど、声を発していることも多いし、喜怒哀楽がはっきりしているムードメーカー。

それが今夜に限っては無口無表情で、夕食を終えると『ごちそうさま』とそそくさと部屋に行ってしまった。

学校帰りの時はいつもの紅蓮だったので、どうしてもそのギャップにはやては引つかかりを感じてしまっていたのだ。

「はい……私たちも今日紅蓮君に何が起こったのか……さっぱり」

「分かったわ、ほんならお先にな」

「はい」

はやてはヴィータと女の子モードの久遠と一緒に浴室に繋がる洗面所に入ってしまった。

残った三人は洗面所のドア越しに浴室に入ったことを聴力で確認すると……胸の緊張感を解いた。

「危なかった……はやてちゃん結構鋭いところがあるから……」

自分たちがはやてたちから交わした「約束」を破って、こっさり蒐集行為をしているとは、口が裂けてもはやてに言えない、言えるわけがない。

数時間前はそれこそ、激闘の数時間、今でもそれぐらいしか時間が経っていないことに内心シャマルたちは戸惑っている、それぐらい密度が濃く、時間が長く感じられたからだ。

「先送りを申し出たのも、今日の戦闘でだろう、シグナム」

「っ………聴いな、その通りだ」

シグナムは服の裾を掴み、インナーごとまくり上げ、その引き締まって見事なS字を刻んだ背中をシャマルとザフィーラに見せた。

見るだけで肌触りの良さを感じることができる美麗な背中には、物理的衝撃による青く淀んだ痣が浮き上がっていた。

「『ウルトラマンゼロ』と名乗った、紅蓮の仲間からか？」

「そうだ、やつの肘打ちを鞘でどうにか防いだのだが、ご覧の有様だ」  
「シグナムに手傷を負わせるなんて……」

ヴィータが市街をサーチして見つけた少女。

どう見ても地球人だった彼女は魔導師だった。

ヴィータは追いつめることはできたものの、彼女の既知の間柄でもありそうな管理局の関係者と、未知なる生命体、さらには巨大生物の横槍で、結局一ページ分すら蒐集できないまま撤退を余儀なくされた。

今日は完敗を喫されたと認めざるを得ない。

こちらは当初の目的を果たせずじまい上に、時空管理局に存在を知られてしまった。

巨大な怪物と、仮面を被った人間の乱入者がいなければどうなっていたことか……：確かなのは後者の面々がいなかったら、シヤマルはあの獅子の指輪を嵌めた僧侶に捕らわれていたに違いない。

所在（ここ）が見つからぬよう、魔法で色々と手を打ってはいるが、手痛い失態であることは揺るぎようがなかった。

彼らのはやてに黙って、蒐集を行うようになったのか、その要因はこのところ急激に進行しているはやての感覚、身体器官の麻痺。

その原因が、自分たちにあると、紅蓮と聞いたあの宣告の日、突きつけられた。

闇の書によるリンカーコアの侵蝕。

地球の医学では見つけることができなかったはやての身体麻痺の正体。

はやてがあらたな主選ばれ、こうして本格的に起動するまでの7年、その長い月日によつてはやてと書は、魔力を通じ肉体面で密接にリンクしていた。

それが何を意味するか……不特定多数の人間の魔力を貯蔵でき、蒐集しなくても魔力ランクに加算すればSSSクラスの魔力量を誇る規格外の魔導書だ。

年齢的に幼いはやての体内にある未成熟なリンカーコアは、その魔導書の浸食を受けていたのである。

下半身からじわじわと蝕むはやての神経性麻痺は、その浸食によつて起きた症状であり、呪いだつた。

さらに厄介なのは、書が自らの存続の為に、はやてのリンカーコアから魔力の供給を受けていること、当然ヴォルケンリッターが現界して生活できる分も勘定に入り、おまけに蒐集による魔力の補給が行なわれかつたことで、騎士たちと書の管制人格の計5人分の命を賄う為にはやての負担が激増され、浸食が加速度的に進んでしまった。

このまま放っておけば、書の浸食が全身を覆い、はやての生命活動は停止、つまりは死を迎えることになる。

シグナムたちにとっては耐えがたい無情で無慈悲な現実。

血生臭い殺し合いと戦争と転生を繰り返してきた自分たちに、安らぎと平穏と光明を齎してくれたははやてたち。

自分たちは恩を報いるどころか、仇で返し、果ては命まで奪おうとしていたのだ。

もし、浸食が進みはやてを死に追いやれば、自分たちはおめおめと次の主を求めて、新たな世界へ転生する。

過去の主たちと大差ない、いやそれよりも遥かに酷い。

何よりも許し難い所業だ。

そして、残酷で不条理な運命に晒されるはやてを救うべく騎士たちが選びとったのが、魔導師、或いはリンカーコアを持った人間、生物から魔力を蒐集するということだ。

魔力を蒐集し、書の全ページを書き埋めて、はやてを闇の書の主として完全覚醒させる。

そうすれば、書の浸食は止められるはずだ。

殺すことは絶対にしないと誓いつつも、誓いと約束を破り、罪に汚れる覚悟を持って、宣告を受けたあの日、ヴォルケンリッターは決意を固めた。

本当は、自分ら4人だけで蒐集を行うつもりだった。

はやてがこうなってしまったのは、自分たちの身から出た錆であり因果応報である。

自分たちの宿命を、無関係な他者に巻きこませることなどできるわけがない。

その手を血で染め上げるのは自分たちで充分だ。

だが石田先生から宣告あった日の夜、はやてたちが就寝に入ったところを見計らって、こっそり近くの公園で会合していた時の模様を久遠に見られてしまった。

それだけではない、はやての神経性麻痺が自分たちにあると知りながらも、久遠は協力を申し出て、あまつさえ己の魔力まで差し出して



くれたのである。

協力はともかく、蒐集されることも良しとする久遠のご厚意に悩みに悩んだシグナム達だったが、申し出を受け入れ、はやてよりも莫大な魔力を抱えた久遠のリンカーコアから魔力を抜き取った。

リンカーコアから魔力を取り出す行為は、相当な激痛を伴う。

どれくらいかと言えば、ひどい時には女性が出産を経験する際に匹敵する痛みだ。

久遠も例外では無く、その時大人形態であった久遠は、防音効果付きの人除け結界を張っていないければ近所中に響かしてしまうほどの喘ぎと悲鳴を上げ、人間形態を維持できる余力まで奪われた久遠は子狐形態となって倒れ込んでしまった。

今にして思えば、久遠の申し出を受けたことは僥倖であった。

立つこともできずに弱り果てた久遠の小さい体躯が、自分たちが、これから犯す罪を再認識させる戒めとなってくれたからだ。

さらに、体力を取り戻した久遠は、詠唱も無しに暴風や雷撃と天候を操れる能力を最大限発揮し、魔導師、魔法生物を圧倒する戦闘能力を発揮し。

彼女の助太刀もあり、11月が終わり際に入る頃には、書のページが半分の333ページを超えていた。

このまま管理局に完全に感づかれないまま、完了していれば申し分がなかったのであるが、現実はそのはいかず、ここに来て障害と不確定要素が一気に増えてしまった。

「あの銀色の戦士たちが紅蓮君のお仲間さんだったなんて…」

「あり得ない話では無かった、紅蓮と同じく、同朋の彼らがあちらの世界に飛ばされていたとしても、おかしくはない」

一つは管理局に存在を知られてしまったこと。

二つ目は、戦闘を行った相手が、紅蓮の11年来の友たちであったこと。

三つ目は正体も分からない第三勢力と怪獣の存在。

一つ目は対策もとってあるし、細心の注意を払えばどうにかなる。

問題は二つ目と三つめ。

「紅蓮君の話だと、ヴィータちゃんと戦ったミラーナイトって、鏡がある場所なら一瞬で移動できるのよね？」

「ガラスに水面でも可能で、例え結界を張ってもその能力を使えば容易く侵入でき、要塞クラスの攻撃すらも受け止めるバリアまで持つ、難敵だな」

鏡面から鏡面を瞬時にワープ。

ヴィータと互角に戦える身のこなしの軽さと二刀流の使い手。

久遠の一撃を受け止めるバリアと自分たちの奇襲に対応できる反応速度と判断力。

何よりそのバリアは、かつて紅蓮の世界を蹂躪していた帝国の惑星クラスの要塞の猛攻から、彼が当時仕えていたと言うエスメラルダ王家の宮殿を護り抜いた逸話もある。

真つ向勝負なら、どうとでも言えないが、騎士としての格なら自分たちよりも上で、畏敬さえ抱かせ、敬意を表したくなる。

「難敵なら、ウルトラマンゼロもそうだ、体術、剣術、あらゆる戦闘技術を高次元で取得している、何より紅蓮によれば、技の飲みこみが恐ろしいまでに高いそうだからな」

シグナムの剣技とほぼ対等に渡り合える格闘能力を持ち、あの体捌きと実際に剣を構えた姿から見て、剣も嗜んでいる、それも高レベル。

近距離戦——クロスレンジでの戦闘技量もそうだが、中・遠距離——ミドルレンジでの実力も申し分の無い。

額から発射する、特定の部位にピンポイントに当てるエメリウムスラッシュ。

両腕をL字に組み、右腕から広範囲に照射できるワイドゼロショット。

ブーメラン、短剣、長刀、大剣とデバイスのように様々な武器となる汎用性を持つ二振りの宇宙ブーメラン、ゼロスラッガー。

そのゼロスラッガーを胸部に装着して放つ破壊光線、ゼロツインシュート。

制約が付いているが、次元を自在に超え、ゼロにさらなる力を与えるロストロギアクラスのアイテム、バラージの盾、ウルティメイトブ

レスレットを右手に宿している。

これだけでも、遠近問わない万能性を持った猛者なオールラウンダーだが、紅蓮が一番口を酸っぱくして忠告してきたのは、驚異的な飲みこみの速さだった。

紅蓮、グレンファイヤーは一度、ゼロと戦闘を行ったことがあるのが、自分の一番の得意技を披露した際、ゼロはその技を一回直に受けただけで、自己流にアレンジまで付けて自分の技としてモノにしてしまった……という。

それだけゼロが洞察、観察力が高く、こちらの技、動きが見切られやすいということ、つまり二度も同じ技が通用しなくなり、逆にアレンジされた自分の技で倒される恐れがある。

彼らの能力には、非殺傷設定は無い、本気で戦うことになれば、殺しをしないという制約すら、破らなければならない状況に追い込まれかねなかった。

となれば……彼らと相對せずには済むもつとも最善な手は――

「あの魔導師の少女たちからの蒐集は諦めた方がよさそうだな」

「下手に襲撃すれば、またあの人たちと戦闘になるし……」

「紅蓮のことを考慮すれば、やむをえまい……」

あの白衣と黒衣の魔導師の少女は、どちらもAAAクラスの魔力量を持つていた。いつ書の浸食がはやての体を覆い尽くして命を奪うか、具体的なタイムリミットが分からない以上、彼女たちの魔力は喉から手が出る宝物だ。

だが、その為には、彼女たちと単なる知り合い以上の関係とと思われるゼロたちと、また戦闘する羽目になる。

はつきり言えば、リスクと実利が釣り合わない。

それに彼らは、紅蓮の仲間、ともに戦ってきた戦友。

自分たちはせつかくの再会のイベントを、最悪の形で演出してしまっただ。

紅蓮が『グレンファイヤー』としてあの場に現れたことだって、悩みに悩んだ苦渋の決断であったことは嫌でもよく分かる。

彼の心境を踏まえて、あの少女たちから魔力を採取することは見送

ることになった。

既に自分たちははやてたちの想いを踏みにじってしまったている。たとえ偽善だとしてもこれ以上、彼らを傷つけるわけにはいかない。

二つ目の障害への対応策は決まった。

残るは……やはり。

「何である仮面を被った人、私を助けてくれたんだろう？」

「心当たりは無いのか？」

「全くよ、シグナムたちは？」

「クラールヴィントが記録した映像データを見てみたが、こちらもさっぱりだ」

ゼロたちの関係者かもしれない僧侶からシヤマルを救った仮面の男。

五分五分でどちらに傾いてもおかしくなかった戦況に突然乗り込んできた50メートルものの巨体を持つ。怪獣と呼べるべき巨大生物。

「何かしらの繋がりはあるかもしれないが、それだけしか分からない」「アニメでよく見る、敵か味方が分からない存在がこんなややこしいなんて思わなかったわ」

シヤマルのその表現はどうかと思うが、一番対処に困る勢力であることは確定だ。

助けてもらったにせよ、所在の分からない相手ほど危険なものはない。

結論としては、状況に応じて、臨機応変に対応していくしかあるまい。

「それでも、我らは負けるわけにはいかない」

「そうだ、我らヴォルケンリッター、騎士の誇りに賭けて」  
もう、立ち止まらない。

スタート地点は既に存在せず、戻りようがない。

そして残された時間すらも少ない。

具体的な数字すら分からないタイムリミット。

たとえ、今進んでいる道が、藪と茨と血と修羅に覆われていようとも、進み続けるしかない。

そう、負けられないのだ。

勝ち進まなければならぬのだ。

そして生き残らなければならぬのだ。

主はやてと紅蓮と久遠との、この暮らしを、自分たちの宿命から守り抜くために、我らは戦いぬく。

この時彼らは、意志を強固にする余り、重大なことを見落としてしまっていた。

その原因が、外部からの人為的な悪意によるものであったとしてもだ。

今ここで気づいていれば、結果的にあそこまで事態を悪化させることはなかったかもしれない。

が、今の彼らには叶わぬ相談だ。

それを絶望と一緒に思い知ることになるのは、もう少し先のことになる。

つづく

## STAGE 22 — 懸念

当たり前のことと言われるかもしれないが、海鳴市にある学び舎は、学校法人、聖祥学園の属する聖祥大学と、小、中、高校含めた付属校だけでは無い。

県立緑ヶ丘中学。

私立の聖祥学園と対照的に、神奈川県による公立の中学校。

はやてたちが住んでいる中丘（なかおか）町の小学生たちは、聖祥のような私立への進学を希望でもしない限り、卒業と同時にここに入学することになっている。

まだ授業の真つ最中にも拘わらず、堂々とさぼって、漫画の主人公みたいに屋上の上で寝そべっている——はやての義兄である八神紅蓮こと、炎の戦士グレンファイヤー——も、その一人というわけである。

彼の性格上、今のようなサボタージュ行為は毎日行われ、教師陣の頭を悩ませる頭痛の源になっていそうな気もするのだが、実はそうではなかったりする。

以前にも話したが、紅蓮は自分が引き起こしたトラブル等で、義妹のはやてにとぼつちりを喰うことになるのを誰よりも恐れている。

幼くして両親を失い、下半身が麻痺して歩くこともできず、学校にさえ通えない。

でも、そんな理不尽に泣き言一つ言わずにずっと耐え続け、他人を思いやれる優しさも捨てずに持ち続けている。

だから、自分が馬鹿なことやつちまえば、多分はやてはそれすらも自分のせいにして、攻め続けてしまう。

そう考えれば、勉強とか自分には肩苦しくて窮屈なことだって、不思議と面倒くさく感じずに打ち込むことができた。

今まではどうにか机に座り続けて先生（せんこう）たちの授業に着いていけた……んだけど……昨日から真面目に学校生活を全うする気になれない。

“あいつらが、約束を破つちまっていたことを知つちまってから。

そりや言い訳がましいさ、仕事なんて行きたくねえと思つてもどうにか頑張つて職場に行つてる野郎が世の中には大勢いんだから、この程度でサボるなど責められても、言い返すことはできやしない。分かつちやいるんだよ……これが現実逃避だつてことぐらい……言い訳にして逃げてるつてことぐらい……分かつてんだけどき。

「くお〜ん」

紅蓮の耳に、聞き慣れた鳴き声が入りこむ。

「お前…」

寝そべつたまま見上げると、ちっこい狐ツ子、子狐モードの久遠がいた。

その久遠は、紅蓮と視線が合わさった瞬間、その身を光らせながら体軀を変えていき、巫女服を纏つた半獣半人の大人モードとなり、寝そべる紅蓮の横に、いわゆる体育座り、ミラーナイトことリヒちゃんガベリアルの野郎に洗脳ウイルスを撃ち込まれて落ち込んでる時に使つてたらしい座り方で座り込んだ。

それから数分間は、互いに一言も発さずに佇む状態が続いた。

言いたいことがあるにはあつたのだが、気まずさで自分から言い出せず、つい相手から切り出してくれるのを期待してしまうのが原因だった。

「いいのかよ学校に顔出しやがつて、不審者で御用になるぞ…怪しい奴がうろついてるだけでもニュースになるご時世だつてのに」

「紅蓮こそ、ここで油を売つていいわけがなからう、私の記憶が正しければここは確か、生徒は立ち入り禁止では無かつたのか？」

「ほつとけ…」

二人の言い分は、どっちも正当性がある。

本人にその気が無からうが、学校に来ておきながら説明できる理由も無しに、立ち入り禁止の場所にてさぼりを満喫している紅蓮。

たとえ知性が人並みで、人の姿になれても、不思議な能力を持つている以外は動物でしか無く、動物としての彼女には人権なんて持ち合せていない久遠。

二人ともこんなところを第三者に見られてしまえば、ただでは済まない。

特に久遠は、紅蓮の言う通り、保健所に捕まってしまうか、または妖弧と呼ばれし特異な存在なゆえに、それ以上に悲惨な目に遭うかもしれない。それはある意味、正体は巨人な紅蓮も当て嵌ることもある。

自分たちが人の常識から外れし者と自覚があるため、久遠は対策としてこの屋上一帯に人除けと、結界外からは誰もいない様に見える効果を持たせた結界を張り、紅蓮のもとに来るまでも、ウルトラマンゼロが次元移動している際使用している魔法と同じ、自らの周囲に認識障害の術を掛けて、白昼堂々街中を歩いてここまで来たわけである。

彼女の術は魔法とは言えないが、同じ力、魔力素を術の原料にしている点ではよく似た能力である。

「いつから知ってたんだ？」

「シグナムたちの蒐集行為のことか？」

「……………おう……」

「……………石田殿の…宣告があった日の夜だ……」

そして久遠の口から、あの日の夜のことが語られる。

その日の久遠は、紅蓮や騎士たちと同様、はやての神経性麻痺の急激な進行とそれに伴う命の危機に瀕していることを知り、シヨックで終始子狐形態のまま一日を過ごした。

騎士たちと同じ、いつ終わるかも分からない、孤独で冷え切った日々してくれた一人が死に掛けている。

その事実を、たとえ何百年「独り」で生き続けていても、すぐに受け入れられることでは無かった。

自分の力ではかできないかと考えはしたが、自分もまた、闇の書と同じく、破壊しか取り柄が無い存在。

多少、治癒などの癒しの術は持っているが、髪が抜けるなどの副作用



用が出ない抗がん剤程度の効果しか望めない。

一体どうして自分はこんな力を持ったのだ？

自分の母は、その力のせいで、命を落としたと言っても良いのに……なぜ自分はこんな存在となったのだろうか。

問いかけても、納得できる答えは提示されなかった。

温かな生活を送ってきた反動で、余計自分自身が呪わしかった。

暗く淀む想いを抱えたまま、眠りに着こうとしたその時だ。

いきなり瞼越しに光が差し掛かり、それが収まると同時に、パターン、とドアが閉まる音がした。

今の光と音で覚醒してしまった久遠は、目を開けて部屋を見回すと、いつもはやてと寄り添って眠っている筈のヴィータがいないことに気づく。

精神年齢が低い子狐形態の久遠でも、さっきのはヴィータが出ていったことに行きつく。トイレの類かとも思ったが、一向に水洗トイレの洗浄音が聞こえてこない。

ひよつとしてと思い、集中力を高め、家中の魔力反応を探って見た。ヴォルケンリッター全員が、家から出た形跡がある。

こんな真夜中に何の用件なのだろうか？ 疑問と同時に昼間の記憶が脳裏に流れる。

壁に怒りの籠った拳を叩きつけるシグナムと、泣きじやくるシャマルの、とあるやり取り。

“なぜ気付かなかった！”

“ごめんなさい：わたしい：”

“お前にじゃない、自分に言っている！”

傍から見れば意味を図りかねないシグナムたちの発言から、胸騒ぎがよぎった久遠は、はやてを起こさぬよう注意を心がけながら、子狐形態から、大人形態へと変わり。

「服はこんなものでいいか」

魔力で構成された巫女服を、目立たぬよう黒のタートルネックにジーンズと、飾り気の無い現代の衣服に変えた。

耳も尻尾も完全に隠し、はやての部屋を後にするのであった。

4人がどこに行つたのか、あてがあるのかと気になる方に補足を付ける。

ヴォルケンリッターたちは、闇の書に組みこまれたデータとリンカーコアを元に、魔力によって人体を再現、構成された生命体。

表皮も、流れる血液も筋肉も骨も、髪の毛一本までその体は魔力でできている。

よって魔力持ちの人間よりも魔力を発散しながら生活している。

歩くだけでも、足跡ならぬ魔力跡がしばらくの間残留していることがある。

なのだが、本人たちもそんな体質であると分かっているので、付けられない様に、魔力の体外放出を抑えているようだ。

外には出てみたものの、残留魔力はほんの僅かしか感知できず、T字路に入ったあたりから枝分かれしていた。

自分たちに後を着けられない様、一時的に別れたようである。

だがこちらにも、手が無いわけではない。

もしはやてたちにも知られたくない密会を彼らが行うつもりなら、どこかで結界を張って集まっているかもしれない。

それに、たとえ魔力の痕跡を残さぬよう努めても、どうしても残ってしまうものが他にある。

それは、どの生物にもある「匂い」だ。

こればかりは、自分の方が上手だと自負できた。

鼻孔で感じる騎士達の匂いを辿って、久遠は歩みを進めた。

そのヴォルケンリッターたちは、中丘町のお隣にある御浜町の公園に集まっていた。

はやての足を不満足にしていた原因が、自分たち闇の書の浸食によ

るものと紅蓮とともに宣告を聞いていたシグナムとシャマルは、  
ヴィータとザフィーラに詳細を話していた。

全員翳のある顔つきで沈んでいる。

生きているだけで、大事な人の命を蝕んでいるのだ。それに対し、  
もう何も感じられない自分たちでは無い。

「助けなきや……はやてを助けなきやー！」

ヴィータに至っては、拳を震わせながら強く握り、その吊りあがっ  
た瞳を潤わせてさえた。

「シャマルは治療系得意なんだろっ？ そんな病気くらい直せよおっ  
！」

「ごめんなさい……私の力じゃどうにも……」

泣き叫びながら服の裾を掴んで詰め寄るヴィータに、申し訳なきそ  
うに答えるシャマル。

正面切つての戦闘は不慣れだが、治癒などの補助系魔法にかけては  
並ぶものはいないシャマル。

過去において、蒐集による戦闘をほぼ毎日、休息もまともにとれな  
い悪条件下での連戦をこなしてこれたのは、彼女の存在が大きい。

そのシャマルでさえ、書の浸食を抑えることはできても、進行その  
ものを止める術は持っていないかった。

「何でなんだよ……あたしただけじゃね、紅蓮や久遠だって……はや  
てに救ってもらってたんだぞ！ 罰を受けるのはむしろあたしたちな  
のに……なのに……何ではやてがこんな目に遭わなきやなんねえん  
だあよおお!!」

防音効果のある結界の中にいることをいいことに、ヴィータはやる  
せない思いの丈を、喉を枯れるのを構わずに叫んだ。

こんなことやったところで、状況なんか好転しない。

駄々っ子の戯言だつて分かつてる、逆に虚しさを煽るだけだつてこ  
とも。

戦火にいたところから、ずっと変わらない現実。

けれども、こうでもしなければやり切れなかった。

シグナムたちも、正直叫びたい心境はヴィータと同じだ。

「我らにできることは…あまりにも少ない」

「シグナム、まさか…」

シグナムが、この不条理な運命を変えられる、最善だが同時に悪辣な一手を同士たちに提示しようとする。

「蒐集…：だな」

それをシグナムが口にする前に、ある人物が声に出した。

聞き覚えのある声に、驚きを隠せない騎士たち。

すると暗闇の奥から、大人形態で完全に人間の姿となった久遠が現れた。

「久遠ちゃん…いつからそこに？」

「シグナムが書の浸食のことをみなに打ち明けるあたりからだ…」

息のを吞ませられる騎士一同。

自分たちの生んだ因果なら、自分たちでどうにか清算したかったが、もうこうして知られてしまったのなら、それは致し方ない。

何より驚かされたのが、久遠本人がこうして自分から現れるまで、こちらに存在を察知されずにいたことだ。

ここ数カ月が気配を過敏に研ぎ澄ませる日々とは無縁な毎日をおくっていたにせよ、背後をとられてしまったと言ってもいい。

「狐（わたしたち）は警戒心が強い種族だ、ゆえに存在を悟られないよう気配を消すことに関しては得意分野であるのでな」

と久遠が説明を入れてくれた。

彼女のような妖狐に限らず、狐という生き物は群さえ作らないほどに用心深い。

プラスとして彼女には魔力による妖術が扱える。八束神社で紅蓮に見つかるまでは、この妖術を駆使して存在感を消し、各地を転々とし、海鳴に腰を据えるようになってからも、この力を使って、地元に住民に見つかることもなく八神家を訪問していた。

「それより…はやてを助ける方法が、本当に書の起動以外に方法がないのだな？」

このままはやてが衰弱していくのを、ただ見ていくくらいなら、たとえ褒められた手段で無くとも、能動的な一手に踏み出したい気持ち

は久遠も同じだが、それでも問いておきたいことがあった。

「ああ…主の体を蝕んでいるのは闇の書の呪い……」

「はやてちゃんが闇の書の主として真の覚醒を得れば……」

「我が主の病は消える……少なくとも浸食（すすみ）は止まるはずだ」

「みんなの未来を血で汚したくないから、人殺しはしない……だけど……それ以外だったら、なんだってする、攻めるなら攻めてくれ！でも……今はこれしか方法がねえんだあよ!!」

4人の目から発される感情は本物だった。

はやての代になるまで、心を殺し続け、ただ主の命に従うだけの殺戮兵器な、プログラム生命体はもうそこにはいない。

「了承した、はやてと紅蓮には話さずにおいておく……その引き換えに、まず私の魔力を蒐集してほしい」

「え?」

「久遠?」

彼女の発言に騎士たちの目が見開かれた。

返す言葉が見つからない。はやてたちには、話さぬように頼むもりではあったが、まさか蒐集まで願い出るとは予想し得なかった。

「魔力は有り余るほど持っているのだから、その分犠牲になる者の数は減らせる」

「でもくうちゃん、蒐集は献血とは訳が違うんだよ、それこそ、たとえようのない激痛が……」

「誰だろうとその痛みを強いることになるのは変わりない、そうであろう? それとも相手が身内程度で躊躇うくらいなら、今言った言葉を撤回すべきだ、私が身をもってそなたらの戒めとなる」

久遠の目もまた本気であった。

彼女の眼差しから、シグナムたちに過去の記憶がよぎる。

彼女たちの時代では、ものふ達は敵味方関係なく、戦場で果てる意志を持ち合わせていた。

その者たちには、下手な情けは最大で最悪の侮辱であり、屈辱。

今ここで久遠の心意気を無下にすることは、それに準ずる愚行だ。

互いの意志の同意による殺し合いですらない、一方的な襲撃をこれから自分たちが繰り返すことになる以上、久遠の申し出を払うことは許されない。

「相分かった……シャマル……闇の書を」

「うん……くうちゃん、少し……我慢してね」

「覚悟の上だ」

シャマルの手にクラールヴィントに格納してあった闇の書が現れ、怪しげに、紫がかった光りを纏い、輝きつつ浮遊しながら、一人でページが開かれた。

『Sammlung』

闇の書から発された『蒐集』を意味するその言葉が発されると、とたん久遠の胸の奥に痛みが走った。

書の光が増すに比例し、彼女の胸部からも発光する球体が現れ、時間が経つごとに、彼女の痛覚は異常なまで反応、稼働して全身に訴えてくる。

その光こそリンカーコア。

魔法が使えし者ののみが持つ器官にして象徴。

この器官には、物理的な実体を持たないエネルギー体だ。

生命そのものが、実は未だに謎だらけなように、コアにも解明されていない謎が多いが、『魂』の一部分ではないのか？ という説を上げる学者もいる。

魔源種やそれをモデルとした使い魔、さらに守護騎士たちのような魔導プログラム体の存在を踏まえると、あながちその説も間違いないと言える。

その光を発するコアから、粒子状の魔力が放出、闇の書へと吸い取られていく。同時に、激痛に苛まれる苦悶の声が久遠から漏れ出した。

「久遠！」

「止めるな！」

悲鳴と喘ぎを甲高く上げる久遠に、ヴィータは居た堪れなくなり、反射的に蒐集を止めよう体が動いてしまうが、シグナムによって制止

された。

辛いのは全員同じ。

止めたシグナムもその身を震わせ。

蒐集の手を止めないシャマルも、直視できずに目を逸らし、ザフィーラも口を切らしてしまうほどに、口を噛み締めていた。

『Vollendung』

4人の心境に反して無機質に素っ気なく響く、蒐集が完了したと知らせる書の電子音。

光が消え、浮遊していた書はページを閉じながらシャマルの手に収まり、同時に久遠のリンカーコアは彼女の体内に戻った。

と同時に、久遠の体から力が一気に抜け、バランスを崩した彼女は前のめりに倒れていく。

シグナムはとっさに抱きとめた。

するといきなり久遠の体が光り出し、小さく収縮していく。

光量が収まるころには、子狐に戻った彼女が、シグナムの腕の中で眠りに着いていた。

「くう……………」

「今の久遠には、人間体を維持するだけの魔力もないということか……………」

その衰弱しきつた小さな妖狐の姿に、シグナムたちの心が何かに突き刺されて、容赦なく抉りつくしていく。

もう彼らには、自らを心の無い人形だと、機械だと言い聞かせることはできなかつた。

きつと自分たちは、見知らぬ誰かや、生き物を、こうして傷つけ、彼らの魔の力を吸い上げて行く度に、自らを断罪して、精神を擦りきらせていく。

もう、彼らに会う前の自分たちに戻ることは叶わない。

だからこそ言いたかつた。たとえ自己満足であったとしても、それでも言葉にして表したかつた。

「すまない……………我らの因果と……………非礼を……………許してくれ」

4人の代表として、シグナムはその想いを眠る久遠に送りながら、

その小さく温かな体軀をそつと抱き締めるのであった。

その日を境に、彼らは本格的に蒐集を開始する。

当初は主に、知的生命体の文明が存在しない無人の惑星にて、コアを持つ現地の生物から、書のページを刻ませていた。

当然生物たちからは徹底して抵抗を受けたが、全員が相当の猛者であり、苦戦することはほとんどなかった。

一方で、人間相手から蒐集は控えるようにしていた。

意外なことに、人間が一番魔力を持つ生命体の中で、魔力を多くコアに蓄えられる性質である為に、効率的には魔法 生物相手より良いのだが……騎士たちには積極的にそれを行えない事情がある。

それは色々あるのだが、内の一つとして時空管理局だ。

一度警察組織でもある彼らに目を付けられてしまえば、完遂までの進行が極端

に送れるのは确实であるし、あの組織とは少なからず因縁がある。管理外世界に住んでるからといって、みすみす見逃してはくれない。

と、局への警戒心とそれによる対策が功を奏し、魔力蒐集の初め頃は比較的滞りなく進んでいた。

しかし、火の無いところから煙は立たないというように、連続して起きた魔法生物のリンカーコアが収縮する現象に、局も腰を上げて無人世界に調査隊を派遣するようになった。

時に偶然鉢合わせるといふ事態も数度起き、人間相手には控えるといふ自戒も結局破られてしまった。

なのに……書に刻まれるページ数を、かなり稼げたというのは、皮肉と言いださない。

そして、局員との接触が、先日海鳴市での戦闘に繋がっていくのだが、詳細の説明はここでは控えさせていただきます。

時計の針を現在、学校の屋上にいる紅蓮と久遠に戻そう。



「攻めたければ攻めればいい、気が済むまでいくら殴っても、蹴っても構わないさ、兄妹（ふたり）を裏切ったことには変わりない……」

「俺ができねえこと分かってて、言ってるんだろ？」

「……………すまないな……」

今久遠に八つ当たりしたって、このもやもやは絶対晴れてくれない。

だってもう知ってしまったんだ。

あいつらが苦しみながらも蒐集を続けていることを。

4回目の聖杯争奪戦に臨んだ魔術師殺しは、『家族』を持ってしまったことで、かつての冷酷な自分に戻そうとするだけで無理をしていた。

その魔術師殺しとあいつらは同じ状態だ。

以前の自分自身に立ち返れず、一人、また一人と目的を果たすための犠牲を払う度に心が悲鳴を上げている。

あいつらをそうしてしまったのは、自分たちだ。

俺たちが、命令を実行するだけだったプログラムを、一介の人間にしてしまった。

今だって苦しんでる。

この方法——蒐集でしかはやてを救ってあげられない。他に手段を持ち合せていない自身に……それが分かっちゃうから、被害に遭ったやつらみたいに、一方的に断罪なんて、できやしない。

たとえ向うの魔法が普及してり世界じゃ、被害者たちが集まって被害者の会でも開いて、時空管理局つう警察の連中に、早く捕まえろと急かしてニュースになっていると想像できて、一方的に奪われる悲しみも苦しみを味わっていたとしてもだ。

だから余計に腹が立ってくる。

どっち付かずで雁字搦めになった自分に……あの時は、どうにか家族のためにと、ゼロたちと戦うことができたが、正直2度も同じ決断ができそうにない。

ほんと……こんなの俺らしくねえ……昔みたいに、物事つてもんに白黒はつきり付けられそうに無かった。

はやてとあいつらの家族になったことに後悔は無い。

だから悔しくて堪らず押しつぶされそうになる、どっちの力になつてあげられないことが、学校サボって寝そべることしかできない自分が。

快晴真つ只中な天候に反して、紅蓮の心は、益々真つ黒な雨雲に覆われていった。雨が降り出すのも時間の問題だった。

「ただ……最近気がかりなことがあるのだ」

「何だよ、その気がかりって」

そんな暗い気分の紅蓮の耳に届いた、久遠の一言。

まだ心の内は黒い天気だが、思考停止はどうか免れた。

一緒に騎士たちと相乗りすると腹を括っっておいて何言っただ、と突っ込みたくなつたからだ。

「紅蓮は、闇の書自体のことをどう思ってる？」

が、この久遠からの質問で一気に失せてしまった。

「どうって……まあ……こう言っちゃアレなんだけど……大量破壊兵器ってやつか」

「私も最初はそう思っていた、だが闇の書は、殺しの道具にしては、不可解な点が多過ぎる……」

不可解……おかしいってこと……何がおかしいってんだ？

まあそりゃ、666ページ分の魔力を集めなきゃ、まともに使えねえ代物って……一応真面目に勉強してたお蔭で鍛えられた自分のおつむを回転させて、考えを進めていくうちに、久遠の提示した疑問が何なのか行きついてしまった。

おかしい、おかしいよな……確かにあの本は兵器としては扱えねえにも程があると言うか、使い勝手が悪いどころじゃね。

“主”に選ばれた奴以外に使えなくなってる癖に、何百人分の気が遠くなる量の魔力を集めまくらなきゃ、主ですらまともに動かせない、使えない代物（しろもん）だ……欠陥だらけにも程がある。

「紅蓮も気づいたようだな、どう使うにせよ、人の道具に求められるのは程度の差はあれ、誰もが使える利便性だ、武器も同じ、その点に関

して言えば、闇の書は兵器としては失敗作も同然だ」

もし俺たちの思いこみの通り、殺戮兵器として作られたんなら、作った野郎は稀代の大馬鹿野郎だ。

街一個消し飛ばすなら、わざわざ面倒な手続き踏んで闇の書を覚醒させるより、あいつらヴォルケンリッターに大暴れさせて街を破壊させた方が、ずっと安上がりで済む。

「つまりだな…闇の書ってのは元々…」

「元々、兵器以外の使い道で作られたものだろう、それが…過去の主となった人間によってその構造（からくり）を細工され、本来の用途からはみ出してしまったとしたら…」

久遠の言う通り、本来の使い道が何なのかは置いて、前の主になった大馬鹿野郎が、無理やりあいつらを兵器としてこき使おうとして、本を魔改造なり改悪なりしていたとしたら。

「じゃあさ…このまま蒐集を続けちゃったら、あいつらとはやては、どうなんだ？」

「どうとも言えない…そもそもこれは現状、私の推測、妄想でしかないのだ、確証が全く無い以上、騎士たちに伝えても信じてくれないだろう」

「だろ…トールリコールのシ○ワちゃんとおんなじ気分になしちまうのがオチだ」

「今はむしろコン・ファレルではないのか？」

「うるせえ、いくらシ○ワちゃん公認でもあの映画といやシ○ワちゃんなんだよ」

彼が例えとして出したのは、最近リメイクもされた近未来の火星が舞台のSF映画で、劇中でアー○ルド○シ○ワルツネツガー演じる主人公が、自分の記憶が外部から植え付けられた偽物であると知ってしまふ場面がある。

「ひよっとしたら騎士たちも、その映画でのシ○ワルツネツガーのように記憶を改竄されているかもしれない…」

「あ…あり得そうで怖えな…」

紅蓮の体に震えが流れる。

今彼の全身に走った身震いは、冬の寒さによるものだけではない。騎士たちが、兵器としては穴だらけな自分たちを兵器と疑わなかったのは、そうであると思いつまされていたのが理由、だというのはありえない話では無かった。

主が改悪を平気でする狂ったド外道なら、ロボットミー手術くらい平気でやりかねない。

とは言え、今のところ、久遠の言う通り、これは自分たちの思いこみでしか無いのかもしれない。

実際のところ、蒐集が終わるとどうなっちゃうのか、俺たちには皆目見当がつかねえからだ。

ある意味で、さっきの久遠の話以外にも疑惑の種は一応ある。

シグナムたちは前に、いかに前の主たちが人でなしの碌でなしだったかを口にしたことがあった。

グイータに至っては、終始愚痴と不平不満のオンパレード。

sonだけ先代たちのことを覚えているなら、やつらの最後も覚えているかと思いきや、その末路、つまりは書の主として完全覚醒したやつらはその後どうなったのか、一度も口にはしなかった。

一応主だった野郎だから遠慮したのかとあの時は勝手に思いこんじまったけど、実は本当に覚えてない、覚えてないことを意識させないよう、頭ん中弄られたと考えれば筋が通る。

けど、やっぱり今は俺たちの誇大妄想でしかねえ、あいつらに馬鹿正直に話したって、否定されるか笑われるかのどっちかだ。

俺だってロボットミー手術されてますと言われたら、『何言い出すんだ!』と頭に来る。

本当のところはどうか確かめようにも、俺たちにはできない相談だ。

インターネットにも乗って無い異世界の代物を、どう調べろって言うんだよ。

「真実を露わにする手は、一応、あるにはあるのだがな」

「何い？　ほんととかよ？」

そんなもんだから、久遠が言ってくれるまでは、すっかり失念しち

まっていた。

他力本願ではあるが、闇の書が何の目的で作られたのかを知る方法をだ。

後に彼は、仲間がこの世界にいてくれたことと、久遠が冷静な判断力を失わなかったことに感謝することになる。  
つづく

## STAGE 23 | 接触

曜日は土曜。

時間帯は午後、空が燈色の夕日に差し掛かる少し前。暦が12月に入ったので、街は日に日に冷気によつて覆われ、温かな吐息を可視化させ、人々をコートにマフラーにと厚着にし、完全に冬一色の光景へと様変わりしている。

加えて市街地のあらゆる店では、今月の下旬から末までのイベントに備えて、この時期限定の装いが裝飾され、どの商業施設でも、流すBGMはどれもこれもクリスマスソングを流していた。

さらに、海鳴では12月に街の通りを大規模なイルミネーションで着飾るイベントも毎年催されている。

聖なる夜に向けて、街は寒気にもめげずに、だんだんと光沢を身に付けながら、活気を色づけていた。

日本独特の師走の趣が広がる市街地の中心に位置する商店街に、海鳴市ではあちこちに店舗が複数置かれている関東スーパ一の一つがある。

その一店舗の向かいには、スターバックスやドトールコーヒーに代表される前払い制のコーヒーショップが置かれており、店内二階の窓際の席には、長く混じりつ気のない黒髪をポニーテールで縛り上げ、きつめに吊りあがる目じりゆえ近寄りがたい雰囲気を放ちつつも、凛々しさも醸し出す顔立ちをし、左手の中指に水色の宝石が埋め込まれた銀色の指輪を嵌めた少年がホットコーヒーを飲みつつ、当店で売られているサンドを頬張っていた。

その少年とは勿論、光の国の巨人、ウルトラマンゼロ、本名ゼロⅡユウヤ・ヴェアリースターの人間体——諸星勇夜その人。

「調子はどうですか？」

飲食しながら、窓越しに商店街の通りを見回し、何かを探している様子の彼に、来客が向かいの席に腰を下ろした。

長すぎず短すぎないショートカット、微かに緑かかった髪色、勇夜と同じ吊り目だが、絵に描いた穏やかさが顔を覆い、仏頂面が似合う

彼と対照的に笑みが嫌味にならない容貌な、見た目は勇夜―ゼロと同じ年な少年。

鏡の騎士ミラーナイト、本名リヒト・シュピーゲルの人間体――高町光。

「良かったらここでのんびり飲み食いしてねえよりヒト、(もうこの辺り張り込んで三日目だけど、ここもハズレかもしれないねえ…)」

「(リンディ提督に報告しておきます)」

「(ああ)」

応じながら、勇夜は溜め息を吐いた。

「(もう少し街ん中回れる人手があればな)」

「(『外人顔』なアースラの局員様方では、この国では目立ち過ぎますから、比較的日系の顔立ちな私たちが頑張るしかありません、それに湖の騎士様の能力を考えると、余り大人数では動けませんし、守護騎士の偽物に怪獣たちのせいで本部も大慌てですしね)」

ここ数時間、勇夜がこの地域で何をやっていたのかというと、いわば『張り込み』、である。

リンディ・ハラオウンらアースラチームと組んで、第一級ロストロギア闇の書の探索を行っている巨人たちで構成された独立部隊ウルティメイトフォースゼロ。

彼らは海鳴市で居を構えて生活しているであろう、闇の書の主に選ばれた地球人、主とは身内の間柄かもしれない勇夜――ゼロたちの仲間、炎の用心棒グレンファイヤー、使い魔のモデルとなった多大な魔力を有す突然変異種、魔源種と思われる半獣半人の巫女服を纏う妖狐の少女、そして……様々な世界で魔力生成器官リンカーコアを持つ生命体を襲い魔力を搾取し続けている闇の書の守り手たる魔力プログラム生命体。

守護騎士――ヴォルケンリッター。

勇夜が行っている張り込みは、彼らを確保する為の捜査活動の一環だ。

この時点ではもう、騎士たちにグレンの住処が海鳴市のどこかということはほぼ確定していた。

その確定となる確証は、大まかに三つある。

まず、11月末でのなのは襲撃を端に発した一戦にて、勇夜―ゼロがシグナムと一戦交えた時、彼女が日本語を使ったということ。

次にゼロとナオト―ジャンボットともにウルトラマンレオの人間体、おとりゲンが風の癒し手シヤマルと接触した際に、彼女の足元に日本のスーパーマーケット、それも関東地方でしかチエーン展開していない店舗のレジ袋が置かれていたこと。

さらに三つ目として、関東では海鳴での玩具店でしか販売されていなかった兎の人形と同じデザインの顔人形をバリアジャケットの帽子に付けていたこと。

これらの手掛かりが早い段階で掴めたことで、搜索範囲は一気に海鳴市内にまで絞れた勇夜たちは、海鳴市内でも多数店舗が置かれている『関東スーパー』の近辺を中心に聞き込みと張り込み捜査をしていた。

一見すると捜査は滞りなく進んでいそうだが、何の障害もないわけでもなく、ハンディだつてある。

ここ日本は基本単一民族で成り立っている国だ。

海外生まれでありながら、日本に住む異国人は少なくはないが、それでも外――特に街の中心に出かければ日本人の群衆が目焼きつけられる。

当然、その中に異人の容姿をした者が入り込めば、どう見繕つても目立つというものだし、それにアースラクルーは日本の地理に不慣れ、良い歳して迷子なんて災難に成りかねない。

ハンデはこれだけでない。廃棄都市区画での一戦以来、地球から個人での転送魔法の移動の限界を超えて広範囲の次元世界に出現するようになった守護騎士に成りすました偽物や、怪獣。本部は真偽混じった騎士たちの行動に翻弄され。

特に怪獣はその世界の生態系にも影響を与え、局の魔導師では歯が立たないのが実状なので勇夜―ゼロらが応じるしかなかった。

枷は彼らが探している相手方によるものもこちらに齎されている。ヴォルケンリッターの一人、《湖の騎士》、または《風の癒し手》た



る異名を持つシャマルという魔導師の女性。

彼女は正面切つての戦闘を行えるだけのスキルは、ほぼ皆無に等しい。

現に、ゲンの話ではあの夜に彼と対面した時、彼の眼光から迸る威圧に半ば心が折れかけていたそう。

だが彼女には他の騎士たちより秀でたものがあり、それは補助系統の魔法によるサポート。

一例として、特定の物体、生物にしる静物にしるなニカを探し当てる魔法。

その気になれば、海鳴市内にいる魔力持ちの人間を全員探し当てるのも、軽く為してしまうだろう。

勇夜たちも探索に出る時は、彼女の能力を懸念して、体内に幾重にもジャミング結界を張ってリンカーコアがあることを悟られない様注意を払いながら出歩いているくらいだ。

どうにか騎士たちの居所を探し当てる為にも、自分らがこの地方都市で搜索していると気づかれるのは、避けなければならない。

「そつちは何か進展はあったか？」

「あまり鮮度がある情報ではありませんけど、少々ですね」

別の地区で張り込んでいた光が仕入れてきた情報の大まかな内容はこうだ。

今年の八月の初めごろにオープンしたあるスーパー銭湯の受付係をしている従業員が、開店初日に「オレンジ色の髪」をした少年と、「金髪の妙齡」の女性が混じった10人近くほどの家族連れらしき面々が入店したというもの。

「どうにもキナクせえな」

眉を潜める勇夜。

彼に「キナ臭い」など思わせるのは、その従業員の証言。

先述の二方のことは、それなりに具体的な見た目の情報は覚えていたと言うのに、それ以外の連れの者たちの姿かたちはほとんど思い出せなかったというのだ。

受付スタッフの脳裏に記憶されていた者たちが目立つ見てくれを

していたにせよ、おかしな話である。

魔法が使われたと思われる匂いが、その話からは漂っていた。

けれどこの海鳴市に彼らが暮らしていることを既に掴んでいる以上、光の言う通り特に鮮度がある報せではなかった。

かといって気になることも皆無ではない。

オレンジ髪の少年。

単に髪を染めただけの男子な可能性の方が高いが、もし例の一行が騎士たちなら、そいつがグレンの人間体であるのは充分に考えられる。

ロボットに搭載されたAIなナオトことジャンはともかく、元々あいつは自分とリヒトと違って人間の姿になれる能力はなかった……が、普通に地球で生活できたとなると、あの時の次元振の影響でできるようになったのかもしれない。

自分とリヒトは体が幼児退行したし、リンク——イージスだって自我が芽生えたのだ。それぐらいのことが起きてても可笑しくない。

「勇夜？」

光は勇夜を呼び掛ける。

彼の顔から、陰りと暗鬱さが発し始めたからだ。

元々彼らの周囲の空気は軽いとは言い難かったが、それでも明確に重みがあるものに变化していくを光は知覚していた。

「いや、どうもさ……最近あいつのこと考えると、決まってあの時のあいつの背中が浮かんでくんだよ」

あの時、ヴォルケンリッターと相まみえ、11年振りにグレンと再会し、感慨にふけることもままならぬまま一戦交えようとした矢先に怪獣が介入し、その混乱の最中転移魔法で消えゆく炎の用心棒の背を向けた姿。

何となく……あいつが泣いている気がした。

実際に流れていたかはともかく、涙を流すだけの辛さに苛まれていたのは確か。

何しろ、あの時のあいつは二つの選択肢を選びとらなければならなかった。

10年来の戦友たちか……同じ屋根の下で暮らしているであろう騎士たちか。

そして選ばれなかった方と、戦わなければならない現実。

敢えてどちらにも手を貸さず静観なんて手を取るもできなかったが、そんなことあいつ自身の義理堅い性分が許さなかった筈だ。

そのジレンマに苦しんだ痕が、あの時の後ろ姿からははつきりと感じるのである。

分かるゆえに、こっちも気分が重くなる。

身を引き裂かれる想いつてのは、こんな感じなんだろうな。

「辛かったのは、グレンだけではありませんよ、（ライト、例の画像を出して下さい）」

『（御意、メモリフラッシュ）』

光のデバイス、シルバーライトがそう一言詠唱すると、二人の脳内にある静止映像が浮かびあがった。

メモリフラッシュとは、簡単に説明すると人の頭脳に特定のイメージを直接写す魔法で、ライトが只今二人に写したイメージは、なのが鉄槌の騎士に強襲された際レイジングハートが記録した映像からコピーした静止画だった。

騎士の使うハンマー型ベルカ式デバイスの攻撃で大ダメージをレイジングハートが受けていたこともあり、画素数は荒くて画面も暗かったので、アップコンバートに明度調整などの補正が掛けられた画には、あの鉄槌の少女の全身が写っていた。

そして少女がその時顔に浮かばせていた表情もまた……重々しく、今にも吊りあがった目から流れる雫が頬を濡らしそうな雰囲気であった。

「（彼女と戦っていた時はなのはが云われの無い暴力を受けられた怒りと、戦闘への集中で気がつかなかったのですが、今思い出すと、『邪魔をするな、どうしても邪魔するんだ、自分だってこんなことはしたくないけど、どうしても今はこうしなきゃいけないんだ』と、顔が訴えていたように思えます）」

「（逆ギレも……良いとこだよ、あんなの）」

「はい……ですがその不条理で不合理な激情の叫びも、人が人である証しの一つです、彼女らにもそれが芽生えているのも、現行の主の器の広さの賜物でしょう、彼らも人間としての自身と生活に享受しているようですし、それを踏まえると……やはり)」

「(守護騎士(あいつら)が “人間味” を得た切っ掛けが “主様” なら、蒐集をやり出した切っ掛けも、主が関係してるって………言いたいのか?)」

「(ええ…推論の域ですが、恐らく主の身に、何かしら異常が起きたのかと、それこそ地球の現代医学では力が及ばず、彼らに書のページを刻むことが唯一つの活路だと信じ、魔力の収奪に駆り立てるくらいのこと……)」

なるほど、当たらずとも遠からずだな。

光の推論を踏まえれば、単に命令を実行するのを逸脱して、目的を達しようとするヴォルケンリッターの意志と我の強さにも合点がいく。

となれば、彼らの主でグレンとは身内の間柄な主は、市内にあるいずれかの病院に定期的に通院、或いは入院している可能性がある。

下手すると怪獣を率いている “仮面の男” ら謎の組織よりも、主その人の情報が少なすぎる今、人物の特定に近づくだけの絞り込みがある程度できただけでも、ありがたいと思いつつながら、勇夜はコーヒートの最後の一口を飲み干す。

とても苦く、苦すぎて舌が旨味を捉えてくれなかった。

ブラックを注文したから当然味は苦いのだが、今考えていることが補正となったのか、コーヒートの苦味がより強く感じられた。

「光の推理が当たりなると、益々あいつらを止めてやらないとな」

「あんなこと、続けさせていいわけがないです、誰一人報われません」折角、ようやく彼らが手にしたものの為にも、そしてグレンたちの為にも、この瞬間にも彼らの手で敢行されている蒐集行為なんてのは止めなければならない。

今……確かに存在しているのだ。

怪獣や異星人を我が物顔で使役する技術を持ち、魔導書の力をモノ

にしようとして騎士たちに手を貸した外道たちが。

プレシアにダークロプスとバトルナイザーのデータに、次元航行要塞を提供したのも、その一味の一人に組みしてる輩で違いはない。

それに、ウルトラマンノアからの魔導書についての情報も気がかりだ。

「闇の書」という名称は蔑称、そうでありながら、シグナムはあの時名乗り上げた際、その蔑称の方を使った。

次元世界に蔓延る自分たちの悪評からの自戒つてのも考えられるが、あの時のあいつの言い方というか声色から見ると、本当に「闇の書」を魔導書の真の名と思いきんでいるのかもしれない。

それに世界の生きとし生ける者の中でも、規格外の戦闘能力に神秘の力を持ったあのウルトラマンでさえ手こずる闇の書の暴走。

あの暴走が、蒐集を終えた先にあるのだとしたら、彼らが行ってるのは自殺行為だ。

もし仮に、光の推理が本当なら……：……ヴォルケンリッターが一度は禁忌としたものを破ってまでも望んでいる未来は、きつと来ない。

たとえ今まで上げた不穏な要素を払っても、彼らの抱いているかもしれない「願い」は叶うことはないだろう。

なぜなら――

「コーヒータイムのところ、失礼する」

「ナオトですか」

この場にもう一人訪問者が現れた。

男性としては短めだが女性としては長めの長さな紫がかつた黒髪と、真面目一徹で知的そうで、美のレベルとしては二人に負けず劣らずな顔に眼鏡を掛けた少年、鋼鉄の武人ジャンボットの人間体ナオト・J・フライトだ。

「げ、もう交代の時間かよ」

勇夜の言う交代とは、張り込みの仕事を指している。

彼らは翠屋でアルバイト店員としての働いているので、捜査活動は時間帯ごとに交代制をとっていた。

「それと御婦人方から言伝を預かってきた」

ナオトはそう言うと、二人にそれぞれメモ用紙を手渡す。紙には主に食品の名前がずらり載っていた。

「そういうことですか」

つまり買い出しをお願いされたわけである。

すぐ目の前にスーパーがあるので、丁度良い。

「ついでにこっちからもご依頼があんだが」

「いか様か？」

勇夜はナオトにまず光の打ちだした推論を伝える。

「つまり市内の病院患者のリストを作成してほしい、と」

「ご名答、無限書庫の資料集めのあるからきついとは思いますが」

「お安い御用だ、一晩で纏める」

「頼りにしてるぜ」

「あの施設は無限書庫というより、魔窟書庫ですけどね……愚痴を零すようで恐縮ですけど、世界をどうこうする前にまず組織の体内を整えるのを優先させた方が良いでしょう」

「私も光の意見には同調だが、あの世界の歴史上、そうは言ってられなかった事情もある、秘境は人為的に作れるものだと、逆に感心したかな」

「そりや同感」

「ですね」

軽口をいくらか交えながら、高レベルの容姿をした三人は店から出ていくのであった。

数十分時間が刻まれた先にて――

「そちらのフェイトも同様というわけですね」

「ってことはなのはもか？」

「はい、体重計に乗ったら、決まって暗いオーラと猫背のセットで部屋

に直行ですよ」

「どうも女の子のその辺りの気持ちが分かんねえんだよな、どの道体は成長（おおきく）なってんだから、増えるものはしょうがねえと思っただけだ」

「男にとつては永遠の謎……ってやつです、それに少しくらい謎があった方が魅力的だとは思いますがよ」

「この、色男」

「勇夜ほどじゃありませんよ」

「へ？ それはどういう？」

「特に意味は無いのでお気になさらず」

「そうか…」

不特定多数の通行人たちが通りを、買い出しを終えたばかりの勇夜と光は買い物袋を引っ提げながら、気分転換の雑談をしながら歩を進めていた。

さすがにさっきの空気を持続させる気には二人ともなれなかったからだ。

その帰宅途中で二人が交わしている前述の雑談は、前回の話しを読んだ方々には承知の通り、この二人に少しでも近づいて強くなりたい気持ちと、そのために日々日常の合間を縫って修行に励み、心身を鍛えると引き換えに、年頃の女の子の悩みが無慈悲に表面化している試練とジレンマに苛まれているというものだ。

さらに補足として、勇夜は性格的にやっぱりと言うべきか、こういう色恋の話は一番苦手で、彼にとつては天敵も等しい存在。

先手を撃つ先の先、いわゆるカウンターを意味する後の先すらもままならず、ひたすら後手に回り、後退しなければならなくなる。

それがフェイト柄みともなれば、間違いなく赤面しつつ慌てふためいて、てツンデレ節全開の物言いをしてしまうであろう。

言葉にするなら。

「別にフェイトとはそんな関係じゃねーよ！」

とまあこんな感じで普段のクールさと二枚目さとギャップがある返答をしてしまうことは明白だ。

彼はまだその辺りの事柄、事象には初心同然な身で、フェイトへの気持ちはまだ完全に自覚の域にまで達されていない。

さらに一言を申すなら、フィクションに出てくる朴念仁たちに比べれば、まだ許せる範疇、立ち位置に彼は立っているかとフォローを付け加えておく。

「ところでネーミングは決まったのですか？」

「なんのことだよ」

「プレシアさんから頼まれたのでしよう？ レイジングハートとバルデッシュのパワーアップ後の名前」

「それか……いくつか候補があんだけど、一つに絞れねえんだよ、あんな奇を狙い過ぎると痛々しいし……な……」

「どうしました？ 勇……夜……」

突如、二人は雑談も歩を進めることも止めて、通りの真ん中に立つたまま、ある一点を目に留めたまま、時間が止めてしまったかのように微動だにしなくなった。

じわりと常識を浸食する異常が、二人を釘付けにする。

距離にして彼らから約10メートル。

その地点に、群衆の波の中をひっそりと立ち、二人を見ている生き物が一体。小駆の……子狐だ。

臆病な性格ゆえ、ほぼ独り身で行動し、滅多に人間と鉢合わせることの無い狐が、人間たちの文明社会のテリトリーに、堂々と入りこんで立ち尽くし、勇夜と光の二人をじっと見つめていた。

子狐を気にするどころか、視線にさえ入れずにすれ違って去っていく周囲の通行人たちが、この場から発せられる超常性と異常性を煽りたてている。

眼前の常軌を逸する光景に、幻を見ているのでは？——と勘繰りたくなるが……。

「(光、お前も感じてるか?)」

「(右に同じですよ、間違いなくあの巫女で化け狐な魔源種ですね)」

二人が感知したのは、子狐の体の廻りを覆っている魔力。

その魔力によって、子狐は自分たち以外に人々から認識されないよ



うにしているのだろう。

そして発する魔力の波動は、あの夜にヴォルケンリッターとグレンファイヤーとともに現れた巫女服を着た使い魔のモデルである魔力種の少女と同じもの。

指紋や網膜と同様、魔力も人によって違いがある。

紛れも無くあの子狐は、魔源種の少女の本来の姿であると見て良  
い。

ならばなぜ、わざわざ書の主たちを探している自分たちに存在をア  
ピールして接触してきたのだ？

理由はどうあれ、通り魔的な諸行を重ねている以上、蒐集行為の妨  
害と拠点の察知されることは避けなければならぬのにも拘わらず、  
何でまた自分から出向いて来た？

どういう関係かは知らないが、グレンや騎士たちから背信行為と見  
なされかねない大博打、勇夜たちの出方次第ではそのまま御用にもさ  
れかねないリスクが大きい賭けだ。

一体……彼女は何を考えている？

頭をもたげる疑問をよそに、子狐はこちらに目を向けたまま背を向  
ける。

どうやら、着いてきてほしいという意思表示のようだ。

「罨：でしょうか？」

「(ありえなくもねえけどな……ここは渡りに船だ)」

交渉のテーブルに着く意志表示か？ はたまたそれに見せかけた  
騙し撃ちか？ どちらの可能性も、今のところは推測のレベルで平行  
線を保ったままだ。

妖狐な彼女の意図は、依然不透明な状態ではあるが、上手く交渉す  
れば騎士たちの蒐集目的が掴めるかもしれない。

二人は、巫女の少女が提供してきた博打の船に、思い切って乗船す  
ることに決めるのであった。

買い出しの荷物を持った身であったので、リンディたち連絡係も兼

ねた荷物の運搬係は光、子狐の追跡は勇夜が請け負うことになり、周りに怪しまれなよう気を使いながら、体の周りに認識阻害の結界を張って闊歩する小動物の後ろを着けていた。

今のところ、周囲を気にせず話せる静かで人気の無いところに自分を案内しているとしたか、子狐の意図は掴めない。

市街地の中心から、閑静な住宅街を抜け、勇夜の前に裏山と、あの八束神社へと繋がる石段に辿り着く。

「会議場にはうってつけだな、リンク、そっちは」

『魔力種以外に魔力反応も、知的生物の生命反応もありません』

「独りでの対談申しつけか、人見知りな狐さんにしてはたいした度胸だよ」

単純計算して、なのはとフェイトの三倍の魔力量と落雷などの詠唱と魔方阵に依らぬ魔力をエネルギー源とした、魔導師には最上の脅威な攻撃方法を子狐は持つてはいるが、それを踏まえてもやはり彼女の行為は危ない綱渡りだ。

「(勇夜君、応援として局員を数人着けましょうか?)」

「(やめといた方が良いいぜ、相手を数でよつてたかって『保護』しようとして、信頼を反故にしちまってケースは結構あるだろ)」

「(それを言われると辛いわね……ですが報告は逐一するように、分かったわね)」

「(了解)」

彼が念話でリンデイに言ったケースとは、過去に次元犯罪者と穏便に接触した際、確保に躍起にやるあまり数を揃えて応じたことで、武力行使沙汰にまで発展させた事態のことであった。

守護騎士たちを通じて、彼女は組織の概要、規模といった時空管理局の知識を手に行っているだろう。

それにちよつと考えれば、戦力比が自分たち側に不利なことも、人並みの知性を得た魔力種なら理解が及んでいる。

相対している組織(あいて)がどれだけ馬鹿でかい図体をしているか、それらのリスクを承知で、一人で自分たちの前に現れたのだ。

ならこちららも、信頼には信頼で応えなければならぬ。

大人数を率いては、そいつをぶち壊しかねないので、こういう会合の場は少人数で臨んだほうがいい。

小さく細い手足で長くそびえる石段を駆け上がる子狐を見上げながら、勇夜も石畳の階段を足の長さを生かして二段ごとに軽やかに、段の多さを気にもせず駆け登りだした。

「勇夜、彼女はどこに？」

「こいつの前に来たとたん見失ったよ」

スーパードットに詰め込んだ諸々を両手に持って行った後、八束神社裏の森にて勇夜と合流した光。

しかし勇夜によれば、子狐は今二人がいる地点でどこからともなく、いきなり存在を消してしまったとのことだ。

彼の言うこいつとは、『久遠塚（くおんづか）』と彫られた二人の身の丈以上もある塚であった。

以前光が調べ上げた海鳴の言い伝えに関わる、とある妖狐の墓標である。

「ですがこの辺りにまだ隠れているのは違いありません」

二人の周りには、人を近づかせない効能がある結界らしきものが張られていた。恐らくは子狐の差し金であろう。まだこの近くにいる何よりの証拠だ。

勇夜と光は、集中力を高め、魔力だけでなく、微細な生命エネルギーも感じ取るよう感覚を鋭敏に研ぎ澄ました。

常人には視認も感じ取ることもできないエネルギーだが、二人のように鍛錬を積み上げること、皮膚感覚の濃度を意図的に上げ、意識的にくみ取ることができる。

これは人間でも可能な技術で、魔導師たちの魔力感知もこれを応用したもの。

第6感にも思えなくは無いが、実際は触覚強化の術だ。

自らの感覚を強めた途端、子狐の魔力の波動が急に強まった。

サウナ……ほどではないが、二人の全身に自然の風ではない生暖かい波動が流れ触れる。

流れを発する源流を視覚で辿ると——  
「さすが、『彼』の友ということだけあるか……」

——エコーのかかった女性の声。

そこから端を発し、ぼんやりと気配と同時に輪郭が浮かび、巫女装束を纏い、狐の耳と尻尾を生やし、煌びやかに艶を帯びた金色の長髪をなびかせた絶世の美貌を持った女性が現れた。

その容姿、かの妖狐に見間違いようのない。  
ただし、相違点がいくつかあった。

あの夜の日での邂逅では、彼女の体格は10〜12歳ほどの幼子のものであったが、今は人間の齡なら二十歳前後の美女で、尻尾の数も一つから5つとなっていた。

例の証言に出てきた女性と特徴も合致していた。

そのことについては、別段二人は驚かなかった。  
使い魔は、アルフなら『子犬フォーム』のように獣形態にしる人型形態しても、どちらの姿でも体格を自在に変えることができる。

モデルとなった魔源種たちにも、同じ芸当ができて何ら不思議ではない。

「彼つてことのはグレンの野郎のことか？」

「その通りだ、ウルトラマンゼロ殿、ミラーナイト殿」

「驚いたな……なんで俺たちの正体が分かった」

「グレンから聞いた人物像と、そなたらの物腰が一致したものでな」  
そりゃグレンから自分たちのことを聞かされてはいるとは察しがついていたが、まだ名前も言っておらず、人間体である今の姿で正体を看破されてしまうとは、侮れないな。

「我が名は久遠、見ての通り、人に化ける妖術を持った妖怪狐だ、グレンファイヤーとは、友人としてお付き合いをしている」

彼女は容姿負けしない凛と落ち着いた口調と佇まいで、自らの名を申し上げた。

二人、特に光は内心動揺のさざ波を起こしていた。

なんと…見た目だけではなく、名前まで海鳴の伝承に記された妖狐と同じとは……偶然………と、片付けるにはでき過ぎてる。

金色の髪、巫女服、髪と同じ色の狐の耳と5つの尾。

彼の心の眩きの通り、久遠は、まさに二人の背後にそびえる久遠塚の由来となった昔話に登場する妖狐と瓜二つであったのだ。

まさか伝承の妖狐と……同一の存在か？ と勘繰ってしまうが、今はそれを追求する時でも場でも無い。

「で、その俺たちの身内（だち）に喧嘩吹っ掛けたそのグレンのご友人様がどんなご用件で？」

いつもより淡々で、重くて低く、刺々しい勇夜の声。

声を形にすることができれば、間違はなく矢じり、槍先と言った凶器となっているまでの痛さと冷たさ。

どうよく目に見ても、喧嘩腰な声音と目つきとガンを飛ばしながらの姿勢で、勇夜は用件を要求する。

声と顔だけ見れば、完璧に不良そのものな様相であった。

現に昔はヤンキーではあったけど……もだ。

「（勇夜、今は交渉の場です、ここは穏便に対処ですよ）」

「（分かってるよ……）」

余りの無愛想な物腰に、このままではいかんと思った光は念話で彼を宥めた。

ただこうは言ったが、彼がこんな態度をとってしまうことに、分からないわけでは無く、理由も把握できるだけに納得もしていた。

「そのことについては、攻められて当然のことだ、本当にすまない……」  
勇夜個人の場合をとつても、有無を言わずにフェイトら「ダチ」を襲い、グレンに葛藤の果てに苦みを噛み殺して自分たちと拳を交える羽目を味あわせたのだ。

あんなに大事な存在な騎士たちのために大事な戦友と争わなければならぬ哀しみに彩られたグレンの背中を見せられた為に、どうしても原因作つた連中に憤りを感じてしまう。

極めつけに、7年前に腐れ縁の友人の親父さんの命を奪っているという事実。

これらを前にして、相手方に良い印象を持ちようがないのは当然の反応であった。

激情のまま罵倒したり、手なり足を出して武力を行使せず、ガン飛ばしに留めさせてることだけでも良しと見るべきだ。

それに、良心の呵責に身を擦り切れさせながら、心から沈痛な面持ちと気持ちで頭を下げてきた久遠の態度を見れば、不条理から生まれし心のもやそのものは消えなくても、拳を振り上げるのを止めざるを得ない。

ジレンマに苦しんでるのは、グレンも彼女も同じなのだ。

「本当なら……こうして対等に口を交わすことさえおこがましい身分であることは承知している……その上で……そなたらに頼みがあつて、こうして参上いたしました」

「その……『頼み』……というの？」

「……………闇の書についての……情報を……教えてもらいたいのだ」「っ!?!」

余りに意外過ぎる久遠と名乗った妖弧の『頼み』に対して困惑し、二人は返す言葉に詰まってしまった。

「当の本人たちを差し置いて、何で俺たちにそんなこと?」

ようやく出た言葉も、困惑に埋め尽くされたものとなっている。

闇の書に関することは、勇夜たちより、自分の体そのものと言つても差し支えの無いプログラム生命体で書の機能の一部分な守護騎士たちの方が詳しいに決まっているのだ。

回りくどく、目的の達成上障害となりえるものたちから情報を仕入れることに一体何のメリットがあると言うのだろうか。

「推測だが……あの魔法の書物は、本来の使い道から外れ、騎士たちがそれすら自覚できないまでに歪んでしまっていると……私は考えている」

どうやら彼女は、あの魔導書には重大な欠陥があると踏み、騎士たちからそれを確かめる術が無いがために、こうして接触を測ってきたらしい。

その推測は実のところ正しい。

完全覚醒した闇の書と一戦交えた銀色の神秘の巨人——ウルトラマンノアによって、魔導書が真の役割を逸脱していることを齎された直後だったからだ。

久遠も当初は、積極的に蒐集に協力し、自らの魔力も書に捧げたそうであったが、ページを魔力で刻ませていくうちに、何のために書（かれら）が生み出されたのか？ という疑問が芽生えた。

その疑問には勇夜も光も同意見であった。

かの魔導書は、666ページ、キリスト教では不吉を象徴する数字分の魔力を集め、書の根幹に封印された管制人格——システムを円滑にコントロールする役割を担うプログラム体を目覚めさせ、その者が主となった人間を正式にマスターとして認証させることで、ようやく使用できる代物……らしく、どんな使い道があるのか、正直釈然としなかった。

破壊兵器……であるなら、前述の手順などしなくとも、ヴォルケンリッターたちだけで充分賄える。

それで、書には欠陥と破損を抱える身であるという推論に至ったとのことだ。

「あいつらの蒐集する理由と、主がどこの誰なのかと、グレンとどういう生活しているのかは言えないんだな」

「その点も本当にすまない……今はどうしても話すわけにはいかないのだ」

その一連の推理と、これらが是か否か、白黒はつきりさせる為に自分たちに頼んで来たの理由（わけ）は納得も理解もできた。

もし書の破損が、騎士たちの記憶野にまで及んでいたとしたら、本人たちから真実を聞き出すのは絶望的だろう。

アリスアの記憶を植え付けられながら、他者の記憶であることを察せられない様に記憶操作されたフェイトの事例（ケース）もあるだけに否定はできない。

だが、接触と言う賭けに出ておきながら、今年の10月に入って突然始めた蒐集行為と、主となった人物の概要とどこに住居を構えていることに関する勇夜たち質問には対して久遠は、返答を渋って拒否し

た。

仮面の男、クローンの怪獣たちと異星人たちを率い、蒐集に手を貸す第三勢力に関わる問い掛けには、即答で――

「存じ上げない……彼らの存在は我々もあの夜まで知らなかった」

と答えたのとは偉い大違いである。

彼女のリアクションと応じ方と目つきから見て、二人は久遠が答えたことが本当であると信じた。

確たる物証は無いが、れっきとした根拠はある。

戦いというものは身体だけでなく、勝ち抜き、生き延びる上で、頭を使うことも要求される。

その身に降りかかるあらゆる危険に対し、瞬時に予測し、対応しなければならなかったため、戦闘経験を積み重ねていけば、自然と観察力と洞察力が鍛えられ、日常に於いても、相手の心の機微を捉えやすくなる。

その気になれば、目を見ただけで嘘か真か判別を付けるなど造作も無いことであった。

「答えなくても良いけど……今のあんたらは、身内の治療のお金はどうしても必要だから手を汚せざるを得ない……ってな感じか？」

「そなたらのご想像に……任せる」

勇夜の意図が測りかねる問いに久遠はそう答えてはぐらかしたが、彼女の反応から見て、彼の質問は当たらず正解寄り、であると言えた。

光の国の戦士から見て、直に一戦交えた際の騎士たちの様子と対応から、何となくだが『本当はこんな方法を選びたくは無いが、状況的にそうせざるを得ない』目をしていたから、が彼の先の質問の意図だ。

囑託魔導師として請け負った仕事の中には、そう言った訳ありな被疑者たちと相対する機会が何度もあったからだ。

無論のこと、半年前のフェイトもその内の一人である。

とにかく、今この場でできる最善の一手は、彼女が橋渡しとなって紡いできた信頼の糸を反故という形で切らさぬよう維持させ繋ぎとめることだ。



彼女の目的は明快だ。

闇の書の正体と、蒐集の果てに待ちうける真実の所在を明らかにすること。

その真実が最悪の事態の場合、騎士たちへの説得材料にし、事態を穏健な内に終息させるということだ。

何より、今日のここで話し合いの場を設けることができたのは、自分たちとグレンが仲間という糸を繋げ、そのグレンも今日のコンタクトに賛同してくれていたからだ。

こういうチャンスは逃さない手は無い。

グレンと久遠と、まだ顔も知らないが、人外と見なされかねないグレンたちを向かい入れた人道的で善良なマスターの為にも、これ以上心を削らせてまで蒐集を強いらせるわけにはいかない。

フェイトが狂気に堕ちたプレシアの命じるまま、ロストロギアの採集の果てに待ちうけていた最悪の結末を、彼らが絶望とともに突きつけられるやもしれぬのだから。

「それと、仮面の野郎と怪獣には気をつけるよ、上手い話には裏があるからさ」

「ご忠告感謝する、我々も彼らにはどう対応すべきか手をこまねいていたからな、それを騎士たちに伝えるのは当分先になりそうだが……」

やはり隠しごとをすることに良い気がしないようで、彼女は憂いその後ろめたさの籠った表情を見せながら、勇夜の忠言を聞き入れた。

かの第三勢力が、その絶望に誘う使徒である可能性も無きにしてもあらずなので、今判明していることを話しつつ用心するよう釘を指すのであった。

闇の書の手を使えるのは、認証を受けたマスターのみ。

使い道だっただかが知れているのに、蒐集に助力させていることは、何が裏があると見ている。

もし『やつ』の仕業だとすれば、今まで起きた悲劇の比では無い惨状が起きることも在り得る。

まあ……今のところはこうせざるを得ない。

以前相まみえた時の様子を思い出しても、騎士たちはとても彼女のようによい冷静かつ冷静にこちらと接触する余裕が無く、かつてのフェイト並に強情で頑なであると見た。

でなきや、彼女がこんな大博打なんぞ打つわけがない。

グレンも比較的態度を堅くしてないのが救いだ。

どの道御用にはなるのは避けられないし、まだダチたちへの仕打ちへのしこりが消えてはいないが、危ない橋を渡るリスクを承知でコンタクトをとってくれた彼女にも感謝しなければならぬ。

「ご希望は分かりました、私たちも今日はこれ以上とやかく問うつもりはありません、とりあえずは、一週間後、同じ時間にここで会いましょう、それまで集めた情報をお話します、ですが次の機会では対価として、こちらの問いにはイエスカノーので答えてもらいますよ、これが承諾できなければ、二度と私たちの前に現れないでもらいたい」

「承知……致した、何から何まで忝い」

「気にするな、俺たちもできれば力を使わずに済ませたいからな、グレンにはよろしく伝えてくれ」

「相分かった、それでは次の週、この塚の前で——」

段々と久遠の姿が半透明となつて輪郭がぼやき、気配ごとこの場から姿を消した。

と同時に、周囲の森を包んでいた魔力の波動の濃度が急速に薄まつていく。

彼女が転移魔法を披露しつつ、周辺を張り巡らせた人除けの結界を解除させたのだ。

感覚を研ぎ澄ましても、久遠の気配はもう微塵も感じられない。

完全にこの場から立ち去つたと見て、間違いない。

この時光は、心中しまったと呟いた。

闇の書のことも気になるが、この久遠塚の伝承と彼女との関連性も気になっていたからだ。

しかし優先順位としては遥か下位。

こんなことを彼女に説くのは、今の案件を解決してからでも問題ない。

今は好奇心を胸にしまいこんでおく時だ。  
それよりも……

「このように穏便な感じのまま、事件が終わってくれれば良いですが……」

「同感だよ、できれば遣り合う前に——」

せっかく穏和な方面で進展が付いたのだ。

どうにかそれを維持させたまま、めでたく一件落着にさせたい。

「(勇夜君に光君！聞こえる!?)」

させたかったのだが………現実はその甘味ではなく、幻想はあつさりと砕かれた。

「(今市街地上空の広域結界内でクロノ君と武装局員たちがヴォルケ  
ンリッター数名と交戦中、直ぐ応援に向かって!)」

どうやら神様って野郎は、偉く刺激に飢えた悪趣味な野郎らしい。

このタイミングで、とんでもなく傍迷惑なイベントを置いていきや  
がったのだからだ。

もし実在してんだつたら、一発ぶん殴らせてやりたい気分だ。

でもこれがチャンスなのも確か。

「彼女のように穏便に済めばいいですが……」

「儂い希望ってやつだろうな……」

荒事になるのは覚悟の上だ。

這いつくばってやるくらいにの気概で以て、止めてやる。

あいつらが続けてる………血を吐きながら走り続ける悲しいマラ  
ソン”をな。

「行くぜ！」

「はい！」

そうして二人の戦士は気持ちを切り替え、これから戦場となりえる  
コンクリートジャングルへと疾走した。

つづく。

その日の闇の書……と呼ばれるようになってしまった魔導書の魔力蒐集は、『鉄槌の騎士ヴィータ』と『盾の守護獣ザフィーラ』のおふた方によつて実行されていた。

場所は時空管理局からは『第42無人世界』と呼称を付けられ、呼び名の通り、人間も、文明を生み出すだけの知性を持ち合せた生命体が一切いない次元の海——多次元宇宙マルチバースに浮かぶ泡粒（せかい）の一つで生きている惑星。

全陸地の80パーセントが黄金色の砂塵と青い灼熱の空に彩られた、とても人間がまともに長く生を謳歌できない環境下な星であった。

その日二人は、ウルトラマンら超人たちのいる次元での地球人たちなら、明確に『怪獣』と即答されるであろう巨体と、久遠ら魔源種ほどではないが、リンカーコアを宿している管理世界の人々からは魔法生物——マジティアという総称でカテゴライズされた生命体たちから蒐集していた。

本日の蒐集分、ページ数にして6ページ。

なのはたちAAAクラスの魔力持ちなら20ページ、久遠ならば換算して60ページ。

有体と言うかはともかく、喩えで言うならば、今日の収穫は不作であった。

豊作の日なら、50ページ前後は稼げてはいたので、宜しくない結果である。

今日集めた分を加えれば、表記された頁の数は計412ページ。半分という峠を越すことはできている。

だが、余裕であるとも言い難い。

まだ彼らのマスターであるはやての体は表立った症状を顕在させていないが、彼女の体を蝕む騎士たちが『闇の書の浸食』と決めつけてしまっている神経性麻痺の進行は着実にペースを上げていたからだ。

今日のような不作の日となるだけで、不安や焦りが騎士たちに押し寄せてくる……もし、手遅れになったら……と、全て書の頁を埋める前に、麻痺がはやての体を埋め尽くしてしまつたらと。

否……絶対にそうはさせない、手遅れにはさせない、間に合わせて見せる。

でなければ、騎士としての己が立たない。

主を大切にしている同胞たちに申し訳が立たない。

何より、そんな最悪の結末へと誘わせてしまう、因果生み出してしまふ自分が許せない。

そんな不安を払って誤魔化すには、蒐集を大義名分にして、死地に赴く以外には手がなかった。

日々の蒐集に心と体の疲労を重ね、不作な成果に苦虫を噛む思いで海鳴に戻ってきたヴィータとザファイラに待っていたのは――

「管理局か……」

市街上空に転移するやいなや、広域結界を張って二人をドーム以上の敷地を誇る網に捉え、取り囲んだ対闇の書捜査チームの武装局員たち。

協力者たちである囑託魔導師の諸星勇夜――ウルトラマンゼロらウルティメイトフォースゼロの地道な聞き込みと張り込み調査の甲斐あつて魔導書の主が海鳴市に居を構えていることが早い段階判明し、この街から他世界へ転移していると踏んだリンディは、市街を重点的に魔力を感知する探査魔法の網を張っていた。

その網を張る武装局員たちの対応も速く、彼らは転移魔法の反応地点に赴き、被疑者である二人を結界に取り込み包囲した。

「でも、あたしらにかかればこんなチャライ奴ら」

正面からの戦闘では、勇夜たちにどうしても後れをとってしまった、騎士クラスのベルカの使い手から『チャライ』と言われてしまう彼らだが、彼らも戦士の端くれ。

「返り討ちにしてやる！――つて……？」

そう意気込んで愛機の鉄槌――グラーフアイゼン構えたヴィータだったが、次に局員たちをとった行動に虚を突かれる。

彼女らを円形状になる形で取り囲んでいた局員は全員、後退して下がったのである。

二人を直に相手をするのは、自分たちではないと言わんばかりの手際の良さと言うべきか、群衆として申し分のない規律の届いた無駄の無き対応。

事実彼らは指令のリンディから交戦を避け、結界の強化と維持に努めるようにと御達しがあった。

P・T・事件では、ジュエルシードという共通の脅威が在ったことと、フェイトが他者に危害を加えるのに消極的であったため、泳がすという一手は使えたが、ここ二カ月だけでも既に人間、動物含めた被害者たちが多数であり、目的や事情はどうあれ、このような傷害行為は止めなければならぬ。

先ほど、勇夜と光が、騎士たちと何らかの関係を紡いでいる魔源種の少女——と接触し、状況を温和に終尾させる光明が見えたばかりだが、こうして網にかかった以上、相応の対処をしなければならぬ。少々手荒だが、道筋が見えたのだ、ここでこのまま見逃すことはできなかつた。

また……かつての自分たちを生み出してしまう目に、誰かに理不尽を被らせ、彼らを罪の鎖を強めてしまう前に。

そんなリンディの指示の下、局員らの自分たちへの応じように対し、戸惑い気味だったヴィータは。

「上だー」

ザフィーラの警告と、同タイミングにその身が感じとった急速に膨れ上がる魔力によって上空を見上げたことで相手方の意図をようやく察した。

魔力は発せられているのは地上からはおよそ高さ2 km、ヴィータとザフィーラのいる位置から約1, 5 kmの地点。

そこにあつたのは、薄い空色の光でできた……諸刃の剣。数にして2つ、3つ……それどころではない。

二人が目視できるだけでも、百以上ものの光剣が夜空の宙に出現し、今なお数が増加されていく。

「ステインガーブレイド——」

この数秒間という短い時間の合間で剣の大軍を一斉に作り出した張本人である魔導師——クロノ・ハラオウンは、術名を大声で出しながら、右手に持ったS2Uを空へと高く振り上げ。

「エクスキュージョンシフト！」

ヴィータとザファイラーが佇む方角へと見据え、振り下ろす。

彼の動作を合図に、総数150もの諸刃の光剣たちは一斉に眼下の一方向に刃先を向け、その場から急加速して、目標へと降下していく。それは眼下にいる二人から見れば、光る群れた凶刃の驟雨であった。

数は多い上に広範囲に降り注いで来るため、飛行で回避することは叶わない。

防御で受け切り、耐えるしか選択肢は残されていなかった。

ザファイラーがヴィータの前に立ち、左腕を翳して障壁を発生させ、半透明の壁が二人を包みこんでいく。

その刹那、光剣の群体の先陣の初撃が、魔力の壁に衝突。

さらに第二陣、第三陣の光剣たちが、彼らのいる位置にぶつかり、衝突による魔力の閃光、拡散爆発が起きた。

今の爆発のよって周辺大気の温度が急上昇し、空気中の水分が蒸発して白い煙が舞い上がる。

これはこの魔法が元から持っている効果で、相手の視覚を一時攪乱、不能にする役割があった。

「はあ…はあ…少しは…：…止まったか…」

その巨大な白煙を注視するクロノ。

彼が取得している魔法の中でも、消費量が高めの技で、ストレージデバイスの利点を生かした短期間に大多数の魔力刃を生成するという魔導の使い手としては神技めいたテクニックを披露したがために体力がかなり食われ、息が少々荒れ気味となっている。

数秒の後、騎士たちを覆っていた白煙が散り散りになって消えていき、塞がれた視界が晴れた。

「ザファイラー！」

晴れた先にいたのは、この「盾の守護獣」が二つ名の通り盾となつてくれたことで無傷に済んだヴィータと、彼女を守り抜き、彼の堅固な障壁をすり抜けた光剣4本が、黒ずむ小麦色の左腕に突き刺さっているザファイラ、刃が刺さった皮膚からは、少量だが赤い液体が痛々しくしたり流れていた。

「気にするな……この程度の傷でどうにかなるほど——」

負傷した自分を案ずるヴィータを心配させぬよう答え、筋肉で固く覆っている剛腕に力を込めつつ。

「——柔ではない！」

腕周辺に魔力を発散、放出させて、魔力刃を粉々に砕いてしまった。「上等——」

仲間の健在さを目にして、戦闘意欲を高めるヴィータ。

彼ほどの体躯となれば、筋肉も鎧の役目を果たし、短刀くらいではまともに皮膚を通さない頑強さを誇る。

加えて、防御系統にも長け、『盾の守護獣』としての本分を如何なく発揮させていた。

己の繰り出した大技が齎した結果に歯噛みするクロノ。

先の攻撃には、二通りの目的を込めていた。

一つ、クロノからは年齢では年上だが、立場では部下である局員の方々を定位置に配置して、結果を強化し、守護騎士たちを絶対に外部に出させないための時間稼ぎ。

二つ、荒いやり方だが、肉体に魔力ダメージを与えて相手を無力化し、そのまま確保し連行。

『武装局員、所定位置への配置、終了したよクロノ君——』

「了解……」

エイミーからの通信で、前者の目的は達成された。

これで暫くは彼らをこの結界内に閉じ込めておける。

だが後者の方はと言うと、半獣人形態の盾の守護獣によって効果はいまいちに終わった。

それは良い。相手は古代ベルカ式の使い手な兵どもなのだ。この結果はむしろ想定内ではある。



現代の魔導師よりも、戦闘——文字通りの殺し合いに長けていた筈の古代ベルカの兵士たちでさえ、ヴォルケンリッターには歯が立たなかった。

“非殺傷設定”などと言った安全性がある程度保障されたため、湯に浸かる現代の魔導師な自分たちの今の攻撃くらいで彼らを無力化できたのなら、七年前にもっと早く魔導書は確保できた。

父だって……死ぬことは無かったし、提督が介錯を負う咎を受けるまでに事態が悪化することも無かった。

問題は……自分が相手に手傷まで負わしてしまったことは、正直なところ想定外。

できるだけ殺傷沙汰は避けつつ、次元犯罪者を捕えることが、自分たちに掛けられた重い枷であると言うのに……一体何をやっているのだ？

まさか……無意識の内に非殺傷設定を解こうとしていたのか？

『——それから今、現場に助っ人さんを転送したよ』

助っ人……エイミイの言ったそれが誰のことを指しているか直ぐ検討は付いた。

「何だ？」

クロノの先制攻撃を凌ぎ、反撃しようとした時にそれは起きた。

何か……目に見えない何か、彼女らの体に触れてきた。

風？

意気を強く込め、愛機のグラーフアイゼンを握りしめて、臨戦するべく、結界だろう人だろうと自分たちを阻む障害をぶっ飛ばそうと構えた時、奇妙な風が吹いた。

そもそも、なんでこの場で風など吹くんのだ？

ここは結界、外部と完全に遮断させる魔導。

たとえば外が大嵐が吹いても、寒波が覆っても、地震で大地が呻き声を上げて、その影響を内部に被らせない超空間。

そよ風すらも、起きようが無い場所。

ところが確かに、今まさに風が吹いている。  
何か起きる……前兆を知らせるかのよう。

「新手か……」

ザフィーラのその一言を区切りに、今度は風と混じって『闘気』が飛んできた。

それは何者かが、明確な闘志を以てぶつけてくる眼力。

発信源は……眼下前方斜線、100メートル先の高層オフィスビルの屋上。

その塔の最上に、転移魔法による光を発する魔法陣が二つ現われていた。

光は増し、円陣内に輪郭が浮かび、何か……否、何者かを形作っていく。

さらに光が煌めき、急速に明度が落ちていくとともに、転移されたきた人、二人が姿を現した。

その二人は、どちらも日本人な顔つきをした少年たちであった。

背は二人とも180近く有り、年齢では、自分たちにとっては家族も同然な炎の戦士の人間体時の姿と同年代か、やや年上と辺りに見えるべきか。

一人の方は、やや濃い緑が混じった黒い短髪。

人畜無害、優男、と呼ばれそうなまでに温和そうで穏やかな顔つきと物腰を帯びた細身の体躯。

もう一人の方は、この結界内の夜天よりも漆黒で艶やかな艶を放つ髪を肩にかかるまで長く伸ばし、もう一方の少年と対比的に、への字な口と、鋭く釣り上ったまなじりと眉によって、長髪を違和感なく溶け込ましてしまう中性的で凛々しい顔つきをしながら近寄り難い印象を与えていた。

一見すると、どちらも上段に値する美形である以外は、普通の10代の日本人の少年たちと、印象付けたい……のだが、ゆっくり歩を一歩一歩進める二人の周囲に起きている現象たちが、それを決定的な間違いであると、本能と戦士として積み重ねた経験から来る『勘』が訴えてかけてくる。

その現象とは——この風だ。

さつきから吹いている風の発信源は、この二人からだった。

その証拠に、こちらを見据えて歩む両者の髪は、その身から発生している流れる空気によって揺らめいている。

もう一つは、風とともに二人の瞳から発せられる……闘志。

というより、二人の闘争に臨む意志によって、周囲の空気はその圧力に応え、風を生み出していた。

「何なんだよ……てめえらは何?」

まだ、ただこちらに視線を送って歩いているだけなのに、周りの空間に影響を与えるまでのプレッシャーを発する未知なる存在たちに、思わずヴィータはそう問いかけていた。

猛者の中の猛者な兵にのみにしか起きえない、持ち得ないはずの特権を、まだその域に到達するには程遠い若年な者たちに対して。

惑いと焦燥を隠しきれない彼女の問いに対し、長髪を同胞の剣士よりやや下向きに一纏めした方の少年——諸星勇夜は——

「ただの通りすがりの——魔法使いだぜ」

と一言を発し、答えた。

この場に居た者たちなら、確実に同じことを考えていただろう。

この少年たちが、『ただの』という烙印を付けられるような輩では断じてあり得ないことに。

現に騎士たちは、それを確証で以て感じ、身構えるのであった。

その様子を遠間にそびえ立つビルの一つの頂から眺めている少年が二人。

クロノとユーノだ。

ユーノは先程まで、ナオトとある施設で闇の書の情報が記された史料の探索をしていたのだが、一時ナオトに任せて、その足で現場に飛んできたのである。

「段取りは分かっているな?」

「勇夜さんたちが騎士たちの相手をしている間、僕たちは闇の書を持っていく主か仲間を探し出して、見つけ次第確保、だったね」  
「ああ、それと仮面の男にも注意するように、この状況なら、彼らも絶対に見られるはずだ、怪獣は召喚されない様に手はもう打ってあるけど」

彼の言う対策とは、この広域封時結界のことだ。

今局員が強度を強化しつつ維持している結界には、特殊な細工を施してある。

ある一定以上の水準をオーバーした物体を、結界内部に転移できないようプログラムされており、50メートルクラスの巨大生物なら、この場を送り込めない様になっている。

少なくとも、怪獣による騎士たちの逃走の補助が未然に防ぐことができた。

そして二人は、この状況を利用して、今の内に市街地のどこかにいるであろう、他の騎士や仲間、或いは主を探し出そうとしていた。

蒐集するには魔導書本体が不可欠で、勇夜たちが相対する騎士たちは持っていないとなれば、近くに他の者が書を持って潜んでいる可能性に行きつく。

その役の担当が、この二人。

「じゃ、内部の搜索は頼んだぞ」  
「うん」

そうしてユーノとクロノは、それぞれの持ち場へと飛んで行く。

だがクロノの心には、まだ微笑ながら黒くて淀む「なにか」が巡っていた。

今、闇の書と相対する者たちの中で、数少なく希少な、守護騎士たちと真つ向切つての戦闘を行えると、はつきり断言できる実力をその身に備えた戦士たち。

味方としては、これほどまでに安心感と頼もしさを保障してくれる者は、もっとさらに希少であろう巨人という爪を隠した鷹たちだ。

なのに、なぜなのだ？

なぜ、心のどこかに不快とさえ感じてしまうささくれが立っている

？

どうして自分は、『助っ人』である彼らの加勢を素直に喜ばないでいるのだ？

自分の魔導で、自身の力によって、そして己の手で、■の■をとるべく直に彼らを制裁したい——と、今…自分は求めてしまっていて、いるとでも？

首を振りながら雑念を払おうとするクロノ。

馬鹿げている……何を考えているのだ？

大昔なら、■討ちは許された行為のかもしれないが、今はそれを断固許さない時代なのだ。

自分は執務管だ——局員にして捜査員であり、上司であり、法の番人でもあつて執行者でもある。

己の私情が、局員としての義務を逸脱することなど、断じて許されない。

それは…最大の悪徳。

法治体制に於いて、絶対に越えてはいけな一線だ。

あくまで自分は『個人』を封じ、『執務管』としてこの場に臨むべきなのだ。

今は彼らの加勢を良しとし、最善を尽くす時。

そう……そうでなければ、自分が今ここにいる意味なんて、皆無なのだから。

結界に入つて、■をこの目にしてから、彼の心には冷たく気味悪い感触をしているぬめりとした何かが、生まれつつあつた。

例えるならそれは粘液とも呼ぶべきか……それが重力を無視して急速に這い上がってくる。心の籬を外し解放させようと迫ってくる。

その沼のようなヌメリは……人らしいと言えば、人であると言い切れる確証を秘めていた。

その黒きく淀んだ沼の正体を直視するには、10代である彼にはまだ若すぎた。

一方勇夜も、騎士たち、特にヴィータの態度に対して、ある確信を手にしていった。

やっぱり、この間ミットチルダでやり合った、自分とグレンとタメを張れそうなくらい、目つきが鋭利で、刺々しい立ち振る舞いをする眼前の鉄槌の騎士な少女は、偽物だった。

察しの通り、勇夜は人間体として、ヴィータと一度対面し戦っているのだ。

なのに一戦交えたはずの本人は、初めて会ったかのようなリアクションを返してきた。

これは、以前会ったヴィータが真つ赤な偽者であったことに他ならない。

ひよつとしたら師匠のレオを戦ったあの仮面野郎が化けたのかもしれない。姿を現してないだけで……仮面の男とは仲間である他の連中って可能性もあるがだ。

妙に張り合いが無かった気がしたが……慣れない古代ベルカ式を使わなければならぬ事情つてのが大方の原因だろう。

しかし……さつき妖怪そのものな久遠と会っていただけに、どこの化け狐だと思わず心中で呟いてしまう。

『黒幕』かもしれない野郎はともかくとして、そこまで騎士たちの手に、血の臭いをしみ込ませる沙汰と、グレンや久遠に身を裂くような思いを助長させて、仮面野郎たちは一体何がしたいんだ？

まあ、全容がまだ掴めない奴らだが、今は連中のことは隅に置いておく。

今の相手はヴォルケンリッターだ。

あの連中には会ったら会ったで、ブツ飛ばしてやるけど。

「少々手荒な真似の後で信じられないかもしれませんが、一応僕たちは交渉のつもりでこの場に参上いたしました」

こう光が切り出したが、本音を言えば、光も勇夜も端から彼らと穏和な外交を行えると思っていない。

フエイトがヴィータの時にしたのと同様、あくまで出方を窺う為の確認作業。

そして、騎士たちの前において、自分たちには手荒な外交策しかまともに撃てる一手が無いという確信すらもあつた。

確たる理由は色々ある。

まず先刻に、八束神社裏の久遠塚で久遠と情報交換した際、かじる程度だが、騎士4人のことについてある程度話してもらつた。

「んなこと言つて、てめえら懐に武器仕込んででんじゃねーか」

勇夜とどっこいどっこいな愛想の無い不遜な面持ちで、『武器』を持つ二人を問い詰めるヴィータ。

「ベルカの諺にこういうのがあんだけどさ、和平の使者なら武器は持たない」

「ごもつともだ。」

「ちやつかり自分たちは武器を隠し持つてる。」

勇夜はインテリジェントデバイス以上のサポート能力を有したりリンクと、彼女の中には、ミッド式でAI未搭載だが、アームデバイスの零牙を格納している。

光も右腕に待機モードのシルバーライトを嵌め、服には彼が取得している剣術の流派、御神真刀流の剣士専用の暗器をいくつも忍ばせていた。

「話し合いをしようつてのに、武器持つてやつてくるやつがいるか馬鹿つて意味だよ、バーカ」

小馬鹿にする態度で、彼女は眼下の勇夜たちの問いかけを切り捨てた。

顔に出さぬように努めてはいたが内心、その話し合いの『は』の字の欠片も無しに、不意打ち三昧の通り魔さんなおたくらがどの口で言うか、ボケナス……そつちが聞く耳持たずだから、わざわざ武器持つて行かなきゃなんないつてのに……と突っ込みたくなる。

久遠から騎士たちが、頑固な連中だとは聞いてたが、予想以上に『実力行使』以外に、有効なコミュニケーション方は使えなさそうだ。

先の愚痴の数々を正直口に出したかつたが、お子様の戯言つてこと

で片づけることにした……相手は一応長生きなんだけど

「ただと言われっぱなしなのも癪なので、一応お返しの突っ込みを一発撃ち返しておこう。」

「まあそいつはそうだな、けど、お前さんのその喩え話には一つ訂正点があるぞ」

「何い？」

「確かその話って、諺じゃなくて——『小話のオチ』——だったはずだぜ」

「っ……」

不敵に笑みを浮かべさせた勇夜の口から繰り出された、まさかの言葉返しと言う名のカウンターパンチに、自覚無きボケをかましたご本人は、メンタルに受けたダメージで一時絶句してしまう。

相手の狼狽振りを見て、体がガキに退行しちまったばかりの頃にベルカに関する知識を勉強していて正解だったな、と思った。

何しろ、今こうして役に立った。

「ヴィータ、お生憎様だが今の小話の件は、あやつの言う通りだ」

「う、うっせえ！良いんだよ細けえのはあ!!」

フォローするどころか、勇夜の返しを補強する痛烈な盾の守護獣のツッコミに対し、ヴィータはもはや言い訳にすらなっていない強がりな物言いで誤魔化した。

何か……いくら見た目はちっこいけどは言え、ガキンチョ過ぎねえか？

余りに相手の反応がアレなので、呆れて溜め息すら出てこない。

くそ……昔の自分を嫌でもほじくり返してきやがる野郎だ。

父さんも師匠も、あの頃の生意気な自分に、よくキレずに最後まで耐えきったよな、と一瞬触発な場でそれどころじゃないのに感心してしまう。

多分、自分も同じ似た者な身なんだけど、色々あいつとダブってるグレンと『トムとジェリー』的な感じで仲良く毎日喧嘩でもしてんだろうなど、何となく想像できた。

さっきまでの張りつめた空気は一体どこへやら、一連のやり取りで



結界内はすっかりゆっくしい感じになりかける。

大半の理由は無論、勝手にカツコつけて盛大に自爆に及んでしまったヴェータが元凶である。

こればかりは覆しようが無く、当人にとっての黒歴史に認定されるのは確実で、時間の問題だろう。

そんな時……空から心の臓まで響く爆音が轟いた。

上空、丁度ドーム状の結界の頂点に当たる場所から大気を切り裂き、轟音が雄たけびを上げ、緩んでいたこの場を一気に引き締めさせた。

今の轟音は、何かが強引に結界を通る、と言うより突き破ろうとして起きた衝突音。

「増援……ですね」

次に来たるは、その「何か」である光点が地上に向けて急降下。

光点は、勇夜と光は立っているビルの向かいの屋上に爆鳴と振動を轟かせて降り立った。

爆煙で光点の全体像がはっきりと見えなかったが、勇夜その身が感知した魔力の波動によって、煙を斜に構えつつ見据えながら、乱入者がの正体が何者であるかは直ぐに特定することができた。

「シグナムか……」

黒い煙のカーテンが、宙を切り裂こうばかりに振るわれた横合いの斬撃で払われ、腰まで伸ばした八重桜色の長髪をポニーテールで縛り上げ、凜とした面容を持ちし女性、烈火の騎士シグナムが推参する。

現れた目的は、勇夜たちと同様、味方の助太刀の為だ。

わざわざ強固な結界を押し破ってきたのだ、彼女の意図は勇夜たちにも充分伝わっていた。

「鉄槌の子は私が、剣士は勇夜がお相手、ってことでよろしいですね」

「（ああ、問題はあの盾の守護獣なんだが……）」

「（それならあたしに任せな）」

現状、実質三対二、数の面でなら二人が不利。

そんな矢先、二人の横のコンクリートの地面から、オレンジの魔法

陣が敷かれ、円陣からはアルフが現れ、さらなる助っ人、加勢役でこの場に駆け付けてきた。

「フェイトを差し置いて参戦するのは気負うけど、あのマツチヨなオセロ狼はあたしが相手をするよ、前の不意打ちの借りをまだ返せてないもんでね」

拳を握ってバキバキ鳴らしつつ、人間より鋭くどがった犬歯を見せて笑みを浮かばせながら、意気揚々と上空のザフィーラを見上げる。

ちなみのアルフがザフィーラを『オセロ狼』と呼んだのは、真っ白な髪と獣耳と、黒めな肌をした白黒な容姿からとったもの………まあ確かに白黒な見た目ではある。

「気負いなら僕も同感ですよ」

「贅沢言うな、まだ師匠は当分あいつらを戦わせるつもりは無いんだからさ」

なのはとフェイトを指南しているおおとりゲン——ウルトラマンレオ。

師の戦いの経験を踏まれれば、まだ暫くはフェイトたちを実戦に出したりはしない。

「よし———そんなじゃ———行こうぜ」

「はい」

「おうよ」

この三人による今のやり取りを契機として、三人の目つきが明確なまでに変貌を遂げる。

常人を一瞬で震えあがらせ、戦いに興じられる者のみが持ちえることが許され、可能にする戦士の眼力。

完全に自身の意識を戦闘行為へと誘わせ、普段の物腰がまだ愛嬌があると窺わせるのに十分な闘気を込めた眼光を迸らせ、それぞれ応じる相手にその眼の弾丸を相手方に投げかける。

あなたのお相手は自分だ、と主張を刃を秘めたアイコンタクトのよる意思表示で、もう今はこれ以上言葉はいらなかった。

彼らの眼力に対し、眼力で応え騎士たち。

そして一同は、三者三様はに各々の対戦相手と対峙しながら、それ

それぞれの戦場へと踏み込んでいく。

「零牙、セットアップ、ブレイドモード！」

腕輪形態のリンクから溢れた粒子が、瞬時に物体を形作り、彼の物言わぬもう一人の相棒なデバイス、ブレイドモードの零牙を取り出しつつ、馴染みの濃い黒いジャケットを纏った彼とシグナムは、屋上から同タイミングで飛び降りて、アスファルトの地面へと降下していき。

「シルバーライト——セットアップ！」

『御意』

光の声に答え、シルバーライトは自らを起動し、彼のマスターは緑と銀のバリアジャケットを羽織り、二振りの小太刀を腰に纏いながら、山間部の方角へと飛んだヴィータを追う形で飛翔。

アルフは、上空に不動で佇み待ち構えるザフィーラに向けて、犬歯を剥き出しにしながら跳躍し、対象に急迫していくのであった。

今、実際に存在こそしてはしないが、この場においては確実に再戦の鐘が境界内の海鳴中心市街地に鳴り響いた。

つづく

STAGE 25 | ZERO vs SIGNA  
M

リンデイから支給されていたミッド製携帯電話端末が握り、先程まで彼女と連絡をとっていたゲン。

「おおとり先生、何があつたんですか?」

なのはとフェイトは、彼に何の連絡が来たのか尋ねた。

「今武装局員が張った結界内で、弟子たちとヴォルケンリッターが戦端を開いたそうだ」

「え?」

「本当ですか!?!」

守護騎士たちと武装局員たちの接触を端に発し、勇夜、光、アルフが強装型の封時結界内で、ヴォルケンリッターと交戦を開始したことは、桜台登山道広場での修行場の内でも、報せが生き届いていた。

その連絡内容の詳細をゲンから聞いたなのはとフェイトの様子を見たゲンは、二人の心中を瞬時に掴みとり。

「すまないが、君たちを結界(ここ)から出すわけにはいかない」

「どうして…分かつたんですか?」

「君たちの顔に、ゼロたちの下に駆け付けたいと書いてあつたからだ」  
「……………」

何度目かもしれないが、二人が闇の書事件にも関わろうとしているのは、騎士たちが半年前のフェイトと同じ、『強い意志で自分を固める余り、周りの言葉が入らない現状』と『どうしてもそうせざるを得ない』理由があると感じ取ったことと、蒐集の裏に隠された謎を日々突き止めよう尽力し、今こうして激闘に身を置いている戦士たちに助力したいからだ。

それを承知で、ゲンは二人のご指南を買って出て、みっちり鍛え上げてきたこともあり、彼女らの心境が手に取るように理解できた。

「ユーノ君とクロノ君が、闇の書のマスターさんを探してるんでしょ?」

「搜索くらいなら、私たちでも十分手伝えます」

ただし——理解ができてしまうからこそ。

「最初の日に言った筈だ、私の認可が降りるまで実戦には出さんと、それにレイジングハートとバルディッシュの改修とシステム調整はまだ終わっていない、プレシアさんたちも、万全では無い内は君たちに君らの矛を託す気は無いだろう」

「でも……このままこの結界中で待ってるなんて……わたしたちには……」

「ならん！ 半身も同然な愛機もなき半端な君らがのこのこと戦場へ出て行っても、戦闘経験では長のあるベルカの騎士たちに返り討ちに遭うだけだ!! なぜゼロたちと、彼らをサポートしている局員たちを信じられない」

「っ……」

だからこそ、今の彼女たちをこのまま外に行かせるわけにはいかなかった。

彼女たちのAAAクラスの魔力量は、ヴォルケンリッターたちにも、仮面の男ら第三勢力にも、格好の獲物。

まだ一連の訓練メニューを修了しておらず、二人の相棒もまだ完全に改修作業を終えていない。

ゲンの言う通り、そんな中途半端な身で戦場に踏み込めば、手痛い敗退を受け、為す術なく、リンカーコアから魔力を略奪される可能性の方が高かった。

そのゲンもかつて、先日も弟子と一戦まみえたツルク星人によって宇宙パトロール隊MACのピンチに陥った状況に焦る余り、修行中な身でありながらそれを放棄、怪獣となって巨大化した星人挑んで、完膚なきまで叩きのめされ、完敗を喫したことがある。

ツルク星人に限らず、先走って痛い目を見て、悔しい思いを体験させられることになる挫折を幾度となく味わってきた獅子、それがゲン——レオの地球での戦いの日々のある一面。

これらの経験があるだけに、焦燥で感情を先走らせてしまうことが、どれだけ危険な結果を招くことになるか、ゲンは身に染みして理

解しているがゆえ、どうしてもものはとフェイトを、今行かせるわけにはいかなかった。

かつて自分が味わった同じ痛みによつて、二人を傷つけたくは無かったのである。

その為なら、いくらでも『憎まれ役』に徹する所存であった。

「焦る気持ちは分からんでも無い、だが彼らに助成する前にやらなければならぬことを、君たちは忘れてる」

「あの……それって」

「過去(それまで)の自分自身との戦いに打ち勝つことだ、なのは、フェイトよ、今君らが戦う相手は己自身、弟子たちに背中を託されてほしければ、修行を続ける、今は耐え時だ、いいな」

片手を腰に添え、もう片方を突き出した宇宙拳法の構えを見せ戦闘態勢をとり、一時中断されていた模擬戦を再開する旨をその身で示すゲン。

「はい」

「さあ……いつでも来い！」

口の中に金臭くて、苦いものがこみ上げながらも、二人は幼いながらも、今の自分たちが優先しなければならぬのは鍛錬、それに励むことしかできないと、己に言い聞かせながらデバイスを構え、宇宙拳法の構えをとり対峙するゲンとの組み手に再び臨み行く。

想い人たちへの背中に、少しでも追いつこうとするイメージを、頭に刻みつけながら、いつか辿り着いてみせると、意気込み、少女たちの戦いは、続行の火蓋を切つて落とされるのであった。

それぞれ戦う相手を目線で打ち交わした後、脚を付けていたビルの屋上から飛び降りた諸星勇夜ことウルトラマンゼロと、烈火の騎士シグナム。

常人たちのよる、傍から見た視線では、どちらも大うつけの愚か者と見られてもおかしくない……どころか確実にうつけとみなされ

る。

どちらも高層ビルの頂から、命綱も無しに跳び上がったのだから。しかし、常識の範疇ならコンクリートに叩きつけられ、衝撃で体をボロボロにされ、天へと召されるゆく運命でも、この二人の場合、簡単にそれを覆ってしまう異能を持ち合わせていた。

八重桜の剣士は、古代ベルカ式の飛行魔法によってゆつたりと一般国道のど真ん中に降り立ち。

いまは夜空よりも深みのある黒いデニムジャケット、自身のバリアジャケットを身に付けたウルトラ戦士の人間体たる勇夜は、ウルトラテレキネシス―念力を大地に向け発し、落下速度を緩めて着地した。

なお二人が、屋上から降りたのは、偶然自分が戦いやすいフィールドに移ろうとした思考が被ったためである。

“似ている………この私と、どこか”。

相手を注視しながら、彼女は内心呟いた。

今の独白は、シグナムが今コンクリートジャングルの合間のアスファルトにて相對している少年への第一印象。

似ていると感じたのはまず見た目、鏡を見ているかのように何から何までそっくりというわけではないが、身を構成している部分はかなり共通点がある。

髪は綺麗に艶を帯び、長めに伸ばして耳と平行になる高さで後ろ髪をポニーテールで結んでいる。

そんなどちらかといえば現代の男性には合わなさそうな髪型と、遜色なく溶け込ませてしまう、どちらの性でも上位に相当する中性的な顔つき、今まで何十、何百年と転生を繰り返しながら、ひたすら剣と騎士の道に準じてきた自分でも、この少年は他者を惹きこんでしまう容貌を備えていると、はつきり言える。

やや目じりのつり上がり様が強く、本人にその気が無かろうと相手を縮こませる威圧感を醸し出す眼力があり、男なら男らしく、女ならば漢女と言われそうな趣があるが、全体の顔つきの整いようは………最早凛々しいと表現すべき域へと達していた。

これらの点はシグナムにも該当しており、ある意味で両者は“瓜二

つゝとも言える。

そして共通点は、両者の得物も然り——どちらも、片刃の刀剣。シグナムのレヴァンティンは、サーベルとソードの要素を掛け合わせるというコンセプトを下に作られた直剣。

一方少年の得物は、オートマチック型ハンドガンの木製グリップを連想させられる形状とトリガーボタンが付いた柄。従来の日本刀に付けたれたものより分厚く、形は三角というより台形寄り、青緑色の光る楕円状の球体が付いた黒い唾。

元の柄と唾の原型をできるだけ留めさせつつも、デバイス特有のメカニカルさが印象的なデザインではあるが、鞘に覆われている刀身が湾曲したその刃は、紛うことなきこの国、日本特有の刀剣——『日本刀』——であった。

文献、テレビやインターネット越しで、シグナムはその『刀』を何度か拝見したことはあったが、デバイスとは言え本物の真剣を直にこの眼で目にするのは、これが初めてだ。

そして、自らが持つ得物に負けず劣らず、持ち主の眼光も、若年の外見に似合わないようで、違和感を払拭させるまでに溶け込ませ、磨き上げられた刃を秘めていた。

だが、その少年に対して浮かび上がる妙な関心は、その容姿だけでは無いような気がする。

詳細は……自分でも関心の正体をはっきり測ることができない。

ただ——

「貴様、どこかで私と会ったか？」

——彼の佇まいに対し、どうにも得体のしれない既知感——デジャヴが彼女の意識をよぎっていた。

少なくとも、彼と会ったのはこれが初めて、その名前も、結界に侵入した際、ネットワークで相手方の情報を集めていたシャマルから聞いたばかりだ。

諸星勇夜——それが今自分と対峙している、彼の者の名。

戸籍上は現在15歳の少年、社会での立ち位置は、時空管理局囑託魔導師。



その若さにして、異名を付けられるまでの実力を持ち合わせた魔導師にして剣士であり、戦士であると言う。

その異名とは——「魔導殺し」——名の由来は、魔導を用いずとも、剣技と体術で、魔導師を地に伏せてしまう技量を秘め、なおかつ魔導師としても才に恵まれているという。

二つ名があるところから見て、十分名の知れた魔導師であるのだろう。

「さてな……道端でそっくりさんとすれ違いでもしたんじゃないか？

ヴォルケンリッターの烈火の騎士さん」

彼は先のシグナムの質問に対し、明らかにほろかした態度と粗暴な口調で返答をしつつ、左手に持った刀を腰に近づけ、右手を柄に添えた。

一般的に「居合」という名称で広まっている鞘の中に納め、反りの入った刀を素早く鞘から抜くと同時に斬り付ける剣技——抜刀術（ぼつとうじゅつ）。

これはその前振り、いわゆる居合腰と呼ばれる構えである。

その無駄なく整った所作と姿勢と、研ぎ澄まされた闘志の気迫を前にして、シグナムの心に、震えという名の電撃が走った。

彼女の場合、震えとは、恐怖の感情と指すことではない。

強者にこうして相対したという幸運によって沸き上がる……心からの喜び、愉悦、これ即ち——「武者震い」のことを指す。

シャマルから聞いた彼の噂は、本ただと見ている。

彼から発する魔力、以前にトリコロールカラーの超人——ウルトラマンと戦ったあの夜に刃を交わした、金髪紅眼の黒衣の少女ほどではないが、それでもAAAクラスの量を持ち合わせている。

それだけではない。

彼が今、披露した居合腰。

何という……美しい構えだろうか。

徹底的に無駄を排し、張りつめた緊張感と「気」を発した、実戦的な物腰ではあるが、そのくせ……美術刀などの芸術的側面を宿した武器を、この目にした時の何とも形容しがたいし難い、美への快感を、今

この瞬間……この身で感じてしまった。

本来、人間なら何十年もかかる、達人による磨き抜かれた居合術を、この勇夜という、見た目は若輩者なこの男はモノにしている。

騎士としての経験による直感から、目にしただけで、

その若さで、この出様を見ただけでも、相当な剣の技量を持っていることが窺えた。

「魔道殺し」の噂に、嘘も、誇張も無さそうだ。

でなければ、管理局が彼に協力を仰いで、こうして前線に出させたりはしない。

その様相、その眼力、まさしく本物の戦士（もののふ）。

強敵として相まみえるに相応しい相手だ。

シグナムは勇夜の居合腰を前に、レヴァンティンの柄を左半身側の頬に寄せ、剣先を前方に突き出し、構えて応じた。

まさか、グレンの友、別の次元に存在する宇宙の、M78星雲の超人「ウルトラマンゼロ」に続いて……この現代で、自分と対等に戦える者と出会えるとは、なんと僥倖なことであろう。

これでは、己の血が熱く滾ってしまうではないか。

強者と心置きなく、熾烈に戦い、死合う場に歓喜を見出す本能が……だ。

これは前に紅蓮からも指摘された、自分の悪い癖だが、障害を叩つ斬り、状況を打破する為、十二分に利用させてもらおう。

下手な手加減は、むしろ彼の者のような兵には、むしろ無用の長物というものだ。

未だ彼へのデジャブの正体が掴めずじまいだが、現状は保留ということにしておく、なに……案外戦っている内に、詳細が浮かんでくる可能性も無きにしもあらずだ。

おつといかん、本来の目的を忘れぬようにせねば。

ヴァイターたちを閉じ込めたこの結界からの脱出、奇しくも以前の海鳴でも戦闘と、立場が逆転していた。

これもまた、因果と呼ぶべきか………まあいい。

本筋から逸脱しない範囲を見極めながら、今宵は奴と全身全霊を以

てして、互いの剣技、剣舞を交わし合うとしよう。

「瑣末なことだった、先程の問いは忘れてくれ、お前の言う通り道端で他人の空似とすれ違ったことにしておく」

「こつちからも前置きに一つ聞いておくが、魔力を掻つ攫つてる理由（わけ）を話す気は——」

「毛頭ない」

「てことは、知りたきやまず力で叩き伏せてみせろ、と言いたいんだな？」

「そういうわけだ、加減など入れず、存分に斬りかかってこい、魔導殺し——」

「ふっ……上等だ」

異名を呼ばれながらも、勇夜は鼻で笑って過ごした。

それから数秒……互いの得物を構えたまま、言葉も無く、全く微動だにしない時が刻まれていくが、当人たちの体感時間は、それを上回るものであった。

一分……いや、それ以上経ったような感覚、それだけ神がかった集中力を、この二人の剣士たちは持ち合せていると言える。

さらに数秒の後……静かなる状況に、転機が訪れた。

シグナムがその身を僅かに地面から浮かせ、超低空飛行で加速し。

勇夜は、足を地に踏み込み、アスファルトに罅を入れながらシグナムに向け疾走。

「ハアアアアア——!!」

「デアアアアア——!!」

二人の間には、12メートルの距離が開いていたが、秒数を片手で内に間合いを詰め、勇夜は零牙を抜刀、シグナムは袈裟がけにレヴァンティンを振るった。

直剣と曲刀、二つの刃がぶつかり合う。

その後、剣士たちは上手く体の軌道を変えながら、擦れ違い、切り抜けた。

だが剣裁の舞は、そこで終わらない。

二人は振り返ると、間髪いれず、同時に斬りつけてきた。逆袈裟、胴薙ぎ、切り上げ。

余りの早業、両者とも、剣の軌道を常人に全く悟らせないまでのスピードで、相棒たるデバイスの剣を振るう。

それから数合、刃同士の撃ち合いが続き、剣が交わされる度に火花が舞い、足が踏み込まれる度に、アスファルトは彼らの脚力によって、表皮が粉々に砕け散っていく。

カキン、と幾度も金属音が大気を震わせる。

剣裁は、動から静へ、鏢迫り合いによる膠着状態に移行される。

鋭く洗練され、底冷えさせられる鋭利さと、肌を焼き焦がすような熱さが内胞された殺気を放ちながら、刀身を突きつける両者。

再び状況は動へ。

先に動いたのは勇夜。

一端剣を僅かに引き、バランスを崩させてシグナムの体勢を不安定にさせつつ、同時に右足を下段に横合いから蹴り付けることで、完全に崩そうとする。

すんでのところ、シグナムは飛行魔法で後退し、彼の蹴りは虚空を掠めるに終わった。

チャンスは逃さぬとばかり、今度はシグナムが攻勢に転じる。

直刀の大剣を、振りかぶりながら勇夜に肉薄し、上段の一閃をスタートに踏み込み、前進しつつ連続して、斬撃を繰り出していく。

勇夜は、摺り足で身を引きながら、レヴァンティンの軌道を読みつつ、衝撃を上手く緩和させながら受け流したり、少しタイミングが遅ければ流血確実な、ギリギリの間で回避していく。

左からの切り上げを、避けると同時に一回転からの右足正面蹴りをカウンターで見舞わせた。

その一撃にシグナムは、咄嗟に本体の格納領域に納めてあつた鞘を召喚させて防御。

斜線の剣劇と鞘の防御の次は、直線の突きがシグナムから勇夜に迫る。

しかし勇夜は身を横に逸らしてかわし、レヴァンティンの間合い内

に入り込みと、左腕で彼女の下腹に肘打ちを披露した。

痛みに呻く時間も与えずに、続いて手の甲で鳩尾、頬の順で殴り付け、摺り足で後ろに下がりつつ、右腕の零牙による剣撃を放とうとする——が、その前に魔力を相乗して突きだされたレヴァンティンの鞘が勇夜の右胸に直撃。

すぐさまシグナムは続いてすらりとした白磁の足先を相手の腹部に蹴り付けた。

反射的に跳躍しながら後退し着地する勇夜。

どうにか軽減はできたが、ダメージそのものは避けられなかったため、胸を抑えている。

痛みを受けたのは彼女の方も同じで、先の肘打ちが当たった腹部を抑えられ、凜と整った容貌の頬には痣ができていた。

「女相手でも、殴るとはな…」

「いちいち気にする玉じゃないだろ？ あんたの場合」「当然だ」

戦闘の合間、少し言葉を交わされているが、ここで休止も隙を与える思考も二人には無く。

シグナムは、アスファルトにベルカ式の魔法陣を敷きながら、レヴァンティンの刀身が炎を纏い。

対して勇夜は零牙の切っ先を右半身側背後に向けた下段で構えながら、ウルトラ念力で周りの大気を刃に掻き集めていく。

「炎光牙（えんこうが）！」

「バーストストーム！」

虚空を切り裂く両者。

レヴァンティンからは、焰の大玉が、零牙からは風の衝撃波が解き放たれた。

今勇夜が、シグナムの火属性の魔法に対抗して見せたこの技は、以前クラナガンの廃棄都市区画で彼と戦ったツルク星人が披露したソニックブーム、別名かまいたちを元に、独自に発展させて作り上げたのが斬撃技である。

念力で大気密度を上げることで、破壊力を自在に調整が可能してい

る代物だ。

火炎弾とは、真つ向から正面衝突。

互いの攻撃の勢いは相殺されたが、圧縮された空気の群れに帯びる高密度の酸素が火球に触れたために燃焼の勢いを極度に強めて炎は急激に膨張し、バツクドラフト現象に酷似した大爆発が起きた。

その火炎の巨獣によって、周りのビルの地上に近い階層の窓が、バラバラに四散する。

その爆煙とガラスの欠片の群れの合間から、シグナムが突進、真横から薙ぎ斬ろうとするが、勇夜は高く跳躍して免れた。

10メートル近くまで身を180度半回転し、零牙を上段に添えながら飛び上がり、シグナムの背後をとる形で、眼下の彼女に向けて落下しながら一気に振り下ろす。

それを彼女は素早く振り替えながら、レヴァンティン本体と鞘をエックス字に交差させて受け止める。

刃同士の衝突音が、夜の国道に残響された。

しばしの押し合いの後、シグナムは零牙を振り払い、勇夜の下腹部にひざ蹴りを見舞い隙を作ると、斜線を描きながら飛翔、地表から80メートルの地点で滞空状態をとった。

勇夜は地上から、シグナムは空中から互いに眼光をぶつけ合いながら、ミッドの円形型、ベルカの三角型の魔法陣が敷かれ。

「レヴァンティン！カートリッジロード！」

『Jawohl（ヤヴォール）』

ベルカ語とドイツ語で、『了承、承諾、承知、了解』等を意味する、実直にしてクールなマスターとは対照的なハイテンションで応じる愛剣のレヴァンティン。

「リンクー！ベータカートリッジを！」

『了解しました』

レヴァンティンに装填された弾丸から魔力を供給、排莖装置の力バーがスライドして葉莖が排出され、メラメラと刃に火炎が舞い上がり。

零牙からも、青緑色の魔力光が渦を巻いて、刀身を包み込んでいく。

さらに勇夜の指示でリンクから粒子が溢れ、彼の左手の掌の中で実体化。

光の巨人、ウルトラマンと、その相棒によって生まれたUSB型次世代タイプ。

『ベータカートリッジ』

勇夜はそれを、零牙の柄頭——持ち手の端にに備え付けられた差し込み口に装填。

「ロードカートリッジ！」

罫に備えられた発光体が点灯して、問題無く零牙とカートリッジにエネルギーパイプが繋がったことが示される。

さらに柄に取りつけられたトリガーを人差し指で押すことで、大量の魔力がカートリッジから零牙本体に送りこまれ、その恩恵を受けたことで、刀身を覆う魔力が大型化、光の勢いが嵐を吹きあらすかのよう飛躍的に増していく。

「オーラ——」

「紫電（しでん）——」

魔法の発動させる方法は三種類ある。

特定の単一の語句を発する『コマンド』。

大規模型、儀式型の魔法の発動の際に、定められた長文を唱える『詠唱』。

そしてもう一つ、武器タイプのデバイスが多いベルカ式で特に使用率が高い、特定の動作を行うことで発動する《アクショントリガー》という行使方法がある。

ウルトラマンで言えば、彼らにとって基本にして十八番な必殺光線——《スペシウム光線》を使用する際、両の掌を伸ばした状態で、右腕を縦に、左腕を横に、十字になるように交差させて発射するのと、同じ要領だ。

ならばなぜ？ この二人は動作を行うだけで行使できるアクショントリガータイプの魔法を使おうとしているにも拘わらず、わざわざ技の名称を口に出しているのか？

それは、魔法のとある特性によるものだ。

この次元世界での魔法には、精密機械を扱うに等しい繊細なコントロール技能だけでなく、強靱な意志の強さも求められる。

意志——— 想いが強ければ強いほど、魔法行使の成功率も、攻撃魔法なら、技そのものの威力も跳ね上げることが可能だった。

己の集中力を高め研ぎ澄まし、さらに技の名称を大きく声にして発して、意志（おもい）の強さを底上げさせることによって、魔法もより強大なパワーが発揮される。

現に、二人の声が引き金となつて、刀身に宿る魔力たちがさらに活動を活性化させていた。

そして——— 前振りの溜めは、ここで終わりを告げる。

シグナムは、レヴァンティンを横合いに構え、地表に立つ勇夜に向かい急降下。

勇夜は、零牙を上段に添えながら脚に渾身の力を込め、アスファルトの破片を舞い上がらせながら、上空のシグナムへと跳躍。

どちらも、一般の人には輪郭がはつきりと合わせなれないまでのスピードで宙を舞っていた。

両者の距離が、凄まじい速度で縮まり、10メートルを切り、さらに5メートルを下回った瞬間。

「——— セイバアアアアアア——— !!!」

「——— 閃!!!」

同時に両人から、閃く斬撃が振われ、舞い踊り、真上からの光刃（こうじん）と、横薙ぎからの炎刃（こうじん）が、激突。

暴れ狂う青緑と深紅の魔力たちが、打ち勝つのは自分だとばかり、光を 迸らせながらせめぎ合う。

やがて魔力と刃がぶつかり合つてできた、スパークの光が、超速、急激に登強まっていく。

次の瞬間。

先の爆発よりもさらに大規模で、刃を打ち合っていた剣士たちを飲み込んでしまうほどの巨大な閃光が、衝撃と一緒に広範囲に飛び、宵闇の海鳴のビル群を照らし出し、荒波と化した膨大な大気の高圧力によって、先刻よりもさらに大量のビルのガラスが砕け散り、コンク



リートジャングルの中を、桜の花びらの如く飛び散らしてく。  
ハイスピードのスロー撮影でなら、それはそれで、見る者を圧倒させてしまう、美しい光景がそこにはあった。

「中々の見物だな……」

勇夜とシグナムの二人による剣舞を含めた結果内での戦闘を、観客気取りに静観している男がいる。

部屋は彼の無機質なルーム。

先日、鉄槌の騎士ヴィータになり済まし、勇夜と夜の都市区画で追跡戦を展開したフェイカーに脱出ルートを指示。

また彼に、F計画の技術で生成されたクローンのレイビーク星人たちとツルク星人を差し向けた張本人。

勇夜―ゼロたちとヴォルケンリッターの戦いは、観戦しているこの男でも、それなりに心躍らせる代物であった。

ただし、男が浮かぶ笑みは、自分の敷いたレールをひた走る、彼からは道化も同然な、『ベルカの使い手』たちをあざ笑う歪んだ感情によつて、大半を占めていた。

「とは言え……流石にこの場を道化なあやつらだけに賄わせるには負担が大きいだらう」

ここは、自らの『傀儡』たちを助力役として差し出さねばなるまいて。

そう……ようやく力の片鱗を取り戻しつつある、全知全能の支配者たる己の力と、この体に宿る技術力、そしてこの世界の文明の力によつて為しえ、完成することができた結晶体と表せる下僕たち。

今こそ……表舞台に出す時だ。

さて……やつらは我が下僕を前にどのような反応を起こすかな、全くもって楽しみだ。

男の邪悪な微笑は、さらに歪みを増して、不気味な様相を呈していった。

つづく。

アスファルトが敷かれた地上の海鳴からは約1000メートル上空な夜天に、雲を切り裂かんとするばかりに空を駆ける光点二つ。

一つは、オレンジ、もう一つは黄緑の色を宿している。

光点の正体は、高町光一リヒトこと、ミラーナイトの人間のりヒト・シユピーゲルとヴィータによる宙を掛ける追跡戦。

立ち位置的には、追われる方であるヴィータは速度を維持しながら、背後にびったりと追いかけている光に振り向いた。

「へっー。結局は、やる／＼んじゃねえかよ」

「そう言うあなた方は、端からその、やる気」しか無いでしょう」

ヴィータの挑発的な発言は、鏡の騎士の丁寧だが皮肉も混じった物言いであっさり投げ返された。

彼女の額に皺が走る。

イラつく……まただ……またこの気分苛まれた。

さっきの返しのを打ってきやがった、見た目がシグナムと、口調とか性格とかが自分と紅蓮に被ってる、*「魔導殺し」*とか呼ばれているらしいあの黒髪ポニテ漢女男野郎にもだけど、今追っかけてきやがる、口は丁寧なんだけど、慇懃無礼ともとれる減らず口叩いてくるこの優男にもだ。

ヴィータの戦いには、いつも相手だけでなく、己から溢れる苛立ちとも戦わなければならぬ事態が、度々起きていた。

ノイズとも称すべきか……戦場に出ると、彼女の耳には正体不明の不快な音がじわりと流れ、響いてくる。

悲鳴にも聞こえるし、アナログテレビの砂嵐にも聞こえるし、弦楽器の弦をカミソリで弾いたような感じ……とも言える。

ようは全く分からない……正体が分からないことぐらいなことと、一度響くと本来の意味で鳥肌が立ち、ストレスが積み重なっていくことしか、判っていない。

昔からも、そして今だって、慎ましくも、確実に聞き取れる音量で、  
“ソレ”は彼女の心を逆撫でさせる。

ソレに対し、一番効果があるのは、苛立ちを無理やり戦う力に変えて、敵を駆逐することだった。

ただ昔と今とで異なる点もある。

“ソレ”と違い正体はつきりしている苛立ちもあるということ。分かってる……分かってるんだよ……自分たちがこうして追われて当然のご身分だつてことくらい。

命まで奪つてないとは言え、もう……どれくらい魔道師やら魔法生物やら、リンカーコア持つてる奴を襲ったか、数えるのを断念させられるくらい、手を汚してきた。

戦場では、お互い殺し合いの場に参上し、生きるか死ぬか、常にその瀬戸際に立たされながら戦っている身であることを受け入れ、死んでも文句は無しと暗黙の了解があつたから、言い訳はどうかたつた。

生きたければ、敵たる相手より先に相手を殺る……でなきや即あの世行き。

道徳やら倫理なんてのは、平和平穏平時な時世の時からこそ機能し、人々にその大切さを教え説き、守ろうと努めることができる。

殺気と血の匂いに塗れた戦場では、そんなもの一ミリたりとも入りこむ隙間は無いし、紙切れにすらならない無価値な代物になる。

だけど、現代では、それらが確たる価値を以て通用される平時な時代。

そして自分たちは、相手に戦う覚悟すら決める時間さえ与えずに、手を掛けてしまった。

兵士たちにとって、超えてはいけない領域……境界線に、踏み込んでしまった。

それと、その領域の先を走ることですつけられることで、心身を傷つける生き地獄があることを、久遠は……自分の身で示してくれた。

そいつの名は……罪悪感だ。

はやてと、紅蓮と、久遠と一緒に暮らしていくうちに、戦いしか知

らなかった、人の姿を借りただけの戦闘マシン同然だった自分たちは、感情（こころ）つてやつを手にした——それが罪悪感……戦場では、あの場の暗黙の了解と言う名のルールで誤魔化してきた……されてきた、感情の一端。

悪行を重ねる度に、心を切り裂いていく、己が己に、自ら課す罰。当人から名乗り上げてきたとは言え、久遠のリンカーコアから、魔力が貪り取られる様を目にした時、どうしようも無く胸が軋みを上げて、痛んできやがった。

同時に……自分たちはこれから先、何度もこんな、体にまで響いてくる精神の痛みを味わうことになる、思い知らされた。

お陰で、腹はある程度括って耐性が付いたけど、良心の悲鳴は、蒐集される度に絶叫してきやがった。

だから、今ここでイラつくのは、逆ギレよりもっと酷いことなんだってことも、悪党なのは自分（あたし）たちの方なんだってことも、自覚はしてる。

けど……それでもだ。

ヴィータが指先に魔力で編み、実体化させた鉄球を複数召喚する。

「ちっ……いつまでも——」

『Schwalbe fliegen』

やっぱり、目的を邪魔する障害（あいて）が現れるってのは、良い気がしない。

そう感じてしまう自分には、もっと良い気がしない。

あの「ノイズ」が、それを助長させていく。

「——減らず口叩けると思うなあああ——！」

結局、堂々巡りにイラつきを絶叫で表現する、昔からの悪癖をまた繰り返して、自分を誑かすしか、胸のしこりをどうにかする手は無かった。

一時的に誤魔化すだけで、それそのものが消えてくれるわけがない………というのだ。

「このおとおお——！！！！」

喉に溜まった水分を全て枯らさんとばかり、雄叫びを上げながらグ

ラーフアイゼンで鉄球に魔力と衝撃を撃ちこみ、合計12球、一回に4球ずつまとめて飛ばすヴィータ。

それぞれ独自の軌道を描いて、追う側の光へと迫り飛んで行く。

対する光は、腰に付けられた二振りの小太刀——シルバーライトを抜き。

「へアア！」

絶妙なタイミングで、通常の刀より間合いが短いライトで、横、真上、真下、背後と、あらゆる方角から肉薄し、攻撃有効範囲に入った鉄球たちを切り裂き、鉄球は次々に、残留魔力の塵と化していった。

刀身を魔力で強化せず、純粹に彼の剣技によるものである。

元々騎士の身で、剣を嗜み、地球に迷い込む前々から二刀での使用を好んでいた光（リヒト）だったので、小太刀二刀がメインな御神流との相性は、良好を通り越して最高であった。

けれども、御神の剣士にとっては、この場合は良好な環境とは言い難い。

御神流は要人警護、人を護る為に振るわれ、受け継がれた剣術の流派で、誰かを守る状況にこそ、技術的な面ではなく、精神的な面で、全力を発揮できる剣であるのだ。

今は対峙する相手と、共に戦いに赴く同士しかおらず、特に彼が守る力を押し上げる存在である愛妹（いもうと）のなのはは、特訓という事情上、結界（ここ）にはいない。

先の光の発言であった『気負い』とは、なのはがいない——守りながら戦う状況ではない意味で発したのである。

ただ、守る対象は今もちゃんと存在する。

蒐集対象の人々も然り、闇の書が起動し、過去の記録や、ウルトラマンノアの闇の書との死闘を繰り広げたという記憶から、覚醒時に起きるであろう災害を阻止し、人々にその煽りを受けぬように、未来に控え、待ち構える危機から救わねばならないからだ。

『T・dlichshlag』

「テートリヒ——シユラアアアアア——クウ！」

12個の魔力球を全て切り落とした光に、幼く華奢な身に反し、心

の内から激しくたぎる意志が籠められた鉄槌の一撃が光へと迫りくる。

『Refract circle』

雄叫びをあげて得物を振るってくる相手に反し、光は努めて涼しげな趣のまま、半透明で乳白色なドーム状の盾を形成させた。

その選択をヴィータはミスだと心中思った。

自分とアイゼンにとって、*盾* など気休めな小細工、そんなもの、ガラス破片みたいにバラバラにぶつ潰してやる。

遠心力と魔力が上乘せされた金属製の鉄槌の頭部が光の盾に触れた。

瞬間、ヴィータにとって信じがたい事態が起きる。

アイゼンの先端が盾に当たったと同時に、衝撃を与える側の筈の自分の体に衝撃が走り、逆に彼女が突き飛ばされる格好となった。

何が起きた？ 相手はただ受けただけ……なのにどうして痛みが自分に牙を向いたのだ？

この時の彼女には理解し難いものであったが、きちんとこれにはカラクリが在る。

リフレクトサークルと呼称された乳白色のバリアは、表面に何らかの接触を受けると、触れてきた対象に、バリアに溜められた魔力の圧力による衝撃を放出させる効果がある。

ただ受けるだけで、カウンターを繰り出せるとも言える防護魔法だった。

一見万能そうだが、弱点もある。盾としての強度は、それほど頑強ではなく、高威力の攻撃を受ければ呆気なく壊れてしまうし、特性上、近距離攻撃にしか効果を発揮できない。

が、そんな長短を知る由もないヴィータにとっては、未知なる不可解な現象、な扱いだ。

一方で、あの一瞬で察することができたこともある。

あの二刀剣士、自分の一撃を真正面からではなく、ハンマーの軌道を計算に入れた上で斜に構えて受けやがった。

転移魔法で現れた時から薄々感じてたけど、こいつは掛け値なしの





くそ！

口の中に金臭い苦味が溢れたヴィータは毒づく。

ラケーテンのアイゼンの打撃までいなされるなんて……あたしらから見れば魔導師や兵士の質が明らかに昔と低下したこの時代で、ここまで卓越した技量を持つてる野郎がいるなんて、現代の魔導師たちはみな「腑抜けで雑魚い」と思いこんでた自分が恨めしい。

けど、一回程度避けられたぐらいで！

ラケーテンフォルム時のアイゼンの三つあるバーニアは、それぞれ独立して動かすことができる。

ヴィータはその推進機の出力と、それを助力とした高速回転を維持したまま、三つの噴射口それぞれを可動させて軌道修正。

「そこだあああああー………!!!」

光のいる方角へと向きなおし、バーニアの出力も増加させて突貫を敢行した。

こればかりは避けられないと彼は悟ったのか、手に持つ二刀に呼び掛け。

「ライト！」

『Silver crystal』

×字に構えられたシルバークライトは、宝石と見違う多面体なクリスタル状のバリアで、彼を包み込んだ。

完全にクリスタルが光を覆った瞬間、アイゼンのスパイクが着弾する。

火花と摩擦熱を迸らせ、稲妻の光を散らし、バーニアを吹かして、半透明の壁を貫こうとするアイゼンと、主には通さぬとばかりに打撃を阻み、耐えるシルバークライトと、顔色を変えずに防御を続ける光。

「固え……」

今まで破られたことがなかったなのはとレイジングハートの魔法障壁を、簡単に打ち壊したヴィータにとっては、今度こそ決定打にすべく撃ち込んだ一撃必殺の突撃であったが、予想以上の光たちによるバリアの強度に、攻めあぐねていた。

既

にシルバーライトには、左手用の一振りに取り付けられた差し込み口に、ベータカートリッジを装填済み。

従来の弾丸型よりも、多量の魔力を詰め込まれた長方形のバッテリー型のベータカートリッジ。

そのバックアップを受けたシルバーライトは、今まで多くの戦士たちを屠ってきた鉄槌の剛力な一撃を防いでしまっていた。

シルバーライトが、この頑強な盾を張れるのは、主の力量によるものでもあるのも含めてだ。

血縁は無く、魔法による戦闘属性も、近接スピード型と遠距離砲撃パワー型と異なる高町家の三男坊と末っ子兄妹だが、一つだけ確たる共通点が在る。

防御能力の高さ。

なのはは砲撃タイプを特性を生かす為、防御で固めた固定砲台というスタイルとなっていていき、光もその細い体躯と裏腹に、バリアでの防御力はウルティメイトフォースゼロの中でトップに位置していた。

なお且つ光——ミラーナイトは要塞の攻撃からエスメラルダの王城を守りきったことさえある。

違いが多いようで、実はこのような相似点があるのが、この高町兄妹のお二人であった。

兄であり、剣士にして騎士である彼の鉄壁の前に、出し惜しみはできないと悟ったヴィータは、さらに二発、カートリッジロードして排莖、魔力をアイゼンに込め、トリプルスラスタの出力を上げた。

噴射口からの魔力エネルギーの放射が段違いに肥大化、バリアを押し込む圧力も激増されていく。

彼女らの底意地に根負けしてしまったのか、とうとうバリア全体に罅が走り、爆発すると同時に砕け散った。

煙幕でヴィータは視界不全となり、相手を一時見失う。

くそ、バリアを破るのに、パワーを込め過ぎちゃった。

今日の蒐集で、カートリッジの数も残り少ないってのに、ザマあねえ……アイゼンを周囲に振り、爆煙を散らして光がどこへ飛ばされて

いったか探す。

ふと、表面に不自然な大穴が開いたオフィスビルを見つけた。

距離からみて、あの二刀剣士が突っ込んだことでできた爪痕と見ていいだろう。

その時、あるデジャブが過る。

あの真つ白な騎士甲冑を着ていた……見た目なら自分より歳が上なあの女の子の姿、それを思い出した途端、口内の唾液が急に苦くなった。

不意打ちかますだけでも、気分が悪くなるのに、あの少女を襲ったことが切っ掛けで、管理局に自分たちの存在を衆目に晒してしまう失態を、あの夜犯してしまった。

あんまへマが無きや、まだ当分は『謎の魔導師連続通り魔事件』と見なされたまま、今日みたいに待ち伏せされることも無かった。

もう……これ以上のミスはできない。

今日は不作だったんだ……はやての為に、悪いがその魔力、頂たいてもらおうからな。

件のビルへ、ヴィータは加速して翔けていった。

一連の流れが、相手の策だということにも気づかずに。

空中にて、ザフィーラの黒めな拳と、アルフの透明感のある色白な拳が、正対に激突すし、拳に込められた魔力と魔力が反発し光を放つ。使い魔と守護獣、言い方は違えど、主を全力で守り抜く使命を帯びる狼が素体な両名は、海鳴市街の別の一角で肉弾戦を繰り広げていた。

真つ向から押し合っていた拳同士は、魔力衝突による衝撃と閃光で離れる。

すかさずザフィーラはアルフ接近、血管が浮き出すまでに筋肉に固められた剛腕による鉄拳を連続で突き出した。

魔法による攻撃力は、シグナムとヴィータに譲るザフィーラだが、肉体そのものの身体能力は騎士たちの中で一番高い。

一見すれと、ただの女性ではその豪胆な肉体を前に勝ち目はなさそうであった。

しかしだ。その『ただの』から程遠いアルフの場合、前述の偏見は大きな間違いである。

彼女は平らかな両手を、その勝気な容姿とはギャップを感じさせられてしまう手つきで拳による打撃の破壊力を流して無効化させていく。

今彼女が行ったのは。地球の武術にも宇宙拳法にもある、『化勁（かけい）』という、相手の攻撃による衝撃力を力を抜いた身で巧みに吸収、力の流動と進行を変えて無力にする技術。

その手さばきは、風に舞う布地のように柔らかで、慎ましいまでの美を醸し出していた。

さらに、今まで手で回避行動をとっていたアルフは、ザフィーラの右腕からの正拳に対し、1、2歩ほど両者の距離を空けながら、足好きな男には堪らない、太すぎず細すぎない、調和のとれた弾力性を持つ両足を上げ、彼の剛腕を下腿で挟み込んだ。

「何!？」

平時も戦闘時も冷静で口数が少ないザフィーラも、これには驚きを隠せない。

手では無く、脚——FOOTによる白羽取り。

その状態を維持したまま、アルフは縦に宙返りして数回回転、その後ろにそびえ立つビルの一角に向け投げ飛ばし。

「くっらいなあああ!!」

使い魔の彼女はさらに、身を横回転させ、駄目押しとばかりに、体勢を崩されたザフィーラのボディにドロップキックを見舞い、守護獣は外壁へと飛ばされた。

全身から、魔力を吹かし、その推進力で勢いを減速させて、外壁に足を着かせる。

ビルに重力があると錯覚させられそうになるほど、ザフィーラはガ

ラスに直立させていた。

かの芸当は、体の周りに魔力フィールドを張ることで、擬似的に重力を発生させたことで成し得た壁立ちである。

彼に向け、飛行で砲弾となったアルフから、ストレートキックが迫る。

縦に並べた両腕でそれをブロックして弾くザフィーラ。

アルフは今の蹴りを弾かれながらも、縦回転して相手方の背後に回り右足を叩きつけ、その際起きた運動エネルギーで距離を開き、彼と同様の手法で壁面に着地、間を置かずザフィーラに向かいひた走った。

「列鋼牙ア!!」

右腕から突き出された魔力の弾頭が迫りくるが、物怖じせずむしろ走力を上げ、ギリギリ霞みそうになる瀬戸際で、スランディングして事なきを得た。

そのままビルのガラスの上を滑走させてザフィーラに近づき、その体勢のまま右脇腹に蹴りつけ、足を押し上げ投げ飛ばした。

ザフィーラは一旦宙に舞いながら降り立つが、そこへアルフの足技が畳みかける。

回し、膝蹴り、足払い、ストレート連打、体を前かがみさせての上段からの踵蹴りに派生の逆立ち回転撃、狼の俊敏性をフルに発揮させた変幻自在にしてキレのある脚の円舞。

いずれもどうか両腕と持ち前の防御魔法で防ぎ、顔に迫る右足を掴んでそのまま背負い投げ、叩きつけ、それを数度反復させた。

亀裂が走る窓、実は二人は完全に窓に足を付けているわけではなく、ガラスの地面から僅かな高さで力場を作って浮き立っている。

これによって、ビルへの被害は幾分か抑えられていた。

横たわった使い魔に拳を突く守護獣、それはアルフが横のまま横転して空振りとなり、立ち上がったところを中段から蹴りつけるが、後ろに仰け反ったことで避けられ、その姿勢からの返しのサマーソルトを受けられた。

サマーソルトは観客へのパフォーマンスとして使われる見せ技で、

本来試合向きでも実戦向きでも無いのだが、元が俊敏性に長けた狼である強みとウルトラマンたちによって鍛えられた肉体で、実戦でも扱える技に昇華させていた。

後転して降り立ち、足技の舞から転じて左腕のストレートを撃ちこむアルフ。

状況反射で顔面と胸部を、腕の筋肉の鎧でガードを掛けるザフィーラ。

が、次に来たのは、腕に来る衝撃では無く、鳩尾に走った圧迫感だった。

あの左ストレートは四、フェイント。

本命は、右腕と手のひらからの掌底（しようてい）。

ザフィーラは間一髪、魔力障壁を張れたが、今の強攻（きようこう）で後方に飛ばされていく。

両の足をしっかりと地に押しあて、窓ガラスを擦り切り、扶らせながらも勢いを止めた。

アルフを見据えつつ、手を握り拳にした「剛」の構えをとる。

彼女も同様、しかしファイティングポーズは、左腕を腰に、右腕を掌が相手に見える形で伸ばす……ウルトラマン譲りのものであった。

ここまで体技に秀でているとは思わなかったな………相も変わらずポーカーフェイスなザフィーラであったが、内心アルフの戦闘能力に舌を巻いていた。

魔導生命体としての身体能力の高さ、と言う名のアドバンテージを常に最良のコンディションに発揮できるよう日頃心身を鍛えているだけでない、体術に優れた者から、日々厳しく叩きこまれたのだろう。

純粋な己（おの）が肉体のみでの肉弾戦の技量ならば、完全に彼女の方が上手だ。

悔しさは無い、客観的に分析した上で、それが純然たる事実だと悟っただけのこと。

とは言え……あの構え、どこかで見覚えがあるのだが、いつどこで

だったか？

注意深く観察して行くうちに、ある人物のイメージと使い魔の少女が重なった。

主の大切な兄君、紅蓮とかつて、様々世界を渡り歩いていた仲間（とも）の一人、ウルトラマン……ゼロ、情報元は、シグナムのレヴアンテインが記録していた映像。

そうか、あやつのはウルトラマンゼロであったのか、身一つでシグナムと渡り合える武人な彼だ、彼の指南を受けたのならば、あれほどの強さも納得できる。

だが、それでも尚、自分はここで打ちのめされるわけにはいかない。我は守護獣、主と同胞の盾となる守りし者。

そんな自分が、先に倒れるようなことは、あつてはならないのだ。でなければ、誰が主たちを災厄から、守り通せるのだ。

己が盾になるからこそ、シグナムたちは己が領分の戦いを全力で行えるのだ。

是が非でも、この障害は切り抜ける。守護獣としてだ。

一方守護獣と面するアルフも、彼に舌を巻かされていた。

なんてタフガイな野郎なんだよ。

攻勢のベクトルが向いてるのはあたしで、何発かあいつの体に当てられてはいるけど、相手は澄まし顔をずっとキープしてるとききた。

確かあいつの二つ名の守護獣って、主様含めた味方全員を護る意味で、昔のベルカの時代に付けられたんだっけ？ あたしから見りゃ、使い魔とどっちもどっちな気がしないでもない。そもそもベルカでもこいつを除けば半獣半人の魔導生命体は『使い魔』と呼ばれてたぞうだし。

けど、肩書きに『盾』と『守護』って付くだけあって、防御は神技レベルで感服させられるよ。

いくら殴るなり蹴ったりしても、障壁と真つ黒でタフな体で、ほと

んど全部の攻撃を受け止めてしまうしき。

ただな、野郎がタフガイなことに文句も異論も無い。

容易く自分に打ち負かされるんじや、フェイトなのは、管理局だつて今まで苦労して手を焼かないつて、それこそクロノの親父さんだつて……死ぬこともなかっただろうしき。

それと、こうしてやり合つて解つたけど、勇夜たちの言う通り、主の知らないとこでこっそり独断やつてる線は、妥当かもしれない。

顔つきにしろ、手つきにしろ、嫌々やつてる感は微塵も感じられないというか、ちよつと前のフェイトみたいに、ある問題があいつらを追いこんで、それしか方法が無いんだ……つて言い聞かせている気がするのだ。

ほんと……何があつたつて言うんだろ？ やっぱり光の仮説である……主の身に医学じや直せない何かが起きたのだろうか？

10月に入るちよつと前に……蒐集も強いられず、勇夜の友達と、あのX—MENのストームばりの狐ツ子と、そしてきつと包容力のある優しいやつな主さんと、平穩に暮らしていたはずだつてのに。さっきの、勇夜と光とのやり取りを聞いても、話をとり合う余裕を持ってないのは明白。

だつたら、意地でもとつちめて聞き出して、そんで光の仮説通りなら……徹底的に阻んでやる！

フェイトが辿ることになるかもしれないなかつた、生涯消えない後悔を背負つて、一生を不意にする結末なんぎ、もう御免だ。

悪いけど、あたしから見りや、あんたらは勇夜が前に言った――

“血を吐きながら続ける……悲しいマラソン”――つて呼ぶのも同然なんだからな！

そうして二人の魔導生命体は、改めて決意を秘めて、再戦のスタートの火蓋が切られた。



ビルに開けられた空洞の内部に入った瞬間……ヴィータにまたデジャヴが過ぎってきた。

奇しくも、あの夜と同じ、昼間はサラリーマンがせつせと汗水流して働いてるオフィスの一室だ。

二刀剣士が中に突っ込んできたせいで、ここは結界で実際は明日も問題無くデスクワークできる環境下が維持されているが、この場においては見える影も無い。

机やら、椅子やら、パソコンやら棚やら、書類やら観葉植物やら、ともかく色んな物体どもが辺り一面に散らばって、整頓から程遠く。

埃も部屋中に山積して、騎士甲冑の魔力フィールドが無いと、目と鼻、口に悪影響を確実に出させる有様だ。

そんなことより、二刀流の優男だ。

ビルに向かってる間は、中からあいつの魔力を確かに感じた。

はずなのに、侵入した途端、気配は一切消えてしまった。

いくら集中して、周りを見回って探しても、人っ子一人の存在の欠片も無い。

完全に、人気が無い建物とかの場所に入りこんだ時と、同じ感覚に見舞われていた。

もうここにはいないかもしれない。

何十回もあるビルなのだ。

他の階に逃げて、転移したのかも……いや……それなら自分の身が魔力に反応してくるはずだ。

くそ……こんな広い建物の中を探し回るなんて、とてもやる気にならない。

一端……ここから出るか——不意に突き刺すように迫る、戦場ではどこもかしもく感じさせられた殺気、わずその場を屈んだ。

自分の頭上に、何かが飛来し、通り過ぎる。

その何かを確認する間もなく、押し寄せる殺気の第二波を前に、アイゼンの柄で、プレッシャーとセットで来やがった短めの刀——小太刀の一閃を防いだ。

「てめえ、どこにいやがった!？」

「どこに……私はずっとこのオフィスに居ましたよ」

まさかの返答内容を答えながら、両手に持った小太刀でヴィータに斬りつけていく光、愛機とシールドで、防戦するしかないヴィータ。剣筋が速い上、刀身に魔力やらのエネルギーを込めずに斬りかかってくる為、どうしても反応が遅れてしまう。

今までは大概、魔道師と戦う機会が多かった。中にはそうでない兵士とも相まみえたことも、あったが、そう言う奴らは取るに足らない雑魚だった。

だから、魔法か魔力を使った攻撃には人一倍過敏になるが、今相手にしている奴のような、魔法を依らない攻撃への対処に手間取ってしまう魔導師特有の弱点を、彼女もまた結果として有してしまっていた。

剣撃の合い間に炸裂される中段前蹴りが、アイゼンの防御をすり抜けて胸部に命中し、ヴィータは痛みには呻きながら、飛行で身を退かせた。

ずっと……このフロアに隠れてただって？ 嘘だろ？ だって、さっきまで何も感じられなかったのに、どんな手品を使いやがったんだ？

無論、光の言う通り先程まで存在感を消し、奇襲を仕掛けた曲芸には、ちゃんと種も仕掛けもあった。

あくまで人を護る為に使われ、伝承されてきた御神真刀流だが、実は暗殺術の一面を持っている。

暗殺に最も必要とされる技能とは、気配を押し殺し、相手に気づかずに手を下すこと。

よって、御神の剣技を極めた者は、これは戦う技術を持った者全てに言えるが、視覚に頼ることなく、気配だけで人の存在を感知、特定でき、さらに完全に自分は存在しないと、相手に錯覚させる。

“気配遮断——その名を遮気（しやくき）”

御神ではそう呼称される曲技も、剣士たちは造作無く扱うことができた。

久遠でも、魔力を消費しなければならぬ技を、御神の剣士は魔導

に頼らずとも身に付けているのである。

ちなみにだが、光が斬りかかる前にヴィータを襲った物体とは、飛針（ひしん）と呼ばれるクナイに酷似した御神の剣士が使う小型ナイフである。

そんなことを知る術もないヴィータは御神の術に惑わされる一方だった。

ただ、ここで戦い続けるのは不味いと、直感で察し、外に出るべく、夜空が見え、月光を通す空洞に向かって飛翔した。

だが、フロアーと外部との境界に差し掛かる寸前、彼女は嫌な感覚に襲われ、咄嗟に制動を掛けて静止。

「なんだよ……これ？」

目の前に、壁があった。

それも、ガラスみたいに半透明で、穴どころか窓全体に、びつしりと張り巡らされていた。

その正体は、光によって生成された、ガラス状の魔力内壁。

こんなもん、さつさとアイゼンでぶち破りたいところなのだが。

「申し訳ありませんが、『鏡』を作るのは得意でしてね」

そんな暇とか時間なんて、彼が与えてくれるわけも無かった。

やろうものなら、即斬りかかって阻んでくるのは間違いない。

「暫くは、ここで戦ってもらいますよ」

しまった……こいつにまんまと誘い込まれた。

今で察した者もいるだろう。

光は最初から、この場にヴィータを誘い込むつもりで、ラケーテンハンマーでビル内に飛ばされたと見せかけたのだ。

言ってしまうと、ラケーテンハンマーを防ぎきることは、やろうと思えば可能であった。

その分、カートリッジの魔力消費という代償付きでだ。

ならば、こちらの魔力エネルギーを節約させつつ、逆に相手にカートリッジの連続消費を余儀なくさせ、相手には不利な、己なら十全に戦える空間に入りこませるべく、彼はさつきの大芝居を打ったというわけである。

こうなってしまうては、ヴィータの手札に残された打開案は一つ――  
―どうにか彼を打ち倒す、それしか残されていない、今の彼女の実状。  
「望むところだよおおおー……！」

フラストレーションに苛まれながら、光に挑む鉄槌の騎士。

こんなところで、負けられねえんだよ、今日もちやんと、はやてのいるあの家に、帰んなきゃなんないんだあ！

暗く、さつきまでオフィスだった閉鎖空間な戦場にて、鉄槌と小太刀がぶつかり合い。

断続的に得物同士の衝突による閃光を何度も煌めかせて、いくのであった。

つづく

## STAGE 27 — 激戦の裏側

### STAGE 27 — 激戦の裏側

一般人には不可視なドーム状の封時結界から、それほど距離が離れていないビルの上にて、人除けと、通行人からは自分が不可視となるフィールドを身の周りに張り、ドームを見上げる女性が一人居た。湖の騎士、またの二つ名を風の癒し手——シャマルである。

「(主は今どうなさっておられる?)」

「(すずかちゃんの家で彼女と遊んでいるわ、久遠ちゃんもボデイガードとして同行してる)」

並列思考——マルチタスクを活用しつつ、ベルカでは思念通話と呼ばれている念話で、アルフと戦う傍ら彼女に尋ねてきたザフィーラと交信をとっているシャマル。

「(状況は芳しくない、我らが応じている相手はいずれも難敵だ、この結界をどうにかできないか?)」

「(どうにかしたいけど……局員たちが中と外に別れて結界を維持してて、わたしの魔力じゃどうにも……)」

彼女は連絡をとりながら、内部にいる仲間たちの五感を借りて、現況を把握させていた。

ザフィーラの言う通り、シグナムら三人の相手をしている魔道師でもある剣士な日系の少年二人と、オレンジの髪をした使い魔ら三方はいずれも、自分たちにはここ何十年もお目にかかれなかった豪傑たちだ。

シグナムの相手をしている一人は、凜とした中性的な貌に鋭い吊り目、髪型がシグナムと似通っている黒こげ茶色のデニムジャケットを着た男の子。

### 「魔道殺しの勇夜」

噂に違わぬ……ひよっとしたらそれ以上かもしれない剣捌きと体捌きで、総合的な力量はヴォルケンリッターの中でトップな彼女と、互角の勝負を繰り広げ。

ヴィータちゃんと戦う一見すると穏和で社交性が良さそうな、白に

緑のラインが走ったジャケをファスナーを上まであげて着こなす、もう一人の二刀流の方の男の子は、ヴィータちゃんのカツとやりやすい直情的な性格を突いて、自分に有利なフィールドへと誘い込んでしまった。

ザフィーラの相手をしている使い魔の女の子に至っては、経験ではザフィーラが勝ってる分互角ではあるが。格闘技術なら盾の守護獣より上手ときた。

三人の視界を借りて見てみたが、全員ほぼ魔法による身体強化を施していないにも拘わらず、常識離れた身のこなしの速さで武器なり拳なりと攻撃を仕掛けてくる。

シャマルはどうか動きを捉えようとしたが、自分の動体視力では叶わぬ相談であつたとすぐさま思い知って、断念することにした。

理不尽だ……とほほ……使い魔の狼ちゃんはまだ良いけど、あの男の子たちは、どう見ても人間なのに、一応純然たる人間では無い自分より人間離れしているなんて。

それならまだ良い、一番ショックなのは見てくれすら、男なのに、相手は男なのに、特にあの黒髪ポニテ君に負けてる気がする。

だって……怖い目つきで誤魔化してるけど、体が女の子でも違和感は消し飛ばす美貌持ちだつてことが解つてしまうからだ。

一体何をすれば男らしさとがありつつも、あんなに髪も肌も綺麗に保てるのだろうか……理不尽だよ……こんな。

とシャマルは涙目になって独白した。

仮にも戦闘中だというのにちとズレた落ち込み様、気持ちは解らんでもないけれどもだ。

しかし、純然たる地球人でないのは、かの二人も同じだ。

今は単に、彼女が知らないだけである。

知れば、嫌でも受け入れる選択を採らせられることになろう。

他にも実は家事面で、シャマルを涙目にさせる現実がもう一つあるが、内緒にしておくのが賢明だ。

「(せめて、シグナムのファルケンか、ヴィータちゃんのギガント、久遠ちゃんの雷並の魔力を出せば……)」

「(シグナムとヴィータはあやつらの応戦に手が回らない、主を置いた状態で久遠を呼ぶわけにもいかんだろう、目的の読めない輩もいるかな)」

「(それは、そうなんだけど...)」

三人を転移魔法で脱出させたいが、対象者を閉じ込める為のプロテクトが掛けられており、解除するには時間が掛かり過ぎる。

周知の通り、騎士たちの主戦力のほとんどは勇夜たちを相手にしているの、結界破壊を行える余裕が無い。

外に転送させようにも、結界の強度と効果が強過ぎてそれも叶わず。

真つ向勝負には向かないシャマルでは、結界を維持する局員をどうにかすることもできない始末であった。

まだ自分があの時のように見つかつていないのが幸運だった。

残る手は、闇の書が完全覚醒した場合を除いて、破壊力なら最も高い久遠による広範囲攻撃だが、今迂闊にはやての許を離れて呼ぶには、躊躇せざるを得ない不確定要素があった。

それこそ、あの仮面の男と怪獣たちら、詳細不明のグループである。

「見ての通り、通りすがりの僧侶ですよ」

11月末の、管理局に存在を知られてしまったあの夜の日、シャマルは獅子の眼光を秘めた修行僧——おおとりゲンことウルトラマンレオに接触、見つけられてしまった。

「大丈夫です……一人で帰れますから」

「ならせめて、あなたが維持しているこの空間(けっかい)を解いてもらえますかな?」

「っ!?!」

修行僧のその一言で理解した。

この人は、自分を確保する為にこの場にいるのだということ。

「ごめんなさい……今は……どうしても」

「そうですか、仕方ありません、あどけない少女たちに暴力を振るった報いを受けてもらうとしましょう」

逃げなきや……少しでも……この人から離れなきや、でないよ。

多分……その先にあるのは……牢獄。

今はダメだ……はやてちゃんを、いつかは裁かれる身な自分たちだけど、せめて、はやてちゃんを、あの優しい主様を、自分たちが生み出した闇から救うまでは、絶対にそんな事態は避けなければならぬ。

だから一刻も早く、応戦するなり、牽制してここから逃げて隠れるなりしなければいけない。

頭では、そんな指令は何度も発している。

なのに、その指令を直ぐに実行せねばならない身体が、言うことを聞いてはくれない支障をきたしていた。

体が……修行僧からは逃れられない……太刀打ちできず敗北すると、諦めてしまっていたのだ。

今相手は、ただこちらを睨んでいる……だけだと言うのに。

なぜなら、その男の睨みから来る殺気は、今まで経験したことのない、研鑽された切れ味を持っていたのだから。

ゆつくりと、錫杖の音色を響かせながら、湖の騎士に近づいていく僧侶の姿をせし獅子。

シャマルは、何度も体にこの場から退散する指令を出す。

が、指示を受けた身は、小刻みに振動を繰り返すばかりで言うことを聞いてくれない。

自分では、この修行僧から逃れる手は一切無いと、ここで抵抗して痛い目を見るくらいなら、潔く彼に連行された方が賢明であると、身の方が使い手の箒の主に進言して来る始末だ。

仲間の助けも今は望めない。

お願い、言うこと聞いて……聞いてよ……ここで捕まったら、同じ騎士のみんなも、久遠ちゃんも、紅蓮君も、そしてはやてちゃんもただじゃ済まない。



何より……はやてちゃんに、やつと巡り会えた優しい主様に、恩を何も返してあげることすらできずに、死なせてしまう。

償いも、咎も、ちゃんと受ける覚悟はできてるから、お願い、今はここから立ち去らせてよ！

思わず目じりが濡れた瞳を閉じる。

その時——バアン！——と耳に、何かが衝突した音を捉えた。詳細を掴もうと、目を開けてみる。

その先には、さらなる闖入者がいた。

体格から見ても、見かけは20代前半の男性。

服装は、丈が短めな白いジャケットと青く長めの脚絆。

跳ねっ気がついた青味があった髪。

シャマルからは後ろ姿なので、全体像は見えないが、貌にピエロマスクによく似た白い仮面らしきものを付けていた。

闖入者たる謎の男は、修行僧に正拳を打ち込み、僧侶は錫杖の柄で受け止め鬨ぎ合っていたが、やがて双方とも跳躍して後退した。

「あの……あなたは？」

「蒐集を続ける、この男は俺が引き留めておく」

仮面の男の目的は、どうやらシャマルの逃走補助のようだ。

しかし、なぜ男は自分を助けようとしているのだろうか？

それも、わざわざ仮面を被って正体を隠す手間までしている。

少なくともシャマルの記憶には、この男は見覚えも聞き覚えもなかった。

逆に男の真意が気になって仕方がなかった気持ちであった。

自分たちは、どうあつても咎人と見なされる行為を繰り返している身だ。

殺さぬよう気をつけていると言っても、被害を受けた人々とその親しい人たちは、自分たちへの恨みつらみを日々募らせているはずなのだ。

共に暮らし、メリットなどを超えて助力できる紅蓮、久遠はともかく、見ず知らずの人間が騎士たちを助けるメリットなど、有り様もない。

とは言え、目の前に差し出された船に乗らない手は無かった。

仮面の男の意思は、読み込めず仕舞いなまま。

けど、今は彼の手助けに甘えてもらおう。

シャマルは飛行魔法で、その場から飛び去っていった。

残った修行僧と仮面の男の二方。

男は、構えをとって、動作でシャマルを追わせないと意志表明した。

相手の思惑を感じ取った僧侶も、錫杖を地に置き、彼の弟子、弟子

の想い人のパートナーである使い魔の少女に受け継がれていった。

かの宇宙拳法の構えを見せ、男と対峙するのであった。

仮面の男にとってそれは、思わぬ誤算であった。

あの結界の内部での戦闘においては、当初は静観を貫く姿勢をとる予定であった。

ベルカの騎士たるヴォルケンリッターならば、万が一敗北する事態は起こらないだろうとたかを括ってさえいた。

ところがだ。

今は別の次元に存在する故郷の星に帰っていたはずのウルトラマンゼロと仲間たちが、戦場に介入、戦況バランスは五分と五分になる。

おまけに湖の騎士が、ゼロの仲間らしき日本の僧侶の格好をした男に見つかり、眼力だけで彼女を追い詰めてしまった。

何をやっているのだ？

正直騎士と呼ぶには風上にも置けぬ我らの■な連中ではあるが、仮にもベルカの騎士の端くれであろう。

サポートが主な役目とは言え、それでも騎士なのかと情けなく感じてしまったが、自分たちの長年の計画の成就の為に、今確保される状況は避けなければならぬ。

即断即決。

僧侶がどの程度の実力かはまだ測り気味ではあるが、時間を稼い

で、ころ合いを見て自分も退避すれば良い。

しかし、誤算はこれだけで終わらなかつた。

己の特技たる地手空拳、体術を、惜しげも無く披露する仮面の男。体捌きだけ見ても、彼の体技を避けられる魔道師は、そうさらに存在しない。

魔導が繁栄した世界において、魔法に特化した片割れを持つ身にとって、何よりも誇れる得手であり、自分だけの得手吉であり、誇りであつたのだ。

それが、通じない。

今相對している男に、自分の攻撃が一度たりとも通らない。

焦燥の汗が、体中を巡り流れていく。

なぜ？ どうしてなのだ？

振り上げた拳が、胸部に当たつた僧侶の掌の一撃で勢いを失う。

ダメージを与えるつもりが、与えられる側に回された。

長い間……■■■■のサポート役として、何十年も長きに渡つて戦つてきたが、経験したことのない現実が道化に押し寄せてくる。

僧侶もまた、体術による戦法で応じている。

針のような鋭さを持った拳を難なく捌き、鉄槌よりも堅き蹴りはいとも簡単にかわされ、攻撃を外す回数がどんどん増加し積み重ねられていく。

「アエリヤー！」

僧侶に左腕を掴まれた。

と同時に、体に力が入らず、相手の為すがまま、投げつけられ、コンクリートの床板の冷たさを感じる前に、さらにすかさず投げ飛ばされた。

痛みに呻きながら起き上がると、僧侶の豪腕が連なって襲い来る。

男は拳撃を魔力障壁を施した両腕で受け止めていく。

「ぐう……」

が……なぜだ？

防護した……確かに防いだ……魔力の盾を纏つた上でだ。

なのになぜだ？ なにゆえ痛みが体の中を通り巡っていく。

最初は防ぐことはできていたが、次第に体内を貫く僧侶の打撃に押されていき、ついに指先からの突きが防御をすり抜け、鳩尾に直撃。「がはあー!」

鉛の弾丸が貫通したと思わせてしまう激痛に、一瞬意識が飛んだ。直ぐに覚醒はしたものの、その最大の要因は僧侶の追撃だ。

刀で切り付けるような滑らかさと鮮やかさで、袈裟がけからの一之太刀、逆胴からの二之太刀による手刀の後、左足による下腹部への膝撃ち、右足からの連続にして撃ち込まれる下段からの前蹴り。

そしてジャンプの勢いを相乗させた体当たり。

一度態勢を崩されただけで、全身の痛覚が一斉に悲鳴を上げる。

体術の名手と言われた自身が、■である■■■ほどでは無いにしても、齢を重ねた50前後の人間に圧倒されている……その事実すら、体から発する慟哭によって認識できない。

仮面の戦士にとって不幸だったのは、彼に並ぶフィジカル面での技量に優れた者が、身近にいなかったことだろう。

よって、肉弾戦の技術がこちらを上回る存在が、この瞬間まで存在しなかった。

その存在こそ……この修行僧の身なりをした男——おおとりゲン、ウルトラマンレオである。

多くの大切な存在を失う苦難を味わいながらも、地球を守り抜いた彼は、一時期地球各地を旅して廻っていた。

同時に修練も怠らずに続け、時には現地の武術をジャンル問わずに学び、吸収していった。

勇夜が以前、光へ口にした室町時代発祥の古流剣術『香取神道流』もその一つである。尤も、修行熱心であったゲンは香取以外の流派の剣術も身につけている。

弟子が剣術の腕前も恐ろしく高いのは、ゲンの武者修行の旅の賜物だった。

修行僧の服装であるのも、常日頃から己を磨きあげ、初心を忘れない心構えの顕れであり、それによって、実戦の経験も肥やしとなり、最終的に惑星であるブラックスターを破壊できるまでになった地球防





それ自体はありがたい……だが、どうも腑に落ちない。

わざわざ仮面で貌を隠している時点で、否がおうにもキナ臭い匂いを感じてしまう。

手を貸すと見せかけて、実はこちらを嵌める一物を隠しているのはと、良い気はしない考えまで過る始末。

ともかく、怪獣を寄越してきた何者かと組んでいるかもしれない仔細不明な連中がいる以上、最低一人でもはやてと一緒にいた方が賢明だった。

よつてあの夜以降、専ら久遠が、はやてのボディガード役として傍に付くようになり、結果として数刻前の勇夜たちの密談を可能にさせることとなった。

まあそれに対して、現状シヤマルたちに現況を打破する突破口が見つかからない障害もできてしまったのだがである。

殊に直に仮面の男を目にしたシヤマルは、最も彼らへの警戒心が強かった。

忘れられない。

ほんの、ほんの微かで、正体が掴めないゆえの未知への畏怖だと思っただが、実際は違う。

あの仮面がこちらに目を向けてきた時、確かに感じたのだ。

お世辞にも良いとは言えない、よからぬ負の感情が、仮面越しに発せられていた。

あの視線は、何度も戦場で直に肌で接してきたものと同じだ、間違えようが無い。

だから、久遠を呼ぶ一手は、今は手札から捨て置く方針にした方が良いのかもしれない。

全容が解らないゆえに、慎重な思考による判断。

しかし、どうにか解決口も見つけておきたい。

「(となればやはり、"アレ"を使うしか無いな)」

「(分かっている……でも)」

ザフィーラが今提示したように、突破口となるカードは一応手札に存在していた。

闇の書本体に蓄えられた一個人の容量を超えた魔力による広範囲攻撃で、結界を破壊すること。

それが現状、最も有効的な切り札。だがこの切り札にもリスクが付いてくる。

まだ完全に蒐集が完了していない状態で、書に内包された魔力を使ってしまうと、使用した分だけ、頁（ページ）が真っ白い白紙に逆戻りしてしまう。

消費した分をやり直さなければならぬデメリット。

書のリンカーコア浸食によるはやての神経性麻痺の進行が着実にカウントダウンと刻んでいる中で、手札から取り出して使うのに躊躇う要因としては、充分過ぎるリスクであった。

贅沢は言えない……背に腹は変えられないのかもしれない。

ここで時間をロスした分、何かしらの代償が押し寄せてくるかも分からない。

ならいつそ、思い切って使うべきなのでは？

ダメだ、それなら久遠を救援に呼んだ方が、まだリスクは低い。

いや……結局どちらを選んでもリスクは必ず背後についてきて、払わせようと強制してくる。

その強制の対象がはやてに向けられてないと、誰が断言できよう。

もし……これが書の主たるはやてを確保する為の陽動だったらどうする？

仮面の男らも手を貸すと見せかけて実はという流れになることも充分にあり得た。

久遠がいない間紅蓮に警護を頼みたいが、あんな心を闘ぎ合わせてまで助けに来てくれたグレンファイヤーとしての勇姿を見てしまった今となつては、もう彼に甘えられない。

褒められたものではない所業を繰り返している身であるので、どうしても疑心暗鬼で、臆病な気持ちが強まる。

シグナム達を信じて現状静観か。

やはり久遠に応援を頼むか。

書に貯蓄された魔力を行使するか。



選択肢をとるのに手間取る時間さえ悩ましい。

手札から、何を切り出すべき……なのか。

どれを選ぶか思案を重ねるシヤマルであったが――

「風の足枷！」

――咄嗟に、背中の肌を感じ取った気配を発せし何者かに、シヤマルは右手に形成されたベルカ式魔法陣から人間サイズを竜巻を飛ばした。

大した威力では無いが、時間稼ぎによる牽制としては差し支えない。

魔法による小型の風の渦を受けて気に取られている間に、彼女は後退してビルから離れた。

シヤマルの背後を取ろうとし、シヤマルの攻撃を難なく防いだその何者とは。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ――」

漆黒のバリアジャケットを羽織り、無骨なストレージデバイス――S2Uを携え、闇の書の主か、騎士たちの仲間を確保すべく結果外を跳び回って探索していたクロノであった。

「搜索指定ロストログアの所持、ならびに使用の疑いで、あなたを確保します」

もしシヤマルの反応が遅れていれば、運が良くて彼女が転移にも蒐集にも重宝しているあるスキルで逃走、悪くてその場で御用となっていたかもしれない、むしろ後者になる方が確率は高かった。

逃げようものなら、補助魔法を幾つも所持しているクロノによって、力技で拘束されていた。

「(どうした？ シヤマル)」

返答がこないことに引っかけたのか、やや切羽詰まった声色でシヤマルを呼び掛けるザファイラ。

「(執務官さんに見つかったっちゃった……でもどうにかするわ、みんなももう少し持ちこたえて)」

「(相分かった、気をつけろ)」

「(うん)」

手札に集まってるカードから、何を選びとるのか、それは後回しだ。  
「行くわよ、クラールヴィント」

『Ja 《了解》』

シャマルの呼び声に、彼女のデバイスたる両手の人差しと中の指に、それぞれ二つずつ嵌められた青と緑色の輝きを帯びた金の指輪――

――風のリング――クラールヴィントが応じた。  
今は何としても、この男の子からどうにか逃げのびることが先決だ。

自分だって騎士なのだ。

この状況くらい、自身の力で切り抜けよう。

そう己を鼓舞しながら、シャマルはクロノと相對するのであった。  
つづく

## STAGE 28 — 突きつけられる現実

結界内での海鳴のオフィスビルたちの渦中で起こりし戦場。

魔力を帯びた刃と刃の衝突によって、表皮のガラスが全て吹き飛び、粉塵を空に舞い上がらせる海鳴のビルたち。

散った破片は全て、あちこちに黒い稲妻模様の罅が走った冷たいアスファルトに散らばり、独特の異趣な光景を演出させていた。

このフィールドを作り出した演出家、あるいは芸術家とも言える、諸星勇夜とシグナムによると刃同士の剣裁は、なおも続いていた。

数分前と比べれば、剣閃の激しさは鳴りを潜めている。

迂闊に攻めれば、致命的な返り討ちを浴びるかもしれないからだ。

両者は互いに、互いを強敵だと見止め、集中力を紡ぎながら、様子見にシフトさせている。

いわゆる：千日手で拮抗している状況。

光の国の戦士に八重桜の炎の剣士、どちらもとも戦法が酷似しているので、今の状態に落ち着いているのは、ある意味必然であった。

どちらにしても、身体能力が十人並な人間さまたちには、絶対に近寄れない、近寄りたくない異空間である。

「さすがだな…二つ名を轟かせるだけのことはある」

「そりゃどうも」

場は二人の剣士が距離を取り、どちらも得物を正眼に構え対象を見据えたことで、より静かなる大気に落ち着いた。

けれど、二人ともあれだけの武闘を見せながら、まだ息を荒らしておらず、さらにこの静かなる場の大気は、あくまで第二破の激闘の嵐を控えた静寂、という奴だ。

少し経てば、周辺の物体は、二人の魔力、脚力、飛行速度、闘気のぶつかり合い衝撃波と荒ぶる大気の暴走、それらの激流で再び舞い踊る演技を強要させられることになる。

シグナムは、戦時下の集中を継続させながら、心の内で武者震いの笑みを浮かべた。

「もう暫く、心躍る戦いに踏み込みみたいところだが、そうは言ってもら

んか…」

「悪いが、俺はあんたの遊興（しゅみ）にいつまでも付き合う余裕はない、今日で通り魔稼業から足を洗ってもらうぜ」

何という男だろう、あのウルトラマンといい勝負だ。

口調やら物腰やらに態度と、どこかあやつと重なる点もあるが、今は野暮、追及時ではない。

それよりも、私の心を疼き掻き立てているのは、彼の剣裁。

身体強化の魔法に依らずしてこの身体能力と戦闘センスの高さ、かの己が肉体のみで、あれほどの無駄をそり落とし、常人を超えた身のこなし。

こうまで私と愛機による剣技と拮抗するとは、やはりこの少年、手練れの中でも上位に根を下ろす手練れだ。

もうあやつとは何十合も剣先を交わし合っているが、得物を交わすこともほとんど無いまま、私の剣によって兵たちは地に伏せられ、そうした味気なく虚しい勝利ばかりを積み重ねるようになってから、もう何百年も久しい。

確かに、勝利と生存確定という結果が、こちら側に齎されるのは良いことではある。

ほんの少しの些細な入れ違いで、気が付けば生命を剥奪された自覚すらできぬまま、どこへとも知れぬ世界に召し上げられる…など、征野ではそれほど珍稀な事象でもないからだ。

戦場に限らず、人生自体、先行き不透明なロシアンルーレット、特に血が流れる空間ではより顕著、その場に臨んだ者たちに飾り気も混じり気もなされずに突きつける現実。

いつ敗者の結末に堕ちても致し方ない戦場では、勝利は実のところ財宝よりも眩しい代物だ。

とは言ったが、ただ勝ちに急ぐやり方…：…と言うより物足りなく呆気ない結末（しょうり）の数々は、正直に言えばこの八重桜の剣士（バトルマニア）にとっては、余り好ましくないものであった。

勝つに越したことは無い——が、要は…：…過程、筋道だ。

騎士という理性の檻で抑えている彼女の本心には、その眉目麗しい

容姿からは想像し難い猛獣の血が隠されている。

本音を言えば、当人たちに文句を吐く気はないが、格下の兵士何百、何千人を斬り伏せたところで、一体何になると言うのだろうか？

そんなことでは、己の戦いに滾る獣の血は満足してはくれない。

一方的な勝利の数が増える一方で、心の深淵に巢食う虚無感も比例して増産されていくばかりだった。

贅沢を言うなら、自分もつと、磨き上げた自身の技量と、真つ向から相對し、對等に斬り合える強敵たち、そんな格上の猛者たちと全身全霊で遣り合つてみたいのだ。

その点なら、諸星勇夜はその水準を大きく飛躍、いやそれ以上かもしれない、言葉ではとても表現しきれない力を、彼は持ち合せている。劍を交わす度膨らむ確信が、堪らなく血を高鳴らせる。

己の得物の刃が、相手の体に触れるか触れないかの瞬間、とてつもなく心身が高揚する。

逆に相手の得物が己の身を掠める瞬間、寒波が押し寄せてきたかのような身震いがする。

殺気を込めたお互いの武器が、その切っ先が交差、またはぶつかり合う瞬間、迸る火花は美しく、溢れだす熱量はとても心地良い。

そうだ……これだ……この感覚だ。

この一瞬と一瞬の積み重ね。

生きるか、死ぬか、その天秤、綱渡り。

そこでしか味わえない、全身を塗り上げる美味たる快感。

これだ……自分はずつとこの蜜の味を味わいたかったのだ。

全く久しい……この味を味わえなくなつてから、どれくらい時間が経つたのだろう。

もう二度とこの感覚を身に染みらせることはない諦めていたから、相応以上の力量と姿勢で真つ向から己にぶつかつてきた。

“魔導殺し”

という二つ名を秘めたこの少年には敬服する。

そして魔道師には天敵に等しい彼に、魔法を使わせた事実は、シグナムをより武者震いという名の悦を与えた。

長いこと猛者と巡り合えなかった為に、自分の剣は錆びているかもしれないと恐れも抱いていたが、どうやらまだ捨てたものではないな。

歡喜の熱でうなぎ登りに上昇していくシグナムの体温。

けれど一方で、彼女の頭は反対に冷えていった。

冷や水を思いつきり掛けられた感覚である。

つい数秒前まで、相手の卓越した戦闘技術と、彼との熾烈な戦闘に悦の泉に浸っていた自分への嘲笑と言ってもいい。

平穩の日々を満喫しようなどと、仲間たちにはほざいておきながら……いざ自分は戦いの場に戻るとこのザマだ。

熱く滾る闘争の炎熱と、鮮やかなる血が欲しくて堪らない……ケダモノだ。

求めるのは平穩——で、ありながら、戦いに恋焦がれる様と心の有様は、言うまでもなく、矛盾だ。

しかれど今は、それすらも障害を駆逐し、目的を達する為の原動力にしなければならぬ。

でなければ、この身に確かに芽生えた良心……善心が……騎士の矜持を捨ててまで行っている蒐集に対し、軋みと悲鳴をあげかねない。

正常では、いられなくなるだろう。

心の柱を保つには、自らの異常性すら使わざるをえないのだ。

そして時間は、彼らに迷い惑う暇を提供してはくれないのである。状況打破するには、諸星勇夜たちを切り伏せる他あるまい。

その鍛え上げられた強さは身に染みた。

「だがそれでも私は、この場を切り抜けなければならぬのでな——」  
力量の片鱗を掴む前置きは終わり。

レヴァンティンのあの姿を晒すのも久しかったな。

使わなかったというよりは、わざわざ使う必要性がある場に恵まれなかっただけ。

そう、この瞬間が来るまでは——

「——さあ、第二幕と行こう」

もう——出し惜しみはせん！

『Schlange form!』

シグナムの愛機特有の、テンションがハイな電子音と、カートリッジの魔力供給による排莖口からの空莖莖の排出。

明らかに手札から、*「奥の手」*のカードを切りだす所作。

それを感じ取った勇夜は構えを正眼から防御重視の八双に変える。

紫がかった揺らめく焰がレヴァンティンの切っ先を覆う。

そして——白銀の直剣の刃は、鞭のようにしなやかに伸長された、蛇の剣と化した。

己の直感の赴くままに、勇夜は脚に力を込め、アスファルトを踏み込んで左手側に跳び上がった。

直後、数刻まで彼の足に踏みしめられていたグレーの大地が砕かれ、破片と噴煙が舞い上がる。

そこからさらに後、*「なにか」*が勇夜に押し迫る。

月光を反射し、端正な紋様が刻まれた零牙の刀身を防壁にして、なにかによる直撃は免れたが、身に受けた衝撃に押され、その身は宙を飛ばされた。

器用に空中で翻り、勢いを弱体化させてアスファルトに降り立つ勇夜。

気を休める暇もなく、次に彼の視界が捉えた光景は、かの*「なにか」*がジグザグ状に鋭角を描いて地面を抉りながら迫ってきた。

*「くっ……ダガーモード！」*

両手とも甲を上向きにして零牙の柄を掴んだ状態から発した彼の声を皮切りに、文字通り無口な愛機は光を発すると形状を変えていき、一振りの日本刀は、ゼロスラッガーの基本形態に相当する二振りの短刀——零牙・ダガーモードとなった。

形態変化させた二つの得物を、逆手で構え、粉塵の合間から飛び出してきた*「なにか」*を、ウルトラテレキネシスを纏わせた零牙で打ち払った。

無味無骨なアスファルトの大地を蹂躪するその「なにか」の正体は、束ねられた四角上の——刃たち——であった。

手で数えられる以上のものの多数の刃が、一本の黒光りするワイヤーによって蛇腹状に括りつけられていた。

そのしなやかな軌道と、強烈な突進力と、括られた刃たちを以て、勇夜を切り刻まんと迫り攻撃を仕掛け続けている刃は——正に獲物を捕らえようと牙をむき出しにして喰らいつく蛇の如し。

そして刃を束ねる糸の根元を追いかけていけば、そこには先程まで直剣であったレヴァンティンと、それを手に持ち振るうシグナムの姿。

かの巨大な蛇の刃の正体こそ——蛇腹剣(じゃばらけん)、形態の名は——Schlangeform——シュランゲフォルム。

剣と鞭、二つの武器の特性を兼ね備えた混合兵器——マルチウエポ  
ン。

今宵の闇夜において、久方振りにお披露目をした彼女の「奥の手の一つ」。

ただでさえ通常の鞭でも、予測困難な軌道と、肉を裂き、骨を断つ破壊力を秘めている。

性質上シンプルだが強力なゆえ、家畜、奴隷、罪人たちへの拷問に使われてきたかの武器に刃を付け加え、斬撃の属性を付加すれば、その脅威は計り知れない。

ただ確かに言えることは、この蛇腹状の刃は、ウルトラマンである勇夜——ゼロでも圧倒させられる武器であり、技であり、凶器だった。

高町光——ミラーナイトが、相まみえている鉄槌の騎士ヴィータに披露した大芝居。

一覽の流れを箇条書きにするとこうなる。

まず一つ、ヴィータがカードリッジの追加ロードの敢行を皮切りに



わざとバリアの出力を弱め、罅を走ったのと同時に障壁を暴発させる魔法。

『バリアバースト』

による衝撃と煙幕でヴィータの視界を封じ、アイゼンの表面から二次元人の十八番、鏡面転移でこの場から移動。

二つ、眼下のビルのガラスに転移し、外壁のガラスと内部のフロアーを攻撃して侵入しつつ偽装工作を行い、ヴィータに自分がやられたと思わせ。

三つ、御神流の遮気で気配を殺し待ち構えながら、ヴィータが侵入してきたところを攻撃。

四つ、窓ガラス一面を魔力で編んだクリスタル状の薄い壁面。

『シルバーカーテン』

で出口となる大穴を封じた。

これらの誘い込みの策で、仄暗くボロボロで荒んだフロアーでヴィータは、光との戦闘を余儀なくさせられていた。

常人ならどうにか輪郭を捉えられるほどの暗がり、火花が飛び散り、金属音が残響する。

それこそ、光の二刀小太刀のシルバークラウドとヴィータの鉄槌―グラーフアイゼンの衝突による現象であった。

一見傍目からすると、互角の勝負に見えないこともない。

光の剣撃はヴィータのアイゼンに阻まれているし、そのアイゼンの打撃も宙ばかりしか当てられていない。

“傍目”からは――である、

先刻は意気込んでアイゼンを振るうヴィータではあったが、ここでのみの戦況を簡明に説明すれば、不利な立ち位置なのは彼女の方であった。

原因は、彼女の得物の特性と、地理的環境。

元々ハンマーというものは、作業用の工具としての一面が強い道具。

戦闘用の武器としても使え、特に中世のヨーロッパでは金属製の鎧への対抗策として重宝されていたが、戦闘のみの用途で使われたの

は稀。

確かに、金属の塊が物体に突きつける衝撃は相当なものだ。

だが考えてみて欲しい。

その衝撃（ダメージ）を確実に与えるにはどうしたらいいか。

腕力、それも大事な要素ではある。

それよりも重要になってくる力は、即ち遠心力。

ヴィータのグラーフアイゼンは、スレッジハンマー、和訳すると「荒々しい鉄槌」と呼称される大型かつ両手で使われるタイプの鎚。

単純な打撃力と破壊力なら、銃器を除けば古今東西の武器の中で上位に位置する。

しかし、破壊力を生み出す為にもっとも動きが大振りになる武器で、小回りが利かない。

つまり、攻撃の軌道が見切られやすいということだ。

彼女曰くの『雑魚クラス』なら表面化しない短所だが、高い水準の戦闘能力を持つ相手には、それこそ光ようなのが相手では分が悪すぎた。

分が悪いのは得物だけではない。

戦場と化したこのオフィスの環境でもある。

室内空間としては広めなこのフロアーも、ハンマーフォームにしろラケーテンフォームにしろ、遠心力が物を言うアイゼンを駆るヴィータには狭すぎた。

彼女の愛機に、振り回しや回転による慣性力を相乗させるには、相應の距離が必要になる。

距離を稼ぐほど、アイゼンは如何なる壁も突破する力を発揮できるが、逆を言えば、一定以上の間合いを取らなければ発揮されない。

その点で言えば、この閉鎖空間は、ヴィータとアイゼンの長所を殺す、相性の悪いフィールドであった。

さらに不幸にも、ヴィータは今まで建築物の内部での戦闘経験に乏しく、オフィスは、PCやら机やら様々が物体が散乱して移動にも支障をきたし、魔力弾を使うにも、間合いの狭さと相手の人間離れした走力で撃つ前に接近される為、使用する隙を見つけることができない

かった。

もつとさらに言えば、相手は室内でも十全に戦える戦法の持ち主であつた。

光の使うシルバークライトのモデルの小太刀は通常の日本刀より刀身が短い分、このような場でも差し障り無く戦え、使い手たる光自身も、閉鎖的なフィールドでの戦闘訓練は、御神流の修練で何度も経験していた。

さらに脚力はヴィータの飛行スピードに迫るだけでなく、障害物の群れにも減速させずにすり抜けられ、今は使用を控えているものの、その気になれば、窓にパソコンの画面や、柵のガラスで自在に移動するトリッキーな戦法も造作ない。

彼がここに誘い込み、バトルフィールドとして選んだのも、己と相手の得物の特性と戦闘スタイルを考慮した上での策。

真つ向勝負を行えるだけの力量がありながら、搦め手で追い込む強かさ。

御神の剣士でもある二次元人は、正面突破の直情型な鉄槌の騎士にとって、最も難敵な相手であつた。

「くそー」  
毒づいたヴィータの声が荒れ果てたオフィスに鳴り響く。

完全に自分には不利で、相手は問題無く戦えるフィールドにまんまと入りこんでしまった。

どうしてもこのビルを出たいのなら、二刀の剣士を戦闘不能にするしかない。

突破口の道筋はシンプルな直線、しかし行き先にはたった一つの岸壁。

腕も立つ上に頭も切れる、こんな野郎とも戦いは滅多に無く、搦め手に翻弄され、どうにか決定打を受けぬよう攻撃を捌くだけで手一杯だ。

なのに――

「ぐう…」

――その防波堤すら、維持するか崩されるかの瀬戸際だ。

さつきから、小太刀の刃とアイゼンの柄がぶつかり合う度、ヴィー  
タの両腕に痛みが流れ、押し寄せてくる。

得物で攻撃を防いでも、物理衝撃そのものは体だって受けるくらい  
分かる。

ただそれを踏まえても引つかかる。

軽やかでしなやかな手捌きと足捌き、それらの動きを乗せて円を描  
く変幻自在の美しい剣閃からは想像できない猛撃。

受ける度腕に電流が走り、少しでも気を抜けばアイゼンを手放しそ  
うになる。

どんな魔法を使えばこんな芸当を為せると言うのだ？

彼女は知る由も無い、わざわざリンカーコアで魔力を作らなくて  
も、相応の修練は必要だが、かの芸当を使うことができることを。

武術を極めし者は、最小限の動きで相手を戦闘不能にする打撃を与  
えることはおろか、衝撃を体内にダイレクトに通すことができる。

一般的には、拳法で言えば《浸透勁（しんとうけい）》と名称が付い  
た技で、たとえば体の表面を鎧や何かで防護していようとも、受けた者  
はダメージを諸に被ってしまう。

そんな技を、剣術に生かそうとした結果、御神流では《徹（とおし）》  
という剣技が生まれることになった。

魔力の鎧であるバリアジャケットすらも、完全に浸透勁や徹の威力  
を殺す術は持たない。

どうにかヴィータは意識を持続させているが、並の者ならどこを当  
てられようと気を失い、体の自由が利かなくなる。

フェイトのフォトンランサーを文字通り無傷で受け切ったシグナ  
ムが、勇夜から痣を受けるだけのダメージを受けたのも、かの技術に  
よるものだ。

超常的な力は何一つ使ってはいない、純粋な武術による体技。

魔法ばかり先行した世界では、人体でそんな芸当を為し得られると  
は、思いもしないだろう。

現に身を以て、味あわされているヴィータも然り。

どうにかこいつをブツ飛ばして、さつきとこの結界から出たいって

のに………場を切り抜けようと躍起になる度、焦りで心情が空回りして、ますます押され気味になっていく。

どうしても、何が何でも全員で帰らなきやならないのに、驚愕を突きつける相手の少年の攻撃は、より激しさを増していく。

「はアア！」

「アイゼン！」

『Panzer Schild』

『Barrier slash』

左腕から突き出されたシルバークライトの剣先を、三角形型の魔法陣で阻んだ。

攻撃を防いだ、確かに受け止めた筈だった。

刃の先端が、障壁に触れたと同時に光はライトを押し込みながら胴薙ぎに振ってヴィータの態勢を崩し、すかさずも右手の片割れで唐竹に斬りつつ、左手の刃で逆胴にと、十文字になるように切り付けた。  
「何でえ……」

驚愕で見開いた彼女の瞳が捉えたのは、小太刀によつて難なく切りこみが入り、挟まれていく魔力障壁。

『御神流奥儀ノ参・雷徹』

御神では『斬』と呼ばれる日本刀による剣術なら基本、対象に刃が触れた瞬間刀身を引いて切断する引き切りを二刀同時に行う、徹を掛け合わせた御神流の奥儀の一つ。

そのプラスとして、刀身に魔力を相乗させ、『バリアスラッシュ』の効果も乗せている。

刀身が障壁に触れた際、魔力を流し込み、回線を焼き切るように障壁の結合を弱めさせ、実体剣で切断する。

アルフも、以前プレシアとの戦闘の際、バリアを引き千切ったのも、この原理の応用からだ。

威力なら御神の剣技でもトップレベルな雷徹に、バリアスラッシュを加えれば、ベルカの騎士の防護すらも破る脅威になった。

光は攻勢をそこで留めず、両手の小太刀を逆手に持ち直すと、踏み込みながら正拳突きの大要領で盾を失ったヴィータに向け、柄頭を突き

つけた。

このまま追撃を受ける気は彼女にはなく、命中箇所を予測してアイゼンで防ごうとした。

が——その時、驚愕の第二撃が襲いかかった。

小太刀の柄頭が、アイゼンの防御をすり抜け、彼女の鳩尾に突き当たった。

『御神流剣技・貫（ぬき）』

相手の動きを見切り、防御をすり抜けて攻撃を与える技。

その応用による正拳。

体内から口へ、水が逆流で遡っているかのような錯覚に襲われる。

出てきたのは空気と唾のみだが、昇る流れを抑えきれずに嘔吐した。

見た目は少女ではあるがゆえ、女としてははしたなく映る醜態だが、状況的にそうは言ってられない。

今の正拳によって発生した慣性に逆らうこともできぬまま、壁に衝突させられた。

罅の入った壁から床へずれ落ち、尻持ちを突いたが、これ以上隙は見せないとばかり、痛みを発する体に渴を入れて立ちあがった。

「諦めが悪いですね」

「当たり前だ……誰がためえら管理局なんか捕まるかよ」

数分振りの言葉の交わり合い。

先に発した光も、やや息が荒くなっていた。

実はあの貫による柄頭の正拳を繰り返す際、両腕だけ神速を発動させたのだ。

体のリミッターを外して、本人からは周りの物体全てがスローになるほどの速さで駆ける御神流奥義・神速は体の一部分を限定的に発動させることができた。

どちらにしろ、体力の消費量は半端ないので、多用できない点は同様だ。

「あがたたちヴォルケンリッターが、泰平な日々をみすみす自ら壊すような真似をするからでしょう」

「どういう意味だよ…」

「その帽子に『のろいうさぎ』を飾る辺り、今の主様からは恩義を受け、あなたもそれに感謝しているはずです、違いますか?」  
のろいうさぎ。

その固有名詞を耳にしたヴィータは戦慄した。

あいつから買ってもらって、元になったあの人形は、現地の人間すらも知る人なんてざらな、マイナーな玩具だ。

この帽子に付けられたこれが何の名前か、知っているということとは、少なくとも自分たちが、この海鳴に住んでいることは知られてしまっている。

惑星内で国境がいくつも敷かれて、そこを行ったり来たりするだけでも面倒な、勝手が違うこの管理外世界じゃ、住み処の大まかな位置すら掴むのに手間取ると考えていただけに、手際の良さに絶句した。  
どおりで、こんな色々観光できる場が恵まれてるけど、あくまで数ある一都市でしかない海鳴に網を張ってたわけだ。

連中を、甘く見過ぎてた。

いや…むしろこいつ含めた連中のような、協力者の賜物かもしれない。

何の縁で、あつちの世界と繋がりを持ったのかは置いて、この優男はこつちの世界の住人で間違いはない。

見てくれは日本人そのものだし、日本語だって流暢に話してるんだから……って……今はそんなことはどうでもいいんだよ。

その場から急加速してアイゼンを振り下ろすヴィータ。

それを両手のライトを交差させて受ける光。

「そのムキな応じようから見ると、的外れではなさそうですね」

「うるせえよ——てめえに返す言辞なんかねえ！」

ダメだ……このままこいつの口車のペースに乗っちゃったら……こつちの身もはやてたちも危ない。

海鳴に居るのが知られてるかもしれないのに、うっかり口滑らしたら、この場を乗り切ってもあつという間に、はやてたちとこの家が突きとめられちまう。

「そうですか……しかし、こればかりは言わせてもらいますよ、あなたの方にとって避けられぬ問題でもありますから」

ダメなんだ——せめてはやての体があたしらに蝕まれるのが止まるまで、絶対にボロは見せられないんだ。

自分たちでしか、この撒かれてしまった種を刈り取ることはできないのである。

「——如何な理由で、書を書き記しているのかは知りませんが——」

今優先しなければならないのは、目の前の“邪魔な奴をブツ飛ばす”ことと、全員でどうにか結界の中から出て、はやてたちの許に帰ること——余計なことは、考えていられないんだ。

「分かっているのですか？ 蒐集の皺寄せが、“あなたがたの主”にも押し寄せることを」

「っ!？」

戦場では……余計な雑念など足枷よりも致命的な重み、なはずなのに、彼の今の一言は、ヴィータの心に決定的な波紋を投げかけてきた。耳を傾けるな、たとえ正論を盾に投げかけた言葉だとしても、それは精神を揺らめくトラップだ。

敵対する対象に、言葉による掛けあいは無用。

交わすのは、その手に持つ武器だけで充分なんだ。

「蒐集をやってるのも、咎を受けるのも、全部勝手にやってるあたしらだけだ、主は関係ない!」

何度も心に言い聞かせてるのに、気が付けば、勝手に口から弁明の言霊が流れ落ちてしまった。

「やはり……あなた方の独断でしたか」

管理局の捜査状況のペースを踏まえれば、これ以上情報をみすみす与えるへマは何が何でも避けなければならないはずなのに……得物をぶつけ合いながら、辞の交わり合いは続いていく。

「罰を受けるのも、贖罪を強いられるのも、自分たちが全て引き受ける、その心意気、その覚悟自体は立派です」

心が警告を鳴り響かせる。



聞いちゃいけない……耳を傾けてはいけない……相手の言葉の意味を、理解してはいけない、ぐるぐるとシグナルが短い間隔で、脳内を駆けまわる。

でも、そう無理に問い掛けを重ねるごとに、脳が逆に研ぎ澄まされ、クリアになっていく。

「ですが、どれだけ罪人は自分のみだと訴えたとしても、闇の書の糧とされた人々は、それを絶対に許しません」

よって、彼の口から発せられる言葉に込められた意味を、嫌でもはつきり理解させられてしまう。

そして言霊の意味に秘められた刃は、加減を抑えることもなく、ヴィータの心を抉っていく。

「たとえ主が何の関わりを持っていなくとも、被害者たちは騎士だけでなく、主にも償いの日々を背負わせようと、糾弾し続けますよ」  
罰を受けるのは己だけ。

実際に罪の泥を被るのは、犯した自身のみ、たとえ親しき間柄でも、関わっていない者たちは関係ない、そういうのは筋違いだと、現に彼女たちは、そんな心の持ち様で蒐集を続けている。

「あなたたちはこれから暴力を振るう人たちに言えるのですか？」  
自分の大切な人の為に、闇の書の贄になってほしいと、贄にされた者たちに言えるのですか？  
「主を助けるのはこうするしかなかった、仕方なかった」と

しかし——極論すれば、それは加害者の「エゴ」というものだ。

痛みを被った被害者と、その身内たちは、痛みを押し付けた側の身内たちにすら、内に芽生えた怨嗟を容赦なくぶつけてくる。

「かつてあなたがたに痛みと嘆きを突きつけられた者たちが、あなたが大切に行っている主に地獄を味あわせようなどということが、絶対に起こらないと、言いきれますか？  
そしてあなたたちの「我が主」に言えますか？  
「私たちの犯した罪を、一緒に償ってほしい」と

「違う……違う……違う……あたしは——あたしらは——」

「違うなどと言っても、それがあなた方の選択の代償だと、一生掛けて

払わなければならぬ代価だと……痛みを受けた者たちはそう思うでしょう」

罰を受けるのは己だけだと？

笑わせるな……思い上がりも甚だしい。

忘れない……貴様らに齎された慟哭、突然前触れも無く奪われた温かみ、安らぎ、穏やかな地平の日々を奪っておいて、奪われる側となつたらそうさせまいとまた奪おうとする——そんな愚行……絶対に許せない、許さない、許されない。

下手をすれば、そんな恨みつらみに満ちた叫びを一生味わうことになる。

「ヴォルケンリッターの、主への忠義、忠節、心からの想い、その感情（こころ）は紛れも無く本物でしょう、だからこそ——」

安穩の日々を奪っておきながら、自分たちはさも平然とそれを享受し、奪われるかもしれない危機に瀕すれば、手放してなるものかと、多くの人間をまた闇の書の糧としようとする。

こんな理不尽を認めると、許容しろと、受け入れると、ふざけるな、そんな幸福、貴様らに齎される筋など、言語道断だ。

償え、積み上げた罪の分だけ、生き地獄をその身で刻み続けろ、敬愛する主とともに、生涯全てを贖い捧げるのだ。

罅迫り合いは、光が跳躍で後退したことで終わりを上げ。

「現行の主に対し、あなたたちと相乗りで茨の道に進ませようとする騎士の逆賊行為を、見過ごすわけにはいかないのです」

彼は構えをとりながら、最後通牒とばかり、痛烈な正論を告げた。

「覚悟……しなさい」

対するヴィータには、いつもの無愛想な返しも、絶叫も、アイゼンを叩きつける意志すら削がれていた。

呼吸が乱れる。

否定したい。

違う、そんなんじゃないと。違うんだと言い切りたい、断言して反論したい。

そんなつもりはないんだ。

自分たちが求めるのは、はやてたちと穏やかに暮らせる暮らしだけ。

目覚めていれば、血の匂いと殺気と生き死にが充満する戦いばかりで、次の主が見つかるまでの休眠でしか、安らぎを得られなかった自分たちには、何よりも代え難かった。

その願いが叶うなら、糾弾も、贖罪も、この手に持つ武器と戦いを捨てることも、潔く受容できる。

でも、あんな重過ぎる償いをはやてたちに負わせるなんて……滅相も無い。

今続けているのが逆賊なのは、背信的な行為なのは分かっている。

でも、あたしたちから出た錆で、はやては今苦しんで、いつ死ぬかも分からないんだ。

手をこまねいて、立ち止まってられない。

何としても、一刻も早く何か手を撃たないといけない。

たとえ一番有効な一手が、褒められたものからは程遠く、一度は置いてきた兵器としての自分を呼び覚まなくてはいけないともだ。

時間も無い。

葛藤も苦悩も、軋む、片隅に封じ込めるしかない。

でないと、何も犯していない、自らに降りかかる不幸を恨むことなく健気に生き、妖怪でも異星人でも、血で汚れた……生命体とも言えるのか怪しい、プログラムな闇の書たちをも、人として接し、向かい入れてくれた少女を、最悪な仇返しをし、同じく大切にしている者たちを、悲哀に染め上げてしまおうだろう。

絶対にそうはさせない。

一抹の望みがあるなら、死に物狂いでそれに賭けてやる。

望みを果たすまでに、何らかの邪魔して妨害する障害があるなら、ぶっ潰すまで、絶対に救わなきやならないんだ。

もう一度、あの安らかな日々を取り戻すために。

だけど——突きつけられてしまった。

たとえ、かの望みを果たすことができたとしても、求めてやまないものは、とつくに壊れてしまっているかもしれない可能性。



くれよ、消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ  
消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ  
消えろよ、消えてくれよ、消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ  
消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ  
消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ  
ろオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
!!!!

強すぎる感情（おもい）の余り、目を逸らし………避け続けていた  
現実の前に、ヴィータは叫ぶ以外に術を持たなかった。  
つづく。

## STAGE 29 — 乱れし戦場

結界内で、地球人の物差しでは人知を超えた者たちによる死闘が行われている一方で、結界外でも、一つの戦いがあった。

外から現況を脱する術を思索していたシャマルと、彼女を発見し、確保に臨んだクロノ。

この両者による市街上空での戦闘。

『Stinger ray』

母のリンデイと同じ声質をした電子音声がS2Uから発され、杖の先端から水色の魔力弾がシャマルへと連続で発射された。

「風の護盾！」

狙いの対象であるシャマルは、人間よりやや一回り大きい小型の竜巻を編み出し、魔力弾たちは運動エネルギーを削がれながら渦に引き込まれつつ動きを封じられ、やがて拡散して消滅した。

名の通り、今のは風を使った防御魔法であり、同時に捕縛魔法としての性質を備えている。

この場面のみを見れば、それなりに善戦しているようにも見えるが、やはりシャマルは、直接的な戦闘を担う身では無い為、どうかクロノの攻撃をやり過ぎすくらいしか対応策が無かった。

あの執務官は、見た目こそかなり幼いが、パワー、スピード、攻守のバランスが優れ、手堅く実直と呼ぶべき技巧を備えている。

所謂、オールラウンダーとも呼べるタイプだ。

悪く言うなら器用貧乏だが、ああいふ手合いは特定のスキルの特化によって生まれる目立つ弱点が少なく、相対するシャマルは、決め手となる攻撃法を持ち合せていない。

何より、シャマルがクロノの追撃を振り切れないのは、彼の繰り出すバインド技であった。

今までの実戦で一番冷や汗が流れたかもしれない。

尚、修行僧——おおとりゲンと接触した件は除外した上でだ。

あの時は、冷や汗すら流すことも、戦闘すらもままならず、心身共に獅子の眼光に屈してしまったからだ。

あの僧侶や結界内で仲間たちと戦う戦士たちに比べれば、執務官の少年は抑え目だが、やはり補助と後方支援タイプの彼女では手こずらされる。

気なんて抜いてられない。

少しの間でも、一か所に止まっていれば、彼が仕掛けたバインドの網にかかってしまうからだ。

執務官は魔法の網、バインドの張り方も巧みで、どこに罠を伏せたのか、中々把握しづらかった。

間一髪、スレスレでバインドの罠から逃れる展開がここ数分で何度も繰り返されている。

でもここでへこんでられない。

どうにかして、彼から振り切らなければ。

最も有効な手立ては、自身の切り札であるあの「鏡」。

魔導師にとって、一番の急所を突き、そのまま蒐集に実行できる虎の子。

だけれど、あれはある程度相手が消耗している状態でなければ、有効打になりえない。

空を飛びまわる彼を、果たして捕らえることはできるか？

彼女の言う、その虎の子を出すか否か、思案していたその時……：……：  
大気を伝って飛ばされる肉声ならば、鼓膜に多大な負担をかけてしまわせる強さを秘めた悲鳴が、風の癒し手の脳髓に、ダイレクトに響かせてくる。

集中力が途切れ、耳を抑えなくなるシャマル。

悲鳴を響かせる絶叫の主は、ヴィータだった。

慟哭、苦痛、苦悶、非調、ペーソス、厭悪、否定。

同時に、視界を黒一色に染めてしまいそうな、色で表現するなら漆黒でかつ人の顔を出鱈目に崩して描いたグロテスクな絵のような模様で、泥よりも滑りとした心地悪い感触と震えが、身を侵していく。

感触の正体は、ヴィータの感情。

非と苦に苛まれ、追いつめられた彼女の精神。

サポートタイプのシャマルは、仲間のコンディションをいち早く読

み取る為に、使い魔のように精神リンクの術を取得している。

他者が感じていることを、自分のことの如く受信する能力で、使い魔とは違い、任意でオン／オフの切り替えができた。

もし仲間がパニックに陥るなどという事態が起きたらどうする？  
と思われるかもしれない。

シヤマルに関して言えば、あくまで『昔の彼女』であればの話であるが、問題は無かった。

時に壮大なドジをやらかす穏和なお姉さんとなった現在からは信じられないかもしれないが、はやての代より遙か遠い過去のシヤマルは、騎士たちの中で最も無感情で、冷徹で、徹底した合理主義者であった。

いついかなる時も、最善だが、冷感で非情極まる判断を下し、魔導師たちの勘高い激痛の嘆きに、一切心揺らがせず、魔導を為す力を根こそぎ奪って行った。

感情や心と言ったものが決定的に断絶されていたが故に、精神を繋げても、何の支障も無かった。

不感症と表しても良い、悲しみを受けても、あくまで知識による認識で悲しいと理解できるだけで、自身まで悲しむ余地など、皆無。

それが、心が生まれた今となっては仇となった。

どういう経緯でヴィータがあそこまで追い込まれたのか、戦闘に集中しようと五感のリンクまで行わなかったのか、詳細は分からない。数式を解く過程を飛ばして、いきなり解答を見せられたも等しい。それでも何となくだが、原因に心当たりがあった。

何かが切っ掛けで、暴発したのだ。

大事な人を救いたい思いから続けているとは言え、内に貯め込んだ、蒐集を敢行する度に積み重なる……罪悪感と言った心の嘆き。

こうしてリンクさせた自分も、余波を感じ取るまでに、心情の均衡が崩壊してしまった、それだけは理解できる。

自分だって、はやてちゃんに黙ってこんなことしてる自分が、とても嫌になるから。

昔と違い、一番かつての己と乖離してしまった自分では、それを受



けたまま、戦闘を続けることは困難だった。

現に――

「……………しまった」

感情の波の影響が体にも現れ、反応が遅れ、いくつもの魔力のロープが体を縛り付け、半透明の四面体が、追いつきに四肢を拘束して自由を奪う。

「先程も申し上げましたが、ご同行願えますか？」

どうにか善戦してきた湖の騎士は、こうして囚われの身となった。

バインドの強度を維持させながら、淡々とした口調で、確保に臨むクロノ。

だが、今の彼の瞳の黒さは、決して単に色が黒みがかっている……………だけとは言い難かった。

アスファルトの傷をさらに深く抉らせながら、勇夜の体を捉えようと、執拗に何度も迫る蛇行する刃。

それを彼は、跳躍を繰り返しながら逃れていた。

地面に足を接触、時には念力で即席の大地を作り、触れた瞬間すかさず脚をバネにして跳んでいく。

その動作を繰り返しつつ、迫るレヴァンティンの刃を、研ぎ澄まされた動きで空中に何度も舞って躲し、それが適わない場合は人間体時のゼロスラツガーと言える零牙の斬撃か、念力の膜に包まれた脚での蹴りで払うなどして凶刃を防ぎ続けていく。

この独特で美しいステップは、地球発祥のある移動法を元にしていた。

名を『パルクール』、別名『フリーランニング』。

走る、跳ぶ、這う、登る、などの身のこなしによって、心身を鍛えることを主軸とした運動方法、鍛え方次第であらゆる障害が待つ悪路を、滑らかに勢いを削ぐこと無く走り抜けることができる技法。

勇夜がK76星での修行で会得したこの運動法は、思いやりの心を育ませる意図がある為、荒んだ当時の彼の心を更生させるにはもつてこいとレオが修行プランに盛り込んだのである。

さらに、拳法の技法も加えられている。

運動エネルギーを受け流す化勁。

そして、『聴頸』、感覚を研ぎ澄ませ、対象の動きを身体で読み取る術。

究めれば、視覚に頼らずに他者の存在を感知し、感情すら読み取ることもできる。

地球で生まれし『技術』たちと、自身の身体スキルに超能力を駆使して、レヴァンティンの蛇刃を迎撃していた。

最初の内はさすがにトリッキーな剣閃を前に完全に無傷と行かず、体の各部あちこちが蛇の刃に切り刻まれている。

炎熱の籠った刃なので出血は無いが、代わりに火傷の激痛が勇夜の体中に御雄叫びを上げ、それに耐えながらも、一応は蛇刃の連撃を捌き切っていた。

ただし、余裕があると言われるとそれは否、だから一応と付けた。防戦に専念しなければ、蛇刃を捌き続けることができないのは実状である。

これでもシグナムは加減を抑えている方だろう。

本気を出されたら、下手すると自分の体が猟奇的に四散されそう  
だ。

守りから攻めに転じるには……ガンモードによる攻撃か？  
ダ  
ガモードの二刀流でどうにかしのいでいる現状では無理だ。銃撃を敢行するだけの隙も見えない。

他の形態もアウトだ。逆に隙をシグナムに与えてしまう。念力で足止めする隙間すらない。その前に蛇刃が深い傷を勇夜に刻むからだ。

それだけ彼女の攻めは苛烈なもの、炎の魔力変換資質を持つゆえか、騎士の理性に隠された情は、篝火を連想させるまでに鮮烈で激しいものだった。

どうやら彼女も、相手が強ければ強いほど闘志が燃え上がるタイプらしい。

自分に会うまでは、対等に戦える者がいない現世に内心相当ご立腹だったようだ。

でなきや、ここまで攻撃の手が緩まない筈である。

目的の達成——書の完成の為なら、自分の獣としての血すら惜しみなく使う……どうあっても、みすみす食い下がる気は持っていない。

あんな状態では、立ち位置では障害で敵でしかない自分の言葉など、届くのは絶望的だ。

それほどに、彼女らは思い詰め過ぎている。

ならこつちも引くわけにはいかない。

蒐集の理由は、まだそれらしい仮説があるだけで完全に掴んでるわけじゃないが……あの一連の通り魔行為が、苦渋の選択によるものである確証は、ほぼ掴んでいる。

それが分かっているから、どうしても内心の苦闘の果てに、自分たち刃を向けたグレンと、裏切り行為と見なされかねない接触をとってきた久遠、あいつらの為にも、主となった誰かさんの為にも、どうしても蒐集は止めなければならぬと心が訴えてくるのだ。

ウルトラマンノアが、かつてその昔見たという闇の書の暴走。

あの惨状の光景が、もし……蒐集を終えたと先にある最悪の未来だとしたら。

地球含めたこの次元の宇宙は……塵すら残らず消し飛んでしまふのは間違いない。

ノアが封印による事態の終息を選ぶくらいなのだから、暴走の災害規模は、それぐらい大規模と見込んでいい。

もしその最悪の未来な、次元災害で世界が一つ滅んでしまったら。

見た目は人……或いは人に近いだけで、“心なんて持ってない”魔法書の魔法プログラム生命体たちが、蒐集によってまた一つ次元を犠牲にした……と、闇の書の悪名が歴史と人々の心に新たに刻まれるのは確かだ。

戦いを通じてとはいえ、〃心〃があることを知っている俺たちが、いくら「それは違う」と訴えても、大多数の人は信じない。

そう……それはベリアルと同じと運命を辿ってしまう。

今となつちや……悪玉に身を落とす前のあいつがどんな奴だったか話したつて、口にしたつて、ホラ話と笑われるか、出鱈目な話と切り捨てられるかだ。

親友で戦友だったウルトラの父の言葉でも、信じる者はほとんどいないのは明らか。

事実とはいえ、罪を犯した当人の人となり、ほとんどの人々に知られぬまま悪名ばかりが蔓延つて、そんな中で弁解もできずに大勢の糾弾を黙して生きなきゃならない。

おまけに、今の魔導書の主は、グレンと……あの久遠にとつても大事な存在なのは、顔もまだ知らない自分でもはつきり分かるし……ノアが直面した書の暴走によって、確実に主が死ぬということも、理解できる。

つまりそれは、大切な誰かによって、大切な存在の命が奪われる悲劇に、喪失感による虚無と憤怒に引き裂かれる日々。

それらを背負わされる人生を、あいつらに負わせてたまるか、あいつらと繋がりを育んできた筈のヴォルケンリッターにそんな所業をさせてたまるか。

あの一連の行為の始まりが、善意によるものならもつと尚更。

さつき久遠に問いかけた質問による彼女のリアクションを見ても、やっぱり〃主の為〃に〃自分の意志〃で戦つてるのは事実だ

だから何が何でも、這いつくばつてでも止めなければならぬ。

ただその前にまず、この厄介な蛇の剣をどうにかしなければならぬかった。

マルチタスクで糸口を探しているが、たとえばガス欠を狙つて消耗戦とするか、ダメだな……結果を張つてる局員の体力に魔力は無制限じゃない、彼らに無理はさせられなかった。

他に浮かんだ策も、どれもこれも決め手に欠ける。

けど何か、あの蛇剣にも確たる短所はある筈だ。

この限界など存在しないと錯覚させる刃の攻撃範囲に、鞭と剣が合わさった壮絶なる破壊力を得たと引き換えに背負わされるネック。

迎撃しながらも、刃とそれを操る本人を、注意深く洞察する。

ふと……シグナムを見ていて引つかかった。

何となく……「変わり映えしない」……なんて単語が浮かんでくる。

「(リンク、あいつの立ち位置に変化はあるか?)」

『(………ただいま確認しましたが、デバイスを現在の形態に移行させてから、彼女はあの場からほとんど移動しておりません)』

リンクの分析引っかけからよぎって浮かんできた自身の勘は、ビ ngoであった。

「あいつは愛機を巨大な蛇にさせた瞬間から、ほぼその場に止まって攻撃を続けている」

そうか……読めたぞ、あの獰猛な蛇剣に潜む弱点、そして掴んだ……あの蛇の牙を砕く突破口ってやつがだ。

『(マスター、新たな魔法プログラムを生成しました、データを転送します)』

リンクも何か策が浮かんだのか、その魔法の詳細が記された情報を、勇夜の脳内に送り込んできた。

受信した内容に、勇夜は驚きを禁じ得ない。

そりゃ、セーピングビュートを使いこなせるよう、特訓は何度もしていた。

こいつはそれを応用させたものだ。

ただし、今使うとすれば実質ぶっつけ本番で、使いこなせるかは未知数。

「(おいおい、ぶっつけでこなせるかどうかの保障はできねえぞ……)」

『(その通りです、ですがマスターの戦闘技術を吟味したうえで宣言しましょう、マスターなら必ずやり遂げると信じています)』

送信した当人は分析とシミュレーションを行った上で、勇夜には可能だという確信を得て、その新たな『魔法』を開示したのである。

たく、それにしてもいつのまにこんな殺し文句を覚えたのかね……

この相棒は、ネットで恋愛がらみの情報でも仕入れたのか？ 実際声に出すと赤面レベルな恥ずかしさだぞ……これ。

でも、自然と体が軽くなる気がした。

気持ちも高鳴るつてのに、同時に頭は涼やかにクリアとなつて澄んでいく。

言葉に籠つたのパワーつてやつも馬鹿にはできないな、口にしただけで力を沸かすこんな効能があるのだから。

「(なら、応えてやらねえとな——いくぜ相棒!)」

『(はい、マスター)』

未知への挑戦を、即実行に移せるのは、勇夜が彼女を信頼し、リンクもまた彼を信じているからである。

根拠もなしに信じている訳じゃない……10年以上一緒に歩んできた時間と言う流れが、お互いの強みを高めさせ、力となる。

さて、守り時はこれにて閉幕。

ここからは、俺の反撃のカードを切りだすターンだ。

両手で構えていた小太刀を、そつと下ろす光。

「(ライト、どうでしたか？ 先程の私は)」

『(正直に申してもよろしいのですか？ 我が主)』

「(構いません、堂々とおっしゃって下さい)」

『(………悪魔………です)』

黙した間を経て、シルバールライトは自らの使い手にそう伝えた。

悪魔……己が戦うのに有利な場所に誘い込み、舌攻めでまさにたつた今鉄槌の騎士の信念をへし折つた自分に相応しい言葉だ。

これをなのはや……姫様をご覧になつたらどう思うだろうか？

二人が呆然と目を見開かせたまま自分をずっと見つめる光景が浮かんだ。

これがグレンだったら、どうするだろうか？

激昂して胸倉を掴んでくる姿が浮かんだ。

数刻前にヴィータに対し、静かなる口調で辛辣な言葉の刃を切り付けた光。

啖呵とともに言霊に込めたのは、騎士でもある身としての、同朋たちへの忠言。

久遠塚にて久遠と会い、情報を交換した際、彼女は書の主たる人物のことを含め、自分たちのことを多くは語らなかつたが、彼女の態度と、さつきの鉄槌の少女の反応から見て、現時のマスターの為に、本人の預かり知らぬところで蒐集活動をしている確証は得た。

同時に、こればかりはどうしても伝えておきたかつた。

自身を突き動かす糧が、心からの忠義であり、大事な人たちへの想いであつたとしても、今続けている行為は、咎人の烙印を押されるものであり。

たとえ始まりが善意によるものであつたとしても、それで思いがけなく人を傷つけてしまう結果になってしまうことを。

白状してしまえば、多かれ少なかれ……彼らが許せなかつたのかもしれない。

同じ騎士として、今生の主様が知らない状態で、着々と袋小路に追い込んでいく罪の積み重ね。

直接手を汚していない筈の、光たちからはまだ顔も知らぬ主となつた地球人もまた……清算を担わなければならない現実。

グレンも久遠も、お世辞にも人間の常識から見て人間と言える身ではなく、化け物を見なされかねない存在でありながら、『その方』から色々恩を受けていると、深い縁を紡いでいると、一回彼女と対面しただけでも言い切れる。

そして何かしら主の身に不慮の事態が起き、それを打破する為に騎士たちは武器をとり、久遠も一時彼らに手を貸し、その過程で起きた窮地にグレンが駆け付けることとなつた。

『主……』

「大丈夫ですよライト」

ライトが案じてきた。

かなり暗い貌をしていたのだろう。

けれど、罪悪感はあるけど……いやあるからこそ、胸の奥が引き締められるこの感覚を忘れぬよう味わなければならぬ。

光は最初から、ヴォルケンリッターとの戦いは一種の汚れ仕事になると認識していた。

騎士たちの行動原理は実にシンプルだ。

「愛する者を何としても救う為に、血生臭い世界に身を投じた」  
これだけははつきりしている。

彼らがとった方法が、如何に外道と見なされる者であったとしても、彼らと相對するということは、どうあってもその希望を壊す所業なのだ。

だから自分は、「悪魔の仮面」を被ったのだ。

そして提示したのだ。

自分たちが選びとったものは、騎士の誇りを捨ててまで望んだ願いを永遠に遂げられないかもしれない……と。

それだけじゃない。

自他ともに不幸の底なし沼の土壺に、嵌っていくばかりだと。

より暗闇が溢れる因果が、今か今かと嬉々として待っているというのに。

それだけは絶対に阻止せねば、でないと本当に報われない。

報われぬまま、救われぬまま、彼らは無間地獄の時間を送ることになろう。

それらを伝えた上で、それでも譲れないのなら、止まれないのなら、真つ向から向かい討つつもりだった。

帰結として、こちらの予想以上の打撃を彼女の心に与えてしまったが。

以前から蒐集の罪悪感などから兆候があったとはいえ、光の言辞が決定打となり、ヴィータは完全に戦意を喪失させてしまっていた。

膝を床に付け、身体を支える力は根こそぎ抜き取られている。

倒れていないのが奇跡的だ。

垂れた前髪で表情こそ見えなかったが、光の正論に打ちのめされ、心の支えを壊されて生者とは思えない顔をしていると想像すること



は、簡単にできた。

言い訳がましいが彼女を追迫してしまった罪悪感はある、埋め尽くされてると言ってもいい。

いくらプログラム生命体で、外見以上の時間を生きていたとしても、自分からは妹とそんなに歳は違わない幼子だ。

ある意味では、本当に幼子かもしれない。

ずっと主たちの手足、願望器、戦闘マシンとして、世界を渡り歩いて来た……と言うことは、この地球に来て、人並みの生活をして、感情が芽生えてから日が浅い筈なのだ。

情操が未発達な点で言えば、彼女たちはまだ子も同然。

扱う術を持たず未成熟であったことで、必要以上に自分を傷つけてしまった。

そして己は、崖の瀬戸際に立っていた彼女に、最後の一押しをってしまった。

目に焼き付けなければならない。

これが自分の行いの果ての代償。

逸らしてはならない。

戦いとは、こういう残酷な面がどこまでもしがみ付いてくる。

互いに譲れぬものを賭けて争い、勝利を掴むと同時に敗者となった相手の支えとしているものを打ち砕く。

勝者は敗者の恨み、憎悪が詰まった枷を背負う。

それは忠義と矜持を以て戦う騎士も、ビジネスライクに戦う傭兵も、そして義父士郎たち御神の剣士や、勇夜——ゼロたちウルトラマンら守りし者たちも、平等に背負わされる咎だ。

「ハラオウン提督、守護騎士の一人の武装解除を完了しました、確保の為に武装局員の方々数名をこちらに——」

『主！ 敵襲です！』

胸の圧迫を感じながら、リンディに状況報告を申告しようとしているその最中に、事態は急変する。

愛機の自身の本能からの警告と、新たに巻き起こる事態は同時だった。

フロアーの内壁が、いきなり破裂し、状況をさらに混迷させる新たな起爆剤が、“光たち”に牙を向いた。

<<page>>

海鳴のコンクリートジャングルに囲まれるアスファルトは、未だに烈火の騎士ことシグナムの蛇刃の洗礼を受け、既に乗用車の走る道としての機能を剥奪されていた。

もし無機物に意志があるとしたら、今頃彼らは現在進行形で重なる破壊という災難に、もうこりこりだ、他でやってくれと強訴してくるかもしれない。

この区画の街たちにとって幸いなのは、勇夜が膠着状態の障壁をブチ破るべく、反撃の攻勢に転じたことである。

ただ、その反撃には、ある程度蛇腹状の牙をおびき出す必要があった。

まず勇夜は、迫りくる巨大な蛇に対し、背後に跳躍、後転。

『(右、40度修正)』

「(了解、と)」

単純には直線を飛び廻らず、途中リンクの指示から軌道修正を繰り返し、蛇刃と一定以上の距離をキープさせながら後退する。

一旦退避して態勢を立て直す、にも見えなくはないが、断じて否。

これは前準備だ。

蛇の牙城を崩す、反攻の仕法。

『(今です、零牙を構えて下さい)』

まだ宙を舞い跳び、慣性が残っている状態で、ハンドガンモードにした零牙の銃口を——正確には狙いは少々異なるのだが——シグナムに向けて構えた。

レヴァンティンを連結刃形態——シユランゲフォルムに変形させてから、シグナムは専らこのモードでの攻撃を続けていた。

訳柄は諸々ある。

ある程度効果があったのも有り。

回避による防戦を継続させ、体力をじわじわと削る狙いも有り。

勇夜の戦闘スタイルによるのも有りだ。

数回切り傷程度であるが、刃は勇夜の表皮を捉えることはできた。その後は何度も躲し捌かれているが、防ぐことに専念され、身に貯められた体力が有限である以上、消耗に追い込めばいつか防壁は崩される。

三つ目の仔細、シャマルからの情報では、零牙は銃にも剣にもなる汎用性の高いデバイスであるらしい。

だとすれば、レヴァンティンでは相性的に良いとは言えなかった。術式がミッド型でありながら、日本刀の形態でもレヴァンティンと切り結んでしまうスペックと使い手であるのに、ミドル、ロングレンジ用の形態があるのでは、ほぼクロスレンジに特化された仕様のシグナムの得物では不利、距離をとられたのでは打つ手が限られることとなる。

唯一、遠距離用の形態はレヴァンティンにも在るが、勇夜の身のこなしと反応速度、『同型の形態』が彼のデバイスに備えられている以上、かの形態の使用は現在の戦闘下での選択肢から外された。

で、消去法でシュランゲフォルムが一番攻めるに適していると踏み、先程から蛇刃での攻めが続いてるわけである。

そんな中、シグナムから見ればやや奇妙な後転を勇夜がし始めた。

何が狙いだ？

シュランゲフォルムの有効攻撃距離の圏外からの超遠距離から攻撃？

実際勇夜は遠近両用のオールラウンダーな戦士、普通ならその手が妥当と判断されるだろう。

事実、シグナムもそこに行き着いた。

シュランゲフォルムの牙が届かぬ場まで引くつもりだろうが、我が剣の飛距離を舐めてもらっては困る。

『Schlange beien angrieff』

「穿てー！レヴァンティン!!」

連結刃でのレヴァンティンの攻撃は、『シュランゲバイゼン』と呼ばれているが、これは刃に纏わせた炎の魔力密度をさらに強め、刀身事

態の強度強化だけでなく、魔力噴射による推進力も相乗させて破壊力を上げ、切り付ける斬撃魔法だ。

そしてシグナムの言う通り、シュランゲフォルム時の炎の魔剣は、基本形態のシュベルトフォルムからは想像できない質量保存の法則にすら逆らうリーチで、蛇行しながら勇夜を追走する。

次第に縮まる、得物と獲物とのインターバル。

しかしここで、牙の矛先である勇夜が思わぬ行動をとった。

後部へと跳ぶ最中に、拳銃形態のデバイスをこちらに向けてきたのだ。

周辺にも『魔力弾』を待機させている。

このタイミングからか？ しかも弾丸の生成が早い。

フォルムチェンジの時間は、無い——のだが対処そのものが間に合わないほどではなかった。

弾丸は直進タイプで、発射位置と弾の進行軌道を予測すれば、この状態でも防げる。

「ファイアー」

トリガーが引かれ、弾丸が一斉掃射された。

蛇剣を巧妙に操り、各弾丸の射線上に蛇刃を配置する。

刃の性質上、長時間一定の位置に滞空させられないが、弾の進行を阻むだけの時間はある。

直進する弾丸たちは、「予想通り」、待ち構える連結刃へと前進し、一発たりともシグナム当人に届くことなく果て、パンチャーシルトも徒労に終わる——否、そこで終わらなかった。

「見えない弾」が刀身に着弾した瞬間、次々と弾と刃の衝突地点から火焰の暴発が巻き上がった。

爆発の衝撃が蛇刃を地に叩きつけ、爆炎と噴煙がシグナムを取り囲み、視界を妨げていく。

この場で予想とは、誰の「予想」か？

『(かかりましたね)』

「(ああ)」

そう、弾丸を飛ばし、内心ほくそ笑んでいる勇夜の方。

ここで種を明かそう、勇夜は最初から、シグナムに弾丸を全弾とも防御させる目論見で発砲した。

加えて明かせば、彼が発射したのは魔力弾ではなく、空気を念動波で球体状に閉じ込め、それをさらに念力で弓を引く要領で後方に吸引し、シグナムに飛ばしたのである。

烈火の将が魔力弾と勘違いしたのは、大気に漂う魔力残滓をなのはのスターライトブレイカーに代表される集束魔法の応用でフェイク用のダミーとしてスフィア化し、念動弾の背後に浮かせていたのもあるが、念動弾は魔力弾と違い、微かに空間が陽炎の如く揺らぐのみで、ほとんど目に見えないことも要因。

よってシグナムが、勇夜のフェイクに嵌ってしまうのも無理もないことであつた。

“星の光”の生む切っ掛けを作つたと言える勇夜が、囷用のスフィアを集束魔法で組成させたのもまた憎い手だ。

なにせ現存する魔法の中で最も難度が高い技術だが、一度修得してしまえば、体内の魔力量が枯渇状態でも使用できるからである。

その為、一連の戦法による体力の消費量は、微々たるものでしかない。

集束と聞いて、残留魔力を集め、馬鹿デカイ魔力球から特大の砲撃をイメージしてしまう方もおられるであろうが、このような使い道も存在する。

無論、勇夜が造作なく扱えているのは、不良そうな見た目に反し、日々鍛錬を続け、何だかんだ言いつつも彼の師からの教えを忘れず全うしているからだ。

さらに念動弾には大気中の酸素を圧縮して集められ、連結刃の周辺にはアスファルトの破砕で生じた粉塵たちが漂っていた。

その様な環境下で、高密度の酸素を閉じ込めた弾丸を、炎を宿した刃にぶつけたとしたら、酸素燃焼によつて火勢が飛躍的に上昇し、高まり燃え上がる火が粉塵の群れに着火に、ウルトラ念力による炎のコントロールで、火力は粉塵爆発でより一層極限まで跳ねあがり、結果としてシグナムの周辺を取り囲む形で大爆破が起きた。

しまった……自身を包囲した鮮やかに咲き誇る焰の花々によって、シグナムは先の射撃がシュランゲフォルムの短所を突いたフェイクであると悟った。

連結刃は、接近戦主体のシグナムが中、遠距離の敵への攻撃と、基本形態では不可能な多角的な戦法を可能にするが、反面デメリットも大きくなる。

数刻前に、勇夜はリンクにシグナムの立ち位置の変化を分析させた際、彼女はマスターに炎の騎士が『ほとんど移動していない』と答えた。

正確に表現するのならば、『移動していない』のではなく、『移動ができない』と言い直した方が正しい。

その移動がままならない因とは、シュランゲフォルムが抱える難点だ。

連結刃となったレヴァンティンを操作するには、シグナムの脳波と、刀身からの魔力噴射と、そして肉体全体を総動員する必要がある。

この為シュランゲフォルムの間、シグナムは愛機のコントロールに専念する必要上、ほぼその場から動けなくなってしまう。

特にシュランゲバイゼン・アングリフ等の大技の使用の際は、完全に現在位置での棒立ちを余儀なくされるのだ。

デメリットはこれだけではない。

使用中は、フィールド防護魔法——パンチャーガイストといった、一部の魔法が発動しにくくなる。

相手を防御に徹させるまでの攻勢でデメリットを賄ってはいるものの、この形態は刃の形状こそ片刃だが、『諸刃の剣』でもあるのだ。勇夜の一連の戦法は、連結刃の特性をくみ取った上での一手、その上まかさか、自然現象まで戦闘に利用するなど、シグナムには思いもよらなかつた。

反射的に五感を司る部分の魔力フィールドを強めてたのは幸いだ。

あの爆発の規模では、轟音で鼓膜がイカれ、飛び散る粉塵で眼もやられていたかもしれなかつた。

『Schwertform!!』

無駄にハイな発声で、将の愛機は一定間隔で分裂させた刀身を繋げ、一つに纏めていく。

とにかく、長く伸び過ぎたレヴァンティンを基本形態に戻す、守勢に転じられては連結刃では応じきれない。

それなりに経過していると感じられるかもしれないが、現実の時間で、まだ手で数えられるだけの秒数しか経ってない。

さらに言うなら、これは勇夜の反撃の第一段階でしかない。来る！

剣士としての経験で研ぎ澄まされた『感』が、勇夜がこちらに接近していると知らせてくる。

左からか!?

気配から来る魔力量で、身体強化の術を使用している様子は無い、なのに予測以上に速い。

それもそうだ、勇夜はツルク星人との一戦でも使用した念動波によるスリップストリーム現象と、足場から念力をジェット噴射同然に放出しながらの疾走で一気に距離を縮めたのだから。

炎がカーテンとなって輪郭はぼんやりとしか知覚できないが、気配から見て勇夜が何をしようとしているか、シグナムは理解した。

居合腰、この距離からか？

明らかに相手は刀の攻撃範囲外から、抜刀しつつあった。

素人目に見ても、切っ先がシグナムに届かないのは目に見えている。

だとすれば、考えられるのは刀身からの斬撃波動、現に地面から魔法陣独特の魔力反応。

レヴァンティンはまだ変形途中、鞘で捌くか？ 障壁で防ぎきるか？

『Panzerhinderis』

烈火の将が選んだのは、バリアタイプの防御魔法。

処置としては良い判断だった。

しかし同時に、読みも外された。

瞬きの合間の出来事。

正面から来ると思われた衝撃は、シグナムから見て右手側から押し寄せた。

障壁がドーム状で、右方向にも張られてはいたが、正面に比べれば強度は劣り、何か体が貫く、『奇妙な痛み』を受けながら、騎士は左方向へと突き飛ばされていく。

付加すると、火の群れから飛び出てきたのは、魔力弾でも魔力刃でも念動波でもなかった。

そもそも飛び道具ですらない。

彼女の不意を突いてきたのは、先端が三角状に尖った、青緑色の光を発する鞭だった。

常人よりも長い戦歴を持つ彼女が今の一撃への対応に遅れたのは栓無いこと。

なぜなら、今の魔法はたった今初めて目の目を見たからだ。

魔法そのものの考案も、初お披露目までそれほど経っていない。

技名は——『Flash Whip』

ブレイドモードの零牙の刀身から、魔力を凝縮、固定させて作り上げた鞭を飛ばし、対象に叩きつける、リンクが連結刃の分析と、それをモデルにして即席に生み出した打撃型近接魔法。

剣と鞭の特徴を合わせた蛇腹剣と違い、先端が刃とやっている以外は純然たる鞭だ。

一見、訓練も無しにいきなりできたての新技をマスターである勇夜に使うよう進言するなど、無謀ともとれる。

けれどもリンクは、勇夜の過去の戦闘キャリアを照らし合わせ、合理的な思考で可能であると思いきや、行き着いた。

信頼という意味では、彼女は相棒以上の感情で、自らの使い手のウルトラ戦士に想いを内包している。

当の本人は、口には出さぬよう務めているけれど。

所謂クーデレな女の子なのが、現在のリンクことバラージの盾——ウルティメイトイーゼスなのだ。

そして相棒の勇夜は、彼女の信頼通り、フラッシュウィップをどうにか使い来なした。



それだけ彼の戦闘センスが高いこともあるが、人質の救出や、物体を引き寄せる光の帯——セーピングビュートを使う必要上、修練によって鞭の心得は既に身に着けていたのである。

結果として土台を固めていたがゆえに今の結実へと繋がった。

フラッシュウィップで宙を漂い態勢を崩されたシグナムに勇夜が一気に踏み込む。

この踏み込みにも彼独自の技があった。

足裏から推進ジェットの要領で念力を飛ばすことで、走力を底上げしていた。

一旦相対距離を離しながら、短時間で再接近できたカラクリがこれだ。

零牙を右手に持ち、切っ先をシグナムに向けながら猛進する勇夜。刺突の構え——が、これもフェイントだ。

零牙で突き刺すと見せかけ、ウルトラ念力で動きを封じ、さらにセーピングビュートで拘束し、レヴァンティンを蹴りで手放させる。

怪物でも手こずる二重の捕縛の前では、烈火の将と言えど流石に応えるだろう。

成功するかは五分五分だが、この手順で終わりにしてやる！  
右手の零牙を突き出しながら、左手から念力を放とうとした——

瞬間、イレギヤラーが起きた。  
いきなりの奇襲。

下腹部に見舞われたキックによるものと思われる襲撃で飛ばされ、弧を描いて地面に激突。

新手か？ まさかグレンか？ いや違う、蹴られた感覚から、今のキックはあいつによるものじゃない………だったら誰が？

疑問への思案は、背中が感じ取った殺気によって掻き消され、第二撃の拳撃はどうか跳躍して回避された。

深く抉られるグレーの大地。

勇夜は跳びながら、たった今奇襲を仕掛けた元凶を目にして、言葉を失った。

「嘘……だろ？ あれは、あいつは——」

体色は黒と白、胸部には金色に光る左右対称に並べられた二つの発光体、背中にはゴマダラカミキリによく似た甲羅。

顔には顔に当たる部位は無く、代わりに胸と同色の縦に細長い光体にさながら昆虫の触角な一對の角。

「ゼット——ト——ン」

甲高い電子音と、震えが体感で伝わってくる極低音の重い鳴き声。

勇夜——ウルトラマンゼロが光の国の映像資料と、怪獣墓場で直に見た個体よりも細身で女性的、足の形状は肉食恐竜に見られる獣脚であり、漆黒の尾を生やすなど、独自の特徴も備えていたがその容姿は見間違いようが無い。

ウルトラの次元世界における、最強の怪獣。

宇宙恐竜——

「——ゼットン」

——奴こそ、このフィールドを乱す、イレギヤラーの一端。

戦場はより混迷の色合いへと、塗り潰されていった。

つづく。

結界内部の戦況と、そこで戦う仲間たちの現在の状態をリアルタイムで掴もうとして精神リンクをしていたシャマル。しかし、その行動は仇を生むこととなった。

光の口から発せられる重圧と痛烈が籠った言霊の数々に、感情を律せず自らの心を追い込んでしまったヴィータの精神の軋みによる悲鳴が、精神リンクをしていたシャマルにフィードバックされ、突然の出来事に対応できず隙ができ、クロノによる魔力の縄に囚われてしまう湖の騎士。

が、バインドに縛られるのと同タイミングに、瞬息の機転でシャマルは反撃の一手を表出させていた。

「な……に……」

捕縛した瞬間、クロノは胸部から、体の内から何かが皮膚を破って飛び出してくる激痛に襲われ、実際に呼吸を妨げるものは気道には無い筈なのに、喉に何かが詰まって、息が覚束なくなった。

恐る恐る……顔を下げて疼く胸に目を向けた。

腕……だ………丁度、胸骨がある部位から、とあるSF映画での完全生命体の幼体が宿主たる生物の体から飛び出すかのように、"シャマルの腕"が飛び出していた。

腕の主たるシャマルと言えば、バインドで拘束された状態ながら、左手の人差し指と薬指にはめられたクラールヴィントから黒い筋を伸ばして円形を描き、翡翠色の光が照らされた水面にも見えなくはない円の内側に、クロノの胸から飛び出した分の右腕がのめりこんでいた。

### 《旅の鏡》

これこそ彼女のデバイス、クラールヴィントが作り上げた円の名称だ。

海鳴で二度観測されたワームホールの縮小版とも呼べる物体転送術。

通常の転移魔法やウルトラマンのテレポーション、ミラーナイ

トラ二次元人の鏡面転移——ミラームーバーなどの瞬間移動術とは、  
自他ともに現在地から他の地点に移動する魔法であるのに対し、旅の  
鏡は遠方の物体を現在地、自身の手元に取り寄せる性質を具有してい  
る。

取り寄せることが可能なのは、何も実体があるものだけではない。

「ギリギリ……間にあった、かな？」

自由の利かない体で、必死に今の状況を維持しようとするシヤマル。

執務官の胸部から生えたシヤマルの右手の手のひらの先にある光、  
あれこそクロノのリンカーコア。

旅の鏡は、離れた相手でも魔力を蒐集することが可能だ。

ただし、その鏡は性質上、静止する物体を手元に寄せる技であるた  
め、生命体を捉えるにはある程度対象を戦闘で消耗させなければなら  
ず、本来なら他の騎士たちとの連携が必須となる——のだが、クロ  
ノがバインドでシヤマルを捕縛しようとし、滞空状態に入った際、そ  
の僅かにできた隙が彼のリンカーコアをシヤマルが手中に収める反  
撃の一手となった。

このまま、彼から魔力をもらい受ければ、この縄はどうか解けよ  
う。

一度蒐集できれば、当分戦えまい、非力な自分でも十分彼から逃げ  
切れる。

「蒐集……開始」

その一言が起端となり、体外に露出されたクロノのリンカーコアか  
ら、器官内に貯めこまれた魔力が強制的に搾り取られていく。

「a……a h a a a a a a a a——！！！！」

響くは痛みに呻く、クロノの喚声。

出産時の女性が受けるクラスに相当する激しく強烈な疼き。

変声期に移行していない為か、少女の喘ぎにも聞こえてしまう、は  
なはだ背徳的な有り様であった。

この場で痛みを受けているのは、クロノだけではない。  
与える側のシヤマルも然りだった。

胸の奥底が、少年の悲鳴の振動を受ける度に、叫びは刃となって湖の騎士を突き刺し、無慈悲に削いでいく。

慣れない……もう数えるのを止めたくらい、蒐集を繰り返してるけど、この痛みだけは、何度も己を苦しめる。

どうやら、どうあがいても蒐集で苦しむ魔導師たちの嘆きに眉ひとつ動かさなかった……冷たいけど戦場で都合が良かった以前の自分には戻れそうになかった。

感情を持ったことには後悔してない。

だからそれを手にする切っ掛けをくれた人たちに報いたいから、やり方は悪道だけど、こうして戦いの場に戻ってきたのだ。

耐えなきや……こんなのはやてちゃんの身の上に比べたら、痛いなんて言つてられない。

ジレンマに悶えながらも、蒐集の手を緩めないシヤマル。

然れども、もし実在すると仮定した上でだが、どうも神様という存在は、彼女らがタイムリミットと良心の狭間で苦しむ様を、極上の愉悦と見出し、ご見聞をなされているようだ。

そう感じてしまう証拠に――。

返せ。

「えっ？」

何者かの声を、感じ取った。

返せ。

聞こえてきたのは、少年の声。

大気を伝って音が聴覚器官に入った、のではなく、リンカーコアからの魔力を伝って、クロノの思念が、シヤマルの脳髓へと送られてきたのだ。

「うう……ああ……」

頭蓋に響き渡る声の正体を察する前に、いきなりシヤマルを封じようとするバインドに込められた力が強くなった。

返せ。

声そのものの音域は高めであるのに、シヤマルには獲物に狙いを定めた獰猛な獣の唸り声に聴こえた。

返せ。

その一声が繰り返される度、比例してバインドの拘束力が強くなつていく。

とうとう首にまで、魔力の網に囚われた。

プログラム生命体と言えど、身体構造はほぼ人間のものと同じ、生きる上で大気を取り込む必要性も然り。

ゆえにシヤマルは首に首筋に魔力フィールドの密度を強め、抵抗（レジスト）し対応しているが、圧迫感に呼吸を遮られ、呻き声を上げていた。

どうしてなのだ？

黒衣の魔道師の少年は、蒐集の激痛を直に味あわされている。

当然ながら、網の強度を高めることは愚か、維持することさえままならないはずなのに、どこからそんな力が湧いて出てくるのだろうか？

魔力蒐集を途中で断念されるまでに体に掛かる、痛覚の根源を探ろうと、視線の固定もままならない身で、少年に視線を固定させた。

そして、今自分が行ったことを、数秒も経たぬまま、後悔させられることになった。

彼女の目が捉えたのは、クロノの顔だ。

それも、あどけなく無垢で、性別がはつきりと境界が敷かれるほど成長していない顔が……ひどく歪んでいた。

歪な顔つきと、瞳から零れ行く水流は、決して蒐集とそんな状況下での魔法行使による痛み……のみではあるまい。

瞳も益々黒く淀み、白眼が眼球から消えてしまったとさえ、錯覚させ、涙さえ無色透明から、闇に淀んだ汚水よりも真つ黒な液体に落ち果てていた。

返せ……返せよ……返せッ！

ようやくシヤマルは木霊する声の正体が、この少年の魔力に憑依された怨嗟の呪詛であることに気づいた。

僕の家族を……父さんを……みんなで笑いあつた日々を……全部……返してくれよ！

こんなはずじゃなかったのに……こんな形で、壊れるはずじゃな

かったのに……何もかも……お前たちの——せいで！

許さない……そして……絶対に逃がすものかああああ——！！

同時に、嫌でも、どんなに拒絶の意思を表して目を逸らしても、真向きに矯正されて、向き合わされる現実。

なぜ……今まで気づかなかったのだろうか？

何ゆえ……今この瞬間になるまで、ずっと失念してしまっていたのだろうか？

最後に転生したのは……今からおよそ、七年ほど前。

自分たちが、また蒐集を始めることを決心した時から、その身に刻みつけておかなければならなかったのに、覚悟しなければいけないかったのに。

蒐集の憂き目に遭い、嘆きを強いられた者たちの、底抜けに暗澹な……怨恨。

そして気づいた……ヴィータの慟哭の理由。

あの子も見たのだ……自分たちによって血塗られた暗闇を、その身で受けてしまったのだ。

逃げなきゃ……でもどうする？

拘束された身となつては、この縄を解くには少年をどうにかする他ない。

けど、その為に、最善ににして最悪な方法は、少年から魔力を奪うこと。

なぜ最悪か？ そんなの決まっている。

この身が浴びている怨嗟の闇をより深く塗りつぶすことに、他ならない。

前述の事実に行き着いた瞬間、空恐ろしくなった。

蒐集が恨みつらみの怨嗟を、生み落としていくのなら、闇の書に記された文体は……怨嗟の結晶。

これが、自分たちの今の主である少女の……救いの糧……だというの？

そんな……そんな……こんなの無いよ。

こんなのが、唯一つの『希望』なんて、  
“マヤカシ”も同然ではないのか？

感触が心地悪い。

体の触覚をオンとオフで自由に消せるボタンがあるのなら、今直ぐにでも押したかった。

だって…とてもじゃないけど、このままで戦えない。

何も感じない振りをして、戦うことさえままならないのに、  
“あんなもの”を肌で触れながら…なんて、身がモタナイ。

イヤダ。

さらに彼女を蝕み、苛ませるのは、恐怖。

蒐集そのものへの恐れ、行為を持続させていくことへの恐れ、続けた果てへの恐れ。

耐えられない…今の自分でさえ、壊れそうになるのに、耐えきれずバラバラになるかもしれないのに、みんなに…あの子たちにまで味あわせるなんて…イヤ…イヤ…イヤ…イヤ…イヤ…イヤ…イヤアアアアアアアアアア!!

湖の騎士が、這い寄ってくる『泥』を前に意識を保っていられたのは…この時までだ。

見るだけでも痛々しい光景ではあるが、自身の意思で藪の渦中へと入ってしまった以上、これらの仕打ちを逃れる術など皆無に等しい。

たとえ『人』になってしまってもだ。

宿命と言うモノは、対象者の都合など、構う意志など微塵も持ち合わせていないのだから。

この時、最後に湖の騎士の身体が知覚したのは、何かが焼き切れた音と、冬にはいささか生温か過ぎる、暖風。

そして、視界に写る物体の原形を留めずに歪ませてしまう、陽炎のゆらめきであった。

戦場は、味方とともに相対する敵を倒し、勝利を掴むべく戦いを繰り広げる場、実にシンプルな構造ではあるが、人を含む知的生命体と



いうものは、一人一人が異なる意中を抱えし生き物であることを忘れてはならない。

海鳴の結界内に於いても、ある存在の思惑により、戦況は思わぬ様相へと形を変えられていく。

勇夜——ゼロとシグナムとの戦闘中に突然現れ、若きウルトラ戦士に攻撃を仕掛けてきた介入者——宇宙恐竜ゼットン。

日常の裏側に生まれし戦地に現れる、番狂わせ。

闘争に会した者たちを、狂乱の豪雨に誘う落とし子たち。

その番狂わせたる異形は、宇宙恐竜一体だけでは有らず、であった。番狂わせの二番手は、光とヴィータのいるオフィスビルのワンフロアーにて。

『主！ 敵襲です!!』

ビルの廊下と、フロアを隔てた内壁をぶち破るその二番手。

「っ!?!——ロボット?」

そのマシンは光沢、輝きや艶などとは無縁な、夜の宵闇と同化し、輪郭、存在そのものささえ暗黒に溶け込んでいく鈍い黒色の金属の装甲で身を固めし人型で、両の肩には同色の砲台を乗せ、顔には計四門のガトリングガンの銃口を備え、右腕には手の代わりに大型の両刃を生やしていた。

この機兵……どこかで見たような?

ぼんやりとだが、光はたった今出現したこのロボットに見覚えがあった。

然れども、『見覚え』の正体をはつきりさせる記憶の源を探す手間は、肩の砲口から発射された真紅の光弾で中断させられた。

すんでのところで横転し、事なきを得るが、マシンの砲撃は果敢なく続く。

未だに力なく虚ろなヴィータをよそに、閃光が舞い上がる、暗く狭い空間を走る光。

閉鎖空間の仇が、今度は御神の剣士を追い詰めようとする。

幸いなのは、マシンの砲口は固定されており、光弾の射線軌道が読みやすかったことだ。

「ライト！ モードチェンジです！」

『御意、ビームセイバーモード』

両手に持つ小太刀の実体刃が消え、代わりに魔力を刀身状に固めた切っ先が顕現する。

物理的な対象を切断するのに最も適した形態——ビームセイバーモードにライトを変形させると、マシンの弾幕を掻い潜りながら漆黒の砲台に急接近する光。

ナオトことジャンボットののような心を持ちしロボットはともかくとして、相手が無味な鉄の塊ならば、慈悲など無用。

「その体躯——刻ませていただきます！」

小太刀の剣先の有効距離内に踏み入れ、左手から右切り上げ、右手からの袈裟がけによるシルバーライトの剣撃が舞う。

迸る、金属の反響。

「なっ!? 耐えられた!？」

戦闘時はウルティメイトフォースゼロのメンバーで最も冷静さを維持できる光でさえ、驚愕の事態。

マシンは耐えたのだ——光とシルバーライト——たちの剣閃を。

御神流の指南を受けた光ほどの剣士なら、何の変哲もない通常の刀でも斬鉄を難なく行える。

まして得物は、普通の剣より、下手すると年代物な名刀よりも刃物としては高性能なデバイス刀。

その断裁を受け止めるとは、何と強固な装甲であろうか。

切り付けたのは迂闊だったな——とばかり、脅威の体躯を持ちしマシンの顔面の銃口が光り出し、同時に回転し始める。

歯噛みしながら、その場を退こうとする光だったが、その前に、かつて光の国や地球と、光の恩恵を受けし世界を壊そうと目論んだ『暗黒皇帝』の尖兵たちであったマシン——無双機神インペライザーは、嘲笑うかの如く頭部の銃口から金色の光線を放出。

正面から諸に受けた光は、ビル外に突き飛ばされ、アスファルトの底へと落下していった。

一番手、二番手の番狂わせの担い手は、いずれも光の巨人たちを苦しめてきた凶敵の一端。

ならば、その三番手も、その凶敵に該当せし怪しげなる魔人……であると言えた。

三つ目の駒は、アルフとザフィーラ、狼の血を受け継ぎし二人の魔導生命体の許へと出現。

その時二人は、人とはほぼ同じ体格をしながら人を超過する腕力を秘める拳に、魔導の力を込め、真つ向からぶつかるところであった。

三番目の介入者は、アルフに突進を仕掛け、盾の守護獣との戦闘に傾倒していたことで不意を突かれた彼女は、魔天楼の間を飛ばされていく。

「人様の喧嘩中に……どこのお邪魔虫だい!？」

運動エネルギーに晒された身に制動を掛けて停止、浮遊を維持しながら犬歯を剥き出しに毒づく使い魔の少女。

ほぼ間隔を置かずして、アルフの瞳にその『お邪魔し』の姿が捉えられた。

「鳥……人間?」

彼女の初見の印象は、三番手を表す言葉としては、適確な言い様と道波できた。

白と黒、それぞれ正反対の体色を左右非対称に塗り分けたツートンカラーの背格好。

胸には赤い十文字、背中には自身を飛翔させし体軀と同配色の翼、猛禽類を連想させる容貌には、白をベースに、目を模した黒のラインが泣き顔らしき形を色どり、よく目を凝らして見れば微細で尖鋭なる双眸が、アルフを睨みつけていた。

鳥人間……もつと表現を踏み込むならば、ほぼモノクロの鳥天狗と称すべきか、背中より生えた翼の形状がかの妖怪をイメージさせるだろう。

何にせよ、アルフには厄介極まる相手。

なぜか？ 人と鳥類を掛け合わせたそいつは飛ぶことに特化された生命体。

飛行はできても、元が大地を駆ける肉食獣では、圧倒的に彼女の方が不利だった。

それを証明するかのようには、急加速による疾風迅雷の勢いを乗せた突貫がアルフを襲う。

一回では終わらせない、すり抜ける度向きなおし、突進を繰り返す。時に手刀や手先からの光線を交えながらだ。

主な攻撃は単純な体当たりではあるが、空の覇者たる魔人のスピードは、フェイトにも勝り、彼女以上の機動性を以てして浮遊空間を我が物に蹂躪する。

「上に下に、ちよこまかと…」

速過ぎる。光線に爪の一閃はともかく、突進はギリギリのタイミングで身を逸らして流すのに手一杯。

これ幸いなのは、アルフが押されてる現況に乗じて、ザフィーラまで攻撃してこないことだ。

その辺りは騎士としての誇りってやつが、追い打ちの選択を許さないのだろう。

こればかりは感謝したくなるアルフ、一人相手のタイマンに集中できるところだ。

狼な自分でじゃ空中戦は分が悪過ぎるが、このままやられればなしであるのはアルフにとって癪だった。

空は烏天狗の得意分野、けどどうにか、せめて一発だけでも横槍入れたあのお邪魔虫な鳥野郎にかましてやりたかった。

魔人の次なる疾駆を回転の勢いでいなし、アルフをすり抜けて彼女に背を向けた恰好となる魔人。

「フォトン——ナックル!!」

見せた隙はチャンス、絶対に逃さない。

魔人に向けて、正拳突きからの魔力弾を撃ち込んだ。

向き直る標的だが、命中は必中、いけるとアルフが思った矢先、魔

人は思わぬ手段を講じた。

胸が——二手に開かれた。

外皮が開放され、赤く輝く結晶が露わとなり、その体部はアルフの魔力弾——フォトンナツクルを受け止め、吸収してしまった。

「く……喰いやがった!？」

アルフの魔力を結晶で『食べた』魔人は、本来の持ち主に——自身のエネルギー込みで撃ち返した。

「なっ!? やばあー!」

返された魔力弾は、アルフが発射した波動を上回る速度で彼女を捉え、夜を一瞬だけ照らす爆発の光を巻き起こすのであった。

三番目の番狂わせたる猛鳥、モノクロで人を模した体躯を持ちし異形の怪魔。

そいつの名は——破滅魔人ブリッツブロッツ。

ウルトラマンを敗北に追い込んだ、根源的破滅招来体の一体。

「ゼーツト——ン」

無音が支配する国道車線の真ただ中にて、無機的な電子音声と、生物として最低限の意志があるのかすら怪しい貌、淡々だが言い様の無いおぞましさを醸し出す宇宙恐竜ゼットン。

尾に獣脚とより恐竜らしい特徴を備え、大きさは2m〜3m程度と、本来の大きさよりも圧倒的に小軀にして瘦躯ではあったが、底なしの掴みとれなさの不気味さは、劣ってはいない。

ただ傲然と不動に直立、たったただで戦意を根こそぎ奪い取る威圧感と圧迫感さえ放出させている。

ブレイドモードの零牙を正眼で構える勇夜ごとウルトラマンゼロも、戦意と闘争心自体は維持させているが、強圧なゼットンの佇まいに神経をいつも以上に尖らせていた。

ウルトラマンの姿に変身したいところだが、シグナムのいる手前ではできない。正体隠して彼女と戦っているからだ。

どうにか隙見つけて一旦ここから離れでもしないと、それまではこ

の姿で戦うしかない。

“さすが“ウルトラマン”を倒しただけのことは……ある”

額に冷や汗が滴れ落ちる勇夜が相対する宇宙恐竜は、彼の故郷がある宇宙では最強クラスの生命体である。

個体によつて強さはまちまちではあるが、ウルトラ戦士ですら圧倒する破格の戦闘能力を秘め、度々文明を育みし知的生命体の強硬派たちによつて侵略兵器に利用されてきた。

実は今までウルトラマンと戦つてきたゼットンたちが彼らに披露し翻弄してきた能力や、その体格は、後天的にかつ人為的に付加されたもので、いずれの個体も侵略者たちによつて遺伝的な改造を施されている。

瞬間移動も、光線吸収も、強固なバリアもだ。

ならば、どうして侵略者はゼットンを自らの侵略兵器に改造させるのか？

答えは——類稀なる生命力。

普通なら、有機生命体に過剰な改造に加えることは大きなデメリットが伴う。強引に体を弄られたことにより、文字通り“命を縮めてしまふ”、よつて改造措置を受けた生物は短命で、兵器としての実用性が良いといえない。

しかしゼットンはその例外。ウルトラ戦士を圧倒する生体兵器にしたてあげられても尚生きられる。

これが人工的に養殖をしてまでも侵略者がゼットンを重宝する理由だ。

今勇夜に立ちほだかるこの宇宙恐竜は、大きさを除けば最も野生の宇宙恐竜に近い姿だが……直感で解る……こんなせいぜい人間よりほんの少し上回る大きさでも、これまでの同族たちと勝るとも劣らぬ強敵だということ。

ゼットンへの警戒を維持しながら、先まで戦っていた烈火の騎士を見やる勇夜。彼女もこの状況は想定外であつたらしく、乱入者が余りにも掴み処が見当たらない異形なことも有り、グレンファイヤー介入時のように非礼を詫びて攻撃態勢に至るすまなならない有様、ここ

は様子見に徹するしかあるまい。

「ゼットン——ト——ン」

一方で直立不動を徹していたゼットンが、先手を打ち出す。

顔の無い貌に付けられた光体が光り、そこから赤い光弾を放つ。

対し勇夜は、右手の零牙を正面横向きに付きだし、左手を刀の峰に添えると、掌から半透明の青白いドームが敷かれた。

『ゼロディフェンサー』

ゼロが人間体時に使える数少ない太陽——ディファレーターエネルギーを用いた防御技であるバリア。

大きさだけでなく、長方形、円形、ドーム型と形状も自由自在に変えられ、彼自身の反応速度も相まって防御魔法よりも早く形成可能な光の壁。

ゼットンの光弾は、即座に飛び道具による攻撃だと聴勁で鍛えられた感覚で察して勇夜が正面に張り上げたバリアと衝突。

防ぐことはできたが、光弾の重みは想像以上で勇夜は押され気味、ならばと勇夜は両足を右斜め方向に進めながらバリアを逸らし、光弾を受け流した。

「バーストストーム！」

と同時に、返す刀で横薙ぎに零牙を振るい、風の衝撃波をゼットンに放出、さらに零牙をダガーモードに変え、二つとも投げつける。

大気に悲鳴を上げさせながら迫る不可視の弾道と短刀たちは、しかし両腕を縦に上げたゼットンの周りに現れた多面体の障壁で、轟衝斬は阻まれ四散、零牙も簡単に弾かれた。

『ゼットンシャッター』

宇宙恐竜が持つ、難攻の壁。

過去の事例を照らすだけでも、堅牢さはゼロツインシユートにも耐えかねなかった。

「上等！」

けれど一回防がれた程度で、戦意を失くす度量でもないのが勇夜ではある。

日頃の癖の鼻を鳴らし、地に魔法陣を敷きながら駆け出していく、

ゼットンシッターがあるのなら。

「フォトンサイクラー！」

腰に添えた左手に右手を一度置き、虚空を横薙ぎに振るい、今度は指先から青緑色な三日月状の魔力光の刃、『フォトンサイクラー』を飛ばす。

さて……シッターで防ぐか、或いは——ゼットンが次の攻撃にとった行動は、横向きにした両腕の握り拳を繋げ、光刃を吸収、すかさず前方に伸ばすと手先から波状の光線が発射された。

ウルトラ兄弟次兄に致命傷を与えた光線吸収と、それを自身のエネルギーを上乗せして打ち返す波状光線、が、その行動パターンは予測済み、勇夜は手元に戻ってきた零牙をキャッチしながら、身を転がせて波状を避け、前転でゼットンに接近しながら零牙をブレイドモードに変えると、起き上がると同時に抜刀し、下段から切り付けた。

が、剣先がゼットンの表皮に触れる寸前、空間が突如歪んだかと思うとゼットンは消え、勇夜の背部の痛覚が迸った。

瞬間移動、いわゆるテレポートによつて消えたゼットンが、勇夜の背後に現れると同時に正拳を当てたのだ。

ただの拳撃、されどそれは常人以上の身体性を持つウルトラマンでさえ容易く突き飛ばす。

宇宙恐竜の攻めはそこで終わらない。

勇夜が飛ばされた先にテレポートで先回りして彼を蹴り上げ、その上さらに先んじて、空へ上げられた相手を待ち構え、尾で殴打し、またもテレポートで先どり、長い尾で勇夜の身を掴み上げ、まず縦向きビルへと叩きつけ、外壁を英語のIの字を描くように大きく抉りながらそのまま大地に彼を叩きつけ、さらに向かいのビルのフロアに向け、数回回転を乗せて思い切り投げつけた。

バリアに、光線吸収に、テレポートまで……ゼット星人が改造し、ウルトラ兄弟の次兄たる『ウルトラマン』を完敗に追い込んだ天然個体の能力を、このゼットンもまた全て有していた。



強い……強過ぎる……格が違うとはこのこと。

大きさは本来のサイズより小さいが、ジャックの兄貴と戦ったバツト星人の残念な養殖型や、怪獣墓場でベリアルに無理やり復活(おこ)されて自分と戦った怪獣軍団の一体だった個体と比べることすらおこがましい。

『最強』に偽り無し、ゼットン星人にバットにバルタンと、侵略者がこぞって利用したがるわけだぜ。

今のテレポートからの連撃で体があちこち悲鳴を上げて言うことを聞いてくれないが、どうにか立たなきや……隙は見せられない。またゼットンが攻めてきたら————一連のゼットンの攻勢にもめげず、立ち上がる勇夜。

ふと、彼はある異常をくみ取った。

やけに……静かな空気。なにゆえ、静寂に違和感を感じさせられるのか？

そうだ……聞こえない……ゼットンが現れてから絶えず響き続けた、やけにじわりと来る奴の独特の鳴き声が、一切途絶えていた。数秒……数十秒と時間が勇夜の荒れた息の数とともに刻まれていくが、ゼットンから発す殺気どころか、生命体そのものの気配も感じれずにいる。

警戒を怠らぬよう努めながら、ゼットンが勇夜を投げ飛ばすまでは「紳士服売り場であった」百貨店の内部を走り、破壊された窓から外へ飛び降りる。

案の定、と表すべきか、シグナムもゼットンも、この場から姿を消してしまっていた。

残っているのは勇夜と、戦闘の煽りを受けた破壊の爪痕のみだ。

「やってくれるぜ……」

こいつは一杯喰わされた。

怪獣を使役する仮面の男たちの狙いが、騎士たちの意志を利用しての蒐集の完遂だということは明白、なので今回のように大小なり彼らを追い込めばまた介入しようするのも明らか。それを踏まえ、結界に

は一定以上の大きさのある物体を転移できない仕様にし、人間大の異星人の類も送られぬよう、常にアースラクルーが目を光らせつつ結界の回路を随時切り替えハツキングされないよう対策はしていた。

「(エイミー、やつらの尻尾は?)」

『ごめん、どうにか補足しようと頑張ったんだけど、騎士も怪獣もみんな反応が全部結界からロストしちゃった』

「(そうか…)」

けど連中にはそれすらも温い方だったようだ。

まさかクルーの目を掻い潜ってスペックはそのままにサイズをミニマムにした怪獣にして寄越してくるなんて、なんつー技術力だよ。

結果的に自分らは連中を過小評価していた訳だ。苦笑いするしかない。

おまけに怪獣以外に痕跡を残さずと来た。宇宙恐竜を送り込んできたその黒幕な誰かさんの手際の良さを前に、感心すら抱かされてしまう。

さてよ……自分とこに喧嘩吹っ掛けてきたってことは。

「(光(リヒト)！ アルフ！ お前ら無事か!?)」

「(はい…どうにかですよ……面目次第もございませぬ)」

「(あたしも……無事っちゃ無事なだけどさ………今なら『トムキャット』の気持ち解るよ)」

二人も同様に襲撃を受けたそうだが、とりあえず大事にはいたらなかった。

光にはインペライザーが、アルフにはブリッツブロッツが、まるで彼らを騎士たちから遠ざけようとするかのように攻撃してきたらしい。

ほぼ至近距離から顔のガトリング砲の光線をくらった光だが、魔力フィールドを全開にして、ダメージを軽減、ビルからは落とされたが、どうにか空中で姿勢制御して、アスファルトに墜落は免れた。

アルフはと言えば、魔人に撃ち返された自身の魔力弾をラウンドシールドで防ぎ、その僅かな間で転移魔法を敢行して事なきを得た………得たのではあるが、急ぐあまり行き先を指定しない行き当た

りばったりな転移であつたので、ゴミ袋が不法投棄された路地裏のゴミ山に頭から逆さに突っ込むという、トム・キャットさながらな災難に遭ってしまった。

あるいは四次元怪獣プルトンお手製の異次元空間で、断崖絶壁から本部基地内に置かれたバケツへと顔を突っ込んだコメディリリーフな科学特捜隊員にも喩えられよう。

「(あくゝ折角手入れした髪がぐちゃぐちゃだよ……)」

「(それは……)愁傷様です)」

使い魔で勝気な狼っ子だが、彼女も女の子。

身なりのは気を使う方であるので、ゴミの腐臭と汚れまみれになつたオレンジの髪に嘆くのも無理からぬこと、異性であるウルトラ戦士と二次元人はハモつて勞うしかない。

とは言え自分よりボロボロなやつがいなくて良かった。

勇夜一人とつても、シグナムにゼットンとの連戦で体中打撲に切り傷に火傷だらけ、炎を掻い潜り、ゼットンにコンクリートとビルとあちこち叩きつけられたことで、バリアジャケットも髪もだらけ、怪我の度合いなら一番酷い。

これだけ命がけの闘争を駆け抜けたというのに、事態の進展と云えばその前の久遠とのコンタクト、何が何でも汚名を重ねる守護騎士を止めなきゃならないこと、暗躍者の傀儡な強敵の存在が明るみになつた——ぐらいときた。

骨折り損この上ない。

こんな俺の今の姿を見たら、フェイトはどう思うかな。

まだ小さいのに、歳に似合わず思い詰めやす過ぎる性質だから、師匠に実戦の場に出ることを止められてる現状だけでも、相当メンタルに来てる筈だ。

特にフェイト……もしまたあの時みたいに泣かれて、涙で顔をぐちゃぐちゃにしちまつたら……どうすつかな。

髪留めのこともあるから、心配させてしまうのは避けられそうになり。

なら下手に包み隠さずも誇張もせず、傷だらけだがピンピンだつて

正直に言うとするかな。あんま強がりすぎると、却って気負わせてしまう。

いや……むしろ、フェイト以上に気がかりなのは……友の妹で、フェイトの親友である彼女の方だ。

「みんな……死んじやうところだったんだよ」

人間としては二度目だが、ウルトラマンとしては初めて会ったあの時に、自分とユーノの前で涙を流した時から薄々だが感じていた。

あの子は誰かの助けになりたい、それができる存在になりたい気持ちだが、強過ぎる。

光が思う通り、魔法との出会いは、その願望を為せる格好の転機だった。

潜在的に抱える彼女の欲求は、世界でトップクラスに御人よしな種族の端くれである自分が言うのも何だが、普段自己主張を余りしないだけで、人によって彼女の内面はとても特異なものと受け取られてしまうくらいだ。

打算を超えて誰かの為に尽力することは、素晴らしいとは思いうし、否定はしない——が、それが度を超えてしまうのも、一種の危うさと言えた。

その気持ちたちが昔の自分とはまた違った形で、あの子自身を歪めなきやいいけど……と懸念を心中抱え、勇夜はその場を立ちあがったその時。

「(勇夜さん!)」

「(何があつた? そんな慌てて)」

丁度のころ合いで、切羽詰まったユーノの声が響き渡った。

「(クロノが……蒐集を受けて……倒れたんです)」

「……………」

瞼が開かれて、白眼の面積が瞬間的に大きくなった。

もし携帯での連絡だったら、うっかり地面に落としてしまったかもしれない。

それだけ頭の奥まで電流が流れる並の、衝撃の度合いだった。

解ってた筈なのに、どうして俺は——この瞬間まで気づかなかつ

たのか。

後悔の念が、一瞬で全身を覆い尽くした。

この日の戦いは、またしても第三者——介入者たる人間大の怪獣、マシンたちを寄越した傍観者によの横入りで勝敗は実質お預けに持ち越された。

相変わらず、仕事場と兼任された彼の住み処らしき部屋は、室内の灯りが極端に少ない。

「いかがだったかな？ “彼らの世界” の生命体、兵器をモデルとした作品群は」

『SOUND ONLY』と表示された3Dディスプレイに話しかける男。

彼は今、一応は同志と呼べる者たちと連絡をとっていた。

言われるまでも無い、文句の付け様が見当たらない戦果だ——と通信相手は思った。

お陰でこちらは、結界の術式プログラムを術者本人に気づかせずに細工し、あの三体と騎士たちを結界外へ転移させる逃亡の補助を、容易く実行できた。

もしあの場に対処できるのが自分たちだけであったとしたら、せいぜい書本体を持った一人に書に内包された膨大な魔力による広域魔法を使うよう焚きつけるぐらいしか手はなかった。

反面、腑に落ちない点もある。

彼の言う作品——人工生命体やマシンが、本当に博士が一から作り上げた、いあゆるキマイラと呼ぶ生物または機械なのか？

奴らと戦っている者たち、特に異世界からの戦士の反応を見ると、直感的に違うかもしれないと思ってしまう。

疑念を持ってしまうのは、白状すれば気が引ける。

我らの■とは、何十年来の知己である方だからだ。

前述の気持ちを抱く己には良い気はしない、それでも気になるものは気になってしまうのだ。

『しかし、これだけの戦闘能力を持つ生体兵器が、本当に管理世界の生物だけで賄えるのですか？』

「現状は『企業秘密』としか教えられないよ、君たちもこの世界では『禁じられた果实』を迂闊に広めたくはないはずだ」

そこを突かれるのはこちらとしては痛い、ともすればロストロギアと見なされかねない技術なのだ。

返す言葉が全て塵と化した。

今は押し込めておくしかないと言い聞かせる。

たとえ彼の作品たちの恐るべき力に、空恐ろしさが芽生えていたとしてもだ。

否、だからこそか……空恐ろしさを感じるだけに、彼の言辞はむしろ納得することができた。

この兵器たちは、次元世界の秩序のバランスを崩壊させる火薬庫であるのだから。

むしろそれ以上に押し込めておくべきは、自身たちの内にある。

有体に表現してしまえば、感情、こうして息を潜めるしかない現行への息苦しさ。

口を割って申し上げるなら、羨ましかったのだ。

あの結界の中で、堂々と闇の書の一欠片であるヴォルケンリッターと、真っ向から相対できる「彼ら」の存在に対してである。

本来なら彼らの行為もまた、危うく再び惨劇を起こしかねない業なのに、羨慕の念を抱く「自分たち」がいる、

特に二刀使いの言葉には溜飲が下がった。

カタルシスさえ感じ、良い意味で身が喜びで震えた。

本人にその気はなくとも、彼は自分たちが思いつきり奴らに直接口にしてぶつけたかったがずっと押し留めてきた想いを、代弁してくれたのだ。

ある意味、念願叶った瞬間である。

まさか「あの子」が自分ら以上の黒く淀んだ内情を見せたことに

は、複雑な心境ではあるけど……たとえ遺族として当然の反応であったとしても。

でも、時間が無い上に、これは最後に残されたチャンスなのだ。

もうこれ以上、あの忌まわしき本による災厄の連鎖を、完膚なきまでに止める為の……それを実現させられるなら、潔く、■■■■が被ろうとしている泥を、この身で受けてみせよう。

それが我らの、覚悟だ。

だがその覚悟さえ、一連の事象に愉悦を見出す輩によって、当人が知らぬまま、着実に歪めさせられていたとは知らず、つづく。

STAGE 31 | 見落としていた真実

闇——その世界もまた、漆黒の暗闇が多くを占めていた。

室内に灯る明かりは、人工的な多色の光たちのみ、それでも場を支配する闇を凌駕するには心許ない。

どうも知的生命体を作った一室のようだが、壁と光点以外に、これといった物体は見当たらなかった。

しいて言うなら、複数空間に浮かぶ長方形のホログラムに連続で指をタッチさせている何者か……だ。

一応、体格は人間に近くはある。

背丈も人よりやや大きいくらいで、そう極端に巨体という訳ではない。

他の外見的特徴は、黒と赤と金色で彩られた西洋甲冑風なアーマーと三対の翼に枝分かれして折りたたまれたマント。

昆虫の目にも見える、上から二つ、三つの順で盾に並ばれた水色に光る瞳らしき光体と銀色の顔色、口らしき部分は一見して見当たらない。

モニターに何かを入力している知的生命体の部屋に、擬音でカタカタと表現できる通信音がなった。

音源である空間モニターをタッチする生命体……星人。

「あなたでしたか、また次元航行要塞や怪獣のDNA提供のような難題な注文ですか？ “博士”」

独特の声音を発する星人。

男女双方の声を混ぜ合わせ、エコーをかければ、丁度このような発声になるかもしれない。

『今日は様子見と言う奴だ、デラス』

通信は音声のみで、画面には声の大きさに比例して波となって揺らめく線しか映っていない。

「ほおお……それは珍しい」

『私は直接関わってはいないが、それでも “この世界の技術” がそこからどんな化学変化を起こしたか、中間経過が見たくなくてな』



「その技術のお陰で計画は飛躍的に進みました、サンプルもわざわざ異世界に飛び、取り寄せるリスクも減りましたからね、何せ遺伝子のデータさえあればこちらで実験用検体を生み出せるのですから、新種となると別ですがね、それはそうと、そちらの調子は如何ですか？

例の次元を彷徨える呪われし魔の書物は」

『ものにするにはまだしばしの猶予があるがな、下手に手を出せば、書の呪いが『存続』の名目で転生を始めてしまう』

「難儀なものですね、一介のシステムでありながら、なんと病的な輩でしょう」

通信を交わす者たちは、どうやらどちらも科学に精通している存在のようだ。

『なのでまだ当分は、どうか奴らの光に呑まれる前に手にできた呪われた石一つと、書に関わるものたちの動向で慰み物としている身だ』

「その石もあちらの世界では手に余っているのでは？」

『私にとってはその暴走など小童の足掻きにもならん』

「そうでしたね」

通信相手の言葉に、ふっと笑い声を上げる星人。

「そしてあなたの慰み物も悪くはない娯楽だ、特に書の守り手たちはあなたの言葉越しで聞いただけでも楽しませてくれる、自分たちこそ救い手だと信じながら、実はその真逆だと言う現実、はたから見れば何と嘲笑いを齎す道化なことか」

『お前が実験場に行っている世界の“地球”も、その娯楽の一つであろう？』

「ええ、さて……今日はどんな“ドラマ”を彼女たちは見せてくれるのやら」

星人はまた新たにモニターを空間に出現させる。

それに映っていたのは、工業機械的な無骨さのある煤に汚れた飛行物体と、それを乗りこなす10代後半から二十歳前後の歳の幅があるの少女らと女性たちの姿。

星人の“娯楽”を強制的に付き合わされるといふ理不尽にも屈せ

ずに足掻き続けてる人間たちの勇姿とも言える。

いわば神の視点でその「地球」を見下ろしながら、悪魔たちの近況報告という名の談話はしばらく続いた。

最初に感じ取ったのは、表皮が接触していることで送られる生き物の体温だ。

腕、胸、お腹、足と、体のあちこちの部位から、熱が身の奥まで伝わってくる。

意識がまどろみから覚め、次に意識が感じたのは、浮いてるのか地に居るのか分からない不思議な感覚と、微細な上下の揺れ。

今彼女——湖の騎士シヤマルは、誰かに背負わされている格好だ。

「おねんねタイムはお開きか?」

「ぐ……紅蓮……君」

彼女を抱えて運ぶ主は、八神紅蓮ことグレンファイヤーであった。シヤマルは反芻する。

自分が意識を失うまでの流れをだ。

「見た目」ははやくらいの小さな……そして我らの蒐集の憂き目に遭った遺族であるらしき執務官の男の子に見つかり、シヤマルの切り札たる旅の鏡で形勢を逆転させたものの、蒐集された魔力に意図せず込まれた彼の自分たち闇の書への呪詛に精神……心が耐えきれず……ああ、やつぱりあの時に感じた陽炎も炎熱も、グレンファイヤーのものであったのだ。

その時グレンは怨嗟溢れる想いとともシヤマルを捕らえて離さなかったバインドは、彼の炎熱の如意棒——ファイヤースティックで焼き切り、彼女を抱えて即座に退散、一体海鳴市外まで飛び、今に至っている。

「他のみんなは? 脱出できたの?」

「っ………とりあえず……一応な」

明朗快活な彼にしては、やけに歯切れの悪い口調で問いを返した。

シグナム——『魔導殺し』と戦闘中、彼が“ゼットン”と呼称した生命体は現れ、魔導殺しを攻撃し、隙を作った間に他の何者かによる転移魔法用の魔法陣シグナムをで連れ出された。

ザフィーラ——彼と同じく狼が素体な魔導生命体の少女と二度目の交戦時、人と鳥を掛け合わせた異形が少女を追い払い。守護獣はシグナムと同様、魔法陣で強制的に外部に転移される。

ヴェータは……といえば——

「途中から意識がパーになって、気が付きや公園の雑木林で転がってたんだと」

湖の騎士と同等以上の精神的重圧を受け、心身喪失状態にまで追い込まれたが、どうやら彼女も異形なものたちを差し向けてきた誰かによって、管理局の張った網から逃れることはできたようで、彼女を発見したシグナムによれば、戦線に出られるか出られないかの問題は抜きにして、一晩すれば意識は戻るとのことだった。

「その……あいつらを助けてくれた怪物なだけだよ」

「やっぱり、紅蓮君のいた世界から」

「多分な、ただ人さまと同じサイズってのが引つかかんだよな」

「じゃ、本当は紅蓮君たちくらいの大きさってこと?」

「なんだけだよ……」

グレンファイヤーや仲間のウルトラマンゼロにミラーナイトといった巨人たちのように、体のサイズを変えられる体質を備える生命体がいることを踏まえても、『怪獣』が人間大で現れるという事態は解せぬものであった。

差し向け主が『仮面の男』ら不明の勢力で、何かしらの目的で騎士たちの蒐集に手を貸し、怪獣たちを兵器として運用できる技術力を有している。

ここまでなら、シャマルたちにも納得ができる。

だがその先は?——解らない。

未だにその勢力がどういう意図を有しているか、不透明になる一方だ。

だって……紅蓮に久遠はともかうとして、助力するメリットが無

い。

闇の書を使えるのは、今際の主であるはやと管制プログラムたる『彼女』のみ。

書の一部分であるヴォルケンリッターさえ、機能の一端しか扱えない。

不気味だ：自らの素性も目的も一切明かさずに手を貸してくる存在が、掴み処の無さが、未知なゆえの畏怖を沸きたてる。

仮面の男にしてもそうだ。

マスク越しに、良い気はしない感情を隠してるつもりだろうが、それがどうしようもなく滲み出ていた。

これならいつそ、はつきりと「絶対に許さない」と断じてくれた方がまだマシというものだ。それなら白黒、明確に区別できるからだ。けれど：区別はできても、許容は昔のようには行かない……と付け加えておかないといけない。

「私と戦った男の子は……どうなったの？」

少年の魔力をリンカーコアから採取した際、あの時彼の感情がシャマルに流れ込む事態が起きたが、これはある程度カラクリが証明されている現象である。

大気中の魔力素おコアに取りこみ生成された魔力には、魔法使用や魔力をエネルギー源とする機械の燃料以外に、ある特性を備えている。

それは——感情の伝達、すなわち人間たち知的生命がその時沸き上がる心情が付加する性質であった。

この性質を利用した主なる魔法が、念話や精神リンク。

前者は言葉に乗せた微細な魔力を送信相手の脳に送り込む魔法。

後者は、使い魔システムの構築の過程で発見されたもので、想定外な偶然の産物なのだ。

「魔力剥ぎとられたせいで倒れちゃったよ、お仲間さんが見つかるまではビルの上でお寝んねだろうさ」

「そう……」

シャマルは反芻する。

あの時の少年の目は、戦場で何度も目の当たりにしてきた眼光だ。戦地に於いて、彼ら守護騎士は否がおうにも注目を受ける存在であった。

古代のベルカ式魔法を使いこなす彼らは正に百戦錬磨、一騎当千。たった4人で戦況をひっくり返し、徹底的にかき回すその様は荒れ狂う大竜巻の如し。

一つの戦いが終焉を迎えし頃には、骸が散乱した荒野で四者だけが大地を踏みしめていることが一度限りではなかった。

人間が感情を有する以上、殺し合いという不条理が蔓延する空間では、慟哭や憎悪といった負の情念は幾多も産み落とされる。

特に彼らの上げる戦果は、彼らにその情念を何度も見せつけてきた。

何度も何度も、もういちいち数えることが馬鹿らしくまるまでに、だから彼からの怨嗟の目を受ける仕打ちには、慣れている筈だった。だがそんなもの、思いこみだ…誤魔化しにしてマヤカシであったのだ。

今まで生臭い血と黒き情念の泥が塗れし地で戦ってこれたのは、精神を凍てつかせたただけでなく、そもそも己が人の「心」と言うものが理解できなかった…そんなもの必要ないと切り捨ててきたからだ。

実際、そのお陰で彼らは勝ち続けた。

けど今は、「人」としての生活を送ってきたことで、彼らはその強みを捨ててしまった。

もつと早く知るべきだった。

自分らの強さは、『人でない』からこそ持ちえたもの。

なまじ人に近づきつつあるヴォルケンリッターはそれを失いつつあり、人としてはむしろ、まだ赤子も同然であること。

今まで切り捨ててきたものたちによって、結果自分たちを追い詰めてしまうとは…なんと滑稽であろう。

でも…後悔はしたくない。

たとえ…主であり、彼女を抱える少年の大切な家族であるはやてを死なせない為にも、迷ってはられないのに、きつとこの先も『あ

の子』と同じ存在を生むことに悩み苦しむし、板挟みになるし、蒐集(こうする)ことしかできない自分を攻めて続け、罪科に溺れゆく運命だとしても、『人』になっていく自分たちを否定したくなかった。

「黒いおちびさんとやり合って疲れてんだろ？　もう少し寝ててもいいぞ」

「うん……ありがとう」

だって、かつてなら……ただの人の体温としか認識できなかった……彼のこの熱が、とても暖かったから。

そうしてシヤマルは、再び眠りの床について――

「うっ……最近シヤマル喰い過ぎなんじゃねーか、何か妙に――」

「ひ、ひっどろろい！　女の子にそんなこと言うなんて！　バカ！

紅蓮君の人でなし！　デリカシー皆無！　朴念仁！薄情者！」

「わ、悪かったから、ボカボカすんの止めろって！」

――床につくその前に、何気なく呟いた紅蓮の一言で一悶着起きたとき。

シヤマルが「女の……子」？

まあ……『見た目』二十歳前後で童顔だし、まだ湖の騎士も女の子……ですよ？

だが、この安らぎさえ、一瞬きのもの。

魔導書が長い時の中で積み重ねてきた泥は、まだその牙を隠したまま、その時……までじっくりと待ち構えている。

彼女らの願いなど、それこそ歯牙にもかけずに。

現在は周囲の風景にカメレオンよろしく擬態し、月面に身を置いているスターコルベット、ジャンバード。

船に搭載されたAI『ジヤン』によってよほどの事態がなければ彼が機体の制御を賄っているが、人間を乗せる必要上、内部には居住スペースが設けられている。

搭乗者に何かしらの体調不良が起きた際のアクシデントにも対応できるよう、メデイカルスペースも当然ながらある。

並列された形で複数置かれているSF映画等の長期航海用の宇宙船でよくみる冷凍睡眠カプセルに似た円筒状の治療ポッドで眠っているのは、先の海鳴市街での戦闘で蒐集されてしまったクロノであった。

ただでさえリンカーコアから直接魔力を篡奪されただけでなく、その状態で魔法を行使した影響で器官が収縮している。

ガタが来たエンジンを積んだ車を無理やり急加速させたようなものだ。

肉体の損傷が殆どないのは幸いだったが、それでも無理がたたたりシヨックで意識喪失し、ポッド内で眠りの床につく彼をキヤットウオークとメデイカルルームの間に敷かれたガラス越しに見つめる者たちが二人いた。

一人は服の下に包帯をいくつも巻かれ、顔にも絆創膏が貼られた勇夜。

ポッドで眠る少年より遙かに『怪我人』な風体なので、少し奇妙な光景だ。

もう一人は彼の補佐官兼幼馴染のエイミー。

二人とも、顔に掛かった影と負けず劣らず暗い貌だ。

普段の彼らの人となりは、明るい方だとはつきり言える。特にエイミーは、笑顔を絶やしていない時を探す方が難しい。

それだけに、今の面持ちの暗さがより際立っていた。

「リンディはどうしてた？」

「気丈に私たちに指示を出してたけど、多分心の内はシヨック受けてると思うよ…」

「……………当然……………だよな」

怪獣の乱入で騎士たちが結界から逃げられても、市街のあちこちにサーチャーを出しての搜索は続けられた。

彼らが海鳴市に暮らしていることを判明する証拠が出てる以上、そう遠くには逃走はしていない筈だからである。

しかし結局、姿はおろか魔力の一欠片すら捉えられなかった。

「私も……………びつくりしちゃった、そりゃ……………クロノ君だって人間の男

の子だもん、お父さんの仇前にして、何も感じないわけなかったよね」  
彼女の言っていることは無論、今行方を追っている魔導書とプログラム生命体へのお世辞にも宜しくない気持ち。

それは、彼らがクロノの家族の仇であると言うことと、彼らへの私情を公儀を以て遂行しなければならぬ筈の任務中に、それも仇本人に露にってしまったという事実。

彼の父、クライド・ハラオウンは、七年前管理局にとっては何願だった《闇の書》本体を確保し、その護送の途中書が起こした暴走によって自らが統べる次元航行艦と運命をともした——と、局に残っている記録をコンパクトに纏めるところなる。

この時、クロノの年齢は8歳。

「原因の一つは、俺かもしれないねえ」  
「え？」

そう……まだ8歳で、あれからまだ7年しか経ってないのだ。

なおかつ15歳のクロノがひた隠しにしていたものを表に出して戦ってしまった理由を、勇夜はいくつか心当たりがあった。

自分と……師匠のレオ——おおとりゲン。

勇夜——ゼロにとって彼は、単に宇宙拳法を指南し、歪みに歪んだ彼の心を更生してくれた師、だけではない。

ある意味では実父のセブンと並んで、もう一人の父とも呼べる存在だった。

一方で、クロノ小さい内に父が亡くなってしまったことで心のどこか、無意識の領域で抱えていた筈だ。

父性への……渴望を。

レオ師匠本人は、地球に亡命し暮らしていた当時、兄弟と言える間柄な少年がいたが、子育てをした、つまり父親の経験があるとは言えない。

しかし、普段、特に戦いに関する時は徹底して厳格な態度を見せながらも、その奥には包み込むような愛しさを秘める気質、やや古風であるが紛れも無く「父」の姿だ。

自身と師とのやり取りは、深いところに隠れていたクロノのその思



いを、浮上させてしまったに違いない。

ただ、市街から救助されて搬送されてきた時に浮かんでいた、あの悲しみと憎しみが入り混じり、多量の涙で濡れていた彼の顔を見れば、他にも原因があるのは明瞭。

そいつはやはり……：紅蓮、久遠、騎士たち、そして魔導書の主の間でできた……擬似家族の繋がり。

彼らが家族的な振る舞いをしている光景を、はつきり目に行っているわけではない。

けれどもだ。あいつらの思い詰めて、張りつめて、がむしやらさも帯びた姿を目にしていたら、絶対に「家族」として幸福を噛みしめられる暮らしをしていたんだと、不思議なくらいに確証を持てた。

局の記録を要約すれば「心持たぬマシンと見なされてたのに、いざ対面すれば人間そのものだったことと、口は悪くとも認められた相手には義を惜しまずに示すグレンのあの決断がその確信をより強めてる。

きつと、さぞ満ち足りた日々だったんだろう……でも、それは一方で呪いを生んでしまうものだ。

今を除いて一番近い時期で7年前とそれより昔から、闇の書が現界する度に大勢の犠牲者を生んできたからである。

もし犠牲者の遺族たちが、仇たちの「幸せ」を見てしまったら、目にせずとも知ってしまったらどうなる？ 良くて好い気はしない……それだけならまだ良い。

最悪……仇に対し冷たい殺意が沸き上がってしまうかもしれない。自分たちから理不尽に奪っておきながら、その奪ったものを享受する不筋への憤怒で、彼らに死を以て償わせる……クロノはあわや、その最悪な方向に向かってしまうところだった。

今日はどうにか、最悪に着く前にストップは掛かったみたいだけど、基本被疑者を殺さずに逮捕するように決められてる管理局の局員でありながら、私情で引導を渡してしまう結末だって……あり得たのだ。

「そう自分を攻めるもんじゃないって、遅かれ早かれ、ヴォルケンリッターたちの今の生活は明らかになってたと思うし」

エイミーからの言葉を、勇夜は右の握り拳でガラスを叩いて制した。

ここは仲間の体内と言ってもいい為、力加減は最小に留めさせているが、ガラスに密着した拳は、小刻みに震えていた。

「そうだとしてもな、早いとこシグナム達があんなことをやらかす理由を掴もうと躍起になる余り、あいつをほったらかしにして、俺の仲間の家族を殺させちまうところだったのも確かなんだよ……」

知っていた……分かってた筈なのに、あいつの中にある爆弾を。家族がいない現実を生きなきゃならない空虚さつてやつを。

自分では体験しえない他人の幸せを眺める度に、必死にこらえなきゃならない苦痛を、自分は経験していたと言うのに。

同じ体験をしてきたクロノに何もしてあげられなかった悔しさと己への至らなさ、不甲斐無さで口の中がきつい苦味に覆われた。

「情けねえ……」

勇夜のそんな横顔を黙々を眺めるエイミー。

そういえばと彼女は思いだす。

初めてクロノから聞いた時は、それもそれでびっくりした。

彼がかの光の巨人——ウルトラマンだったってこと。

職業上、ちよくちよく世界を飛び廻っているから、常識外……的なことには慣れていたと思っていし、彼が普通の男の子中身が何なのか分かっててもびっくり箱を開けて驚いちゃったような感じを体感させられたものだ。

だけど、畏怖感というか異物感というか拒否感というか、そういった気持ちまでは浮かんでこなかった。

なぜかと言えば、いくら体がビル並みに巨大になったり、目で捉えられなくなるくらい小さくなれたり、腕とか頭とかから光線だせたり、惑星内でも音速、宇宙だと光速を超えちゃう速さで飛べたりできる能力を持ってても、今の守護騎士たちと同じように喜怒哀楽ある心を持った存在であることを知ってたから……なんだろうな、多分。

それに、彼には、先の連戦と敗北による傷の痛みよりも、他人のことに心を痛められる度量の広さだって持つてる。

根っこではどこまでも善人、むしろそれを普段はぶつきらぼうな態度で隠してしまうシャイさが、何かカワイいとも思えた。

さすがに今は今の空気と、少しからかい半分には出せない顔をした彼の前では、いつもみたいに朗らかに、少しからかい半分に口には出せないけどね。

だからなのかも、人からかけ離れた身体でも心があると分かるから……余計に納得いかない気持ちが目には溜まる潤いと一緒に込み上げてくる。

「なら……それならどうしてなんだろう？」

「エイミィ？」

「完成した闇の書は、ウルトラマンでも封印するだけで精一杯で次元一つ消しちゃうほどの暴走起こすんでしょ？ それにね、怪獣使つてまで蒐集の手伝いをしてる人たちだって、あの人たちは騎士みたいになんかどうしてでも蒐集しなきゃならない事情もないんだよ？ なのに……どうしてクロノ君みたいな想いをする人たちを……増やすような真似をしてるの？」

彼女が提示した疑問の壁を壊す解答は、まだこの時見つかっていない。

勇夜は例の連中を束ねる首謀者と、怪獣という戦力を投入させた人物に目星こそ付けているものの、連中の情報が少なすぎる。結論を急いでしまえば、思い込みで真実を見逃してしまう恐れもあった。

それと……自分の中では重要参考人扱いなあの人と関わりの深い人たちのことを配慮すると、迂闊に口に出せなかった。

なので、この推論は光とナオトにしか話していかない。

しかしやはり、手かがりが雀の涙並なのは痛い。どれくらいの人数で構成されているのか、それすら分からない始末。

エイミィたちアースラクルーの監視の目と網を掻い潜って騎士も怪獣も逃がす手際から、メンバーも設備も恵まれているとは予想でき

るが………しいてはつきりしてる手掛かりといえは………師のレオと戦ったあの仮面の——

頭の内にそのイメージを映した時、彼の脳裏にショックが駆け巡った。

稲妻にも、閃光にも似た強烈な衝撃。

「ちよー！ 勇夜君!」

いても立っても居られず、彼はその場から駆け出した。

勇夜が向かう場所は、3Dの画面と向き合い、タッチパネル式コンソールを入力してリサーチ中のナオトがいるモニタールームだ。

「そんなに急いで何があつた?」

いきなり突風のように走って入室してきた勇夜に戸惑うナオト。

一応説明しておくが、なぜ自分の体内で魔法プログラム体の姿でいるのは、実は“人間としての体”が気に入っている為だったりする。

「今すぐ、この人とあの仮面野郎の身体データを出示してくれ」

「りよ………了解した」

ナオトは現行のリサーチを一旦中断し、モニターに勇夜がミッド製タブレットPCで見せた人物と、おとりゲンの記憶からイメージを取り出した仮面の男。それぞれの体格を再現しつつも顔付きや髪など細部はオミットした半透明のCGをモニターに表示させる。

「重ねてくれ」

そのCGを重ねる。

詳細な結果は、今ここでは秘密させて頂く。

ただ——

「これで、勇夜の推理がある程度実証されたな」

「ああ…あんま嬉しくないけど」

「少しやつれているぞ、今日の怪我の質も小さくはないんだ、そろそろ睡眠に入った方が良い、寝付けないのなら船内のスリープカプセルを使ってくれ」

「ありがとう」

ジャンバードには、治療ポッド以外にも宇宙空間の長距離航行に備えられた就寝用カプセルを常備している。

それが今ナオトが口にしたスリープカプセル。

このカプセルには脳にリラックス効果のある特殊な音波を照射することで、使用者を快適な眠りへと誘わしてくれる機能を備えている。

1〜2時間眠れば、最良のコンディションで快適な起床も保障してくれる代物だ。

「それよりリストアップの進み具合はどうなんだ？」

「日本時間で、朝方辺りまでには完了させるさ」

久遠との接触と情報交換と騎士たちとの戦闘で強まった光の仮説、それは現行の闇の書の主は、地球の医学では治癒困難な病か何かを負っており、騎士たちはそれをどうにかすべく、独断で蒐集の断行を強いられているという可能性。

ならば、ここ最近、特に襲撃事件が起き始める寸前の期間、9月末を中心にして海鳴市内の各病院に入院、または通院したことがある市民のリストを、ナオトは纏めている最中だ。

二人が見据えるモニターでは、瞬きよりも速い間隔で、該当する人物のデータが通り過ぎていく。

「っ！——止めろ！」

「どうした？」

「少し手前に戻してくれ」

彼の常人離れたした動体視力が、一瞬の間を通り過ぎたある顔写真をはつきりその目に焼き付けていた。

まさか、と勘繰りたかった。

思い過ぎで終わってくれるなら何よりだった。

だが、かの人物——少女のデータが画面に表示された時、それは脆くも崩れ去る。

「それだ……その子だよ」

「この少女と知り合いなのか？」

「……………それもあんだけど」

灯台もと暮らし、今日その諺の意味をはつきり突きつけられてばかりだ。

どうしてこのことにも気づかなかった？ 歯牙にもかけなかった？ 今の今まで見落としていたんだ？

手掛かりは、直ぐそこにあつたというのに……………節穴もいいところだ。

モニターに写っているのは、茶髪のショートカットと関西地方の訛りが印象的だった、フェイトやなのはたちと同年代の少女。

その少女の……………女の子の……………名前は——

「八神……………はやて……………」

暗闇、現実の世界とは明らかに次元が異なるどこかの異空間。

四方八方、どこにも物体と呼べるものは皆無で、長時間ここに止まっていると上下という概念を喪失しそうである。

例えるなら……………そう、光が一筋も届かない環境であるので、潔く視覚を捨て去った深海生物と表現すべきだろう。

空間そのものの色合いも、黒系統の水彩色のみで構成され、水に微妙に異なる絵具を完全に混ざらせない程度に溶け込ませたかのように、色と色が不規則な軌道で晴れ時の雲ほどの速さで巡り巡っている。

どの黒色（こくしよく）も、『陰鬱』と単語が即座に浮かんでくる様子。

見ているだけで、鬱な心情に追い込まれそう、生きる活力が根こそぎ洗いざらい奪い取らえられてしまいそうな気さえ感じる。

こんな暗鬱な異次元の真ただ中に、ただ一人佇む者がいた。

外見は女性、一見成人だが少女の面影もある。

背丈は目側170前後と、女性としてはそれなりに高い。

袖なしのタートルネックのような黒色に×字になるようにクロス

された金色のラインが敷かれた服に、上と同色のミニスカートを着こみ、右足がヒラメ筋、左足が大腿二頭筋辺りまでと丈の長さが極端に長短分かれた同色（くろめ）のソックスを履き込んでいる。

黒服がびつたりと張り付いた胸はポリウムがありながら、体軀と不協和音を起こさぬように乳房の形状は整われ、露出された二の腕や二の足はすらりと伸びつつも適度なふくよかさがあり、透き通った色白の素肌にはシミの一つも見当たらない。

そんな肌よりも漆黒の空間に光を添えるのは、腰まで伸びた白銀の髪。

思わず、氷雪に彩られた冬の雪景色が浮かんでくるまでに艶があり美しかった。

美しいと言えば、顔も然りだ。少女とも成人女性とも、どちらにも見てとれる、どこか人為的な、人形とさえ連想させるまでの、美し過ぎて却って寒気すらする美貌が形成されていた。

「また……わたしは……」

異空間に木霊する声。主はこの人間離れた美を持ちし女性のものだ。

それまで閉じられていた瞼が開いた。

目じりは吊り気味だが、勇夜やシグナムと違い、近寄りがたい印象より柔らかな雰囲気漂う。瞳の色は、フェイトのものよりも鮮やかな深紅……まるで血の色そのものな色合い。

鮮烈な瞳は今、憂いに支配されていた。

先の言辞も貌の表情も、輝かしい美貌を影に潜めさせる暗澹とした空気が覆う。

勇夜たちと守護騎士との交戦第二幕が起きたあの夜には、怪獣たちを差し向けた者の他にもう一人傍観者がいた——と言いたいがこの表現は正確ではない、傍観者に為らざるを得ない——そんな現状を受け入れるしかない存在が、この超常的な美しさを持つ銀髪赤眼の女性。

この現状となつてから、もうどれくらい経つたのだろうか？

最後にいつまでも外の世界で口から言葉を発したかさえ覚えて

いない……それ程の悠久の時と時空を彷徨い続けるかの呪われし書の根幹を司るプログラム生命体、

それが彼女であり、未だに彼女固有の名を持たぬ孤独で“防護”というお膳立てで捕われた囚人でもある “名無し”であった。

「なぜ？ 私のようなものが……生きているのだ？ どう……して？

……私なんか——」

嘆きも涙も慟哭も、心の軋みさえ……今はまだ、誰にも届くことはなく、闇に飲み込まれていくのみ。

「どうすればいい？ どうしたら……私は——」  
つづく。



## STAGE 32 — 温もりの夜

STAGE 32 — 静寂の夜

いきなりで恐縮だが、初めに少し寄り道をする。  
ここで述べておかなければならない重要なことだ。

フェイトが、なのはたちの通う聖祥の学び舎に行ける、その制服を  
実質プレゼントな形で勇夜から受け取る——この喜びのつるべ打  
ちによるシヨックで気絶という天国と、一転父セブン譲りの鬼畜さ全  
開な彼の個人指導と言う名の地獄を体験したあの日。

前述のイベントで頭から払われたきらいがあるが、その日は臨時対  
策本部を兼ねた引越作業が行われていたことを思い出して頂きたい。

あの日のフェイトに制服を届けるより前の時間帯に勇夜は、六畳の  
畳の間にて、部屋一帯を掃除しつつ、家具やダンボールから梱包され  
た備品を設置していた。

ふと、ある物の梱包を解いた際、思わず彼は作業を中断してそれに  
目に止めてしまう。

壁に掛けるタイプの写真立て、写真も挟まれている。

印画紙に投影された写真に写っていたのは、左から現在より10年  
くらい若いリンデイ、4歳くらいのクロノ、彼を精悍な成人に成長さ  
せたかのような男。

その男性こそ、リンデイの夫で、クロノの父。

七年前の闇の書の輸送事故で殉職した……クライド・ハラオウンそ  
の人。

撮影当時から切り取られた家族の姿は、みんな眩い笑顔で写ってい  
る。

眩し過ぎて、見ている自分の臉に影が入り、目胸の奥が絞めつけら  
れた。

だって……二人の肉親であるクライドの命を奪ってしまった者た  
ちと浅くない縁を結んでいるのは、自分の仲間だから。

「こら、何油を売っている?」

「へ？ あ、師匠……」

「この部屋の整理が終わってからでいい、家電の運搬を手伝ってくれ」  
「お……おう、分かった」

これ以上はサボって感傷には浸れないと、勇夜は写真立てを壁に貼り付けて、整理を再開させた。

高町家屋内の洗面所から、タオルで髪を拭く寝間着姿の光が風呂から上がってきた。

寝巻はシャツタインプで本人の性格通り、ボタンは全て留めてある。

あの戦闘の後も人間サイズの『怪獣』を含めた情報整理の会合で時間が割かれ、結局自宅に戻れたのは午後九時過ぎであった。

家族からは、無論心配された。

いくら父方がかつて要人警護の関係上、修羅場に身を置いた身であったとしても、家族が命がけで戦地で相まみえていた事実は、気がでなかっただろう。

一方で光にも、気が気でないことがあった。

闇の書に守護騎士、ゼットンやインペライザーなどと言ったウルトラ戦士でも手こずり、時に打ち負かしてきた強敵たち、戦友とはミッドでの小学校からの友人なクロノのこともある。

それらのそうだが、何より。

「光さん……」

二階に上がると、部屋に通じるドアの前でユーノが立ち尽くしていた。

言っておくが、ちゃんと人間の姿である。

P・T・事件後、なのはの勧めでもうしばらくは高町家に暮らすことになった際、家族に改めて魔法のことを話す際、ユーノが人間であることも明かした。

光が異世界から迷いし超人で、末っ子なのはが魔法使いになると言

うことにも受容できる心の広き高町家でも、彼女が拾ったフェレットが魔法少女もので言うところのマスコットキャラで、13歳の男の子が変身していたことは、言うまでもなく、家族全員に驚かれた。

しかれど、一悶着はあったが最終的にユーノも温かく迎えられた。

その一悶着とは、偶然にも声が似通った兄たちのシスコン暴走寸前事態である。暴走を簡易的に要約すれば、『フェレットの姿だからって妹に変な気は起こしてないだろうな?』といったところ。

小動物の姿で、年頃の女の子と同じ部屋にて暮らしてた……と言われれば彼らの気持ちも解らぬわけではない。

が、暴走は高町家のご夫人によって阻止された。

なぜか多大なプレッシャーを与える効果を持つ、彼女の微笑みによつて。

そんなこんなで、なのはが襲われた夜以降もユーノは高町家に居候させてもらっている身でいるわけである。

「どうですか？　なのはは」

で、光が今一番気が気でないことはやはり、なのはのこと。

勇夜に、フェイトからも、今日のこと一番堪えているのは彼女かもしれないと、先刻彼らからも聞かされていた。

「ゲンさんの特訓から帰ってきた時はいつも通りでした……ただ士郎さんによれば、なのはは『いつも通り』を演じてるように見えたそうです」

そのゲンから聞いた話によると、今日の戦闘の旨を聞いたなのはとフェイトは、自分にも何か手伝えることはないかと進言したそうだ。

当然、修練が途中でレイジングハートたちの改修も完了していない現状では、ゲンがそれを許す筈も無く却下された。

あの後にはフェイト共々熱心に修練に励み、家に帰ってからも、比較的いつものこやかさを見せていた……ようではある。

今の彼女の場合、表向き、と付加せねばならないけども。

何しろドアの前に立った瞬間、聞き取れたからだ。

この板の向こうから、ほんの微々たる声量ではあったが、少女のすすり泣きが響き渡った。

光もユーノも、彼女の涙が、どういう味を秘めているのか察している。

今日真に受けた現実に対して、まだ年頃の女の子であるなのは、心に何の波紋も起こさぬわけがない。

なのはが幼少時の経験から、独りでいることと他者に何もしてやれない現状（いま）に人一倍過敏に嘆き、彼女の主観ではあるが、当人から見てこれといって突出した“なにか”を見いだせない自身にコンプレックスを抱いて来たことはご存じの筈だ。

“一人”に関してなら今は問題ない。

周りには心強い仲間たちがいるからだ。

なのはを落ち込ませているのは、数刻前の激戦を、実質傍観するしかなかった自分自身。

今日の出来事は、その一端を浮上させるには充分過ぎた……たとえ自身がフェイトともども未熟で、今は己を高める時であったとしても。

それでも悔しい……未だに誰のことも助けられない自分が……あの人たちを止めてあげることができない……光や勇夜のような捜査を手伝うことだって叶わない、そんな子どもである身分が、恨めしいとさえ感じているだろう。

「僕たち……どうしたらいいんでしょう……」

「今は、そっとしておきましょう、なのはの事です、下手に気を使わせれば、相手に気を遣わせてしまった自分を攻めてしまう、あの子はそういう子です」

「っ………はい」

けれど、二人は信じている。

なのはが、一時の挫折程度で折れる少女では無いと言うことを。

魔法知らぬ日本人であった彼女を担い手として選んだデバイス、レイジングハート。

彼女らの出会いは、一種の運命的なものがあると思えてならない。

だから今は、彼女の名にもなっている——“不屈の心”——でなのはが己が身を立ちあがらせるまで、静かに待つことにした。

静謐な真夜中。

電灯は全て消され、物体の輪郭を灯す光は月光のみなりビングにて、リンデイは寝巻にも着替えず、黙然とソファアに身を置いていた。ソファアと座る彼女の前に据えられたテーブルの机上には、彼女が自分で淹れた緑茶が入った湯のみが置かれている。

無論、常人には下手すると吐き気が嫌でも込み上げる程に大量に甘味が投入済み。

どうやら重い物思いに耽る余り、自分で淹れたことを忘れていたらしい。

既に湯けむりは消え失せ、すっかり冷めきった茶を全て飲み干す。なぜだろう？ あんなに大量に甘味を放り込んだのに、緑茶からは甘さがほとんど感じられなかった。

むしろ舌の中で残留するまでに、苦さが口内を駆け巡る。

元々その苦味を和らげる為に淹れて飲んだというのに、飲む前より苦々しさが酷くなった気がした。

「プレシアさん…」

「眠れないのかしら？」

「ええ…」

どうもこのマンションの一室で起きているのはリンデイのみではなかったようで、淡い紫のワンピースタイプの寝巻にカーディガンを羽織い、ウイスキーが入った酒瓶とコップを持ったプレシアがお目通りと相成った。

「一杯付き合って下さる？」

「ですが…」

「少しぐらいなら支障はないわよ」

プレシアの体のことを踏まえれば、お酒を勧めるには憚れる心境ではあるが、自分だけ飲む気にもなれず、隣に座ったプレシアの手に収められたグラスに、酒瓶の中に貯められた液体を注ぐ。

しばしの間、二人は静かなる時間、お酒を味わうのに費やした。

具体的に明記はしないが、おふた方とも齢を重ねている為か、飲酒する様がしつくり来る。空気感だけなら、室内はリビングからバーの店内に様変わりしていた。

「やつぱり、不眠なのは今日の…」

「はっ」

リンデイが眠れない夜を過ごしている因は、実のところ一つでは収まらない。

主に占めているのは、守護騎士ヴォルケンリッターを結界に封じ込め、確保寸前にまでいったにも拘わらず、逃走を許してしまったこと。「迂闊でした…相手があれほどの巨体な怪獣たちを転移、操作できるだけの技術力を持つなら、ああいう事態も予測できてしかるべきであつたのに」

相對する相手は騎士だけではない。

勇夜によれば、向こうの次元世界をかつて君臨していた生命体の仕業かもしれないとのことだが、今はまだ推測の域を出ていない。

まあ意図や一物はどうあれ、未だどれくらいの規模なのかすらはつきりと掴めない、騎士たちの蒐集を助力する者たちと、先刻勇夜たちに奇襲をしかけた人間大の怪獣たち、間違いなく彼らの放った戦力、兵士たちだ。

結界内への転送を阻害するプログラムを敷くなど、警戒と対策は怠っているつもりはなかったが…反芻するほどに悔やまれる。

今日ほど恵まれた好条件下なチャンスは、もう巡り合えないだろう。

騎士たちもあの戦闘で、自分たちが海鳴（ここ）を重点的に搜索している事実を察したろうから、網を張る一手はもう通じない。

否…逃走を許したのは由々しくもあるが、それ以上に自分の胸にし

こりとなっているのは。

「クロノ君のこと……もよね」

それをプレシアが口にした。

凶星だったのもあり、思わずガラス瓶に蓄えられたお酒を一気に飲み干す。

カランツ……と中の氷がガラスに当たって音を立てた。

「察しがよろしいですね」

「あなたの、母としての顔に書かれてたのよ」

今日の戦闘で、ある意味に於いて、一番痛手を被ったのが自身の息子。

しかも、湖の騎士の特殊な転移魔法によって、リンカーコアを言葉の通りに手中に収められながら、蒐集の激痛すら憎悪で耐えしのぎ、呪殺させんばかりな勢いでバインドによる圧迫を続けた一部始終が映されたS2Uが記録していた戦闘記録から、自分たちの家族を奪ってしまった『闇の書』への負の感情を発露してしまったことを、明確に付きつけられた。

いくら局員としても執務官としても魔導師としても優秀であつても、まだ15の少年。

大人でさえ、不条理を付きつけた存在には激情の炎を燃えあがらせてしまう。

リンデイもそうであつた。

〃クライドオオオオオオオオオオオオ

!!!!!!!

七年前の闇の書護送中に起きた暴走事故。

リンデイも、そして彼女の夫でクロノの父であるクライド・ハラオウンも、その護送の任に就いていた。

本体を確保し、本格的に解析を始める前に本局の護送の最中、書の暴走を起こし、クロノの父クライドの艦『エステティア』をほぼ掌握、さらにグレアムの乗る友軍艦にも宇宙空間を伝って浸食しようとし、連

鎖を避ける為、エスティアは手動でグレアムの艦から遠ざけねばならなかった。

これが、クライドがただ一人艦に残らねばならなかった理由。

その上、この案件の責任者でもあったあのグレアム提督もまた、苦渋の選択を切りださなければならなかった。

浸食が叶わぬならばと、艦を乗っ取った魔導書が、第一級ロストロギアでなければ搭載すらできない破壊力の大型艦砲を向けてきたからだ。

助かる方法は、撃たれる前に落とす。

だがそれを選ぶことは、浸食の被害をこれ以上広げぬ為に抑えの利かぬ舟を制御し続けたクライドを見殺しにするということ。もうエスティアに残った脱出艇は書の浸食で使い物にならないことになった。

部下を殺さなければ生き残れない。ジレンマによる逡巡に苛むグレアムに、クライドは自ら撃沈を求めた。

最終的にグレアムは、クライドからの提言通り、こちらの艦砲でエスティアを轟沈。

これがハラオウン親子を引き裂いた七年前の事件の大まかな流れである。書にジャックされた次元艦と終りの運命をともし、彼女は脱出艇の中で、介錯の光の中へ消えゆく艦を目に焼き付けることしかできなかった。

あの日から暫くは彼女も、何度もこの手で愛する人を奪いし者たちに引導を渡してやりたい、そんな空恐ろしいことが過っては無理に抑える毎日だった。

ましてデリケートな年頃な上、幼少時彼に影を落とし者たちと直面すれば……クロノと言えど、否……実直に職務を全うする真面目な彼の性分なら、だからこそと言えるかもしれない。

思えば自分は、あの子に今まで何をしてあげられたのか？

厳しきも時に見せながら、愛情は惜しまなく示して注ぎ、育て見守ってきたつもりではあったけど、もし……今日が生きた姿を見る最後の日になったとしたら……そんな最悪な事態になったら、何もしてやれなかったと……後悔で押し潰されたかもしれない。



同時に、母としての自分が表に出てくるほど、ある想いも一緒に浮上して彼女を攻め立てる。

「『母』……、そんな大層な肩書きなんて、名乗るのはおこがましいです、私には……」

なら……自分は、まだ15な息子に、一体何をさせている？

あの子の境遇を嘆き、胸を痛めるのなら、自分……否、自分たちは、我が子やなのはにフェイトのような少年少女たちに何をさせている？

まだ心も体も発展途上な身でありながら、魔法という名の武器を持たせ、凶悪な犯罪者と、凶暴な過去の遺物相手に命の遣り取りに等しいことをさせているではないか。

こういうのは、確か地球では《少年兵》と呼ぶそうだ。

管理世界……特に管理局では、さすがに強制はしていないものの、『資質』さえあれば、10代に入った段階から、局の仕事に従事することができるといえる。

『人員が少しでも欲しい』という組織事情もあるが、どこかに大人の甘え、または打算があるのは否めない。

少年兵の最大のメリットは、情操が発展途上な無垢なる存在ゆえ、従順な兵士として扱いやすいということだ。

あくまで子を兵士にするのに問題になってるのは現代の地球の国々ぐらい、魔法世界ではそういうものだ、当り前のことなのだ、と開き直す手もある。

だがその言い訳が通用するのは、乱世の時代か、戦局が膠着した時期に戦力としての大人が乏しくなったか、発展途上で国が貧しく子の方が人口の多い国ぐらいだ。

少なくとも魔法世界は現代で、国力は豊かな方であるし、大規模な大戦は起きておらず、一応の秩序は保たれている。

諸々考えると、どうしても自分たちの世界は子どもと言う『未来』を食いぶちにして無理に『今』維持しようとしてるとしか思えない。フェイトたちも、恵まれた魔導の資質を持っている以上………いつか。

こんな………「未来」を食いつぶしながら生きているも同然な自分たちは、この地球にまで過去の火種をあわや飛び火する瀬戸際にまで密かに追いつめて。

あまつさえ、勇夜——ウルトラマンゼロたち、異世界からの戦士たちに尻拭いとも呼べる汚れ仕事をさせている。

漠然とだが、ウルトラマンたちが戦う理由が何となく分かった。どんな困難、苦難、逆境、窮地、絶望を突きつけられ、阻まれても、それでも望み捨てず、進もうとする人々の希望を守ろうとしているのだ。

なのに、その一人と仲間たちにさせているのは、むしろ希望の篡奪だ。

理由はともかく、ヴォルケンリッターにはもう無慈悲なマシンとしての彼らではない。それは勇夜たちと相対した時の反応から見ても窺える。

そして行為の是非はともかく、彼らは「最後の希望」として、魔力蒐集に手を染め、何らかの運命にもがき足掻いている。

騎士たちに相まみえるということは、そのなけなしの希望を奪ってしまうということ………これを篡奪と言わずして何だ？ 汚れ役と表現せずして何だ？

アルコールの効果が巡ってきたのか、気づけば彼女の表情は沈みに沈み、泣き上戸となっていた。

同時にこの瞬間、プレシアの前まで、ずっと隠し、誰にも言わなかったものが涙と一緒に流れ出ていた。

「リンディさん……」

「ごめんなさい……お酒が回り過ぎちゃったみたい、ダメですね、こんな調子じゃ……」

鼻をすすらせ、人差し指で目じりの雫を取りながら自嘲混じりに微笑むリンディ。

「いいのよ、時には溜まった淀みを出してあげないと、人間壊れてしまいますから、私がいい例です、それにあなたであこがましいと言うなら、私など反吐が出る邪悪になりますよ、娘たちへの仕打ちもですが、

例の一味に怪獣という戦力を与えてしまった一因ですから」

プレシアは彼女から、遠い日の自分が写った感覚を捉えた。

母として至らなかつたのでは？

愛する子に何もしてあげられなかつたのでは？

そうしてずるずると底なし沼に沈んでいった経験があるだけに、プレシアはリンディにかつての自分が見えていた。

違う点があるとしたら、こうして聞き手となつてくれる存在の有無。

こうしてそつと受け手となるだけでも、清涼剤となつてあげられるということ。最近になつて悟れたことだ。

それに、今この状況を作り出した原因は、かつての狂つた自身にもある。

昔、ネットワークのチャット越しに、何者かから提示された……プロジェクトFATEの基礎理論、ゼロの姿を模したマシンと、怪獣召喚システムを備えたアイテム。

交換条件として自分は、基礎理論から発展させた研究データを相手に渡した。

他にも、次元を渡る船として、設計したあの時の庭園もデータも一緒にだ。

間違いない。あの時の提供者は例の一味の一人、そして異世界の存在。

その何者かが、何らかの悪意を持つてるのも確か。

我が子への執着のあまり、生物の理を超えようとして自分は、悪意ある者に禁断の果実を齎してしまった。

果実を手にした誰かが、よからぬ企てを秘めているのも明白だ。

贖罪の為にも、この一件は絶対に最悪のケースになる前に止めなければならぬ。

「それに、まだ何も終わっていないですよ」

「え？」

「世界にある歪さというか暗部といえますか、それと後悔、それらに自

力で気づくことができただけではないですか、まだ救いがあります、荒療治でもされないと狂ったまま死ぬところだった私と違って、でもこんな私たちでも、できることもあります」

自己の内にしろ、外の世界にしろ、一度生まれ出たままの闇と向き合えるのなら、それを手遅れになるまでに肥大させまいと、人は全力で尽力することができる。

それでもと、這い上がることができる。

それを為す可能性も、確かに存在はしているのだ。

「ありがとうございます、何だか肩にしよつてた荷が下りてきた気がします」

「私は隣で一緒に酒を飲んだ、それだけよ」

「それでも、お礼言わせて下さい」

「まだ、間に合う筈だ……我が子のことも、魔導書のこと、世界。淀みを流しに流した分だけ、それをもう一度身を立たせる力としよう。」

過ちを直視したのなら、それを変える力へと変えよう。

まだ、何も終わってない。

ならば、プレシアの言う通り、自分が確かにできることを続けていこう。

たとえ若き战士们に少女たちより非力だとしても、少しでも彼らの力になれるなら。

たとえ微々たるものでも、それが今を変えていく流れを生むのなら。

きつと、"あの子たち"もそれを信じて、時に迷って悩みつつも歩を進めているのだから。

そう思うと心に何となく、光が差ししてくると感じ、部屋へと注ぐ月光も、光量が増していく気がした。

まどろみという名の重みが伸し掛かりながらも、瞼はゆつくりと開かれていく。

開かれた当初は、目を閉じていても大差ない暗闇だったが、次第に窓越しの微かな月明かりを糧に瞳はぼんやりとなのはの部屋を映しだした。

横向きの体勢から起き上がると、90度傾いた世界が元の位置に戻る。

目じりに溜まった目垢を指で取ると、指先が濡れていた。

なぜ自分は泣いていたのか？ まどろみから意識が晴れて行く内に思い出した。

悔しかったんだ……みんな必死に闇の書の守護騎士の人たちを止めようとしてるのに、その助けにもなれない現状の自分に。

だから帰って来てから部屋の中で泣いて、そのまま眠ってしまったんだ。

涙の意味を思い出すと、今度は喉の渴きを感じした。

夜遅くだから、少し水を飲んだら直ぐまた寝よう。明日の朝もゲンさんからの特訓があるから。

光たち家族や居候しているユーノを起こさぬよう、音をできるだけ立てず忍び足で部屋を出て、階段を下りるなのは。

段の半分まで降りて気が付いた。

一階から微かに明かりが灯っている。

誰が起きているのかと気になって微光のある方へと歩いていくと。

「あら、起きちゃったのなの？」

「お母さん……」

台所の電灯光のみで照らされたダイニングルームのテーブルに、一人座る桃子がいた。

### STAGE 33 | 静寂の夜 後篇

夜は子ども、特に両手で数えられる年頃の子たちには、特権であり

義務でもある、大人になると難しくなる安定した睡眠を行う時間帯である。本来は意識を夢の中に放り込まなきゃならないところを、中には起きていることを知られれば親から大目玉と雷をくらう羽目になるのを承知で諸々の理由で中々寝付かない不真面目者もいるがだ。

喩えが少し古臭いが、20世紀の中ごろの子の場合だと、こつそりテレビを点けて、お子様にはちと刺激の強い性的要素を含んだバラエティを見てたり。無論、子はこんなことをしていれば、相応の躰が必要となる。中にはこともあろうにお子さんを夜更かしに付き合わせ、その夜見ていた深夜番組の描写にいちやもんをつける不条理なお方も、悲しきかな：現代人の中に存在していたりする。

話がズレてしまった。何を言いたいのかというところ、その日の夜のフェイト・テスタロッサも、今日に限ってそんな不真面目者の一人だということ。ただ、詳細を知らない者が見れば、これは彼女が見ている夢の世界なのでは？ などと考える者がいるかもしれない。

何しろ、彼女は今、『宇宙の真ただ中』にいるのだから。

四方が果てを感じさせない黒い色合いの空間内に、反して乳白色な指でつまめそうなサイズの光る球体が、雪、はたまたはマリンスノーに似た様相で漂っていた。とは言ったが、雪たちと違って球体たちは自ら光を放ち、地の底に落ちずに漂っていると、付け加えておく。

この不可思議な空間に於いて、フェイトは体育座りでじつと佇んでいた。

当たり前ではあるが、ここは本物の宇宙ではない。人間であるフェイトが、冷徹な真空に生身で出られるわけがない。

「フェイト」

背後から光が照らされる感覚と自分を呼ぶ声がして、フェイトは振り返った。

「姉さん…」

黒味な空間を切り取ったかのような長方形状の光の中に立つ小柄な人影、フェイトとは同一の遺伝子と容姿を持つ小さな彼女の姉、アリシア・テスタロッサだ。

妹より小柄な姉はこの室内に入ると、フェイトの横に座り込んだ。

「わざわざ夜中にプラネタリウムを見なくてもいいのに、明日も早いでしょ？」

「……………」

アリシアが口にしたように、この部屋はプラネタリウム、天像器。地球のものと異なり、星図を立体映像で表示できる機能を持っている。

宇宙船としては決して大型では無いジャンバードには、長期間機体に搭乗する人間への配慮の為、このような娯楽施設も置かれていた。「ちよつと、寝付けないんだ……何か頭が熱心に働いてる感じで、寝よう寝ようと言いつつ聞かすんだけど、そしたら……余計ベットで横になるのがきつくなっちゃって……」

「分かる分かる、寝たい時に限って体は言うこと聞かないのよね、目はパチつと開くし、無性に手足は動きたいと駄ダこねるし、逆に起きようとする」と天の邪鬼に眠らせちゃうくせに、ママが仕事から早く帰って来る日はい……つもそうだった……」

「反対に母さんが遅い日は眠れなくて、起きてるところ見られたらどうしよう」と不安で寝てる振りもしてたよね」

「あ……そんなこともあったな………とこで、おねんねできないレベルな悩み事って、何かな？」

世の中にありふれた兄弟姉妹とは、少し境遇が異なっている彼女たちだからこそできる雑談を間に挟ませた後、姉のアリシアは話題を本題の線路に戻した。

「い……色々……かな」

と、フェイトは答える。だって一言で表すならそう応えるしかない。

頭に芽となって生えてきた眠りを妨げる悩みの種は、一つではないからだ。

まず一つを取り上げるなら、「最初に出会った男の人」で、「初めて好きになった人」でもある光の戦士。

諸星勇夜ことウルトラマンゼロ。

彼が、この世界に来る前からの友であり、仲間だった炎の戦士グレ

ンファイヤーがヴォルケンリッターと身内な間柄であることも驚きだったのに、この世界に来てからの友なクロノが、騎士たちの一人との戦闘でリンカーコアを負傷し、さらには彼の父の仇でもある騎士たちに憎しみを露わにした——という話は、フェイトにとっても幼い身なりに衝撃的だった。

そんなクロノからも、色々と恩を自分は受けてきたから。

最初彼に会った印象は、なんか色々と堅物で真面目すぎて融通が利かなさそうそう……な印象を持たされたものだ。

よくよく考えてみると、初見はとっつきにくそうに見えたところとか、完敗を喫したところとか、結構勇夜と初めて会った時と似通っている気がする。

一見近寄り難いけど、実は誰よりも優しさを秘めているところも、よく似ていた。

確かに勇夜がクロノに『鉄頭』なんて渾名を付けるくらい、お堅い一面もあるけど。

執務官の仕事で多忙なのに、的確な教導込みで模擬戦を付き合ってくれたし、公平さを忘れずに自分たちの裁判のサポートもしてくれた。

なのはたちとの交換日記ならぬ交換ビデオメールだって、クロノたちの尽力あつてこそだ。

彼にだって色々感謝している。

だから今回の件、絵に描いた生真面目さを持つ彼にも、あんな暗闇があつたのを知つたのは、結構響いた。

もし自分もクロノみたいな体験したら……多分同じく、守護騎士や魔導書に憎しみをぶつけてしまおうだろう。

きつと……一生許さない……一生掛けてもその気持ちは色あせずに朽ち果てることなく縛り付けるかもしれない、それどころか、騎士たちが生き地獄で苦しむ様子を悦びを見出してしまふ可能性もある。ついそんな恐ろしくて性質の悪い想像をしまい、背筋が一瞬凍えた。

勇夜も、クロノがそんな瀬戸際に立っている現実を響いてる筈だ。



騎士たちの蒐集行為に今でもどこかで心を痛めているグレンファイヤーの現在に、憂いていると言うのに。

顔には出さなくてもそれが分かる。

とても恥ずかしがり屋さんだから、つい不良ぶって斜に構えた態度で隠してしまうだけで、勇夜——ゼロの根は、どこまでも善玉で優しい、他人の為に涙を流せて、迷わず人の為に頑張れる人。

そういえば彼のその心様は、フェイトの「初めての友達」とも似つかわしかった。

高町なのは、勇夜と一緒に、闇の底に落ちるばかりだった自分を救ってくれた女の子。

彼女もまた、他人の為に全力で力を尽くせる子………なんだけど、ビデオメールとのやり取りに、毎日直に会えるようになってなのはと触れ合う内に、何か無したが……『他者の力』になることに捕らわれているような気が最近芽吹いていた。

自分は彼女のその善意によって助けられたのだ、それを愚かだとは断じて言いたくない。

だけど……今日最後に見たなのは顔の思い出すと、不安が込み上げてくる。

ひよつとして、自分以上に、今日何もできなかった己を悔しがっているのでは？ と。数時間前に光に念話で聞いてみたら、やっぱり部屋の中で一人すすり泣いていたらしい。

と、ここに来てハツとする。

不眠を誘発する悩みの種を、『色々』以外の言葉で表せれたではないか。

要は、「自分の大事な人たちに、何をしてあげられるんだろう」だ。

「私ってば……勇夜やなのはたちに何もまともにお返しできてない……もらってばっかり……」

せめてもしもの時はその背中を守りたい、と怖い力であると自覚した上で以前より熱を入れた魔法の特訓を重ねてきたし、勇夜の師匠、おとりゲンさん——ウルトラマンレオからの手厳しい指導にも負けてたまるかと喰らいついて着いてきたけど……そう簡単に明瞭な結

果として出てこない。

しいてはつきりしたのは、まだまだ烈火の剣士と互角に戦えるのは、まだ遠い道のりだということ。

今日の戦闘記録を見せてもらって、よりずしりと突きつけられた。人間体とはいえ、勇夜ですら手を焼かされて苦戦したシグナムのデバイスが変形したあの蛇腹剣。

スピードが傲慢な自分でも、あの不規則で変幻自在な刃の軌道は無傷で躲すのは、現状限りなく不可能な話だった。

なによりも、守護騎士たち自体、自身が経験してきたものよりも、遥かに多くの回数と、より熾烈で苛烈で予断を許さない、慈悲が皆無で死神の気まぐれに踊らされる命がけの戦場を駆けてきた戦士である。

母さんたちにパワーアップされたバルディッシュを持って、相手から大幅に手加減に手加減を重ねてもらったとしても、ようやく五分五分がいいところ……それさえ贅沢な考えなのかも……だから悩ましくもなる。

どうしたらいいんだろう？

一体自分は……みんなに、どういう形で恩をくれた人たちに力になってあげられるのか。

「悩むのはいいいけどフェイト、悩み過ぎてド坪に嵌らないようにね」「え？」

「フェイトだって、少し思い詰め過ぎちゃうところがあるから、もう一度こうすると決めちゃったら、別にギリギリな状況でなくても『他に方法は無いんだ！』とばかりに突っ走っちゃおう」

「そんなに……思い詰めちゃうかな……わたし」

「詰めちゃうね、リニスから『攻めに傾倒』しちゃうってよく言われてたのアルフから聞いたけど、あれをもっとストレートに言うのと、『フェイトはごり押ししがちな猪武者』だって意味になるから」

「あうううやっぱり……」

実際問題、本当のことであるがゆえ……いや本当に自覚できるからこそ、自身の気質の一つに落ちこまされるフェイト。

自覚できる材料だって、魔導師としての戦歴を見渡せば充分揃って

る。特に勇夜となのは、この二人と対敵し一戦交えて敗北した原因は、どちらも攻撃に傾いてしまう短所が仇になったからであった。

この辺は、やはり良くも悪くも含め、母プレシア譲りだとも揺るぎ無い確信を持って言える。

「お姉ちゃんが言いたいののは、こだわり過ぎは禁物ってこと、魔導師として強くなつて一緒に戦うつても有りだけど、それだつて手段の一つでしかないんだよ」

「他にも、色々やり様はあるってこと？」

「そうそう、どうしたいかは、結局フェイト自身が決めて見つけなきゃいけないけどね」

自分で…決める。

姉の一言に、フェイトは前に勇夜から送られた言葉を思い出した。

「時には、自分で見つけなきゃいけない答えもあるんだぜ」

なぜだろうか？

まだ何も、悩みを打開する道筋は出てきていないのに、体に乗っかっていた荷やら、しこりやらが一気に軽くなつていった。

ああ：そうか、想いを自分以外の誰かと、共有したからなんだと、気づかされた。

たとえ最後には自分自身でどうにかしなきゃいけないことでも、一人で抱えるよりも、他の誰かと一緒に分けあつて持った方が、微かでも前進する一歩になれる。

だって、私たち家族は、その共有と分けあいで、今こうして家族になれたから。

「あれ？」

突然、室内に浮かんでいた3D映像の星が消え、その直後に部屋の天井の灯りが点灯した。

「二人とも、これ以上の夜更かしは厳禁だぞ」

「ジャン！ せっかく良いムードだったのにちよっかい入れないでよ！ このKYバード！」

「KYで結構だ、君たちには早寝という特権があるのだから、それを有効活用しなくては」

「むくくレディに子ども扱いするなんて失礼だよ」

「しかし君を大人としてみなせばそれなりの年齢になるぞ、例の魔導炉事故の日から現在までの年月を換算すれば、君の歳は今——」

「ダメダメダメ！ それを口にしちゃダメエエエエ——！！」

漫才めいた姉とスターコルベットとの語らいに、フェイトの頬の肉は思わず緩みだし始める。

きつと、ウルティメイトフォースゼロが4人揃って旅をしていた頃も、こんな傍から見ると笑えてしまう会話が何度も起きて、それをゼロはやれやれと思いつつ微笑んでいたのだろうと妄想すると、余計笑みが零れてきた。

具体的にどうしたかはまだ分からないけど、ゼロたち異世界からの巨人たちがまたあのような日々を送れるよう、願いつつも、みんなが現実にするんだと、心に決めるフェイトであった。

フェイトのように寝ようにも寝付けない女の子もいれば、一度は眠ったのに半端な時間に起きてしまった子もいる。

その子こそ、なのはだ。

月面のジャンバードからとところ変わり、ここは高町家のリビング。

「はい」

「ありがとう…」

ソファアーに腰掛けるなのはの前に、蒸気が上げるホットミルクが入れたカップがコンツとささやかに音を立てながらテーブルに置かれた。

それを両手で取り、真っ白な水面に何度か息を吹きかけ、さざ波を起こして熱を程度よく緩ませてから、そっと口に入れる。

少しずつ飲み入れながら時計を見た。既に短針は12時を過ぎ、日を跨いでいた。

翠屋の開店準備に朝の家事を踏まえると、母も早いところ眠っておかなければならない。さつきどうして起きていたのか？ と聞いたが、何となくなのはが降りて来ると何となく予感していた、からだそうだ。

「目が腫れちゃってる原因は、やっぱり……魔法に関係することかしら？」

なのはと向かい合わせなる形で向かいのソファーに腰を下ろした桃子が投げかけた問いを、彼女は黙して頷いた。

「今日……わけがあつて魔法の力を集めてる人たちを止めようと、光兄や勇夜さんたちが頑張つて……」

「なのはも手伝いたかつたけど、おおとり先生に止められちゃつた……だっけ？」

「うん……」

今はなのはたちの訓練の教官的立場なおおとりゲンが、自分たちが戦場となつた結界内の市街地に行くのを許さなかつたのか、理屈ではどうか……理由ならなのはでも理解はしていた。

自身とフェイトにとってパートナー同然なインテリジエントデバイスのレイジングハートとバルディッシュは、まだプレシアたちによる改修作業中で手元には無かつた。

兄たちが相手にしている騎士たちが、一筋縄ではいかない実力者だつてことも分かる。スポーツで言うのと、なのはたちは素質に恵まれていると言えど、まだジュニアリーグクラス、対してヴォルケンリッターはプロリーグの第一線に位置しているとも例えられる。けどそんな比喻表現を使わずにもつとはつきり言うならば、『溝』は確かに存在する……騎士たちが人間が生きられる何倍何十倍、下手をすると何百倍ものの頻度で、味わつてきたもの。

『戦いが巻き起る場』に漂う……冷たい大気、というものを。

なのはも魔法使いの力を得てから、何度かは体験した感覚。

全身に冷気が混じる、やたら滑りと粘液が滴り流れるような寒気。心臓を鷲掴みにされ、簡単にその鼓動を無理やり停止させてしまいそ

うな圧迫感に、頭の奥をできたての白紙の如くまっさらにさせてその機能を狂わせる熱。

どうにか言葉に変換させると、先述の文体となる空気感、忘れる筈もない。

特に、初めてジュエルシードの異相体と相対した時と、オレンジ髪の鉄槌の女の子に完膚なきまで打ち負かされたあの時は、今でもクリアな記憶として頭に残っている。

本当にあの時あの場に居た瞬間ほど、生きた心地がしなかった……少なくとも鉄槌の女の子には、魔力を奪おうとはしても、命まで奪う気は無かったというのに。

けれど漠然とだが直感で分かるのだ……直に体験したあの空気すら、戦いの場では温いということを。

そして今日の中心市街で、激闘を交えた人たちは、あれ以上の極寒で、無慈悲で、命の瀬戸際に立たされる……いわゆる「修羅場」と呼べるものを、何度も、数えるのを止めてしまうくらい。

兄たちが主に怪獣や己と同じ大きさの巨人、騎士たちが魔法を使えども人間を相手にしてきた違いがあるけれど。

だから今日の《先生》は、いつになくドスの利いた怒声を上げて、結界の中で傍観する状況に焦ってしまった自分たちを制したのだ。

半端な状態で、修羅の世界に入ってしまったえば、怪我では済まない事態が起こると警告したのだ。

小さな命たる幼子たちに、危険の何たるかを教え、危険の荒波から少しでも遠ざけよう……守ろうとするゆえ、敢えて厳格かつ断固とした大岩にも比喩できる態度で子と向き合う。それは厳しさの仮面を被る親が見せる愛の形の一つだった。

分かるのだ……おひとりゲンの厳格な様は、心からの思いやる気持ちによるものだって。

分かっているのだ……いくら才能があると評価されても、ウルトラマンら超人や、ヴォルケンリッターに比べれば、まだまだ自分たちなどひよつこな身の上なんだって。

理解はできるのだ……愛機も自身も半端者で、ゲンの言う《過去

の自分』にすら打ち勝てるのか分からない今は、想いを訴えて騎士たちを止めてあげるところか、みんなの助けにもなれないんだって。

解ってる……解ってる……それくらい分かるんだ……理屈では分かっているんだ。

なのに……それなのに、そう納得させようとすればするほど、却って納得できない気持ちだが、どんどん膨れ上がっていく。

心が重傷を負った暴れ馬のようにのたうち回り、触り心地の悪い無念が、風船みたいに膨張していく。

何もできない自分、みんなに何もしてやれない、何の助けにもなれない、ただ待つことしかできない自分。

こんな自分が情けないと思ってしまう……そう考えてしまう自分が嫌になってしまう。

この上、傷口に塩を大量に塗り込む勢いではつきりと脳裏にあの記憶が流れ込んでくる。

気を紛らわそうと一気にホットミルクを飲み干したが、何の効果も示さなかった。

却って気が立ち、むしろ浮かんだイメージがより鮮明となる。

父が生死の淵を彷徨い、母たちが必死に家計を支えようと奮闘する裏で、家の中で外の日が沈み暗くなっても灯り一つ点けず、ひたすら家族が帰ってくるのを待ち続けた日々。

イヤだ！ どうして今そんな思い出を思い出さなきゃならないの！？

たとえばそれが、狂乱の渦に呑まれてしまった母から愛情の代わりに暴力の痛みを受けてきた親友よりも、巨悪に洗脳され……理性を失って守るべきものに手を下すまいと疼く体を抑えつけていた義兄よりも、自分が自分だと自覚できる年頃になる前に両親を失くしてしまった考古学者な魔法の先生よりも、家族が直ぐ傍に居る温かみを体験できず、一時は故郷の星の最大の禁忌に手を出してしまうまでに歪んでしまったウルトラ戦士よりも……あの人たちが辿ってきた経歴に比べたら、瑣末なことなのかもしれない……が、それでもこの少女にとってあの日々は、トラウマに相当する重くて苦過ぎる記憶だった。

振り払おうとする、頭の中に浮かぶソレを、死に物狂いに消そうとする。

しかし彼女が足掻けば足掻くほど、消えてほしいその映像は、より明細さを帯びて映しだされてしまう。何度も何度も直視される回数を重なる度、心の像が急に疾走を始め、鼓動と呼吸がリズム良くなどという言葉など意を介さず乱れ、体の奥に何らかの異物が入り込んだ圧迫感に似た息苦しさが襲ってきた。

そうだ……魔法の力に目覚める前は、時々自分の体の内で起き、臨海公園などの人気の無い場所で一人、喉の水気を蒸発させる勢いで叫んでは発散させて対処していた……心の悲鳴。

久方振りにそれが今、発生しようとしていた。

ダメだよ……今ここでそれをやっちゃ、寝ているみんなを驚かせてしまう。

呼吸を整えさせ、どうにか喉から迸ろうとする叫びを出すまいとするのはだが、一度加速しだした現象は彼女の意志にお構いなく実行に移そうとする。

止めて——止めて——止めてエエエエエ——！！

今まさに少女の音量と思えない金切り声が唸りを上げようとした——のだが、皮膚が触れられて伝わってくる何かによって、それは外に放出されることなく霧散していく。あれほど大きく乱れ手を焼かされていた呼吸も、出鱈目かつ乱雑な混沌と化した状態から、元の均等な網目に直された毛糸の編み物に喩えられるくらいに正常に戻りつつあった。

心の揺らぎが落ち着いたのもあり、ようやくここに来て気がついた。

体に伝わるほのかな温かみは、母の体温のものであったと。

自分の横から、母の腕が震えるなのはの体を抱き寄せていたのだと。

「おかあ……さん」

「悔しかったのよね？」

“魔法使い”になれても、誰かの助けになれ



ないと思ってる自分に」

桃子は抱擁から両の掌だけなのは肩に乗せて離すと、そう問いかけた。

母の言う通り、ベッドの上で流した涙も、さっきの心身の乱れも、原因を簡単に表現するとそうなる。

嫌だった……あの頃みたいに無力な味を噛みしめられるは、まだ小さくて幼い歳であるのが呪わしくなる気持ちが芽生えそうになるまでに。

魔法の力に目覚めてから、毎日練習を欠かさなかったのは、少しでもそんな自分から変わりたい願いが含まれていたのも事実。

やっと自分が手にできた『取り柄』だ。手放したくなかったし、できるのなら、どこまでもこの能力を上達させて駆け上がりたくもあった。

そうすれば、あの頃からもっと遠いところまで走り抜けられると考えていたから。

「お母さんは魔法のことはよく分からない、でもこれは言える、そんなに無理して魔法の特訓をしなくても、なのは自身が、みんなの力になる魔法なのよ」

驚きで元より大きめなのはの双眸が、より大きく見開かれた。

母の発言が、彼女にとって意外過ぎるもので虚を突かれたからである。

「信じられないって顔ね、でも本当よ、頑張りすぎちゃって、もう明日の分まで元気が残ってないくらいへとへとに疲れてても、なのは顔見たら、不思議と元気がじわじわと湧いて来たものよ、他のみんなもそう、お父さんもお兄ちゃんもお姉ちゃんもだし、光に勇夜君、ユーノ君にフェイトちゃんたちだって」

当人の予想以上に、自分が他者に影響力を持っていることに、しばし放心させられる。

疑ってるわけでは無いのだけれど、謙虚過ぎる彼女の性分ゆえか、贅辞の言葉に実感が中々掴めない。

なのは本人はこんな有様だが、決して誇張でも過大評価でもないの

如実であった。

光にこの世界で生きる礎となったし、異相体に敗れて無力感と自責の念に押し潰されそうになったユーノや、フェイトを悲愴な境遇からどう救えるか悩んでいた勇夜、アルフにとって活路にもなった。

何より、フェイトがこうして、血の繋がった家族と同一年の子たちと囲まれ、他愛はないようであるが得難い日常を送りながら、相手が色々とは規格外なヒーローとはいえ、男の子に恋もする女の子でいられるのも、どんな障害にもめげずそれでも諦めなかったのはその不屈さが一筋の光となったからでもある。

なのはの想像以上に、なのはは確かに、袋小路に入ってしまった誰かの想いを前進させる『魔法』となっていた。

「それにね、そう急いでどんな自分になりたいか決めなくていいわ」「どういうこと?」

「昔に比べたら、今は大人になるまでの時間は結構あるの、まあいつかは自分がどんなのになるか決めなきゃならないし、本格的に魔法使いになるにしても、他の職業につくにしても、なのはが大きくなって自分だけの道を選んだのなら、その時になればお母さんたちは無理なのはを引き留められないわ、でもそう焦らなくてもいいのよ、まだなのはには時間が一杯残ってるんだから」

母桃子がそつと語りかけるその言葉の数々で、ふと思いついた。

今日の訓練の終わりに、ゲンもまた桃子と似たような言葉を口にしていたことだ。

「焦ることはない、無茶をしてまで強くならざるを得なかった昔の私と違い、君たちには大人へと登るまでまだ猶予が残っている、その時間を上手く使って、急ぎ過ぎずに『自分』を作っていけばいい」

あの時は、思い詰め過ぎて、気張りすぎてその意味を理解する余裕は持ってなかったけど、今はどうにか意味を測ることができる。

「じっくり時間を掛けて、なりたいたい自分を見つけて目指しなさい」  
何だか不思議な感覚だった。

母の口から紡がれる言葉の数々には、単に吐息の熱だけではない、詞そのものに仄かに籠った暖かさが感じられたから。

そのお陰なのか、今日の夕方くらいからずっと自分に苦しみを与えてきたしこりが、段々と消えていく気がする。

実は結構皆の助けになれてたんだ、と知ったなのかも、それはそれで、何と現金なのだろうと苦笑してしまう。

でも今となつてはそれが何だ、嬉しいものは嬉しいのだ、と妙にポジティブに受け止められるようになっていた。

「さあ、そろそろ寝ましよう、なのはが眠らないといつまでも起きたままな夜更かし君が二人いるから」

夜更かし君？ 一体誰のことだろう？ となのはは首を傾げた。

「お二人とも、出てきなさい」

「あはは……ばれましたか」

「すみません、盗み聞きみたいな真似して」

「光兄……：ユーノ君」

リビングからは死角になっていた廊下から、その不真面目な夜更かし君たちが出てきた。

二人とも、一度は就寝したものの、眠りが浅かった為か、なのはが一階に降りた際の微かな物音で起きてしまい、そして足音でなのはだと察し、彼女のことが気がかりとなつて隠れて聞いていたのである。

ことの一部始終と聞かれていた。おまけに思い出せばとても人様に話すには恥ずかし過ぎる醜態の数々。

羞恥な心境で顔に熱が発生し、こうして兄たちに心配掛けてしまったことに申し訳なさも感じる一方、喜びも一緒に込み上げてきて、微笑ましくもなるのはであった。

大丈夫……ゲン先生やお母さんの言う通り、焦らずに頑張り続けてみよう。

一人ではなく、皆皆で手を取り合つて。

それが——みんなを元気づける「魔法」になるのなら。  
つづく。

## STAGE33 — 託す者、託される者

STAGE33 — 託す者、託される者

あの第二幕の夜戦から、少し時間を遡る。

「予想はしていたが、こうまで燦々たる有様とは…」

「はい、なにしろ特定の書物探すだけでも、本格的な探索チームを組むくらいですから、まさに“人工の秘境”です」

ジャンボットの人間体であるナオトとユーノは、自身の目が捉えし光景に愕然とした心情を抱えていた。

無限書庫——それが今彼らが身を置いている施設の名称である。

有り体な表現を使うならば、魔法世界における最も大規模な蔵書数を誇る書庫、アナログなデータベース。時空管理局の管理対象となつたあらゆる次元世界の書籍、蔵書、史料が保管されて、その名の通り日々蔵書数が膨れ上がっている。

当然ながら、闇の書が作られた古代ベルカに関する書物もここにあり、二人はここからあの魔導書の情報を集めるべく、書庫と言う名の魔窟に挑もうとしていた。

言い方が大げさ過ぎるのでは？　と思われるかもしれないが、実際表現に大袈裟や誇張といった単語が出てきてしまうのも無理からぬ話、実のところ、この書庫は辛辣に申し上げるなら、混沌——カオス、無秩序——ディスオーダー、無政府状態——アナキーといった秩序等の反対語を具現化している様だと言っても過言ではない。

施設内部は、円筒状になっており、内壁はリング状になる形で本棚が設置されている。格階層の本棚には、順序、序列とか関係無しに、ありったけの書物が無整理に収納されていた。保管された書物の中には、閲覧用の机に乱雑に積み重なっているものさえいる。本としては偉く酷い待遇だ。貴重品であるのに奴隷的に扱われているとさえ思えてくる。

信じられないかもしれない。地球よりも技術力が進んでいる世界における国立図書館と言つてもいい施設が、でたらめ且つぞんざいに過去を知るのに貴重な史料を保管しているなど、けれど現実にそうな

のだ。

20世紀前半頃の地球では既に確立された、各書物に特定の数字番号を指定、ジャンルごと、日本語ならあいいうえお順、英語ならアルファベット順と単語別に振り分けて保管する秩序——システムというのが、この書庫に限って言うならば全く為し得られていないのである。

一応、本たちの紙質の経年劣化を防ぐべく、未使用時室内は完全真空、閲覧中も酸素濃度を可能な限りギリギリまで抑えるなど、対策は講じられてはいるが、そんなもの……眼前の酷さを前にすれば気休めにもならなかった。

あまりにスペースが広大なので、棚に机など一部を除いて室内は無重力空間となっている。

「質問するのはやぶさかだが、この書庫がこんなにも煩雑なのは——」

「はい、毎日蔵書数が増え続けることと、ここを整理するだけの人手が回ってこないんです、元から人が全然足りないのが一番の悩みな局ですから」

人手不足：戦力が魔法のみといった云々以前に、管理局で働く上で求められる能力、スキルの数々が高度なあまりにこの組織最大のたんこぶとして君臨する存在。いやむしろ、たんこぶよりも癌細胞と例えた方がしっくり来る気もする。そのメインの癌から転移して派生した組織の腫瘍の一旦が魔窟と化した書庫だ。

実を言うと、時空管理局はこうした内部の組織構造が未だに未完成な部分が多い。設立からおよそ100年も経つというのに……これは過去の時代背景に端を発している。

地球に例えるなら、大規模な世界大戦によって、歴史が浅い新興国一つを残してほとんどの国家が機能停止、国土は大量破壊兵器で焦土と化した。

一応無事であったその新興国は、国のシステムを整わせる暇も無く戦争の爪痕が大きい各地の復興、地雷、不発弾、核廃棄物などの残留兵器の処理に明け暮れることとなる。

新興国を管理局、世界大戦を古代ベルカが衰退する因となった、管理世界では『古代ベルカ戦争』と呼ばれる次元世界規模の大戦。

不発弾等は、様々な次元に散らばってしまったロストロギア。

こうした異常な外部の環境下を前に、局は自らの体質を顧みることが叶わなず、組織そのものの年代としてはフェイトやなのはくらいな、まだ成長段階の子どもで、そうした身でありながら自らを酷使し続けた。

結果、勇夜曰く『ガタがとうにきている』状況下となり、無限書庫も書物が散乱している現況となっている——むしろ局内部の縮図とさえ見えてきそうであった。

『地を吐きながら続ける悲しいマラソン』

この世界でも、ウルトラセブンのこの言葉が当てはまってしまいう実状を背負い込んでいた。

「けれど整理されてないだけで、根気よく探せば『どんなこと』でも必ず出てきますよ」

「大方の人間は、目当ての情報が出てくる前に挫折しそうであるがな」  
「あはは、さすがにそれは否定できませんね…」

ナオトの返しを前に、ユーノは苦笑いしか返せる返球を持たなかった。

「無論、必ず見つけるつもりだ、その為に君から『検索魔法』の使い方を教えてもらったのだからな」

「はい、では行きましょう、僕は最下層の棚から調べてします」

粘り強い根気と、極限にまで研ぎ澄ました集中力が要求される、無限書庫での闇の書の情報収集がこの日こうして始まりを告げる。

無数の書物に対抗すべく、二人はある魔法を手に行っていた。

それが前述のナオトの台詞にあった『検索魔法——リサーチアシスト』という術である。

思考を分割させ、複数の作業を同時に進行できる魔法、並列思考術——マルチタスクの効力を最大限に生かし、高速で情報を集めつつ整理処理できる。

これを使い、闇の書が作られた古代ベルカの史料を複数同時に速読

させつつ、書に関する記述が見つければ、それを二人の指にはめられているデータの収納と保存に特化した指輪型のストレージデバイスに記録させるのである。こういった補助系統の魔法が得意なユーノは、500ページはゆうに超える史料を、何と20冊も同時に読み進めていた。

ナオトもナオトで、10冊の書物を読みながら、ユーノの分を集めたデータの照合、整頓を行う。デスクワークに秀でたスクライアの少年とスターコルベットのAIによる探索により、日によっては一日で五百冊以上の本が読破される事態さえ起きた。

かと言って、疲労と無縁とは言い難く。

「ユーノ、そろそろ休憩に入ろう」

「はい…」

ユーノは疲労で目がしらを抑えながら、ナオトからの饑別であるゼリーが入ったチューブを受け取った。

無重力なので、飲食にはこういったチューブタイプの容器が好ましい。

この時点では、書庫での調査を始めて三日目。

「あの、ナオトさん、どうなさいました?」

ウイダーを飲んで補給していると、ユーノはあることに気が付く。

いつもは生真面目な学級委員長の如く、眼鏡をかけた顔をポーカーフェイスの状態で維持している彼の口元が、僅かながら綻んでいた。

何となく、郷愁に浸っていると見てとれる。

「いや、弟が人間の姿なら、丁度君ぐらいの歳になるのかもしれない、  
と思っただけ」

「ご兄弟が…おられたのですか?」

「いわゆる『兄弟機』と言ったものさ、開発中で、人工知能も未発達だったから、まともに会話したことはなかったが……」

苦みも混じった、懐かしむ声色でナオトは答えた。

エスメラルダ王家に仕える人型機兵は、ナオト——ジャンボットのみではなく、『過去』もう一機存在した。

「ベリアルのごことは聞いたか?」

「はい、光さんから大まかに」

「彼の軍にエスメラルダが攻められた時に…消えてしまった…だがまだ生きているかもしれない望みは捨てきれなかった、ゼロからのスカウトを了承したのも、彼らと旅をしていればいつか名すら付けられていなかった弟に会えるかもしれない…と考えたからだ…」

今となつては、あくまで…過去な代物ではあるけれども。

その機体は、10年以上前の恐怖の皇帝カイザーベリアル率いる帝国軍の侵攻から守るべく、まだ完全に完成していない状態でレギオノイドの大群に立ち向かい、行方不明になつたと、ベリアル銀河帝国との戦いが終わった後、エスメラルダ王から聞かされた。

明確に大破とも死亡とも見なされなかったのは、その兄弟機の肉体であるパーツが一欠片も発見されなかったからであつた、らしい。

ユーノは彼の弟に関する立ち入りを、それ以上行わなかつた。

自分も家族を亡くした身で彼の心境は汲み取れるし、度を超す深入りは禁物である。

何より今は、それ以上に優先すべきことがある。

気持ちを切り替え、魔導書の記録が記された史料探索の続行に移つた。

いくら補助魔法でリサーチのペースを上げていても、さすがに二人だけでは厳しかった為、日によつて閲覧申請の許可を出してくれたリーゼ姉妹に、ユーノにとつて家族であり、同僚でもあるスクライア族の考古学者たちの助太刀も借りつつ進められていった。

それだけの人員を借りても、史料搜索な難儀な作業で、始めてから数日は、古代ベルカ、ベルカ王朝という国家が存続していた時代に猛威を振るっていた騎士たちの記述しか見つからなかつた。

しかし、それでもめげず地道に調べを進めていくうちに、少しずつ核心に近づいていることも、また確かではあつた。

そして、時は第二夜の戦いから一夜明けた朝。



ひそかに魔導師の少女たちの修練の場として使われている裏山の広場で形成された結界内では、今朝もまたおとりゲンの指導の下、高町なのはとフェイト・テスタロッサは甘えを許さぬ厳しき鍛錬を積み重ねていた。

“いつもの”と言えるようになるまで繰り返された運動トレーニングのメニューを経て、今は実質身一つなゲン相手に、ツーマンセルでの模擬戦闘に挑んでいる真つ最中なフェイトとなのは。

訓練初日と比べてみると、二人の戦い振りは見違えるような多大な変化を起こしていた。

最初の日は、ゲンの長年の修練と実戦で鍛えられ、磨きぬかれた彼の物理的な圧迫感さえ押し寄せる鋭利な眼光の一筋で、呆気なく戦意を喪失させられたと言うのに、今は初日以上の貫通力を秘めた眼力に臆することなく二人はゲンに立ち向かっている。

様変わりしたのは、彼女らの戦闘への集中を持続させる精神力だけではない。

彼女らが使う魔法の数々は、以前より一層洗練され、精彩さを帯びていた——と、ゲンの目線からでもそう確証させる力強さに満ちていた。

こちらの一存で急速に魔力の出力が上げられても、巧みにそれを御し、むしろ自らの魔法の糧として最大限活用できている。カートリッジシステムによる出力アップにも、今の彼女らならば対応できるだろう。

丁度いいかもしれない。今朝、彼女らの“魔法の杖”の強化改修作業が完了したそうなのだ。

今の二人なら、パワーアップしたパートナーと上手くやっていけるだろう。

だが、その前に、問うておかなければならないことが、一つ。

「礼！」

「ありがとうございます！」

一瞬で背筋を整理させてしまう魔力を帯びたゲンの低音が響き渡り、彼と向かい合う形で直立整列するなのはとフェイトは彼の声に負けしと大声で応えた。

「ではやすめ」

と、続けてゲンが一言そう呟く。その直後、ビシツと地面から垂直に立っていた二人は、へなへなと足も腰も二の腕も背中も体勢を崩していき、尻もちを大地に着かせてしまった。糸の切れた人形が崩れゆく様をスロー再生で見た一部始終とも比喩できる光景であった。

「お疲れ様、はい」

「ありがとうございます」

「もう……喉の中が砂漠みたい」

アリシアからの差し入れなスポーツ用清涼飲料水の入ったプラ製のボトルを受け取ると、直ぐにでも渴きを潤すべく、二人はゴクゴクと水分を体内に沁み込ませていった。

ゲンのスパルタなご指導で、この時既に彼女らは疲労困憊であり、さっきまでの姿勢の良い直立も、現状体内に残っている体力の残り滓を搾れるだけ搾り取ってどうにか為せた次第である。

バリアジャケットの生成を維持する魔力も余裕から程遠いのか、座り込むと同時に衣服が色もデザインも正反対なそれぞれの固有の防護服が解除され、聖祥大付属小製の長袖用体操着へと戻っていった。

季節は冬で、バリアジャケットには体温調節機能も完備しているというのに、体中てかりが出るまでに汗だくで、息をせえせえと吐き続けさせられるまでに疲れを実感させられる二人。

どことなく、小さい子が大好きな一定層の歓喜の声が聞こえてくる感覚が過るが、気のせいにしておこう——もしやと感じた方、あなたのことかもしれませんよ、今のはさらっと忘れて頂いて下さい。

疲労の大半の原因は、やはりゲンの空気感を実戦そのものな模擬戦闘、これでも彼女らに合わせる程度加減を抑え、ウルトラ念力以外はウルトラ戦士としての超能力は使わず、己が身だけで応対していたのだが、それでもなのはたちにとってはハード極まる試練であっ

た。

これもやはりと言うべきか、対してゲンは飛びまわりながら魔力弾、魔力砲撃、魔力斬撃などといった攻撃を仕掛けてくる少女たちを相手にしていたというのに、一滴も汗を流さず、一欠片の体力も消費していないのでは？ 誤認したくなるまでに平然としている。

さすがは獅子の名を持つウルトラ戦士、人間の姿であつても激闘と鍛錬で積み重ねられてきたその貫禄は一切劣らない。

「二人とも、楽な体勢のままでもいいから聞いてほしい」

「は…はい」

「何の話ですか？」

なのはとフェイトは、ゲンの改まった態度に疑問を感じるも応じる。

「今日は君たちにとって、念願とも言える吉報を持ってきた」

そう彼が言い終えるとともに、ゲンの横に転移用魔法の魔法陣が現れ、直線状に光を放出する円内に、人物の輪郭が少しづつ浮かび上がり――

「母さん」

――魔法陣が消えたと同時にプレシアが現れ、この結界内への転移を完了させた。見ると彼女の右の掌の上に、長方形型な指輪などの宝石をしまうフロッキング製のジュエリーケースが乗っていた。

「プレシアさん…ひょっとしてその箱の中にあるものって」

「おまたせしたわね、あなたたちの大事なパートナーよ」

それを聞いた途端、その体力が一体全体身体のどこに残っていたのか、地面にへたりこんでいた二人は驚きひよいと一瞬でその場から立ち上がった。

吉報――良い報せと聞いて、薄々感づいていたにも拘わらずだ。

プレシアはケースを開き、中にしまわれていたものをなのはたちに見せる。

「レイジング…ハート？」

「バル…ディッシュユ？」

紛れも無く、なのはとフェイト、二人の魔道師の少女たちを支えて

きたインテリジエントデバイスたち、レイジングハートとバルドイツシユだ。

何とも不思議な感じだ。結界の効果で体感時間が通常より長いのを踏まえても、実際の時間にすれば、二人が離れ離れだった期間よりも遙かに短いというのに、かなり久々に会った気がする。

感慨の想いが大きく過ぎて喉にでも詰まっているのか、上手く言葉として出てこないのだけれども、それでも自然と二人の頬が笑みを形作っていた。

ケースの中にいるのが彼らであることは、使い手たる二人は一目で分かったが、一方で現在待機モードなデバイスたちは、以前の姿とはいささか以上に、その姿かたちを変えていた。

『お久しぶりです、我がマスター』

「にやはは、そうだね」

片やレイジングハートの方は、ルビー色のガラス玉の姿は変わらずだが、首に掛ける紐の付け根の形状は若干差異が見られる。

「バルドイツシユも久しぶり、元気にしてた？」

『yes, sir』

「あはは、無口なところは変わらないね」

片やバルドイツシユはというと前との違いはより顕著で、金色の光沢を放つ逆三角形状なところは一緒ではあるが、各辺には台形状の窪みが入り、より鋭角的な印象を与える姿となっていた。

最低限の応対しかしない、規律に従順な職業軍人的無骨さを感じさせる口調の方は相変わらずである。

『不器用ですから』

「あれ？ 今日日本の俳優さんみたいなこと言わなかった？」

『おそらく偶然の一致とかと』

「なら……いいけど」

今の無骨なデバイスのささやかなユーモアは、気にせずスルーしても構わないが……恐らく偶然に一致したわけではあるまい。

「変わったのは見た目だけないよ、名前もちよっと新調したんだ」

「新調って、よくアクションモノのアニメとかで、主人公がパワーアツ

プする…みたいなのですか？」

「そう、レイハちゃんの方は、レイジングハート改め、『レイジングハート・アドバンサー』」

「アド…バンサー？」

聞き慣れない言葉だ。聖祥では初等科から英語は科目に入っており、ある程度英語について知識があるものの、少なくとも英語辞書にそんな単語は無かった。アドバンス——Advance、前進、進むという意味な言葉なら載っていたが。

「いわゆる造語だよ、ちなみに意味は『前へ進む人』、レイジングハートと合わせると——『不屈の心で前進する者』ってとこかな」

「じゃ姉さん、バルディッシュはどんな名前に変わったの？」

「バルちゃんの方は、『バルディッシュ・スパークル』」

スパークル——sparkleとは、輝き、煌めき、閃光という意味せある。

「地球だとバルディッシュは斧の一種だから、『闇を照らす戦斧』だね」

「かつ…かつこいい」

「うんうん」

『そうでしょう？ えっへんです』

仮にもというか遺伝子的にの心的にも列記とした女の子だということに、この二方はすっかり愛機たちの新たな名に目を煌めかせ、レイジングハートはそんな二人のリアクションに、それまでの彼女では考えられないような返しをした。

一応男女とも、大小なり異性的嗜好を秘めているものだど補足しておく。

「(この子たちのAI、やっぱり少し弄り過ぎじゃないかしら?)」

「(いいのいいの、これくらいのはったちやけ具合、リンクちゃんに比べたら大人しい方だっつて)」

今の念話の応酬から窺うに、やはり主犯格はテストロッサ親子、というよりほとんどアリシアが実行犯な様子。

確かにリンクことウルティメイティーズは、元はあるウルトラマンの光と人々の諦めない想いが具現化した神秘のアイテムにしては、

とても人間らしさ溢れる人格を会得したきらいがあるけれど。

「生まれ変わったパートナーに一喜しているところに水を差すようですまないが、彼女らを渡す前に、一つ聞いておきたい問いがある」

「は、はい」

巖かで渋味の利いた低音のゲンの声が、一時緩んでいたその場の空気を一気に引き締めさせた。よく見るとプレシアも、先程の穏やかな顔つきから一変して、厳然さも醸し出さず凛とした表情となっている。

大人たちの真剣な眼差しに、フェイトたちも顔から笑みを一度消し、背を正して目を合わせた。

「今勇夜君たち、ウルトラマンゼロたちが相手にしているのは、自分の手を血で汚して、自身の体をを黒ずむ泥を被ってでも、掴みとりたい望みを持った人たちと、そんな純粹な願いを利用し、己の邪悪な欲望の為に暗躍して者たち——そして、ウルトラマンですら圧倒し、次元をも消滅させかねない力を秘めた魔導書よ」

なのはたちも聞かされた……暴走を起こした呪いの魔導の本の恐ろしさ。

ゼロにウルティメイトイージスを与え、ウルトラ戦士でさえ苦戦させ、追いつめた怪獣の大軍を、いとも簡単に駆逐、掃討してしまう計り知れない破壊の力と、単体で次元の壁を越えるなどといった神秘の力を宿し、全容を未だ見せない銀色の巨人——ウルトラマンノア。単純な戦闘能力の測りでも、実在するウルトラマンの中で、最強クラスに位置していると言えるのは大げさだと断じれない。

闇の書の暴走は、様々な因が重なったとはいえ、そんな彼でさえ、身を引き換えとした封印でしか止められなかった恐るべき存在だ。

「無論私たちは、そんな最悪の惨禍を断固阻止する心構えだ、だが……苦戦も免れないのも事実、守護騎士たちは今まで以上に死にも狂いで戦うであろうし、暗躍する者たちの妨害も激しくなるだろう」

「つまり……勇夜たちと一緒に戦うってことは、命を賭けなきゃならないほど、重いものであると………いいますか？」

「そうだ、まだ若く幼い君たちの命を、生きるか死ぬか、この二つの分岐が設けられた天秤に賭けなければならぬ、君たちの心に、刃にも

似た鋭さのある辛い体験をも負けさせかねない」

「ウルトラマンたちと共に戦って、魔導書に関わる者たちに立ち向かうというのは、そういうことよ」

今なら、確かな実感を以て理解できる。

この厳格さが漂う二人の貌と、言葉の裏には、まだ幼子なのはとフェイトを想い、案じ、心配し、できることなら命を秤に置かなければならない危険な場へと身を置かせたくないという情想——愛が存在している、と、幼い彼女たちでもそれを感じ取れた。

「それでも、君たちは、君たちの魔法で、少しでも『彼ら』の力となり、『彼女ら』を救いたいと願う気持ちに、一点の曇りも無いか？」

ここ数日、より厳しい魔導の修練に勤しむようになってから、二人は思い知らされ、直視させられた。

「確かに、勇夜たちは、私たちより……ずっと強いです、体も……心も」自身はまだ子どもで、何もかもまだ小さくて、幼くて、未熟でちっぽけで、井の中の蛙同然で、ただ魔法が使える、ただそれだけな……ある意味では調子に乗って、良い気になってしまっていた身である」と。

自身の背中と、合わせたかった人たちの背は、思っていた以上にずっと大きくて、比べ物にならないくらい逞して、まさに人々から『ヒーロー』と呼ばれても遜色ない勇士であるということ。

ゲンとプレシアの言葉には、そんなヒーローたちに任せて、危ういバランスの上にあるとはいえ、穏やかな日常を過ごすのも手である、自分たちはその選択肢を手にとっても恨みはしないと、裏にそう潜ませていた。

でも——

「だけど、それでも……」

一度喉が詰まりかけ、息を整え直し。

「わがままだと思ってくれても構いません……それでも諦めたくないんです……ここで中途半端に終わりにたくないんです」

「どんなに自分が非力でちっぽけでも、少しでもできることがあるなら、勇夜……ゼロたちの力になりたい、なってあげたい、そんなヒー

ローにばかりに重荷を背負わせるのは嫌なんです」

大人たちの目と自身の目を、真っ直ぐに合わせて伝える。

「これが、私たちの気持ちです！」

偽りのない、剥き出しに等しい自ら情動を、言霊に変えて発した。実時間を測れば、それほど長くは経ってはいない：が、当人たちにとってには妙に伸長された体感時間が、黙然とした空間の中を流れていく。

アリシアも、普段の快活さを奥に潜めさせ、真剣な眼差しで見守り手に徹していた。

短いのに長い、単語にすれば矛盾してしまう時の流れを経て、ゲンはプレシアにアイコンタクトで意思を伝え、プレシアも目線と頷きだけで応えると、手に持っていたジュエルケースを一旦アリシアに手渡しつつ、箱に添えられていたレイジングハートとバルディッシュを両の手にそれぞれ置き。

「なら、この子たちと一緒に力を貸してあげて、どんな困難にも諦めずに進むあなたたちのヒーローの光——ささええになってあげなさい」

ありきたりな言い方ではあるが、慈しみと愛しさと母性に満ちた表情を顔に浮かばせて、デバイスたちを担い手たる魔法少女たちに差し出した。

「そして忘れないで——私たちも、彼らと二人に全てを背負わせたりはしない、私たちも自分ができることを尽くして、あなたたちの未来も守るわ」

ゲンもまた、容貌から厳格さの紐を解いて、ずっと表には出さず隠していた頬笑みを彼女たちに見せた。

「私も皆も、いつでも君たちのことを思っている、君たちもまた、一人ではないのだぞ」

一人ではない……そう、少なくとも思いを共有している事実が、実体となってそこに在る。

「はい！」

大人たちの誠実な気持ちにぶつかってまで、我を通してしまったことに申し訳なさが浮かびつつも、それでも背中を押してくれたプレシ



あたちに感謝の念を送りながら、なのはとフェイトは、生まれ変わって帰ってきた自らの愛機を受け取り、そっと握りしめた。

たった今この瞬間体感したものを、忘れない為に、記憶に刻みつけるようにして。

「どうしてるかな…あの二人」

「勇夜が新たに命名したデバイスたちに心躍る一方で、頑として譲らずゲン殿たちに主張してるでしょう」

「アルフ、精神リンクで何か分かるか？」

「光の言った通りになったみたい、何となくだけど強い気持ちを感じるよ、あ…晴れやかな感じに変わった」

対闇の書臨時捜査本部も兼ねているマンシヨンのテラスでは、勇夜、光、アルフの三人が、フェイトたちの現況を想像しながら、柵に身を寄せて帰りを待っていた。

アルフが精神リンクでフェイトの感情の変遷を知覚して間もなく、テラスに認識阻害の結界が張られ、中央に魔法陣が現れた。

その円陣に、なのは、フェイト、アリシア、プレシアが姿を見せる。尚ゲンの方は、無限書庫探索中のナオト、ユーノ達の補助にその足で向かったのでこの場にはいない。

「おかえりなのは」

「ただいま光兄」

「今日も結構ばてたんじゃないかい？ 体操服が汗でびっしょりじゃないか」

「お風呂沸かしてあるから、入っていらっしやい」

「ありがと母さん」

「仲良く流し合いっこでもする気かな？ お二人さん」

「ふえ？」

「か、からかわないで下さいアリシアちゃん」

「赤くなることないよ、女の子同士なんだし、何の問題もないでしょ

？」

「プラス二人は親友ですからね」

「光兄まで……」

「光君、女の子の赤裸々な会話に下手に入りこむと火傷するわよ」

「これは失礼、以後お気をつけます」

家族と他愛もない談話を交わすフェイトたちの様子を、勇夜はまざまざと見つめる。

大丈夫みてえだな、と彼女たちの顔を見てほっとした。

二人が昨日のことで思い詰め過ぎて、心を縛り付けて負担を掛けているのではないかと、気がかりであったからである。しかし今のフェイトたちは何と言うか、重しが取れて吹っ切れたように見える。

少なくとも、一人で強くなろうと意気がり過ぎてバカをやらしかたかつて自分と同じ顛末に至る心配は無さそうだ。

「忘れるな、私もみんなも、いつでもお前のことを思っている——

—お前は一人じゃない」

つて……なんだってこんな時にアナザースペース……：現在光の国じゃ《エメロードスペース》と呼ばれてる世界に旅立つあの日の父さんの言葉を思い出してんだよ俺。あの時も今も、その言葉に籠められた父の想いには嬉しさを身に宿してはいるが、彼のシャイな性分ゆえ、いざ思いだすところばゆく、かつ歯がゆかった。

後は……クロノたちが、自分の中にあるもんとどうケリを着けるかは、やっぱり最後には自分でどうにかするしかないからな、悔しいけど。

せめて……：信じてあげなきや、フェイトたちみたいに、吹っ切られるように。

「勇夜」

「ん、何だフェイト？」

一人思案していたところへ、フェイトが彼に尋ねてきた。

「今日も街へ調査に出るんでしょ？」

「ああ」

「私にも……手伝わせてくれない……：かな」



へうへう

# STAGE 34 | MASK

地球海鳴市での住まいとしているマンションの正面玄関の柱に背を付けて、フェイトは子犬フォームのアルフと一緒に待っていた。

先刻に、思い切って今日の勇夜の聞き込み調査を手伝わせてほしいと願ったものの、姉の投下したデート発言で思考回路をショートさせて倒れてしまう失態をやらかしたフェイト。彼女には手伝いを名分としたデートなんてする気も打算も持っていなかったのだが、アジアがジョークで投球せずとも、実際に街を二人で出歩く状況下になればパニックを起こして同様の結果に至ったには違いない。それだけフェイトという女の子がウルトラ戦士の少年相手によって発症中の恋煩いは、深刻と言えばそう表せるし、同時に乙女としては青春真っ盛りで微笑ましいものとも言える。

「やっぱりあたしがいるとお邪魔虫じゃない、せつかなんだし二人水入らずで行ってきなよ」

「(無理無理無理無理無理無理無理！ 無理だつて！)」

小刻みにぶるぶると振るわれるフェイトの顔は、再びみるみると赤くなっていた。

「(だ、だつて横に並んで歩いてるとこ想像するだけでも顔が赤くなっちゃうのに……こんな浮ついた気持ちで手伝いたくないよ)」

「(半年前に勇夜と、一度一緒に海鳴の街を歩いてたじゃん)」

「(そうなんだけど……あれはまだ無自覚だったというか、よく分かってなかったというか、まだそこまで気持ちが悪く育ってなかったというか、どちらかというとお兄ちゃんみたいだなって……と、とにかくお願いだから一緒に来てえ……アルフうっ)」

「(しょうがないね、あいよ)」

念話で話しかけてきたアルフに、屈んで子犬姿の彼女の目線の高さを合わせて潤いが溜まった涙目で同行するよう懇願するフェイト。微笑ましい様ではあるのだが、その恋煩いの症状がフェイトの行動に支障をきたしている事実も、御覧のとおりである。

今の光景を傍から見ても、子犬相手に神社参りする様にも映る珍妙

な姿だ。

こんな彼女の有様が気に掛かってか、リンクは——「良いアイディアを思いつきましたので少し待って下さい」——と言い、暫く玄関前に彼女らを待たせていた。

アルフはご主人の心ここに在らず様に微笑ましく感じつつも苦笑いしながら、リンクが編み出したという打開策が何なのか、考えてみた。

フェイトがこうなってしまう原因は、勇夜への恋慕と、彼とともに行動するという前提にある。この「一緒」になるありきでは、どう足掻いても彼女にデートに似た状況を意識してしまう、それをどうにかする方法なんてあるのだろうか？

それなら気持ちだけ受け取ってもらい、丁重に断ってもらった方が良い気もする。しかし頑固さに掛けては人一倍なフェイトでは、そんな着地では絶対納得しないだろうと、ここ数年の彼女との付き合いから考えて、アルフはそう結論づけていた。

一体リンクは、どうするつもりなのだろうか？

「お待たせしました、フェイト、アルフ」

二人に呼び掛ける女性の声が響く。空気を響かせてフェイトたちの耳に伝ってきたその声は、彼女らに疑問符を浮かせた。

フェイトらには聞き覚えの無い、ややハスキーではあるが、女らしい柔らかさ艶のある声。いや一応どこかで聞いたことがある気がする。けれどいくら記憶を呼び覚まして、自分たちと身近な人たちに、その女性の声と該当する者はいなかった。

「だ…誰ですか？ あなたは…」

声の主に目を向けて見たが、疑問符は余計に大きくなる。自分たちは知らないのに、明らかに自分らを知っている風に声を掛けてきた女性。

顔つきを見るに、大体見た目から推測できる年齢は18歳くらい。

背丈は170近くと女性としてはやや長身。

目じりの端は吊り上がっているが、かといつてきつい印象まで与え

ないやや大きくぱつちりとした瞳。

いわゆる姫カットと呼ばれる切り揃われた前髪、触らずとも細さと触り心地の良さが分かる綺麗に光を反射させる背の中心まで伸びた黒い髪。

全体的にほっそりとしているが、服越しからでも適度に肉付きの付くバランスのとれたプロポーションなモデル体型。着やせしているが、隠れ巨乳と言えるくらい胸もあるだろう。

一目で美人と言わせてしまう説得力のある美貌だが、綺麗と呼べるのは何も見た目だけではなかった。

しいて言葉を上げるなら、雰囲気とも言うべきか？

竹を割った様にさばさばとして、自立心と自信に満ち溢れたスーツ姿が相性が良さそうな現代女性。

かと思えば、自己主張から一步引いた慎ましさと清楚さ、気立ての良さのある着物姿が似合いそうな一昔前の大和撫子。

水と油くらい共存できなさそうな二つの要素が、奇跡的に両立されたオーラが、その女性の体からは滲み出ており、見栄えの良さも相まって、凛として目が眩むまでの美しさを持つ女性であった。

「びっくりさせてしまいましたね、これを見れば分かるでしょう」

女性はすらりとした細い指が伸びる左手の甲をフェイトたちに見せる。

その中指には、日常では目立たぬよう指輪サイズとなっているウルティメイトブレスレットが嵌められていた。

「まさかあんな……リンクかい？」

「ご名答です」

美人の正体は、何とその指輪の主、リンクことウルティメイトイージスご本人であった。

「ねえ、あなたがリンクなら、勇夜は今どうしてるの？」

「マスターの意識は、現在“私”の中にいます、いわばマスターの体をマスターから貸していただいている状態ですね」

勇夜とリンクの間で起きているこの状態の大まかな流れを、段階に分けて説明しよう。

まず一つに、生物の意識または魂を一種のデータと喩えると、イージスに宿る彼女のデータと勇夜自身の肉体に宿る彼のデータを交換させる。そして交換させたと同時に、リンクが予め組み立てていたイメージを元にして、ウルトラマンの能力の一端である肉体変化の術を行使して、勇夜の体を女性のものに変身させたのだ。

前述した行為は、どちらもウルトラ一族なら、やろうと思えば可能である。

大きさをミクロのサイズから、エネルギーの消費量の問題を除外すれば、単体でも約200メートルまで自在に変えることはできるし、アイテムに魂が憑依する現象にしても、勇夜——ゼロの先輩であるウルトラマンメビウス、ウルトラマンヒカリ、彼らと共に戦った防衛チームのメンバート、ウルトラ一族とは最大の宿敵と言える暗黒皇帝エンペラ星人との激闘を思い出して頂ければ納得できよう。

あの最終決戦の際、メビウスはウルトラマンの肉体を破壊する効果を持つエンペラ星人のレゾリウム光線によって、その身を消滅寸前にまで追い込まれたのだが、ヒカリがかのキング星に住む一族の長老から授けられたアイテム、ナイトブレスに魂を一時定着させることで一命を取り留めたのである。

その後、どう彼らがエンペラ星人に大逆転の勝利を掴みとったかは、言うまでもあるまい。

そして人間の見た目の性別を変えることも、この通り。

今のところ、勇夜とリンクを除いて、男でありながら女性に変身したウルトラ戦士は、セブンの上司で彼と同名のコードネームを持つ宇宙保安局に所属するレッド族くらい。

覚えがないって？ 思い出してほしい。彼とコンビを組んでいる勇士司令部所属のウルトラマンと一体化した地球人と最初に対面した時、彼がどんな姿で現れたかを。

ん？ じゃあ正義の名を冠したウルトラマンはど？ かのウルトラマンの人間体は、性別不明を表した方がいい。

「でもなんか今のあんだの声、どこかで聞いたことあんだよね」

「恐らく、それは私がこの姿を形作る際にモデルにした一人の声優様



ですね、ルックスに関して彼女をモデルの一人として参考にしてもらいました、声まで被ってしまったのはその為かと」

「それだ、前にス〇パーのアニメチャンネルでやってたガ〇ダムに出てるキャラの声だよ、ちよつとモノマネしてみてもよ」

「はい……『ガンダムう……ガ〇ダムは——敵イ！』」

リンクは体の形成の際、ネットでその姿を拝見できる芸能人の女性たちをモデルして反映させていたのだが、その一人は今上げた声優業、特に吹替えを中心に活躍してる女性役者であった。その女優さんも、モデルとしてやっていけそうな容姿を持つ美人さんである。

しかしこのリンク、偉くノリノリである。

「余り駄弁をし過ぎるとマスターから口うるさく言われそうなので、そろそろ行きましょう」

「うん」

そうして三人は、本来の目的の為に海鳴市街地へと向かった。

さてさて、自分の体を一時リンクに貸した勇夜——ウルトラマンゼ口はというと。

「お……い、リンク……」

ウルトラマンとしての姿で、ブレスレットの内部にある特殊な空間に身を置いていた。

周りはやや薄暗く、仄かなに空間を照らす光と、日光を浴びた水面にも見えなくないゆらぎ、尻もちを付けられる真っ平らな大地ぐらいしかここにはない。

「せめて外がどうなってるかぐらいは見せてくれよ……！」

何度か彼の視点から見て上部に位置する宙に口の回りに両の掌を添えて何度も大声でリンクを呼び掛けているのだが、この意識がこの

空間に転送されてからは一切彼女から返信も応答もない。

完全に外部との通信が遮断されていた。

まさか調査を言い訳に遊び呆ける気では？ などと勘繰ってみたが、真面目ちゃんなあいづらならその心配はないし、それに実年齢はともかくとして、彼女らは年頃の女の子だ。

多少のハメ外しくらい大目に見てもいいだろ。

「まあいいか」

と、今の状況を受け入れることにし、ゼロは胡坐をかいてその場を座り込んだ。座り込むまでのラフな所作と、腕組みをしていることも相まって、完全に不良少年にしか見えない。実際元ヤンではあるけど。

人間体ならともかく、本来の巨人態の見てくれで生活感溢れる人間らしい所作をされるとシミュールに感じられるのだが、それでもどこか似合ってしまうのは彼の人柄ゆえ、と言うべきか。

幸い、この空間での体感時間は、現実とは流れがかなり違う。外が一時間なら、こっちは十時間つてとこだろう。

それにリンクはそこらのインターネットの検索サイトの比じゃない情報量を所持できるデータベース。

時間の流れの差異と、彼女の能力を有効活用しない手はない。

リンクたちが調査をしている間、こっちもこっちで情報整理をしてみるか、案外新しい発見が出てくるかもしれない。

ゼロは自身の眼前に3Dモニターを出現させた。

さすが我が相棒だ。この空間内ならリンクが所有しているデータは自在に閲覧できる。

G。モニターに映っているのは、ある人物の身体情報が記された立体C

謎の第三勢力に属する一人と思われる“仮面の男”。エイミイの一言がきっかけで、そいつはこの画面に表示された肉体の持ち主たる人物をモデルに、変身魔法で正体を隠している可能性が浮上してきた。

何せ、仮面の男とこの人物との身体一致率は、偶然と呼ぶには不自

然なくらい一致している。

双子、ましてやクローンでもないのにここまで似ているなんて、どう考えてもおかしい、とならと魔法で姿を変えていると踏むのが妥当。

変身しているのに、わざわざ仮面を被っていたのは、恐らく自分たちを欺かせる為、目に行きやすい特徴を敢えて提示させることで、まさか変化させていると相手に思わせないフェイントと言ったところか。

変身魔法の性質を顧みれば、シンプルだが地味に効果的な偽装工作だ。

自身の肉体を一時的にせよ変質させるタイプの魔法は、難度が高い上に、消費量が高いからだ。

ここで疑問符を浮かんだ方もいるだろう。

ならばユーノはどうなのだ？ 彼は半年前のPT事件の時、長期間フェレットの姿に変身していたではないか？ と。

遺跡発掘を生業としながら旅をしているスクライア一族は、代々補助系統の魔法の研究に熱心で、積み重ねたそのノウハウを伝承してきたことで、補助魔法のスキルが高く、変身魔法もできるだけ消費を抑えて使用できる。

さらに肉変質は、変身後の姿の大きさが小さいほど、大幅に変質しなければならぬ分、変身の際は嵩んでしまうが、一度なってしまうと維持に必要な魔力量は低コストだ。

これがユーノがうっかり人の姿に戻るのを忘れてしまうくらい、フェレットでいられた理由。

逆に、自身の体格とほぼ同じ大きさの変身に必要な魔力、個人差はあるがなるまではそれほど量は必要としないが、その状態のままを持続させるのは難しくなる。

それを行えるとなれば、魔導師としては相当な腕前だ。

ただ、仮面の男の姿そのものが、正体を隠す仮面だとすれば、小さくはない疑問点が出てくる。

変身魔法だと自分が見抜いたのは、元になった人物の容姿を最近目

にしたりなどの幸運があったからだが、なぜ奴はモデルとして、わざわざ特定の個人から、それこそコピーレベルと言えるまでトレースさせたのか？

足の部分はAさん、腕の部分はBさん、眉毛はCで鼻はDさんと、変身の材料とするモデルは、多い方が良い。仮面のフェイントと組み合わせれば、その方が魔法で化けていると悟られにくくなる。

こうまで一個人に……それも■■■■の■■■■さんを使って……まるで誰かに見せつけたい意思があるようだ。

まあ……特定の人物の姿を借りているのなら、その人への思い入れというか、強い慕情というものがあるのは確かであるけど——と、右手の指を口の前に添えて考えたところで、ふと閃く。

思い入れ……そうか、こいつはその気持ちつてもんが強過ぎるんだ。

余りに強過ぎて、無意識の範疇で変身の材料に彼を使っているのだとしたら。

判断材料なら、ゼロとは身近な人物にもいる。

しいて一人を上げるなら、ウルトラセブン、彼の人間体、諸星弾の容姿。

弾の姿は、彼が恒点観測員として地球に降りたばかりの時に助けた地球人、薩摩次郎がモデル。父にとって彼は、単に地球人の自身の見てくださいの参考となっただけでなく、彼自身の原点ともなった存在で、今でも薩摩次郎への思いは強く、意識しなくとも自然に薩摩次郎の姿で人間体になれるという。

奴のあの姿は、奴自身の心の内にあるものが具現化したもの、そんな無意識の域で、あの風貌を見せつけたい「誰か」は、やっぱり……闇の書のプログラム生命体、ヴォルケンリッターと、魔導書の管制を司るという、マスタープログラム。

「彼」は闇の書が引き起こした事故の犠牲者の一人だ。あの仮面の下にあるものが、彼の仇といってもいいプログラム生命体への憎悪があるのだとしたら、技量も含めて、第三勢力の構成員には本局の魔道師がいることになる。

昨日ゼットンたちの侵入と逃亡の手際の良さ、エイミイたちに感づかれずに結界のハッキングが可能がそこを見て、その数は決して少なくないが、彼と縁のあった人物を洗えば、候補となるさしずめあいつが一線を超えてしまった分身とも言える人物の数は、結構絞り込めるんだけど。

でもそうすると、胸中からにじみ出てくるくらい憎んでいる連中の手助けをするおかしな点が現れるが、それは比較的簡単に解ける。

闇の書がこの先の未来に起こそうとしている惨劇を止める方法を、やつらは先んじて発見し、今は臥薪嘗胆の思いで守護騎士たちの味方となつているとするなら、その方法の具体案の謎を除けば一応筋は通る、だけど——バラバラとなつているパズルのピースを、そこまで繋ぎ合せていながら、ゼロは推理の為の思考を一度止めてしまった。

どうも引つかかる……キナ臭さも。それどころか、不気味さと怖さまで大波となつて理性に押し寄せてくる。

連中は未だに全容どころか、尻尾すら掴ませない。解つてる事実の一つといえば、あいつらの蒐集が妨害されてないか目を凝らし、状況によつては手を貸すのも辞さないってこと。

なのに……どうしてパズルを埋め合わせるのに必要なヒントを俺たちは掴めてしまうんだ？俺たちの立ち位置は、騎士たちと連中の目的を妨げる障害そのものだというのに、なんでどうも謎解きがそれなりにスムーズに進む。

そこが気になるところか、薄気味悪さ、恐怖まで浮かんでくるのだ。逆に何者かの誘導のままに、進められている感覚すらある。

それこそ、あの勢力の高位にいと踏んでいい、怪獣を飼いならす存在。ある程度の心当たりはあるそいつの真の目的は何であれ、その本命を上手く心中の奥底に隠し、表向きの理由で構成員の一人となつてるのは確実。

ただそうになると、こつちでは異世界の生物な怪獣について味方から突っ込まれる問題も出てくるけど。

超能力による洗脳？いやそれなら仮面の戦士に関する推理と矛

盾を起こす。

連中は確たる自分の意志を以て、自発的に構成員となつて、行動してる筈……いや……洗脳されてる件は矛盾でも的外れでもないかもしれない。

わざわざ超常的な能力を使わなくても、人は洗脳で人間を操作できちまう。

操りたい対象の人物が潜在的に抱えている望みといったものを利用し、自分の言う通りにすれば、それに何の疑問も持たずに実行すれば、それは叶えられると反復して言い聞かせ続ければ、そいつは自我を持つ操り人形な傀儡となる。

かつてのプレシアも、この方法でフェイトを操り人形にさせた。

超能力による洗脳は、元さえ断てば容易に解呪できるが、対してこつちは効果は長く持続し簡単には解かれぬ悪辣さも格上な催眠法だ。

裏で糸を引く黒幕な「そいつ」は、その悪辣な手で構成員を支配下に置き、その第三勢力を実質的に牛耳っているとしたら、これは予想以上にやばい状況だ。

あの勢力も、騎士たちもみんな、自分の意志で動いていると信じ疑わないが、その実一握りの存在に思うがまま操縦されてるってことになる。

くそ……今の推測に、急に浮かんだはやてが魔導書の主という疑惑でさえ、やつから故意に誘導されている気がする。

俺たちにとつても、グレンたちにとつても最悪な事態を防ぐには、早いとこ真相を見つけ出さなきゃならないってのに。

頭ん中がもやもやしてきた。動悸も少し乱れてる。

時間はたつぷりあるから、こういう時は気分転換。

映画でも見るか、リンクの中にはメディア問わず物語も結構記録されてるから、鑑賞にはもってこい。

でも、今はもう一つの目の上のたんこぶの対策を練る方が良いか。

「アーカイブドキュメント起動、閲覧希望項目、『ウルトラマンとゼットン』の歴代戦闘記録」、時系列順」

ゼロは先述の単語の羅列を口にして、胡坐の体勢から立ち上がる。直後、周りの空間が一瞬で様変わりした。

薄暗い場に、青空と、角度によって三角フラスコを逆さまにしたように見える独特の形状をした建築物がそびえ立つ大地が現れ。

「ダアア！」

「ゼットン……」

ウルトラ兄弟次兄と、最初に地球に出現した生体兵器としての宇宙恐竜が対峙する様子が映しだされる。

これはCGによる完全立体映像で、映されているのはゼロが今言った通り、ウルトラマンとゼットンの戦いの歴史の再現。そこから彼を完膚なきまで打ち負かしたあのゼットンへの対抗策が閃くと考え、ゼロはその歴史を振り返っているのである。

さすがに偉大な先輩が手も足も出さず惨敗を喫する姿は、自分の敗北の経験より遥かに心にくるものがあるけど、めげていられない。

レオ師匠がK76での修行の時から何度も言っていた通り、〃俺たち〃の戦いは、負けるわけにはいかないんだ。

雨が降っている。

豪雨という程でもないが、それなりに勢いも雨量もある本降り。雨粒たちが灰色の雲海から墓石がいくつも備えられた緑の地表、墓地に降り注いでいた。

一定の間隔で並べられた墓の内の一つの前に、雨が沁み込んでいく喪服を着込んだ人々がいる。

彼らはたった今、目の前の墓石に眠る故人の冥福を祈り、弔う儀式の最中だ。

この葬式に参列した者の中には、大人に混じって、墓石と最も近い位置で立っている子どもが一人いた。

既にある程度の物心は育まれた7、8歳くらいの男の子。

少年の目じりには潤いが蓄えられ、いつ頬に滴れ落ちてもおかしくはなかったが、彼は幼いなりに懸命に流すまいと……耐え続けた。

参列者の大人の中には、そんな少年の姿勢に感服する者もいた。幼い身でありながら、肉親の死に心乱さずにいようとする彼は偉いと。

だが果たして……涙を流さないというのは、当人にとって、良いことであるのだろうか？

この時の雲たちはまるで、少年の代わりに雨粒を涙にして、空から流しているような趣があった。

あの光景の記憶を、夢で追体験していた少年——クロノ・ハラオウンの意識が覚めた。

ユ……メ……か。まどろみからはまだ不完全の覚醒な脳でも、今の映像が何であるか、直ぐに行き着いた。

忘れようがない。七年前の父の葬式の様子。

雨の冷たさも、それがスーツからインナー沁み込んだ喪服の感触の悪さまで、未だにはつきりと体が覚えている。

夢の内容の反芻の次に、自分が眠っていたここがどこか確かめる。少し青味がかったメインの照明、部分部分に点在された乳白色のサブの灯り。白銀の壁、床、天井。二つ置かれたベット間の間隔がそのベッドの短辺くらいしかない、やや狭さを感じる部屋の広さ。

『気がつかれたか？ クロノ執務官殿』

宇宙船特有の無機さの中に、宮廷の寝室の様相が垣間見える部屋全体に響く、エコーのかかった生真面目さが浮き立つ青年の声。

「ナオト……今はジャンバードか」

彼の声が目覚めの補助となり、この部屋がスターコルベットに備えられた個室であると察した。



「どれくらい眠ってたんだ？ 僕は」

『約12時間だ』

「半日も……………っ！ ジャンバード！ 昨日の戦闘はどうなった!？」

意識の回復が進んだことで、ようやくクロノは昨夜のことを思い出し、切羽詰まった声でジャンに尋ねた。

『結論から述べると……………我々の完敗だ』

ジャンの口から、ことの顛末が大まかに語られ、それを聞かされたクロノは、顔を俯かせる。

手を見ると、震わせるくらいの強さでシートを握りしめている。

彼の心を今支配しているのは、昨夜の戦いの結果への遺憾の念だけではなく……………。

『クロノ、実は見舞客を待たしている、部屋に通してもいいか？』  
「構わないよ」

その見舞客がてつきりエイミイか、なのはたちかと思いつつ、クロノは了承。

同時に、個室の横スライド式のドアが開いた。

扉の向こう側に立っていた見舞客とは――

「かあさあ……………艦長」

――母のリンディ。

つづく。

## STAGE 36 — 心の内

海鳴市に住む市民たちには有名で、何度も地元のタウン情報誌に掲載されるほどの人気を誇る高町一家の経営する喫茶店。

喫茶——翠屋。

「あれ高町？ 今日はお前ウエイトレスやる日？」

「にやはは、そうなんだ、ご注文は如何いたしますか？」

本日の翠屋では、高町家の末っ子であるのがウエイトレスとして接客業を営んでいた。

なのはは今日に限らず、もう数十日もすれば年末だが、今年、時期的にはP・T・事件後から少し経った頃から、休日の日に月に2、3回程度の頻度でこうして店の手伝いをするようになっていた。

「なのは、黒糖キナコパフェとイチゴパフェ、抹茶チーズケーキ4番のテーブルのお客様にお願い」

「は〜い」

主な仕事内容は、客の一人で家族連れのクラスメイトの男子の子のやり取りを見れば分かる通り、注文を取ったり、食器の洗浄、簡易的な店の清掃。

ちなみに、仕事に勤しんだ分は一応お小遣いに多少反映されてたりする。

実を言うと、数年前からなのはは翠屋でのお手伝いを熱望していた。

その熱意の原動力は、やはり小学校に上がる前の、幼年期の経験諸々だ。流石に去年までは、その気持ちは受け取っておくよ、と穏便に断られていたが、月に2、3度、一日に3、4時間、60分ごとに10分ほど休憩を挟む、汗かくほどの重労働は禁止、無理は禁物などのルールが定められた上で現在に至っている。

それでだ：やっぱり〜と言うべきか、まああり得ないわけがないな、とも表現すべきか…：なのははが手伝う日は結構集客率は伸びる。

ルックスもクラスでは上位となる美少女であるし、良い意味で尖り過ぎない物腰と気立てのよき、そして『にやはは』という声に添えら

れて見せる彼女の笑顔には、とても好評、リピーター率すら高める効果を出していた。

お客さんの評判の声の中には、『なのはちゃんの笑顔見ると、不思議と元気が沸く』というものもあるくらい。

そんな当人も知らぬ内に、客たちの間であるあだ名が彼女に付けられていた。

当人が聞いたら、絶対赤面モノな代物。

その名は——『喫茶翠屋の天使』

母桃子が娘に言った——「なのは自身がみんなの力になる魔法」という言葉に偽りは無かった。

前述のこのあだ名こそ、なのはという女の子自身が持っている『魔法』の象徴たる言葉である。

そして時間は少し進んで、一時間ごとに置かれる彼女の一休みの時。

店内の裏手に設けられている休憩室にて。

『(まずは新たに加えられた機能の一つであるカートリッジシステムβの詳細から、おさらいとして説明致します)』

「うん、お願い」

休憩時間を利用して、なのはは改修作業が終えられたばかりのレイジングハート改め、『レイジングハート・アドバンサー』から、パワーアップした彼女自身のスペック説明の講義を受けていた。

『βカートリッジは、勇夜殿とリンク殿が、以前からデバイスへの導入を検討されながらも、相性の悪さ等の理由で採用されなかったミッド式魔法でも扱えるカートリッジシステムをコンセプトに考案された新型外部魔力供給機構です)』

なのはの脳内に、USBメモリに酷似したある直方体状の物体が浮かぶ。

全体の主な配色は金色で、面の一つには、上から緑、黄緑、黄色、燈、

赤の順番による配色の変化がある長辺を横向きにした長方形が縦に並んでいた。

これこそレイジングハート専用のβカートリッジで、彼女自身が人の脳髓に直接イメージを送る魔法、『メモリフラッシュ』でなのはに見せているCG画像である。

「でもみんなにも使いやすい様になって作られたのに、どうしてこれを使ってる人が勇夜さんと光兄しかいないんだらう？」

『それはこのシステムの短所が原因でしょう』

バッテリー方式によつて、拳銃の弾丸を使用した以前のタイプと比べて、カートリッジに蓄えられる魔力量は格段に増加し、機構もシンプルとなったことで搭載デバイスの内部構造の複雑化による強度の脆弱化の問題もクリアされた———というのに、今日まで使い手が異世界からの巨人二人と極端に限定されていた事情は。

『(マスター、カートリッジロードを調味料の計測に置き換えてみて下さい、ベルカ式デバイスに組みこまれた以前のタイプは計量スプーン、計量カップに相当する“目安”がありました、しかしβカートリッジは使い手の目側、つまりマスター自身の“目”のみで適切な量をねん出しなければなりません)』

「なるほど、そう言われると騎士さんのより扱うのがもつと難しそうだね」

レイジングハートの比喻表現は、一見突飛だが的を得ている。

さらに喩えとして喫茶翠屋だけに目の前に五人分のケーキを作る材料が置かれているとしよう。

そして計測器を一切使わず、ぴったり適量で一人分のケーキを作れと言われたら……無理と答えるしかない。

システム用の魔力弾丸のようなその計測器に値する目安が無い分、より取扱がシビアになつてしまったのが、βカートリッジ。

愛機からの説明を受けて、なのはは苦虫を噛まされるにも等しかった……実戦に出られない挫折を味わってまでも魔力制御を中心にした特訓を優先させ、かつ自身の我がままに付き合ってくれた大人たちの厚意に感謝したくなつた。

いくら想いが強くても、それだけでは前よりも高性能でピーキーで暴れ馬な乗り物と化した愛機を使いこなす“乗り手”となり得なかったろう。

ゲンの言う通り、まずは“かつての自分自身”を乗り越える必要があったのだ。

「（次に改修前と後の相違点をお見せします、『百聞は一見にしかず』などという諺もあるので、こちらををご覧ください）」

次にレイジングハートはメモリフラッシュでなのはの脳内に見せたのは、まずバリアジャケット、以前のタイプと、自身の性能向上に合わせてリデザインしたものの二つ。

一見するとそんなに違いは見受けられないが、よくみると両手を保護する黄色いラインとルビー色のガラス玉が入った青色のガントレットはサイズはほぼ一回り大きくなり、他にもこうして見比べると目で分かる変化の数はそれなりに多い。

中央の赤いリボンも、結び目には楕円型で金色の縁取りがされたガラス球が添えられていた。

デザイナーである彼女曰く、ウルトラマンのカラータイマーの意匠を入れてみたとのこと。

どうしてそうしたのか？ と聞いてみたら本人曰く――

『It's So Cool』

――だから、らしい。

そして外見の変化以上に、防護服の防御力は向上している。

バリアジャケットの周りには、不可視の魔力の障壁の膜が展開されており、以前は膜が8層であったが、リデザイン後は22層に増量され、加えて防護服の胸部のインナーには、魔力の防弾チョッキとも言えるプレートが胸周りに装着されている。

この仕様で以前より魔力消費は嵩み、空間機動の機敏さも切り捨てられたが、なのはの強みの一つである防御は強固となった。

そのまた次にレイ……長いのでアリシアが付けたあだ名を使わせてもらう……レイハはセットアップ時の自身の形態の比較画像を見せた。

最初に、改修後は『アクセルモード』と改称された基本形態。

アルファベットのCの中に、AIが組み込まれたルビー色の球体なコアが設置されている点などは同じだが、カートリッジシステム搭載により持ち手と先端の間にある機関部が大きくなっている。

その機関部の下部にはβカートリッジの差し込み口が隠されており、飛行機のタイヤに似た要領で45。展開された部位に装填して格納、魔力供給される仕組みだ。

二番手として、なのはにとって十八番と言える砲撃魔法使用時の砲撃形態。

新たな名称は『バスターカノンモード』。

こちらの主なる変更点は、レイハのコア周りに追加装甲を施すことで、敵からの攻撃は無論、カートリッジの恩恵で威力が増した自らの砲撃にも耐えられるようになっていた。それ以外は機関部の太さと装填口を除けばカノンモードとそれ程変わりない。

ここまでなのはの強みをより高める仕様にできたのも、勇夜とリンクのアイディア力と、テスタロッサ親子の技術力、愛機を使いこなせるよう指導したゲンの賜物と言えた。

こんな感じで、レイジングハートのレクチャーを受けているなのは。

しかし……大真面目に愛機の個人講義を受ける一方で、彼女は並列思考——マルチタスクを使って別の考えごとを、実を言うとしている最中。

魔法、自らの才の無駄遣いもいいとこだが、それでもこの時の彼女には、それを後回しにする思考は持っていなかった。

今、なのはが思案のお題となっているのは、親友——フェイト。そのフェイトが、恋焦がれるほどに、義兄の戦友であるウルトラ戦士に恋心を抱いている乙女な女の子であることは、なのはもはっきり熟知している。

交換日記ならぬ交換ビデオメールの送り合いをしていた頃でも、一緒に聖祥と一緒に学校生活を営む今現在でも、他の話題の時は結構饒

舌に喋るのに、彼のこことなると、瞬間湯沸かし器並の速さで紅潮、急に極度の上がり症な人見知りの子と化して、言葉に詰まってしまう事態はちよくちよく発生していた。

恋心の熱にうなされて、倒れてしまった事態だつて今日入れて二度起きている。彼への慕情の強さを顧みるに、この先もあんな局面は何度となく起きるだろう。

親友が乙女度全力全開レベルな夢見る少女であるのは、ずっと前から知っていた周知の事実であつた……というのに。

なぜだろうか？

今朝、その二度目の恋の発熱で卒倒する姿が脳裏に張り付いて離れない。

憧憬、憧れともいうか、羨望……乙女な親友が妙に羨ましいなんて気持ち生まれ育つて、心の中がそれでもやもやとしていた。

何で急に……恋する相手がいるフェイトちゃんを、自分はこんなに羨ましく思ってるんだろう？

今まで、少なくとも恋が芽生える経験など、なのはは体感したことがない。それどころか、いざ考えてみると、一体何が『恋』に値する『好き』なのか、全く判別が付けずにいた。

好きだと言える人なら、周りに一杯いる。

父や母に、恭也兄ちゃんに美由希姉ちゃんに、リンディさんやエイミイさんにクロノ君に勇夜さんにゲン先生、アリサちゃんにすずかちゃんにフェイトちゃん。

そして……ユーノ君に………光兄。

“どうにか、間にあいましたね”

ピンチの時に、鏡面を伝って颯爽と現れて助けてくれた兄の姿は、惚れ惚れすつほどカッコよかったし。

“バインドには、こういう使い方もあるんだ！”

時の庭園での戦いで活路を見出してくれた時に見せたユーノの勇壮な姿は、痺れるくらいに男前だったし。

ひよつとして………この二人に対する気持ちこそ、その『好き』で

はないのか？

だけど、他者のならそうだと解るのに、自分へと向けるとやっぱり分からなくて、はつきりしない……気持ち、考えて正体を掴もうとするほど、余計にもやもやとした感覚に見舞われる。

そのもやもやが強くなるに比例して、余計に自身の気持ちの形を自覚できてるフェイトへの羨望まで膨れ上がっていく。

はあくくくと溜め息が零れた。

一体どうしちゃったんだろう、私……これではまるで、恋してるフェイトちゃんに焼きもちをやいてるみたいではないか。

焼きもち……フェイトちゃんへの……やき……もち、その文字がある考えがなのは脳髓からインセプションされた。

“行こう！　なのは！”

同じく庭園での戦闘で、初めてフェイトちゃんから名前を呼んでくれた時に込み上げた歓喜。

“なの……は”

リボンを交換したあの別れの日、改めて『名前を呼んで』と言った自分の願いに応えようと、いざ意識したせいで言葉にならない中、少しだどしくもはつきり名前を声にして出してくれた瞬間の……上手く表現できない心の奥底から生まれ出た暖かい思い。

まさか……それらフェイトちゃんに対して感じた様々な気持ち、その“好き”から来るものなのでは？　と思いつた途端、その思惟の霧を振り払おうと、なのはは腕を力一杯振り出した。

『マスター？　マスター？』

ダ：ダメ！　ダメダメダメダメダメエ！　ダメだつてば！  
ダメなの！

！  
一体何考えだしてるの私!?　バカバカバカバカ！　大莫迦者な私

フェイトちゃんは女の子なの！　自分と同じオ・ン・ナ・ノ・コなんだよ！

性別一緒なんだよ！　生き物的には同じ雌なんだよ！　♀なんだよ！



実際同姓の人に“好き”な気持ちを抱いちやう人がいるのは一応知ってるし、否定はしない……でも男の子に恋してる親友にそんな気持ちなんて……もう本当私の——

『その顔は何ですか!? その眼は何ですか!?』

「ニヨえ!?!」

心身を混乱させていたなのはの耳に、レイハのマイクで上乗せしたようなエコーが付属された絶叫が脳髓に直接響き、結果的に驚かせることでしゃっくりが止まったに相当する荒療治で、どうにか彼女は正常な状態に戻ってこれた。

『パニックを起こしていたようですが、マルチタスクを使ってまで何をお考えになっていたのでですか?』

「あつ……ごめん……その」

『無理に答えなくてもいいです、代わりとして、私のレクチャーをどこまで聞いていましたか?』

「カノンモードがバスターカノンモードになったところ」

『そうですか、もう休憩も終了間際なので、続きは本日の“お手伝い”が終わってからにしましょう』

「うん」

『明日からはビシバシご指導致しますので、それまでにはその浮ついた雑念は消去願います』

「レイジングハート……ひよつとして怒ってる?」

『これは怒りではありません、私はマスターの支えとなるようプレシア殿ら方々から想いを託されました、それに応える為に相応の厳然たる姿勢で臨んでいるだけです』

「にやはは……」

などとレイジングハートは返した。

何だか凄い変わり様、以前のレイハは、人に喩えるなら冷静なできる秘書官なイメージであったが、今の彼女はその感じは残しつつも、熱血成分の入った鬼教官な雰囲気盛り込まれていた。

なのははそれに若干たじろぎ気味ながらも、さっきのパニックは彼女の言う浮ついた雑念として払しょくさせながら、強化された愛機に

心強さも感じるのであった。

どうして…こんなことになっているのだろうか？

全く皆目見当がつかない訳ではないのだが、それでも“どうして”とクロノは思いたくなくなってしまった。

七年前の追想たる夢の中から現実のジャンバードの個室で醒めて、母が見舞いに来た。

その直後は、彼らの間では他愛のない話の積み重ね。

体の調子はどうだとか、リンカーコアの不調で当分魔法は使えそうにないとか、現在も尚蒐集対象である魔法生物が生息する惑星らを監視しているが、今のところ本物偽物問わず守護騎士も怪獣の動きも観測されていないとか、なのはたちのデバイスたちのパワーアップが完了したとか、今日も勇夜たちが調査に勤んでいる等。

けどそんな談話をする親子二人の間には、気まずい匂いと風味が流れていた。

いつもであれば、お互い仕事中であることを踏まえながら、時として漫才と野球風に言えばリンディが投げてきたボケをクロノが打ち返すなんてやり取りが起きるのだが、今日はそれが生じそうにない。

談話を一通り終えた後は、沈黙がしばし続いた。

黙される空気が、両者に流れる気まずさをさらに助長させる。

言いたいことはあるのに、かの空気感と踏み出そうにも自身の臆病さで踏みとどまって立ち尽くす状態だった。

それからさらに数分経過した頃に、“どうして”と思いたくなくなってしまふそれが起きた。

クロノは今、抱きしめられているのだ——母のリンディから。

「何も言わないで……このままでもいいさせて」

背中から抱擁されているのが幸い。もし正面からだったら……想像しただけで恥ずかしくなる。

今だって、この身に触れている母の体の感触を知覚するだけで、羞恥で体全体が熱くなっているというのに、微かな母の吐息と、仄かに母の身そのものから香る香りがそれを煽り、理性を保つ糸が解かれぬようにと必死だった

さっきまで感じてた視線が母が入室すると同時に消えたところから、ジャンバードはこの光景を見てなさそうだ……自分たち親子を案じて部屋から身を引いたらしい。

彼の気遣いには感謝したい。堅実な人柄だから、言わずとも口外はしないだろうけど、他者にこんな姿を見られた事実だけで参りそう

だ。  
「か……か……」

流星にそろそろ解いてほしいと言おうとしたが、淀んでしまう。

どっちの呼び名で呼べばいいのか、迷っているから。

「母さん」……こんな状況でそう呼んだら、いよいよ頭が一時ショートするかもしれない。だったら公的な場用の《艦長》か《提督》で……そちらを使うことの方が、より拒否感を出した。

呼べない、とても今は後者の方を使えない、使いたくない。

部屋に入って来たの母の目を見た時、察したのだ。

あの目は、状況によっては冷徹な決断も下す管理局員の影はない……完全に「母の目」であった。

そして、クロノの身を包みこむ母の腕、視覚だけでは目をこらさないと分からない程度だが、肌が合わさった現況下でははっきり分かる……震えているのだ。

震える理由も簡単に察しがついた。

だって……自分がその震えの元凶を作ったのだから、そのこともあつて抱かれている現状に、罪悪感もある。

このような抱擁を、それによって伝達される温もりを受ける資格なんてない、母だつてずっと屈さずに耐え続けてきたものに、昨夜負けてしまった自分なんかには、などと過ぎる一方、悪い気がしないという感

覚も同居していた。

むしろ、安心さえしてるくらいもある。

ひよっとすると、この安心感は「子」の本能というものではなからうか？

赤子は、生まれてからも暫くはまだ母親の中にいると思いついていられるらしく、だから母から引き離されると不安でぐずり出し、反対に母親の腕の中になると安堵して大人しくなる。

もうそんな時期から十年以上経ているのに、そんな本能が残っている己が少し情けないとも思った。

かといって嫌な感じもせず、正直に肉体が安心しきっていることと、まだ当分母は抱擁の糸をひも解いてくれそうもないので、もう少し…このままできていることにした。

何と見苦しく酔狂な行為をしているのやら、とリンディは自嘲する。

10代も半分過ぎた年頃な息子をこうして赤子をあやすように、そして継り付くように抱きしめているなんて。

しかも彼女ら親子はひとたび管理局の世界に踏み入れれば上官と部下の関係。

こんな姿を他の誰かに見られたら、親子ともども良い歳なのだから節度を持ちなさいと口酸っぱく言われるか、きっとそれ以上なんてこ

ともあり得る。

少なくともエイミイに見られたら、当分クロノのからかいの種にされそうだ。

その息子は一応、母の酒に溺れてるのかと言わんばかりの沙汰を受け入れてもらっているが、大体のこの歳の子ならうざったく引き離す筈だ。

でも、無事な姿をこの目で見た時から、ただ目にするだけでは満足も、我慢できそうになかった。

七年前のあの日、私は愛する人を直にこの目で最期を看取ることすらできなかった……アルカンシエルが発する無情な魔力の荒波で髪の毛一本すら残らず消え失せてしまったから。

葬式の時だって、亡骸の入っていない墓を眺めるのがどれだけ苦痛で虚しかったか。

安らかな眠りを？ 遺体も魂もこの無骨な墓の下には一欠片もないのに、どう眠れと言うのだ？

その魂すら、今も真空な暗黒の宇宙を彷徨っているのかもしれないのに、墓石一つ置いたところで、あの人に安らぎを与えられるわけがない。

あの魔導書が、夫の自己犠牲を嘲笑うかのように、またどこかの世界に現れるかもしれないというのに——あの時は、心の奥でそんな無粋な考えに耽っていたもの。

同業者でもある家族を失った体験から、本音を言うとはやっぱり、まだ若い息子を送り出す瞬間は気が引ける。

時に相手は凶悪な犯罪者、さらに時にはそれ以上に凶暴な猛獣であるロストロギア、帰ってこれる保障はどこにもなく不確か。その分察せられまいとにこやかな顔をして、無事に帰って来た時は心の底からほっとした経験を何度もした。昨日なんて、毅然の仮面の裏で頭は真っ白になりかけたし、目も真っ黒に染まる思いだった。

だから確かめたかったのだ。息をして、五体満足な姿でいて、夫と生き写しにそっくりこの子が、ちゃんと生きていることを肌で直に触れて実感したかったのだ。

そんな心地で息子を抱いていて……気づいた。

まだ小さいと思っていた我が子、現に歳相応よりも小柄で幼くて、顔も女の子の面影があるものだから、危うさをどうしても感じてしまう。

けど実際触れてみて、昔抱きしめた記憶を照らし合わせてみると、確実に体が大人へと進んでいるのが手にとって分かった。

親の考えているより早く、子どもはあつというまに育つ、なんて話は聞くけど……本当だったのだな。

ああ……そうか、とまた気づかされた。

今なら分かる……諸星勇夜——ウルトラマンゼロが、囑託魔導師試験のあの日、どうしてあそこまで私たちの《世界》に憤っていたのか。

だって私たち大人は、*“未来”* そのものたる存在をずっと汚してきた咎人の群れで、自分は子の内にある怪物を放任して育ててしまった……その群体の一人。

ハラオウン親子の抱く、抱かれる状態が始まって、どれくらい刻まれたのか。

それすら判別できない中、やっとリンディは抱擁を解いた。

「ごめんさないクロノ、今日のお母さんの御乱心は綺麗さっぱり忘れてくれないかしら」

「あ……はい」

人差し指を口の前に立てながらウインクする、いつものにこやかさ

が戻っていた母に戸惑いながらも、彼女からの申し出を承諾するクロノ。

公表したくない新たな「黒歴史」でもあるから、この出来事は未来永劫、封印され続けることだろう。

「それとこれ」

リンディは内ポケットから何かを取り出し、クロノに手渡した。

彼の愛機たるストレージタイプのデバイス——S2U。

「メンテナンスも一通り終わってるわ、でもクロノのコアが本調子でない内は魔法の使用は、前線に立つこと含めて禁止します、私の許可が出るまでは起動しないようロックもしてますから」

「……………」

「でも呑気に休んでもいられないって顔ね」

「はい…」

昨夜の戦闘で騎士の一人から蒐集される最中強引魔法を使い、リンカーコアはすっかり縮小化している。

しかもその時、クロノは私情を優先して激情に押し流されてしまっていた。

公人としての判断を問われかねない所業。これくらいの措置は当然だとも言い切れる。

「だけど、友も仲間も同僚も、家族だって……みんなこの事件を解決しようとして尽力してくれている、母に見抜かれた通り、いつまでもじつととしている気になれない。」

「なので、無限書庫での史料探索のサポートを命じます」

余談として、リンディが入室した直後の時間帯に遡る。

「エイミーさん、どう？」

「防音が利いてるけど、扉に当たる声の振動波をハックできれば中の会話を」

『聞くことは許さないぞ、お二人様』

「うわっ！ びっくりした！」

『何水を指そうとしているのだ？』

「だって……心配なんだもん、ねえアリシアちゃん」

「うん、そうそう、私も魔法で酷い目に遭った繋がりとしては」

などと、盗み聞き未遂者は供述していたが、二人の性格を考えれば、単に心配だからという理由だけではあるまい。

『ハラオウン親子のプライバシーを侵すことを許すわけにはいかない、食い下がるなら、我が艦内から強制退去してもらおうぞ』

「はい、分かりました」

ジャンバードのお陰で、彼の今日の黒歴史は公表されずに済みそうである。

つつく。



## STAGE 37 | 恋の好敵手

海鳴市、中心に位置する鳴宮町(なりみやちよう)のデパート内、女性用化粧品がメインに置かれているフロアにて。

「すみません、ちょっとお尋ねしたいことがございまして、少しお時間を頂けますか?」

「は…はい」

「この子の家族を探しているのです、姉二人と来ていたそうですがはぐれてしまったらしくて、一人は背は170近くで、長髪でポニーテール、こう横から後ろに掛けて髪の一部を三つ編みにしてて、丁度あの化粧品のポスターの芸能人のような吊り目の美人で、もう一人の方は淡い金髪のボブカットで少しタレ目、幼稚園の保育さんみたいらしいのですが、この辺りでそれらしい人は見かけませんでしたか?」

「そうねえ……ごめんさい、覚えはないわ」

「お時間を取らせて申し訳ありません」

「迷子センターに寄って、ご家族さんと呼んでみたらどうかしら?」

「そうしたいのは山々なのですが、本人が恥ずかしがって嫌がるんです……ほら、そうあんまり抱きつかないで、不安なのは分かるから」

金髪な白人系の女の子を連れた見た目10代半ばで、前髪をサブカル用語のいわゆる姫カットで切り揃えた黒髪ロングのクールビューティ系な美少女が、この通り通行人にものを尋ねていた。

「(外はどうですか? アルフ)」

「(今のところあいつらの姿形は見ないし、匂いも感じないね、そんな余裕ないんだろうけど)」

「(念の為です)」

彼女たちがどこの誰かは直ぐにお分かりになった筈。

黒髪の少女の方は、女の子な自我が芽生えたウルトラマンゼロの相棒、普段は彼の左手に付いている腕輪、リンクことウルティメイトイージス。

一応ゼロの体を借りて女体化したこの姿の名として彼女は、《菱海ユリヤ》と自ら名付けていた。

金髪の女の子の方も、正体は勿論フェイト……であるのだが、彼女も魔法で若干姿を変身させている。体格はほぼそのままに、髪型も前髪の分け目から髪質、色の濃さまで変えて、一目でフェイトだと悟られない様変装している格好だ。

こうまでして二人がやっているのは、勇夜たちも毎日市内でやっている聞き込み調査の一環である。

「お釣り70円のお返しです」

「ありがとうございます」

で、今はその調査の小休止。

デパートの敷地内にある地面が石畳なオープンテラスの広場、そこで営業している移動販売車型のスイーツ店からユリヤは注文したスイーツをお釣り金と一緒に受け取り、フェイトと子犬フォームが待っているテーブルへ行き。

「はい」

「ありがとリン……じゃなかったユリヤ」

フェイトご希望の、そのスイーツ店ではやや値段高めだが看板メニューな焼きプリンディングクレープを手渡した。焼き目が付いたプリンをクレープ生地が逆円錐状に巻かれ包まれている。

一瞬フェイトが「リンク」と言いそうになったのはご愛嬌。彼女の本名ではあるが、如何せん日本人的風貌な今の彼女でこの名では、ネットスラングの「DQNネーム」な感じが拭えない。

そのユリヤは、抹茶味のジェラートアイスだ。

「(いいな〜〜)」

「(ごめんね、今度来た時に買ってあげるから)」

「(どうかそれまでには我慢するよ、子犬設定な今のあたしにやお菓子厳禁だからさ)」

アルフのおっしゃる通り、犬は雑食性なのだが、糖分が多いお菓子はお勧めしない、特にチョコはご法度、最悪心不全を起こして死んでしまう。

肉食獣な狼の使い魔なアルフにはそんな心配はないのだが、人間体

や狼形態はともかく子犬フォームな今の姿では、下手に人前で犬に禁物な食物は食べさせない方が良く、事情を知らない愛犬家な通行人から口うるさく言われる恐れもあるからだ。

狼とか狼としての誇りとか言ってるけど、勇夜に会うまではドッグフードを躊躇いなく食べてたそうじゃんか、なんてツツコミが来そうだが、そこは置いてくれ。

子犬フォームなアルフに断りを入れ、フェイトはクレープを頬張った。

お……美味しい。

翠屋と並んでタウン雑誌のスイーツを扱ったランキングの上位に入るほどの人気店らしいが、その看板メニューはフェイトの舌に甘味の快感を押し寄せ唸らせる。

翠屋で初めて食べたパフェもフェイトには感動モノの体験を味あわせてくれたが、それと同様の域だった。

初めて……翠屋で、それが切っ掛けである日のことを思い出した彼女の顔が火照り出し、動悸が強くなり出す。

ああもう、と己が身に言いたくなる。勇夜と二人きりで街を歩いたって記憶だけでどうしてここまで体が反応しちゃうのか、未だ恋への免疫も抗体も中々できない自身が少し恨めしかった。とは言ったが、朝方のように過剰に症状が出なければ、この感覚も悪くは無いとも思っている。

けど人前でこの体たらくは余計に恥ずかしく、少しでも気を逸らそうと目線を移動させる。

デパートの出入り口から出たり入ったりする人々。

広場で休憩する家族連れ、はかのスイーツ店の商品を食している人たちも多くいた。

その中に――

「何か見つけたのかい？」

「今……勇夜の義妹（いもうと）にそっくりな女の子がいたの、ショートカットな下の子の方」

「（へ？ どこどこ？ どこだい？）」

「見えなくなっちゃった、気のせい…だったのかな？」

「(とは言い切れませんが、ミッドチルダにマスターの実母と容姿がそっくりで同じ名も持つクイント様がおられるくらいです、こちらでもパラレルの同位にして異なるそっくりな方がいないことはないでしょう)」

喧騒の中に消えた女の子は、二組の家族と一緒に居たのだが、その中には彼女と親友らしきオレンジ髪の子も実は居た…：…のだが、この話はもうお開きにしよう。

代わりに、ユリヤことリンクたちが今行っている調査の説明に入る。

今まで勇夜たちは、主に中心市街から比較的離れた地域をまず見回っていた。

関東スーパ―が市内に複数バラバラに点在している事情もあったのだが、市街地に行くほど、人も多くなる一方で、居住型の建築物が少なくなる為、いくら騎士たちの目撃証言があつたとしても、主たる地球人の住居の断定はおろか、地区の特定さえ簡単ではない。

今日わざわざ市街地の喧騒の中に身を置いていたのは、まず騎士たちの『日常』での動向の確認が目的。

ただでさえ、守護騎士たちは日本の社会では目立ち過ぎる容姿、一度でも目にしていれば、道端で擦れ違う程度でも暫く記憶には残る。なのに通行人たちの反応を見るに、魔法を伴わない『日常』における遠出はここ最近なさそうだ。

書の主と御近所な人に巡り合える可能性もあつたが、残念ながらその幸運は微笑んではくれなかった。

でもそうならその近所の人間に怪しまれるのでは？ なんて問題も出てくるが――

「(今日は助かりました、警察官でもない私たちが彼らの真似事をするのは結構目立ちますから)」

件の問題がある程度解消させたのが、フェイトが提案した《迷子作戦》。

わざわざフェイトが変身魔法を使ったのは、できるだけ外見を少女

姿の久遠に近づける為であり、『はぐれてしまった家族と一緒に探す』振りをして聞き込み調査をしようとしたのだ。

フェイトが一晩と、朝の訓練中マルチタスクを応用して考えて思いついたアイディアは効果的だった。

フェイトの熱演もあつて、勇夜たちが聞き込みの際、探している人物たちから——ヴォルケンリッターとの関連性を逆に質問された際も上手く誤魔化すことができていた。

「(ど……どうも)」

彼らに代わり笑みを浮かべて礼を述べるユリヤに、フェイトはとうと少しよそよそしい態度で返した。

どうしてなのかわからない。『菱海ユリヤ』の姿で現れてから、妙にもやもやとした気持ちと一緒にリンクを妙に意識してしまう。胸を押しつける気持ちの中には、不安すら混じっていた。

確かにリンクは、勇夜といつも一緒にいるけど。

「いつも一緒………いつも………一緒………いつも、いつも、いつも二人きり」

もやもやとした心情が、より強い圧迫感となって現れる。

「嫉妬………これは嫉妬なの？ この気持ちの正体は嫉妬？ 私は

この人に妬いているの？」

「(フェイト？ 何か胸がこうもやもやするんだけど)」

「(何でもない………何でもないよ)」

自分は、いつも勇夜と一緒にいるリンクに妬いているの？ 自分が勇夜に対して抱える彼絡みの願望、求めてやまないものを、持ちあわしている「相棒」への妬みなの？

自分と勇夜が会う前から、いつも彼の腕の中に嵌り、どんな時でも彼の傍に居て彼を支えて………勇夜にとってはずっと一緒に戦い、過ごしてきた大事な相棒であるというのに、その人にこんな気持ち抱くなんて薄情者と自虐しても、彼女がどんな存在か言い聞かせようとする度に、もやもやは膨らんでいく。

ユリヤの姿な彼女に目を向けると、そのわだかまりの濃度がより濃くなった。

リンクは今、購入した抹茶アイスを食べているのだが、何と云うか……とても美味しそうに嬉々として舌でアイスを舐めている。

大人びた見た目と反対に、食す姿が無邪気な子どものようで、女子なフェイトでも眩いと感じる美貌と相まってそのギャップがカワイイ、とフェイトは見てそう思ってしまった。

ズルイ……僻みな気持ちへに嫌悪もありつつ、どうしてもこの言葉がこびり付いて離れない。

嫌らしい子だ……と、フェイトは自身の悪癖で己を僻ませた。

「どうなさいました？ そんなどんよりとした顔して」

と、ユリヤが聞いてくる。まさか彼女に妬いていたなんて言える筈もなく、数刻ほどどう返答するか困るフェイト。

「そう簡単に……騎士の居所なんて見つからないよねって思ってたの」

咄嗟にそれらしい返答してはぐらかし、上手く会話の内容を別方向へと。

「ところで、美味しそうにアイス食べてるよね、好物なの？」

どうにも無理くりな感じでもあるが、話題はどうかフェイトの思惑通りシフトする。

「はい、マスターが外見年齢で小学校低学年くらいだった頃、クイント様と買い物にいった際、アイスを購入なさってもらって」

当時、リンクは「味わう」という概念に興味を持っており、勇夜の了承を得た上で、彼の味覚を一時共有してもらったのだ。

その時初めて味見を体験したのが、アイスであったわけである。

初というだけあり、舌が知覚する冷たさと甘味の二重奏に惚れ惚れし、以来彼女の好きな食べ物となった——との経緯を聞いている内に、他の話題にすればよかったと、フェイトの口が若干の悔いの味で一杯となる。

話してるリンクは、無意識であろうが顔も声色も、身振り手振りといった仕草から何まで、とても生き生きとしていたから。

きつと……アイスの経験以外の話でも、勇夜に関連するものはこうまで水を得た魚と化すだろう。

ほんと……ズルイ人だ。

けれど、一転して彼女の心中のもやは、段々と霧散していく。

清々しいまでに、リンクの勇夜への気持ちを見てしまったからだろうか？　こうまではつきり示されれば、嫉妬なんて気持ちが払わされて受け入れられる踏ん切りが、意外にあっさりついてしまった。

やっぱり……この人も、私と一緒になんだと、逆に安心してしまってる。

だから次の言葉が、自然とフェイトの口から流れ出た。

「好きなんだね、勇夜——ゼロのこと」

「へ？」

フェイトの一言で、リンクの顔が素っ頓狂な形に固まり、続けて相手の発言の意図を理解した彼女の顔はみるみる赤くなる。

「あのフェイト……あなたのいう“好き”という意味は、もしかして」  
「ん？　“そういう意味”だけど♪　何？」

なんて明言を避けて返したフェイトの顔は満面の笑顔、とてもついさつきまで妬いていたとは信じがたい晴れやかさ。

「弁解するようですけど、確かに私はマスターを慕ってします、でもそれはフェイトがおっしゃる意味では——」

「気を遣わなくてもいいから、きつと誰だつてどうしようもなく誰かを好きになつちやうんだよ？」

「あ……ですから……私……私……私……」

「勇夜は今あなたの中にいて聞いていないから、お願い、私たちに正直に見せて、リンクが“女の子”なところ、良い機会だと思うから」  
「……………」

聖母にも似た慈愛と微笑みに満ちた顔つきなフェイトの“お話”に、もう無理に否認して引き延ばし続けるのも限界だと即断したのか、火照りに火照って赤くなった顔を掌で半分覆わせたリンクは。

「はい……好き……です」

ずっと胸の内に秘め続けていた自らの思いを、さらけ出した。

体をもぞもぞと動かして、ウィルスへの抵抗によるものとは異なる全身を覆う恋慕の熱にうなされそうになる身を悶えさせて……それ

を見た二人は、内に留めてはいたが、相手と同じ女子ながらその姿が愛らしいと感じていた。

なんと恐ろしい子だろうか……同姓でさえこうもときめかせるのだ、この場に男が一人でもいたらどうなっていたらろう？

さてと、こうしてリンクは乙女振りのカミングアウトしたが、こういうのは自分では隠し通せていると思っただけでも、実状は本人の思い込みで、意外に他者には丸分かりであったりする、なぜなら――

「(やっぱりそうだと思ったよ)」

「(気づいて……おられたのですか?)」

「(普段のあなたは、お堅くてクールで、バリバリの秘書官って感じのオーラを出してただけだし、さつきみたいなあからさまってほどじゃないけど、前々から勇夜絡みとなると、素直ってかほっこりというかさ、色々柔らかくなるんだよね)」

「(アルフ! あ……あれは……)」

ここまで見抜かれていたのでは、弁解の余地がない。

そんなもので、片やフェイトの慈愛一杯、片やアルフのニヤけとからかい半分の発言に、リンクは全く言い返せず仕舞いだった。

「続きは、アイスを食べたからにしてももらえますか?」

「うん」

時間を掛けると溶けてしまうアイスを食べている最中な上、一度落ち着かせる時間も兼ねて一旦話を置き、各々スイーツを食べ終えた後、内容も内容なので認識障害の結界も展開させて再開。

「いつごろからのなの? 自分の気持ちに気づいたのは」

「はい……」

何度も今までやってきたが、改めてリンクは無意識に黒い長髪をくると弄らせて反芻する。

なぜ、勇夜ことウルトラマンゼロが単に自らの担い手たる我が主、ただけでない……それ以上の熱い感情を持つに至ったのか、その理由を探ろうとする……が、今またそれを見つけようと潜っても。

「分からないのです、何度記憶を探ってみても……具体的に何が切っ掛けであるの人にこのような慕情を抱くようになったのか」



逆に考えるほど、勇夜がリンクに対して口にした一言一言が、彼女にとつての「殺し文句」と化して行く。

フェイトに負けじと、リンクもかなり重めな恋煩いを発症していた。

「ただ……」

「“ただ”？」

「その気持ちに私自身の性質が絡んでいるのは、はっきりしてまして……」

「(リンクの……せい……しつ?)」

「(私には、鎧となってマスターに力を与える、大量の情報を記録、インテリジェントデバイス代行、次元転移といった能力の他に、パンドラの箱とも言えるある特質を持っているのです)」

パンドラの箱。

フェイトとアルフは異世界のミッド生まれだが、リンクの使ったこの言葉が何を意味するか一応知っている。

ギリシャ神話に登場する絶対に開けてはならない禁忌の箱を喩えに使うまでに、彼女自身が持つ特質とは？

「私は、マスターだけでなく……あらゆる知的生命体の感情、いわば意志を……エネルギーに変える力を持っているのです」

「……………」

最初は、意味を測りかねたがゆえの沈黙であった。

が、それはほんの少しの間を経て、理解したがゆえの呆然の黙秘へと変わった。

意志、それは人どころかあらゆる生命にとつて切っても切り離せない概念。

余りに近すぎて、身近にあるものと意識が向かないくらいに近く、生物が生物たる重要な存在。

リンクはそれを、“エネルギー”に変換できると言ったのだ。

魔法にも、その意志によって効果を強める性質があるが、この場合、せいぜい“意志”は魔力を燃やして発動させる魔法という名の火を強くする為に必要な可燃物、火種となる魔力が必須。

対して、生み出されるものの中身や量のことは別として、魔法ですらせいぜい補助止まりなものが、彼女にかかれれば多大な力を生む源泉となる。

「ある程度、強いものでなければ……変換できませんし、マスターが充分にお強いもので、今のところ、使う機会はなかった、のでは……あるのですけど」

「(勇夜は……このこと知ってるの?)」

「(無論、マスターにもお伝えしています)」

カミングアウトした本人はこう付け加えたが、それでもなお天地をひっくり返し、彼女がパンドラの箱と表するだけの衝撃はあった。

まだ数えられる程度の年数しか生きていないフェイトたちでも、世界のバランスを壊しかねないと考えるに至れたからだ。

「こんな物騒な身の上でしたから、実を言うと、内心自分が怖くてたまらなかつたです……ただでさえ、生命体とも……ジャンボットのようにな心ある機械とも言えない身というのに」

乾きのある笑みと一緒に、独白めいた調子でリンクは腕にある“自身”を見つめながら呟いた。

本人が言うように、彼女はどの特定のカテゴリーにも当てはまらない曖昧な存在だ。

有機生命体とは当然言えず、普段腕輪の姿、真の姿も鎧に弓矢になる複合武器であるので、一般常識なら無機物……であるのだが、誕生経緯を踏まえると、モノとして見るにも怪しい。

まさにブラックボックスの塊、ウルトラマンノアの力と人々の希望が集まって生まれた時点で、そもそも人の常識で図れるものではないのだろうか。

「でも、勇夜はそんなの、気にしなさそう……だよな」

勇夜——ゼロの 交流関係をざっと洗ってみても。

ともにイージスを探す冒険をしたのは、開拓民族なランとナオ兄弟と、王家の姫君なエメラナ。

自身が創設したチームにスカウトしたのは、二次元世界の騎士、炎の海賊用心棒、AI搭載の宇宙船兼ロボット。

彼からはどちらとも異世界人なユーノなのは。

当人はいけ好かないと言いつつも、その組織に属するハラオウン親子らアースラチームに、おやつさんことゲンヤ・ナカジマ率いる陸士部隊らには頼りにし。

家族関係にしても血縁なら父はウルトラ族、母は地球人、ミッドでの義理の方でも妹たちはサイボーグ。

そして使い魔なアルフ、クローンなフェイト。

人種がバラバラで、中には出自に訳ありな人々がこんなにも多い。

「ええ、マスターは基本、出自、種別、立場、境遇などと言ったしがらみに拘らず、左右されないお人で、誰に対しても対等に接します、昔は目上の人にもタメ口上等でしたし……私の能力を知っても、特に気負いせず接してくれました……」

そう口にする内、ああ……だからかとリンクは気づく。

特定の存在に定義し難い自分が、勇夜に思い慕うようになった切っ掛け……彼と一緒に居る日々そのものだったのだと。

どうりで記憶を小粒に探していても、これと呼べるものが見つからなかったわけだ。

ほんと、我がマスターは罪作りでセブンの息子なウルトラマンです。

「でも……いいの？ その気持ち……勇夜に伝えなくて」

「ふふ、よくそんな質問ができますね、私は言わばあなたの『恋敵（ライバル）』でもあるのですよ」

「あ……」

思わず投げた質問の球の意味を返されて、フェイトは返球に詰まってしまう。

そう、リンクはフェイトにとっては恋のライバル同然、それにさっきまで彼女はそのライバルに妬いてもいた。

フェイトの生来の人の良さを顧みれば、前述の投球も納得だが、これではリンクに皮肉な返しをされるのも無理ない。

「でも……ライバルだから、はつきりさせたいの」

そしてフェイトの中にある負けず嫌いな気質から振りしぼった言

葉を、負けじとどうにかさらに投げ返す。

どうしても聞いておきたい、リンクから直に打ち明けてほしいのだ——フェイトの偽りはない気持ちを受け取ったリンクは。

「そう…ですね、私は——」

実はこの時、一種のニアミスが起きていた。

三人からそれほど離れていない喧騒の中を、“彼女”が走り去っていったからだ。

しかし、フェイトたちは勿論、“彼女”もある事情と状況で、お互いの存在に気づくことはなかった。

時間と場所は移り……冬至は迫っているのもあって、日の出る時間が短くなっていくのを感じさせられる気の早い日没へのカウントを告げるオレンジの空が現れる夕方。

義妹のなのはとバトンタッチする形で、午後を翠屋での接客業の手伝いをしていた光は、お客が軽食に使った皿たちを洗浄していた。

マメな光の人柄によるのか、彼に洗われた食器は擦ると良い音が鳴りそうな、テカリ様である。

「光、今時間がとれるか？」

「(仕事中ですが、どうぞ)」

従事中の彼の脳内に、テレパシーでナオトの声が伝達された。

ナオトことジャンも、生命体、マシン問わずテレパシーによるコミュニケーションができる機能を持っている。

繰り返すようだが、空気のない真空での会話にはテレパシーが絶対欠かせないからだ。

「(無限書庫のユーノから朗報があった、闇の書となってしまった魔導書」の詳細が記された史料が見つかったそうだ)」

「(その言い草を見ると、ウルトラマンノアの言う蔑称の話に信憑性がとれたようですね)」

「(詳細は海鳴に戻ってからのことだ、仕事が終わったら臨時本部のマンションに来てくれ)」

「(分かりました、そちらの張り込みの状況は?)」

「(衛星カメラを通じて、市内全ての大型病院施設を見張っているのだが、グレンや騎士らしき人影は確認できてない……私が気づいていないだけでカモフラージュされている可能性もあるが)」

「(結界が使われている形跡は?)」

「(そちらも発見できていない、湖の騎士ならそれぐらい造作もなさそうではあるが……それはそれとして光、インペライザーたちへの対

策は考えているのか？」

『(ご心配なく、我が主は対抗策のプラン自体は、既に考案しています)』

本人に代わって、光の右腕に嵌められている二次元人の紋章が形作られた腕型待機形態の彼のデバイス、シルバーライトが答える。

しかし、どうしてこうも声優役者に酷似した声の持ち主たちが集まるのか？

ゼロたちウルティメイトフォースゼロ然り、フェイトたち然り、シルバーライトも天の道を行く仮面戦士を演じた俳優主演で実写化もされる「あくまで執事」な執事を演じたこともある男性声優にそっくりな声持ちである。

「(確実に成功させる為の訓練は、必須ですがね)」

あくまで執事の声にエコーを上乘せした愛機の一言に付け加える形で、光が応答した矢先に……その声が響いた。

「頼む！ 聞こえるのなら返事をしてくれ！ 今頼れるのはそなたらしかいないのだ！」

声色からして泣きそうなのが分かる、悲痛さに染まった……縋るよ  
うな「彼女」の声が――

つづく

## STAGE38 — サッカーパンチ

水面へと下りていく夕陽の光で、オレンジの光沢を反射させる太平洋の水平線、それ陸との境界な海岸線に沿って伸びる道路を、一台のバイクが走る。

諸星勇夜が移動手段の一つとして重宝している改造が施されたヤマハ製VMAXのカスタムバイク。

フロントにツインライト付きカウルを付けているだけでなく、傍目で確認できる以上に人間体でもずば抜けた身体能力を持つ彼に合わせた大改造を施されているので、はつきり言うところを地球で使うのは色々和不味い。

なので後部にはちゃんとナンバープレートを付け、今は勇夜からバイクはおろか彼の肉体まで借りている菱海ユリヤことリンクは、この道路での法定速度をしっかりと守って運転している。

元から日本の技術者のクレイジーで暴走特急レベルな情熱が詰まったものを、さらに魔改造されたモンスターバイクの性能を持って余しているのもいいとこだが、背に腹は変えられない。

同行している二人、フェイトの方は後部座席に座り、アルフはとうとリンクの羽織る黒のレディース用コートの内側に入りこんで、フアスナーの上がった袖口から顔を出している格好だ。

「マスターに経過を報告しておきたいので、臨海公園で停車致します」  
「うん」

「タイムアウト！ バイクを停めて！ ちよつとタイムアウト！」  
「またター○ネーター2ネタですか？」

「ごめん♪ 前に乗ってるところがジョンと一緒にだったからさ、それにちよつとデザインも似てるだろ？」

「ですが厳密に言うとならVMAXはクルーザーではないですよ、よく似た何かです」

なんてアルフがジョークをかまし、リンクがツツコミを入れている裏で、『タイムアウト』の単語を切っ掛けに――

『Start Up』

ゴオンゴオンゴオン！ ブオオオオオオオ——ン！  
「終わらせなきや始まらねえ！ 加速装置！」

ディィィィィ——ン！

『Exceed charge』

「デエエエリイアアアアア——！！！！」

『3——2——1——Time Out——Reformation』

想像なのを良いことに、色々ごつちやなツツコミどこだらけな妄想をする輩がいた。

『（サー…いくら似ているからといって、勇夜殿と彼の声を使って何をイメージなさっているのですか？）』

「（えへへ…なんかついね…：はあ〜〜）」

その輩は溜め息を最後に付け加えた。

なぜ吐いたかと言うと——

「（今日が絶好のチャンスだったのに、髪留め忘れてくるなんて……私の馬鹿）」

『（気を落とすすぎないで下さい、サーよ、機会はまだございます）』  
「（バルデイツシュ……うん、めげていられないよね）」

フェイトにとって、なのはと半年前に「魔法の言葉」を掛け合い、再会を願ってリボンを交換した別れと思いい出の地たる海鳴臨海公園。

時折大小も種類も様々な船舶が通り、太陽光で煌めく海と、敷地内に植えられた木々たちに挟まれる格好な、各辺がギザギザ状になった石畳の通りのフェンスの傍に置かれたベンチにフェイトは座り、その



横をアルフはうつ伏せに寝ころんでいた。

「待たせたな」

その二人の下に、黒のデニムジャケットにタートルネックのセーター、深青のジーパンを着た黒髪ポニーテールの少年が歩み寄ってくる。

つい先程、相棒のリンクから肉体を返してもらった諸星勇夜である。

「勇夜」

「ほらよ、ご希望通りのコーンスープだ」

木々に身を隠して勇夜の姿に戻るついでに、予め二人からご注文を受けた指定の飲料を公園内の自動販売機から購入してたつた今帰ってきたところだ。

その勇夜から、中にコーンもちゃんと入ってる温まったコーンスープをフェイトは受け取る。

「ありがとう」

早速缶を開け、手袋越しに熱を感じながら口にした。

コートで対策をしているとはいえ、寒気に晒された体、そこにとろみの利いたスープの暖気が心地よく体内に染み渡る。

「アルフはポ○リでよかったよな？」

「うん♪」

アルフにはHOTなミデイサイズのペッドボトルな某清涼印象水を手渡す。

「プハア♪」

人間の姿より指が短い両手でボトルを器用に挟み、嬉々としてごくごくと飲み、お酒でも一服したかのように、アルフは息を吐いた。

「そんなにお前ポ○リ好きだったか？」

「おうさ♪」

「勇夜から格闘の指南受けてた時に、初めて飲んでからやみつきになっただって」

「さ、左様で」

微苦笑を浮かべる勇夜は、ベンチの端に腰かけるフェイトのすぐ横の海と通りを隔てたフェンスに背中を寄せた。

「すまねえな、こんな地味で味気ない捜査もどきに付き合わせちまうて」

「ううん、気にしないで、我がままを言いだして通したのは私だから」  
「まあ、フェイトの駄々っ子癖は今に始まったことじゃねえけど」

「むっ……勇夜のいじわる………駄々っ子なのは自覚してるもん」

「拗ねんなよ、フェイトでじゃ逆効果だぞつと」

と、悪戯つ気を含んだ笑みを見せて、人差し指で夕焼けに映えるフェイトの金髪を拒否感を与えない微力でつついた。

「ひゃっ……もう、勇夜つてば」

つつかれた方は前述の一言を返したが、その顔は綻び、陽の光でカモフラージュされていたが、頬も夕陽に負けじと赤味であった。

この現況を、はつきりとは明言しない。

ストレートに言った際、何が起きるか分からないからだ。

「(あちや……やっぱアタシ付いてかない方が良かったかも、せつかくのムードなのに)」

それにアルフの今の独白で大体把握できるだろう。

「体の調子はどう？」

「そんな柔な鍛え方はしてねえから、半日ご無沙汰だった程度どうつてことねえよ、昨日の怪我也ジャンのカプセルベッドのお陰で治ってるしな」

勇夜はこう答えながら、自分の分の飲料缶の蓋をカチャッと開けて飲む。

ちなみに彼のは缶の色も真っ黒な無糖ブラックのホットコーヒー、子ども舌では旨味が感じられない苦味全開だが、さっきの会話を聞くとブラックでも大甘になってしまう気がしないまでもない。

「ところで、体貸してた相棒が毒のあるトークでもして困らせなかったか？」

「ううん、アイスを美味しそうに食べてた以外は特に何も」

逆にリンクの方がフェイトによって困らされたのが真相、本人から内緒にするよう催促を受けているので詳細は避けている。

「アイスか……そういうや感覚共有で初めて味わせたのがアイスだったっけ、あの時は『これが味覚というものですか』って子どもみたいにはしゃいで感動してたよな？ リンク」

『え？……………はい』

「どうした？ 何か言い方にキレが無いぞ」

『そう……ですか？』

「なあ、本当に今日は何も無かったのか？」

「うんうん、本当に困るようなことはなかったよ、ねえアルフ？」

「そうそう、フェイトのおっしやる通りだからさ」

どう見てもいわくありげに、何かを隠そうとはぐらかす女性陣の姿。

『(マスターのナチュラルたらし……そんな自分のことみたいに嬉しそうに話されては、照れるではないですか……)』

女性陣が何を明かさぬようにしているかは、乙女の熱が上昇中の彼女の独白が示してくれる。

その詳細まで把握できずとも、*“何もなかった”*のは絶対嘘だなとこの場ではただ一人男子な彼はフェイトたちの態度からそう確信したが、この様子ではいくら尋ねてもその*“何か”*に中身に対しては黙秘を貫かれてキリがなくなりそうだと、とも判断して真相の追究は取り止めることにした。

「分かったよ、その代わり今日の結果報告してくれないか」

『それでしたら、マスターのタブレットPCにデータを送ってあります』

「流石だな、相棒」

『いえ……(もう、これは普通の賛辞の言葉であるのに、何動揺しているのですか……私)』

「ナオトの病院の張り込みはどうだった？」

『今日の時点では、騎士やグレンらしき人影は捉えられなかったようです、無人惑星の観察チームからも今日の時点では騎士及び怪獣の活動は観測はされていません』

勇夜の言う通り、内心*“女の子”*な心内でも公私をきっちり切り分

けて自身の努めをこなせるリンクには、流石だと賞賛を送りたくなる。

「空き缶預かってくれ」

『了解』

この場の女性陣の好意のターゲット……もとい対象な彼は、飲みほしたコーヒー缶を後でちゃんとゴミ箱に入れる為に一旦リンクに預けると、ジャケットの内ポケットからスティック状な待機モードのタブレットPCを取り出し、展開して起動させる。

手中に現れたタッチ操作可能な3Dモニターに指を付け、リンクから送信された調査結果の一つを表示させた。

画面にあるのは、海鳴市を真俯瞰から捉えたCGの地図。地区ごとの境界線や地名が表示され、数にして3つほどだが、ゆつくりと赤く明滅している地域が一部あった。

点滅する地区は、例の魔導書の主に選ばれたと者と思わしき市民が住んでいる地域を表している。

今日のリンクとフェイトたちの『迷子の金髪少女と、彼女と一緒に家族を探す黒髪ロングの美女』という設定による聞き込みと外回りの調査によって、その候補は3つにまで減っていた。

フェイトは、その地図が記されたモニターを見つめる彼の横顔を見て気づく。

さつきまで表情は明るめであった彼が画面のある一点を目に止めたまま視線が動いていないことを、その一点を見ている彼の目が、憂いを帯びているということに。

多分……なのはと初めて会った時の自分も、今の勇夜と同じ“悲しい貌”をしていたのかもしれない。

“物体の動きには、川の流れの様な線が隠れている、日頃からその流れをなぞるよう心掛ける、そうすれば相手の打つ手が読み易くなる”

“想い人の表情の意味を読みとろうと、ゲンゴ指導による特訓のある時に彼から教わった動きの見方を思い出し、それを参考に、フェイトは勇夜の視線をマーカーで描く要領で彼の視線を瞳からPC画面へ

となぞり。

「な、か…おか…ちよう……さつきからこの辺りしか見てないけど、何かあるの？」

『中丘町』と表示されていた区画を指差す。

直後、質問を返球しない代わりに、彼の普段から刺々しさがあがり、戦闘時にもなれば大人でも屈服させる眼力を持つ目に帯びる鬩りの深みが増した。

問いかける前から、フェイトには勇夜の今の表情にさせるものが何か、漠然とだが感じていたが、質問の反応から確信が強まり。

「その町に住んでるんだね、闇の書の主かもしれない可能性が、一番高い人が……」

さらにぐつと踏み込んだ問いを投げかける。

しばし唇を強く締めたまま黙り込む勇夜であったが、一旦目を閉じ、一呼吸して自身を落ち着かせると。

「ああ……見てくれ、この子はそうだ」

フェイトからの問いを肯定し、指でPC画面を海鳴の地図から、その人物の詳細と顔写真が記されたデータに変え、彼女に見せた。

「嘘……」

赤く大きな双眸を見開かせると同時に、フェイトは思わずそう呟いていた。

何かの間違いでは…自分の目が見間違いで誤認しているだけでは？ と一度目を閉じ、開いて再び画面を注視する。

しかし、映る光景は一度目と何も変わらなかった。

茶色がかって、肩に掛かるか掛からないかの長さなショートカット。

対面からは右側の横髪には、一つはバツテン印、もう一つは道路でよく見るラインに似た二本線な、計二つの髪留め付き、目じりはタレ目寄りで、いかにもほんわかで温厚そうな雰囲気か漂う日本人の女の子……間違いなく、その子は――

「八神……はやて」

さつきと同じく、フェイトは無意識の内に画面に記された少女の名

を口にしていた。

「知ってるのか？ この子のこと」

彼女の反応から、明らかに写真の子を知っていると踏んだ勇夜が問いかける。

「うん、まだ直接会ってないけどさすがから紹介されたの、前の月に海鳴私立図書館で知り合った子で、放課後よく図書館で会ってるんだって、近い内にみんなでその子と会う約束もしてた……勇夜はいつはやと会ったの？」

対してフェイトも、勇夜の口振りから以前会った経験があると察して聞いてみた。

「半年前の海鳴（ここ）でのすったもんだの時に二回だ、一度目はさすがと一緒でこっちの地球のこと調べようと図書館に寄った時に会って」

「二回目はアタシの怪我のリハビリで散歩してた時にぼったり、転んでトラックに轢かれそうになってるところを、間一髪勇夜が助けたんだよ」

横断歩道を渡る途中車椅子から転倒し、あわやトラックの巨体で命を散らすところをヒーローよろしく（本当にスーパーヒーローなウルトラマンではあるが）勇夜が彼女を傷つけぬよう抱え身を横転して事なきを得て、行き先の病院まで同行し、家まで送り届けた——という経緯を当事者的立場な二人はフェイトに話した。

「そう……だったんだ……」

この時表には出さずよう堪えてはいたが、内心勇夜からいわゆる『お姫様抱っこ』をされたのは自分だけではなかった事実には若干の妬み込みでシヨックだったフェイト。だが自分の場合、初めて会いジュエルシードを巡って戦闘した時、母からの宣告で意識喪失していた時、そして先月末の騎士たちとの戦闘時で三回も経験していることを思い出して気分を持ち直させるのであった。

「まずこれを見てくれ、リンクが記録してたはやての魔力データだ」

さらにPCの画面を切り替えて、勇夜はフェイトに見せる。表示されている彼女の魔力数値にもフェイトは驚かされた。

自分やなのはよりも遙かに多い……Sクラス、母でさえ外部からの供給を受けてようやく超えられる高みの域を、はやては生まれながらに持ち合せていた。

守護騎士一人に付き、肉体の維持にどれくらい魔力量が必要なのかは分からないが、もしアルフ……或いはリニスと同程度だとしたら、四人全員を賄わせられる上にお釣りも付いてくる。

「それと、はやてが麻痺で足が不自由で、ちよくちよく病院通いしてるのをすずかから聞いてるか？」

「うん」

「ナオトに、ここ最近の通院回数を調べてもらったんだが……」

今度は通院した日にマークが付けられたカレンダーを表示させる。

今年の初めを皮切りに、勇夜の指で現在まで時間をスライドさせていく。

最初は一〜二週間に一回ある程度だったのだが、九月に入った頃から週一、十一月の中ごろからは二、三回と通う回数が今に近づくにつれ急激に増えていった。

「そういえばさ、その足が麻痺しだしたつてのも、七年くらい前だったつて……担当のお医者さんが言ってたんだつた……よね？」

「ああ……」

「クロノのお父さんが亡くなった護送事故も——」

今から七年前の出来事、偶然の一致にしては出来過ぎな感がある。

通院の頻度にしても、急に増えた九月を過ぎたあたりから、騎士たちの仕業と思われる襲撃事件が起き始めている。

もし……はやてが魔導書の主だと仮定し、ヴォルケンリッターが一度は禁じた筈の蒐集行為を始めてた切っ掛けが、彼女の足の病だとしたら。

「確かに……はやてが主なら……」

すずかによれば、血縁はなく養子で引き取られた義兄が一人いて、今年の中ごろからは『遠縁の親戚さんたち』に、大型犬一匹も、一緒に家で暮らしているという……それを反芻したことで、フェイトは自身の至らなさを恥じた。

その義兄がはやての両親の養子となったのは11年前、勇夜がミツドに、光が地球に飛ばされた時期と重なるし、すずか越しに聞いた人物像も、『お調子者なムードメーカーだが義理堅い江戸っ子風なお兄さん』……勇夜が言っていたグレンファイヤーの人となりとも合致するではないか。

今年に同居し始めたという「遠縁の親戚」も、年上のお姉さん二人と歳下の子が二人、内三人は守護騎士で、残った一人は昨日勇夜たちと接触してきた『久遠』って名前の魔源種な狐の耳と尾を生やした巫女姿の女の子、大型犬は盾の守護獣の獣形態であろう。

有力候補がはやてであったこと自体は、直に面識が無くとも驚愕したフェイトであったが、ふと冷静に考えてみれば、主がはやてである可能性を匂わす判断材料が、彼のPCが見せたデータ以外にも多いことに気づかされる。

どうして……今この時まで、直接会ってないにしても八神家の家族構成とヴォルケンリッターたちの共通点に気がつかなかったのか？

「ごめん、私たちがもつと早く気付いていたら、主が誰で海鳴のどこに住んでるのか早目に掴めたかもしれないのに……」

「いいさ、俺だって昨日まで眼中になかったんだぜ、それに……はやてとグレンたちの繋がりをはつきりさせる証拠は……まだないしな」

改めて説明すると、『思い込み』、『先入観』、『結論を先走る』といったものは捜査活動に限らず、探る行為そのものに於いて非常に厄介なトラップだ。

一度その罠に嵌ってしまおうと、探りを入れている物事の実態、真実、本質を見逃し、時として致命的なミスへと繋がってしまう。

例えば警察の場合、それは誤認逮捕による無実の者に罪の汚名を着せる汚名、たとえ冤罪だと明るみに出ても、した側もされた側も、双方に簡単に消えない染みとして残留する苦い結果となる。

特に勇夜たちは尻尾すら掴ませない謎の集団と、次元そのものを危機に陥れるロストログアが相手なので、彼らも当事者の特定には慎重な姿勢で臨まなければならず、だから昨日ははやてが有力候補に上がった、今日ならばリンクたちの聞き込みやジャンバードの衛星カメラ



を使った市内の病院施設の張り込みなどで、急かさず他の可能性の芽を摘み取っていったわけである。

「でも……………」

自分でもびっくりしている……………はやてと、ヴォルケンリッターたちの組み合わせが、とてもしっくり来ているということに。

フェイトには簡単に想像できたのだ——彼女たちが一つ屋根の下で一緒に暮らしている姿——を、あくまで自分の脳内の産物だというのに、実際にそれを目にしたかのようにイメージははつきりしていた。

車椅子必須な身ながらも朝食の支度をするはやて、それを手伝う風の癒し手シャマル、ソファアで朝刊を読む烈火の将シグナム、狼の姿でうつ伏せに脚を崩す盾の守護獣ザフィーラ、寝ぼけながらもどうにか起きてきた紅の鉄騎ヴィータに久遠に、そしてグレンファイヤー（人団体の姿は髪がオレンジな如何にも不良っぽそうなヤンチャ小僧をフェイトはイメージした）。

他にも彼らの団欒のシチュエーションが、いくつもフェイトの脳内で閃いてく。全て自身の妄想の産物ではないのに、余りにイメージが具体的に強烈過ぎて、頭が『闇の書の主ははやて』と勝手に確定しそうになり、理性で必死に先走るなどストップを掛ける有様だった。

だけど、もしこの想像が現実にあつたものだったとしたら……………管理局からは『心を持たぬ、主に選ばれた人間の傀儡』としか認識されていなかった騎士たちと戦って感じた、彼女らが〃人そのものな心を持つ〃存在に生まれ変わった事実の説得力が補強される。

「……………不思議と、納得できちゃうんだよね、主がはやてだつて」「アタシも……………えらくびったりと来ちゃうのが怖くなるくらいさ」

「俺もだよ、やけにはつきりと暮らし様をイメージできちゃうからさ……………余計に、外れてほしいって……………願ってる自分がある」

鮮やかな夕焼けの光景に反して、その日の光を受ける者たちの顔は暗い。

「フェイトやあの子くらいの歳の俺は、もう色々荒れててさ、イライラ体ん中に溜めこんでは、誰これ構わずに不満撒き散らして迷惑掛けて

ばかりだった、挙句に馬鹿やって国外追放………一方ではやてなんて、親御さんがいなけりや、足もまともに動かないから学校もいけねえ、いけねえから友達ができる機会も恵まれねえし、治って歩ける見込みもないってのに………なんでそんな子が、宇宙を丸ごと消し飛ばす火薬庫（ロストロギア）を抱えなきゃならないんだよ」

彼らしい表現で、勇夜は一同の顔を暗くさせる感情の中身を吐露した。

異世界の巨人たるグレンや妖怪と呼べる魔源種久遠が「地球人」として生活している。

魔力とプログラムが人、または人に近い形に構成しているに過ぎなかったヴォルケンリッターが、「人間」として生きている。

そんな彼らと、一緒に日常を送っているのが——八神はやて。

その可能性がどんどん強まるにつれて、そうであってほしくない感情もまた秒ごとに強みを増していった。

まだ彼女とは、面識が多いと言えない……いやむしろ少ないからこそ、切実な——願ひ。

『マスター、フェイト、お気もちを沈んでいるところ、申し訳ないのですが……』

「あつち、見て」

海に背を向ける格好だった勇夜とフェイトは、リンクとアルフが示した舞台でいうところの上手側の方向に目を向ける。

「おい……冗談だろ？」

驚きと戸惑いで、二人はその不意打ちを前に体が硬直してしまつた。

これは神様のきまぐれか？

それとも悪魔の純然たる悪意に満ちた悪戯なのか？

噂をすれば、何とやら……な状況下であった。

こちらから大体三十メートル先に、彼らの談話の中心にいた八神はやてが、そこにいて、勇夜たちと視線を合わせていたから。

彼らの心情に応じているのか、海から吹く潮風が少し強くなる、そ

の大気の波にはどこか、不吉さが入り混じっていた。

だんだんと空がオレンジから紺色へと変色し始めていく時間にて歩く二人連れがいた。

「無理やり付いてきちゃって、ごめんね光兄」

「いえ、お気になさらず、今レイジングハートもおりますからね、『私がいれば御神の剣を存分に使えるでしょ』と言ってきた時は策士だと唸らされましたけど」

「にやはは」

「ですが、暗くはなってきたので、一応手は握らせてもらいますよ」

予め前置きをして、義兄（あに）は義妹（いもうと）の手を握った。

「あ……」

握られた妹の方は、すんなりと受け入れたものの、両の頬に赤味を宿らせる。

「なのは？」

「ちよつと、冷えてるだけなの……さあ、行こう」

「はい……」

と、軽い（？）やり取りを交わしながら、高町兄妹はある場所へ向かっていた。

やがてその目的地に辿りつく。

「この並木道だったよね？ 待ち合わせ場所」

「ええ」

目的の場所は高町家から近い距離にある大型公園、藤見北公園、彼らも朝のジョギングコースとしてよく使っている公共施設だ。

敷地内には、イチヨウの木たちが植えられた幅が約十メートルある並木道が敷かれている。冬なので通りは枝から落ちたイチヨウの葉

でびっしりだ。

二人がその道を進んでいくと。

「お待たせしました」

木々の間に設置された脚部は曲線と金属でできた木製のベンチに、女性が一人座っているのを目に止め、光は彼女に声を掛ける。

金色の髪をした女性は、高町兄妹に目を向けながら立ち上がった。

「すまない、急な呼び出しをして、迷惑をかけた」

「いえ、こちらこそ狼狽が鎮まったところお詫びしますが、用件の前に一つ聞いていいですか？ 恐らく関係あることなので」

「相分かった」

「先程、私の友人がたった一人でいた小学生の女の子を保護したのです、その子は足が悪く車椅子で、関東暮らしながら京言葉に近いニュアンスの関西弁を使う子でした」

光からの言葉に、女性——久遠ははっとした表情を浮かばせた。

「単刀直入に言います、その子の名前は八神はやて……………あなたとグレンたちのご家族で、闇の書に選ばれた、現行の主……………ですね？」

つづく。

暗めな紺色の範囲が、オレンジ色を半分以上染め上げた空の眼下の地上に立つ建築物、いわゆる病院ってやつだ。

その建物の固有の名は、海鳴大学病院、この中の受付嬢、訪問者、患者などの人が各々集まっている広いロビーに置かれたソファアの一角にて、諸星勇夜はある人物を待ちながら座っていた。

「ごめんなさい、待たせてしまいました」

「いえ、もつとお時間が掛かると思っていましたし、いきなり訪ねてきたのは俺の方ですからお気になされないで下さい、お久しぶりです、石田先生」

「(ちらいそ)」

勇夜の許へと来たその人物な、見た目が30代前半でショートヘアの白衣を着込む女性に、彼は身を立たせて頭を下げる。

石田幸恵、長年八神はやての担当医を務めている海鳴大学病院の神経内科医師である。

二人は始めに挨拶を交わすと、ほぼ同時にソファアに腰掛けた。

「あの日ははやてちゃんを助けて頂いてありがとうございます、今日まで一度もお会いにならなかったけど、あの後どうなさっておられたのですか？　この学生さんでしたよね」

「交換留学で、先月の末まで海外にいたんです、こっちに帰るのに色々ありましたよ、ホームステイ先の家族が日本に興味持って越してくるし、しかもアルフの飼い主の一家とは昔からの仲でルームシェアするわ、家賃浮くから一緒に住まないかと双方の奥さんたちに催促されるわで」

「災難でしたね、聞いたところを見て、退屈はしなかったようですね」

「はは………鋭いですね、当たりです、みんな超がつくほど人が良い方ばかりなもので」

「でしようね」

勇夜が話している近況報告の中身は、本当なことも部分部分あるの

だが、ほとんどはこの地球での表向きの経歴、海鳴大学の学生という設定を踏まえて作り上げたホラ話である。

ミッドでは戸籍上15歳、ウルトラ一族としても5900歳は地球人ならまだ高校生な年齢だが、見た目が大人びていることと、同声の声優が演じる某死神のノートを使う青年に負けず劣らずの演技力で、今の会話を見る限りは嘘とは思えない真実味があった。

ただ……元ヤンで誰が相手でもタメ口が基本で、戦闘には時に厨二病全開な発言をかます彼が丁寧語を使う姿はどうしても、彼を知る身から見るとどこか滑稽味も感じてしまったりする。

「それで、今……はやてちゃんは、その人たちの家におられるのですね？」

「はい、そうです」

「一人でいたところを、ばったり勇夜君とお会いになったと聞いた時は驚きました、彼女は今なんと？」

「そのわけを聞いてはみたんですが、だんまりを決め込まれちゃって、何も話してくれないんです、それ以外の話題には朗らかに返してくれるんですけど」

軽い近況報告から、本題であるはやての話に変わり、二人の顔から笑みが消えた。

話は先刻、勇夜とフェイトたちが夕陽に照らされる海鳴臨海公園ではやてと鉢合わせた直後に戻る。

「(バルディッシュ！ はやてから魔力は！)」

「(計測不可)」

なぜだ？ 相手は殺気も戦意も持っていないとはいえ、この瞬間までなぜ存在に気がつかなかった？

それに……どうして彼女から魔力を感じない？ 彼女は障害を抱えているが、たかがその程度でリンカーコアは消えたりはしないの

に。

表情として露わにせぬよう努力し、幸いそれは実つてはいたが、勇夜たちは心の動揺を前に四苦八苦していた。

「勇夜……さん？」

「よお……久しぶりだな」

「はい、こちらこそお久しぶりです」

竹を割った性格な彼にしては、ぎこちない声音で挨拶を返した。

彼女への疑惑や魔力の無反応なども原因であるが、まさかこの場でばったり会うとは予想もしなかったからである。

誰にしても……この状況に出くわしてしまえば、程度の差はあれ狼狽しそうではあるがだ。

とにもかくにも、今は平常心の維持が最優先と、心臓の鼓動をどうにか正常にさせる。

「アルフちゃんも元気やったか？」

「ワン！」

「ほんで、そつちの金髪の女の子って、ひよつとして——」

「はじめまして、フェイト、フェイト・テスタロッサ、君のことはすずかから聞いている」

「ああ、やっぱりフェイトちゃんやったんね、こちらこそはじめましてな、八神はやてです」

お互いに自己紹介を交わすフェイトとはやて、二人はすずかの仲介を通じて、お互いのことは既に知ってはいたが、面と向かって会うのはこれが初めてだ。

「二人とも知り合いやったんですか？」

「まあな、アルフの飼い主もこの子なんだ」

「そないですか」

この後の石田先生との会話同様に、上手いこと事実を一部脚色、曲解させながら、現在はフェイトらテスタロッサ親子とハラウン親子と、ナオトにゲンとルームシェアしていることを一通り勇夜ははやてに説明した。

同じ屋根の下で暮らす表向きのわけの詳細は、細かく設定を決めて

いることもあつて、かなり説明が長くなるので割愛させてもらう。「ところでよ、何でこんな時間に一人でほつつき歩いてたんだ？ あの事故で石田先生から外出には必ず家族と同伴しろって釘刺されただろ」

勇夜は、この場で再会してから一番気になっていた事柄をはやてに尋ねた。

現在の時間は、午後4時30分を過ぎたところである。

日の入りの時間も早いし、車椅子な独り身で家から結構距離があるこの公園にいた事実にはやはり重大な理由がある筈だ。

「その……」

当の本人は、先程までの柔和で親しみ易さが溢れる京言葉風な関西弁による口振りから一転して、言葉を詰まらせていた。

返答に困っている間を利用して、勇夜は彼女を観察してみた。戦闘経験の積み重ねで、洞察力は人並み以上なほどには備わっている。

上はややグレーがかった白のコート、袖口から見えるインナーは乳白色のセーターに赤のスカートと黒のストッキング……服の状態から、着用には人の手を借りつつ丁寧なそれなりの時間を掛けている……念の為、人間体でも使える超能力の一つの千里眼（使用の際、瞳の虹彩が光る為、変身魔法の応用で眼の色を非使用時と変わらぬようカモフラージュしている）で、介助者用の手押しハンドルを注視してみると指紋を発見した。付き方から外見年齢なら10〜11歳ほどの子が握って押し、付着してから半日も経ってないところも見て、自宅から突発的に出てきたわけではない、途中までは家族の誰かと同伴していた。

他に目にできる手掛かりは、服や髪に付着している常人には視認できな微細なほこりの量、それに混じって肩辺りに髪の毛が数本……長さや細さから見て女性のもので推定、寒気でやや赤くなった頬、唇と肌の乾き具合、外出用の車椅子のタイヤの汚れ具合から、午後0時〜13時までの間から介助役の同伴者と一緒に出かけ、そこから現在まで、時間の約半分は室内に、後の半分は外に出ており、何かをきっかけに同伴者から振り切った……普通に話されたのなら、質問した



時あんな反応を見せるのは不自然だからだ。

いくら彼がウルトラマンとはいえ、人並み以上どころじゃない、なんてツツコミは受け付けない。

「(アルフ、はやてからグリーンやシグナムたちの匂いは付いてるか?)」

「(うーん……色んな匂いがこんがらがって、きっぱりだ)」

はやての体に付いた不特定多数の人の香りで、同伴者を匂いで特定するのは断念される。

「(でも、ほんのちよつとだけど、時間が経った本の匂いが……一冊や二冊じゃないね、書庫みたいなどこにいたみたい)」

「(……ってことは、少し前まで図書館にいたんだな)」

それでも鼻が利く狼の使い魔なアルフのお陰で、はやてが一時どこにいたかは把握できた。

「(胸に長方形のでっぱり……リンク、はやてからレギオンが寄って気そうな電磁波は流れてるか?)」

「(感知できません、電源を切っていると思われまます、女子相手に申し訳ないのですが、視覚共有と透視をお願いできますか?)」

「(ああ)」

今度は勇夜の視覚情報をリンクとシンクロし、同時に千里眼による透視で、はやての内ポケットに入った携帯を確認する。

リンクは携帯の形状から、該当機種を瞬時に割り出した。

『(GPS機能付属の、比較的新しいモデルです、状態から見て、使用期間は約一年ほどかと)』

「(電源はオフだから、GPSで家族に位置を知られずに済んだってわけか)」

このGPSの件と、先のリンカーコアの件、車椅子に実年齢相応より小柄な彼女に対し自分らと会うまで、誰もはやてを気に留めなかった不可解さは幾つも残るが、これらの推理を踏まえれば、一人でいた理由は——それはともかく……はやてをこのまま一人にしておけない。どうにか送っていききたいのだが……今彼女の家に行くことは、色々と厄介でリスクが大きい。

行くなら、地雷原のど真ん中に足を踏み入れる心持ちと覚悟で臨ま

なければならなかった。

「(もしはやてが主なら、家に行った時にあいつらとばったりなんて……)」

『(あり得ますね、昨夜の戦闘からまだ一日も経っておらず、彼女の現況であちらには精神面の余裕はない筈ですので、今彼らと接触すれば戦闘は不可避です、風の癒し手でしたら、念話遮断に結界による身柄拘束もお手のものですから、備えもなしに八神家に向かうのは危険です)』

「(でも……このままはやてを一人にはしておけないよ)」

そのリスクたちは、今女性陣が口にした通りだ。

未だはやてが闇の書の主である可能性は、外れてほしいと勇夜たちは願ってはいるが、だからといって最悪の局面を予測する思考を停止するわけにもいかない。

一方で、フェイトの言う通り、彼女を一人な状態のままにしておけなかった。冬の冷気に半日も晒された体に、この季節には活発になるインフルエンザウイルスが体内に侵入して牙を向く可能性だってあるからだ。よってフェイトの意見には全員賛同である。

「(仕方ねえ、石田先生に一度はやてを預からせてもらって、家族への連絡も先生に頼むか) はやて、今日石田先生は勤務中か？」

「はい、昨日の診察で『明日も仕事があるから大変』と言うておりました」

はやてはさっきの質問の時とは正反対に、はっきりと答えた。

今の状況下で、一番波風立てずにはやてを自身の住まいに送れる案を、より具体的にかつ簡潔に説明すると――

海鳴大学病院に寄る。

担当医の石田先生の面会を求める。

先生に家族構成の変遷等の近況をさりげなく聞きつつ、はやてを一時保護してもらい、家への連絡も依頼。

そして、早目かつ自然に病院から退散してその足で帰宅――な、流れだ。

「(帰ってる途中に迎えに、来た騎士たちと会ったらどうしよう……)」

『その対策も立ててあります、メモリフラッシュ』

リンクは情報転移魔法——メモリフラッシュで、三人の脳内に大学病院を中心とした地図を見せた。中丘町のはやて家と病院には赤い丸が点滅し、両方の地点を道路に沿ってマーカーが結ばれている。

『このマーカーは八神家宅から病院までの最短ルートです、長年通院しているのなら、このルートをいつも使っているでしょう、少し迂回することになりますが、帰りの際は私のナビゲーションに従って下さい』

「(分かった)」

「(うん)」

「(あいよ)」

一同は念話によるこれからの打ち合わせを一通り終えた。

そうと決まれば実行、さて……：……：鬼が出るか蛇が出るか。

はやてが主である説が外れればそれで良し、当たってしまったとしても一応捜査の進展にはなる。

「そんじゃ、家まで送りたいんだけど、いきなり家族には見知らぬ俺たちが行つちやびつくりさせるだろうからさ、病院までは送るぜ、車椅子も押してやるから」

と、はやてにこの後の主旨と同伴の旨を伝えつつ、彼女の車椅子の取っ手に手を掛けようとしたその時だった。

「お、おい……」

いきなりはやては、両手で勇夜の左腕をがっちり掴んできたのである。

「は、はやて……：……：どうした?」

さすがにいきなりなこと、彼女の行為の意図が分からぬまま、当人に問うしかない勇夜。

「——とないんです」

「っ……：……？ なんだって?」

最初は、余りに儂い小声で、何を発したか上手く聞き取れなかった。

小柄で座る格好な彼女は顔を俯かせているので、勇夜からは表情が見えない。

だが、明らかに寒さによる凍えとは違うものと断定できるまでに、小刻みに

震える両腕と彼の手を握る両手が、顔に頼らずともはやての意志を物語り…代弁していた。

「帰りとう…ないんです」

今度のはつきりと明瞭に、はやての沈痛な切願が込められた声が勇夜たちの耳に響いてきた。

帰りたくない……具体的な成り行きは何であれ、彼女の夕方まで一人での外を出歩いてきた理由が何であるか、これではつきりと示された。

「今は……家(うち)に帰りとうないんです……お願いです……お願いです……お願いです……帰らせないで下さい」

悲痛な気持ちを搾りとって発された懇願の言葉を前に、勇夜もフェイトもアルフも、困惑な顔を浮かべる以外に、応じる手立てを持ち合せていなかった。

あれから約一時間半が経ち、空がもう完全に紺色へと変色していた。

夜に応じてありとあらゆる部屋から電灯が点いた海鳴大学病院のメインの出入り口から、勇夜が出てくる。

あの後、フェイト、アルフ、そしてはやては、勇夜の連絡で実は購入していた日本車で迎えに来たリンデイに住まいのマンションに送ってもらい。彼はその足で大学病院へ向かい。石田先生に表現のオブラート込みで先の出来事を報告したのである。

その際、しばらくは自分らのマンションではやてを預けるものの、  
“ご家族”には先生が彼女を預かっていることと、本人が帰る決心をするまでそつとしてほしいと伝えるよう頼んでもおいた。

その方が向こうも安心するだろう……とも言った甲斐もあり、頼ま

れた先生も快く了承してくれた。

「(プレシア……今、はやてはどうしてる?)」

勇夜は念話でプレシアにはやての今の様子を尋ねた。

「娘たちとw○iのカラオケで遊んでいるわ、今はフェイトが『恋の桶狭間』って曲を歌ってる最中)」

「(どう聞いても……それ、演歌だよな? 何でまたそんなチョイスだよ)」

予想斜め上の変化球な返球に、勇夜は苦笑ってしまう。

なにせ異世界人で地球ではイタリア系アメリカ人で通しているフェイトが、日本特有の歌謡曲を歌うのだ。想像するだけですごいインパクトがある。

「(アリスアとはやてちゃんからのノリと勢いでせがまれてね、最初こそあの子恥ずかしがってたけど、結構ノリノリでこぶし利かせて歌ってるわよ、さつきもイイ○コってお酒のCMの歌も熱唱してたわね)」

そのお酒のCMソングも、正確には演歌ではないのだが、日本らしい情緒感溢れる歌である。

「(でさ、あの子から家出について、何か……)」

「(何もよ、はやてちゃんそのことと家族に関わる話は一切答えてくれないの、口を開いてくれるまで、辛抱強く待ってなきやいけないわね)」

「(だな……今からそっちに帰るわ)」

「(気を付けて)」

念話を終えた直後、勇夜は溜め息を吐く。まだ課題が何かと山積しているが、今夜はもうその対策を考える気力は維持すら億劫になるほど残ってそうにない。

素直に白状してしまうと、はやてから懇願を受けたあの時でさえ、彼女が主であってほしくない、まだ願ってしまう自分も心にいた。

だけど……現実という確証を前にしては、無理やりにも納得させるしかない……それだけ、はやてが主だと証明する決定的な証拠をいくつも掘り出してしまったからだ。

さつき石田先生に、家族のことを詳しく聞かしてもらったのだが、

するとどうだ？

彼女が生まれた歳に養子になった義兄の名前は「紅蓮」、オレンジ色の地毛に、ガキ大将風な雰囲気なムードメーカーの少年……物の見事にグレンファイヤーの人間体。

今年同居し始めた面々に関しても、一人は金髪の女の子で、そんな白人風の見た目なのに名前は「久遠」。

他の面々と飼っている犬はヴォルケンリッター各メンバーと同じ名……当然だ、同一人物なんだからな。

シグナム、ヴィータ、シャマルにザファイラ……ヨーロッパ製の車と同名な名前のやつなんてそういない。なぜか一人だけイタリア車で、後はドイツ車という半端な組み合わせには頭をかしげるが、そんなことはどうでもいい。

証拠はもう一つ、自分がロビーで待つてる間に光から、はやてを探してて藁にすがる思いで頼ってきた久遠が、はやてが自分らの家族で魔導書の主だと、認めたそうなのだ。今彼女は高町家で光たちに事情を話しているらしい。はやての体内からコアが消えたトリックも込みだ。

さらにとダメ押しに、はやての車椅子を押そうとして彼女の手に握られた時、こっそりコートに付いていた髪の毛から内一本を回収して、リンクに調べてもらったのだが。

『(マスターが採取した毛髪から、細胞一角からDNAの塩基に至るまで魔力反応が検出されました、細胞組織の構成を見るにこの髪は魔法によって擬似的に再現されたものです、色と長さ、形状から、恐らく…風の癒し手のものかと)』

結果はこの通り。こうまで真実が明確に明らかとなつては、違つかもしれないと、いくら駄々をこねたって無駄、そんなささやかな願いなど捻り潰されるだけだ。割り切るしかない。

勇夜は、止めていたVMAXを駐輪場から出して跨り、フルフェイスタイプのヘルメットを被りエンジンを掛ける。

この事件に隠された真実を明らかにする……その為に、今日まで捜査活動に従事し、こうして明るみにできたというのに、また白状する

と…心境は感慨よりも苦々しさが上回っている。

さつき飲んだブラツクの缶コーヒートの比では無い苦さが、口内を蠢いていた。

しいて理由を一つ上げるなら——勇夜は一度ハンドルから右手を離し、バイザーを開けて掌を見つめる。

「帰りとう………ないん………です」

あの時のはやての様子と声が、記録映像並の明瞭さでフラッシュバックされた。

しいて口の苦味の元を上げるとすれば、ずっと同じ屋根の下でともに暮らしてきた仲で、家族の温もりつてやつをグレンたちや守護騎士に味あわせてくれたはやてがSOSを発して縋ってきたその手を、家族を差し置いて凶らずも自分の手で受け止めてしまったことへの「罪悪感」、とも言うべきか……それを振り払うように、やや強めにバイザーを閉じ、スロットルを引いてVMAXを発進、完全に濃い紺の色合いな夜天となった海鳴の街を、彼は疾走して行った。

自身の部屋がある二階に連なる階段を登るなのは。

彼女の手の上には、丸型のお盆が、その盆の上には藁の籠に入った和菓子に、緑茶の入った湯のみ二つ、ホットミルクのカップ一つだ。ミルクはなのはの分である。

日々修練に明け暮れていた賜物か、苦も無く盆を片手の絶妙なバランスで持ちながら自分の部屋に入る。

「まさか、あのトラック事故の救助者が…勇夜殿だったとは」

「はい、その縁で、八神はやてが主の上位候補に上がったのですよ」

「なんとという因果か…」

「光兄、持って来たよ」

「あ、御苦労さまです」

「久遠さんも緑茶でよかったですか？」

「問題ない、忝いな」

「お砂糖とか……入れなくても……」

「な……なぜそんなものを入れる必要があるのだ？ 緑茶に甘味の組み

合わせは不協和音であろうに」

「にやはは……ですよね〜」

十中八九、砂糖云々は甘党提督の仕業によるものだ。

地球の一部地域ではともかく、疑問顔を浮かべる久遠の日本では至極真つ当なツツコミになのはは笑ってはぐらかし、盆を部屋の中央にあるテーブルに置く。それと差し向かいになる形で、光と久遠はカーペットに腰を下ろしており、なのはは光の横に正座で座り込んだ。

三人は各々手に持った飲み物を一口、喉に流しこむ。

「先程ストレートにものを聞いた身な上に、取り調べそのものになつてしまいますが……」

「気兼ねせぬともよい、私が『被疑者』の一人には違いないのだ」

「では改めてお聞きます、グレンにあなた方とは義理の家族な間柄でもある闇の書の主は、八神はやてでよろしいですね？」

「その通りだ、グレンの方は光殿と同様、11年前にこの街に迷い込み、はやての御両親に保護されてそのまま養子となった」

「いつ頃から、魔導書ははやてちゃんのところに行ったんですか？」

「七年くらい前の、両親が不慮の交通事故で亡くなった直後には、あの本があり、はやての足の麻痺も、その頃から兆候はあったそうだ」

「騎士たちが目覚めたのは――」

「五月の初めごろであったな」

「で、はやてちゃんの足が悪くなった原因は……」

「魔導書がそなたらがリンカーコアと呼ぶ魔力生成器官を浸食し、それが身体機能の支障をきたしていた」

「そして、ヴォルケンリッターの現界が引き金となって、浸食の進行が悪化したと」

「ああ、担当医の石田殿から、臓器の麻痺も時間の問題で……進行が



止まらなければ最悪心不全を起こす危険性もあると宣告を受け、それを止める為に……はやてとの約束で禁忌としていた蒐集を始めた……いきさつを大まかに説明するところだ」

「はやても、グレンも、あなたたちの行為にはご存じなかったのですね」

「左様、蒐集は私たちの独断によるものだ、紅蓮もあの夜でのそなたらとの一戦までは存じていなかった、これだけは断言させてくれ」

高町兄妹からの質問の連投を、久遠は嘘偽りなく、包み隠さず答える。

彼女からの了解も予めとった上で、今この一連の会話は、シルバーライトとレイジングハートが逐一録音していた。

二機が同時に記録しているのは、証拠としての信憑性を高める措置である。

「久遠さん、質問を変えるんだけど、どうして蒐集のお手伝いをしてたあなたが、騎士さんたちに内緒で、光兄たちと会ったんですか？」

「……手短に言うと、その方法ではやてを助けられるかどうか、疑問が沸いたのだ……」

「その切欠はひよつとするとですが——」

光は、シルバーライトから、彼の格納領域に保管していた代物を取り出す。

ライトから放出された光が四角上の物体となり、具現化されたのは一冊の本だった。

「この童謡のお話が関係していますか？」

厚さは比較的薄めなその童謡で絵本な書籍の表紙は、江戸時代の北陸の薬売りの風体をした青年と、巫女服を着て狐の耳と尾が生えている金髪の女性が手を握り合っつて見つめる構図な絵で、上部にふりがな付きで『弥太と久遠』と題名が書かれていた。

実はこの絵本、例の海鳴市の久遠塚の伝承の内容を童謡化したものだ。

「言い伝えとして現代まで語り継がれていたことは存じていたが……童謡となっていたとは……」

「約二十年前にマイナーな出版社が出したもののなのですが、『可能な限り元を忠実になぞった後味の悪く救われないストーリー』が不評で、数年で絶版になったのです、私も昔一度読んだきりだったのですが、巫女姿のあなたと、伝承について調べる内に思い出しまして、家の倉庫から引つ張り出してきました」

なのは兄の概要を聞きながら、速読魔法で一気に絵本を読み終える。

「感想は？」

「今すぐ作文にするのは無理だけど、国語の教科書に載ってた『ごんぎつね』を読んだ時より胸が痛くて、悲しいお話だった……………でも、この本の久遠さんは亡くなってるんだよ、なら……………今ここにいる久遠さんは——」

「その妖狐の娘……………が私だ、今の名ははやてからもらったもので、母が弥太から名付けてもらったのと同じなのは、偶然の産物によるものだよ、嬉しくも……………あつたがな」

絵本にも、その童謡のモデルにもなった言い伝えにも娘の方の久遠が記述どころか存在の欠片もなかったのは、当時の彼女は生まれてから数年で、超極度の人見知りで人間相手には薬売りの青年以外姿を現さなかった為、記録に残らなかったからだ。

当事者の一人でありながら人間の記録に何も記されていないカラクリはこの辺にしておく。

代わりに、絵本のモデルの久遠の体験談が、どう昨日の勇夜たちとの接触到繋がったのかというと、彼女曰く……………重なって見えたそうなのだ。

母が愛した人間を殺やめてしまった後に海鳴市となる地の村人たち。

はやてを助きたい一心に蒐集に明け暮れる騎士たちの姿。

この両者に対して、しいて共通項を一つ、述べるとすれば、『自分を脅かそうとする災いから脱するには、ある方法一つしかない』という考えに囚われてしまっていること。

もし……………騎士たちが我武者羅に突き進む先が、母たちとあの村人と

の間で起きてしまったものと同様、ともすればそれ以上の悲劇へと繋がっていたとすれば……一度脳内に起きた波紋を、家族に下手に悟られるよう抑えつつも、騎士たちの戦う姿を目にする度、不安と悪い予感はいくつも大きくなっていったという。

闇の書そのものの、666頁分の魔力を集めることで封印が完全に解かれるなどといった不可解な性質は、その不安たちの可燃物で燃える火に注がれる油ともなった。

それらの疑念と不安の正体を暴く為の情報を集めるべく、久遠は単身昨日まで勇夜たちを探し、見事に彼らを見つけ出し接触、初日は用心深い姿勢に徹して……そこから段階を踏んで彼らと闇の書の謎を解いて、その謎の自身が自らの不安を的中させるものなら、その材料で騎士たちを説得させる手筈であった。

しかし今日、思わぬアクシデントが起きてしまった。

「はやてちゃんが家出しちゃった……心当たりはないんですか？」

一応、その日は昼まではいつも通りの日常は保たれていた。

最初に「一応」と付け加えたのは、あの一家では、家族の内数名が、家族との約束を破り、理由はどうあれ密かに自らの手を汚す行為を続ける「影」があるからでもあるし、昨夜の激闘は彼らに小さくない影を残したからである。

それでも午前前の時点は、その影を一番知られたくない相手には悟られずに済んだ。

が……午後に入って一変する。

勇夜の推理通り、12時代にはやてと久遠は家から出て、図書館に向かい借りた本を返し、新しく借りる本の見聞をはやてはしていたのだが、13時半を過ぎた辺りから、忽然と姿を消した。

その時子ども形態だった彼女は、人手の無いところで大人形態に変え、光たちに緊急の念話を送るまで、休まず探し続けた。

結果は彼女の独力では、無し得られなかった形となってしまうものの。

「図書館にいた時に、咄嗟に私を振り切るに至る「何か」自体は分かる……だが、どういった流れではやてがそれを……」

久遠は俯いて、指を額に突きつける。騎士たちによるアリバイの網を潜ってはやてがその「何か」を知ってしまった出来事を探っている為。どう頭を探っても、今の時点では掘り出せずに終わった。

「中身が、昨夜私が紅の鉄騎殿に与えた言葉の槍並にシヨツキングだったのは、察せられます」

「ヴィータがか？ 確かに今朝の彼女は空元気ではあった……ただ、それは家族全員にも該当している……か、一体何を——」

質問しようとして、久遠は《言葉の槍》の意味を感づく。

「《正論の刃》って、やつです」

光は静粛と、昨夜のヴィータとの一戦で、「悪魔の仮面」を被り、彼らの行いの先にある未来の可能性を突きつけ、彼女を完膚無きまで追いつめたことを告白した。

淡々と語る声音にはどこか、自らを嘲る声色も感じられる。

彼の言う通り、「正論」は、どんな刃物よりも殺傷力のある刃に、鉛の弾以上に心を貫通させる弾丸となり、人が己と他者を律し、御し、治め、共生する上で必要な「正しさ」は、時として悲劇を生み出す種となってしまう。

善人悪人問わず、誰にも彼にも潜む罠の一つでもあるのだ。

鏡の騎士の告白を、二人はほんの寸刻の間、粛々と聞いていた。

「久遠……さん」

ふとなのはは、久遠へと目の先を移す。

「光殿……そなたはご自身を悪魔だとおっしゃりたいのか？」

目の線が久遠に固定された瞬間に、彼女は口を開いた。

「彼らを苦しめる咎を、無理やり直視させましから、そう呼ばれるのは——」

「呼ばれるべきはむしろ私たちの方だア！」

光の返しの言葉を、悲鳴にも似た絶叫で久遠は掻き消し、握り拳にした両手をテーブルに叩きつける。そのシヨツクで机上の湯のみがカーペットに落ちた。

中の茶は飲み干されていたので、布地に染みを作る事態にはなっていない。

「どう考えても……悪魔に値し、責められるべきは『私たち』だあ……だって……そうではないか、家族を救いたい願いの為に……はやての想いを……願いを、踏みにじった……誰かにとつての友や家族でもある者たちを、それこそ光殿の妹君らをお理不尽の牙で傷つけた……幼子を守ろうとする母でもある獣たちに、引導すら渡した……挙句、紅蓮を旧友と親族との板挟みにして苦しませて……病魔の呪いから助けようとしたはやてにすら……」

代わりに、むせび泣く彼女の目じりから滴り落ちる雫によって、机の上は泪でできた水たまりを作り出していた。

「恨めしい」

弥太を殺し、母を狂い死にさせ、自らの住む大地を焦土にさせたあの時代の人間たち以上に……己自身が恨めしくて仕方ない。

もしも時間の壁を越えられる術があるのなら、今すぐ宣告を受けたあの日の夜に行つて、その時の騎士たちがこれから行う所業を止めて、『自分が戒めになる』などとご高説を唱える己を言い聞かせてやりたかった。

はやては確かに命の危機に瀕している。彼女を助けられる方法があるのなら、それに賭けたい気持ちは打ち消したくない。

問題は選んでしまった手段。

なぜ、思い至れなかったのか？ 自分らが選択した手段が、よしんば彼女の命を死の谷底に落ちる前に繋ぎとめられたとしても、引き換えとなるものの大きさを。

今日の出来事は、引き換えとして差し出された贖いの一つであり、騎士たちにとつては、身体的痛みより深く奥に刻まれる傷そのもの。「非情な仮面など被らなくともいい、いつそのことはつきりと断じてくれ……私は、彼らを誑かし悪魔にしたてあげた女狐だ……」

これまでずっと表出させぬよう、内に抑えてきたものをが、その今日起きたことが発端となり、ここに来てこらえきれず涙となり流れ、一滴が、震える左の握り拳の甲に落ちる。

直後、その手に触れるものがあつた。

はつとして久遠は自らの泣き顔を上げる。

「久遠さん……」

なのはの小さな両手が、久遠の手を包み込んでいたのだ。

「光兄の言葉は胸にくるけど正しくて、はやてちゃんを助けたい願いでたくさんの人や動物さんを傷つけてしまって、それを『ひどい』って思っちゃう人もたくさんいる、それくらいなら、私にも分かります……でも——」

一呼吸の間を置いて、なのはは久遠の目を見つめながら言葉を紡ぐ。

「でも……だからかもしれない、私はあなたたちを、酷いとか、悪魔とか、そんな言葉で攻めたくありません、あなたとグレンさんに、騎士さんたちも、辛くて……痛くて……悲しい思いをしてるのも、分かるから」

その目は、かつてフェイトに「友達になりたいんだ」と伝えた時と同じ、少しでも、相手が抱える重さを、少しでも和らげようと、その気持ちを分け合おうとする瞳そのものであった。

「なのははこういう子です、たとえ理由も話さず暴力を振るってきた相手に対しても、その人を理解しようとする努力と、手を差し伸べることを忘れない」

なのはの言葉に座る格好ながら心が立ち尽くしていた久遠に、光は補足の言葉を念話で説きながら、妹の手に包まれた彼女の手に自らの手を添え。

「私が辛辣に口にした贖罪の未来は、今となってはどう足掻いても避けられない運命でしょう……けれど、戦友のご家族を、それ以上の絶望の悲劇（みらい）な奈落へは、絶対に落とさせません」

静かさの奥に、明瞭に強さも感じさせる口調で、彼も決意を述べた。

「……………」

暖かい。二人の手の微熱が心の臓にまで伝ってくる感覚を覚えた。

どうして、自分たちが強い理不尽の被害者である彼らは……恨みつらみ等、清濁の『濁』に相当する存在こそ否定せずとも、自分にかこうして語りかけられるのか？ 今はどうしてもその理由を、己の思考からは推し量れずにいた。

それでも、手を差し伸べてくれた血は繋がらなくとも兄妹なこの二方の厚意は、ちゃんと分かる。

証拠に、目じりにがまた潤みだし、言葉にできない想いは頬を伝って嗚咽と一緒に、溢れだしてくるのであった。

それから一分ほど時間が経った矢先。

『失礼しますが、ユーノ殿から通信が入っています』

「にや!? どうしよう、久遠さん……」

「私は構わぬぞ、それと、私のことは、そなたが一番呼びやすいと思う名で、呼んでくれないか?」

「はい………じゃあ、〴〵ちゃん〴〵……でいいですか」

「ああ、喜んで」

『マスター、一度間を置いてこちらから連絡し直しますか?』

「あ、今繋いで」

『了解』

レイジングハートは宙に、ユーノ立体モニターを出現させる。

『すみません、何やらお取り込み中だったみたいで』

「お気づかないなく、例の朗報の件ですか?」

『はい、〴〵の書と付けられてしまった魔導書〴〵のことで報告があります、久遠……さんでしたよね? あなたにもお聞かせしたいのですが』

「心得た、私も…… 彼女ら〴〵すら忘れてしまった真実を、この目で知りたい」

『では、月面のナオトさんのところへ来て下さい』

とユーノが言い終えると同時に通信は終わり、レイジングハートはモニターを切った。

「ユーノとやらはさらつと言ったが、ここから月までどうやって行く

のだ？」

「直ぐに着きますから、くうちゃんは目を瞑ってて」

なのはがそう前置きを述べると、光は服の内側からミラージュアイズを取り出し、両腕を水平に重ね。

「ミラー！・スパーク！」

アイズの前で手をクロスさせる。

ペンダントから発される光は、なのはと久遠ごと包み込み、部屋の窓ガラスへと飛び、一瞬の内に煌めきは彼らごと消え去った。

つづく



## STAGE 40 — 闇に覆われし夜天

月面で停船させつつ、周囲の光景に擬態させたジャンバード。

対闇の書捜査本部の一つに宛がわれ、ミーティングルームとして使われているブリッジでは、チームに加わる者たちが一同に会していた。

勇夜、光、ナオトラウルティメイトフォースゼロ。

フェイト、なのは、ユーノ、アルフ、そして久遠。

クロノやエイミイら、アースラ組は、整備が最終段階へと移行し、本局の整備ドッグに停泊しているアースラのブリッジにおり、プレシアたち他の面々は地上のマンションで待機している恰好。

そしてはやてと言えば、勇夜たちがジャンバードに移動した直後、急に睡魔に見舞われて、寢室の一つで眠りに着いたとのことである。

「集まってもらったのは、ご存じの通り、『闇の書』についてです、まず、ウルトラマンノアが勇夜さんへ提供した情報の通り、前述の名は俗称で、正式名称は『夜天の魔導書』」

「それが、あの本の本当の名前……なのだな？」

夜天の魔導書、通称夜天の書。

無限書庫での史料探索で見つけし、闇の書の本当の名。

久遠の問いに、ナオトは頷いて肯定する。

「そうだ、元々は健全な用途で作られた『旅道具』と呼べる代物と言ってもいい」

「旅道具、というのは？」

「元々この魔導書は、あらゆる次元世界の魔法の知識、情報を集め研究する為に作られた、主のお供として旅する収集蓄積タイプの大型ストレージデバイスなんです」

「旅の相棒でもあり、次元の海を渡る船でもあり、航海日誌でもあるつて、わけか」

「そして、この魔導書を開発したのが——」

3Dモニターに、壮年の男の肖像画が表示された。

細長な馬顔寄りの風貌で、学者らしい知的さが感じられるが、親しみも持てる素朴さも垣間見えた。

地球でいうとヨーロッパ系の顔つきでありながら、どこことなく、白黒時代の黒澤映画の常連だった俳優と似通っている。

彼の名は、クリストファー・ライゼンシュタイン。

夜天の書の生みの親で、当時のベルカ王朝専属の科学者であったそうだ。

ユーノが今説明した通り、彼が作り上げた夜天の書は様々な次元の魔法の情報を記録する厚めの帳面であり、本自体がリンクことウルティメイトイージスと同様、次元の壁を超える転移能力を備えている。

ヴォルケンリッターたちは、そんな書と使い手たる主を守護し、時に長旅における話相手役も請け負うお供といった身であった。

「騎士たちの総称が、『ヴォルケンリッター』であることも、夜天の書と闇の書が同一のものと示す格好の材料ですね」

「光兄、それってどういう？」

「ドイツ語で『Wolken—ヴォルケン』は雲、『Ritter—リッター』はナイト、騎士という意味です」

発音、単語に文法語法もドイツ語と似ているベルカ語も、同じ意味合いなので、『夜天を守りし雲の騎士』となる。書の本名も空に関連するものだと推測はされていたが、なるほど——夜空という名の本と持ち主を守りし雲海たる騎士——中々に凝った組み合わせとネーミングである。

「けどユーノ君、その『健全な本』が、どうして『闇の書』なんて良いイメージが浮かばない名前を付けられちゃったの？」

「記録によると、歴代の主たちの内誰かが、書のシステムに手を加えようとして、自己進化機能を備えた自動防衛プログラムを狂わせてしまったようなんだ」

その自動防衛運用システムのプログラムの名は——『ナハトヴァール』

「他の者に渡ってしまった時の対策として付加させたのでしょうか」

ど、無理やりな改変でシステムの根幹にバグを生み、魔導書のあらゆる機能を狂わせてしまったんです」

「その一つが、ノアの言ってた無限再生能力ってやつか：大方収集した魔法のデータを損失させない為のバックアップだったんだろうけどよ……」

「元々不測の事態への対処法であつた再生機関と時空転移機能、そして防衛プログラム、ナハトヴァールは魔導書そのものを存続させる為なれば、担い手たる主の意志すら無視し、『防護』を大義名分に、主を捨て石同然に魔力を根こそぎ使つて破壊を無差別に行い、次元転生を繰り返す今の『第一級危険指定ロストログア』に変貌してしまった」

最早「改悪」と称しても過言ではない多くの改変により生じた邪悪で多大なバグと、システムエラーを積み重ねたことで、元々魔導師或いは魔力を使う術の使い手の肉体をスキャンし、魔法の情報を読み取るものだった魔導の記録は、リンカーコアから直接魔力ごと搾取、篡奪する蒐集機能に変わり、さらに666ページ分の蒐集を完了させると、主の肉体と融合することで、想像を絶する力を齎す大量破壊兵器へと変貌を遂げた。

ヴォルケンリッターたちも、主を心身ともに支える旅のお供から、蒐集過程の終了まで外敵を駆逐する時間稼ぎの役へと、なり果ててしまった。

彼らの騎士としての矜持は、紛れも無く本物ではあつた……が、それすらも汚されてしまったと言えよう。

よつて夜天の書は、最高で約10年の周期で次元干渉レベルの災害を引き起こす怪物と化し、繰り返される惨劇と悪行によって、『闇の書』という怨嗟の籠もつた蔑称を付けられてしまった。

「改変の中で特に酷いのは主に対する性質の変化だ、蒐集行為を怠つたまま一定期間を過ぎると、ナハトヴァールは主のリンカーコアを浸食し、精神または肉体を蝕ませ、弱体化させることも判明した」

「精神？ はやてには特に変わった様子はなかったが……」

「彼女自身の魔力資質で、精神への汚染はレジストされていたのかもしれません、だからナハトヴァールはその分彼女の肉体の浸食に重点

を置いたのかと」

「具体的な症状は、『肉体の神経系統の……麻痺』、地球での通常の医療機器では原因の特定はできないので、カルテには『不治の病』だと記録するしかない」

奇しくも、はやてが患っている足の病と全く同じ症状。

敢えて今までの違いを明記するならば、原因不明の症状から、ロス・トロギアによる外的要因によるものと今日判明したことだろう。

ナオトは宙に、さらに3Dモニターを複数出現させた。

彼はその内の、ドーム状な大型の光に呑みこまれていく都市を写した静止画に指差す。

「管理局のデータベースに保管されていた魔力サーチャーの記録画像で、これは蒐集が完成した直後を映したものだ」

「では、そちらの銀色の髪をした女性は？」

光は別の画面に表示された画素の粗いデジタル写真に写されている、腰まで伸びた銀髪、血の色に似た鮮やかな瞳、投身から見て背は約170近くある女性について尋ねた。

「魔導書の管制を司るマスタープログラムとも言うべきプログラム生命体です、木に喩えると、ヴォルケンリッターが枝の一端ならば、彼女は幹と根」

「この船に喩えるならば、私に相当する存在だ」

全体像をかりうじて捉えた荒々しい一枚であったが、画の粗さ越しでも、写真の主が人間離れした美貌を持っているのは把握できた。

「どうだ久遠？ シグナムたちからこいつについて聞いてないか？」

「騎士たちの話から姿形を思い描いてみたのだが……特徴は一致している、この女子（おなご）が管制人格で相違ない、彼女でもそのナハトとやらは制御できないのか？」

「現在ではほぼ不可能となっている、封印が完全に解かれてから一定時間経過すると、書の全機能がナハトヴァールに掌握されてしまうのも明らかになった」

「悪辣な摂政によって実権を握られ、王家はお飾りとなった王制国家、とも言えますね」

「じゃあ、はやてちゃんより前に主に選ばれた人たちは、書が完成した後にはみんな——」

「彼らの末路に関しては………ここにいる各々のご想像にお任せする」

と、普段以上に固いトーン答えたナオトの代わりに、噛み砕いて説明すると。

蒐集を行わなければ、選ばれた書の担い手自身を蝕み。

完成してしまえば、書にかき集めた魔力と、担い手自身の魔力と命を貪りつくして、書を“守る名目”で生物無機物、星も次元も問わず周囲の存在を破壊していく。

目的の為の手段の内の最悪の一手である筈なのに、ナハトヴァールは完全にそれを“目的化”してしまっている。

そうして破壊の限りを尽くした後、次の主と言う名の生贄を求めて、また次の世界へと転生する。

こうした悲劇が、過去に何度繰り返されてしまえば、本来の名は忘れ去られ、『闇の書』、『呪われた魔導書』などと俗称、蔑称ばかりが広く渡ってしまったのも頷けた。

悲しいことに、その魔導書は、人の悪しき所業を身に受け呪いを蓄えながら、時と次元を駆け続けていたのである。

生みの親にとつても、嘆きに心を染めさせる浮世の………現実。

『この上さらに厄介なのは、完成前の機能停止が、困難なことだ』

通信モニター越しに、本日はリンディの指示でユーノたちのサポートに加わっていたクロノが苦虫を噛む面持ちで呟いた。

「一時的な活動停止の方法も見つかってねえのか？」

「ええ、今のところは………」

ナハトヴァールを主とした改悪で構造が捻じれに捻じれてしまった現在の夜天の書は、魔導書自身が真の主たと認証した人間でなければ、システムの管理に操作、プログラムの再改変はできない仕様となっていた。

外部からのハッキング作業による停止、封印もできない相談、無理にそんなことをすれば、眠っていたナハトヴァールが起動、過剰反応

し、主を本体に捕り込み、転生して逃亡してしまうからだ。

これが管理局から『完全封印』は困難と見なされるまでになつてしまった原因であり、七年前の護送事故も、書を分析するべくアクセスを試みた際、猛獣たるナハトを覚醒させて起きてしまった惨劇であった。

「くう……ちゃん」

なのはは、魔力製の現代服を着込む大人姿の久遠に目を向けながら名を呼ぶ。

この場にいる者たちは何かしら、ある魔導書に秘められた真実に対し、心に影を指し込ませている。

この場が室内であるが故、空間を支配する沈鬱な空気は、ブリッジにいる一同に息苦しさまで錯覚させていた。

特に、フェイトたち年少組には魔導書のバックに存在した重い事実、貌を暗くさせてしまっている。

幼い少女たちには、ショッキング過ぎる話だった。

「真実を知る心構えはしていたさ……その為に私は、この場にいるのだから……」

それよりもさらに、久遠に落とし込まれた影が一番、巨大だと言ってもいい。

なぜなら……はつきり示されてしまったからだ。

真実が鋭利な刃となって、明確に残酷な一閃を振るったからだ。

自分たちが愛する幼き家族を救おうと行ってきた行為が、むしろその家族により凶悪な運命を強いて、人間としての尊厳を完膚無きまで破壊する死を与える結果を齎そうとしていた罫であった事実。

前述の彼女の言葉は、その事実に対し、どうにか気を保とうとしてふと口から洩れた独白とも言えた。

「それに、私のようにまだこうしてどうにか受け止められるだけまだいい……問題は——」

「あいつらに……どう、伝えるか、だよな」

「あの様子でじゃ四人とも……ナハトヴァールのこと、忘れてるよね」

「そう考えた方が妥当でしょう………でなければ彼らが、自ら進んで『蔑称』を使ったりはしない」

久遠は提示しようとした問題の内容を、勇夜、フェイト、光の順番で代弁された。

グレンファイヤーについては、どうにかなる。

久遠はグレンに前もって、魔導書の真実を得る目的で勇夜たちと密かに接触する旨を伝えてある。チームでも屈指のムードメーカーな彼でも影を落としかねない重い真実だが、それを受容できるだけの落ち着きは持ち合せている筈だ。

一番難儀となるのは、やはり当人とも言えるヴォルケンリッターたち。

二度に渡って彼らと相まみえた勇夜たちは、汲み取っている……今の守護騎士たちは、今日判明した真実が、自らの記憶から抜け落ちていたことを、それがナハトヴァールによる故意によるものか、強引な改変による副次的産物によるものかは別にして、『忘れている』のは確かなのだ。

騎士たちが現界してからの生活において、『ナハトヴァール』はともかく、『夜天』なんて単語すらも、実を言えば後者は全くではないのだが、ほとんど彼らの口から発されていない。

敢えて、災厄を重ねてきた我が身ゆえに、蔑称の方を使っている線もあり得たが、久遠がいくら記憶を辿って見ても、騎士たちが『闇の書』と呼ぶ時のニュアンスは、そういう呼び方で当然だという響きであった。

なら、自分たちが改変され、書の真の名を消し去られているのを全く自覚していないのは間違いない。

自身の実状を知っているなら、心を持っているなら、恩情を抱く主を破滅に誘う行為など、する筈がない。

しかし記憶に穴がある彼らは、皮肉にも自らの性質で、蒐集を強いられる悪循環に陥っている。進む先は奈落の底、たとえ立ち止まっても、少しづつ踏みしめている大地は綻びていき、崩れてゆく、どっちにしろ今の彼らには地獄の諸行そのもの。

いや……単に改変を覚えていないだけならまだ良いのだ。

「一度心を意固地にさせちゃうと、誰の言葉も入ってこなくなっちゃうんだよね……昔の私みたいに」

フェイトが、かつての自身と、現状の守護騎士たちと重ね合わせて呟く。

最も難儀なのは、今の騎士たちがPT事件時のフェイトと同等以上に他人からの言葉を聞き入れられるだけの余裕が無いということだ。

リンカーコアから蒐集した魔力を全てのページに刻み、魔導書の封印の眠りを覚まさせば、自分たちによって蝕まれるはやての病は治癒できる——とそう信じて疑っておらず、“人間は殺さない”などの枷を設けつつも、行為を何かしら妨害し阻む者たちには徹底抗戦の構えで魔導の力を振るう。

もしはやてが今どこにいるのかを知れば、悲壮なる覚悟で、勇夜なりの表現で言う“殴り込み”を敢行するは明白。

そんな精神状態の彼らに書の実態を伝えようとしても、信じてくれる可能性の方が低いのが実状だった。

「ザフィーラなら聞き受ける余地は残っていよう、後の三人は……まだ望みが薄い」

「“人間”としちゃ、あいつらがアタシより年下だからかい？ そういうアタシも人の子じゃないけど」

「ご名答、セキュリティプログラムでしかなかった彼女らが心を持つてから、まだ一年も経っておらんのだ」

さらに騎士たちに感情が芽生え、魔導書が一種“自身の肉体”にも等しいことも彼らの頑なさを強めてしまっている。人間性、主観の会得と、それによるはやてへの親愛の情よって、皮肉にも客観的冷静な視点を持つてずにいるのだ。

『自分の体は、自分がよく知っている』

ドラマでよく耳にしそうな言葉が、彼らの口から出されるのもあり得ないとは……言い切れない。

「私とユーノ君に使ったみたいなのに、テレパシー……みたいな方法、できませんか？」



「ダメだ、あれはお相手さんが『聞く耳』を持ってねえと」

「念動波を込めた拳撃による交信も、ほぼ不可能ですね」

彼女が提示したのは、以前勇夜が彼女たちにフェイトの出生を伝える際に使ったテレパシーの応用による情報伝達術——サイコトランスマット。

瞬時に情報を相手に伝えられるので、ヴォルケンリッターと対面した時にこの術で聞く耳持たずな彼らに使えばよかったのでは？ と考える者もいるかもしれないが、これも決して万能ではない。

自分が伝えたい情報と、相手が知りたい情報がある程度一致し、かつ相手が耳を傾ける意志を持たなければ為し得ない技なのだ。

勇夜の言う『聞く耳』を持たなければ、テレパスを受信した相手は脳に不快で強いノイズしか響いてこない。

それは、勇夜―ゼロと光―ミラーナイトが行った《肉体言語》も然り。

たとえ守護騎士との二度目の戦闘の時点で、夜天の魔導書やナハトヴァールの詳細を掴めていたとしても、是が非でも蒐集を完遂させてようとしている彼らを前では、サイコトランスミッドでも言葉でも届かなかつたろう。

脳に直接情報を送る性質ゆえ、余りに強引にでも伝達させると、精神崩壊による廃人化させてしまう恐れもある。

セブン——諸星弾譲りの超能力を使いこなす勇夜ら超人たちの経験とセンスあればこそその技でもあるのだ。

「情報がさらに集まり次第、君には騎士の交渉役を担ってもらいたいのだが」

「勿論それは引き受けよう、私も災いの回避の努力を惜しむ気はない」

「ありがとな」

「私としても、根気よく夜天の書を調べてくれたそなたらには感謝している」

久遠は前もって謝意を勇夜たちに示した上で——

「ただな……まだ、腑に落ちないところがある」

——今までも、ボールが解かれた今となっても、彼女の脳裏にこび

り付く謎を投げかけた。

その霧にも喻えられる謎は、ある程度魔導書の実態が明るみにされたことで、より濃くなったと言ってもいい。

「どの点がですか？」

「大量の魔力を蓄積できる魔導書の性能を、戦闘に利用できないかなどと思いついた何者かが用途と構造(カラクリ)を弄ったのは分かる、ならばなぜ……蒐集から完成まで、封印を解く過程をいくつも設けられたのだ？」

提示された謎の概要に、一同は目を見開いてハツとする。

「そうだよな……なんでそんなしち面倒くさい仕様なんだ？」

勇夜は右手の指を口元に添えながら疑念を呟いた。

そもそもシステムの使い様を無理やり変えようとする時点で、改変者たちの思考など、たかがしれているものだが、それでも解せぬ疑問。ナハトヴァールの過剰かつ残虐さも極まる防護で守られているにも拘わらず、なぜ嚴重に、幾重にも手順を踏む封印の措置が取られているのだろうか？

改変後にしても、まして前にしても、必要性が疑われる機能である。特に改変前の資料本な《夜天の書》に対し、システムに制限を付けるメリットがどこにあると言うのだろうか？

ナハトにしても、ここまで凶暴化させる気は、このプログラムを組み込んで書を制御下に置きたい改変者たちにもなかった筈である。

『謎解きは手がかりをもう少し集めてからにして、今日は捜査の進展を踏まえて、今後の方針を纏めよう』

謎の溝へとド坪に嵌るところを、クロノが上手く阻止し、彼の言う通り捜査チーム一同の方針の整齊を測る方へと題目を転換させる。

ユーノとナオトは引き続き、夜天の書の記録が書かれた史料探索。

アースラチームもコアを持つ生物が住む無人惑星の監視の続行。

勇夜、光たちは、第三勢力の調査及び、怪獣出現の際の迎撃行動(ナオト、ゲン含む)。

なのはたちは基本待機ながら、学業に差し障りの無い程度にスクライア一族のサポーターとともに史料探索の補助。

と、ポジションが組み分けられた。

「アースラはいつ出られるんだ？」

『今日には最終メンテナンスが終わる予定だったんだけど、『追加兵装』でもう数日延びちゃって、提督も今…その申請願を出してる最中なの』  
「おい、それって……………まさか」

どう聞いても曰くありげなエイミイの声音を前に、勇夜はその意味を気づいたらしく、女性に負けじと麗しい彼の顔が焦りに染まり。

『対艦反応消滅砲——《アルカンシエル》』

その兵装の固有名が彼女の口から発された途端。

「ちよつと待て！ あんなもん地上に向けて撃てるわけねえだろ！

海鳴を地図から消してえのか!？」

『マスター、気をお静めになつて下さい』

「そうだよ勇夜、何もそこまで……………」

切羽詰まった表情と口調で、彼は思わず問いただしていた。

《アルカンシエル》

その兵器の子細を知っている者も知らぬ者も、平時のクールさと、根の気さくさから一変した勇夜の様子にうろたえるしかない。

「勇夜どの、まるで、戦略兵器のような物言いだが」

「戦略兵器そのものですよ、アルカンシエルは、勇夜さんが狼狽するのにも無理ありません……………最低でも海鳴市を都市はおろか、陸地ごと消し去ってしまう大型魔導兵器です」

「……………」

ユーノの説明はオブラートに包んだものだったが、やはりこの場にいる者たちに大きな衝撃を与え、閉口させてしまう。

周りへの配慮で彼は詳しいスペックこそ話さなかったものの、彼の言う通りアルカンシエルは勇夜があれ程の感情を荒げるのも領ける次元艦船専用兵器である。

高密度に圧縮された魔力の大型弾道を発射するのだが、着弾時に対象から約百数十キロメートルの範囲の“空間そのもの”を捻じ曲げ、消滅させてしまう破壊力を有しているからだ。

核兵器の放射能汚染ように、二次的災害は起こさない性質も備える

が、それを踏まえても一次的被害は、地球の大量破壊兵器を凌いでいる代物。

その強力さゆえ、使用は第一級ロストログアに限られ、艦船を所有する提督以上の階級を持ち、専用のライセンスを取得した者しか取り扱いを許されず、船に搭載するにも申請書を提出して認可を受けるのが必須となっている。

何よりこの兵器は、七年前の事故で、クライド・ハラオウンが艦長を務めていた次元航行船エスティアを葬った過去もある。

ウルトラマンである勇夜も、戦略兵器クラス……どころかそれ以上の戦闘能力を有しているが……むしろ自身が強大な力の所有者であることと、前述のハラオウン親子と兵器との因縁もあって、あそこまで過敏に反応してしまったのだ。

『僕たちも使う事態にならぬよう事件を終息させたいが、上からの世知辛いお達しもあってね』

「『プロパガンダ』……って奴か」

『市民に本腰でこの事件に当たっていると証明する材料でもあるからね、その捉え方で間違いはないさ』

さつきよりは落ち着いた勇夜だが、アルカンシエル搭載の裏にある事情を読み取った彼は眉に皺をよせて苦々しい思いを吐き出す。

何しろ、今日クラナガンでは、『闇の書被害者の会』という名称の団体が会見を開き、早急に魔導書の封印、または破壊を求める声明も出し、その日のニュース番組のメインに取り上げられたくらいだ。

『闇の書』には、想像以上に暗く重いバックボーンが存在している証しの一つとも言えた。

明らかにになったその背景で、重々しい空気が流れ出した直後……ジャンバードのブリッジに緊急通信のアラームが鳴り響いた。

連絡をしてきたのはアリシアだった。

慌てに慌てた様子で、〃とにかく戻って〃との報せに、勇夜たちはジャンバードの転送ポートで、マンシヨンの屋内のリビングに転移する。

「師匠、何が？」

「それがな……」

待っていたゲンの導きで、ある寝室へと続く扉に足を運ぶと、開いたドアから見えたのは、ベッドの両端でそれぞれ腰を下ろしているアリシアとプレシア、二人に見守られる形で、夢にうなされて横たわっているはやての姿であった。

つづく。

## STAGE 4 | NIGHTMARE

「母さん、姉さん、これって……」

「はやてちゃん……どうしちゃったんですか？」

フェイトとなのはが、少女たちでも分かるはやてに起きている事態をプレシアたちに投げかけた。

「それが……さっぱりなの」

「さつきまでは、すやすやと眠っていたのだけれど……」

「魔導書による浸食を除けば、これといった異常は見当たらないのだが……」

テスタロッサ親子とゲンが今言ったように、数十分前、子どもにしても早すぎる睡眠に見舞われたはやては、それこそ快眠そのものな、アリシアたちが使う寝室で穏やかに床に着いていたのだが、数分前から急に息が乱れ、額は汗でてかり、その寝汗でフェイトから借用したボタン型パジャマは濡れ、穏和な顔も苦痛に苛まれている状態となっていた。

「ナオト」

「分かっている」

勇夜の呼びかけと目配せで瞬時に彼の指示内容を汲み取ったナオトは、はやての下へと寄り、彼女の額の真上に右の掌を添えた。

その瞬間、ナオトの手から、エメラルド鉱石のエネルギーに酷似する緑がかった蛍光色の薄明光線がはやての頭部を照らす。魔法プログラム製の人間体時でもナオト——ジャンは、本来の肉体であるスターコルベットのスーパーコンピュータを使用可能で、それで彼女の肉体を検査して異変の因を探っているのだ。

「彼女の意識は現在、夢を体験できるレム睡眠の段階に入っているのだが、脳波が通常とは異なる波形を示している、恐らくは何らかの外的要因で干渉を受けている状態だろう」

「何者かに、夢を見せられているってことですか？」

「そうなるな」

夢……はやての様子から見て悪夢の類なのは明確だ。

なら、今その悪夢を見せる程にこの少女に何かしら影響を直接与えられる存在はやはり、「闇の書」という呪いを宿す——「夜天の魔導書」。

一気にそこへと結論を導き出した勇夜は、同時に即決する。

「勇夜、何をする気なの？」

詳細まで読み取れずとも、勇夜の顔つきで「何かをする」決心をしたことを読み取ったフェイトはその内容について発問した。

フェイトにつられる形で、この場にいる一同も勇夜に視線を向ける。

「はやての夢の中に入るんだよ」

視線の群れに応える形で、勇夜はこれから行うことを端的に述べた。

「にや？ そんなことできるんですか？」

「ウルトラマンでも個人差はあるが、弟子ほどのテレパシの使い手なら、夢への進入は造作ない」

大雑把に話した勇夜の代わりに説明すると、テレパシの念波動をレム睡眠時のはやての脳内送り、その念波の糸を一種の道筋にして自らの意識をはやてが見ている夢の世界に入り込ませようとしているのである。

身体のサイズ、容姿を変えられ、太陽エネルギーの問題を除けば、宇宙、地上、水中、ミクロ化による生物の体内、さらには肉体を数値化してネットの仮想空間でも活動でき、巨人態の際にはテレパシで会話をを行うウルトラ一族ならではの能力、と言えた。

「今はやてに夢を見せるだけの繋がりがあるのは夜天の書だ、もしかしたら夢の中に、書に関係してる手掛かりがあるかもしれない」

勇夜はその力で、ヴォルケンリッターが忘れてしまっている過去を探ろうとしているのである。

夢の内部が、魔導書そのものの記憶かどうかは、定かではない。

しかし、中身によっては騎士たちを説得できるだけの情報も掴めるかもしれないのだ。

頑なな彼らに、はやてをむしろ追い込ませている蒐集行為を止める

には、勇夜たちが提示する情報が真実だと信じさせるだけの「確認」が必要以上に、目の前に現れたチャンスに賭けてみる手はある。

よしんば上手く行けばの話だが、銀髪の美女の姿をした夜天の書の管制人格とも接触できる公算もあった。

「でもさ、下手に入って、ナハトを起こしちゃったら……」

「慎重に臨めばその危険性からの回避も可だ、ナハトにとつて脅威なのは、書を存続を脅かそうとする者と、内部のシステムを変えようとする者だ、昨日の戦闘よりは吊り橋の強度は良い筈、渡る価値はある」  
「まだ完成に至っていない上に、無理に魔導書をどうこうしようなどとする素ぶりを見せなければ、ナハトヴァールは破壊すべき障害とは見なさないだろう。」

それに今回は、無理にアクセスして書の内部に続く扉をこじ開けるのではなく、元から開いている道を辿る恰好でもある。

ナオトの発言通り、今にして思えば昨日の戦闘による蒐集の阻止よりは比較的安全策だった。

下手に封印を解く駒な騎士を武力行使で追いつめ、拘束しようとするれば、ナハトが痺れを切らして活動開始し、事態を悪化させかねなかった。

ちと反則な物言いだが、別の世界の海鳴では完成直前とは言え、白の砲撃魔導師が紅の鉄騎を追い詰めた時、ナハトを覚醒してしまった事実があったりする。

結果として、ゼットンたちの妨害によって最悪なアクシデントが免れたということ。今日の出来事たちを合わせても、塞翁が馬……つて奴だ。

「現実(ここ)での時間なら、大体2、30秒の旅だ、俺の「頭」が録画した夢の映像の記録とバックアップは頼んだぞリンク」

『お任せ下さい、マスター』

相棒からの了解の言葉を受け、勇夜ははやての直ぐ横へと座り、念波動含めたエネルギーを一番発しやすい部位である右の手を、彼女の額に据え、意識を彼女の脳と繋げようとした時だった。

「待って」



制する言葉が勇夜の耳へと入り込む。

彼は声の主であるフェイトに目を向けた。そして間もなく、正確には「フェイトたち」であることも悟る。

「ごめん勇夜、お願いがあるの」

「私たちも、連れてってくれませんか？」

二人の魔法少女が、自分も夢の世界に行きたいと懇願してきたのである。

最初勇夜は彼女らの頼みを、気持ちはちゃんと受け取りつつ断りを入れるつもりであった……が、彼女たちの「目」を見て、それも思い止まらせる。

今の二人の瞳は、前に見た時よりも、どこか……いや確実に。

なのはなら、フェイトの出生を知ってもなお『腹を括れるか』と投げかけたあの時。

フェイトなら、プレシアからの宣告で一度闇の底に落ちても、それでも這い上がってきたあの時。

その当時見た眼よりも力強さが増し、活力が溢れている気さえしたのだ。

師匠に厳しく扱われたことで、どうも一皮剥けた様である。

とは言え、二人の要望を応えるには、小さくない壁も存在するのがたんこぶだった。

「気持ちは分かるんだが、流石に俺も何人も連れて行くのは……」

勇夜一人でなら、人の意識の内部へと潜りこめることができる。だが彼でも、複数の人間を連れての潜行は難しかった。経験がないのも、彼を躊躇わせ、踏み出せずに足踏みさせてしまう。

「助け舟が必要なら、私が出そう」

そこへ久遠が、今彼女が言った通り、助け舟を出してきた。

「私には、生ける者が見る夢を、複数の者の脳に写す能力がある、勇夜殿のテレパシーと併用すれば、夢の共有体験もできよう」

「そうか、よし」

久遠が明かしたその能力は、『夢移し』という名称、彼女の母から授けられた魔力による妖術の一つで、元は自身はテリトリーとしていた

領域に人が迂闊に侵入してこぬよう、踏み入れてしまった人間に自らが編み上げたイメージを見せて、追いつかぬのに使っていたらしい。

肉食獣としては臆病な狐の生態が反映された怪しげなる異能の力と言えよう。

何はともあれ、「壁」の問題はどうかできた。

夢を複数人で見るメリットもある。

自分が見たものの信憑性を高められる為、例えば幽霊を見たのが、一人より数人の方が、俄然真実味が感じられるようになる。

「二人とも、行く前に聞いておくぞ」

けど二人を連れて行く前に、彼女らの熱意も理解できるからこそ、確認をしておかなければならない。

「見ての通り、はやてが見てる夢は決して良い代物じゃない、もし魔導書の記憶を見てるとしたら、そいつはおぞましい悪夢だぞ、この間テレビでやってたステイブ・スピルバーグの戦争映画の比じゃね」  
人食いザメの猛威、少年と異星人の交流、バイオテクノロジーで現代に蘇った恐竜の映画などを作ってきた映画監督の戦争映画を引き合いに出して、勇夜はフェイトたちに覚悟が求められることを明示する。

その映画の冒頭で描かれるノルマンディー上陸作戦の様子は、あの当時の阿鼻叫喚で生々しい地獄絵図をできるだけリアルに描かれている。

ほぼノーカットで地上波放送されたのが奇跡と言えるくらいだ。

「多分、蒐集された人間たちの悲鳴を、何人……どころじゃね、数えきれねえほどの声を聞くことになるかもしれねえぞ、それでも……はやての夢の中に入りたいか？」

「うん、できるなら、私も魔導書の管制人格に会って、話しをしてみたいの」

「はやてちゃん、くうちちゃん、グレンさんに騎士さんたちが苦しんでるのを、どう思ってるのか、直接聞きたいんです」

勇夜からの投げ掛けに、少しも動じることなく、瞳の確かな強さを保たせたまま二人は、思いの丈を込めて返し、改めて勇夜は二人が似

た者同士の女の子だと実感した。

普段は自己主張は余りなくせに、ここぞで決めて決めたことには梃子でも動かさず、揺るがずに、貫こうとする。

時に迷ったり、挫折したりしても、そこで完全に折れたりせず……周囲の力を借りながらも、立ち上げられる強さは、この子たちにもあると、目を見ただけで強い確信が持てて、綻びそうになった。照れ隠ししがちな自分の癖で、顔の裏に引っ込んではいたけれど。

まあでも、自分ばかりが譲歩して、実のところ夕方から沈み気味だった気分が持ち直されていく感覚を知覚されるのも何なので――

「分かったよ、でも条件付きだけど、まずきつ過ぎてもう限界だと思つたら我慢せず正直に言ってくれ、それともう一人お目付け役で――光、付き合えるか？」

「無論です、丁度願ひ出るつもりでしたよ」

光も了承してくれた。

遙かな時の流れに刻まれてしまった……悲しみと怨嗟と呪いの記憶。はやてが見てるのはきつと、本にすれば重い厚みの中の一頁でしか無い。

だけどまず、その一端を受け止められなければ、あの家族を救う僅かな光明さえ掴みとれないと、そんな気もした。

改めて、生半可な覚悟では「彼ら」と向き合えないぞ、と己を戒め、気を極限にまで引き締める。

「なのは、気を付けて」

「フェイトも……」

「体に命があるってことは凄く儲けものなんだから」

「うん」

「四人とも、危ないと思つたら、直ぐに戻ってきなさい」

「気を抜くな、短時間だが現実（こちら）は任せてくれ」

「何があつても私たちが彼女たちを守り抜く、グレンのご家族にも会えるよう願っているぞ」

「ああ、みんな、手を繋いでくれ、肩の力も抜いて、リラックスしてな」  
勇夜、フェイト、なのは、光、久遠。この順で、五人は円を描いて

両の手を繋ぎ合せ、一同に深呼吸を促せる勇夜は、右手を再びはやての額に添い、久遠は左手を彼の手の上に置き重ねる。

「準備はできたな？」

前置きの問いに、フェイトたちは黙然と頷く。

「行くぜ」

勇夜は瞼を覆わせる刹那に、テレパシーの波動できた道を、はやての夢へと繋ぎ合せ、彼らの意識は深遠なる世界へと身を投じて行った。

勇夜からの合図が端となり、寝室の蛍光灯の光と、瞼に流れる血液で微かに赤味がかつていた闇が、完全に混じりつ気のない漆黒のものとなった。

まだ意識が現実にあるのか？ それとも夢の渦中へと進行しているのか？

判別ができない最中、視界からは中心に位置する地点から光点が現れ、目測では指だけで掴めそうなサイズから数倍に高跳びして膨れ上がり、点から棒状で、赤、緑、黄、ピンク、橙、乳白、純白と多色な光の水流の無数のシャワーが、降り注いでくる。

中心の光点の大きさは止まらず大きくなっていく。

光が自分へと向かっているのか、あるいは自分が光へと向かっているのか。

それも定かにならぬまま、闇をほとんど打ち払うまでに過大化した光は、自身を完全に呑みこんだ。

光が闇を完全に覆い尽くした直後、直ぐに純白の視界は暗闇に変わったが、直ぐにそれは血の赤味がある閉ざされた瞼による闇だと気づく。

さらに、自分の足が大地に付き立っている感覚、その次にやや強めだが直立できないほどではない風量の大气の流れを知覚した。

目を閉じたままだった少女——フェイトは、恐る恐る、ゆっくりと瞼を上を開かせていく。

彼女の瞳が捉えた光景は、緑色の広大な絨毯の大地だった。

ところどころ木も二、三本程度は見え、途中枯れ野原になっているのか、褐色の岩場がいくつかそびえ立っている。

空を見上げると、灰色の雲たちで青空は完全に地上からは些細な隙間すら残さず隠れてしまっていた。

雲たちの動きは早く、風の強さも相まって今にも天然のシャワーを降らせる用意があるように感じられる。

「みんな無事に入れたようだな」

空模様を見ていたフェイトの耳に、エコーを帯びた、しかし彼女には聞き慣れた艶味のある声が入り込む。

視線を空から地平線に下ろし、背後に振り返ると、ウルトラマンゼロ、ミラーナイトことリヒト、なのはの三人がそこにいた。

ゼロとリヒトが巨人態の姿なのは、この世界では彼らにとつての“本来の姿”が反映される仕様となっているからであろう。

夢共有のサポートをしてくれた久遠も、この世界なら妖弧の姿で現れる筈だ。

一応、自分たちがこの世界とどう関われるのか確かめる為、地面に散乱してる石粒を掴もうとした……のだが、フェイトの手が石をすり抜けてしまった。

幽霊同然と化したその手よく見ると、輪郭が光の線で覆われ、やや白味を帯びていた。体を見渡すと、全体が白味と光の輪郭を纏っている。

他の三人も同様であった。

フェイトたちがこの世界では“異物”である証しだと言える。

変な感じだ。物には触れられないのに、足が大地に接触し、風が身に当たる感覚はあるという奇妙極まる状態だからである。

かと言って、肌が外気の状態を捉えられない様を想像したら、それだけで小さくない不安が込み上げ、痛覚が機能しているだけでも良しと結論付けることにした。

「フェイト、何ちよくちよくこつちを見てんだよ？」

「ふえ？」

と、ゼロからの問い掛けで、フェイトは無意識に、彼の方にはばかり目を向いていたと気がつく。

そういえば、勇夜——ゼロがウルトラマンの姿でいるのをこの目で見るのは、そこそこ久しかった。

柔な鍛え方はしていない——と言っただけあり、無駄を排してバランス良く引き締まった綺麗な筋肉だ。かの怪鳥音が特徴的なアクションスターに匹敵するスタイルの良さ。

今を除いて、ウルトラマンゼロとしての彼の勇姿を最後に見たのは

“待たせたな、フェイト”

烈火の将——シグナムの猛攻で追いつめられたところを、間一髪助けてもらって、お姫様抱っこ………された時。

その模様を再生した効力で、フェイトの頬がまたも急上昇して、反射的にゼロたちから背を向けた。

「フェイトちゃん……大丈夫？」

「う……うん、ど……どうにか」

「(ひよつとして、久しぶりにウルトラマンになった勇夜さん見てときめいちゃった?)」

こくこくと頷くフェイト。

「(にやはは、凶星みたいだね)」

内容によつては念話を使つての気遣い込みな親友からの言葉に、フェイトはよく見ないとYESの領きだとは分からないくらいの微細な動きでコックリと首を縦に振った。

どうか今この恋煩いの発作は数秒程度で治まったが、人の夢の中に入つてまで何自分はゼロにときめいてしまつていいのか？ 少々自虐的な心情となるフェイト。あの微かな間の間に、『腕の筋肉は固かつたけど、何だかほつとする心地よさを感じた』なんてのを考えてさえいた。

幸いなのは、ゼロたち男性陣は他の方角に視線を向けてフェイトの醜態を目にはせず彼女のテンパリは助長される事態に至らず、また前よりは多少彼女自身の乙女心が制御できた点である。

「それより、ここが本当に魔導書の記憶なら、どこかに騎士たちがいる筈だよね？」

「うん、今光兄たちが探してるんだけど、どう？ 光兄、ゼロさん」

二人は、今彼女らに背中を見せる恰好となつているゼロとリヒトに目を移し、なのはは進展はあったか？ という意味合いの質問を投げかけた。

が、尋ねられたゼロたちは答えなかった。

彼らの下に真つ向から吹いてくる向かい風が流れる先の方へと、目

線も体も固定させたまま、微動だにしていない。

「あいつらなら、多分あの向こうだ」

ゼロは、目には見えぬ視線の筋の遙か先の方角に向けて指を差す。この時、なのはとフェイトには分からなかったが、常人よりも機敏となつている二人の五感は、はつきりと捉えていた。

向かい風が微かに運んでくる——多数の人の血の匂い。

それと、ここからは細かな音量ながら、耳に響いてくる……様々な音が入り混じり形成された——戦場の轟音。

最初の地点から真正面の向かい風が吹いてくる方向に、一行は飛行で向かっていた。

4人とも現実世界で飛行技術のコツと経験は得ているので、特に違和感も戸惑いもなく順調に曇天の直ぐ下の空を翔け抜けている。

「あ、あれって?」

「城塞都市、というやつです」

眼下の地平は、暫く自然の産物たる光景しか見えなかったが、やがてようやく人の手による人の住処と営みの集合体、街が彼らの目に写った。

今リヒトが口にした通り、その集合体は城塞都市の体を為していた。

言葉通り、四方を城の城壁に守られた都市だ。



遠目からだが、傍目には中世時代のヨーロッパの建築形式とよく似ている。

外部からの侵略者から街と城を防護すべくそびえ立つ分厚い城壁の外では――

「戦争……やっってるんだよね?」

「ああ…」

ゼロとフェイトの遣り取りでも分かる通り、今まさに戦闘が行われていた。

少女たちには遠目過ぎて、せいぜい多数の兵士たちが戦っている姿と、ところどころ起きる爆発ぐらいしか判別できないが、悲痛さが漏れ出すゼロの声と、表情を作り様がないのに、人間なら顔を顰めているのが読みとれてしまう鉄面の横顔から、地上では地獄絵図の有様であると、理解できた。

四人と同じ様に、過去の記憶の世界のどこかにいるかもしれないやてを探するのは、ゼロとリヒトに任せて、自分たちはここで待っていた方がいいのかもしれない。

直感で、吐き気すら催される光景が待っていると、体も心に訴え掛けている。

「覚悟はできてるか? 二人とも」

「今ならまだ、引き返せますよ」

改めてゼロたちが選択肢を提示してくる。

この先にある戦場を、己が目で確かめるか、否かを。

「準備は……できてる」

「一緒に、行かせて……」

それでも二人は、戦場を直に見ることを決めた。

この場で止まるなら、もうこの『闇の書事件』に係わるのはやめた方がいいと……書の記憶の一場面すら直視できなければ、騎士たちに想いを伝えるべきじゃない、とさえ考えていた。

少女たちの覚悟を受け取ったゼロたちは、それ以上問うことはせず、地上へと高度を下げて行く。

それに付いて行く形で、フェイトたちもゆつくりと下りていった。

城塞を守る側の兵士たちは、必死に自らの国を侵攻されまいと、必死に侵略者たちと、戦鬪を繰り広げている………と、言いたいのだが、この実状をご覧になって、どれほどの人がまだこれを《戦鬪》だと言える者が出てくるか？

きつと、誰もがこう思ってしまうであろう。

こんな惨状は、断じて《戦鬪》などとは呼べない——と。

城の正門が、破壊と言う形で破られた。

侵攻者の一人が、先陣に立って敵兵たちに斬り込んでいく。

曲線で構成されながらも無骨な銀の甲冑を着込み、大型の片刃の剣を携えし八重桜の長髪の女剣士。

「紫電——一閃！」

烈火の将シグナムだ。

彼女は地面すれすれを超低空飛行し踏み込みながら、紫がかった炎を纏いし大剣——レヴァンティンを振るう。

一太刀、二太刀、三太刀、と連続して繰り出される剣撃は兵士たちの身を、兜、鎧、盾、槍などの得物ごと簡単に両断していく。

一瞬で命が消え、切断された亡骸の群れが、大地に散乱する。

焼けただれた切断面から火が広がり、既に肉と骨の塊となった物

“が無慈悲に業火に焼きつくされていく。

かろうじて剣閃の直撃を免れた者も、瞬く間に全身に燃え広がった炎によって、珍妙だが苦痛に満ちた舞を踊り、苦悶の絶叫を上げた。これでもまだ地獄の一片でしかない。

“もう一人”が四足で地を掛け、唸り声を上げて飛びかかる毎に元から長く伸びた前足の爪を魔力でリーチと切れ味を増した刃で兵を切り刻み、首や四肢を飛び散らせ、鋭敏で凶悪なる犬歯が喉笛を噛み切り、血がスプリンクラー状に吹き荒れ、彼の青味の毛並みと、爪と歯が大量の返り血に染まる。

完全に狼の姿となった盾の守護獣——ザフィーラの猛攻。

荒ぶる獣の闘争本能の激流を操作しながら、突き刺される錯覚を与える殺気を放出して兵を襲うその姿は、彼にも肉食獣の血を受け継いでいることを痛感させる。

彼の怒りの咆哮に理性を刈り取られながらも、生体凶器の餌食にならぬよう兵たちは後退しつつ、刃先が発光する槍を構え、一斉に魔力弾を発射した。

ザフィーラの居た地点から爆発が上がる。

規模からして、生身の人間なら体の主の特定すら困難させるほどに陰惨な死体と化すが——そんな惨い死を受けたのは、守護獣ではなく、少しでも一糸を報いようとした兵士たち。

爆発地点から対象へと向かって大地から生えてきた白く光る結晶の先端が、次々と兵たちを串刺しにした。

煙と粉塵が晴れた先には、拳を大地に突き刺し佇む、獣人形態に変身したザフィーラがいた。盾の守護獣と名乗れるだけあり、あの程度の魔力弾では傷一つ付いていない。

かの結晶の正体は、便宜上は《拘束魔法》となっている彼の技——鋼の軛。

拘束魔法が『動きを封じる』代物なら、間違っていない。大地から伸びる結晶の針で、十字架の磔よろしく強引に封じ込めるのだから。守護獣はさらに、背後から彼を撃とうとした九人の兵士を振り向きざまに、右、左、右の順で拳を突き出し、甲から放たれた衝撃波が相

手の魔力弾が発射される前に兵たちに着弾、今の波動の衝撃で鎧は破碎し、彼らの骨も音を立ててズタズタに砕かれた。

ザフィーラお得意の、防御の魔法の応用、手の周りに小振りだが堅固な障壁を形成、拳撃の勢いと一緒に甲から魔力を放出として飛ばし、障壁は重い砲弾となって相手の体の内部をボロボロにしたのである。

彼の魔の盾は、同朋の騎士への攻撃も防御する。

「飛竜——」

カートリッジをロードして排莖し、鞘に収められたレヴァンティンを上段に構え、ベルカ式魔法陣を敷いてこれから大技を放とうとするシグナムの周りには彼お手製の結界が張られ、魔力弾の横薙ぎの雨から発射までの隙を突かれぬようにしていた。

「——閃！」

抜刀と同時に刀身はシュランゲフォルムの蛇腹刃となり、極太の魔力炎を乗せて撃ち出される。

骨は蛇腹刃、肉は炎でできた大型の竜の濁流は、兵群を一気に呑みこんだ。

呑みこまれた兵たちは、業火に身を完膚なきまで焼かれ、切り刻まれ、人の形を為した炭となって散っていった。

城壁の上に降りてその光景をこの目で見ていたなのはとフエイトは絶句する。

体は小刻みに震え、唇も開いたまま振動を繰り返す。

瞬きするのすら忘れるくらい、自身が見る地獄の前に、意識体でなければ瞳が乾きを訴えるサインを出すまでに、長いこと目が開かれたまま硬直していた。

ゼロたちがともすればくどいくらいに渋っていたのも領ける。

少女たちの価値観のものさしでも、こう思わずにはいらなかった。

これは戦闘ではない、闘争とも呼べない。

一方的な殺戮だ……虐殺だ。

プログラム生命体で、ジエノサイダーと化した騎士によるものとは言え、最早人為による災禍だ。

同時に二人は、この地獄の顕現に否が応にも思い知らされる。

もし……明確な戦意と殺意を以て、非殺傷を解き、全力で戦ったとしたら。

十発以上の魔力スフィアを一斉に撃ち出したら。

雷気を帯びた魔力の鎌で、斬り付けたら。

デイバインバスターの奔流を浴びせたら。

サンダーフォールの雷流を、幾度も浴びせたら。

既に大量の残留魔力が散布しているこの場で、もし手加減抜きに“星の光”を使ってしまったら。

今起きてる災厄を糧にイメージされた映像は、想像するだけでもおぞまし過ぎる阿鼻叫喚の地獄絵図が脳内にできあがっていた。

体の中に、使い手そのものを、“大量破壊兵器”に変える器官がある。

その使い方次第では、下手をすれば、自分たちは魔法でこの惨事以上の惨劇を生み出せるという事実を痛感させられ、二人は戦慄するばかりだ。

心身は悲鳴を上げている。

心臓は強く握られる感触に晒されて苦しかった。

自他含めた“魔導”を持つ者への恐怖も浸食していく。

それでもなお二人は、背けることなく、地獄をこの目に焼き付けていた。

どんな戦いも、このような惨禍の集合体であると、そして自分らもまたこの地獄を生み出せる力を有していると前から自覚していたぜ口たちも、しばし何の言葉が浮かばずに黙して眺めている。

彼らも目にする戦場では、かろうじて息があり、命がまだ肉体に





制官でもあったわけである。

塔の屋上の床に落ちたその本型カートリッジを、飛び移ってきたシグナムがレヴァンティンで突き刺し、強制的に機能停止させた。

「主戦力たる一軍と、その将としてこの程度か……百年程度の時でベルカの騎士も地に落ちたな」

「これもまた、時の流れだシグナム」

「愚痴を零しても仕方ないわよ、近頃のベルカは戦自体が稀なもの、もう騎士の時代ではないのかもね」

「これではコアの蒐集も心苦しい、弱者を蹂躪して奪うのは性に合わん」

「だがこの度の主もまた、我々に求めるのは……頁の蒐集のみだ」

五感が常人より機敏な体質である為、ゼロたちには蒐集の一部始終も明瞭に見え、彼らの抑揚の薄い会話も聞きとれていた。

「先程久遠から聞いたのですが、彼らが蒐集を決断した日、自ら魔導書の糧となったと話してくれました」

「何だど？」

ようやく二次元人特有の口のないリヒトの顔から言葉が漏れ、それを聞いたゼロが驚愕して彼に強面の鉄面な顔を向けた。

「彼女によれば、蒐集中はまるで、侍の『切腹』を体験させられたそうです、それも十文字にかつ捌かれる感覚だったと……」

「的を得てるよ、そいつは……今の兵士のリアクション見てるとな」  
平安末期の日本より独自の習俗として存在し、戦国時代から武士の名誉ある死に方として広まった自殺方法——切腹。

この行為にも、作法というものが存在する。

その一つが、横一文字、縦一字の順で腹を切り裂く『十文字』。

人の体は脆弱だが、かといってそう簡単に自傷して死ぬるほど柔でもなく、実際そこまでやり遂げた武士はそういなかったという。

当然彼らは、実際に自ら腹を切った経験はない、たとえこの二方の巨人が日本刀型の武器を得物としていたとしても……ではあるのだが、蒐集による兵たちの悲鳴や断末魔を聞いていると、それぐらいの激痛が押し寄せてくると思えてならなかった。



違いを提示するなら、死を覚悟し自ら刃を突き立てた侍たちに対し、魔力を篡奪された彼らは……痛みを耐える心構えすら、準備できずに……死んだ。

これが、騎士たちが繰り返して強いられてきた……汚名を被る業の、一幕。

「効率第一、早く蒐集しないと、また逆鱗に触れるわよ」

「ああ、ところでヴィータは？」

戦場の凄惨さに注目する余り、失念していた騎士の一人たる少女の存在を、シグナムの一言でようやくゼロたちは意識した。

丁度その時、夢の潜入者側から左手の方向に、爆音が上がる。

四人はそちらに目を向け、ゼロは爆煙が飛び交う地点を、千里眼で目をズームさせ、透視で煙を払った。

「シエア！」

「はっ——ゼロ？」

「ゼロ!?!」

「ゼロさん!?!」

透視で目に入った者を認識した時、ゼロは思わずその場から斜線状に降下していった。

あの爆音は、ヴィータの遠距離攻撃魔法——シユワルベフリーゲンによる魔力付加され飛ばされた鉄球が地面に着弾して起きた爆発によるもの。

この時の鉄球は、魔力で擬似再現したものでなく、デバイスの格納領域に予め保管していた本物。しかも爆発の瞬間、砕け散った鉄の破片が爆薬成形弾の役割を果たして襲い来る。

その上爆発自体、地球製の手榴弾より遥かに威力も範囲も広い。

魔力の恩恵を与えてくれた本型カートリッジの破壊により、ほとんどが実質生身となった兵たちが近距離で、そんな爆発を受けたらどう

なるか？

「腕があ……腕がああああああ……！！」

「マ マあああああ……！！」

それは被害を諸に受け、戦意に涙どころか理性すら決壊した兵の叫びが示している。

中には……体の内部の器官が露わとなっている者さえいた。

傍から見ればまだ生きて、絶叫するだけの力が残っているのが奇跡とさえ考えてしまう。

当事者のことを思えば、むしろ今ので死んだ方が良いとも言えてしまうだが……なぜなら彼らがまだ息があるのは、コアを宿しているからだ。

「うっとおしい……」

胸を締め付けそうな兵の叫びに。

「うっとおしいんだよてめえらー！」

惨状を齎した本人は、逆上の怒りを隠そうともせず吐き捨て。

「戦場でピーピー喚くくらいならー！」

グラーファイゼンを引き摺りながら一人に近づき――

「最初から――」

魔導の鉄槌を振り上げ。

「あかんヴィータ！ やめて！ やめてええええ！」

叩きつけようとする紅の鉄騎に、必死に呼びかける者がいた。

それこそ、この悪夢を見ている主――八神はやてだ。

歳に似合わず聡いところがある彼女なら、この光景が『過去の記憶』であることくらい察しがついている。

が、だとしても、『家族』がこの瞬間にも生ける者に手を掛けようする様を前に、感情が理屈を凌駕し、必死に声が枯れるくらいの声量で叫んでいた。

ゼロが飛び立ったのは、フェイトたちと違い……何の覚悟も心構えする準備すらできず悪夢に放り込まれた彼女から、これから起きる出来事を直視させぬ為。





己の心にささくれを起す者には、敵には容赦無く、味方であつても棘のあり過ぎる態度で応じる、まるで獵犬のような獯猛さ。

当時の彼女を見ていたゼロには他人のような気がしなかった。

前々からどこか自分と彼女は似ているところがあると思つていたが、一時期の心の荒み様は完全に鏡写しだ。

そんな自分を見ていると錯覚させる彼女が、どうしてここまで苛立ち、怒りを撒き散らしているのかは、当人でも分かつていないだろう。

いずれにしても、地獄を生み出した本人たちは、この時の主人の理不尽な命によつて……侵攻を行ったのだと、戦闘と会話の一部始終だけで把握できた。

「はやて……」

そして……腕の中にいる現在の主であるはやてを見る。

さつきと打つて変わつて安らかに眠つていた。夢の中で眠るといふのは、些か奇妙な状況だが瞼を閉じて意識も封じている今の彼女の様子を表現するには、先の言葉が一番適切だ。

ゼロの筋肉で塗り固めたトリコロールの両腕を寢床代わりに、床に付くはやての歳相応より小柄な体は……悲しいくらいに軽かった。

顔も知らない……でもその顔を今すぐ一発かましたくもなる当時の主のエゴが引き金となつたこの殺戮を、間近で見えていたのも少なからず影響している。

夢に入る前に、仲間の存在のありがたみを再認識していなかったら、もつと心が痛みで沈んでいたかもしれない。

なぜだ？

なぜ……この子なんだと？

血を通わせた両親とは死ぬまで永遠に会えず、立つて歩く生活すらできない現実に向き合つて暮らして、仲間にとつては血縁がなくなつたって大事な家族である彼女に、どうして……どうして「運命」はこんな「十字架」を背負わせたのだ？

顔を上げるゼロ、その目に映るは無数の死屍累々。安らかに死を受容することすら許されなかつた者たちの亡骸。今にもボロボロに朽ちたその肉体から、怨霊となつた魂が一斉に現れそうだ。

もう体が物言わない彼らにだって、家族がいた、友がいた、守りたいという気持ちと、その原動力となる大事な人たちがいたのも確かなのに。

なぜ……総称に“守護”という言葉を付けられたあいつらが、守るから程遠い……ただ奪うだけの戦闘マシンとして酷使される血溜まりの海を渡るループを何度も苦汁し、心が芽生えた今でも災いを呼び起こす“十字架”を抱えなきゃならないんだ？

ライゼンシユタイン博士は、まだ見ぬ未知の次元と、その世界にある魔法への純粋な探究心で魔導書を作ったというのに、なんで彼に生み出されたこいつらがこんな悪名を呼ぶ殺戮を科されなきゃならないんだ？

自分にとつての“大事な存在”のお陰で、軽減はされていたが、それでも嘆かずにはいられない、不条理に怒りの火を灯さずにはいられない。

戦いはどう言い繕っても、どんな論理を言い並べても、結局現実はこのなのだから、いちいちそれに心痛めては身がモタナイ——と諦観を促す者もいるだろう。

その方が楽かもしれない……現に魔導書に宿る生命体たちは、苛立ちを外に発散して保ってきた一人を除けば、そうやって生きてきたのだ。

だけど、そうはいかない。

自分は戦士だ……でも同時にウルトラマンなんだ。心の性質を麻痺させて、何も感じられない存在になり果てるわけには行かない。戦う覚悟は身に刻めど、それでも“感じられる心”を捨てることはできないんだ。

脳内に邪悪な笑い声が響き渡る。

もしも……そいつを捨ててしまったら、失ってしまったなら、自分の未来の可能性の一つでもあった“もう一人のあいつ”になっってしまう。

そう己を言い聞かせていた最中、異変は起きる。

周りの景色が、突如白味が増していく。

雑にデジタルカメラの明度が変わえられるが如く、ゼロの視界が極度に明るくなっていき、やがて白一色とホワイトアウトした。

白銀一色に染められた世界は、段々と明度を落としていく。

適切な光量となったことで、今自分がいる場所を視界が脳に伝えてくる。

はやては今でもゼロの腕の中にいる。

様々な暗色が混ざり合った暗めの空間、なのに微かに明りが感じられるのは、足を踏みしめる海にも見える模様をした大地が、光っているからであった。

二次元世界にある「鏡の星」の湖の水面を彷彿とさせる幻想的な光景。

辺りを見渡すと、リヒト、なのは、そしてフェイトも、その水面の上立っていた。

全員、こちらに飛ばされた……というよりは、感じからして投影された過去の記憶の映像が、解除されたと解釈すべきか？

「ゼロ……ここって、どこなんだろ？」

フェイトがこの空間の詳細について問いかけてきた。

「魔導書の中つてのは、何となく分かるんだが………つ、誰だ？」

「よろしければ、姿を見せて頂きますか？」

状況から空間の正体を漠然とながら推測していたゼロとリヒトは、突如感覚が捉えた気配を発すが姿が見えない何者かに声を掛ける。

問いに応える形で、ゼロの視線の先の位置に大量の小粒の光が集まり、段々粒子は人の形を為していく。

そして一瞬の閃光の後、「彼女」が姿を現した。

「あなたは……」

と、フェイトが呟く。

ゼロたち四人の前に現れた女性、それは紛れもなくあの管制人格――マスタープログラム。

ジャンバードのブリッジで見たデジタルフォトは、画像の粗さで大まかな全体像しか捉えられなかったが、こうして直接肉眼で見ると。

「き、きれえ……」

四人の心情を、なのはが言葉にする。

美しい、そうとしか言いようのない美しさだ。

外見年齢では二十歳間近ほどの顔は、肌の艶、頬の膨れ具合、目と鼻と口の配置など、恐ろしいまでに整った容貌。

色が血のような深紅で、常人より虹彩が余り光を反射しない瞳を宿す目は吊りあがっているが、きつい印象を与えるゼロやシグナムと違い、むしろ静謐さを放ち、銀色の長髪は見ているだけで、触るとすりと滑る感触が伝わり、足場から発される淡い光が髪を一層美しく輝かせる。

女性にはやや高め of 背丈な体格は、二の腕も両脚もシミ一つ存在せず、ほっそりと引き締まっていながら柔らかな肉感も同居し、胸の乳房も大きく実られている。

これだけ男を惑わせ、女性にも羨望の念を抱かせる色香ある肉体を持ち、それを助長させる黒のノースリーブと丈の短すぎるスカート、片足だけサブカル用語で言うところの“絶対領域”を形成するハイニーソという組み合わせの格好ながら、彼女から発される清楚で清澄で神秘的なオーラが、上手くそれらを中和させていた。

人間離れた美貌はともかく、佇まいはおしとやかな一昔前の麗人と言えよう。

「あの……あなたが、『闇の書』さん……ですよね？」

確認の為に、なのはが投げ掛けた問いに対し。

「そう……呼んでもらっても構わない、私は魔導書の管制プログラムであるから」

銀髪の管制人格は、少し歯切れの悪さを見せながらそう投げ返す。

外見に違わず、声もまた綺麗だと表せた。

諭えるなら、穏やかな河川の、ゆったりとした水流のせせらぎ、と言える。



そんな透き通った声から紡がれる言葉の音色は、淡々としたものだったが、どこか物悲しさも感じられた。

ここで、なぜなのはが本名でなく、通り名の方で呼んだのかと言うと、城塞都市へ向かう最中に、もし今の状況となった場合、ナハトの影響の考慮して、今日明らかになった「事実」はできるだけ伏せると打ち合せていたのである。

「ならどうして、はやてにあんな家族が人を殺してる夢なんか見せたの？」

次にフェイトが彼女に尋ねた。

怒り、と言えるほどでもないがやや語気が強まっている。こうきつく発してしまうのも無理はない。

ロストロギアの異相体やヴォルケンリッター、それと怪獣たちとの相対で、ある程度死線は潜り、「本物の戦場」を目の当たりすることになると、ゼロたちに前もって忠告され、覚悟の準備も整えた上で目にしたフェイトたちに対して、家族は地球人の物差しからは人外の存在であることと、魔力資質と障害を抱える以外は、はやては普通の地球人の少女である。

境遇はともあれ、はやては同じ屋根の下で暮らしてきた者たちが戦場でひたすら人を殺し尽くす模様を、何の心も準備もできぬままいきなり見せられたのだから。

「主はやてに騎士たちの過去を見せてしまったのは、私の至らなさが原因だ、すまないと思っっている、本来ならあれは蒐集と第二段階の覚醒を終え、担い手が魔導書の真の主になられた時、「我ら」の真実を知って頂く為にお見せするものであったのだが……」

「はやてが無意識にフライングして、あんたら過去の記憶を覗いてしまった……ってわけか？」

ゼロからの補足に、管制人格は頷いて肯定した。

はやての資質の高さは、マスタープログラムな彼女の予想を大幅に上回ったらしく、それゆえはやては意図せずして魔導書にアクセスし、いくつもの閉ざされた扉を開けて行く内にここまで潜行してしまっただけのことだ。

「ごめんなさい……私、ついカツとなっちゃって」

「先程も申ししたが、これは私の至らなさで起きたこと、気にしなくていい」

ことの次第を知って、フェイトが詫びを入れた直後、一同が居る空間の色合いが変色して変質し始めた。

いきなり起きた異変に困惑するゼロたちは、首を絶えず動かしている。

様々な色が混ざって流動し、明度の急激な変化で点滅を繰り返す空間は、やがてどこかの建築物の内部へと形を変えた。

ドームと半円で構成された東ローマ帝国時代のビザンティン様式に似たデザインな建物は、どうやら宮廷の王座の間のようなのだ。

そこには王座に座る女性と、王であるらしい彼女に屈んで頭を下げるヴォルケンリッターの姿があった。

「こちらの記憶は、もう随分と昔のものだ、この時の主は、惑星ベルカに点在する一国家の女性領主だったな」

件の映像の再生は、一度起動すると暫く自動で再生される仕様らしい。

「ヴォルケンリッター、ただ今戻りました、本日の成果は西の城を一つを攻め落とし」

「蒐集頁は五四頁、これで現在の総頁数は三一六頁となりました」  
「遅い……遅いわー!」

「はっ」  
「『闇の書』に選ばれた私には……絶対たる力を得る権利がある」

「はい」  
もうこの時期から既に内部のシステムは改悪され、名称も『闇の書』と化していたようだ。

主たる女性は、顔が青白く不健康で、重度の麻薬中毒に陥ったような痛々しさと不気味さがあった。

その様相を見るに、ナハトヴァールは蒐集を少しでも早く進めるべく、主の肉体、または精神を浸食する性質が事実であると、この過

去は証明していた。

元はそれなりに美人であつたようだが、ナハトからの精神汚染で、注視しなければその美貌の面影の一片すら判別できないくらい変容してしまっている。

「神にも等しい闇の書、一刻も早く私を『真の主』にし、その力をこの手に齎すのよ」

「心得ております」

丁度一戦を終えて帰還し、国家元首でもある当時の主に謁見する騎士たち。

鎧はかなり血の痕、砂や煤で汚れており、一目で城を落城させるまでに激戦が繰り広げられたと想像がついたが、主は彼らに労いの言葉一つ送らず、むしろペースが遅いと攻め立てていた。

ゼロたちが最初に見た時代の夢よりも無感情で人間味が希薄なシグナムとシャマルは、淡々と応じるばかりで、今すぐもう一つ城を落とし、兵から魔力を蒐集しろと命じられても、顔色を一切変えず了承しそうな雰囲気だ。

また空間が揺らぎ、歪み、変質し出して映像が別の時間に切り替わる。

次に空間が投影した映像は、地下に位置する室内のようだ。

床面積はそれなりに広く、直径は15 m近い。

四方を、長方形の石のブロックが円筒状に何メートル積み重ねられており、天井付近に僅かに正方形に切り取られた部分から光が差し込み、かろうじて視覚を機能させる明りとなっているが、薄暗いと言える雀の涙な明るさ。

外は猛吹雪に晒されているのか、隙間から光に混じって白銀の水晶の群れが度々強風と風音に乗って入り込んで来た。

「明朝には出発する、それまでに回復しておけ」

「ヴィータ、こつちへいらっしやい、寒いでしょう？」

「いらねえ、こんぐらい一人で寝れる」

そこにいた当時の騎士たちの姿。

「ちよつと待ってよ……何これ？」

「これが騎士さんたちの『部屋』なんですか？」

「この時の主は、そうだったな」

「この時」の彼らを目の当たりにして、四人は愕然としていた。

どう見ても石で形成された屋内は、『牢獄』と呼ぶ方が相応しい場所だったからだ。

ここには騎士たちと壁たる石、嚴重に鍵が掛かった扉。他に目に見えるものと言えば、じめじめとぬかるんだ床、ところどころ黄緑に変色した石にこびり付いている汚れやコケ。

外は極寒の世界にも拘わらず、火といった暖をとれる物はない。

彼らの服装も、各人によって差異はあれど、管制人格のものに似る袖なしの黒い薄着一着しか着込んでいなかった。

「仕方がなかったのだ、彼ら騎士の異能の力は、人々に無用な恐怖を植え付けてしまう、戦闘以外はこうして人目につかぬところに閉じ込める他になかった」

「だけどー」

騎士の戦闘能力が、強大な恐怖の情を人々に与えてしまうのは、納得せざるを得ない。

現にフェイトたちは、先程の殺戮を目にした時、傍目からは何の躊躇いもなくあれ程の不条理な暴力を震える彼らに対し、『怖い』という感情が心に波紋を起こしていた。

彼らだけでなく、資質に恵まれ過ぎた魔導の力を宿す自分自身に対しても、同じ気持ちを抱かされた。

恵まれている自分たちでさえこの有様、何の力も持たない者からは、どんなに人の姿をしていても『怪物』扱いされてもおかしくない——と、理屈では理解できている。

けど、だとしてもこの仕打ちは酷いにも程があるではないか。

ほぼ人と同じ身体構造をしているのなら、食物による体力の補給も彼らには必要な筈だ。

こんな牢屋に閉じ込められているところから見て、碌に食事も与えられていないだろう。体力も無駄に消費できないから、体の周りに魔力フィールドを張って寒さから身を守ることさえできない。

鳥肌が立ち、震えている様子から「寒さ」を知覚し、それにひたすら耐えているのは確か。

事の良し悪しはともかくとして、曲りなりにも「主」の願いを必死に叶えようと力を尽くしている者たちに、なんでこんなにも残酷になれる？

圧倒的な魔導の力と技を持っているからか？ それを何の躊躇もなく殺し合いに振るえるからなのか？

理由はどっちにしても、少女たちは理解に苦しんでいた。

「異能の力」を持つ騎士たちに恐怖を感じるのは分かる、だがだからといって彼らの力を正当化の言い訳にしてこんな所業を行える人間たちの方が恐ろしいと、より強力な恐怖の寒気が彼女らの背中を過ぎっていた。

その後も、過去の記憶という名の立体映像が次々と空間に表示されていく。

いくら時代が移ろっても、彼らに強いられた運命はほとんど変わらなかった。

ナハトヴアールによって心身を狂わされたその時代ごとの主に、非人道的な扱いを受け、休む間もなく蒐集の為に戦線に駆り出され、己が魔導の力で地獄を何度も地上に出現させ、人々からは恐れられ、蔑まれ、時には迫害同然に虐げられ、いくら主に尽くしても報われず……細かい変化はあっても、その大筋だけは揺るがずに、繰り返されるループ構造。

そして……空間に表れはしなかったが、完全に蒐集を終えた先に待ってるのは――

「優しいお前たちには刺激が強すぎたな、ここまでにしておこう」

魔導書に刻まれた追想録は管制人格によって終わりを告げ、空間は暗闇と光る水面で構成されたものに戻った。

記憶の数々を目にした今、いかにはやてたちに巡り会えたことが彼らにとってようやく巡ってきた日の下の幸福であったか思い知らされる一同。

邂逅は偶然によるものだった。次の転生先は乱数設定でランダム

に選ばれる方式だそうだから。

それでも……毎日が喜びの連続であったであろう。

ずっと続いてほしい、と願うほどの眩さがある日々だったろう。

記憶を垣間見たことで、はやてたちが送ってきた日々のイメージが、より鮮烈に圧倒的な具象で描かれた姿となってゼロたちの脳内に現れる。

「あの……聞いていいですか？」

「答えられる範囲であれば」

何度もそれが頭の中を巡る最中、なのはは「彼女」に問いかけた。

「今、騎士さんたちがはやてちゃんを救おうとして、何をしてるのか……分かってるんですよね？」

管制人格は、ほんの少し、口を固く閉ざして沈黙した後。

「存じている……契約を結んだ魔導師と使い魔同様、騎士たちの精神は私とリンクし、彼らの想いはこうして今も我が身に伝わってくる」

暗になのはからの質問を肯定する回答を、口にした。

それを聞いたなのはは、思わず身を乗り出して問い質しそうになった。

「だったらどうして、苦しみがいてる彼らを止めようとしらないのだ？」

「このまま蒐集を続けても、願いは叶わず、はやてを死なすどころか、また悲劇の引き金を引いてしまうと言うのに、どうして放っているのか？」

このような意味合いの籠った詰問を声にして出す寸前、彼女の肩に何かが接触し、口にまで来た言葉の数々は放たれぬまま胸に引き戻された。

肩に触れて来たのは、リヒトの銀色の手。なのはは手の主に目を向けると、鏡の騎士は黙して首を振り。

「さっきも言いましたが、彼女が一国の王だとしたら、今はお飾りな身であり、抗おうにも、悪辣な摂政によって人質を取られている状態です、その人質が誰なのか、なのはもお分かりでしょう」

リヒトの言う通り、なのはら幼い少女たちにも、ナハトヴァールが人質としている者たちが誰であるのか分かっている。

ヴォルケンリッターと、現在の主であるはやて。

もし管制人格が何かしら蒐集の妨害を起こそうとすれば、主や騎士はおろか、「彼女」の意志すら意に介さず、『魔導書を脅威から守る』という大義を振りかざして、あらゆる存在に牙を向き、破壊活動を始めてしまう。

ゆえに、マスタープログラムの筈な彼女は、何もできないのだ。

行動を起こそうとすれば、それだけで惨劇へと誘うスイッチを、押してしまうことになるのだから。

その為、何もせず静観するのが最善の一手で、それ以外に選択肢は持っていないのが彼女の現状であると理解できるからこそ、苦虫を噛む思いで4人の表情は沈んでいた。

「もう一つ、俺からも質問がある」

「何だ？」

「答えなくてもいい、あんたに課せられた十字架から――」

ゼロは沈む心中で下ろされた顔を上げ、目線を管制人格と合わせてもいい、あんたに課せられた十字

「――はやてたち」を、救いたいのか？」

と、銀の鉄面の口から発した。

真っ直ぐ目線を届けてくるゼロから目を逸らしはしたが、「彼女」は答えなかった。

沈黙を返答としていた。

静寂さが場を支配し始めた時、異変はまた起きる。

「あ、あれ？」

フェイトが自分の手を見ると、体を覆って輪郭を形作っていた光の明度が大きくなり、指先から粒子が立ち登り出していた。

今述べた現象は、眠るはやても含めた五人に共通して起きていた。

「我が主が深い眠りに着こうとしている、早く戻られた方が良い」

夢の主であるはやてがレム睡眠から完全にノンレム睡眠に入ろうとしていると、管制人格は忠告する。

ということとは、これ以上この場に止まるのは危険であるという意味していた。

早く意識を自身の体に戻し、現実に戻らなければならない。

「ここから真上に光点が見えるだろう、あそこに向かつて飛べば帰れる、急げ」

「分かりました、みんな、行きましょう！」

「うん……」

本当はまだ「彼女」とお話して、聞きたいことが山ほどあるのだが、そうは言っていられない。

渋々フェイトとなのはは、リヒトの提言を承諾し、彼を先頭に彼女たちは飛翔した。

はやてを腕に抱えるゼロも、三人に続いて飛び立とうとしたが、一度上空に向けた顔を下ろし、再び鋭く吊りあがった金色の瞳で「彼女」を見つめ。

「最後にこれだけは言わせてもらおうぞ」

まず前置きの一言を述べ。

「これ以上あんたたちを罪の底なし沼に沈ませない、はやてたちを絶望の底に落とさせもしねえ、「夜天」を閉じ込めてやがるドス黒い闇は、「俺たち」が振り払ってやる！」

最初の声音は静かながら、段々と音量を上げていき、強い決意の籠った言葉を、管制人格に思いつきり投げつけた。

「だから——待ってる！」

深紅の瞳を宿す瞼を開かせ、呆然とゼロの決意の弾を受ける彼女を



よそに。

「シエアー！」

ゼロははやてを抱えたまま飛翔し、上空の光点の奥へと消えていった。

管制人格は暫く、ウルトラマンゼロが飛んで行った空を見上げていた。

やがて彼女の頬に、流れ落ちるもの。

一つ、二つ、三つ——赤眼の瞳を潤す水が、瞼の中に溜めこめきれず、次々と溢れだし、光の水面へと落ちて行く。

涙を流しているのだと、自覚したと同時に、彼女は膝を大地に付け崩れ落ちた。流れる水量は増していき、俯かれた頭は振り子の如く縦に揺れ、両の手は重ねられ、咽びを雫と共に漏らし出している口元が覆われる。

瞳から降り注ぐ局地的な大雨は、まだ止みそうにない。

もう一体何度目になるか……ここでこうして泣くことを繰り返す様になってから。

夜天の光が血に墜ちた今となっては、自分は騎士たち、優しさを失わない主とその家族らにこの先待ち受ける運命に嘆くぐらいしか。

もう一つとして、せめて……自分はどうなってもいい。彼らだけでも救いの手が舞い降りてこないか、これから起きる災厄を回避されないかと……願うことしかできなかった。

一方でその願いは、彼女の心を締め付ける呪いの一つともなっている。

“私”は………全てを破壊する。

比喩ではなく、言葉通りの意味だ。

破壊は時に新たなものを生む、とも言うが、己が齎すのはそんな生易しいものではない。

連綿たる時の河流の中で、自分は幾度もなく奪い尽くしてきた。

多くの、生きとし生ける者たちの命もだが、それだけじゃない。

奪ってきたのは、各々の生ける者たちが持つ、願い——希望もだ。

今を生き、未来へと繋ぐ力となるそれらを、どれほど自分は根こそ

ぎ奪い取り、二度と芽が一つも上がってこない焦土へと変貌させて

いったか……計り知れない。

実際に破壊を行使してきたのは自身を縛りつけ、自由を奪っている  
ナハトヴァールだ。

だが重複されてきた破壊と惨劇は、罪深き自分が持つ力によってこ  
の世に顕現されたもの。

ならそれは、己が引き起こした所業と同義、そんな私が……そのよ  
うな「光」を胸の内に秘めること自体が、糾弾されるべき咎であり、  
重罪だ。

管制人格が日々流す涙には、彼女にとっての大事な者たちに待ち受  
ける運命への嘆きと、前述の心情から沸き上がる罪悪感によってでき  
ていた。

しかし、今日この瞬間流される紅涙には、もう一つ落涙を促す「何  
か」が存在していた。

その正体が具体的に何であるのか、今の彼女にははつきりと理解で  
きずにいる。

なぜなのか？ なぜここまで、今まで流されてきたものよりも多く  
涙が溢れ出るのだろうか？

あえて分かっているのを挙げるとするなら、今流れ出る水流を引き  
起こす切っ掛けとなったものが——

「夜天を閉じ込めてやがるドス黒い闇は、俺たちが振り払ってやる

!

——まだ何の打開策も、光明も、ほんの些細な可能性すら見つかっていないと言うのに。

“だから——待ってる!”

力強く、心丈夫で、揺るぎ無い決意が込められて、彼女の心へと送られた。

若きウルトラ戦士——ウルトラマンゼロの、言葉。

それが彼女の内に、涙線を刺激させる熱いものを浮上させているのは、確かであった。

つづく。

「よくまあそう落ち着いてられるね？」

「あんたはもう少し棘を引っ込めておこうよ」

「そう言われてもね、こっちは同志さんの棘を抑えんに苦労されたんだよ」

未来的な清潔感と無機質さが漂う執務室では、デスクに座る一人と、挟む形で立っている二人は、机上の3Dモニターで何者かと通信していた。

『こういう時こそ、冷静さを失わず対処するのが君らの信条であろう？ 私はその姿勢を心がけているだけだよ』

通信先の男が、ラフなやり取りをした二人に提言をした。

対する二人と言えば、通信相手が述べた意見には賛同はしている。長年のパートナーである「彼」が長年の経験の蓄積で辿り付いた持論であるからだ。

だが正直、今すぐにでも思いつき焦りに焦り、存分に騒ぎ立てて走り回りつて発散し、そうして「冷静」になりたいと考えているのも偽らざる心境も持っていた。

まさか、自分たちの何年も掛けた悲願である計画の完遂に必須な要となる「少女」が、名目上ハラOWN親子を筆頭とした民間協力者たちとの合同捜査チームに、正体も掴まれた上で保護されるなんて……口の中が苦い睡で一杯になる。

当初の予測では、彼らがその少女と接触するのはもう少し後の筈と踏んでいた。それがどれくらい子細なものかと説明すると、あの地方都市に住む魔導師な地球人の少女を、憎き存在の一端な「やつら」が襲撃するところから予測は付いていたからだ。

その襲撃事件を切欠に、PT事件の功績でアースラチームが捜査担当となり、彼らと「主」の居所を突き止めようと調査を開始するものの、数回彼らとチームが接触することはあっても、「主」の下へは辿りつけない……当初の見た手ではそうだった。

あの魔導師の少女たちの人柄ゆえ、協力はするだろうがせいぜい戦

闘止まりだろうし、素質はあってもまだヒヨコ、手玉に取るのは容易い。

上手いこと暗躍を進めれば、これから先にある悲劇は形はどうあれ避けられたというのに……あの「巨人たち」によって覆されてしまった。

年長者らしい仏教という地球の宗教の僧侶の姿をした拳法の達人はともかく、「彼」の昔からの腐れ縁的な級友でもある「魔導殺し」率いる集団は、一見若さと勢いと戦闘だけの連中だと思っていたが、油断していたと言わざるを得ない。

偶然に助けられたこともあるが、彼らの助力が入った地道で根氣のいる捜査と、集めた情報を照らし合わせて起きる閃きによって、「主」が地球のどの地域に居て、「やつら」がどういう目的であんな所業をまた行っている理由すらも行き着いてしまう始末。

おまけにこの数日は、思わぬアクシデントというやつが連発し過ぎた。

彼らはそれすらも前進の糧にしてしまった。

本当に神でもいるのなら、文句一発言つてやらなきや気が済まない。

「彼の言う通りだ、今は下手に手を打たない方が良い、むしろ動きを見せれば機とばかり彼らは足元をすくってくる、それに彼らも真実を知った今となつては、打つ手なく静観する他ない」

『私もそれに賛成だ、「主」が彼らの傍から離れた分、結果として騎士たちも存分に蒐集を行えるではないか、戦力と準備期間の長さのお陰で、まだ私たちの方が有利だ』

ある目的の為、独自に集まった非正規班の長と右腕からの言葉によつて、頭はどうにか冷ややかとなる。

阻まれてたまるか。

■■■■ たちの為にも、私たちの悲願は、絶対達成させなければならぬ。

彼らもまだ知らない——ある存在にとつては、この者たちも都合のいい駒であり、道化であるということに。

自身の在り方を180度一変させるに等しい……激動の数時間を体験した魔源種の妖狐——久遠。

彼女はようやく、八神家宅の玄関前に辿りついていていた。扉の前まで寄った久遠は、ほっそりと綺麗な指が生えた右手をドアノブに接触させる。

すると、手からドアに、魔力の波が一瞬流れ、鍵のロックが解除された。

この家の扉は、魔法で特殊なセキュリティ構造となっており、予め登録された「魔力の波長」を送ることで鍵の開け閉めができる仕組みとなっている。

指紋認証に近い防犯システム、と言えよう。

久遠が扉を開けると——

「久遠ちゃん、おかえり」

——シャルルが待っていた。

「ただいま……すまない、はやてを護らなきゃならないのに、こんな様だ」

「気負わないで、元はといえば「私たち」が撒いた種だから」

久遠は、自分がついていながら今日起きてしまった事態のことで頭を下げ、シャルルもまた彼女に謝意を表した。

その事態こそ、はやての突然の家出。

実を言うなら、彼女が今日どうしてそんなことをしたのか、二人と

もおおよそ見当は付いていた。

お互い「理由」を悟っていることも、今の遣り取りで察し、気を遣ってそれを表に出すのはよそうと同時に判断し、敢えて口にしないでいる。

「今、石田殿のところにおられるのだな？」

「ええ、先生にも、なんで家出しちゃったは、明かしてくれなかったそうだけどね……」

ちくりと、久遠の胸が痛んだ。

自分は今彼女たちに隠し事をし……嘘を付いている。

はやてが本当は、今どこにいるのかを……本当は、騎士たちにとって彼女が魔導書の主であると、一番知られたくない者たちのところにいるということ。

本当は、はやての為にの……いや……この家の屋根の下で暮らす者たち全員の為に、闇に染められてしまった「夜天の真実」を、話したかった。

だが今は、感情に身を任せて、それを伝えるわけにはいかない。

長い時を生きてようやく得られたものと、それを齎してくれた者たちを救いたいと、守りたいと思うあまり頑なになってしまった彼らに真実を見せては……むしろ彼らが回避したものよりもさらに大きな非劇の引き金を引いてしまう。

その想いを無下にせず、穏便にことを収める方法が見つかるまでは、秘めておくしかないのだ。

たとえ引き換えにどれだけ良心が傷つけられても、今は耐えるしかない。

ウルトラマンゼロたちが、光明を見いだせるようお願い、自分も助力しながら彼らに託すしかないのだ。

すっかりしろ……仮にも自分は蒐集の耐えがたい痛みに耐えた身ではないか、これくらい心の痛、耐えてみせろ。

「他のみなは、如何してる？」

と言い聞かせながら彼女が家族の近況を聞く。

シヤマルによれば、その日の夕食ははやてが家に居ない為、仕方な

く昔より味のクオリティは上がっているが舌が肥え過ぎている八神家の面々には少々物足りないコンビ二弁当で済ませたという。

石田医師からはやてをしばし預かると連絡が来てからは、シグナムとザフィーラは蒐集の為に出かけ、ヴィータも明朝から出るので休息をとるべくもう既に床に着き。

そして紅蓮ことグレンファイヤーといえは。

「よ、帰ってたのか、お疲れさん」

丁度彼は洗面所から出てきた。

風呂上がりなようで、橙色の髪は濡れ気味で首にタオルを掛けている。

「ぐ……紅蓮」

恐らく……今日の出来事に一番心に重く響かせているのは紅蓮だ。

久遠より、ヴォルケンリッターより、ずっと前からはやてとずっと一緒にいて、この家で暮らしてきたのだから。

「だあ……たくよそんなしけた面しなくてもいいって、もうそれ顔に出すの禁止！　こんな空気家に溜めてちゃはやてがまた落ちこんじまうだろ？　毎日俺たちみてえな濃ゆ……いメンツを衣食住養わなきゃってガンバツてりや、あいつも偶には休みたくなるって」

その紅蓮の態度は一見すればいつも軽口叩いては周りを和ませ、心身を暖かくさせるムードメーカーな口振りではあるのだが、間近で見ると二人の目は、普段ならごく自然にできる軽妙なトークを、今の彼は無理やり自分の心を鞭打って無理強いして行っているのだと、はつきり捉えてしまった。

「明日は学校ではええからよ、俺も先に寝かせてもらうわ、おやすみさん」

「おやすみ……」

「オレのソウルは……真つ赤なファイヤー……♪」

普段なら機嫌が良い時によくやる即興で作った自分のテーマ曲を口ずさみながら、自室がある二階に繋がるくの字状の階段を上がっていく紅蓮は中段まで登ったところで、一旦そこで立ち止まり、歌うのも止めてしまう。



数秒ほど一階から見上げる彼女たちに後ろ姿をを見せた彼は、再び踏み出して登っていった。

そんな彼の背中を見ていた一人の久遠の耳に、壁との接触による衣擦れ音が侵入する。彼女は、音を起こした壁にもたれかかるシャマルに視線を移した。

「シャマル？」

紅蓮の後ろ姿も何とも言い難い重さがあつたが、風の癒し手の沈痛たる顔も、彼のものと匹敵する悲愴さが滲み出ていた。

目元周辺に掛かった暗さは、この廊下の照明と影のコントラストによるものもある……のだが、その闇が表出しているのはそれだけでないのも確か。

「きゃっき……石田先生から電話があつた時なんだけどね……」

数刻前、例の連絡があつた時、久遠以外の面々は全員家にいた。

はやての魔力によって現界しているヴォルケンリッターに、何の体の異常が現れていない以上、主である彼女も無事であるとは分かつていたものの、〃石田先生の許にいる〃と聞かされた後もなお、当時のリビングルームには暗雲の空気が立ちこめていたらしい。

やはり……薄々ながらはやてが家出を起こした理由を、全員悟っていたからだろう。

いつもは饒舌で、何かしら軽妙な声を出して紅蓮さえ、その時はダシマリとしていたという。

〃こんな空気家に溜めこんでたんじゃ、帰ってきたはやてがまた落ちこんじまって、もうそんな暗い出すのは禁止だ、それに今はやては家にいないんだから、その間にちやちやつと終わらせてき、早いとこはやてを助けようぜ、仮面被つた悪徳セールスマンには気をつけてな〃

代わりに、暗澹が占める沈黙をどうかしようとしたのは、ヴィータであつたそうだ。

先程の紅蓮の発言と似通っているのは、彼がヴィータの発言を少なからず意識していることと、性格面で両者がとても似ていることによるもの、と言える。

“あたしも明日出るからさ、先に寝かせてもらおうわ”

と言って、背中を向け、廊下に連なるドアを開けてリビングを出ようとした際、その時彼女は一度立ち止まり。

“なあ……助かるよな……助けられるよな……はやて”

さっきの発言とは正反対のトーンで、今の言葉を発し。

“わりい……変なこと言って、お休み”

直後、背を向けたまま無理やり声音を明るくさせて弁明し、はやてと共同で使っている寢床もある部屋へと行った……という。

「今の紅蓮君の背中、あの時のヴィータちゃんと……そっくりだったの」

その時の模様を反芻して久遠に伝えるシヤマルの顔の影は、さらに黒くなったと感じさせられた。

「こうするしかないんだって……書の守護者である私たちが、一番よく知っている筈なのに……」

この発言に至っては、久遠に述べたというよりも、迷える自分に言い聞かすものであると分かる。

「気がちよつと参ってるみたいだから、私も寝るね」

「ああ、お休み」

「お休み……テーブルに久遠ちゃんの弁当あるから、お腹空いてたらそれを食べてね」

「ありがとう……」

シヤマルもまた、自室のある二階へと登っていった。

キッチンルームに入ると、シヤマルの言った通りテーブルにコンビ二弁当が置かれていた。

最近、そのコンビニのCMで紹介されているハンバーグ付きのドリア。

久遠はそれを電子レンジで温めて、スプーンで具を掬い、口の中へと入れる。

「物足りないな……やはり」

確かに宣伝の謳い文句に偽り無しな味ではあった。

けれど、思わず漏れてしまった通り、「あの子」が毎日作ってくれた料理に比べれば、どうしても物足りなさを否めることができなかつた。

激変の連鎖が起きた日曜が終わり、時は月曜の午前4時22分。

朝と言いたいが、日照時間が短い冬真ただ中なので、空を見る限りはまだ夜中そのものだ。

夜空に立ちこめる星の下、昨日は勇夜たちとはやてが邂逅し、何かと劇的な場面の舞台となっていている気がしなくもない海鳴臨海公園では、ジャージを着込んで早朝ランニングをやっている最中の少年二人がいた。

「ちよつといいいか?」

180近くある長身とポニーテールな長髪で見た目は大人びている方が走行を一旦止める。

「何だ勇夜?」

対して150センチ代で、まだ幼さ特有の中性さが残っているが物腰は実年齢より上乘せされている方が問うてくる。

「つーか、何で俺、お前と一緒に走ってんだらうって……」

「今ここでそれを言うのか?」

「今さらだとは俺も思ってるよ、まっクロノ」

「また君はそんな呼び方で」

「だったらせめてジャージくらい黒以外のやつにしろよ、顔と手以外真っ黒クロスケだぜ」

「それは……確かに否定はできないな」

大きい方——諸星勇夜と、小さい方——クロノ・ハラオウンのどこか漫才じみているちよつとした談笑混じりのやり取り、というやつである。

何でこんなことになっているのか説明しておく。

11年前の次元振でミッドチルダに迷い込んでからというもの、勇夜——ゼロは特定の場所に長期間滞在する際はこうして毎朝走るようになった。いったい。

当初は無理をしすぎないように配慮しながら、体を鳴らして少しづつ肉体幼児化によって一時失われたウルトラマンとしての力を取り戻す為であったが、今は半ば彼の日常の中に常習化されて組み込まれている。

それに強いて他の理由を上げるなら、走るのが心地よかったのだ。リズムよく両足で大地を蹴り、一瞬だけ肉体を宙に浮かせて、風に触れながら進むのは、空を飛ぶのとはまた違った楽しみ方がある。

太陽の光の恩恵を受け過ぎて、寒さに弱いウルトラ一族特有の体質もあるというのに、日本の朝の寒気と走ることで火照る自分の体がつかり合う感触すら、今の彼には快感となっていた。

勇夜は今日も、いつも通り自分が設定したコースでまだ日が射さない朝の海鳴を走るつもりだったのだが。

「僕も一緒に付き合ってもいいか」

と、クロノが併走を希望してきたのである。

希望された当初は特に気を止めず二つ返事で了承した勇夜であったが、走りながら冷静に考えている内に、なぜこの「鉄頭」がそう言ってきたのか気になって仕方なくなってしまう、先述の会話へと至ったのだ。

「で？… どういう風の吹きまわしなんだ？」

一旦休息に入り、二人は海と陸の狭間なフェンスに腕を掛け、勇夜は改めて質問をする。

「打ち明けるとだな、言いたいことが言える環境が欲しかったんだ」

今のクロノの言い分から見ると、こうして共にジョギングしているのは、あくまでその「言いたいこと」を口に出やすくする為のお膳立て……みたいだ。

「じゃ、言いたいこと、ってのは？」

「何と言うべきか………」

最近若干声変りの兆候は出てきたものの、まだまだ幼い声に反して、淡々とだがはつきりとした口調で話すクロノ、それが今はどう言葉として表現すればいいのか分からないようで、少しぎこちない。

「ざっくり言うと、申し訳ない……って」

たどたどしさの尾を引きながらも、クロノはどうか言葉という形にしていくな。

「この次元に生きる人々と日常を守る」、そのつもりで局員として従事してきたけど、不可侵と線引きした地球を二度も僕たちの世界の危機を巻き込んで、君たちの力を借りてもらってばかりなことにな」

目線を下向きにして話す彼に対して、勇夜は暫く黙秘で返すしかなかった。

実直で生真面目で、公人を地で行き、ポーカーフェイスにしても感情が顔に出してしまうのが偶に傷なところでもあり人間味とも言える一面があるけど、自身のプライベートは内に秘めようとするタイプな彼が、不器用さ全開でそんなことを口にするなんて……調子狂う。

それを言うなら自分だって、異邦人な分際で首突っ込んでる身だ……公務員はなまじ結果を残してるとこ含めて良い気しない方が普通。

クロノもそれが分かってるから、わざわざここで切り出したのは分かった。

「だんまりを決め込まないでくれ……いつもみたいにからかってくれた方がまだ良いと思えてくる」

「わりいな……ちょっと頭フリーズしやがってさ」

「だからこういう場でなければ言えないことだと言ったんだ……」

彼からはこう言うまでに至る経緯があるのだろうか、勇夜からはほぼ突然の台詞であったので、いつも以上に物言いが不器用と化していた。

容姿も性格も、一見正反対な両者……しかし根っこの善良さを、表向きの物腰で隠してしまう点では、ある意味この二人は同類な不器用

者だ。

「じゃあ俺も、こういう場でしかきけないこと聞いていいか？」

「……………僕の心の中にある、君の仲間の家族への心情……………だな」

物の見事にこちらが言おうとした内容を当てられてしまった。

「堅物さんにしちや頭柔らかくええじゃんか」

「これでも執務官になれるだけの頭は持つてる」

「でも一回落ちただろ？」

「それぐらい難関なんだ、それに一昨日の件は、ともすれば僕以上に君が気にしてるとは予想がついていた」

ここ数日の流れを顧みれば、言い当てられないことはないけど、何か若干悔しくもあるので、こればかりはとついジヨークな返球してしまつたが、さらに投げ返されてしまつた。

凶星だ……………確かに自分は気にしていたし、悔いがあった。

クロノの魔導書との因縁による、あいつの中にある闇の存在に薄々気づいていたのに、何のフォローもしてやれなかつたことに。

はやてたちに関しては、もう吹っ切れていたけど、クロノのことだけはまだ心残りのしこりは……………正直、未だ残っている。

「なんせ『人間は誰でも猛獣であり猛獣使い』ともいうくらいだからな」

行きつけの酒屋のマスターで情報屋でデバイス鍛冶でもあるステイブン・セガール似なおっさん、ベーカー・オールデイスから、偶然とは言え……………忠告とヒントをもらっていたというのに……………生かせなかつた自分が情けないとさえ勘繰ってしまう。

「完全とは言いが、ある程度のけじめは付けられていると思う、君の『師匠』のお陰で」

「え？」

「母さんからの指示で、ユーノたちのサポートをしていた時にな」

師匠——おとりゲンが今の話題に出されて戸惑う勇夜をよそに、クロノは昨日にあった出来事を話し始め出した。

時は昨日の午後の時間帯へ。

その頃の無限書庫では、今日もユーノとナオトを中心に、『夜天の書』に関する情報が記録された史料探索が行われ――。

「この写真……」

「これで闇の書と夜天の魔導書が同一の可能性は強まったな、記載された写真のと本局のデータベースにあったCG画像の形状が一致している」

――丁度、核心に切り込める材料が集まり出した時。

「すまない、私とクロノ君は少しばかり休憩をとるが、君たちはどうする？」

「もう少し探索を続けてます」

「そうか、では私たちが戻ってきたら交代しよう」

「どうも」

その日共に探索に当たっていたゲンは、クロノを連れて休みをとろうとした。

「あの……ゲンさん」

「いいから着いてきなさい」

追記として、その直後のナオトたちの会話も記述しておく。

「……………」

「心配か？ 彼のことが」

書庫の出入り口へと飛んで行く二人を見上げるユーノに、視線の意味を投げ掛けるナオト。

「確かに……心配です、いつもはからかわれてはついカツとなってしまうですけど……………」

「対等に付き合えるご友人、か？」

「はい、あなたとグレンファイヤーのような間柄です」

自分たちを喩えに使われて、特に否定しない当たりナオトは満更でもないようだ。

本人から『焼き鳥』と呼ばれたら、やっぱり『無礼者！』と返してしまうだろうけど。

「…………昨日蒐集されて倒れているところを見つけた…………その時の泣き

顔が頭から離れてくれなくて、マルチタスクがなかったら探索に集中できなかったかもしれない」

「あの若さで高い役職に就かれているから、人となりはしつかりして  
いよう、それでも心に巣食う存在は、簡単には消えてくれない……彼  
も例外ではないさ」

「それは……分かりますけど……」

「だが心配ない、その昔谷底に墜ちかけた『私たち』のリーダーを、  
ウルトラマン』として蘇らせたお方もいるのだぞ、なのはたちのよう  
に、彼も乗り越えられると信じよう」

「……はい」

微笑みながらそう言ったナオトに、ユーノもまた微笑して頷き返す  
のであった。

「何がいい？」

「コーヒーを、無糖でお願いします」

目的の本一冊探し出すのに苦労する無限書庫では、訪問者たちをサ  
ポートする施設も設けられていた。

クロノとゲンがいるのは、休憩用の談話室。

清潔感ある白味の壁、部屋の中央には、テーブル、それに挟まれる  
形でソファアが設置され、壁際には自動販売機やテレビまで備えられ  
ている。

その販売機から購入したブラックな缶コーヒーを、ゲンから受け取  
るクロノ。

「普通に緑茶が売られているとは思わなかったな」

「ミッドには、その昔地球からの移住してきた地球人が少なからずい  
ましたから、地球生まれの飲食物も結構お目にかかれます」

今の会話の通り、ゲンが買ったのは緑茶。ちなみに商品名は、ミッ  
ドのアルファベット文字で、『GOEMON』と表示されていた。

クロノは缶の蓋を開け、中のコーヒーを口にする。

なし崩し的にゲンに連れて行かれて、休息をとってはいるが、まだ



それほど疲労が出るまでに魔力を消費していないのが実状。

蒐集された影響で、リンカーコアのサイズは縮小しているが、伊達に魔導のスキルを磨き抜いていないので、ユーノたちのように何十冊の域に行かずとも、検索魔法と速読魔法で3、4冊は一度に読める。まだまだ史料集めをする余力はあり、あの時点では休む必要なんてなく、遠慮する意志を彼に示すことはできた。

なのに、なぜだかクロノは、ゲンに導かれるまま今こうして彼と骨休みをしている。

「あの……わざわざ場所を移したってことは、僕に何か話があるので  
すか？」

「そうなるな、どうだろうか？ 何なのか当ててみなさい」

「昨日の……一件ですか？」

「正解だ」

やはりそういうことか、とクロノは思った。

昨夜のあの行為は、「局員として次元犯罪と戦う」と心に決めていた自分にとって、自身に対する手痛い裏切り行為であり、最も恥ずべき愚行であった。

「ご心配なく、もうあのような失態は二度と起こしません、これでも執務官ですから」

「私が聞いているのは、公人『ハラオウン執務官』としての君ではない、歳相応な、一個人としての『クロノ・ハラオウン』だ」

ゲンの今の言葉の通り、「公人」として……と付け加えられるが、だ。

修行の場での彼に比べれば、今のゲンの獅子の如き眼力は幾分控えめ。

それでも彼のその眼差しは、厳然であり、同時に真摯さを感じさせる気も瞳から漂っている。

「君が置かれている環境では、そう率直にプライベートな自分を打ち明けられないのも分かる、黙秘を返答にしても構わない」

現在のクロノが身を置く環境は、特殊かつややこしいものである。

比喩表現で彼の境地を表すなら、子役時代からキャリアを重ね、演

技力も高く評価されている10代の若手で、尚且つ両親は二人とも名役者な二世俳優——と言える。

これで彼の身の上の複雑さは、漠然とながら理解できた筈だ。

「だが生憎と私は管理局に従事する身ではないし、身近な肉親でもない、せいぜい君の友人の身内だ、私の口からは絶対に他の者に口外しないと約束しよう」

私人としてのクロノの意志を尊重、誰にも話さず秘密を貫く点を強調し、ゲンは静かに語りかける。

今の彼の様は、厳かさの中に静穏なる気色を帯びた独特の佇まいを見せていた。

対してクロノは、顔を下に向けたまま黙した姿勢。

やはり迷いがあるのだろう……その静かさの内に、公人としての自分と私人としての己がゲンの申し出にどう応えるべきか口論している様子がありありと捉えられた。

実際の時間は数十秒、が体感では数十分のもの時間が刻まれた時、俯いていたクロノは顔を上げてゲンと目を合わせた。

そして……また顔を下げたと同時。

「正直に言いますと、『真実』を知った今でも……父を殺した彼らを、許せない自分がいます」

独白めいた調子で、クロノの内なる思いが言葉として語られている。

「『あの日』僕は、学校が終わると直ぐに真っ先に家に帰りました、自分が言うのも何ですが真面目な身なのでいつも寄り道せず帰宅はしていたのですけど……その日は父と復職したばかりの母が、任務を終えて帰ってくる予定だったんです、母が作り置きしていた料理を食べた後、ひたすら僕は部屋のリビングで待っていました、最初はテレビを見てたのですが飽きて、でもじっとしているのも億劫になって、買ってもらったけどまだ読んでなかった本でも読むことにしました、シャーロック・ホームズの長編で、ホームズとワトソンの最初の事件を描いた『緋色の研究』です、二人が馬車で事件現場に向かうところまで読み進めた時、電話が鳴りました、父か母だと思って、受話器を取った

ら……」

相手は聞き知れぬ管理局員で、彼から告げられたのは、父が殉職した悲報。

年単位で育児休暇をとっていたリンディと違い、父クライドは、提督の職ゆえ多忙で、家にいない日の方が多かった。

それでも多いと言えない休みの日は、一緒に遊んだり外出する約束を、必ず果たしてくれたという。

あの日のあの瞬間までは、いつものように帰って来て、玄関で出迎えてくれた幼いクロノを抱き締めてくれる——という光景が来ると彼は信じていた。

しかし、実際に待ち受けていたのは無慈悲な悲報だった。

小さかった当時のクロノからは、連絡してくれた局員の言い様が、酷く淡々と無機質な感じに聴こえた……とのこと。

「その日の記憶は、そこでばったり途切れてて、あの後僕が何をしていたのか……全く覚えていません」

最初は、比較的平静な口振りであった。

それが、「父の死」を知らされた日の話しを一通り終えた頃には、無理に自分の心境を御しようとしても、小さくない波紋を前に限界が迫りつつあった。

何度も鼻はすすられ、息も乱れ始めていく。

「理解自体はしてるんです……彼らが何百年体験してきた地獄に比べれば、今話した僕の経験なんて、たわいないものですよ」

理解はできて……できてはいるのだ。

人の好奇心と探求心によって生まれた「夜天の書」が、「闇の書」と呼ばれるまでに人の負の欲望で変容させられて、災いの種を生み出したのは自分たち人間の方だと言うのに、それを棚に上げて……畏怖と侮蔑の目を向け、化け物扱いし、闇の底へと落とし込み、延々と地獄のループな悪道を、あの魔導生命体たちは歩ませ続けられてきたのだから。

果てがなさそうな輪廻の中で、出会った新たに選ばれし主と、その人親しい間柄なグレンファイヤーと久遠という魔源種の少女との出

会いと、過ぎてきた筈の日々は……義務を逸脱して彼らの「守るべきもの」となり。

もし例の自動防衛システムによって蒐集を拒否した主が命の危機に瀕しているとすれば、是が非でも救おうと決心した筈だ。

クロノの理性的な面は、彼らに課せられた宿命のことを踏まえれば、また己の手を血で汚す悲哀なる決断を下すのも無理ないと、思案していた。

それが分かるから……納得できてしまうから……余計に「納得できない」。

「でも……」家族を救う「為に蒐集を行っている可能性を聞いて、それがほぼ事実だと確定された時、実を言う……腹正しかった……僕たちは、あの不条理な運命に……戦うことも、抵抗すらできずに……一方的にある日突然奪われたんです、あの人たちは全てが終わった後、被害者たちと「家族」にどう詫びるつもりなのですか？

「主を助けるしかなかった、他に方法がなく仕方なかった、それを分かってほしい、人は殺してないのだから目を覆ってほしい」とでも言う気なのですか？……もしそうなら……虫があ……よ過ぎますよ！」

平時の歳相応より幼くて、あどけない容姿に反した冷静さと公人という仮面ははぎ取られ、気がつけばクロノは、七年間無意識に溜めこんでいたものを洗いざらい涙と共に流し出していた。

「こんな筈じゃなかった人生」

様々な要因な重ねつての非劇とは言え、多くの人を犠牲にし、残された者にこの人生のルールを歩ませて、苦しませておいて、いざ自分たちがそんな立場になったら、また新たに人々にそのルールへと強引に誘おうとする。

彼の理知的な「自分」を以てしても、止め切れない大波。

今日の朝の出来事が、その波をより強くする。

母だつて……愛する人の喪失をずっと引きずって生きていた。

母が「母の顔」をさらけ出して、蒐集された自分を抱き締めて、まだ息子が生きているのだとこの手で確かめていたのが何よりの証拠

だ。

「こんな筈じゃなかったからって……今さらどの面下げて『家族』ですか！それが彼らの忠義なのですか!? 騎士の誇りとでも言うのですか!? どう納得しろと言うんです!」

クロノもまた、その幼さに似合わない賢さと、その気質ゆえに我儘は言えない、耐えなければならぬといった、強迫観念を持っていると言えた。

事実、クロノは父を失って以降、感情を発露することを余りしなかった。

彼の魔導師の事実であるリーゼ姉妹も、ポーカーフェイス以外の表情を見る機会はそれほどあるわけではなく、学校でもクラスメイトや同級生からは『無表情』『根暗』といった印象を与えていた。

片や小学校以来、片や士官学校以来の腐れ縁な勇夜とエイミイの影響で、多少は明るくなり、時に真顔で被害者兼ツツコミ役は主にユーノな、計算されたボケを披露するようにもなってはいたが、職業柄、同世代の友人ができにくく、年上の部下な大人たちに囲まれるある種の歪な環境は、周りに壁を敷かせるには充分過ぎた。

結果、彼はまた耐えしのぶ選択肢をとってしまったわけである。

そうして当人すら気づかぬ内に、復讐心という淀みが蓄積されていったのだ。

以前プレシアに言った――

『世界はいつも、こんな筈じゃない』ことばかりだよ!』

――という言辭は、彼なりの世界への訴求の表現とも言えた。

彼も一介の人間な少年である、あの呪われし魔導書たちのへの憎悪の発露は、時間の問題であった。

あれぐらいで済んだのは幸い……下手すれば、なぶり殺しをする気さえ、起こしていたかもしれない。

彼に限ってそんなこと……だなんて理屈は通じない、人が感情を持つ限り、誰もが内に積まれてきた火薬に点火させ爆発させる可能性を秘めているのだからだ。

こういう形で思いつき泣き、発露できたクロノはまだ良い方なの

である。

そんな一人の子なクロノに、今まで聞き手に徹していたゲンが、そつと頭に手を置く。

固く、貫禄と重みが積み重ねられていながら、体の芯から伝わってくる彼の手の温もりをまざまざと感じながら、クロノはもう暫く、当時は流せずにはいた。『七年前の喪失』の涙を流し続けるのだった。

その『七年越しの涙』の話聞いていた勇夜は、クロノからは自身の顔を見られない様、彼の立ち位置と正反対の方向を向いていた。

「ばかやろ……………師匠が秘密にするって言ったんだから、秘密にしとけよ……………聞いているこつちが恥ずかしくなるじゃねえか」

人並み以上に涙脆い体質とのこともあり、彼の瞳は潤って、今にも流れそうなどころを必死にそうはさせまいと、抑制させていた為である。

「何度も言ってるだろう？　こういう場でもないと言えなかった……………って、君にも打ち明けたわけは、君も口が固いからと……………僕の痛みで、君にこれ以上負担を負わせたくなかったんだ……………エイミーから聞いたぞ、一昨日のこと」

「ぐ……………あのおしやべりめ」  
エイミーがあ夜の自分のことをクロノに話していた事実には、勇夜は苦笑する。

「いつもの彼女ならからかう気満々だったろうけど、多分エイミーも君の重荷を和らげたかったんだと思う、根っこはともお人好しだからな、君って」

「うるせえ……………」  
さらについ、いつも以上にツンケンどんな態度で強がってしまった。

今のクロノの発言も、実を言うと凶星。

良くも悪くも、個人差あれどドが付く『お人好し』な種族なウルトラ一族。

地球人の血も引いているとはいえ、勇夜——ゼロもまたそんな一人なウルトラマンで、感受が強い少年である。

さっきのクロノの話も、彼の頭の中ではゲンに本音を打ち明ける姿が具体的に浮かび、涙性は刺激され、彼の心にささやかな救いを齎してくれた師のゲン——レオに大使、感謝と一緒に申し訳ない気持ちも抱いている。

だって……あの人は、地球が第二の故郷になるまでの間、あんな風に……誰かに涙を流して、気持ちを受け止めてもらおう暇すらなく戦い続けるしかなかったんだ。

それでも、自分以外の人の悲しみを受け止められる……自分の師の偉大さを、まざまざと勇夜は感じている。

何はともあれ……一応、ここ数日の出来事胸の奥でしこりになっていたものは、マイクロ並に小さくなっていった。

これで心おきなく、夜天の書の『悲しみの連鎖』を断ち切るべく、力を尽くせそうだ。

せっかくだから、この機会にクロノにも伝えておこう。

「俺からも、もう一つ今のうちにここで言っとく」

「何をだ？」

「まだ推測でしかねえんだが、例の連中の首謀者のことさ、今日報告書に纏めて出すつもりだったんだけど」

「教えてくれないか？……それが、誰なのかを」

「結構ここに来るぜ」

勇夜は前置きに、胸を指差し、覚悟が求められるとその仕草でクロノに伝え、彼も視線で了承の旨を返した。

「行くぞ」

勇夜は人差しと中指を立てて側頭部に触れ、サイコトランスミットで、『自身のまだ確定してない推理』の内容を、クロノの脳に送りこんだ。

情報の並が物理的な圧力となり、彼の脳内に押し寄せ、一瞬頭を揺らされる。

その次の瞬間には、送られた情報を知覚していた。

「もつと、驚くかと思っただぜ」

「いや……驚いてはいるんだが、驚き過ぎて顔に出る余裕もなかった  
というか……不思議とその可能性もあり得ないと納得できて  
しまつてるといふか……それに——」

「ああ、趣味の悪い——」

二人の足下に魔法陣が形成され。

勇夜は、魔力の短刃——《フォトンダガー》を生成して手に持ち。

クロノは、指鉄砲にした人差し指に魔力を集め。

「覗き魔もいるしな！」

「ステインガーレイ！」

両者は同時に、木々に覆われる影の向こうに、攻撃を放った。  
つづく。



## STAGE 44 — EXPLOSION

「デェア！」

「ステインガーレイ！」

勇夜が投擲したナイフ型魔力刃——フォトンダガー。クロノが指先から発射した魔力弾——ステインガーレイ。

二人が発動した攻撃魔法は、群れなす木々によつてより影の度合いが深まる闇へと直進していく。

魔の光たちが、森の闇の奥へと消え、着弾音が鳴った直後——さらに黒味が深い影一つが、木の身丈よりも高く跳び上がり、勇夜たちに目掛けて降下してきた。

「下がれ！」

影から溢れる殺気を感じ取った勇夜は、これから自分に降りかかるものから巻き添えを喰うのを防ぐためと周辺の配慮で結界を張ったと同時に、咄嗟にクロノを突き飛ばした。

影から伸びた何かが袈裟がけに勇夜の身に襲い来て、彼は鍛えられた持ち前の反射神経で背後に摺り足してその一撃を回避する。

彼を襲う何かの正体は——右の「手」だ。

それは手ではあつたが……人の物ではない。

形状こそ人の物に近いのだが、皮膚の質感、濁り味のある緑の色合いから見て、むしろハ虫類のものであつた。

指先からは、湾曲された黒く鋭利な爪が伸びている。こんな凶器が人の急所を捉えれば……間違いなく命はない。

黒いフード付きローブを羽織る影はさらに、右と同じ特徴をした左手を伸ばし、連続で爪先を突き出してきた。

小気味よく左手からの突きの連打で牽制し、隙を見つければ右手で本命の一閃を振るってくる。

影からの攻撃を後退しながら化勁でいなして防戦状態な勇夜を、クロノは援護しなかったが、そうはいかなかった。

クロノは今、宙に出現してくるモノたちと「格闘」している。

モノとは——バインド。立方体状、リング状、ロープ状と様々。

大気中の魔力濃度からこれから現れるバインドたちを察知し、前転、後転、側転などの倒立、跳躍、飛行魔法も動員して魔の鞭を避けるクロノ、魔の拘束具たちを前に彼は絶えず動き回らなければならず、まるで四方八方から迫る槍の突きを回避する光景にも見えただ。

少しでも一定の位置に止まり続けられれば、網に捕えられてしまう。

とはいえ、このバインドたちの役目は、彼と勇夜から距離を離す為。それにコアもまだ回復していない状態、身体強化魔法の効き目が切れるのも、時間の問題だった。

とまあ……ここまで述べると、勇夜たちはピンチの渦中にいると考えてしまうだろう。

しかし、まず結論を上げるなら、この戦闘はウルトラマンと魔導師の少年たちの勝利に終わる。

最初は相手の良い様に攻められた彼らの反撃が、ここから始まった。

上段からの左の爪の一閃を、勇夜は左足を軸に体を右回転させて躲す。

そのままバレエダンサー顔負けの身がブレない回転を続け、一時クロノがいる方角に背を向ける格好となる。

一方今の一撃を回避された影も、左足を軸にその場を半回転し、その勢いで横薙ぎに勇夜目がけ、右の爪が迫る。

対して勇夜は、身を屈ませ、前へ摺り足しながら凶刃から逃れ、ほんの一瞬両者は背中合わせになった。

実は影は、この瞬きを待っていた。影に背を向け、俯く彼は今視界に影の姿を捉えられていない。

この隙を突き、〃計画〃に最も邪魔な障害たる〃人の皮を被った巨人〃の喉にこの爪で——と、右回転の遠心力を乗せて五本の凶爪を相手の首に突き刺そうとしたその時、影の右ひざの裏に激痛が走っ



!!!

今の乱れ撃ちで獣特有の奇声な悲鳴を上げる影、その痛みを与えし  
ポーカーフェイスな当人は、いつもの宇宙拳法の構えではなく、全身  
の力を抜き、〃無形の位〃とも呼ばれるノーガードな状態で一度は開  
いた相対距離を詰めていく。

右腕が使い物にならなくなっている異形の影は、悠然と歩み寄る勇  
夜に対し、震えていた。

外見は人そのもの姿をしながら、人間離れた戦闘力、全身から溢  
れる焦らしを促す効力と静かな威圧感を持った彼の佇まいから誘発  
される恐怖による震えだと断定できよう。

「g u a a a !!!」

恐れと焦燥に焦らされた影は、不快な奇声発して飛びかかってき  
た。

だが対して勇夜は眉一つ変えないどころか、〃見事に術中に嵌った  
な〃と、内心不敵に微笑んでいた。

短期決戦で仕留めたかつたんだろうが、攻撃に傾倒する余り、もう  
彼には影の動きは手に取るように把握している。

右腕を潰された今、影……というよりこいつをどこかで操る何者か  
は、冷静な思考を削がれている。そしてこつちが敢えて傲然な姿勢を  
見せることで焦りと恐怖心をさらに煽りに煽らせ、撤退の選択肢を相  
手の頭から消し、死に物狂いの渾身の一撃を掛けてきたところを、さ  
らなるカウンターで返り討ち。

勇夜は鍛錬と実戦で磨いてきた戦術眼と洞察力で、影がどういう攻  
撃を仕掛けて来るのかはおろか、影の背丈、腕の長さ、姿勢、体捌き  
の速さ、走力といった特性とパターンを即座に見通し、今の攻撃さえ、  
具体的な軌道を空想の線でなぞれるまでに見切っていた。

証拠として、下段から切り上げてきた爪を生やす左腕を、巧みにし  
なやかな手さばきによる化勁で、勢いを勇夜の視点から左側に流し、  
すかさず左手で影の左手を拘束、手に連なる肘周りを右手から振り下  
ろす裏拳と右脚の膝蹴りを同時に当て、すかさず右手を振り上げて対  
象の左肩へ袈裟がけに浸透頸の手刀を見舞わせた。

「(勇夜!)」

その時クロノが念話で呼び掛け、今のが「準備ができた合図」だと悟った勇夜は相手の右肩を破壊したばかりの右手でローブ首筋付近を、左手で腹部を掴み上げ。

「そらあああよーー!!」

彼の方に向けて思いつき背負い投げた。

半円を描いて舞う影は、クロノが立つ場所へと落ちていく。

バインドの網はもう解除済み、むしろ攻撃魔法の準備さえ整っている。

「ブレイク——」

魔法陣が敷かれた大地に立つクロノの右手は、振動する障壁の魔力エネルギー纏っており。

「——インパルス!!」

強震する光の拳で、落ちてきた影の肉体に向け、タイミングよく打ち上げた。

接触した魔力光と異形の影が、小刻みに震えた後、光からリング状の閃光と共に発された衝撃に影は再び宙に突き飛ばされた。

ブレイクインパルスとは、振動させた魔力エネルギーを拳、または杖といった得物で対象に打ち込む近接打撃魔法。

接触の際、攻撃対象たる物体の振動数を割り出し、それに見合わせた振動エネルギーを送りこんで文字通りブレイク——破壊する魔法で、接触時にほんの僅か時の隙間ができるがゆえ難度は高いが、魔力消費量は少なめであり、破壊力も折り紙付きだ。

クロノがその強震なる鉄拳で打ち上げると、ほんの一刻置いて勇夜もその場から跳び上がり。

「デエアー!」

上空へと飛ぶ勢いが弱まり微かなに宙に静止した瞬間、彼からの止めた見事な縦回転のムーンサルトキックが決まった。

影は真っ直ぐ斜線を描いて、地面に激突。

「バインドー!」

お返しとばかり、クロノは石畳に生成した魔法陣からのチェーント

イプ、リングタイプ、立方タイプの種別にして3つ、数にして15もあるバインドを一瞬で形成して影を捕縛した。

影を石畳に打ち付けた勇夜はというと、綺麗にブロックの大地に着地すると、リンクから彼のデバイス——零牙の弓形態アローモードを出現させ、海上に向けて魔力製の弦を引き絞ると、光の矢が生成される。

「フォトンスピア——」

ここから約3, 8 km、海面から65 m。

千里眼による透視である標的を視覚化させ、視界をズームアップして捉えると、瞬時に矢の狙う先を定め。

「——ファイアー！」

光矢——フォトンスピアを打ち放った。

大気を切り裂いて突き進む矢は、周囲の風景にカモフラージュされていたサーチャー型魔力スフィアを貫き、瞬きの間のフラッシュの後、消滅した。

勇夜が今見せたフォトンスピアは、以前使用した射撃魔法——バニングスピアの簡易版と言える技で、威力は当然下がるが、チャージ時間も魔力消費量も短縮できるメリットがある。

そしてそのフォトンスピアで射抜いたサーチャーは、影の操り人が使っていたもの、勇夜を影で襲いながら、クロノを捕えようとバインドを張り続けられたカラクリの正体だ。

K mの域の距離なら心配ないと踏んだのだろうか、超能力の補助があるにしても、極太の魔力流や金色の稲妻の奔流よりも攻撃範囲の小さい光矢で強風が吹き荒れる悪天候な環境下の中、一矢でジュエルシードを二個も撃ち抜き封印させた勇夜の射撃スキルを前では、下策であると言わざるを得ない。

「お見事、だな」

魔力の縄の強度を維持しながら、今回も戦闘センスの高さを如何なく発揮した勇夜にクロノは賛辞の言葉を送る。

「そいつはこっちの台詞だ、まだ本調子じゃねえのによくやるよ」

勇夜も、まだコアが蒐集を受けた影響で縮小しているにも拘わら

ず、魔法を行使できた彼の技量に改めて感嘆していた。

魔法や超能力、身体機能諸々を含めた総合的な戦闘技能はやはり勇夜——ウルトラマンゼロの方が勝るが、魔法そのものの運用技術に関しては、クロノの方が上手であると彼も認めているからだ。

見事と言うべきは、むしろ二人のコンビネーション。

あの状況でマルチタスクを有効活用して連携プランを即座に編み上げて、息もピッタリ合わせて実行したのだから恐れ入る。

「『これ』が無ければ、流石にきつかったけどね、お陰で全部消費してしまつたよ」

勇夜から返された称賛を受けるクロノがポケットから取り出したのは、銀の色合いミッド式魔法陣のレリーフが刻まれた金属製のカード。

待機モードのS2Uではない。

簡易的なカートリッジと言える使い捨て式な魔力の電池で、名称は《バッテリーカード》。

管理局が古代ベルカのカートリッジシステムの研究過程で作り出したアイテムで、βカートリッジもこれをモデルの一つとして勇夜とリンクが設計した。

使い方次第では魔導師のコアに溜めこまれた魔力をほとんど使わずに魔法行使できるのだが、βカートリッジと同様に、実用化への道のりは遠い。

初期に造られたものは、魔力チャージに時間が掛かる反面、最大貯蔵量は少ないと実用性は皆無、ある程度問題が改善された現在も運用はシビアでβカートリッジ程ではないにしても、使える者は多くない。

現状はクロノのように技量が優れると判断された魔導師に試験的に配布されるに止まっている。

「それより、あの生物は……」

二人の地点からおよそ15m先に縛られている異形のローブの下に見える顔は、ハ虫類を人間に近づけたような容貌であった。

「恐竜って生き物は知ってるか？」

勇夜は警戒を怠らず、零牙をガンモードにして構えながら発問する。

「6500万年に絶滅したこの星のハ虫類生物の総称……だったな」

『この生命体は、異星人のバイオテクノロジーで人工進化された恐竜人類——デイノサウロイドです』

デイノサウロイドは、自らを《ナーガ》と自称し、後に《ナオフロンティアスペース》と呼称される世界の地球を侵略しようとした異星人に改造された恐竜で、元はトロオドンと名称を付けられた肉食恐竜だった。

生みの親であるナーガを“神”と崇めていた彼らは、サイボーグ怪獣に改造され、中性子爆弾を埋め込まれた同類たちを操り、地球生命を死滅させようとしたが、ウルトラマンティガの活躍で阻止され、彼らも自らの過ちに気づき新天地を求めて宇宙の大海原へと旅立つといったこのことだ。

「その恐竜人類とやらを操っていた何者かに、さっきの会話を聞かれたなんてことは…」

『ご心配なく、念の為と結界を張りつつ、周囲を警戒していたので』  
この場に限った話ではないが、今回も影の功労者はリンクだと言える。

夜天の書の主たるはやてが、実質対魔導書捜査チームの下で保護されている状況は、例の勢力にとっても看過できない事態。

ならば勇夜たちに監視の目を光らされているのでは？ と予測していたリンクは、用心の為と、ジョギングする二人に認識制限の結界を張り、会話も盗み聞きされるよう結界内の二人の声を遮断させる効果も付加し、読唇術で悟られる可能性も視野に入れて、結界の鏡面を細工して勇夜たちの口の動きが本来のものと違って見えるような措置もとっていた。

そして案の定二人の牽制に相手が乗って始まった戦闘の際も、クロノに次のバインドの発生予測地点を、勇夜にデイノサウロイドの詳細とサーチャーの所在の情報を伝え、こちらの勝利に一役以上買っている。



勇夜が「相棒」と称して信頼しているのも領ける働き振りだ。

「とりあえず、こいつもナオトに調べてもらうか」

まだ生きていたとはいえ、恐らくは連中の下っ端が功を焦った果てに自分らに捕えられた傀儡であるこのデキノサウロイドを解析したところで、一味についての情報まで掴むのは難しいが………こつちも時間が決して余裕がない………タイムリミットは確実に刻まれている。

ナハトによる浸食で、はやての肉体の限界が迫る期限のタイムリミットと

「八神一家」の想いを利用しようとする思惑があるのも確かな以上、手掛かりは多面的に、かつ多く早めに集めた方がいい。

勇夜はそう決め、念話でデキノサウロイドを捕えたことをナオトに連絡しようとした……矢先、彼の第六感とも呼べる直感が、不吉な大気を感じ取る。

不吉の正体をはつきりすべく、透視でデキノサウロイドの体内を目にする勇夜……その目が捉えたものが何なのか気づいた彼は――

「息吸い込め！」

「え？」

「いいから！ 飛びこむぞー！」

――端を折り過ぎな忠告をクロノに投げ、彼の背中側の襟元を掴むと、その場から跳躍してフェンスを飛び越える。

ジャンプした先にあるのは――海。

二人が海原へ降下した時、デキノサウロイドの肉体は、胸部から全身にかけて橙色に発光し出し、勇夜たちの体が、足から海中へと入り込み潜水しようとしたのと同時刻――スパークが煌めき、瞬く間に………大爆発が起きた。

耳の内部を乱れ切りさせかねない重くて、大地だけでなく大気すら震撼させかねない爆音を乗せて、焔の荒波は全方位に向けて広がって

いき、うねりを上げて巨大化していく爆炎の規模は、爆心地から半径40m以上、火柱の高さはおよそ60mと、そこらのウルトラマンたちの背丈よりも天高く夜天へと昇っていった。

火柱を超えて、小山ほどの大きさまで膨張した大火は、爆発の体力をそこで使い果たし、そこから火の勢いは急速に縮小化。

その時、海中から断続的に閃光が迸ったかとおもうと、金色の光球が海面を突き破って飛び上がり、一旦石畳に降り立ち、光の中からクロノが出てきた。

もう一度宙へと垂直に翔ける光球は20mの高度に静止すると、光は球状から人型に形状変化していき、輝きが消えるとウルトラマンゼロが姿を現した。

彼の金色の目には、爆心地からのものと、爆炎で木々に燃え移った残り火たちがゆらめく様が映っている。

「ウルトラ——」

ゼロは両腕を真上に伸ばし、一度掌を重ねてから腕を扇状に広げると、右耳の横の位置で手を合掌。

「——フロスト！」

火の上がる方向へ腕を向けると、手先から白い冷凍ガスが発射された。

ガスのシャワーはまず森を焼く炎へと降り注ぎ、ゼロは手先を動かして隅々まで消していき、次に爆心地の石畳へと発射先を変え、完全に爆発の炎を消失させる。

ウルトラフロストによって全ての火が消火されたと確認すると、ゼロはゆっくりと降下して着地し、全身に光を覆わせ、一瞬の発光の後、その身を人間体

——勇夜の姿に戻した。

「アクション映画みてえな真似させちまったな、ごめん」

「詫びる必要はないよ、あの状況下では妥当な判断だ」

背後に立つクロノへ振り向き、歩みながら彼ごと海にダイビングした自らの行為を詫び、災難な目に遭ったと言える身ながら、クロノは理性的に返す。

爆発の猛火から免れる手段として、ダイビングを選んだ勇夜の根拠を一つ一つ上げると。

爆発までの時間が早い上範囲が広く、その場からの飛行も走行も、転移による退避さえ間にあわない。

ゼロに変身して防護する手もあったが、まず変身し、そこからバリアを張るという二重のタイムロスが起きてしまう。

さらに結界の特性として、形成した魔導師が一人な場合、空間維持の為術者は必ず結界内にいなければならない、もし術者が外に出ると結界が強制解除される。

それと、結界内部で起きた固形物の破壊は現実には引き継がれないが、火の場合解除すると現実世界に飛び火してしまう。

人間体時でもバリアは張れたが、水の中の方が自身もクロノも火竜の猛威から身を守れる。

よって勇夜は、比較的リスクが小さく、確実に爆発の猛火から逃れる一手として、一旦水中潜行して避難する方を選んだわけだ。

クロノは勇夜の機転の根拠が分かっていたから、びしょ濡れな状態ながら不満を口にしなかった。

濡れネズミと化した体と服の対処も問題無い。

二人は自分の手を服越しの肌につけると、接触部に掌よりやや大きい魔法陣が現れると、両者の服から蒸気が上がった。

クロノが先に使用したブレイクインパルスにも使われる振動エネルギーを応用し、付着した水分を蒸発させたのである。

「しかし一体、どうやってたらあれ程の爆発を……」

今の業火が、自分たちに情報を掴ませないように仕組んだ証拠隠滅なのははつきりしている。

分からないのは………どういう原理であれだけの規模の火柱を上げられたのか？

「それは………な………」

『マスターが透視で捉えたティノサウロイドの体内を分析したところ――』

爆破の謎はリンクが説明してくれた。

まず結界魔法で高圧縮された火炎を魔力障壁で球状に包み、その上に重ねる形で同様に高密度に凝縮された酸素を障壁で囲む。

そして、二つの障壁を内郭から外郭の順で解除し、無理やり敷き詰められた炎と酸素を掻き合わせたことで、先の大爆発が起きた……とリンクのアナライズにより判明された。

「魔法を使った……生体爆弾……ということか？」

『……はい』

爆発の謎解きを聞かされた二人は……何も言葉にできずに黙ってしまう。

なぜなら、あのディノサウロイドもまた、魔法世界の技術によって生み出されたクローン生物な筈であり、その命に引導を渡した大火は、かの世界では“グリーンエネルギー”と謳われてきた技術で作られた——“生体爆弾”——であるという事実を突きつけられたからだ。

その苦味を噛みしめると同時に、二人の瞳に決意の眼力が高まる。夜天の魔導書と、正負含めた縁を持つ人たちの為にも……この事件の真の黒幕たる存在の思うようには、絶対にさせない——という、彼らの意志が顕現した眼光であった。

「ごめんなのは、少し待たせちゃって」

「うんうん、じゃあ行くこう」

勇夜たちの夜天の戦闘から、数時間後。

冬の寒空特有の晴天の下、海鳴での住まいであるマンションから出てきたフェイトは、表門で待ち合わせていたのはと一緒には、通学に使う路線バスの停車場へと向かう。

ちなみに、習慣になっているものの、この日に限って言えば二人が直に顔を合わせるの二度目。

一度目は無論、その毎朝の習慣となっている裏山での特訓、昨日までとは違う点も込みで。

相違点は今日からは教官に相当する存在がおおとりゲンことウル

トラマンレオから強化された彼女たちのインテリジェントデバイスである。

こうした教える側の交代がされたのは、βカートリッジが搭載された愛機たちを十全に使えるようするというのが特訓の主な趣旨だったからだ。

厳格なゲンの指導は、その主旨以上のものを結果として彼女らに齎したとも述べておこう。

一方で今日からの訓練の詳細な模様だが、今回は控えさせて頂く。

「はやてちゃん、今朝はどうしてた？」

なのはは昨日からフェイトたちの住まいに一時居候し、家出中のはやてについて話題を切り出した。

前日、偶然に鉢合わせた勇夜たちに「帰りたくない」と縋ってきた彼女の心情も二人には気がかりとなっていているのだが。

「あからさまに、落ちこんでる様子はみせなかったけど」

一番彼女たちが心配しているのは、昨夜に勇夜と久遠の助力ではやての意識の内部に潜行して見た夜天の書の過去。

途中ノンレム睡眠への移行の影響か、夢の中で眠ってしまったが、彼女もまた……その過去を間近で見てしまった。

「多分……あの夢のこと、覚えてるかもしれない」

意識的に他人の夢に入り目の当たりにしたフェイトたちと違い、半ば無意識に覗き見たはやてなら、夢の内容を目覚めた時には忘れている可能性もあった。

でもフェイトは、今朝一緒に朝食を食べた時に直感で……はつきり覚えているのかもしれないと考えていた。

その時の彼女から、一種の既知感というものを感じ取ったからだ。

姉の記憶にいた過去の「優しい母」を取り戻そうとする余り、自分を押し殺して、傷つけて……攻めてばかりで、誰にも助けを求められずにいた自分と似た感覚を。

身近にいた家族にさえ頼れずにいる今のはやてに、何かしてやれることは無いだろうか？

前にアリシアに言われた様に、自分たちができる何かがあるのだから

ら。

今はまだ、片鱗すら掴めぬ状況、だが以前の勇夜の言葉の通り、どうにか自分たちで見つけ出さなければ。

数ある選択肢の一つでしかなかった「戦うこと」にばかり拘っていた少し前の自分よりは、その方法を見つけやすくしている……とは思いうし、それこそ勇夜たちは戦闘以外の手段で手掛かりを見つけたのだから、土台無理な話じゃない。

「あ、そうだ、折角だからアリサちゃんとすずかちゃんとか、フェイトちゃんの家遊びに行ってもいい？ はやてちゃんとも一緒に」

「いいね、私も賛成」

なのはの笑みを浮かべての提案に、フェイトが微笑み返す。

現になのはがその一つを提示してくれた。

一時しのぎでしかないかもしれないけど、独りで耐えている時よりは、はやての心の負担を少しでも和らいであげることができると答だ。

となのはと談話して思案する内にバス亭に着いていた。

丁度、聖祥大行きのバスも良いタイミングで来て停車し、二人は親友達が待つ車内へ乗車した。

フェイトたちの通学風景から、さらに時が刻まれて日本時間なら午後に移行された時間帯にて。

いきなり描写を高跳びして見せるのを了承してほしい。

太陽系第4惑星——火星。

遠い未来の先では、地球の人類にとって新天地となるであろう惑星。

その赤褐色の堅い岩石が星全体に広がる大地のある一端——人類からはアレス谷と呼ばれる地帯に、赤い火炎の球体が、地響きと噴煙を宙に舞い散らせて力強く降り立った。

火炎球は消え、中から巨人が姿を現す。

炎の戦士——グレンファイヤー。

そして彼がここに来るのを待っている巨人もいた。

グレンに背中を見せていた彼は、振り返って正面に相手を見据える。

若きウルトラ戦士——ウルトラマンゼロ。

赤目の砂塵が、地球より薄い大気の波で飛び交う大地の上を舞台に、これで二度目となる、この次元での二人の再会のご対面であった。

つづく。

## STAGE 45 — 男泣き

STAGE 45 — 男泣き

擬音として表すなら、カキーンという音が鳴った。

何の音かというのと、飛んでくるボールをバットで思いつきり打ったもの。

打たれたボールは斜線を描いて飛び、緑色のネットに進行を阻まれて落ちていった。

打者は再びバットを構える。

真正面に相対する投手である投球マシンは、プロの選手でもその域に至るのは稀有な時速約150kmのボールを投げた。

ストリートとは言え、打者は豪速球を糸も簡単にクリティカルヒット、網に張られている300と数字が書かれたロゴのど真ん中に命中した。

説明が遅れたが、ここは海鳴市内にあるバッティングセンター。

敷地面積は結構広く、センター自体10年近く前からあるが最近新装開店したので施設は綺麗で新しい。

そこでさつきから高得点を連続マークしていたのは、ストレス発散の目的で球を打つ人間体時のグレンファイヤー——八神紅蓮。

学校帰りで、学ランのボタンの半分を外してラフに着込む彼は次のボールを打つべく構えるが、今まで一定のリズムで投球してきたマシンが球を寄越してこない。

「つれねえな……」

ほんの一間置いて、紅蓮は一通り料金払った分の球を打ち尽くしたと気づき、溜め息を漏らして、打席フロアから出ようとした。

と、その時紅蓮は何か頭に引つかかりを感じ、緑の網越しの朱味がかった空を見上げると、その場を走り出す。

センターの外に出て、改めて空に現れたものを注視した。

アルファベットのE、J、Hと似たものに、一本線を引いたような巨大で光る文字。



紅蓮にしか見えないその字体の正体を察した瞬間、紅蓮は再び全力疾走し出した。

紅蓮が見たのは、ウルトラマンゼロ専用のウルトラサインだった。どうやらサインからのメッセージで彼に呼ばれたようなのだが、一通りの少ない八束神社方面へと行くあたり、行き先の場所に一癖あるようだ。

何十段もある石の階段を二回のジャンプで一気に飛び越え、久遠と始めて出会った神社の社の、さらに奥の方の森へと進む。

木々の緑の密度が、空間の明度に影響するほど濃くなつた地点で立ち止まった紅蓮は、制服の内ポケットからあるものを取り出した。

彼の武器と同名の変身道具——ファイヤースティック。

「ビィィィック——ファイヤアアアア——!!!」

紅蓮はスティックを空に翳すと、先端から放たれる炎色の光が彼を包み込み、光体は夕暮れの空に向かって飛び立った。

光は途中紅蓮に煌めく炎と化して加速、瞬く間に大気圏を突破し、月を通り過ぎた後から炎球は巨大化してさらにスピードを上げる。その炎の行き先こそ——火星。

そうしてグレンファイヤーは火星の大地に降り立ち、先に地上で待っていたウルトラマンゼロと対峙。

“視線”……とも呼称される目から出る見えない光線をぶつけ合う二人は、各々の構え——ファイティングポーズをとり。

「デエア！」

「おおおしやあああ——！」

両者は、戦いのゴングを鳴らした。

ゼロとグレン、それぞれの右手からの正拳が真つ向から激突。

地球より薄味ながら、空気が漂う火星の宙は大きく揺れ、乱れ、衝撃は赤い大地を文字通り震撼させる。

今の拳の衝突を皮切りに起こるは、時折キツクやチョップを交えながら拳打の応酬。

約50mもある体躯だと言うのに、振るわれる打撃は重いだけでなく速い……信じられないほどのフットワークの軽さだ。

遠目からでも、この戦闘を肉眼でご覧になれば、並の者では彼らから発される圧迫感に立つことも維持できなくなるかもしれない。

炎の戦士の殴打を防いだゼロは上段から手刀を振り下ろし、グレンは両腕をクロスさせて受け止める。

ゼロの右手とグレンの両手が衝突した瞬間、ゼロは左手を下段から打ち上げ交差する両腕を払い、バランスを揺らがせたところに左足による胴回し回転蹴りを振るった。

「おおおつとー！」

グレンは超低空飛行で後退して回避、すかさず飛び上がり。

「ファイヤアアア——バアアト！」

炎を凝固させたような頭を燃え上がらせ、バット——butt、頭突きを敢行。

しかしそれはあつさり身を回転させたゼロにかわされ、丁度背中合わせになったところに彼からの裏拳をくらった。

「いっててってえええ……」

「デエリヤ！」

追撃の初手として、ゼロは振り向きざまに右のミドルキックを振る

う——が、グレンも簡単に追い打ちを貰うほど柔では無い。

蹴りの衝撃はある程度くらいながらも、ゼロの右脚を両の手でホルド。

「そおおおらっよー！」

驚掴みしたまま思いつきり両腕を振り上げ、ゼロを放り投げるグレン。

宙に浮かされるゼロだったが直ぐに姿勢制御し、身を縦回転、その勢いと反重力エネルギーの放出にする推進力を相乗させて連続に蹴り付ける、対するグレンはパンチの連打でそれを迎撃した。

相手の握り拳を足場代わりに、ゼロはジャンプして宙返り、相手の背後に逆さまに周り込みながらのスピンドバックブロー。グレンも振り返りながらバックブローで打ち合う。

再び飛び上がりながら、虹状に舞い後退するゼロ。

「もらったああああー！！！！」

「のああー！」

ここからは自分の攻撃のターンとばかり、グレンは急加速して踏み込み着地したてのゼロをタックル。

「イッチいいいニイいいいサアアアアン——シイイー！！」

スピードを維持して押し込み、ゼロの下腹にアッパーのラッシュをぶち込む。

続けて前傾した後頭部で腹を持ちあげ、起き上がる勢いで背後に反り投げた。

ゼロの体は大地に打ちつけられる……かと思われたが、反重力エネルギーで身を浮かせ。

「そらよー！」

高速移動術——マツハムーブでグレンの側面に瞬時に回り込んでドロップキックをお見舞い。

「ああああええええー！！！！」

防御する間もなく受けたゼロの一撃にグレンは突き飛ばされ、

「あたー！ いてえー！ ほおー！」

途中地面を何度ものた打って、計約百数十mの距離を転がった。







「ハア！」

対するゼロは左腕を胸の前で横方向に添え、右の掌をリンク——ウルティメイトブレスレットの上に翳すと、ブレスのクリスタルからカラータイマー程の大きな光球が現れた。

彼は一旦包むように両手で光を囲み、手を広げる……すると光球も棒状に伸び、それは一つの武器として具現化。

トリコロールカラーな銀の槍、ウルトラゼロランス、ゼロが初めて異世界の旅に出る日にセブンから授かったウルトラブレスレットの一形態。

かつてノアからイージスを託された時、ブレスレットに変化する際ウルトラブレスレットが融合したのだが、腕輪への形態変化とエネルギー貯蔵と物体格納機能（これらはリンクによって賄える）が消失したと引き換えに今でもゼロアイ同様、リンクから取り出し武器として使える。

ランスをゼロは手に取ると、円を描いて振り回した後、仁王構えを取る。

名称の通り、仁王——金剛力士のように相手に大きく広げた掌を見せ、長得物は腰にそえる構えだ。

そしてゼロは甲をグレンに見せるよう手の向きを変え、扇よろしく広げた指を閉じ、手招きをした。

いわゆる、挑発ってやつである。

「そうこなくっちゃな！　『アングダーソン君』！」

彼の長髪から、仮想空間が舞台なSF映画の主人公を浮かべたグレンは、意気揚々と踏み込み、ゼロも加速。

お互いの棒状武器が激突。

地球より三分の一な大気濃度とはいえ、音速の壁を簡単に突破した超人たちは、空中で何度も擦れ違いながら得物をぶつけ合う。

段々と高度は下がっていき、やがて同時に地面をスライディングして着地。

場所を地上に移しつつも、激しい戦闘は続く。

グレンは一見リーチ範囲内からかけ離れた距離から、ゼロ目がけて











激闘による疲れで中々立てないので、火星の地に尻持ち着いての談話。

「ひっで〜よゼロちゃん、しょっぱなからアクセル全開で向かってきやがって……」

「だってよ、下手に手加減したらお前の闘志に火が点いて、結局本気にやる羽目になるだろ？」

「あ……それもそっか、昔よりもっと強くなったしクールになったけど、ゼロちゃんも変わんねえところあるよな、押しの強さとか」

「そうか？」

「そうだよ、『用がないなら火星に今すぐ来い、追伸、用事があっても必ず来い』、俺はジョン・ワトソンかっての」

今の言葉は、ウルトラサインでグレンに送られた伝言。

こんなアバウトな内容でなぜ迷わずゼロのいる地点に到着できたのは、彼から発するエネルギーの波動が目印となったからが答え。

追加の補足として、ウルトラサインでグレンを呼べるなら、なぜ最初からやらなかった理由は、今日以前に伝言送っても、彼の義理堅さゆえに騎士たちを庇って応えてくれない懸念があったから。

久遠がパイプ役を担い、『闇の書』の謎がそれなりに明らかになった今だから、こうして二人は対面できたのだ。

「元ネタ知ってたのか？」

「まだア○アンマンな方の映画しか見てねえけど、あれのネタ元がホームズのだったのは知ってるぜ」

現状のお互いの立場も立場で、もう11年も会えなかったというのに、そんな空白の時間があつたとは思えないくらい、ごく自然と二人は笑い浮かべて駄弁り合っていた。

疲労の重みが和らいできた体を立ち上がらせてグレンに寄って、手を差し伸べるゼロ。

「お、あんがと、ふう〜〜」

彼の手を借り、グレンも自らの足を大地に踏みしめる。

「海鳴の時は言えなかったけど……お久さだよ、ウルトラマンゼロ」「こちらこそだ、グレンファイヤー」



「ほ、本当なのか!？」

今度はグレンの発言にゼロは驚愕させられた。

11年前に次元振に巻き込まれ、仲間ともはぐれて次元の狭間で彷徨っていた時、ノアが彼の前に姿を現し、人間体への変身能力と変身アイテムを授けてくれたらしいのだ。

そしてその時グレンのいた位置から近い次元の惑星——すなわち地球に辿りついた。

「ガキの姿で地球に放り出された時は、ノアのバカヤローと言いたくなっただけど……今思えば色々助かったぜ」

「向こうの生活とか文化とかよく知らない身だったからな俺たち、子どもになっちまったのはむしろ幸運さ」

体が幼児化したことが、周囲からは無知であることに比較的寛容になつてくれるメリットとなり、それによつて迷い込んだ先の世界の日常に容易に溶け込めて、11年の月日を過ごせたのは、確かに幸いと言えた。

「んでリヒちゃんも地球……それも海鳴に飛ばされたんだろ？ これがほんとの灯台もと暮らしてて奴だな」

「そしてジャンボットは、光の国の近場の宙域と」

「なあ、ここ11年でジャンちゃんに何か変わったところあったか？」

「初めて会った時より、柔らかくなつたな、頭も性格も……でも『焼き鳥』って言われたらやっぱ怒りそう」

「そっか……それ聞いて安心安心、これで心おきなく焼き鳥と言えるぞ」

『無礼者！ 私は焼き鳥では無い！ 10年以上経つてまだ覚えられないのか!』

「うわー!」

突然ジャンボットの怒鳴り声が響き、周りをキョロキョロするグレン。

「あいつも今火星（ここ）にいんのか!? どこだどこおー!」

「いねえよ、今のは俺の声真似だ」

そう、今のジャンの台詞は念力を活用しながら持前の演技力で声色

も言葉遣いそっくり再現したゼロのモノマネ芸人顔負けの声真似であつた。

種明かしされたグレンはほっとして息を零す。

「おどかすなよ……あゝまだ心臓バクバクする……」

「たまにはちやんと『ジャンボット』と呼んでやれよ」

「まあ、そいつは偶にな♪ タ・マ・ニ♪」

「つたく……」

驚かされても尚懲りない彼のこだわりっ振りに、ゼロは苦笑いをした。

白状すればゼロも、グレンとジャンの漫才風凸凹コンビなやり取りは嫌いではなく、むしろ彼らの恒例行事として楽しみ、またそれが近いうちに見られると思うだけで胸が期待で躍らしそうになってるのも事実である。

もう少しこうして雑談を続けたいのは山々だったが、そろそろ本題に入った方が良い。

その本題の為に今日、グレンをここに呼んだのだから。

「それでさ、お前を呼んだ……わけなんだけど……」

「ざっくり言つて『夜天の書』だろ？ 察しは付いたよ」

ゼロの鉄面な顔と声に書かれていたものを読み取つたのだろう。

大まかながら彼が上げようとした話題内容を、グレンは当ててみせた。

数秒前まで談笑していた二人の周りの空気が、黒味を帯びた重量感があるものへと変質していく。

「久遠から粗方聞いたさ、あの本は中身はバグだらけで、『闇の書』つてのは『ファツ○ンジ○ツプ』みてえな意味で、本の中にいるあいつはナハト……ナハト……ナハトの後なんてつたけ？」

「ナハトヴァール」

「そう、そのナハトヴァールとかいう超ヤンデレ野郎が全部ページ埋めたら大暴れして次の世界に……なんてループを繰り返して、あいつはどうすることもできないし……騎士（あいつら）はすっかり忘れちまつてるし……はやて、なんて……」

「残念だが、シグナムたちが選んじまった方法じゃ、お前らの願いは………叶わない………それどころか………ベットの所で、安らかに眠れもしない」だろうさ」

流石に気が引ける。

たとえ絶対「彼ら」を救うを心に決め、自分たちが見つつけ出したものがほぼ純然たる真実でも、当人たちにとって無情で残酷過ぎる宣告を伝えなければならぬのは………その相手が仲間であるのが拍車を掛けてきた。

末期の病気を宣告しなければならぬ医師、それこそ何年もこいつの妹をサポートしてきた石田先生は、きつとこんな胸の奥深くを圧迫される気持ちで………グレンたちにはやてを蝕む病魔を伝えてきたのだと感じた。

でもせめて、グレンにはちゃんとそれを今話しておかなければならない。

伝えるべきその真実が、自分の使う力や武器よりも深層に心を抉る魔を秘めた凶器だったとしても。

「このことも久遠から聞いたと思うけど、今はやては俺たちが共用で住んでるマンションで保護してる、今頃はフェイトたちと一緒に遊んでるところだ………本当なら昨日の内に家に返したかったけど」

「元気にしてんなら、それでいいさ」

「騎士たちの方は？」

「誤魔化す相手が家にいないもんだから、もう一日中蒐集三昧………ありやお前と初対面の時の俺以上に強情になってるわな」

「そうか………例の連中からコンタクトを受けたりとかは」

「ゼロたちをやり合った時に逃げるの手伝ってくれた以外はさっぱり、怪獣なんか出してくっから胡散臭さはぶんぶんするけど」

連中の動向にも気を配り対策も整えるのも忘れずに、無限書庫での探索で、ヴォルケンリッターを納得させるのに充分証拠を揃えるまでは、やはり静観するしかないか、「奴ら」も慎重になるくらいナハトヴァールは厄介な存在。

下手な一手じゃ、はやてを生贄にし、「彼女」の力を使ってまたナ



ハトが悲劇と災禍のループを引き起こすのを許してしまう。

「今日はその話この辺にしようぜ、まだ何もやりようがねえんだろ？」

「お、おう」

突然のグレンによる話題転換にゼロは戸惑う。

相手が余りに無理やり、お題を変えようとしたからだ。

今日の時点で新たに手掛かりが見つかっていない以上、魔導書を主題にしても会話は続きそうにないし、ここは流れを合わせることにした。

「えーとだな……なんでまた場所を火星にしたんだ？」

今質問を受けたその理由を上げると。

人の目を気にせず、思う存分戦える場所だったのも一つだが、どことなく火星の地表が初めて会ったというか……やり合ったとも言えなくないが、スペーススニトロメタンに漂う小惑星に似た感じがあった……ってのもある。

「そういうや、名前なんだっけ？ 昔ゼロちゃんとも共闘して、火星で初めて変身したつーウルトラマン……」

「あ、ダイナのことか？」

グレンに言われるまで気がつかなかったが、この星は確かに、ダイナ——アスカ・シンが初めてウルトラマンとなった……彼の「はじめりの場所」。

「あー思い出した、ダイナミックでダイナマイトなウルトラマンだからダイナだったよな？」

「ああ」

命名者は、アスカとは仲間と同僚……正確には先輩な女性隊員だった筈だ。

「まさか俺たちもダイナと同じ目に遭うとは思わなかったな……」

言われてみれば、自分たちとダイナは、同じ境遇を受けている。

異世界に飛ばされるという境遇。

ネオフロンティアスペースの太陽系を呑みこもうとした、スフィアという生命体の親玉を仲間たちとともに倒した際、ダイナはその時発生したワームホールのブラックホール並の高重力に巻き込まれて、異

なる次元の宇宙に飛ばされてしまったのだ。

最初に彼が辿りついたのが、自身の生まれ故郷がある宇宙だった。かのギャラクシークライシスでも、父たちと一緒に戦ったらしい。あの怪獣墓場の浮遊大陸でのベリアルとの戦いでも、ペンドラゴンのクルーたちを案内して現れ、初めてウルトラマンとして初戦を飾った自分と共闘している。

ふと、今ダイナはどこで何をしているのか、気になった。ネオフロンティアスペースに帰ったのか……いや、違う。

根拠はないのに、まだ色んな世界を旅して廻っているような気がした。

怪獣墓場はあらゆる次元に存在し、世界と世界を繋ぐ扉としての一面もある。

それを使つて、今も次元規模の流浪の旅を続けているのかもしれない。

「あ、あくあく青空がくくく」

「青空が何だつて？」

などと思案していると、歌を口ずさもうとしていたグレンの声が聞こえた。

歌詞が思い出せないのか、最初の数フレーズで詰まる有り様であったが。

「いや、ダイナのいた世界で有名ならしい歌唄うつもりが、さっぱり忘れちまつてて……悪いけどリードボーカルしてくんね？　ゼロちゃん歌上手いだろ？」

「いいぜ、すうくくく」

前準備に深呼吸をする。

ダイナのことを考えていたら、無性に本人から聞いた「あの曲」を歌いたくなり、自分が先導する形で、グレンと一緒に歌い始める。

久しぶりなので、自分も歌詞どころかメロディも忘れてしまった懸念もあったが、一片の欠落もなく全部覚えていた。

伴走者もない、観客と言えばリンクぐらいしかいない中、小さな音楽界は続いていく。

結局、フルコーラス全部歌い切ってしまった。

終わったなら歌の感想を聞くつもりだったのだが、最後のサビに入る頃には、それはやめようと決めた。

なぜなら――

「グレン……」

「泣いてるわけじゃ……ねえぞ……目にゴミが入っただけだ……」

――あの歌の詩文が涙線を刺激させたのか、一緒に歌ったグレンの顔から、火の粒子でできた涙が流れ出していたからだった。

意地張ってゴミが原因だとか言ってるけど、咽返して泣いている姿のせいで、見え透いた嘘であるのがバレバレだ。

「ゴミが出るまで待つてるよ」

「……すまねえ……」

敢えて見え見えの嘘に付き合っただけながら、ゼロは自らの手をグレンの肩にそっと置き、彼の涙する姿を見て、自分の想像に間違いはなかったんだと、確信する。

八神家宅の屋根の下で、血縁なくとも家族として暮らしてきたグレンたちの団欒の眩さと。

それと……その生活がとても眩過ぎたばかりに、少しずつそれが崩れていく様子を、己の無力さをまざまざと直視されながら、今の今までずっと耐えてきたことを。

拳を交わしてあげなければ、こうして涙すら流せずに、彼の心を追い込んでいったかもしれない。

グレンの男泣きは、それだけ心中に大量で重過ぎる淀みを溜めこんでいたと証明していた。

手の温かみを送るゼロは、半年前のフェイトの時のように、グレンの顔から流れ出る様々な思いを、黙して受け止める。

同時に、ある家族をみんな救う決意を、より強めさせていった。



## STAGE 46 — 依怙地

著名な画家が描いた絵画のものと錯覚させられそうな、澄み渡る色をした青空。アクセントとして空に飾られているのは、小から中規模の雲たちと、計3つは惑星を周回する衛星。

地上からの視点では、どこまでも黄金に近い色合いな砂ばかりの地平線。

管理世界が命名したこの星は第42無人世界、惑星デザイナー。

とても人が住むには適していない過酷極まる環境な灼熱の惑星。

その星の一地帯で、地面が大きく揺れを起こした。

星そのものが引き起こす地震ではない。

非常に巨躯な物体が、大地にぶつかって発生した振動だ。

物体は巨大生物だった。

ロープ状の体躯で、一部の体が地の中にいるので、正確な大きさは測れないが、地上に出ている部分だけでも100mはある。

光沢ある茶色で、甲虫のような円筒状の殻な表皮が、生物自身の動きを妨げぬよう均等に区分されて覆われ、下部には多数の節足。

目は黄緑色な複眼、口は全ての脊椎動物共通の縦開きでなく、横に開くタイプで、左右に大きく牙が伸びていた。

この節足動物の特徴を備えたリンカーコアを宿し魔法生物——マギティアの一種。

管理世界で付けられた固有名名称は、バルデイス。

普段は地中に棲息する種で、自らの縄張りに踏み入れた者には問答無用で襲う凶暴な生命体だ。

今この星では、肉体が魔力でできているという体質等は別にして、ある“人間”たちが度々出入りしている。

「ヴィータが手こずるのも……無理はなかったな」

その一人——シグナムが、バルデイスの一体を瀕死寸前に追い込んだのだ。

戦闘不能に追い込めたものの……連日続く連戦による疲労と、バラデイスの巨体と凶暴性に裏打ちされた戦闘能力によって苦戦させら

れながらの辛勝。

彼女の騎士甲冑——バリアジャケットは全身汚れと砂と損傷に塗れている。

魔の鎧の下に隠れた彼女の皮膚も、戦闘のダメージで綺麗とは言い難い。

特に自由に伸ばせるバルデイスの節足の縄に全身を羽交い絞めされていた為に、全身が痣だらけであった。

傷だらけのシグナムは、自身の掌の上に……当人たちが真の名を忘れてしまった魔導書を出現させ、ページが開かれる。

『Sammlung』

日本語で、『蒐集』を意味し、魔力を奪う一方的な通告にも等しい言葉が、無機的で……無情な声で、魔導書から発された。

バルデイスの蛇行する巨体から、リンカーコアの光球が現れ、そこから漏れる粒子たちが書のページへと集っていく。

蒐集中、対象たる魔力保有生命体が喩え様のない激痛に苛まれるのはどの生物にも平等に当てはまり、この巨大生物ももがき苦しみ、天を切り裂かんばかりの重い悲鳴を上げていた。

悲鳴はまるで、こんな理不尽をしいた存在への恨みが呪詛が籠もった呪詛のようにも聞こえてくる。

『vollendung』

書が『完了』と発声し、バルデイスのコアに蓄積されていた魔力は根こそぎ強奪され、白紙のページは魔法陣とベルカ語の文字たちに埋め尽くされていき、蒐集の苦しみからある意味解放された巨体は、砂塵の大地に爆鳴を轟かせて倒れた。

満身創痍なシグナムは魔導書を手に取り、白紙の頁数を数え、完成に必要な残りの魔力量を確認する。

現在466ページ。

自身が集めた分と、他の世界で集めている仲間の分を合わせて、今日は34ページは刻めていた。

成果としては上々な方だ。

残りは200ページ……全ページの3分の1を切った。

調子が良い日は続けば、12月中には蒐集作業を終了できるだろう。

そうすれば、主はやての体を命を蝕む「呪い」を消すことができる………。筈だと言うのに、終着点が見えてきたというのに、素直に喜べそうになかった。

まだ予断は許されないのも、理由の一つではあるのだが……最も強い理由は、少なからず、自分たちが選んだ手段に対し、前より確実な方法であると、断言できなくなっていること。

すなわち、蒐集がはやてを救う術だと、確信が持てなくなっていた。迷いを齎す要素は、幾重にもある。

内一つを挙げるとすれば——諸星勇夜。

シグナムが一昨日の海鳴で激闘を繰り広げた少年。

魔導書の休眠期間を踏まえても、何百年と戦いに明け暮れる日々を生きていた彼女でも舌を巻く戦闘能力を彼は持っていた。

烈火の将が今まで相まみえてきた者たちの中では、掛け値なしにトップクラス、彼と並ぶかそれ以上の存在は、シグナムと交戦したという条件内であれば、「ウルトラマンゼロ」ぐらいしかいない。

異名の「魔導殺し」に偽りは無い、並の魔導師相手には魔法に依らずとも一ひねりしてしまうだろう。

その戦い様は、剛胆で怜悧、大胆にして優美。

振るわれる拳は力強く熱気溢れ、逆に鞘から抜く刀の一閃は氷の結晶のように流麗。

生物としての本能と言う名の直感と、人としての知性を上手く併用し、溶岩並みに熱い闘志を以て斬り込みながら、沈着さのある思考でコントロールして、逆境を打ち破ろうとする意志の強さ。

ほんの一面だけでは捉えられない多面的な戦闘技能は、相手が強者の上の上なほど異名の如く心中の火を燃え上げる一面を持つ彼女を昂ぶらせるまでにハイレベルであった。

戦闘の甘美な味に酔って、攻めに傾き過ぎたのもあって、一歩間違えれば……いや、あの横槍が無ければ、敗北していたかもしれない。

だが、あの時諸星勇夜が見せた力には、単純な技量の高さだけでは

説明できない「なにか」がある………何と表現すべきか………彼の雄姿の内には、闘志や勝利を掴もうとする意気とは別に、局から受けであろう依頼の遂行を超えて、是が非でも蒐集行為を止めようとする“感情”を、彼女の直感が見通していた。

その感情の具体的な形までは分からない、しいて言えば………騎士たちの蒐集行為を、災いを呼び起こす“起爆剤”として認識しているようであるのだ。

その彼を、一方的に圧倒してしまつたのは――

破壊など不可能と思わせる強固なバリア。

エネルギーの吸収と反射。

素早い上、連続で使用できるテレポルト。

それらの力を惜しげもなく使つて戦場を掻きまわし、電子音に似た不気味な泣鳴き声を発す、黒い異形の怪物。

普段なら、強敵たる存在と相対すれば熱く昂揚し高鳴る心は戦慄で冷え切り、明らかに“武者震い”とは全く異質な震えに苛まれていたと、今の自分は確信できる。

その瞬間の自分は、その震えの正体すら分からぬまま、足下に出現したミッド式の魔法陣で結界外に強制転移されてしまった。

あの怪物含めた一昨日自分たちの逃走補助に現れた生物たちも、1月末での戦闘で現れた巨大生物と同様、グレンたちのいた世界に棲息する生命体に違いない。

そしてその生命体の手綱を握っている存在は、自分たちにすら正体を隠し通しながら、蒐集に手を貸していると見て良い。

一番解せぬのは、そこだ。闇の書を扱えるのは主と選ばれた人間――つまり今ははやてのみで、その主すら完全に魔導書を覚醒し、管制人格たる“彼女”のサポートなしでは十全に扱えない。

逆に蒐集を終えなければ、それすらもままならない。

完成前にしても、完成後にしても、外部の者では魔導書の力を手中に収めることは不可能、ならば………自らをベールに包ませたまな奴らの目的は………あれほどの強大な生ける者を御するだけの術を持ち得ながら、やつらは自分たちに助力し、魔導書を完成させて一体何を



しようと言うのだ？

あの黒い怪物とは、また違った不気味さとうすら寒さを感じざるを得ない。

いつそ……はつきりと断じてくれた方が、まだ良いと考えてしまう。

主はやてたちに会うより昔、眠りから覚めている間は、それこそ歴代の主の命じられるまま人を殺め続けてきた。

現在まで恨まれる節は、いくらでもあった。

久遠の身を以て示してくれた戒めによって、我らの行為が新たな“恨み”を生む種をまくものだとし身に刻み、重々承知している。

それを覚悟の上で、また愛刀を手にとったのだ。

ただし……生まれつきの冷静を備えるザファイーラや自身はともかく、他の仲間たちが冷たき言葉に耐えられるか、怪しい。

八神家宅からそれ程離れていない公園で強制転移された時、一時は抜け殻のように放心していたヴィータも転移されてきた。

恐らく“遺族”の身でもある管理局の幼き執務官の執念に根負けし、グレンが助けに来てくれなければ、シヤマルはあえなく捕えられていた。

この半年で育まれた“心”は、確実に我らの枷となっている。

皆できるだけ表に出さぬよう心がけているが、昨日の主の家出は、その枷ともなっている心に追い打ちの負担となっているのも事実だ。

実を言えば、烈火の将も例外ではない。

具体的な形は分ならずとも、明確な根拠と意志を見せ、真つ向から蒐集を阻んできた諸星勇夜たち。

全く真意を見せぬまま、致命的な危機に陥った時にのみ、助け舟を出してくる者たち。

彼らの存在が、彼女の心中に小さくない不安を植え付け、それは“家族”の現状をも餌にし、大きくなっていく。

もし……もしも、主を救う為にとった選択が、何らかの災いを招く

——パンドラの箱——だとしたら。

脳内に生まれ育つ疑念を、シグナムは必死に振り払った。

落ち着け、何を考えている……仮にもリーダーたる己がこんな体たらくでどうする？

主はやてを救うには……我らより以前から主の家族であった者たちを悲しみの沼に沈ませないためには、この一手しかない。

「お前に殺めさせはしない——」

左手で持つ魔導書の中にいる「彼女」にシグナムは語りかける、

何より、まだ主から名を貰っていない「彼女」を目覚めさせなければ、彼女が主を殺してしまうことになるのだぞ。

「——主はやての……命を」

そんな結末には、断じて至らせない。

何としても、手遅れになる前に……魔導書の覚醒を完遂させる。

「すまない、もう少し……力を貸してくれるか？ レヴァンティン」

『ja』

相手が誰であろうと、それを阻もうとする者には、このレヴァンティンの刃で打ち払う。

特に……諸星勇夜と、ウルトラマンゼロ。

もしまた障害として目の前に現れるのならば、次は——必ず勝つ。

雨が降っている。

雷鳴と雷光を轟かす灰色の雲海から落ちて来る水流は多く、豪雨と呼べる雨足の強さであった。

大量の雨粒たちで視界は霞み、強い雨音はそれ以外の音を聴覚に伝達させにくくさせ、流が沁み込んだ草原の大地は、ぬかるみで不安定な状態だ。

第36 無人世界、惑星クライジユ。

ディザールとは反対に、緑の大地が溢れる星。

星内の、たつた今大雨に打たれる草原の上を、ヴィータは歩いてい

た。

彼女もまた……ボロボロだ。

甲冑のスカート裾は抉れるように破れ、紅い色の衣にはところどころ、それよりも暗い色味なヴィータの血が染み付いていた。

血は彼女の額からも流れ、幼い容貌がその痛々しさをより酷く見せる。

グラーフアイゼンを持つ体力も残ってないのか、泥の海と化した草原に愛機を引き摺り、重くなった脚を上げ、微々たる速さで進む。

水気で脆くなった泥は、一歩進み続ける度ヴィータの小さな足を捕まえようとし、それに抵抗する度に体力はさらに消費されていき、ついに泥濘に足が埋もれ、バランスを崩して前屈みに倒れてしまう。

うつ伏せに倒れたはずみで泥が口の中に入り、体が反射的にせき込み吐き出した。

血だらけな彼女の身体と甲冑は泥で黒ずみ、帽子に付けられている“のろいうさぎ”の顔人形にも沁みができていた。

ヴィータがこんな状態になっているのは、先刻のマギティアとの戦闘が原因。

彼女が戦ったのは、大きさは4〜5mくらいの猛禽類型、母親なメス。

当初はヴィータが圧倒。ダメージを負わせ、いつものように蒐集しようとした。

しかし、その時マギティアが育てていたひな鳥たちが、懇願とも見てとれる悲痛な鳴き声を発してきた。その声に一瞬気を取られたヴィータに、親鳥は傷だらけの身ながら必死の反撃を敢行、一糸報われたヴィータは止むおえず撤退し、途中から豪雨を浴びて今の泥水の大地に浸る状態となっている。

彼女が蒐集に逡巡し、親鳥の返り討ちを受けてしまったのは、雛鳥たちの悲鳴を聞いてしまっただけではない。

その声が耳に入り、雛たちの姿を視界に捉えた時……二つのイメージが浮かび、重なったのだ。

自分に襲われ追いつめられ、恐怖で顔を歪ませた——白い甲冑姿を

した魔導師で日本人の少女。

穏和さが形となったような顔を大粒の涙と痛哭でぐちやぐちやにして、必死に止めるよう叫ぶはやて。

彼女の心中で着実に育っていた生ける者から魔力を奪うこと含めた罪悪感が、この二つのイメージを形作り、体にも心にも小さくはない傷を刻ませた。

心身に尾を引く痛みは今も彼女の胸中に残留され、同時にこの雨並に冷たい現実をまざまざと知覚される。

今ならば……分かるんだ。

一昨日のあの二刀剣士の言葉は、警告だと。

敢えて偽悪的に“悪魔の仮面”を被って……あの辛辣な警告を伝えてきたのだと。

わざわざ久遠が、自ら魔導書の贄となつてくれたのに……剣士の悪魔的な物言いではつきり言われるまで、重みというやつから、目と耳を閉じていた。

全ての頁を蒐集し終えて、魔導書を完全に目覚めさせて、はやてに“真の主”になつてもらおう。

そうなつた時……はやてはどう思うだろう？

“多分”とか、“きつと”どころじゃない……絶対に、自分を攻めてしまう。

はやては“善意”が擬人化したくらいとても優しい子だから、自分の命が助かった引き換えに、大勢の人間が傷ついて……苦しんだことに対して、“自分のせい”だと苦しんでしまう。

昨日のはやての家出が、それを証明してるじゃないか。

はやては、結構勘が鋭いところがあるから、あの日……自分たちが家にいない間何をしたか、気づいてしまったんだ。

そのことにショック受けて、でもあたしらを攻める気にもなれなくて、分け分かんなくなつて一人、街の中彷徨うしかなかった。

昨日だけでも辛かった筈なのに……剣士の警鐘の通り、この先実行者である自分たちの主なはやてにも、恨み節吐く人たちだって……たくさん出てくる。

蒐集された人の悲鳴が魔力に宿って、耳にノイズといて響くくらい強い恨み節。

「うっとおおしい……………ああ！ うっとおおしい！」

特に自分なんざ、戦場で喚いてはイライラ発散して八つ当たりしてアイゼン振るってきたから、恨み買う心当たりは多過ぎる。

怨念塗れで、ナイフで抉られるに等しい心無い言葉の数々にも、自分がやらかしてしまった罪同然に、受け止めてしまう。

そして自傷を続ける余り、いつか笑うことすら忘れて、心を壊してしまう。

そうなったら……………流石に紅蓮も久遠も、私たちを許さないだろう。

今はそうでなくなつたって、この可能性が未来の現実に起きないなんて……………なんで保障できる？

体を打ちこまれる無数の雨に混じって、彼女自身の水も流れ出し始めた。

悔しい……………はやてを蝕む呪いを解く方法が、蒐集であることが。

悔しい……………救おうとするつもりが、逆に追い詰めてしまつてることが。

悔しい……………せつかく人並みの暖かい暮らしをくれた人たちに、

ヴィータの心情に惹かれてもしたのか、巨大な積乱雲から降る雷の一柱が、彼女が倒れる地点から目と鼻の先に浮かぶカスピ海並の広大な湖の、岸に比較的近い湖面に落ちた。

数億ボルトの落雷が水中を駆け巡り、放電のショックが引き金となつて、湖に潜んでいた巨獣たちを呼び覚ました。

湖面を突き破り、荒波を起こして暴れ狂うのは、マツコウクジラに似た白い体躯と、サメ以上に鋭い牙を口に生やし並べた水生生物型マギティア。

彼らの暴れ様を目に留めたヴィータは、重い疲労に満ちた体に力を込める。

「痛くねえ……………こんなの……………ちつとも痛くね……………」

あたしたちのせいだ、はやてたちは……………もつと痛くて……………辛くて

……苦しい思いをしてんだ。

それに比べればこんな怪我程度……どうってことない。

自分にそう言い聞かせ、アイゼンの支えを借りて、ヴィータは体を鞭打って立ち上がり、マジティアへと飛翔。

もう……自分がどうなっている……「悪魔」と呼ばれたって構わない。

それでも……嫌なんだ。

はやてが痛くて……苦しみながら、どんどん弱って……苦しんで……死んでいくのは……嫌だ！

はやてが弱っていく姿を見てグレンたちが、辛い気持ちのせいで痛い目に遭って、悲しむのは……絶対に——嫌だ！

だから——

「アイゼン！」

『Verst・ndnis』

ヴィータの呼びかけに応え、グラーファイゼンが変形と拡張を開始。

ハンマーヘッドがヴィータの身長並に巨大な角柱へと変わる。

これがグラーファイゼンの、第三形態。

「どりやあああああああ————————!!!」

巨大化した愛機を大きく振りかぶり、心と体を縛り上げる鎖や枷を振り払うが如き勢いがある叫びを、喉から迸らせたヴィータは、興奮で我を忘れたマジティアたちに突貫していった。

海鳴市街の色合いを赤く染め、太平洋の海面に半分は浸かる夕陽。

橙の光は、腕を組んで立つ諸星勇夜と、病室のベットの傍の椅子に座る高町なのはとフェイト・テスタロッサ、そして三人の心配する眼差しを向けられ、ベットの上で眠る八神はやてをも照らしていた。

火星で、グレンの男泣きを受け止めていた勇夜——ゼロに長距離通信をしてきたのは、なのはのレイジングハート。

『念の為にと連絡をしておきます、八神はやてがナハトの浸食による

発作で倒れました、現在大学病院で治療を受けておられます』

彼女からの緊急の報せを聞いたゼロとグレンは、即座に速足ならぬ速飛びで海鳴に戻り、大学病院に駆け付けた。

「あの、紅蓮さんは？」

「今石田先生から検査結果を聞いてるところさ」

はやてが病院に運ばれた経緯を述べると——その日の夕方、なのはとフェイトは今朝思い付き、快く賛同してくれたアリサとすずかの4人で、勇夜たちが借りるマンションではやてと一緒に遊んでいた。

遊びの中身は、テレビゲームだったりカラオケだったり、大富豪にページワンに賭け金なしのポーカールなどのトランプだったり。それらの遊戯を楽しみながらの談笑。

五人がこうして遊ぶのは今日が初めてだというのに、何だか前々から五人揃うのが当たり前であったかのような……と感じさせる弾み様だったらしい。

はやても、フェイトたちに今は家出中であると一時忘れてしまいうくらい笑っていたそうだ。

そうして娯楽を堪能し、時間が時間なのでアリサとすずかは先に帰り、二人を見送った後部屋に戻った時にフェイトたちが見たのは——リビングのカーペットの上で、胸を抑えて倒れ込み、発作で過呼吸を起こすはやての姿。

この時フェイト以外の住人は、買い出しやら魔導書の調査やらで全員外出しており、二人ははやての病態の急変に当初は慌てふためくばかりだった。

「バルディッシュたちのお陰で、どうにか早く病院に送れたんだけどね」

「サポートご苦労さん、二人とも」

『お礼には及びません』

『右に同じ』

そこへ彼女たちのインテリジェントデバイスが、的確にレクチャーしサポート。レイハたちのお陰で早急に救急車を呼び、はやては大学病院に搬送されて治療を受けられたわけである。

「あんまり効きそうにないが……しないよりは、マシだからな」

勇夜は、はやての体の真上の位置に掌を下向きに添えると、球型の光粒子が手からはやてに降り注いだ。

生物の生命力を活性化させる治癒効力のある特殊光線「メデイカルパワー」、人間体時でも使える超能力の一つ。

しかし定期的にメデイカルパワーを照射しても、せいぜい浸食の速度を弱めるくらいの効果しか望めそうにない……「雀の涙」になるかさえ怪しかった。

それでも、少しでもはやてに降りかかる苦痛を緩和できればと、メデイカルパワーを彼女に照射し終えた直後、病室のドアにトントンとノック音が鳴った。

「入っていいぞ紅蓮、はやては今眠ってる」

スライド式の扉が開き、学ランをラフに着こなし、夕陽に負けじと鮮やかなオレンジ髪をしたグレンの人間体——紅蓮が病室に入ってきた。

ドア越しにも拘わらず、透視も使わずノックの主が紅蓮だと察したのは、扉を叩く強さの具合から彼だと見抜いたからである。

「改めて紹介するよ、この子たちがさつき火星で話したフェイトと、リヒトの義理の妹のなのはだ」

「フェイト・テストロッサです」

「高町なのはです」

「おう、ゼロ……今はユーちゃんか、そいつとリヒちゃんから聞いてっと思うけど、俺がグレンファイヤーだ」

紅蓮とフェイトたちが面と向かって対面するのは初めてなので、三人は自己紹介を交わす。

「今日はうちのはやてと一緒に遊んでくれてあんがとな、ほら……足悪くて学校も休学中してっから、嬢ちゃんくれえの子とはなっかなか遊べねえもんで、こいつには良い思い出の一つになったよ」

「いえ……そんな、それほどのことはしてません」

「でも、ありがとうございます、明日学校でアリサとすずかにあなたが礼を言っただと話しておきますね」



二人ともなにかと謙遜しがちな人柄ゆえ、紅蓮からお礼の言葉に照れで夕陽に負けじとフェイトたちの頬は微熱を帯びた。

「で……………嬢ちゃんたちって……………そのっ——さ……………なんつか……………」

普段は竹を割ったようにハキハキした紅蓮の口調が、今に限って言えば口ごもり舌足らずとなる。

いつもの彼なら、『もっとはっきり喋れよ』と明るく突っ込むところだが、立ち位置が実質逆転していた。

フェイトたちへ何か聞きたいようなのだが、心情の影響か……………上手く言葉として発せられなくなっている。

だがその態度で、紅蓮が尋ねたいことの内容を汲み取ったフェイトは——

「はい、私たちも『魔法使い』で、あの日の夜に、騎士たちと……………戦いました」

——先んじて紅蓮からの質問の中身を当てて答え、各々のデバイスを見せた。

あの時の結界内では、バラバラに散らばって戦闘していたので、紅蓮は彼女たちを見ていない……………が、紅蓮の超感覚は、なのはとフェイトの体内にも宿る、ヴォルケンリッターたちには喉から手が出るくらい求めるリンカーコアの魔力波動をはっきり捉え、二人が自分の家族に襲われたかのかどうか尋ねたかったのだが……………騎士たちを気にする余り、上手くオブラートに包んだ表現で聞こうとして、それが浮かばず口下手化してしまっている。

彼女たちはそれが分かったから、意識的に『襲われた』という言葉は使わぬよう心がけた。

「ああ……………やつぱな……………」

諦観めいた声色で一言漏らし、気持ちと言う名の重しで重たくなつた自身の体を、背後にあった椅子に腰かける紅蓮。

痛ましさが発せられる紅蓮の佇まいに気の重みが強くなるのを感じしながら、勇夜は石田先生の検査結果を聞こうと息を軽く吸った。

『(マスター、今すぐ病院の正門付近をご覧になって下さい)』

「(え?)」

と、そこへリンクの念話による妙な申し出を受け、咄嗟に窓の外を見下ろし、正門と正面出入り口の間の通りに立っている。人物たち〃に目線を合わせた勇夜は、周りに気を遣うのを忘れずに、その場を駆け出し病室から出ていった。

「あいユーちゃん! どこ行くんだよ!」

「とにかく行こう」

「うん」

「おお…」

勇夜が何を見たのか掴めずにながらも、追いかける形で三人も走り出す。

当然学校同様、病院の廊下を走るのは控えなければならないが、そこは見逃してもらいたい。

自動ドアな正面玄関を抜けた勇夜はそこで立ち止まり、追いついて来たフェイト、なのは、紅蓮の三人も通りに佇む。彼女ら〃を見て驚きで一瞬体が凝固された。

「やはりここにいたな」

待っていたのは、ロングコート着込んで完全に人間の姿に擬態している大人モードの久遠と……………狼形態な盾の守護獣——ザフィーラ。

「あ…あのな、ザツフィー……………何で久遠と一緒にここにいるのは知んねえけど……………これは…」

「(案ずるな紅蓮、私はお前の友たちと戦うつもりはない、話しをしに来たのだ)」

「へ?」

状況も呑みこめないまま勇夜たちと一緒にいることを彼なりに説明しようとしたが、ザフィーラのいつもの冷静な口振りによる発言に、奇天烈な声音で返答してしまう。

この念話は勇夜たちにも伝達されており、フェイトとなのはも、ま

だきちんとこの状況を理解できていない。

対して勇夜とリンクだけは、久遠とザファイラの目的含め、この状況を把握していた。

「ここで話すのも何だ、場所を移すぞ」

つづく